

RE：世界一可愛い美少女錬金術師☆

月兎耳のべる

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

リゼロにカリおっさん突っ込んだらどうなるかなって思ったら居てもたっても居られなくて書き始めたクロスオーバー小説です。

主役は当然カリオストロ。

グラブルキャラで活躍は多分カリオストロ一人。

おっさん可愛いを目標にするけど現状可愛さが発揮出来てません。

注意。

基本Web版原作寄りで進む予定です。

※2017/09/11 3章を開始しました。オリジナル展開です。

## 目次

### 【第一章】初めての世界と、終わらない一日

第一話	誘われた錬金術師	1
第二話	白銀の少女との出逢い	15
第三話	搜索と殺人と繰り返される一日	23
第四話	鍵は黒髪の少年にあり	32
第五話	天才美少女錬金術師のおしおき☆	41
第六話	永き一日の収束（前編）	50
第七話	永き一日の収束（後編）	59
第八話	そして一日は歩みを進める	73
第九話	新たな出逢いと刻まれた平和	81

### 【第二章】二人の異世界人と、屋敷の人々

第十話	二人だけの真実	92
第十一話	召使と食客	104
第十二話	湯煙の中の金と銀	114
第十三話	待ち人は知識の探求者なのか？	124
第十四話	牙を剥く世界	135
第十五話	慟哭と覚悟	147
第十六話	守るべき意志	158
第十七話	些細で致命的な切欠	168
第十八話	最後は蔓延する死と共に	178
第十九話	割れ鍋に綴じ蓋	196
第二十話	足りないパズルのピースは？	208
第二十一話	復活と告白と決別と	219
第二十二話	子供、犬、メイド、怪我人	233

第二十三話	偽りの真実	247
第二十四話	絞り出された珠玉の知恵	265
第二十五話	STRAIGHT BET (前編)	280
第二十六話	STRAIGHT BET (中編)	293
第二十七話	STRAIGHT BET (後編)	305
第二十八話	JACK POT	321
第二十九話	手に入れた安寧	336
第三十話	束の間の訓練 【番外編】	354
第三十一話	束の間の幸せな夢 【番外編】	370
第三十二話	束の間の小噺 【番外編】	382
第るっ！話	こんな屋敷だったっけ！ (上)	398
【第三章】	招かれた意味と、招かれざる来訪者	
第三十三話	招待状	406
第三十四話	午後八時の鐘の音	419
第三十五話	出会いと再開	437
第三十六話	絶対に王様になんかならない！	452
第三十七話	歩み寄る悪意	468
第三十八話	「主人公」と『主人公』	488
第三十九話	最悪の裏切り	501
第四十話	裏切りの代償 (前編)	520
第四十一話	裏切りの代償 (後編)	537
第四十二話	午後八時の鐘の音②	557
第四十三話	疫病神	571
第四十四話	大いなる破局	591
第四十五話	独りよがりな英雄願望	613

第四十六話	和合を乱す波乱	630
第四十七話	都合のいい真実	652
第四十八話	絶望の草原（前編）	668
第四十九話	絶望の草原（後編）	684
第五十話	きるきるきるみーらぶらぶらぶみー	704
第五十一話	収束点へ進む二人	722
第五十二話	取り返しの付かない世界（前編）	735
第五十三話	取り返しの付かない世界（中編）	755
第五十四話	取り返しの付かない世界（後編）	775
第五十五話	午後八時の鐘の音③	804
第五十六話	合言葉は『――』	819
第五十七話	黄金鍊成	834
第五十八話	反撃の狼煙	849
第五十九話	足跡のない開戦	862
第六十話	52回目の緒戦	881
第六十一話	届かぬ手	896
第六十二話	始めまして。またお会おうね	919
第六十三話	俺を信じてくれ。	945
第六十四話	団結。	963
第六十二話EX	5205回目のラストワルツ。	979
第六十五話	黄金時間（前編）	993
第六十六話	黄金時間（後編）	1006
第六十七話	これからの話をしよう。	1024
第六十八話	近づく別れ	1041
第六十九話	「私は平気よ」	1057

第七十話 崩壊の足音（前編）

# 【第一章】初めての世界と、終わらない一日

## 第一話 誘われた錬金術師

——時空に干渉する力を持つという星晶獣ヴァシユロン。姿を見た者は、この世から跡形もなく姿を消してしまおうとされ、伝承の中で畏怖の象徴とされてきた。

所謂”神隠し”の正体とも呼ばれるヴァシユロンによつて異世界に飛ばされてきたミラⅡマクスウエルは、元の世界に戻るために途中で知り合つたグラン達一行と原因である星晶獣ヴァシユロンを追い詰め、今まさに対峙していた。

「はああアアッ!!」

四大精霊の力を取り戻したミラの力を筆頭に、グランも後を追うように追撃をかける。カタリナ、ラカム、イオ。そしてカリオストロがその援護に回つた。

「ようやく相手の底も見えて来たな、——とオ!」

「ああ、それもこれもミラ殿の力のお陰ではあるがな」

鳴り散らされる破裂音。繰り返される氷撃。

ラカムとカタリナが熟練のコンビネーションを見せながら軽口を叩く。

「みんな、協力感謝する。だがあと少しで片が付く。それまで私に力を貸して欲しい」

ミラの周りを舞う精霊達が思い思いの輝きを放ち、美しい光の軌跡を残しながらヴァシユロンにダメージを与え続けていく。見目の美しさに反する一撃の重さに空に浮かぶ鎧のような魔物、ヴァシユロンが怒号を上げ、怒りのままに一行へと自らの力を開放する。

手に持つ巨大な剣が振りおろされれば簡単に岩が砕け、飛び散り、地面が割れる。破壊的なまでの魔力を纏ったそれはあまりにも強力無比。食らってしまえば人間などひとたまりもない。

だが歴戦の騎空士達は動じない。そして倒れない。

巨大な魔物との戦闘、災害と言った数多の艱難辛苦をかくぐって生き残ってきた彼らにとって、この程度の攻撃は日常茶飯事。魔物の強力な一撃を冷静に避け、そして空いた隙をぬって確実にダメージを蓄積させていく。

ヴァシユロンの形勢は時が経つにつれ悪くなっていき、やがて致命的な隙を晒すまでになる。そして、そんな絶好の機会を見逃す騎空士達はこの場には居なかった。

「っしやあ！ グラン、やっちまえ！」

「——ッおおおおおッツ!!」

捨て鉢のヴァシユロンの一撃をカリオストロの錬金術が吹き飛ばす。掻い潜ったグランが懐へ潜り込み、渾身の斬撃がヴァシユロンを切り裂いた。一撃はヴァシユロンにとって致命的であり、またその光景を見た誰しもが勝利を思い描いた。当然ながら一撃を放ったグランでさえも。しかし、

「よしっ！」

「馬鹿ッ、油断すんなグランっ!!」

警戒を解くのが早すぎた。

斬り伏せられたヴァシユロンは崩壊する体のまま最後の力を振り絞り、亜空間への道をこじ開けていた。命を振り絞った、捨て鉢の一撃。憎き敵を1人でも多く倒そうと、目の前で油断するグランを宙空に浮いた暗闇が取り込もうとする。

それに気付かぬグランが光のない穴に放り込まれそうになった瞬間、いち早く気付いたカリオストロが呆けるグランを吹き飛ばした。そして彼女もまた、こじ開けた亜空間から遠ざかろうと試み——

——亜空間から伸ばされた無数の黒い手に捕まった。

「な——ッ」

その手を、その足を、その首を、その腹を。黒い手はカリオストロの瘦躯を掴み、凄まじい力で亜空間へと引きずりこもうとする。咄嗟に自身の切札である「ウロボロス」を展開しようとするが、彼女の口



を手が塞ぎ、展開する事も出来ない。せめてものと無詠唱で放った土の槍や礫が、光を全く透さない黒い手を1つ、2つと剥がしていくが、手は更に2つ、3つと増えるばかりで、少女の抵抗を意に介さない。どころか瞬く間に増えた手達はいよいよ持つてカリオストロの全身に群がった。その頃には既に体の半分が亜空間に放り込まれており

「カリオストロッ!!!」

拘束されたカリオストロが最後に見たのは。

駆け寄るカタリナ、ラカム、イオ、ミラの姿と。自分の名前を叫び、こちらに必死に手を伸ばす、信頼する団長の姿だった。

「グラン」

錬金術師が伸ばした小さな手は、何も掴むことなく空に掻き消えた。

§ § §

——次にカリオストロの視界が開けた時には、そこは見知らぬ街だった。

燦々と照らす日の下には数え切れないほどの様々な「見たことのない」種族が、各々の目的の為に行動している。

アルビオンより雑多だが、アガスティア程発展していないなど町並みに感想を抱いたカリオストロは、頭を掻きながら身体の確認を行う。

両手をぱたぱた、両足をぷらぷら。

身に着けた装備品と、大切な魔道書を確認。

全身に軽く魔力を流して、魔法の使用有無の確認。  
最後にかかるべく、身だしなみのチェック。

——全てOK。

(……体、動く。錬金術も。ウロボロスも使えるな。持ち物とかはあの時のまま変わらずか)

まずは一安心。ひとつ息をついて心を落ち着けると、次は現状の確認を続ける。自分に一体何があった？ あの時自分は何をされた？

(オレ様はヴァシユロンの作り上げた亜空間に落ちてしまった。いや、あの亜空間から現れた手によって強制的に放り込まれた)

生物ではない。しかし魔力でもない。闇より黒くて甘ったるい匂いのする手の群れ。纏わりついた謎の手の感覚を思い出すだけで冷や汗が流れる。あれとヴァシユロンは別物であるとは何故だか直感的に理解出来た。星晶獣にあそこまで「人間くさい」強烈な思念を持つことは出来ないと思えたからだ。

(……しかし、ここは一体どこなんだか。ヴァシユロンの亜空間に引きずりこまれたって事は十中八九、元の世界じゃあないだろうが……文化レベルは似てるしな)

道の往来で棒立ちしていたカリオストロは思考を止めずに歩みはじめ、人ごみに紛れて町並みを観察していく。

全身を毛で覆われた猫の顔をした女性が、

人間の女性と普通に会話をしている。

フル甲冑の騎士が道の端であくびをしている。

人間の子供と、垂れた犬耳を持つ亜人が

追いかけてっこをしている。

四足歩行の大きなトカゲが引く幌つき馬車が大量に、

そしてひっきりなしに往来している。

亜人と人間が寄り添う事が当たり前であり、そんな市井の様子は非常に活気に溢れていたが、やはり自分の知る世界とは何かが違うと違和感を覚えてしまう。きよろきよろとお上りの様に辺りを見渡しながら進むさなか、視界の片隅にとある店を見つけると、彼女はその店へと歩みを進めていく。

(……一縷の望みに賭けて確認して見るしかないよな)

「ねえおじさんっ☆ 美味しそうなリングだね☆」

「あん？ なんだぁリングゴって。リングだよコレは」

街をあてもなく進んだ先に団長の相棒であるトカゲが好む「リング」を売る青果店があったので、早速店主と思しき男に声をかけて見たが、結果として自分の中で別の世界であるという可能性が上がる事になってしまった。内心で舌打ちしながらカリオストロはめげずに話を続けていく。

「へえ〜そうなんだ☆ 私の地元だとこの果物、リングゴって言うんだよ〜?」

「一体どっから来たか知らねえが、俺の認識もルグニカ王国の認識も昔っからリングだよ」

ルグニカ王国。これまた聞いた事も無い国名に更に可能性が上がる。ふうん、ルグニカ王国ね。とカリオストロが口の中で反芻させていると、青果店の男が口火を切った。

「んで嬢ちゃん。立ち話も悪くねえんだがリング、一個ぐらい地元の味と比べて見たらどうだ？」

「ん〜☆ タダなら考えてあげてもいいけど〜☆」

「可愛い嬢ちゃんだけど、それじゃうちも商売上がったたりだ。出来るなら購入してくれるとありがたいもんだがな」

軽口を聞く親父は丸々と赤く熟れたリングゴ……いや、リングを手の中で弄ぶ。男の体温で温まったリングは食わねえぞ、と脳内で悪態をつきながらも、カリオストロは懐から銀貨を取り出して、男に見せびらかした。

「見たこたねえ銀貨だが……なんのコインだ？」

「おじさん知らないの〜? これはねっ、うちの地元の〜……記念コインっ☆」

知らねえよ! とノリよく突っ込む男に「おじさんと会ったのも記念だし、記念同士でリングと交換っ☆」などと言って、カリオストロは渋る男を持ち前の可愛さと板についたぶりっ子で押し切って交換させた。

「まったく、嬢ちゃんの可愛さをそうやって有用に使われちゃ、こつちの家計が苦しくなっちゃあー！」

そう言いつつも良い笑顔で、フアー・タグラ・ンデ空域の共用コインを手で弄ぶ男。対してカリオストロも同じくいい笑顔で貰ったリングに齧りついた。

「ところでおじさん、聞きたい事があるんだけど、いいい？」

「あん？仕方ねえな……んで、何だよ嬢ちゃん」

「騎空艇って知ってる？」

結論から言えば男は騎空艇の存在を知らなかった。

ソレに似てるものも見ることがない（飛竜なら居るそうだが）と言った男にカリオストロは礼を言い、再び街を歩き始める。コレほど発展してる街で、その住人が騎空艇を見たことないという事は、自分の知る世界ではありえない。

更に、人通りの多い道をリングを齧りながら歩くカリオストロが辺りを見渡せば、ヒューマンは居ても、自分の世界で一般的である小柄な種族ハーヴェインも、瘦躯で耳と尻尾が生えた種族エルーンも。男性は大柄、女性は小柄の種族ドラフもない。代わりに居るのは全身が毛で覆われた獣人や、鱗を露出させる蜥蜴人等々。極めつけに看板に書かれているのは、天才を自称する自身でさえ見たことのない言語。

間違いない。ここ異世界である。カリオストロはそう確信した。

（まずったな。この世界にもヴァシユロンが居ればいいんだが崩壊直前までボコつちまったからな……。下手すると帰れない可能性も……いや、諦めるのはまだ早い、可能性は可能性でしかねえんだ）

思わず漏れるため息を噛み潰し、彼女は頭の中で冷静に、今後するべき方針を立て始める。求めるのはヴァシユロンの目撃情報。そして当分の活動拠点。その為には誰かしらの権力者に手っ取り早く自分の力を見せつけて、パトロンに仕立てあげるのが良いだろう。幸いにも自分にはそれを可能とする力を持っている。

（オレ様の可愛さと錬金術があればそれくらい容易いだろう。それ

に、今頃あいつもきつと俺様の事を探してる筈だ。あぐらを掻いて救助を待つなんて真似出来るか？ 嫌だね。必ず戻るから大人しく待つてろよ、グラン」

と内心で考えた所で、あの団長が大人しくしてる筈がないよなあと一人納得し、苦笑する。そうこうしてカリオストロが決意を新たにしていたのだが、その直後。対面から人を掻き分けて誰かが走ってくるのが分かった。いや、掻き分けているのではない。まるで忌避するかのように入が勝手に分かれている。

程なくして人ごみの中から現れたのは、まるで雪のように白い少女だった。輝く銀髪を持ち、全身を白い装いで固めた少女は、美しくも強い眼差しを携えてこちらに向かって走ってきており――

「ごめんなさい、ちよつとそこ通るわね！」

――彼女はこちらを一瞥することなく、そのままカリオストロの横を通り抜けていった。

(……。なんだアイツ)

思わず目で追ってしまいうくらい目立った彼女を、周りの住民達も奇異の目線で見っていた。ただ、何となく自分と違う視線の温度に小さな不快感を感じてしまう。その不快感から抜け出そうと先を急ぎ――しばらくしてカリオストロは時間をかけることなくある人物に出会う事が出来た。

「ねえねえ騎士のお兄さんっ☆」

「ん、なんだ？」

「えつとね、実は迷子になっちゃって……。ここがどこか分からないのっ☆」

「ふむ、迷子か……。分かった。こつちに来なさい。お父さんかお母さんとはぐれたのかい？」

カリオストロが目指した先は、警備兵の詰め所だった。彼女は文無しで土地勘もないうちは然るべき場所で保護を求め、情報も得るべきだと判断したのだ。若い兵士に連れられて奥の部屋に行くと、彼は力

リオストロに水を一杯用意して事情を聞き始めた。

「実はお父さんもお母さんも、既にいなくなつて……たまたま変な魔物に襲われて命からがら。気付いたらこの街に居たの☆」

「ああソレは済まない事を聞い……ちよつと待つて欲しい、魔物かい？ この近くに魔物が？ お嬢ちゃん怪我はないかい？」

「怪我はなかったの……でもお怖くて必死に逃げてえ……☆ この近くかは分からないけど、兎に角凄いい魔物だったの☆ 空飛ぶ鎧みたいな感じで……☆」

媚び媚びな感じで説明する少女に兵士はたじろぎながら照れる。見た目は完璧な美少女であるカリオストロは街でも、いや数多の国でも中々見かけない程のレベルの造形美を誇っている。たじろくのも当然であろう。

カリオストロはそんな自分の武器を前面に押し出しながら、ここぞとばかりにヴァシユロンの特徴を説明する。怪しまれない程度に、詳細は除いて、外見程度の説明だけに留め、似たような魔物はいないか聞いてみたが残念ながら確認されていないという。やはりそう簡単には行かないかと内心舌打ちしながらも、カリオストロは表情を変えずに話を進めていく。

「……ありがとう。大変だったね。さて、キミは一体どこから来たんだい？ よければ元の場所まで送つてあげたいが……」

「ポート・ブリーズつて所☆」

ポート・ブリーズか。と反芻する兵士だが、やはり思い当たりがないように、王国の地図をその場で広げ、探し始めた。カリオストロもわざと兵士に体を近づけさせながら地図を覗き込もうとすると、兵士は露骨に照れ始める。

「この辺りだと思っただけだなあ……☆」  
すすつ

「そ、そうか。この辺りの小さな村なのかな？ この地図もそこまで正確という訳ではないからなあ……ハハハハ」  
すすつ

「ねえ兵士さん、もしよければ何だけど……☆ 私、実は知り合いもお

金も何もなくて……心細いからあ、兵士さんの家に泊めて欲しいなあつて……☆」

すすすすつ、ふうつ

「!!」

「ねえねえ、駄目……?」

「い、いや流石にキミを私の家で止めるのはその……わ、悪くはない案と言えるがっ、私は男一人暮らして……」

自分の武器を惜しみなく使って寢床を確保しようとするカリオストロに、既に陥落一步手前までに落ちていた若い兵士。

「その役目、もしよければ僕が担ってもいいかい？」

——だが、二人の間に凜と通る声割って入れれば、少しおかしくなっていた空気も霧散してしまう。つい先程まで感じなかった気配にカリオストロはヒヤリとしながら振り返った。

燃えるような赤毛に、輝く蒼い相貌、異常なまでに整った顔立ち。そして腰に下げる業物と思える騎士剣。そこに立っていたのはまさしく騎士然とした男で、カリオストロは元の世界で知り合った、パースヴアルという青年を咄嗟に思い出していた。

「こっ、これはラインハルト様っ!」

「畏まらなくてもいいよ、今日の僕は非番だ。少し用事を済ませに此処に来ただけでね、盗み聞きして申し訳ないけど話は聞かせて貰ったよ。キミは心穏やかで居られなさそうだし。彼女、しばらく僕の家で預かせて貰っても構わないよ」

「……どちらさまっ..」

カリオストロの問いかけに兵士が驚くも、ラインハルトは動揺する事無く微笑みをたたえながら向き直り、丁寧に跪いて挨拶をした。

「自己紹介が遅くなって済まないね。僕の名前はラインハルト。ラインハルト・ヴァン・アストレア。しがな一人の騎士です、お嬢さん」  
「……」丁寧にあるがどうラインハルト☆ 私の名前はカリオストロって言うの、よろしくね☆ ……と・こ・ろ・で、お兄さん本当

に良いの?」

「構わないとも。僕の家は数人で使うには持て余す程でね、空いた部屋が一杯あるから好きに使えと思うよ」

カリオストロはこの数瞬で目の前の騎士に自分ですらも底知れぬ、強大な何かを感じたが、持ち前の仮面を被って何とか平然を装って返事をする事が出来た。

(どうやら有名な騎士のようだな。幸先いいというか、出会ったこいつの底の見えなさに嘆くべきか。何であれ今は少しでも切っ掛けが欲しい……付いていくしかねえな)

「ありがとう☆ それじゃあラインハルトに甘えさせて貰うねっ☆」

「身よりも当てもない女性を野放しにさせるのは騎士道に反すると教えられたからね。どうぞ遠慮なく、カリオストロ」

§ § §

幾分悔しそうな顔をした兵士を残して、カリオストロはラインハルトについていく事になった。

彼に連れられるがままに馬車に乗り、夕方になる頃には間違いない豪邸といえる大きな屋敷についており、あれよあれよと言う間に豪勢に持て成された。豪華絢爛を体現した持て成しを受けたカリオストロは、とんとん拍子に良い相手に巡りあえた自分の豪運に内心テンションをあげながらも、見た目どおりの淑女らしい振る舞いで歓待を受けた。

「素敵な夕食に、お風呂まで本当にどうもありがとうラインハルトっ☆ その上で聞くけど、どうして私を預かろうと思ったの? カリオストロがくあんまりにも可愛かったから?」

時は既に夜更けにさしかかっている。夕食を頂き、更に湯浴みまで頂いたカリオストロは、現在ラインハルトの部屋を訪ねており、彼のベッドに腰掛けながら職務中であるのか机に向かっているラインハルトにそんな事を尋ねた。彼は一旦作業を止めると丁寧にこちらに向き直り、口を開いた。



「勿論それもあるし、昼に言った理由が大部分だね。当てもない女性に野宿させるなど父に教わったものだから」

「ふうん、本当かな☆」

「会ったばかりで信用ならないというのも分かるし、キミにとって都合が良すぎて不安になるのも分かる。が、こればかりは信じて欲しいと言うしかないね」

カリオストロが部屋のベッドの上から体を乗り出し、見透かすようにラインハルトをじっと眺めていると、ラインハルトは困ったように手を上げて降参だと笑った。

「正直に言えば——そうだね。女性云々はもとより、キミが気になったから声をかけたのは違うんだよ」

「あれあれっ☆」

（こいつロリコンかよ。ま。オレ様の魅力の前ではどんな奴でもメモロカ。世界一カワイイってのも困りもんだな！）

「何せ、キミの体があまりにも人間そっくりだからね」

浮かんでいた笑顔は貼り付いた絵のようになり、カリオストロは自然と腰を浮かせ、警戒心を最大まで高めた。

「……どう言う。意味かな？」

「一度見ただけでは分からなかったが何度か他の人と見比べると分かる。その体自体が作り物だという事がね。精霊が入っている訳ではない、しかし魂が確かに入っている。とても興味深くてね」

『ああ。別にどうこうするつもりはないよ、警戒させて済まないね』と付け加えるラインハルトは、実に自然体。その様子にカリオストロは呆れを隠さず、ベッドから浮かせていた腰を落として座り込んだ。「普通はそこでカリオストロを捕らえたり、その場で処断するものじゃないかな☆」

「生憎、僕は研究に生きる魔法使いではなく、法に生きる騎士だからね。法がカリオストロを罪と見なさない限りは捕らえる事はないよ」

「……もしかして、カリオストロみたいな人って結構居るのかな？  
だからそんな自然体で居られるとか……」

「だったら良かったんだが、残念ながらキミのような娘は今まで一人も見たことがない。だからこれは……そうだね、僕の単なる好奇心がキミに声をかけたって事だね」

「……」

ほんのり考え込んで、そのような答えを真面目に答えるラインハルト。そんな彼の様子に敵愾心が薄れたカリオストロは、一つため息を吐いて部屋を後にしようとする。

「送っていくよ」

「平気だよラインハルト☆ 宿と飯を貰った恩もあるし——とりあえずは今の言葉、信じてあげる☆」

返答に苦笑するラインハルト。それは年頃の少女を軽くあしらっているような態度で、カリオストロの高いプライドをいささか傷つけた。故に、彼女は挑発的な言葉で目の前の男をからかおうとしてしまう。

「あ。そうそう☆ すぐに恩を返す方法があるね☆ ——ねえねえラインハルト、今日はあ、カリオストロと一緒に寝てくれる？」

体をすり寄せ、自分で考えた一番魅力的に見えるポーズでラインハルトを誘う。ラインハルトはきよとした顔でカリオストロを見つめていた。

「あれれ☆ ふふふ、固まっちゃってるよ？ ラインハルトは、カリオストロみたいな女の子は、嫌……？」

気を良くしたカリオストロがラインハルトの傍に近寄って顔を覗き込むが、彼は見つめたまま固まっているだけで、何一つとして反応がない。

「……も☆ 流石に反応ないと寂しいんだけど……なっ!？」

固まる眼の前の男に業を似やした直後、あの甘ったるい香りとともに世界が一瞬で灰色と黒に色褪せ、自分の意志に反して体が。世界が、過去へと巻き戻り始めた。

人々は後ろ向きに進み、拡散した音が口に収束し、胃に収まった物

が元の空間、元の形に戻る。馬車が逆進して、鳥は地面に向かって飛翔し、夜が夕方に傾き、夕方が昼に変わっていく。

人々が過ごした一日が、全てが元通りなかったことになって行く。

（ふざけんな！　なんだよこれは!?!　時の逆行!?!　世界の理そのものを弄ってやがるのか!?!）

不可思議な世界の中、カリオストロは抵抗する事も出来ずに逆行をその身でもって体験していた。不思議な事に時を逆行しているというのに、自分の意識だけは明確に残っていた。

心臓が血液を送り戻す感覚。汗が自分の皮膚に潜り込む感覚。取り入れたものが全て排出され、排出されたものが全て吸収されるという感覚は筆舌に尽くしがたく。また五感の全てが逆の感覚を伝えるという未知なる経験はカリオストロの意識に不快感だけを残している。それは実際は刹那の時間だったかもしれないが、カリオストロにとっては永遠にも思える長い時間を感じた。

カリオストロは不快感の中自分が歩んだ一日を見せつけられた上で、目の前で無に帰されるという拷問を味わい続けた。

——気付けばカリオストロは燦々と日の照る道を歩いてる所まで戻っており、世界が元の歩みを思い出した時には蓄積した不快感からその場で膝をついてしまう。

「お、おい嬢ちゃん平気かい?」

「日差しに当たりすぎたのかしら」

「へ、平気平気☆　うん、ちょっと日差しにやられちゃって…☆」

心配する通行人を何とか誤魔化すと、口元を抑えながら日陰の方に移動し、不快感を押し隠しながらも冷静に思考する。

(世界を対象にした、逆行魔法だと……？　ありえない。どういう力だ……こんな規格外な術、聞いたことも見たこともねえ。星晶獣でもこんなのは容易に実現出来やしないだろう……一体どうなってやがるんだ)

先日まで戦っていた時空を操るヴァシユロンがまるで子犬のように思える程の異能。それは今まで戦ってきたどんな相手よりも、どんな災害よりも得体が知れない物だった。

そして今までと違って困難を共にしてきた頼れる団長も、その団員達もこの世界に誰一人として居ない——つまり、この困難を一人で打破しなければならぬのだ。

項垂れた顔を上げた先には、何も知らない人々が二度目の一日を刻んでいる。

彼女が無意識に握りしめた片手は何も掴めなかった。

## 第二話 白銀の少女との出逢い

混乱と不快感に支配された頭を振って、深呼吸をひとつ。

和らいだのを見計らって立ち上がったカリオストロは、脳内で状況を整理し始めた。

誰しもが夢を見る「世界の歩みを巻き戻す」という力。

カリオストロも一度はその事について思考、研究した事があった。だが時間を巻き戻す範囲、力の源、巻き戻した後の問題点と何一つとして解決策が見出せず、研究はすぐさま暗礁に乗り上げる事になった覚えがある。

しかしカリオストロは完成系に出会ってしまった。

ありえないと笑って切り捨てた逆行を、実際に体験してしまった。体験して感じたのは2つ。

是が非でもこの力を突き止めたい、という真理を追究する者としての好奇心と。

そして二度とこの力を使わせてたまるかという、激しい怒りだった。

巻き戻しの犯人が何の目的で逆行したのかは分からないが、自分の意思だけ除いて世界が巻き戻る感覚は筆舌に尽くしがたい。咀嚼したものが口内で再形成される感覚、流した汗が体内に戻る感覚、それこそ全身から感じる逆行が、神経を悪戯に刺激し眩暈や吐き気を催し続ける。

目の前で平然と歩く町の人々からはそのような素振りは全くと言って良いほど感じられないことから、「自分だけが」逆行中に意識を保っているようだ。

何故そんな無駄に器用な真似をする！

自分だけこの感覚を味わう必要はないだろうに！

考えれば考えるほどカリオストロは憤りを隠せなくなかった。

(あの黒い手の奴はぶっ飛ばしてやらなきゃすまねえぞ……)

自他ともに認める超絶可憐な美少女が笑顔を浮かべれば、自ずと人を引き寄せるものだろうが、あいにく今の彼女は超近寄りがない負の

オーラを出して歩いている。ゆえに道行く人々は一瞬美貌に見蕩れた後、慌てて視線を逸らし、道を空けるといふ奇妙な行為をしていた。——しかし、ただ一人の例外がその少女のオーラに気付いていなかった。

「あでつ！ わ、悪い、大丈夫か？ 完全無欠に、全くもってこつちが前方不注意だったへごぶ!!」

その黒髪の少年は一触即発の彼女の後ろから走り抜けようとしてぶつかるといふ、とんでもなく空気の読めない真似をして見せた。哀れ虎の尾を踏んだ少年はたたらを踏んだカリオストロから即座に人体の急所に向けて蹴りを受けて悶絶。その光景を目撃した通りすがりの男性たちは自身の一部を守るように手で庇ったとか。

「気をつけてねお兄ちゃん☆」

「あ。あ。ああああ……ちよ、今のは俺も悪かったけどさ……いくら美少女と言えど流石に犯した事案に対しての罰が見合つてない……」

「気をつけてね ☆」

「す……すいませんでした……た……」

少年は股間を押さえたままへたり込んで轟沈した。

この界限にしては珍しい服装で、珍しい髪色だ。カリオストロはふん、と鼻を鳴らして後にしようとする。しかし足を踏み出そうとした矢先にほんのりと、あの甘ったるい香りが鼻をくすぐった、気がした。

「……」

「ぐおおお……ぶ、無事かマイサン……！まだ役目を果たす事なく終わるんじゃないぞ……そうなたら全俺が泣き喚く……、じえろにもつ!？」

独り言の気持ち悪さからもう一回少年を蹴飛ばすと、カリオストロは気のせいと断じて先を急ぐのだった。

§ § §

確固たる足取りで先へと進むカリオストロ。

その行き先は1回目に向かった詰め所だった。

危なげなく辿り着けば1回目と同じ手口で若い兵士に地図を見せて貰い、ラインハルトの家から異変の大体の発生地点と方角と距離の予測を立てる事が出来た。熟達の錬金術師であるカリオストロはあの世界の侵食がどこから発生したのかをおぼろげに把握していたのだ。

前回と違って寄り道をしなかったせいも、今回はラインハルトと遭遇することはなかったが、必要な情報は手に入れる事が出来た。あとは純情な兵士を自分の魅力で軽く弄んだ後、すぐさまその場を後にしていた。

「気をつけてねお嬢ちゃん」

「ありがとう兵士さん☆ まったね☆」

デレデレになった兵士に軽く無邪気に手を振り返した後、カリオストロは人通りの少ない細い道へと進んでいく。

(確かこっから先は貧民街だったか……オレ様の美貌に目がくらんで、襲い掛かってくる馬鹿が居そうだな)

でもそうなるのも当然だよな、と髪を手で流しながら驕るカリオストロ。そんな彼女が直感と予測の赴くままに路地の角を曲がった先に出会ったのは、まさかの予想通りのチンピラと思しき大中小の男性3人だ。

しかも待ち構えるどころか、既にぶっ倒れてしまっていた!

「……オレ様が迷惑を被る前に誰かが倒してくれたってか?」

目の前の光景に素で呟いてしまうカリオストロ。どうやら三人とも息はあるが、完全に伸びてしまっている状態だ。

どうして? という気持ちもあるが今は助ける義理もない、無視だ無視と跨いで先に行こうとするが……その足がピタリと止まる。カリオストロは急速に接近する影に気が付いていた。

「……」

「うわっ、ちよっ、わわっ!」

小気味よく指を鳴らした直後、細い路地いっばいに膝丈程の高さの土が隆起。黄色髪の少女が足を引っ掛けそうになる。しかし少女は

咄嗟に飛んで土壁を避けると、何とか転がりながら着地した。

「なにすんだよ！」

「てつきり物盗りかなって☆」

「ただ急いでるだけだよ！ いきなり攻撃すんじやねーよ姉ちゃん！」

敵意をむき出しにして睨む少女に対して、カリオストロは悪びれもなく返す。

「ったく、本来ならいきなり攻撃した落とし前を付けさせてもらうけどよ……本当急いでんだアタシは。邪魔すんなよ！」

「えー、こっわーい☆ 私か弱いから、そんな事されたら泣いちゃうゾ☆」

「……何だよそのぶりっ子、あんな事咄嗟に出来る魔法使いの台詞じゃねーぞ。実力ありありじゃねーか。つかこの惨状もあるしよ」「ん？」

少女の視線の先には伸びている男性3人が居た。

「……これは私のせいじゃないよ？」

「信じられるかっつーの！」

無理もないかもしれないが、先ほど少し見せた実力からカリオストロがこの三人をのしたと勘違いされたらしい。思わず弁明するカリオストロ。しかしそこに別の足音が新たに加わる。

「げっ、そうこうしてたら……」「？」

「見つけたわよ！」

新たに現れたのは一回目にすれ違った、雪色の少女だった。

彼女はこの惨状に目を見張った後、変わらぬ強い意志を目に宿らせ、仁王立ちで二人を指差し始めた。

「人の物を盗んだだけに飽き足らず、他人を襲うだなんて……！返してくれたら謝っただけで許してあげようと思ったけど、もう見逃せません。さあ観念して盗んだ物を返しなさい！ さもないとひどい



んだから！」

「え、えーっと、あ、私はただ通りすがっただけで☆ 無関係だから後は二人で……二人で……？」

気付けばすぐ側に居た少女が忽然と姿を消しており、カリオスト口は辺りを見回す羽目になる。すると路地上の家の屋根に飛び乗ってこちらを見下ろす黄色髪の少女が視界に入った。

少女は清清しいほどの笑顔でこちらを見ると、

「用心棒の姉ちゃん、後のこと頼む！ じゃあな！」

凄まじい威力の爆弾発言を放り投げて、そのまま姿をくらました。

「……えーっと。違うんだよ？」

「何が違うのかしら。あなたもあの子の仲間なんでしょう？」

「違うよ、なすり付けられただけなんだよ？」

「じゃあこの惨状はいつたい何なのかしら」

「この人達は最初から倒れてたんだってばっ！ それに、ほら。盗んだ人がどっか行っちゃうよ!」

「それもそうだけど、悪い人を見逃す事も出来ないの。観念して」  
「……」

運と状況の悪さにカリオスト口は頭を抱えなくなった。仕方ないとばかりに一つため息をつくと、その手に自分の魔道書を持ち、

「悪いけど、相手してる暇ないんだよ。ちよつと大人しくしてくれ」

「！ リア！」

雪色の少女の足元から現れた土の手がその足を掴もうとする。しかし少女の髪から顔を出した小動物が、その手から氷を射出。掴もうとした土の手は氷によって粉碎されてしてしまう。

「ちっ、何だテメーは」

「自己紹介してないから知らないのも当然だね。そんな事よりボクの娘にそう言う事するのは親として見過ごせない事なんだよ」

ふよふよと少女の横に浮かぶ子猫のような存在が腕を組んでこち

らを睥睨してくる。カリオストロもそんな子猫の「格の高さ」を一目で見極め、下から睨みつけ返した。

「なあ、証明できねーがこの惨状はオレ様のせいじゃないし、あの小娘の仲間でもない。更に言えばオレ様は急いでるんだ。ここはお互い会わなかった事にして素通りするって所で手を打たねえか？」

「ボクとしてもリアのことを思えばあの盗人を追うべきかなって思うんだけど、大事な愛娘に手を出してしまった”ツクリモノ”には少し罰が必要かなって思うんだよ」

またしても自分の本質が見抜かれた。出くわす奴全てが面倒そうな奴だなと舌打ちをすると、油断なく両手をこちらに向ける銀色の少女が尋ねていた。

「ツクリモノって？」

「言葉の通りだよリア。あの子の体は人間そっくりだけど人間じゃない。ただの容器みたいなものだよ。そしてその容器に魂が入ってるようだね。……兎に角、普通じゃない。警戒して当然の相手だよ」

「オレ様の体の事なんかどうでもいいだろうが。とつとと引くか——ここで捕まるかしとけッ！」

マイペースに話をする二人に敵意を向けると、細い路地の地面から、壁から、少女と子猫を拘束しようと土の手が一斉に伸びる。少女はその様子に驚いた様子を見せたが、咄嗟にその場を飛んで避け、狭い路地に氷の樹を作り上げて手から逃れる。その間、子猫が巨大なつららをこちらに飛ばし、カリオストロへと殺意の溢れた牽制を行っていた。

「なーに、悪いようにはしないよ。ただ暴れると、ちよつと痛いのが増えるかもしれないけど」

「ぎつきから痛いどころじゃ済まねー攻撃ばかりだろーが」

「大丈夫よ。私擦り傷とか切り傷くらいの怪我なら直せるから。あ、でもパツクやりすぎないでね。治せなくなるから」

大丈夫に済ませる攻撃が見当たらねえよ、と文句を言いながら土と氷の打ち合いを続けるが、埒が明かないと判断したカリオストロは初めて自身の手に持つ本を開く。開かれた本は持ち主の命令を待つか

のようにカリオストロの側で浮遊し始め、

「《s e i z捕らえろ》」

ある言葉を唱えれば自動的に捲られた頁の中の一つの単語が光り輝き、巨大な石の壁が瞬く間に雪色の少女の周りを囲うように隆起する。それは堅牢な牢獄だ。それが恐るべきスピードで作りに上げられているのだ。

「うーん、似たようなのは見たことあるけど聞いたことはない呪文だね。攻撃する意志を見せないのが嬉しいと思うべきか……リア」

「ええ」

彼女たちは脱出することなく、そのまま石の檻に閉じ込められ——そしてすぐに路地裏に重たげな破碎音が響き渡った。

見れば無数の巨大な氷の槍が石壁を貫いて檻を破壊しつくしており、こじ開けられた隙間から何事もなかったかのように彼女らが出てきていた。

目の前の少女は依然としてやる気満々。カリオストロ自身も一筋縄で行かない相手に業を煮やし、本気を出してやろうかと考え始めるも——とある理由からその気が失せた。

「なあ」

「なあに？言つとくけど諦めろって言っても無駄よ。あなたは悪い事をしたんだもの、ちゃんと償う必要があるわ」

「だ、か、ら。誤解だつて言ってるんだろ。世界一可愛い俺様が、こんなちまつこい悪事の片棒なんて掴む訳ないってんだ。それよりも、そろそろ止めねえか？」

「そ、そうね確かにすごく可愛いのは認めるけど……止めるのは私が貴方を拘束させて貰った後よ」

「平行線じゃねえか……じゃあ、ほら。まずは後ろ見てみるよ」

「後ろ？……はっ！ そんな手には乗らないわ。悪い人はそうやって隙を作つて悪さするって、この前読んだ本に書いてあったんだもの！」

「あー、リア。これは言葉の通り後ろを向くべきかな」

「え、バックまで何言ってるの。駄目よ言うこと聞いちゃ！ こう言

う所で隙見せたらすごい大変な事になって……大変……——  
大変!!」

パックと呼ばれた子猫にまで促されて少女が見たのは、戦闘の余波で傷だらけ&凍りかけていた、絶賛気絶中の三人だった。少女は三人の元に急いで駆け寄り、カリオストロも頭を掻きながらソレに追隨するのだった。

### 第三話 搜索と殺人と繰り返される一日

「いやーごめんねカリオストロ。うちのリアの勘違いだったみたい」「だからさつきから言ってるんだろ。ったく……オレ様の貴重な時間、返せるものなら返して欲しいくらいだ」

「ごめんなさい……」

あの後、戦闘の余波で傷つき、凍りついていた三人組を二人がかりで傷を癒やした。そしてようやく気絶から回復した三人に事情を聞いて、何とか誤解を解くことが出来た。

三人組曰く、変な服装をした目つきの悪い、謎の黒髪の男によって気絶させられたのだという。

彼らはしどろもどろになりながらも身振り手振り、自分達が如何に無辜で、無害な存在で、一方的に暴力を振るわれた事を説明していた。雪色の少女……エミリアはその説明に真摯に耳を傾け、真犯人へと怒りを露にしていたが、カリオストロと謎の小動物……パックは男達が真反対の事を言っていると見抜いていた。

なので「正直に言ってる？」とパックと息を合わせて片手を向けて（詠唱発動一步手前）可愛くおねだりした所、男達は「すみませんでしたー！」と叫んで慌ててこの場から去っていった。残ったエミリアは見抜けぬ事にショックを受けていたとか。

（しかし、黒髪の男ね……街でぶつかつたあいつか？）

変な服装で黒髪と来れば記憶の中の存在と一致する。目つきの悪さまでは見てなかったが、意外と武闘派なのだなど認識を改めていると、少女の隣で浮遊していたパックがふよふよとこちらに近づき話しかけてきた。

「それにしてもキミの魔法は面白いね。土や石、物質そのものの構成を紐解いて別の形に組み替えるのにかにや？ 今まで長く生きてきたけど、そんな変な魔法初めて見たよ」

「褒めてんのか褒めてねーのか分からねえけどここじゃ珍しいのは違くないだろうな。そっちこそ無尽蔵に氷を作り上げて、ばかすか撃つてきやがって……」

「いやーそれほどでも」

「褒めてんじやねーよ。文句言ってるんだよ！」

「ごめんなさい……」

こちらの鼻先で照れて見せるパック。牽制と言いながらもカリオストロを殺す気満々の攻撃をしておいて、なお全く悪びれた様子を見せない彼(?)は「本当は誤解だつて気付いてたけど、リアに教えて上げる前にキミが攻撃するから、まずはおしおきかなって思っただけだよ。ソレにほら。キミは無傷だっただろ？」としれつと釈明し、カリオストロは思わず土に埋め立てたくなる衝動に駆られた。

「ところで……エミリアだったか。おい。そんな申し訳なきような顔でオレ様の美貌を見つめるな。せめてうっとりしながら見つめろ」

「ごめんなさい……」

「……パック何とかしろ。さつきからお前の娘、壊れた蓄音機みたいになってやがる」

「ちくおんきう？ リアは今罪悪感の真っ只中だね、人の話を聞かずに悪い人認定したのが相当応えてるみたい」

聞けばこの謎の生き物、人の心情がある程度分かるらしい。ただ今の状態なんて心読まなくても分かる。

顔を真っ青にして人の顔を窺いながらこちらの一言ごとに謝罪を繰り返すエミリアに、流石に怒る気力が失せたカリオストロは頭を掻きながらため息をついた。

「おいエミリア。謝罪も釈明ももういい。気にすんなどは言わないが、今後はちゃんと人の事情も聞けよ。今回は割と勘違いしてもおかしくない事情だったけどよ。……兎に角、オレ様はもう行くぞ。ただでさえよく分からない事態になってるからな」

「待って、あの……ごめんなさいカリオストロ。あなたは凄く可愛いけど、口調が怖くてあんな力持ってあんな状態だったからつきりって思って……あう。ごめんなさい、もう謝罪と釈明はしません」

凄みのある顔でカリオストロに睨みつけられて、更に申し訳なきような顔をするエミリア。そんな彼女が言葉を連ねる。

「あの、そのお詫びになるか分からないけど……わ、私何か手伝えることないかしら！」

「な・い☆

……何でそんな誰から見放されたような絶望そうな顔するんだよ！ まるでオレ様が悪いことしたみたいじゃねえか！」

第一オレ様に関わる暇あったらお前も盗まれたもの取り戻しに行けよ、と言うと「あっ！」声を出して慌て始めた。どうやら本当に忘れていたらしい。

「うう。何もお詫びできずに心苦しいわ……あ。そうだ！もしも何かあったら、この場所に来て。きつと頼りになれると思うの！」

エミリアはメモ用紙の切れ端に何事かを書き、カリオストロに手渡す。この国の字を知らないカリオストロには内容は全く分からないので聞き返すと、「メイザース領 エミリア」と書かれているようだ。

「ふうん。エミリアって有名所のお嬢様なのか？」

「ううん。ただの後ろ盾を持つてるだけだよ。長くもない付き合いだけどね」

「ちよつと色々あつて、えつと、そこの偉い人に気に入られて。それで、あつ……。その。色々するため、今その場所に泊まって」

「説明できないなら補足しなくていいからな！」

使うかわからないツテを手に入れたカリオストロは今度こそ踵を返し、最初の方角に沿って進んでいく。

時の逆行を行う存在が一体なんなのか、まず見定めないといけない。自分には帰るべき場所があるのだ。怒りと使命感を糧にずんずんと先へと進む。

……進むのだが。

「……何でついてくんのお前ら」

「だってあの子が逃げた道もこの先なんだもの」

§ § §

ついてくんなよ。

そのつもりはないけど、あの子の行き先が一緒だから仕方ないよ。もしかして貴方も何か盗られたのかしら。

はっ、オレ様がそんなつまらないへマする訳ねえだろ。……いちいち凹むなよ面倒くさいなお前!?

二人と一匹は細い路地を先に進む。どうやら本当に行き先は同じようで、カリオストロは仕方なく。パツクは我関せず。エミリアは申し訳なさそうに道中進む。

土地勘もなく、入り組んだ路地をああでもなくこうでもなくと時に道を間違えながら進んでいたため、既に日差しは暮れて夕方になってしまった。

カリオストロは焦燥感を覚え始めた。

もしも同じ時間に逆行が起これるとすれば、残り時間は数時間もない事になる。内心の焦りを覚えながら先へ進んでいけば——彼女達の足取りはとある場所に近づいて、止まった。

「……」

「ん。ここだね、あの子のマナが感じられる」

「カリオストロ? ……もしかして貴方の目的もここ?」

三人がたどり着いた場所は、他の家に比べれば造りがしつかりした、そこそこ大きな酒場のような建物だった。明かりも見えず、扉も閉められ、今も酒場として機能しているかは謎だが、パツクの目的が此処であると同時に、カリオストロの目的地もここだと直感で分かった。

あの黒くて甘ったるい香りが今も尚、この酒場の奥から強く発せられているのだ。また、その香りとは別の嗅ぎ慣れた臭いも漂っている。

「あ、待ってカリオストロ」

小さな錬金術師は無言で酒場の入り口に向かう。二つの香りは次第に強く、混ざり合うようになってカリオストロの神経を逆撫でする。慌ててエミリアが後ろから声をかけたが、道中とは雰囲気を変え



た彼女に気圧され、追隨することは出来なかった。

そしてカリオストロは自然な動きで手を入り口に向けて翳すと――地面から唐突に現れた巨大な土の槍が、酒場の入り口を屋根諸共粉々に吹き飛ばした。

ほぼ同時に破壊された酒場から飛び出してくる黒い影。影はエミリアとカリオストロの間に、転がりながらも獣のように四足で着地する。

「あらあら過激なご挨拶。精霊も揃って私に会いに来てくれたのかしら――本当、素敵」

現れたのは全身を黒いドレスで身を包み、更にその上から黒いコートを着た妖艶な女性だった。先程の不意打ちを気にせず、むしろそれを嬉しそうに、舌なめずりをしながら喜んでいる。

その手に持つのは二振りのナイフ。既にその凶器が血に濡れていたのをカリオストロは見抜いていた。

「ねえ、キミってこの人と知り合い？」

「……こんな物騒な知り合いはいねえよ」

「では今から知り合いね。貴方の力も、そして精霊使いも魅力的――今日は本当に楽しい日だわ」

すつくと立ち上がった彼女はナイフについた血を舐めとると、状況に付いていけず、混乱の極みにあるエミリアの元へと自然体で近寄る。

黒髪の女性は殺意を感じさせない友好的な笑みをエミリアに見せると、おもむろにその凶器を振り上げ――、

「はいダメー！」

――パツクの力によって空中に現れた氷の盾が、小気味いい音を立てて一撃を防ぎ、更に返す刀で彼女に向けて放たれた三振りの氷柱が女性を貫こうとする。しかし女性は即座に飛び跳ねて軽々と、楽しそうにそれを回避した。

「つれないわ。彼女と同じ挨拶をしようとしたただけだと言うのに」

「そう言う挨拶は狂人同士でしてくれるかな？ ……ほらリア、キミ襲われてるんだよ。しっかりしないと」

「う、うん。ごめんなさいパック……でも、あなたもカリオストロも。何でいきなりこんな事を」

まだ混乱しているがようやく戦闘態勢に入ったエミリアは両の手を翳して目の前の黒い女性を睨みつける。この場で名前を呼ぶんじゃないよと内心で舌打ちしながらも、カリオストロはエミリアへ説明し始める。

「……血」

「？」

「血の匂いだよ。こいつ、何人か殺してやがる。多分今さっきもやってるな。狙いはなんだ？ 盗まれた物と関係あるのか？ ……もしかして盗品の強奪が目的か？」

エミリア達と自分が目指す目的地が同じだった事を考えて、カリオストロが推察を口にする。エミリアがハっとなって破壊された酒場に目をやり、その後もう一度女性に視線を向ける。向けられた女性は苦笑しながら肩をすくめた。

「私はただの依頼人。別に強奪する予定はないわ……でも少しだけ、依頼内容に不備があったのよね」

「不備があっただけで殺すんじゃないよ」

「あら、交渉というのはシビアなものよ。私は口を使うのは本職じゃないけど、あの子は欲張りすぎたわね……交渉相手を増やして釣り上げようとしちゃって」

「……もしかして、あの黄色髪の子……？」

「知ってるのね——ええ。もう一人の交渉相手より先に天使に会わせてあげたわ」

恐らくその少女含めて関係者が全員中で死んでいると悟り、エミリアは苦々しい顔で女性を睨みつける。溢れる強い義憤が、少女の体からマナとなって迸っているのがカリオストロに見えた。

対してカリオストロはその事自体は有り触れた事だと理解して、冷静に相手を見極めながらも、別の要因によって事態に本腰を入れて意

識を割くことが出来ないうでいた。

何故なら血の香りではない、あの甘い香りが今も尚あの酒場の中から漂い、そして香りそのものが先程よりも酷く濃いものになつていくからだ。

(誰も気付かねえのか?!?)

これだけの距離でも感じられる香りに顔を顰めるカリオストロだが、殺人鬼もエミリアも、パックすらもその様子に気付いていないのだ。

あの酒場で起きている現象が気になる。しかしあの女に背を向ける事も出来ない。ならばさっさとこの狂人をぶつ倒すに限ると意識を切り替え、カリオストロも魔導書を開いて殺人鬼へと敵意を向けた。

そして黒服の女性が駆け出し、エミリアとパックが氷柱を放ち、カリオストロが武器を放とうとした所で、

世界が

歩みを

止めた。

(お。い、まだ夜じゃ——)

一瞬で世界を包み込んだ、黒くて甘い香りが世界から色と、時の歩みを奪い、為す術もない時間の巻き戻しにカリオストロはまたも巻き込まれてしまう。

放った土の槍が、氷柱が、殺人鬼の走りが、ゆつくりと。しかし徐々に徐々に加速して戻っていく。崩壊した酒場が一瞬で元に戻り、酒場から路地裏へと歩みに戻りついてくるエミリアやパックとの会話が肺に回収される。謝罪の言葉が。蟠りが。路地裏での余波が。三人組の傷が。二人との関係性が立ち消える。黄色い少女もぶつかった黒髪の男性も、全て全てが収束点に戻っていく。

モノクロの空間で意識だけを残して、この日に為した実績が台無しになつていく様をまざまざと見せつけられることのなんと口惜しい

事か。なんと苦しいことか！　そして絶えず立ち上る黒く甘い香りの、なんと腹立たしい事か！

カリオストロは拷問のように続く逆光の流れの中、漂う事しか出来なかった。

——そして、最終的にカリオストロは二回目と同じ位置で立ち竦んでいた。

§ § §

吐き気と目眩を堪えながら、カリオストロは今までの事象を反芻する。

逆行するタイミングが夜ではなく夕方に変わった理由は何故だ？

自分が違う動きをしたせいで条件が変わった？　そうなのであれば何が鍵になった？　そして、あの酒場に一体何があるんだ？

振り返って分かる事は、恐らくあの酒場に逆行の原因が存在するという事。そして自分、あるいは別の理由で逆行の条件が変わるという事。

逆行した人物がもしも前回と同じ動きをしないと考えると、途端にランダム性が高まり、それを加味するととてもではないが毎回夜に逆行が起こるとは結論づけがたい。しかし繰り返される1日で変わらなないものもある。

それは「あの黄色い髪の少女がエミリアからある物を盗む」「少女はそれを黒髪の殺人鬼に届ける」「盗まれたエミリアがその少女を追いかける」という一連の流れだ。

(そこを突くしかないな……まずは酒場に速攻で移動し、逆行の原因を調べる事が先決だ)

「お嬢ちゃん、立ち止まってどうしたんだい？」

「あ。ごめんなさい、ちょっと考え事しちゃって☆」

にっこりと満点の作り笑顔を見せると、心配した男が頬を染めて、それならいいんだと照れながら通りすがっていった。道の往来で美少女がぼーっと突っ立っていたらそりゃ声も掛けられるわな、と思い

ながらまたも酒場へ早足で急ぐと、

「待ってくれ。——サテラ！」

往来から聞こえてきた声と、それによって一瞬で静まり返る往来。そして、その音の中心で銀髪の少女に向けて話しかける、あの黒髪の少年という光景が目に入って来るのだった。

## 第四話 鍵は黒髪の少年にあり

「待ってくれ。——サテラ！」

雑多な音が飛び交う活気ある街の中で、その少年の声だけが特別響いた訳でもないのに一瞬、街の活気はその場所だけ途絶えた。

カリオストロが目を向けた先には背を向けて立ち止まる銀髪の少女……エミリアと、彼女に声をかけるあの黒髪の少年の姿が見えた。

「無視、しないでくれ。いなくなつたのは本当に俺が悪かった。でも俺もわけがわからなかったんだ。あの後も盗品蔵まで探しにいったし、それでも会えなくて……」

エミリアに向けて必死に弁明をする黒髪の少年。本当に伝えたい何かがあつたのだろう、その顔には焦燥あるいは罪悪あるいは安堵の感情が複雑に絡み合つて浮かんでいた。

対してカリオストロは何があつたんだろう、という思いよりも、少年の発言に幾つか疑問点が浮かんだ。

（盗品蔵……？ もしかしてこの少年もあの時、酒場に行った？ その前に何故エミリアをサテラと呼ぶ？ 何故民衆が静まり返る？ それに何より——この出来事は1回目にも2回目にもなかったのでは？）

カリオストロの脳裏に湧き上がる何点もの不自然な点。内容を整理する前に、体を震わすエミリアが少年へと声を荒らげた。

「誰だか知らないけど、人を『嫉妬の魔女』の名前で呼んで、どういふつもりなの!?!」

予想外の怒りの言葉をぶつけられた少年は、完全に思考が停止してしまっていた。何故彼女が怒っているのかが、そして何故周りの住人が二人に対して奇異の目を向けているかが全く理解できていないのだ。

（嫉妬の、魔女……？）

それはカリオストロも同じだった。分かるのはその名前が所謂「忌み名」であり、哀れ少年は何の冗談かエミリアをその名で呼びつけてしまった、という事だけ。

（何故あいつをそう呼ぶ？ それに、エミリアはあの少年を知らない？ 人違いなのか？）

更に新たに浮かぶ謎。怒りを明確に露わにするエミリアの姿は二回目の世界では想像が出来ない程であった。少年は混乱の海に溺れて狼狽する他なく、一通り怒りをぶつけたエミリアは憤慨しながらもどこかに移動しようとする。

そんなエミリアに、何者かが群がる通行人の隙間を掻い潜って近づいていた。

「フェルト!？」

少年の声にはつと気づいた頃には、その人物はエミリアから何かを盗み出して、逃走しようとしていた。

（あの黄色髪の少女……そうか、この時はまだエミリアはモノは盗まれないんだな）

思いがけず時系列を理解したカリオストロは、逃げ去る盗人へと魔法を展開しようとして——思い直して手を下げた。

（盗みをここで止めても、時系列が今までと大きく変わるだけだ。ここは見逃す他ないだろうな。それよりも——）

「貴方もグルなの!？」「おい、待て！ 誤解だ！ 俺は……っ」

ちらり、と視線を向けた先には諍い合う二人。しかし幾ら詰問しても埒が明かないと考えたのか、少年を置いて盗人を追いかけていく。そして少年も釣られたように路地裏の方へと走っていき……。

「——っておい、ちょっと待てー!」

少年が全速力で遠ざかっていくのを見て、カリオストロは慌てて少年を追いかけた。が、体型の違いによる速度の差は明確だった。

声をかけても聞こえていないのか足は止まらず、結局は狭く入り組んだ路地の真ん中で立ち往生する羽目になっていた。

「くそ、はあ、はあ……火事場の馬鹿力つてやつか……け、結構早いじゃねえか。……仕方ねえ。先回りするしかないな」

どうせ最終目的地は酒場改め、盗品蔵になるだろう。一度上がった息を落ち着けると今度は目的地に向けて走り出し始める。時刻はまだ昼である。夕方にもなっていないなら、十分時間もあるはずだ。

ただあの黒髪の少年の行動……それによって「逆行」が早まる可能性はあるかもしれないが。

(しかし……アイツはこの盗品騒動にどういう関わりを持っているんだ?)

エミリアを誰かと見間違ったのか。それとも本人とそっくりな誰かに嘘の名前を教えられたのか。何であれ彼が盗品蔵で何かをしていたのは間違いない。前回の三人組の「痕跡」がこの説を裏付ける。

あの時、殺人鬼は交渉内容に不備があったと言った。「交渉相手を増やして釣り上げられた」と。つまり最終的に少年はあの盗品蔵で殺人鬼に殺されたのだろう。

そこから推察されるのは——あの少年が黄色髪の少女が盗んだモノを求める「別の交渉相手」だったという事。

(……ただ、これはただの推理であって真実ではないかもしれない。兎に角だ、盗品蔵であいつらを出待ちしてじっくりと詳細を聞くとしたらどうか)

二回の経験から盗品蔵への足取りに迷いはない。止まることなく移動すること小一時間程。カリオストロは盗品蔵の前に立っていた。

時刻は昼過ぎで日差しが陽気に建物を照らしている。

だが、カリオストロはまたも違和感を感じていた。2回目ではあれほどまでに匂っていた、あの甘ったるい香りが全くしないのだ。

(最低でも夕方にならないと、逆行が発生しないのか……?)

何であれ盗品蔵の中を確かめるべきだと、乱れた髪を取り出した櫛で梳き直す。そして身だしなみを整え終わると次に扉に近づき、いつもの天使のような美少女顔を浮かべながら可愛らしく1つ、いや2つノック。

「……大ネズミに」

(……符丁かよ)

ノックから帰ってきた言葉に。作った顔が早速崩れそうになる。盗品蔵とまで言われたならそれくらいは当然か。とどうしたものかと考え込むカリオストロ。

大ネズミ、大ネズミね、と思考していると、扉越しにいる誰かが、何



かそこそこ大きなモノを抱えた気がした。これは面倒臭い事になりそうだ。

カリオストロもまた魔導書を抱えれば、物理説得の準備は万端である。掌に光が灯り出す。

「符丁とかいいからここを開け——」

しかし口を開いた直後、カリオストロは三度目の逆行を体験してしまふのだった。

§ § §

(どうなってやがる……)

都合3度目の目眩と吐き気を味わいながら、カリオストロは道端で両手で頭を抱えて蹲っていた。およそ美少女がするような格好ではないがそれくらい脳内は混乱していた。

(逆行の瞬間が夜から夕方、夕方から昼とどんどん早まってやがる。しかもあの匂いの位置が盗品蔵じゃなくて別の位置に移りやがった。オレ様の動きが原因？ いや、直接的に大きく筋書きを変えるような何かをした訳ではない)

脳を高速回転させ、様々な仮説を検証していく。カリオストロは盗品蔵そのものに「逆行」の原因が存在すると当初考えていた。しかし、その原因そのものは移動出来るものであり、夕方以降に別の場所に移った。そして今回は盗品蔵とは反対側の場所で発動したと来ている。

要因として考えるのは……1つ。

一日の筋書きを大きく変える奴が居る。

(今のところ、あいつだけがその候補だな——あの黒髪の野郎め)

次こそはとっ捕まえてOHANASHIしようと心に決める。

ちなみに集中のあまり彼女の思考は駄々洩れになっており、真つ青な顔した美少女が、ぶつぶつと独り言を喋り続けるという、何とも近寄りがない存在になっていた。

「よしっ、まずはあの子を探さないとねっ！ ——あれっ?」

元氣よく立ち上がってみれば、さつと周りの視線が集まった。誰もが何とも言えない顔をしており、カリオストロは少し頬を染めて、無言かつ足早にその場を去る必要に駆られた。

……しかし少年が仮説どおり「一日の筋書きを変える奴」だとすれば、あの少年の居場所を突き止めるのは難しいだろう。

最終的に盗品蔵にまでいけば出会える可能性も高いが、ふとした事で逆行が起きてしまえば、何もかも意味がなくなる。

カリオストロは念のため、先程エミリアと少年が諍いあった場所まで戻っていた。当然、この場所でもう一度あの出来事が起こると思っていないが、何かしらの手がかりがあれば儲けものだ。

そう考えていたのだが、

「——ちやーんちやーちやちやつちやつちやつちやつちや！」

間抜けな声が、大通りの隅っ……青果店の近くの露天から聞こえてきた。

間違いようもない。無駄に目立つ奇妙な服装と、特徴的な黒髪の少年。そいつが奇妙な踊りをしながら、歌っていたのだ。

視認したカリオストロの口角は、自然と上がっていた。

「男にはやらなきやならねえときがある。そうだろ、オツサン」

「それによって破滅の道に進む事もあるけどね☆」

へ？ と呆気に取られた声を出した少年が声の発生源へと視線を向けると、そこには極上の美貌を持つ稀代の錬金術師が並々ならぬプレッシャーを発しながら笑っていた。

「こんにちわお兄ちゃん☆ 早速だけど☆ ——ちよつとツラ貸せよ」

§ § §

「人生初ナンパされたのがとんでもない美少女なのは嬉しいんだけ

ど、何か俺が思ってるナンパと全然違う!？」

「良かったね初めての経験がカリオストロで☆ カリオストロく、お兄ちゃんの初めて……貫っちゃった☆」

きやつ☆と少年の目と鼻の先で笑うカリオストロ。現在黒髪の少年——スバルと言うらしいが。スバルは顔だけ見れば世界一、二を争う美少女に路地裏に連れ込まれているという、字面だけで言えば薄い本展開を味わっていた。

しかしその状況を喜べると言えば、NOであるとスバルは断じただろう。

何故ならスバルは首根っこを掴まれて路地まで引きづられており、あまつさえ腹を踏まれて尋問を受けていたからである。

「あの、私何か粗相めをしたのでせうか。不詳ナツキ・スバル。親には生きてきてごめんなさいレベルのことをした覚えは御座いますが貴方様にはまだ何もしてない次第で御座いまして……」

「今回はまだ」と小さく口の中で呟くスバル。双方にとつて幸運なことにその呟きはカリオストロには聞こえなかつたようだが。

「親に迷惑かけるのは子なら当然ありえる事だけど、生きてきてごめんなさいレベルってとんでもない穀潰しって事? 救いようがないお兄ちゃんだねっ☆」

「自分で言っておいて何だけど他人から言われるともものっそい傷つくな!! やめてくれその言葉は俺に刺さ……近い! 近い近い顔近い!!」

ノリよく突っ込んでくるスバルに戯れに更に顔を近づければ、女性自体に免疫がないスバルが面白いくらいに顔を真っ赤に染め、カリオストロはドSな笑顔を浮かべながら満足そうに頷いていた。

「解放してくれてアリガトウゴザイマス……本性滅茶苦茶腹黒そうなのにその顔だけで全部許せそうになってしまふ俺マジチョロ——ふおんどぼっ!？」

「お兄ちゃんってよく空気読めないって言われてない? さくて、それじゃ質問だけどうスバルは今日盗品蔵に用があるんだよね?」

おしおきの蹴りが吸い込まれた後、放たれた問いにスバルのおちや

らけた雰囲気が消し飛んだ。

「ど、どうしてそれを……!! まさか——」

「いいか。質問に質問で返そうとすんな。黙ってオレ様の質問に答えろ。……じゃあ次、スバルは盗品蔵に何の用があるのかな？」

先ほどの口調と打って代わって、幼女とは思えぬ凄みのある胆力に気圧されたスバルは口をつぐみ、続く言葉を出せない。なので、カリオストロは逆に答えを投げつけていた。

「あの黄色髪の少女が盗んだ品物が目当て？」

「!! ……ああ。そうだ。」

やはり推測は正しかったようだ。

2回目の逆行時、スバルは盗品蔵で殺人鬼とは別の交渉人として赴いていたのだ。

現段階でカリオストロはあるひとつの確証に辿り着いていたが、先に質問を優先した。つまりはその品物を求める理由についてだ。

「ふうん……スバルって、人から盗んだ物がそんなに欲しかったの？」

「っ、違う！ ただ俺はあの子に！」

「あの子に？ 別の奴に贈り物でもしたい訳なのかな？」

「そう言う訳じゃねえよ！ ただ俺は——盗まれた本人に徽章を返したいだけなんだよ!!」

少し意地悪く質問をしてみれば、何とまあ大声で答えてくれたことか。ただ予想と違う思わぬ理由にカリオストロはきよんととしてしまふ。

「返す？」

「あ、ああそうだよ」

「何の為に？」

「な、何の為に？ なあ……いや、それは海よりも高く山より深い何とかが」

「訳分からん事言ってはぐらかすんじゃねーよ。ああ、もしかしてあの子がいい所の子だからって恩でも売ってあとで謝礼でもせびろうとか？」

「ち、違えよ！ 俺はただ、あの子が……あの子に……。り、理由はね

えよ。困ってる人は助けるのが当然ってもんだろ！」

『理由？ 特にないよ。困っている人が居たら助ける。僕は昔からそうしてたからな』

——ふと、ある一人の言葉がカリオストロの頭を過ぎった。

もごもごと口ごもるスバルの顔は真っ赤に染まっており、気恥ずかしいのかしどろもどろになりながらも誤魔化している。

最初こそ怒りに満ちていたカリオストロも、その分かりやすすぎる理由を察して一瞬で毒気が抜けた。

真意は似ているようで違うが、清々しい程純粋な気持ちは怒りを吹き飛ばすには十分で、代わりに笑みが溢れていた。

「……っというかあの子、そんなやんごとない身分なのか!? 実は俺って凄く今まで凄く失礼なことしてたのか最悪だああ」

コミュ障にしても程があつたのではとくねくねと気持ち悪く自問自答自己嫌悪に陥るスバル。

「名前も知らない子のために頑張っちゃうだなんて☆ お兄ちゃん凄いい純粋で……うくん、誠実……いや、キモいね☆」

「今なんて言い直したんですかねえ!」

「いいセリフのあとで自分で評価下げするような行動するのがいけないよね☆」

「ごもつとも過ぎて何も返せねえよ失礼しましたあー!!」

打てば響くとはこの事か。大げさに頭を大きく下げるスバル。ひねくれているようで純粋な少年に、カリオストロはようやく自然に笑うのだった。

「さて。ここまで聞いて分かった事がある」

「お、おう。お前……すいません、カリオストロさん。口調そうコロコロされると見た目美少女なものも相まってすげー混乱するんだが……というか普通に、ずっと可愛い路線でお願いします」

「何でスバルの要望聞いてあげないといけないのかな☆ っというか一々茶化すんじゃないよ。……それよりもスバル」

多少雰囲気こそ軽くなつたが、真面目な顔で見つめてくるカリオストロに、スバルもごくりと喉を鳴らして聞く姿勢になる。しかし、

「お前、世界の逆——」

「おつ、見ろよ」

「おいおい、ガキが二人でこんな所で何してやがんだあ？」

「こんな道で弱つちそうなガキが二人で出歩くもんじゃねえよ。とりあえず、出すもん出しな」

タイミング悪く、第三者が二人に介入してきていた。

カリオストロの話の腰を折った空気の読めない人物達。それは二回目の世界でスバルによって気絶させられたあの三人組のチンピラだった。

今まさに核心を話そうとした彼女は、青筋を立て、小さな手を見て分かる程強く握りしめた。

彼女の変化に気付いたスバルは小さく声を漏らして、怯え始めていた。

## 第五話 天才美少女錬金術師のおしおき☆

「まあこれも授業料だと思つてめぼしいもんおいてけや」

「俺達も本当はこんな事したくはないけどよオ」

「お嬢ちゃんもついてなかつたな。なくに変なことはしねえよ。金目のもんだけ置いていってくれたらなく」

下卑た笑みを見せ付ける三人組からはカリオストロは背を向けており、怯えた顔をしたスバルの情けない姿しか見えず、いいカモに出会つたとしか考えていなかった。

だから、そのスバルが怯えていたのが目の前の幼女に対してとは夢にも思つていなかった。

スバルは見た。自分の前に佇む可憐な少女の顔が見たこともないほどの狂気と、見るものを震わせる妖しい雰囲気を漂わせてゆつくりと口角を歪めて嗤つていく様を。

彼がまず感じたのはその狂気を実際に向けられる対象ではないという安堵。しかし実際に向けられなくてもその顔そのものを直視するのはあまりにも耐えがく、その見る者を震わせる嗜虐的な目線と呼吸すらも許されぬほどの威圧感の前に目を離す事が出来ず、スバルはただひたすらにこの視線が早く逸れる事を願う他なかった。

スバルは自らの心臓が早鐘を打ち続ける中、某漫画に書かれていた言葉を思い出していた。『笑うという行為は本来攻撃的なものであり獣が牙をむく行為が原点である』という言葉を――

「ふうーん……☆」

心臓が忙しきあまりに過労死しそうになったあたりでカリオストロがスバルに背を向け、スバルは金縛りから解放されたかのように空気を取り入れた。その様子を一顧だにせず、彼女は愚かな三人組へ近づいていく。

「おおっ……」

近づくカリオストロを視界に納めて、三人のうちの誰かが思わず声をあげた。それは恐怖ではなく、美しい芸術を見た時のような、感動をばらまかせていた。

均整の取れた、幼さを匂わせるもしつかりと成長を感じさせる少女体型。少女の魅力を余すことなく伝える、機能美にあふれた赤い貴族服。金糸のように美しく輝く、曇りひとつもない、肩まで届くブロンドヘア。百人中百人が振り返る、その美貌。そして、その顔に浮かべた天使ともいえる無垢な表情――

三人組は言葉も忘れて、少女を魅入った。

貧民というヒエラルキーの最下層に生まれ、追いはぎに堕ちた彼らにも常識的な理性は持ち合わせており、当初は少女を辱めるつもりは全くなかった。しかし稀代の天才錬金術師が追い求めた完璧な少女を見て、彼らの薄い理性は沸き立つ内なる獣欲により、瞬く間に崩壊直前にまで追い込まれていた。

「へ、へへ。お嬢ちゃん凄え可愛いじゃねえか。へへ、へ……」

故に、火に近づく蛾のようにふらりと誰かが彼女へと近寄ってしまったのも無理はないことだろう。三人組のうち一番小さなチンピラが、本能に従って慣れ慣れしくもカリオストロの肩に手を触れようとして――

ぐちゃっ。

「あっ、ヒいん☆」

その小柄な体がびくんと跳ねた。

当然、声の出所はカリオストロではなく、近づいたチンピラだった。

何が起こったか分からないチンピラの残り二人とスバルは、男の様子に目を見開き。

少女は慈愛を含む笑みで、目の前で悶絶するチンピラを泡を吹いて倒れるまで見つめていた。

何があつたのか。哀れな犠牲者一号が倒れ伏した後、その原因を察することが出来た。ちようどそのチンピラが立っていた足と足の間に、最初はなかった筈の土で出来た四角い杭が生えていたのだ。

「あ、ああ、あああああ……!!!」

その攻撃の真意に我先に気付いたのはスバルであった。彼はその



恐ろしさに気付いてしまえば、攻撃を受けた訳でもないのに搾り出すように呻き声を出して震え始める。

「カ、カカ、カンバリーイイ——ツ!!!!」

「お、おまつお前お前それはだめだろ!! やっていいこと悪いことがあるだろ!!」

「あ——!!! あ——!!! 今ぐちゃって言った!!! ぐちゃって聞こえた!!! 男の子の大事な男の子に大きな杭がずどんって!!!」

その場は今もお泡を吹いて痙攣する一人を除いて阿鼻叫喚に包まれた。当事者であるカリオストロは天使のような微笑みを絶やさず、にここに、にここに倒れ伏す男の末路を見届けた後、次の獲物に視線を向けた。

「て、てめえよくもカンバリーに!」

「よせっ!」

舌を出した中ぐらいの大ききのチンピラは、彼女の無慈悲な攻撃に怯えはしたが中身は単純なのか我先に怒りを取り戻し、その手にナイフを持ってカリオストロへと突貫する。ちなみにその暴拳を止めようとしたのはスバルだったりする。

「うわっ、馬鹿やめろ!」

だが、カリオストロが細い指先を男の大事な場所へと向けると、襲い掛かったチンピラは慌てて片手でそこをカバーしながらバックステップをして、

どぬっ、ぐちゅん。

「あギッ! んぎゅう☆」

ステップした場所に丁度よく出現した土の杭が、ピンポイントに男の臀部のある部分を貫き、ぴんと彼の背が伸びる。その直後、反射で前のめりに倒れそうになった男の不可侵領域に向けて再度杭が突きたった。男は一瞬で白目をむいてその場で果て、土の杭が地面に戻っていくのと同じようにずると崩れ落ち、膝をついた後、前のめりで倒れた。

「……」

「……」

残された男たちは股間を手で押さえて青ざめる他なく、カリオスト口が次の獲物を視界に納めると、残った一番の大男が恥も外聞も捨てて地面に膝をついて命乞いをし始めた。

「ヒイツ!!! ゆ、許してくれ! 出来心だったんだあ!!!」

「お、俺からも頼むカリオスト口彼らを許してやってくれ!? 流石にあそこは駄目なんだ! 男として生きていけなくなる! せめてそこ以外にしてやってくれ!」

なぜか一緒になって許しを懇願するスバルを置いて、カリオスト口は自分より目線の位置が小さくなった男の目を覗き込む。

「今の台詞が一般的に私が貴方達に追いはぎされて、辱められた後でも通用するなら許してあげるけど、そうじゃないよね? 違うよね? 一歩間違ったら逆の立場になってたんだよ?」

「い、怒りはごもつともだ! な、何なら俺たちの金を持っていったいい!」

「何で私があなた達みたいな屑と同じようなことしないといけないのかな☆ 勘違いしないで欲しいんだけど☆ 正直不快っ☆」

「も、もも、もう金輪際こんな事はしねえ! 全うな働き口を手に入れる! 二人にも絶対いい聞かせるから! 頼むっ!」

「こ、ここまで言ってるから許してやろうぜ? なっカリオスト口、お、俺たちには実害もなかった事だし」

カリオスト口の無垢な表情に相反する、魂をも射抜く視線に耐え切れず、ついに男が跪いた状態でぺこぺこと平伏し始め、スバルもカリオスト口を取り成そうと、媚びた目で訴えかける。すると彼女は「ん☆」と可愛らしく唸り始めて、何かを考えだし始めた。

もしかして少しは心に届くものがあるのかと期待したスバルは、如何に男をボールレスにする事が無駄で無常で無益かを色々な視点で説得した。

うんうんと唸るカリオスト口は一区切りスバルが口上を述べた数瞬後、「うん、決めた☆」と一人何かを結論付けて手をぽんと叩いた。

「ねえおじさん☆ もうこういうことしないで誓える?」

「ち、誓う! 絶対にしないっ!」

「本当に?」

「ししししない!!! あ、あいつらにも絶対に言い聞かせる!!!」

「そっか。じゃあ許してあげる」

「あ、ありがてえ! そ、それじゃこれで俺たちは——は……?」

早速二人を担いで逃げ出そうとした男の手足がカリオストロが鳴らした指の音と同時に壁に一瞬で縫い付けられた。しかも、大股開きの格好で。

「え、あ、あの……」

「——と言うとでも思っていたのか?」

希望を殺いだカリオストロは、今までの慈悲の顔を捨てて見るものを震わせる嗜虐的な笑みをしていた。どうやらカリオストロ脳内裁判所での審議結果では、最後の一人に情状酌量の余地は無かったようだ。

ただのチンピラ相手にここまでカリオストロが怒っている理由は単純。度重なる理不尽な逆行により、彼女のストレスが溜まっていたからだ。別世界に飛ばされたことが、積み上げた関係性がリセットされる事が、逆行による体調不良が。様々な要因が着々と彼女のストレスを蓄積させていた。そしてトドメに話の腰を折った頭の悪いチンピラの登場である。瞬く間に彼女のストレスゲージは振り切れた。

彼女の行動を阻害する事も万死に値する所業だが、加えて彼女は馬鹿が大の嫌いである。関係ない場所でのうのうと暮らす馬鹿は我慢できるが、天才である自分の足を引っ張る馬鹿は、特に許せなかった。

「イヤアアアア!!! 誰かああああ!!! ま、ママああアアア!!!」

それだけは、それだけは勘弁してくれええ!!!」

「ハハハハハ——ツ!!! 泣き喚いたってめえの母親が来るわけねえだろうが! オラツ、女の子になっちまえツ!!!」

「その台詞絶対何か危ねえよ!? っていうか鬼、小悪魔!! 小悪魔

じゃなくて悪魔!!! いや、天使！ 天使顔っ!! とにかくやめてあげてくれえ!!! いや止めて下さいカリオストロ様！ あれだけ反省してただろ!？」

「甘い、こういう輩が一度きりの反省で止めると思ってたのか？ こういう輩に対して必要なのは言葉の説得じゃねえ——痛みによる上下関係の刻み込みだッ！」

大股を開いて壁に固定された大男が泣き叫び、スバルがカリオストロにすがりついて懇願し、カリオストロは高笑いをしながら杭を男のご本尊に向けて射出しようとして——

「……何か騒がしそうだけど。これは一体。何があつたんだい？」

いつぞやに出会った、赤髪のイケメンが混沌の坩堝にある路地裏に現れて居ていた。大男はその姿を見て安堵の涙を流し、そして意識を飛ばすのであつた。

§ § §

「事情は理解したが……自衛も行き過ぎては立派な罪だ。彼らにとつても殺されなだけマシではあるだろうが、出来るなら今度からは衛兵を呼ぶなりして欲しい所だね」

「ちっ、反省してまーす☆」

「全く持って反省してないよな!? す、すいませんマジ反省してますんでー！」

騒ぎに駆けつけたのはカリオストロが1回目で出会った燃える紅髪の男、ラインハルトであつた。非番であつた彼は街を散策中にたまたま男が叫ぶ声を聞きつけこちらに来たのだという。

スバルはその整いすぎたイケ顔と、気障にも思えない程の人格者ぶりにドギマギし、カリオストロは見知った相手のように振舞って彼に敬意を表さない。

「何はともあれ、二人が無事でよかつたよ。今の王都は色々ごたごたしているせいか、衛兵の目も隅々までは届きにくい。ただ結果を見

るに、僕の微力すら必要なかったようだけどね」

「いやいやいや！ぶつちやけ俺だけじゃ止めきれなかったから助かったって言うか。ラインハルト……さんが来てくれただけで嬉しいです」

慌てて礼を言うスバル。加えて礼を言おうとしないカリオストロを見て頭を抑えて強制的に礼させようとするが頭に触れようとした矢先に彼女に膝を蹴られ、痛み悶絶する羽目になった。

「ラインハルトでいいよ、スバル。そしてカリオストロ。兎に角、彼らの身柄はこちらで預かろう。……しかし面白い術を使うようだねカリオストロは」

「ざらつと距離縮めて来るなこのイケメン……ああ、カリオストロの魔法は凄いやな。あつという間に男たちを拘束して土の杭で……うっ、頭が」

「……」

見透かすような視線がカリオストロへと向けられ、カリオストロは不機嫌そうに睨み返す。直後にラインハルトは不躰に眺めてしまつてすまないと謝つた。恐らく彼はこの回でも自分の体について気付いて居るのだろう。彼女はそう解釈していた。

「さて。本来ならこんな危ない場所に居る君たちを安全な場所に無事に届けるのが仕事なのだが……君達は迷い込んだ、という訳ではないんだね？」

「あー……まあ、ちよつと野暮用があつてな。いや、すぐ済むような用事だと思う。多分。めいびー」

「うん☆ ちよつとね☆」

ふむ、と頷くラインハルトはしばし何かを考えると、

「二人共珍しい髪と服装、それに名前だと思つたから詳しい話を聞きたいとは思つたが……どうやら急ぐ用事もあるようだね。この先、また同じような輩が居る可能性もない事はない。僕の微力でよければ同行を——」

「ありがとう、でも大丈夫だよラインハルト☆」

「お、おい」

食い気味に断ったカリオストロに、流石にとスバルが声を出す。しかしラインハルトは「そうか」と落胆した様子も見せずに二の句を告げた。

「いや、済まない。余計なお世話だったね。キミ程の実力があればそれも杞憂で終わりそうだ。ただもしも何かあるんだつたら衛兵として、一個人として些細な事でも力になる事は約束しよう」

それでは、とラインハルトは気絶した三人を縛り上げて大通りの方へ戻っていった。

「別に手伝って貰ってもいいんじゃないかねえのか？　ラインハルトがどれだけ強いかは分からないけどよ、この先アイツが……」

「アイツってのは大体分かかってるし、ラインハルトが強いのも認める。だが不要だ。お前これからの話をあいつと交えてやるつもりか？」

「い、いや、そんなつもりはねえけど……」

ラインハルトと別れたあと、スバルとカリオストロも盗品蔵へと移動しながら話していた。

「けど俺的には悪い案だとは思えねえんだよ。そりやあいつはイケメンだぜ？　俺と違って、マジ嫉妬覚えるくらいなの。だけど良い奴っぽいし、正直関係の1つでも作っておいたら御の字って言うか……」

「……どんだけイケメンに拘ってんだよ。イケメンは関係ねーだろ」カリオストロとしても、そこまでデメリットはないとの考えはあった。根の優しい、正義に殉ずる好青年。立ち振る舞いからも気配からも、間違いなく戦力にもなるであろう、関係を作っていけば今後ヴァシロンを見つけた時に、非常に役立つかもしれない。

が、彼を連れていけばまた状況が一変する可能性がある。起きるイベントも起きなくなければまた逆行の憂き目に遭う。であるならば不確定要素は出来る限り減らしておきたかった。

「ま。安心しろよ。この天才錬金術師カリオストロ様が居ればあんな奴目じゃねえって事をこれからみっちり証明してやる」

「……分かった。俺的にも单身突っ込むよりは全然嬉しいから良いって言うか？　あ、実は俺正直戦力外通告受ける程の弱さなんで、頼みますカリオストロ先生」

「見た目で分かっているから申告必要ねえよ。あと先生じゃねえ、カリオストロ様と呼べ」

二人は軽口を言い合って進み——気づけば昼の光に照らされた盗品蔵の前についていた。

## 第六話 永き一日の収束（前編）

硬く閉ざされ人気を感じさせない古びた盗品蔵。スバルとカリオストロは目標となる場所に夕方になる前に辿り着く事が出来た。

「まだこの時間帯はフェルトは居ないとは思うけどよ、これなら先に交渉を終わらせることも出来そうだな」

「フェルト……ああそう言えばフェルトってあの黄色髪 of 盗人の事か？」

「知ってるのか雷電。あああの手癖の悪いガキンチョだよ。って言うか素で答えちゃまってるけど、もしかしてカリオストロも……」

「誰の事だ。あとお前も餓鬼に変わらないだろが。……ああ、ここまでくれば流石に言わなくても分かるだろ？」

「俺より小さいカリオストロに言われたくねえよ!」

結局チンピラが来て最後に言おうとした話はうやむやになってしまったがカリオストロが何を言いたいのか、スバルは理解していた。「そうか、まさか同類が居るとは……はっ、もしかやこの世界の俺のメインヒロインはカリオストロ!」と聞こえるくらい勢いよく独り言を言うスバルに、カリオストロは喧しいキモイと膝裏を蹴る。

……二人は知る由もなかっただろう。この時彼らは非常に綱渡りな会話をしていた事を。もしこの時に起こる事を知っていれば、二人はまた違った道を歩んでいただろう。

「しかしスバル。あいつが何盗まれたかは知らないがお前交渉って……大金でも持つてるのか？」

「いや、残念ながら俺はこの世界では天下御免の一文無し……あーやめてそれやめて! 違うから! 金はないけど代案はあるから!」  
笑顔を湛えたカリオストロがずっと指先のある場所に向けようとして、慌ててスバルが涙目になって弁明し、懐からあるものを取り出した。スバルが取り出したものは薄い板のようなもの。そう、ガラケーである。

「何だあそれ?」

「ふっふっふ、良くぞ聞いてくれた。これぞナツキスバルの最終兵器



……時を切り取るミーティアだ！」

「ミーティア？」

初めて聞く単語である。しかしそれ以上に目の前の不思議な物体に興味を惹かれた。彼女でも知らないものがあると得意げになったスバルはカリオストロへそれを手渡し、彼女はまじまじと観察する。恐らく見たことのない材質で出来たそれは、不思議な手触りをしていった。

「見たことねえ代物だが、これが本当に値千金なのか？」

「おおとも。この世界では絶対にお目にかかれないレア物だ。それじゃよく見ておけよ——スバル・フラーツシュ！」

「うわっ！」

スバルは「ミーティア」を再び手に取ってカリオストロへ向けると、不思議な音とともにその薄い物体から眩い光が一瞬またたき、彼女は眩しさに手を翳してしまう。

「さて、こちらを——いたつ。こちらをご覧——痛いつて！いきなり悪かったつて！だから蹴るのはやめてくれ!!」

まばゆい光を浴びせられたカリオストロが無言でスバルへと鋭いローキックを見舞う中、スバルは痛みにくらえながらミーティアの裏面を見せると、そこにはこちらを覗き込むカリオストロの姿がはつきりと写されていた。

「写真か」

「よくご存知で。そう、これは小型の写真機だ。俺の世界じゃこういうのがよく出回ってんだよ。更に言えばこの世界にはそういう物は無い、らし……いい」

「へえ、へえ、ほう。中々どうして……うん、うん、やっぱりオレ様は世界一可愛いな！」

「あつハイ。存じ上げております」

自分の美しい顔が鮮明に移る機械が気に召したカリオストロは、その後何枚かスバルに写真を取らせてその画像を見て悦に浸っていたが、思い出したかのように咳払いをする。

「……ごほん。なるほどな、好事家なら確かに大金を出しそうな代物

だ。しかし、お前が返そうとする盗品……オレ様は知らないが、それに釣り合う価値なのか？」

「ん？ あ、悪いカリオストロは知らなかったか。交換する商品は竜の紋章入り、そして宝石入りの徽章だ。ぶっちゃけ言えばそれについても問題ないぜ。前にこの盗品蔵に居る爺さんに太鼓判を押して貰ったからな」

スバルなりに考えた内容にカリオストロもふむ、と頷く。どうやら二週目の時、彼は盗品蔵でこれと徽章の交換を持ちかけたらしい。ただそれはあの殺人鬼の機嫌を損ねる結果となり、結果として殺される羽目になったようだ。

「しかし前も同じことしたんだろ？ それで同じ目にあってちや意味ねえだろうが」

「それに関しては……エルザの野郎が来る前にさっさとフェルトと交渉して徽章自体を取り戻す。それだけしかない」

「エルザ……ああ、あの殺人鬼の女か。その案、お前の目的を達成するだけならいいだろうけどよ。結局はお前もフェルトも目当ての子も殺されるぞ」

「——は？」

「は？ っってお前……普通に考えたらそうだろうが。あの女の狂気は見ただろ？ アイツが依頼した盗品を受けとれませんでした。はいそうですか。で済みますと思うか？」

「あ」

スバルは何回もの死に戻りで視野が狭くなっていたせい、ひとつの目標しか見えていなかった。カリオストロから見ても、スバルから見てもあの女は快樂殺人者であり、依頼を成し遂げられなかったあの少女は見せしめに殺され、それに関わったスバルも、エミリアも一人ずつ殺していく事だろう。

カリオストロはその発想までに至れなかったスバルにイラついたが、仕方ないとばかりに啞然としていたスバルの背を叩く。

「だが、それはオレ様が居なかったらの話だ」

「……！」

「大サービスだ、本来ならこんな事無償でなんてしてやらねえからな。さっさと交渉すませるぞ」

目の輝きを取り戻したスバルが気を取り直して入り口に向かい、カリオストロはその後に追隨していった。

（つたく、以前に比べたら考えられないほどオレ様も甘くなつたもんだぜ。お前のせいだからな、グラン）

お前が探し出すまでにこっちから戻ってやるから待っている。小さく呟いた声は空に溶けて、誰にも聞こえなかった。

§ § §

カリオストロはそういえば盗品蔵の符丁を知らなきや入れないと思いついたがスバルが既に知っていたようで、軽々と、ふぎけながら符丁に回答していく。

そのふぎけた符丁に怒りながら中から現れたのは、浅黒い肌を持つ筋肉質で大柄な老人だった。

最初はこれから交渉があるから帰った帰ったと袖にしようとする老人だったが、フェルトに用があつて来たと言う言葉とお近づきの印だとスバルが薄い手提げ袋から取り出した謎の菓子を手渡しして、中でフェルトを待つ事に成功した。

「お爺ちゃんありがとう☆」

「フェルトの客なら一応ワシの関係者じゃからな。あとお主、ワシに渡した菓子なら勝手に食うでないわ！」

「持て成す茶菓子のひとつもないなら皆でお菓子をわけあえばいいじゃない。みんなは一人のために、一人はみんなのために。OK?」  
「明日の食い扶持にも困るこの貧民街でそんな博愛的な言葉投げつけられて自分の飯を手放す奴がおるか！ 言葉じゃ腹は膨れんのじゃぞ！」

さまざまな盗品が置かれた蔵のバーカウンターののような場所で三人は思い思いに座り込み、カリオストロはまるで年頃の少女のようにきよろきよろしながら出されたミルクを飲み、ロム爺は貰ったコンポ

タチップスを食べ、スバルはそのコンポタチップスを何個かつまんで時間を潰していた。

「しかしお主が持ち込んだこの品は確かに価値がある代物じゃな。ワシも長いことこの稼業をしてきたがミーティアを見たのは初めてじゃ」

「だろ？ だろ？」

スバルはその説明にしたり顔をし、カリオストロはミーティアの意味を聞いてなかったので可愛らしく首を傾げると、優しい笑みを浮かべて老人が説明する。

「魔法の才能がないものでも、それを使うだけで魔法を行使出来るアイテムの事じゃよ、お嬢ちゃん。ミルクのお代わりはどうじゃ？」

「ありがとう☆ お爺さん優しいんだね☆」

「何か露骨に俺との態度が違うんじゃないのか!？」

「見た目も中身もお主とは天と地の差があるわい、当然じゃろう」

「爺さん、見た目に騙されたら痛いっ!? あ、ああああー、きゅ、急におなか痛くなってきたなあああー……」

老人からは見えなかったが震えた声で机に突つ伏すスバルの腹にはカリオストロが持つ分厚い本がめり込んでいた。何じや藪から棒に、拾い食いでもしおったか。と訝しむ老人を置いてカリオストロは盗品蔵の至るところを眺め続けた。

(やっぱりあの気配が無いな、こりや盗品蔵そのものに何かがあると考えるのはよしたほうがいいだろう。って事は別の条件か。その鍵は間違いないスバルが握ってやがるのは違くないが……)

情報そのものはだいぶ集まってきたがまだ真相は見えてこない。残る怪しむべき点はお目にかかっていない徽章そのものぐらい。それ以外に自身の知らない要因があればお手上げだが、多角的に分析してもカリオストロは恐らくはそれ以外の要因はないと考えていた。

老人が酒を飲み、スバルが戯言を述べ、カリオストロが笑顔を絶やさず相槌を打つ時間が少々続き、そろそろ話題が消えそうになった所で、コンコンとノックの音が響く。

「来たな」

老人が符丁の確認をしに行く。スバルの顔が緊張に引き締まり、カリオストロも体を入り口のほうへ向き直し、現れた少女を視界に入れた。

「……ロム爺。こりや一体どういう事だ？」

「どういう事も何も、お前さん目当ての客だ。何でもお前さんが今日盗んだ品が欲しいんだと」

「は？ 何でそれを知ってるんだ？ まああたしは金が貰えれば何でも良いんだけどよ」

勝手知ったる我が家に居るかのようにスバルの横に座ったフェルトは彼女がロム爺と呼んだ大男からミルクを受け取ると、一気に飲み干し、味に愚痴を零した。

「それでアンタ達はアタシが盗んだものに幾ら出してくれんだ？ 言つとくけどアタシも結構苦労したし、先約もあるんだ。いい値を出してくれないと応じてあげないからな」

「金はねえ。が、その代わりになる超絶レア物を用意した。なんとその価値聖金貨20枚!! 中々いい条件だろ？」

鼻高々にミーティア：ガラケーをフェルトに突きつけるスバル。フェルトは訝しみながらそれを見つめ、そのあとロム爺を覗き込んだ。

「……へえ。ロム爺それって本当か？」

「こいつを調子に乗らせるのは癪だが、嘘ではない。これは時を切り取るミーティアよ。ワシは20金貨程だと見込んだが、それ以上出す輩はごまんとおるじやろうな」

その言葉にフェルトが目を見開き、スバルはそうだろうそうだろうと満足そうに頷く。カリオストロはじつとフェルトを見詰めて、口を開いた。

「ねえねえ、それで盗んだ物はちゃんと持ってきてるの？」

「つたりめーだろ？ ほら見ろよこの徽章をよ。宝石入りだぜ？」

フェルトが懐から取り出した黒く三角形の徽章は、確かに竜の紋様が入っており中心には宝石が埋め込まれていた。カリオストロはしばしその徽章をじつと見詰めていたが、やがて興味を無くしたのか視

線を別の場所に移した。

(……)いつも、違う)

徽章からはあの雰囲気か微塵も感じられなかった。となると何が要因なのかが皆目分からなくなってくる。発動の鍵となる行動が必要なのだろうか？ とするならばスバルが鍵であることは間違いないが——考え込むカリオストロをよそに、取引は進んでいく。

「ふうむ。このような徽章も見たことはないが……なるほど、これも中々価値のありそうなものじゃろうな」

「だけど、俺のミーティアより価値は？」

「……ないと言わんが、まあ、お主のミーティアの方が価値はあるじゃろうな」

「よっし！ よしよしよし!! じゃあ決まりだな交渉成立ウ！ 早速このミーティアと徽章を交換——」

(この馬鹿。 急ぎすぎだ)

カリオストロは表情を変えずに内心で舌打ちした。スバルは繰り返した世界で彼女がたどった末路を忘れている。彼女はエルザ相手に欲を出し、殺された。であれば性急な結論を出せば間違いなく——「ちよーつと待った。慌てんなよ兄ちゃん、アタシにも依頼人が居るんでね。実際の交渉は依頼人としてくれよな」

スバルが伸ばした手は空を切る。片手に徽章を掲げたフェルトは唖然とするスバルを見て意地悪そうに笑っていた。

「え、いや……聞いただろ!? このミーティアの方が価値があるって……それで満足しておけよ！」

「勝手に交渉してアタシが依頼人になんて説明すればいいんだよ。それに……お前はなんで損する交渉をそこまで喜んでるんだ？ もしかしてソイツに隠された価値があるんじゃないやねーだろろうな」

「おまつ、その欲を掻きすぎるとやめろよ！ それじゃいつか、つつか今日絶対痛い目にあうぞ！」

「はあ？」

喧々囂々と交渉ともいえない口喧嘩が二人の間で勃発する。ただし喧嘩の形勢はスバルの不利。ただ早く交渉を終わらせたいという

気持ち先立つスバルには、フェルトを納得させるカードが少なかつた。

やれやれと言わんばかりにロム爺が酒を飲み、カリオストロも頼杖を突いてその様子を眺めた。

時々ちらちらとこちらを見て助けを求めるスバルの視線を感じたが、彼女はそれを意図的に無視する。勿論彼女がスバル側に立てば交渉を早く終わらせてやることも出来たが、そのつもりは最初からない。逆行現象を拝見するためには、当時と可能な限り同じ状態にする必要がある、つまり、カリオストロはエルザやエミリアを意図的にこの場に呼び込もうとしていたのだ。

よって彼女は傍観に徹する。交渉が長引けばよし、早く終わるならその時はその時だ。勿論エルザにみすみすとフェルトやロム爺、スバルを殺させるつもりは毛頭ないが。

互いに妥協出来ずにだらだらと時間だけが過ぎていく。我関せずといった体でいたカリオストロが、飲んでいた自身のミルクをそろそろ飲み干しそうになった頃、新たに扉を叩く音が転がり込み、スバルが文字通り飛び上がる。

「誰じゃ?」

「お、噂をすればなんとやら。依頼人の登場だ。兄ちゃん、話は依頼人とゆーっくりしてくれ。あたしは高く買ってくれるほうを取るかな」

アタシが出る、と椅子から降りて入り口に向かうフェルトをスバルが悲痛な表情で叫ぼうとする。

「やめろ。殺——んごっ!」

「……あ、ごめんねスバルお兄ちゃん☆ 本が落ちちゃった☆」

が、カリオストロが落とした本の角がピンポイントでスバルの小指に直撃し、スバルは悶絶してそれを行うことが出来なかった。足を抱えて倒れるスバルに近寄ったカリオストロは鈴の音のような声で囁く。

(な、何するんでしょうか……!)

(いいから黙ってろ。それ以上自分を不利にすんじゃねーよ)

(でもエルザが……！)

(オレ様が居るって言ったろ？ ……後はオレ様の出番だ、大人しくしている)

その様子に肩をすくめたフェルトは止めた足を再度入り口に向けて、扉を開く。倒れ伏したスバルがその様子にごくりと喉を鳴らし、扉から漏れた明かりが、その人物を照らす。

「げっ」

「えっ……っ？」

「どうとう見つけた、観念しなさい」

そこに居たのはまさしく怒ったぞと言わんばかりに眉をひそめる雪の少女、エミリアだった。



## 第七話 永き一日の収束（後編）

薄暗い盗品蔵の中を扉から差し込む夕日が薄赤く照らす。その夕日を背景に、仁王立ちになった少女がぷんすかぷんという言葉がとてもし合う顔でフェルトを睨んでいた。

「逃げられると思わないで。あの徽章はすごく大事な物なの。返して貰うわよ」

「ホンつとにしつこいな、アンタ」

「盗人猛々しいとはこの事ね。神妙にしてくれれば痛い思いはしないわよ」

言うが早いかエミリアの周りに6つの氷柱が浮かび上がってフェルトを威嚇する。そのうちの2つは倒れ伏すスバルとロム爺に向いていた。

ただ肝心のスバルはまさかのエルザではなくエミリアの登場に呆気にとられており、カリオストロは先に着くのがエミリアだとは思っていないかったものの、どちらが先でも問題ないと、フェルトとエミリアのやり取りを大人しく見守っていた。

「くそっ、ロム爺…」

万事休すかとフェルトがロム爺に視線を向けるも、カウンターの中に置いてあった大きな棍棒をいつの間にか持ったロム爺は、自身に向けられた凶器ではなくその先に居る少女から目が離せなかった。

「ワシに振られても動けん、命を握られてるようなもんじゃ。それに嬢ちゃん、あんたエルフじやろう」

「正しくは違う。——私がエルフなのは半分だけだから」

その言葉に強く反応したのはエミリアとスバルを除いた三人。全員が全員違う反応をした。その中でカリオストロはへえと興味深そうに頷くだけだった。

「銀髪、ハーフェルフって…お前っ!」

「他人の空似! 私だって迷惑してるんだから」

エミリアの悔しそうな声を聞いて、忌み名となった元は銀髪のハーフェルフと情報を関連付けるカリオストロ。2回目のループで、住民

が全員振り返る程の忌み名だ。さぞかし迷惑を掛けた存在なのだろう。ふんふんと一人納得をするカリオストロが倒れたままのスバルの元から離れようとする、その足元、丁度スバルの顔の鼻先に氷柱が突き立った。

「いいっ!?!」

「――」

「え、パツク?」

銀色の髪の毛の横からひよっこり現れた精霊、パツクが小さな手を突き出していった。エミリアすら驚いたことからパツクの独断であることは明白だった。

「リア、一番警戒すべきはこの子だよ。この子は他の子と体の作りが違う」

「……そうなの?」

「うん。あとマナが底知れない。ボク程ある訳じゃあないけど一番厄介な子だと思うよ」

そういえばこいつが居やがったなど内心で苦虫を噛み潰すカリオストロ。そんなカリオストロに向けて全員の視線が突き刺さる。

「そんなに見詰められちゃうと、カリオストロ照れちゃうなっ☆ あと〜カリオストロは盗みと関係ないから☆」

「そ、そうそう。追加すれば俺も盗みとは関係無い。あと俺的には血を争うような展開は御免って言うか……兎に角! 四方丸く治めるためにもフェルト、徽章返しちやおうぜ? それでキミは徽章を返して貰ってさっさとここから出てく。もう盗まれないようにな!」

「は!?! 兄ちゃん達どっちの味方だよ!?! 特に兄ちゃんは徽章欲しいんじゃないのかよ! そんなんで丸く収まる訳ねーだろ!」

「カリオストロお兄ちゃんに連れてこられただけだもん☆」

「うゝっ、い、痛いところを……いや、本来の目的は返したら達成できるって言うか……って今さらっと思捨てたなオイ!?!」

「……何だかよく分からなくなってきたけど、あなた達仲間じゃなかったの?」

「あれだよリア、小悪人の見苦しい仲間割れ」

激怒するフェルト、宥めるスバル、混乱するエミリアとロム爺に、我関せずのカリオストロ。今や盗品蔵は一気に混沌に傾き、收拾がつかなくなりそうになった。

だが、その混沌を更にかき乱す黒い影が滑るようにエミリアの背後へと忍び寄っていた。それに真つ先に気付いたのはスバルとカリオストロ。スバルは咄嗟に叫んでいた。

「バック、防げ!!!」

息を呑んで少女が振り返ると、夕日に輝く銀刃が振り下ろされるのは同時。しかし声に気づいたバックがいち早く展開した氷の盾がその一撃を阻み、同時に氷柱が狼藉者へと向けて連続で放たれる。侵入者はその反撃を事も無げに踊るように躲すと、驚く一行と離れた場所に着地した。

「まさしく間一髪。結構危ない所だったね、ナイスフォロー。キミって実はいい盗人？」

「盗人じゃないって全力で否定させて貰うけど、そっちこそナイスガード」

バックとスバルが二人でサムズアップしあう中、エルザは獲物を見定める蛇のような目でエミリアを見つめる。それはカリオストロに勝るとも劣らない嗜虐的な目であった。

「——精霊、精霊ね。ふふふ、素敵。精霊はまだ殺したことがなかったから」

ククリナイフをひゅん、と器用に手の内で回すエルザに対してフェルトが食ってかかった。曰く交渉はどうした。話が違うと。だが持ち主や余計な人まで連れてきて交渉もへつたくれもないとエルザは一笑にして付す。

二回目と多少筋書きは違うだろうが、かねがね予想通りの展開にスバルは緊張し、カリオストロは冷静にその様子を眺めていた。

「この場に居る関係者は、皆殺し。徽章はその上で回収するわ」

エルザの言葉に、場に緊張が走る。全員が各々の武器を持ちエルザを囲う中、武器を持たないスバルだけが我先に行動した。

「てめえ、ふざけんなよ——」

「……？」

「こんな小さいガキ、いじめて楽しんでんじやねえよ！ 腸大好きのサディステイック女が！ そもそも出現が唐突すぎんだよ、外でタイピング待ってたのか!? 俺がただけ痛くて泣きそうな思いしたと思っただけなんだ！ 何とか分かってくれる同類に出会えたからいいものを、そうじゃなけりや俺はこのまま黄色い救急車に乗って精神病院コースだぞこのすつとこどっこい！ これで腹も切り裂かれたら頭もお腹も同時に見て貰わないといけないだろうが！ この世界救急車ないけどな!!!」

それは無様で、惨めで、見すばらしくて、意図の読めない叫び。この世界に来てからの彼なりの逆行のストレスをぶつけたいが為だったかもしれない。さしものエルザも、そしてカリオストロでさえもスバルのいきなりの行動に眉を顰めたが、カリオストロは数瞬でその意図を読み取った。

「つてことで……時間稼ぎ終了！ やっちまえ！」

「あ、やっぱりそういう事なんだね。あんまりにも無様だったから狂ったのかと思ったよ——そのキミと同じでね！」

スバルに合わせるようにパックが小さな手をゆつくりと広げて振り下ろすと、エルザの周りを無数の氷柱が囲う。そして完璧に包囲したそれが逃げ場のないエルザに容赦なく殺到！ しばし終わることのない破碎音と、細かく小さな氷の霧が盗品蔵内部に広がった。

「やりおったか!？」

「オイ、フラグ注意しろ！」

ロム爺のお約束の発言にスバルの突っ込みが入ったのと同時に、当然のように白霧を切り裂く黒い影があった。勿論それはエルザ。コートが脱げて露出のあがった彼女は嬉しそうにククリナイフを翻してエミリアへと向かい——

——直後に、床ごとぶち抜いて突き出した石の槍に進行を阻まれた。

「こつちの事も忘れちゃ、ダクメ☆」

「あら」

流石に先に進む事は出来ず、流れるように姿勢を低くして回り込もうとしたエルザに次は氷の剣山が彼女の進行方向を阻害する。

「徽章の事で貴方達が何してたのか気になるけど……今は共闘って事でいいのよね？」

「うん☆ カリオストロ、降りかかる火の粉は叩き潰す感じだから☆」  
「土と氷で哀れ相手は板挟みだね。キミのそれは土にしては特殊なようだけど……それじゃ、さくつと終わらせちゃおうか」

稀代の錬金術師カリオストロと精霊術師エミリアの即席のタッグ。さしものエルザも笑みを浮かべたまま冷や汗をかくしかない。だが、流れる汗に相反して彼女の背筋には快感が走った。

「ふふ、うふふふ……素敵、素敵よ。今日はここまで楽しめると思わなかったわ。腸狩り。エルザ・グランヒルテ——貴方達の腸、是非とも切り裂かせて頂戴」

エルザはもう片方の手にもナイフを携えて、二人の強敵に向かって飛び込んでいった。

§ § §

戦況は常にエルザが不利だった。

かたや氷を自由自在に扱うほぼマナが無限の精霊術師。かたや錬金術に精通した、稀代の天才錬金術師。

氷が雨あられとエルザを昆虫採集の虫よろしく縫いとめようとし、土や石がエルザの体そのものを吹き飛ばし、粉々にしようとする。追隨する。

エルザはそんな暴力の嵐の中で少くない傷を負うものの、時に地を這い、時に柱に纏わりつき、時に壁を走りとおおよそ人間とは思えず、さながら虫のような動きで避ける。避ける。避ける。

戦況は常にエルザが不利だった。

しかし笑いを浮かべながらも決して二人に近づく事が出来ないエルザと、そのエルザを遠距離から仕留めようと画策するカリオストロとエミリアの図で、こう着状態に陥っていた。

ソレ以外の面子はと言うと……最早別次元の戦いに参戦する隙もなにもない。圧倒的な殺意の応酬をただただ見守るしかなかった。戦闘中のカリオストロの耳に、そんな三人の言葉が時々耳に入る。

「うわ、あっち行っただと思っただらもう、こっち行つて……あつ、氷の槍来た。コレ死んだんじゃ……おお!? そう避けれるもんなんだ!? あ、でも後ろから土の手が——捕まった! って自分の手切り落とした!? うげ、尋常じゃねえよアイツ!」

「……喧しいわ! 邪魔にならんように精々黙っておれ!! もしかしたら加勢せねばなくなるかもしれぬのじゃぞ、準備しておけ」  
「準備つて言つてもよー、もう勝負ついたようなもんだろ?」

(……のんきに観戦してんじゃねえよツ!)

彼らの脳天気な物言いに若干青筋を立てながら、カリオストロは石の槍、土の手を自由自在に操作してエルザを追い詰め、捕縛しようとする。だがエルザは時に自分の体を犠牲に、時に障害物を利用して、最小限の動きで避け、普通は考えない逃げ道を辿り中々捉えることは出来ない。それは二人がかりでもだ。

決定打の欠ける攻防に舌打ちしたくなる気持ちを抑えて、並行思考でエルザが何を狙おうとしているかを考える。彼女の体術、ナイフ捌きを見ればかなり優秀な暗殺者なのは分かる。そんな彼女が何の勝算もなしにこの不利な戦いに挑むのか? そして致命傷ではないものの、彼女は傷を負い続けている。このままではジリ貧だと分かっている筈だ。

(一体何を狙っている? まるで時間稼ぎを狙っているような……) 訝しむカリオストロの耳に、スバルが思い出したかのように叫び出す。

「不味い。もうすぐ夜になる……パックが定時退社する時間だ! おいパック、ちよつと残業していつてくれよ、残業代は俺が出すから!」  
「にやにを言ってるんだいキミは。んー……でもごめん、リア。ボクやっぱり……ふああ。もう限界……」

「そう、ありがとうパック。後は私と……カリオストロで頑張るわ」

「君になにかあれば、ボクは盟約に従う。——いざとなったら、オドを絞り出してでもボクを呼び出すんだよ」

(は……?)

カリオストロが啞然としてその光景を見つめる中、パックは虚空に消えていった。

「ね、ねえパックはどこに消えちゃったの?」

「え、え? えーっと今はこの胸のペンダントの中で……マナを蓄積してるの。」

大体夜になったらマナ切れになって此処で眠ってるのよ」

(聞いてねえぞそんな事!)

カリオストロといえど、流石にこの世界の精霊術師の制約を知らなかった。サルナーンのように四六時中命を削り続ける精霊術師は見たことがあったが……ひよっとしたらエミリアのようにサルナーンも何かの依代にハニーとやらを入れて時間指定で契約を交わせば、あのげっそりやつれた顔も元に戻っていくのではないだろうか?とどうでも良い事を考える一方で、エルザがコレを狙っていたのだと理解する。

「残念。消えてしまうのね。精霊のお腹を割くのはまた今度になりそう……今は精霊術師と、その小さな魔法使いで我慢しましょう」

黒いドレスは自身の血で更に深い黒色に染まり、白い肌がところどころ赤く染まっているエルザは、妖艶の一言が非常に似合っていた。恍惚の表情を浮かべて二人を見る彼女は、数え切れない程撃たれた土と氷の槍によって少くない傷を負っていた筈だが、疲弊も苦痛すらも彼女から感じ取る事は出来なかった。

「パックが居なくても戦えるんだよね?」

「ええ。……でもパックが居ないと少しだけ火力は下がってるわ。さつきと同じような事をしようとするとならとちよっと、マナも節約しないと厳しいかも」

「ちっ。……おい、スバル!」

「な、何だっ?」

「そいつら邪魔だから、どっかに避難させろ」

被っていた仮面を投げ捨てて、カリオストロは命令する。いきなり口調の変わった事にフェルトとエミリア、そして一番ロム爺がショックを受けていた。

当然、そいつらと言うのはフェルトとロム爺である。

「お、おお。了解、了承、かしこまりつ。それじゃフェルトにロム爺はさっさと退避しようぜ〜」

「ちよ、何すんだよ押すんじゃねえよ!」

「じよ、嬢ちゃん……フェルト、良いから行くぞ。ワシ達では何も出来ん」

命令に従い、スバルが裏口に二人を移動させようとする。エルザは当然ソレを邪魔しようとする暗器をフェルトへ向けて投げるが、妨害虚しく小気味良い金属音と共にエミリアの氷によって邪魔されてしまう。

「そんな事させないんだから」

「別にさっきので殺すつもりはないわ。ちよつと足を止めて、あとで腸を割くだけ」

「物騒な事言つて、ソレも含めさせません。……ねえカリオストロ、何をするつもり?」

両手をしっかりとエルザに向けながら、エミリアがちらりとカリオストロを見る。カリオストロは悠長に自分が抱える分厚い本を開くと、ぱらぱらとひとりでに頁がめくれ始めた。

「あれだけギャラリーが居るとオレ様がちよつと力出したら巻き添え食う馬鹿も出てきそうだからな。このままじゃ埒もあかねえから少しだけ力の一端を見せてやる」

「あら、本気を見せて貰ってもいいのに」

「見せる必要がねえって言ってるんだ」

指し示したかのようにあるページで捲れるのが止まり、そのページが強く輝くと同時に小蠅のようななきが盗品蔵に鳴り響く。その瞬間、エルザを中心とした半径5 m程の空間にある酒場の柱、床、盗品……その他もろもろが全て真反対に「捻れた」。

エミリアは見た。

ありとあらゆる物が捻れ崩れる中、エルザが足を正面に向けなが



ら、背中を向ける姿を。同時に、範囲内にあつた柱が破壊され、自重を支えられなくなった盗品蔵の一部が捻れたエルザごと木材と瓦礫の山に埋めていった。

まるで空間を操るかのような理不尽な魔法。エミリアは目を見開いてその惨状を見つめるしかなかった。

「巻き添え考えなきやこんなもんだ」

カリオストロは当然だと言わんばかりに呟いた。

§ § §

「お、おい。カリオストロ。やるのは良いけど加減もしてやってくれ。思いつきり盗品蔵壊れてロム爺が唾然としてやがるぞ」

事が済み、スバルとフェルトとロム爺が月明かりが自然と入る開放的な盗品蔵に戻って来た。ロム爺はフェルトに背を撫でられながら入って来た事から、結構なショックを受けている事が見て取れた。ただそれは建物が壊されたことへのショック以外にも多大に理由がありそうだが。

「死ぬよりは全然嬉しいでしょ？ 命あつての物種だよ、お爺さん☆」

「思いつきり本性バレしてるのにそのキャラまだ貫くのか……あ、あーあー！ 冗談ですうう！ カリオストロ様世界一可愛いカリオストロ様世界一可愛い！」

カリオストロが顔も見ずに指先をある場所に向けて慌ててスバルが平伏しだす。エミリアは何故指を向けられるとスバルが慌てるのか理解出来ないが、それはともかく、とカリオストロに向けて頭を下げた。

「その、ありがとうカリオストロ。貴方が居なかったらきつと私……ううん、みんな危なかった」

「言ったでしょ？ カリオストロは降りかかる火の粉を振り払っただけ☆ たまたまその火の粉が貴方達も襲おうとしただけだからラツキーだって思っておけばいいよ☆」

エミリアの感謝の言葉にカリオストロは興味がなさそうに、でも少しだけ口角を上げて答え、スバルは満面の笑みでエミリアに向けてサムズアップした。そしてその流れのままカリオストロは事の経緯をエミリアへと説明していた。

スバルと自分は徽章を盗み取ろうとは思っていない。むしろスバルはエミリアの為に、自分の私財を擲って取り戻そうとしていたと耳打ちをした。感激したエミリアは失礼な事をしてごめんなさいと平謝りしたとか。

「最初は徽章を盗みの仲間かと思ったけどそうじゃなかったのね……勘違いしてごめんなさい。それと、スバルも一緒になって手伝ってくれたなんて。本当にありがとう」

「いーって事よ。正直、これでようやく貰えたもの返せたって感じだしな！」

貰えたもの？ とエミリアは覚えのない恩に小首を傾げるしかなかったが。

「それで、もしよければだけど……何かお礼出来ないかしら」

「お礼!？」

「え、ええ。私に出来る範囲なら、だけど……何でもお礼するわ」

「しかも何でもって言った!？」

その言葉に鼻息荒く興奮し始めるスバルにエミリアが若干引いて、カリオストロは呆れた顔で「気持ち悪っ☆」と弄ったがスバルは気にした様子もなく、髪をその場で軽く整えると、キメ顔でお願いを伝えた。

「俺の願いはただひとつ——キミの名前を教えて欲しい」

見晴らしのよくなった盗品蔵が一瞬で夜の静けさを取り戻した。きよとんとするエミリアを除いて他全員があまりの気障な台詞に、スバルへと白々しい目を送る。

（あ、そうか。こいつってずっとエミリアの名前知らないんだっただか。そーいや伝えてるの忘れてたな……）

だがイモ引いてたまるかとスバルがキメ顔を維持する中、白けた空気をささやかな笑い声が吹き飛ばし、エミリアが手をスバルに差し出

した。

「——エミリア。ただのエミリアよ、私を助けてくれてありがとう」

エミリアの言葉にスバルは目頭を熱くし、そして満面の笑みで握り返した。カリオストロにはスバルとエミリアに最初、どのような出会いがあったかは分からない。しかしあの時啖呵を切ったスバルの気持ちは嘘ではなかったのだと、今の二人を見て確信を持てた。

スバルは名前すら知らぬ少女へ本当に一途な思いを抱き続け、弱くなり自分の出来ることを模索し、そして苦痛を伴う逆行の先にこの笑顔を手に入れたのだ。

たとえそれが自分の力ではなかったとしても。たとえそれが運の力であったとしても。それでも、彼は自分の気持ちを貫き通したのだ。

(ま。それが自分で達成できないうちは半人前なんだろうけどな。及第点はやるよ、凡人)

「……なあ、まるでめでたしめでたしみたいになってるけどよ。アタシ達は全然めでたくねーからな」

ただフェルトだけは不満そうに二人のやり取りを見ていた。

「ソレに関しちゃ、今回は自業自得って言うか……あんな依頼人を選ぶのが悪い！ ぶつちやけて言えばそもそも盗むのが悪い！」

「うるせーぞ！ こうしなきゃ生きてけねーから仕方ねーだろ！」

「あ。そうそう、ちゃんと徽章は返して貰うからね」

「命も助けて貰ったし、ちよろまかしたりとかはしねーよ……はあ、おい。ロム爺しつかりしろ。ちよつと目標が伸びただけだ、傷は浅いぞ」

あーうーと項垂れるロム爺と同じく、フェルトも観念したようにエミリアへと頷く。そんなフェルト達を同情したのか、または最初からそのつもりだったか、スバルがエミリアへと提案をした。

「あ、エミリアたん。よければこいつらを通報するのはよしてくれねーか？ あれだけ怖い目にもあっただろーし、自業自得っていったけど正直同情出来る所もあるしな。あとフェルト。これは俺からの特別プレゼントだ」

いきなり馴れ馴れしいスバルに、「たん？」と可愛らしく首を傾げるエミリア。スバルは疑問に答えることなく懐から取り出したミィティア——ガラケーをフェルトの手に握らせた。

フェルトが驚き、何でこんなもん渡すんだといい、スバルはこっちの世界じゃ有効活用出来ないしな。あとこっちも色々いい勉強になった。授業料だ。と、惜しげもなく、若干照れながら手渡す。その姿にカリオストロも思わずへえと言葉を漏らした。

「……なんつーか、兄ちゃんって人生損してるって言われねえか？」

「あ、私もそう思う……損してるわよね」

「損してるよね☆」

「三人口揃えて損してるって言わないでくれますう!? 何であれ俺はフェルトにコレを渡したいから渡した、それだけだ!!!」

顔を赤らめるスバルにエミリアが、フェルトが笑い、カリオストロも薄く笑みを顔に浮かべた。散々な印象を持っていたスバルに対して、カリオストロは好ましい印象を持ちつつあった。

これで目出度く大団円。一連の騒動もこれでおしまいだ。だが、カリオストロにとっては肝心の疑問がまだ解決できていない。

（エルザは倒した。これで二日目に死んだ奴は全員生き残った形だが……逆行現象は起こらないか。なら別の条件があるようだが……他に何かがある？）

時刻は既に夕方を超え、夜にさしかかろうとしているが一行にその兆しは見えず、うんうんと思いを続けて内容を整理していくカリオストロ。しかしその思考は背筋を走る悪寒によって中断せざるを得なかった。

——悪寒の正体はすぐさま現れた。エルザが埋まった瓦礫の山を吹き飛ばし、ククリナイフを手にエミリアへと突貫していたのだ。

（エルザ!? まだ生きて……クソツ、オレ様としたことが甘く見すぎっていたか!）

エミリアがそんなエルザの様子にようやく気づき手を向けようとするが、遅い。カリオストロも走馬灯のように進む時間の中、錬成に

よる土の迎撃を試みるが、ソレよりも先に彼女の凶刃がエミリアを切り裂く方が早かった。

そして、あわやエミリアが切り裂かれそうになった瞬間、スバルがエミリアを庇うように押し倒し、代わりにその横腹を切り裂かれた。

「スバル!!」

「ちっ、この子、また邪魔をして……!」

一緒に倒れこんだエミリアが慌ててスバルを抱え起こす。深く切り裂かれた腹部からは止め処なく血が溢れ、口からも血を吐き出していた。

「な、何じゃあこりやあ……って、実際、言う暇……ね、ねえなこれ。ごぼっ、ごぼっ、エルザ、ざまーみやが、れ……っ、お前の最後のわる、あがき、も……っ」

「喋らないでスバル! 今、傷を塞ぐから……っ」

そして奇襲に失敗したエルザは再度エミリアを狙おうとするが、立ちふさがるカリオストロに舌打ちして、攻撃を止める。

「死んだ筈だと思ってたが、どこまでもしぶとい奴だなお前。生き残るのだけは一丁前ってやつか?」

「貴方の攻撃が素敵過ぎて、もう一度喰らいたくなくなって生き返ってきたわ。でも、今日はお預け——また会いましょう、次こそ貴方達の腸切り裂かせて頂戴」

エルザは瞬く間に廃材を蹴って跳躍し、夜の闇に溶けていった。奇襲を許したのは自分の甘さから。と自分への不快感にいつぱいになりながらもカリオストロは必死に治療するエミリアの元へと駆け寄る。

「んっ——だめ、私の治癒魔術じゃこの深い傷は……っ!」

「どけ、エミリア! オレ様に任せてみる!」

白い衣装を血で染める事を厭わず治療するエミリアの横からカリオストロがスバルの容態を見る。スバルは既に痛みから気絶しており、顔は先程から一転して青白くなっていった。

肝心の傷は血で溢れた腹部が内容物ごとぱっくりと切り裂かれ、予断を許さぬ状態だった。カリオストロは舌打ちしながらマナを込め

て回復魔術を行使しようとした瞬間――

――あの甘く、黒い気配が、スバルの全身から立ち込め始めた。

「!」

その頭をとろけさせるような甘い香りが鼻につくが、他の皆はその様子に気付いていない。その匂いは刻一刻、スバルが弱るにつれてその異臭と色が強くなっていく。そこでカリオストロはようやく事の次第を理解する。

（逆行の原因は……お前自身か、スバル）

翳した手から発せられる光が気絶するスバルを癒やしていく。ただそのスバルを見下ろす彼女の目は先程の温かいものから打って変わって、冷たい物に変わっていた。

自分の目的のために何度でも世界を巻き戻す少年、ナツキ・スバル。

世界の巻き戻しに巻き込まれる異世界の少女、カリオストロ。

複雑に絡み合う二人の物語が今、この時《ゼロ》から始まろうとしている。

## 第八話　そして一日は歩みを進める

スバルがエルザの凶刃によって倒れ、エミリアは必死に少年へと治療を試みる。しかし自身の治療力に比べて対象の傷は大きく、治療が追いつかなかった。

だが駆けつけたカリオストロが代わりに傷を見るといつて患部に手を当て始めると、その彼女から一瞬、冷たい雰囲気を感じられた気がした。

「……カリオストロ？」

「……」

言葉に反応こそないが、彼女は思い出したかのように手から癒やしの光を放ち、スバルの傷を治療していく。その力は見事というほかなかった。

彼女の治療魔法によってこぼれ出た内容物が逆戻しのように腹に収まり、傷は最初から無かったかのように癒着していき、時間にして一分、下手すればもっと早くにスバルの治療は終わっていた。

治療後のスバルは傷を受けた当初より全然マシな顔をしていたが、抜け出た血の分だけ青白い気がした。

「凄い……ありがとうカリオストロ」

「……礼はスバルに言え。本来ならこうなるのはお前だったんだ」

治療が終わったというのに喜ぶ雰囲気もなく、カリオストロはさつさとスバルから離れてしまう。その様子にエミリアは困惑する。ついさつきまで感じられたどこか柔らかい雰囲気が微塵も感じられないのだ。

ひよっとして自分が居ながら守れなかった事を悔やんでいるのだろうか。エミリアは募る気持ちを抑えられずカリオストロに声をかけようとしたが、背後に感じた新しい気配に振り返らざるを得なかった。

「——何か、あったようだね」

そこに居たのは赤髪の騎士だった。彼は崩壊した盗品蔵の戸口に立って、当事者達を見ていた。

「貴方は……」

「お主……剣聖か」

「ゲツ、剣聖かよ」

多種多様な反応を貰っても剣聖——ラインハルトは表情を変えることなく近づく。彼が真つ先に近づいた先は……カリオストロだった。何故ラインハルトが彼女に？と疑問を浮かべる前に、肝心のラインハルトが反応すらしない彼女へ声をかけた。

「大きな音に駆けつけて見れば……スバルは無事かい？」

「ああ」

「済まない、まさかこんな大事に君達が巻き込まれていたとは……気付けなかったのは、僕の不徳だ」

「真つ先に協力を断ったのは私達だから、気にしなくていい」

取り付く島もないといはこの事だ。ラインハルトの問いかけにもカリオストロはぴしゃりと言葉で跳ね除けてしまう。彼もその様子に流石に言葉が続けるつもりはなく、悔しそうに顔を下げると今度はエミリアの元へ近づき、跪いた。

「エミリア様、ご無事で何よりです。危機に巻き込まれた貴方様を守れず、尚且つ遅れて到着するという愚挙。申し開きようもありません。この処分如何様にも」

「いいわ。この件は自分の甘さが招いたようなものだから」

剣聖が白銀の少女に傳く光景。フェルトとロム爺は二人の関係性を見抜くことができず、表情こそ変えずにカリオストロもその様子を横目で見ていた。ラインハルトとエミリア二人は、残りの面子を置いて話を進めていく。

「……何があったか、説明を頂いてもよろしいでしょうか？」

「ええ。まずは、私が——」

フェルトに徽章を盗まれた事。

フェルトを追いかけ、盗品蔵にたどり着いた事。

そこでカリオストロとスバルにも出会った事。

徽章を狙うエルザに襲われた事。

それをカリオストロが撃退した筈が、



不意打ちで斬られそうになった事。

その不意打ちをスバルが身を呈して守ってくれたこと。

「そうですか……腸狩り。それをスバルが——」

「ええ。見ず知らずの私を、彼は命がけで助けてくれたわ。それで気になったんだけど、貴方はどこで二人と出会ったの？」

「彼らとは貧民街で出会いました。これもまた騎士として恥ずかしい話ですが、出会ったのも彼らに襲いかかった追い剥ぎをカリオスト口が撃退した直後に」

エミリアの脳裏にノリノリで追い剥ぎを吹き飛ばすカリオスト口と、スバルが後ろから応援する姿が容易に想像出来た。その時には既に貧民街に向かって居たのだろう。しかし、何故彼らは自分が徽章を盗まれた事を知っているのか。何故出会った事のない自分にここまで尽くしてくれるのか。そしてスバルとカリオスト口はどういう関係なのか。何故一緒になって手伝うのか。エミリアにはさっぱり分からなかった。

しかし間違いようのない事はエミリアには彼らには大きな恩が出来た。という事実だけ。この恩、絶対に忘れてはならないとエミリアはふんと両手を前に出しぐつと拳を握りしめて決意を新たにした。直後、ラインハルトが倒れるスバルを見てエミリアに提案する。

「エミリア様、スバルは我が家で介抱しましょうか」

「あつ、い、いいえ。それには及びません。大恩ある彼は、メイザース領で介抱させて貰います。返しきれない恩だけでも、それに報いない恥知らずにはなりたくないわ」

そしてちらりとカリオスト口を見たエミリアが言葉を連ねる。

「カリオスト口。貴方にも是非とも恩を返したいわ。良ければスバルと一緒に、私が懇意になつてる領地に招待したいのだけれども——」

「……」  
カリオスト口はラインハルトとエミリアをそれぞれ一瞥すると、一言「行く」と呟いた。ほつと胸を撫で下ろしたエミリア。ラインハルトは少し残念そうな顔をした後に「畏まりました」と告げ、踵を向けフェルトへと近づいた。

「な、何だよ」

「分かっているとは思いますが、キミの盗んだその徽章はとても大切な物だ。抵抗は出来るならして欲しくはない。そのままエミリア様に返して頂きたい」

「言われなくても返すよ！ アタシ達も命助けられた口だかな………つたく、ほらよ」

フェルトは懐から竜の紋様が入った黒い徽章を取り出すと、ラインハルトにそれを手渡そうとする。が、ラインハルトが受け取る前にフェルトの腕を掴んだ。

「なっ……ん、んな事しなくてもにげねーよ！」

「あ、待ってラインハルト！ スバルにその子達の罪を問わないでって言われているの。私もちゃんと返して貰えたから罪は問わないつもり、だから……」

「……」

動揺するフェルトとエミリアをよそに、ラインハルトは依然として腕を掴み続けてフェルトの手にある徽章を睨みつけていた。その態度は今までのラインハルトからは考えられない程で、思わず一行は言葉無くしてしまふ。カリオストロもその様子を観察し、ロム爺は一触即発のムードを出しつつあった。

「……フェルトと言ったね。すまないが、キミは当アストレア家までご同行願おう」

「は!? 何だよそりゃー!」 「おい、貴様!」 「ラインハルト!」

「お怒りも最もだが、譲る事は出来ない。……エミリア様。決して捕縛して罪に問うわけではございません。彼女は“候補者”である可能性が非常に高い、という事です」

「!」

三者がその発言に揃って驚く中、ラインハルトは険しい表情を変えずにフェルトを見据え次にエミリアへと伝えた。エミリアはその発言を聞いて思わず口を手で抑えた。

「訳わかんねー事言ってるじゃねーぞ! アタシがなんでお前の家に行かなきゃなんねーん……ふにゃ」

首筋に手を添えられたフェルトが途端に意識を失いラインハルトにもたれ掛かると、ラインハルトは徽章を落とさぬようにしっかりとその手で徽章を受け取る。それに怒ったのがロム爺だ。孫のように思っていた少女が貴族に攫われようとしている、思わず獲物を手に取って襲いかかろうとしたが、瞬く間もなくラインハルトによってフェルトと同じ運命を辿らされた。

「済まない」

優しく気絶したフェルトを自身のマントを敷いて横たわらせると（ロム爺は地べた）、ラインハルトは改めて手にした徽章をエミリアへと返却した。

「……それって、本当に？」

「この徽章が指し示す者ならば、間違いなく」

彼は強い眼差しでエミリアへと頷くと、「大変失礼になります、私はこちらで下がらせて頂きます。すぐに竜車と部下をこの場に向かわせませますのでしばらくお待ちください」とフェルトを抱えてその場を去っていった。

そしてその場に倒れたスバルとロム爺、先程から何一つ喋らないカリオスト口と唾然とするエミリアだけがこの場に残るのだった。

「……」

「……」

エミリアは思った。気まずい、と。

瓦礫の1つに座り込み、膝に頬杖を突いてそっぽを向くカリオスト口はどこからどう見ても不機嫌そうで、迂闊に話しかけられない雰囲気が出ている。彼女に一体何があったのか分からないが、こんな事で尻込みをしようするのは気合を入れたエミリアが口を開く。

「あの……っ」

「——なあ、候補者ってどういう事だ？」

その直後、エミリアの目論見を知ってか知らずかカリオスト口の質問が被せられ彼女の出鼻が挫かれた。だがそれでもめげずに、その質問に対して丁寧な答えようと意気込んだ。

「今、王都が騒がしいのは分かっている？」

「ああ、そう言えばラインハルトがそんな事を言ってたな」

「今ルグニカ王国では王選が始まろうとしているの。この国の竜の巫女であり、この国の王を決めるための活動。一度は聞いたことはあるかしら？」

「いや、生憎オレ様もスバルも全く違う所から来たからな。この国の詳しい話も常識も知らない——それで？」

「凄く遠い所から来たのね。と内心思いながらエミリアもカリオストロの隣に座り、促す彼女に続きを話す。

「王は5人の候補者から選ぶ必要がある。その候補者は自薦でも他薦でもないわ、相応しいとする者を竜殊……この竜の徽章が選ぶの。さつきラインハルトが驚いてたのは、多分フェルトに徽章が反応してたからだと思う」

「ふん、そう言う事か。つまりアイツがエミリアに傳いたつてのは……」

「——ええ、私もその王候補の一人よ」

懐から取り出した徽章をカリオストロに見せる。その徽章は確かに淡く光を放っており、カリオストロの手に移すと光が消えた。徽章を手で弄ぶように観察した後、すぐにエミリアへと返却したカリオストロは一度考え込むと……。

「メイザース領って結構でかいのか？」

「え？ ええ……とても大きいと思うわ」

「領主は……メイザースっていうのか？ そいつはお前の後見人か？」

「有名人か？」

「領主の名前はロズワール・L・メイザース。それで……うん、後見人……みたいなものかしら。それに、ロズワールは結構有名な人なのは間違いないと思う。王国の頂点に立つ魔法使いよ」

矢継ぎ早の質問にたじたじになりながら答えるエミリアに、ふんふんふんと、一つ一つ咀嚼するように何かを考え込むカリオストロ。剣呑な雰囲気先程よりも薄まったせいも、エミリアはそんな彼女の愛くるしさを再認識し始め、「撫でていいかな、でも何か怒りそう……」と葛藤をしていると、再び彼女が口を開いた。

「——ねえ、エミリア☆ 恩を返してくれるってのは、本当?」

打って変わって、可愛らしい声色での問いかけ。どこか試されているようなその言い方に、エミリアはノータイムで力強く頷いた。

「本当よ。私に出来る事ならなんでも言っつて、力になるわ」

「……そつか☆ 言質は取ったからねエミリア☆」

「う、うん。取られても平気。任せて! ……それで何をすればいいのかしら?」

にっこりと微笑むカリオストロに、エミリアは少しドギマギしながら聞き返したが、カリオストロは「それは領地についてからのお楽しみに☆」とはぐらかした。

曰くスバルと話しあってから決めるつもりであるとか。その言葉にエミリアは口を閉ざすしかなかった。そして、その二人の会話が終わった直後。待っていたかのようにエミリア達の元に竜車が到着するのだった。

§ § §

王国からロズワール領への道中、竜車内に隣り合って座る二人。(スバルは別の竜車で移送中)二人の間での会話は散発的で、会話は続かず、ソレ以外の時間は気まずいか、エミリアがちらちらとカリオストロを盗み見て(カリオストロ撫でたい)、カリオストロがその視線を無視する(ちよつと視線が鬱陶しい)ぐらいだった。そんな苦境の中でもエミリアは健気に、めげずに、話題を振り絞って話かけ続けた。

「そう、えつと……そ、そう言えばスバルとカリオストロって一体どういう関係なの?」

「あ。そう言えばそこはボクも気になってたね。キミの実力といいスバルの実力といい、二人で組むにはあまりにも歪過ぎるや」

それはエミリアがあの日に浮かんだ疑問だった。パックも同じ事を考えていたのか、興味深々な様子でカリオストロを見つめた。カリオストロは長い道中でのエミリアの雑な話題の振り方に若干うんざり

りしながら、それでも律儀に反応した。

「……姉弟関係☆」

「嘘だね」

「うん、嘘っ☆ といふかゝ答える義理はないよね？」

即答でバレル嘘についても尚動じないカリオストロは、至極正論で返すが、う、ごめんなさい……と素で縮こまるエミリアに対し、リアが傷ついてる！ コレは真実を伝えないと癒やされないよカリオストロ！ と同情誘いと煽りのダブルパンチをパツクが被せてきて、仕方なく二の句を告げた。

「んーっと、詳しくは言えないけどくそうだね、強いて言えば一蓮托生の腐れ縁かな☆」

「腐れ縁？」

「うん、しかもこれからなる予定っ☆」

「??」

「……今度は嘘じゃないみたいだよリア」

より疑問が深まったエミリアが首を傾げている間に竜車はロズワール領へと入っていた。そして竜車の窓から一望できる長い長い道のりの先には、立派な屋敷が見えて来ていた――

## 第九話 新たな出逢いと刻まれた平和

ルグニカ王国を過ぎ、平原を抜け、森を抜け、二日間ほど竜車の導かれるがままに移動をする一行。

その二日目の朝、朝靄の中に現れたのは趣を感じさせる西洋風の巨大な屋敷だ。大きさを言えばラインハルトの屋敷よりもかなり大きく、庭には大きな噴水のある池や、色とりどりの美しい花。そして様々な動物を模したトピアリーが理路整然と並んでおり、永い時を歩んだカリオストロでさえも思わず目を奪われる程。カリオストロは竜車の窓からの光景を見続けながら、エミリアに尋ねる。

「ここが？」

「ええ。ここがメイザーズ領……の別荘ね。長旅お疲れ様、カリオストロ」

「へえーこれで別荘なんだ、大層なパトロンなんだね☆」

「ぱとろん？ とエミリアが可愛く首を傾げると同時に竜車が速度を落とし、玄関前で完全に停止する。

カリオストロはこの大豪邸を別荘と言い張る財力と、かの”サテラ”と似たエミリアを王にさせる酔狂さを持つロズワールにどこか嫌な予感がした。実際に会ってみないと分からないだろうが、何故だろう、彼女を王にさせる理由はなんだかろくでもない理由な気がしてならない。

停車してすぐに竜車の扉が御つきの兵士によって開かれ、二人は降り立つ。降り立った先には二人のメイドが寸分たがわぬ姿勢で出迎えていた。

そのメイド達の第一印象は淡い青と赤だった。姉妹なのだろう、顔立ちまで似た彼女達は揃ってボブカットにしており、その違いは髪と目の色の違い程度。二人の目は主人へと絶対の忠誠を誓う鉄の意志を感じさせ、仕立ての良いメイド服に身を包む彼女達はこの華美な屋敷に非常にマッチしているように見えた。

カリオストロは脳内で自然と前の世界で出会った少女相手にニヤつくメイドと主人以外を毛嫌いするメイドと比べたが、見かけ以外で

あればこちらの方がメイドらしいなという結論に至った。

「おかえりなさいませエミリア様」

「ただいまレム、ラム。連絡は届いてると思うけど、早速スバルを部屋に運び込んで頂戴」

「かしこまりました。レム」

「はい、姉様」

レムと呼ばれた青髪の少女がスバルを寝かせた竜車へと向かい、まだ寝こけているスバルをお姫様抱っこで軽々と彼を屋敷へと運んでいった。

カリオストロはあの男もよもや女性にお姫様抱っこされるとは思わないだろうな、とその様子を見つめていると二人の間で会話が済んだらしい。エミリアが彼女の肩を叩いた。

「えっと、カリオストロ。長旅の直後で申し訳ないけど、ロズワールが是非貴方に会いたいです」

「あ、うん☆」

「早速で申し訳ありません。では案内いたします。ロズワール様はエミリア様も一緒にとの事です」

エミリアとカリオストロは先導する桃髪の「ラム」というメイドに続いて屋敷へと入る。屋敷の内部は外観に恥じぬ内装で、外から見るよりも広く感じる。真紅の絨毯が引かれた長い廊下を歩いている途中、カリオストロはエミリアへと尋ねた。

「ど・こ・ろ・で・スバルは？」

「別の部屋で寝かせたわ、顔色こそ良いけど二日間も眠ってるうちよつと心配だし……もしまだ起きないようであれば、腕利きの医者や今度王都から呼び寄せるつもり」

「ふうん☆」

カリオストロの見立てではスバルはあの濃密な一日で何度も死を体験した事で疲れが溜まったのだと見ている。体そのものは大丈夫だろう。

軟弱な奴だ、とは思わない。普通の一般人が殺される、あるいは殺されかける経験をして平常でいられるか？ 答えは否である。スバ



ルは1日しかない特殊な時間の中だからこそ忘れていたようだが、刻み込まれた死という感覚は後からでも心を蝕むものだ。心配なのはむしろ起きてからである。

カリオストロも自らの脆弱な体を捨てて素体に逃げ込んで数百年以上経つが、死は恐ろしいし慣れない、いや、慣れたくない経験だ。体が生命の維持を出来なくなるたびに、自分の体を再構成するたびに死が自分の背筋を撫でる感覚がする。その時に感じるのは耐え難い孤独と、喪失感だ。

真理にたどり着いた今でこそカリオストロにとっては「死」はただの「状態異常」でしかなかったが、それでも尚絶対に避けたい異常なのである。

仕方がない、念のためあとで診に行つてやるかと思つていると、やがて一行は長い通路の突き当たりに辿り着く。先にあるのは他の部屋より大きな両開きの扉。ラムが扉に近寄り、慎ましいノック。その音に続けて聞こえてきた「どーうぞお」と言う間の抜けた返答に、カリオストロは先ほどの懸念がムクリと鎌首をもたげるのを感じた。

「あはあ、よーうこそお客様。遠路はるばる当家にお越しいただき、感謝感激でござーい」

「――」

さしもの歴戦の騎空士であるカリオストロも、目の前の存在には口を閉ざさざるを得なかった。

扉を開けた先、広々とした執務室で待つていたのは長身痩躯、ピエロメイクで奇抜な格好をした長髪の男性だった。カリオストロが思わずエミリアとラムの両方を見るも、エミリアは気まずそうに頷き、ラムは表情すら変えず、視線すら合わせなかった。そんな言葉を失つたカリオストロを見て男は、悪戯が成功したと言わんばかりににやりと笑っている。

「此度の活躍う、当主としてまーさに感謝しかありません。そしてエミリア様が恩に報いたいというお気持ちい、私も同意するところですねえ。本来ならお二人揃つてから伝えたいところではありますが、まずはお礼をば――」

気障つたらしい口調に態度、それはまさに道化そのもので。顔に描かれた偽りの涙の上の眼には、好奇心と歓喜が刻まれているような気がした。

「エミリア様を救って頂き、まーことに感謝致しませう。ロズワール・L・メイザース、カリオストロ殿及びスバル殿へ此度の尽力に対して最大限報いたーくう存じ上げます」

大きく腰を折りカリオストロへと頭を下げる姿は十分な教育を受けてきたと思われる、見るものが美しいと思わせる所作。それに反する道化師めいた口調と格好。そこに彼女が感じた印象は一つだけだった。

(……………いつ、絶対に面倒くさい奴だ)

§ § §

「ええつとまずはお、カリオストロ達を招待してもらってありがとうございます  
ごぞいますっ☆」

「あはあ、可愛らしいお姿にふさわしい、小鳥のさえずりのような声、素晴らしいですねえ。いーえいーえ、当家の者を救っていただいたというのであれば招いて当然、そして持て成して当然でありますからあー」

簡単な自己紹介の後、大きな部屋で机を挟んでロズワールとカリオストロが会話を始める。カリオストロの隣にはエミリア。ロズワールのすぐ後ろにはラムが立ち、机の上には淹れたての紅茶が三人分用意されていた。

ロズワールは安心させるかのように、まず自分からと紅茶を手に取り飲み始めるが、カリオストロもほぼ同時に手に取り、彼よりも先にそれを上品に飲み始めた。その様子を見たロズワールは一瞬目を見開き、そしてすぐに面白そうに自分も紅茶を飲み始めた。

「フフ、お気に召していたーだけたかなあ？」

「ん☆ 凄く上品な味だねっ☆ カリオストロ病み付きになっちゃおう☆」

「ええ、ラムの淹れてくれる紅茶は凄く美味しいのよ。私もいつも淹れて貰ってるの」

「エミリア様。大変申し訳ありませんが……この紅茶は妹のレムが淹れました」

えっ、ご、ごめんなさいと気まずそうにするエミリアを置いて、カリオストロとロズワールは視戦を交わし続けていた。片や、何もかも見透かそうとする好奇心の目。そして片や、仮面を被り真意を悟らせない冷静な目。二人の視戦はやがて、ロズワールが紅茶を置いたことで終わり、次なる戦いへと進もうとしていた。

「とーころおで、手紙で話は聞いていましたがあ……事の経緯、直接お聞きしてもよろしいですかねえ？」

「ええ。それについては私からも説明させてもらおうわ」

エミリアが説明し、カリオストロがそれを補足するようにして経緯を伝える。ロズワールはその間ただ頷くだけで質問をすることなく聞き続け、説明が終わった後に数瞬の間を置いてから、カリオストロへと聞いた。

「ふうむ、分かりましたあ。此度のお二方も尽力、我が陣営としても無視できないほどの大きな恩と言えましょう。たーだあ、ひとつだけ聞かなければならないことがありますねえ。誠に失礼ですが、お二方。いーつたい何しにこの国に来たんですかねえ？ 聞いけば二人とも、どうやらこの国の世情にも疎いご様子、差し支えなければ是非ともお教えて願いたいものでーすが」

それは当然といえれば当然の質問だろう。王選の真っ只中、候補者を救った二人の素性は限りなくグレーだ。カリオストロは彼が何を懸念するのかは理解していた。つまり、自分達が他の候補者の差し金ではないのか、という事。この件が他陣営からの妨害なのは明白。いきなり現れてそれを救った二人は、もしかしたら他候補の自作自演の一環かもしれないのだ。ただカリオストロもそれを想定はしていた、だから正直に自分の目的を話した。

「スバルの事は知らないけどお、カリオストロは探し物をしにこの国に来たの☆」

「探し物？」

「そう、ある魔物の情報っ☆ 空中に浮かぶ大きな動く鎧のような魔物☆ 私達はヴァシユロンって呼んでるんだけどお……☆」

「ふーむう、大きな動く鎧ねえ。わーたしの方もそれは確かに聞いたことない魔物だ……つまり、今回の件は」

「うん☆ ” 偶然 ” スバルと出会った私が、 ” 偶然 ” あなた達を助ける結果になっただけ☆ 本当は恩に着せるつもりもなかったけどお、ロズワールが権力持つてるって聞いてえ、折角だし情報とか貰っちゃおうかなあって☆」

それは身の正当性も、あるいは敬意すらも伝えようと思わない、明け透けな物言いである。さしもの発言にロズワールの後ろに佇むラムの眉が少しだけ釣り上がり、エミリアはそんなカリオストロの発言におろおろしだした。ロズワールだけはカリオストロの目をじっと見詰めながら楽しそうに頷いた。

「——なるほどお。時にはそのような偶然もあーるでしょうねえ」

「そうそう☆ エミリアは偶然助かったの☆ 王様には運も必要だからあ、その点で言えばエミリアも王様の素質あるよっ☆ カリオストロが太鼓判押ししてあげるっ☆」

「え？ う、うん。ありがとうカリオストロ」

言外にラツキーだったただけだと皮肉られたが、それに気付かないエミリア。その様子に、カリオストロはこの王様候補大丈夫なのかと煽っておきながら心配になった。ロズワールは言葉の真意に気付いても尚笑顔を崩さず、ラムは心なしかカリオストロを冷たい目で見ていた。

「話はーあ分かりました、でーはお客様。此度の恩は、そのヴァシユロンと呼ばれる魔物情報と引き換える、そおーれだけでいいかな？」

「勿論お願いはそれだけじゃあないよっ☆ カリオストロ、与えた恩に対してそれだけじゃまだ釣り合わないと思うなあ☆」

「ほーお？　いーいですとも。可能であればなーんでも、叶えて見せましよーお」

「……」

ラムのカリオストロを見る視線温度が更に下がるが、当の本人は動揺した様子もなく二の句を告げる。……前に、ノックの音がそれを邪魔した。

「はあい？」

「ロズワール様、レムでございます。お話中に失礼ですが火急お伝えしたいお話が」

入室を許可されたレムは、一礼してロズワールの元へ向かうと耳元で内容を伝える。その話を聞いたロズワールはさほど動揺こそしなかったが、立ち上がると話し相手であるカリオストロと、エミリアにその話を伝えた。

「エミリア様、お客人。どうやらもう一人のお客人が目覚めたようだあーよ」

「！　本当！」

「わ☆　良かったあ☆」

「たあだ。お客人は少し元気が有り余ってたのかねえ。レムが部屋を離れてる間に抜け出して、部屋の外で倒れてたみーたいだあーよ」

「……本当!？」

「わあ……☆」

何やっつてんだアイツ、と思わず頭を抱えなくなる。結局、カリオストロのもう一つのお願いに關してはスバルの様子を見てからという事になるのだった。

§ § §

「おお、エミリアさんにカリオストロ！　ご心配おかけしました、不肖ナツキスバル、完・全・復・活！」

カリオストロとエミリアがベッドの上でうざい上に謎のポーズを取るスバルに対面したのは、スバルが通路で倒れた所を発見されてか

ら数時間後だった。

最初は心に負った傷のせいで衝動的な行動でもしたのかと懸念し、再度スバルの体を治療しようとしたカリオストロ。だが、要因は別にあることに気付いた。

それは彼の体からマナが少し失われていた事。

カリオストロは一体スバルに何をしたのだと当時看病していたレムを問い詰めたが、そんなマナを吸い取るような真似はしなしい出来ないと言う。では誰がやったのか？ スバルマナドレイン事件の容疑者として上がったのは、この屋敷のもう一人の住人だった。

「そうか、あのドリルロリ。ベアトリスって言うのか……くそっ、いきなり気絶させやがって、漏らしたらどうするつもりだったんだ！」

「漏ら……もう！スバル、そう言う下品なのどうかと思うの」

「エミリア様、このお客様は既に野獣めいた欲望をお持ちです。先程も起きた直後に欲望をぶつけられ汚されました。姉様が」

「エミリア様、このお客様は今も尚獣欲を発散させようと獲物を探しているようです。先程も起きた直後に襲われました。レムが」

「……」

お前ら初対面なのに酷くねえ!? とエミリアに謝罪しながらレムとラムに突っ込むスバル。个性的過ぎる会話の応酬にカリオストロは最早突っ込む気も失せた。

どうやら事の真相は、「見ず知らずの場所に着き混乱したスバルが、さまよった先で偶然ベアトリスという少女に出会い、その少女に無礼を働いたせいでマナを盗られた」という事らしい。ラム曰く「ベアトリス様とは狙って会えるものではなく、会えたのであればかなり幸運」との事だがその幸運で気絶させられるとはこの男、幾度の死も含めてかなりついていない。

(いや、多分こんなノリで迫ったんだろうな。初対面でコレならオレ様でも気絶させるわ)

この短期間、スバルと付き合ってたのは、他人との対話が非常に下手であるということだった。自信のなさの表れか、自分を下げて相手をあげようとする生粋の道化師のような発言がとにかく多い。

それだけならつゆ知らず、人の個人的空間にずかずかと入り込んだあげく押し付けると言った。相手との距離感、会話のアプローチまで壊滅的であった。スバルとこれからも付き合い続けると思うと、本当に頭が痛くなる。

「それで〜スバル☆ これまでの説明は要る？」

「おおカリオストロのその猫被りも久し……あー猫！ 猫といえばパック！パックどこいったんだろなー!？」

「猫？ パックは猫じゃなくて精霊よ。あと今パックは昔なじみに会ってくるらしくてどこかに行ってるわ」

カリオストロは余計な事を言いそうになったスバルを人差し指を向けただけで黙らせると、ため息ひとつと共に事の経緯を説明する。

始終高いテンションを維持しながらその話を聞くとスバルはしきりに自分の腹を撫でさすった。治っているものの不安らしい。しかしながら顔には隠しきれないほどの安堵が浮かんでいた。

「あーでも何とか、生き残ったんだよなあ……」

「うん。私を守ってくれて本当にありがとうスバル。お陰で助かったわ」

「どういたしましてエミリアたん！ って言っても俺じゃなくてほとんどカリオストロの力だけだな」

「たん……前も言ってたけどたんって何なのかしら。でも勿論カリオストロにもありがとうって言いたいわ」

「謙遜しなくていいよスバル☆ 今回の件はほとんどスバルの力みたいなものだから☆」

「……お、おお？ あのカリオストロが褒めるなんて。明日は雪か？ 実はデレ期来るとか？ ハーレムか!? いやいよ持つて俺の主

人公説が高まって来たあー！」

「エミリア、助けられたけど付き合いだけはよく考えるんだよ☆ この子ちよつとアレがアレだから☆」

「そ、そう……うん、アレなのね……」

「アレね」「アレですね」

「アレって何なんですかねえ!？」

煽られて、高テンションで反応する二人の様子にエミリアが口元に手を当てて笑い、スバルも嬉しさを隠せずに釣られて笑った。死んで死んで、三度の死を重ねた結果に得られたご褒美にしては安いかもしれないが、この和やかな空気は得難く、貴重なものだ。しっかりと噛み締めて欲しいとカリオストロは思った。

「お客様のあまりの珍獣っぷりに伝え忘れそうになりましたが」

「おいおい珍獣って。カリオストロに対してまでデイスっていいのかメイドさんよお、アヤマッテ！」

「カリオストロ様は別でございますから」

「何で出会って数時間で格差がこんなに広がってるんだよ!」

「はいはい、お客様の話はあとで聞かせて頂くわ。それよりもそろそろ昼食の準備が整うところです。エミリア様、カリオストロ様、よろしければ昼食は如何ですか?」

そういえば朝に到着してから結構時間が立っていた事を忘れていた。意図的にハブられたスバルの抗議をメイド達がさらりと受け流す中、カリオストロが口を開く。

「んくつとお、ありがたくお受けしたいのだけでもおく☆ その前に少しだけ、スバルと大事な事を話したいの☆」

「へ? 俺と?」

「そう。スバルとおく、二人つきりでつ☆」

室内の視線がスバルに集中する。よもや白羽の矢が自分に立つとは思わなかったスバルは呆けた顔でカリオストロを見ていたが、やがて言ってる内容を認識すると凄い勢いで悶えながら独り言を呟き始めた。

「お、おお。これは、いきなり告白イベントか何かか!? おいおい、俺この世界でようやく主人公っぽい展開にありつけてるのか!? それにしても好感度とか全然足りてない気がしたけどそれはあれか、俺の主人公特技……ニコポあるいはナデポ補正がようやく働いたと考えてもいいかも——」

「え? え? ちよつとスバル、一体どうしたの? 何言ってるの?」

「姉様姉様、お客様が先程よりも一段と気持ち悪くなっています」



「レムレム、お客様の評価が先程から上がることないのだけどこれはどうしたものかしら」

再び話が混迷し始める中、カリオストロはベッドで悶え続けるスバルへと何気ない足取りで近付き、おもむろにスバルの胸ぐらを掴んで顔を引き寄せた。

「——嫌とは言わないよね？」

世紀の美少女が笑顔で顔を寄せる全男性羨望の光景。だがその少女の目に宿るのは、あの快樂殺人鬼にも負けない嗜虐的な目。一瞬で黙らされたスバルには「はい」と言う返事以外、許されていなかった。

## 【第二章】二人の異世界人と、屋敷の人々 第十話 二人だけの真実

エミリア、レム、ラムの三人には席を外して貰い、スバルとカリオストロは豪華な客室で二人きりになった。

大きなベッドの上で寝巻き姿のスバルが座り、そのすぐ隣にカリオストロがちよこんと隣り合っている。年頃の少年と少女が寝室で二人きり。カリオストロの類稀なる美貌もあいまって、未だ思春期すら抜けきれていない少年にはこの状況は酷なほど刺激的で――

「……何だろう。俺、今凄く喜んでいいはずなのにその反面すげー緊張してる。もう何か聞こえるくらいに俺の心音がバクバク言ってる」  
「本当……☆ スバルの心臓がどきどき言ってるの、カリオストロにも聞こえる☆ ふふふ…それはあ☆ カリオストロの可愛さに参ってるからだよっ☆」

「ああ、そうだよ、カリオストロ様マジ天使……！ ……だけど可愛さだけじゃなくてプレッシャーにも参ってんだよ!? あと無駄に近いんだよ！ お話する姿勢じゃないだろ絶対!」

美少女がすぐ隣に、しかも体を密着させて座るというアニメやライトなノベルでしか見たことがないシチュエーションに、否応無くスバルの顔は赤らみ、声が上がる。だが反面、スバルはこの美少女の本性が「とんでもないドS」だという事を知っていた。故に女性経験が皆無の少年は女性の柔らかささと美貌への興奮と、何をされるか分からない恐怖の板ばさみにされて、極度の緊張に陥っていた。

「好きなんだろう？ こういうのがさあ！」

「好きだけど切実に相手は選びてえよ!? ふもっご!」

間髪要れずにカリオストロの加減した腹パンが突き刺さり、スバルはそのままベッドに仰向けに倒れ込んだ。この腹黒さとドS加減がなければ間違いなく喜んでいたのにと、続けて言おうとしていた悪い口は強制的に閉ざされた。

「……カリオストロ様カリオストロ様、暴力反対。ストップザウオー

……」

「お前が失礼なことと言うのが悪い。つつかこんなイチャつきしたくて二人きりになった訳じゃねえんだ。昼飯が遠ざかるからさっさと本題に入るぞ」

イチャつき……？と疑問を浮かべる少年を放って無然そうな顔をしたカリオストロが寝転がったスバルに本題を突きつける。

「お前。どこから来た？」

「……ものっそい東から、って言っても納得はしねえよな」

不機嫌そうな顔のまま続きを促すカリオストロに、スバルは顔だけ上げて真剣な面持ちで続ける。同郷であることを願って、そして同郷でなくともその世界を知っている事を願って。

「日本だ。……知ってるか？カリオストロは」

「知らん」

「知らねえのかよー！」

一瞬で期待を裏切られたが、カリオストロはまあ落ち着けと手で制するとスバルに確認するように言葉を連ねる。

「知らないが、この世界の人は誰も知らない国なんだろう？」

「ついで言えばお前はこの世界に来て間もない」

「更によれば、知人も友人もこの世界には居なくて、この国の言語は話せるけど何一つ読めない、一文無しでコネすらない」

そのどれにも力強く頷くスバル。カリオストロもその反応に自分の考えと答えが一致していく感触を得ていた。つまりこの男は自分と同じ――

「異世界から来たって訳か」

二人の声が重なり、自然と二人は頷き合った。

「じゃあカリオストロは日本から来たんじゃないやなくて別の世界からか？」

「ああ。この世界と文明レベルは似てるが、はっきりと違う世界からな。オレ様はある魔物と戦ってたらこの世界に放り込まれた」

「ファンタジー世界、やっぱり色々あるもんなんだな……平行世界って奴か？ うおおお、って事は俺やカリオストロ以外にも色々な転生者が居そうだな！ あ、そうそう俺はコンビニ……あー、ある店で買いい物して外に出たら急にあの広場に居た。いやー夜だったのにいきなり昼になるからな、びつくりしたぜ！」

「……他にも同じ奴が居るかは分からねえが、まあほぼ同時刻に放り込まれたって事だな……じゃあ次だ」

「おおー 同郷のよしみ、つつーか同じ境遇の奴だし色々助けられたからな、俺でよければ何でも聞けよカリオストロ！」

「そうか？ じゃあ嘘偽りなく答えろよ」

にっこりと笑ったカリオストロは体を起こして質問に答えようとしたスバルに肺が潰れるほど力強く、すばやく肘を胸に押し当て、ベッドに乱暴に押しつけた。

肺からは漏れた空気がこひゅという音を立て、いきなりの展開と痛みに混乱を隠せぬスバルは押し倒すカリオストロを仰ぎ見た。ふとすれば顔同士がくつききそうなほど近い距離。彼の瞳に映るのは、ぬくもりを感じさせない冷めた少女の眼だった。

「——何が目的だ？」

体を押さえる手と反対の空いた手が、何らかの魔法を起動中なのか淡い光を放ちスバルの顔を照らす。これがいつものカリオストロの悪い冗談かと考えたスバルだったが、そんな気配は微塵も感じられず、スバルは困惑と恐怖に声を震わせながらも言い返した。

「もつ、目的なんか何もねえよ。ただいきなりこの世界に放り込まれて、それで宛ても無く——」

「知らばつくれる気か？ あんな力を使っておいて、天才のオレ様を あんな目に味あわせておいて、はいそうですかって納得できる訳ねえだろうが」

「あ、あんな力？ あんな目？」

「お前はこの世界に来て三回あの力を使っただろ。一度目は夜。二

度目は夕方、三度目は昼だ。確かに理不尽なまでに強い力だがなあ、何故オレ様を巻き込む？ 何故オレ様をこの世界に放り込んだ？

「テメエは一体何を目論んでんだ？」

「ちよ、落ち、落ち着けよカリオストロ！」

まくし立てるカリオストロに慌てるスバル。氷点下の視線で見下すカリオストロの返答は、スバルへと翳す手の光がより輝度を増すだけ。スバルは恐怖で泣き出しそうになるのをこらえてたまらず叫んだ。

「わ、分かった！ 分かった何があつたか分からねえけど全部話す！

隠し事なんて絶対しない！ 話すから!!」

片手で顔を隠しながら必死に懇願するスバル。数瞬の後にカリオストロも翳した手を下げてスバルの上から移動した。必死に息を整えたスバルは起き上がって、カリオストロへと語りだした。

「ま、まずは俺は本当に、この世界に飛ばされたただけだ。唐突に。何の理由もなく。何の説明も受けずに」

「じゃあお前の持つてる力は一体なんなんだ」

「それは俺も知りてえよ！ 何の因果か知らない間に使えるようになった。勿論使えるようになったのはこっちの世界に来てからだ。つつても、使えるっつーか。勝手に発動するって感じだけだな。……俺の世界の物語とか、小説で流行ってる異世界召喚っていうのと同じだと思ってたぜ。それは前世で事故死した若者とかが、異世界で神様に強い能力を貰って無双してハーレム築くって言う感じなんだけど……」

「は、そりやまた寂しい夢物語が流行ってるんだな。つまりお前は特に意図せず、勝手にオレ様を巻き込んでるって訳なんだな？」

「だから別に巻き込むつもりは……———そうか、カリオストロもあの盗品蔵での件を知ってたって言うことは別に俺と同じ力を持つてるというわけじゃないのか」

スバルは勘違いしていた、カリオストロも自分と同じ「死に戻りが出来る人物」だと。ただそれは間違いで、実際には「スバルの死に戻りに巻き込まれながらも、その事実を知る人物」というのが正しかつ

た。もし彼女が同じく死に戻りが出来るだけならば、スバルが死に戻りした時点で彼女の記憶もリセットされている筈だった。

だがそうではなかった。彼女は全てを記憶していた。エルザに闇討ちされて、エルザに拷問され、チンピラに刺されて、都度三回スバルが死に至り、その度に死に戻りが発動した事を。ではカリオストロの言うあんな目というのは何だろうか？ 疑問を呈する前にカリオストロは自身に起こった出来事を話始めた。

「全部だ。お前の力に巻き込まれて一日でやった事、起こった事全部無駄にされた。ただそれは別にいい。ああ、たかが数日を無駄にしただけで嘆くほどオレ様は柔じゃねえさ。だがなあ、その度にオレ様の身体があの日起点に強制的に戻される。位置も、新陳代謝も、ありとあらゆる感覚も。それを一身に味わって見れば分かる。あれは二度と味わいたくない、反吐が出るような感覚だつてな」

その顔に浮かぶのは嫌悪感と明確な怒り。いくら見た目が少女といえど、中身は海千山千のベテラン騎空士であり、数百年以上生きた錬金術師である。そんな少女の怒りの矛先に据えられたスバルは、その強い眼差しの前では怯える他なかった。そして彼女が宿す怒りは留まるどころか更に燃え上がる。

「だがそれすらも百歩譲って、別にいい——オレ様が一番怒ってるのは、この世界にいきなり放り込まれた事だ」

「だ、ちが、だか、だからそれは俺のせいじゃ……」

「お前のせいじゃない？ かもしれないねえな。だがお前には絶対関係がある。オレ様がこの世界に放り込まれた時に、ある黒い手に放り込まれた。お前が起こした力の雰囲気とそっくりのな！ そこに関係がないとは言わせねえぞ……そんな事知らないだと？ なら思い出せ。思い出せよナツキスバル。何かがお前を呼び、そしてオレ様も何かに呼ばれた。お前は力を与えられ、オレ様はお前を手伝わざるを得なくなつたんだ。そこに因果関係がないなんて言わせねえぞ。何故お前はエミリアを手助けした？ 何故お前はオレ様にぶつかった？ 何故お前は三度死んだ？ それは全部偶然なのか？ それとも何かに誘導されていなかったのか？ 考えろ。思考しろ、思い出せ。捻り出

せ。搾り出せ！ 覚えてること、分かったこと、些細なことでも何でも全て、ひとつたりとも余すことなくオレに教える！」

「そんなの……そんなのわからねえよ！ 俺はただっ！ エミリアに助けられて、恩を返そうと我武者羅に足掻いて！ それで”死に戻り”を——」

——瞬間。世界が色褪せた。

(……嘘、だろ?)

二人の意識を残して、音も、空気の流れも、鼓動すらも止まる。そして困惑と驚愕をよそに、どこからともなくスバルの背後からゆっくりと黒い手が現れるのをカリオストロは見た。

立ち込める甘い香りと共に、今から起こることを見守ることしか出来ない二人をあざ笑うかのように、それは徐々にスバルへと近づき……身体の内部に悠々と入り込む。不思議とそれはスバルだけでなく、カリオストロにも分かった。その手が優しく、愛おしい相手にするようにスバルの心臓を撫で——そして軽く握りしめたという事を。

そして力をこめた指がゆっくりと心臓から離される。スバルの心臓を愛で終わったその手は次にカリオストロへと手を伸ばし——

「——がっはあツツ!!? あ、あっ!!!」

世界が再度歩みを取り戻し、スバルは心臓を握り潰されそうになった感触に胸を押さえて身をよじった。カリオストロも眼前まで迫った手が立ち消えたことに驚き、そして尋常ではないスバルの様子に慌てて近寄った。

「おい！ おい大丈夫かスバル！」

「さ、いあくだ。は、腹切り開かれるか、心臓撫で、られるかって言ったら甲乙つけがたいくらいに、どっちも二度とごめんだってくらいには……味わいたくねえ」

「そんだけ憎まれ口叩けるなら大丈夫そうだな……いいか深呼吸しろ。ゆっくりとだ」

喘ぐスバルの背中を撫でてやりながらとりあえずスバルを落ち着かせるカリオストロ。そうしていくうちに荒い息も青い顔も何とかマシにはなったスバルを見て、ふうと安堵の息をついた。

「……あれが、カリオストロの言う黒い手か？」

「ああ……つてことはお前、あれは初めて見たのか？」

「18年間生きてきた俺だけど、あいにくあんな禍々しい手一度だつて見てはねえよ……何で、あいつは俺の心臓を……？」

「さあな。だが、何となくの推測は立つ。お前、あいつにハートキャッチされそうになった直前に何か言おうとしてただろ？」

「何か一気に可愛い雰囲気になったけど、実情知つてると全然可愛くねえなそれ……ああ。確か死……げぼうし!? ちよつと奥さんけが人に暴力はよろしくしないですわよ!？」

「またハートキャッチされてえのかお前はよお!？」

迂闊にも竜の尾を再度踏もうとしたスバルをカリオストロがすんでの所で妨害した。この男、知恵が足りてないにも程があるぞ苛立ちながら、彼女は説明を続ける。

「多分だけどな。警告だ。他人に迂闊に話さないようにつてな」

「!」

「お前を呼び込んだ奴は、お前に何かをさせるためにその力を与えて呼び込んだ。だが何を思ったかそいつはその力を他人に話すことは許さず、スバルだけの秘密にさせたいんだろうな。……オレ様を除いて」

スバルは先ほどの自分の発言で、再度あの感覚を味わう羽目になると考えてぞつとした。そして、何故自分にそのような制約を与えたのか。目的が見えない元凶を呪った。対するカリオストロは怒りを宿しながらも話を続けた。

「オレ様は多分、ちようどいい駒としてそいつに選ばれたつて所だろうな。お前にさせたい何かの、手伝いの為とかな。……オレ様を顎で使おうつて訳か? いい度胸じゃねえか、絶対鍊金の材料にしてやる」

「俺としても是非ともその元凶はとつちめてもらいたいのは同意する」



ところだぜ……」

スバルの脳内で、なぜかその元凶に対してゴールデンボールスマツシヤーを決めるカリオストロの姿が思い描かれた。

「もう根掘葉掘りは聞かねえ。どこまで喋るのがセーフかアウトかすらも分からない現状、また奴のセンサーに引つかかるとあれだからな。だがこれだけは教えろ。スバル、お前の目的は？ ……怯えるんじゃないやねえよ、お前の事はもうほとんど疑ってねえ。お前が訳もわからずこの世界に呼ばれたってのは信じてやる。なら次の話だ。これからお前はこの世界で、どうするつもりなんだ？」

「二応疑いは残ってんのな………俺は………」

「……決まってるじゃないなら先にオレ様の目的を教えてやる。オレ様の目的は、元の世界に戻ることだ。あの世界には天才のオレ様を必要とする奴が居る。そいつのためにも、この世界には居続けられねえ」

「……」

いきなり異世界に飛ばされた。だから帰る。カリオストロが語る目的は至極当然の事だった。しかしスバルも同じ気持ちに駆られるかと言えば、そうではなかった。

また苦痛引きこもりな日々に戻るのか。誰とも話さず、ただ一日中部屋に籠り、生産的なこともせずただひたすら時間を浪費し続ける毎日。出来ることならやり直したい。その全てを、やり直したい。

だが、やり直すといっても自分は何をすればいいんだ？ 自分はこの世界で何が出来るというんだ？ 与えられた死に戻りの力だけで何をなせばいいんだ？ そもそも一度挫折した自分が何かを成し遂げられるのか？ スバルの中で思考が悪い方に、悪い方に向かっている。そして薄っぺらい虚勢で隠していた、今まで抱えてきた不安が、死の恐怖までもがぶり返しそうになり――

ぱちんツ

「！」

カリオストロの合わせた両手から発せられた乾いた音が、スバルを現実（現実）に引き戻した。

「……何考えてるかは知らねえが、酷い顔してやがったぞ。はあ……本来ならこんな事言うつもりはなかったが……アドバイスをやる。スバル、目的が決まらないなら今お前がしたいことを考えろ。出来るか、出来ないかで考えるんじゃないやねえ。本当にやりたいって思ったことだ」

「俺が、やりたいこと——」

「ああ。そうだ。ただし生理的欲求とかそういうのじゃねえぞ？ お前が最終的にやってよかったって思える事だ。オレ様が元の世界に戻るためには、非常に、ひつつっじょうに癩だけど、お前の手助けをしないといけないってのは分かっている。……あー……だからな……。最後までついてやれはしねえだろうが、少なくともそれまでにお前のしたい事を決め、それを目的にしろ。オレ様は“片手間で”お前の目的の手助けをしてやる」

カリオストロは最初は元凶であると思われるスバルへ、手段を選ばず尋問するつもりだった。だが結局スバルは巻き込まれただけではないと分かり、罪悪感が生まれてつい口が出た。「これもまた”あいつ”に影響されたせいかもしれない」と考え舌打ちしたくなったが、エルザの襲撃を完全に防げなかった分、サービスしてやっただけだと自分の中で無理矢理、理由付けした。

対するスバルはさぞ面倒くさそうに、頭を掻きながらアドバイスを告げる彼女の態度と真反対の手厚い言葉に、笑みが毀れそうになった。美少女の皮を被ったDSでプライドの高いカリオストロ。だがその実、意地っ張りで、世話焼きで、優しさを表に出せない性格なのだというのがスバルにはよく理解できた。

「あ——ああカリオストロ！ 悪いけど、それまでいっちょ頼りにさせて貰うぜ！」

だからスバルは満面の笑みで返した。そんなスバルにカリオストロはふん、と顔を背けるのだった。

「……で、だ。カリオストロ、なぜ貴方様はワタクシから身体を引いてるんでしょうか？」

「……」

先ほどスバルを介抱したカリオストロは今はなぜかスバルから距離をとっており、不審に思ったスバルがそれを尋ねた。

「……お前も、あの臭い感じられたら？」

「匂い？ いや、特に何も感じなかったけど……」

「まあ、なんつーかな。その手が現れるあるいはお前の力が発動すると、お前から臭いを感じるんだよ。甘いっつーか、腐った果実みたいな妙に気持ち悪い匂いがな」

「……なんか嫌な予感がするんだけど、続けてくれ」

「お前、今その臭いが凄い。全身から漂ってくる」

「……悪臭つき!! 他人に話すデメリットがハートキャッチ+悪臭つきだよ!!」

「スバルくさ☆い☆」

「思春期にその発言はめちやくちや突き刺さるからやめてくれねえか!! あー昼飯前に先に風呂に入りてえ! 先に湯浴みさせてくれー!!」

「……お客様? お客様どうしましたか?」

騒いでいる音に気付き様子を見に来たレムのノックの音で、一旦二人の内緒の話は終わりとなりスバルは一旦元の服装に着替えて昼食に赴くことになった。

§ § §

「なんつーか、二日間も眠っているとやっぱ腹減るな。思えばあの日から何も食べてない気がするし……でも病み上がりでがつつり食えるか心配だ」

「お客様の体調に合わせた軽い料理も用意しています。ご安心ください」

「おおサンキューレム! 美少女メイドキャラってドジツ娘か超有能

かの二択かと思つてたけど、案の定、超有能で何より！」

「恐れ入りますお客様」

食堂まで進むがてら、レムに先導されてスバルとカリオストロが通路を移動する。相変わらずの戯言を垂れ流すスバルにカリオストロが裾を引いてこちらを向かせると、小声で話し始めた。

（おいスバル、このあとお前はこの地の領主に出会うことになるからな）

（マジ？いきなり貴族謁見ルート？ 俺実はこの力見込まれて戦争に巻き込まれるとかねえだろうな）

（あんな制約かけられてお前の力知ってる奴が居るとは思えねえよ。で、だ。お前はその領主にエミリアを助けたお札を何でもどうぞつて言われる）

（おおお、まさしくとんとん拍子…！　そこで俺はエミリアたんをくださいって言う流れって奴だな！）

（そんな願い一瞬で却下されるのが目に見えてるだろうが。ここで提案だ。そこでの願い、ここで働かせて貰う事にしろ。拠点を持たないオレ様達にとつて、出来るなら権力者の後ろ盾は有ったほうがいいからな）

（そ、それもそうだな。いやマジでカリオストロ先生、為になります）

（授業料はあとでがつつり請求するからな？）

「お客様、こちらが食堂でございます」

「お、おお！案内ありがとうございます」

「ありがと☆」

そうこうしてる内に食堂についたらしい、レムが扉を開け食堂の全容を見せた。

細長い、純白のテーブルクロスに包まれた机には色とりどり、食欲を誘う様々な食事が。そしてそれを囲うのはエミリア、ロズワール、ラム、そして黄色髪の少女ベアトリスの姿。二人は意気揚々に、誘われるように席へと移動していった。

——そんなスバルとカリオストロを見るレムの目は、到底客に向け

るような視線ではない、冷ややかな色をしていたのだった。

## 第十一話 召使と食客

「話は終わったようだあーね」

「うん☆ お待たせしてごめんねみんなっ☆」

一同が会する食堂に、遅れてやってきたスバルとカリオストロが入場した。

案内役のレムもラムと同じくロズワールの後ろに移動し、模範的なメイドよろしく背筋をぴんと立てて佇んだ。

「……？ あー。あー……えーつと……メイド二人に、失礼ロリに、エミリアたん一人。俺が知らない後の一人はどう見てもお付きの道化師。カリオストロ。お前の言う領主ってどこに居るんだ？」

スバルは初めて見るロズワールの姿に困惑し、小声で問い質してきた。カリオストロもそれも無理はないと思いつつ自ら自身の目で誘導して領主を示唆した。誘導されたスバルとロズワールは目が合い、ロズワールは嬉しそうに手を振ってその視線を受け止めた。

「……笑えねえ冗談だぜカリオストロ。あれが領主だったら俺の国はホームレスでさえ総理大臣だ」

「あはあ、その例えの意味はよおーく分からないけども。私は領主でまあーちがいないーいよお」

「その口調でますますありえないという信憑性が高まったぞ!? どこの世界にピエロの格好する領主が居るんだよ!？」

はっはっはっ和高らかに笑うロズワールは「まあまずは席に座りたまーえよ」と二人を席へと促し、スバル達はそれに従い席へと座った。「カリオストロ君には既に自己紹介しーたけど、君にはしてないからねえ。それでは改めまして。メイザース領の領主、ロズワール・L・メイザースと申します。此度はエミリア様の命を助けて頂き、まーことに感謝します」

「まじで……まじで領主なのかよお前……あつ、ああ俺の名、つか私の名はナツキ・スバルって言いま……申します。此度は倒れた俺、じ、自分、いや私を拾ってくれて感謝感激の雨あられ、恐悦至極でありがたき幸せと……」

「堅苦しい挨拶は苦手みたいだあーね。それなら気にせず、普通に喋って貰ってもいいよお」

「……それすつごく助かるわ。それじゃお言葉に甘えるゼロズつち」  
「ロズつち? 面白い子だねえ、きいゝみは。是非ともそう呼んでくれたまえ」

いきなりの馴れ馴れしさに傍らに控えたラムの眉がぴくりと動き、カリオストロも頭を抱えなくなったが、当の本人は全く気にした様子を見せずに好奇心の目でスバルを見ていた。

「しいーかしその様子だとスバル君の体は大丈夫そうだねえ、良かった良かった」

「ああ、腹がつつり切り裂かれたけど、お陰様で何とかな。いやー助けしてくれた上に寝る場所も飯も提供もしてくれて、マジで感謝しかねえゼロズつち」

「お礼なんてとおーんでも。治療はカリオストロ君、移送はエミリア様が行ってますかーらねえ。当家としては寝食の場、それぐらいしか提供出来ていませんよ」

「……まあその後でまた死んだかと思っただけだよ」

スバルの視線が、対面に座る金髪ロールの少女に移る。その少女は何故かパツクを胸に抱えて嬉しそうにもふもふしていたが、スバルの視線に感づく途端に不機嫌そうに睨んだ。

「……何かしらその目は。ベティーは不審者かつ侵入者が失礼な事を言ったから、ちよーつとお灸を据えてやっただけなのよ」

「この失礼ロリめ、病み上がりの俺を気絶させるには灸の火力強すぎだろ! ベアトリス……いや、ベア子め!」

「……ふん。お前が病み上がりかなんて知ったこっちゃないのよ。あと変なあだ名で呼ぶんじゃないかしら。その単語の意味は分からないけど、不快な意味だというのは分かるのよ」

「おいおい、それを考慮しておかないと大変な事になってたぜ? さもなくば無防備に気絶する俺、ふとした拍子でしめやかに失禁なんて展開になってお前の部屋は瞬く間に——」

「食事の場でいきなり何を言い出すのかしら!? メイド、ちよつとこ

いつを追い出すのよ！」

がるるるとにらみ会う二人。カリオストロは初めて会うベアトリスをきよとんとした目で見てみるとロズワールが補足するように説明を شدした。

「名前だーけは聞いてるようだけど、あーらためて。彼女の名はベアトリス。当屋敷の書庫を管理して貰っているよ。いつもは書庫に閉じこもっていーるけれど、今日はめーずらしく食卓に来てくれてねえ。久々に私と食卓を囲いたくなーったのかなあ？」

「お前が幸せな思考回路を持つてるのは分かったから黙るかしらロズワール。ベティーはただにーちゃと食事しに顔を出しただけなのよ」  
仮にも領主のロズワールに辛らつな彼女はスバルとロズワールをなじる間も、もふもふと言う音が聞こえそうなほど愛おしそうに精霊パックを撫でるのに夢中だった。そして肝心のベアトリスに撫でられ続けているパックはくすぐったそうにしてそれを享受していた。

「はふ、にやはは、くすぐりたいよベティー。あ、それはともかくスバルは元氣そうで何よりだね。カリオストロ共々。リアを助けてくれてありがとう。ボクが居ない間に……ん、ふふふ。どうなることやらとハラハラだったけど、リアも傷ひとつなくて本当によかつ……あー尻尾は気持ちいいってば」

「……ねえベアトリス。せめてパックが話してる間くらい撫でるのやめてあげたら？」

エミリアの指摘にむっとして睨みつけるベアトリスだが、渋々と責める手を緩めた。また個性的な奴だなと内心で思うカリオストロは初対面の彼女、そしてメイド達に自己紹介をした。

「始めましてベアトリス☆ 私の名前はカリオストロって言うの☆  
今回エミリアとは偶然縁があつてお邪魔させてもらってます☆」

よろしく☆と手を可愛らしく手を振ったカリオストロ。だがラム、ラムはともかくベアトリスはカリオストロをじっと目を細めて見つめるだけ。あれだけ撫で続けていた手も止まっていた。しばらくして一言ぼそりと「……よろしくなのよ」と返事をしたベアトリスは再びパックを撫で始めた。恐らく、ラインハルトやパックと同じく自



分の力量を測ってるのだろうなとカリオストロは推測した。

(……スバルのmanaを吸い取ったのはこいつか。見た目少女だが、ロズワールと違ってmanaの巡りがおかしい。人間じゃあねえな。一体何者だ？ 更に言えばこいつの立ち位置だ。屋敷の書庫を管理しているならその屋敷の持ち主になるだろうロズワールのほうが立場が上の筈だが、馴れ馴れしすぎるし無礼すぎる。どういう関係だ？ まあこのピエロがため口上等で、礼儀の有無を気にしてないせいかもしれないねえが。何であれ、それとなく探りは入れる必要はあるだろうな)「よし、じゃあ次は俺の自己紹介だな！俺の名前はナツキ・スバル！

偶然出会ったエミリアさんに運命を感じ、カリオストロと協力して此度の盗難劇を八面六臂の活躍で解決した、世紀の凡人だ！ ぶっちゃけこじや一文無しで、身よりも誰もいなくて、右も左も分からない状態！だけど、それを補う有り余る主人公力とトラブル誘発力を持つてるぜ！ 以後よろしく！」

カリオストロの自己紹介が終わった直後椅子から立ち上がり、陳腐な舞台劇よろしく仰々しく決めポーズを取るスバル。その自己紹介ならぬ自己アピールに、空気が凍りついた。沈黙の数瞬の後、凍りついた空気を解凍したのはラムの可愛らしいくしゃみだった。

「……失礼しました。つい耐えられず」

「花粉症かな？ そう言えばここのお庭は色とりどりの花が咲いててすっごくきれいだったね☆」

「はい、姉様と二人で毎日お手入れをさせて頂いています」

「人工的な環境だけど、此処の庭はすごく手入れが行き届いてるよ。だってリアの呼びかけに微精霊も沢山応えてくれるんだもの」

「わかってた、わかってたさこうなることぐらい……！ でも無視して別の会話はやめてくれ、その対処法は俺に効く……ッ！」

スバルは机の上に泣き崩れる。林檎が木から落ちるのと同じように、それは必然の結果であった。しかし生真面目を地でいく天使、エミリアはあたふたしながらスバルをフォローしてくれた。

「えっと、大丈夫よスバル！ 言いたいことはその、ちゃんと伝わったと思うわ。でも一応ロズワールは領主だから、猪口才な発言は程ほどに

ね」

「猪口才ってきょうび聞かねえな……」

自己紹介が一区切りつくと、ロズワールの鶴の一声でようやく昼食が始まった。彩りの良い様々な料理は、どれもこれもがスバルはもとよりカリオストロでさえも唸らせる味で、あの騒がしい一日で失ったエネルギーが一気に補充されていくのを二人は実感した。

頬を綻ばせながら食事に舌鼓を打ち、自然とエミリアやロズワールとの会話がとても盛り上がった。そして話はあの件、つまり騒動の中心になった徽章の話になった。

「……そうか。エミリアたんって」

「ええ、王様候補なの。黙っていてごめんねスバル」

今の王国が王が不在であること。そしてエミリアが5人の巫女候補の一人であること。スバルが倒れている間にカリオストロが聞いたさまざまな事実を聞いて、スバルはうんうんと唸った。そして自然と自分達が非常に怪しい立場であるということ始めて自覚したように、冷や汗をたらだらと流し始めた。

「いやいやいやいやーエミリアたんが謝る必要はないぜ。関係ないことに首を突っ込んだのは俺達だし、むしろ怪しまれてしよっぴかれなかつただけでこつちが感謝したいくらいだ！ 正直、まさか民を引っ張って行く王様をこんなバッジで決めるとは思ってたけどな」  
「その徽章に選ばれる、そおーれは龍に選ばれるという意味だあーからね。古くから龍との縁がある我が国では、重要な意味があーるからね」

「そんな大事なものが盗まれたってのかエミリアたん……」

予想以上に重要な物を盗まれたという事実には流石のスバルも閉口する。スバルにまでそんな顔をされてエミリアも顔を真っ赤に染めて俯く他なかった。如何に盗むのが悪いとは言え、盗まれた隙を見せるエミリアもエミリア。理由はともあれ候補の証をなくすのは候補者にとって非常に大きなスキャンダルだ。

（ま、だからこそ候補者にとっては有用な妨害手口でもあるけどな。

だけど、色々と解せない点も多い。盗むなら盗むで何であんなガキを使う？ 確実に失脚を狙うならプロに狙わせるべきだろ。オレ様ならそうする)

カリオストロは料理に舌鼓を打ちながら考察を続ける。

(というかエミリアを失脚させるならそんな手を使うまでもねえ。風聞とちよつとの出来事だけで十分の筈だ。何せ件のサテラとかいうのとそっくりなら、そこを突いてやればいいだけだからな。それこそ噂を助長するような、小さな事件をまことしやかに――)

「――ねえカリオストロ、カリオストロつたら！ スバルがいじめるの！」

「ふえ？ え？ あ、そうなんだ☆ うーん、スバルう……めつ☆」

「そうだよスバル、うちの娘を虐めたら容赦しないんだからねー」

「何この王様候補マジで可愛い。あとカリオストロもパックも笑顔で手をこつちに向けないでくれねえか!! 冗談でもこええよ！」

エミリアを王様候補から引きずり落とす方法を考えていると、隣に座っていた本人が肩を揺すぶり縋ってきた。何故かエミリアはあの助けた日以降、自身への距離をぐいぐいと縮めてきているとカリオストロは感じていた。そこまで親密になったつもりはカリオストロにとって全くないし、他に思い当たる理由は自分の美貌ぐらいしかないが。

「つーか王様候補のスキヤンダル回避って考えると俺達って結構凄い功績残したんじゃないかね？」

「そーうだねえ、加えてエミリア様の命も救って頂いた。こーれに勝る功績はなーかなかなーいねえ。故に、キミ達への恩はそおーれこそ表現できないほど大きなものになってるよ。もしキミ達が望むなら……報酬はお望みのまま、どーんな願いでも叶えてあげよう」

「お、お望みの、まま――！」

「……ねえエミリア☆ あの子の視線が極めて不快かつ怖気が走るの分かるけどお、こつちを見られても何も出来ないんだよ？」

「姉様姉様、お客様の目が既に筆舌に尽くしがたいくらいに気持ち悪いです」

「レムレム、バルスの目が最早言葉に表すのを憚るくらいに気持ち悪いわ」

ロズワールの言葉に興奮したスバルの目は真っ先にエミリアへ。そしてエミリアはその視線から逃れようと必死にカリオストロへと視線で何かを訴え続けていた。

その話に至った段階でちらりとスバルを見るカリオストロ、するとスバルもまた同じことを考えていたのだろう。二人の目が合う。そして互いにアイコンタクトで確認し合うと、ロズワールへと望みを話しはじめるのだった。

「それじゃ言わせて貰うぜ——」

「カリオストロもこの機会に言わせて貰おうかな☆」

「そう、俺の望みは——!」

「カリオストロの望みはあ——☆」

「俺をここで働かせてくれ!」

「カリオストロを食客にして欲しいな☆」

「……あれ?」

少しの間のあと、スバルは啞然とした顔でカリオストロを見やる他なかった。

§ § §

そこは一緒に働くべきだろー!?!と抗議するスバルに、素知らぬ顔でスルーするカリオストロ。結局スバルはあれだけ盛大に言い切った自らの発言を撤回する事も出来ず、レムとラムの二人に屋敷案内という名の職場紹介に連れて行かれた。

カリオストロがスバルを働かせ、自身を食客とした理由。それはこの屋敷での情報収集を分散して行うためであり、また屋敷の人物の監視の目を強制的に緩くするためでもあった。目下グレーゾーンをキープして疑いが解けていない現状、自分達に監視がつくのは必然となる。

しかし、聞く限りで言えばこの広い屋敷で活動する存在はレム、ラム、ロズワール、エミリア、ベアトリスと、驚くほど少ない。主に引きこもっているベアトリスはともかくとして、エミリアも屋敷では王としての勉強に努める日々。レムとラムはこの屋敷全般の生活面担当。ロズワールが唯一何をしているかカリオストロは把握していないが、仮にも領主なら執務にいそしむ必要があり、暇ではないと見ていた。

となれば監視として動くのはレムかラムの他いない。だがそのレムとラムには良くも悪くも目が離せない、怪しき抜群のスバルを教育する必要が出てきて、対する自分は屋敷内をある程度自由に動くことが出来る状態になっている。そうなれば自分とスバル、両方を四六時中見張るのはかなり困難になる筈だ。

(ただそれも、人知れず見張る影の存在や監視魔法があると考えるところに崩壊する雑なプランだけだな。今のところそれらしいものはなさそうだが……。ちよつと調べてみる必要があるか。ま、目下怪しまれてる現状だが、口封じに殺される事なんてまずないし。程ほどな美少女に囲まれて働くんだなスバル。ご褒美だろ?)

「……スバルは欲が無いのね。私のすぐく、すぐく大事な徽章まで取り戻してくれただけじゃなくて、私の命まで助けて貰ったのに。ここで働きたい!だなんて」

「スバルは一文無しの身寄りなし、力もなければ自信もなしのなしなし尽くしだから、どうしても拠点欲しかったんだろ☆ あとあわよくば屋敷で一緒に生活するのを通して、エミリアともーつと親密になりたかったんじゃないかな☆」

「私とねんごろになりたいの? 私、ハーフエルフで銀髪なのに。……すぐく、すぐく変なのね」

「ねんごろってきょうび聞かない言い方だね……☆」

スバルと打って変わって見事食客の身分を勝ち取ったカリオストロは、エミリアに屋敷を案内してもらっていた。最初はレムやラムが案内すると言っていたが、エミリアは自分がやりたいと強く主張し、今も楽しそうに屋敷内をカリオストロへと案内していた。ちなみにパックはベアトリスに拉致……確保されて以降姿を現していないようだ。

「えーつと……ここがスバルの部屋で、その隣がカリオストロの部屋になるわ。浴場はさつき説明したわよね？ 屋敷の突き当たりにあって、事前に言えばレムが用意してくれるわ。これで屋敷の中はあらかた説明したけど——」

「ねえねえエミリア、ひとついいかな。書庫って一体どこにあるの？」  
「あ。……うーんと、その、書庫なんだけど……実は書庫はとても特殊な場所にあるのよね。一応屋敷の中にはあるのよ。でも、見つけるのは困難なの」

「……？」

「ベアトリスの力で書庫だけ屋敷から隔離されてるのよ。」扉渡り  
”って言うんだけど……”

エミリアの説明曰く、ベアトリスは屋敷内の扉と書庫を至るところに繋ぐ力を持っているようだ。そのような力で書庫を隔離する理由は、それが禁制の品や貴重な本をしまう禁書庫でもあるから、らしい。

「……」

「屋敷を紹介するって言った手前、実際に紹介できなくてごめんねカリオストロ。でも私も普段どこに居るのか把握できないし、呼んでも開けても出会えた試しがないの。だから一発で出会えたスバルって本当すごいと思うわ。……あ、でもでも！ 今度時間あったら絶対に紹介するから！」

慌てふためくエミリア。だがその時カリオストロの脳裏を占めるのは三文字の単語、「禁書庫」だけだった。

「禁書庫」。あぁなんとすばらしい響きであろうか。この世界特有の知識。しかも禁制の知識と聞くと、古今東西、ありとあらゆる知識

を求める真理の探求者にとって、そこは垂涎の場所だ。是非とも入りたいし、読みふけりたい。そうだ、こんな大変な目にあつてるんだ、少しは自分だって良い目を見てもいいはず。そんな欲求に駆られたカリオストロだが、すぐさまその場で欲望を振り払い、エミリアへ笑いかけた。

「その時を楽しみにしてるねエミリア☆」

「うん！ それじゃ案内は終わりよ。それでカリオストロはこの後はどうするつもりかしら」

「うーん。そうだね、正直今日は何もすることないし……正直早い時間だけど、長旅直後だし部屋で休んだ後は少し湯浴みさせていたかどうかな☆ レムか、ラムにお願いすればいいんだっけ？」

「！ ええそうすればいいわ。そうすればいいんだけど……えーつと。えーつと……」

「……？ エミリア、どうかしたの？」

何度か思考の渦に嵌ったカリオストロのように、エミリアもその場で悩み始める。やがて、よし、と一つ力強く頷くとカリオストロへと詰め寄った。

「ねえカリオストロ……いい、一緒にお風呂入らないかしら！」

## 第十二話 湯煙の中の金と銀

大理石の床。広い天井。何十人が入っても狭いと感じそうにない巨大な浴槽。湯けむりに包まれた浴室は壁に取り付けられた明かりでぼんやりと、しかし決して暗さを感じさせずに照らされている。湯気の立つ温水でなみなみと満たされた湯船には白い花卉が散りばめられており、ライオンを模した石像からは絶えずお湯が継ぎ足されているのが見えた。

絢爛豪華な浴室。見る人が見ればまるで古代ギリシャ風の建築だと興奮したかもしれない。そんな華美な浴室を、衣類、装飾品とその全てを外し、髪を後ろで纏めて柔らかなタオルのみ身につけた存在が独り占め、いや、二人占めしようとしていた。

「わあ………☆」

「ね、すごいでしょ？ 長旅の疲れを癒やすには、ここのお風呂は最高の場所だと思うわ」

広く湿った空間に二人の声が木霊する。カリオストロは視界に広がる光景に感嘆し、エミリアもそんな彼女を見てふふんと少しだけ自慢気に、かつ嬉しそうにしていた。

エミリアからの急なお風呂の誘いは、元男性のカリオストロとしては少し思う所もあった。が、当の本人の体はとつくの昔に女性に作り替えており、加えて言えば元の世界では騎空艇で日常的に女性と湯を共にしていたという事実があった。

よってカリオストロが導き出した結論は「まあいいか」であり、断る理由を考える手間を惜しみ一緒に入る事にしたのだった。一緒に入るのが分かった時のエミリアはそれはそれは輝くばかりの笑みだったとか。

どこかうきうきとしている二人は早速軽く体を流す。そしてカリオストロがタオルをつけたまま先に湯船に入ろうとすると、エミリアがそれを止めた。



「カリオストロ。湯船にタオルは付けちや駄目」

「ん？ そうなの？」

「ええ、私も知ったんだけど、この間本に書いてあったわ。湯船にタオルを付けるのはマナー違反だって」

「エミリアって本当本の虫だよねえ……☆ んー分かった、じゃあそうさせてもらうねっ☆」

普段こそタオルは身に付けずに湯浴みをするが、知り合いになったとは言え日にちの浅いエミリア相手に裸体を晒す、あるいはその裸体を見るのはほんのりと抵抗があった。故にタオルを身に付けて入ろうとしていたのだが……そう言うのであれば、とはらりとタオルを肌蹴させていた。

タオルの下からは華奢だが瑞々しい体躯が現れる。成長を暗示させる、微かな膨らみを持つしなやかな肢体は、触れれば折れてしまうような儂さがあり、発展途上だと言うのにまさしく芸術と言っても良い程完成されていた。

対するエミリアも同じく自らのものを肌蹴させると、タオルの上からも感じさせた豊かなモノと、均整の取れたすらりとした美しい躰が表れる。中身はまだ子供だというのに、そのスタイルは大人顔負けのプロポーションであった。

二人の染み一つない白磁の肌はお湯の粒を弾き返し、浴場の熱気の中に中てられたか、肌はうつつすらと上気し、薄い桜色に染まっていた。

「はあく……」☆

肩まで浸かった二人を包む熱すぎず温すぎないお湯は、あの騒動と長時間の移動で蓄積した疲労を溶かしていく。これはいい。非常に堪らない。この世界に来て初めての心から休息出来た瞬間だとカリオストロはしみじみと思った。そして何よりも、自分の美しさを重要視するカリオストロにとって、これからの拠点にこのような豪華な浴室があるのはとても素晴らしい事だった。

「ねえ、エミリア☆ 変なこと聞くけど、ベアトリスって……実は人間じゃなかったりする？」

「え？ ……あ。そうね、そう言えばロズワールはその事説明してなかったかも。確かにベアトリスは精霊よ」

「ふうん、やっぱり☆ って事はあの子って、エミリアとパックみたい誰かと契約してるのかな？ ロズワールとかと？」

「うーんと、詳しくは分からないけど多分そうじゃないと思うわ。私でも、ロズワールでも、レムでもラムでもない。でもずーっと。それこそロズワールのご先祖様の頃からこの屋敷で禁書庫を守っているらしいわ」

ロズワールの先代の、そのまた先代の先代。ずーっと前から居るのよ、と説明するエミリアの話聞いて、ベアトリスのロズワールへの無礼の理由は、子供扱いのようなものと理解する。

「じゃあベアトリスとパックって、凄いい長い付き合いだったり？」

「あ。それなんだけど、そう言う訳でもないのよね。ただ、パックの方が精霊としての格が凄く高くてそこにベアトリスが惹かれてるみたいな」

精霊としての格、と言われて二人の姿を脳裏に思い浮かべるが、ビィより小生意気な猫と同じく生意気そうな少女ではどちらの格が高いのかなんて、カリオストロには判断がつかなかった。

「そう言えば私の方からも聞きたいことがあるの。ずっと気になって…いい？」

「うーん、内容によるけどいいよ☆ 私も聞きたいこと一杯聞いているし」

「ありがとう。わかってるわ、そんな突っ込んだ話はしないから！

えっとね、カリオストロって——」

聞きたいこと。オレ様を使う魔法の事か。それともどこから来たのか、という質問だろうか？ 考えるカリオストロを置いて、お湯の中で少し距離を置いて座るエミリアが詰め寄り、その際に年頃の少女にしては大きな膨らみが目の前で揺れるのがカリオストロの目に入った。

「——どうして時々、男言葉になるの？」

「……」

それは、カリオストロにとってちよつと想定外すぎる質問だった。「あのね、カリオストロって自分で言ってた通りすごく可愛いと思うの。髪の毛も凄く綺麗だし、目も透き通った紫で吸い込まれそうで、顔も整ってて、肌も真っ白で……身体も……あ、ジロジロ見てごめんなさい。でもカリオストロって時々男口調になるでしょ？ それが凄く意外だって言うか、驚くって言うか……で、でもでも！どっちの口調も好きなのよ？でも何でだろうって思ったら、凄く気になっちゃって」

「……お、おう☆」

「あ、ほら！また男言葉に……あれ？ 今のはでもちよつと男言葉じゃない？」

このエミリア、言うことがとてもストレートだ。下手をすれば間違われる発言にカリオストロも思わず言葉が詰まってしまう。しかし竜車での移動中、時々何かを言おうとしては口を噤んでいたエミリアがずっと聞きたかった事が「これ」とは思わなかった。

カリオストロは軽い音を立てて顔を湯で洗うと、一息ついてエミリアに説明し始める。

「そうだね☆ エミリアって傭兵って知ってる？」

「傭兵？ えつとお金で雇われる兵士……でいいかしら」

「そうそう☆ カリオストロはあく、そういう傭兵稼業をやった経験があるんだ☆ だからどうしても荒事とかになると、時々そう言う言葉がつい出ちゃうの☆」

「……そう、だったのね」

嘘ではない。だが、本当のことは言っていない。言うまでもないがカリオストロにとっては、男口調の方が本性だ。女口調は擬態するため（そしておちよくるため。更に可愛さを補強するため！）に使っているというのが正しい。だがエミリアはその答えには一度は頷いたものの、腑に落ちない様子だった。

「納得いかない〜？」

「……………うん。正直に言うと。カリオストロっていつもスバルと話す時は男言葉、よね？」

「二人の態度を見ると分かるの。あの盗品蔵での二人のやり取りから、ずーっとそう思ってた。みんなで話す時はちゃんと女言葉で話してるけど、多分二人きりになったらもつと気軽に、男言葉で話してるんだなって……カリオストロはそんなスバルとの関係を「腐れ縁」だと言ってたわね。最初は意味が分からなかったから後で調べたら「切っても切れない、好ましくない縁」。あんまりよくない縁ってのはちよつと分かったけど……でも。でもね、そんな二人の関係が私はすごーく、羨ましく感じたわ」

エミリアは吐露していく。自分の思いを。あの盗品蔵での、スバルとカリオストロの気軽で気楽な関係を思い浮かべながら。それは物語で読んだ、エミリアが夢想する友達像そっくりで、

「女言葉も可愛くて良いと思うけど、男言葉の方が凄く距離が近い気がしたわ。だから私も、出来るならカリオストロに男言葉で話しかけて欲しいの」

要するにこのエミリア、カリオストロとずっと友達になりたかったのだ。

エミリアは王候補というやんごとなき身分でありながらも、嫉妬の魔女と容姿が似ている被差別対象の銀髪ハーフェルフ。そんなエミリアの友達は今は一人居ない。唯一居る理解者はパツクのみという状態。誰しもが自分を冷たくあしらひ、時に罵倒する過酷な世界の中で生きてきたエミリアだが、徽章の件でパツクに次いで色眼鏡で見ない存在と出会った。それがスバルとカリオストロだった。

特にカリオストロは同性でありながら自分の容姿を嫌な目で見ず、そして気紛れだと言いながら自分を助けてくれた。それは確かに打算的だったのかもしれないがエミリアにはそれだけでも十分嬉しく、そして初めて親しくなりたいと自分から思っていた。

カリオストロには当然、そんなエミリアの気持ちはほとんど分からない。だが彼女の「仲良くなりたい」と言うストレートにぶつけてくる子供そのままの欲求は彼女にもしつかりと届いた。それは聞いているこっちが恥ずかしいくらい。いつも天真爛漫な少女を演じる力

リオストロ口でさえも中々真似出来ない物で、まるでルリアのようだ、と思わず考えてしまう程だった。

「……質問だけじゃなかったの?」

「あつ、ぐ、ごめんなさい!」

若干の気恥ずかしさを吹き飛ばすためか、カリオストロ口が突っ込むと何を言ったのかを理解したエミリアは顔を赤く染め、視線を下げた、だが下げた後にちらちらとこちらを覗き見てくる辺り、何を求めているかは一目瞭然だった。

「……はあ。言っておくが、いつもは無理だからな」

「! うん!」

輝く程の満面の笑みを浮かべたエミリアは、その後始終嬉しそうにカリオストロ口のお風呂を楽しんだ。その中には、身体を洗わせてとねだるエミリアの姿があったとか。

§ § §

「カリオストロ口様は非常に、ひっじょうじょうじょうじょうに、いいご身分を堪能したようで」

その日の夜。カリオストロ口がスバルの部屋に訪れると、超不機嫌そうな顔をしたスバルが出迎えた。

「スバル落ち着いて☆ いつもよりキモ怖い顔が、もつとキモ怖くなってるから☆」

「おおよどうもありがとう、カリオストロ口様の為にもつとキモい顔で迫ってやらあ……!?!」

スバルはラムレムに連れられて労働の楽しみを知ったようだ。最後に見た時にはなかった生傷が至る所についている所からそれを察する事が出来た。

「お前。何で俺も一緒に食客にしてくれなかったんだよ……! お陰様で俺がただだけ過酷な仕事させられたと思ってんだ、言つとくが俺

は就労経験すらもないただのニートだぞ?! 家事も掃除もほとんどした事ねえのに、病み上がりの俺に課せられる仕事の重いこと重い事……! ああ労働の尊さはよく分かったさ、もうお腹いっぱいなくらいだ! 明日から立場交換してくれよ!? あとエミリアさんと一緒にお風呂入ったってな? 一緒にお風呂とかお前……! ——なあ!?!

「はいはい分かった分かった大変だった大変だった☆ でもスバル知ってつか? 食客つてのは才能ある人を囲うことを言うんだぜ?」「才能あるわ!……裁縫とか!」

「ロズワールが欲しがると才能か? って言うかお前ナイナイ尽くして自己紹介しちまってんだろうが」

「はい、自業自得でしたアー!!」

ベッドに座るカリオストロの横でくねくねと気持ち悪く蠢くスバルに、カリオストロは気持ち悪☆と煽って返す。

「まあいいじゃねえか、そこそこの美人姉妹に手取り足取り教えて貰ったんだろ? なら女の子と手握って貰った事のないスバルなら、それこそ嬉しかったんじゃないか?」

「どどどど、童貞ちゃうわ!」

「そこまでは言ってるよ」

脱線を繰り返しようやく本題に入る。カリオストロがスバルの元に訪れた理由はスバルが手に入れた情報を教えてもらうためだった。「……ただ情報ついてもな。今日やった事は掃除とか料理の手伝いしただけで、何の探りも入れてねえしなあ。と言うかこの場所で情報収集とか必要あるのか?」

「馬鹿。これだから童貞は駄目なんだ。何も知らない異国の地では一つでも多くの情報が必要だ。下手すりやそれが命取りになったりする。ロズワールから一応褒章として今の権利を勝ち取ったとしても、いつ放り出されるか分からねえぞ」

さりげなく童貞で弄らないでくれますう!? 違いますまだ大事に取っておいてるだけですう! と見苦しい主張をするスバルだが、思い当たる節が全くないのか首を傾げるばかりだ。

「些細なこと……うーん。あんま特徴的な事とかねえんだよな、精々料理の仕方とか掃除の仕方教えて貰ったくらいだし……ちよつと頼みが抽象的過ぎて思いつかないって言うか」

「いい情報くれたらエミリアとのお風呂の話、聞かせちゃおっかなー☆」

「唸れ俺のCPUとメモリー！ 思い出せ何か重要なキーワード！ちよつと待っててくれ、絶対にカリオストロをうんと言わせる情報を絞り出すぜ!!!」

いきなり頭を抱えてベッドにヘッドバンよろしく頭を突っ込むスバル。しばらくベッドに顔を埋めていたようだが、不意に起き上がったかと思えばカリオストロへと絞り出した結果を出力し始めた。

「ラムが俺の事をバルスって呼ぶ。ここの屋敷の通路がループする。レムのおっぱいが大きい。ラムの得意料理が蒸かし芋、芋の皮の剥き方は包丁じゃなくて野菜を動かす。ベア子がパックを密室でもふもふしてた、ロズワールの発言がねっとりしててホモっぽい。ラムが毒舌。レムが俺の事をじーつと氷点下の目で見てくる、掃除洗濯以外ほとんどレムの活躍が大きい。エミリアさんの私服が超可愛いってか作った人分かってる。何かイ文字とか口文字とかあるっぽい。エミリアさんが夜中に微精霊と語り合ってるのすげー可愛い、みんなが入り終わった後に最後に風呂入ったらすっげーいい匂いがした……あとは、あとは……」

「ところどころで変態っぽい発言があるけど聞かなかった事にしてあげる☆ ま、割りと気になるのはあるな。屋敷の通路がループするってのは？」

「あー俺がこの屋敷で目覚めた直後にな。通路歩きまわってたらかかずーつと同じ道をぐるりと巡ってる気がしてたんだよ。歩いた先に直前まで見た同じ絵とかが飾ってあって」

「ふんふん。侵入者用のトラップか何かか。それで？」

「俺のセンスが冴え渡って、ループを見破った。何となく扉を開いたらベア子……ベアトリスに出会った」

「ふん、扉渡りって言ってたな。普通はベアトリスの部屋は見つから

ないらしいが。お前は一発で見つけたと」

「おおそうそう、扉渡り。ラムもそう言ってたな。でも今のところあの時以外でも何回かベア子の部屋は見破ってたな。俺は十中八九でベアトリスの部屋を開けられるぜ！」

「何でだよ。だがそれはでかした、褒めてやるぜ」

殆どの情報は使えなさそうだったが、一番の収穫はスバルがベアトリスの扉渡りの対抗手段になりえるという事だった。最もコンタクトが取りづらかったベアトリスとの連絡手段が付くというのはとてもありがたい。兼ねてから琴線に触れる禁書庫。もし入れるのであれば是非とも入りたいし、あわよくば読み耽りたい。

（ただ、それを許す程ベアトリスも甘くはねえだろうが……既に交渉材料は一つ見つけている。それを使わせて貰うかね）

「ま、あとは気になるのは……レムの視線か。言うまでもないだろうが、スバル。お前は今も監視されてるって考えとけよ」

「やっぱり？ まあ、どう考えても俺たちって怪しいもんな。ラムはともかく、レムがあんな目で見てるのも監視対象だからか……にしては露骨な気もするけど。しかしカリオストロならまだしも人畜無害の俺を監視するのかなあ。何もやらかさねえってのに……」

「この童貞、この屋敷に来て早々やらかしたこともう忘れてるのかな？」

「う——そ、そんなことよりも！ ご褒美のエミリアさんのお風呂話プリーズ！」

他の話を聞こうとした矢先に、スバルが何かを誤魔化すように食い気味にエミリアとのお風呂話を強請ってきた。カリオストロは十分いい情報も手に入れたのもあってか、やれやれと思いつつながら疲れ気味の少年にご褒美をあげる事にした。

「んーつとね、エミリアとのお風呂は……すつごく楽しかったよ☆」  
「そう言う小学生的な感想を求めてるんじゃないやねえ。分かってんだろ。分かってんだろカリオストロ先生よお……！」

「鼻息荒くて本格的に気持ち悪い……うわっ!? わかったわかった顔近づくんじゃねえ！ ぶっ飛ばすぞ!」



風呂話を焦らそうとするカリオストロに、スバルが血走った目でベッドの上で彼女の元へとにじり寄る。あまりの剣幕にさしもの彼女も引くしかなく、それを更にスバルが両手を広げて追い詰める。

「いやダメだ今の俺は褒美に飢えたクソニートよ。カリオストロから詳細な話を聞かない限り、何度ぶっ飛ばされようと絶対に食いついてやるぜ。教えてくれカリオストロ……いや、カリオストロ様！

エミリアたんのお風呂での一挙一投足、あとボディラインとか余すこと無く全て俺に教えてくれ！ ぶっちゃけ大きかっただろ!? っていうか背中流し合いたか!? したよな!? 二人の美少女の温泉姿とか言うイベントCG入り間違いないシーン、俺にも脳内補完させてくれえ——!!!」

「お前そこまで必死だと本当に気持ち悪いぞ!? いいから落ち着けよ、オレ様に汚らしい鼻息浴びせんじゃねえ！」

「ねえスバル、カリオストロ、聞こえてる? そこに居るんでしょ? 入ってもいいかしら? 二人して何を騒いで——」

その時。ノツクの音に反応はないが、扉の向こうから聞こえたどたばた音に業を似やしたエミリアが顔を覗かせた。そのエミリアが部屋の中で見たのは『ベッドの端っこに追い詰められるカリオストロ』と『それを両手を広げて追い詰めようとするスバル』の姿だった。それは百人中百人が幼女を襲う変態の構図であると断じるには違いないく——、

「……」

「……」

「——」

「きゃー☆」

「……違っ」

「——ヒューマー——」

スバルはその日、二度目の気絶を体験する羽目になった。

### 第十三話 待ち人は知識の探求者なのか？

声が木霊する程のただっ広い空間に、見渡す限りに敷き詰められた大量の書棚。読み切るには数十年は掛かりそうな程の書物に囲まれるは、一人の少女。外界から切り取られたその空間は静謐の一言に尽き、聞こえてくる音といえは頁をめくる、乾いたか細い音だけ。

その場所の名前は禁書庫。

そしてその場所の主は「ベアトリス」と言った。

ベアトリスは契約に従い、今日も書庫を外敵から守り続けている。しかし幸か不幸か、彼女が契約した日以来書庫を襲う存在は一人として居ない。そんな彼女のする事と言えば、自分しか居ない書庫の中でひたすら本を読み耽り、時折紅茶や茶菓子を摂取するだけ。

本を読み、休憩し、そして眠る。その日々の繰り返し。

この日々は一体何回繰り返し返されだろうか。

千の昼も万の夜もとうに過ぎ、数える事も馬鹿らしい程に時は経っていた。

精霊にとって契約の遵守は絶対だ。契約の通り「待ち人が来るまで、書庫を守る」。異論はないし、ベアトリスはそれを今後も守り続けるつもりだ。しかし待ち人も襲撃者も現れずに、毎日を書庫で過ごし眠る日々は、如何に人の理から外れた精霊といえど少しずつ摩耗するような感覚を覚えてしまう。

だから彼女は本を読み耽った。自らの恐ろしい想像をかき消すために、読み切れぬ程の大量の本を読み続けた。

当然、終わらぬ時と違って書物は有限で、時折増える本も含め彼女は全ての本を読み切ってしまう。そうしたらもう一度と、読んだ本を全て再度読み直す。如何に無為な行為だとしても、兎に角何かをしないと恐ろしい想像が浮かんでしまうから。

「

ベアトリスは幾度となく読んだ手元の本を小さなテーブルの上に置くと、すっかりと冷えてしまった紅茶を口に運ぶ。季節も時間も分からない、静寂だけが支配するこの空間ではカップがソーサーに触れ

る音でさえも大きな音に聞こえた。

思う。

いきなり現れたあの二人組のことを。

何度となく扉渡りを見破る、失礼過ぎるコミュニケーションを取る、スバル。そして一癖も二癖もありそうな得体の知れない少女、カリオストロのことを。もしかしたら今度こそ、あの二人のどちらかが。いやあの二人が待ち人なのだろうか。

思う。

契約が果たされ、この屋敷から出られる日の事を。

しかし期待は膨らませた傍から尽く萎びてしまう事を何度も体験している。また期待して、勝手に裏切られるのか——気付けばテーブルの上で手慰みに書いていたメモをぐしゃぐしゃと羽ペンで書き乱していた。本の修正箇所も落書きのパックの絵も。一緒にくたにくしゃぐしゃ、ぐしゃぐしゃと。

期待するな。願うな。望むな。念じるな。見込むな。どうせ裏切られるんだ。どうせまだ待つのだ。どうせ、どうせ、どうせ、どうせ、どうせ、どうせ——！

「お母様。ベティーはあと、どれだけ」

自らの口から漏れた言葉で、ベアトリスは正気に戻る。メモ書きは縦横無尽に走り回る黒でいっぱいになり、落書きのパックでさえも今やうつすらとその形が見えるくらいになってしまった。こんな事ではいけない、弱音を吐くなど顔をぶるぶると横に振ったベアトリスは再度本を手に取ろうとして——

「カリオストロ様、こちらがベアトリス様のお部屋でござい」

「わあ……、これが禁書庫……☆ 素敵っ☆ ありがとう執事のスバル君☆」

二つの声が書庫を満たしていた静謐をかき消し、ベアトリスは手を止めざるを得なかった。現れたのは屋敷に転がり込んできた、件の二人。赤い貴族服をまとったカリオストロ。そして執事服で、何故か額にたんこぶをつけたスバルだった。

§ § §

「……お前、ほんつとうに憎たらしい奴なのよ。雇われてる立場の下郎が、ベティーの書物にずけずけと入って良いと思つていいのかしら」

「ベアトリス様、ベアトリス様。誤解であります。わたくしめはただ部屋の掃除をしようとしたら、たまたま！ そう、たまたま！ ベアk……ベアトリス様の部屋に出くわしてしまった訳であります！ 要するに俺無罪。そんなところに扉繋げてるベア子が悪い。おっけー？」

「お前さつき確信持つてベティーの部屋だつて言つてたかしら!? 敬意も途中から感じられないし、何がたまたまかしら、白々しい！」

「女の子がたまたまつて……卑猥な」

「お前の誘い水なのよ!? あーもう、鬱陶しいのよ! そいつごと一緒に出ていくかしら!」

スバルの非常に鬱陶しい煽りにベアトリスは一瞬で沸点を超え、片手を翳してスバル達目掛けて不可視の衝撃破を放つ。それは直撃すれば二人を問答無用で部屋の外へと弾き出す程の威力を持っており、一度マナドレインを受けたスバルが慌てて腕で顔を覆い衝撃に備える。が、その前にカリオストロが冷静に手を翳せば衝撃は何かに阻まれ立ち消えてしまった。

「む」

「スバルはいいとして、カリオストロは許して欲しいなっ☆ 私はベアトリスにどうしても用事があるのっ☆」

「お、おお。さっすがカリオストロだぜ。というか俺も許して頂きたいんだけどな?」

「スバルは許す許さない以前にまだ他に仕事があるでしょ？ ほらほら仕事しなきゃ☆ レムとラムに怒られちゃうよ☆」

「案内させるだけさせておいてポイかよお!? 横暴だぜカリオストロよおー!」

「エミリアの誤解、解いてあげようと思っただけどなく☆」

「それではわたくしめはここで。カリオストロ様、後程茶菓子を用意させていただきます。ごゆるりと」

「紅茶と甘いケーキでお願いね☆」

見事な手のひら返しを見せるスバル。腰を90度に曲げて恭しくお辞儀をした彼はその姿勢のまま音を立てること無く部屋から出ていき、その場には小さな錬金術師と、小さな精霊が取り残された。

「……はあ。お前も一緒に出ていくかしら」

「言つたよね？ カリオストロには用事があるって☆」

「お前にはあるかもしれないけど、ベティーにはないのよ。ロズワールの客人であつて、ベティーの客ではないし、応える義務なんてないかしら。強制的に屋敷の外に放り出されたい?」

「ふふっ、それがあるんだよね☆ その義務が☆」

「……へえ、そうなのかしら。なら参考までにどういう理由か聞かせて欲しいのよ」

足音を立ててカリオストロが悠然とベアトリスに近づいていく。睨みつけるベアトリスに対してカリオストロの顔は、あどけない無垢な笑顔。その体躯と相まって非常に可愛らしいものだった。しかし彼女から感じるマナといい、そして巡るマナの動きといい、それらは今まで見てきた人間にも精霊にも当てはまらないものだ。今のベアトリスには目の前の存在がとても、とても大きく見えていた。

気付けば、気圧されたかのようにベアトリスは彼女の顔がすぐ近くに迫るまで接近を許してしまい――

「――マナ、私達から勝手にドレインしてるでしょ?」

「……!」

「分かるよ? スバルはともかく私は天才だから。屋敷に居る人全員からすごく分かりづらいけど、ほんの少しずつマナを補充してる事

ぐらいね…☆ 知ってたかな書庫さん☆ 人の許可なくマナを徴収する、これつて〜ど・ろ・ぼ・う☆ だよね？」

「……」

ベアトリスはただ睨みつける事しか出来なかった。カリオストロの言うとおり、彼女は屋敷に住まう住人から少しづつ少しづつマナを徴収していた。気付かれない程小さく、か細く。毎日、毎日、雀の涙ほどのマナを自らの糧にしていたのだ。

数百年の時の中で気付くものはほとんど居ない。だがカリオストロはそれを一日で看破した。それは本人の才覚か、熟達の錬金術師としての力か。何であれ、ベアトリスはますます目の前の少女を警戒せざるを得なくなった。

「沈黙は肯定とみなすけど？」

「はあ……別に否定するつもりはないから。この屋敷に住むのに必要な、小さな小さな宿代、と考えて欲しいのよ。お前達が気付かないほどの量なら、何も咎める程ではないと思うけど？」

「量の問題じゃあないんだよベアトリスっ☆ 分かるでしょ？ 効果はともあれ、”人の許可なく、他人へ魔法を行使した”という事実。それが一番の問題☆ 人によつては喧嘩を売っていると取られてもおかしくないよね？」

「あのちっぽけなマナがそんなに大事だったのなら、ノシつけて返してあげるのよ」

「そんなので私が納得すると思ってる？ 違うよね、思っていないよね？ ——なあに、そんなすごい対価を要求なんてしないよベアトリス☆ 今ごねて私と敵対するより、その要求を呑んだ方が手っ取り早くて楽だと思うけどなあ☆」

カリオストロが顔を覗き込む。薄く透き通った紫色の眼で見詰められながら、あくまで可愛らしい口調は崩さず、だが内容は理路整然に事実だけを連ねて追い詰めるカリオストロに、ベアトリスは眉を顰めるしかなかった。

「聞くだけ、聞いてあげるのよ」

「ありがとうっ☆ 要求は簡単☆ 知識の提供、ただそれだけ☆ カ

リオストロがベアトリスに聞きたい内容を本を渡すなり、口頭なりで伝えて欲しいのっ☆ あ、勿論提供出来ない知識に関しては提供はしなくていい、ベアトリスが与えてもいいと思っただけの内容を教えてください☆

「……提供するのが今で、一度限りなら別にいいのかしら」

「ダメっ☆ 期日指定なし、回数なしの無制限☆」

「ふぎけるなかしら！ ベティーの時間と都合を何の権利があつて奪うのよー」

「あれあれ☆ これでも譲歩してるんだけどなあ……——言いふらしちゃおつかな、パツクに」

それはカリオストロが用意した特大の爆弾。ベアトリスはその眩きに内心、大いに動揺し、紅茶を飲みながら努めて冷静に振る舞った「ふ、ふん。にに、にーちやに告げ口しても、に、にーちやならきつと……た、多分笑って許してくれるのよ」

否、振る舞えてなかった。好機と見たカリオストロは、更にベアトリスを迫撃する。

「え〜でも、言い方次第だよね☆ 仲のいいベアトリスが、パツクの大事なエミリアに勝手に魔法を行使してますっ☆ ”無許可”で。もしかしたら”命に関わるかもしれない”魔法を。パツクもひよつとしたらベアトリスの見る目、変わっちゃうかも☆」

「ぐ、ぐぬ、ぐぬぬぬぬ……！」

「というかベアトリスってぶっちゃければ、いつも暇でしょ？ カリオストロにそれくらい時間割いてもいいと思うのっ☆」

「!? ……ひ、暇なわけがないのよ！ 何を言ってるのかしら、ベティーは書庫の管理で忙しいのよ！ そりゃ比較的緩やかな時間も続くけど、その間もベティーは気を緩めることなく——」

「そのメモに書かれたのはパツク？ かな〜？ 可愛いのにぐしやぐしやにしちゃうなんて、本当勿体ないなあ☆」

にこにここと机の上を覗き込むカリオストロ。パツクの落書きをしたメモは、顔を真っ赤にしたベアトリスの手で瞬く間に乱雑に丸められて魔法で消滅させられた。

「あ☆ あと毎日スバルにモーニングコールさせてあげるね☆ 暇そうなベアトリスの絶妙な暇潰しに成ること請け合い——」

「分かった！ 分かったかしら！ 仕方ないから教えてあげなくもないのよ！」

ダメ押しのスバル派遣を仄めかせれば、とうとうベアトリスが折れた。カリオストロは「交渉成立だね☆」と満足そうに笑い、ベアトリスはかなり不満そうにしながらもしぶしぶ頷く他なかった。

「その代わり！ 絶対にーちゃんに言うんじゃないのよ。あの魔女臭いあいつも、連れてくるんじゃないのよ！」

「勿論、カリオストロちゃんとかんと約束は守るから☆ 聞きたい情報を伝えてくれる限りはちゃんとかんと………ん？ 魔女臭い？」

「……ああ、お前は気付いてなかったのかしら。あいつ、ベティーに出会った後から更に魔女の残り香が強くなってるのよ。最悪の香りかしら。魔女に見初められたか、目の敵にされたか……何れにしろ、厄介者に違いな」

「ベアトリス。その話詳しく聞かせて」

もう一度。ぬるくなつた紅茶を口に運ぼうとしたベアトリスに、カリオストロが食い気味に問う。先ほどとは180度違う雰囲気になっていたベアトリスは、渋々とカップをテーブルに置いて、向き直る。

「詳しく話すと言っても、何をかしら」

「魔女のこと。そして残り香のこと」

「あいつの残り香が強くなった理由なんて、知ったこっちゃないかしら。魔女の事なら少しは説明は出来るけれども、お前の持つ常識的な知識とあまり変わらないのよ」

「カリオストロはその常識さえ今はない状態だから、一から教えてくれると嬉しいね☆」

「……どこの田舎から来たのかしら。全く」

椅子から下りたベアトリスが、確かな歩みである書棚に近付き、一つの本を取り出す。それは彼女の手からふわりと離れば、カリオストロめがけて飛んで行った。カリオストロは投げつけられた難なく受け止めると、その場で確かめ始める。中はどうやら絵本のようで、



おどろおどろしい挿絵が随所に見受けられた。

ぺらぺらと内容を一通り眺めたカリオストロは、ふむふむ、と頷いて本を閉じると、

「ベアトリス」

「何かしら」

「実はカリオストロ、この国の文字が読めないの☆ だから概要だけ教えて☆」

「——はあ!?!」

さしものベアトリスもその言葉に呆れるしかなかった。こいつ、本当にどこから来たんだと目を見開かせて驚き、続けてはあーっと大きいため息をつく。そして、カリオストロの本をテーブルの上に置かせて、ひとつひとつ説明し始めた。

嫉妬の魔女「サテラ」が銀髪で、

ハーフエルフだったという事を。

他の6人の魔女を自らの糧にし、

世界を敵に回した大罪の事を。

賢者と龍と、剣聖の力を持って、

滅することも出来なかった事を。

そして今も大瀑布という場所に封じられている事を。

カリオストロは時折湧いた疑問点はすぐさまベアトリスに聞き、ベアトリスは質問に都度、淀み無く答えた。

「ふんふんふんふん。なーるほどね☆ 確かに大きな爪痕を残したかもしれないけど、でももう封印されて400年ぐらい経ってるんでしょう? 流石にそこまで時間が経っていると、今の人がそこまで毛嫌いするとは考えられないなあ☆」

「それは魔女教徒による所が大きいかしら」

「魔女教徒?」

「そうなのよ。嫉妬の魔女を崇拜する、頭のおかしい集団。そいつらがちよくちよく、あの魔女が封印されてる間も人々に壊滅的な程の被害を及ぼしてるのよ。……理解頂けたかしら?」

「少しは☆」

魔女教徒は神出鬼没で、騎士団でも中々討伐出来ず、尚且つ起こす被害がいちいち甚大らしい。故に人々からあれ程までに恐れられているのだな、と理解したカリオストロは、続けて残り香について問う。「ベアトリスはスバルの匂いに気付いてるっていったよね？　いつから？」

「いつからも何も、この屋敷に来てからずっとなのよ。その口ぶりだとお前も気付いているようだけど」

「あそこまでの異臭を漂わせられると、流石にね……☆　じゃあ気付く人と気付かない人が居るのは何でかなって☆」

「さあ？　そんな違いなんてベティーにも分からないのよ。何かしらの理由はあるだろうけど、それを暴けるほどの確証も何も持ってない。知りたければお前が探ってみるといいのよ」

興味なさそうに机に肘鉄をつきながら答えるベアトリス。カリオストロはスバルと自分を送り込んだあの手が、その魔女の力によるものだと推測出来たが、思考の途中にある一つの疑問に辿り着き、続けて質問を重ねた。

「ねえねえ、貴方つてもしかして——魔女教徒、あるいは魔女に会った事ある？」

「——」  
「スバルの匂いを魔女の残り香と断定したってことは、以前に同じ匂いを嗅いだ事があるって事だもんね？」

彼女は真つ先にスバルの匂いを魔女の残り香と断定した。魔女教徒や魔女が実際にそのような香りを出すかは分からないが、それはつまり準ずる存在と出会って、その香りを嗅いだ経験があったという事実他にならない。その質問に対してベアトリスの目の色と雰囲気が変わった。

「……答えることは出来ないかしら」

「含みがある回答は、肯定したのと一緒だけど？」

「それでもなのよ。第一、お前との契約では答えることの出来ない内容は伝えないとなっているはずなのよ」

「知ってる。だからもう追求はしないよっ☆」

二人の間で視線が交錯する。ベアトリスの拒絶の色が目には浮かんでおり、カリオストロは何があったのかを聞きたくなかったが、今はそれが急を要する情報ではないと考えていたため、あっさり諦めた。「ふんっ。……む。何だか外でお前の事を探し回ってる臭い奴がいるのよ、お昼か何かじゃないのかしら。今日はたくさん質問したからもう満足の筈なのよ、さっさと出ていくかしら。しっしっ」

「えっつれないなあ☆ ……あ、最後に二点だけっ☆」

「ほんっとうにがめつい奴なのよ!?! いいからさっさと行くかしら!」

「すぐ済むから☆ まず一つ目が、この国の文字を学ぶための簡単な本とか貸して頂戴☆」

返事もせずにベアトリスがぱつと片手を振ると、ノータイムで書庫から2つの本が飛んでいく。飛んできたそれをカリオストロは余裕しやくしやくで受け取り、最後の質問も投げかけた。

「で、これが最後の質問です☆ ベアトリスって、異世界とか信じてるっ?」

「……異世界? お前、一体何を言ってるのかしら。そんなものある訳がないのよ」

「——あはは、そうだよねっ☆ ありがとベアトリス☆ それじゃカリオストロは昼食に行くね? また分からない事があつたら聞きにくるから☆」

カリオストロはその質問に満足そうにすると、受け取った本を持って、可愛らしく片手を振って禁書庫を退出した。

「はあ。全く。何なのかしら、あいつ」

ベアトリスは嵐のように来て嵐のように去っていった彼女に辟易し、疲れきった様子で机に突っ伏した。そしてあんな契約をしまった事を後悔した。ああ午後、また来るであろう彼女を考えないといけないなんて!

そう悪態をつきながらも、ベアトリスは部屋の隅に積まれている椅子をもう一組、魔法で浮遊させて持つてきていた。

これは椅子が無いと文句を言われるだろうから、面倒な事を避けるためだからだ。そう理由付けをするベアトリスは、久々に訪れるであろう騒がしい日に、若干の高揚を感じていることを否定出来なかった。

## 第十四話 牙を剥く世界

屋敷に来てから三日が経った。

二人の屋敷生活は特に問題なく続いていた。

スバルは屋敷内の炊事洗濯掃除を任されて、毎日生傷をこさえながらめげずに働き続けている。彼の一日は朝早くに起き、エミリアをらじお体操という謎の運動に付き合わせ、その後屋敷の雑務に勤しむ。

職場の先輩であるラムは度々スバルを煽り、罵倒し、レムは冷たい目でじっと見続けながら、二人がかりで手厚く教育している。スバル曰く、レムの視線も初日に比べれば幾分ぬるくはなったとの事だ。

夜になれば労働から開放され、その度に足繁くエミリアの元へ行き、自分をアピールしている。ただし、エミリアの天然っぷりも相まってほとんど空回りで終わっているようだ。

カリオストロは食客として優雅な毎日を送りながらも、情報収集と勉強を行っている。暇な時間はこの国の言語を勉強し、毎日ベアトリスの元へと通い、様々な質問を投げかける。ベアトリスはそんなカリオストロを、仕方なく迎えて、仕方なく答えてあげているようだ。

また、時折エミリアがとことことカリオストロの元へ遊びに来ては二人で話に勤しみ、のんびりと時間を過ごしている。

そして夜にはスバルと互いに得た情報の擦り合わせをする。スバルはその度にカリオストロの食客という待遇を羨ましがり、更にエミリアが隙あればカリオストロの元へと足繁く通って話をしたがる様子を見て、ぎぎぎと口惜しそうにする姿がよく見られたとか。

「——つ——訳で3日目の定期報告を終わります！」

「わー☆ お疲れ様スバル☆」

三日目の夜も暮れ。スバル達はのスバル部屋でいつものように集まっていた。カリオストロはベッドの上、スバルは椅子の上で今日一日あった事、手に入れた情報をお互いに共有しあう。それが終わると、労働の楽しさをとくと味わっているスバルは大きく伸びをして、眠そうに瞼をこすった。

「いやー、ネットもケータイもなしの生活がこんなに健康的になるとは思ってたなかった。この俺がこんな日の浅い時間に眠くなるなんて……まだ慣れないけど、労働もたまには悪くないな！」

「ネット？ けーたい？ よく分からないけど凄い真人間っぽい台詞☆ 全く似合わないっ☆」

「そう褒めるなよ、今の俺はまさに真人間。心が綺麗なニユースバルにはその程度の煽り、効かないぜロリ美少女先生よお！ ——あ、いてっ、いてっご褒美です、いでっ!？」

「本当っ☆ 日に日にうざくなっくてくねスバルっつ☆」

ポーズをとって調子に乗ったスバルに、カリオストロのおしおきのローキックが襲った。

「ま、それでも頑張ってるのは認めてあげる☆ だから、ご褒美のエミリアからのプレゼント☆ どうぞ☆」

「これマジ!? つしゃああああ! 尽きた活力が瞬時に回復するぞこれ……は………何これ？」

カリオストロから手渡された可愛らしく小さな包み。スバルは意気揚々とその包の中身を手に載せ——困惑した。

それは薄く四角く、そして今にも崩れそうな真っ黒な物質。何であろうか、もしかやこれは薬品の一種？ 漢方なのだろうか？ スバルが正体を暴けずにいると、カリオストロが正解を伝えた。

「エミリアのクツキー☆」

「クツキー!? これが!？」

自らの叫びで漆黒の物体はぼろぼろと崩れ、スバルは慌てて手から溢れぬようにせざるを得なかった。そう、どこからどう見ても暗黒物質にしか見えないこの物体、実はクツキーなのである。

ことの発端は昨日の夜。いつものようにカリオストロの元へと通ったエミリアが話をしていると、エミリアの特技の話になった。彼女によると、特技は歌と、料理と、速読らしい。それを聞いたカリオストロは社交辞令の意味合いで「へえ、凄いね☆ いつかエミリアの料理食べてみたいな☆」と言った所、

「翌日に直ぐ様作ってくれたぜ、クツキーをな……!」

「エミリアたん、そんなテンプレヒロインみたいな特技持ってやがったのか……!」

思わずつばを飲み込んだスバル。掌の上で乗せると崩壊してしまふ黒い物体、それは酷い悪臭がするわけではないが強烈なプレッシャーを放っており、口に運ぶ事を強く躊躇わせる。カリオストロは逡巡するスバルをじーつと注視している。

「……食べないの?」

「……いや、ほら。冷静に考えるとこれは俺宛っつーか、カリオストロ宛だろ? 俺が勝手に食べるのは不義になるっていうか……な?」

「大丈夫、エミリアには『スバルと一緒に食べさせて貰う』って断っておいたから☆」

「その気遣い嬉しいけど絶妙に嬉しくねえ……! いやいやいや、カリオストロ先生。ここはやはり先生が先に……」

「遠慮しないでよ☆ ご褒美って言ったでしょ?」

「レディファーストの精神ですね……」

「なんちやつてフェミニストぶらなくていいから☆ オラツ、いい加減食っちゃまえっ☆」

「もごっ!」

カリオストロによって強制的に口に放り込まれた粉状漆黒物体。スバルは否応なくその物質を舌で味わう羽目になり――

「……あ、あれ。想像していたよりも酷い訳じゃあねえな」

「お?」

「ほんのり甘いし、少しだけチョコっぽい感じがする……っそうか、チョコレートクッキーだったのか……! 匂いも味も炭っぽいし何か口の中じやりじやりするし、ぱさぱさもするけど一応人が食っても平気そうだぞカリオストロ!」

「ええ……☆」

どうやら致命的な程もでないらしい。けれども炭っぽくて食べづらい時点でアウトなのではないだろうかとカリオストロは困惑を露にした。

食べたスバルもしきりに口の中を動かしている事から、酷くぱさつ

くものようだ、ひとしきり味わったスバルは急ぎ水差しから水を注ぎ、勢いよく喉を潤すと、両手を強く合わせた。

「つつー訳で俺はごちそうさま！ エミリアさんの味最高だったぜと伝えてくれ！」

「若干変態っぽい発言なのが気持ち悪いんだけど☆ の、残りはまだあるから全部食べていいよ〜？」

「いやいやいや。俺今日は全然頑張れてなかったからこれ以上良いし。エミリアさんはきつとカリオストロにも食べて欲しいと思うぜ？ 間違いない。あと明日になったら味の感想聞かれる事になるだろうから——まずは一口。どうぞ、カリオストロ先生」

「ぐっ………」

ウザ顔で純然たる事実を指摘するスバルが、カリオストロの手に恭しくクツキー（黒）を置いた。音もなく掌の上で崩れた黒いパウダーは、どう見てもカリオストロの知るクツキーとは違うモノだった。

「おやおや、もしや天才錬金術師のカリオストロ様が友人からの、それもエミリアさんからのプレゼントが食べれないなんて事は、ないですよね〜？」

「……」

尚の事煽ってくるスバルに絶対あとでめる。と決意を固めると、カリオストロも口内にクツキーを運んだ。直後、感じたのは苦味。まさしく炭と言っても代わりない味が広がり、噛み締めるには脆すぎる、砂のような感覚を返す。砂が口内に張り付く感覚はカリオストロの美しい眉目を歪ませるには十分だった。ただ、スバルの言うとおり、咀嚼するたび仄かな甘味とチョコの風味が広がるのを感じることは出来た。

堪能したカリオストロはスバルから水の入ったコップを奪うと勢い良く飲み干し、大きく息を吐いて告げる。

「これは、断じて、クツキーじゃ、ない。炭にチョコと砂糖ぶっつけたモノだ！」

「うわあ。正直に言った、正直に言いましたよこの幼女」

エミリアが聞けばショックを受ける評価だったが、料理にもある程



度精通したカリオストロにとっては許容できるものではなかった。あの少女は料理を特技だと言った。だがその特技がこのザマだとは！ 最初はなあなめに済ませるつもりだったが、実際に食べるとそんな気は天の彼方に失せた。

何が料理が特技だ。これを料理と認めることは出来ない。これは本人の為を思い指摘してやるしかないだろうと怒りを胸にするカリオストロは、次にスバルを睨みつけ、スバルはその迫力に身体を引いた。

「そう言えばお前、明日は出かけるって言ってたな」

「お、おお。何か買い物行くらしいぜ、村の方まで買い出ししに。レムと」

「それ、キャンセルしろ」

「ひよ!? ちょ、何でだよ!」

スバルは驚き、その理由を尋ねる。するとカリオストロは今まで女の子座りだった姿勢をわざわざ変えて、ベッドの上で胡座をかいてその理由を告げた。

「言つとくが私怨で行くなって言ってるんじゃないぞ。お前はまた忘れてるようだが、オレ様達はまだグレーゾーン。絶賛怪しまれ中だ。もしかしたら事故を装って殺される可能性もあるんだぞ? 屋敷の中ならオレ様も異変があればすぐ察知出来る。だがな、あんまりにも遠く離されて気付けるほど、オレ様は万能じゃねえ」

「いやいやいや、殺されるって……流石にねえよカリオストロ。あの二人と三日過ごして分かったけど、あいつらはそんな事はしねえって」

「たった三日で人となり分かる程、お前は洞察力があるのか?」

「あるとは言えねえけど、それでも分かるものはあんだよ」

「……ちっ、どこから来るんだその自信は」

スバルの発言にカリオストロは面倒くさそうに、ぼりぼりと頭を掻いて吐き捨てるしかなかった。いつも思う。こいつのお人好しは本当にグランそっくりだと。

だがグランと違い、スバルには自衛できる実力も何もないというの

が頭が痛い。弱っちいくせにお人好しで、すぐに自分の身を挺する。自己犠牲は美德かも知れないが、悪徳でもある。弱者は強者に巻かれる事が幸せであるというのも事実であるのに。

「はあ……ならせめてオレ様を連れていけ、そしたら方が一が有っても対処出来るだろうからな」

「だからその方が一なんてねえって！ レムも見る目は厳しいけど、今日だって普通に笑ってくれたし。ラムもいつも口は悪いけど、何だかんだで面倒見てくれるしな。それに、カリオストロも言ってただろ？ 殺される確率は限りなく低いつて！」

「……」

確かにカリオストロ自身、殺される可能性はかなり低いと見ている。恩人として招いた自分達を殺すのは愚策。まだ何かと理由をつけて追い出す方が可能性が高い。しかし恩人を放逐したという事実はロズワールにとって、ひいては王選候補エミリアとしての大幅なイメージダウンに繋がる。自分達を害するのはメリットよりデメリットの方が遥かに大きいのだ。

「な。ここは俺を信じてくれよカリオストロ。あいつらはそんな事しない、それは絶対間違いないんだ」

「お前が自衛出来るんだったらオレ様だってこんな提案しねーよー！ つたく、しょうがねーな。ならコレを持っていけ」

カリオストロは腰の小さなポケットから小さな薬瓶を取り出して手渡した。薬瓶には透き通った緑色の液体が並々と満たされている。

「メロンソーダ、じゃねえよな」

「キュアポーション。回復薬だ。お前の腹からモツが出るくらいの怪我ならすぐに回復することは出来る」

「具体的な例をありがとんでもぞつとするからやめろ!？」

自分のお腹を抱えて顔を青くするスバルに対して、カリオストロは腕を組みながら朗々と語り始めた。

「いいかスバル。アドバイスだ。お前はウザくて気持ち悪いってのは自分で分かってるだろうが、更に自分が弱っちいということを自覚しろ。力がない奴は大抵根拠のない自信に囚われ身勝手な事を言うが、

本来なら弱者は吠える権利すらないんだ。今回はお前がどうしてもと言うから仕方なく、本つ当に仕方なく折れてはやるが、万が一が起るってのは普通にありえるんだ。それに備えない奴は総じて馬鹿だ。準備を怠って死ぬ奴はオレ様はゴマンと見てきたぞ？ だからそんな弱者のお前にオレ様が色々と知恵を貸してやる。オレ様がついていくならただオレ様の後ろで震えてろ、で済むんだがな。耳をかつぽじって聞けよスバル。1つ、臆病であれ。戦おうとするな。まづは逃げろ。お前に立ち塞がる相手は全員お前より強いと考えろ。戦うのはどうしても逃げられなくなった時だ。周りがなんと自分と生きてなきや意味がねえからな。そして2つ。どんな時でも自分優先だ。他の弱者に目移りするな。助けるのは自分の命を確実に確保してからにしろ。3つ、常に最悪の更の上に上を想定しろ。現実はお前の想像を遥かに飛び越えて襲いかかってくる。想定が足りなかった時、それはお前の死に繋がると覚えておけ。忘れるなよ、お前とオレ様はこの世界では一蓮托生なんだぞ？ あああとそのポーシヨンだが患部にふりかけても飲んでも良いが、味は最悪だ。飲んだ方が効きは良いだろうけどな、それに——」

「長っ!? 初めてののお使いを心配する母親かよ!？」

「んだその態度はテメー！ オレ様のありがたい助言をさらつと流すんじゃないええよ！」

「ありがたいけど過保護過ぎんだよ!？ いてっ！ いててっ!？」

「ねえスバル、カリオストロは……あ。また二人で楽しそうなことしてる」

そこへいつものようにカリオストロを探しに来たエミリアが現れ、二人の喧嘩は強制的に終着を迎える。その後はカリオストロの怒りの矛先はダークマタークツキーを作成したエミリアへと向かい、怒りをぶつけられ涙目になったエミリアを必死に宥めるスバルの姿があったとか。

そして屋敷での生活4日目。昼頃に買出しに出かけていったスバルとレムだが、スバルの言うとおりカリオストロの杞憂で終わったらしい。二人は夕方には屋敷へと帰宅していた。

「ただいま帰りました」

「よ、帰ったぜ我が家に！」

「お帰り☆」

スバルは樽を両手に抱え、レムは1つ紙袋を抱えて、偶然玄関の前にいたカリオストロへと言葉を交わした。スバルはそんなカリオストロを見て苦笑しながらサムズアップを見せた。

「随分大荷物だね。大変だったでしょ？」

「いえ。スバル君が手伝ってくれたのですごく助かりました」

「おおよ。やっぱり大荷物に関しては男の仕事だかな！ これくらいは余裕余裕……って言いたいけど、実は今結構腕と腰に来てる……足がプルプル震えてやがるぜ」

「スバル君は男の子なのに不甲斐ないですね」

「言ってくれるな、握力はあつても持久力とかはないんだよ……」

イテテ、と樽を置いて両手を振るスバル。よく見るとスバルは行きとは違い全身が汚れており、その手には行く時にはなかった噛み傷がこさえられてた。

「ただ買い物に行くだけのなのに、何でそんな薄汚れるのかなあ……☆」

「ふっ、これは名誉の負傷って奴だ。背中傷はないから安心しろ、カリオストロ」

「そうですね名誉ですね。道中に道端で転び、村では子供達にたかられて弄られて、挙句の果てに子犬に噛まれる。どれをとつても名誉と言えるでしょう」

「ちよ、レムさんレムさん真実言うのやめて！ 俺の名誉の為にもやめてあげてよお！」

その後、レムはスバルへと休むように伝えると軽々と樽と荷物を持って行ってしまった。

「……美少女が俺より力持ちで有能って何かプライド傷つくぜ」

「誇るようなプライドなんてそもそもないでしょ？ それよりほら、手を出して☆」

「え？」

「手、怪我してるでしょ？ 治してあげるって言ってるの☆」

「……あ、ああハイ。分かりました」

スバルが大人しく犬に噛まれた手を差出した。その手は絆創膏や生傷が散見され、スバルの努力のあとが垣間見えた。カリオストロはそれを微笑ましく思いつつ、小さくきめ細やかな手でその手を包み込む。すると手から淡い光が零れ始めた。光はスバルの傷口を見る見るうちに癒していき、時間にして十秒も経たずに手の傷が完全になくなった。

「はい、おしまい☆ 全く、本当傷が耐えない男だねスバルったら……スバル？ ……あれあれあれ、顔赤くしちゃってどうしたのかなっ☆ カリオストロの手の感触にどきっとしちゃった？」

癒し終えたカリオストロがスバルの顔を見ると、そのスバルは耳まで顔を赤くしており、それを見て悪戯心が沸いたカリオストロがにやにやとスバルを煽ると、スバルは慌てふためきながら弁明しだした。

「ばっ、ばっか、ちっげーよ！ こ、これは回復の副作用って言うか!?俺がカリオストロにどきどきするなんてそんな事方が一、いや億が一にも——」

「あゝ？」

「——ありまあす！ すっごいどきどきしましたあ！ 女の子の手ですっごい柔らかいなあって思ってたどきどきしましたあ!!」

ひと睨みで掌を返したスバルに、渋々とカリオストロも追求はやめた。

「はあ……まあ何であれお前は言われた通り休め。傷は癒せても疲労まではオレ様も癒せねえからな」

「ああそうさせてもらうぜ。しかし元の世界じゃ動物達のハーレムを築いた、このナツキスバルが何故子犬にすら噛まれるのか……!」

「動物もスバルのウザさを見極めたんだろう。それか、お前の匂いの

せいかもしれないねえな。動物ってのは人間より匂いに敏感だし、匂いが分かってもおかしくはない」

「……てことは俺、この先動物と触れ合いできる可能性皆無!？」

「ま。噛まれただけで済んだのを幸運と思うんだな」

ノー！ と仰々しく頭を抱えて悲しみをアピールするスバルに対し、他三人は朗らかに笑うのだった。

「——って事があつただけど、スバルって本当馬鹿だよね☆」

「暇人……いちいちベティーにそんな事伝えるためにお前はここに来たのかしら」

夜。スバルの疲れを考慮して今日の情報交換はなしになり、カリオストロは質問と暇潰しを兼ねて禁書庫へと訪れていた。勝手知ったる態度で椅子に座り、今日あつた出来事をベアトリスに駄弁る。これもまた今のカリオストロの日課になりつつあつた。

「いいや、ちゃんと質問もあつて来たよ？ この話はただの、ベアトリスへのお・み・や・げ☆」

「心底いらぬおみやげに感謝のかの字も出て来ないのよ。ベティーを慮る気持ちがひとつでもあるなら、質問の頻度を減らして欲しいかしら」

「つれないなあ☆」

呆れと疲れ顔で出迎えたベアトリスはしつしつと追い出すようなジェスチャーをするが、カリオストロはわざとらしくぶくーつと頬を膨らませるだけだった。

「で、聞きたいことってのは今度は何なのよ。王国の成り立ちから食生活、貨幣の種類と一般常識に始まり、現存する種族の事まで聞いて……なにかしら、次は道徳でも教えたらいいのかしら？」

「そうっふんけんしないでっば☆ 契約でしょ？ 次は魔物の事について聞きたいな☆」

「まもの？ ……魔獣の事でいいかしら」

カリオストロの世界で魔物と呼んだ存在は、こちらでは魔獣と呼ば

れているらしい。ベアトリスはまた一つ本を持ってくると、カリオストロが見えるようにテーブルに開いて置いた。

「魔獣は……言ってしまうえば人類の外敵なのよ。人類に仇為すため魔獣が生み出したと言い伝えられていて、マナを主な食事としている存在かしら。それこそ400年前に災厄がある前から存在する厄介者たちで、彼らは普通の動物と違って人間相手に非友好的。今に至るまで魔獣相手の被害はなくならず。当然、魔獣相手の研究も行われて来たかしら。けれど実際の所——」

「実際の所?」

「よく分かってないのよ。いつから現れたのか。何のために存在するのか。どうやって増えるのか。全部謎」

ぱらり。目の前の本をめくると様々な魔獣の挿絵が見える。犬、蛇、蚯蚓。どれもこれもが凶悪そうで、決して尻尾を振って懐いてくれるようには思えなかった。

「魔獣の分布は?」

「正確にわかっている所は少ないのよ。気候に合わせた魔獣が存在しているのは分かっているけど……そうね、例えば屋敷の麓にあるアラム村。あの付近も魔獣の群生地なのよ」

「あの囲まれてる森すべてが? ってことは結構危ないところに立地してるんだね……☆」

「定期的にロズワールが処理をしているようだけど、気付いたら増えるからイタチごっこなのよ。当然ながら村には入れないように結界が張られているけれども、正直危ないことには変わらないかしら」

「結界ね。ふーん、明日その結界を見せてもらおうかな。村を包むくらい結界なら興味あるし☆ ありがとベアトリス☆ それじゃ夜も遅いしお邪魔し過ぎもあれだから、カリオストロはこれでお暇するね☆」

「全くなのよ、ベティーの都合を考えて訪問して欲しいのよ」

「それは追々考えさせて貰おうかな☆ あ。そうそう昨日でイ文字はそれなりに分かったから、ちよつと発展的な本が欲しいな☆」

「……………」

「もう☆ 無視しないでよベアトリス——……!?!」

カリオストロが異変を感じた瞬間、世界が一瞬で黒と灰色で塗りつぶされた。

(な……どうしてだ……!?! スバルが今、殺されたってのか!?!)

足掻くこともできずに、無常にも目の前で巻き戻っていく。ベアトリスと過ごした禁書庫での日常も、エミリアとの初々しい会話も。全て、あの甘い腐臭と共に無に帰っていく。

嫌悪感と吐き気が全身を蹂躪する感覚と共に、抵抗すら出来ず無くなって行く日々の証を見て、カリオストロは悔しがることしか出来ない。

どうしてだ、何故だ。何で、こんな事をする。嫌悪感だけでなく、疑問と怒りもないまぜになり、カリオストロは混乱していく。自らの精神を置き去りにして、巻き戻される自分の体が相反した動きをとり続ける。それがたまらなく不快で、また、それがたまらなく悲しかった。やがて、逆行する世界は徐々に速度を落とす——

「エミリア様、お客人。どうやらもう一人のお客人が目覚めたようだあーよ」

——屋敷での一日目が、再び始まる。



## 第十五話 慟哭と覚悟

「！ カリオストロ！」

カリオストロがふらついたのを見て、慌ててエミリアが傍に駆け寄った。ふらついたカリオストロは“周囲から見れば”一瞬で顔を真っ青にし、今にも倒れそうな表情に変わった。その様子にはさしものロズワールも目を見開いた。

「う、ううん、大丈夫☆ ちよつと立ちくらみが……☆」

「立ちくらみって……そんな顔真っ青にして」

「……こおーれは申し訳ない。長旅の直後だというのに無理強いをさせてしまったようだね。レム、ラム。すぐにお客人を然るべき場所へ……」

「これくらい平気平気☆ それよりも、スバルのところに行かせて？」

「でもカリオストロ……」

「お願い」

心配するエミリアにふらつくカリオストロが嘆願する。二の句を告げさせない真剣な表情であった。ロズワールもそれには折れざるを得なかった。

「案内を」

「二はい、ロズワール様。お客様どうぞこちらへ」

先導してレムとラムが案内し始める。傍目に見て少し危なかしい動きで後へついていこうとすれば、何者かによって労わるように優しく背中を支えられた。カリオストロが感触に驚き振り返れば、案の定それはエミリアによるものだった。

「もお、エミリアだったら☆ カリオストロは大丈夫だって」

「こんな説得力のない大丈夫は初めて見たわ。スバルが心配なのは分かるけど、私は今のカリオストロの事も心配。だからせめて、支えることぐらいさせて」

「……」

心からの言葉なのがよく分かった。その美しい眉目を下げて、小さくも、さりとして確かな声でそう告げるエミリアに、カリオストロも何

も言い返すことは出来ず、言われるがままに背中を支えて貰いながら移動した。

無言で通路を進む一行は程なくしてスバルが居る部屋に辿り着く。レムとラムが扉を開ければ丁度スバルが目を覚ましたようだ。半身を起こして不思議そうに辺りを見回している。そしてスバルはすぐに四人に気付कि顔を綻ばせた。

「おっはようエミリアさんにカリオストロ！　そしてラムにレム！

それで、えー、早速聞きたいんだが……俺なんで部屋移ってんの？」

「え？　部屋を移る？」

「？」「？」

4人のうち3人がスバルの台詞に疑問を浮かべ、揃って首を右に傾げた。残りの1人はそんなスバルの様子を少し悲しそうな、どこか悔しそうな目で見ていた。

「いやいやいや、俺ってほら、いつも使用人の部屋に居たじゃん？　何

か朝起きたら超綺麗な寝室に居たから、何か俺の待遇がいきなり上がったかと……んん!?　あれ!?　何か寝巻きまで変わってる!?　実は昨日寝てる間に病気で倒れたとか!？」

「使用人の……部屋？　スバルはここに来たのは初めて……よね？」

うーん、スバルは病気ではなくて怪我では倒れてたけど……それにしても、スバルってばいつの間にレムとラムの名前を知ったの？　知り合い？」

「いいえエミリア様、お客様とは初めて出会います。姉様なら出会った覚えはあるかもしれませんが」

「いいえエミリア様、お客様とは初めて出会います。レムなら出会った覚えはあるかもしれませんが」

「怪我ア!?　オイオイ俺って闇討ちされたのか!?　っていうか幾らなんでも冗談きついでレム、ラム！　エミリアたんも！　そう言うネタ振りには元引きこもりの俺には大ダメージだから！　今すっごい傷ついてるから！」

エミリア達の素振りを茶化されたのだと判断したスバルだが、肝心の三人は何を持って冗談としているのかが理解できておらず、首を傾

げるばかり。撤回する気配もなく、スバルの表情が段々と不安げなものへと変わっていく。

「本当に大丈夫スバル？ やっぱり盗品蔵での怪我の影響で……」

「姉様姉様。どうやらお客様は混乱しているようですね」

「レムレム。どうやらお客様は混乱しているようね」

「え、いや……エミリアたん。ラム、レム。本当に冗談だよな……？」

「は、はは、みんなして俺を騙してるんだろ？」

「——スバル☆」

今まで口を閉ざしていたカリオストロがスバルへと声を掛ける。いつもと変わらぬ、鈴の音のような清らかなソプラノボイスに、狼狽していたスバルはさすがのような眼差しを向けてきた。顔はいつもの小悪魔スマイルを浮かべていたが、なぜだかそれが悲しみを湛えているようにしスバルは感じた。

「カリオストロ……。な、なあこれは何かのドツキリ——」

「ねえエミリア、ラム、レム☆ ちよつと席を外して貰っていい？」

スバルはどうやらあの件で混乱してるみたい☆ だから二人でちよつと話し合わせてほしいなって☆」

「「畏まりましたお客様」」

「え、ええ。分かったわ。何かあったらすぐに言っつてねカリオストロ」

「あ……」

スバルの台詞を食い気味に遮って提案すれば、エミリアは心配そうに、そしてレムとラムは恭しくも他人行儀な振る舞いで一礼して部屋を出て行き……あつという間にスバルとカリオストロだけが残された。

「……」

「……」

室内は痛々しいまでの沈黙に包まれた。スバルは沸いた激情を消化しきれぬ、何かをこらえる様な顔で三人が出て行った扉を、じっと見詰め続けていた。

その顔はこれから残酷な真実を突きつけようとしたカリオストロを躊躇わせるには十分だった。だが告げなければならぬ。覚悟を

決めて口を開こうとする——しかし、先に沈黙を切り裂いたのはスバルだった。

「……ようやく、ようやく二人とも打ち解けられたんだよ」

「……」

「野菜の皮剥きとかさ、最初は手を何度も傷だらけにして、見るも無残な残骸を作り上げちゃったんだ。ラムはその度に俺の事を罵倒して、得意げに自分の皮むきを見せ付けて」

ぽつり、ぽつり。零れる思い出。誰に言うでもなく呟かれるそれは、事実を知るカリオストロにとってあまりにも重い告白だった。

「ラムはそんなラムを褒め称えて、俺には何もフォローなし。最初は流石に酷いと思ったぜ？ でもそのうちラムもラムも。段々仕方ないなって感じで教えてくれるんだよ」

「……」

「庭や屋敷内の掃除も。洗濯だってそうだ。手際悪くて失敗ばかりする俺を何度も叱りながら、あいつらはそれでも決して手を抜いて教えたりしなかった。ラムは気付いたら俺の事を勝手にバルスって呼んでさ、毎回毎回心を抉る罵倒するけど……何か友達感覚でさ。ラムは最初は睨んでばかりだけど、そのうち俺の事をスバル君って呼んでくれるんだよ。段々と気安く、親しく。知ってるか？ レムって笑うとすっぱーかわいいんだぜ？ エミリアたん一筋の俺がぐらつくくらしいのスマイル！ 昨日一緒に出かけた時に見ただけどやばかつたぜ。本当、毎日死ぬほど忙しいけど、それこそ疲れが吹き飛ぶ笑顔って言うか？」

「……スバル☆」

「ベアトリスとは正直まだまだ壁があるな。あいついつつも俺に会うたびに鼻つまんでしっしっして、酷くねえか!? だからお返しに毎回おやつとか紅茶渡すたんびに居座ってやった。あんま弄りすぎると部屋から追い出されるけど、何だかんだであいつって優しいよな。俺の馬鹿な話でも、いつも蔑ろにしないでちゃんと話付き合ってくれるし。まあベア子とは追々仲良くなっていくしかねえな」

「スバル」

「それにエミリアたんもそうだ。事あるごとにカリオストロ、カリオストロって言うのは……正直面白くねえ。だから俺だって毎日暇なときに話しかけてき、つい最近になってパックと交えて話したら、すつごく笑ってくれた。あと……あーこれは言うつもりは無かったんだけどな、いいや。言うぜ！ 自慢したいし！ 実は俺。昨日の夜に念願のエミリアたんとのデート、取り付けた！ 今日アーラム村と一緒に出かけるって約束をさ。エミリアたんは乗り気じゃなかったけど、ゴリ押ししたらいつも頑張ってるからってさ。昨日の夜はマジで嬉しくて寝れなくて——」

「スバルー」

あまりにも幸せで、あまりにも微笑ましく——そして、あまりにも聞くに堪えない独白に、カリオストロは気付けば肩を掴んで強く揺さぶり、それを中断させていた。

スバルの脳は現状を把握しつつあった。だが彼の心は現状を理解出来るほど強くはなかった。故に彼は現実から抗うために、自分の屋敷での足跡を守るために、心に壁を立てたのだ。

「——夢、なんだよな……？」

それは突けば脆く崩れてしまう、儂い防壁だった。

吐息がかかる程の距離においてスバルの表情は歪で、今にも壊れてしまいそうな笑み。気が付けばスバルはカリオストロの手を震える手で掴み返していた。

「今見てるのは、悪い夢なんだよな？ は、はは。なあカリオストロ。俺の頬、引っ張ってくれよ。夢の、夢のカリオストロに頼むのはおかしいけど、そっちの方が効きそうだしさ。早くこんな悪い夢目覚めないとさ……なあ、頼むよ。夢なら目覚めさせてくれ——なあ！」

「夢じゃない」

カリオストロは即答していた。

「お前は何者かに殺され、世界はオレ様達が屋敷に来た日に戻った。これは現実だ」

現実には薄つぺらな防壁を容易く貫き、が守りたがったものを完膚なきまでに破壊した。

守るものを失ったスバルは強い無力感に囚われ、体を支える力すら失つてしまう。しかしベッドに自らの身体が投げ出されそうになる前に、カリオストロが優しく抱きとめていた。自身の体より大きい筈のスバルの体は、今はとても小さく感じた。ともすればこのまま壊れてしまうのではと思うほど頼りなかった。

カリオストロは無意識にその背中に手を回し、壊れないように優しく包み込んだ。吐き出される苦しみも、嗚咽も。小さな錬金術師が余すことなく受け止め、部屋の外に漏れることはなかった。

§ § §

疲れ切ったスバルを寝かせた後。昼食を挟み、別の客室でカリオストロがひとまず休んでいると、エミリアが顔を覗かせ、椅子に座って二人でお茶をすることになった。

「……大丈夫?」

「それはどつちが?」

「当然カリオストロとスバル、両方よ」

二人が同時にカップを机に置く音が響くと、エミリアがカリオストロへと問うた。

「ん……まあ大丈夫だ。オレ様はもう休んだから平気だし、スバルもあんな怪我を受けて少し混乱しちまってただけだしな」

お茶を啜りながら何気なく告げるとエミリアがきよんとしていた。その様子はカリオストロの表情を歪ませるのに十分だった。「なんだよ」

「ご、ごめんなさいちょっと驚いたの。今まで私に男口調で話しかけてた事なかったでしょ? でも自然にその口調で話しかけられたから……あ、でもでも! そつちのほうが個人的には私も嬉しいかなっ

て。……カリオストロ？」

”……だから私も、出来るならカリオストロに男言葉で話しかけて欲しいの”

「……ああ。何でだろうな。つい素が出ちまった」

ふと、ありえた筈の未来を思い出したカリオストロは、湧き上がる感情を落ち着かせるために、再度紅茶を口に運んだ。何気ない会話から浮き彫りになる記憶との齟齬が、この世界が巻き戻ったのだという事実をまざまざと見せ付けてくる。

それは心に小さなトゲが突き刺さった気分だった。口内に広がる苦味では痛みを打ち消すことは到底出来ない。どうしても気分転換がしたくて、カリオストロは会話をしながら、今回の出来事を反芻し始めていた。

新たに発生した謎は2つ。

ループ地点の変更。

そしてスバルの死因だ。

ループ地点の変更については、理由云々は置いて正直助かったと考えるべきだろうか。スバルの死によって再度盗品蔵の事件発生前に戻されていたとすれば、もつと自分達のダメージは大きかったであろう。

しかし何故ループ地点が変更されたのか？ 推測しか出来ないが、あの1件が正しく解決できた事によって、首謀者の狙い通りに進んでいるから変更されたというのが一番理由として通る。ただ理由としては通るが、非常に癪である。首謀者は神になったつもりなのだろうか。自分達を実験動物よろしく監視して弄んでいるとしか思えない。

次に、スバルの死因。様子を見るに、彼は死んだ事に気付いていないようだった。死亡当時に漂うはずのあの甘い臭いを感じる事が出来なかったのは、自分が隔絶された禁書庫に居たのが要因だろうか。

(だとすれば惜しい。せめてもの発生場所が特定できていればよかつ

たが……)

推測出来る殺害方法は寝込みを襲われての暗殺か。遅効性の毒殺か。その下手人で最有力なのは当然レムにラムであろう。ロズワールが直々に手を汚す可能性は限りなく低いと見ているし、エミリアには到底殺せるとは思えないし、殺す動機もない。パックはエミリアに害さえなければ無害だと感じているので論外だ。

しかし殺害方法よりも謎なのは「何故殺されたか？」である。スバルを殺すことは基本デメリットしかない筈。けれども現実問題あいつは殺された。それは殺される程の理由が出来たに他ならない。そう、例えば屋敷の秘密を期せずして知ってしまったとか。

(他の外的要因ももしかしたらあるかもしれないが、今考えられるのはここまでか。当事者のスバルにはあとで詳しい話を聞くとして……今回、二回目は念を入れてあいつは働かせずに同じ食客の身分にするしかねえな。そして可能な限り、ラムやレムとは接触させない。ベアトリスは……どうだろうな。個人的にはシロだろうが信じすぎるのも——)

「——ストロ。ねえカリオストロってば。聞いてる？」

「うん」

「1+1は？」

「へえ」

「……頭撫でていい？」

「ああ………いきなり何すんだお前」

不意に髪に感じた重さにカリオストロは驚いた。気付けば隣に座ったエミリアが自分の髪をさらさらと梳かしていたのだ。抗議の目で見ると、逆にふくれたエミリアが抗議の目で見返した。

「カリオストロが撫でていいって言ったから撫でてるだけよ。私が話しかけてもずーつと上の空。ちよっぴり失礼しちゃう」

「あー悪い、ちよつとぼんやりしててな。許してくれ」

「ふんだ。許してあげない。代わりにずっと撫でさせて貰うんだから」

怒りながらも撫でる手はやめないエミリアに、やれやれとため息を



つくカリオストロ。為されるがままにエミリアに好きにさせていると、やがてぼつりとエミリアが呟いた。

「……ごめんなさい。スバルにあんな怪我を負わせてしまつて」

「あれはお前のせいじゃない」

「いいえ。元はといえれば私が徽章を盗られたりしなければ……それに私があつたエルザつて人の不意打ちに気付いていなければ！」

「いいか。もう一度言うがあれはお前のせいじゃない。責があるとするれば、このオレ様だ。あいつが死んだと見誤つてみすみす攻撃のチャンスを与えちまつたのが悪い」

「カリオストロ……」

事実その通りだろう。魔物相手であれば更に追撃を掛けただろうが、人間の尺度で考えて、あの一撃で満足してしまつた。体を文字通りひと捻りされて生きてると誰が思うであろうか。しかしあの殺人鬼はそこまでされても、怪我の素振りもなく生きていた。あいつは人間ではない。人間であるとすれば、そいつは既に人間を止めている。「氣に病むなどは言わない。王様候補になつたのなら、今回の不祥事は原因が何であれお前の不手際になる。オレ様から言えることはひとつだけだ。次は氣をつけろ」

「……はい。ごめんなさい……いいえ、ありがとうカリオストロ」

「ふん」

話がひと段落済み、沈黙が部屋に降りる。その間もエミリアはカリオストロを労わるように、いや、どこか甘えるように髪を撫で続けていた。

しつこい程撫でられて流石に拒もうとしたが、手を退けようとする度に子犬のような目で見られて洩々と許していた。するとしばらくして客室にノックの音が転がり込む。ノックの主はラムだった。彼女は一瞬、室内の光景を見て固まつたが、すぐさま再起動して恭しく報告し始めた。

「……失礼します。カリオストロ様、エミリア様。夕食の用意が整いました。それと、スバル様も目を覚まされました」

「本当？ 容態は？」

「今は落ち着いておられます。顔色も良さそうですし健康と言っているでしょう。空腹を訴えてらっしゃるので、夕食に来られるようですよ」

「ありがとうございます、すぐ向かうわラム」

ラムはその言葉に頷くと「失礼します」と丁寧に一礼して下がっていった。

「スバルが落ち着いてよかったわ。ね、カリオストロ。……カリオストロ？」

何故か沈黙し続けるカリオストロ。顔は赤くなり、震えている。その理由がエミリアには皆目見当がつかなかった。カリオストロはすつくとその場を立ちあがると未だに撫で続けていたエミリアの手から離れた。

「エミリア——しばらくオレ様にべったりするの禁止な」

「え、何で?！」

誤解されかねないからだ! と顔を真赤にしながら客室を後にするカリオストロに、エミリアは何のことだか分からず、追隨してその理由を問い続けるのだった。

§ § §

「おお、エミリアたん!そしてカリオストロ! 悪いなさつきは取り乱しちまったぜ!」

夕飯時。そこに姿を表したスバルはとても元気そうで、普段と同じようなテンションで皆と話していた。予想以上に元通りになっていたスバルを見て、カリオストロもほっと胸をなでおろした。きつと吐き出すだけ吐き出して落ち着いたのであろう。これなら当分は大丈夫だ、カリオストロは手を振りつつ微笑みを返した。

そしてロズワールやレム、ラム、そしてエミリアにベアトリスが一同を介する食卓で（パックは既に眠ってしまった）宴が始まる。何度も味わったが、何度味わっても飽き足りないレムの料理に舌鼓を打ちながら、皆で何気ない話で盛り上がる。話は二転三転し、やがて

一周目と同じく話は王選の話へ。そしてエミリアを助けた事への報酬の話に向かっていた。

「もしキミ達が望むなら報酬はお望みのまま、どんな願いでも叶えてあげよう」

一周目と同じく懐の深さを見せるロズワールに、カリオストロは当初の考え通り、二人共食客にして貰おうとする。

「本当？　じゃあ私とスバルの願いは？　☆　二人を食客に」

「――俺をここで働かせてくれ！」

被せるように、スバルが立ち上がってそう告げた。カリオストロはその言葉にとても驚き、つい絶句してしまふ。

「……いいのかい？　わーたしが口を出すことじゃないが、もつといい条件でも文句はなーいんだけどねえ」

「男に二言はねえぜ、俺はここで働く！　カリオストロは今回の功勞者だしな、カリオストロの方は食客に――」

訝しげに聞き返すロズワールに、強く頷くスバル。絶句していたカリオストロだったが、しばらくして再起動。慌ててロズワールへと弁明します。

「待って☆　ちよ、ちよつと待ってロズワール☆　あ、あははは……☆

どうやらスバルはまだちよつと混乱してるみたい☆　もう一回言わせて貰うね☆　私とスバルの願いは」

「いーや。混乱なんてしてねえし、休んで頭脳スッキリさっぱりだぜ」  
「……と、本人は言ってるよーうだけど？」

ここまで断定されてしまえば上手い言い訳が浮かぶ筈もない。ぱくぱくと抗議も出来ずに口を開くカリオストロに、スバルが言い放つ。

「悪いなカリオストロ。もう決めた事なんだ。俺はここで働く」

本人の意志はとて強く、最早撤回出来そうもない。何より願いを聞き入れる本人が、その啖呵を聞き遂げてしまっていた。カリオストロは力なく項垂れ他なかった。

## 第十六話 守るべき意志

「どういふつもりだ」

夕食後、宛てがわれた客室で話し合うカリオストロとスバル。睨みつけるカリオストロに対し、ゆっくりと息を吸って気を落ち着けたスバルが、真摯な眼差しを向けて話始めた。

「カリオストロが俺を心配してくれてんのは分かる。だけど俺とカリオストロがここで食客になったら得られる情報も減っちゃう。なら前と同じ流れを辿って、出来る限り俺も探ってみるつもりだ」

「そんな事最初から分かってんだよ。だがな、お前がわざわざ働かなくても情報は得られる。自分から虎穴に入って虎に食われる必要はねえだろうが」

「いいや、ここに虎はいねえよ。居るのは可愛いメイドと、生意気な子供と、ピエロ、そして俺の推しだけだ」

目の前の餓鬼スバルが縋る、甘つちよろい根拠。それは理詰めで考えるカリオストロにとっては到底理解出来るものではない。カリオストロは舌打ちすらも隠さず、語気を強めて問い質し始めた。

「お前……まだ、レムとラムを信じてる。とか言うんじゃないかな」

「ああ。信じてる」

「甘つちよろい考えは飽き抱きだ。いい加減にしろ。お前にも分かっているだろうが、一番の容疑者がその二人だって言う事は」

「……まあな」

言葉尻小さく、しかし首肯するスバルに、だったら！と捲し立てようとするカリオストロ。しかしそれを遮るようにスバルが強い論調で告げる。

「だが、確たる証拠がある訳じゃないんだろカリオストロ。あいつらが俺を殺したって言う証拠はよ」

「当事者の情報を聞かずに、そんな事言い切れる訳ねえだろうが。……じゃあ聞くが、あの時のお前は、鑑みるに睡眠中で、気付いたら戻っていた。そこまでは間違いないな？」

「ああ、気付いたら一日目に逆戻りだ。正直寝る前も特に違和感もないし、人影があつた訳でもなかった。あつたとしたら、デート前でした。テンション上がってちよつと寝付けなかつたぐらい。レムとラムもその日は別に怪しい素振りもなかったぞ」

「何か屋敷で変なものを見たか、知つたりしなかつたか？」

「ないない。俺が屋敷で見たものって言ったら可愛いエミリアさんの私服と、ラムの蔑む目とレムの笑顔と、パックを人知れずもふもふするベア子、あとロズっちの全裸だ」

全く参考にならない。カリオストロは腕を組んで頭を垂れた。しかしながら容疑者は必ずどこかにいるのだ。スバルを考え直させねば、また同じ二の舞になってしまう。

「……であれば今考えられるのはやっぱり暗殺ぐらいしかねえ。容疑者で可能性が高いのは、さつきも言ってるがレムかラム。そして死因は毒殺か、寝込みを忍び寄って殺害の2つだ」

「ありえねえ。ラムもレムもそんな事しねえよ」

「いい加減にしろ。そう言う根拠のない台詞がオレ様に響くと思つてんのか。信用？ 信頼？ 大いに結構だがな、勝手に絆されて勝手に自分の首締めてたら世話ねえぞ」

反抗的な目を思わず向けるスバル。しかしそんな目を向けられてもカリオストロはその口を止めなかった。

「ああそうさ。確かにお前の言うとおり確定じゃあないし、あくまで推測でしかねえよ。ただ可能性が高いってだけで、お前を殺害する動機もメリットも今は見当たらねえ。だけどな、万が一つてのはあるんだ。オレ様は前も言ったよな？」 常に最悪の更に上を想定しろ” っつてな。言いたい事は『リスクに自分から頭を突っ込むじゃねえ』 っつて事だ。リスクに頭を突っ込んでいいのは、それを解決出来る力を持つ奴だけだ」

「……」

説教じみた説明を受けても、スバルは理解はしたが納得はしていない顔だ。カリオストロは大きいため息をつくとき、今度は諭し始めた。「これだけは言っておく。オレ様はお前のやりたい事を片手間で手

伝ってやるとは宣言はしたが、自分から死地に赴こうとする馬鹿を手  
伝うつもりはない」

しかし……思う処はあるのだろう。しばしの沈黙の後、カリオスト  
口はこう付け加えていた。

「ただ……今回は特別だ。お前があれだけ大見得を切つちまったら今  
更撤回もまずい」

不貞腐れながらも最後に付け加えた一言に、スバルも苦笑しながら  
頭を下げた。

「……ありがとよカリオスト口。けれど俺は持論を変えられねえ。絶  
対にラムとレムがこんな事をするとは思えないんだ。だから……今  
度はあいつらが無実だっていう証拠を絶対集めてやるぜ」

「オレ様を説き伏せられるほどの確かな証拠を集められるなら、喜ん  
で受け取ってやるよ」

それから。二人は今後の方針と注意点を話し合い始めた。

カリオスト口は前と変わらずアトリスから知識の蒐集を続けて  
いく。しかしスバルは前と同じく働くものの、無意味な“探り”を入  
れるのは必要な時以外禁止とカリオスト口に言い渡された。

「……ってオイ。折角前と同じく働けるのに能動的に調べなくていい  
のかよ?」

「素人の探りなんてあいつらにやバレバレだ。無目的に嗅ぎ回れば嗅  
ぎまわるほど怪しまれて、お前の首が締まるだけだ。オレ様が機会を  
作るまでは余計な探りは絶対に入れるんじゃないぞ」

事実ラムとレムはその立ち振舞とマナの巡りからしてただのメイ  
ドではないとカリオスト口は既に気付いていた。彼らがロズワール  
から監視を命じられている以上、スバルが何かしようとすれば直ちに  
怪しまれることだろう。

「……これでも学芸会じゃ木のフリとか割りとか絶賛だったんだぜ?」

「ふーん☆ じゃあベッドの上で一週間以上寝転がり続ける、怪我人  
のフリをしてもらおうかなっ☆」

「よし、次行こうか!」

方針として他に上がったのは、スバルは極力一人にならないこと。レムやラムと二人きりになるのは特に注意すること。何かあったらカリオストロを頼る、居なかつたらエミリアやベアトリスに助けを求める。ピンチになったら大声を上げて助けを求めること、e t c . . .

「——死んだフリは下策だ。やるならみつともなく命乞いが一番いい。相手もしばしの時間をくれるだろうからな。失禁までして泣き叫べば更に相手は時間をくれる確率が高いああそれから反撃とかはここ一番だけにしておく事。それから…」

「ほんつつとうに、おかんだよなカリオストロって!? 分かった! 分かったからそこまで良いって!」

持ち前の心配性と世話焼きが重なり、カリオストロの口は回りに回る。懸念事項の嵐に巻き込まれたスバルは堪らずストップをかけていた。止められたカリオストロはまだ言い足りなさそうだったが、代わりにポシエツトからあるものを取り出し、スバルへと渡していた。「お守りだ。持ってたけ」

「……今度はメロンソーダじゃねえんだな」

渡されたのは以前渡されたキュアポーションと同じ形の紫色のポーション。だが、そのポーションは前のものよりかは遙かに小さい。透き通った紫はまるでエミリアの目みたいに美しい。思わず目を奪われていたが、横合いからの説明ではっと現実に引き戻される。「お前に回復薬を渡しても回復する前に死ぬからな。だったらお前を死に難くするものを渡す」

「……」もつともだけど、これも土壇場ですぐに使えるかって言ったら微妙じゃねえか?」

「故に、自動発動型のものだ」

カリオストロは説明する。この世界に来る前に研究してた代物で、体のどこかに身に付けておくと、攻撃を受けた時に自動で割れてお前を守る薄い膜みたいなのが短時間だけ発動する。更に一時的に筋力が上昇するし、毒などの状態異常も一度回復する」

「すげえ!? バリアに攻撃アップに状態異常回復!? これがあれば一

時的に俺も強キャラに!？」

「言つとくが自動発動型にしたせいか性能は良くねえぞ。膜はお前が死ぬであろう攻撃を、死にかける程度の攻撃にするだけ。筋力の上昇はお前の筋力が精々ちよつと強くなる程度。状態異常も一時的に和らぐだけで、全部治す訳じゃねえ。そして持続効果も約10秒で終わる。発動したらすぐ様逃げないと、お前はどの道死ぬ羽目になるからな」

「……うわあ、ですよねえー」

だがそれでも非常に有りがたい事には変わりなかった。そして就寝の時間であるため今日の報告会はお開きになった。カリオスト口は部屋を後にしようと思つて扉を開けた所で……ふと振り返る。

「そういえば聞いてなかったな。スバル、外出したときの事を聞かせろ」

「ああ、レムと出かけた時のことか? つつても特に変なことはねえぞ。レムと一言二言会話したり、途中でこけたり、村のガキ共に群がられたり、あとは子犬に噛まれたぐらいだ」

カリオスト口は思案する。確かに特徴的な出来事ではない。それでも、もしかしたらと思ひながら詳しい話をスバルへと聞いていく。

レムに失礼な言葉を投げかけたか?

↓全く。逆に笑いながら談笑した程度。

こけた時、場所や打ちどころが悪かったりしないか?

↓小石につまづいて土の上で転んだだけ。被害は膝擦りむいた程度。

子供の中に怪しいやつはいなかったか?

↓全員無垢過ぎて疑うことすら烏滸がましい。鼻水はなすりつけられた。

その子犬は何か怪しくなかったか?

↓頭部がハゲてたぐらいで普通に可愛かった。

「……ありがとよ。全く参考にならなかった」

「そつちから面白いという酷い感謝だな!？」



時は二日目昼。昼食後に宛てがわれた客室で一人机に向かうカリオストロの姿があった。彼女は備え付けられているメモ用紙に黙々と羽ペンで、今回の件を書き連ねている。

(スバルを殺した理由。……それは一体なんなんだ?)

浮かぶ動機は、「他陣営の間者かもしれないから」程度しか今のところはなない。けれどもスバルの話と動きを推測するに間者である振る舞いも見せていないだろうし、一番の容疑者であるレムやラムとの関係も良好だという。それがどこまで信じられるかは分からないが、カリオストロ自身も殺す事はまずないと考えていた。

仮にも陣営の重要人物の恩人を殺す事はメリットが少なく、デメリットがあまりにも大きすぎる。それが考えつかぬほど彼女達、いやロズワールは浅慮ではないだろう。早とちりをした上での衝動的な殺害? そこまで考えると可能性は多岐に登ってしまい、考えきれない。

ふう、と一息ついたカリオストロは、頬杖を突いてメモをゆっくりと眺め始める。そして「外的要因」と書かれた場所をくるりと黒で囲った。

(仮にもし、レムやラムが犯人ではないとしたら……ベアトリス。あいつも容疑者だ。もっと言えばパツクだってな)

だがベアトリスは禁書庫以外に重きを置いているとは思えないし、そもそもがああの性格だ。スバルをぶつ飛ばすことはあつても殺すこととはないと思える。パツクだってそうだ。あいつはエミリア以外に興味なさそうであり、気に食わなくて殺すなら出会って速攻殺していそうだな。なら、

(この屋敷に存在するまだ見ぬ存在……いや屋敷外にいる存在……か? はっ。ますますスバルを殺す理由が考えられねえな)

片手で弄んでいた羽ペンを墨壺に入れると、んくくくと可愛らしい声をあげて背伸びをする。そして傍らに置かれた紅茶を飲もうと

して、それが空だと気付いた時——控えめなノックの音が聞こえてきた。

「カリオストロ様、よろしいでしょうか」

「ん……☆ どうぞ☆」

カリオストロは書いていたメモを、ベアトリスから仮り受けた本——

「ちやつかりとベアトリスから再度の契約を済ませていた——に”  
雑”に滑り込ませると、部屋に招き入れた。」

声の主はラムだった。恭しく礼をしながら入室した彼女はトレイの上にティーポットとお茶菓子を乗せ、カリオストロの側へと近づいてきた。

「お茶のお代わりと、お茶菓子を用意しました」

「ありがとうございます☆」

慣れた手つきで空いたカップに透き通る紅梅色の液体を注がれると、湯気と芳醇な香りがカリオストロの鼻孔を擦った。お茶菓子は市松模様のクッキーのようで、カリオストロは早速と紅茶とお茶菓子を口に運んでいった。

「んっ……んっ……はあく☆ 美味しい……☆ 紅茶もそうだけど、このクッキーもほんのり甘いのが幸せ……☆ ありがとうございますラム、丁度紅茶が切れてた所だったのっ☆」

「見計らった訳ではありませんが、丁度タイミングがよろしかったようですね。……あら。その本は？」

「あ、これ？ ベアトリスから借りたのっ☆ 手慰みに何かいい本ないかな……って思っ☆」

カリオストロがラムに見えるように本を掲げると、この国の言語で「ルグニカ王国童謡集（上）」と書かれていた。実はこの錬金術師、数日で既にイ文字とロ文字を習得し、ほとんどの本を”読む事だけなら”出来るようになっていた。ラムはそんなカリオストロに少し驚いている様子だった。

「ベアトリス様から、お借りしたのですか？」

「うん☆ 貸してって言ったら遠慮なく貸してくれたよ……？」

「そうですか、であればカリオストロ様はとても強い運をお持ちの方なのでしよう。ベアトリス様は普段は扉渡りと言う力で、私達ですらこの屋敷のどこに居るかさえも分からないのですから」

「えへへへ〜ありがとうございます☆ 私ってツイてたんだっ☆」

「ええ。とは言え一度会ってしまったら頼み込めば貸していただけると思いましたが。気難しそうに思えますが、同時に素直になれない可愛らしいお方だと思っています」

「……結構ズケズケ言うんだね☆」

「出会えないので、面と向かって文句も言われませんか」

それでは失礼しますとトレイを持って下がろうとするラムの足を、カリオストロの問いかけが止めた。

「ラムに聞きたいことがあるんだっ☆ ここって、今ラムやレムしか働いていないの？」

「はい。この屋敷を私とレムで管理しております」

「こんなに広い屋敷なのに、二人だけってのが凄いやね〜☆ 昔はもつと居たりするのかな？ それと、二人はいつ頃からここで働きだしたの？」

「私達ですか？ 私たちは物心ついてほとんどすぐにロズワール様に雇われました。雇われてからずっと、ここで働かせて頂いております。他の方は……昔他に一人いらっしやられたようですが、それ以外は存じておりません」

「そんなに小さい頃からほとんど二人で回してたんだ〜☆ すごいすごいつ☆ ここで働きはじめた切っ掛けはロズワールの親戚だから？」

「いえ。とある出来事からありがたい事にご縁がありました、それにより」

そこまで聞いたカリオストロは変わらぬ表情で、変わらぬ口調でラムへと質問を続ける。

「ふうん〜それって〜☆ ラムやレムが人ならざる存在だから？」

「——それは」

「分かるよ？ 貴方達って他の人間と比べると何かが違うもん☆ 口ズワールが二人を雇ったのって、案外二人が持つ力を珍しいと思ってるのかな？ アレほどお金も地位もある人だもん、そうじゃないと子供二人召し抱えるなんて物好きなこと……しないよねえ☆ あれ、もしかしてその物好きだったりするのかな？ 道化師みたいなメイクしてるしっ☆」

無垢な表情と相反する、あまりにも明け透けで、悪意を感じる質問は普段のカリオストロを知るものであれば「らしくない」と評したであろう。しかし此処には普段を知る者はおらず、さしもの問いに表情を失ったラムの姿だけがあった。

「ねえ、参考にラムとレムの種族を教えてくださいよ☆」

「――」

「参考にするだけだってば☆ 言いふらしたりはしないよ？ ここだけの話にするから、ねっ☆」

「……大変申し訳ありませんが」

「ふくん……☆ 駄目なんだっ☆ じゃあいいよくだ☆ ラムの代わりに、レムに同じこと聞いて――」

「――お客様」

圧力を感じる語気が、カリオストロの二の句を縫い止めた。そしてどこか敵意すら感じる視線を受けていることに、カリオストロは今気づいたと言わんばかりに、白々しく笑顔を見せた。

「……あつ、ごめんねっ☆ カリオストロについて好奇心強くて、色々なこと根掘葉掘り引いちやうのっ☆ 聞いちやいけなかつた事だつたら本当にごめんなさいっ☆ この話はなかつた事にしてっ☆」

「……こちらこそ。いち使用人のお客様に大変失礼な態度を取ってしまい申し訳ありません。それでは私は改めて、失礼します」

ラムは先程よりも気持ち素早く。部屋を後にする。瞬間。彼女の視線が偶然にも机の上に置かれた本からメモのような紙片が飛び出しているのを捉えたが、特におくびにも出さずに、静かに扉が閉まった。

部屋は再度静けさを取り戻し、カリオストロは暖かな紅茶を口につけ、ほう、と一息ついた。

「……種は蒔いた。これが保険になるかは分からねえが。少なくともアイツだけが狙われることあねえだろ」

ソーサーに紅茶を置くと、本から少し飛び出した紙片を指で元に戻すのだった。

## 第十七話 些細で致命的な切欠

二回目の二日目も滞りなく終わり、二人の屋敷生活は既に三日目を迎えていた。

一回目では四日目夜にスバルが殺害されたが、先日の仕込みが影響を及ぼし、その瞬間もまた変わるとカリオストロは踏んでいた。ただし、それが大きな影響になるとは考えていなかった。

故に彼女は今日も余念なく情報収集を続けている。

スバルを死なせない為に、そして元の世界に戻るためにも。

「えーっと、ここじゃなくて……ここだ！」

「ん、ぴったりベアトリスの部屋☆ ありがとうスバル☆」

「どーいたしました！ なんつったってカリオストロは客。俺は使用人だからな。また言ってくればいつでも案内するぜ」

「使用人なら客人よりも家主を優先してこそかしら！ お前たち人のプライベートを何だと思ってるのよ!?!」

今日も今日とてベアトリスの部屋を探り当てて侵入するスバルとカリオストロに部屋の主が声を荒げた。原理こそ分からないがスバルは扉渡りの力を簡単に見破っており、ベアトリスが引きこもる事を許さない。

本人は「これが異世界転生で得たチート能力かよ」と若干自嘲気味に愚痴をこぼしていたが、その御蔭でカリオストロはこの世界の知識に触れられるのだから、割と助かっていると見えよう。活躍箇所が限定的過ぎるが。

「ベアトリス、けい・い・やく☆ でしょ？」

「ぐぬっ……」

既に知識及び本の貸与を受け取る脅迫……ならぬ契約を交わした事を良いことに、カリオストロは勝手知ったる顔で禁書庫に入り、家主の近くの椅子に勝手に腰掛けて余裕の表情でベアトリスへと笑いかける。

契約を交わした手前、それを反故にも出来ずベアトリスの顔はただただ苦渋にまみれていた。

「ま、安心しろってベア子。別にパック相手に『にーちやの毛並みは素晴らしいかしら〜っ』ていつて、もふもふしまくってる時に遭遇しなかったし！ ……あ。今回は俺そのシーン見てねえな」

「な、ななな……お、お前……お前どうしてそれを！ ちよつと待つかしら！ 逃げるんじゃないのよソコに直るのよ?! お前っ！ 絶対に次会ったらただじゃ置かないのよっ！」

「どうやら今回もパックへの愛が溢れすぎ、同様の行為を行っていたようだ。」

その秘めたる行為は誰にも見られていないと考えていたようだが、よもや時を超えてその痴態を観測する存在が居るとは夢にも思っていなかっただろう。

痴態の観測者は一目散に部屋から逃げ出していき、家主はその場で地団駄を踏んだ。

「にーちやの毛並みは素晴らしいかしら〜☆ ……こほんこほん」

「お前出禁なのよ」

「冗談だってば〜☆ 機嫌直してよベアトリスっ☆ ほらほら今日も私の知識欲を満たさせてっ☆」

ぷにぷにほっぺを突つつけば「やめるかしら鬱陶しい！」と手を払いのけるベアトリス。

精霊という存在なのに本当にそこらの子供そっくりで、肌触りもまさしく人間の彼女。

この世界では精霊という存在は儂げなものではないとカリオストロは認識を改めていた。

そして挨拶代わりにスキンシップも終わって、いよいよ本題に入ろうとカリオストロはテーブルの上で手を組み、その手の上に顎を乗せて問いかけた。

「じゃあ今日の質問だけど〜☆ この屋敷付近で人に害意を及ぼすもの、全部教えてっ☆」

「……はあ？ お前……何が聞きたいのよ」

「そのまんまの意・味・☆ 例えば植物、例えば虫。例えば動物。例えば気象地質。兎に角、この地域で人を死に至らしめるであろうもの

ゼーんぶ☆」

「……。変なことを知りたがる奴なのよ、お前は」

やれやれと言わんばかりに椅子から下りたベアトリスは、淀みのない動きで書棚を移動していき、1つ2つ3つ……次々に本をテーブルの上に魔法を使って積み上げていく。

「植物学(上)」「ルグニカ鳥獣図鑑」「気象学IV」……etc etc…  
積み上げられて本の山が一つ出来ると、またすぐ側に本の山が出来ていく。

可愛らしい擬音が聞こえてきそうな足取りで、ベアトリスが椅子に戻ってきた頃には本の山は4つ程出来ており、数えるにぱつと見で30冊は下らなそうである。

ただそれだけの山を用意されてもカリオストロは瞬時に関連しそうなものをノータイムで、躊躇する事なく選べるベアトリスの司書としての力に舌を巻くだけで、決して意欲が萎縮する様子はなかった。

「この近郊で人に害意を及ぼす物が載ってる本はこれぐらいなのよ」「すごいすごい☆ これ全部ここ近辺のものを載せてるものなの？」

「関係ありそうなものは見繕ったけど、一冊丸々この地域の事を書いてるとは思わないほうが良いかしら。あとベティーは研究者ではないから専門的な話は出来ないのよ。詳しい話は自分で探ればいいのよ」

「うーん。なるほどねえ……」

ただコレだけの書物があっても活かせねば意味はない。

タイムリミットである4日目夜までに全て読破し、その上で対抗策を練り、実行する……それは流石のカリオストロも無理だと考えていた。

故に彼女は一冊一冊、どこが該当するかのピックアップを目の前の書庫の主に交渉を行った。

当然ベアトリスは渋る。しかしカリオストロの巧みな交渉術の前では彼女はか弱い羊でしかなかった。

耳障りのよい言葉を並べ、相手をおだて、餌で釣り、餌が駄目なら



若干の脅しにシフトして。

ベアトリスは抵抗止む無くあれよあれよと追い詰められてしまい、悪い狼に言質を取られてしまった。

「……お前本当嫌な奴なのよ」

「え、そんな事ないよ☆ その代わりパックと触れ合う機会は増やしてあげるって言ったでしょっ☆」

「当たり前なのよ、メリットがないとこんな事やってられないかしら……ほら、さっさと終わらせるのよ。まずは薬物凶鑑。此処近辺、というかルグニカ近辺でよく取れるのは……」

ベアトリスは司書として非常に優秀だった。

どの頁にどの項目があるのか。脳内には長年で蓄積した専用のライブラリが出来ており、スラスラと淀む事なくカリオストロに知識を提供していき、カリオストロは持ち寄ったメモ帳にその項目を真剣な表情で書いていく。

時折質問と回答を交わし、時に冗談交じりに、それでもテンポよく、交錯する事なく教導は進んでいき……。

「……次は魔獣凶鑑。正直この近辺での魔獣の分布はよく分かってないから、よく出ると言われる魔獣だけでも教えておくのよ。まずはウルガルム。犬型の魔獣かしら」

「犬……」

「そ。群れて活動して、獲物を襲う。まあ普通の野犬のような奴と言ってもいいのよ。取り立てて強くはないけど噛まれると呪われる、結構厄介な奴ね」

「呪われる……ねえ。呪われるとどうなるの？」

「呪いをつけた魔獣が死なない限り延々とmanaを絞られるかしら。どれだけ離れていても魔獣が好きな時に命の源を吸われて、対象者は衰弱し、やがて死に至るのよ」

ベアトリスが開いた凶鑑に書かれた絵柄を見ると、そこには角が生え、何かを威嚇するような牙を携えた大きな成犬の姿が描かれていた。その姿は知る人が見れば、それをドーベルマンのようだと称したかもしれない。

その情報にカリオストロは思わず目を見開く。  
犬、噛み傷。そして衰弱死。

そのキーワードはカリオストロが求めていた答えに近いものだった。

——しかし、まだ確証とは言えない。

「……ねえ、そのウルガラムの子犬もいるのかな？」

「子犬？ さあ。ベティーが知る限りはないかしら。ウルガラムについて書かれるのはその本ともう一冊あるけど……子犬の事については触れていないと思うのよ。そもそも魔獣全般は突然発生すると言われていて、普通の動物のように番を作って繁殖をしたりする所を見られていないのよ」

「へええ……。ちなみにもしそう言う子犬の魔獣が居るとして☆  
躰けて飼ったりとか……する事が出来ると思う？」

「出来なくはないのよ。知ってるかもしれないけど、魔獣は大なり小なり角を持つている。魔獣はその角を折られると、折った相手に従うようになるかしら。ただし魔獣は忌むべき存在……角を折ってもすぐに殺してしまうのが常。望んで従えるような奴なんて変わり者が悪人しかいないと思うのよ」

「ふむふむ……」

「……ま。そもそもこの付近、街道やアラム村には魔獣避けがあるから、村に持ち込む事も侵入することも出来ないかしら」

「……」

スバルを噛む犬がもしもウルガラムの亜種であつたとしたら。

その犬を持ち込んだ存在がもし手懐けていたのであるのなら。

たまたま持ち込んだ場所に結界が存在しなかったら。

決定打になりえないが、限りなく答えに近い回答になるだろう。

「……魔獣を飼いたいか言い出すんじゃないわよ」

「そんな事しません☆ さ、次々。まだ10冊以上あるよね？」

そうして二人の幼女達の勉強会はスバルが呼びに来る夕飯前まで続くのだった。

夕飯も終わればあつという間に夜になり。

いつもの定例報告会も終わった後、カリオストロは月明かりが照らす部屋で本に囲まれた机に向かって、スバルの死因についての推理を書き連ねていた。

机の隅に置かれたシェードランプが手元を明るく照らす中、手の動きとペン先が紙をこする音は部屋内で途切れることはなかった。

(……結局アレ以外で有効な情報はあんまりなかったな。毒物、毒虫は羅患すれば兆候が分かりやすく、その時点で対象から外れるし。特殊な気候による体調不全も考えられにくい。やっぱ一番の収穫は……ウルガルムか)

原因。死因、どれをとっても現状のスバルを死に至らしめた原因に最も近い存在である。

ただ、あの魔獣に子犬の形態があるかどうか分からず。

そして魔獣だとしても、その魔獣を従える力が存在するかどうかも分からず。

更に魔獣は結界の影響で村に侵入できない、近づけないという事実があり確証には至らない。

ただ、それらの要素が全てありえると仮定した場合でも二点、問題が残る。

『何故そのような人物が村に居るのか』

『何故スバルが噛まれたのか』

(子供の中に偶然魔獣の加護を持っている奴がいて。偶然魔獣の子供を従えていて。偶然結界が綻んでいる部分があつて。偶然村に持ち込んだ所で。偶然スバルが噛まれた? ……ありえねえな。偶然がそう何度も重なって堪るものか)

墨壺に羽ペンを一度戻すと、カリオストロはふああと可愛らしい欠伸を一つ。

雲ひとつない夜、月明かりが煌々と彼女のシミひとつない白い肌を更に飾り立てるように照らし、彼女の美貌を引き立てていた。

絶世の美少女は何をするにも絵になる。それが物憂げな表情をしていれば、殊更に。

ただ可愛さを引き立てる事に関して余念のないカリオストロは、意図的にそのような仕草を取ろうとする節もあったが。

(しっかし、本当に謎が尽きねえな……。はあ……。オレ様はいつから探偵になったんだ……。こういうのはバロワが専門だったのに)

そこまで思い浮かべて、そもそもバロワでは駄目だと考え直す。あの迷探偵は全部暴力と偶然で解決する存在だった。

一を知って十を知る。

自らを天才と称するだけあって、忌憚なくその力を発揮してきたカリオストロだが、このような奇異な経験は初めてであり、顔には隠しきれぬ疲れが見えていた。

「異世界」

「死に戻りが出来る少年」

「王選」「盗品蔵騒動」「屋敷の異変」

少年の死が自分を過去へと引き戻す。

少年と自分の記憶だけを残し、周りの足跡を全て消していく。

笑いも。怒りも。悲しみも。出会いも。別れも。約束すらも。

全てを忘れ去られる悲哀、あの少年の感じた悲しみを自分も確かに感じ取った。

動揺せずに要られたのはあくまで長年の経験と知識の蓄積があったからに過ぎず、一歩間違えれば自分も同じくふさぎ込んでいただろう。

気付けばカリオストロは羽ペンを手を取っていた。

現状を再確認したかったのだろうか。

疲れていたのだろうか。

ただ、弱みを吐き出したかったのだろうか。

彼女は、初めてスバルの死に戻りの事について書き連ねようとしてしまった。

——しかしそれは余りにも短慮で。致命的な行為であった。

（——ッ、まさか）

彼女が紙にその内容を書き連ねようとした瞬間。世界は活動を停止した。

甘く濃密な腐臭が辺りを覆い始める中、色のなく、動きのない世界の中でただ一つ動く存在があった。

床をすり抜け、ゆつくりとカリオストロに近づく存在。それはあの黒い手。

黒い手は緩慢な動きで彼女の周りを取り囲むようにし。

そのまま、確実に、カリオストロの、胸に——

「ッはあッ!! ——はあっ、はあっ!」

開放された瞬間どつと冷や汗が全身を覆い、カリオストロは咄嗟に自らの薄い胸を手で守るように掴んだ。

（これもアウトだったか……ッ! 畜生、オレ様としたことが……なんて迂闊な真似を……!）

自らを叱り付け、そして反省を後回しにしてカリオストロは急ぎ部屋を出ていく。

制約を破ったペナルティを一身に受けるのはスバル。

前回は心臓を撫でただけで終わったが、今回はそうとは限らない。

ノックを惜しんで隣のスバルの部屋を勢い良く開け放つが——

「スバルッ!! ……くそ、どこ行きやがった!」

スバルの部屋は蛻の空。本人の姿はどこにもなく。

こんな夜更けに他の行く場所があるとすればお手洗いか、エミリアに会いに行つたかのほぼ二択。



る、血に濡れた鉄球を持つレムの姿だった。

## 第十八話 最後は蔓延する死と共に

エミリア様は王都から戻られた際、二人のお客様をお連れになられました。

1人はスバルという珍しくも黒髪の少年。もう1人はカリオストロという見目麗しい金髪の少女でした。

お二人が屋敷に来た当初、少年の方は怪我の影響で気を失い続けていたようなので姉様に部屋に運ぶように言われましたが……近づいた時、少年が非常に不快な香りを纏っているのに気付きました。その香りは忘れることも出来ぬあの悪夢を想起させます。悪辣で、傲慢で、残忍で、思い出す事さえ憚られる憎き集団。

### 魔女教。

姉様から角を奪い、私から故郷を奪い、私を姉様と対等に近づけてくれた、悪夢であり、私の罪の残滓である存在。その匂いを嗅いだだけで激しい怒りが、恨みが、嫉みが、妬みが、暴力的な衝動と共に湧き上がります。思わずこの場で彼を八つ裂きにしたくなる衝動に駆られる程でしたが、エミリア様の恩人であるとの事で渋々。何とか心を落ち着かせて姉様のご命令に従いました。

その後。目出度くないことに目が覚めてしまった彼は此度の件の褒章を、この屋敷で雇用して貰うという、普通に考えればありえないお願いをしました。

私は彼に不審を募らせませす。願おうとすれば大抵の願いが叶うという状況なのに何故わざわざその様な事を願うのでしょうか？

当然ながらロズワール様から素性の分からぬお二人について警戒と監視をするように言い含められた私達は、怪しげな二人を監視し始めました。

私は特にスバルと言う少年を監視していきました。

### 二日目。

屋敷で労働をし始めた彼の様子は、一言で言ってしまうば……「道化」でした。



炊事も洗濯も掃除も、可がなく不可ばかりの出来栄えの彼は、事あるごとに聞いてもない事を口に出し、あえて自分を下げて私達からこき下ろされる事を望んでいるような振る舞いをします。何かの情報を聞き出そうとする素振りもなく、私達と会話する事を目的としているような……。兎に角不可解です。姉様もそんな彼に合わせるように軽口で警戒を解いたような素振りを見せると、ますます調子に乗って話しかけてきます。

……まんまと乗せられているとはいえ、姉様に気軽に近づく彼には……正直、殺意が沸きます。

何度自制が解けそうになり、何度この鉄球で、彼を砕いてやりたいと思つたでしょうか。

その匂いを振りまきながら、姉様に近づくな。

彼はそれ以外に怪しい素振りこそ見せないものの、まるでこの屋敷を知っているかのように振舞うことが何度もあり、それがまた疑惑を募らせます。

初対面の時に私と姉様の名前を知っているような素振りを見せた事もありますし、事前に私達を調べていたのでしょうか？

更なる不信感を募らせながら、私は彼を監視し続けて行きます。

三日目朝。

不機嫌になつていた姉様に何があつたか聞くと……カリオスト口様との話を教えて頂きました。

姉様いわく、あのお方が私達姉妹の事を探っていると。……あの方は屋敷に来て早々、ベアトリス様と意気投合し様々な書物を読みふけておられるようで……特に行動が読めないお方です。

ただあの方は何かのメモを、走り書きを本に挟んでいたとの事。それが何かは分かりませんが、何かを狙っていることは間違いないささうです。彼が私達を知っている事と何か関係があるのででしょうか？

私は二人に、更に疑いの目を向けます。

三日目夜。

仕事を終えた彼がカリオスト口様の部屋で話をした後、屋敷の外に

出るのが見受けられました。

当然、私は彼の後を付けていきます。

彼は外に出るとしばらくきよろきよろと誰かを探しているようでしたが、一体誰を探しているのでしょうか。エミリア様でしょうか？

しばらく彼は手持ち無沙汰気味に独り言を呟くばかりで、誰にも会えないと悟ると帰ろうとし始めます。

そして彼は大きく背伸びをし……瞬間、彼は胸を抑えて体を縮こめました。

何があつたのか。などと考えることはできませんでした。

何故なら彼は全身から、今まで以上に濃い魔女の匂いを振りまいていたからです。

その瞬間、私の視界が、意識が。赤く、紅く、赫く。憤怒の色に彩られました。

ああ、駄目だ。

彼は、駄目な人だ。

彼は忌むべき存在なのだ。

彼は生きてはいけけない人だ。

彼は殺すべきだったのだ。

彼は殺されるべきだったのだ。

何故最初から殺さなかったのだろう。

最初から殺すべきだったのに。

エミリア様が襲われる前に。

ベアトリス様が襲われる前に。

ロスワール様が襲われる前に。

姉様が襲われる前に。

姉様が襲われる前に。

姉様が襲われる前に。

姉様が襲われる前に。

姉様が襲われる前に。

気付けば、私は隠れていた木陰から出て彼の前に出ていました。

彼は私を見て戯言めいた挨拶をしました。　　気色が悪い。

鉄球を懐から取り出すと彼は驚いた様子で道化のように振舞いました。　反吐が出る。

そして鉄球を体に投げつけると彼は呆けた顔をしたまま吹き飛びました。　　ざまあみろ。

しかしながら当たった感触がおかしい事に私は気付きます。

普通なら死ぬ筈の一撃、だが彼は噴水近くまで吹き飛んでも五体満足でした。

よく見ると彼の周りを小さな膜のような物が覆っていたのでした。小賢しい。

目を回す彼は、倒れながらどうして、と言っています。

どうして？　それは私が聞きたい事です。

どうして貴方は私の故郷を襲ったのですか？

どうして貴方は姉様から角を奪ったのですか？

どうしてまた我々の目の前に姿を現したのですか？

今回は思い通りにはさせません。

今回は私が姉様を、守るんです。

私は彼に鉄球を投げつけました。

彼は目を見開き、体を転がせて一撃を避けました。

私は彼に鉄球を投げつけました。

当たることはありませんでしたが、衝撃が彼を吹き飛ばしました。

私は彼に鉄球を投げつけました。

どうして、何でだと煩い彼は、私に背を向け無様な格好で逃げようとしてました。

私は彼に鉄球を投げつけました。

鉄球はようやく彼の右の肩と腕をもぎとり、私は嬉しくなりました。

止め処なく血を流し、痛みに悶えて聞き苦しい叫びをあげる彼に私は近づきます。そして慈悲深くも止めを刺してあげようとして――

気付けば、私は吹き飛ばされて木々に全身を打ち付けられています

た。

§ § §

満身創痍のスバルとそのスバルに今にも止めを刺そうとするレムを視界に納めた直後、カリオストロは半ば無意識に魔法を行使。即席の石の鞭を作り上げると生死を考慮しない痛烈な一撃をレムに加え、吹き飛ばしていた。

「スバル！ おい、しつかりしろスバル！」

「あ……あ……が、ごぼ……ご」

急ぎ彼の元に向かったカリオストロを迎えたのは濃密なまでの魔女の香りと、それに負けず劣らずの濃厚な血の臭いだった。うつ伏せで倒れているスバルは体を小刻みに痙攣させており、失った右肩の断面からは止め処なく赤い命の源があふれている。視線は虚ろで、空いた口からは血液が逆流しており、呼びかけにも満足に応じることは出来ない。まさしく風前の灯だった。

一刻一秒を争う容態にカリオストロが全力で治癒魔法を掛けようとした瞬間、背後からの風切音を耳に捉えて彼女は振り向きざまに全力で障壁を展開する。

響き渡る奇妙な甲高い音。

カリオストロが振り向きざまに見たのは、展開した障壁に阻まれ顔面間近まで近づいた血に塗れた鉄球。そしてそれを投げつけた下手人であるレムの姿だった。

その腹部は石の鞭による殴打でメイド服ごと切り裂かれ、少なくな血を滲ませていたが、彼女は痛みすらも感じさせない……いや、感じ取ることの出来ない、冷徹な表情でこちらを見据えている。

頭部には光り輝く一本角。角にはカリオストロでなくても認識できるほど、マナが集まっているのが分かった。

「そこをおどき下さいカリオストロ様。その方を殺せません」

「そいつは無理な相談だな。」

オレ様が納得出来る理由もなく、こいつを殺させる訳にはいかね

え」

「理由ですか？ それであれば簡単です。理由はその男が魔女教徒だからです」

魔女教徒？ スバルが？

ただ異世界に放り込まれただけの一般人が魔女教徒な訳がない。

しかしカリオストロの頭脳はただ断じるのではなく、レムの言葉から真意を推察しようとする。その時、咄嗟に脳裏に浮かんだのはベアトリスに告げられたある言葉だった。

“あいつ、ベティーに出会った後から、また更に魔女の残り香が強くなってるのよ。最悪の香りかしら”

(もしかして、スバルの魔女の残り香から……！)

「彼は危険です。当屋敷に足を踏み入れて何をするつもりか分かりませんが、危険因子は早めに排除するに限ります。どうかそこをおどき下さい」

「……こいつは魔女教徒じゃねえ、それはオレが保証する。

お前こそ下がれよレム。……いいかこれはお願いじゃない。警告だ。下がれ」

「保証？ 如何にカリオストロ様の保証を頂いても、信用することなど出来ません。濃密なまでの魔女の臭いを振りまくその存在が魔女教徒でないとしても？

カリオストロ様こそお下がりに下さい。どかなければ諸共、排除するだけです。

何を持って彼を庇うつもりか分かりませんが、私には彼がこの屋敷に居る事を許容出来ません」

どうやらカリオストロの推察通り、レムはスバルの匂いから彼を魔女教徒だと判断したようだ。

カリオストロは歯噛みする。

間違いなくこの状態を生み出したのは自らの不手際によるものと分かってしまったからだ。あの手を呼び出してしまい、同時にスバルが魔女の臭いを濃くした結果、偶然か、それとも監視をしていたのか——その場に居たレムが激昂して断じてしまったのだ。

しかし何故そこまで魔女教を目の敵にする？と疑問を浮かばせながら、この場を脱出する方法を模索するカリオストロ。しかしながら目の前のメイドは思考の暇を与えてくれないようだ。じゃり、と鎖がこすれる音を立てながらまた一歩、レムが近付いてくる。

「許せない。そう、許せないんです。その臭いで私の近くに存在することも。

エミリア様に近づく事も。ロズワール様に近づく事も。姉様に触れることも。

姉様に話しかけることも。姉様に近づく事も。姉様の視界に収まる事も。姉様に。姉様に。姉様に。姉様に。姉様に。姉様に。姉様に。姉様に。姉様に。姉様に。姉様に……っ！」

煌々と光る角を持つレムの目はとても冷たく、ただ無機質な殺意だけを孕み、全身を巡る魔力は禍々しいの一言。そして何故か冷静を失い、狂気のみで囚われた彼女を言葉で説得する事は不可能であることは明白だった。

だが、カリオストロも最後まで言葉で説得するつもりは元よりなかった。

彼女は悔いていた。

自らの浅慮が招いた事態に。

自らの約束を守れなかった不甲斐なさに。

守ると約束した彼の惨状を見て、過去の自分を縊り殺したくなるほどに悔いていた。

だがそれ以上に、彼女は怒っていた。

天才を自称する自分の失敗に。

約束すら守れない自分の行動に。

そして彼を傷つけたレムという存在に。

「いいか。オレ様は警告したぞ。

一体お前が何をとち狂ってるか知らねえが、もう容赦も恩情ねえ。

——ここから先は一方的なオシオキだ。

しっかりと体で分かせてやるよ、お前が犯した罪って奴を」

カリオストロの手から離れた魔術書が傍らに浮くと、ひとりでに頁

がめくれ始めた。レムの元に集まっていたマナが気付けばカリオストロの方へと強引におびき寄せられ始め、風が彼女を中心に収束していく。

辺りに流れる強い風の流れ。木々が騒ぎ、草葉は戸惑い、その勢いにレムも思わず目を細める。——そして、風の流れが最高潮に達した時、カリオストロの背後の空間に突如、二つの黒い穴が開き、それぞれから何かが顔を覗かせた。

淡い赤色と涼しげな青色をしているその存在を見た者は、それを竜と称するだろうか。

頑強な鱗で包まれた顔。カリオストロくらいは軽くひと飲み出来そうな程の大きな口。口から覗く凶悪な牙。その眼はギョロリと主人を害なそうとする存在を睥睨しており、広がった穴から頭に続いて長い首が現れた。

その存在が、竜として決定的に違うのはその顔や首に突き刺さった巨大な杭。そして、その存在に手足がなく背中に翼が生えている事だった。

竜というより、蛇。蛇というより虫、虫というより、未知の魔物。

金糸のような髪をたなびかせなる彼女はそれをこう称した。「ウロボロス」と。

全貌を見せた二対の「ウロボロス」は、主人を守るかのようにその周りどとぐるを巻き、首をもたげてレムを睨み続けていた。彼女は庭に現れた二対の存在を見て、その存在感と発する圧迫感に冷や汗を流した。種族の違い、そして何よりも生物の格の違いがただ見ただけでまざまざと感じられたのは生涯で初めてであり、それは狂気に浸された彼女の精神が揺れる程の衝撃だった。

「二度で理解しろ。それが無理なら死んで詫びろ、クソメイドが」

カリオストロの無慈悲な宣告を切っ掛けに、二対の竜が瞬く間にレ

ムへと飛び掛る。

うろたえて居たレムは反応が遅れ、第六感だろうか、脳裏に走った危機感から咄嗟に全身を芝生に投げ出して差し迫る二対の竜を避ける。

レムがそれを避けれたのは奇跡と言っていいだろう。彼女の頭部と腹部があつた場所を颯風を纏つたウロボロスの牙が凄まじい勢いで通り抜けていった。

だが一時的に避けられただけで、二陣、三陣はすぐ様襲い掛かつてくる。そう判断した彼女が次なる攻撃に備えようと動き出す——前に、その体が宙に浮いた。

その瞬間にレムが感じたのは、腹部への熱と、体から何もかもが押し出されるような圧迫感。腹部を突き上げた物の正体は巨大な土の杭だったが、あまりの衝撃に彼女は何をされたか判断することは出来なかつた。

しかし、レムも負けてはいない。

角が光を増し、血の混じつた吐しゃ物を撒き散らしながらも痛みには歯を食いしばり、空中で姿勢を変えて鉄球の一撃をカリオストロへ浴びせようとし——すぐにそれを中断せざるを得なくなつた。

同じく空中で頭部を方向転換し、再度食らいつこうとした紅いウロボロスが牙を煌かせて襲い掛かるのに気付いたからだ。レムは咄嗟に手繰り寄せた鉄球で紅竜を殴打。間一髪。一撃が竜の顔の方向を変え、空虚を噛み砕く音だけが虚しく響き渡り、レムは一時的に死を紛らわすことが出来た。

しかしながら、後方から飛びかかっていたもう一体のウロボロスには対処は出来なかつた。

「あゝっ!？」

未だ地に足着かぬ空中戦。紅竜を一時的に退けたレムは蒼竜によつて鉄球を持つ右腕を肩ごと噛み付かれていた。

その鋭利な牙が柔らかな皮膚を、筋肉を、骨を難なく貫通し、脳を貫くような痛みには彼女から呻き声が漏れる。

宙で噛み付かれたレムは痛みに歯を噛み締めながらも、空いた左手



でもって竜の目を突こうとするが——その前に彼女の視界が急激に変化し始める。

見えていた夜空が——光の軌跡を残して庭の木々——そして芝生へと移り変わり——やがて彼女の全身に鈍痛が走った。

「あぐつ、あつ」

星が瞬くかのように明滅する視界の中、思考する暇もなく再び彼女の視界が芝生、庭の木々、夜空と切り替わり——その後高速で芝生へと移り変わる。

三度、四度、五度、六度——

レムが対抗する手段も、その思考すらも与えない、哀憫も容赦も一切ない攻撃。

やっっている事は単純に体を地面に叩きつけているだけだが、叩きつける度に轟音と共に地面が陥没する事からその威力が伺えるだろう。

鬼化——身体能力が普段より格段に上がったレムであったとしても、その一撃一撃は耐え難いものであり……。

——途切れることのないその攻撃は、レムが宙高く吹き飛ばされたことで終わった。

いや、終わらせるつもりはなかったのだろう。急激な動きに耐え切れなかった腕が彼女から千切れ、体が切り離されただけだったのだから。

おおよそ人のものとは思えぬ落下音の後、レムは身じろぎも出来ずにその場で倒れる事しかなかった。

無残にも芝生の上で体を小刻みに痙攣させるレムは、右肩が腕ごともがれ、全身を打撲し、また左腕、右足、胸部と至るところを骨折した痛々しい姿。半死半生……いや、生きている事がおかしい状態になっていた。

そんな彼女が再度、ウロボロスによって空へと引き上げられる。

だが今度は叩きつけられるのではなく、腕を組み、冷淡にレムの様子を観察するカリオストロの元へと運ばれた。

彼女の竜は何の命令を受けずとも主人の顔の近くに、ぼろぼろになつたレムを銜えたまま運んで来て——

「……ああ、何だまだ生きてんのか。

運が良いのか、この世界の奴は全員頑丈なのか……まあいい。

それで、理解したか？ お前の罪深さを」

今にも途切れそうなか細い息をする、無残な状態のレムの顔を覗き込みながらカリオストロは告げる。銜えられたままのレムはそんなカリオストロの言葉に最初は反応がないように見えたが、しばらくして微かに、そしてゆっくりと反応し始めた。

レムの反応。

それは折れた手をカリオストロに向けようとしながら、切れた口角で、何かを呟こうとする事。

……そう、レムが選んだのは謝罪でも、命乞いでも懇願でもなかった。

それは抗戦。

彼女の目に映るのは未だに折れぬ、敵意。

自らが死そうとも相手を倒そうとする、狂気の意志。

弱弱しくも輝く角と共に、その掌が光を帯び――

「馬鹿が」

心底の呆れを含んだ呟きとともに、カリオストロは完全にレムから興味をなくし、背中を向けてスバルの元へと向かった。

彼女の背後からは水つぽい何かが潰れるような音と、何か小気味よく碎かれる音が続いた。

「放つという悪かったスバル、今から治療するからな」

時間にして1分も立たない一方的な虐殺劇。だが腕を挽がれたスバルにとっては生死を彷徨う一分間だっただろう。申し訳なさそうな顔をしながらカリオストロは立膝について全力で治療を行い始めた。

患部に当てられた掌から発せられる癒しの光は、無残にももぎ取られた傷口を元に戻していく。すると、土気色をしていたスバルの顔も、青白い色へと若干和らぎ、彼はうっすらと目を明けてカリオストロを見て――

「……ほっ、お、か、がり、かりお、すと口」

「ああオレ様だ。大丈夫だスバル。」

お前を脅かす奴はとつちめた。今すぐに治してやるからな」

「あ、あ、ああ……！」

血を吐きながらも痛みには涙を讃えて、こちらに腕を伸ばそうとするスバルを抑えながらカリオストロは治療を続ける。

一刻一秒を争う容態もあつて全力で回復せざるを得ない状況、カリオストロはウロボロスに使っていた魔力を回復に傾けると、口元を何かで汚した二対の竜は世界から掻き消えた。

そんな治療の中、スバルは何度も何度もカリオストロへと腕を伸ばし、何かを伝えようと話しかけ続けていた。

「ちが、かり、ちがあ、あ、が」

「大丈夫だ。大丈夫だスバル。血もすぐに出なくなる。」

痛いのは分かるが、もう少つ、しひゆ、きひゆ」

強風が二人の間を通り過ぎたと思った時には、彼女は急にうまく喋れなくなっており——見下ろしていたスバルの体が更なる血で塗れていった。

止め処なく広がるのはスバルの血か……？ いや、この血はスバルのものではない。カリオストロは遅れた知覚で咄嗟に発生源を手で抑えた。

そう、発生源は自らの首だった。シミひとつない白磁の首がぱつぱりと開いており、こひゆ、こひゆという音とともに血が激しく噴出していたのだ。

「——よくも、よくもラムの妹をツ!!」

スバルは痛みにも悶えていたのではない。必死に伝えようとしていたのだ。

後ろに立つ、憤怒の形相のラムの事を。

治療に専念していたカリオストロは奇しくも、ラムの存在に気付いていなかった。

（——く、そー！）

首筋を割かれたカリオストロは傷口を手で抑えながら、咄嗟に迎撃しようとするが、ラムの二撃目の方が早く、彼女が翳した手から放たれた真空の刃が先にカリオストロへと到達していた。

ばきゅっ。

間拔けな音と共に、カリオストロの金糸の髪諸共、あっけなく首が飛んだ。

そして頭部を失った体は力を失い、そのままスバルの体に倒れ伏した。

「あ、ああああ……!! ああああああああ——ツ  
!!!」

失った。あれだけ強かった、アレだけ頼りにしていたカリオストロを目の前で失った。

スバルの抛り所になりかけていた少女を、失ってしまった。

自分ではない、見知った人を失う哀しみ。

それは異世界で危うくも繋がっていたスバルの精神の均衡を、容赦なく粉碎していた。

スバルの痛々しい慟哭が響き渡る中、ラムも滂沱の涙を流しながらも、怒りに満ちた表情でスバルに乗っているカリオストロの体を蹴り出し、怪我の癒えてないスバルを引き起こした。

「お前らが——お前がこの屋敷に来たからだッ！ 何でお前はこの屋敷に来た!？」

お前がッ、来なければレムはッ、レムは死ななかつたのにッ!!」

カリオストロを殺しただけでは収まらぬ怒りの矛先は自然と望まれぬ客人、スバルへと移っていた。治癒されかけていたとは言え未だ重症には違いない少年へと憎しみを込めた暴力が振るわれ始める。殴り、蹴り、叩きつけ……遠慮も容赦もない、怒りと憎しみを込めた一撃一撃は少年の命の灯火を確実に削って行く。

——肩で息をしたラムが収まらぬ溜飲を無理矢理納めた時には、スバルは芝生の上で血だらけで横たわった状態で既に虫の息。

夜の庭は濃厚な血の匂いが立ち込める、凄惨な現場になっていた。その場所ですら涙だけを流して立ち尽くすラムが、レムの亡骸を回収しようとした矢先に……「スバル……カリオストロ？」かの少女の声が響いた。

ラムがゆっくりと振り返った先に居たのは、顔面を蒼白にしたエミリアの姿だった。エミリアの視線は庭に広がる、凄惨な光景で固定されており——彼女はよろよろとラムを通り過ぎ、転がっていたカリオストロの首まで移動すると、やがて、正気を失った目でその場でへたりこんだ。

「エミリア様」

「カリオストロ……嘘……でしょ……？ ……いや、イヤだ、イヤあ！

何で、何でカリオストロが……スバルが……!!

ねえ何でなのよラム!? ここで何があつたの!? どうして二人がこんな目に……!!」

「エミリア様。カリオストロ様は、いえ、アイツはラムの妹を殺したんです。

故に殺しました。……私たちは、いえロスワール様もあの二人を怪しんでいましたが、悪い予感的中したんです……ッ！」

「そんな、そんなの……嘘よ！ カリオストロがレムを殺すなんて……ありえない！」

だってスバルもカリオストロも私をつ、私を助けてくれてっ！  
あ、あんなに優しくしてくれて……っ!! なんて、何で殺したのよ！  
ラムの人殺しい!!」

子供が癪癪を起こしたかのように、ラムへと両手を伸ばし、食いかかるエミリア。だが、ラムはそんなエミリアを冷たく突き飛ばした。まさかの反抗にエミリアは突き飛ばされるがまま血に塗れた芝生に尻餅をついてしまう。

「え……っ？」

「……元はと言えば」

呆然とするエミリアを見下すように、ラムが涙すらも拭わずに吐き捨てた。

「元はと言えばお前がこいつらをこの屋敷に連れてきたからだ……！」

人殺しはお前だハーフエルフ！ これはお前が原因なんだ!!

お前が徽章なんて盗まれるから……お前が、こいつらを屋敷に連れてきたから……レムが……っ、人殺し！ ラムの、ラムの妹を返して!!

「そんな、だつて……嘘……嘘よ、いや、いやだ……!! いや、いやああああ!!」

容赦なく責めるラムに頭を抱えて泣き崩れるエミリア、そしてラムが怒りのままにエミリアにも拳を振り上げようとした所で、予想だにしない事が起こり始めた。

カリオストロの亡骸が光り輝き始めたのだ。

最初に異変に気付いたラムに遅れて、エミリアもその眩いばかりの光に目を奪われる。

よく見れば持ち主を失ったカリオストロの本が一人に頁を刻み、強い強い魔力の波動を放つて、切り離された首と残された胴体を光で包み込んでいた。その光は次第に強さを増し、二人は怒りも悲しみも忘れてその様子を見守り続けていき——そして、次に起きた出来事に意識すらも奪われた。

死んだばかりの彼女の身体が目の前で小さな粒子のような物に分解されたと思えば。その次の瞬間には、元の体を取り戻したカリオストロの姿があったのだ。

「嘘……」

「どう、して」

傷跡すらもなく、首と頭も繋がった状態で現れたカリオストロは、啞然とする二人を尻目にゆっくりと片手を翳す。

翳した先に居たのは——ラムだった。

「あ」

エミリアの間の抜けた声と同時に、彼女の隣にいたラムの全身が予兆もなく、文字通り粉々に爆ぜた。

温かな血肉が辺りに飛び散る中エミリアは全身にそれを浴びて、ラムが殺されたという事実を認識しても尚、復活したカリオストロをじっと見据えていた。

「カリオストロ……」

それはとてもとても、安心しきった声だった。

だが直後にエミリアの表情は、いや。世界は歩みを止めた。

記憶だけを残し、痛みが、傷が。再度、屋敷の記録点へと戻り続けていく――

「エミリア様、お客人。どうやらもう一人のお客人が目覚めたようだ……おやあ？」

三度目の屋敷の一日目が幕を開けたと同時に、カリオストロは執務室を飛び出し迷いのない足取りで廊下を走り抜けていった。

全身を蝕む嫌悪感も、吐き気も押さえ込み、後ろから聞こえるエミリアの驚いた声、呼び止めるレムとラムの声すらも振り切り、進んで行った先は――

「あ、ああああ、ああああ、あ、あ、あ、あ!!」

「スバル!!」

ベッドの上で存在する右腕を抑えて悶え苦しむスバルの側に駆け寄り、カリオストロはスバルを抑えるように強く抱きしめた。

「落ち着け！ 落ち着けスバル!!」

もう大丈夫だ。もう終わった、終わったんだ！」

カリオストロが呼び掛けても尚、普段では考えられないほどの力を

発揮して全身を跳ねさせるスバルを、彼女はただただ抱きしめ続け、やがて――

「ぜひゅ、ぜひゅっ、か、カリオストロっ。カリオストロ……カリオストロなのか？」

ひっ、ああっ!?! カリオストロ。カリオストロが……あああああ……!!」

「ああオレ様だ。大丈夫だ、生きてるぞ。

落ち着けスバル……深呼吸だ。平気だからな、もう大丈夫だからな」

スバルの意識がカリオストロを認識した途端、スバルはしやくり上げるように泣き出し、打って変わって彼女を抱きしめ返し始めた。

苦しいほどの抱擁だが、カリオストロは文句すら言わずに、安心させるように背中を撫で続ける。

「お客様?!」

「カリオストロ!? 一体、どうしたの?」

「――それ以上、近づくなッ!!」

未だ泣き喚くスバルを落ち着かせていると遅れてレム、ラム。エミリアがスバルの客室に辿り着いたと同時に、カリオストロは声を荒げた

スバルはレムとラムの声を聞くと「ひいつ!」と強く怯えはじめ、カリオストロはその二人がスバルの視線に入らぬように、三人に背中を向けたままで……やがて首だけ振り返って、にっこりと笑った。

「……大声出してごめ〜んね☆

でも今、スバルはあの事件の影響で凄いパニックを起こしているみたいなの☆

だからちよつと落ち着かせてあげたいんだ☆ すぐにそっちに行くから、少しだけ待っててね☆」

「え。ええ……ごめんなさいカリオストロ」

「……大変失礼しましたお客様。行くわよレム」

「っ、……はい姉様」

すぐごとトンボ返りして客室から出ていく三人を、カリオストロ



も申し訳なさそうに、それでも手を振って笑顔のままで見届けた。

——だが最後に客室を出たレムが扉を締める間際、彼女は見てしまった。

カリオストロが笑顔ではなくレムを睨みつけていたのを。

## 第十九話 割れ鍋に綴じ蓋

屋敷での二回目の死に戻りはスバルにとっても、カリオストロにとっても今まで最悪のものだった。

スバルにとっては都度5回目の死……通常なら生涯に一度。稀々な経験の筈の「死」を5回も味わって居る時点で最悪に違いない筈だろうが、今回は「死」の質が違った。

何せ信頼を寄せていたレムとラムに襲われ、信服していたカリオストロが目の前で死んだのだから。

スバルには異世界で少なからず舞い上がっていただけでなく、異世界での生活をいまだ現実に捉えていない節があった。

訳も分らず飛ばされた世界が、日々懸想していた空想のような世界であって、更に自身を主軸として幻想の物語のような展開が続けていけば——それも無理もない事だろう。

死に戻りは破壊された体は五体満足、傷一つなく戻すが、傷だらけになった心までは戻してはくれない。レムとラムへの恐怖心。自身から沸き立つ無力感彼の心に醜く深く刻まれたままである。

その結果、スバルには身近な頼れる存在への、強い依存心が芽生えていた。

「……スバル」

一日目夜。

ロズワールとの話の最中にいきなり部屋を飛び出し、ベッドの上で発狂するスバルを宥めたカリオストロ。

エミリアとレム、ラムを部屋から追い出した後もスバルは不安定な状態が続き、カリオストロが少し部屋を外すだけでそれはそれは取り乱す程だった。

あの時刻み込まれた五体への痛みに、焼き付いた敵意と、失意。それらは死に戻りをした後も彼の精神を蝕み続けている。

今まで四度の死を迎え、それでも尚見た目元気に溢れていたスバルだったが、所詮それはただの空元気ではなかった。

死を迎えるたびに彼の精神は磨り減り続けており、今回の件で無残にも彼の心は擦り切れてしまった。

リセットされた今でも、彼に見えている世界は現<sup>うつ</sup>ではなく、虚<sup>うつろ</sup>なのであろう。

絶望の世界で今も彷徨うスバルに付き添い、何度宥め続けても彼の心は癒えること無く、ただただ痛みを強く発し続ける。

そして絶望から逃れんとやがて自傷行為にまで発展しかけた所で、カリオストロに体内のマナを弄られて、強制的に眠らされた。

叫び続け、泣きはらし歪めた顔は気絶により一時の落ち着きを得て、子供そのもののような表情に戻る。

気絶することによってようやく休息が取れるスバルを、カリオストロは沈痛な眼差しで眺める他なかった。

「……」

涙の跡が残るスバルの頬を手の甲で撫でたあと、カリオストロは部屋を後にしようとする。

カリオストロにとってスバルとの付き合いは短いが非常に濃いものだ。

アイツ<sup>グラン</sup>とは違って馬鹿なコイツを少しは悪くないと思った矢先に、このような状態になってしまった事を……悔やまざるを得ない。

「これは自分の責任だ。」

自分が起こした不始末の結果だ。

何が片手間で見守るだ。何が天才だ。大言壮語したかつての自分は道化にしか思えない。カリオストロの心には後悔が、自身への怒りが。止まる事はなく積もっていくのを感じる。

唯我独尊を貫いていた頃。

他人は他人、自分は自分だと割り切っていた頃はこのようなように苦しむこともなかった。

だがアイツと出会ってしまった為に。

あの船で皆と過ごすうちに。

人との繋がりを知ってしまったうちに。

守るべきものを得てしまった途端に。

——この体たらくである。

(……オレ様も、弱くなったな)

ふう、と蟠りを解すように、深呼吸をしながら部屋の扉を開け、閉める。

すると、閉めた扉の陰に誰かが居た。

「……何やってんだお前」

「……」

そこに居たのは銀髪のハーフエルフ、エミリア。

彼女は一瞬カリオストロを見て喜色が顔に浮かんだが、直後に見咎められたかのようにしゅんとしていた。

「その……二人がすごく心配で……」

……えつと、スバルは大丈夫だったかしら？ 傷とか……」

「……心配することあねえ。傷なら完璧に治癒しているさ。」

あいつがあそこまで取り乱したのは外傷的な問題ではなく、精神的な問題だ。

殺されかけた時の記憶が悪いように残っちゃってんだろが……あの状態はあくまで一過性のものだ。

今日明日で直るものじゃあないかもしれないねえが、しばらく落ち着くまでは……安静にさせるしかねえな」

「それ、大丈夫って言うのかしら……」

カリオストロがスバルの症状を話すと、事更に申し訳なきような顔をしだすエミリア。

彼女は自らの手で強く握りこぶしを作り、勢い良く目の前の少女へと頭を垂れた。

「ごめんなさいカリオストロ！」

私が、私がスバルを巻き込んだばかりに……！」

半ば予想していた反応。

前日も辿ったエミリアの同じような謝罪に、若干うんざりとした気持ちだがカリオストロに浮かんだ。

「……勘違いするんじゃないやねえよエミリア。」

お前が巻き込んだんじゃないやなくて、あいつが、オレ様達が勝手に巻き

込まれていったんだ。責任の一端はオレ様達にもある。

スバルの件はお互いのヘマが呼んだ事故だ、気にしすぎるな」  
カリオストロは短くも濃密な付き合いを繰り返す事で、彼女が悩みを抱え込み続けるタイプだと見抜いていた。

エルザに襲われたスバルがあのように苦しむ姿を見て、心優しくも責任感の強い彼女は心に募りに募った罪悪感に非常に堪えたのだろう。パンクしそうになったその気持ちの吐き出し先を、無意識に求めていた結果がこれだろうとカリオストロは推測していた。そしてそれは事実だった。

今にも泣き出しそうな雰囲気、エミリアはカリオストロへと謝意を表し続ける。

「でも、私が……私が徽章を盗まれなければこんな……！」

「……過ぎたことを悔やんでも何も解決はしない。」

悔やむ事を否定はしねえが、悔み続ける愚挙だけはするなよエミリア。

——ああ確かにお前は徽章を盗まれたさ。その結果、何の因果かスバルはケガをした。

ならエミリア、お前はこれからどうするつもりだ？

ただ悔やんで悔やんで、自分が楽になるためにオレ様にごめんなさいと謝り続けるつもりか？」

「そ、そんな事は……しないわ」

「だろうな、それは馬鹿がすることだ。」

仮にも王様候補がそんなつまらない事をするとは、オレ様は思っかねえぞ。

なら行動だ、エミリア。お前が考える、最善の行動を起こせ」

「……私が考える、最善の行動」

エミリアの瞳は気付けば潤んでいたが、その目には徐々に決意の色を帯びていく。

「……スバルの外傷はもう？」

「完治済みだ」

「精神的な傷は？」

「重症。正直、発狂しかけていたレベルだな」

「……………」

エミリアはカリオストロの目の前で両の人差し指で自らのこめかみを左右から突き、目を瞑りながらうんうんと唸り出した。

また古臭い考え方だなとその様子を観察するカリオストロは、正直彼女がスバルに出来る事などほとんどないと考えていた。

出来て衣食住の提供、更に話し相手になる程度か。

はたしてエミリアが考える最善の行動は一体なんだろうか。

期待しないで彼女を見ていると……ようやく目を見開いたエミリアはカリオストロへと告げた。

「決めたわ。——私、スバルが完治するまでお世話をするわ」

「……………は？」

「スバルは私が責任を持ってお世話するって言ったの。」

落ち着くまで私が付きつきりで！

あ、当然だけど王都からとびきりのお医者さんも呼ぶわ、期待は出来ないかもしれないけど、何か分かる事もあるから……」

決意の色で満たされた目で、ふんすとやる気に満ち溢れるエミリアに、カリオストロも流石にストップをかけた。

「待て。待て待て待て！」

世話ってお前……それがエミリアが考えた最善の策なのか？」

「ええ。……私、考えてみたの。」

私が出来る事って外傷を治す治療魔法くらい。

衣食住の提供は当然だから考えないとして……あとは話し相手になるくらいしかないなって。だったら、出来る事を……とびつきり凄くしようって思ったの」

「お前、王様候補として勉強とか執務とかあるだろうが。」

それに世話ならレムとラムに頼れば……」

「あら。スバルがいる部屋で勉強をすれば済むだけよ。」

それにスバルは何で分からないけど、レムとラムが苦手なんですよ？

……ごめんね、扉越しにスバルの声が聞こえてきたの。

どこであの二人の事知ったのか分からないけど、怯えるくらいならお世話とかも私がしてあげた方がいいんじゃないかなって」

ここに来てカリオストロは、エミリアがスバルが居る部屋の前でずっと待機していた事を思い出した。そう、カリオストロが狂乱するスバルを宥めていた間も、彼女は部屋の前に居たのだ。

スバルの叫びが扉越しに聞こえていてもなんらおかしくはない。カリオストロは自らの髪を片手でぐしゃ、と軽く掻き乱すと……ため息を添えてエミリアへ告げた。

「……まあ、そうだ。」

何故かは知らないが、あいつはレムとラムに異常に怯えている。

……はあ。元よりお前には時々でいいからスバルの話し相手になつてやって欲しいっていうのと、レムやラムをしばらくスバルに近づけるなど伝えるつもりだったし……渡りに船か」

「じゃあ……！」

「ただし、オレ様も出来る限りスバルには付き添うつもりだからな。」

お前も流石に四六時中スバルには構う事出来ないだろうから、交代しながら看病だな。

……オレ様が用事か何かで席を外した時とかは、しっかり頼むぞ」

「ええ、任せてカリオストロ。」

私スバルのために、すごく頑張るんだから！」

§ § §

屋敷に来てから二日目。

当初の予定通りレムとラムを遠ざけ、カリオストロとエミリアは二人でスバルを看病する事になった。

スバルも一日目に比べればまだ落ち着いているようだが、時折見えない何かに怯えるようにして布団に縮こまり、単純な会話は出来ても途中で発作的に泣き出すなど、刻まれた恐怖が根深い事を二人に示していた。

……エミリアが看病すると言った時に、カリオストロが真っ先に危

惧したのはスバルが余計な事を口走らないかどうかだった。下手をしたら「あの言葉」を連ねてしまうのではと。

ただ今のところはそれもない。恐らくは、彼に根付いた恐怖がそれをさせないのだろう。

そう思うと尚更、自分が起こした始末の罪深さが浮き彫りになって仕方がなく、カリオストロは後悔の念に囚われそうになったが……それよりも。それよりも彼女には今、気になる事があった。

「はいスバル。あーん」

(……エミリア、お世話張り切りすぎじゃねえか?)

今、カリオストロの目の前ではベッドの横に椅子を用意し、座り込んだエミリアが昼食をスバルの口に運んでいる所だった。

どこか虚ろな表情の彼は、受動的にそれを受け入れている。そこには恥ずかしさも嬉しげな様子も内包されていないが……カリオストロにとってはどこか、困惑しているようにも思えた。

「すごい頑張る」という宣言通り、エミリアは張り切った。

兎にも角にも張り切った。

スバルが泣き喚けば、時に抱擁を交えて慰め、

スバルが不安そうな顔をしているなら、楽しげな会話を振り続け、

スバルが寝ている間は、ただ手を繋ぎ、

少しでもスバルの不安を消そうと、昼夜問わず精力的に動いてくれた。

ただそれだけではなく、食事の世話も。湯浴みも(流石に部屋でタライを用意していた)下手すればお手洗いまで。(狂乱状態のスバルが、果たしてお手洗いを一人で済ませられたかは彼の名誉のためにも告げない事にする。ただ二人がかりで顔を赤らめたり青ざめたりと、非常に悪戦苦闘した事だけは伝えておこう)

兎に角、今のエミリアと来たら新妻……いや母親のような甲斐甲斐しきで、過剰な程尽くし続けていた。それこそカリオストロが何もする必要が無いほどに。



これには傍についていたパックも思わず苦笑いを浮かべる他ない。パック曰く、「リアはいつもお世話されてばかりだったから、逆に誰かを世話したかったんだらうね」との事だが……。

「うう、あ……」

「あ。もう、スバルつたら駄目よ？　ちゃんと食べなきや。こぼしちゃったじゃない。」

ホラお口拭いてあげるから、じつとして」

「……スバルの世話もいいが、エミリア。お前は大丈夫か？

昨日からずっと看病して、夜なんてほとんど寝れてないだろ？」

「これぐらい、スバルに比べたらへいちゃらよ。」

まだ一日目だし、カリオストロだつて寝てないのは同じでしょう？

それにね、スバルには申し訳ないけど……お世話するの、ちよつと楽しいかなつて。

赤ん坊をあやしてるというか……そう言う気分？　ふふ、赤ん坊の

あやし方とか本で前読んだ事あったから、活用出来て良かったわ」

「お、おう……そうか、それならいいんだが」

(オレ様としては自由に動ける分助かるからいいんだが……)

エミリアに下の世話までされて真正正銘の赤ん坊扱いか……。

スバルが正気に戻っても、その事実告げたら、またコイツ発狂するんじゃないのか？)

「まああれだ、程々に休息を入れろよ。オレ様はちよつと席を外す」

「うん。行ってらっしゃいカリオストロ。」

……今度はクリームシチューよ、スバル。

レムの特製だからすごく美味しいわ、保証してあげる」

カリオストロは二人がいる部屋から抜け出すと「ある見極めの判断材料を手に入れる為に」通路の先へと進んでいく。

目的地は、来た当初に無礼を働いてしまった人物の部屋。

他の部屋よりも大きな、厚みのある木製の扉をノックすると、若干間延びした返事が帰ってきた。

「どくうぞ。」

——ああ、こーれはこれは。カリオストロ君、スバル君の容態はどうだい？」

「お陰様☆……って言いたい所だけど、

まだはつきりと良くはなっていないかなあ☆」

ロズワール・L・メイザース。

この領地を収める、道化メイクの掴みどころのない人物。

長身瘦躯の彼は、執務机に向かって書類かなにかを書き留めていたところだったようだ。

カリオストロが可愛らしくぺこりと一礼をして部屋に入ると、

ロズワールも机から立ち上がり、目の前のソファアーへと手で促し、彼女もそれに従った。

「そーうかい……それは、残念だねえ。今回の件はこちらの落ち度でもある。

彼にはしーっかりとこの屋敷で、治るまで療養して貰わないとねえ」

「それは衣食住のみ？」

そしてスバルが完治するまでって事？」

「君達が更なる滞在を望むと言うのであれば、如何用にも。

エミリア様を助けた事は、それでも尽くせないほどの恩だと考えているからねえ。

我々は彼の治療にも全力を尽くすことを約束しよう」

ロズワールの言葉に、カリオストロはにつこりと天使の微笑みを向けると……次に大きく頭を垂れて、謝罪し始めた。

「温情感謝します☆

——そして前回はお話の途中に飛び出して、大変申し訳ありませんでした」

ロズワールは鷹揚に、片手を振って返した。

「気にする事はない。むーしろ起きた彼がああなるであろうと、予期できなかったこちらのミスだったとこちらは考えて居るよ。

少なくとも、メイドの一人を彼の傍に付けておくべきだった。

たあだキミが、どうしてスバル君が起き上がる瞬間が分かったかは

少し疑問だーけどねえ……共感能力、でも持つてるのかい？」

「んー☆ 秘密☆」

「謎多き乙女、というものかい。魅力的で、いいものだねえ」  
はぐらかすと追求することを直ぐ様諦めたロズワール。

そして会話が一段落すると、狙ったかのように扉をノックする音が部屋に響く。

音の主をロズワールが招き入れると、紅茶のセットを用意したラムが入ってきた。

ラムはてきぱきと、無駄なく二人の元に完璧とも言える所作で紅茶を淹れると……主人の後ろに佇んだ。

カリオストロも、ロズワールも淹れてもらった紅茶に口をつける  
と、ゆっくりと杯を傾け……ほう、と、息が漏れた。

「それで？ カリオストロ君、キミはここに何しに来たんだい？  
顔を見る限り、この私に何か聞きたいことあるようだけど」

「やだっ☆ カリオストロ、そんなに分かりやすかったかなあ☆」  
「失礼ながら、勝手なイメージを言わせて貰うと、キミは無駄を省き効率を重視するタイプのように思ーえてねえ。

ただ謝罪するだけなら、わーざわざこんな場所にも来ないだろう？」

ニツコリと笑いながら、表面上大人しい会話を続ける二人。

カリオストロはもう一度、琥珀色の液体を少量口に含み、カップをソーサーに置くと……切り出し始めた。

「ラムも居るなら丁度いいね☆

……スバルが狂乱状態になっているのは聞いてるだろうけど☆  
どうにも解せない事があるんだよね☆」

「解せない事？」

「うん☆

……スバルは今回の件に全く関わりがなさそうな、ある二人に異常に怯えてるの☆」

そう言うと、カリオストロの視線はラムへと移る。

ラムはその視線を受けて、どう反応すればいいか分からないよう

だった。

……これは本来なら無駄な行為だ。なぜなら真相を知っている上であえて尋ねているのだから。が、この質問は自らにとって必要なもの。内面をおくびにも出さずにカリオストロは詰問を始め出す。

「聞くけど、ラムはスバルとどこかで会った事ある？」

「いいえ、ごいません」

「本当？　じゃあ何でスバルはレムとラムの名前を出しながら、怯えているのかな？」

「身に覚えがありません……お客様と出会ったのは私もレムも昨日が初めて。」

それ以前で彼のような黒髪を持つ少年とは一度も出会った覚えもありません。

彼は私達と同じ名前の存在に怯えているのでは……？」

「ふうむ。私もレムやラムとは短くない付き合いだーがねえ……。」

彼女達は幼くしてこの屋敷で勤め続けている。

様々なご客人がこの屋敷に来たもーのだが、私も黒髪の少年とはまーったく面識はなーいねえ」

助け舟を出したロズワール。

だが、カリオストロは間髪入れずに言葉を連ねた。

「魔女教」

空気が凍るとはこの事だろう。

ロズワールは表情も変えることはなかったが、ラムはその言葉に動揺を隠せず、身じろいでしまった。

カリオストロは我が意を得たりとばかりに追撃する。

「……彼が言うんだよね☆　レムとラムっていう名前と同じくらいに魔女教だ。魔女教だって☆

ラムの反応を見る限り、どうやら魔女教に何か関係がありそうだけど？

——申し訳ないけど彼のためにも、知ってることを教えて欲しいな

☆

スバルが何に怯えているのか知るためにも☆　スバルの完治の為

にも☆

多少言いつらい事だろうとも、私には、私達には知る権利がある☆  
……そうだよね？」

視線の先をロズワールに向けると、彼は瞑目しながら紅茶を傾けて  
いる所だった。

ラムは何かを堪えるように、持っていたトレイを強く握りしめる。

ロズワールは「治療に全力を尽くす」と告げた以上、断る権利を持  
たず、ラムは主人に命令されればNOとは言えないだろう。

カリオストロが求めた判断材料、「レムとラムの過去」。

それはレムとラムが本当に敵なのかを見極めるためのものだった。

## 第二十話 足りないパズルのピースは？

”スバルくん、では教えた通りに紅茶を淹れてみてください”

「任せろレム！レムの超絶テクニクには叶わねえが、将来は主夫もちよつと目指してる俺の腕をよく見てくれよ！」

”期待していますスバルくん。”

……あ、そこ違います。もつと慎重に注がないと香りが逃げてしまいますから”

レムが苦笑する。

警戒し、あれだけ距離を置いていた自分へまるで弟に対して接するかのように、親しげに。

”バルス、本当ダメダメね。今までどうやって生活してきたのかしら。”

いい？ こういう陶器や青銅器の掃除の仕方は——”

「そう言ってくれるなってラム、生まれてこの方陶器や青銅器なんて掃除した事ないんだからよ。」

まあでもこれからの成長性は◎だけ？ 一度教わったら完璧にやり遂げて見せるって”

”戯言をいつてる暇があれば手を動かさない。そう言う所が駄目駄目なのよ”

ラムが罵倒する。

ただ相手を貶めるためではなく、相手を慮つての罵倒で。

投げっぱなしではなく、懇切丁寧に指導してくれる。

すれ違いざまも。何気ない会話も。挨拶ひとつだけでも。

二人との距離が縮まり、感じられる険がなくなったと自負している。

この調子でいけば明日には更に仲良くなって。一週間立てばもつと仲良くなつていて。

一ヶ月、一年も立てばきつと、親友と呼ばれるレベルまでになる——根拠はないが、スバルはそう確信していた。

頼りになるが口うるさいカリオストロとも、初めて心奪われたエミリアとも、その保護者のパツクとも、ツンツンしっぱなしのベアトリスとも、少し怪しげなロズワールとも。

時に少し辛くも、煩くも、楽しい異世界生活が送れるという希望があった。

あちらの世界で手に入らなかったものが、こちらの世界で手に入られると信じていた。

”スバルくん”

”バルス”

呼び声がする。

音のする方へ振り返ると爽やかな昼下がりの庭に、二人が立っていた。

レムはこちらを見て、小さく手を振って笑いかけ。

ラムはこちらを見て、ふんと鼻を鳴らす。

「おお、今行くぜ」

俺も笑って、彼女達に近づくために芝生の上を踏み出す。

涼し気な風が頬を撫でる感触。

雲ひとつない空に高く上っている太陽が、燦々とこちらを照らす。

まばゆいばかりの陽光は逆光となって視界から姉妹の顔を隠した。

「さて次の仕事だな、レム、ラム。」

この新人執事、ナツキスバルになんなりとご用命を！

”そうですね。次のお仕事は——この屋敷から出ていって下さい

”

「……………は？」

未だ逆光で顔の見えぬレムが発した指示は、理解出来ないものだった。

「……………どういう、意味だ？」

”そのまんまの意味ですよ。屋敷から出ていってください。

邪魔なんです。目障りなんです。不愉快なんです。







体は、力を無くして、前に倒れた。

「っひ、あ、ひ……っ」

叫ぶ事はもはや出来ない。考えることも出来ない。

ただその場で尻もちをつき、歯をガチガチとならし、絶望に浸るしかない。

だと言うのに、絶望は自身を休ませてはくれない。

首元を掴まれ自分の身体が急に引き上げられる感覚。

掴んだ存在のは——ラム。

自身の顔に間近にまで寄せられた彼女の顔に刻まれたのは、見たことがないほどの憤怒であった。

”お前がこの屋敷に来なければ良かったんだ!!

何でお前はこの屋敷に来た!? こうなつたのは全部お前のせいだ!

お前のせいだ! お前のせいだ! お前のせいだ! お前のせいだ!!

拳が振り上げられ、蹴りが叩き込まれ。投げられ、叩きつけられ。

傍らに倒れたカリオストロの遺体の横で、あらん限りの暴虐が彼を打ちのめす。

ひび割れ、磨耗した心が頼れるモノを求めて、この地獄から救い上げてくれる人を探して、声なき叫びをあげ続けるが、地獄は終わらない——

”  
ふと終わらぬ苦しみの中、不意に自分が温かいものに包まれたように感じた。

”  
滔々と語りかけてくるような静かな音は……女性の物だ。

澄んだ音色は黒く赤く染まった世界を、穏やかな色合いに変えていく。

”—————”

気付く。これが子守唄なのだ。

暖かな手が、優しく、愛おしそうに背を撫でてくる。

聞こえてくる誰かの鼓動の音に合わせるように、ゆっくり、ゆっくりと。

”—————”

あれだけ感じていた痛みが、苦しみが和らいでいく。

こびりついていた恐怖が、絶望が徐々に剥がれていく。

”—————”

心を和らげる目の前の何かを逃したくなくて、自然と身体がソレに抱きついていった。

それは逃げる事もなく、自分を更に包み込み……そのまま、穏やかな眠りが自分を誘った。

”—————おやすみなさい、スバル”

§ § §

前回の死に戻りは重ねて言うが、カリオストロにとって最悪の回であることに違いなかった。ただ、ソレ以上に情報がぎつしり詰まった回であることに違いもなかった。

レムから生えた一本の角。

レムの魔女教への尋常ではない恨み。

レムのラムへの異常な程の愛情。

いずれも謎ではあるが、その情報が解決に繋がる糸であるとカリオストロは睨んでいる。

……前回スバルを殺害しようとした存在はレムであり、一回目の死因に関わっている可能性も高い。二回目の死でレムとラムへの悪感

情も募りに募っているので、今すぐ感情に身を任せて亡き者にしてしまえば、という気持ちも多々あった。

だが、一回目の死をもたらした存在が別人である可能性は未だに残っているのだ。

情報を集めきり、全ての芽を詰み、可能性を考慮する。

故にカリオストロは、感情を殺してレムとラムを見極める。

研究者であり探求者であるカリオストロに妥協は、ない。

「我々姉妹がこの屋敷に来る切っ掛けは、確かに魔女教によるものです。」

それ以前は村で密かに、レムと共に過ごしていました。

——が、ある日。私達の村は唐突に襲われました」

執務室、レムとラムの情報を求めたカリオストロはラムを説き伏せた後……観念した彼女は静かに、何かを押し殺すように語り始めた。

「襲われた理由は？」

「……はつきりとは分かりません。ただ推測は出来ます。」

私達がある特殊な種族であるからかもしれない」

「特殊な種族、ね☆」

大体の推測はついているが、カリオストロは口を出さずにラムの言葉を待つ。

「はい。鬼族と呼ばれる種族です。」

頭部に角を持ち、強靱な身体と強力な魔法を行使でき、その力は他の亜人族に比べ比類なき物を持ちます。

ただ種としての絶対数は非常に少なく……絶滅に瀕する種族でもありました。我々の村も数えるほどの人数しか居ませんでした」

「そして我々の村が鬼族、最後の村でした」と続けるとラムはカリオストロの前でおもむろに付けていたカチューシャを目の前で外し……頭部の髪を自ら掻き分け、あるものを晒した。

「……角、斬られたの？」

それは角の痕跡。頭部の中心に1つ、丸い出っ張りが存在していた。

ラムはカリオストロが確認したのを見るとすぐさま髪を正し、再度

カチューシャを取り付けた。

「かの集団との交戦中の際に」

「ふうん。一騎当千、かどうかは知らないが。その種族の力を持ってしても、魔女教には耐えられなかったって訳なんだ☆」

「……夜更けの急な奇襲でした。集団で襲われ、気付いた時には村はほぼ全滅。」

私も必死にレムを守ろうとしましたが……敢え無く」

「それで、絶体絶命なラムレムを救ったのが」

「私、という訳だよね……さて、此処までの話でスバル君とレムやラムが関係なさそうなのは分かる筈だーけど？」

今まで静観していたロズワールが反応し、従者のプライベートを根堀葉掘り聞かれるのを嫌ってか、カリオストロへと投げかける。が、カリオストロは一蹴した。

「関係ないと判断するのはそっちじゃなくて、こっち☆

ラムには申し訳ないけど、納得するまで質問は続けるからね☆

じゃあ次は……魔女教の奴らの出で立ちや特徴、教えてくれる？」

ロズワールは肩を竦めると、再度紅茶に口を着けて静観のスタイルに戻り、ラムも感情を殺して冷静に回答する。

「彼らは全身を黒装束で包んでいました。」

手には小さな短剣のようなものを持ち、魔法を行使します」

「またベタな格好だね……でもそんな格好してる癖して、鬼族に勝つてしまうくらいには凄腕なんだ」

「一人一人の強さ自体は大したことはありません。」

奴らの恐ろしい所は、死を厭わないこと。

死を怖れずに、時に味方ごと巻き添えにして我らを追い詰めたのです」

ベアトリスも言っていたが、魔女教徒はサテラに狂信と言えるまで信仰をしている。死兵と化し、そこそこの力を持つ存在が大量に襲ってくるのは……確かに厄介な事だろう。

カリオストロは内容を咀嚼するように紅茶を飲み、ふと新たな疑問が湧き上がった。

「……ん？ 大したことないって、その時ラムは普通に戦えてたの？  
結構幼い時だよね？」

「……昔の話ではありますが、ラムは村では神童とまで言われており  
ましたので。」

しかしながら当時若かった私は、十数人程倒した所であえなくやれ  
てしまいました」

誇らしげでもなく淡々と告げるラムに、神童の名は伊達じゃないな  
と関心する他ない。

「じゃあラムは当時、どうだったのかな？」

本当ならラムに聞くのが一番いいのだけれども☆

「……おやめ下さいカリオストロ様。ラムは私ほどあの一件に関して  
整理がついておりません。代わりに私が全てお答えします。」

——ラムは当時、魔法や戦うことそのものが苦手でした。

無理もない事です。起きたら村が火に包まれ、至る所で身内も倒れ  
ていたのですから。怯え切ってしまうって、戦うことも、逃げることも  
出来なかった」

毅然とした口調でラムへ飛び火するのを避けようとするラムに、カ  
リオストロは特に文句はない。

また、ラムは当時そこまで戦闘力がなかったとのこと。

ならば逃げ遅れたラムが怯えるラムを助けるために戦ったのは想  
像に難くないだろう。

ラムの行き過ぎた姉への愛情も、そこが根源なのかもしれない。

——これまでの質問で大体のことが掴めた。では最後に、とカリオ  
ストロが問うた。

「この屋敷に来たスバルを初めて見た時、どう思った？」

隠すこと無く、心のままに伝えて欲しいな☆

「……？ 彼ですか？」

質問の意図が分からず無意識に首を傾げるラムは、それでも律儀に  
彼女の問いに答えた。

「——そうですね。一言で言えば、頼りない。でしょうか。」

エミリア様を命の危機から救ったと聞いたので、もつと頼れそうな

身体をしているかと思つたのですが……あとは珍しい、と言えるんでしょうかね」

「珍しい？」

ぴく、とカリオストロが反応する。

「ええ。あの服と言い靴といい……見たことがないものでした。

私達の知らない地方の服……そう、例えばカララギなどでは流行つてるのでしょうか」

「……分かった。ありがとうラム☆ それにロズワール☆

答えづらい事を答えてくれた事に感謝と、失礼の謝罪を」

（——スバルの魔女の残り香に気付けるのは、妹だけか）

これでカリオストロが得たい情報が全て手に入った。

あの夜、レムが見せた一本の角は鬼族のもの。仕組みは分からないが本気を出した時など、ああして角を見せるのだろうか。

魔女教への深い恨みと、ラムへの強い愛情は幼い時に奴らに里を襲われた事から。

そこから推測される、あの庭での惨劇の真相は——魔女の残り香に過剰反応してしまったレムによる凶行の可能性が非常に高いだろう。

……最初から魔女の残り香を振りまくスバルを、レムは非常に警戒した事だろう。だが、そのまま過ごしていれば警戒のレベルは超えなかつたのだ。

惜しむらしくはあの夜、自らが行ってしまった失態によりスバルの残り香が急に強まってしまい——彼女の警戒レベルを振り切れてしまった。

未だ過去に整理がつけられなかつたレムは、激高し、監視中のスバルを殺めてしまったのだろう。そして自分はそのレムを殺め、異変に気づいたラムが自分を殺め——ああなんて下らない。

もしこれが事実だとすれば——知らなかつたとは言え、自らの失態の罪深さにカリオストロは頭を抱えたくなる程だった。……許されるか許されないかは分からないが、スバルには必ず謝罪しなければならぬだろう。

「いえ。お気になさらず。スバル様の容態回復に繋がるのであれば」

「治療には全力を尽くすといーったからねえ。」

そーれで、知りたい情報は得られたかな？」

「大体はね☆」

「そーうかい。それはそれは重畳。」

……ちなみにこの話、ここだけにしておいて欲しいものだね」

「……無闇矢鱈に言いふらすような内容じゃないのは分かってるよ☆」

「頭の良いキミには過ぎた忠告かもしれないが、念のためさ。」

事と次第によーつては、考えないといけないからねえ」

カリオストロは返事をする事もなく、天使のような微笑みをロズワールへと浮かべて部屋を後にし……スバルとエミリアが待つ部屋に戻っていった。

「……どう言う事でしようか」

「さあて、ね。キミ達狙いの、どごぞの差し金のようにも思えるが……見る限りはどーにもそうは思えない。彼女はスバル君の事を真摯に考えて行動しているようにも見える——たーだ、ねえ」

「？」

「……スバル君が、何故レムとラムという名前を知っているのか。何故キミ達を見て怯えるのか……そこだけは非常に興味深いね」

ロズワールはラムを背に、執務室の窓から外を覗き見る。

そこに広がるのはどこまでも青い空と、広漠な森林。

更にロズワールは懐から黒く小さな本を取り出すと、それを愛おしげに撫でた。

「……彼がそうなんだろうね。きーっと」

その小さな眩きはラムには届く事はなかった。



## 第二十一話 復活と告白と決別と

「スバルの様子がおかしい?」

「そうなの。昨日までは……ううん、昨日までもずっと落ち着かない様子だったんだけど、今日は特におかしいというか……。朝からずつと布団に籠ったつきりで、出てきてくれないの」

「ふうん……布団にねえ」

屋敷に来てから四日目の朝。

朝食も過ぎた頃、エミリアとカリオストロはスバルが寝ている客室の前で話あっていた。

カリオストロはラムとロズワールから話を聞いた後、エミリアと二人で寝る間を惜しんで、交代しながらスバルの看病を続けていた。

本来なら前回、前々回に続けて禁書庫で情報収集を行いたかったのだが、スバルという扉渡りを抜けられる存在がいない事で禁書庫の主との接触が出来ていなかった。よって満足に情報収集が出来ず、空いてる時間はエミリアやパックと会話に花を咲かせるか、看病に傾倒するしかない状態に陥っていた。

「いつもは不安を口に出してくれたから対処もしやすかったんだけど……今日の朝になったら急に布団に籠りつきりになっちゃって、話しかけても何も話してくれないの。こんな事初めて……どうしたらいいかしら、カリオストロ。」

……大丈夫かしらスバル。ひよんなことでお腹でも壊したとかじゃないといいんだけど……」

「ひよんなことって今日び聞かないね……☆」

おろおろとカリオストロに悩みを吐露するエミリアの姿は、まるで子育てに悩む母親のようだ。いや、あれほどの懇親を見せているので、もう母親でいいんじゃないかなという気すら湧き上がってくる。彼女の世話焼きっぷりと来たら、焼かれたほうが骨抜きになりそうなほど甲斐甲斐しすぎた。あちらの世界で知り合った極度の世話焼き少女、ナルメアの姿をエミリアに重ねながらカリオストロは言葉を連ねる。

「確かに今までにないが、話しかけても無反応なのか？」

「そうなの！ いつもは多少なり反応あったのよ？」

でもね、今朝からいきなり反応しなくなっちゃったの。お布団もずーっと被りっぱなしで、息苦しくなっちゃうわよって剥がそうとしても頑なに布団を被り続けるの。……もしかして世話、焼きすぎちゃったのかしら。鬱陶しかったのかな……ごめんねスバル、私もつと……」

「おい馬鹿、反省会始めようとすんな」

反省会までしたら尚更ナルメアと一緒にだと、トリップし始めようとするエミリアを軽く揺さぶり、はつとしたエミリアはぶるぶると顔を振って正気に戻った。

スバルが治るまでつきつきりでお世話すると豪語したエミリアだが、彼女はどうにも根を詰めすぎている節がある。食事こそ削らないが、睡眠時間を削っているために思考も悪い方に偏り初めているような気がする。……どこかで休ませる必要があるだろう。

「兎に角、話を聞いただけじゃわからねえな。一旦見させて貰うぜ」

「うん。お願いカリオストロ」

二人で部屋の扉をくぐる。

するとエミリアの言ったとおり、キングサイズの豪華なベッドの上で、布団に籠ったスバルの姿があった。

聞く以上に珍妙な光景だ。防衛本能が働き、見るもの全て近づくもの全てが恐ろしくなってしまうのだろうか。出来る限り大きな音を立てず二人で近づき、山になった布団部分をカリオストロは優しく揺さぶった。

「おいスバル、スバル大丈夫か？」

「……………」

帰ってくる反応は無言。

布団の膨らみ部分が緩やかに上下を繰り返すが、それは寝ているようでもなければ息を潜めて隠れている様子もなく、恐怖に引きつっている様子でもない。まるで意図的に無視しているような、そんな印象を受けた。

エミリアもカリオストロに次いで心配そうに手を伸ばし、優しく揺さぶった。

「スバル。スバル……平気？　もしかして……昨日の料理の中に嫌いなものとか入ってたから怒ってる？　昨日の料理、おいしかったけどピーマルが入ってたから……なるほど。うん。それなら気持ち分かるわ。私もピーマルが入ってるのとちよつと、うん。すこーしだけ不機嫌になっちゃうかもだから……」

「スバルがピーマル嫌い前提で話すんのやめろ。」

あと好き嫌いせずに野菜くらい取れ王様候補」

ピーマル苦いんだもの……と渋るエミリアを置いて、カリオストロはスバルの容態を探る。

よもや一服盛られたのか？　それとも精神的な動揺を受けてしまっただけか？　何があったのかは知らないが、こうも籠もられては分かるものも分からない。布団を被って亀のようになってしまったスバルに対して、どうしたものかと熟考しようとするときゆるるるう……。

「……」

「……」

可愛らしい音が聞こえた。

瞬時にエミリアを見るカリオストロに対し、エミリアもきよとんとした顔でカリオストロを見返していた。

互いの音の発生源を探る視線は、やがて一つに収束する。……そう、この布団の膨らみへと。

「……スバル、朝ごはんまだだっけ？」

「うん、私が来た時には籠りつきりだったから……まだね。」

ね、スバル……お腹空いたでしょ？　用意してあるから食べましょう、またあーんつてしてあげるから……あつそれとも……もしかしてお腹痛いとか!?　大丈夫？　スバル、一緒にお手洗い行く？　私もそろそろコツ覚えたから——」

「だあああああやめてくれええええ——!!」

二人の目の前で急に布団が吹き飛んだかと思えば、顔を耳まで真っ

赤に染めたスバルがそこにいた。

エミリアとカリオストロは目の前の光景に目を白黒させる他なく、肝心のスバルはそんな二人を置いてその場で両手で頭を抱え、何かの感情に駆られて悶え始めた。

「二人にあやされて、宥められて、慰められて、食事の世話も手取り足取り!？」

いや嬉しいよ、嬉しくて本当顔にやけるくらいなんだけどソレ以上に申し訳ないっていうか恥ずかしさが満漢全席だわ!? 俺何回泣いた!? つつか、何回抱きついた!? ソレ以上に俺、身体も二人に拭いて貰ったあげく、と、と、トイレっ、お、お手洗いまで世話されたとか……うわああああああ!! 美少女二人にやらされると破壊力更にプラス、っていうか羞恥心半端ねえよいつそ殺してくれえええええ!!」

「え、スバル? え? え?」

あつ、だ、大丈夫よスバル! 今誰も貴方を脅かす人なんていないから……!」

「ちよ、エミリアたん!? うわ!？」

あつたかやわらか、うわ……うわ——ッ!? す、すげえ嬉しいけど大丈夫だから、大丈夫だから離れてくれ——ッ!？」

「……あー、うん。まああれだ。何とか目は覚めたようだな」

スバルに抱きつくエミリア、そして大きく動揺するスバルを、カリオストロは呆れた眼差しで見つめ続けた。

§ § §

「本当に大丈夫なんだな?」

「嬉し恥ずかしさで心臓バクバク言ってる以外はな!」

動揺したスバルが落ち着きを取り戻した頃に、改めてカリオストロが聞くと、スバルは心臓に手を当て未だくすぶる羞恥心を抑えるようにして彼女に返答した。

看病の甲斐あつてか、それとも別の要因か。スバルの心は話せる程

度まで回復出来たようだ。聞く限りでは今日の朝早くに意識がはつきりと戻っていたようだが……どうやら意識が朧げだった頃の記憶もちゃんと残っており、受けた看病、介護の内容を自覚した結果、恥ずかしさの余り布団を被って悶え続けていたようだ。

下らない真相に閉口するも、いつものスバルらしい行動に若干の安心を覚えたカリオストロは、心的外傷の影響をつぶさに確認しようと彼の目を覗き込むが、ソレを恥ずかしがりスバルは目を逸らす。

そんな二人を尻目に、いそいそとプレートに食事を載せたエミリアがスバルに詰め寄ってきた。

「でも良かった、スバルの目が覚めて。」

「ずーっと落ち着かない感じだったから……心配したのよ？」

「あ、これ朝ごはんよ。ほらスバルあーん……」

「その節は本当にお世話になりました。ようやくナツキスバル、復活の時であります……って待って、待って大丈夫だよエミリアたん!! いや正直あーんとか嬉しすぎるけど、流石に日常生活過ごせるレベルまでには回復を——」

「駄目よ、本人がそう言っても身体はまだかもしれないじゃない。」

「カリオストロに聞いたわ、心の傷はそう簡単には治らないって」

「いやごもつともだけど、少なくとも今は大丈夫……ってかこれ以上世話かけさせると罪悪感がやば」

「あーん」

「……あの、エミリアたん？」

「あーん」

「……」

「あーん」

「……あ、あーん」

「どうやらエミリアはこの数日でお世話する喜びに目覚めてしまったらしい。」

「頑なに食べさせようとすするエミリアに根負けして、スバルも顔を赤らめながら差し出されたスプーンを口に含み、食べた。」

「続く「美味しい?」の声に小声で「……美味しい」と返す様子は、端

から見れば恋人……ではなく母親と子供の姿のように思えて仕方がない。

これは恋が芽生えるのは当分先だなど苦笑が半分、そして照れまくる初心なスバルの姿による愉悦が半分の笑顔でカリオストロはスバルを見つめた。

「そこー。まじまじ見ないでくれますう!？」

「スバルスバル、カリオストロも☆ あーんってしてあげようか☆」  
「やめろオ！ もうお腹一杯です色んな意味で！」

「もういいの？ まだ一杯あるけど……あ。やっぱりお腹痛いとかでしよう？」

我慢しなくてもいいのよ。もしそうならお手洗い付き添ってあげるから……」

「エミリア様本当に勘弁してくださいこのままでは死んでしまいます一人でトイレいけますお腹痛い訳じゃないんですただ羞恥心が半端ないだけなんですお許し下さい」

エミリアの無自覚かつ無慈悲な追い打ちにスバルが再度布団に籠りそうになった所で、ふと思いついたようにスバルが呟く。

「そう言えば今日って何日目だ？」

「何日目？」

「あー、屋敷に来てから4日目だ」

「……もう4日も経ってるのか」

ぐしぐしと眠気を取るかのように自分の瞼をこするスバル。

ソレを見てカリオストロはエミリアへと提案した。

「なあエミリア、悪いがちよつとスバルと二人で話させて貰ってもいいか？」

「それって内緒話？ 私と一緒に居なくても平気？」

「まあ内緒話だな、平気だ平気。」

つつかオレ様に母性発揮しても意味ないだろうが」

「……そう。うん、分かったわ。何かあったらすぐ呼んでね」

若干残念そうな顔を見せた後エミリアは素直に従い、部屋から出ていく。そうして二人きりになった部屋でスバルとカリオストロが視

線が交差し……若干の沈黙の後、カリオストロは静かに話を始めた。

「……何があったかは分かっているか？」

「残念な事にな。……正直忘れちゃいたい思い出だ。」

「あんなこと、何で。何でって今でも思うぜ、それにカリオストロが——」

「悪かった。お前には辛い記憶を思い出させちゃうな。」

「……申し訳ないが状況判断するためにも否が応でも思い出して貰う事になる。いいか？」

「凄惨な過去を思い出して、スバルの顔に苦しげな表情が刻まれると彼女は申し訳なさそうにながらも改めて問う。」

「スバルは逡巡することもなく、ああと力強く頷いた。」

「……あの日、いつもの定例の後お前は外に出たが……それはなんでだ？」

「あの時はただエミリアさんに会おうと思ってたんだよ。」

「エミリアさんってほぼ毎日、夜になると微精霊との語らいを庭でやってるからさ。丁度あの時間にいけば上手く出会えて、話が出るって寸法……だったんだがなあ、あの日はエミリアさんは居なかった。だからちよつと時間潰して、それで帰ろうとしたら——」

「急にあの腕が伸びて、レムに襲われたと」

「そうだ。言っとくが何もオレはやってねえぞ！」

『あの言葉』を言ってもいないのに急に——カリオストロ？」

「——すまんスバル。あれはオレ様が原因だ」

「……！」

深々とその場で頭を下げるカリオストロに、スバルは驚愕するしかない。

あの理知的で、理性的で、尚且つ慎重を好む彼女がああ惨劇の原因と誰が思うだろうか。頭を下げたままあげようとしないうカリオストロは、その原因を紡ぐ。

「オレ様は丁度その時、お前のここでの1回目の死因を辿っていた。ベアトリスに借りた書物を調べて、お前の死因になりそうなものを紙に纏めていたんだが……その時、迂闊にもお前の“あの能力”につい





カリオストロの話が繋がっていき、スバルは察する。

そう、レムはカリオストロ、ベアトリスに次いで魔女の残り香が分かる存在であり、過去に魔女教の集団が振りまいていた匂いとスバルの匂いが同じであると気付いたのだ。

「そうか……これでレムが俺を睨んでくる理由が分かった。

道理でこの屋敷に来た時から睨まれる訳だ……っつー事は、襲われた理由は……急激に膨れ上がった魔女の残り香に反応したレムの暴走——？」

「確認、とまでは行かないがほぼ間違いないだろうな。

姉のラム曰く、レムはまだあの過去を引きずっているようだから」

「なーるほどな——……腑に落ちたぜ」

「……」

事の真相を理解し、彼はうんうんとその場で頷く。

その様子はアレだけの残酷な仕打ちを受けた者の姿とは思えず、対する全ての真相を語り終えたカリオストロは、刑を執行される前の罪人のような面持ちでスバルを見つめていた。

「……言つとくが」

「わぶ」

急にスバルの手が伸び、カリオストロの髪をかき乱し初めた。

「この件について俺はカリオストロを恨んじやいねえよ。

そりゃ正直、あんな目に合うなんて思ってたし……あんな物、見たくはなかったぜ。

だけどさつきも言った通り、初見殺し過ぎて責められねえよ。

あんなルール聞いてもないし、レムが魔女教に恨みがあっただなんて持つての他だ、多分何もしなくてもアイツらは俺を襲ってたかもしれないしな……。

ソレに、あの時カリオストロは俺を助けに来てくれた。それだけでも感謝してもしきれねえぜ。

お前は取り返しつかないって言ったけどな——取り返し、つくぜ？  
なんたって諦めない限り、死んでも俺はずーっと繰り返せるからな  
！」

反省するカリオストロを宥めようとスバルはわしやわしや、わしやわしやと、触り心地の良い髪をかき乱し続ける。

カリオストロは自分の髪を良いようにかき回される事に、更に自分より遥かな年下に慰められる事に怒りと恥ずかしさを感じていたが……彼への負い目と、彼に拒絶されなかった事への幾分の安堵が邪魔をしており、その手を払い除けるか除けまいか迷い、されるがままになっってしまった。

「……い。いかげんオレ様の髪をわしやるんじやねえ！」

「あー俺、心傷ついたなー、マジ傷ついたわ。」

トラウマもんだよなーこれ、この責任誰が取ってくれんのかなー」  
「~~~~~ツ!!」

今度はスバルに代わってカリオストロが顔を赤くする番か。

結局それを盾にされると負い目を感じている彼女にはどうしようもなく。されるがままに髪の毛をわしやられ続けたカリオストロは、スバルの攻撃が終わる頃にはふるふる震えて、羞恥と怒りを我慢している状態になっていた。

「……（やべ、やりすぎた）あー、カリオストロ……さん？」

「ふーっ、ふうー……っ、満足、した……か？」

「しました。超しました。なま言っすいませんでしたカリオストロ様。」

もう無茶ぶりとかしませんのでハイ」

流石のカリオストロの様子に、先程まで一転攻勢を見せていたスバルも顔をかくかくと揺さぶられながら首肯する他無い。

その言葉を聞いた直後、顔を赤らめたまま髪を急いで整え始めたカリオストロは、スバルを睨めつけるようにして話を続けた。

「……二回目の死の話はしたな？　じゃあ次は一回目の死の話に戻るぞ。」

正直な話、一回目の死はレムによるもの……じゃない可能性が更に高くなっている」

「！」

「言っただけだろが、丁度お前が買い出しに行った村の周り。」

つつかこの周辺の森は全部が全部魔獣の群生地だ。

そこには『ウルガラム』っていう大型の魔獣が大量に居る。噛むと呪いをつけ、遠く離れても噛んだ相手を呪い殺す魔獣がな」

「犬型……噛み傷……まさか!？」

「お前が買い出しに言った時に、丁度子犬に噛まれたって言ってたよな？」

お前の死因は、もしかしたらその犬によるものかもしれない」

「おお、マジか。マジかよ……だとしたら初見殺しってレベルじゃないぞ。こんなの誰が分かるってんだ……」

「慌てんなスバル。まだ可能性が高いってだけで確証はねえ。

——まあ、今日ソレを確認しに行くんだがな」

一通り話をしたカリオストロは急にベッドから降りると「んじや留守番頼む」と、スバルに軽く手を上げて部屋を後にしようとしており、「へ?」とスバルは啞然とした後、彼女を慌てて呼び止めた。

「ちよ、ちよちよ、ちよつと待て! カリオストロ。確認って……村に行くのか?」

「ああ。村に行つて直接確かめる。百聞は一見にしかずって言葉もあるし、かくいうオレ様も体験主義者だ。自分で見たものしか信用はしない」

「だ、だけど今行つてあの子犬が居るとは——」

「今日は丁度屋敷に来てから4日目だ。お前が以前レムと出かけた日も丁度4日目だった。むしろ今しかねえ。既にレムと一緒に出かける約束も取り付けてる。

……つてオイ、何してる? お前は留守番だ。休め」

「いや。俺が居た方が確実だろ? だったら——」

スバルも起き上がり、ベッドから降りて急いで寝間着から着替え始めようとしていたが、カリオストロは強い物言いでソレを止めさせた。

「まだレムやラムにトラウマがあるお前が、あいつと一緒に過ごせるのか? 無理だろ。

というか、外に出てまた噛まれたらどうするんだ?

リスクは少ない方が良いって言っただろうが。いいからお前は休んでろ」

「っ、だけど……っっていうかそもそも確認って、危ないのはカリオスト口お前もだろ!？」

お前だつて噛まれたら同じく呪われるかもしれないし……!」

「……わざわざオレ様が噛まれなくても、確認する手段はある」

「そんな手段どこに……!」

……——カリオスト口、お前まさか」

スバルが何かを察するのを見て、カリオスト口はにこりと、誰もが癒される無垢なる笑みを見せる。だが今のスバルにはその笑みが、好奇心で虫の脚を笑いながらもぎ取る子供のような、残酷な笑みにしか見えなかった。

「レムが噛まれば犬が魔獣かどうかも分かるし、もしかすれば脅威になるレムも消せる……一石二鳥つてこう云う事を言うんだよね?」

カリオスト口は身内には非常に甘い。だが甘いのはあくまで身内のみ。

何もかもを救おうと、愛そうとする博愛主義者ではないのだ。

グラン達と過ごす事で多少は見知らぬ人も気にかけるようになったが、その本質は全く変わらない。

自分の手の届く人だけを「確実に」助ける。その為なら関係のない存在は全て切り捨てる。

たとえ助ける対象が気にかけていた相手だとしても。

「っ、駄目だ」

「何でだ? 相手はお前を衝動的に殺しかねない、危険な奴だ。」

それが未然に防げるかもしれないんだ、こんないい案はないだろう?」

「だ、そ、そうかもしれないけど!」

俺はまだ一周目のあのレムの笑顔が、紛い物とは思えない! だから——」

「だから、代わりにお前の命を賭けに載せろって？」

巫山戯たこと言うな。良いか、オレ様はもうまっぴらごめんだ。

あの力で戻る時の感触も、そして記憶だけ残して関係が元通りになるのも、お前が都度疲弊していくのを見るのもな。

——正直、お前があいつを未だに気にかけてるのが驚きだ。

だがな、お前が何をどう思おうともう決めた事なんだ」

「……っ、カリオス——」

カリオストロがこちらに手を向けて翳すと、不思議な事にスバルの意識が急に遠ざかっていく。

靄がかかったかのような思考しか出来ず、全身からは力が抜けていき、見えていた視界一杯にカリオストロの顔が移った。

「——今は休め。お前が寝てる間に、全部解決しておくから」

「か、りお——」

やがて自分の身体が不思議な力でベッドに移され、カリオストロによって抵抗できずに身体に布団を被される。

スバルはどうかカリオストロを止めようとするが、手を上げることも満足に出来ず、ただ部屋を去ろうとするその姿を目で追う事しか出来ない。

そして感じる瞼の重さに視界すらも徐々に小さくなっていき——

「……や☆ ベアトリスが珍しいね☆ スバルに何のよう？」

「あの侵入してきた馬鹿が魘されてると聞いて、見学しに来たかしら。……やれ「マナドレインの影響かも」とか屋敷の至る所で話されて、いい迷惑してるから、仕方なくなのよ。

ソレで肝心の馬鹿は——眠ってるかしら。なら、邪魔するのも悪いし、帰るのよ」

そして視界すらも薄れ、瞼が完全に落ちる。

どうやらベアトリスが部屋に来訪してきたようだが……やがて聞こえてくる音も、ぼんやりとした脳では断片的にしか内容を掴めなくなっ来ており——

「わあツンデレ☆ たった今スバルは眠った所だよ☆

あ。帰る前にちよーつとだけ、質問していい？」

「は？ 質問？ ……一体何が聞きたいのかしら」  
「んーつとね☆ 実は——」  
——そうしてスバルの意識は、完全に闇に落ちた。

## 第二十二話 子供、犬、メイド、怪我人

カリオストロがスバルの部屋を後にして屋敷玄関へ向かうと、既にレムがその場に居た。

その装いはいつもと変わらぬメイド服。

外であろうともメイドであろうと言う気持ちの表れだろうか。

「ごめんねっ☆ 待たせちゃったかな☆」

「いえ。レムも今この場に来たばかりですので。

早速ですが行きましようか、カリオストロ様」

デートの決まり文句のような会話を交わし、二人の美少女は屋敷を出て歩き始める。

屋敷に来て1回目の時はスバルと共に買出しに行ったレムだが、今回はカリオストロと買出しに行くことになる。

当然スバルと違い、客の身分であるカリオストロは雑用のために付き添うのではなく、「知的好奇心を満たす」という名目でレムに付き添っている。

カリオストロのレムとの外出の提案は渋られることもなく受け入れられ、当初は竜車を出そうとロズワールが提案したが、「散歩目的でもあるから」と言うそれっぽい理由でありがたく辞退した。

当然、断った理由は1回目でレム達が歩きで移動したため、竜車で移動すると起きるイベントを見過ごす可能性があるからだが。

(思えば、こっち来てからほとんど屋敷で過ごしてたな……たまには外を出るのも悪かねえな)

本日の天気は快晴。見渡す限りの雲ひとつない青空が広がり、暖かな陽光と涼しげな風が気持ちいを穏やかにさせる。まさしく絶好の散歩日和といってもいいだろう。

そして二人の視界の先には起伏のない緩やかで、長い長い一本道。道の左右は森に囲まれ、ふとすれば森林浴をしているような気分になる。

研究尽くして部屋に籠りっぱなしになる事も多々あるカリオストロは、ここぞとばかりに大きく背伸びをして新鮮な空気を取り入れ

た。

「くくくつ、はあ。今日はいいい天気だね☆」

「はい。レムもそう思います。まさしく絶好の洗濯日和でしょう。」

「こういう日のお出かけは息抜きになります」

「と、言ってもレムの今日の目的は買出しだから、仕事の延長じゃない？」

「仕事と息抜き、無駄なく両立出来てこそメイドです」

疑問も呈するが、どこか説得力のある言葉である。

「……しかし、本当によろしかったのですか？　ここからアーラム村までは少々距離があります。歩いて……そうですね。1時間ほどでしようか。」

村までは一本道なので、道中は代わり映えしないと思います。やはり竜車で移動すべきでは……」

「い・い・の☆　カリオストロの居た所とここって結構違うから、歩いてるだけでも新鮮だし☆

見たことがないものもあって、歩いてるだけでも楽しい☆　それに、レムとも話せるしねっ☆」

「はあ。私と、ですか？」

先を歩くカリオストロがくると、ブロンドヘアをなびかせながら振り返り、にこりと微笑む。

天真爛漫を体現した美しさと可愛さを振りまくカリオストロ。当然この仕事も「可愛い」を追求する彼女によって計算された可愛らしさなのだが、レムも少し見惚れそうになる程だった。

「うん☆　この屋敷にいつまで居るかは分からないけど、お世話になってるから仲良くなっておきたいし……そ・れ・に。聞きたいこと、あるでしょ？」

一筋の風が二人を撫でた後、視線を交わす二人の歩みが自然と止まる。

カリオストロの表情は変わらず、レムの表情は困惑した様子だった。

「スバルのこと、気にならない？　何でレムとラムに怯えるのか、と



か

「……それは、確かにありますが」

「それに何で魔女の匂いを振りまいているの、とかね」

「——ッ!!」

レムの表情が劇的に変わる。

先程までの困惑した様子と打って変わり、それは強い怒気と少量の殺意を孕んでおり……しかし、すぐに元の表情に戻った。

「……カリオストロ様も、あの匂いが」

「分かる☆ カリオストロ、あれが魔女の匂いって気づいたのはつい最近なんだけどね☆」

「どうやらスバルは魔女に魅入られてるみたい☆」

……一応言っとくけど、あの子は私が知る限りは魔女教徒じゃないからね？ 福音書だって持ってないし、あの匂いを纏い始めたのはつい最近だから」

福音書とは魔女教徒の象徴であり、道標だ。

魔女教徒はその書を必ず持つており、詳細は分かっているが魔女の意思が介在され、所持者の望む未来が書かれると言われている。

そして福音書の恐ろしい所は、ある日何ら関係のない一般人の元に送られてくる事。

送られたものは自分の意志を塗りつぶされて魔女教徒の仲間入りしてしまい、人知れず姿を消してしまうらしく、庶民では恐怖の象徴にもなっている。

「申し訳ありませんが……信じられません。お話を聞くに、お二人は街で偶然出会ったとの事。彼がどこかに福音書を隠し持っているという事はありえませんか」

「そうだね☆ 確かにそれもありえるかもしれない☆ 彼が本当に魔女教徒じゃないってという保証は出来ないねっ☆ 信じる信じないはそのらの自由☆」

——ただスバルはあれだけ苦しんでいる。魔女教と貴方達二人に

魔されながらね。

魔女教徒が、魔女教に怯える必要はあるのかな？

逆にキミ達こそ魔女教じゃないのかな？って私は思うんだよね☆

「ッ、カリオスト口様！」

「気を悪くしたかな？ でも、カリオスト口も同じ気分☆

私が見たスバルはどうしようもない馬鹿で不器用な奴だけど、あんな悪辣な一味に加担するほどの屑じゃあないのはあの一件で分かっている。同じに見られるのは——すこーし不愉快☆」

知れず強くなった口調に気圧され、レムは黙るしかなかった。

自分から空気をかき乱したというのに、張本人は気にすることなく先を歩み始め、レムも歩みを再開させた。

「……私も、姉様も。スバル様にお会いしたことはありませんし、魔女教ではありません」

「それを私が信じられるという材料は？ ないよね？

ラムも同じことを言ってたけど、身内の証言じゃ私は納得出来ないよ☆」

「……」

「互いに信じられない。今はそれでいいじゃない☆

真実はそのうち分かるだろうからね☆」

§ § §

それから二人は特に会話がな……ということではなく、カリオスト口から振られた当たり障りのない会話をしながら道を真っ直ぐ歩き続け……1時間半程で村に辿り着いた。

着いた村は特に発展している訳ではないが、かといえれば貧乏過ぎる訳でもない木造建築の家が立ち並ぶ、小さな村だった。

寂れている様子もなく、肩に木箱をかついで運ぶ青年や、井戸前で群れる、井戸端会議をしている主婦たち。そして子供が気ままに、村の中を走り回って遊んでいる。

どこにでも見られる平凡な村という感じだ。

「では私は用事を済ませて参ります」

「うん☆ 行つてらっしゃい☆」

到着後、レムは買い出しのためにカリオストロと別れ、一人になったカリオストロも情報を集めるために、村の内部を歩きだす。

しかし村の人々よりも華美な服装に身を包む絶世の美少女は、あらゆる意味で目立つ。

何の気なしに歩くだけでも、様々な視線が突き刺さるのを感じて仕方がない。

(……可愛すぎるってのも問題だな！ ま、悪い気はしねえけどよ。

さーて、さてさて。一番情報を集めるのに適してんのは……お。ア

イツいいな)

「おじいちゃんつ、こんにちわ☆」

「おお。こんにちわ可愛らしいお嬢ちゃん」

キヨロキヨロと辺りを見回すカリオストロの目が、とある人物を狙いに定めた。

それは大きな切り株の上に腰を下ろした老爺。背が低く、腰の曲がった頭頂部が禿げ頭、そして白い髭。あちらの世界でもよく見た、いかにも「村長やつてます」と言わんばかりの人物。

カリオストロは声をかけ、その人物の隣に座り込んだ。

「見ない顔だが、もしかしてロズワール様のお客人かな？」

「そうっ☆ 訳あって客として招かれてるの☆」

たまには外をみたいなって思つて、この村に来たの☆ ここはいい村だね☆

「ほっほっほ、これはこれは。ありがとうお嬢ちゃん」

そう、小さく何も無い村ではあるが自慢の村じや。ロズワール様のご恩恵を受けて、平穩無事に暮らせておる……何よりの幸せじや」

時折村の光景を眺めながら、二人で何でも無い話を続けていく。

どうやらこの老人、見た目は村長っぽいけど村長という訳ではないらしい。しかし長年この村で暮らしているようで、村には精通しているようだ。そこそこに打ち解けたのを見計らつて、カリオストロは自

然な流れを装って探りを入れていく。

「この村って、犬とか飼ってるのかなっ☆」

「犬……？ そうじゃなあ、犬はこの村では飼ってる奴はおらんな。

猫も同じく。この森には魔獣ばかりじゃからなあ、猫も犬も居たとしても、こちらに早々顔を見せることもないじやろうよ」

「へえくそうなんだ、ざんねくん☆」

（これで、スバルを噛んだ犬が村で飼われていたものでないという事は確定した。村の子供が偶然、怪しげな犬を拾ってくる。という事はありえるだろうが……犬が魔獣である可能性が高まったな）

「……ってここって魔獣多いの？ カリオストロ怖い☆」

「ほっほっほ、大丈夫じゃよ。」

「この村は結界で囲まれておるんじや、これがあれば魔獣は迂闊に村に近寄れん」

そう言うと、老爺は腰を上げて村の周りの近くの木の一つまで近付き……ある部分を指さした。カリオストロが指された方向を見ると、そこには小さな鎖でぶら下げられた、拳に収まる程の透明な石があった。

「あれが？」

「うむ……結界じゃ。村の周りを覆うように、木々にぶら下げられておる。」

時折マナを補充せねばならぬが……エミリア様がいつもひとつひとつ、結界維持のために村に下りては調整をしてくださる。

……しかし、な。村の者はエミリア様の種族を気にして、邪険にしておる。村の為に動いてくれるというのに……嘆かわしい事じゃ」

本当に嘆かわしく思っているのだろう、深い皺が刻まれた顔を更にくしゃつとさせて、遠い目で村の人々を見ている。それはまるで、今まさに住民に歩み寄ろうとして拒まれるエミリアの姿が見えているようだ。

……生まれの種族だけで疎まれる理不尽。辛いことだろう。

エミリアと出会い、その優しさに触れたカリオストロも微々たる量だけ心痛む気分になった。だが、それだけだ。

スバルなら怒りを奮って村人を改心させようとするだろう。しかし彼女はそのような事を到底しようとは思わない。

彼女自身くだらない理由で差別を受けた覚えはある。

まだこの体でない頃も、病気という理由で。

真理に到達した頃も、危険という理由で。

当然最初は怒りも覚えた。怒りのままに力を振るったこともあった。

だがそんな愚かしい人々に囲まれ、幾百年過ぎた辺りでカリオスト口は一つの考えに至った。

「仕方がないのだ」と。

人は弱い。

弱い故に他者を比べたがる。

そして自分と違うものを排斥し、安心を得ようとする。

理由なんてなんでもいいのだ。

種族、性別、階級、職業、言語、能力、容姿、そして怪我や病気。

己が安心を得ようとするために、人を排斥する。

差別とは、弱者による浅ましい心の防衛機能なのだ。

下らない視点で人を区分けする弱者達に、カリオスト口はただただ哀れむ心しか生まれなかった。

「む、どうしたのじゃ、子供たち?」

「ん?」

「えっと……」「……っ」「じーっ」「じーっ」「……」

仮村長の声に引つ張られるように考えをやめると、木の陰から複数の子供達がカリオスト口をじーっとして見ているではないか。

見知らぬ子供達は同じくらい背丈のカリオスト口が気になって気になって仕方がないのだろう。しかし声を掛ける勇氣もなかなかなく、最終的に見つめるという手段を講じたようだ。

カリオスト口はオレ様の可愛さに子供もメロメロか、と下らない事を考えていたが、仮村長は正しい解を察した。

「どれ、お嬢ちゃんが良ければ村の子供と遊んでくれんかのう。」

どうやらあやつらはお嬢ちゃんの事が気になって仕方がないよう

じゃ」

「ええ☆」

「何やらお前さんは村のことを知りたいようじゃし、子供の方が知ってることもあるじゃろう。」

あながち損する訳ではないとは思うがの？」

「うーん☆」

「うっ、子供と遊んでくれぬと持病の発作が……」お爺ちゃんいつもそう言う事言うよねー」「前も言ってた……」「ずび……」「アメ欲しいって言ってもジビョーとかですぐ誤魔化すー」……ええい、折角の気遣いを邪険にするでないわい！」

怒りを撒き散らす仮村長に、子供達はキャハハハ！と笑いながら散り散りになり、何だこの茶番……と渋っていたカリオストロも仕方ないなど腰を上げ、子供達のもとへと向かった。

「はじめまして☆ 私の名前はカリオストロって言います☆

領主のロズワール様のお客として、つい最近お屋敷で暮らし始めたの☆

よろしくね、みんなっ☆」

スカートの手をつまんで、様になった貴族風の挨拶を子供達に向けると、皆一様に「ふわー」と感嘆してカリオストロの仕草、そして可愛らしさに見惚れた。

子供たちの中で誰よりも先に反応出来たのは、肩で切り揃えた赤色交じりの茶髪の少女だった。

「あつ、あの、私はね！ ペトラって言うの、よろしくねカリオストロちゃんっ！」

「あつ、ずるい、えっとおれはリュカ！」「ボクはカイン」「ダインだよー」「メイリイ……」

子供の順応力と言うのは凄まじい。互いの名前を交換しあつた後にはあれよあれよと話が進み、カリオストロは気付けば至る所に振り回されて、本当に年頃の少女のように遊び回らされていた。

彼女は鬱陶しさを感じながらも、情報収集、ひいては犬のためだと我慢して、一つ一つついていって回っていった。

「……カリオスト口様？」

「次はこつち！カリオスト口ちゃんとお花畑行くの！」「いいや、凄い格好いい虫がいるから、あつちの森の方！花なんてつまんねーだろー！」「団子虫とかいる場所がいいなあ」「木の実」「……」

「あの、レム。ちよつと助けて欲しいなつて☆」

それから賞味、30分ほどだろうか。買い物が終わった後、探しに来たレムが見たのは両手を子供達に引つ張られるカリオスト口の姿だった。

道中の一味も二味も違う姿とは対照的な滑稽さに、最初は驚いていたレムも、口を手元で隠して苦笑した。

「むつ、笑つたね？」

「申し訳ありません、余りにも馴染んでいらしたので……」

すみません、カリオスト口様は当家のお客様です、そこまですて頂いてもよろしいですか？」

「うー」「ええ」「はーい」「……」

背の高いレムの言葉に、子供達は不肖不肖カリオスト口から離れ、介抱されたカリオスト口は服の皺を伸ばして、ついた砂埃を払う仕事のと、ふうと一息ついた。

「では用事も終わりましたし、カリオスト口様もよろしいでしょうか？」

「ん、こつちも大体は終わった所。ありがとみんな楽しかったよ☆」

「え!? もう帰つちやうの? ねえねえカリオスト口、また来る?」

「絶対来るよな! つていうか来いよなー!」

「団子虫、今度見せる」「美味しい木の実ある所知ってるよ」

「あはは、また時間がある時にお邪魔させて貰うね☆」

出来るならもう来ねえ! 元気良すぎるわ! と内心で愚痴りながら、レムとともに屋敷へ帰ろうとするカリオスト口。

当然、犬の件について忘れていない訳ではない。今回、子供達にもあえて犬について聞いていないのは、手引をしている魔獣使いが居る事を想定し慎重を期していたためだ。

(子供の方からのアプローチを待っていたが……今回は無い、か。スバルじゃないと駄目なのか……？ ん？)

服の裾を引っ張るような感触に振り向くと、そこには青髪で子供達の中では大人しい女の子……メイリイが居た。

「えつとね……こつち」

「……えーつと、レム？」

「構いませんよ」

レムの許可も出て、少女に引っ張れるように先に進む。メイリイの仕草と、進む方向に子供達も納得いったのか、皆悪戯っぽい笑顔になりながら我先にと村の奥まで進んでいく。

「絶対驚くって」「可愛いよねー、あの子」「驚く驚くー」

「えー？ 何があるの？ 教えてってばー☆」

「「ひ・み・つーっ！」」

あれ程ばらばらに遊び回っていたのに、何という連携感。

レムを後ろに引き連れ、カリオストロももしや、と思いつながら歩いていくと……そこは、日の当たらぬ村外れ、結界間近の付近だった。

引っ張っていった少女は着くと同時にこちらの手を離し、林の木陰まで駆け出していく。

そして、少し大人しめな彼女が息を弾ませ、ソレを腕に抱いてカリオストロの前へ戻ってきた。

「わあ、可愛い☆」

「これは……確かに可愛らしいですね」

彼女の腕に抱かれていたのはスバルの証言通りの黒く、生後間もない小さな子犬だった。つぶらな瞳に柔らかそうな体毛と来たら、それはそれは保護欲を掻き立てる。ハゲているように見えるが、実際はハゲてるのではなく頭部だけ体毛が違うだけのようだ。

「へへーん、すげーだろー」「可愛いでしょ？」「すごくかわいい」「木の実」

二人の反応に子供達が誇らしげにする。

どこかメイリイという少女も嬉しそうにして、ん、と子犬をこちらに差し出した。子犬はこちらを見てもくああと欠伸をするだけで、ま



るで敵意を感じさせない。

「えっと、撫でていいの〜?」

「うん……撫でると、気持ちいいよ?」

カリオストロは逡巡する振りをし、レムをちらりと見た。

「ね、レム。先に触ってみない?」

カリオストロちよつとだけ怖いなつて☆

「大丈夫だよカリオストロちゃん! 凄いいおとなしい子だから!」

「こんなのが怖いのか? だっせー」 「だっせー」 「だっせー」

「こら! そう言う事言わないの!」 「……」

「はあ……私は構いませんが」

可愛らしいものに目がない、という訳ではないが人並みに可愛いものは好きらしい。少しだけ目を輝かせたレムがカリオストロの前へと出て、手をおずおずと差し伸べようとする。

触れるまで残距離20cm。

犬は無垢な黒目をレムに向けて大人しくしている。

残距離10cm。

メイリイはレムの様子をじつと見守り、

カリオストロも、実験を見守るような心持ちで見つめ続ける。

残距離3cm。

触れる直前、レムの華奢で白い指が期待に軽く震え、犬が口を小さく開けた。

「そ、れ、ま、て、ええええええええええ——っ!!」

「え?」 「?」 何あの兄ちゃん 「何だあいつー」 「あいつー」

聞こえてきた、裏声に半分脚を突っ込んだ大声に、差し伸ばされていたレムの指が反射的に戻された。

カリオストロもレムも、その声の主を見て信じられないような顔を

し、残された子供達は唐突に現れた人物に理解が及んでいない。

「な、お前ッ！ 何で起きて——」

「お客様?! そのような格好で一体……」

そう、今頃ベッドで眠って居るはずのスバルである。

屋敷から全速力で村に来たのだらう、息も絶え絶えで走る姿はフラフラと非常に滑稽にも思えた。

彼の姿は寝間着のまま。そして裸足だった。あの長い道の途中で転んだのか、至る所が泥で汚れ、擦りむいたせいか膝の部分に血が滲んでいた。

「あははは！ 変な走り方！」 「変なやつだ変なやつ！」

「石投げちゃえ」「投げろー！」

「わ、ちよ、まて……俺っ……今、すっげ……息……うえっほ、げほっ！ つげほ、ゲホーツ！」

一行の前に辿り着いたスバルはその場でへたり込んで、必死に空気を吸い込んで息を整えようとする。そんなスバルの元にカリオストロとレムが駆け寄った。

「どうして……」

「どうしてもこうしても、あるか……悪いが、俺はっ……あの案には……反対……だっ……」

人の意見も聞かずに、勝手に……げっほっ！」

「? 案とは一体……」

事情が分からぬレムの頭に疑問符が浮かぶ。

カリオストロはどうしたものか、と苦々しく顔を歪めると——

「あつ、待って！」

メイリイの慌てたような声。

カリオストロが即座に振り向くと、彼女の手から逃れた犬がレムの元へと駆けていく所だった。

子犬の行動に慌てたレムは、途端に抱きかかえるようにして受け止めようとする。そんな犬の口は大きく開いていた——が

「は、い、だらああああああ——ツ!!?」

ソレを見たスバルが、レムと犬の間に滑り込むように全身を投げ出

し――

「あいつたああああ――ツツ!!? へぶつ」

そして、スバルの右手が子犬に噛みつかれた。

……だけに収まらず、そのまま木の幹に頭をぶつけ、動かなくなつた。

「ぶつ、あははははははは!」「ばかだー! 噛みつかれて! 頭ぶつけて! あははははは!」

「やーい、ばーか」「ばーかー!」「……!」

犬は驚いたのか、そのままスバルを離して森へと消えていき、子供達は大笑いし、レムは困惑。カリオストロは大きく焦る羽目になつた。

「ばつ、馬鹿野郎ツ! お前、噛まれやがつて――!」

動かなくなつたスバルの傍に大慌てで近寄り、容態を確かめる。……気絶しているだけのようだ。

頭部には大きなたんこぶが出来ており、全身に擦り傷もあるが、どれもこれも大事ではない。……右手に刻まれた忌々しい噛み傷を除いて。

馬鹿だと思っていたが、ここまでの大馬鹿者だとは思っていないかった。心配は一瞬で怒りに転化するものの、物言わぬスバルにぶつける事も出来ずに燻るだけ。

せめてもの心を落ち着けようと深く息を吐くと、カリオストロの背後に近寄る影があった。

それは状況を全く理解できていない人物、レムである。

「……カリオストロ様。これは一体どういう事なのでしょうか」  
「……」

「スバル様があのような格好でこちらに急いだ理由。そして案という言葉、更に私を犬から庇つた理由に、カリオストロ様の焦り様……どれもこれも意味が分かりません。カリオストロ様は、何かご存知なのでしょうか?」

レムの疑いの目がこちらに刺さり、大きく自身のプランを崩されたカリオストロは脳内で必死に次の案を模索せざるを得なくなつた。

懐柔——難しい、というか信頼も材料もないのに無理だろう。

しらばつくれる——今後の展開が不利。疑惑だけは残り続ける。

レムを行方不明にする——真っ先に疑われるし、目撃者が多すぎる。それに、今頃スバルが行方不明であることを向こうは騒いでいるだろう。愚策。

一番の最善手は——

「……ちっ」

舌打ちを一つ。そしてカリオストロは自身の頭を乱暴に搔くと、レムに向き直る。今まで見せなかったその姿と、浮かぶ表情にレムは目を見開いた。

「事情は後で説明する。まずは屋敷に戻るぞ」

「は、はい……」

レムは困惑しながらもカリオストロの指示に従い、スバルを抱えて屋敷へと戻る事になった。

## 第二十三話 偽りの真実

「あ、カリオストロ！ スバルは、スバルは見なかったっ!?」

実はスバルがいきなり屋敷を抜け出したのっ!

それでラムがスバルを探しにそっちに向かったらしいんだけど……」

「みたいだな。大丈夫、スバルは見つかった」

「ただいま帰りましたエミリア様」

「本当!? 良かったわ……。それでスバルは……あ」

「見ての通り、今ラムが肩に担いでる」

カリオストロ一行が屋敷へと戻れば、玄関には心配そうな顔で待ち受けているエミリアの姿があった。

先程まで居なかったラムは、広場でスバルが気絶した後、カリオストロがラムと共に屋敷へ戻ろうとした矢先に遭遇。遭遇の理由はエミリアが言った通りであり、彼女が持つ「千里眼」の加護のを使ってスバルを探し当てたのだという。(その力を使えばまさしく千里先の景色も見ることが可能のようだ)

尚、ラムはスバルが何故カリオストロとラムの元へと急いだ理由の説明を求めたが、小さな錬金術師はラムと同じく「屋敷にいたら話す」と答え、回答を先送りしていた。

「……スバルは、大丈夫なの?」

「手を犬に噛まれたのと、頭打って気絶したのと、あとは裸足で抜け出してコケたりしたんだろうから擦り傷が少々。今のところ命に別状はない。……が、急いだよがいいかもしれないな」

今は既に日が沈みかけている黄昏時。一回目とは違う状況だが、もしもスバルの死が衰弱死で一日目と同じ頃に発症するのであれば……早く解除するべきだろう。

「今のところ……って、それじゃまるでスバルが危険な状態に聞こえるわ」

だが当然ながら事の詳細を知らないエミリアは、何故その程度で治療を急ぐ必要があるのかが理解出来ない。疑問を浮かべるエミリア

に対しての説明はまたのちほど出来ると、彼女は質問には応えずに逆に質問を投げかけた。

「ところでエミリア、スバルが脱走した当初……部屋に居たか？」

「え。ええ……カリオストロが出かけた後……スバルの部屋に戻ったの。」

そしたらちよつと様子がおかしいのをパックが気付いたの。『彼のマナが弄られてる』って。

だから私が戻してあげたら……起きるなりカリオストロがいつ出奔したか聞いて、慌てて外へ向かっていったの。——ねえ。スバルのマナを弄ったのはカリオストロ。貴方なの？ それに何でスバルは貴方を探しに行ったの？」

「……全ての事情は後で皆に説明する。少し待ってくれ」

エミリアの信頼の目が揺らいでいる。不安めいた目線が投げかけられると、さしものカリオストロの表情も小さく歪んだ。何せこれからする説明で彼女の心が離れるかもしれないのだ。

子供のような純真さを持つエミリアに今まで慕われていたが、その関係が壊れてしまうかもしれないと思うとカリオストロは心が軋むような気がした。

だがそれでも彼女は覚悟を決めて自らの考えを進める。

全てはあちらの世界に戻るために。そして何より、スバルを守るために。

カリオストロは足早に通路を先導し、エミリアとレム、ラム。

そしてスバルを連れて彼が元居た寝室へと戻る。

「おい、居るか？」

「——居るのよ、全く。ベティーを部屋で待たせるなんて、ふてぶてしいにも程があるかしら。それに口調も変わってるし、一体どういうつもりなのよお前」

「こつちが地だ」

「だと思ったのよ、お前、声と見た目の割に性格悪すぎるからそつちの

方がぴったりかしら」

余計なお世話だと言いたげにカリオストロが鼻を鳴らした相手、それはベアトリスだった。

彼女は部屋の片隅にある椅子に座って本を読んでおり、一行の存在を確認すると持っていた本を机の上に置き、カリオストロ達に近づいていく。

実はカリオストロは出かける前にベアトリスとある話をつけていた。

それは「子犬が魔獣であるという確証を得る」、そして「万が一の保険を得る」為の布石。(その布石の為に今回も「あの弱み」を翳して契約まがいの約束をばっちり取り付けており、ベアトリスはその契約を渋い顔で受け入れたとか)勿論カリオストロ除く一行は、何故この場にベアトリスが居るのが分っていないのか困惑の表情を浮かべるばかり。

そんな皆の反応をよそに、ベアトリスは一人一人に近寄ると目を瞑って何かを感じ取り始める。

対象になったエミリアも、レムも、ラムも、カリオストロに対してもただ翳すだけで何の反応も起こさなかったが、彼女が最後にスバルを探り始めると、「……へえ。本当に術式の気配がするかしら」と呟いた。

「術、式……?」

「そう、術式なのよ。最初にこいつから聞いた時は半信半疑だったけど……まさか本当に掛かってくるなんて思ってもいなかったかしら。

……それにしても。聞いていた話じゃメイドがそうなるって話だったけど?」

「メイド……? まさか……!」

何かを察したのかレムがカリオストロを驚きの目で見ると、彼女はその視線にも動じる事なく、ただ沈黙で返す。未だ話が理解出来ないラムとエミリアが事情を求めて継るようにカリオストロを見つめ始めれば、彼女ははあ、とひとつ溜息をつくとベアトリスへと指示を出した。

「まずはスバルをそこに寝かせて治療してからだ。……おい、ベアトリス。治せるんだよな？」

「精霊遣いの悪い奴。確認だけじゃなかったのかしら？」

……仕方ない。全く、面倒な事させる奴なのよ」

§ § §

「今から術式を破壊するかしら。術者が直接触れた場所が術式が刻まれた場所なのよ。」

——といっても、大体の予想はついてるけど」

スバルをベッドに寝かせると、ベアトリスが静かに彼に巢食う術式がどこにあるか探し始める。

小さな手は迷いなく彼の身体の上を滑るように動き、やがて止まる。

巢食う術式の有りかに、カリオスト口を除く一行が驚いた。

「……何。これ……」

「これは……」「姉様……」

箇所ははまだ歯型が残る、スバルが子犬に噛みつかれた場所。

ベアトリスが手を翳したその患部からは、黒い靄が立ち込めている。

その嫌な雰囲気に対して、想定していたカリオスト口は冷静にその様子を見守っていたが、残る三人は不快感を露わにした。

「呪術師による呪いかしら。忌々しいつたらありやしないのよ。」

——はい、終わり。もうこれでこいつは呪いに悩まされる事はないのよ」

「ちよつと、ちよつとお待ち下さい。呪術師？」

アーラム村に呪術師が潜り込んでいるという事なのですか？」

ベアトリスがふう、と息を吹きかけて黒い靄を霧散させると同時にラムが堪らず質問をすると、じつと患部を睨んでいたベアトリスは、カリオスト口を顎でさした。

「さあ。それは分からないかしら。ベティーはあいつに、『これから呪



われた奴が帰ってくるかもしれないから、どこが呪われてるのか判別しろ』って言われただけなのよ。

詳しい話は、あいつに聞くのがいいかしら」

途端に一行の視線はカリオストロへと集中する。縋るような目つきで見るエミリアとその他の視線を受け、椅子に座って膝を組んでいたカリオストロが鷹揚おうように頷く。

「ちゃんと説明する。——さて、まずはスバルの呪いの原因だ。

それについては……現場に居たレムは分かるよな」

「……はい。あの呪いの元は……子犬でした」

「子犬……確かに噛み傷はそこまで大きくないけど」

エミリアがスバルの手の傷を再度見る。

手に残された傷跡は何かにかまれた歯型。だがそれは確かに小さく、サイズのにも子犬のものであるのは間違いないと思わせた。

「村の子供達が私とカリオストロ様に見せたいものがあると言って誘導された場所で、ある子犬を見せてくれたんです。そして子供に撫でて欲しいと言われたので、言われるがままに撫でようとしたのですが……途中で現れたスバル様が身を挺して庇かばったのです」

「子犬の正体は十中八九、ウルガルムって言う魔獣だ。

そいつは噛み付いた獲物を呪い、遠く離れた場所からもマナを奪い取る力を持っている。

その力がいつ発動するかは分からないが、少なくとも奴らが空腹を訴えたときが噛まれた奴の最後だ。呪いが発動すれば対象は衰弱し、やがて死に至る」

レムとカリオストロの告げた言葉に、ラムとエミリアが揃って驚く。

特にエミリアは顔を真っ青にし、深刻そうな顔だ。

「そんな、じゃあ村の結界に綻びが……!」

「すぐにロズワール様に……しまったわ。あの方は今、王都へ外出中。早馬を出しても間に合わない。今のうちになんとしても対処しない……!」

二人は今後起こりうる事態を考えて、早速行動をしようとしたが

……レムがそれを止めた。

「お待ち下さいエミリア様、姉様。それが事実だとしても不可解な謎が残されています。」

まずはそちらをはつきりとさせる方が先決ではないでしょうか」

そう言い切ったレムはカリオストロに向き直り、はつきりとした口調で問いを突きつける。

「カリオストロ様。貴方とスバル様の行動はまるで魔獣が現れるであろう事を、そしてそれによりどうなるかを知っているような動きに見えましたが……一体、それは何故なのですか？」

「……」

どこか身構えるような態勢で、レムの強い眼差しがカリオストロを捉える。そこには真実の全てを余すこと無く見極めようとする、強い意思がひしひしと感じられた。

ここからがカリオストロとスバルの分岐点。分水嶺<sup>ぶんすいれい</sup>。選択を誤れば今後、自分達のこの屋敷での立場が非常に脆くなる。最悪、屋敷を追われるか、またスバルが狙われる羽目にもなるだろう。

だが失敗したからと言ってスバルに死んで貰って、もう一度屋敷での生活を繰り返して貰うなどという馬鹿な考えはカリオストロの中では一切ない。スバルがこの世界で生きられるよう、スバルがこれ以上傷つかぬように自分の知識を最大限使い、切り抜ける事しか考えてはいなかった。例え失敗しようともその責任は全て自分にかぶせる。例え立場が悪くならうとも傷つく羽目にならうとも、それが強者としての責任。自分が為すべき、スバルへの責任だ。

カリオストロは少しだけ瞑目<sup>めいもく</sup>し、考えを纏め上げると——やがて、語りかけるように一行へと説明を始め出した。

「オレ様達。……正確にはスバルにはある力がある。」

それは未来予知のような力……いや、加護だ」

「……未来予知？」

「……」

「……」

カリオストロが取った策、それは正直に「答えられる範囲で」伝え

る事。

下手な嘘は最初は良いが、後々に大きな齟齬そごが出来上がる可能性がある。特にスバルは誤魔化す力が壊滅的だ、後で火中の栗を拾わぬようにするならばこれしか道はない。

一番のネックは彼の力についてぼかして伝える事で魔女のセンサーに引つかかってしまうかどうかだったが、そんな危険な綱渡りは無事に成功したようだった。

「正確な未来が辿れる事はないし、任意で発動出来る加護ではない。

まだスバルもオレ様も力の把握もできていないし、何回使えるかも分からない不確実な加護だ。

アイツは、その力によってアイツ自身に起こりうる未来を唐突に視る。ただし、それは確定の未来ではない、あくまで予定された未来だ」  
「……にわかには信じられません。つまりスバル様は今回の事件をその加護で見通していたと？」

「一部だけ、な。アイツが見た未来の断片から、オレ様がそれを推察した。

そもそもアイツがこの屋敷で見た未来は2つあった、1つはスバル自身が犬に噛まれて、術式により衰弱死する未来。そしてもう1つは、お前たちメイドに殺される未来だ」

「馬鹿な……ありません。何故私達がお客様を殺す必要が？ ロズワール様のお客様を、そしてエミリア様の恩人をむぎむぎ殺す理由はありません。そうでしょうレム。……レム？」

ラムが食い気味に、心外だと言わんばかりに異議を唱える。

そして妹へと賛同を求めようとして……妹が黙している事に気付いた。

「レム……？」

「……姉様、申し訳ありません、ありえないと言い切れないかもしれませんが……」

姉様もエミリア様もお気づきになれていないかと思いましたが……。

……実は、スバル様からはある匂いがするのです」

「――魔女の残り香」

沈黙を貫いていたベアトリスが、ぽつりと呟く。

その言葉を聴いたラムは、はっとした顔になってスバルを見た。

「正直に言えば、私はこの屋敷に来てからスバル様を疑っておりまして。

……ご存知かもしれませんが、私と姉様は過去、魔女教徒に故郷を奪われた存在です。

ここまではつきりとした魔女の匂いを纏っているのです、彼が何か怪しげな行動をとった場合……独自の判断でスバル様を危険人物だとみなし、排除していたかもしれません」

「そんな……カリオストロ様、お聞かせ下さい。スバル様は魔女教徒だと言うのですか？」

「さあな。こいつが魔女教徒だという証拠はないが、魔女教徒ではないという証拠もない。福音書を持つてるところは見たことないが、それはスバルが隠しているだけかもしれない。今は証明はできないな。だから一旦コイツが魔女教徒であるかどうかは置いておく。

……それよりも先に、こいつの加護の困った性質を教える必要があるだろう」

「困った性質……？」

鈴リンとしたエミリアの声。スバルが魔女教徒であるかもしれないというのに、彼女の表情も態度も何一つ変わったところはない。ただ純粹に話に聞き入るエミリアを好ましく思いながら、カリオストロは説明を続ける。

「こいつは未来を見通すと、何故か分からないが『魔女の残り香』が強くなる。

ベアトリスもレムも気付いただろ。屋敷についた時の香りに比べてコイツが目覚めた時の香りが強くなっている事を」

「……間違い、ありません」

「……確かに、こいつは前会った時よりも臭くなっていたかしら」

カリオストロが告げる事実が、今までのスバルの不可解な行動を裏付けていく。

ピースを1つ埋めるたびに他のピースの形がまた1つ分かるよう

に、あるべき真実への道のりが1つ1つ紐解かれていく。

「待って。じゃあスバルが……スバルがすごく取り乱した時って、ひよっとして——」

「ああ。丁度未来を見たんだだろう。スバルがレムとラムに殺された時の事を」

納得いったのだろう、エミリアもレムも数度頷く。

ベアトリスも顎に手を当て何かを考えていたが、特に発言するつもりはないのか口を閉ざし続けた。……が、ラムは違ったようだ。

「お待ち下さいカリオストロ様。もし、もしもです。もしもレムがスバル様を殺めようとしたとしても、私が加勢する理由にはなりません。むしろ私はレムを止めるでしょう」

「まあそうだろうな、だがその時見たスバルの未来はこうだ。

こいつはある日の夜に庭で1人で散歩していた。

……怪しまれてるスバルの単独行動だ。レム、お前ならどうする？」

「……当然、監視をします」

「だろうな。だがそこであいつが唐突に未来を視た。するとあいつの体から魔女の匂いが急激に強まる。お前はそれを見て何を思ったか分からないが、危険と判断してスバルを襲ったらしい。

そしてスバルが死に掛けていた所を、異常を察知したオレ様がたまま駆けつけ——

——逆に、レムを殺したんだとき」

「——ッ」

「姉様」

実際に起こった訳ではないが、最愛の妹が仮にも殺されることを快く思わなかったのだろう。

ラムの顔がはつきりと怒りに歪み、諫めようとしたのかレムが最愛の姉の服の裾を摘んだ。

エミリアはカリオストロの発言が信じられないのか、悲しそうな表情を見せていた。

「ラム、お前は仮定の話でもレムが殺されることを快くは思わないだ

ろう？

それが実際に殺されたとしたら……お前の怒りはその程度で収まることはないよな。

お前がスバルを殺すであろう事態はまさにそれだ。同じく異常を察知したラムはオレ様がレムを殺した所を目撃し、逆に不意打ちでオレ様を殺した。

……それでも怒りが収まらぬお前が弱っていたスバルに矛先を向け、殺した。それだけの話だ」

「……よく出来た話ではありますが、その力が本当かどうかは分かっていません。

失礼ですが、貴方達が他陣営の内通者である可能性の方が十分高いように思えますが。

魔獣を手引きし、こちらの評判を下げさせる。その方がまだ理解出来ます」

「普通はそう考えるだろう。だが、その理屈は穴がある。

他陣営の差し金だとして、何故スバルはレムを庇う必要があった？

互いに面識もない関係だ。見殺しにすればいいものを、助ける必要はないだろう？

それに、お前はあの怯えたスバルの顔を見たか？ あの声を聞いたか？ オレ様とエミリアが看病し続けてたが、あの取り乱しような演技だとしたら天晴れとしか言いようがないぞ」

「……うん。私も看病して見ていたけど……スバルの表情はとても演技には見えなかったわ。それにパックでさえ、スバルを見て心が壊れかけてるって言ってたもの」

エミリアもカリオストロの発言に同意すると、ラムは口を閉ざさざるを得ず。そしてそれを見たカリオストロは更に話を続ける。

「話を戻すぞ。スバルは未来を見通したとき、自分が衰弱死する未来を見た。そこまではいいな？ 当初はスバルの話を聞いても原因が犬かどうかは分からず、あくまで可能性の一つだった。

当然見えた未来はさっきの話もあったから、どちらも考慮しておく必要がある……故にオレ様は最善の策を取ろうとした訳だ」

「最善の策……う？」

「そうだ。スバルが衰弱死した未来では屋敷に来てから4日目の今日、誰かが買い出しの為に出来る事は分かっていた。

その未来ではスバルとレムが買い出しに出かけ、あいつは犬に噛まれたらしい。だからオレ様は今回、スバルを村に近づけさせない為にも出かける前に強制的に眠らせた」

「……それで、スバルのmanaが弄られてたのね」

未だに安らかな表情で眠り続けるスバルを、エミリアがちらりと見た。

かちり、かちりとひとつずつピースが嵌まる音がする。

だが、このピースが全て嵌まる時に完成するものはなんなのだろう？

彼女には考えれば考えるほど良い物が出来上がらない気がしてならなかった。

レムが続けてカリオストロへと質問を続けていく。

「理解は出来ませんが……スバル様もその事実を知っているのなら、わざわざ気絶させずとも村に出かけなかったのでは」

「本来ならな。だが、原因はオレ様がある策をぼろりと伝えちゃったせいだ」

策とは一体なんなのか。

他の一行が目線で先を促せば、カリオストロは嘲るように笑いかけた。

「天才のオレ様は無駄な工程を通りたくないんでな、あの犬が魔獣かどうか判断するために「レムに噛まれて貰う」と言ったんだよ。そうしたら何故かは分からないけどスバルが猛反対して何が何でも着いていくとごね始めた。だからしょうがなく強制的に眠って貰うしか無かったわけだ。

——全く、本当スバルのお優しさにはほとんど参っちゃまうよな」

「ツ!!」

「姉様！」

食ってかかろうとしたラムをレムが腕を抱くようにして抑えた。

彼女がカリオストロへ向ける表情はまさしく鬼気迫る物。もしも妹が抑えていなければ、多少なりとも手が出てしまっただけでもおかしくない剣幕だった。

「カリオストロ様はレムで、レムで実験しようとしたと言うのですか!?!」

「実験とは人間き悪いな、ただリスクを減らしたただけだ。

わざわざ自分たちで危ない橋を渡る必要はないだろう?」

「何故、一言なりとも私達に報告をしないのですか?」

「言って信じるのか? 今でさえも話を信じきれてないっていうのに。」

お前達姉妹がオレ様達を信用していないのと同じく、オレ様達はお前たちを信用していない。

第一、これは本来ならお前達が解決すべき話なんだ。むしろ情報を渡したオレ様達に感謝して欲しいくらいだし、オレ様達を巻き込んだ事に謝罪して欲しいくらいだ」

怒りのラムに対し、カリオストロは愚者を諭すように、さりとして嘲りを含んだ声色でラムを説き伏せ、挑発に嫌悪を滲ませる彼女を鼻で笑った。

……そしてカリオストロの視線は、困惑するエミリアへと移る。

視線のあったエミリアは身体を小さく震わせ、恐る恐るカリオストロを見つめ返した。

「か、カリオストロ……」

「……」

エミリアは、カリオストロの行動が理解出来たが、納得は出来なかった。

『スバルを護るために行動した』

『その為にレムを犠牲にしようとした』

自分も誰かを護る事に賛成だ。だが誰かを護る延長上で他の誰かを犠牲にするという発想は、一度も考えた事はなく。思い描かれているのは常に大団円。……未だ、大人にもなりきれない彼女はそれが当然だと思っていた。



「……そ、そうよ！ カリオストロは全員が助かる方法を模索していたのよね？」

現に、治療法だって確保してたし……本当はレムで試そうとなんてしてないのよね？」

「……今回は、たまたま治療法があっただけだ」

「ううん、私には分かるわ。私を助けてくれたときもカリオストロは――」

「エミリア」

静かな、しかし語気の強いカリオストロの一言にエミリアは咄嗟に口を噤んだ。

「……何か勘違いしてないか？ 盗品蔵でオレ様が動いたのはスバルが死にかけたからだ。」

あれはお前のための行動じゃあない。お前は偶然、助かったにすぎない」

息を飲む音。拒絶を含んだ言葉にエミリアは路頭に迷う子犬のように狼狽し……そして何かを堪えるように俯うつむいた。カリオストロはそんな彼女にも目をくれず椅子からスバルの眠るベッドに移り、不遜ふそんかつ瀟洒しょうしやに座りこんで、一同に告げる。

「話は以上だ。信じろとは言わない、後は好きに判断しろ」

それは、判断によっては武力を持って抗う事を辞さないという意味表示に他ならなかった。

スバルに手を出そうとする存在を許さぬ、絶対的な守護者となったカリオストロは周りを強い目線で見渡す。一同は彼女の態度に思う所こそあったものの、その正論の前に何も言い返すこともできない。……それに、今はそれを咎めている場合ではないとラムは判断し、レムに語りかける。

「……レム。屋敷に来て早々だけど村までお願い。」

もしもがあった時を思うと、貴方の継戦能力の方が信頼できる。

私は何かがあった時の事を考えて屋敷でベアトリス様と、エミリア

様をお守りするわ。そっちの事もちゃんと視ているから」

「姉様……あまり目は……」

「ベティーを護るだなんて偉くなったものかしら、メイド。

自分の身くらい自分で守れるのよ、要らない心配かしら」

「……待って、ラム。私も行かせて」

俯いていたエミリアが顔を上げ、口を挟んだ。が、ラムは振り返ることもなく否定した。

「エミリア様。貴方に何かがあった場合、私どもはロズワール様に顔向けが出来ませんし、ひいては陣営にとつての大打撃になります。この問題は私どもが解決しますので……屋敷で大人しくしててください」

「でもー」

自分の居場所を求めて、役割を求めて何とか食い下がろうとするエミリア。

だがそんな彼女に対するラムの反応は、あまりにも冷たいものだった。

「……厳しい事を言うようですが、行って何が出来るのですか？

村では未だ貴方は受け入れられていない。むしろ、いたずらに村民を刺激するのが目に見えて居る筈です、それが分からない訳ではないでしょう？

——頼みますから、どうか大人しくしててください」

「……ッ」

またしても拒絶。王として何かを為そうとしても、それを行うことすら許されずに行き場のない思いだけが溜まっていく——エミリアは力なく、部屋を後にした。

次いでレムとラムが部屋から下がり、場にベアトリスだけが残された。

彼女はベッドの上で未だ眠るスバルをじっと見つめ続けていたが、やがて目を逸らすと部屋から出ていこうと扉に手をかけ……ぽつり、眩いた。

「お前の話、にわかには信じ難いけど一笑するには余りにも場面が整

いすぎてるのよ。

……もしかして、お前たちがここに来る未来もこいつには見えていたのかしら?」

「さあな。第一それを聞いてどうするんだ?」

「……ふん。ただの、興味本位かしら」

カリオストロを追求すること無く、彼女は何かを誤魔化すように静かに部屋を出ていった。

二人きりとなった空間で、カリオストロは何をするでもなくベッドの上でスバルを見守り……体感で1時間が経った所でうめき声が聞こえてきた。

「……っ、ここは……屋敷? 屋敷?!——つくああ!」

「起きたか、馬——いつづう!!」

鈍い音が部屋に響き、両者の視界に満開の星が瞬いた。

覚醒と同時に勢い良く身体を起こしたスバルの頭と、顔を覗き込んだカリオストロの頭が衝突したのだ。

「いで、いでえええ……ッ!! ま、まだ俺生きてるよ!? 生きてるけど犬に噛まれた、噛まれてたよな俺!? まだ死ぬまでリミットはあるよな!」

「つく~~~~~~~~ッ!! テメエスバル! いきなり頭突き食らわせやがって! ああ生きてるさ、呪いももう解除した! お前は晴れて4日目も越せる! 良かったな!」

頭部を抑えながら涙目になるカリオストロが、投げやり気味にスバルを祝福すると、同じく頭部を抑えたスバルも「マジ?」という呆け顔の後に布団に倒れ込んだ。

「……は、はは。俺生き残ったのか……よし、よし……ってよしじゃねえ! だとしたら今度は村がやばい! 特に子供達が危険だ!」

「——事情はもうエミリア達に説明した、今頃はレムが村に行ってる。

だから安心しろ。お前の役目は終わりだ」

「説明って、……お前アレの事まで言ったのか!」

再度バネ仕掛けのように飛び起きたスバル。

未だ頭部の痛むカリオストロはおでこをさすりながら驚くスバルに説明を加えた。

「ぼかしにぼかして、未来予知能力っぽい力がお前にあるって事を伝えただけだ。

他の面々が納得しているかは別だが、お前の奇特な行動の辻褄が理解できたのか、割りと理解はしてるっぽいぞ」

「未来予知……？ まあ結果的には未来予知だろうけどよ。それセーフなのか……っていうか奇特な行動言わないでくれますう!? 結果として奇特だったかもしれないけど、心は危篤だったんですー!」

いつものように全力で突っ込むスバルを見て、からからとカリオストロが笑う。

それはエミリア達に見せたものとは全く違う、気を許した相手にだけ見せる表情だった。

……やがて彼女は優しげな目から一転させ、鋭い眼差しを見せる。「……しかし、さつきはよくぞ邪魔してくれやがったな。折角お前が助かり、謎も解ける最善の道を示そうとしたのに何であんな小娘に自分の命を張る必要がある? ああ?」

「言つとくが、それについては謝らねえぞ。カリオストロのあの策は最善じゃねえ、ただただ効率的なだけだ。理由? 情にほだされたからだ。何か文句あつか」

顔を近づけ凄むカリオストロを、スバルは怯む事無く真剣な表情で返す。

その単純で、分かりやすい返答に舌打ちをし、カリオストロは更に詰め寄った。

「出会って一週間も経ってない奴にかあ?……チヨロすぎるだろお前。

お前が死んで、毎回巻き込まれるオレ様の気持ちになってみるよ? ええ!?

第一、一度はお前を殺そうとした相手だぞ。アイツの本音も聞いただろ!? だってのに——」

「だってのに、俺はあいつらを助けたい。……今でもあいつらが襲ってくる光景は思い出せるさ。」

「だけど、だけどだ。それ以上に一回目で見た、あいつらの笑顔が忘れられない。あの笑顔が嘘だとは、思いたくないんだ。」

「——巻き込んで本当に悪いとは思ってるけど、助けたい。けどその力も足りない、だからカリオストロには力を貸して欲しい」

「そんな身勝手な願い、オレ様が飲むとでも——」

「俺はこっちの世界でも悔いを作りたくない、作りたくないんだ！」

頼むカリオストロ！ あいつらを一緒に助けてくれ!!」

「……っ」

言い切るとスバルはベッドの上で姿勢を直し……土下座をしながら懇願こんがんし始めた。

カリオストロが断じた通り、スバルのはただの自分本位な願い——だが、目的の為に……いや、人助けの為なら自らを顧みず、全力で事を為そうとする態度が、カリオストロにはある人物をたびたび想起させた。

顔も、性格も、強さも全く違う筈のグラン。その実本質である極度のお人好しが変わらないからこそ、ダブって見えてしまうのだろう。

カリオストロの心の葛藤が始まる。スバルを傷つけた責任もある。一考し、言われるがままに助けるか？ それとも願いを断ち切り、リスクを取って関わらないようにするのか？ 葛藤は遂しゆんじゆん巡では終わらず、やがて遅疑となり——

——不意に部屋の外から聞こえた、陶器か何かが割れる音が思考を妨げた。

「……今の、何の音だ？」

「分からねえな。花瓶かなにかが落っこちた音か？ ちよつと見てくる」

スバルに答えを告げる前に、胸騒ぎを覚えたカリオストロが通路を覗く。

そこにはカーペットの上に散乱したティーセットの破片と紅茶の染み。そして胸を抑えて蹲る、ラムの姿があった。

「っ!? おい、どうした!」

「何だ、何があったカリオストロ!」

「……つく、ふうっ……ふううっ、ふ……!」

顔から脂汗をじっとり流すラムの尋常ではない様子にカリオストロは駆け寄って身体を揺さぶり、声を聞きつけたスバルも慌てて飛び出してその様子を気遣った。

顔色は青く、荒い呼吸を繰り返す彼女は二人に気付くと頼りなく立ち上がり、壁に手をつきながらも移動しようとする。

「……申し訳、ありませんっ、このような粗相を……ですが大丈夫です、私は行かなくては——」

「馬鹿、こんなの怒れるかよ。つていうか行くつて……」

こんな苦しんでどこに行くつもりだよ?」

「……スバルの言うとおりでな。このまま倒れられても困る、今は早く休め」

「休んで何か、いられ、ませんっ!」

見るに耐えかね、スバルが手を伸ばしてふらつくラムを支えようとするも、ラムはそれを振りほどき、睨み返した。ラムが見せる異様な剣幕にますます怪訝けげんそうにする二人の顔は、次の彼女の発言で驚愕に染まった。

「休んで、休んでなんかいられませんっ……! レムが、レムが今危険なんですッ!」

## 第二十四話 絞り出された珠玉の知恵

屋敷に来てから5日目の朝。

1回目にスバルが死亡した屋敷での4日目を乗り越え、新しい朝を迎える事は出来たのだが、それを素直に喜ぶことが出来ない現状になっっていた。

現在、ラム、そしてスバルにカリオストロはまたも屋敷のある一室に集まっている。

三人はキングサイズベッドの前に囲むように立っており、ベッドのすぐ傍にはベアトリスが。そしてベッドの上には健やかに眠るレムの姿があった。

レムの顔色は穏やかそのもの。吐息も安定し、容態こそ大事なさそうに見えたが、取り囲む面々の顔色は厳しい。

傍らに佇み、レムに手を翳して何かを探っていたベアトリスが瞑っていた目を開けると、その動向を固唾を吞んで観察していたラムが堪らず問いかけた。

「どうでしょうか、ベアトリス様」

「……」

ラムの問いかけにベアトリスは逡巡し、一度開きかけた口を閉ざす。

だが彼女の切なる視線に負けて、ゆっくりと口を開いた。

「……正直な事を言わせて貰えば、お手上げかしら。」

外傷はないし、マナの巡りはそれこそ平常時と同じで問題ないけれども、コイツに掛けられた呪いの量が半端ではないのよ。

——このままじゃ解呪はできないかしら」

「っ」

「ちよ、ベアトリス！」

彼女の答えに飛びついたのはスバルだ。

スバルはベアトリスの前に踊り出ると、眉根を寄せながら訴え出る。

「何とか、何とかならねえのか!？」

俺の呪いは本当に片手間程度で解呪出来たんだろ？

それこそふーって、息吹きかけるだけで！」

「お前の時と状況が違いすぎるかしら。」

お前が噛まれたのは一箇所。コイツの場合は全身、複数箇所、数え切れないくらいなのよ。

ウルガラムにかけられた呪いがコイツの中で複雑に絡みあって、解くことも出来なくなってる状態かしら。……ベティーにはどうする事も出来ないのよ」

「そんな……！」

話は前日夜まで遡る。

カリオストロが自身らの秘密を話し、レムが起こっている異変を解決するために村へと繰り出した後。ラムが共感能力によりレムに異常事態が起こった事を知覚、ふらつく体で助けに行こうと意気込むその様子にスバルはもとより、カリオストロも仕方がないと重い腰をあげて村へと向かった。

そしてラムの先導の元に村へ進めば、そこでは村人達が右往左往しているのが見て取れた。

何があつたかと1人に聞けば、案の定子供達が噛まれた——のではなく、子供達が行方不明になったのだという。

想定と違う出来事に、更に険しくなる一行の表情。

三人は魔物の住まう森に飛び込み（当然スバルが同行する事を渋つたカリオストロが居たが、説き伏せられてしぶしぶと同行を許可したとか）、ラムの千里眼を用いて奇跡的にレムの居場所を突き止める。

その場所に居たのは巨大な倒木の前に陣取り、血まみれになって孤軍奮闘するレムの姿だった。

あの夜のように角を生やしたレムは、多数のウルガラムと思われる巨大なドーベルマンのような犬達に囲まれており、美しいメイド服を血に染め、数多の傷を負いながらもその場でウルガラムを退治し続けていた。

すぐさまその輪に飛びこんだラムとカリオストロ（とスバル）。



ラムが風魔法で犬を切り裂き、カリオストロが土魔法で串刺しに見舞い、数分で犬の輪を退治する事が出来たが…、レムはその様子に安心しきったのか、その場で倒れてしまった。(ちなみにスバルも棒切れで戦おうとしたが、何故か魔獣のヘイトが高くて困代わりにしかならなかった)

そして直後。一行は彼女が囲まれてしまった理由を知る事になった。

なんと彼女の背後。倒木のうろに当たる部分に行方不明になっていた子供達がいたのだ。

子供達は全員ぐったりとしており、手や足に噛み傷がひとつずつ存在。マナを吸い取られていたのは明白だった。

三人がかりで子供達とレムを抱えて脱出する一行に対して、追いつがる魔獣達。何故かは分からないが特にスバルを執拗に追いかけてわしてくるのだが、カリオストロの力のお陰で、何とか無事に森から抜け出すことが出来た。

そうしてレムと噛まれた子供達を一旦屋敷で預かって、傷の治療及びベアトリスが呪いの解呪を施す事になったのだった。

その結果、子供達は無事に解呪に成功したが――  
(レムは噛まれすぎて解呪出来ない、か……)

ちっ、呪いは正直専門外で手が出せねえ。呪術に精通してるマジサやらアンナが居れば解けなくもないんだろうが。――外傷や病気がくらいなら何とかなるんだがな)

腕を組みながらレムを見下ろすカリオストロ。

ちなみに、レムの怪我を治したのは彼女である。

一部どころか全身に痛々しい傷を負ったレムを、カリオストロはその場で事も無げに治療して見せて面々を驚かせた。とはいえ直す前から鬼化したレムの体は自己治療を始めていたので、治療すら要らなかった可能性もあるが――

「それじゃ、それじゃもうレムはただ死を待つしかないというんですか――！」

「……」

今にも泣き出しそうな声色でベアトリスに詰め寄るラム。

そんな悲劇のシーンの中もカリオストロは考えることをやめない。  
(あー、それかあれだな。一旦レムを分解して再構成してやれば片付くんじやないか?)

……いや。駄目か。人間ならまだしも、鬼族の構成なんて把握も出来てねえ。

魂を別の物質に移し変えるぐらいならまあ何とかだが。……あん?

「……オレ様の可愛さを今更再認識してんのか?」

「ちがつ、お前こんなシリアスな場面でよくそんな事を言えるな……っ!?!」

気付けばスバルがこちらをじつと見ており、思ったことを話すと彼は小声で叫ぶという器用な真似をし始めた。そして改めて、すす、とカリオストロに近寄ると小声で話しかけ始める。

「それより……」

「言っておくが、オレ様を頼っても無駄だぞ。」

根本的にこちらの世界の知識が足りてないし、呪術はオレ様の専門外——加えて、この世界が向こうの世界の法則と同じかどうかも分からないんだ。むしろ失敗して酷くなる可能性の方が大きい」

ぼそぼそと小声で反論するカリオストロに、出鼻をくじかれたスバルはがっくりと項垂れる。

「……無敵の錬金術も、こっちの世界じゃ無力かー」

「むっ、錬金術は万能だけど全能じゃねえんだよ。」

その気になりや世界を紐解く事だつてやって見せるが、それも知識の蓄積あつてこそだ。

トライ&エラー気にせずに行つていいっつーんなら別に構わねえけどな」

「世界を紐解くつてまた大層な事を言うな……ちなみに、やった場合の成功確率は?」

「1割。物言わぬ骸が出来る可能性が6割、よく分からない生物が出来る可能性が3割だな」

何をするつもりか分からないけど、やめよう。他の方法を探そうと強く頷いたスバル。

そこにベアトリスの声が重々しく響いた。

「——方法はないのよ。」

呪いとは言ったものの、これは奴らにとっての食事そのもの。

食べる側が命を落としたら、食事は中断されるのが道理かしら」

「……！」

「おおー……あー……」

「……」

ベアトリスの出した答えに、三者三様の反応を返す一行。

だが全員がその回答に付随する共通の問題点を即座に見抜いていた。

『果たしてあの広漠な森の中、レムに噛み付いた犬を虱潰しで探し回って倒す事が出来るのか』

一番気を揉んでいるラムもその回答に今以上に美しい顔を歪ませている。だがそれでも悩んでいられないのか彼女はすぐ様部屋から出ていこうとする。

「ちよ、待ってってラム！」

「……離して下さいお客様」

スバルは急ぎ去ろうとするラムの肩を掴み、移動を拒まれたラムはスバルを肩越しに睨みつけた。

「宛もなく森に入って一体どうするつもりだ？

そんな事したって、絶対達成出来ない……っつーかレムの方が武闘派だっけ言っただよな!？」

そんなレムがやられたって言うのにお前が単身で入ってもただ返り討ちになるだけだろ！」

「確かにあの子の方がラムより強い。だからと言って指を啜えてレムを見殺しにしろと？ そんな残酷な事、私には出来ません。」

レムは私にとっての大切な家族——世界に一人しかいない、かけがえのない妹。そしてラムはその姉です。目の前に解決の糸口があるのなら、それがどんな内容であれやり遂げて見せます」

向き直り、自身の思いの丈を真正面から伝えるラム。

双子として生まれ、カリオストロ達は知らないが一本角というハン  
ディキャップを負いながらも二人で支え合い生きてきた二人。

魔女教に襲撃されてからも。屋敷に勤め始めてからも。ラムは妹  
であるレムを慈しみ、レムは姉であるラムへと縋った。——常に互い  
を思いやり、仲良く過ごしてきた。

それはこれからも変わらない。いや、変わらせない。

角を切られ、妹より遥かに弱くなるうとも。自分の立場は姉なのだ  
から。

「落ち着け！ 別にレムを見殺しにしろって言ってるって訳じゃねえ  
よ。」

もうちよつと作戦が必要だつて言いたいだけだ」

「作戦も何も……森に入つて探す他ないでしょう。」

一体何を企てるの？ 焼畑よろしく森を全域焼いて全滅させるな  
んて言わないで頂戴」

「そんな物騒な事考えてねえよ!」

——いや、それがな。——いい手段があるんだ」

「……」

半信半疑、どころか一信九疑ぐらいの眼差しでスバルの言葉に耳を  
傾けるラム。

一応止まってくれた事に安堵するスバルに、一体どういう手段を考  
えついたんだと嫌な予感が止まらないのはカリオストロだ。

この少年はつい半日前、レムやラム達を助けたいと意気込んでい  
た。情に厚いのは結構だが、そんな彼自身は猪突猛進で行き当たり  
ばったりなきらいがある。果たして誰もが納得する策を練れるのだ  
ろうか？

否、絶対に否。コイツは絶対に自らを省みずに身体を張る何かを考  
えつく。

眉目を細めてまじまじと下手人を見つめていると、彼はその手段を  
口に出した。

「この策を使えば多分、探さずとも魔獣をおびき寄せる事が出来る。」

そう、昨日の夜に分かったがこのナツキ・スバルの体質を使えば魔獣が「ダメだ」——はい？」

案の定である。

カリオストロは提案した内容を食い気味に却下し、却下された当の本人は啞然とした顔をこちらに向けていた。

「どうせお前の案は自身の魔女の残り香を餌にした罠だろう？」

駄目だ。却下だ。認められない。

折角助かったって言うのに何でまた命張ろうとしてやがるんだテメエは」

スバルが何故か魔獣に狙われやすいのはカリオストロも昨日の時点で気付いていた。

それは本人が非常に目立ち、鬱陶しいから……という理由ではなく。自分たちにはなくてスバルにはある体質が原因であろうとスバル本人はもとより、彼女にも判断がついていた。

自分達と決定的に違う体質——それは、魔女の残り香だ。

理由こそ不明だが、魔獣達は魔女の残り香に誘われるように集まってくるのだ。

「お、おいカリオストロ！ そんな事言ってられないだろ!？」

第一そうしなきゃどうやってレムを救うって言うんだ!」

「はあく……勘違いしているようだから言っておくが、何でそこまでしてレムを救ってやらなきゃいけないんだ？ サービスで外傷くらいは治してやったがそれ以上の事はしてやれねえ。

……いいか、オレ様達は客。この問題はホスト側の不祥事で関係はほぼ無いんだ。

この問題はホスト側が解決すべきモノであり、一介の客が首突っ込んでわざわざ被害を被る必要はないんだよ」

「~~~~つ、カリオストロ。はつきり言うが冷たすぎんぜ」

「ご大層かつご立派な英雄願望大いに結構だがな、そろそろ巻き込まれるオレ様の気持ちを考えてもらってもいいか？」

ああそうさ、お前が出たら確かにオレ様もなし崩しに参加せざるを得ねえ。だがな、お前が死にかける度にオレ様が毎回どう言う気持ち

になるか、分からない訳じゃないだろう。

——お前とオレ様は一蓮托生なんだぞ」

「……………」

自身が信頼を置くカリオストロの言葉に、二の口を告げる事が出来ないスバル。

……当然誤解なく言えば『死に戻りの度に不快感が襲う』というのと『毎回苦しみのたうち回るスバルの姿が見てられない』という事を伝えただけであり、決して恋人同士のアレコレではない。だが傍から見ればそのようなやり取りに聞こえなくもなく、内情を知る由もない他二人は、カリオストロがスバルの事を大切に想う程の密接な間柄なのだなど考えたが、今は詮無き事である。

「…………もう、よろしいでしょうかお客様。こうして話し合う時間すらも惜しいのです、離して貰えませんか」

「う、ちよ、ちよつと待って。待ってくれラム！」

1分、いや2分だけくれ！　すぐに話纏めるから！」

「おわっ!？」

一刻一秒が惜しいラムが痺れを切らしそうになったのを見てスバルは焦り、反対者であるカリオストロを無理やり抱えて部屋の隅っこへ移動。自身も彼女の身長にあわせるように屈み、不機嫌そうな彼女に視線を合わせて相談タイムに移り始める。

「頼むカリオストロ！」

「どーしても、どーしてもあの二人を助けたいんだ！」

「何度頼まれても駄目だ。」

あの犬どもと交戦して分かったが、あいつらの機動力、統率力、そして量は侮れない。昨日でさえ防戦一方だったんだ、犬どもを全部集める、かつ持久戦となればオレ様は生き残れるが、お前を守りきれるか分からねえ」

「昨日は…………ほら、レムとか抱えてたから苦戦してただけで…………！」

「今度は万全の体制で挑めば、どうにかなるだろ!？」

「理由はまだある。お前も昨日のラムを見ただろ？」

「どうやらアイツはレムと違ってマナの貯蓄量が少ないようだし、持久戦となれば途中でお荷物になるだけ。そうなると実質、頼りになる戦力はオレ様一人。途中からお荷物二人抱えて戦闘しろってか？」  
「ぐ……」

実際、二人は昨晩の内に魔獣と何戦も続けていく途中で彼女の疲弊する姿を目撃していた。

スタミナではなく、生命力そのものを酷使しているような様相はあまりにも痛々しいもので。カリオストロの言うとおり、途中で倒れてしまう情景がスバルの頭にありありと思ひ浮かんだ。

「それに、だ。ひよっとしてお前、魔獣使いの事を忘れてないだろうな」

「あ……」

昨夜、村に戻って救助した子供達が全員いるか確認してもらった所、村人からは全員居るといふ言葉を貰ったのだが、スバルとカリオストロは青髪の少女、メイリイが居ない事に気付いていた。その少女を確認しても、そもそもそんな子供は存在しないとされる始末——二人はすぐにぴんと来た、あの少女こそが魔獣使いなのだ。

だがその魔獣使いは現在潜伏中。何をしでかすか分からない状態なのだ。

「魔獣使いの狙いが何なのかは分からないが、十中八九他陣営が差し向けた間者だろう。」

大方村の子供を浚って行方不明にさせ、評判を下げようっていう魂胆だろうが、オレ様達はそれをなんとか妨害した。分かるか？ 妨害したんだ。それなら向こうは次の策を取る可能性が高いというのが分からないか？

その上での魔獣だらけの森に突っ込むなんて、阿呆か自殺志願者の所業としか思えねえよ。リスクがでか過ぎる」

「くっ、ま、毎回毎回リスクが、リスクが……なんだよ、リスクが少しでもあったら動けないのかよ!? リスクは分かってるよ！ だけど、それしかレムを救う手立てはないんだ！ それが最善手なんだよ！

第一それだけ強い力があるんだったら俺の為にも、彼女達の為にも少しぐらい——」

「——甘ったれるんじゃねえツ!!」

しつこく粘り、何とか助けを請おうとするスバルをカリオスト口の怒りの声が打ち据えた。スバルはいきなりの彼女の声と剣幕に体を跳ねさせて目を白黒させる他なく、一方でカリオスト口は動転したスバルの首根っこを掴み、屈んでいる彼を壁に押し付けた。

「お前の策のどこが最善だ!?! 突けばボロボロと穴だらけ、打算もなければ後先を全く考えない。ただの愚策だ、しかも下の下のな! 第一なんだ? さつきから聞いてればオレ様の力をまるで自分の力のように……また黙って尻拭いしろってか? ケツの青いクソガキが、ナマ言ってるんじゃねえぞ!」

「つぐ、うち、ちがつ……別に、俺はそんなつもりは……つ」

「自覚すらねえってんだったら更にタチが悪い、いや害悪だ!

そういう奴に限って失敗すると人のせいにするんだ、やれなんでもそこでもつと力を出さなかった、やれもつと上手くやっておけば……自分の力でもないのに凶々しい。矢面に立つのは他人任せで自分は後ろから高みの見物か、随分と良いご身分だな? そういう奴を世間じゃ何ていうか知ってるか? 『卑怯者』って言うんだよ! 分かったか!?!」

一方的に啖呵を切るとカリオスト口は乱暴にスバルの首根っこを離す。

見た目が少女とはいえ、中身は数千年の経験を積んできた大人だ。18年そこらしか人生経験を積んでいない少年は狼狽する他なく、悔しそうに項垂れた。

「いいか。お前の命に危険を及ぼす可能性が高く、打算も勝算もないならオレ様は動く気はないし、お前を行かせるつもりはない。……諦めて大人しくしてろ」

ベアトリスを含め、ラムもその一幕を見ていたが、やがてラムは呆れとしか取れぬため息を漏らして静かに部屋を出ていった。

(あれだけ痛い目にあっただけ、それでも尚救いに走ろうとする意



気込みだけは買うが。意気込みだけじゃどうしようもねえんだ。

……これも勉強だ。時にはどうしようもない事があるのを思い知れスバル)」

カリオストロは落ち込んだ様子のスバルを放って、備え付けられている椅子にどかりと座り込む。

すっかり微妙な空気になった部屋の中、ベアトリスも居た堪れなくなったのかラムに続けて部屋を出ていこうとすると……ラムと入れ違いで部屋に入ってくる存在が居た。

「ねえ、ラムが今急いで外に出ていったようだけど……。」

……えっと、一体何があったの？」

それはエミリアだった。肩にパックを乗せた彼女は、何うように部屋を覗き込んでいる。どこか遠慮がちな彼女に対して、パックはやほ、と軽く手を上げて面々に挨拶をしていた。

「にーちゃー！ どうしたのかしら、こんなところに来て」

「いやね、リアがいつも以上にしよぼんとしてるから親として心配でね。」

「ここでうじうじしてるより、本人達と話させたほうがいいかなってちよつと焚き付けてさ……。」

「も、もうパック！」

流石自称エミリアの親。小柄体系の不思議猫は自然な様子で貫禄を示すが、その直後に自然な流れで喜色を隠さぬベアトリスの手で胸に抱き寄せられ、可愛らしいマスコットへと戻っていった。

「そ、それよりも！」

「一体ここで何があったの？ レムは……大丈夫なの？」

エミリアが躊躇いなく、真っ先に視線を向けるのは意外にも先日拒絶されたばかりのカリオストロ。

その目はどこか怯えも含んでいるが、停滞せずにまず行動しようとする彼女は、カリオストロの目からしても好ましく思えた。ふ、と相好を崩して答える。

「一言で言えば、レムが今非常に危険だっていうのと、無謀な案を提案しようとしたスバルをオレ様が叱った直後。そんな感じだ」

「えっ、レムが!? 呪い解けないの!？」

「ああ。犬に噛まれすぎて呪いが複雑になってしまったらしい。

解除するためには術者本人、つまり犬達を倒さないと駄目なんだが」

「でもでも犬は森の中で、どこに居るかも分からない。

更に言えばどの犬がレムを噛んだかも不明。タイムリミットは残りわずか。そんなところかな? 八方塞がりだねー、にゃふふふ、ベテイクすぐつたいってば」

「にーちやが来てくれて助かったかしら、鬱屈した空気は味わいたくないのよ」

絶賛猫撫で声をあげるベアトリスと、彼女の愛情を受けて緊張感のないふにゃふにゃの声を漏らすパック。流星にそぐわぬ発言にエミリアは彼らをじと目で見る。

「……八方塞り……。囿……。魔女の香り……」

「スバルもスバルでどうしたんだい？」

折角呪いも解けたって聞いたのに、何かおかしくなってるけど……呪いの後遺症?」

「あー、んー。まあ叱られて絶賛反省中ってところだ。

そつとしておいてやれ」

愛娘のじと目に堪らず別の話題を振ったパック。そして話題にあがったスバルはと言うとカリオストロに壁に押し付けられた時の姿勢のまま俯き、ぶつぶつと何かを呟いており正直怖い。

「そ、それよりもレムの事をなんとかしないと！」

カリオストロ、森に行きましょう! ラムと一緒に魔獣を——」

「計画もなく行っても無駄骨になるだけだ。

諦めろ、って言うのは酷かもしれないが、無事に助け出せる可能性なんて砂漠の中から針を探しだせるくらいの確率。逆に呪われる可能性の方が遥かに高いんだぞ? それともエミリアは効率的に探す方法でもあるのか?」

「それは……でも、うう、ここで手をこまねくだけなのは……!」

「うーん、残念ながらボクも思いつかないや。」

普段は魔獣を近づけないような対策をしてるだけだったから、その逆の手段はねー」

「近づけないような……っ？」

悔しそうなエミリアに対し、ベアトリスに抱かれながらも同調するパック。そんな中ぴくり、と反応したのはスバルだ。彼はゆつくりと顔を上げるとパックを見上げた。

「……パック、近づけないような対策ってなんだ？」

「にやんだい、藪から棒に。」

その対策の事なら聞いてると思ったけど。……ほら、結界だよ結界。

あれはリアが毎度毎度村に出向いて調整してるんだよ」

「結界……」

スバルはパックの言葉を咀嚼するかののように口にすると、再度頭を俯き、何かに没頭するようにぶつぶつと呟きを繰り返す。

「命の危険……、戦力……、結界……」

「……コイツ、本当に大丈夫なのかしら？」

「……」

ベアトリスの言葉もごもともだ。ちよつと強く叱りすぎておかしな方に行ってしまったか？などと腕を組んでその様子を眺めるカリオストロ。

特に密接な看病を経て気心知れたエミリアは気が気でないのか、先程からスバルの周りをおろおろと移動しては声をかけようとするも、威容な雰囲気には圧されてそれが出来ず、というのを繰り返している。それは思春期の子供にどう触れていいか分からない母親のような動きにしか見えなかった。

「スバル……スバル、ねえ平気……？」

「魔獣使い……、ベア子……、魔女の残り香……、エミリアたん……!!」

「？ うん、私よスバル。私は此処にいるから——わっ!!」

「わ、わかつつたああ——!!」

いきなり勢い良く立ち上がり叫んだスバルに、顔を覗き込んでいたエミリアが尻もちをつき、残りの3人はいきなりの彼の行動に驚き目

を見開いた。

「つて、あ。ごめんエミリアたん！ 大丈夫か!？」

「う、うん。平気……そんな事よりどうしたの？ 何が分かったというの?」

「レムを救う方法っ！ やっぱりこの方法で行くしかないんだ。

そうだよ、使えるパーツは全て使うしかなかったんだよエミリアたん！ パズルみたいなものだったんだ!」

「え? え?」

手を差し伸べてエミリアを立ち上がらせるスバルは、そのまま彼女の手を握りながらブンブンと振りながらエミリアの問いに答えるも、彼女は要領を得ない発言に困惑を返す他なく。

やがてひとしきり喜びに浸ったスバルはある人物へと向き直る。

そこには先程よりも不機嫌そうに眉根を寄せたカリオストロの姿があった。

「まだ諦めてなかったのか」

「生憎、諦めは悪い方なんでね!」

「その台詞、さっきの無様な姿がなけりやもうちよつと格好ついてただろうな。……で、一体何するつもりか知らねえが、さっきよりはマシな案なんだろうな? また自身を囮にするってんなら領かねえぞ」

足を組み、肘掛けに片肘をついて頭を預ける彼女はスバルへの目線を強める。ほぼ睨むのと同等のソレを受けてスバルは一瞬たじろぐが、胸に手を当てて深呼吸をすると彼女の目を見返して告げる。

「残念だが、俺を囮にする事は変わらない」

「……論外だ」

「最後まで話を聞けつて。もう時間がないし、本当にこれしか道がない……と、思うぜ」

失望の色を滲ませた眩きを受けてもスバルは揺るがない。

そして畳み掛けるように続けた。

「さっき言ったよな? 『俺の命に危険を及ぼす可能性が高い』『打算も勝算もない』なら動かないって。

じゃあ仮に『俺の命に危険を及ぼす可能性が低く』、『打算も勝算も

ある』のだとしたらどうだ？」

「なに？」

「——ここに居る全員の方があれば、それが可能なんだよ」

両腕を広げて、スバルはカリオストロだけじゃなくこの場に居る皆に聞こえるように、力強く言い放った。

第二十五話 STRAIGHT BET (前編)

「……結局命張ってんじゃねえか」

「だから言ってるんだろ、『命の危険性は少ない』だけって。無い訳じゃあないんだ」

「でもでも、私はその作戦いいと思うわ。それ以外に良案もなさそうだし、早速行きましょうー!」

「はあ、何でベティーがこんな事……」

「まあまあ、リアもこうして意気込んでる事だし。ボクの顔にも免じて頼むよ」

「にーちやの頼みなら仕方ないかしらー!」

「現金すぎていつそ清々しいわア子。で、カリオストロ。これならどうだ?」

「……」

「カリオストロ……」

「——ちっ、わあつたよ。少しは考えられてるようだしな」

§ § §

景色の変わらぬ一本道。視界の隅に流れる大量の木々。

何時間、何日、何年と往復してきた筈の道が、今では忌々しく感じてしまう。

竜車に不必要なほど鞭打ち、最高速度を出して貫っている筈なのに、もどかしくて堪らない。目的地はまだ見えないのか、森はまだ見えないのか。

心を燃やすのは焦燥感。心の片隅で燻るのは諦念と絶望。

だが燻り続けるソレらを無視して、私は先へと進む。

昨夜森で血だらけになった自分の妹を見た時。

そして森から連れ出し屋敷に戻った後にベアトリス様に宣告された時。

それこそどちらとも目の前が真っ白になる気分だった。

今まで妹と二人で過ごしてきた生活を崩さなければならぬ？  
そんなの論外だ。

私はレムの姉なのだ。唯一無二の妹を失うことなど、考えられない。  
妹が助かるならどんな無理難題だろうと、挑んで勝ち取って見せる。

妹を助けるためならどんな代償だろうと、支払って救助して見せる。

今の地位を失ってもいい、腕もくれてやる。足もくれてやる。命ですら構わない。

それであの子が助かるのであれば、なんだってくれてやる。

そんな使命感を糧に、いつもならすぐと思える時間を永遠にも感じながら、ようやく私は村にたどり着く事が出来た。

村人達は砂埃をあげて近づいてきた竜車を遠巻きながら確認していたようで、竜車から降り立った普段と装いの違う私へと直ぐ様近づいてきた。

「ラムさん！ そんな格好で、一体どうしたというのですか？」

「……森に行く必要が出たのよ」

「!? 子供達の呪いは治癒した筈じゃ!?」

「子供達は平気よ。こちら側に被害が出たの」

「……まさか。レムさんか」「あれだけの怪我だったもんな……」

「でも昨日あの女の子が回復をして……」「外傷だけは治せたが呪いが残ってたのか……」

今の私の姿は外出及び戦闘時用の全身白のローブ姿。頭に被っていたフードを外して応対する私に対し、村人達は口々に囁きだす。

「……正直、こうしてくつちやべってる時間が無駄だ。目の前で群がる人々をかき分けて私は進んでいこうとする。」

「お、おい。ちよつと待ってくれよラムさん。まさかあんた一人で」

「そのまさかよ」

「そんなの無茶だ！ この広大な森に、それに大量の魔獣相手に太刀打ち出来る訳が……」

「そんな事知った事じゃない。出来る出来ないじゃないの。やるのよ」

「せめて、昨日行った人と――」

「彼らはこないわ。命の危険の方が大きいし、リスクが高すぎるこの事よ。」

……ラムでもそう思うわ。実際、正気の沙汰じゃあないもの。

この広大な森の中で、妹を噛んだ犬を探し出して始末なんて、出来る訳がない。……でもやるしかないの」

「……っ」

村人達は二の句を告ぐことが出来ない。

当然だ。私のやろうとしている事はただの自殺と同じ。賞賛される筈がない。

だが逆に批判する事だつて出来ない。

彼らは想像してしまつたのだ。自らが同じ立場になつた時に、どうするかを。

そして想像してしまつたからこそ、どうすべきかを迷つてしまつているのだ。

『諦めろ』と自分を説き伏せるか。

『加勢する』と自分に追随するか。

そのどちらの選択肢も即座に選択できるほどの軽さは持ち合わせていない。

肉親を諦めろと言って、諦める人物がどこに居る？

自分の命を投げ捨てて、他人を助けようとする人物がどこに居る？

加勢に出来ない仲間たちを臆病者となじるのは簡単だ。だが、自分たちが仲間に加わるといふ理想を実行するのは重く、ましてや今すぐには決断出来ない内容だ。村人が自然と私から視線を逸らすのが見て取れた。……そんな彼らの葛藤が分かりきつているからか、私は自然と柔らかな表情を見せていた。

「――分かつているわ、別に助けてなんて言うつもりはない。」

彼らも、貴方達も臆病だと断じるつもりはないわ。これはあくまで私の問題なのだから。



「さあ、そこをどいて頂戴。もう時間がないの」

覚悟を決めた私に、最早どんな言葉も通用しないと理解した村人たちは、ゆつくりと道を作ってくれた。開けた視界の先には森まで続く道。それが私には死出の道に見えて仕方がない。

——だからどうした。内心の恐怖も忘れて歩みを止めず徐々に森へと向かうと、村人のうち、昨日助けた子供の親なのだろうか、女性がラムに駆け寄ってとある物を差し出した。

「これは……」

「ボツコの実よ。……貴方、確か魔法を使っていたらしいから。

……これぐらいの事しか出来なくて、ごめんなさい」

手で包める程の小さな麻袋。そこに入っているのは複数の黒い実だった。

彼女は視線を合わせず押し付けるように私にそれを手渡してきた。

……私は彼女に礼を言ってお受け取り、フードを被り直す。

——待っていて頂戴、レム。今お姉ちゃんが助けるから。

§ § §

「あ、見えたみたいよスバル！ カリオストロ！」

「ようやくかつ！」

「体感で10分程度だ、慌てんな。まだ間に合う」

「こちとらそんな肝座ってねーんだよ！ うー早く付け早く付け」

「リラックスリラックス。正念場はこれからなんだからさ」

スバルの案に乗った一行が、屋敷にもう一台あった竜車に飛び乗り、ようやく村を視界に収めたのはそれから10分後だった。

よく晴れた朝方の中、エミリアが運転する竜車（曰く初めて乗ったらしいが、中々様になった乗り方だった）をかつ飛ばして向かった先に見えた村は、遠目から見ても様子がおかしい。

何故か農具や武器を持った人々が広場に集まっていたのだ。

「おい……アレ」「エミリア、様か」

「あの少年と少女も居るぞ」

「おいみんな!! ラムはどうした!?!」

急ブレーキをかけた竜車が土煙をあげて止まるのと同時にスバルが飛び降り、村人へ声をかける。

「ラムさんならつい先程森へ」

「くそ、入れ違いか!」

それであんた達は一体どうしてここに集まってるんだ?」

「どうしてもこうしてもあるか、一人で向かったラムさんを助けて……」

「おい、だからやめとけて!俺たちには関係ないだろう!」

「そうよ貴方! そりゃラムさんには恩はあるわ! でもそれで貴方が死んだらどうしようもないじゃない!!」

「だからってお前……」「いや、まずはラムさんを連れ戻そう。それしか道は……」

どうやら村人は一人行ってしまったラムを手助けするか、連れ戻すか、放置するかで喧々囂々の騒ぎになってしまったようだ。

後追いするようになってきたエミリアとカリオストロもスバルの元へ続き、人々の騒ぎを聞いて遅れてその事情を理解する。

「そう言うあんた達こそ何をしに来たんだ?」

森には行かないつもりじゃ……いや、ラムさんを連れ戻しに来たのか?」

「いや、そういう事じゃ「違うわ」……エミリアたん?」

村人の質問に答えたのはスバルではなく、エミリアだった。

彼女はスバルの前に立つと、村人達に自身の言葉を伝え始める。

「我々は今からエリオール大森林に入り、当家の使用人であるラムの加勢及び魔獣達を駆除しに行きます。その間は貴方達は村に留まり、本日の業務は中止して家で大人しくしていて下さい。落ち着くまで外出は禁じます。」

現在ロズワールは留守のため領主不在の間、エミリアが領主代行として皆さんに命令します」

凜とした声が村人達に澄み渡る。

当主留守の間、責任の所在が問われるのは当然ながらエミリア。彼女はソレが分かっているのか王選候補としての本分を發揮しようとして、スバル任せではなく自ら村の混乱を纏めようとする。

だが白銀の髪にハーフエルフであるエミリアの姿は未だ不信感があるのか、人々の目は冷たく、口々に不安を零し始める。

「一体何が起ころうとしてるんだ？」

「魔女教が来たのか……？」「こいつのせいなんじゃ」

「子供が拐われたのも、やっぱり領主様がハーフエルフなんて王様に据えようとするから……」

「な、何だこの反応……お、おいエミリアたんの話聞いてたか!？」

別にこれはエミリアのせいじゃないってのに……!」

「……これがこの世界のハーフエルフへの反応さ。」

はあ、厄介だよー。他人の空似だったのに、だからボクは人間が好きになれないよ。

うちの愛娘が何したって言うんだい」

「……」

ハーフエルフへの忌避感の根強さを知らなかったスバルが村人の反応に困惑し、パツクが怒り混じりの愚痴を零す。カリオスト口はその反応を冷めた様子で見守り、当のエミリアは口をぐつつぐむと、「お願い!! お願いだから、言うことを聞いて下さい!」

貴方達を危険に晒したくないの!

不安なのは分かっているわ、でも私達が絶対に解決する! ——だから、お願いします!」

目の前で大きく腰を曲げて頭を下げた。

銀髪を振り乱して、恥すらも顧みずに頭を下げる彼女に流石の村人もスバルも度肝を抜かれてしまう。

——そしてスバルもエミリアに続けて、遅れて頭を下げた。

「俺からもお願いだ! 俺たちで絶対にラムも……いや、レムも救って見せる!」

だからエミリアたんを信じて村で大人しくしていてくれ！ この通りだ！」

カリオストロは二人の様子を見てふん、と鼻をならす。

自身の役割を理解して、出来る限りの事をやろうとするエミリアと、それをサポートしようとするスバルの姿勢に、今までの彼女達への内心の評価をほんの少しだけ上向きに修正するに至った。

決してソレを口に出すこともないだろうが、前よりも幾分ましになった二人を手助けしてやろうという気持ちは、彼女の中で少し膨らんだのだった。

——黒髪と銀髪の男女が深く頭を下げる姿に、村人達も思う所があるのだろう。

お互いを見てまた悩むと、三々五々、渋々とした様子で家へと戻っていく。

しかしガタイの良い一人の男性は、戻ることなくスバルとエミリアへと近づき……こう告げた。

「……正直だ、正直嬢ちゃんの事をまだ信頼する事が出来ない。

だけど、自分と同じ人間が嬢ちゃんの事を信じてるんだ。

一回ぐらいは信じて見ようと思う」

男はほれつと手に持っていた高そうな片手剣を投げ渡し、スバルが慌ててそれを受け取った。

「おわっ!？」

「おいおい、落とすなよ？」

兄ちゃんが何を得意としてるか分からないが、流石に丸腰は厳しいだろ？

「せめてもの餞別だ。それで頑張ってくれ」

剣を渡すと、村人は背を向けて改めて自分の家に戻っていく。

スバルはこの異世界で初めて渡された剣を確かめながら、その後姿を眺めた。

「……あの人格好いな。何か俺より主人公っぽい感じだ」

「浸ってる場合か？ おら行くぞ。時間はないんだ」

「第一スバル、キミって剣は使えるのかい？」

「剣道ならちよびつと中学の授業で……え、ん？ どうしたエミリアたん？」

「……」

くいくいとジャージの袖を引くエミリアに対し、振り向いて訝しがるスバル。

エミリアは少し伏し目がちになりながらも、ゆっくりとスバルに視線を合わせれば、

「その……ありがとう。一緒をお願いしてくれて」

「……ッ！」

顔を赤らめながら礼を告げた。

少し上目遣いになったのも一因だろうか、彼女の珍しい表情を見て、スバルは一瞬で顔を赤くしてしまう。そしてソレを悟られないようにと直ぐ様振り向いて背を向いて、早口で呟き出す。

「お、おおおおお！、どど、ど、どーって事ないぜエミリアたん！

俺、俺はいつでもエミリアさんの味方だからな！……あー、やばい。不意打ちのEMTだコレ。こんなの惚れるしかないだろ。もうこの場で結婚申し込んで」

「あ。待つてカリオストロ！ 私も行くから！」

「ほらスバル。くねくねしてないで早く行くよ」

「エミリアたん切り替え早いな?! って言うかせめて浸らせて!」

痺れを切らしたカリオストロがずんずんと先導する中、エミリアも後追いし、スバルも遅れて後に続き、結界が結ばれた木を超えた森へと侵入していく。

森の中に入った一行を迎え入れるのは鬱蒼と生い茂る草木、仄かに届く木漏れ日と聞きなれない鳥の声、そしてむっとする青臭さであった。手入れがされていない森は樹海と言いつてもいい程の荒れ模様で、無秩序に伸びた木々だけでなく、倒木や岩石がまばらに存在していた。

目印がないとすぐにでも迷ってしまいそうな森の中、エミリアを先頭、スバルを中央、カリオストロを後方という隊列で三人は進む。

「ラムー！」

「ラーム！」

「お願い出てきてラム！」

「おーいラム、出ておいでー」

三人と一匹は森の中で声を張り上げ、先走ったラムを探し求める。だが彼女は反応を返す事はない。聞こえない距離に居るのか、それとも暴挙を止めに来たと思われて、意図的に無視されているのか。ともあれめげずに、一行は声を上げながら森の奥深くへ誘われるように歩む。

「しかし……よつと、行ったことねーけど、富士の樹海を思い出すな。

これ、どつかで自殺死体とか吊るされてねーだろうな」

「行ったことないのに思い出せるの？ それもスバルの予知の力か何か？」

「と言うかフジ、って何なのかしら……」

「あー、そういうアレじゃなくてただ場所を知ってるっていうか……」  
「そもそも何で自殺死体なのさ？ まあそんなもの吊るしてたら魔獣が食べて跡形もなくなるから、きつと見当たらない筈だよ」

「……物騒過ぎて参るぜ、ここで自殺すんのは勧められねえな」

「そもそも、自殺そのものが勧められないと思うんだけど……」

「くつちやべってないで歩け歩け、遅えぞスバル」

「あ、いちっ！ だ、だってよこんな場所滅多に来ないから転けそうになつて……ぶわっ！」

「わー！ 大丈夫!? もう、カリオストロもそんなに急かさないの。」

確かにここ、歩きづらいのは分かるから仕方ないわ」

行き先は根が張り巡らされたり、小石だらけだったり、ぬかるんだったり、岩石が阻んでいたり、またその複合だったり枚挙に暇がなく、まさしく悪路と言ってもよかった。

だが根気よく進み続けることで、やがて開けた場所へとたどり着き……そこで一行は目を見開く事になる。

「これって……」

「ああ、ウルガルの死体……だな。どうやらもう交戦は始まっているようだ」

開けた場所中央に、数匹のウルガルの死体があった。

ラムの風魔法によるものだろう。首を断ち切られたものと、胴体ごと真つ二つにされた遺体が血溜まりの中に転がっていた。

「く、じゃあ急ぐしかねえな」

「ああ。場所的にもこの辺りがいいだろう。——よし、スバルやれ。

……ちなみにさつきも言ったが、危険だと思ったらすぐに撤退するからな」

「了解、了解。正直やりたくない気持ちもあるけど、まあ任せておけて。」

それじゃエミリアたん、パツク、カリオストロはよろしくな」

「うん。やるのね。こっちも守るのは任せて頂戴」

「リアがやる気ならボクも頑張らないとだね」

スバルが作戦通りに開けた場所の中央に立ち、カリオストロ達がそんな彼を守るように辺りを固めると、スバルは目を瞑りながら数度深呼吸をし始め——やがて、目を見開いて叫び始めた。

「俺は死に戻りを——」

直後に、世界がモノクロに色あせ、カリオストロの鼻に腐臭が届き始めた。

そしてお決まりの黒い手がどこからともなく現れ、

ぐるりとスバルとカリオストロを囲うように周りを回る。

何もかも吸い込みそうな闇色のソレは何かを示威するようで、

しばらく二人の周りを回った後、スバルの心臓へと向かっていく。

ソレは彼の心臓をひとしきり愛おしそうに撫で回すと、

そのまま彼の心臓を手が沈むほど握りしめ——

「——ッッ!!」

「スバル!! 平気かつ!?!」

「かはっ、あゝっ、ぐ……!!」

平気、だつ、くつそ、やっぱ、め、ちやくちや気分悪くなるなコレ……ッ！」

「スバル、大丈夫!？」

「本人が平気って言ってるなら大丈夫さ。」

——そんなことよりリア、気をつけて。本当に魔獣達が集まり始めてる。すごい量だよコレは」

死に戻りのペナルティが発動したと同時に、スバルが纏う魔女の残り香が強くなり、その匂いに誘われるように森中から魔獣達が集まってくるのがカリオストロにも分かった。

これはスバルの作戦のうちの一つ。自身の魔女の残り香を餌にした魔獣の誘き寄せ（改）である。それは「平時でさえヘイトが高いなら、ペナルティで残り香が強まった直後はどれだけヘイトが高まってしまふのか？」という考えから来た作戦だ。して、実際の所どれだけ集まるのか？

その答えは『入れ食い』である。

森に潜む多数の悪意の群れは、あれよあれよとこちらへ近付いて来ていた。

奇しくもカリオストロに叱責される事で考え付いたその案は、当然の事ながらペナルティ利用をするために彼女に最初却下されたが、二人だけで喧々と、さりとして小声で協議を重ねて、精々心臓が痛むくらいだからとスバルが何とか説き伏せたものだった。（当然ながら他エミリア達にはこの事を詳細はぼかして伝えている）

刻々と近付いてくる脅威に、カリオストロも自身の魔導書を広げて、出し惜しみはなしだと準備を万端にさせる。

「おわっ!？」

「ッ!？」「うわわ」

直後、彼女の隣に現れたのは朱と蒼の竜だ。

忠実な従者達は以前と同じようにカリオストロの隣に前触れもなく現れ、これから姿を見せるであろう敵へと静かに牙を向いて敵意を表していた。



当然その存在すら知らなかったスバルとエミリア、パックは驚き、つい振り返ってしまう。

「なな、なんだなんだ!? 味方だよな!」

「これって……トカゲ?」

「むむ、これもツクリモノだね? 歪というか、何というか…」

「詳しい質問には答えてられねえが、味方だと思ってくれていい。

それよりも備えろ。スバルはその場を動かすよ!」

「お、おうガッテン!」

剣の心得こそないが、ないよりましか。村人に渡された剣を握りながらスバルは警戒し、その周りをエミリア、パック、カリオストロが囲うように立つ。

三人と一匹の視線は目の前にある森に固定され、身体は何が飛び出して来てもいいような臨戦態勢を自然と取り初める。一斉に集中し始めれば一行から言葉が消え、風が草木を揺らす音だけが周りを支配し、緊張は否応なく高まっていく。

——やがて三人を囲う森からはつきりと知覚出来る程に枝を踏む音、地を踏みしめる音、獣の息遣い、そして唸り声が聞こえ始めた。

暗がりの奥からは目と思われるものが光に反射して赤く輝き、今や獣臭までもが漂い始めており、その数と来たら10で収まらない。20、30……いやソレ以上あるのではと思える程だった。

「……はは、なんつーか……囿、効果ありすぎ?」

「予想以上という言葉が一番しつくり来るな。」

もうちよつと調整出来りや文句なかったんだが」

「でもこれだけ居るなら、ひよつとしたらこの中にレムを噛んだのもいるかもしれないわ」

「全部倒せば万事も無し。」

ちよつと難易度は高いけど……まあここはカリオストロの二匹の竜に期待をかけようかな?」

余りの魔獣の量に顔を引き攣らせるスバルに、冷静なカリオストロ。冷や汗をかくエミリアに、余裕を現しながら軽口を叩くパック。

一行を多数の敵意の視線に晒す魔獣達は刻一刻と包囲の罟を締め

ており、その包囲の輪はいつ崩壊してもおかしくなかった。

「——来るぞッ！」

開戦は唐突だった。

魔獣達が一斉に木々の間から飛び出して一行に飛びかかり、カリオストロの声を切っ掛けとして一行は各々の迎撃を開始する。

——エリオール大森林での死闘が幕を開ける。

第二十六話 STRAIGHT BET (中編)

入り組んだ森を跳ねるようにして疾走する。

忌々しくも自己主張するようにのたくる根や、大小さまざまな石などが地の上で至る所に四散しているため避ける必要があり、どうしても平地よりも移動速度が落ちてしまう。

そんな自分に追い縋ろうとするのは三頭のウルガルムだ。

奴らは悪路など存在しないとしても言わんばかりに難なく横を並走し、粗い息遣いと獣臭を漂わせながらこちらを威嚇してくる。

私が森に入ってからまだ1時間も経っていないというのに、温存を心がけていた体力は魔獣との連戦で既に切れかけていた。身体が休息を求めて全身に痛みを発しているが、休んだ時が自分の最後だろう。寒気する予想を考えながら気力を振り絞って、私は駆ける。駈ける。翔る。

そんな中、焦れた一頭の魔獣が自分の後ろに周り、距離を詰めてきたのを感じた。

そいつは自分の背後を陣取りながら、息を潜め始めたのが分かった。

大方不意打ちでこちらへ体当たりを仕掛け、隙を作り出そうとしているのだろう。

——しかし、それは悪手だ。

背後からなら意表をつけると思ったのか？

自分が今どれだけ怒りに打ち震え、どれだけ集中しているのかが分からないのか？

愚かにも奴が私の予想通りに跳躍して、彼我の距離を一気に詰めてくるのを感じた。

背後の様子を見ずとも察知出来るほどに鋭敏化した感覚でそれを理解すれば、ほぼ同時にその場で前方に跳躍する。瞬間的に時の流れが緩慢になり、跳躍の勢いのまま空中で縦に回れば、反転した世界の中で自分に牙を向ける汚らしい魔獣の全貌が見えた。

視界にはその愚者が大きな口を開けている姿があったが、私は既に

掌を向けている。

向けた掌は即座に光り輝き、そして――

「ガアッ!」

ギロチンにも等しい切れ味を誇る、私の風魔法が愚かな魔獣を口元から真つ二つに頭を切り裂き、私が再度地面に降り立って駆け出した瞬間、後ろから醜くもぐもつた転倒音が耳に届いたのが分かった。

これでまた一匹。

今まで仕留めたのを合わせれば、合計7匹程度。コレは平時よりもハイペースなのに違いがないが、森に潜む魔獣――それが何匹居るかは分からないが――恐らくは全体数の幾ばくかしか倒せていないだろう。これでは明らかに足りない。……だと言うのに、自分の身体は既に苦痛のサインを出している。それが情けなくて仕方がない。

「ふッ……ふッ……ふッ……!」

自然と漏れてしまう、空気を求める吐息。

忌々しくも震えてしまう足。

全身に灯された熱に反応し、止まることのない汗。

脳に発せられるのは痛みと、休息を欲するサイン。

だが、まだ終わらない。終われないのだ。

自分がやらねば誰が妹を救うのだ。

自らを叱咤激励しながら先へと向かえば、鬱蒼と生えた木々の奥から明かりが見える。どうやらようやくこの狭苦しい場所から出れるらしい。

私は早く辿り着けと言わんばかりにぐんぐんと両足に力を送り、先へと進む。

木々が過ぎ去り、枝葉を手で払い、最終的に視界が一気に開けたと思えば――その先に見えたのは広大な空。

そして大森林を一望出来る、小さな崖だった。

「ッ!」

両足で土を踏みしめ全身で急制動を駆ければ、崖から残り数十cmくらいで何とか動きを止める事が出来た。が、間が悪い事に追隨して来た魔物のうち一匹が、動きを止めた私に向けて飛びかかって来てい

たのに直ぐ様気づいた。

「つ、る、あああああ——ツ!!」

「キャウンツ!？」

その場で跳んで、身体を捻りながら片足を背後へ翻す。

自分の右足はしなるように放たれた回し蹴りとなり、かろうじて魔獣の顔へと吸い込まれ、そいつは蹴られた勢いそのまま崖下へと落ちていった。

その直後、何とかその場で姿勢を整える事が出来たが、非常に綱渡りな一瞬だった。

一歩間違えていれば、私もきつとあの犬と同じ末路を辿っていた事だろう。

内心の恐怖を押し隠しながら崖を背後に前を見やると、そこに居たのは二匹の魔獣。……いや、遅れてもう一匹が到着してきた。先程まで確認していたのは三匹、そのうち倒したの二匹だった筈だが、途中でまた合流してきたらしい。倒しても倒しても減ることのない、鼠のように忌々しい存在だ。私は苛立ちまじりに睨みつけると、向こうは唸り声をこちらに浴びせて来た。

「はっ！ 同族が大量にやられてご立腹なのかしら。」

”ツノなし”にここまでやられるなんて予想できなかつた？ 犬畜生は群れる事は出来ても、やっぱりおつむの方は足りないわね。

自らの出来の悪さを自覚して、さっさと自害してくれないかしら「グルルルルル……!!」

通じるわけではないと知ってるのに、自然と口から漏れた悪口雑言。

犬達はその言葉は理解出来ないだろうが、抵抗を繰り返す獲物に対して怒りが強いのだろう。

今まで以上の敵意、いや、殺意を見せ付けながら一歩、また一歩と自分へと距離を詰めて来る。

背後は崖。前方はウルガラム。万事休すか。

……いや、こんなところで諦めれるほど、妹の命は安くはない。

決めただろう。自分の命に代えても妹を救って見せると。

ならばここで終わってやれない。やられてたまるか。

負けじと殺意を視線に載せて逆に距離を詰めていく。

彼我の距離は既に5mを切っている。もうお互いの攻撃範囲だ。なけなしのマナを振り絞り、自身の身体から風を放出。両の掌も風を溜め込み、いつでも放出出来るように準備を整える。

「さあ——来るなら来なさいッ！」

息巻く私が啖呵を切って、まさに戦闘を開始しようとした矢先——ありえぬ事が起こった。

犬達が目の前の敵を放って一斉に森へと振り返ったのだ。

その反応に拍子抜けして、つい攻撃の手が止まってしまふ。

自分をここまで追い詰めておいて何故よそ見をする？

思考とともに止まった間の後、犬達はどうとう体ごと向き直り、私から興味をなくしたかのように森の中へと戻ってしまった。

「……一体、何が起きているの？」

最早啞然とする他ない。自分を始末するよりも優先すべき事が出来たのは間違いないが、一体この森で何が起ころうとしているのか。腕を下ろし、警戒を解いて思考に身を委ねていると……次の瞬間、足元が小さく揺れたのが分かった。

(地響き……？ しかも小刻みに……)

頭上を舞うのは何かから逃げるように、大量に飛び立った鳥達。

それを見て震源地はここからそう遠くはない事を悟る。

……何が起きているのかを見極めねばならない。

息継ぎを一つすると、私は再度森の中へと自らを投じて行った。

§ § §

戦端が開かれたと同時に、エミリアとパツクのコンビが放つ殺意に溢れた大量の水柱が、飛び出してきたウルガルムに容赦なく降り注いだ。

水柱は抵抗なく魔獣達の体を貫き、一息に絶命する者や、木々や地

面に縫い付けられた後、抵抗空しくその冷氣に取り込まれて氷像となってしまう者も居た。

その死の雨を運よく避けた犬達は当然ながら術者のエミリアに向かっていく。が――

「たりやー!」

可愛らしい声と共に彼女の徒手が袈裟に振るう動きを見せれば、魔獣は両断されてしまう。

――いや、徒手ではない。その手にはマナで生成した透き通る氷の剣が握られていた。

だがその同族の死を無駄にしまいと横合いからもう一匹のウルガラムが急速に近寄り、彼女の柔肌へ牙を突きたてようとする。

「はい、ぎょんねん!」

しかし、彼女の親を自称するパックはソレを許さない。

唐突に地面から鋭い三振りの氷の槍が勢いよく生えれば、避けることも出来ずに魔獣の腹部を貫通。標本のように空中で縫い止められてしまい、苦悶の声を漏らしたウルガラムは直後に追撃の氷の槌がその頭部を粉碎し、命を絶った。

お互いの死角を埋めるコンビネーションに、無尽蔵とも思える火力。

精霊使いの圧倒的な強さを、一人と一匹は魔獣相手にまざまざと見せ付けていた。

「うちの子を嫁入り前にキズモノにさせる訳には行かないからね。

……と言ってもそもそも嫁にあげるつもりがにやいんだけど!」

「? ありがとうパック!」

短い会話の応酬の後、攻撃を再開し、その強さを見せ付ける。

二対の固定砲台となった二人は鋭い氷の礫を容赦なく犬達へと降り注いでいく。

打ちもらした存在へは氷の剣が、槍が、斧が、槌が、鞭が、ありとあらゆる模造された武器達が獣へと振るわれ、その度に小さな氷の欠片が宙を舞う。

一帯に散らばった欠片は日の光を反射し、きらきらと輝く小規模な

ダイヤモンドダストとなり、幻想的な光景を見せていた。

「レムの為にも。ラムの為にも。村人の為にもスバルの為にもカリオストロの為にも。……ううん、ひいては国の為にも私はやり遂げて見せるわ。」

覚悟してかかっってきたさい。今日の私はすごーく、頑張り屋さんなんだから！」

「その意気だよりア。という事で有象無象のキミ達はここで氷像になっただけいいね！」

エミリアの気力とテンションはいつに増しても高く、二人の息のあった氷雪の嵐は、魔獣達を包み込んで行く――

――その一方、カリオストロも眼前の敵へと無慈悲な攻撃を行っていた。

「ウロボロス 朱と蒼の竜は、その巨体からは想像できないほど素早く動き回り、時に凄まじい膂力で犬を噛み潰し、時に尻尾で切り裂き、時に体当たりで魔獣の肉片を撒き散らす。」

カリオストロは、石の槍を無尽蔵に生成し、時に石壁で叩き潰し、時に凄まじい速度で吹き飛ばし、時に体の半分をそもそも存在しなかったかのように消し去る。

一人と二頭が起すのは死の暴風。犬達の物量すらも問題にならない凶悪な攻撃の数々。

射程圏内に入る、即ち死。と言う現状。これでは魔獣達も近付くどころの話ではない。

抵抗すら出来ずに死ぬのだ。これを”戦闘”と称するのは相応しくない、最早”粛清”である。

カリオストロの前には瞬く間に死骸と血潮の海が出来上がった。その屍の山から漂う臭気に眉を顰めた彼女がぱちんと指を鳴らせば、瞬く間に死骸と血潮が分解されてしまい、それらを造作もなくこの世から消し去ってしまう。

「おいおいどーした、もうおしまいだよ？」



お前らの事はちよつとは警戒してやったんだ、もう少し本気を出していいんだぜ？」

その力、まさしく圧倒的。

犬達もその実力差を否応なく分からされてしまったのか、戦意こそ消えていないが森の木陰から出てこようとせず、ただ唸り声だけをあげて威嚇するだけになってしまっていた。

二対の竜を傍らに侍らせながら、カリオストロはその中央でつまらなそうな目で獣達を見る。

だがソレも無理はない事だろう。

カリオストロは自身が従える二対の竜に「ウロボロス」と名づけている。

その名前に込められた意味合いは「破壊、創造、永遠」。

その系統こそ彼女の得意分野であり、それに誰よりも精通した彼女の敵となるには、目の前の存在では余りにも力不足だった。

「敵は勝手に寄ってきて、闇雲に動く事なくその場で防衛。

守るキングも1人だけになり、援軍も居るし保険もある。

そして相手は雑魚ばかり——まあ悪くはない、悪くはないな」

1人スバルの作戦についてごちるカリオストロ。

考え込むカリオストロを見てチャンスと思っただのだろうか、意表を突く為に木に登っていた一体のウルガルムが、枝から跳躍。空から奇襲をかけようとするが、

「——ギヤイツ!？」

彼女を守る朱のウロボロスの尻尾が瞬時に閃き、愚かな魔獣の体を空中で串刺しに見舞う。

そしてその後、勢いそのまま尻尾ごと地面に叩きつけた。

魔獣は小さなクレーターが出来るほど叩きつけられ、口から止め処なく血を流して痙攣しており、どう見ても既に事切れる寸前。だがその直後、カリオストロが一瞥することなく片手を向けて首から上を消し飛ばしてしまった。

「さて、後は魔獣遣いの策次第だな。用心しておくか」

作業染みた虐殺劇、だがカリオストロに油断も容赦もなく。

彼女は冷静に、慎重に、実験を見守るかのように犬達を処分していった。

最後に、ウルガルドム達がこぞって殺しにくるほど臭いが素敵な男、スバルはというと――

「……」

特にする事がなく、所在なさげにその場で突っ立っていた。

一応ポーズで剣こそ掲げているものの、振るう間もなくエミリア、パツク、カリオストロ、ウロボロス達が瞬く間に犬達を片付けてしまうので、その剣は一度も血に濡れたりはしていない。そもそも本人は剣自体まともに振るった事もなく、振れと言われても上手く出来る自信はないようだが――

（普通、こういうのって男が命がけで戦って、女が後ろで守られるってのがセオリーじゃね……？）

しかし現実はその逆。

スバルは美少女二人に守られ、ただ固唾を呑んで見守るしかない状態。

しかも二人とも自分が予想していたよりも遥かに強いし、容赦がないし。遅しい。

エミリアは飛び道具一辺倒ではなく、近距離戦もお手の物。パツクの援護もあつてバランスがよく、目の前に次々と吹きあがる犬の氷像や、日の光を反射する氷片も相まって美しさを感じる程だ。

カリオストロこそ飛び道具に頼っているが、サポートキャラのウロボロスも本人の魔法も全てオーバークイル気味の威力を誇り、淡々と攻撃して淡々と始末して、目の前に肉片や死骸を大量生成する様子は思わずドン引いてしまいそうになる。

そして今の自分は囷という大事な仕事こそあるが、その現状はただ棒立ちで待機するだけ。

安全安心何よりだが、このまま二人に任せっきりで勝利した時――

いや、勝利そのものはうれしいのだが——その時、何してたかと問われたら「二人に守られながら突っ立ってました!」としか言えない事に、スバルは男としての危機を感じていた。

そもそもは自分でそのような作戦提案したのが原因なのは分かっているが、自らのちっぽけな男の沽券がストップ安に差し掛かるのは如何ともしがたい。

手持ち無沙汰にも程がある現状、何かしら二人の役に立ちたいという思いだけが募り、自らが活躍できる場所をちらりと二人を見て探す——が、

「やっ! はっ! ——やあっ!」

「んーリア、あんまり大きなモノ撃つと視界遮っちゃうから小さいモノを的確にね」

「ん! こう言う感じかしら?」

「上出来! 流石はボクの娘だね!」

「オラオラ、何遠慮してやがるんだ!

折角オレ様が力の一端を見せてやろうっていうのに遠慮してんじゃねえよ!」

「——」

「……」

見渡せども、サポート出来る隙間があるとは到底思えなかった。

逆に足手まといになって邪魔する未来しか見えず、スバルはその場で静かに項垂れた。

「はあー……異世界転生特典が戦闘系だったらってつくづく思うぜ」

剣を地面に突き立て、柄に腕を乗せるようにして脱力するスバル。だがそんな彼が項垂れたまま地面を見れば、ある事に気付いてしま

う。  
何故か、自身の真下が淡い光を放っているのだ。

「……? おーいカリオストロ! 何か俺達がいる地面が心なしか

光ってるぞ！

これってカリオストロの全体バフとかそういうアレか!?

——っっておわ、何かどんどん光強くなっていくぞ!?

「あ!?! なにが光ってるって……? ツ!!」

「へ?」

カリオストロが一瞬振り返った直後、彼女は顔の血相を変える。

と、同時にスバルの体にウロボロスの尻尾が優しくお腹に添えられれば——

「お、ああああああああああ——つつ!!?!? へぶうつ

!!」

そのまま尻尾に強く押し出され、スバルは森の片隅、エミリアの近くに何故か出来ていた柔らかな盛り土の山にシュートされた。

そしてタツチの差でスバルが立つ地面が急速に地割れ、岩石の壁がせり出すようにしてその場に突き立った。

どうやら不利を悟った魔獣遣いは分断策を取ったらしい。

カリオストロは自身らの中心に立つ、明らかな弱者であるスバルを狙った攻撃から咄嗟に守るため、”優しく”彼を吹き飛ばし、結果としてソレに成功はした。だが目の前に聳え立つ高さ3m程、横幅はめいっぱいある壁によってエミリア、スバルとカリオストロとで分断されることとなってしまった。

「はっ! どーやら首謀者はこの近くに居やがるようだな!

——おいエミリア、スバル! 平気か!」

「てめえカリオストロ! ペっペっ! いきなり、うえっ、吹き飛ばすな!

お陰で体中土だらけで……口の中も……おわあっ!」

「こっちは平気よ! スバルも無事!」

「敵に魔術師でも居るのかな?」

ほらスバル、取り合えずそこにいると危ないからこっち来なよ。当たっちゃおうよ?」

「だあああ!?! あぶねっ、危ないからスレスレだから誤射寸前だから!」

見ることこそ出来ないが、壁の向こうで行われているであろう光景は容易く想起出来た。心配こそないだろうが、この壁は無くしてしまった方がいいと考えてカリオストロが手を翳した直後——  
「っ」

巨大な影が自分を覆ったと思えば、自身めがけて巨大な爪を振りかざす獣が襲い掛かって来ていた。

それは警戒をしていたウロボロスの反応を搔い潜つての一撃。

——間一髪、彼女の眼前で蒼竜の尻尾が甲高い音を立てながらもそれを防ぎ、一方の朱竜はその狼藉者へと追撃をしかける。だがソイツは巨体に反して素早い動きで巧みに躲して、再度踊るように森の中へと消えていつてしまった。

一瞬だけ目視できた敵は、ウルガルトより遥かに巨大な獅子に似た姿をしており、その癖動きは俊敏で、ウロボロスの反応が一瞬遅れる程気配を消すことに長けている。戦場から気が逸れたところを見計らって、ここぞというところを狙ってくる辺りは狡猾で、さながら暗殺者のようだ、とカリオストロは思った。

今までの雑魚とは違う毛色の違う敵。

彼女は獰猛な笑みを見せて注意を喚起した。

「おい二人とも、ちよつと厄介そうな奴がきやがったぞ、気をつけろ！」

「うわっ、ちよ、おおお！ 今それどころじゃないってのに、更にか!」  
「ウルガルトじゃない大型の魔獣だ！ こそこそ隠れて不意打ちするのが得意みたいなようだ！」

壁越しの会話をしていると、呼吸の間をぬって横合いから滑るように先程の獣があらわれ、またもカリオストロを巨大な爪で切り裂こうとする。

しかし更なる警戒を露にしたカリオストロに、不意打ちは通じない。

過剰な程の魔力を盾とした朱竜が一撃を弾き返し、蒼竜とカリオストロが同時に攻撃を放つ。

複数の鋭利な石の槍と、尻尾による凶悪な横薙ぎ。さしもの魔獣も

この一撃で終わりと考えられたが、相手は弾き返された勢いを利用して、ひらりと宙帰り。その巨体から考えられないほど軽々とした跳躍で作られた岩壁に横合いから着地。反撃を躲してしまおう。

しかも、驚くべきことに返す刀で自らの長くしなやかな尾を閃かせ、切り裂こうとしてきたではないか。

「くッ！」

咄嗟に反応して障壁で防いだが、その時には魔獣はまたも彼女の攻撃圏内から逃れて、森へと消えてしまう。

……一瞬ではあったが今度こそはつきりその姿を見る事が出来た。それはまるで向こうの世界でも見た「キメラ」のような魔物だった。獅子の顔に、胴体は馬か山羊のような細くしなやかなシルエット。

四足の両手両足は筋肉で覆われ、その爪は鋭利。

長い尾はさながら蛇のよう。

だが大きな図体に反してその素早さ、反射力、そして機転の良さは非常に厄介。

評するならば、この世界で出会った殺人鬼<sup>エルザ</sup>と変わらぬ強さと言ってもいいだろう。しかし、苦戦を強いられながらも、カリオストロはこう考えていた。

(だけどもあ、倒せない程の敵じゃあない)

あちらの世界で彼女はこのような敵を何度も相手にしてきたのだ。

手段さえ選ばなければ、自らの蓄積した知識さえあれば勝ち筋などトランプが出来るほど存在すると彼女は自負していた。

故に勝つのは最低条件。

ここで求められるのは「誰もが傷つかず、そして自身に最も利となる」勝ち方だ。

カリオストロはその頭脳をフル回転させつつ、時折襲ってくる「キメラ」の攻撃を払いのけ、戦闘を続けていくのだった。

第二十七話 STRAIGHT BET (後編)

「カリオストロの方、大丈夫かしら？ やっ！」

「おわああ!?!」

「あれだけ無双してたからしばらくは平気さ。まずはさっさとこつちをやっつけないかね！」

「うおおおっ！」

「ええ、そうね！」

「ひやらあああつ!?!」

「……スバル、キミうるさいよ」

「悪うござんしたね！ こう見えて必死なもんだからさ!?!」

分断されたエミリア、パック、そしてスバルは、ウルガルム達の処理に後を追われていた。

今やカリオストロを襲う事は諦めたのか、その分のウルガルムまでもがこちら側に襲撃しており、先程よりもエミリアとパックは劣勢に追い込まれてしまっていた。その為、まさかのスバルすらも戦闘に駆り出しており、彼はエミリアを襲おうとする犬を微細ながらも攻撃し、先程ようやく一頭を倒したところだった。

不思議な事に犬達はスバルの臭いに誘われたというのに、スバルそのものを攻撃することは一度もなかった。

「しかし、本当キリがないな!?! もう数えるのも嫌なくらい犬共の死体だらけだ!?!」

「キミの囮効果恐るべし、と言うべきか。」

魔獣の命知らずさ半端がない、と言うべきか。

いずれにせよ、この場で攻撃し続けるのもそろそろ不味いね。死骸の山で視界が悪くなってる。そろそろ移動しないと」

石の壁を背に攻撃を続ける二人と一匹だが、言われている通り一面に多数の魔獣の氷像が出来上がっていた。それは美しい光景と評する事もできるが、それが障害となって攻撃がしづらい事にもなっていた。場所を移動して仕切り直さなければ攻撃そのものの命中率もさることながら、不意を打たれ易くなってしまいかもしれない。

「でもカリオストロが……」

「……っ、だ、いじょうぶだ！ カリオストロはあれだけ強いんだ。あいつがやられるなんてまずありえない。」

こっちはこっちでやれることをやろう、エミリアたん」

エミリアの不安が切っ掛けに、スバルの中でもあの夜のカリオストロの死に様が思い浮かんでしまう。だが頭を振るい、内心の不安を覆い隠してエミリアへと助言すると、彼女も迷ってる暇はないと分かっているのか、うん、と頷く。

彼女が納得したのを見届けると早速スバルが先導、精霊術師がソレをサポートしながら一行は行動を開始する。

「オラオラー！ お前らの大好きなナツキ・スバル様がお通りだ！ そこをどけ！」

近寄るのはいいがお触りは駄目だからな!!」

「威勢の良さは買うけど、発言内容は大分消極的だねー、よつと！」

スバルは怖気づきながらもじわじわと犬の群れに向けて距離を詰めていく。ただの一般人なのになんて命知らずな真似をしている！と思うだろうが、これも打算あつてのものだ。その証拠に、彼が先導しても何故か犬達はスバルを襲わず、逆に後ろに退いていくという不思議な光景が起きていた。一体ソレは何故か？ 答えは彼の首に下げられた掌大の大きな結晶にあった。

——そう、何を隠そうスバルは魔獣避けの結界を身につけていたのだ。

これぞスバルの第二の作戦「ナツキ・スバルバリアー」である。

当初は「囚役なのに敵を逸らすものをつけたら囚効果がなくなってしまうのでは？」などと危惧されたが、魔女の残り香は予想以上の集敵効果を誇り、だが結晶の効果も発動するという誘き寄せが近寄りやすい、最適な囚野郎にスバルはなったのだ。

作戦の甲斐あつてかスバルとエミリアとパックは何とか氷像エリアからほとんど抜け出し、そろそろ魔獣の迎撃を再開しようとした矢先。一陣の疾風が群がろうとする魔獣のうち、一頭を切り裂いた。

一行は唐突な援護射撃に驚き、後ろを振り返れば——



「魔獣がどこかに集まってると思えば……これは、一体どういう事なんですか？ エミリア様。お客様」

ラムである。

樹上の枝から攻撃をした彼女は、すぐさま地面に降り立ち、合流してきた。

「ラム！」「ようやく合流できたね」

「おおラム！ 助かったぜ！」

「喜ぶよりも質問に答えて下さい。」

何故貴方達がここに居るんですか。それに、よりにもよってエミリア様まで——」

美しい眉目を細めて怒りを表すラムに、うっとエミリアが視線を逸らす。だが、

「まあまあまあ！ 怒りはまず抑えてくれよ。」

とりあえず目的は俺たちでラムの助太刀に来た！

エミリアさんに関しては俺がどうしてもってお願いして出張って貰ったんだ！」

その視線を遮るように体を乗り出したのはスバルだ。

ラムはそんな彼に対しても怒りのオーラを隠さず、詰め寄る。

「抑えられません……！ 屋敷にレムを置いてきたのでしよう!？」

であれば今は1人しかあの子が居ないじゃないですか、魔獣遣いが屋敷に攻め入る可能性だってあるんですよ!？」

「それについては問題ないぜ、なんつったって今レムは誰にも手が届かないところに居るからな！」

「誰にも……?？」

これもスバルの提案した作戦の一つだ。

囹役となるスバル、ソレを守るカリオストロとエミリアが外出してしまうとなると屋敷に残るは未だ眠り続けるレムと、ベアトリスだけになってしまう。当然の事ながらそうなれば屋敷の守りが薄くなってしまう、敵が攻め入る口実を作ってしまうとカリオストロは指摘した。だがソレも織り込み済みだと彼は作戦内容を伝えた。

スバルの第三の作戦、「禁書庫避難所」である。

彼の言う誰にも手を届かない所とは他でもないベアトリスの禁書庫であり、スバルは怪我人のレムをベアトリスの禁書庫に一時的に避難させようと考えたのだ。

当然そんな提案を渋ったベアトリスも居たが、パックが一言頼めばころりと頷いてくれた。彼女は現在屋敷の警戒及び、レムを見守るという仕事を受けて絶賛書庫で待機中である。

「二人とも悠長に話してる時間はないよ！　どんだん犬達は来てるんだからさ！」

「そういうこった、とりあえずレムは無事で安全な場所に居る！　犬は俺たち全員でとっちめる！」

ソレで今のところは理解してくれ！」

「っ、ちよつと！」

エミリアとパックが襲い来る犬の群れを対処しながら叫び、スバルは未だ納得出来でないラムの手を引いて先へと移動していく。

二人の援護射撃と、更に追加となったラムという戦力で大事に至る事なく視界の悪い部分から抜け出すことの出来た三人と一匹だが、唐突にスバルが足を止めた。

「お、おいあれ……！」

「何？　……子犬の魔獣じゃない、確かに珍しいけどそれが一体どうしたというの？」

三人の進行方向に居たのは頭がハゲているように見える子犬が一匹居た。

その子犬は愛くるしい表情を見せており、ラムはわざわざ足を止めるスバルに疑問を呈する。

「ただの子犬じゃねえ、あれが例の俺を噛んだ魔獣で……っ！」

彼が説明しようとした矢先、子犬の様相は瞬間的に一変。

あどけなさが剥げ落ち、威嚇するかのように牙を剥く。

すると同時に、進行方向の土が唐突に、鋭利で大きな棘となって二人を突き刺そうとし――

「!!　スバル、ラム！　そこをどいて！　――パック！」

「ほいさ、リア！」

「わあっ!?」「っ！」

先行する二人を掻き分け、前に出たエミリアとパック達が両手を翳して氷の盾を作り、その棘を全て打ち砕いた。

スバルとラムは驚きを隠せない。何せ目の前で起こった出来事、それは子犬型の魔獣が魔法を行使したという事だ。衝撃のあまりに目を見開く二人だが、その後ろから犬が示し合わせたようにエミリア及びラムめがけて襲い掛かってきた事を切っ掛けに正気に戻り、スバルが咄嗟に首に下げた境界石を見せつける事でそれを躊躇わせ、合わせる様にラムが風魔法で犬達を打倒した。

「今のって!」

「ええ、あの子犬は他のウルガルムと違って特別みたいね。」

「カリオストロみたいな魔法を行使したわ!」

「それに他の魔獣との咄嗟の連携まで出来てるように見えるね、もしかなくても司令塔の役割があるのかも?」

「司令塔……?」

ちらりと確認すれば、パックの言うとおり自身の周りにウルガルム達を従えるように脇に控えさせ、子犬は中央ではたばたと小さな尻尾を振ってこちらを見ていた。

「……まさかの子犬自体がボスだったとは微塵も思っていなかったぜ」

「だけど、ノコノコと私達の前に出て来るのは愚かとしか言いようが無いわね」

「ええ、こつちだつて魔法くらい打てるんだから!」

ラムとエミリアが同時に両手を向ければ、傍のウルガルムごと巻き込むように風の刃と巨大な氷の結晶が殺到。吹き荒れた風に乗って氷が舞い散り、辺りに白い霧と涼しい風が撒き散らされる。その一撃はスバルの目から見ても強力無比と称するにふさわしい威力を持っていた。

……だが、それほどの一撃を見ても尚、彼の心からは翳りは消えない。何故か逆に不安が頭をもたげていた。

「やったかい?」

「あーその台詞言ったからこれ、絶対上手く言っていない気がする！  
エミリアさんにラム、要注意！ 十中八九終わってない——！」  
そう言い切るが早いか、白煙を切り裂き土槍が次々に飛び出してく  
るではないか。

スバルは咄嗟に屈んで避け、エミリアとラムも注意喚起のお陰で事  
もなく避け、再度臨戦体勢へと戻る。

「お陰で助かったわスバル！ もしかして今、未来を見たの？」  
「経験談！ つつーか通説だな、俺の国じゃ分からないのにやった  
かって言うのと漏れなく失敗するっていうジンクスが……おいおい」  
「……随分と小癩な真似をするじゃない」

やがて白煙が紛れば、一行は子犬がどうやってあの一撃を退けた  
かを理解する事ができた。

従えている魔獣数匹を肉盾にして魔法を受け止めたのだ。

子犬の前には切り裂かれ凍りついた数匹の魔犬のオブジェが出来  
ており、本人は傷一つ負うことなく一行をつぶらな瞳で見つめてい  
る。どうやらあの犬は司令塔で間違いはなさそうだが、よもや自身の  
同族を躊躇なく肉盾にするとは思えなかった一行は驚愕する。最早  
この子犬を見て可愛いなどのたまうことなど、到底出来ないだろ  
う。

「ウルガラム達は捨て駒だから構わないってか？」

「その魔獣達も、身代わりにされても何とも思っていないみたいだね  
ほら、傍らに自ら控えていつてるよ」

「厄介ね……いつそその捨て駒を全滅させてしまえば……いえ」

倒し切るかこちらが全滅するかで言えば後者の方が可能性は高い  
だろう。ソレが分かっているのかラムは口を嚙み、代わりに貰った  
ポッコの実を口に含んだ。

ここに来て、再度エミリア達は厳しい状況に陥っていた。

アイテムで誤魔化してはいるものの、ラムの体力は既に限界が近  
く。

パックはともかくエミリアも軽く息を弾ませている状態。

スバルは体力こそあるが、戦闘力は皆無。

カリオストロは未だ石壁の向こうで苦戦を強いられているようなので期待出来ない。

魔法で応戦して取り巻きを倒しても直ぐ様補充され、逆にその数はどんどん増えて行く。

応戦しても応戦しても、キリがない状態。

体力だけ刻一刻と消費してしまう現状、一体どうすればいいのだろうか？

その打開策を誰よりも考え込んでいたのは、スバルだった。

彼は激しい応酬の中、アドレナリンの出る脳をフル回転させ——結論を出した。

その結論はカリオストロが居れば間違いなく短絡的過ぎると一喝した内容であったが、その歯止め役が居ない現状、スバルは自身の案を推し進めてしまう。

「——エミリアたん、パック、ラム。ウルガラム達は任せた。

……俺があいつを倒すっ!!」

「スバル!?!」「えっ」「!?!」

それは丁度子犬が魔法を放ち、土槍がひとしきり吐き出された直後。

言うが早いか、スバルは犬に向かって一直線に駆け出してしまう。

まさかの独断専行を取り始めた彼に対し、誰もが呼び止める事も出ずにソレを見逃してしまい、スバルは無謀にも取り巻きの犬達を見向きもせず、剣を右手に、結晶を左手に目の前に突き進む。

「そこをおおどけええええええええ——っ!!」

天下御免の、ナツキスバル様のお通りだあああああああッ!!」

結晶を突き出すようにして移動すれば嫌がるように魔獣達がたじろぎ、一瞬反応が遅れたエミリア、ラムがそれを魔法で打ち取る。

さながらモーセが海を割るように子犬へと道が出来、ついに後5m程という所まで接近。スバルは両手で剣を振り上げ、目の前の子犬へと更に勢いを載せて突貫する!

「魔獣、うちとつたりいいいいいい——ッ!!」

振り下ろされんとする直剣。

劍の素人ではあるが勢いの乗った一撃。たとえ殺せずとも子犬の体なら大ダメージ間違いなしだろう。

——そう、子犬の身体であったならば。

「へっ……？」

「——ウウウルルルウウルウアアアアッ!!」

スバルがいぎ振り下ろさんとした直後、今まで黙っていた子犬が唸り声をあげれば、その姿はみるみる内に巨大化。平均的な大型犬のサイズを飛び越え、今や見上げんばかりの巨軀を見せていた。

あの愛嬌ある顔はどこへいったのか、凶悪かつ鋭い歯をびっしり蓄えた口。射殺しそうな程の殺意を蓄えた目。その逞しい両腕には巨大な爪があり、後ろ足二本で支えている巨体は見るからに筋肉質。半端な一撃さえ通さぬと言わんばかりに雄々しい。

かの身体へはまかり間違ってもスバルの一撃など通しそうになく

「え、ぶ——っ」

巨腕が、スバルの身体を横合いから軽々しく吹き飛ばした。

腹部にジャストミートした一撃は威力を逃すこと無く彼に伝わり、弾丸と見間違うほどの速さで木々の間を飛ばし。複数の枝をへし折る音が派手に鳴り響いた。

「す、スバル——ッ!!」

「リアっ!? 落ち着いて! 目の前に集中して!」

顔を真っ青に染めて声高らかに叫んだのはエミリアだ。だが直ぐ様傍らに居たパックが声をかけ、落ち着かせようとする。

ラムも歯を食い縛り群がる犬達への対処を続ける。当然ながら、内心は穏やかではいらなかった。

「——まんまとしてやられた……!」

誰があの子犬が巨大化するなんて想像出来た?

やられたお客様の安否を確認したいけど……恐らく、あれでは……)

如何に短絡的な行動を取った結果と言えど、仮にもレムの為に立ち上がった人物だ。

だというのに彼をみすみす失ってしまうと思うと、戦意が削れる思いだった。

せめてもの、彼の犠牲を無駄にしないで妹を必ず助けねば。

また一つボツコの実を口に含んでドーピングをすれば、不安定になったエミリアを、ひいては自らを奮い立たせようと声を張り上げる。

「エミリア様！　しっかりしてください!!」

諦めて今ここでやられるおつもりですか!?　そうなったら誰がレムを、ひいては村を守るのですか!

貴方は王選候補なのです、竜に選ばれる資格があるのならば、この程度の試練、乗り越えて見せなさい!」

「……っ!!」

「そうさ、リア!　今は集中!

キミはこんな所で死んじゃダメだ、ボクの娘なんだろう?　この程度の魔獣、ぱぱっと倒して見せないと!」

ラムに発破をかけられて、エミリアの顔色が少しは回復し、再度魔獣達へと対峙する。だがやはりスバルがやられた事への動揺があるのだろう、魔法や動きのキレが悪く、更に言えば本気を出したあの犬が、回りの魔獣と連携してその巨躯で暴れまわるものだから、次第に押されていく。

「スバルの尊い犠牲があっても、中々難しいものがあるね……!」

ついに余裕を見せていたパックまで苦言を漏らし初め、一行の顔色がさらに悪くなった、その時だった。

「俺あまだ死んでねーぞッ!!」

クソ犬共よく聞けえ!　俺は■■■■”を——ツツ!!」

崩壊しそうになった戦線にこだまする大声。

それはエミリアやラムを振り向かせるだけでなく、犬達すらも瞬時

にそちらに顔を向けさせた。

間違いない、一同が視線を向けた先には、剣により掛かるようにして立ったスバルが居た。

服が破け、腹部が露出する程の一撃を食らったというのに本人には傷一つないという、奇跡をも思わせる状態だ。その奇跡を前に大声の筈なのに何を言おうとしたか聞き取れない部分があったという違和感搔き消え、代わりに全員が驚愕と歓喜に沸き立った。

「スバル！ 良かった生きてて！」

「生きてたなんて、運が良かったね！」「……」

ラムも言葉こそなかったが、ほっと一息ついて安心を表す。

だがスバルの顔は未だ険しく、どこか苦しそうな表情を見せながらも一行へと続けた。

「みんな、心配させて悪いが俺が囨なのは継続だ！」

あいつらはしばらくは俺しか狙わない、だから、後ろからやつちまってくれえ!!」

「えっ？ ——スバル!?」「まさか……！」

「っ、また無謀な真似を……っ!!」

言い切ったスバルは、踵を返して森の中へと疾走。

同時に、スバルへと集中していたウルガラムと、巨大な魔獣も全てエミリア達を放置してスバルに誘われるように森へと入っていく。

彼の唐突な行動に我先に動けたのは、ラムだった。

追いかける犬達へと風魔法を放ち、その数を少しでも減らそうと尽力する。

「エミリア様！ お客様の……スバル様の行動を無駄にしないで！」

「っ、分かったわ！ パック！」

「はいよ！ 全く、あの子も中々いい男気見せてくれるじゃにやいか！」

エミリアとパックも遅れて森へ入れば、木々を押し倒しながら突き進む巨獣は無防備に背中を向けており、尚且つ肉壁となりえる他の犬達もスバルに夢中。二人の魔法を当てるのに絶好の機会となっていた。



疾走しながらもパツクと同時に輝いた掌を翳し、エミリアが巨大な氷槍を投擲。

それは巨獣の大きな背中に見事突き立ち、犬は痛みに怒号をあげる。

だがその足は止まる事なく、最早操られているかのようにスバルへと追い縋ろうとしていた。

「攻撃を食らったっていうのに全く怯まないなんて、そんなにあの前方の臭いが気に入ったのかし、らっっ！」

「えいつ、やあっ！」「いい加減倒れてくれないんだよ！」

二人の波状攻撃を足や背中に一身に受け、その背を血に染めようとも魔獣は決してエミリア達に振り向くことはなく、ただひたすらにスバルを追い求めて走り続ける。地面に血を止め処なく流しながらも木々を破壊し、すぐ傍まで近づいた標的をその口に収めようと生き急ぐ様子は、異常としか言えない光景であった。

「るお、おおおおおおお——っ!!」

そうはさせじと走り抜けるのは、スバルだ。

これが火事場のクソ力というものか、彼は自分でも考えられないほどの速さで森の中を走り抜ける。ただそれでも並走する犬達には呆気なく追いつかれそうになっているが、結界石——今は魔獣の一撃で砕け、欠片しか残っていないが——それを四方に振りかざしながら、何とか周りの犬達も退けて逃げ回っている。

「スバル、もう少しだけ頑張って！」

「あのデカブツも流石に消耗してきてるね、周りの雑魚も大分数は減ってきてるよ！」

果敢に逃げるスバルを援護するように魔法を放つエミリア、パツク、ラム。

スバルにわらわらとおびき寄せられる犬達は確かに減り続けており、残るはようやく二桁を切った所。一番の問題である巨犬も彼女達の攻撃により速度も落ちて来ているが、未だその勢いが止まる気配は見えない。

未だ状況は苦しい展開が続いているが、一番苦しいのは囿になって

くれているスバルだろう。彼が止まらないよう、そして希望を失わないようにエミリア達は声をかけ続けた。

「もうすぐよ。残りはあと少し——、——つ!? 待つてお客様! そっちは——!!」

今では口の悪いラムもスバルを素直に応援し続ける。

彼女もマナの酷使で鼻から一筋の血を流すほど消耗しているものの、出し惜しみはなしだと、口の中にポッコの実を含みながら魔法を連発している、が。唐突に彼女はスバルへと呼びとめようとする。

(犬、右から。やばい。止まるな。地面に根。ジャンプ。やばい。走れ。)

左から犬。動け。結晶。後ろから来てる。逃げる。疲れた。死。

止まるな。噛まれる。不味い。逃げる。後ろ。目の前。木。大きな音

剣。重い。声。無理。止まるな。犬が。噛まれる。走れ。走れ)

しかしながらスバルは二人の声援は全く耳に届いていない。

ただただ全身のエネルギーを走ることに注力し、必要最小限の本能的な動きと、わずかな思考のみ残して先へと急いでいた。

死を間近に感じながらも、全力で抗う。全身を包む倦怠感も痛みも今は無視出来たが、差し迫る死に対して震えるほどの恐怖は無視できず、またそれが自分を後押ししているのか、壊れてしまったかのように両足が動き続けていた。

(結晶。退ける。邪魔。犬。死。近い。逃げる。屈め。怖い。

エミリア。死ねない。死に戻り。犬。恐怖。逃げる。逃げる。

光。先。走れ。目の前。光。見えた。空。まだ居る。後ろ。

死にたくない。眩しい。光。近くに犬。避ける。やばい。逃げる。

目の前。空。走れ。崖。見えた。崖。崖。落ちる。崖。崖! 落ちる!!)

そんな矢先、スバルの視界が開けたと思えば、見えたのは切り立った崖。

脳が咄嗟に危険信号を飛ばしてくるが、後ろから感じる濃密な死の気配は止まる事はなく、自らの足も止まることはない。ここで止まっ

た時に何が起こるかを自分の体すら理解していたのだ。

故にスバルは足を止めない。奇跡的にその手に握り締めていた剣を、更に強く握り締めれば速度を落とすことなく崖へと近付き――

「死なばもろともだあ――ツ!! いいか、俺は”死に戻り”を――」

ドクン

ダメ押しのパナルティの発動。静止した世界から戻り、臭いが更に増したスバルに、最早魔獣の脳裏には崖と言う危機すらも忘れて目の前の敵を倒すことしか頭になくなる。

対してスバルは崖から落ちる直前にも勢いを落とす事無く跳躍。あっけなくスバルの足が地から離れ、空を舞ったと思えば――眼前に広がるのは青々と生い茂る広大な森。そして、眼下に迫るゴツゴツとした岩肌。一瞬の浮遊感の後、急速に重力の手が自身を地へと引きずり落とそうとするのを受けて、足元から頭までぞわりとした感触が走った。

「おわあああああああ――!?!」

スバルが叫ぶのと、魔獣達が勢いを殺さずに崖から飛び降りたのは同時だった。

落下するスバルを求めて次々と空へと舞う犬達。だが彼らに飛翔能力はなく、次々と重力に引き寄せられて落下していく。

そして最後にあの傷ついた大きな魔獣までもが飛翔を行い、確約された死すら厭わずその大口で空を舞うスバルを噛み付こうとする。

「ふあああああいとおおおお!! いっぱーつううう!!」

その瞬間は、まさしく”鬼”がかつていたと言つても良かった。

奇跡か偶然か、それとも第六感か。空中で振り向きざまにスバルが剣をひらめかせ、大型の魔獣の口を、頭ごと貫いた。

スバルの手に肉を貫く気色の悪い感触。だがそれが致命的な一撃であるという直感があった。

(――ようやく皆の役に立てた)

直後に思い至ったのは場違いな感想。

だが、折角実感を伴えたというのに、スバルの全身は今も地へと落下中だった。

全身を強かに叩きつける風。いや、自ら空気に向かって叩きつけられにいつているスバルに見える視界は、絶命した犬と、急速に遠ざかる空。

明確な死がすぐそこまで差し迫る中、真っ先に感じたのは生への渴望でもなく、死への恐怖でもなく、これは助からないだろうな、という諦念だった。

(折角ここまでお膳立てしたのに……まだ駄目だったか。

カリオストロ、悪い。また死に戻ってやり直しになる……。

ああ、せめて最後はエミリアさんの顔でも見たい。こんな氷付けの犬の顔見ながら心中だなんて——氷漬け?)

「のわっ!?!」

がくん、と剣を握っていた手が抵抗を感じ、スバルの落下が急速に止まった。

一体何が起こっていると目を白黒させる彼に、声が届いた。

「スバルツ!!」「お客様っ!!」

「今足場を作るから、早く移動するんだよスバル!」

ちよつと痛めつけすぎたせいかな、この魔獣結構脆くなってる!」

驚く。崖から顔を覗かせるのはエミリア、ラム、そしてパックだ。なんとエミリアとパックは落ちていく魔獣を崖ごと凍らせて、強制的に足場としたのだ。

もしも諦めずに剣を奮っていなければ、自分は今頃他の魔獣と共に地面で汚いシミとなっていたことだろう。その事実を前に安心よりも恐怖が沸き立ち、スバルは慌てて作られた足場から崖へと戻っている。

「——っあ!?! つめたっ!?!」

「氷だからね! そんな事言っていないで早く早く!」

張り付いた皮よりも自分の命を大事にして!」

これは命綱ではなく氷綱だ。手の平が凍る感触に痛みが走るが、考えないようにして登りきり——エミリアとラムの二人に腕を引かれ

て、倒れるようにして崖から戻ってくる事が出来た。

「っ、はあああ——っ！　い、生きてる！　終わったあああー!!」

「本当に何とかかね……と言うかスバル！　もう！

無茶しすぎよ！　本当に生きた心地がしなかったんだから!!」

「お陰で助かったとは言え、流星にラムも手放して褒められないわお客様」

「まあまあ。でもスバルの機転がなけりやボクらもジリ貧だったからね。

ボクは素直にキミの行動を評価するよ。ありがとうスバル」

お互い息を切らしながら、くたくたになって笑みを見せる一行に、スバルも同様の笑みを見せて地面へと寝転がった。

「ごっちこそ助かったぜ。ありがとうエミリアたん、パツク。そしてラムも。

正直何回駄目だと思ったかわからねえよ。今回ばかりはもう本当に——」

達成感が身を包んだ、と思えば直後に抱いたのは違和感だった。そして自らの言葉を脳内で反芻した直後、スバルは思い出した。

今、カリオストロはどうなっているのだ？　と。

ソレを考えた途端全身に悪寒が走り、消耗した体とは思えないほどすばやく飛び起きた。

「カリオストロはどうなってる……?!?」

「っ、そういえば……早く戻らないと!」

「あの方もやはりいらっしやってるんですか……?」

スバルを切っ掛けに途端に顔に警戒が戻る三人。

そんな彼らの元に、爆音と地響きが伝わった——震源は近い。

「!　今のって——」

「くそ、急ぐぞ!」

先程から悪寒がしてならない。

森から戻る途中、あの日の夜の惨劇が何度も脳裏にフラッシュユバツ

クしてしまう。

悪い想像だと打ち捨てるが、嫌な予感だけがスバルの脳裏に思い浮かんで仕方がなかった。

一刻も早く悪寒を打ち消したいが為に酷使した体に鞭を打ち、エミリア達と共に元居た場所へと戻っていく。

そうして急ぎたどり着いた一行は、ある光景を見てしまう。

何かが炸裂したせいで、崩壊した石壁。

死闘があつたのが見て取れる、出来上がった様々なクレーター。

そして一行が始めて見る「キマイラ」のような魔獣の雄雄しい姿。

その魔獣には戦闘による傷が一つも見当たらず、その口に何かを啜えている様子が見て取れた。

しかして、その口に啜えられているのは――

「……っ、うそ」

「あ……」

虚ろな眼をあらぬところに向け、噛み付かれた首筋から止め処なく液体を流す、カリオスト口の無残な姿だった。

## 第二十八話 JACK POT

魔獣ギルティラウは、非常にプライドが高い魔獣である。

彼はそもそも森の静かなる王と言われており、自身の縄張りである森から出ることはなく、また一つの敵を絞って襲うことがない。何故ならば自分は絶対的な強者であると自負しており、常に敵は挑戦者か餌でしかないと考えているためだ。

だが現在。ギルティラウは縄張りではないエリオール大森林まで出張り、更に自ら敵へと襲いかかっている。

何故か？

本人にとって甚だ不本意ではあるが自身の角を折られ、従わざるを得ない『主人』が出来た為である。

強者である自身が誰かに従うという事はいたくプライドを傷つけるが、今の自分は象徴でもある角を折られた敗者ではない。自分より立場が上の『主人』に従わないという事も、また彼のプライドを傷つけるものであるため、大人しく命令に従っているのだ。

ギルティラウは従うに際しこう考えた。

自分が強者であり続けるためにも、せめてもの完璧なる勝利を物にし続けよう。

敵の強さに関わらず、一切の容赦もなく、一切の出し惜しみもなく。興が湧かずとも、つまらぬ作業になろうとも、『主人』が他に従えるほどの魔獣よりも強く有能である事を示す。それが今のギルティラウが目指す目標であり、生き方であると定めたのだ。

そうして遠路から足労し、『主人』が与えた敵を自らの力で一蹴しに來たのだが、ギルティラウがそこで出会った敵は、幸運な事に今までのどの敵よりも強い存在だった。

それは『主人』と同じく二足で歩く生物。体軀は自分よりも遥かに小さく、爪の一振りで容易く刈り取れる相手に見えた。だがそいつに付き従う二体の生物。……いや生物と言うのはおこがましい「人形」。ソレが厄介極まりなかった。

意志を感じさせぬ面構え。異形の体軀。その体軀に相反した素早

さ。そして内包する力は自らをして本能が警鐘を鳴らすほど。

今まで通りつまらぬ仕事になると考えていたギルティラウは、ひと目見て興奮を覚えた。

しかし相手がどれだけ力を内包しようとも上手く使えるとも限らない。ならばと自らが得意とする奇襲を行った。願わくば自分の思う強者であつて欲しいと、微塵の気配すら感じさせない、絶対の初撃で襲いかかった。

——果たして、その願いは叶えられた。

人間は自分の一撃を防いだのだ。

初めはまぐれかと訝しみ、しかしながら感じる歓びを抑えつつも、意識を逸らした瞬間を狙って再度襲いかかった。すると次は一撃を完璧に抑えられ、お返しにと的確な一撃を放ってくるのではないか。

ギルティラウは確信した。この人間は強者であると。

自分が倒すに相応しい、自らの敵足らんとする敵なのだ。

相手が自分と同じ強者である事を実感すれば最早喜悦を抑えられなかった。

これほどまでの敵を用意した『主人』へと脳内で感謝をしながら、ギルティラウは怒濤の勢いで襲いかかった。地から。空から。近距離から遠距離から。自分の強さを示そうとその人間へ余すこと無く自分の力を見せつけていった。だが当然とばかりに相手は自分の力を全て受け止め、ギルティラウですら唸らせる一撃をお返しに放つ。

殺意溢れる、何びとたりとも邪魔できない甘美な空間に、猛りが止められない。

だが、この応酬は決め手に欠けているとお互いに気付いていた。願わくばもつとこの応酬を楽しみたいが、互いに千日手など望んではいないと分かっていた。

望むのは明白な勝敗。互いに新手を仕掛ける準備がある。

後はそのタイミングを見計らうだけ——ギルティラウが茂みに再度隠れて、人間の間を見定めようとした直後の事だった。

何故かは分からないが、人間が警戒を忘れて胸に手を当てているのが見えた。



敵が初めて晒した明確な隙。

ソレを逃すほどギルティラウは甘い存在ではなく、コンマのずれもなく森から飛び出した。

相手も致命的な隙である事を自覚しているのだろう。

見事な反応力で自分のすぐ近くで大きな爆発を起こし、粉塵を辺りに撒き散らした。

途端に視界が土煙で塞がれる。

成る程。一旦仕切りなおしにする魂胆か。と判断する。

確かにこの土煙の中では正確な一撃を繰り出すのは厳しいかもしれない。

——それが普通の魔獣であるならば、だが。

不運にもギルティラウは他の魔物よりも遥かに高精度な五感を持つ存在であった。

その五感を前にすればこのようなカモフラージュはほとんど意味を成さない。

煙が立ち込める中、不自然な音を拾い上げたギルティラウは瞬く間に飛び掛り、それへと噛み付いた。

ベきり。

肌を切り裂き、肉を噛み締め、骨が碎ける音が牙から広がる。

ナニカを噛み締めたまま反撃を警戒して煙から飛び出るが……それはなかった。

自分が口に啞える人間から血が毀れていき、口内にそれが溢れるのを感じる。

噛みしめた感触は以前も食い荒らした人間の物と同様。

そして自分の一撃は人間にとってどう足掻いても致命傷であると理解出来た。

良い戦いだった。

久しく昂ぶる一時を過ごせたことをこの亡骸に感謝し、餌としてのの身に取り込んでやろうと口内に溢れる血を飲んだその時だった。

ギルティラウは直後、自らの失態を悟った。

「嘘、そんな……っ」

「リアっ！」

唾然自失と言った様体でその場で膝から崩れ落ちたのはエミリアだった。

無理もない事かもしれない。折角仲良くなれそうだと思っていた少女が目の前で無残な姿になっているのだ。その様子を深刻に思ったパツクは慌て彼女に縋りつき、「気確かに！」などと声を荒げている。が、その声は彼女には届いていなかった。

「くっ……！」

ラムはつい先日まで疑ってかかっていた客がやられてしまった事に、悔しさと怒りを感じていた。このままでは終わらせない。だが怒りにかまけてしまえば全滅は必至。

まずはエミリア様を回避させねば、と理知的な光を目に宿らせながら、憔悴した体に更に鞭打つようにもう一口ポッコの実を食むと、スバルへと向き直り提案する。

「……スバル様。今は悔しいですが、一旦屋敷へと戻りましょう。」

あの魔獣に太刀打ちする手段は現状の私達にはありません。——スバル様？」

「——あ」

そのラムが見たのは顔を真っ青に染めたスバルだった。

彼が浮かべる表情、それは親しい人を亡くした故の失意ではなく、悲しみにも見えない。

むしろ大変な事をしでかしてしまった事による後悔と絶望で満ち溢れているように見えた。

「す、スバル様……？」

「お、俺……俺が、やってしまったせいなのか……？」

スバルは目の前の惨状を見て、ある事に思い至っていた。

最初こそカリオスト口でも倒せない相手なのか？ と考えたが、そ

れならばカリオストロは直ぐ様、即時撤退を皆に言い渡していただろう。であれば倒せる相手だった筈。だが——現実にカリオストロはこうしてやられてしまった。

油断？ それとも敵の力を見誤った？ カリオストロに関して言えばそれも考えられづらい。……ならば他の要因が切っ掛けで倒すことが出来なかったとしたらどうだ？

例えば自分が起こした、ペナルティなどが理由だとしたら？

彼女は自らに起こるペナルティを見ることが出来る唯一の存在だ。

そして仕方なかったとは言えそのペナルティを立て続けに、唐突に二連続で使ってしまった。そう、唐突にだ。自分は頭ごなしにペナルティが自分だけに害を及ぼすと考えていたが、もしペナルティが自分だけではなく、カリオストロにも影響を及ぼすものだとしたら？

だとすれば今起こっている現状は、誰の仕業だ？

その疑念に辿りついてしまった事で、スバルの足元から嫌悪感と、悪寒、不快感が湧き上がり、全身を震わせ始める。

全てを拒絶するような信号が働きかければ、胃の腑から急にこみ上げてきた酸っぱいモノが出口を求め、彼は咄嗟に口を押さえた。

「——う、ぷっ」

「っ、スバル様っ!! 今は堪えてください、まだ目の前には脅威が——！」

エミリアとスバルがここまでカリオストロに依存していた事に気付かなかったラムは焦り、身体を折り曲げて不快感を抑えようとする彼に直ぐ様近づき、背を撫でて労る。

折角ウルガルの群れを倒し、レムは恐らく助け出したというのにこのような展開になるとは。……最早二人は役に立たないだろう。早急に撤退する必要があるとスバルの背を押して必死に下がろうとするラムだったが——

最悪は続くものだ。

カリオストロを仕留めた魔獣は既にこちらへと顔を向けていたの

だ。

先ほど倒した大型の魔獣よりはスマートな体型をしているその敵は、首筋に噛み付いていたその亡骸を口からぼとりと落とすと牙を軽く剥いてこちらを睨みつけて来た。

ラムは敵に睨まれながら同時に疲弊した脳で冷静な判断を瞬時に行う。

自分は攻撃できても、あと魔法二発程度で打ち切りだろう。

一番頼りになるエミリアは失意の淵。戦力になるかどうか怪しい。

スバルは端から戦闘力がなく、囷としての役割が果たせるかどうか。

唯一パツクが動けるが、あの方もエミリアに付きつきりだろう。

戦況は非常に厳しい。ならばとラムは冷徹な結論を出す。

『最悪でもエミリアだけは助ける。』

例えソレ以外の誰もが犠牲になろうとも』

この陣営にエミリアは必要不可欠なのだ。

それが自らの主人の意志であり、その意志に背く事は自分の命でも贖えない重い罪だ。

唯一心残りであったレムも、きつと助かっている事だろう。……ならばここで命を燃やし尽くしてでも、エミリアを屋敷に送る。ソレがこの場で求められる事だとラムは断定した。

悲壮な決意を胸に抱いたまま戦えない二人の前に立ち塞がり、けなしのマナを振り絞ろうとした——直後。ラムは異常に気づいた。

魔獣の様子がおかしいのだ。

憔悴しているかのように大きく息を乱し、その屈強な身体を這い回る血管は不気味に浮き出て、不規則に脈動を繰り返している。その眼は自分たちの方向を向いてはいるものの、自分たちを見ていない。あべき筈の黒目がなく、煮だったかのように白濁していた。

(……カリオスト口様は無力に敗れたのではなく、死ぬ前に手痛い一撃を加えていたのかしら？ それにしては外傷が見えないけれども……)

そう考えながらもラムは油断を崩さずに構えていたが、唐突に、魔獣が居た辺りの地面から数え切れないほどの石槍が飛び出した。

魔獣はその一撃を避けることも出来ず、その巨軀を全身貫かれて、空中で串刺し状態となってしまう。

唐突な展開に啞然とするラム。

そして直後、彼女のすぐ傍から聞き覚えのある声が聞こえた。

「——そっちは随分と無理したようだな？　まあ全員五体満足のようだが」

均整の取れた矮軀に、見るものが羨む美しい黄金色の髪。そして誰もが振り返る絶世の顔を持った少女、カリオストロがウロボロスと共に隣に立って居たのだ。

やられた筈の彼女が何故ここに居る？　ラムの脳内に浮かんだ当然の疑問も衝撃のあまりに口から出てこない中、彼女はそのまま横を通り過ぎ、串刺しになった魔獣へと散歩するかのようになり歩み寄れば、  
「《コラプス》」

カリオストロが手を向け、自身の傍らに浮かぶ本が淡く光を発すれば、口から止め処なく血を零し、未だ抜け出そうとする魔獣を中心に渦巻く闇が現れる。

光を通さぬ闇の渦は死に体の身体全てを包む程大きくなると、急速に収束を開始。その中にある存在を末端から小さな粒子状にまで分解していく。

獣は自身に何が起こっているのか理解できてはいないが、さりとして自分が迎える末路を本能的に理解しているのか、存在が消えてしまう事に恐怖して魂から悲鳴をあげてもがく。だが傷ついた身体では抵抗も出来ず、何よりこの闇は自分を決して離さない。

尻尾が消え、両手両足が消え、腹部と胸部、そして頭部が闇に飲み込まれ——やがて世界から切り取られたかのように貫く石槍ごと、その場から消滅してしまった。

カリオストロはその様子をつまらなそうに眺め終えると、従えた竜二匹と一緒に一行へと向き直った。

「……生きて、生きていらしたんですか？」

「あん？ 見て分かるだろ。オレ様は死んでねえよ」

「では先程我々が見たあれは何だと言うのです？」

ああ、とその言葉で合点がいったカリオストロは、視線を自分とそっくりの死体へと向けてラムに語りだす。

「あれは囷だ。オレ様に滅茶苦茶そっくりの、な。」

……どうにもあの獣が素早く中々捉えられないから、ならこちらから待ち構えてやろうと思ってな。爆発でわざと粉塵を上げて、その間にオレ様そっくりの囷を作った」

粉塵が上がる間にあの囷を作った？ 視界が不明瞭なのはどうか聞いても数十秒程度だろう。その短時間でアレほど精巧な囷を作り上げたカリオストロの力は、はつきりといって底知れないとラムは戦慄した。その間にも二人の視線の先にある、死体もどきは目の前で身体の端から砂となって崩れていった。

「囷……ですか。何であれ心臓に悪い囷です。そっくりなのはまだしも血まで流れているのですから」

「そこはオレ様が天才たる所以だな。」

囷は精巧であればある程騙しやすいし、幸いにも元となる材料はこウルガルムの死体の場にたんまりあった。

……ま、あの囷は精巧なだけじゃあないんだがな」

「精巧なだけじゃない？」

カリオストロは小さく嗤った。

「特製の囷なんだよ。あれは。」

身体の構成物としてオレ様の知識にある、ありとあらゆる毒物を仕込んでやった。

——そんな毒まみれの物に食いつけば、どうなるかなんて……自明だよなあ？」

ラムは腑に落ちた様子で頷いた。

あの魔獣の明らかに可笑しい様子、それは囷に仕込まれた毒のせいなのだという事を理解したのだ。……ちなみに言えば囷の材料はウルガルムの死体なのだが、その点については発想が及ぶ筈もなかった。

ひとしきりの慌だたしさが終われば辺りに静けさが舞い降り、ラムは今度という今度こそ張り詰めていた警戒心を解き、ふう、と息をつく。日は間もなく昼に差し掛かる辺り。時間にして数時間程の戦闘だったが、一生分の長さにも思える戦闘だった。

こうして生きていられるのはスバルやカリオストロのお陰だろう。そう考え、まずはカリオストロに最上の感謝を伝えようと考えたラムだったが……何故かその場に居た筈の彼女の姿は消えていた。

いや、正確には彼女は視界から消えただけのようだ。

……ラムの視界の下に、銀髪の少女によってその場で押し倒された彼女の姿があった。

「カリオストロお!!」

「ぼっ!? お前、いきなり何しやがんだ!」

「死んだかと思っただじやない死んだかと思っただじやない!」

カリオストロの馬鹿! ばかばかばかばか! おたんこなす!」

馬乗りの姿勢でカリオストロに乗るのはエミリアだ。

銀髪を振り乱し、まさしく子供のようにぽかぽかと両手で力なくカリオストロを叩き続ける。

カリオストロはよもやエミリアの猛攻を受けて攻撃することも出来ず、ただ両手で彼女の猛攻を防ぐ事しか出来ていなかった。

そんな二人の様子を見てラムは主人の狼藉を止めようか、それとも紛らわしい真似をしたカリオストロを鑑みて放置するか一瞬悩んでいたが、どちらを選ぶか決めたのは隣までふよふよと浮かんで近づいたパックであった。

「ボクとしてはリアがここまでカリオストロに心酔してると思わなかったけど……。危うくリアの心が壊れそうだったんだ。これぐらいは罰として受け止めるのも当然じゃないかな?」

「……」

ラムはそう言えば、と今までのやり込められた分のお返しがあつたなど考えてあっさりとはパックの考えに同意。放置する事を決定した。

「あー悪かった! 確かに紛らわしい真似はした!」

それはオレ様も少しは思う所はある! 悪かったから離れろ!」

「ダメ！ 許さないんだから！」

カリオストロがそんな事するから私っ、私生きた心地がしなくてっ

……！

とにかくすぐーく怒ってるんだからあっ！」

「いたっ、痛いっ!? お、おい落ち着け！ 顔はよせ顔はあ！」

ら、ラム！ パック！ お前ら何とかしろ!？」

「申し訳ありませんがカリオストロ様。」

此度の件、非常に感謝しておりますが、エミリア様のお気持ちにも一考の余地がありまして」

「左に同じだね」

「この薄情者どもがあー！」

救いの手を差し伸べられる事もなく、哀れエミリアによって感情の任せる限りほかほかされ続けていたが、そこに新たな刺客が現れた。

「か、カリオストロ！ お前生きてたんだ、へぶうっ!？」

スバルである。

今の今まで呆けていたが、三人と一匹のやり取りを見てようやくカリオストロが生きていると実感し、堪らずエミリアと同じく感動とか怒りを分かち合おうとした。だが忠実な従者であるウロボロスはソレを許さず、頬に優しいめの尻尾ピンタが見舞われる羽目になったようだ。

「うわあ、痛そう」

「痛そうっていうか痛いよ!? 一体何するんだよカリオストロおー！」

「お前が無茶しやがった分の罰だ。——つかいい加減に離れるエミリアー！」

「やだ!!」

どうやら尻尾びんたはウロボロスの意志ではなく、カリオストロの命令であり、びんたされた理由は下心が見え隠れしていたせいではないようだ。

彼女は未だ抱きついて離れないエミリアと共に立ち上がり、スバルへと告げる。

「お前無茶はしないって言ったよな？ なのになんだってアレを二回



も使っていないやがんだ。

予想外の事態があったのかしらないが、お前が命を張らないのを前提にオレ様が動いたつてのは忘れてないよな？」

「エミリアたんがくつついてるのを見ると途端に威厳が……あ、ハイすいません余計な茶々とか入れません」

ぎろりと睨みつけられれば萎縮するスバル。

カリオストロは勝利を喜ぶよりも、スバルの猪突猛進ぶりにどうしても言いたいことがあるらしい。

駄々をこねる子供のようにへばりつくエミリアをそのままにし、正論を織り交ぜた説教が始まりそうになった時、ラムがそれを止めた。

「カリオストロ様、おっしゃる通りスバル様は多少無謀な行動を取りましたが、結果としてその行動がなければ我々の命は今ここにはなかった事でしょう。今は素直に上手くいった事を喜びませんか？」

その言葉に素早く顔を上下させるスバルに対し、カリオストロは苦々しい表情になり、

「それは結果論だ。こいつの悪癖は早めに釘を刺しておかねーとだな……」

「カリオストロがスバルを心配してるのは分かるけど、そんなに心配ならもつと早くかけつけるべきだったね。」

キミの様子を見るに苦戦する相手でもなかったみたいだけど？

少なくともボクもリアも、スバルの漢気溢れる行動には助けられたよ」

「ぐぬ」

珍しくもパックの擁護が加わり、尚且つ痛いところを突かれてしまったカリオストロは二の句が告げなくなってしまう。

彼女は旗色の悪さを理解したのだろう、しばらく葛藤を繰り返せば一つため息をつき、

「……分かった。ここでとやかく言うのはやめる。」

パックの言うとおりそっちの異常に気付けなかったのはオレ様のミスだ。

だが、続きは後で絶対するからな」

「（続くのかよ……）」

「（まあ、そうだと思つたよ）」

「（この方ならそう言うと思つたわ）」

若干げんなりするスバルを置いて、カリオストロは自分に未だくつつくエミリアを離そうとして――

直後、ウロボロス達が何かに反応したのに感づいて上を見る。

カリオストロの行動にすわ、敵かと遅れて反応した一行。……だが、そこに居る存在を見てすぐさま警戒を解いた。

「ロズワール様！」

「どーおやら、留守の間に色々とおあつたみたいだねえ」

そこには外行きの高価そうな装いのロズワールが空中に浮かんでいた。

彼はゆつくりと一行の前に降りると、ラムがすぐさま傍に駆け寄る。

エミリアも流石にくつついたままは駄目だと判断したのか、名残惜しそうにカリオストロから離れた。

「申し訳ありませんロズワール様、留守中に不測の事態が発生しました。」

ようやくその事態も何とか收拾がついたところですが――」

その場で深々と腰を曲げて謝意を表すラムに、ロズワールが鷹揚に手を上げて話を止めた。

「謝罪は後。ここで話すのもあれだ。詳しい話を聞きたい気持ちもあるが……後にしよう。」

キミ達は随分と無理してしまつたようだろうしねえ。

まーずは全員で屋敷まで戻るとしようか」

ロズワールは特にカリオストロが侍らす二体の竜をちらりと見た後、直ぐ様そのように提案すると、スバルが賛同した。

「ああそれには賛成だぜ、ロズっち。」

正直俺たちみんなへトへトだ、大きな怪我こそないけど今回ばかりはマジで疲れた」

手もこんななんだしな！と氷で張り付いてべろんと皮の剥がれた手

を見せて、ラムやエミリアが顔を顰め、パツクはあー、と神妙な面持ちを見せていた。そしてカリオストロは普通に驚いていた。

「お前腹が丸見えになってるといい、一体何されたんだ？」

「おお聞いてくれよナツキ・スバルの英雄譚を！」

この腹は巨大なウルガラムにぶん殴られて、あいたあつ!？」

言うが早いかカリオストロは腰に据えていた緑色のポーシオンを投擲して、スバルに叩きつけていた。

「何かさつきから踏んだり蹴ったりだな!? いい加減怒るぞ!？」

「治療行為だ。大人しくしてろ」

「へ? お、おおお?」

スバルが全身に浴びた緑色の液体は、かつてスバルがメロンソーダみたいだと称したキュアポーシオンであった。それは皮の剥がれた手や細かな切り傷につけば、じんわりとした暖かさと共に傷を塞いでいき、スバルはその光景に思わず声が漏れた。その間もカリオストロは小さな手でぺたぺたとスバルを触診すれば、ふん。と一つ息をついて離れる。

「どうやらそれ以外は大した傷はないみたいだな。

あのポーシオンが役立つた、って事か」

「お、おお。本当に九死に一生を得たって感じだ。助かったぜ」

あの巨大な魔獣にどう考えても致死の一撃を貰ったスバルだったが、本人は無事で服が破れるだけだった。その理由は、以前のループでカリオストロから渡された自動発動する、一時的なバリア機能を持つポーシオンのお陰だった。これはカリオストロが念には念をと行って渡した物であった。

「スバル君は大丈夫かい? カリオストロ君」

「ああ問題ない。この程度の傷なら——……何だよその顔は」

「いーえいえ。鈴の音のような声で気品と威厳を感じさせる口調がずーいぶんとお似合いだと思ってね。カリオストロ君の前の喋り方も良いが、そちらも良い物だねえ」

あ。と素の口調で話してしまった事をカリオストロは今更思い出す。だがロズワール以外には既にこの口調で通しているので、遅かれ

早かれバレル事だと彼女は開き直った。

「タメ口聞いてごめんなさい☆ こっちの方が好みですかっ☆」

「とーんでもない。こちらとしてはタメ口の方が親しみが感じられるので全く問題ないですとも」

「うん、ロズワール。私もすごーくそう思うわ」

「まさかのエミリアたんがロズつちに同意……!?!」

「あはあ！ こーうしてエミリア様まで同調してくれるとは！

皆さんには申し訳ないがこのロズワール、今日は嬉しさが止められなーいねえ！」

自身の喜び忘れないようにとその場で内容をメモしだすロズワール。

ソレを見て呆れるパツク、エミリア、スバルにカリオストロ。

ラムは涼し気な表情でその様子を眺めていた。

だがロズワールを除く一行が危機を乗り越えた事に、少なからず喜びの感情が溢れているのは、見て取れるようだった。

「スバル」

「ん、何だよカリオストロ？……って説教か!?

ちよっと待ってくれ、まだ屋敷についてないぜ!?

いやそりや自分でもあの時はちよっとアドレナリンどばどばで今更考えると勇者でもねーのに何やってんだ俺とか今更思ってるけど何か輝ける主人公っぽさを出そうと考えたらこうやって」

「あゝ!?! やっぱりテメエそう言う英雄願望抱いてやがったのか!?!  
弱いうちは冒険すんなって言ってんだろぅが!?!」

「いだいだいだい……しゅいまへんでひほほらっはんれふ……  
!!」

「つたく、茶々入れんじゃねえよ。話す気失せるだろぅが」

「あー悪かった。悪かったって。」

ホラ、俺ってなんつーかギャグを入れねえと死んじやう病みたいで  
……それで、一体どうしたんだ? カリオストロ」

「……まあ、あれだ。お前の無茶は正直見過ごせねえが……。」

「こういうのは口にするのが大事だからな」  
「?」

「よく頑張ったな。褒めてやるよ」

## 第二十九話 手に入れた安寧

騒動を乗り越え、疲弊した一行がロズワールと共に徒歩で村へと戻れば、普段作業に従事している筈の村民がその場に見当たらない。どうやらエミリアの言い伝えを守って家の中で待機していたようだ。その様子を見ればエミリアが手を胸に当ててほっとし、スバルはそんな彼女を感慨深そうに眺めて頷いた。

「ふうむ、どうやらちやーんと言いつた通りだね。」

「……エミリア様。今一度彼らを呼んでも？」

「ええロズワール。皆も不安に思っているだろうし、早く無事に終わったことを伝えないとね」

ロズワールがエミリアに伺いたてれば、すぐさま控えていたラムが代わりに前に出て皆を呼びたてようとする。が、彼はソレを手で止めた。

「ロズワール様……」

「ラム。キミはこの戦いで体を酷使しすぎている。先に竜車で休んでいたまえ」

「いえ、この程度であればまだ……っ」

「ラム」

「……っ。……分かり、ました」

主人の断固たる口調に、ラムは渋々と諦めて竜車へと先に戻っていく。

カリオストロはこの一幕を意外そうに見ていた。ロズワールを良く知るわけではないが数千年に及ぶ経験上、彼のような人物は部下を駒のように使い捨てる傾向にあった。であるというのに部下を氣遣ったのは、本当にラムを大切に思っている、情の深さがあるという事の証拠である。

（あるいは、この一幕そのものを俺たちへの外面的なアピールとしてあえて振る舞っているか。いや……考えすぎだし、今そんな事考えても仕方ねえ事だな）

「村の者達よ、ロズワールⅡⅡⅡメイザースとエミリア様が今帰還し

たぞ!!」

そうこう考えている内にロズワールが両手をあげて村の隅々まで聞こえる声を高らかにあげた。その音量はまるで拡声器を使っているように大きく、カリオストロはそれが魔法によるものだと即座に見抜いた。

そして彼の声に呼応して村人達が窓や扉から顔を続々と覗かせ、全員がぞろぞろと村の広場、ロズワールの元へと集まっていく。村人達は領主の存在に幾分か安堵した様子を見せているが、続く内容が良い報せか悪い報せかが分からず不安を表に出してざわめいていた。

「ロズワール様」「ロズワールさま」「ロズワール様だ!」

「エミリア様もいるぞ」「あの人間も」「ラムさんは!？」

「ラムさんがいない」「魔獣はどうなったの?」「お母さん、ロズワールさまだよ!」

集まった村人が一様に憂苦を曝け出せば、ロズワールは手を数度叩く。

するとどうだろうか、村人達はすぐさま口を閉じて傾聴し始めた。「村の者達よ。安心するがいい!」此度の私の留守を狙った魔獣による襲撃は無事に解決した!」

敵とした声の人々に浸透すれば、途端に村人たちから不安の表情が消え去り、全員が顔を明るくさせた。

「皆も存じているかもしれないが、それもこれも全てはこちらにいる者たちのお陰である!」

エミリア様、パツク様。我が従者であるラム。

そして、客人であるスバル君とカリオストロ君。

改めて私から、そして村民からの皆の感謝を受け取って欲しい!」前に出て話していたロズワールが手を鷹揚に広げてその場から横に移動すれば、村人達の視線がスバルたちに晒され、直後一行は村人たちの歓声を浴びることとなった。

「「うおおおおお!!」」

「ありがとう!」「ありがとう!」「ありがとう!!」

「つてことはラムさんも無事なんだよな!」「さっきラムさんの姿見た

よ！」

「レムさんも無事!?」「兄ちゃん、なかなかやるじゃねーか!」「エミリア様も頑張ってくれたのね」「カリオストロちゃん!」「あいつすげーんだな……」

わつとした歓声に瞬く間に包まれば、エミリアとパツクはぺこりと頭を下げ、カリオストロはふん、と鼻を鳴らす。ただスバルだけは照れよりも驚愕が大きいのか、まるで未だ状況がよく掴めていないという感じの顔を見せていた。

「な、なんかこう……むず痒いつつーか実感沸かないつつーか……」

でもこれで、屋敷に関わる問題は全部……終わつたんだよな?」

「屋敷に関わる……?」 スバルつたら変な言い方をするのね。

でもでも魔獣騒ぎについて言えばもう終わつたと思うわ」

「魔獣は数え切れないほど倒したし、全員欠けること無く生還! コレ以上無い勝利さ。これならあのメイドの子もきつと生きてると思うよ。……そして、この勝利にキミの貢献は欠かすことは出来ない!とボクは断言できるね。こればかりは誇つていいんじゃないかい?」 スバル」

「おーやおや、スバル君もどうやら大活躍だーつたようだねえ。」

コレは屋敷に戻つたら是非にとも武勇伝を聞かせて貰いたいものだね」

三者三様の言葉を受け止めれば、ようやく実感が湧いてきたのか。

スバルはくうくうっ! と小さく唸りながら身を縮めていき、

「びいびいいくとりいびい——っ!!」

「うわっ」

大仰に。いや、本心からの喜びを全身で余すことなく表現しようと両手を挙げて村人へと笑顔を見せた。村人はその声の内容自体は分からないが、スバルの満面の笑みを見て更にやんややんやと歓声をあげて、エミリア達一行を讃えた。

その後、テンションの上がったスバルがエミリアの手を取って一緒に両手をあげて「ビクトリー!」といわせる一幕があったが、直後調子に乗りすぎるなどカリオストロに背中を強めに叩かれ、続く彼女の



一言ですぐ様冷静を取り戻す事になる。

小さな錬金術師曰く。

「何でレムが無事だと決め付けていやがるんだ」

§ § §

「すっかりはしやぎすぎたけどレム！ そうレムだよ！」

カリオストロの鶴の一声で一路、村から屋敷へと向かう一行。

スバルは今や冷静を取り戻すどころか顔を青ざめた様子で、竜車から顔を覗かせて屋敷への到着を今か今かと待ちかねていた。

「スーバル君、窓から顔を出すのは危ないよ。」

風除けの加護から出てしまうとたちまち吹き飛んでしまうからねえ」

「けどこんなのじつとしていられないだろ!？」

くそ、何で浮かれてたんだ俺は……っ!」

我慢できないと言った感じで竜車の中で片膝を揺らしながら呟くスバルに、同乗するカリオストロはやれやれと言った感じで窘める。

「がなるんじゃねえよ。結果はあと数十分ほど分かる。勝利の余韻に水差したオレ様の言う台詞じゃないかもしれないが、万が一があるっただけで、ほぼ大丈夫だろう。——いや、万が一ってのは正確じゃあねえな。精々千が一、いや、百が一の方が正解か?」

「それ、どんだん確率がってない?」

真面目そうに呟く彼女の発言にエミリアが突っ込み、スバルの膝は更にビートを刻み初める。

パツクは流石に貧乏ゆすりをうるさく感じて来たか、「うるさいよスバル」と注意すれば、一旦竜車の中に沈黙が降りる。

……そして少し重苦しくなった空気の中、エミリアが少し落ち込んだ様子で話はじめた。

「でも……うん、カリオストロが忠告してくれて助かったわ。」

私も肝心のレムの事も忘れて、完全に勝った気でいたもの……これ

じや領主なんてまだまだね」

「いや、でも無理はないって俺は思うぜ!? 実際俺たちがした事はそれだけ凄い事だし、結構な綱渡りな一面もあつたけどそれでも成し遂げた。」

勿論レムの事を忘れてなんてなかつたけど、ソレ以上に喜びが強すぎた……!

はしやぎすぎた一面は……まあ、反省しなきゃだけど……」

エミリアを擁護したスバルがちらりと視線をずらせば、そこには優雅に腕を組んでいるロズワールの姿があつた。彼は取り立てて慌てている様子もなく、自然体そのもの。スバルと視線があつてもにこりと笑いかけるだけで、どうにも余裕があるように見えた。

「……なんつーか、ロズつちは余裕……いや冷静だな?」

「領主たるもの常に冷静でいる必要があるからねえ」

上に立つものとしての覚悟の差か、ロズワールは冷静沈着。柔らかな態度を崩さずにスバルへと受け答えをする。

こういうのは長年責任ある立場として居続けた経験が物を言うんだよ、と説明する彼にスバルはふーんと頷くが、直後パックが茶々を入れた。

「冷静、っていうより絶対大丈夫だと思ってるような感じもするけどね。」

ちなみにボクも同感さ。絶対。間違いなく。多分。……恐らくは、大丈夫なんじやにやいかな〜」

「だからどんどん確率下げる発言やめろよな、ぞつとする!」

パックの冗談とも思えぬ冗談とスバルの反応に、軽い笑いが車内を満たす。

その中でただ一人、カリオストロだけが、今の発言に思う所があるのか笑っていなかった。

(絶対大丈夫、ねえ)

パックはある程度心を読むことが出来る。その彼が言うのだ、ロズワールは無事であることを確信している。しかし何故無事であると言いつけるのか?

屋敷に偶然招いた自分たちの力に、そしてエミリア、ラムの力にそこまで信をおいているのか？

留守中の話を今詳しく聞こうともせず、これだけ落ち着いていられるには何らかの別の理由があるのではないのだろうか？

(例えば、留守中に何が起るかを理解していた……とか。

それが分かっている放置して、自分たちを動かしたとか。

はたまた、自作自演でのエミリアの株上げとかか？)

自分の髪を一房持ち上げて手の平で弄びながら、カリオストロは内心で自嘲した。

(——はっ、どんだけオレ様は疑ってるんだ。

理由がないし、デメリットが大きすぎてメリットがないだろうが。

……どうにもこの世界に入ってから疑心暗鬼になってしまいがちなだ……全く)

「お、屋敷が見えたみたいだぞ!？」

「お客様、危ないので座っていて下さい。本当に落ちます……あら？」

ちなみにだが、皆が乗る竜車の手綱を引くのはラムである。

本来なら席に座って安静にするべき彼女だが、せめてコレだけでもさせて欲しいとロズワールに懇願し、今に至っている。そんな彼女は御者席から何かを見つけたようだ。

「……レムね」

「それと、ベアトリス？」

ひよっこりと窓から顔を出したエミリアが覗き見れば、屋敷の入り口前で二人が喧々囂々と言いつ合っており、更によく見ればレムは寝間着姿のまま外へ出ようとし、ベアトリスはそうはさせじと彼女の服を引っ張っている様子が目に入ってきた。

「——いかせないかしら！ お前はあいつらが戻るまで禁書庫で待つよ！

お前の呪いは既に消えているからきつとあいつらは上手くいっただのかしら!？」

「いえ、いえ！ それでもここでじっとしている事なんて出来ません！

ベアトリス様どうか離して下さい、私なんかの為に姉様やエミリア様達にもしものことがあったら、レムは、レムはロズワール様にも、ましてや自分にも顔向けが出来ません……っ!」

「聞き分けのないメイドなのよ! 交わした契約は絶対!」

こうなつたら意地でもお前を戻してやるかし——ほら、戻つて来やがったのよ!」

ずりずりとレムに引きずられながら窘めようとするベアトリスだが、ようやく近づいてくる竜車に気がついたらしい。一行を指させば遅れてレムも気づく。そして彼女は抵抗を止めれば一行を、特に御者に座るぼろぼろのラムを見て瞳を潤せはじめる。

「姉様!」

屋敷の前に竜車が止まり、ラムが御者席から降りるなりレムが思い切り抱きついた。

ラムはそんな妹の行動を拒むこと無く受け入れ、優しい笑顔を讃えながら背中を撫で返す。

……遅れてロズワール達が竜車から降りた事で、その表情は慌てた物に変わったが。

「ろ、ロズワール様申し訳ありませんっ!」

「いやいや、いいさ。二人共心配で気が気でなかったよーうだしねえ」

「実際感動の再会だもんね。ほら、いった通りだろう?」

「本当、良かったわ」

「はああああ……いや、まじで肩の荷が降りたわ。良かった良かった」

この場に居るほぼ全員が安堵の表情を浮かべて肩を撫で下ろし、微笑ましい二人の様子を見て和む。ベアトリスも敬愛するパックが帰つて来て嬉しいのか、ととと、と近寄るとパックを抱きかかえてくるくと喜びを表現した。そんなマイペースを地で行く彼女に、カリオストロが近づいて小声で問く。

「で? 感動のあまりに抱きついてるあの妹、実際のところどうなんだ?」

「……何だ、お前も戻ってきてたのかしら。ベティーの感動に水を注がないで欲しいのよ。」

まあ見ての通りかしら。アイツからもう呪いの反応はないのよ。それでお前たちの作戦の方は——言わずもがなかしら」

「まあな」

どうやらレムの呪いは全て消えているようだ。

その言葉を聞いて初めてカリオストロは息を一つついて、二人を眺める。

レムは今もラムに抱きついたまま肩を震わせており、ラムから離れようとはしていない。

その様子を全員で生暖かな視線を向けて眺めていたが、その中でロズワールが手を叩いて全員の注目を集めた。

「さあーて、思うところも色々あるだろうが。」

まーずは皆、体を休める事を初めてもらおうかーねえ。……それでレム、体の方は」

「申し訳ありませんでしたロズワール様……っ！

はい……っ、レムは……レムはもう平気です……っ！

皆さんのお陰で、レムは……っ、でもレムのために、レムのためにこんな……っ！」

「レム。レム……そんな卑下なんてしないで頂戴。」

皆様は私達のためにも動いて下さったのよ。その好意を蔑ろにする発言はしてはいけないわ。

——さあ、大丈夫だから少し離して頂戴。

ロズワール様がおっしゃっていたでしょう？ エミリア様やお客様を休ませないと……」

「はい、はい……っ、全てレムに、レムに任せて下さい姉様……っ！

お客様、ロズワール様にエミリア様、お怪我などは……？」

感情の収まらぬレムはぐすぐすと鼻を鳴らしながらも一旦ラムから離れると、寝間着姿のまま一行へと向き直る。一行は誰かが怪我したか、ときよろきよると自分たちを見回し——やがてその視線は一つに収束していった。

「俺か!? いや、確かに怪我したけどさつきカリオストロに直して貰ったばかりだし」

「外傷だけで中はどうか分からないでしょ?」

「少なくとも私はただ疲れただけだから、念のためレムに看てもらおうべきよ」

「あー……じゃ、じゃあお言葉に甘え……へっ?」

エミリアがそう諭したが最後、レムがスバルの手をがしりと掴み、驚くスバルを無視してずるずると屋敷の中へと引きずっていく。

「分かりました、お任せ下さい!」

不肖レム、姉様とお客様の傷を診させていただきます!!」

「力強っ!? いや、ちよつと待って行くって!」

別に行かないとは言っていないから!? 引きずらなくていいから!?」  
「……お客様、諦めましょう。今のレムのはりきりは誰にも止められないわ。」

ロズワール様、大変恐縮ですが今日はご厚意に甘えさせて頂きます」

「うんうん、ごゆるりつくりと。報告はエミリア様に聞かせて貰うよん」  
ペこり、とラムも瀟洒にお辞儀を返すと、レムの後に続けて屋敷へと下がっていく。

その様子を見ればその場に残された者たちも順次、改めて行動を開始していく。

「さーて、戻りますか」

「……やれやれなのかしら。」

契約も無事終わらせた事だし、ベティーも書庫に戻るのよ。

あ、にーちやも一緒にどうかしら? 美味しいお茶とお菓子を用意してるのよ」

「ん? そうだね、じゃあお言葉に甘えようかな!」

「わーいなのかしら〜♪」

ベアトリスはお花畑が後ろに見えそうな可憐なステップで、パツクを抱えながら自室へと向かっていった。普段からは想像出来ぬ程の猫撫で声を見せるベアトリスを見て、猫被りすぎだろうと自分の事を

棚に上げた感想を思い浮かべるカリオストロ。そんな彼女の肩をエミリアがぽんと叩き、振り返った所でふわりと笑みを見せた。

「カリオストロ、早く戻りましょ。」

私達も一緒にお茶でも飲むのはどうかしら？」

「……ロズワールとの話はいいのか？」

カリオストロがそう問いかければ、ちらり、とエミリアはロズワールを覗き見る。

するとロズワールは軽く肩をすくめて頷いた。

「ですって」

「……いいのかよ」

「帰路の途中で大体のあらましは聞いているかーらねえ。」

「事の詳細についてはまーた休憩後にでも聞かせて貰うとするよ」

だから存分に休み給えよ、と爽やかな態度で二人に話しかけたロズワールは手をひらひらとさせながら先に屋敷へと戻っていき、エミリアは嬉しそうにカリオストロの背中を押しながら屋敷の中へと移動する。

「わーった、分かったから押すなって」

「カリオストロも疲れたでしょ？ 私もレムみたいに労ってあげたいの！」

「労うって、お前も功労者の1人だろうが……」

カリオストロは押されながらも満更でもない様子で客室に誘導される。

そこにある高級そうなソファは今の疲弊した彼女らにとってはとてとても魅力的に見え、二人で流されるがままに隣り合わせで座り込めば、体をふわりと柔らかな羽毛のクッションが包み込み、二人共声が漏れ出てしまう事になった。

「はあー……流石にちよつと疲れちやつたわね」

「ふうー……全くだ、まさかちよつと泊まっただけでこんな騒ぎになるなんてな」

「あう……その、面目（づ）ごいません」

「別にお前には怒ってはない。」

単純に巡り合わせが悪かったって考えてるし、お前に沸くのは同情くらいだ。

これからもこういう嫌がらせめいた物が降りかかってくるんだろ？」

「……うん。多分」

今回の件が妨害なのは既に明白。

騒動の主犯格であろう、あの青髪の少女メイリイは既に姿を晦ませていた。

騒動そのものは抑えることは出来たが、彼女を捕らえることが出来なかったのは痛い。

——もしかすれば潜伏し、今後も同じ妨害が考えられるかもしれない。だがその対策を考え、実行するのは最早自分の仕事ではない、とカリオストロは考えていた。

既に食客としての待遇を受けているが、短い間で与えた恩は盗品蔵騒動を考えればかなりのものになっている。今後どれだけこの屋敷に厄介になるかは分からないが、カリオストロがその事実を他人行儀気味で告げたのは、「こう言う騒動はこれっきりで御免だ」という意味に他ならなかった。

エミリアもソレが分かっているのか少し寂しそうに呟き返す。が、直後お前には？　と言う言葉の意味に疑問を浮かべる。それでは自分に怒っているのではなく、別の人に怒っているように聞こえるが一体誰に？　エミリアが顔を覗き込めば、彼女はフン、と鼻を鳴らした。「怒ってるのは主に自分……そしてスバルに対してだ」

「カリオストロ、とスバル？」

カリオストロはでも、上手く魔物は倒してくれたわ。そりゃ倒す方は少しは驚いたけれども……。それにスバルのお陰で私達は助かったわ。本当よ！　スバルの切っ掛けがなかったら私たちはきつと全滅してたわ！」

今回の功労者であるカリオストロとスバル。

カリオストロは皆を驚かせる一面があったが確実な作戦で強力な魔物を撃退した。



スバルは確かに少し無謀な動きもあつたが、その行動は勇敢かつ立派なものであり、褒めこそするが叱るのは違つたとエミリアは擁護する。

だがカリオストロはそんな擁護を違つ、とぼつきりと切り捨てた。

「第一に、オレ様は自らの自作戦が浅慮だと怒つてはいない。

第二に、スバルのソレはさつきも言つたが結果論にすぎない。

偶然綱渡りが成功し生き延びただけ。

成功自体は喜ばしい事だろうが、今後はあつてはならない例なんだ」

「でも……」

「……エミリア、お前は王を目指すんだろう。

王になつて、お前が取る策全て一か八かの破れかぶれだつたら国民はどう思う？

全部上手くいくならいいだろう、ただ上手くいかなかつたら全滅を蒙るんだ。

誰がついていきたいと思う？」

「う……」

「策つて言うのは本来は、一か八かの賭けになつちやいけないんだ。

だから生か死かという選択肢になつたら、オレ様はかまわず逃げろと言つた。

なのにだ、あいつはあろう事か突き進みやがった。ソレが正しいと言わんばかりに」

スバルの行動原理は突き詰めれば英雄願望だ。

だが彼自身はその願望を叶える力を所持していない。

出来るのは無謀と無知から来る破天荒な行動。ただそれは、所詮「匹夫の勇」に過ぎない。

更に言えば死に戻りがあるせいとか、本人は自分の命を軽視しているきらいがある。

優先順位を自分より他人を高く据え、ただ他人の役に立とうと成功しか見据えずにただ闇雲に動く。ソレは狂信者の行動と何も代わらない。

そんな彼の悪癖はカリオストロが再三の忠告をしたというのに治ることなどなかった。

故に怒る。

いち強者としても。

いち監督者としても。

この世界での運命共同体として怒る。

言う事を聞かずに増長するスバルに。

そして何よりも彼への負い目から、ついつい手を貸してしまった自分に。

今後も同じような事を繰り返せばいつか、必ず、手痛いしつぺ返しが待っている。

それがどんな物かは分からないが、きっと本人にとっても、そして周りの人にとっても致命的な何かになるのは間違いなかった。

「いいか、今回の件でスバルが天狗になってるのは違うな。」

だからあんまりあいつを調子に乗らせるような発言は控えろよ、エミリア」

ソファに体を預けながらどこを見るでもなく忠告するカリオストロを見て、エミリアはくすり、と苦笑で返答した。よもやのエミリアの反応に、カリオストロは怪訝そうに彼女に顔を向ける。

「なんだよ?」

「んーん。カリオストロったら本当にスバルの事を大切に思ってるんだなって」

「はあ!?!」

エミリアの結論は不意打ちとなってカリオストロに刺さり、思わず声が飛び出す結果になった。

何をどう考えたらそんな結論になる!?! と慌ててしまう彼女にエミリアが懇々と説く。

「だって、話を突き詰めたらスバルに死んで欲しくないって事でしょ

う？」

「今までの行動でもそう。カリオストロはずっと、ずっとスバルの事気にかけてる。」

全部が全部スバルのために、スバルのためにとって」

「言っちゃ変かもしれないけど……カリオストロがお母さんで、スバルがその子供って感じがするの」

カリオストロの方が小さくて可愛いのにね。とくすくす笑うエミリアに、

カリオストロは顔を赤くして口をぱくぱくするしかなかった。

「べ、別に心配とかそういうのじゃなく、オレ様はオレ様の為に仕方なくだな……！」

「はいはい、そう言う事よね。自分の為よね」

エミリアに生暖かな目で見られて頭を撫でられれば、もう赤面は止まらない。

最早何を言ってもそうとしか聞こえず、カリオストロはソファの上で無言で体を反転させてエミリアから顔を見えないようにすると、彼女の足を自らの小さな足でぺしぺしと蹴った。もうそれぐらいしか抵抗のしようがなかったのだ。

「……………」

「あいた、降参。降参です」

天才美少女錬金術師の制裁劇はエミリアが音をあげるまで続き、やがてソレが終われば沈黙が客室に沈黙が降りる。先程的一幕でちよつと微妙な空気になってしまい、エミリアは弄った手前どうい話をしようか考えてたところで、ぽつり。小さく声が聞こえた。

「…………もう終わったんだよな」

「え？」

「騒動。犬は撃退したし、レムも助けた。ラムもエミリアも無事で、スバルだって生きてる。」

……これで全部厄介ごとは片付いたんだよな」

唐突な質問にエミリアは目をしばたかせるが、意図を理解すると柔らかな笑みと共に首肯した。

「カリオストロまでスバルみたいなことを言うのね。

——ええ、スバルと、それにカリオストロのお陰でみんながみんな助かったわ。

本当に感謝してる。ありがとうカリオストロ」

体を背けているためカリオストロの顔を見ることは出来ないが、その言葉を受けて彼女はこくりと頷き返したのが見えた。……だがそれ以降、彼女からの返答はなくなった。ただ規則正しい、小さな呼吸が聞こえてくるのみ。

「……カリオストロ？」

覗き込めば、カリオストロは目を瞑ってあどけない様子で眠っていた。

エミリアには分かる筈もないが、繰り返される屋敷の日々で実質、不眠不休で情報を探り、動き回っていたのはカリオストロだ。ろくな休憩も取らずに精力的に動き続け、今、解決に至ってようやく緊張の糸がここで途切れたのだ。最早エミリアの声も聞こえない。ただ体が回復を求めて、全身で休息を取っていた。

「……」

エミリアは本人を起こさぬように、ブランケットを肩までかけようとして……ソレをやめ。自分も詰めるようにして隣に座れば、カリオストロにも自分にもかかるようにブランケットを被った。

「——お疲れ様。本当にありがとう、カリオストロ」

「入りましたーえよ」

「失礼します、ロズワール様」

夕日差し込む執務室。ノックの音に反応したロズワールが声をかければ、メイド服に着替えたレムがいつもと変わらぬ態度、姿勢で一

礼して入室する。

その一挙一頭足がいつもより活力溢れるように見えたのは、先刻の件があつてはりきっているせいか。そんな事を考えながら、ふとロスワールは疑問を浮かべる。数時間後に報告に来るといつていたエミリアが同伴していないのだ。

てつきり同伴して来ると思つた彼はそれを尋ねた。

「おーやあ、エミリア様は？」

「あ、その……エミリア様は実は……今は、お休みになられています」

「……怪我でもしていたのかい？」

「いえ。そういう訳ではなく……」

「？」

「……カリオストロ様と、隣り合わせで幸せそうに眠っておられます」

「——ああ。起こすのに忍びなかつたって感じかねえ」

「言いつけも守ることが出来ず申し訳ありません。」

ただ、実際疲労しているのは確かだと思ひ……」

「そーうだねえ。良い判断だよレム」

二人が仲睦まじく眠っている様子は、なぜだか二人の間柄を詳しく知らぬロスワールでも容易く想像出来た。詳しい報告は確かに欲しているが、彼、ロスワールにとつては火急に知りたい要件ではない。今は後回しにしてもいいと判断してそれよりも知りたい内容を尋ねる。

「では、スバル君やラムは大丈夫かい？」

「あ、はい。スバル様については問題はありません。」

本人がカリオストロ様の治療を受けていたと言つていたように、目に見えた外傷もありませんでした。ちよつと疲労が残っていた程度でしょうか。……ただ姉様が」

「……」

続けて、と無言で頷くロスワール。レムは一旦間を置いて一息に告げた。

「姉様は……どうやらボツコの実を食べて限界までゲートを酷使してしまつたようです。」

現状は疲弊だけで済んでいます……今まで以上にマナの巡りが不安定になってきているのは間違いありません。詳しい事はこれ以上は分かりませんが、至急医者に見てもらおう必要があると思います」

一人で魔獣の群れ相手へ戦闘を仕掛け、そして連戦に続く連戦を騙し騙し続けていたラムは、本来なら途中で倒れてもおかしくないほど疲弊していた状態だった。だというのに最後まで精神力だけで持たせていたのだ。それはひとえに忠誠心が為せる技か、はたまた妹への愛によるものか。

ただその代償は決して小さいものではなかった。

日常生活はともかくとして、今後、魔法を用いた戦闘を行うとなれば今以上に動きが制限されるであろう事は間違いないかった。

ロズワールは椅子に座りながら少しの間瞑目し、やがてゆつくりと目を開けて答える。

「……そーうかい。残念だ。

であればすぐさま、選りすぐりの医者呼び寄せないとねえ。

スバル君の心も回復したように思えるが、一度は見せて置く必要があるだろうし」

「感謝します、ロズワール様」

「なーになに、報告」苦勞レム。——ああそーうそーう」

その言葉を区切りに、レムは一礼して部屋を去ろうとする。が、その直後にロズワールが彼女を呼び止めた。彼は自らの机の上に置かれた小さな書類の束を取り、手慰みに軽く捲り上げては手を離すことを繰り返す。

「今回の件の詳細とは別に、カリオストロ君と二人で話したいんだ。

夕飯の後でいい、呼んでくれても構わないかね？」

「畏まりました」

「頼むよレム。何せカリオストロ君が望む情報が手に入ったんだ。

是非とも伝えなくてはねーえ」

——その書類の表紙には「空に浮かぶ鎧についての報告書」と書か

れていた。

### 第三十話 束の間の訓練 【番外編】

屋敷での生活12日目。

エリオール大森林での激闘から早一週間が経過していた。

あの激戦で誰一人として欠けることもなく魔獣達の脅威を取り除いたスバルとカリオストロ。

そんな彼らの一週間がどんな様子だったのか、ここで述べていこう。

まずスバルである。

スバルは騒動の後、献身度MAXになったレムに医務室へと連れて行かれ、彼女から手厚い看護を受けた。

元々自分を姉より下に見ていたレムである。彼女にとってスバルは「姉の代替品で、全てにおいて劣った自分なんかのために二度も命を投げ出そうとしてくれた大恩人」なのだ。無価値な自分を救い出した彼に報いるのならばと切羽詰まった様子でせつせと尽くしてくれたのだが、そんな彼女にスバルは後述の言葉を紡いだ。

「自分を卑下するな。ラムはラム。レムはレムだ」

「角がある？ 角がない？ 劣ってる？ そんなの関係ない」

「俺は優劣を考えて助けたりはしない。レムだから助けようと思っただ」

『『来年の話をすると鬼が笑う』。笑えよレム』

「笑いながら肩組んで、明日って未来の話をしよう。俺、鬼と笑いながら来年の話すんの、夢だったんだよ」

何というジゴロ台詞であろうか。

その台詞は看護を受けて先に休んでいたラムが、眠る振りをしながら内心で悶えるほどの威力。直に、面と向かって言われたレムにとっては銀の弾丸と言えるほどの凶器になっており、弾丸は真っ直ぐにレムのハートのど真ん中を貫いた。



傷つき、不安定になっていた彼女である。偶然にも自身のコンプレックス部分を優しく梳き解す言葉が投げかけられれば、最早レムはBREAK<sup>腰</sup>状態<sup>砕</sup>になるしかない。

結果としてレムはスバルと打ち解けた。

あの冷めた目線は何処へ、向ける視線は熱い眼差しに打って変わり。

彼我の距離感ガンマンの間合いからボクサーの間合いへと成り代わり。

最早打ち解けたというより心酔するレベルへと変化してしまった。

一方で姉のラムはと言うと、森での無謀極まる彼の行動に少し呆れる所もあったが、そんな彼の行動によって助けられ、また彼が純粹に自分達の為に動いたことを理解したのか、お客様と従者という隔絶した関係から一歩進み、スバルへと一定の信頼を置くようになった。

……しかしながら最愛の妹がこれでもかと思はれるほどにべたべたしている現状は複雑なようで、時折心配そうに二人に視線を送る姿が見られるようになったとか。

そしてスバルは改めて今回の件の報酬に、“一回目”と同じくロズワールに雇用させて貰う事を提案。晴れて以前と同じ待遇を手に入れる事になる。

現在、彼はラムとレムの二人に手厳しいアドバイスを受けながら雑事をこなす日々が続いているが、その表情は以前よりも澁刺としたもので、毎日を幸せそうに過ごしていたのだった。

次にカリオストロについてである。

今まで疲労を隠していたものの、緊張の連続が続けばソレもピークに達してしまい、騒動が終わった後に自然とエミリアとのお昼寝に勤しんでしまう。とは言え事件も無事に解決し、ようやく安寧を手に入れた後である。彼女は何の憂いもなくその日はすぐに眠ってしまう

——事はなかった。

なんと彼女、スバルの元へと向かって用心棒のように周りの警戒を

し始めたのだ。

『大事が終わった直後、気の緩んだ瞬間が一番危ない』と経験で知っているせいか、それとも生来の完璧主義のせいか。スバルの「もう大丈夫だから！」と言う宥めも何処吹く風で、カリオストロは彼を死なせる存在を警戒して不寝番ねずばんをしだした。エミリアやラム・レムはそんな彼女のただならぬ警戒に、すわ。未来に何かあるのかと同じく警戒する一幕もあった。

……結局のところ、2日、3日と経つても時間が巻き戻らないという事実には、緊張を徐々に解いていったが。

そんな彼女の屋敷の人との交流は、悪くはないと言った感じか。

一度は突き放したエミリアも魔獣騒ぎが終わってからすつかり元通りになり、不信感を募らせていたレムやラムとも、少しはぎこちないが、以前よりかは嫌悪も薄れた関係になった。

騒動から数日経ってスバルが屋敷で働くことになったのに際し、彼女はやはり以前と同じく食客の身分を手に入れ、ちよくちよく禁書庫に入ってはベアトリスに勧められた本を読んだり、この世界の知識を着々と習得していく日々を過ごしているのだった。

そうして時は現在——スバルとカリオストロは雲ひとつない青空の下、屋敷の庭で向かい合う形で佇んでいた。

「いきなり外に連れ出されて、すわ、デートか何かか!?!とと思ったら……

戦闘訓練?!

「スバルのおめでたい発想はともかく、そうだよ☆」

青々と生い茂った芝生を踏みしめるスバルは、お馴染みのジャージ服姿。対するカリオストロはいつもの赤い貴族服ではなく、屋敷から支給された動きやすそうな半袖の布の服に短パンという装い。普段のブロンドは後ろで紐で纏められており理知的な印象から活発な印象へと変わっていた。

「いや、戦闘力が少しでもあればいいってのは分かるし、俺自身も強くないとヤバいってのは分かる。この世界パンピーには厳しい世

界だからな。だけどカリオストロ、一点だけ。一点だけ分からない事がある。……俺の武器は？」

「ない☆」

「……素手で戦えって？」

「そもそも戦わない☆」

「これって戦闘訓練だよな!? 何するっていうんだよ!」

戦闘訓練といえば剣と剣を交えたガチンコバトルを想像していたスバルは、想定との大きな乖離に叫んでしまう。カリオストロは耳に手を当てながら彼の叫びを聞き流すと、御歳17歳の夢見がちな少年に、茶目つ気つつぷりに訓練内容を告げた。

「今日やるのは、逃げる訓練ですっ☆」

「ええー……逃げるう？」

聞いた瞬間、スバルの顔に悔りの表情が浮かぶ。

「前も言ったけど、スバルの敵は大抵、みーんなスバルより強い☆ スバルを鍛えて強くするのもひとつの案だろうけど、そうになると何年レベルで鍛えないといけないからね☆」

「いやいやいや……ちよつと待って、ウエイト。一言物申させて欲しい。」

こう見えても無駄に木刀の素振りは頑張ってきた俺だ。剣の素質があつたりするかもだぜ？ 先の森林大戦でもこの豪腕を振るう事で、何匹もの魔獣を千切っては投げ千切っては投げ……」

「ええー、そんなに倒してたっけ？」

ちらりとカリオストロが視線を向ければ、そこには二人の人影があつた。

エミリアとレムである。

二人は今回のカリオストロの特別特訓に興味があり、こうして少し離れたところで観戦を希望していたのだった。

「スバル君はレムのためにも凄く頑張って魔獣を倒していたと聞きます。」

であれば大体、1000匹は屠ってくれていたのではないでしょうか」

「ありがとうレム、でも流石にそこまで倒した覚えねえよ!?

実績解除：ビーストキラーとか貰えそうな技量は持ってないからな!?

「えっと……確か、3匹くらい?」

「んー、ボクもリアもあの時は夢中だったからね、2匹くらいじゃないかな?」

「エミリアさんとパツクは凄い客観的目線かつ現実的な評価ありがとう!?

「……」

レムの評価はともかくとして、当時その場に居たエミリア、パツクの評価が正しいようだ。実際に倒した数は4匹であったが、その実績はスバルが魔獣除けを持っており、尚且つエミリア・パツクとラムの援護があつてのものだ。カリオストロはやはり先の戦闘で少しは自信がついたようだが、アドバイスを素直に受け止められない辺り調子に乗ってる部分があると判断。どうしたものかと頭を軽く掻いた。

「うーん、数匹程度じゃあちよつとね☆」

「……毎日家で無駄に素振りとかしてる分、スキルポイントぐらい溜まってると思うんだけどな? リアルではモンクタイプって言い張るつもりはないけど」

「うーん、援護があつて精々3匹程度で鼻高々になつてる程度の素人じゃクソの役にも立たないしぶつちやけ無謀蛮勇な癖にへっぴり腰過ぎて足手まといだから戦うの止めて欲しいんだけどちよつとね☆」

「オブラート!! オブラートで包み込んで傷つくから!!」

カリオストロの言葉のナイフが振り下ろされればスバルがたちまち叫ぶ。

「だがやはり訓練内容に納得はしていない様子のスバルにため息をつき、ある提案をした。

「つたくしょうがねえな……、じゃあまずはオレ様と一対一で戦ってみろ」

「おおそうこなくちゃ! このナツキⅡスバルの真の力を見せて

……って、か、カリオストロとか？」

彼の脳裏に、先の戦いで鬼神のような彼女の戦いぶりが思い浮かんだ。ところどころで容赦のない彼女の事だ、訓練ですらウロボロス＋魔法の波状コンボを持ち出し、戦うどころではないのでは？ と引きつった顔とともに冷や汗を流していたスバルだったが、そんな心情を察したカリオストロが淡々と告げる。

「んなびびんなくても魔法もウロボロスも使わねえよ」

「ソレを聞いて安心するっちゃするが……じゃあ一体何で戦うんだ？

ぶっちゃけカリオストロが魔法以外使つてるところ見たことないんだけど」

「それは勿論——素・手☆」

「へ？」

両手を握りしめて顎の下で揃える、いわゆる『ぶりっ子のポーズ』を取るカリオストロに、スバルはぼかんと口を開けるしかなかった。

「か、カリオストロってステゴロ上等系ロリっ子だったっけ」

「もう、そんなの上等じゃないですよーだ☆ ——それっ☆」

「っとお!？」

言うが早いか近くの木に手を触れたカリオストロが錬金術で即席の木の剣を作り上げ、投げ渡す。

スバルはソレを掴もうとして一度取り落としてしまったが、急いで剣を拾い上げた。

「錬金術の汎用性の高さってやべー……ってか、俺は剣装備でカリオストロは素手でやるのか？」

「それで相違ないよ？」

「相違ない、つつつてもなあ……」

自分より頭2つ分くらい的身長差があり、なおかつこちらは武器を持てるというハンデはあまりにも大きいのではないか？ 如何に彼女が戦闘に長けて、如何に自分が戦闘の素人であろうとも、彼女の専門は魔法のはず。ひよっとすれば怪我をさせてしまうのでは？ と難色を示すスバルに対し、カリオストロはその場でとんとんと軽く跳ねながら彼に語りかける。

「大船に乗ったつもりでかかってきていーからね？」

「いや、大船っていうか背丈的にも小舟だろ……器がでかいのは知ってるけど」

「失礼しちゃうなく、カリオストロこれでも魔法なくても強いんだからねっ☆ ぶんぶんっ！」

ホラ早く早く！ かかってきてよー！」

「えーっと……」

スバルがちらりと横を見ればレムとエミリア、そしてパツクはこくりと頷いた。

「スバル君。頑張ってくださいね」

「本人がそういうんならやってみてもいいんじゃないかにやー」

「カリオストロ、怪我しないようにね」

どうやら彼女らはこの訓練を止める気はなさそうだ。スバルはため息をつくと諦めて剣道のような構えを取って対峙し始める。対するカリオストロはやはり何の構えを取ることもなく、ただただ自然体のままだ。

「素人だから、寸止めとか出来る気がしないんだが……まぐれで当たっても怒って八つ当たりとかやめろよな、絶対やめろよな！」

「その言葉だと何か逆に八つ当たりして欲しいようにも聞こえちゃうけどなく☆

まあそんな心配は杞憂だと思っよ、当たらないし、スバルには当てる事自体が無理だから☆」

「っ、上等っ。そう言うなら後から文句とか絶対なしだからな」

男として今の台詞はカチンと来るものがあるのだろう。

剣を握る力を強めたスバルは小さな錬金術師を睨みつけ、機を伺い始めた。

エミリア達が穏やかに様子を見守る中、二人は視線を交差させ続け……やがて二人の間に一陣の風が吹く。

ソレが切っ掛けとなったか、唐突にスバルが駆け始める。

「——せりやああああっ！」

剣道の型は何処へ消えたか、スバルが選んだのは遮二無二愚直な振り下ろし攻撃であった。

彼は距離をつめた後に間合いを見計らって振りかざした木剣を叩きつけようとする。

割りと本気目の攻撃だ。当たったら痛いで済む程度ではあるが、普通に怪我するのは違くない。しかしながらそんな攻撃が迫っていると言うのに彼女は依然として構えすら取らず、ただ笑顔を見せるのみ。

それに焦ったのはスバルだ。

よもや回避行動すら取らないなんて!? と内心で叫ぶが、自身に急制動できるほどの技量もなく、剣はまっすぐにカリオストロの顔に吸い込まれていく。

この後手に響くであろう、他人を打つ感覚とカリオストロが傷ついでしまう展開を想起して、思わず目を瞑ってしまうスバルであったが待ち受ける筈の衝撃は手に来ず、代わりに来たのは自身の体が浮かぶ感覚であった。

「へ? ——いっせつ!」

ふわりと空中でぐるりと前に一回転したと思えば、すぐさま地面に背中を強かに打ち付けてしまい、背中から感じる鈍痛に顔を顰めるスバル。

一体自分に何が起こっているのかが全く理解出来ていないのか、彼はしばらくぱちくりと目を瞬かせるしかなかった。

「ね? 心配なんていらなかったでしょ?」

「……」

そんな彼の顔を覗き込むカリオストロの顔は変わらぬ笑顔だ。

だがそれがどこもなく意地悪気な物に見えてしまい、何ちくしょうと反骨心を浮かべながらスバルは慌てて起き上がった。

「い、今のはスリップ！スリップだ！

ちよつと躓いたか何かしちまつただけだ！」

「はいはい☆ そういうの良いいからもう一回どう」

「っ隙ありいいいいいい——っっ!!」

何ということだろうか！ 男の沽券とかそういう物を全て投げ捨てた、会話中のアンブツシュであった。

スバルの次の攻撃は振り下ろしではなく左下から右上にかけて掬い上げるような逆袈裟。だが案の定その攻撃に手応えはなく、カリオストロが視界から消えたと思えば、胸に何かが触れる感触と共に踏み込んだ足が宙を浮き、空を見上げていた。

「どうっ!?!」

重力に従ってまたもや背中を打ちつけ、スバルの口からから苦鳴と呼気が漏れた。

一体全体何が起きているのか理解できずスバルの頭の中では絶えずクエスチョンが飛び交っていたが、一連の内容を客観的に眺めていた二人と一匹は、カリオストロがスバルに何をしたのかがはつきりで見えていた。

「すごい……魔法みたいね」

「素晴らしい動きですね、カリオストロ様。」

スバル君の攻撃が雑……ごほん、素人であったとしても、あそこまで見事に捌けるとは「

二人は知らないだろうが、カリオストロの技術は地球で言う「柔術」に酷似していた。

彼女がやった事を説明するところだ。

1：スバルの剣の軌道を見切って、カリオストロが姿勢を低くしながら懐に潜り込む。

2：振り上げたスバルの腕に手を添えて、力の流れを上向きに助長させる。

3：彼の胸を押しして重心をずらす。

4：重心がふらついたのを見計らって足を払う。

「——で、一連の動きはほぼ同時に行われていて、スバルは自分の力と



カリオストロの力の両方に翻弄されてこけてしまうと。こんな感じかな？ うんうん、見事なもんだね。無駄がないってこう言うのを指すんだらうね」

パックが考えを述べると、観客二人はぱちぱちとパックの解説、及びソレを実行したカリオストロへと無言の拍手を送った。

「まだやる？」

「あ、あたぼうよ!! おらああああ!!」

一方でカリオストロは再度倒れ伏したスバルに問いかけ、対するスバルは顔を赤くしながら立ち上がっては三度目の突撃を敢行。直後に突撃はいなされて空を見上げて地面に叩きつけられてしまう。……しかしながら根性だけは人一倍持っているスバルである。彼は自分の活躍の機会を手に入れようと歯を食いしばって何度も何度も挑んでいく。……勿論その度にぽんぽんと投げ飛ばされ、地面と接触する音と、無様な声が都度庭に響き渡る結果になっているが。

「……んー、しかしあれだね。本当カリオストロって優しいね」

「パックもそう思う？」

突撃攻撃したスバルが、くるりと一回転して地面に叩きつけられた様子を見ながらパックが呟き、ソレに対してエミリアが賛同する。

「やっぱり、心配なのよねスバルの事が。」

わざわざ納得するまで付き合ってあげるなんて……確かにスバルって凄く頑張り屋だけど、ちよつと我が身を顧みないところあるから……」

「こうして自分の実力を認識させるのは、大事な事かもね。」

ボクとしては剣ぐらいは使えるようになってもいいかなーって思うけど。

まあスバルが自分の実力を理解してないからこそ、剣を持たせたくないのかな？」

「スバルは戦闘が不慣れのようなだし、今回、どっちかって言うところを知恵を振り絞って頑張ってくれたものね。そのせいか本人はあんまり活躍できなかったってちよつと思ってるみたいだけど……」

再度視線を向けた先では、剣で地面を払って砂かけからの攻撃をし

ようとしているスバルの姿があつたが、やはりカリオスト口には通じず、そのまま転がされていた。

「……私としては十分に活躍してくれたと思うんだけどな。」

スバルったら結構アレよね、えっと、卑屈？

ロスワールに求めた報酬だつて『この屋敷で働きたい！』なんてすごく慎ましい物だつたし……」

「リア、卑屈じゃなくて謙虚ね」

「あ、うん。ソレよ」

二人が好き勝手に論評する一方、レムはと言うと投げ飛ばされ続けるスバルが気が気でないらしい。表情にこそ出ることにはなかったが、手に医療箱を抱えて今にも飛び出したような雰囲気醸し出していた。

「……………」

「…………レム？」

「……はっ！ はい、なんでしようエミリア様」

「えっと、もうちよつと我慢するのよ」

「…………うう、はい」

§ § §

5分……いや、10分後。数え切れないほど投げられたスバルは、肩で息をしながら全身を芝生に投げ出していた。対するカリオスト口はうつすらと汗をかいた程度に消耗するだけで、まだまだ余裕が見て取れ、汗をかき、火照らせた肌にくつついた金髪を優雅に後ろに流していた。

「ふー…………つ☆、満足したー？」

「……………」

スバルは荒々しく酸素を求めるばかりで返答はないが、代わりに力なく挙げられた手がゆらゆらと振って返っていた。どうやら満足してくれたようだ。

「それにしてももーっと早くへこたれると思ったんだけど、案外粘るんだねー、カリオスト口驚いちやつ——おわっ」

「スバル君スバル君、大丈夫ですか？ お水飲みますか？」

気付けば倒れたスバルの横には先程まで居なかった筈のレムが駆け寄っており、コップに入れた水を手渡そうとしているところだった。

「カリオスト口、お疲れ様」

「エミリアも観戦お疲れ様☆ 退屈だったでしょ？」

「ううん、とんでもないわ。する事なす事、全部魔法みたいで見てて飽きなかったわ」

「リアに同じく。面白い催しだったよ」

レムに引き続いてエミリアとパックがカリオスト口の元へ近寄る。エミリアは手に持っていたタオルを彼女に差出し、カリオスト口はソレを感謝とともに受け取り、首筋や顔の汗をふき取った。

「てつきり魔法専門だと思ったから、こんな事出来ると思わなかったわ」

「ん、ほぼほぼ荒事専門の何でも屋みたいな真似事してたからね☆

一芸だけじゃやっぱりやっていけなかったり☆」

「うわ、ようじよつよいい……がぼがぼごぼ!!!」

「スバル君、お水おいしいですか？ お代わりありますからね」

「突っ込みありがとうレム☆

……っておい待て、トドメを刺そうとするな。素でやってんのかよソレ」

気遣いと献身の余りに命を奪いそうになってるレムを止め、疲労困憊のスバルに水よりも回復魔法をかけてやれ、と指示をすると。レムは慌てて水ではなく癒しの光を浴びせ始めた。

「ぜーはー……ぜーはー……あ、あー、生き返った……」

「死に損なつたの間違いじゃないかな？」

パックの突っ込みは兎も角、回復魔法や水分補給をすることで大分落ち着きを取り戻したスバル。そんな彼にカリオスト口は先程と同じく直ぐ傍で屈んで、顔を覗き込んだ。

「もう一回やる?」

「いやいやもう良いです分かりました身の程を知った次第であります!!」

「よろしい☆」

どうやら流石のスバルも分かってくれたようだ。時間をかけた甲斐があったとカリオストロは満足そうに頷き、彼にいつものようにアドバイスを送る。

「まあオレ様が天・才☆なのは何度も言っただろーが、このオレ様よりも体術が強い奴なんてごまんと居るってことは覚えておけよな。言っとくがオレ様の仲間内では魔法やウロボロス抜きで強さじゃ、下から数えたほうが早いぐらいのレベルだ。

その程度の奴にこのザマなんだから、当分は生き残るための訓練を優先だ。

強くなるんならせめてものグランと同じぐらいの才能を……つと、言っても仕方ねえ話か」

「グラン?」

カリオストロが発した言葉にエミリアが首を傾げ、パツクとレムも同じ反応をすればスバルはああ、と話を繋げた。

「あれだよな、カリオストロが所属していた団の団長的な存在みたいなな」

「へえー……そのグランって人はやっぱり強いのか?」

と、エミリアが食いつけば、スバルはどこかムスっとした様子で語り始めた。

「強いつてもんじゃないらしい。年齢は俺と同じくらいだけど、1人でも大抵の荒事を収められるぐらいの猛者で、尚且つ冷静沈着、指示は的確。カリスマに溢れて、どんな物事にも才能があるスーパー超人……とかなんとか。どこのラインハルトだよ」

「……お前にそんなにグランの話してたっけか?」

「え? 今まで無意識で喋ってたの?」

俺、事あるごとに比較するようにグランって奴の話聞かされたんですけど?」

事実、カリオストロはスバルに何らかの注意、アドバイスを送る度にグランの事について語っていた。『グランならこれが出来た』、『グランならこの程度苦戦しなかった』と。当然ながら意図してではなく無意識の内に言葉が漏れてしまっていただけだったが、長く団長と共に過ごす事で、彼女の中の同年代男子の標準がグランになってしまったようだ。当然そんな超人と比較されるスバルは溜まったものではない。本人の社会不適合性も相まってスバルはグランと聞くと眉を顰めるようになっていた。

本当にそんなに語ってたのか、と自分でも首を傾げるカリオストロ。

そんな中、レムが唐突に爆弾を投げつけた。

「えっと、カリオストロ様とグラン様は……恋仲なのでしょうか？」

「ぶーっ!!」

「カリオストロ!？」

こうかはばつぐんだ。

いきなり噴き出した天才錬金術師に一行の視線が突き刺さり、カリオストロは紅潮した顔で慌てて弁明し始めた。

「ん、んな、んな訳があるか!? オレ様とアイツが恋、恋仲とかそんな事っ」

「では一方的に懸想している感じでしょうか？」

そーいう事でもねえよ!? と必死な様相で否定する彼女は珍しく、エミリアもスバルも目を見張ってしまう。カリオストロは三人の視線に晒される中まずは冷静になろうと深呼吸を一つ、二つすると、努めて冷静に伝え始めた。

「……確かにあいつは頼りになる存在だがな。

あいつは団長でオレ様は団員。関係としてはそれ以上でも以下でもない」

「……『アイツは団長。オレ様は団員。ただそれだけの関係だった筈なのに、傍でアイツの活躍を見ている内に、段々と惹かれちゃった。このオレ様とした事が、真理は解けても恋の方程式は解け——』——  
がぼごぼごぼ!!」

「水、飲み足りないよね？ 全部飲ませてあげる☆」  
「むう」

「あとエミリア、お前何でオレ様の腕に抱きついた？」

未だ倒れたまま茶々をいれたスバルに、レムから水差しを奪ったカリオストロが口に水をなみなみと注いで黙らせる中、何故か膨れ面になったエミリアが腕に抱きついていていた。一方でレムはちよつと話題を間違えたかなと申し訳なさそうに謝った。

「すみません、要らぬ誤解を招いてしまったようですね」

「全くだ。つたく……オラ、スバル。」

もうちよつと休憩したら逃げる訓練本格的に始めるからな」

「げっほ、げっほっ！ ……うえ、もう十二分に特訓した感が俺にはあるんだけど……続きは明日にしないか？」

「却下だ馬鹿。まだ始めたばかりだろうーが。」

言つとくが訓練は昼までやるからな」

「うげえ、明日にや筋肉痛で全身が動けないのも間違いないな……んっ、お……？……！」

「ファイトですスバル君！ ……スバル君？」

辟易した反応を見せたスバルだったが、その顔が瞬く間に赤くなつたのをレムが気づいた。そしてその反応の直後、彼は何故か顔をエミリアとカリオストロが居る方向とは真反対に背けた。

「あん？ どうしたんだ？」

「あーいや、その……何でもない？ 何でもないんだ！

ま、まあちよつとだけ休憩させてくれ！ な!？」

「？ 顔真っ赤だけど、本当にどうしたの？ お熱でもあるのかしら……？」

「……うーん、別に体調が悪いって事はないみたい。むしろ今のスバルのはすつごく喜んでるね。何か良い事でもあったのかな？」

「よよよ喜んでなんか居なくてよ!？」 と、とにかくちよつと休憩するからさ！ カリオストロ様やエミリア様にいたりましては少し離れた方がよろしいかと……!!」

「……」

怪しい。自分達に何か原因があるようだが、一体自分ら二人に何かあるのだろうか。

二人して顔を向け合い訝しんでいると、スバルがぼそり、と小さく呟いた。

「……屈むとその、かなり無防備でその、な？」

スバルは倒れた姿勢のまま会話していたせいで、視線が低い位置にあった。

エミリアもカリオストロも、そんな彼の前に二人して屈んでいた。

短パン姿のカリオストロ。

裾短めな部屋着のエミリア。

そこから導かれる図式は――

「だがちよつとまって欲しい。倒れ伏す原因はカリオストロにあつて、そもそも俺の目の前で屈んだのは二人。つまり責任の一端は二人にもあると思うんですけdぐわあああああ――ツツ!!!」

「す、スバルくん!!」

その日、スバルは顔を赤らめたカリオストロによって空高く舞い上げられ、人が空を飛ぶ事の意味を考えさせられる結果になった。

### 第三十一話 束の間の幸せな夢 【番外編】

「……ん、あ……？」

意識が浮上する。

視界に入るのは土色をした木目のある天井と、狭い部屋。

覚醒しきれない意識のまましばらく微睡んでいれば、自然と言葉が漏れ出した。

「知らない天井だ……」

ここはどこだろう？ 俺は屋敷で過ごしていたのでは？

ぼーっとしながら、不規則に広がる天井の木目を眺めていると、部屋の扉越しにノックの音が聞こえてきた。

「おい……おい、起きてるのか？」

そして間髪入れず聞こえてくる声。……カリオストロの声だ。

無視をする選択肢はもとよりのない。

ただ靄がかかった意識が邪魔となり、「うえーい……」なんて気の抜けた返事しか出来ない。

扉向こうに居る彼女は返事が聞こえたのか聞こえてないのか、扉を開けて顔を覗かせて来た。

「……いつまで寝てやがるんだ」

「あー……昼とか」

「あゝ!？」

「ごめんなさい調子に乗りました！ ……つてか今何時？」

「つたく……大よそ朝7時回った辺りだな」

「7時かー……やばいつ!？」

一気に意識が覚めると同時に全身を冷たい汗が伝い出す。

朝7時!？ それはまずい、既に朝食の準備の時間だ。

さつさと着替えて食堂に行つてレムとラムの手伝いをしないと、レムはいいがラムに死ぬほど冷たい目で見られる！

急いで布団を弾き飛ばして起き上がれば、箆筒に手を突っ込んで執事服を探し出す。

「あれ!？ あれ!？ ちよ、執事服どこいった!？」



慌てふためきながら筆筒をほじくり回すが、肝心の執事服は見つからない。

もうこの際ジャージでも着てさっさと土下座かますしか、と思っていた所で背中に軽い衝撃を受ける。どうやらカリオストロに叩かれたみたいだ。

「スバル、何寝ぼけてやがる」

「もうさっぱり覚醒したよ!? 執事に土曜も日曜もないんですよ奥さん!?!」

「だーから、ソレが寝ぼけてるって言ってんだ。」

「……ここはもう屋敷じゃねえだろうが」

「えっ。……………あ」

カリオストロに指摘された内容の意味が分からなくて、動きが止まってしまふ。

だが次いで言葉を反芻するうちに、その意味を理解し、そして腑に落ちた。

本当に一体何を勘違いしていたんだろうか。

俺は手に取っていた余所行きの服を取り出すのではなくしまいだんだ。

そう、俺たちは現在、屋敷には居ないのだ。

騒動の後、あくる日までは屋敷での労働に勤しんでいたのだがカリオストロが求めていた魔物を探し出すと言い出したので、二人で屋敷を出ていく事にしたのだった。

エミリアさんと離れることになったのは正直惜しい気持ちもあるが、それ以上にこの小さな錬金術師には世話になりっぱなしなのだ。ここらで一役買って、カリオストロに少しでも恩返ししようと思つて一念発起をしたのだ。

旅立ちの日に、エミリアさんが涙をぼろぼろ流しながら引きとめまいと気丈に振舞う姿は、未だに忘れられない。

その後ロズワールから貰った少なくとも軍資金を手に宿を取りな

がら転々と場所を移動する俺達。お金の節約の為に、時に労働や依頼に勤しみ、ひたすら魔物を追い求め——早三年が経過していた。

今、俺たちはとある街のはずれにある、小さな空家に二人で住んでいる。

旅の途中で何でも屋家業を続けていたら意外にも好評だったため、そこで居を構えて、依頼を受けれるようにしたのだ。魔物も闇雲に旅して探すのではなく、情報呼び込みもうと俺から提案した結果でもあるんだが。

そんな内容を思い出せば「ようやく思い出したのかよ」と言いたげな顔で、唯一無二の相棒が鼻を鳴らした。

「はあ、それよりもだ。ちよつと手伝えよ」

「ん？　こんな朝から依頼とかあつたつけ」

「依頼は昼からだ。手伝えつてのは……分かるだろ」

「……あー」

今まで気付かなかったが、カリオストロの姿を見てぴんと来た。

今のカリオストロは自身の金髪を後ろで纏め、服は余所行きではないラフなカットソーと膝丈までのスカートを身につけ、そしてその上からエプロンを纏っていた。

その格好を眺めていると、カリオストロは何も言わずにぷい、と体を背けて部屋を出ていってしまう。

「どうやらいつもの『アレ』をして欲しいらしい。」

俺はさっさと行ってやらないと機嫌を損ねるなど、いつものジャージに着替えるのだった。

自分の部屋から出て、そこそこ掃除された廊下を通って居間まで行けば、システムキッチン……いや、家そのものが小さい為に、居間とキッチンが合体した間取りが見える。

そのキッチンの前に立つのは当然ながらカリオストロである。

彼女は腕を組みながらこちらを待っていた。

「遅いぞ」

「悪い悪い、箆笥の中引つ掻き回しちまったから着替えにも手間取つて」

「ふん、朝っぱらから馬鹿やってんじゃねえよ」

再度ぷい、と背を背けてキッチンに向かうカリオストロ。

態度こそ悪いが、今の彼女は特に機嫌が悪いという訳ではないのは俺は知っている。

これは恥ずかしい時のカリオストロの反応なのだ。

彼女は台所床に無造作に置かれている、少し作りの悪そうな台に乗るとちらりとこちらを向いてきた。なので、俺は彼女に應えるように後ろから抱きしめた。

「んっ……」

「それで？ 今日の朝食は何作るんだ？」

「サンドイッチ」

「おっけー。具材は昨日の依頼報酬で貰った鶏肉だな？」

「もう茹でてあるから後は切つて挟むだけだ」

「おーらい、楽しみに待ってるぜ」

俺がわざわざカリオストロに抱きついてるのは、別に朝セクハラがしたい訳じゃあない。

あくまでカリオストロが台から落ちないように支える為である。

この手伝いの経緯はこの家を借りたときに彼女は身長が低いためキッチン用の台が居るな。という話から発展した物だ。

正直家事全般は俺がやるつもりだったんだが、「オレ様も料理くらい作れるわ」という主張から、交代制で料理を作ることになり、また、お金を無駄にしたくないために俺自慢のDIYスキルで、少しみすぼらしいが専用の台を作った。……「台もオレ様がつくりや一発だったのに」と突っ込まれ、しまったと嘆いた物だったが、何だかんだでカリオストロは俺の作った台を使つてくれている。優しい。

そうしてこうして1年くらいその台を使い続けている内に、壊れてしまった事があった。

最初は修理しようと思っていたのだが、そこで俺が冗談交じりに後ろから支えれば修理要らずじゃね？と抱きしめたら、本人が気に入っ

てしまった……という訳だ。

ちなみにだが、この台とは別にもう一つ、カリオストロが作った立派な台がある。

彼女は普段そっちの台を使って料理をしているが、機嫌が良いときや甘い時はいつも朝に手伝えと言って、俺の台を使って支えて貰う。そのせいか、俺の台は未だに修理すらしていなくて壊れたまんまだ。

「それで、今日は何の依頼だったっけ」

「三軒隣のダーントっていう男性が、猫を探してるんだとよ」

「あー猫探しか」

「またスバルに走り回って貰うからな？ ま、覚悟しておけよ」

「うげ。……失せ物を探す魔法とかないのかよカリオストロ先生」

「そんなのあったら今頃ヴァシユロンだって見つかつてるわ」

「ごもつとも」

カリオストロの言う手伝いは、料理の手伝いというよりかは彼女を支える事と、ひたすら彼女を構い続ける事だ。

頭を撫でたり体を密着させたりする事も手伝いの範疇にはなるが、いやらしい手つきは厳禁だ。前やったら股間を蹴られて朝飯抜きになった。解せねえ。

「あ。マヨネーズ！ マヨネーズは忘れてねえよな!？」

「うぜえ。頭を顎でぐりぐりするんな。ちゃんと用意してあるぞ、ほら」

「サンキュー、やっぱマヨがないと始まらないんだよな」。

カリオストロ、愛してるぜー！

「っ!? ……ふ、ふん。まあ精々オレ様に感謝しろよな」

今の自分からじゃ顔は見えないが、耳が赤い事から今の台詞が結構キタみたいだ。

更に嬉しさを表してるのか、体から力を抜いてこちらに持たれかかってくる、さりげなく見せる信頼に俺もついつい顔をニヤけさせるしかなかった。

さて。朝のイチヤイチャ料理が終われば実食となる。

手作りのサンドイッチを皿に盛り付ければ小さな机に載せ。二人で向かい合うような形で食事に勤しむ。

……え？ 実食もイチャイチャしないのかって？ ところがどっこい、しないのである。

カリオストロは物事を明確にしたがり、言うべきことは物怖じせずと言うし、切り捨てる程の理論屋だが、事が色恋になれば結構な恥ずかしがり屋なのだ。表立って甘えてくる事は滅多にない。

だからそもそも外でイチャつくなんてまず無いし、家の中でイチャつくのも何かしらの理由がないとしない。つまり、台の話はカリオストロにとって丁度いい甘える口実になるのだ。

——こう云う”いじらしさ”が、正直堪らない。今すぐに抱きしめなくなる。

こんな関係になってから初めて知った彼女の一面だが、もっともおっぴらに甘えて来てもいいのにといつも思う。まあ彼女のプライドがソレを許さないのも分かるけどな。

だからその分は俺の方からと、いつも甘えているのだが。

「美味しいー」

「当たり前だ。このオレ様が作ったんだからな」

事実、美味しい。

錬金術を生業にしているせいかは分からないが、カリオストロの料理の手際はレムの水準一步手前まで来ている。

そして俺はカリオストロが作ってくれた時は欠かさずに毎日美味しいと言っている。

正直言う今更必要もない程言ってきたし、向こうも聞き飽きたかもしれないが、欠かさない。何故ならそうするとカリオストロはいつもの尊大な台詞を吐きながら笑ってくれるからだ。

それはもう朗らかに、嬉しそうに。幸せそうに。

もう見たただけでお腹いっぱいになるレベルの笑顔を見せてくれるのだ。

「やべえ、毎日サンドイッチ主食にしているレベルで美味しい。

鶏マヨってやっぱり正義だ……ちよつぱり辛子っぽい味も入ってんのがいいな！」

「食いながら口を開くな。わかったから味わって食え」

そう言いながら気分良さそうに鼻を鳴らすカリオストロ。麗し可愛い。

だがソレだけじゃ物足りないの、俺は調子に乗って馬鹿な要求を試してみる事にした。

「後ついでに言えばあーんしてくれるともつと美味しい」

「阿呆か」

即答かよ。もう一度だ。

「後ついでに言えばあーんしてくれるともつと美味しい」

「だからなんだよ、やらねえよ」

二回目の攻撃も通用していない。もう一度だ。

「あーん」

「やらねえつつつてんだろうが！」

本丸は硬いな。もう一度。

「あーん」

「……っ！」

怒ったか？ いやまだいける。もう一度だ。

「あーん」

「……（↑顔を真っ赤にしながら葛藤中）」

敵は陥落寸前なり。

ここで押ししても墮ちるかもしれないが、念のため引いて反応を伺うべしだな。

「ちえつ、残念だなー。まあ今日の所はカリオストロの激うまサンドイツチを一人で」

「……………つ！ ……くそつ。お、おいスバル……」

「ん？」

「……………く、……………口、開けろよ」

ちよろい。

そうして幸せを朝から噛み締めた後はお仕事の間になる。

さつきも言ったが俺達の仕事は何でも屋だ。依頼の内容はその名に恥じない雑多っぷりを誇る。

猫や人探しもあれば、配達もある。掃除依頼なんてのもあったし、揉め事も仲裁もあった。時には暗殺阻止なんてのも舞い込むことだつてあった。

当然依頼内容に隔たりがあれば報酬にも隔たりが出てきて生活なんて安定しないのでは、と思うかもしれない。だがコレでいて結構安定している。

その理由はオレ達の依頼成功率がほぼ100%だからだ。

必ずやり遂げるその有用性をひたすらアピールしていったお陰か、今やこの街で俺達の名前を知らないっていう人物は少ないほど名前も売れており、依頼も毎日舞い込んでくる程になった。……まあ主に名前が売れてるのはカリオストロだ。仕事における依頼成功率の由来が彼女の力に起因しているから当然かもしれない。いや、錬金術マジ応用性が半端ないって言っているほど便利過ぎて困る。困らない。

今日の依頼も街中を探し回った拳句達成する事は出来たが、結局解決したのはカリオストロの力だった。駆けずり回って追いかけた俺の労力はほぼほぼ意味がなかったと言っているかもしれない。

「は〜、無事に解決出来てよかった〜……」

「スバルお疲れ様☆」

依頼を終えて再度家に戻ってきた俺達。

俺はへとへとになった体をスプリングの軋むソファに投げ出して、一息ついた。

「まさか風呂場の中に紛れ込んでたなんて思ってもいなかっただぜ……」

「女風呂に喜々として入ってった時は●してやろうかと思っただけど、まさかあんな場所をたまり場にしてたなんてね☆」

「え、今日俺さりげなく死にかけてた？ ねえ？」

疲労感が全身を襲う中、ぴとりと冷たい物が頬に当てられたのを見ると、陶器製のコップに入れられた水だった。俺はサンキューと仰向けになってから受け取り、飲んでいく。

「つぷはあ！ しっかし、相も変わらず役に立てたか立ててないのか……。」

今日の所もほぼカリオスト口無双だったな……」

「ふふーん☆ カリオスト口の偉大さ、身に沁みてるでしょ？」

「いや、マジで身に沁みってます。」

これじゃいつになったらカリオスト口の恩に報いられるのか」

「あん？ ……何だ、そんな事考えてんのかよ。なら気にすんなよ」

「いや気にするって。さんざつばら今まで助けられて来たんだから——せめてもの少しぐらいはな。正直、俺抜きでも仕事回せそうだったし、こんなんじゃ着いてきた意味gげぶつふ!？」

げほつ、げほつ……あ、あの……カリオスト口様。

何故に貴方様はわたしめのお腹に乗って——……うん!？」

「……」

勢い良く俺のお腹に馬乗りになったカリオスト口。

今その顔を見たのだが、これは怒ってる。間違いなく怒っている顔だ。

頬がぷつくら膨らんでいたりはしないが、眉を顰めて怒りの眼差しでこちらを睨みつけている。マジ怒りのパターンだ。

だが怒りの原因が掴めない、俺は何か不味いことを言ったか!？」

「……え、えーっと「おい、スバル」は。はい!!」

「じゃあお前はただ恩や義理で、オレ様に着いてきたって——そう言いたい訳か？」

「……」



「恩や義理を返したら、それで終わり。オレ達はそんな関係だっ  
て言  
いたいのか？」

「……」

真剣な表情でこっちの目を見つめるカリオストロに、俺はようやく  
自分の発言を迂闊さを悟った。

……一体何を言ってるんだ、馬鹿か俺は。

確かに最初は恩や義理だったかもしれない、だけど今はそれだけ  
じゃない筈だろう。

もう今の偽れない程心酔してると、俺はきちんと言葉に出したじや  
ないか。

「……悪かったカリオストロ。恩や義理なんて関係ないよな俺達は。

既に持ちつ持たれつの一蓮托生なんだから。

迷惑かけるの当たり前。貸し借りなしのツーカー関係だ」

「そうだ。忘れてんじゃねーぞ馬鹿」

「本当にすまん。つつい役立とう、立とうと思ったら焦っちゃつ  
てさ。」

彼女を不安にさせるなんて、彼氏失格だ」

「ぼっ!? お、お前彼女とかそんな……んうっ」

跨った彼女の背に手を回し強めに胸に抱き寄せると、彼女は幼い猫  
のような甘い吃音を漏らす。

並大抵の魔獣など相手にすらならない程強い彼女だが、その体はこ  
んなにも華奢なんだな改めて思いながら、俺は優しく頭を撫であげ  
た。対してカリオストロは文句は言わず、ただ俺の体の上で大人し  
く、成されるがままになっていた。

「……第一な、オレ様はお前の事を……ん……役立たずだなんて思っ  
た事なんてねえよ」

「……本当か？」

「嘘じゃ、ねえ……ちゃんと、オレ様の為に真剣に行動してくれてん  
のは分かるからな……ただ、その行動が結果に結びついてないだけだ  
……」

「結びついてたら、完璧なんだろうがな……」

「焦るんじゃないやねえよ……オレ様が常に活躍するのは……それはオレ様が天才だからだ。凡人はな……至らないことを自覚して、ただただ積み重ねるしかねえんだ……ん、ふ」

頭の感触に目を蕩けさせながら、か細く、今にも溶けてしまいそうな声で俺を励ます姿は、あまりにも愛しく。

髪を撫でる手を自然と頬に移し、その張りある肌を撫でも手を振りほどく事はなく。逆に自分から擦りつけて来る程で……もう我慢は出来なかった。

気付けばお互いの位置を反転させていた。

それでも彼女は何ら抵抗することはない。

ソファの上には彼女の金糸のような髪が散らばっており、

潤んだ瞳と紅潮した頬で、俺を見つめ返していた。

「……出来ない分は、オレ様が支えてやる。

だから、もっとオレ様に寄りかかれよ……スバル……」

そしてゆっくりと両手を広げるカリオストロに、俺は静かに覆いかぶさり――

「……うへ、うえへへへへ……」

「……」

「姉様？ スバル君はもう起きて――!? あの、姉様。なんで目を隠すのですか？」

「見ちゃ駄目よレム。穢れるわ」

「またスバル君が呪われたんですか!？」

「違うわ、獣に襲われたんじゃないやなくて、獣になったのよ。」

布団越しに分かるほど——本当、汚らわしいわ」

「??？」

「良いから行きましよう、あんなの起こしたくはないわ」

その日から数日間、ラムの見る目が氷点下の物へと代わり。

そして、スバルは何故あんな夢を見たのかと苦悶しながら、カリオ  
ストロを見るたび顔を赤くする事になったとか。

どっとはらい。

### 第三十二話 束の間の小噺 【番外編】

執事として働くスバルがティーセットを運び入れた部屋は広くどこか落ち着いた雰囲気でも包まれていた。アクセントになる程度の調度品が壁や棚に立てかけられ、部屋奥には執政用か、大きな机が一つ。そして来客用のミニテーブルと、それを挟む柔らかそうなソファが置いてあるのが見えた。

当初、この部屋に初めて入ったスバルは『まるでどこぞの大企業の社長室のようだ』と感想を抱いたもので、最初の数回は入る度に緊張したものだだったが……今では慣れたものだ。済ました顔でこの部屋の主——机に向かうエミリアの元へとお茶を運びに行けば、礼とともにそれを受け取った彼女が一つの提案を出した。

「ねえスバル。ちよつと休憩でもしない？」

「ん？ おおエミリアたん。こつちも丁度キリも良い所だし、もつち構わないぜ！」

「もつち？」

二つ返事でサムズアップとともに返すスバルは促されるがままにソファに座り込み、その対面にエミリアが座り込んだ。

「お勤めご苦労様。屋敷のお仕事も大変でしょう？」

「予想以上の仕事量つてのは間違いねえかな。」

掃除、洗濯、調理、買い出し、庭の手入れに夜番。

なんつーか、こんな屋敷をよくも今までレムとラムの二人で維持できたって気がするぜ。

ここに來て3週間とちよつと経ったけど、ようやく慣れてきたって感じだ。

……つていうかエミリアたんの方こそ大変だろ？

今も書類と本に囲まれて、ずーつと何か書いてるぐらいだし」

ちらり、とスバルが重厚で大きな木製の机上に視線をよこせば、左右に山ほどの本や書類が置かれているのが見えた。

先程書類を一瞥してみたが、現在イ文字をかううじて習得したスバルでは何が書いてあるのかは分からなかった。分かったのはエミリ

アが忙しく、そして何か小難しい事をしている事ぐらいか。

「うん、領地経営……のお勉強かしら。」

実際の領地経営は今ロズワールがやってるけど、ゆくゆくは自分でやらないとだから……。

でも私は体は動かささないから、多分スバルの方が大変だと思うわ」「頭脳労働の方が大変だと思うけどなあ……。」

俺は考えるの正直苦手だし、体動かしてる方が性にあってる気がするぜ」

「本当？ あの時はとってもいい案出してくれたじゃない」

「あれは土壇場で考えついた苦し紛れの案っていうか……。実際結構穴もあったし」

「そんな事ないわスバル。確かにちよつとは予想外の事もあったけど、あの案がなければ私たちは危なかったんだから。——もつと誇ってもいいのよ？」

少し身を乗り出し、目を見据えてそう語るエミリア。

スバルはそんな彼女の真摯な思いを受けとめ——きれず、顔を赤くしながら目を逸らしてしまう。

「お、おお……ありがとなエミリアたん。」

ま、まあそこまで言ってくれるんなら俺も嬉しいぜ」

「ううん。こちらの方がこそありがとうよ、スバル」

互いに感謝を言い合い、目が合えば二人してくすりと笑いあう。

そして直後に訪れた少しの沈黙の後、エミリアがぼつりと呟き始めた。

「……ねえスバル。それでいつも思ってたんだけど……。」

スバルってどうしてそんなに欲がないの？」

「欲がないってのは初めて言われたな……。いやいや、実質俺って欲だらけよ？」

美味しいもの食べたいし、楽しいことしたいし、エミリアたんとお近づきになりたいし。

村にラジオ体操定着させたいし、マヨネーズはこの国に普及させたいし、エミリアたんとお近づきになりたいし、あとエミリアたんとお

近づきになりたいし……」

「そう云うのも確かに欲かもしれないけど、私が言いたいのはそうじゃないの」

「ざらつとスルーするなこの娘……!」

しかして彼女の言いたい欲のなさとは一体何の事なのだろうか？

スバルが頭を捻ろうとしたところ、彼女は補足するように告げた。

「報酬の事よ、報酬」

「報酬……?」

「その……徽章騒ぎだとか、魔獣騒ぎだとかあつたじゃない?」

スバル達はその騒ぎを解決に導いてくれた訳だけど……それに対する求める報酬が安すぎると思ってるの。だって前者は私の命まで救って貰って、後者は村の人達とレムへの被害を抑えたのよ? 私の力でもないのにおこがましいけど、ロズワールにお願いすれば並大抵の事は叶ったと思うわ。

でも、スバルが求めたのは『ここで働かせて欲しい』って言うお願いだけ……ねえ、どうして? 何でそのお願いにしたの? もつと欲張ってもいいのに」

「ああ……」

エミリアが懸念することをようやく理解したスバルは、腕を組み、頭を垂れながら唸り始める。そして垂れた頭がひとしきり下がった辺りで唸りは止み、顔をゆっくりあげて答え始めた。

「こういつちやエミリアさんは納得しないかもしれないけど……俺にとつちや報酬はこれで十分なんだよ。なにせ俺は元々、無一文のコネ無しスキル無しの無し無しの流浪人だ。

だっていうのにエミリアたんとかと関わったお陰で怪我の治療もしてもらったし、衣食住の確保も出来たし。レムとラムに執事のスキルも教わられてるし、屋敷の面々と仲良くなれるし。何よりエミリアたんとも親密になれてる! これって俺にとつちや望みすぎの貰いすぎって言ってもいいくらいだと個人的に思ってる。だからだよ。これ以上願ったら逆にこつちが罪悪感で潰されちまうかもしれないな!」

茶化しながらも好青年のような回答を、気持ち格好つけて放つスバル。

内心で「俺ちよつといい事言ったかも」と思ってるのは本人の名誉のためにも伏せておくが、幸いにもエミリアはその言葉に一応は納得してくれたようだ。

ただ自分の身を省みず、身を挺し、死にかけてまで手に入れたかったものが「些細な幸せ」である事がどうにもおかしくて、エミリアは小さく笑ってしまう。……でも、これがスバルなんだ、と実感しながら。

「本当に欲がないんだから」

スバルは頬をかいて苦笑するしかなかった。

「まあエミリアさんがそんなに欲がないっていうんなら、ちよつと欲出させ貰おつかなー！」

「ふふ。さつき貰い過ぎて言つてなかつたかしら？」

「あ。……あ、あくいや、それは」

「冗談よスバル。冗談。こんな私でよければ、頑張つて叶えさせて貰うわ。」

将来王様になる予定だから、並大抵の願いは叶えちゃうんだから

茶化し気味に、腰の左右に両手を当ててふんす、と年相応より少し大きな胸を張るエミリア。

そんな彼女にスバルはごくり、と唾を飲む。

並大抵の願いが叶えられる、と聞いて彼が何を想像したかはここではあえて触れないが……スバルは「かねてからの」願いを恐る恐る告げようとする。

「え、えーつとだなエミリアたん……」

「うん」

「……お、お。おお！ お……俺と！」

「！ うん」

ソファに座った状態から立ち上がり、紅潮させた顔のままエミリアを見つめるスバル。

彼女もそんな彼の真剣さが読み取れたのだろうか、姿勢をただし彼に目を合わせる。

そうしてスバルはそのまま大きく腰を折り、顔を下げ、片手をエミリアに差し出し――

「おっ、俺っ、俺と一緒に村に行きませんか！」

「えっ？ ええ、ええ。勿論」

返答は即時即決。二人の緊張はすぐに解きほぐされた。

……ただ、二人が感じている温度に大きな隔たりがあるのは間違いないだろう。

持ち前のチキンハートと、断られるとは思っていなかったが万が一を考えてナイーブになっていたスバルは、その返答に大きく安堵、及び大歓喜し、どんな大きなお願いになるのだろうと思っていたエミリアは少し肩透かしを受けながら、そんな事で良いならと話を承諾していた。

「えっと、村って……アールラム村よね？」

「もっちー！」

「もっちー？」

「勿論って事さエミリアたん！ いやーガキ共があれからどうしてるかとか、剣くれた人にお礼言いたいとか、そういう点も踏まえてエミリアたんと一緒に、その、村に遊びに行きたいと思っててさ……」  
「本当にそんな事で良いの？ それに、それって私お邪魔にならないかしら」

「いやいやいや!! エミリアたんが邪魔な訳ないって!! エミリアたんYOU今回の件の功労者！ むしろ俺より褒め称えられるべき存在っつーか、だ、第一エミリアたんじゃなきゃ駄目っつーか!」

「スバルの方が頑張ってくれたと思うけど……それに、えっと……私じゃなきゃ駄目？ あ。もしかしてまだ魔獣が残ってるかもしれない



いから一緒に討伐するとか……?」

「違うよ!? 今回はノーバイオレンス! ただ一緒に遊びに行くだけ!

そのふ、ふふふ二人つきりで……うひいっ!」

何故か腰を曲げて、手を伸ばした状態のまま会話をしていたスバル。

そんな彼の手にエミリアの手がぽふり、と乗せられて彼の口から奇妙な声が漏れた。

「あ。ごめんねスバル。何か手を乗せたほうがいいかなって」

「お、おおお……ふ、不意打ちで柔らかな感触が……と、兎に角OK?」  
「う、うん。それくらいならさつきも言ったけど全然大丈夫よ」

改めて彼女の承認を取り付けたスバルはようやくソファに戻って、両手でガッツポーズを取り出した。

初めて屋敷に来たときにエミリアと交わしたデートの約束を再度取り交わすことが出来るのだ、喜びもひとしおだと言えよう。……ただ、誤算があるとすればエミリア自身に恋愛の機微が全く分かっていない事と、迂遠な誘い文句だったためエミリアがそれ自体をデートだと認識しておらず「視察でもするのかな」と思っているぐらいだった事か。

「よっしよっし……! そんなじゃその時は朝一に行ってエミリアたんも子供達に混ざってラジオ体操しようぜ! あいつらも少しは覚えてきたし、楽しんでるからさー!」

「うん。あの変な体操よね? それなら私も少しは覚えてきたから出来ると思うわ。」

ふふ。実際に見てはないけど頭の中で子供達に懐かれてるスバルの姿、よく想像できる」

「おおよ、その懐かれっぷりと来たら半端じゃないレベルだぜ?」

まあその代わりにあいつらのパワー全部受け止めるとくたくたになんだけだよ」

子供のパワーってマジですげーって思うぜ、と手をぶらぶらさせるスバルにお勤めご苦労様です、と敬礼するエミリア。だが彼女は直

後、ふと思いついたかのように口を開く。

「そうそう、話はちよつと変わるんだけど……村とここって結構距離離れてるわよね？」

「ん？ まあ歩きだどちよつとな。竜車があればそうでもないんだけど」

「今回の件もあつてか村に有事があつた場合にすぐに駆けつけられるように、ロズワールが貴重なミーティアを調達してくれたみたいよ。えつと『マナ・パッセージ』って言うみたいよ」

「マナ・パッセージ？」

「うん。マナパッセージ。ちよつと大きくて円形上の魔道具なんだけどね、例えばそれを村のある場所と屋敷のある場所に置いておいて、屋敷側からその魔道具の上に乗ってマナを通すの。するとマナが空間を湾曲させて……えつと」

「あー、村側の魔道具の上に辿りつくって訳か。ショートワープみたいな？」

「ワープ……って単語は分からないけどスバルの言うとおり。要するに近道できちやうの」

「マジかよ」

日本語に直訳すれば「マナ通路」と呼ばれるそのミーティアの力に驚きを隠せないスバル。

だが確かにそれがあればすぐに駆けつけることも出来るだろうし、屋敷で何かあつたときにすぐ逃げることも出来そうだとその有用性に何度も頷く。あわよくば買出しの時も使えればもつと便利だ！

なんて考えていたがあくまで有事用であり、それに貴重なマナ結晶を使い捨てするマナ馬鹿食い器材の為にぼんぼんと使えるような物ではないらしく、日常的に使うのは淡い夢でしかないと分からされた。

「まあでもあんな事あつたつきりだしな。」

今後もどうなるか分からないしあつたほうが便利だろうな」

「ええ。結果も再度見直して嚴重にしたし、魔獣もあのときに沢山倒したけど森の魔獣が居なくなつたわけじゃないもの。当分は大丈夫だとは思うけど……」

「村のみんなも不安がってるしな、異常があつた時にすぐ様向かえるってのは大きいな！」

「……あ。そうだ、それならこつちもエミリアたんにもちよつと伺いたい事あつてさ」

「何かしら？」

「金取るって訳じゃないけど、人形劇を村でやってもいいーかなつて」

「予想だにしない話だったのだろう、きよとんとした顔を見せるエミリアにスバルは苦笑しながら話を続けた。

「つい最近カリオストロと話したんだよ、錬金術の話さ。

「そんな時に思いついたんだが……この前の魔獣騒ぎでカリオストロが精巧な身代わりを作ってたろ？ だったら人形とか作るのも簡単なんじゃないか？ って聞いたんだ。

「そしたら『それくらい造作もねえ』ってありあわせのガラクタで簡単に作ってくれたんだよ、超精巧な人形！」

「わあ……！」

「んで折角作ってくれたんだ、何かに活かそうと思うじゃん？」

「そう思ったら人形劇とかがいいかなつて……幸いにも腹話術は割りと得意なんだなコレが！」

「——『エミリアタン、エミリアタン、人形劇ノ許可ヲお願いシマス！』」

「あ。あれ？ スバル喋ってないわよね？ 本当に手が喋ってるの？」

「スバルって手が喋る加護を持つてるとか……!?!」

「何その限定的な加護!?! 腹話術だよ!?!」

「自分の手を人形に見立てた腹話術にエミリアは物の見事に引つかかったようだ。

「村の子どもたちがして欲しかった反応を彼女がしてくれた事でスバルは満たされ、エミリアはそんな反応をしてしまったことを少し恥ずかしがり、こほんと咳払いを1つ。

「ん。ともかく……人形劇なら問題ないと思うわ。

「特に子供達はさらわれかけたから、何かしらの娯楽があるとみんな喜ぶと思うし」

「さすがエミリアたん分かってるう！」

ただ唯一問題があるとすれば劇の題材が決まってるないんだよな……泣いた赤鬼とかオチが悲しいのはアウトだしな……、っていうかこのあたりで馴染みある昔話の方がいいかもしれないし……エミリアたん、何かいい題材知らねえか？」

「うーん……そうね。有名所だと……リング太郎とか？」

「リング太郎？……それって桃太郎的なアレか？ 川からリングがどんぶらこどんぶらこの的な……」

エミリアはスバルの問いに首肯する。似たような説話が地球世界で色々あるように、やはり異世界でも同じような話があるのだなあ、と感心しつつも赤ん坊が入れるサイズの大きなリングが1つ流れてくるイメージを思い浮かべ……。

「まずね、お婆さんが川で洗濯をしているとリングが100個、川から流れてくるのよ」

「リング太郎100人説!？」

「えっ」

穏やかな印象が一変した。大挙する巨大リングが川をひしめき合ってお婆さんの元へと襲来するイメージは最早既存のものとはかけ離れてしまっている。

それだけ大量のリング人間が100人も徒党を組んで鬼退治に出かければそりゃ鬼も滅びるわ。というか一人あたり三人のお供をつければ400人？ 一体何が始まるんです？ 第三次世界大戦か。思わず突っ込んでしまったスバルはとりあえず自分の知るストーリーではないとエミリアに内容の先を促した。

「と言っても……驚いたお婆さんが振り返ると、橋の上でリング売りが転んでいた。ってだけよ」

「……んん？」

「で、そのうっかりさんの名前がリング太郎っていう名前で」

「ただのどこにでもありそうな失敗談だこれ!？」

「っていうかコレ昔話っていうより小咄じゃねえか!？」

「むう。私はリング太郎、好きよ。こういううっかりさんも居るん

だつて思えるし……そういうスバルこそ何かとっておきの童謡、知ってるのかしら？」

ファンタジー世界はファンタジーを夢見ないのかよ！ と変わらぬ突っ込みを見せる少年にエミリアがぶく、とむくれながら問い返した。

「ふっふっふ。おおよエミリアたん、よく聞いてくれました！」

昔話を語らせたら右に人は居ない、生きる昔話と言われた男——それが俺、ナツキスバルよ！

エミリアたんに聞かせてあげたい話なんて両手じゃ数え切れないくらいあるぜ！

何がいいエミリアたん？ 『長靴をはいた猫』？ 『ブレーメン音楽隊』？ 『脚長おじさん』『かちかち山』『白雪姫』？ それとも『三匹の子豚』『浦島太郎』『人魚姫』——」

その後、スバルによる昔話朗読？ 回が行われた。

聴衆一人という寂しいものではあるものの、その聴衆は自分の世界にはない異世界の昔話に興味津々に、相槌を打ちながら聞き入った。

喜びに溢れる展開になれば自分の事のように喜び。

怒りに溢れる展開になれば頬を膨らませて怒り。

哀しみに溢れる展開になればハンカチで目元を抑えて哀しみ。

楽しみに溢れる展開になれば頬を綻ばせて楽しんだ。

読み聞かせる側にとってそれはそれは話甲斐のある相手に違いない、スバルは興が乗るがままに語り続けた。

「……そして一人、未だ暴れまわる巨大な犬を抑えようとした巫女の元に四人の巫女が再度集結し、言葉の意味を真に理解した巫女達は島のみみんなと、哀しみに啼き、暴れる犬に歌いかけたんだ。するとどうだろうか、犬は次第に暴れるのをやめていき、どんどん大人しくなっていく！」

そして島のみなで始まったお祭り騒ぎが最高潮に達した時、とうとう犬は暴れるのをやめて完全に大人しくなりどこかへ消えていつて

しまいました。

こうして島のみんなは古くから続く慣習の意味を完全に理解し、巫女達と共にこれからも犬とお祭りを楽しむことを誓うのでした、めでたしめでたし」

「うう……良かったわ、良かったわねシヨロトル……！」

涙ぐんだエミリアが両手でぱちぱちと拍手。スバルはその様子に嬉しそうに頭をかき……ちらりと壁を見た。……時刻は休憩を始めてから1時間経とうとしており、そろそろ仕事を始めないといけないだろう。

「さて、まだまだ俺の昔話の引き出しは滅茶苦茶ある訳だけど、残念なことにとそろそろ仕事に戻らないといけない」

「えっ……？ あ……本当。もうこんな時間……。」

引き止めてごめんねスバル。楽しかったわ。……もし人形劇やるなら私も見に行かせてね？」

「いやいや、エミリアさんが気持ちよく聞いてくれたから俺の方こそ楽しかったぜ。」

勿論、人形劇やる時は屋敷の関係者には特等席を用意して待つてるかな！」

笑みを零したスバルがすつくと立ち上がり、ティーセットを慣れた手つきで片していく。

対するエミリアも自分に残された仕事をこなすためにソファから立ち――

――あがろうとはしておらず、その場に座り込んだままだった。

「……？」

部屋からお暇しようとしたスバルだが、一向にソファから動こうとしないエミリアを不信に思った。何故俯いたままなんだろうか。……もしや仕事したくない、とかそう言うアレなんだろうか。だとすれば親近感を覚えるのだが実際の所はそうではないだろう。

「……何か悩みがある系？」

「ふえっ。あ、え……スバルまだ居たの？」

「エミリアたん困る所にナツキ・スバルあり！」

流石に仕える人が悩んでいる所をみすみす放ってはいけねえよ」

「……でも、休憩時間とか」

「いいっていいって。仕事よりも大事な事がある、今がその時！」

まーもしも俺の仕事で気に病んじまうってんなら……今から俺はこの部屋を掃除するから。まあ壁の花に話しかけるつもりで悩み、吐き出しちまわねえか？」

キメ顔でそう言い放つスバル。エミリアも最初は目が点になっていたものの、続いて口を抑えて小さく、ただ抑えきれないように笑い出し始める。……何かがつボに入ったようだ。

笑いだされた当の本人は少し恥ずかしくなり、ふてくされたような表情を向ける他ない。

「あはははは……つ、ご、ごめんさい、でも壁の花って……つ……も、もうスバルったら。」

ここはパーティ会場じゃあないのよ？ それだと私、エスコートする立場になっちゃう」

「うぐつ、ご、誤用はとにかく——」

「ええ勿論、言いたいことは分かってるわ。」

……そうね、優秀な執事さんがお掃除してる間。少し独り言でも零しちやおうかしら」

言いたいことは伝わったのを感じると、スバルは掃除用具を外から取り出し……手に持ったふきんで調度品を拭き始める。勿論意識は自らの主人に向けてなので、若干なおざり気味なのは否めないが。

「……私ね、ちよつと不安になってるの。」

カリオストロ、スバルもだけど——いつまでここに居てくれるのかなって」

手を膝に載せたまま俯く彼女がぽつりと零した言葉には、隠しきれない寂しさがあつた。

一室に溢れた感情は小さく、だが広く染み渡る。

小さな感情に揺さぶられたかのように、スバルの掃除の手は自然と止まってしまった。

「ロズワールからカリオストロが探している魔獣の情報が提供されたのを知ってるでしょ？」

ちよつと聞いてみたんだけど、魔獣は王都のすぐ隣の平原で見つかったみたいなの。

ソレを聞いた時、私は見つかったて良かったって素直に思ったわ。

カリオストロが何のために魔獣を探してるかは分からないけど……困ってる事が解決するのはいいことだもの」

でも、思ったのはそれだけじゃない。と彼女は独白を続ける。

「どうしても見つかっちゃったんだろうって。——そう思わずに、いられないの」

エミリアは語る。

二人と出会ってからたった一ヶ月で、自分が持つ世界がどれだけ広がったのかを。

どれだけ今までの自分の世界が狭く、色あせたものだったのかを突きつけられた事を。

ただ何気なく過ごす一日に多種多様な発見があつて。多種多様な『喜び』がある事を。

二人のお陰でレムとラムの二人と距離が縮み、村の人々と仲良くなる切欠も出来た事を。

こんなにも楽しい日々が続くのなら、きつとどんな困難も乗り越えられるであろう事を。

「……私ね、今は毎日が楽しい。楽しくて仕方がないの。」

毎日寝ちやうのが勿体無いつて感じちやうし、夜眠ったらすぐに朝になって欲しいって……起きるのが待ち遠しいって思うくらいには、楽しいの。

だからね——何でも見つかっちゃったんだろうって思ってしまったの。

二人がずーつと此処に留まるなんてありえないのは分かる……分



かるけど！

折角仲良くなつた二人と離れるなんて考えたくないの。

折角の楽しい毎日が無くなってしまいかもなんて——考えたくないの」

「——」  
スバルには理解できた。

ハーフエルフと言うだけで排斥されるエミリアの気持ちが。

灰色の世界に慣れ親しんで居たと言うのに、その世界が鮮やか色を取り戻してしまふ気持ちが。

一度でも鮮やかな色を見てしまえばもう、色のない世界なんてごめんのだ。

世界に馴染めず、自分から孤立していった経験のあるスバルも、この異世界で出会った皆と別れるなんて考えられないし、考えたくなかつた。

「……こんな事言つたつて仕方がないのにね。浅ましくてごめんね、スバル。

……でも、吐き出せるだけ吐き出したらなんだかすつきりしたかも」

彼女はふう、と自らを落ち着かせるように一息つく。

そこに込められた気持ちは自嘲か、それとも諦念か。

だが少しは吹っ切れたのだろう、彼女はうつむき加減だった顔を上げるとようやく立ち上がる。

——と、ずつと話を聞いていたスバルは手を動かしながらも調度品に向かつて呟き始めた。

「一度掴んだ幸せをまた離すなんて、誰だつて辛いよな。

無理かつて言われたらそうじゃないだろうけど……なんつーか、おっきい覚悟がある」

「……………」

「だったらさ。同じ気持ちにさせちまおうぜ」

「……………」

「カリオストロをさ。今エミリアたんが思うような気持ちにさせちゃうんだよ。」

「そうしたらアイツだって、ここを離れたくなくなるかもしれないぜ？」

「あ、ちなみに俺はもうそんな気持ちだから、やるってんなら協力するぜ？と茶化すスバルだが、彼はカリオストロをその気にさせるのは非常に難しいと言うことを知っていた。」

彼女の意識は、常に元の世界に向いている。

それがグランに対するものなのか、それとも元の騎空団という居場所に対するものなのかは知らないが……きつとどれだけこちらの世界で仲良くなるうとも、どれだけ親密になろうとも彼女はここを去って行く事だろう。

ただ、万に一つというのはあるかもしれない。

不謹慎かもしれないが、魔獣を見つけたとしても元の世界に戻れないという可能性もある。もしそうなった場合——ここに居続けて貰えることは出来るかもしれないから。

しんみりとした雰囲気打ち消そうとした、実現性の低い提案。

エミリアも、ソレがどれだけ難しいかを理解した上で元気そうな笑みを見せた。

「そうね、それいい案だと思うわ——うん、そうしてしましましょう！  
そうなったらスバル、どうすればカリオストロはそう思ってくれるかしら？」

「まずはそうだな、向こうもエミリアたんが居るからこそ楽しいって思えるようにするためにはもっと親密にならなきゃ駄目だな。」

「ただ話すだけで満足するんじゃないかって、もっと距離を縮める……そう、物理的に！」

例えば一緒に風呂とか、一緒に食事とか、一緒に散歩とか、一緒に寝るとか……」

「んーと……うん。一応全部やってるわね」

「えっ」

「えっ？」

「……一緒に寝た？ 同じベッドで？」

「う、うん。断られることも多いけど……。」

夜、雷が鳴った日に枕持ってお邪魔したら仕方ないなって入れてくれた事があった……あの時は怖いのもあったから、ずっと抱きついて。でもお陰様でぐっすり眠れて……スバル？ 何でハンカチ噛んでるの？」

そうしてこの後、夕飯になるまで如何にカリオストロと親密になれるかの談義が続き、スバルは仕事をほっぽりだしたと思われ、エミリアに庇われるまでラムにネチネチとお小言を言われるのだった。

第るっ！話　こんな屋敷だったっけ！（上）

「……カリオストロ様、カリオストロ様」

世界が揺れる、いや揺さぶられている。凜とした声が耳をくすぐるが、その程度の妨害ではこの眠りは妨げられない。いや妨げてほしくない。

むずがり、妨害者から逃れるように反対側へ身体を移動させると、「……ッ」という息を飲む音。

やがて妨害は止み、安心して健やかな微睡みに自分を投げ出す。

……が、投げ出した矢先、別の妨害が始まったようだ。

「ふひ、ふひひひひ……ふっ、ふっ……ふひひひひ」

「……」

妨害者の存在を、とても近くに感じて仕方がない。

というか近い、まるで顔を至近距離まで近づけているような気がする。

一度考え出すと意識は眠りの淵から引張りだされて、現実の世界へと帰還してしまう。

もう今は寝ようとする気にはなれない。だが、起きるにも……目を開けた先に広がる現実には果たして許容出来る現実なのだろうかという大きな不安があった。

それでも勇気を振り絞り、恐る恐る瞼を開けると――

「ふっひ、ふひ、ふひ……あっ」

目と目があった。

カリオストロの目に入ったのは、整った目鼻に薄いブラウン色の目をした、キリっとした顔の女性だった。

女性はカリオストロが起きたことに気付くとそそくさと距離を取り、ピシリと背筋を伸ばしてカリオストロに頭を下げた。

「――おはようございますカリオストロ様。朝でございます。」

間もなく朝食でございますので、お召し替えをしに参りました」

流暢な発音の後に「ふひっ」と吃音が漏れたのは気のせいだろうか。

その人物はレムでもないし、ラムでもない。しかしどこか見たこと

がある存在であるには間違いない。

艶やかな黒髪にぱつっんへアーというのだろうか、耳元まで出した髪と、後頭部にシニヨン（お団子）が見える。

全身を覆うメイド服も、普段のレムとラムの物に比べたら露出面積が全く存在しない、隙がないと言ってもいいだろう。

「あ……、えー……え？ ああ!？」

「は？ 如何いたしましたかカリオストロ様。どこか体調が悪いのでしょうか。仕える者の心身のサポートまで出来てこそメイドです、どうぞ身体を楽にしてください、まずは触診から——」

「いや、そうじゃねえ！ クラウディア！ お前何でここに!？」

そう、目の前の存在は、あちらの世界で知り合ったメイド、クラウディアだった。

彼女は向こうの世界で奔走した主人を探す途中でグランに出会い、共に旅をするようになった仲間である。

普段は非常に出来るメイドのだが、一つ問題があるとすれば美少女に目がない事だろうか。何を言われようとも、どんな目で見られようとも美少女を愛でることを止めない、変態に部類するタイプのメイドなのだ。

そんなクラウディアが目の前に居る事に気づき、慌ててここがグラインサイファーなのかと辺りを見回すカリオストロ。だが部屋自体はスバルと一緒に居る屋敷と変わりはなく、元の世界に戻った訳ではないと知ると、彼女を若干の落胆が襲った。

「おかしな事をおっしやりますね。私はラムです。

決してクラウディアなどという素晴らしい名前ではありません。寝ぼけていらっしやるのですか？ やはりこれは検査が必要です。さああちらでお召し物を……」

「いやお前クラウディアだろ！ 何しらじらしい事言つてやがるんだ!？」

「っていうかナチュラルに脱がそうとしてんじゃねえ！ おい、事情を説明し——」

「おっはようございま〜す！ 朝ですよご主人様っ☆」

部屋の扉が勢い良く弾かれると、大声で挨拶をする存在が現れる。浅葱色の瞳に、天真爛漫な笑顔。服はクラウディアと同じ服装に身を包んでおり、明るめの茶髪に、同じぱつっんヘア。ただし腰まで伸びるツインテールが特徴的だった。

「……って、ああ〜っつ!! 何やってるんですかラム!

ご主人様のお着替えはジャンケンで私がやるという約束でしたよね!」

「ちっ」

「……おい。お前こそ何やってんだドロシー」

「え、ドロシー? 可愛い名前ですね〜っ☆

でもご主人様、間違えてはいけませんよ。私の名前はレムですっ☆」

彼女もまたあちらの世界の知り合いになったメイドだ。

本名はドロシー。クラウディアと同じく自らの主人を探す存在なのだが、途中で出会ったグランに運命を感じ、主人と慕うようになり……ソレ以降グランサイファアの仲間になった。

彼女はクラウディアと同じ変態ではないが、行き過ぎる程の主人愛を發揮し、主人に害意を表すもの、邪魔になりそうなものを燃やしつくそうとするという、割りと危な目な人物である。

「そんなんっ、事よりご主人、様っ☆

もしかしたらお聞きしたかもしれっ、ませんが!

朝食の準備が整っていますのでっ、食堂までっ、お越しく下さいっ

☆

「レム、順番を間違えてはいけません、ふっ!

まずはカリオストロ様のお召し物を変えるのが先決——!

ああ少々お待ちくださいカリオストロ様っ、ふひっ、その美しいネグリジエを今私がっ、ふひひひっ」

「自分で着替えるから二人共部屋を出ていけ!

あとオレ様の部屋でバトンのやめろ!」

メイド流格闘術なのだろうか、全く無駄のない動きで一進一退の殴り合いを始めるメイド達に、カリオストロは怒鳴り声をあげるのだった

た。

§ § §

「やあやあ！ おっはようカリオストロ！

ホラ見てよロズつちの皿捌き！ いつもより多く皿が回ってるよ！」

「き、今日もすごいなあロズワールはん……」

あ。カリオストロおはよう……よう眠れた？」

「……」

着替えた後、食堂に入ったカリオストロが見たのはテーブルの上座に座る……いや、座るのではなく立って小さな棒を匠に使って、その上で皿を回す、ピエロメイク……と言うより全身道化師の格好の小人。

そしてどこかはなんなりとした様子でそれを見守る、獣耳と尻尾を携えた少女だった。少女の方はカリオストロを見つけると、ふさふさの尻尾をぱたぱたと嬉しそうに動かし始めた。

「ウラムヌラン……いや、もしかしてロズワールか？」

「？ おかしな事言うねカリオストロ！ ロズつちはいつでもロズワールって名前だよ！

やつ、ほつ！ ほつと！ さあさあお立ち会い！ よーく見ておくれよっ！

王国一の魔術師と謳われたロズワールが、この不安定な椅子の上で、片足立ちで皿を回すからねっ！ 3、2、1……」

「早く座って下さい、朝食が出せません」

「ふぎやつ!!?」

ドラムロールが聞こえてきそうな程の大芸は、ラム……クラウディアに椅子を引かれることよって強制的にお開きとなった。バランスを崩したロズ……ウラムヌランは無様に床に倒れる。回していた皿はと言うと……そちらはクラウディアによつて見事に受け止められていた。

「……き、キミさあ。芸人におさわりは禁止だつて習つてなかつたかい!?!」

「朝食の場に芸人が居る習慣がないものなので」

一応主従関係であると思つていたが、このやり取りを見るに敬う心も何もあつたものではなさそうである。

「あ、あかんよラム……そないに言うたら……い、一応ロズワールも領主なんやから……ね?」

ほ、ほら朝ごはん食べよ……お日様もあがつてもうたし……一杯食べて元気にせなあかん……」

「エミリア様だーいぶ容赦ないよね! 追いつ打ちが痛いよ!」

「?」

「しかも無自覚だから始末におけないよね……わかつたよ、ご飯食べよう」

そうして何事もなく起き上がったウラムヌランが席へつき、カリオストロもあれよあれよと着席を勧められて朝食が始まつた。

(……どういふ事だ、これ)

今まで理解が及ばなかつたカリオストロはここまで来て、この世界の異常性に気付いた。

どう言う理由かは知らないが、「こちら」で知り合つた人物が「向こう」の人物に成り代わつている。

星晶獣の仕業か、はたまたただの夢かは分からない。もしも星晶獣の仕業ならとつちめなければならぬだろうが……

「……? えつと、カリオストロ……どないしたん?」

お食事、あんま美味しなかつた?」

「……あの、エミリア様。無自覚で他人をデイスるのやめてください」

「え? でいす……?」

「……何でもありません」

考え込んだカリオストロを氣遣うエミリアの無自覚の口撃に、食事担当のクラウディアが突っ込んだが、更なる天然を返されて言葉を失つた。

カリオストロはこちらを伺つてくる少女に問いかけた。



「……あーお前は……エミリアだよな？」

「ん。そやよ？ 昨日もあつたのに……ふふ、もしかして寝ぼけてるん？」

カリオストロのそう言う所見るん、ちよつと珍しいかも……」

ぱたぱたと尻尾を揺らして話す少女、彼女は向こうでは「ソシエ」と呼ばれている、エルーン族の少女だ。

ソシエは故郷に伝わる、失われた八つの神器とか魔物とか舞人とか友達とか色々追っている途中でグランに出会い、意気投合した後旅に加わった。

故郷に伝わる巫女服を身にまとい、直伝の舞で戦う美しい彼女だが、人見知りで恥ずかしがり屋であつたりする。

そんな彼女はカリオストロを微笑ましい物を見るような目で見て、口元に手を当ててほんわりと笑っていた。

「今日のカリオストロは珍しいね！」

まるでボク達の顔に何かがついてる見たいにじろじろ見てくるし！

ところでボクの朝食はまだかな？ まだこの皿の上に何も乗っていないようだけど……」

「流石ですロズワール様っ！」

よもや手品で朝食を消してしまわれるなんてっ☆

「待って、これただ配膳されてないだけ——」

「流石ですロズワール様っ！」

あ。ご主人様こちら新鮮卵のスクランブルエッグでございます☆

「あ〜〜……うん、どうも」

そして露骨にカリオストロ鼻屑にするご主人ラブメイド、レム……ドロシー。恐らく普段からこのような関係なのだろう。元のロズワールと比べて哀れと思う他ない。

そんな哀れなロズワール役は、あちらの世界では「ウラムムラン」と呼ばれているハーヴィン族の少年だ。全空一の大道芸人を自負しているストリートパフォーマーの彼もまた、グランが目指す空の果て

「イスタルシア」という伝説の場所に惹かれてついていく一人だった。大道芸が非常に上手いのだが、持ち前のドジっぷりが玉に瑕だったりする。

メイドに至れり尽くされ、普段より豪華な食事を済ませると、ふとした疑問が浮かびあがった。

「すっかり忘れちゃったが……スバルはどこに行った？」

「スバル？ んつと……どこ行ったんやろなあ……」

「ら、ラムとレムは知つとる？ ……ベアトリスとパツクは一緒に部屋におるんのは分かるけど……」

「野郎のことなんか知りません」

「レムもご主人様の事しか知りませんので☆」

聞かれたエミリアがラムとレムに質問をし、帰ってきたのは清々しいまでの即答。

かたや一人は見麗しい少女にしか興味がなく、かたや一人は仕える主人のこと以外に興味を咲かせようとしない。

期待した結果が得られず、エミリ……ソシエは非常に悲しそうな顔でカリオストロに謝罪した。

「……あう……か、堪忍なカリオストロ……役立たずで……」

「気にすんな。 って言うかお前本当無自覚にデイスるな!？」

「向こうじゃそんな性格じゃなかっただろ!？」

「でいす……って言葉今流行ってるん？」

「どう言う意味なんやろか……」

「あー……いや、もういい。そのままのお前で居てくれ  
???」

本当に意味が分かっているかないエミリアに頭痛を覚えながら、どうしたものかと考えていると、どこから手に入れたのかパンを口に頬張りながらロズワ……ウラムランがカリオストロに告げた。

「スバルなら、屋敷の中を歩き回ってたよ。 あむあむ

もしかしたら、あむつ。 ベアトリスのところに居るのかもねー」

「分かった。 ありがとロズワール☆」

「お礼ついでに彼女達にボクの朝食を出して貰えるように口添えして

欲しいな！」

「行ってくるね☆」

「ちよつとー！」

世界がおかしくなっているのか、それとも自分が夢を見ているのかは分からないが、目下気になったのはスバルだった。

彼はどうなっているのだろうか。漏れなく影響を受けているのか、それとも影響を受けておらずに混乱しているのだろうか。

特に大きな悪さするような異常ではないが、彼に何かがあると自分にも影響がある、探す他ないだろう。

カリオストロは若干の期待と不安を抱きながらも長い廊下を進んでいった。

【第三章】 招かれた意味と、招かれざる来訪者  
第三十三話 招待状

日差しが少しだけ差し込む、崩壊した部屋の中。

ひとつの声が椅子に縛り付けられた彼に語りかけた。

「スバル、人間を悪たらしめる原動力が何なのかを知っているかな？」  
声をかけられた少年、スバルは荒い息を吐きながら怯えた目つきで  
相手を見やると、声の主は正気を逸した笑みをたたえた顔のまま、  
ゆっくりと近づいていった。

——その手に、鈍色に光るナイフを持って。

「それはだね——」



「……ふむ」

「……」

屋敷のとある一室。客用の椅子に座ったスバルは現在、ある人物と  
向かい合わせになっていた。

その人物は彼と同じく椅子に座り込んでおり、その位置は非常に近  
い。手を伸ばせばすぐにでも届く距離だ。……いや、事実その人物は  
手を伸ばし、彼に触れていた。

どこを？

それは勿論スバルの肌だ。

なんと現在、スバルは服を肌蹴させており、その前面からは生肌が  
見えている状態だった。

腹部に押し当てられた皺だらけの手は時折撫で回すように動き、触  
れられる側は自分の服をめくりあげた状態で緊張した様子をただ見

せていた。

「……ふむふむ。なーるほどのう」

そしてそんな状態が1分程続けば、目つきの鋭い老婆がようやく手を離す。その雰囲気は未だに重い。雰囲気に合わせてられたかスバルは思わず唾を飲み込んだ。

白衣に身を包んだ彼女は瞑目したままスバルの前で腕を組むと、重々しい口調で告げる。

「よく分かった、お前さん——」

「朝は胃腸が弱いタイプじゃろう？ 腹がきゆるきゆる鳴いておるぞ」

「いやそういう事聞きたい訳じゃねーから！」

予想外の検診結果を突きつけられ、スバルの軽快な突っ込みが飛んだ。

§ § §

「あ。スバルどうだった？」

「当たり前だけどなんともなかったぜ。」

マナのめぐりが悪い訳でもなし、腹部に炎症や後遺症がある訳でもなし。

一事が万事、全部無事。コンディションオールグリーンの問題ナッシングって感じだ！」

スバルが先ほどの一室から出てくると、ソファに座して待っていたエミリアが迎えた。

同じくソファにはカリオストロが隣に座り、その後ろにはレムが心配そうな顔をしていたものの、彼の返答を聞いてほっとした顔にすぐ変わった。

「はっ、当たり前だ。何せオレ様が治療したんだからな。」

後遺症なんて残すものかってんだ」

当然だ、とカリオストロが鼻を鳴らしながらお茶を飲んでいると、同じく一室から出てきた女医がカリオストロの言葉に追随するように繋げた。

「事実見事なものじゃったぞ。話を聞かねば傷があつた事にも気付かなかつたじやろう。」

丹念に調べてようやくマナの残滓が見えた程度じゃからのう。

……ま。先ほども言ったがこの坊主は全く問題ないじやろ」

「スバル君……良かったです」

「レムは心配しすぎよ、ここに来てからバルスは見苦しい程無様にもがいていたじやない」

「人の労働を足掻きみたいに言わないでくれますう!?!」

ラムのいつもの弄りと軽妙に突っ込むスバルのやり取りに部屋に笑いが漏れ、年老いた女医も「カツカツカツ」と大口を開けて笑った。

その最中、一室にさらなる来訪者が現れた。

「おくやおやフラグラ先生、スバル君はどうだったかい?」

ロズワールである。

彼はいつもの道化師の出で立ちで一室に立ち入り、『フラグラ』と呼ばれた女医に歩み寄る。

女医は彼の姿を視界に収めると顔の皺を更に深くして、投げやりに返答しだした。

「はん。ようやくおでましかいロズワール。」

唐突に連絡を寄越したと思えばお前さんは……坊主は見るまでもなく健康体さ。

全く、命に関わる腹の傷を1ヶ月後に医者に見せるなんて一体何考えてるんだい」

「先生はどうにもお忙しいようですかーらねえ。」

今回は事後診断という形にさせて貰おうと思ひまして」

「予定は未定だよ。命に関わるかもしれないんだつたらすぐ呼びなど何度も言っているだろう」

何故スバルが唐突に検診を受けて居るのかと言えば、それは屋敷に

来た当初にカリオストロと交わした約束のためだった。スバルは腹を切られて、直後に精神的に不安になった経緯があった。そのため医者に診てもらったことをエミリアもロズワールも約束していたのだ。

……しかしして、呼ぶと言ってから既に一ヶ月も経ってしまったのは、高位の治療師であるフラグラのスケジュールが合わなかったという理由もあるが、ソレ以上にスバルの健康状態がすこぶる良好だという理由が大きかった。

ただ今回の診察、スバルはおまけでしかないと言う事は誰も気づいていない。

もう一人、見る必要がある人物がいる。

その細い目を更に細めてロズワールに詰め寄る老婆が、ロズワールの手紙の文面、王都での仕事上の立ち振舞、しまいには服装や話し方が気に入らないと、くどくど文句を言う中、文句をつけられた側はその全てをのりくりくり、持って回った言い方で躲し……本題を切り出した。

「積もる文句はあるかもしれませんが、それよりも……スバル君だけでなく私の大切な従者、ラムの話も聞きたい所ですが？」

「ふん……そこの鬼娘かい」

フラグラの鷹のような目線が逸れ、ラムへと向く。

ラムはその目線を澄まし顔で受け止めたが、妹のレムは自分のことのように体をこわばらせた。

「……ゲートがイカれかけてるのは違くないね。

あんなズタズタなゲートじゃ無意識に取り込むマナの量も極端に減っておるじやろう。

普通の奴なら魔法が使い辛い程度で済むかもしれないが……コイツは鬼族。マナをバカ食いする種族の癖して角が折られておる。平然としておるが実際は生命維持に必要なマナまでギリギリ賄えるレベルなんじゃ、結果としてオドを削るハメになるだろうから毎日倦怠感や頭痛、目眩に襲われておる筈。

魔法を使うなどもつての他だし、あるいは激しい運動でさえ死にかけるじやろうよ」

強靱な肉体と扱えるマナの質・量が他種族のソレとは圧倒的な差を開く鬼族。

そんな彼らの強さを支えるのは鬼族独特の特徴である『角』にあった。

鬼の角は大気中のマナを集める強力な吸気口のような役割を持っており、他種族以上にマナを必要とする彼らにとって生命線でもあった。

つまり角がないラムは少し暴れるだけでもすぐにへばってしまいう状態なのだ。

そんな状態だと言うのに、全ての種族が持つ自分の体の中と外にマナを通す門、ゲートが損傷しているとしたらどうなる？ ゲートからマナを取り込む事が出来なければ普段自然に取り込んでいる生命力に直結するマナを必要十分量賄う事も難しくなる。……つまり、ラムがまた激しい戦闘や魔法を行使すれば瞬く間にマナは干上がり、死に至る可能性が高いのだった。

老婆の声に、重苦しい沈黙が降りる。

ラムは先ほどと同じ澄まし顔を変えることはないが、腕の中のお盆を持つ手に力が入り、残りの面々はあるの戦いが残した唯一の傷跡に、顔をしかめる他なかった。

「ちよつと待て。マナを確保する手段がないってんなら、何でラムはまだ生きてるんだ？」

そんな中頬杖を突きながら冷静に指摘を入れるのはカリオストロだ。

空気を読まない彼女の質問に妹のレムが少し強い目線を送る中、老婆は答えた。

「その理由は接触によるマナの譲渡で賄えるから、じゃよ」

「ゲートが壊れかけてるって言うなら送れる量もたかが知れてる。

仮に接触するとしても四六時中ラムに触れておく必要があるだろう？」

「なあに、接触する場所が肝要よ」

「場所……？ ……ああ、そう言う事か」



「？……つまりどう言う事だ？」

事情を知るエミリア、レム、ラムの面々はカリオストロの察しに追随するように頷くが、一人話についていけないのはスバルである。彼女の納得に疑問を浮かべ、つい口を挟む。そんな彼に助け舟を出したのはエミリアだった。

「スバル、ラムは角を介してマナを補充して貰ってるのよ」

「でもラムの角は……」

「既に折られて自発的に集める力はなくても、取り入れるためのゲートは開いてるといふ事よ。」

そして、角にあるゲートは他より大きい——そんな事よりも先生。私のゲートを治すことは……？」

話を継いだラムが口早く説明を終わらせ、老婆に問いかける。

老婆はそんな彼女をしばし見つめたかと思うと、瞑目するように顔を俯かせ……呟くように答えた。

「これでも名を馳せた治療術士さね。ある程度のゲートの損傷なら時間はかかるが治してやれない事もない。ただ……ここまでスタスタのゲートじゃ、もうあたしの手には負えんよ。」

残念だがボツコの実を食べて死ぬ寸前までゲートを酷使したのが仇になったね」

「そんな……」

魔獣達との戦いにおいてドーピングに次ぐドーピングをした結果、ラムのゲートはそのほとんどが機能していないのと同様なくらい貧弱な物に成り代わっていた。悲観的な言葉に思わずレムの口から悲しみが漏れる。スバル、エミリアもレムと同じく突きつけられた現実  
に顔を曇らせるしかなかった。

しかし、そんな重い雰囲気こそぐわぬ声が横合いから投げかけられた。  
た。

「でも、それは先生が難しいというだけで治せないという意味じゃあな——い。」

——そうですよね？ フラグラ先生」

「……気に食わんねロズワール。間接的にあたしを無能となじりおつ

て」

「とおーんでもございませぬ。人に出来る事など皆たかが知れて  
いる。

蛇の道は蛇とも言いませぬかーら……先生が治せないなら、別の治せ  
る人に頼む他ない」

「利いた風な口を聞くじゃあないか。……だが、その通りさ。

あたしが治せないなら、更なる凄腕に頼むしかないだろうね」

「……凄腕？」

スバルが口を挟むと、老婆は彼を見やつてぴんと右手の人差し指を  
立てた。

「フェリックス・アーガイル。

ルグニカ王国の『青』にして王国、いや世界に名を馳せる治癒術士。

あの子に頼めば何とかなるかもしれないね」

曰く『水の加護』を持つその人物は、死者蘇生の手前であればどん  
な重症、難病すら治す事が出来るらしい。スバルやカリオストロは興  
味深そうにその言葉の前に頷き、レムもホツとした様子を見せる。治  
る見込みはまだ残されていた。コレに勝る喜びはないと言えよう。  
……だが、レムと同じく真つ先に喜びそうなエミリアは言葉を聞いて  
少し首を傾げていた。

「フェリックス……？……えつと先生、もしかしてですけどその方っ  
て……クルシユ・カルステンの騎士の？」

「よく知ってるね。……と、言うより知ってて当然かい。

そりゃあこれからあんたのライバルになるだろうからねえ」

クルシユ・カルステンはエミリアが参戦している王選の有力候補の  
1人である。まだ公式のお触れこそ出ていないが、候補者の情報は一  
部の人間にまことしやかに広まっており、エミリアもそのライバル達  
の名前は耳に入れていた。

カリオストロはその情報こそ知ってはいなかったが、ライバルと聞  
いてすぐさま候補者であると推察をしていた。……しかしながら何  
の因果か。よもや治療を頼みたい相手がライバルの手下とは、と彼女  
は続けて考える。ただでさえ種族というハンディキャップを背負っ

たエミリアが、ライバル相手に貸しを作ってしまうのだ。金を積んで治療を頼んでも、恐らく向こうは無償でやると言い出すだろう——表向きは善意で。しかして裏向きは敵陣営に大きな貸しを作るが為に「エミリア様。と言いう事でしてラムの治療をフェリス様にお願ひしてもいいですかねえ？」

そう考えているとロズワールが大仰に腰を曲げてエミリアに問いかけた。

試しているのだ、と即座にカリオストロ、それにラムは気づいた。

『自分の従者を助けるか』『陣営を不利にするのを避けるか』

王に相応しい判断が出来るかを自分の従者を駒にして試しているのだ。

「ええ、お願いしましょう！」

だがこのエミリア、生憎ながら横に出る人がない程の重度のお人好しだった。

彼女はロズワールの問いかけにも寸分の躊躇もなく返答した。

「……」

「……」

「……」

その見事なまでの即答ぶりにラム、ロズワール、カリオストロは思わず口ごもることしかできず。特にそんなロズワールの意外な反応が面白いのか、フラグラは口の中から溢れる笑みを抑えようと咄嗟に手を当てるが、それすらもやめてかんらんかんらと爆笑し始めた。

「え？ 何？ 何でそんな反応するの……？」

だってラムが治るのはそれしかないでしょう？ だったら頼むしかないじゃない」

「く……っ、くくく……っ！ ろ、ロズワール。お前さん中々いい娘を推薦するじゃあないかい、ええ？」

「……えーえ。どうやら私の目に狂いはなかったようですねえ」  
「??？」

皮肉への返答は普段のものよりも疲れが強いものだった。

そんな彼を見て溜飲を下げたのかフラグラは機嫌良さそうにエミリアに近づき、肩に手を置いて話しかける。

「お嬢ちゃん、お前さんは無意識かもしれないがその気持ちは大切に  
するんだよ。」

ええそうさ、大事な物を救う、いや、傷つく存在や助けを求める存在を救おうとしないで何が王様だい。その気持ちを持つ限りあたしはお前さんを応援してるからねえ」

「……うんつと、ありがとう先生。よろしくお願いします」

ペこり、と頭を下げるエミリア。フラグラはそんな彼女の頭を優しく撫であげると白衣を脱いで帰り支度を始める。

レムが彼女を手伝いながら支度をすませると、一行は見送りするために玄関までついていった。

「それじゃ、その鬼娘の治療の口添えはあたしの方からもしておくよ。」

……ただ優先治療とまでは行かないかもしれないねえ、あの子も王選でござたごたしてるだろうから。すぐにとは行かないよ」

「えーえ。心得ていますとも。幸いにも大人しくしている限りは命に別状はないですから。」

その日が来るのを心待ちにさせて頂きましょう」

「ありがとうございます先生」

「先生ありがとう」「ありがとな、先生！」

そうして一同に見守られながら女医は竜車で来た道を戻っていく。駕籠が完全に見えなくなるまで玄関に佇んでいた一行だが、ロズワールがふと顎に手を当てながらエミリアへと問いかけた。

「エミリア様。そーう言えばあの招待状に書かれていた催しがありましたねえ。」

その席にこそ居ませんがクルシユ殿も王都に居る事です、一度直にお話でもしてはどうでしょうか？」

「そう言えば……ええ。ソレが良いかもしれないわね」

「ん？ ん？ 招待状、催し？ 一体何の話だ？」

「……バルス、慎みなさい。使用人が主人の話に口を挟むなんて言語道断よ」

スバルが耳ざとく言葉に反応すれば、ラムがびしやりとソレを払いのける。

……が、主人である二人がちらりと目を合わせれば、示し合わせたかのように頷き、スバルに告げた。

「実はね、このお話スバルにも関係ないとは言えないの」

「さるお方から、キミにも是非ともこの催し……懇親会に参加して欲しいとの事だよ」

「へ？ 懇親会……何で俺?！」

「……」

何故この世界の懇親会で自分が名指しされるのか皆目分ならず、挙動不審になるスバル。

一方で怪訝な目をしたのはカリオストロだ。スバルをわざわざ呼び立てる人物とは一体誰だ？ いや、誰であろうとも少年を死に戻りさせる魔女という存在を鑑みると、碌でもないイベントが待っていると思わざるを得ない。屋敷での前例があるのであながち考えすぎとも言えないのだ。

「まじかよ、まさか森での戦いが知らず知らずのうちに知られた!？」

多数の魔獣を退けた無名の新人、ナツキ・スバルを見初めた高名な騎士のスカウト!？ はたまたとある貴族の令嬢からの誘い……とかか!？ やっぱり隠し持った力を見抜いた人ってのは居るもんだな……だがしかし！ 俺の心は既にエミリアたん一筋！ 安心して欲しいエミリアたん。例え仕えろ言われても秒で断るのがこの俺だ!」

「姉様姉様、またスバル君が気……ハッスルしてます」

「レムレム、またバルスが気持ち悪い反応しているわね」

「スバルったら、本当調子がいいんだから」

すぐ隣で謎のポーズを取りながらいつものように面々に揶揄されるスバルに、カリオストロが参加を断らせようとした——その時、口ズワールが口を開いた。

「そこで良ければなんだけどねーえ、カリオストロ君。キミも一緒に

懇親会に出てみないかい？」

「……折角だが今回はスバル共々屋敷で——」

「実は鎧の魔物について、また追加で情報が手に入ったと言うのさ。発見地点も、その懇親会が行われる場所から少し離れた場所。

先方もスバル君以外の身内の来場を許可しているし、キミの調査のためにもなるし……何よりスバル君も守れる、丁度いいと思わないかい？」

「——」

その全てが自分にしか聞こえない声量で伝えられる。どうやら断らせようとする事を悟っていたのかタイミング良く被せ、更に行かざるを得ない状況を作り上げたロズワールにカリオストロは重圧を伴う敵意と共に威圧的な目をぶつける。ぶつけられた側は涼しい表情でニコリと笑うだけで応えた様子はない。

ロズワールには自分らをどうしても行かせたい理由がある。

しかしてその理由が見えない以上断りたいのがやまやまだ。

だが、ソレ以上ヴァシユロンに鎧の魔物の情報は捨てがたかった。

カリオストロはしばし視線を交えたまま数秒思考を巡らせ……その後重圧を解いた。

「……ヴァシユロンの件に、嘘はないだろうな？」

「本当ですとも。実はその件についての報告も、今回の懇親会を開いた方からの物でしてね」

「あ、あ？」

スバルを指名した人物と自らが追い求める魔物の情報を知っている人物が同じ？

そんな偶然があつてたまるかとカリオストロは吐き捨てたくなつた。

真つ黒も真つ黒過ぎる状況、これはついていくとしても付かず離れずじゃないと不味いな、と苦虫を噛み潰したような顔で彼女は考えに没頭する。……その一方、隣ではスバルとエミリア達が懇親会の準備話で盛り上がっていた。

「——それでね、レム。スバルの懇親会用の服とか用意出来るかしら

？」

「お任せ下さいエミリア様。スバル君、多分前測ったものと同じで大丈夫だと思いますけど、後で寸法を再度図らせてくださいね。タキシードを用意するので」

「おお、レム頼むぜ！ しっかしタキシード……タキシードかあ……。まさか初めて着るタキシードが異世界でだなんて、誰が想像出来たか……？ そう言えば、俺ってテーブルマナーとか無いにも等しいな……何か今更ながら不安になってきたな!？」

「スバル君スバル君、大丈夫ですよ。テーブルマナーはレムが手取り足取り教えてあげます」

「お、おおレム頼むぜ！ あとは……あれだよな、そう言うパーティだったらダンスとかあるかもしれないよな。異世界で地味に必須になるダンススキルは残念ながら俺には……!？」

「スバル君スバル君、大丈夫ですよ。ダンスもレムが手とり足取り教えてあげます」

「お、おおレム近い!! 近いよ!? やや柔らかかあったか!？」

「レム、恐らくダンスはないから暴走しないで帰ってきなさい」

頼られて嬉しく、更に頼って欲しいレムがスバルにくつつき、ラムはソレを諫め、スバルは赤面して離れようとする平和な一幕。そんな中ちらりちらりとエミリアはカリオストロに視線を送っていた。何かを期待するような、それでいて何かを言おうとして躊躇っているような素振りを込めて。カリオストロはしばらく、あえて視線を合わせる事を避けていたが……やがて観念したのか、頭を少し掻き、

「エミリア。……オレ様もその懇親会、ついていくからな」

「!! うん。勿論よカリオストロ!」

喜色満面とはまさにこの事だろうか。

満開の花のように嬉しさを全面に出したエミリアは、次いでレムへとカリオストロの服も用意するように言い含めるのだった。

「ところで、エミリアたん。

この俺をわざわざ呼び立てするお目が高い方って一体誰なんだ？」

「そいつはオレ様も気になる所だな。と言うか、懇親会ってのは一体どう言う事だ？」

「あ。ごめんなさい二人とも。でも安心して、ふたりとも知ってる人なのは違くないから。」

……それと、懇親会っていうのは便宜上の話。本当はお披露目会みたいな感じみたいよ」

「……俺達が知ってる？」

「……お披露目会だあ？」

二人の疑問を一身に受けながらも、エミリアは勿体ぶったかのようにふふんと胸を張り……そうして応えた。

「差し出し人はラインハルト。ラインハルト・ヴァン・アストレア。

お披露目会の内容はね、多分だけど……盗品蔵で出会ったフェルト、あの子の王選候補入りを参加者に知らしめる事だと思うわ」



### 第三十四話 午後八時の鐘の音

「あー。ここか」

「んん？」

メイザース領から出発した二台の竜車のうち、一台。カリオストロとスバルが乗った竜車で、ふと少女が呟いた。

朝に出発して約一日半かけて窓から見えてきたのは黄昏時の中に佇む、自分らが住まう屋敷よりも幾分小さな、それでも巨大で華美な屋敷。そんな屋敷を眺めているカリオストロの意味深な発言に、スバルが反応した。

「……………ここに来たことあるのか？」

「ある。この世界に来て一回目にラインハルトに遭遇してな。

行く宛ないって言ったら自分の屋敷にどうぞって言ったもんだから、ここに泊まったんだよ」

「へえ、初対面だっけ言うのに優しいな。

まーでも見捨てるラインハルトってのも想像出来ないか」

「確かにラインハルトが優しいからってのもあるけど☆

多分本当の理由はカリオストロがこんなにも可愛いからだと思うよっ☆

世界一カワイイんだもの、誰だっけ泊まらせてたくなるよねっ☆」

「……………素直に認めたくねえ！ 何か認めたら負けな気がする！」

天真爛漫の笑みとぶりっ子ポーズを見せるカリオストロの可愛さは確かに自他共に認めるモノではあったが、常日頃カリオストロと過ごしていたスバルはソレを面と向かって認めたくはなく、大仰に頭を抱えるポーズを取った。

「普通に認めちゃえばいいのに、このこの☆

——ま。2割くらい冗談だとして……………実際はオレ様の異質に気付いたからだ」

「(8割方本気かよ……………)異質？ 発言から天才だとか錬金術師だって気付いたとか？」

ぶごとごとと小さく揺れる竜車の中、腕と膝を組んだカリオストロは

窓を見ながら続けた。

「人から逸脱した存在だつて事を、ひと目で気付いたんだとき」

「いや、そりゃカリオストロは人間離れした力は持つてるけど……何か滲み出るオーラでも感じ取ったつて事か？」

腕を組み唸るスバル。実のところ、彼はカリオストロが何度も体を練成して数千年生きながらえている事を知らないし、カリオストロも聞かれてない以上教えていない。

それは不必要に情報を与える事がいつ致命的な事態を招くのかが分からないと言う考えからで、現状スバルのカリオストロへの認識としては、『凄腕の錬金術師であり、とてもとても強い』程度に収まっている。無限コンティニューが出来るのも自分だけだと、そう考えている。

彼女は「まあそんな感じだ」と発言をはぐらかすと、丁度屋敷内に侵入した竜車は速度を落とし、やがて大きな扉の前に止まった。

「つと、到着か。……あー、何かおかしいところ無いよな？ カリオストロ」

「んー、しいて言えば顔が生理的に受け付けない事かなつ☆」  
「身体的特徴以外で頼むわ!？」

慌しくも取り出した櫛で自身の髪をしきりに直したり、服の着付けをチェックするスバルと、落ち着いた様子のカリオストロ。二人が戯言を交し合っていれば、やがて執事服の老齢の男性が竜車の扉を開け、二人はそれに倣うように降り立った。

いつもの黒髪をジェルで固めてオールバックにしたスバルは、その身に黒のタキシードを纏っており、仕立てしただけあつて彼の長身にフィットしているのが見えた。

ひと目見る限りでは非常に様になっていると言ってもいいだろう。だがよく見れば若干顔が強張っており、その動きは固く、緊張している事が一目瞭然であつた。

一方スバルの後に降り立ったカリオストロはと言えば、いつもの錬金術師の服ではなく、フリルをふんだんに使った鮮烈な赤色のドレスを身に纏っていた。

肩まで下げていた後髪は黒のリボンで纏められ、右片側のもみあげはカールさせている。更にただでさえ整っている顔には派手になり過ぎない程度の薄化粧が施され、彼女の可愛さはより際立ったものへと進化。そこに降り立った彼女の立ち振る舞いと、見る物を魅了する美貌と蠱惑的な表情がブーストする事で、もはやある一国のお姫様と形容しても良いほどの雰囲気醸し出していた。

「ふふ、スバルったらすっごい緊張してる」

「そういつてくれるなよエミリアたん、こんなパーティーに呼ばれた事なんか生まれてから一度も無いんだからさ」

声をかけたエミリアに振り返り、スバルが相好を崩した。

スバルが見たエミリアはと言うと、初雪を思わせる純白のドレスを身に包んでおり、その上から纏う白のレースは霧のよう。足首まで届くスカートにはスリットが入っており、彼女のシミひとつ無い脚がちらりと見えていた。

いつも身に着けている胸元のパツクのMana結晶はそんな彼女の服装に良くマッチしており、また頭部の後ろで三つ編みにした髪を流し、前面部は紫の蝶のピンで留め、いつも以上に綺麗な顔を白日に晒せば、子供らしさは鳴りを潜め、大人の雰囲気があるに現れていた。「緊張するなどは言わないけれどせめて背筋を張りなさいバルス。

そして、失礼な発言、行動は絶対に控えるのよ。

ここでの貴方の粗相は、ロズワール様の、ひいては陣営の評判を下げると知りなさい」

エミリアの横に立つラムはと言うと……彼女はいつものメイド服のままであった。

一緒にドレスを着ましようよとエミリアやレムにも勧められていたが、本人は断固固辞。

自分は使用人の立場で、尚且つ名指しで招かれてもいないのならば

メイド服のままで行かせて欲しいとの事だった。

「まあまあ☆ そんな注意したらますます固くなっちゃうだけだつてば☆

カリオストロが横についてあげてあげてから、心配しないしなっ☆」  
「そうそう。大丈夫よスバル。」

私も最初は慣れなかったけど、何回か行くうちに慣れたもの。

私だってサポートしてあげるんだから」

「お、おお頼もしいぜエミリアさんにカリオストロ！」

二人の援護射撃を受けて何とか気持ちを上向きに修正したスバル。

だが屋敷の大きな扉の前に立つ執事が会釈しながら一行を迎え、招待状を確認し始めたタイミングで、彼はある重大な事に気付いてしまった。

(……あれ。俺って逆エスコートされてねえか……?)

大の男が少女と、幼女二人に連れ添われているという事実。

ソレを認識した時、スバルのちっぽけな男のプライドが警鐘を鳴らし始めた。

——不味い。今の俺、超格好悪いのでは？

現状を理解し、だらだらと冷や汗をたらし始めたスバル。

そしてその心情が分かっているのだろうか、執事とやりとりするために前に出たラムがすれ違いざまにぽつりと呟いた。

「——女性二人にエスコートされる男性……はっ、無様ね」

痛烈な一撃だった。しかしながらぐうの音も出す事が出来ず、スバルはぐぬぬと唸るしかない。そしてよくよく見ればカリオストロもニヤニヤとこちらを見て笑っているのが見えた。……どうやらサポートすると言いついたのは、この状況を狙ったものだったようだ。

おのれ小悪魔ども！ と内心で自らの経験のなさを柵において罵倒するしかやりようがないスバル。そんな彼を置いてラムと老執事がやり取りを行っていた。

「——それでは、今回ご出席なさるのはエミリア様。ナツキ・スバル

様、カリオストロ様にラム様……以上でよろしいでしょうか？」

「はい。当主ロズワールは所用のため今回は欠席させて頂く運びになりました。

主人に代わり謝罪させて頂きます」

そう、今回のパーティの出席者は4人。エミリア（パツクは夜のたぬめ既におやすみモード）、スバル、カリオストロはともかくとして、ラムはエミリアの付き人という名目でついてきていた。それはフェリスに出会えたらを想定しての意味も含まれていた。

一方でロズワールはと言うと、彼は執務の為に領地に残り。レムも同じく屋敷の管理を一任されて留守番となった。（尚、皆が出かける時に非常に寂しそうな顔をしていたとか）

「とんでもございません。こちらこそ急な招待の中ご足労いただき、まことに感謝しております。

……招待状、確かに確認させて頂きました。どうぞ中にお入りください」

老執事は朗らかな表情を見せながら屋敷の扉を開け、中へと一行を招き入れる。

先に広がる廊下を先導していく執事に、一行が無言のまま追従していけば……時間をかけることなく重厚で大きな木製の扉の前にたどり着く。その扉の隙間からは光と、多数の人が話し合うざわめきが聞こえていた。

——そして、洗練された動作で執事がその扉を開け放てば、一行の視界に今夜のパーティ会場が飛び込んできた。

パーティを開く場所にしてはいささか小さく感じるが、狭くは感じさせない小ホール内では既に数十人が各々の歓談を楽しんでおり。立食形式なのだろうか、見る者の心を奪う色取り取り、かつ芳醇な香りを醸す盛り付けの良い料理が、散在するテーブルに敷き詰められ。ウェイターは彩色溢れる透明な液体の入ったグラスを、参加者達に呼ばれるがままに渡している。

カリオストロは何度かパーティの経験があったのか、冷静に、かつ品定めするように参加者達の顔ぶれを観察——する前に。

広がる光景に眼を奪われ立ち尽くしているスバルを見て、新たなイタズラ——いや本人にとっては大きな助けになるかもしれない提案——をしようと思いついた。

感謝しろよ童貞野郎、と表向きは天使の微笑み、裏向きは悪魔の含み笑いで、棒立ちの彼の背中をつつくカリオストロ。

つつかれたスバルは小さく体を跳ねさせた後、いぶかしげにカリオストロに振り返った。

(……な、なんだよ)

(いや、気圧されてるなーと思ってるな?)

(……すーいませんねー、教養も度胸も経験もないものでー)

(そうふて腐れるんじゃないやねえよ。さっきのは可愛いお茶目だと思えて。)

——そんなスバルに、汚名返上のチャンスだ。お前、エミリアをエスコートしてやれ)

(はあっ!?)

(なんだよ、女性にエスコートされるがままが良いってんのか?)

そーじゃねーだろ、男はエスコートしてこそだ)

(い、いやいやいや!! エスコートつつたつて……)

(レムにさんざっぱら色々教わっただろ?)

知識つつーのは使って初めて輝くん、埋没したままにするのは時間の浪費と変わらねえ)

(そ、そうは言ってもまだ俺のチキンハートは……!)

ひそひそと立ち止まって話し合う二人を怪しんだのはエミリアとラムだ。

後ろから付いてこない二人へと振り返っては話しかけ問い質してきた。

「……ねえ、どうしたの二人とも? 入り口で止まっちゃって……」

「はあ……バルスは臆病すぎてどうしようもないわね。さっさと前に進みなさい。」

別に誰も貴方なんて気にする事も見る事もないのだから、気に病むだけ無駄よ」

「あ、やつ、わ、悪い！ いやこれは別に何でも——

「——ねえねえ聞いて二人共、スバルがエミリアをエスコートしてあげたいんだって☆」

「ってオイイ!? カリオストロさんなんば言いよつとね!」

「きやるん☆と100%の完成度を誇る外向きの笑顔を見せながらカリオストロがのたまえば、エミリアはきよんとした顔を見せ、ラムは呆れた顔を投げかけてきた。

「そうなの? スバル」

「あ、あああー、あー! え、えつとえつとだなこれはカリオストロが……」

「もう☆ さっさとエスコートしてあげてつ、それが男の努めなんだからつ☆」

「挙動不審になるスバルに、ダメ押しとばかりにカリオストロがエミリアの手を取ってスバルの腕に絡ませてあげれば、ますますの事スバルは顔を赤くして動揺する。しかしてエミリアは

「白の手袋を嵌めたその手を自分の意志で改めて深く絡めさせれば、いたずらっぽく笑った。

「うん。じゃあスバル、エスコートお願いします」

「——っ!」

「……はあ。どこまで緊張してるのよ」

「あはははつ、もうスバルつたらどこのあやつり人形? 手と脚が一緒に出てるじゃないっ☆」

「腕に感じる柔らかなエミリアの感触に先ほどとは別の意味でガチガチになったまま進むスバルを見て、エミリアが笑い、ラムが嘆息をついた。

「カリオストロもそんなやり取りを見て自然と笑いながらも——ふと、かつての団員達との思い出を想起してしまった。

「馬鹿な事を言っただけを盛り上げるソリツズ。

「同調するオイゲンにラム。」

イオがその発言に姦しく突っ込めばソリツズは尚の事茶化し、更にイオが怒り出す。

ロゼツタは蠱惑的に笑いながらそれを見守り、ルリアはどちらが正しいのかが判断できずにはわわと慌て、カタリナとビイが至極真面目にソリツズを断じる。

そんなありふれた騒動を最後に纏めるのはいつもグランだった。持ち前のカリスマのせいだろうか、輪の中心はほとんど全てグランにあり、

そしてそのグランの周りには常に笑いが溢れていた。

大切な団員達と離れ離れになってしまった事を思うと、自分の胸が小さく締め付けられる感じがしてならなくて。そしてそんな心境の変化にカリオストロは慌て、内心で否定する。

この天才と美少女の名を欲しいがままにするオレ様が、たかが数ヶ月程度離れただけで郷愁の念に駆られてるいるのか。と、内心の弱みを跳ね除けるために小さく顔を振っていると、彼女のすぐ横で聞き覚えのある声が届いた。

「エミリア様、今宵は遠いところからご足労頂き、誠に感謝します。当主に代わり、このラインハルトが心より歓迎致します。

——スバルもよく来てくれたね、エミリア様のエスコートとは羨ましい限りだ」

ラインハルトである。初めて会った時とは異なる白のタキシードに身を包んだ彼もまた、髪型をオールバックに変えて趣の違うイケメンっぷりを見せつけ、どこまでも様になる動きで深々と一礼する。そして最後に考えにふけていたカリオストロへと体を向けた。

「カリオストロ、キミもよく来てくれたね。

スバルと一緒にエミリア様のところに居るとは聞いていたから、今日キミを招くことが出来て僥倖だったよ。その真紅のドレスは見事だね、とてもキミに似合っているよ」

「——お褒めの言葉ありがとうございます、そして今日はお招き頂きありがとうございます☆」

実直かつ好感の持てるセリフだ。



しかしながらスバルをわざわざ危険に晒す必要性を作った主たる原因と考えると、素直に喜ぶことは全く出来ない。まずは形式だけの返答をし、そして本題に入ろうとすると、

「お、おいおいおいラインハルト。いや、素でイケメン過ぎて全俺が焦ったつーか。見惚れたつーか……マジでこの場所美男美女率高すぎて俺だけ疎外感感じるわ、割りとマジでな！」

ともあれ招待あんがとな！ ただ本当、俺が名指しで呼ばれた理由が全く分からないんだよな……自慢じゃないが社交経験なんてオール0だぜ？」

この場で唯一の見知った男性だからだろうか、スバルが仮にも主催者側であるラインハルトに対して、どこまでも馴れ馴れしいファーストコンタクト共に本題に突っ込んでくれた。……話す手間が省けたのは良いことだが、ラムが射殺す程の目でスバルを睨んでいるのを見ると、コレは後で説教は違いないだろう。だが今日の主催者は相変わらずの彼に不快感なども一切表さず、むしろ嬉しそうに対応し始めた。

「そんなことはないさ。スバルもそのタキシード、とても様になっているよ。」

もしも僕と君に差があるとすれば、それは経験の差だろうね。

スバルもボクと同じくらい経験をこなせば、僕なんてすぐに飛び越せるさ」

「ラインハルト知ってっか？ それ枕詞に『ただしイケメンに限る』ってついてっからな！」

経験があっても生まれ持った顔面偏差値には勝てねえんだよ……！！」

「二人共久しぶりで、一度しか出会ってない筈なのに……すごく仲良いのね。」

……ねえカリオストロ、どうやったらあんなにすぐに仲良くなれるの？

私もあそこまでグイグイ行けたら仲良くなれるのかしら」

「……エミリア、スバルの手法だけはやめろ。いいな。」

あれは偶然の中から偶然を拾っただけだからな。通じるほうがおかしい」

ぎゃいのぎゃいのと騒ぎ立てるスバルに、ちよつと羨ましがるエミリア。ラムは一步引いた場所でソレを静観して見守っている中、ラインハルトがスバルの質問に答え始めた。

「さて、先程のスバルの質問だけ……今日の催しの内容は大体は聞いているかな？」

「ああ。確かあん時出会ったフェルトのお披露目会だったか？」

徽章が反応してたなんて知りもしなかったぜ……実はフェルトって元高貴な身分だとか？」

「実際にそうなのは分かっているけれども、その通りだ。」

ただ——些か唐突かつ強引だったためか本人が乗り気ではなくてね。

心苦しいが王不在のルグニカ王国に一刻も早く王をあてがうため、彼女に本腰を入れて欲しいと思いつつ

「一応見知った顔である俺に頼った、って事か。オーライオーライ。ようするに何らかの形で俺が活入れるなり、説得して欲しいって事ね。」

……つっても王様候補って現状4人居るんなら、乗り気じゃないなら候補から外せばいいんじゃないのか？」

「本人を思えばそうしたいのもやまやまなんだけれどもね。」

王選開始の条件は5人の候補者を募るところからなんだ。

フェルト様には申し訳ないが、是が非でも乗り気になって貰いたい——それに」

「それに？」

「——僕はフェルト様こそ真の王の器を持っている、と聞いているからね」

一度貯めたラインハルトは裏のない瞳で言い切る。仮にも別候補者が居る前での言葉にラムは勿論眉を顰めたものの、エミリアは同じく純真そのままの笑みで満足そうに頷いていた。スバルはと言うと若干茶化し気味にラインハルトにつつかかっていた。

「おいおいおいおいラインハルト。中々挑戦的だな？」

仮にも未来の王様が確約されるとも言えるエミリアさんに啖呵切るなんて、ふてえやろうじゃねえか」

「こればかりは済まない、とは言えないな。」

今日この会は僕の家がフェルト様を支えたとみんなに認知して貰うための催しなのでね。

勿論、家だけでなく僕自身もフェルト様の一騎士となるつもりだよ」

「騎士……」

毅然とした態度を貫くラインハルトに、気圧された……というよりある単語に興味を惹かれたスバルが思案顔になる。が、歓談は時間切れらしい。ラインハルトは壁横の時計を確認すると、エミリアへと話しかけた。

「——と、ここですつと会話に花を咲かせていたのですが……時間も迫っている事です。エミリア様、来て早々ですがこちらの部屋へお願い出来ますか」

「ええ、手紙にあったあの話よね。ラム」

「はい、エミリア様」

「ありがとうございますエミリア様。では済まないけど、スバルとカリオストロはしばしご歓談を。お酒と料理はお好きにどうぞ。僕自ら作ったものだけど、そこそこ自信はある出来だと自負しているよ」

「このパーティの料理作ったのラインハルトかよっ!? あ、オイ」

ラインハルト、エミリア、ラムはそのまま会場を横切り奥の部屋へと進んでいってしまい、二人はその場に取り残されてしまった。

「あいつ、どんだけチートなんだ……料理すらプロ級に出来るとか。」

あむつ。……うまつ!? マジでレム級の技量かよ!？」

「天は二物を与えずって言葉が嘘つてのがはつきり分かるな」

「……カリオストロもラインハルトと同じ部類だから、その台詞は違うんじゃないか?」

「オレ様の美貌と天才は努力の末だ。先天的に授かったものじゃねえ」

勘違いするなよと鼻を慣らす彼女はグラスを傾けつつ料理に舌鼓を打つ。

スバルもまだきよろきよると辺りを見回しながら同じく料理と飲み物を堪能する。

……余談にはなるが二人が手にもつ飲み物、実は果実酒である。

カリオストロは(見た目的な)問題こそあったが、素直にウエイターから受け取る事ができ、スバルも元の世界の法では20歳までと厳粛に決められていた飲酒も、世界が変われば従う理由もなし、と流されるがままに手に取っていた。こちらの世界ではお酒に年齢制限なんてないのだろうか？

「リンゴサイダーって感じ？ 炭酸あって結構美味しいし、普通に飲めるな。」

「っていうか初めての飲酒も異世界かよ。俺の人生って何かすげーな」

「お前のこれまでの体験は誰にも負けないもんだろーよ。真似したくも体験したくもないけどな。——しつつかし、アイツを王様に添えるか、分らないもんだな」

「うるさいなオレも体験したくはなかったよ!？」

まあ盗賊から一転王様だもんな、ジェットコースターみたいな人生だよな」

「ジェット……何だよそれ?」

「まあ山あり谷あり的な感じつつーことで……本人は乗り気じゃないってのが意外だけだな」

「あんな説明もなしにいきなりじゃ当たり前だろうよ。」

と言うかだな、お前フェルトの説得を本気でやるつもりなのか？

言つとくが招待されたからと言って受ける必要はないんだぞ？

お前がエミリアに今後も肩入れするつもりがあるなら尚更だ。敵陣営に塩を送るようなもんだぞ」

くびり、とカリオストロもグラスを煽り、それを味わった。

対するスバルも首筋を軽かきながら、内心を吐露し始める。

「……いや、まーそりゃ確かにそうなんだけどさ。」

ただ集まんないと王戦が始まらないって言うなら形だけでも参加させるだけでもいいかな、なんて思ってる。……ラインハルトのやる気を折る形になっちまうけどさ」

「ふん、それが妥当な判断だろうな。……でも違うんだろ？」

「……ああ。正直、個人的にはフェルトに本腰入れて貰いたいってのもあるんだよな。」

エミリアたんがフェルトが参戦するって聞いてすっごくやる気燃やしてたし……なんつーか、エミリアたんは搦手よりも正攻法で行かないと駄目な気がするんだよな」

「……………はあー……………だと思っただぜ。ま、好きにしろよお人好し。」

オレ様は止めたりはしねー。ただくれぐれもタダ働きみたいな事はすんじやねーぞ」

ぽん、と背中を叩いてアドバイスをするカリオスト口。実は彼女も同じく、エミリアは正攻法で地道に功績を立てねば王選で生き残ることが難しいと考えていた。本人の銀髪のハーフエルフという身体的特徴は心象としてあまりにも大きなマイナス要素であり、恐らくは小手先の功績では国民に猜疑心を抱かせ、結果として良い評判に繋がらない可能性があった。

そんな中、他陣営に恩を売るというのは正攻法のひとつにはなり得るだろう。ただ、ここでラインハルトがこちらに頼る事がどれだけの恩となるのか……と少々思索したが、恐らくは鎧の魔物の情報でトントンと言った所だろう。……薄情なようだがカリオスト口にはエミリアの王選成功まで付き合う義理はないし、そのつもりもなかった。本人の目的はあくまで元の世界への帰還。エミリアの行く末などどうなろうと知った事ではないのだ。(しかしスバルがしたいなら一緒に居る間くらいは補助ぐらいはしてもいいとは考えているようだ)

「対価か……正直、この料理と飲み物で十分元取れるって思ってるけどなー」

「この貧乏舌が、どれだけ欲がねーんだよ」

「レムの味で舌は肥えつつあるっての。でも改めて感動の品だったしなー！」

そうして他愛もない話を続ける事数十分頃、スバルがちらりと柱時計を見ると時刻はあと少しで8時を指そうとしていた。……未だ三人は相談中なのだろうか。話が一段落つき、二人に間が訪れた所でカリオストロが呟いた。

「……スバル。ちよつとその場にじつとしてろよ。所用すませてる」

「ん？ デザートでも食べたいのか？ だったら隣のテーブルに」

「阿呆。ただの花摘みだ。」

——すぐ戻る。いいか、絶対に。絶対に。そこを動くんじやねえぞ」

「……」

カリオストロはわざわざ指差しして言い含めるとツカツカとその場から去っていき、とうとうその場にはスバルだけが取り残された。

「……そんなに信頼ないもんかね。ちよつとショック受けるぜ。」

いや、カリオストロは割りとおかんだからな……は……」

自信への信頼のなさを実感して少ししよげながら、スバルは隣のテーブルに移動する。そして見ただけで高そうだと分かる皿に盛り付けられた宝石のようなデザートをひとつ拝借した。美味い。美味いが何だろう、とても侘しい味がする。シアワセ一杯の表情で食べた気持ちもあるものの、生憎自分に出来るのは若干やる気の削がれた無気力顔だった。現状は甘さよりも今は苦い何かを食べたい、いや飲みみたい気分だ。——そうして若干のやさぐれを見せつけながらスバルはデザートを咀嚼していると、

——彼のすぐ隣で何者かの気配を感じた。

「……………」

「……………」

スバルが顔を右に向ければ、その者もスバルと同じ無気力、いや無表情でひたすらもくもくとチョコと思しきデザートを口に運んでいた。しかして唯一スバルと同じなのはその部分だけ。その体格は力

リオストロと同じ程度の身長で、起伏のない体つき。幼さを感じさせる顔は中性的で髪はおかっぱ頭とどう見ても子供だ。性別は顔だけで判断するのは至難ではあったものの、体に纏う黒色の子供用のドレスからかろうじて女の子(?)だと判断出来た。

「……………」

「……………」

ふと、目があった。彼女の糸目からは何を考えているのは汲み取れないが、目が合いながらも依然として頬に詰め込むだけチョコを詰め込み、口元を汚すのも厭わずにデザートを堪能していた。その食べっぷり、子供ながら見事だと賞賛したくなるほど。

「……………」

「……………ぐきゅん」

じつと見ていると、少女もスバルを見つめながら口いっぱい頬張ったチョコを手品のよう一気に胃に収めてしまう。そして、そのまましばし二人の間に沈黙の帳が降りた。

「……………」

「……………」

なんとなく居たたまれなくなってスバルがテーブルのナプキンを取り、口元を拭いてあげると、少女はなされるがままに顔を拭かれていく。そうしてすつかり綺麗にし終えたのだが、相も変わらず視線を逸らすことがない。ただひたすらにお互いに視線を交わすばかり。聞こえてくる喧騒をBGMに、二人は対峙を続けた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………んがあぶぐぶはぐはぐ!!!」

「……………!?!」

そんな静寂のチキンレースの中、先に仕掛けたのはスバルの方だった。

しかしながら、この妙な雰囲気打破するためにとった手段は、奇しくも少女と同じ手法。

なんと、スバルは自分の目の前にあるデザートを皿に盛り付けるだけ盛り付ければ、それを一気に口に放り込み始めたのだ。(尚視線は少女に固定したまま)

嗚呼、何という冒瀆的な光景だろうか。

劍聖作の芸術的な出来のスイーツを味わうことなく口の中に詰め込み、下品にも咀嚼音を立てながら一気に噛みしめていく。さしものスバルの行動は少女の鉄面皮に驚きを刻んだ。

「もっちゃもっちゃ……んつくんつく……んんつく!!……けふ」  
「……………」

頬を膨らませた状態で咀嚼していき、一気に飲み込むようにして食べきるスバル。口元は当然汚しきったままだが、どこかその顔は満足気だ。

すると少女はお返しとばかりにテーブルのナプキンを取り出し渡してきたので、拝借して自分で口をぬぐった。

この時この瞬間、見知らぬ二人の間には奇妙な連帯感が生まれていた。

見慣れぬパーティーで、芸術的なスイーツを介した奇跡の遭遇。

二人は友情を先程の行動を通じて感じ、自然と握手をしていた。

「スバル。ナツキ・スバルだ」

「……ポルクス」

変化こそ乏しいが、どこか満足気な表情のポルクス。

彼女は親戚の付き添いによりこのパーティーに参加したらしい。

本人の口数の少なさから汲み取れる情報は少ないものの、スバルは1人を紛らわせるためにスイーツを食べながら話し合った。

「そうかポルクスは親戚の付き合いかい、ついてたな！　ここまで見事な料理が食べられるって言うんだからさ。正直今日の発表内容より俺はこの料理を食べただけで満たされた気分だぜ。知ってるか？　これらの料理って全部ラインハルトが作ったんだってさ」

「……劍聖。多趣味だね」

「マジでな。あいつはチートだぜチート、出来ないことなんてないレベルじゃねえかな」



「……チョコ。美味しい」

「と言うよりポルクス、チョコ食べ過ぎじゃね？　ちよつとチョコくれよ」

「……ゼリーもケーキもあるから、そっち食べてて」

「ケチンぼだなー、お兄ちゃん傷ついたわー、マジで傷ついたわー」

「……その評価は心外。あげる」

「ポルクスマジ天使」

「……もつと言っていていいよ」

小気味いいテンポの会話の応酬が続く。

それは待ち時間を潰すのに丁度いいものだったが、ふとスバルが気付く。

「……そう言やポルクス、お前のその親戚とやらはどこに居るんだ？

こんなところで1人でぶらぶらしてていいのか？」

「……今更。あの人は今どこに居るかは知らない。案外適当に人を見繕ってるのかも」

「は？　見繕う？」

見繕う、とは一体どういう事だろうか？

有力そうな権力者か、はたまた若いツバメを探して声をかけているのか。

少し不思議な単語に聞こえたが、と首を傾げるスバルに対してポルクスは手元のジュースを飲み干し、けふ。と息をつく。

「……こつちの話。多分、そのうち出会えると思う。」

私はここでじっとしてろって言われてるし」

「ふーん、まあ迷子とかじゃないなら何よりだな。」

実のところ俺もじっとしてろって言われててな」

「……大の大人が子供扱いされてるとか」

「一応俺も子供ですうー！　ってかこつちって何歳からが大人なんだっけ」

「……さあ。こつちはよく分からないね。20？」

「んじやあまだまだ子供だな！　酒は飲んじまってるけど少し大人ぶったって事で——」

その時、厳肅な音がホール内に鳴り響き始めた。

「お」……」

音の出所は部屋済に置かれた、アンティークを思わせる柱時計。

時刻を告げる針は丁度8時になっており、時を忘れて料理と歓談に夢中にした人々の注意を引くために間隔を置いて鐘が鳴らされる。

どこか寂しいが、さりとて1つで完結している鐘の音は2つ、3つ。4つと静かに、かつはつきりと鳴り響いていく。……気づけばそれが合図になったのか周りに響いていた歓談は鳴りを潜めて、ホール内の音は鐘の音1つになった。そうして皆の意識は自然とホール奥。舞台の上へと注がれていった。

予告されていたのか、それとも予感めいた予知か。

何かの始まりを感じ取った皆に倣ってスバルもポルクスも舞台に体を向けていた。

——お披露目がいよいよ、始まろうとしていた。

### 第三十五話 出会いと再開

参加者が一様に舞台への注目を続ける中、柱時計の鐘の音が悠々と会場に鳴り響く。

最上級レベルの料理で持て成された参加者たちの関心はその時点でお喋りよりも、食事よりも、これから起こるであろうお披露目へと関心を向け始めていた。

スバルとポルクスもそうである。

皆の雰囲気から何かの始まりを察した二人も、彼らと同じ方向へ体を向ける。

そうしてついに時を刻む鐘が鳴り止み、皆の期待は一丸となって舞台へと注がれるのだが――

「……」

「……」

「……ん？」

「……」

鐘の音が鳴り止んでしばらく立つが、舞台の上は依然として無人。誰も来る気配がない。

これからお披露目が始まるのではないのか？　と思わず辺りを軽く見回すスバル。

だが他の参加者達も同じ気持ちだったようだ。

やがて各々の困惑のざわめきが、小さくだが会場に響き始める。

「……お披露目、始まるんじゃないやなかつたのか？」

「……さあ」

緊張の糸を緩めさせ、眼下のポルクスへと声をかけたがその反応は乏しい。と言うより意識は既に舞台よりデザートに行っている辺り、お披露目そのものに興味はないようだ。

さて、一体何が起こったのだろうか。

原因があるとすればお披露目されるであろうフェルト自身だろうが、彼女に何が起こった？

体調不良？　考えづらい。

そもそも今日は舞台に出さない？ それなら舞台にラインハルトがすぐに出てくる筈。

気恥ずかしくて表に出たくない？ そんな柔な精神はしてい無いと思う。

まさか嫌気が差したあまり脱走でもしたのだろうか？

……何となくあの勝気な少女ならありえるかもしれない、とスバルは考えてしまう。

無理矢理つれてこられた意趣返しも兼ねて、いの一番で台無しにする。

あの子はただやられたらそれっきりの子ではない、きっとそう言うことぐらいやりそうだ。

「……あ」

「ん？」

そんな失礼な考えを抱いているスバルの意識をポルクスの声が表層へと戻す。

少し遅れだが今からお披露目が始まろうとしているのだろうか？

そう思つて再度舞台へと振り返ろうとした矢先――

「てめえは誰でいやりますか？」

その瞬間、スバルは全身に怖気がさすのを感じた。

気付けば声の主は彼の肩を精悍な手で掴み、こちらに問いかけている。ただそれだけだと言うのにスバルは絶対的な捕食者を前にしたかのような死の危険を感じていた。

全身の肌が逆立ち、汗腺からは止め処なく冷や汗が溢れ。心の臓は急速に、せわしなく動き始める。どうにかして逃げなければ自分は死ぬと体が分からされている。

だが背後に感じる圧迫感の前では体は微動だにせず、ただ震えることしか出来なかった。

「んんー？ 何でてめえみたいな肉塊がパーティに入り込んでいやがるんですか？」

こんなクズ肉いたっけか？ 呼んだっけか？ 覚えないんですけどどてめえなんなんですか？」

「ひ……」

大蛇のとぐろの中で睨まれる鼠というのはこんな気分なのだろうか。

しわがれた声に含まれるのは純粹な好奇心。だが、その純粹さはマインス方面に振り切つてると言い切れる程の悪意に満ち溢れているのが何故かはつきりと分かつてしまう。解答如何によつては口くでもない末路をむかえてしまう事も、同時に。

ごくり、と喉を鳴らし動けぬスバル。

そんなスバルを、ポルクスははまだ無表情で見ていた。

「……普通じゃないの？」

「ああああああ普通じゃないですね。普通じゃねーです。普通じゃねーですよ、全然普通でいやがらないですよ。一体何をどうしちまつたらここまでするのか気になって仕方が無い肉の塊ですよコイツは。たとえそれがアタクシ以下だとしてもねえ——」

彼女は後ろの人物の雰囲気の前にしても全く変わらぬ顔のまま会話をしている。それがスバルにはあまりにも信じられなかった。

そしてスバルは見知った相手であるならとポルクスへ助け船を出して貰おうとする——が、その前に肩に置いていた手はそのままに、声の主はぐるりと覗き込むような形で顔を回り込ませてきてしまう。「で。で。で。で。」

聞こえてねえよ——なんで慈悲深くももう一回聞いてあげますけどーお。

——てめえは誰なんです？」

彼の顔を見た瞬間、スバルは大きな矛盾をその人物に感じ、吐き気を覚えた。

見えたのは歴史を刻んだ厳しい顔に立派なアゴ鬚をたくわえた男性なのだが、その口調が。その表情が。全く顔に一致していないのだ。

それはまるで悪意ある人物が他人の皮を被っているような、強烈な

違和感。

何故この顔で、どうしてこんなにも悪意に溢れる砕けた口調を発するのか。

何故この顔で、どうしてこんなにも見る者全てに嫌悪を思わせる笑顔を見せるのか。

そんな人物が全てを飲み込んでしまいそうな黒目でこちらを覗き込んでいるのだ。

彼の瞳はスバルを捉え離さない。

逃げたい、逃げ出したい、だが動く事も出来ず、声すら出すことも出来ない。

心中での助けを呼ぶ声も誰一人として届かない。その事に絶望してしまい震えた声で延命を願おうとした矢先――

「ねえねえ☆ おじちゃん何してるの?」

カナリアのような声が三人へと届いた。

それはスバルにとっては聞き覚えのある声。

他の二人にとっては初めて聞く声。

三人は導かれるように、新たな声の主へと顔を向けていた。

そして、スバルはその声の存在を見た瞬間、心の底から安堵した。

席を外していたカリオストロがそこに立っていたからだ。

「ひよつとして、この子が何か粗相でもしちゃった?」

だとしたらごめんさいっ、この子ったらパーティ慣れしてなくてっ☆」

背後に花畑が見えそうな程の美しさと可愛さを振りまく美少女は、にこやかな笑顔のままこちらに近付いてきていた。赤のドレスを揺らすことなく、ゆつくりと。

だがスバルは気付いていた。彼女の目は全く笑っていない事を。むしろ二人への敵意で満ち溢れている事を。

「……か、かりっ」

「――おお、こんばんわお嬢さん。」

私としたことがつい、お嬢さんの顔に見惚れて言葉を忘れてしまった。

いやなに、彼は何もしておらんよ。私の方がどうにも彼が気になつてね」

先程の雰囲気は何だったのか依然としてスバルの肩に手を起きながら、一転して姿に相応しい声と顔でカリオストロへと返答しだす男性。そんな彼に対してカリオストロもくすくすと笑いながら話に乗っていく。

「気になつた？ それはやっぱり目つきの悪さとか？

あ、髪の色でしょ？ この子つて黒髪だからいつも他の人より目立つのっ☆」

「うむ。その通りだ。つついっい黒髪に惹かれてな。

年を食つてもどうにも好奇心だけは消えなくてなあ」

「好奇心旺盛、結構な事ですねっ☆」

表面上で交される壮年の男性と子供の微笑ましい日常会話。

だが、互いの目はどちらも笑つてはいない。

相手の魂胆を探り合うこの二人の間だけ、今や空気が全く別のものに成り代わっていた。

「と・こ・ろ・で☆ そろそろその子返して貰つていくい？

ちよつとその子と二人で話したい事があるんだ☆」

「ほう、そうなのかい？

ふうむ……私としてはもう少し彼と話したいんだがね。あと数十分程度でいいんだが」

「ごめんねおじちゃん、どうしても話したいんだっ☆

それに、お披露目もそろそろ始まる見たいだしね☆ ——だからさ、早く離して？」

纏わりつくような粘ついた悪意と、熱を感じるほどの強い敵意がぶつかりあい、近くのテーブルに置かれたグラスが小さく揺れてか細い音を鳴らし始める。

気づけば彼女の後ろ手にいつもの魔導書を持っているのが見える事から、最早この先に待つのは言葉での話し合いではないのは明白

だった。

「——それもそうだな。いや、すまなかつたなお嬢さん、それにキミ。ではまた機会があれば彼とゆつくり話したいものだ」

「うんうんっ☆ ごめんねおじちゃんっ、その時が来るならね☆」

「ハハハ。楽しみにしているよ。——では行こうか」

「……………」

男性はポルクスを連れてその場を離れようとする。

……が、背を向けて数歩歩いてから彼らは歩みを止めてしまう。

「——ああ、そう言えば。私とした事がすっかり忘れていた

お二方のお名前、お聞きしても？」

「おじちゃん、ボケちゃ駄目だよ？」

お名前を聞きたい時は先に名乗らなきゃ☆」

「あん？ かははは、手厳しい。だがその通りだろうな。

では遅れまして……私の名前はリツケルト。リツケルト・ホフマン

と申す。この子はカ」

「ポルクス」

何故か食い気味に否定したのは無表情な少女だった。

顔色こそ変わらないが、こちら先程までの話し方と一変した必死さがあつた。

「…………ふむ。ポルクスと言う」

「ご丁寧にありがとう☆ 私の名前はカリオストロ☆ 家名も何にもない、ただのカリオストロだよ☆

こつちの緊張しちやつてる子はスバルって言うの☆」

「ほうほう。カリオストロ君にスバル君か。

あい分かつた、しっかりと覚えておくとしよう——それでは改めて」

男性は自らの髭を撫でながら厳しい顔で優しく微笑むと、今度こそポルクスを連れて二人でどこかへと移動していった。カリオストロは愛想よく軽く手を振った後、すぐ様スバルの手を取り……そして、会場の端まで連れていった。

「つぐ、うえっ、はあっ、はああっ——！」



「落ち着け、ゆっくりと深呼吸しろ」

彼らから離れた瞬間緊張の糸が途切れたのか、スバルは肩で息をつくようにして全力で肺に酸素を取り込む。足どころか全身の震えが今頃になって表れ、安心をあらわすように汗と涙が次々に溢れる。あまりにも尋常ではない様子を見てカリオストロは連中に強い怒りを覚えるとともに、スバルが落ち着くまでゆっくりと背中をさすり続けていく。

「ふう、ふうっ……人、と出会っただけで、死、を覚悟したのは……は、じめてだ——ずずっ」

「……流石に同情するぜ。一体どこの星に生まれたらここまで運が悪くなれるんだ？」

それもちよつと目を離れた隙に……全く、変な奴に好かれ過ぎだろうに……ほら、水だ」

ナプキンで顔を拭うスバルへと水の入ったグラスを差し出せば、スバルはソレを一息で飲み干し、ようやく落ち着いたのか大きく息を吐いた。

「それで、一体何があつた？」

「……見ての通りだ。たまたま意気投合した子供と話し合ってたら、あの男に絡まれた。」

俺が普通じゃないって、何でお前がここに居るんだって」

「普通じゃない？ オレ様ならともかく、お前が？」

確かにスバルは普通じゃないといえば普通ではない。

異世界から招き呼び寄せられた存在で、死に戻りという体質を持つ少年だ。

だが、その異常は外面からではとてもではないが分かるものではない。

外面で分かるのは精々珍しい黒髪ではあるが、黒髪の人物もこの世界に居ないわけではないというのは読みふけた禁書庫の本で把握している。では他の何を見てスバルが普通ではないと判断したのだろうか？ もしもあの人物に他人の能力を見透かす力があればさもありなんだが……と考えを巡らせて行く途中、カリオストロはある事

を思い出した。

「……もしかしてだが、魔女の残り香のせいか？」

「……マジかよ」

誰にでも判断こそ出来ないが、特定の人物のみ近付いただけで判断できるモノ。

そう。魔女の残り香である。

カリオストロ曰く腐臭がするというそれは、スバルが死に戻りを繰り返すたびに強くなっていく。それは他人に死に戻りの事実を伝えた時のペナルティでも同じだ。

もしも彼がその香りに気付くことが出来る存在ならばスバルへ絡みにくる事も説明がつく。

あの男もレムと同じく魔女教に何か恨みがあるのかと思う一方で、道行く先で目の敵にされてしまう自分の体質にげんりしてしまうスバル。そんな彼をカリオストロも珍しく哀れみの目を向けて背を軽く叩いてやった。

「まあ運が悪かったと思え。あいつの狙いがなんにしるよからぬ結果になるのには違いない。

今後は近付いてきたら絶対に逃げろ」

「言われるまでもねーよ、あいつの……あの雰囲気は異常だ。

人の形をした悪魔って言ったほうがまだしっくりくるぞ。

……なんつーか、ちぐはぐで、兎に角気持ちが悪かった。もう二度と会いたくない」

「気持ち悪い、ね。確かに感じた気迫はオレ様も同じ気持ちだ。

そういや……そんな気持ち悪い奴に連れ添ってたあのガキはどうなんだ？」

「……アイツは本当にただの子供なだけだと思うけど、今は自信ないな……」

二人で無言でラインハルトの菓子を貪り食いあって握手して、取り留めない話をしただけだし」

「何してやがんだお前は……」

スバルの行動に呆れ顔を見せるカリオストロ。その直後、にわか

ホール内が再び静けさを取り戻した。

「皆様、本日はお集まり頂きまことに感謝します。

そして遅れてしまい大変申し訳ありませんでした、定刻から既に5分は経ってしまいましたが始めさせていただきました」

唐突に壇上に現れたのは先ほどラムが応対していた老執事。

丁寧に腰を曲げて謝意を表した彼が、お決まりのお礼と今回の集まりの趣旨を告げていく。

曰く、今回の王選5人目の候補者が見つかった。

曰く、王選5人目の人物は当アストレア家がバックアップしていく事。

事前に聞いていた通りの分かりきっている内容である。

スバルはそんな発表よりも、この場にエミリアとラムが居ないことが気になり始めた。

「……エミリアさんとラムは？」

「さあな。ラインハルトとフェルトもまだ出てきてないとなると……もしかしてこの後」

小さな声で問いかけるスバルに、腕を組みながら執事の言葉に聞き入るカリオストロ。

スバルと違って、彼女は何かしら想像がついているのか慌てた様子は見せていない。

果たしてどこに消えてしまったのだ、と疑問と不安を浮かべる中――次の老執事の言葉が耳に入り、彼の疑問は解消することとなる。

「さて。今回の催しに際し快く駆けつけて下さったご来賓の方を紹介させていただきます。

同じく今回の王選候補者のお1人であらせませすお方――ロズワール・L・メイザース辺境伯が推薦しますはエミリア様。でございます」

エミリアが壇上にあらわれたのだ。

ラムを後ろに控えた彼女は物怖じ一つせずに（緊張はしているが）紹介されるがままに中央に移動していく。

壇上に集中する光のせい、全身を白と銀の装いで整えた彼女は更にきらびやかに見え、強調された美貌に誰もが声を漏らす。

……だが、漏らしたのは感嘆の息だけではない。一部のどよめきの声はその証だった。

やはり銀髪のハーフエルフというだけで忌避感が強いのだろう。珍しい物を見るような、それでいて嫌悪の混じる視線もそこには含まれていた。

しかし、そんな心無い視線を浴びながらも彼女はただニコリと笑みを浮かべて小さくお辞儀をやり切る。

スバルはエミリアへ悪意を向ける皆に怒りを覚えながらも、

そんな悪意さえ跳ね除けてやり切る彼女の行動に、何故か小さく感動を覚えていた。

対してそんな事を微塵も考えていないカリオストロは彼らの狙いを理解して小さく鼻を鳴らした。ここでエミリアを呼ぶ理由——それは王選開始前に二陣営でタッグを組もうという魂胆なのは間違いなかった。

方や『銀髪ハーフエルフ』、方や『貧民街生まれの元盗賊』というお世辞にもあまり褒められた出自の二人ではないものの、反面二人のバックは非常に強力なものだ。ロズワールは王国一の宮廷魔術士。ラインハルトに至ってははルグニカイや世界一の剣士だ。家筋や財政は二つとも連綿と続く物であれば弱い訳ではない。手を組めば他陣営にしてみれば決して侮れない勢力になるのは間違いがなかった。

お辞儀が終わった後、執事はエミリアの簡単な説明を行い、そしていよいよ主役が登場する。

「そして今回、我々が王に立てるお方を紹介いたします。——フェルト様、でございます」

老執事の声がホールに響くと同時に、舞台の側面から鮮やかな黄色のロングドレスを身に纏った少女が現れる。そして晒された顔は間違えようがない、あの盗品蔵で別れたつきりの盗賊の少女フェルトそのものだった。

以前の荒んだ目はそのままに、くすんだ金髪も汚れた服装も全て一新され、化粧に様々な装飾品で彩られた彼女は控えめに言っても美少女であるという事には違いなく。スバルも少し目を見張る程であっ

た。(尚、カリオストロはオレ様の方が可愛いと考えていた)

だが、そんな見麗しきに対して彼女の動きは……少したどたどしかった。

単純にドレスというものが着慣れないのだろう。その顔には余裕が無く、いや、余裕が無いというよりかは不機嫌を露わにしていた。

……そんな彼女の様子を一顧だにせず涼しい顔で後ろからついてくるのはラインハルトである。その歩き姿は堂に入っていると言ってもよく、参加者もフェルトよりも見目と作法の整った彼に見入ってしまった。

やがて壇上でエミリアの横に立ったフェルトを置いて、ラインハルトが中央に進み出て話始めた。

「本日はお集まりいただき誠にありがとうございます。」

アストレア家当代剣聖、ラインハルト・ヴァン・アストレアです」  
そうしてラインハルトは今回の経緯を説明し始める。

エミリアが腸狩りと対峙したこと。その際にフェルトに出会ったこと。

そして偶然フェルトが徽章を触れる機会があつて、その際に適合者である事が発覚したことを。

あたかも徽章が盗まれなかつたようにも、またエミリアが1人で腸狩りを倒したようにも取れる発言だ。やはり徽章を盗まれた、また盗んだのがフェルトだという心象を下げるような事実は伏せたいのだろう。

流石に浮浪児を王に立てるといふ言葉に一部の参加者が驚きの声を出す。ラインハルトの言の前にまた静けさを取り戻す。金色の髪と紅の双眸これは、ルグニカ王家の血筋の特徴に他ならないと説き伏せ。

ラインハルトは更に続ける。これは言うならば運命であると。

王になれと唐突に申し付けられた彼女の困惑も理解出来るが、必ず理解して貰い、共に歩み、民のために王となつてもらおうと。

そしてエミリアとは一時的に歩調を合わせて、厳しい王選を勝ち抜いていくと。

上記の内容を理的に、そして一切のどもりも停滞もなく。分かりやすく、抑揚を込めて聞き心地の良いトーク力で参加者に説明していく。参加者もそんなラインハルトの話術の前では何度も頷き、同調していくしかなかった。

「——さて、私だけ話すというのではフェルト様にお越しいただいた意味がない。

フェルト様、良ければお一言だけでも」

「……」

そして話がひと段落すれば、腕を組んで不機嫌そうにしていたフェルトに白羽の矢が立つ。

フェルトは文句こそないものの、チツと舌打ちして足早にラインハルトの変わりに中央に立ち、一言。

「……一言だけってんなら本当に一言だけ言わせて貰うけどよ。

アタシは王になるつもりはねえ。

仮に王になったとしたら、お前ら貴族どもは全員苦しむことになるだろーよ」

以上だ、と投げやりに言ってフェルトは元の位置に戻っていく。

そのあまりの大胆すぎる発言に、スバルも、カリオストロも、エミリアも、ラムも、そして参加者達全員が目を見黒させざるを得なかった。

直後、静聴していた参加者達が大きくどよめき始める。

どういう事だ、なんだあの娘は。本当にあの娘は候補者なのか？

アストレア家は何を考えているのだと口々に話し合う人々。スバルはそんな事知ったことじゃあないと顔を横に背けているフェルトを見て苦笑した。あいつやりやがったな。と。

だがそんな騒ぎは拍手によって一瞬の静けさを取り戻す。

「フェルト様、ありがとうございます。」

王にならない、と言う発言はさておきまして、刺激的ではありませんが我々もフェルト様の意思に付き従う次第です」

ラインハルトである。微笑を浮かべながらそのような事を述べる彼に、参加者は一様に「狂ったのか」と疑問を呈し始める。事の発端のフェルトも同感である、何言っただコイツと言う呆れ顔で彼を見るのだが、その彼は一同に浮かんだ疑問に畳み掛けるように話を続けていく。

「少しフェルト様のお言葉が足りなかったようですので説明致しますよう。」

先程も言いましたがフェルト様は幼少を貧民街で過ごしおられ、幼い頃から食事も満足に取れず、またひとつのパンを隣人と奪い合うような険しい毎日を送ることに辟易なさっておいででした。

そうした貧しい者達が居る一方で、貴族は毎日何不自由なく食事をすることが出来、またメニューの選り好みすら出来るのです。

更に不自由は食事だけではありません。出自が貧民街と言うだけで不当に虐げられる……そのような差別が残念ながら我らが誇る王国では横行しています。例えば差別が悪しき風習だという考えがあつても、今尚」

そしてそれはエミリア様も同じ気持ちだと、ラインハルトがエミリアへ目配せすれば、彼女もこくりと頷く。

「今この場に居る方々もお二方に何か思うところはあると思われま

す。ただそれを弾劾するつもりは全くありません。

何故ならば我々はそのような悪しき風潮の中で育ち、その風潮が心の中に根付いてしまっているからです。——故にフェルト様はこう仰られているのです。そのような差別を根本から消してしまえと」

大きく手を広げて説明を続けるラインハルト。

聴衆はその言葉に魅了されているかのように、夢中になって彼を見ていた。

「……はい？」

何でそこまで大きな話になってるんだ、とフェルトだけ混乱の極みだったが。

「ちよ——」

「貧民だから、獣人であるから、ハーフであるから。」

だからどうしたと言うのです。それらの種族も内包するのが我がルグニカ王国です。

不当を受ける者などあつてはならない、等しく臣民であるならば皆が皆幸せでなければならぬ。

差別をなくすことは、皆が一丸となつていくこと。そしてソレは今後の王国を脅かす脅威すらも解決していくことでしょう」

「お、おい」

「だがそれを為すのは誰か？」

それは王の力ではありません。王は極論で言えば命ずるだけです。

実際に命令を成し遂げるのはひとえに民の力であり——そして貴族の力なのです。

人より立ち位置の違う我々貴族は率先的に国を憂う存在でなければならぬ筈です」

「待てライ」

「その時、一番割を食うのは——当然ながら貴族でしょう。」

だが我々貴族の下では数多の民が今も尚苦しんでいる。

我々は国が一番重要視するものを守らねばならないのです。

お忘れではないと思いますが、国にとって一番大事なもの——それは臣民です！」

「おいって!!」

熱を帯びた演説めいた説明に食い入る参加者には、既にフェルトの声は聞こえていないようだ。

フェルトはその状態に違和感を覚えると共に、何か不味い事になると感じた。取り返しがつかなくなる、そう思えて仕方がないのだ。だから止めなければ、そう思つて声を荒らげるが……一向に効き目はなく。

「フェルト様を王にする——それは確かに貴族には大きな打撃を受けるかもしれませんが。」

我々にも苦難の道が待ち受けているのは間違いありません。

だが真に国を憂うのであれば、そんなフェルト様の選択こそが正し



いと気付くでしょう！

王選開始2ヶ月前、幸いにもエミリア様と共同歩調を取れることは非常に僥倖でした、二人を支援し、このルグニカ王国を新しく生まれ変わらせましょう——!!」

言い切った途端に会場から割れんばかりの拍手が響き渡った。

エミリアもラムも、スバルも。参加者達も、そしてカリオストロも何故かその言葉に導かれるように心をひとつにしていた、そうせざるを得ないほど熱の籠った、素晴らしい演説であったと皆が感じていた。

そんな彼らの中ではフェルトは破天荒ではあるものの、その勝ち気さで差別撤廃を目指す王様候補と言うイメージが定着してしまったのだった。

「んだあああああ——ツ!!!」

拍手の海の中で、フェルトの嘆き声だけが悲しく飲まれていった。

### 第三十六話 絶対に王様になんかならない!

「本日は改めてお疲れ様でしたエミリア様、フェルト様……おっと、何をなさるのです」

「~~~~~っ!!」

パーティ終了後、一室に集まったスバル一行とラインハルトとフェルト。

ラインハルトの演説によりあれよあれよと王候補者に擬似的に仕立て上げられたフェルトは、それはもう納得がいかないと演説直後に何度もラインハルトに抗議（暴力）を振るうが、暖簾に腕押しするが如くいなされて不発。言葉での説得も「王国の繁栄のためならば」と全く通じない。

であれば観客に自分が如何に王に不向きか、やる気がないかと伝えようとして行ったものの、直後ラインハルトに拉致されて舞台袖へとフェードアウト、印象を巻き返すことも出来ずにパーティは終わってしまったのだった。

当然ながら彼女の怒りは未だ収まっていない。

壮麗なドレスを翻してのハイキックはラインハルトの手によって事も無げに止められてしまう。

片足立ちのような姿勢になった彼女は未だ張本人を睨んでやまず、不安定な姿勢から軸足を使って更に蹴りを飛ばすがそちらも止められ、落ちそうになった体はふわりと抱きかかえられ、赤面しながら降ろせと喚く羽目になっていた。

彼女のために拵こしらえたであろう皺ひとつないドレスは先程からの彼女の動きにより幾ばくかの皺が出来ているのに違いないだろう、拵えた側も不憫な、とそんな二人のやり取りを見てラムは内心で同情をしていた。

「乗せられちゃった俺達も俺達だけど……王様も悪くないんじゃないか?」

「私はてつきりフェルトが本気で王様になり来ると思っちゃった。

でも、フェルトが掲げた理念は私も素晴らしいと思うわよ?」

そう言うことなら私も競う側にはなるけど、陰ながら応援とかするんだから」

「おいにーちゃん、それにねーちゃんは違うからな!？」

あれはただムカツク貴族共を全員貧民レベルまで叩き落としたいから言っただけで、そんな深い意味まではねーから!」

がーっ!とエミリアにまくし立てるフェルト。

しかしあの演説の時は確かにその考えが素晴らしいもので、フェルトがまるで王への道を目指すつもりがあるように皆が感じてしまっていた。その内のひとり、カリオストロもあれは一体何だったんだ、と思っていると次のフェルトの言葉でその答えがわかった。

「こいつはあたしを監禁して以降ずーっとこんな感じなんだよ。

いやだっつっても絶対に首を振らないし、ここから出せっつっても出してくんねーし……。」

……さっきの演説だつてそうだ、皆の様子を見るにどーせ加護使つたんだろ?」

「私はフェルト様のお気持ちを代弁しただけです。

多少、気持ちが伝わるようにと加護を使ったのは間違いではありませんが」

「……加護?」

ラインハルトの返答に対して一同の視線が集まると、本人は多少苦笑しながら種明かしをしてくれた。

「今回は『扇動の加護』、と言うものを使わせていただきました。

力の内容としましてはより自分が話した内容にいくばくかの説得力を加えてくれる力です」

「騎士としての力だけでなく加護は内政特化かよ……つてかそれズリーだろ!？」

——あたあっ!？」

「スバルは、口を、慎み、なさい。

持っている力を使って何が悪いというの。

持ってない力を妬むくらいなら自分でその力を得る努力をしなさい」

ラムがスバルの頭を何度も引つ叩き、その様子を見てエミリアが苦笑。カリオストロもここにこ笑いながら内心で同意した。

持っている力は活用出来る時に活用するのが普通。

死蔵して負けるより、使用して勝つ方が何十倍もいいに決まっている。

ただ本人の意志を無視するのは如何なものかと思わなくもないが。

「いや、加護は努力しても得られねーだろメイドのねえちゃん。

つつかにーちゃんがズルって言い出すのも仕方ないと思うぜコイツ。なにせ」

ラインハルトへの攻撃の無意味さを悟ったフェルトはドレスを翻しながらどかっと、乱暴にソファに座り込んでこう続けた。

「なにせこいつ、欲しい加護はその場で取得しやがるからな」

「……………」

思わず声を出したのはカリオストロである。

今、こいつは何を言った？ 欲しい加護はその場で取得出来る？

何なのだその理不尽さは。

内心の思いは皆一致しているのだろう。一同の視線は再びラインハルトへと集中。当の本人は複数の視線に晒されれば苦笑をしていた。

「待て。待て待て待て…………オレ様が知ってる知識の中じゃ、加護って結構珍しいものだよな？」

「…………何だよその口調、さっきまでと全然違うじゃねーか」

「ふむ。僕自身もカリオストロの話し方は初めてだね。

どこかフェルト様と似た感じがしなくもないが」

「あなた達が求めるならこつちの話し方でもいいけどねっ☆ ——つてそう言うのはどうでもいいんだよ。加護つてのは百人に一人与えられ、希少性によつては万人に一人、複数の加護なら更に希少になる先天的な力の筈だ。それを自由自在に取得出来るつつーのはどういう事だ？」

「自分も深く理解している訳ではないので説明をするのには憚られるね。

ただ言えるとしたら『自分は龍の意志に応える者であり、正義の体現者であるから』。だろ」

フェルト様。代弁ありがとうございます」

「答えになってねーっの、加護人間が。」

最初に聞いた時は卒倒するかと思っただ、百くらい加護持つてんだろお前」

「必要に駆られて取得しただけです」

「ひゃ、ひゃく?」

フェルトの言葉には最早絶句する他ない。精々が一時的に加護をレンタルするような形で取得するものかと思えば取得しっ放しだと言うのだ。

何という異常性。何というチート。スバルなどすぐ隣で「本来ならこういう加護を俺が取得するべきだったんだよ……!」と嘆いている。まあ知った事ではない。

「剣聖って凄いのね……」

「凄いつてレベルじゃなくないか? 実質的な無敵だろ」

「……まあこいつがおかしいのは今更、そんな事よりだ。」

にーちゃんにそのねーちゃんは久々だな、腹ぶった切られて以降元氣してやがったか?」

フェルトがソファの上で片足を脚の上に乗せ、その上で頬杖を突くと言う、仮にも淑女が取るべきではない姿勢でスバルへとフランクに投げかけると、対面のスバルも同じくフランクに返した。

「おう、フェルトも久々だな。腹の傷以外にも色々増えたけど何とか生き残ってる。」

フェルトもすっかり垢抜けたっていうか……変わってないっていうか」

「身の回りの事以外何も変わってねーよ。この服については……言うな。」

ラインハルトの野郎、あたしのいつもの服をどっかに隠しちまうんだよ。それで代わりにドレスだけ置いて来るって言う」

「……メチャクチャ強引だな!」

「だろ!? 分かるだろ!」

ぱしんつと膝を叩いて同意を求めるフェルトに、スバルも頷き返す。

直後におい、説得は何処言つたと呆れた目でカリオストロが睨めば、スバルはやばいと慌て始めていたが時既に遅し。援護を得たフェルトは振り返り後ろに立つラインハルトを見るが、そちらはただ沈黙を貫き何も言わず。

「だから強引だつつつてんだろーが、そんなやり方じゃ幾らアタシだつて乗り気になんねーぞ?」

「全ては王国の「繁栄のためだろ、聞き飽きたつーの! アタシの意志はどうしたつて言うんだよ!」

——多少の意志は捻じ曲げる必要もあるでしょう。あくまで必要とあれば、が付きますが」

ふかーっ! と子猫のように怒りを撒き散らすフェルトだが立板に水の如し、ラインハルトは動じないようだ。ただ溜まっていた怒りをぶつける事が出来て少し溜飲は下がったが、そんな事よりカリオストロにも彼女は声をかけてきた。

「そっちのねーちゃんもだな、あれからそのにーちゃんと一緒にエミリアの所で過ごしてたんだっけか?」

「カリオストロでいーよ☆ うん、そんな感じ☆

ちよつとスバルが頼りなさすぎて、泣く泣くついていくしかなかったと言うか☆

「えっ、な、泣く泣くだったの……?」

「エミリアたん冗談、冗談だからガチシヨック受けちゃ駄目だつて。

……ちなみに聞くけど、冗談だよな?」

「スバルが頼りなさすぎるつてのは本当かなっ☆」

「ぐうの音もでねえ!」

「どこの漫才だよお前ら、面白いからいーけどよ。つてか口調、別に取り繕う必要ねーからな?」

「えーでもこつちの方が可愛いでしょっ☆」

「さっきのマジ声聞いた今じゃ不気味にしか思えねーよ!」

ほつと胸を撫で下ろすエミリアと頭を抱えるスバル、不気味と言われたカリオストロが少しシヨックを受けるといふその対比が面白くてフェルトは笑う。こう言うやり取りに飢えていたのだろう、以前よ彼女のトークは軽快になっていた。

「言うに事書いてクソガキに不気味って言われるとはな……！」

はっ、だがオレ様の方が遥かに可愛いのは覆しようがない事実だとは言っておくぞ！」

「言ってるてめーもガキじゃねーか。」

あーもーこじれるから突つかかってくんなくて、リラックスしろよカリオストロ」

「んがっ……！こ、この……っ」

「……カリオストロって時々『カワイイ』を軸にして話だすよな」

「もう、喧嘩しちや駄目よ二人共。」

カリオストロがすごく可愛いのは私がかかってるわ、だから、ね？」

カリオストロの横に座っているエミリアがとりなし、渋々彼女は落ち着きを取り戻す。

それを見てエミリアが話を繋げていく。

「本来はあの時命を助けて貰った分の恩を屋敷でお返ししてあげるつもりだったけど……スバルとカリオストロの二人には来てもらってからも助けて貰っちゃたから、返す恩が全然見つからないのよね」

「だからあの屋敷に置いて貰って、エミリアさんの近くに居るだけで十二分に助かってるって！」

「カリオストロは衣食住の提供もあるし、欲しい情報が手に入るから現状文句は無いけどね☆ 何かあったら考えるかもしれないけど☆」

「ほら、こんな感じだもの」

「へー、何か色々あったんだな。まあ色々あったってんならあたしも負けてねーけどさ」

さほどの興味も持たなかったのか、それとも自身の苦境を語りたのか。フェルトは自分の境遇を一行に話始める。あの時に拉致さ

れて目を覚ましたら、見たことも入ったこともない豪華な部屋でベッドの上で寝間着姿だったと。ベッドも寝間着も初めて過ぎて混乱したと。目覚めたタイミングでラインハルトに出会って、王様候補になってもらいますといきなりの宣告を受けたと。何度拒否しても頑なに拒むラインハルト。逃げ出そうとしても先回りされる始末で、この一ヶ月余りは居心地の悪い日々だったらしい。

「上等な服、暖かいベッド、美味しい食事。あと湯船とかな。確かにどれもいーもんだよ。」

一回使つちまえばもう離れられないってくらい病みつきになりそうだった。

でもな、いきなりこんなの与えられて王様になりたいかっていや、そんなのお断りだね。」

教養もクソもないただの貧民街のガキんちよに王様になれって、普通言うか？ それも徽章が光ったから？ 金髪に紅い瞳だから？ 頭おかしいだろ。」

あたしよりも優秀なやつは腐るほど居るんだからそいつ据えれば終わりの話だろ、全く。第一あたしはこの国の民を救おう、幸せにしようなんて気はさらさらねーよ。むしろ一回ぶっ壊れろって思うね！ ——おい、聞いているかラインハルト？ いい加減あたしを解放しろってーの！」

「……」

現状の不満が出るわ出るわ。相当溜め込んでいたらしく、その愚痴は止まる事がない。そんな彼女の怒涛のラツシュにさしもの一行も相槌を売つたり、苦笑いを浮かべる事しか出来ない。ラインハルトもさんざつばらぶつけられたが揺れることなくただ目を瞑ることを続けていた。

「都合悪いとだんまり決めやがって……つたく。」

それによお……ロム爺はまだ見つからねーのか？」

「老人に関しては、未だ」

「……ロム爺？ つてあの時のでっかい爺さんか？」

スバルが疑問を呈すると、フェルトがああ、と頷く。



「流石に忘れちゃいねーだろ、あんなでっかいジジイはよ。」

ロム爺は……あいつはあたしが拉致された後に気づけば消えてたんだとよ。

——あたしはてつきりラインハルトが口封じでアイツを殺したのか、と思つた」

「龍に誓つてそのような事は致していませんフェルト様。」

かのご老人は我々が手厚く保護をし、今回の騒動の迷惑料として幾ばくかの報酬をお渡ししたのですが」

「だからそんな事すれば誰だつてキレるつってんだろーがよ！

仮にも親ぞ……友人攫つといて、はいお金あげるから諦めてなんて言つて何処の世界に諦めるやつがいる!？」

それは確かに納得が行かないだろう、とエミリアもスバルも、カリオストロでさえも頷いた。

殺して居ないのであればきつとどこかに潜伏しているのだろうが、一体何のために潜伏をしているのだろうか。その謎も本人が居ないことには分かりようがない。

「言つとくが、ロム爺の安否が確認されない限りは絶対に。ぜつつつたいにだ、どんな理由があろうとも何が何でも王様なんか目指さねえからな」

「それは、かのご老人が見つければ王様になると?」

「都合よく解釈するんじゃないやねえ! そう言う所があたしは嫌いなんだよ!!」

ばんつ、とソファの前にある机を叩いてフェルトが吠えた。

背後に居るラインハルトへ向ける感情は怒りよりも憎悪が勝る程で、室内の空気は一気に陰悪な物へと移りつつあった。

流石にこの状況はまずい、とスバルが話題を別の方向へと舵取りする。

「あ、あく〜、そ、そうだそうだラインハルト!

ちよつと気になったことがあつてさ、リツケルト……えーつと、リツケルト・ホフマンつて知つてるか?」

話題を振られたラインハルトは彼の質問に初めて表情を崩す。

「何故唐突にその名前が出るのかが、真剣に理解出来ないようだ。」

「よもやスバルの口からかの方の名前が出るとは思わなかったね。」

リツケルト氏はルグニカ王国の文官さ。確かに今回招待状をお送りした方だが……それがどうしたのかい？」

「いや、なんつーか今日その人に絡まれてさ。どういう人なのか知りたいうて言うか……失礼な事言うかもだけど、滅茶苦茶薄気味が悪くてさ……」

「……彼に絡まれた？ 少々苛烈なお方ではあるが、誰にでも絡むよいうなお方ではない筈だ。それに、かのお方とは何度かお会いしたことはあるが薄気味が悪いという印象を覚えた事はないね」

「男が趣味なんじゃねーのか？ にーちゃんモテて良かったな」

「よくねーよ！ だったら尚更怖いわ!?!」

「まあそう言う漫才は兎も角として、薄気味悪さはカリオストロも感じたよっ☆

実際にスバルが絡まれた所も……その人はスバルが此処に居ることを疑問視してみたみたいっ☆」

「ふむ……」

カリオストロの援護射撃を受けてスバルの言葉に信憑性が増したのか、ラインハルトが少し思案する。そうして数瞬の思考の後に軽く二回手を叩けば、幾ばくの間もなく来賓室を開けて老執事が入ってきた。

「お呼びでしょうかラインハルト様」

「リツケルト氏は今夜こちらにお泊りになつて居るかい？」

「リツケルト様は……いいえ、既にお帰りになりました。」

「何やら明日の仕事が溜まっているとの事でしたか」

「そうか、ありがとう」

老執事は深々とお辞儀をして退室していった。

「今日いらっしやるなら直接話を、と思ったがそれも行かなかつたようだね。」

さて、繰り言にはなるが彼に関しては僕からはそのような印象を受けた覚えはないね、今日は最終的にお会いすることもなかつたが……

また今度彼に直接会ってみるとしよう」

「ああ、まあ今後会うことは正直ないかもだけど、そこんところよろしく頼むぜ」

「ねえカリオストロ、男が趣味ってどういう事なの？ 性別って趣味に出来るのかしら……」

「それはねっ、エミリア☆ リツケルトさんはあ、スバルの事を——」  
「そこやめて！ エミリアたん絶対誤解するから！ 誤解するから！」

そうして面々の話は気づけば終わりを迎え、夜も遅いとラインハルトは一行を客室へと案内。

一行は宛てがわれた客室で一泊を過ごすことになったのだった。

§ § §

小鳥のさえずり音が窓越しから聞こえてくる。

カリオストロはその音、というよりは自身は自身の体内時計に従ってすくっと目を覚ますと、すぐ隣のベッドでだらしなくも布団からはみ出して眠っているスバルを見て、はあ、とため息をついた。

何となく、朝を迎える度に彼が生きている事を確認するのが日課になってしまっているな、と思いつつながら、ベッドがら起き上がったカリオストロはまずスバルに布団をかけなおすと、少し乱れた髪を部屋内のドレッサーに向かってせっせと櫛で直していく。

窓から差し込む光を見れば、今日も昨日に引き続き快晴なのが見て取れた。

さて、昨日は聞けなかったが今日こそラインハルトに魔獣の話聞いてやろうと意気込みを新たにすると、こんこん、と扉をノックする音と共にエミリアの声が飛び込んできた。

「カリオストロ、スバル、起きてる？ ……ちよつと問題が起きたの」  
「——問題？」

何が起きたのだ、と整える手を止めるとカリオストロは扉を開けて

エミリアを招き入れる。

すると彼女は起こしてごめんね、といったん断りを入れた上で事情を説明しだした。

「私達、急遽領地に戻る必要が出来たみたいなの」

「……うん？ お前たちはフェリスとか言うのに会いに行くんじゃないのか？」

「そのつもりだったんだけど、朝起きたら私宛に手紙が来てたの。」

宛先人は……ロズワールからの物で、内容は『エミリア様はすぐに屋敷に戻られたし』だって」

「……。内容、それだけなのか？」

どう見ても罨にしか思えないような内容だ。まさか差出人がロズワールだから帰るつもりなのか、とカリオストロがじろりとエミリアを見ると、彼女は少し慌てながら弁明しだす。

「も、勿論私も最初は怪しんだわ。」

普通、戻るにしてもちゃんと理由は書く筈だし……それにタイミング的にも急だし。

でもね、ラムがこう言うのよ。『これはロズワール様の筆跡だ』って」

「……」

筆跡は確かに人の癖が出やすく、個人の判断に最適な物ではある。だがその筆跡だって真似出来ない訳ではない。

カリオストロはそのことを伝えたが、エミリアは首を振る。

彼女もその事を伝えたらしいが側で何十何百ものロズワールの筆跡を見たラムが間違いようがないと断言を繰り返すのだ。それに、その手紙には決定的な証拠があった。

「封蝋もメイザース家が使用している物そのものなの」

「封蝋か……ふん、開封するまで破られてなかったか？」

「うん」

封蝋は手紙の差出人の証明と、機密性を立証するには最も良い技術である。

封蝋のマークは偽造しづらく、また封を開ければ蝋が破れる。

筆跡と封蝋のマークが一致してるならば毘と否定もしづらい。

「だからね、何があったか分からないけど一旦帰ろうと思うわ。

もしかしたら急を要する事があったのかもしれないし……。

……それで、二人はどうする？ 一緒に帰る？」

「そうか……まあ気をつけろよ。オレ様はラインハルトに話を聞く必要があるから残るが、スバルは……どうだろうな。……おい、起きろ。気ままに寝てるんじゃないやねえ」

「んが……あと、あと5分……いでっ、いでいでいで……。

や、めろ……まだ眠いって……ふにゃんにゃ」

「……いつもより頑固な野郎だなこのっ」

「あ、も、もう良いってばかりオストロ。ちよつと可哀想よ。

本今朝も早いし、それに私達の事情だしね……昨日、お酒何杯か飲んでたせいかしら。起こすのも忍びないし、カリオストロ、スバルのことお願い出来る？」

「……ま、そうなるよな。分かった、任された。

つたく、酒の数杯程度でこんなんじゃない先が思いやられるぞ」

布団に完全にくるまって眠りこけるスバルを見てカリオストロが溜息、エミリアが苦笑した。最後まで罪悪感があったのか、結局エミリアは書き置きをする事にしたらしい。ドレッサーの上で小さくメモ書きをすると、それを置いた。

「……よし、と。それじゃあそろそろ私もこの辺りで——」

「エミリア様、竜車が整ったようですが……はあ、予想はしていたけど本当バルスはバルスね。この一大事に眠りこけるだなんて」

「仕方ないわよラム、こんなにも朝早いんだもの」

「ま、スバルらしいって事で☆ 見送っていくよ☆」

「ふふ、ありがとうカリオストロ」

睡眠を続けるスバルを置いて静かに部屋を後にした三人。早朝という事もあってか屋敷は静まり返っており、廊下を渡りやがて玄関の扉を開ければ……そこにはすでに竜車が待機していた。

竜車の準備をしていた御者が三人に気付くと、ペこりとお辞儀をして挨拶をします。

「おはようございますエミリア様、ラム様、カリオストロ様」

「おはようございます。朝早くから準備して頂き感謝します」

「とんでもございません。火急の用とあれば致し方ない事です。」

「竜車も我が屋敷で一番の早足を誇る者を用意しました」

御者は地竜を軽く撫でると、さあこちらへとエミリアとラムを席へと誘導する。二人は従うがままに座席に座り込み、そして間もなく御者は竜車に跨り、あつという間出発の時間となってしまう。

「それじゃあスバルの事、よろしくねカリオストロ」

「はいはい、道中はお気をつけてね☆」

エミリアが窓越しに手を振り、最後に言葉を交わすと竜車はゆつくりと速度を上げ、屋敷の門を抜けて出て行ってしまった。

カリオストロはその様子を最後まで見守ると、さて、と意識を切り替えて屋敷へと戻ろうとし——直後、その屋敷の扉から何者かがこちらへと走り込んできた事に感づいた。

「——はひっ、はひっ、か、カリオストロか！ え、エミリアたんは!？」

「……はあ……エミリアならついさつき帰ったぜ」

「そ、そんな……!」

ネタに尽きない男、スバルである。ついさつき起きたばかりだったのだろう。寝間着の上からジャージを羽織ったスバルの髪はぼさぼさで、全速力で走ってきたのか疲労困憊だ。彼はカリオストロの言葉を聞いて、その場でへなへなと座り込んでしまった。

「く、くそっ……エミリアたんが居ないとか俺は何を楽しみに……!」

「折角遠出したんだから遊びにでも行けばいいんじゃないか?」

「エミリアたんが居なくちゃ起きるフラグも起きないだろうがよ——っ!!」

「……あつそ」

スバルの中では色々プランがあった。王都に行くついでにエミリアと一緒に王都で散歩をしたり、エミリアのプレゼントを二人で選ぶあったり、エミリアと一緒に食事をしたり、カリオストロと一緒に遊びに行ったり。だがエミリアなき今では大半のプランは実行することが不可能である。

そんな彼の心情など知ったことかと呆れ声を出したカリオストロは「先に戻る、お前も早く戻って着替えろよ」と言い含めると非情にも（当然だが）彼を置いて戻ってしまった。

置いていかれて尚ああどうするべきか、としばらく深い嘆きに包まれうなだれていたスバルだが——彼もまた何か遠方から近づく音にその頭を上げる。

「なんだ……う？」

竜車である。幌屋根の大きなカゴを引き連れたそれは3台が連なつてこちらに向かつてきていた。

こんな早朝に一体何をしに来たのだろうか、と思つていると何やら幌にいろいろな物が乗っているのか、がちやがちやと振動につられて音を立てる竜車がスバル目の前で止まる。

「お早うございます、ホーシン商会です。ご注文の品をお届けに参りました！」

えつと、貴方が受取人という事で……はないですよね」

「……はい」

どうやら荷物を宅配しに来た商人だったようだ。

目の前の壮年の男性はスバルの格好で目当ての相手ではないと分かるど困った顔をしていたが、背後から遅れてあの老執事が現れた。

「遅れてすみません、お早うございます。」

……おや、スバル様もお早うございます。如何なされましたか？」

「あ、はい、おはようございます……えーつと俺はエミリアた……エミリアの送り迎えを」

「成る程。何か火急のようがあるとおっしゃっていましたからね。」

……さて、申し訳ありませんが私はこれから仕事があるため、これで。

早朝でその格好は体が冷えてしまいますよ、朝食はあと30分もすれば出来上がるようですし、屋敷に戻ることをお勧め致します」

「ど、どうも……あーでも着替えとかもすぐ終わるんで、もしよければ見ててもいいですか？」

「勿論でございます。老骨の働く姿で良ければ」

ニコリ、と微笑み返すその表情は安心出来る印象があった。

許しを得たスバルは改めて商人と話し始めた老執事……ではなく、竜車とその幌馬車を注目し始める。普段雑事を担当していたせいも、それとも帰来の好奇心のせいも。恐らく後者だろうがスバルはラインハルトの家運び込まれた物を確認したするために籠の中を覗き込む。

中には様々な箱や、武器。樽が色々と詰め込まれていた。……さん、と匂いを嗅げばどこか土の香りや甘い香りがしてくる分、食料品が主な物のようだ。

「……おっと」

次の幌を見てみれば、人も乗り込んでいたようだ。

丁度目の前で降りてきた人を切欠に、他の馬車からも数人が降りては籠に積まれた荷物をどんだん荷卸しては屋敷へと運び込んでいく。スバルはそんな彼らに挨拶をして労っては、その様子をまんじりと見守っていく。

大小様々な箱はあつという間に運ばれていく様は、普段の自分の仕事を考えると中々壯観である。

特にあの焼けた肌の筋骨隆々の巨体を持つ人物だ。深く帽子を被っているその人物の効率是他の荷卸人と違って高いものだ。スバルは頷く。複数の大きな木箱を一片に持って尚余裕があるように見える。動きもいい。

スバルとしてはその働きっぷりがどうにも気持ちが良いものなので、一言声をかけたくなくなった。なので邪魔と知っていても荷物を取りにまた幌へと戻ってきた人物へと近づいた。

「お勤めご苦労様です、凄い力で正直尊敬するぜお兄さん」

「お兄さんという年ではないわい、こう見えて儂はもう老いぼれも老いぼれ……あん、この声？」

「え？ あれ、この声」

「……貴様、あの時の小僧か？」

「ロム爺……？」



——そこには昨日話題にあがったフェルトの親族(?)である、ロム爺の姿があつた。

### 第三十七話 歩み寄る悪意

「お、おおおおロム爺お前一体どこに……もがつ!？」

荷卸人がロム爺と分かったスバルが驚きを声にしようとした瞬間、彼はロム爺の大きな手で口を抑えられ、更に瞬時に竜車の籠かごの裏まで引きずられていった。

「え、ええい……ここでその名を呼ぶでないわい……! わしがここに居る事は秘密なんじゃ……!」

「もがもが……!」

きよろきよろと辺りを伺いながら小声でスバルに語りかけるロム爺。

何故彼は存在を隠したがる? ソレが理解できないスバルは疑問を浮かべる他無い。

ただ疑問以上に自分を拘束する力が強く、考える暇もなく腕を何度もタツプする始末になり——気づいたロム爺がようやく拘束を解いた。

「む。すまん、つい力が」

「ぶはあつ! お、お前な爺さん、危うく死に掛けたぞ……!」

「お主のせいでこちらら計画がおじゃんになりかけたんじゃ、力が入るのも仕方ないと思え」

「は? 計画だ?」

「……む。いや、何でもないんじゃ」

計画という単語を聞いて、スバルは更に訝いぶかしむ。てつきり彼は心機一転して盗品を売り払う職から真つ当な職についたのかと思っていた。

だが存在を隠したがる、更に言えば『計画』と言う言葉。何かしらの狙いがあるとしたか考えられない——ここまで来れば勘の鈍いスバルといえど、ある結論に至る事が出来た。

「……爺さん、もしかして——狙いはフェルトか?」

「……」

彼の言葉を聴いてロム爺はその大きな体を大げさに跳ねさせ、そし

てすぐに顔を逸らした。

巨体に似合わぬ芸の細かさである。そう感心しながらもスバルは追及を続ける。

「はあー……、なあ爺さんフェルトにただ会いたいんだったら正門から堂々と入ればいいだろ？」

別にこそこそ隠れなくたって……」

「……………」

はあ、儂の心配を返せドアホウ。

ただ会いたいが為にこんな事する訳がなからう……しかし小僧は何故ここにおるんじゃ？」

「ちよ、フェルト目当てじゃないのかよ……いや、俺はラインハルトに招待されたんだよ。」

今回のフェルトの王選の出馬表明お披露目会に」

出馬というか、出竜というか。そんな事よりもスバルの論しにあからさまにため息をつくロム爺は、王選と聞いてぴくりとその眉をあげ、続けて不快そうな表情をした後、小さく息を吐いた。

「……奴は、どうじゃった？」

「フェルトは……かなり不機嫌だったな。昨日久しぶりにあつたけど、まあ不満たらたら。」

ラインハルトが強制的に王に仕立てあげようとしてくるって。

逃げ出すことも出来なくて、ストレスばかり溜まってるみたいだ。

お披露目会も半ば無理矢理皆にお披露目するような形で憤慨してたぞ。それに——」

「それに？」

「——フェルトは消えた爺さんの事をすごく心配してたぞ。」

どこにいったんだって。爺さんが見つからない限り絶対に王様になんかならないって」

「……フェルト……………」

スバルの言葉に、ロム爺は胸を打たれたような表情を浮かべる。

二人の関係を深く知らないスバルだが、やはり二人は並々ならぬ間

柄なのだろう。体型的に恐らく親族という訳ではないだろうが、その表情は孫を想うおじいちゃんそのものだと感じられた。

「そうか……フェルトには悪いことをしたの。」

「……それでじゃが、フェルトは王様になりたがっておったか？」

「いいや……ラインハルトの無理強いがあつてか、全く乗り気には見えなかったな」

「……じゃろうな。何が剣聖じゃ。いたいけな小娘を拉致して、無理強いさせてまで王を目指させることの何が正義じゃ」

「ぎり、と音が聞こえるほど拳を握り締めるロム爺の目にははつきりと怒りが燃えていた。」

ラインハルトには彼女が王様になってくれるよう口添えして欲しいと言われた立場であるものの、彼のやり口を鑑みるとあまり同意出来ないな、とフェルトを孫娘のように大事に想うロム爺の姿を見てスバルが再認識していると、彼は唐突にその野太い手を彼の肩に乗せて顔を近づけてきた。

「で、じゃ。フェルトは今この屋敷におるな？」

「……ま、まあ。居るな」

「お主、フェルトをここまで連れてこれるか？」

「んん？ いや、まあ出来るだろうけど……別に正面からお願ひすれば」

「どうしても二人つきりで話したい事があるんじゃ。秘密裏に」

矢継ぎ早に飛び出すロム爺の質問とお願ひに、たじたじになるスバル。

だが彼は脳内で実現可能か考え込み……それが難しいと告げる。

「いや……っていつてもな。結構ラインハルトがべつたりついてんだよな、フェルトの傍に。」

二人つきりでなおかつ秘密にってなるとそれは——」

「頼む小僧……っ！ そこを何とかお願ひしたい……っ！」

「お、おいおい……っ！」

「渋る……というより現実的に難しいと分かっているのか難色を示すと、ロム爺は何と、唐突に目の前で土下座をし始めたではないか。」

よもやそこまでされると思っていなかったスバルはたじたじになつてしまい、慌ててロム爺の肩を揺さぶる。

「わ、分かった！ 分かったから土下座なんてやめろつて、何とかしてみるから……！」

「ほ、本当か……！」

籠の陰になつているので人目には見えない位置でのものとはいえ、大の大人に土下座されることが未経験だったスバルは驚き、外聞を気にしてかきよろきよると辺りを見回しては早く起き上がってくれとロム爺へ促した。

「……二人つきりがいいんだな？ だったら……これから朝食を皆で取る手筈になつてるんだ。」

その後何とかができる……と思う」

「じゃがラインハルトはべつたりなんじやろう？ どうやって引き剥がすんじや？」

「実は俺以外にもカリオストロも招待されてるんだよ。」

カリオストロはラインハルトにある情報を聞く約束をしている。

と、同時にだ。俺もフェルトが王になつてくれるよう説得してくれてラインハルトに言われてるんだよ」

「……成る程。あの穰ちゃんも剣聖が話しておる間、その名目でフェルトと二人きりになる事が出来るんじやな？」

「そういう事」

スバルの考えにふうむ、と顎に手を当てて考え込むロム爺。

荷卸の音が続く早朝の中、少し間を置いて彼は商人の内の1人へと向つていった。

「ん？」

何故そつちに行くんだ？ とスバルがその様子を見守っていると、ロム爺と男がやり取りを始める。遠く離れてるので何を話してるかは分からないが、一体何をするのだろうかとうと眺めていると……やがてロム爺はこちらへと戻ってきて、

「1時間後、屋敷玄関前まで連れてきてくれ」

ぼん、とスバルの肩を叩いてそれだけ言うと、再び彼は荷卸の作業

に戻っていった。

スバルは肩に優しく置かれたが重さを感じるその手の感触をどこかむずがゆく思いながらも、自身も肩をすくめて屋敷へと戻るのだった。

§ § §

「おはようございますフェルト様、それにスバル、カリオストロ。よく眠れたかな？」

「ふかふかのベッドですっかり快眠できたよ☆」

「右に同じく。っつか酒入っててエミリアさんの送り迎え出来なかったぐらい眠ってたわ」

「布団も枕もふかふかすぎて気持ち悪い、もっと堅いのにしろ」

食堂にて。三者三様の挨拶が返ってくれば自然と朝食は開始される。

老執事の手によって配膳された朝食はいつもレムに作って貰う料理と遜色ないレベルのものであり、スバルもカリオストロも舌鼓を打ちながら料理を楽しんでいく。

ラインハルトのテーブルマナーは完璧。

スバルから見ても美しい所作食べる様は惚れ惚れするほど。

カリオストロのテーブルマナーもそれに次ぐモノだ。

嬉しそうに食べる様は見ただけで心が和やかになる。

対してフェルトの所作はと言うと――

「……やっぱ、フェルトはフェルトだよなーって」

「あん？ にーちゃん喧嘩売ってんのかよ」

盗品蔵で会った頃の服に着替えていた彼女のマナーは、一言で言う  
と粗野だ。

食器をガチャガチャと鳴らし、超一品の料理を味わうことなく飲み込む。

食べるというよりかはがつつく、という言葉が相応しく、その様はマナーに疎いと自負するスバルが優越感を覚えるほどのものだった。

「フェルト様。フォークを人に向けてはいけません」

「るせーよラインハルト。食事中に喧嘩売ってくる奴相手が居たら仕方ねーだろーよ。……んはぐっ、んんぐんぐ」

「別に喧嘩は売ってるつもりはないし、逆に安心はしたけどな。」

俺が一番テーブルマナー劣ってるって思ってたしき」

「はぐ、下見て安心してんじやねーよ、男なら上見やがれ……んぐ。」

……んんぐんぐ……っ、つぶは、ごっそさん」

口周りを汚しながらあつという間に平らげ、高そうなシェリーグラスの水を一気に飲み干せばもうフェルトだけ食事終了である。何と言う素早さだろうか。

「食うの早っ。ってかフェルトその服」

「ん？ ああ、今日は部屋に置いてあつたから颯爽と着替えませ」

「ドレスの方は今侍女達が仕立て中ですので、申し訳ないですが今しばらくはその服装で我慢を」

「我慢なんてしてねえからずつとこの服にさせろ。」

ドレスとかはひらひらして動きにくいったらありやしないんだよ」  
食べ終わると机に肘をつけてぶーたれるフェルトに、ラインハルトは苦笑するだけ。どうやらそんなつもりはさらさらないらしいのが見て取れた。そんな二人のやり取りの間も静かに食事を楽しんでいたカリオストロも、フェルトに遅れて食事を終わらせる。

「ごちそうさまでした☆」

「カリオストロも大分早いな！」

「会話よりも食事に集中していたらこのくらいだつてば☆

そんな事よりもラインハルト、この後空いてる？ あの話つてできる？」

「勿論だともカリオストロ。その事についてはロズワール様にもお願いいされているからね。」

と、言っても目撃情報というだけなので心苦しいが」

「十分☆ 手がかりがあるだけでカリオストロ的にはすごく助かったちゃうもの☆」

「……昨日の事があると、やっぱりねーちゃんの話し方に違和感感じる

な」

「俺はもう慣れた」

「そこ、何の話をしてるのかなっ☆」

なーんにも、と口を揃えるスバルとフェルトの息はびったりだ。

カリオストロは可愛らしくぶんすか☆と怒りだせば、少し雰囲気  
和やかになる。

そんな中フェルトが「あ」と声を出せば、思い出したかのようにス  
バルへと声をかけた。

「なあ兄ちゃん。ほら」

「え？　——うわっど!？」

机を挟んだスバルに向けて声と共に何か投げつけられ、スバルは  
驚きソレを受け取る。

一体何を投げつけられたと掌サイズのものを見れば、そこには――

「……ケータイ?？」

「ああ、もうあたしにはそのミーティアは不要だと思ってな」

異世界に来てから久しく見てない現代の物、スバルが持ち込んだ  
『ガラケー』がその手にあり、彼はどこか懐かしさを覚えながらそれを  
手の中で弄び、確かめ始める。

「いや、別に返さなくていいんだぜフェルト？　もうお前にあげたも  
のだしさ」

「そう言ってくれるのは嬉しいけどさ、鳥かご状態のあたしじゃ使い  
道も見当たらないんだよ。

兄ちゃんの優しさを突っ返すようで悪いけど、丁度兄ちゃんと出会  
えたし返させてくれ。あん時はその、助かったぜ。ありがとな」

「フェルト……」

勿論ねえちゃんもありがとな、とカリオストロへも礼を言うフェル  
ト。

貧民街出身も相まって義理に厚いのだろうか。彼女のお礼を受け  
てスバルは胸を熱くする。

先程約束を交しても内心は秘密裏にロム爺に合わせる事を迷って  
いたが、やはり彼女の為にも引き合わせてあげようと心に決めたスバ



ルは、ケータイを開いて確かめながらお返しにとフェルトへと切り出そうとし——驚く。

「え？ あれ？ んんっ？ 何でまだケータイ動くんだった!」

スバルが開いた携帯電話だが、ぱかりと中を開けばぼちりと動いていたのである。

何故か充電残量もMAX。幾らガラケーの燃費の良さがあつたとしても、一ヶ月も無充電なら流石に電池切れになつてる筈だった。そんなスバルの動揺を見て、フェルトがにやりと笑った。

「それな。あたしも時々それで遊んでただけど途中で動かなくなつたのは驚いたぞ。壊しちゃつたのかつて思った。それでラインハルトに調べて貰つて、魔力で動いてる訳でもないつてのが一番驚いたけどさ」

「僕自身もそのような代物は始めてみたよ。」

魔道具に詳しい人も呼び寄せてみて貰つたが、結果としてはどう言う風に作られているかも不明。仕方がないので僕が無理矢理治させて貰つたよ」

「む、無理矢理……？ まさか」

『復元の加護』を取得してね」

最早スバルには加護の力つてすげー、というため息しか出ない。

その加護があれば異世界で充電切れに怯える必要もなくなるのだ。(その為にはラインハルトが必要という但し書きがつくが) 同じ気持ちに至っているのかどうかは分からないが、ラインハルトの無茶苦茶っぷりにカリオストロまでもがため息をついた。

「それで何とかなつちやうのがびっくりだよね☆」

「……僕としては直つて良かったという感想が欲しかったところだね」

「いや、思わなくもないけどやっぱりラインハルトつてすげーつていう感想の方が大きいわ」

「アタシもこの時ばかりはラインハルトやるじゃんつて思ったな」

まあ現状お前の評価は総合的にマイナスだけどよ、と言い含める辺りラインハルトへの風当たりがやたらと強く、彼は肩をすくめること

しかできない。

「つてケータイに驚きすぎて言い忘れちゃったじゃねーか。

あーフェルト、この後時間あるか？」

「あ？ あたしにか？ まああたしとしてはクソみたいな勉強の時間とかが潰れるんなら万々歳だけだよ。……つつーかにーちゃんが改まってあたしになんだってんだ？」

「フェルト様……」

珍しくはあ……と溜息をつくラインハルトは、スバルがちらりと目配せすると察してくれたのかこくりと頷いた。どうやら昨日の約束を履行してくれると考えてくれていたようだ。

「まあちよーつとした雑談みたいなもんだ。

色々と近況含めてしゃべくりみたいなの？」

「んだよ、それなら改まる必要もないだろうーがよ……ま、あたしは構わねーぜ」

「オツケー。じゃあ食後によろしく頼むぜフェルト」

「カリオストロたちも食後にね、ラインハルト☆」

こうして互いの約束を交わした朝食は終わりを迎え、ラインハルトとカリオストロは二人して彼の部屋へと向かい、スバルとフェルトはその場に残される事となった。

執事達が食器を片付けていく中、椅子の上であぐらを組んでスバルを見るフェルトは語りかけてくる。

「それで？ あたしに話したい事ってーのはなんだ？」

「あーそれなんだが……ちよつとおおっぴらには話しづらい事だな」

「あん？ 人目があると駄目な話？」

……じゃああれだ、今片してる人どっか行ってくれ、何か二人きりで話したいんだとよー」

フェルトがぱんぱんと手を鳴らすと、片付けをしていた執事達は大人しくその命令に従い、食堂から退席していく。人を動かす事に関しては既に堂に入っているように見えるが、今はそんな感想はいいだろう。これならば、とスバルは更に言葉を続ける。

「で、人払いしてくれてありがたいけど、ちよつとそっち行ってもいい

か?」

「……何か気持ち悪いな、何だよ。変なことすんじゃないぞ」

「気持ち悪いってどう言う事です!? 別に変なことは考えてねーよ!」

近づぐことに拒否感を示すフェルトは、渋々と彼の接近を許す。

スバルはそんな彼女の直ぐ側までくると耳元に口を寄せて、囁いた。

「ロム爺がここに來てる」

「……っ!? おま、それ本当かッ!?」

「ちよ、声大きいって……っ!」

しーっ! と口到人差し指を当てて黙るように促すとフェルトは咄嗟に口に手を当てて黙り込み、ちらりと食堂扉を見る。……どうやら騒ぎを聞きつけた存在はいないようだ。少し胸を撫で下ろしながら、フェルトは改めてスバルへと問いかける。

「……ほ、本当にこの屋敷に來てるのかよ?」

「いらぬ嘘なんてつかねえよ、商人の荷卸人のフリして、この屋敷に接近してきたみたいだ。

俺も朝玄関に行ったら偶然出会ったから、死ぬほど驚いたぜ」

「そ、そっか……そうか……! あたし、今からちよつと会って!」

「ちよ、ちよちよちよーつと待て!!」

こうしては居られないと食堂から飛び出そうとするフェルトの肩を咄嗟に掴むと、なんだよ! と彼女が八重歯を見せながら怒った。

「慌てんなって! ロム爺は何でか知らないけど此処に居る事がバレたくないみたいだ。

だから慌てて出ていったらバレちまうかもだろ!」

「く……それでどうしろってんだよ、にーちゃん」

「ロム爺は何やら二人で話したいことがあるってさ。隠れてな。

俺はロム爺にお前を引き連れてこいって言われたんだよ。屋敷の玄関で待ってるらしい」

「二人で……?」

一体何を話すのかが検討もつかない様子 of フェルト。

そんな彼女にスバルは更に言葉を連ねて提案をする。このまま何でもない雑談をしながらゆつくりと、怪しまれない程度に玄関に行くこと。

フェルトはスバルの提案に文句はないようで、こくりと頷けば、待つていられないと早速玄関へと移動を開始し始めた。

「あーでさ、エミリアたんも王候補者としての挟持が段々——」

「挟持なんてクソ喰らえだね、人間意欲がなければどんな物も——」

「それでエミリアたんの耳ってやつぱり魅力的に見えるんだけど——」

「何でお前の好みについて話さなきゃいけないんだ——」

「ちくわ大明神——」

「おい今何か混じった——」

屋敷で働く人々や、来賓とすれ違いながらもあまりにもくだらない雑談を繰り返す二人はゆつくりと、ゆつくりと玄関まで近づく。

段々その距離が縮まる度にフェルトは特に辛抱たまらないのか、気持ち足取りが早くなっていくのが分かり、スバルが焦る一面もあったが……幸いにも屋敷の人には怪しまれず。そうして——

「あー今日もいい天気だなー」

「そうだな本当だなー」

既に雑になりかけているやり取りをしながら玄関から二人して外に出る。すると、またあの老執事が先程の商人とやり取りして居るのが見えた。

「商品が一部遅配されてしまう不手際、誠に申し開きようありません」

「いえいえ。お気になさらず。無事に商品も送って頂きましたので……」

「ご厚意感謝致します、ですがそれでは我々の気が済みません。」

当商会は信頼がモットーです。失った信頼を取り戻すことはなんと難しい事か……。

今回は形ばかりの謝意にはなりますが、全商品の値段を一割引きさ

せて頂きます」

「なんと。そんな事をしなくとも——」

「いえ、そうさせて頂かなければ気が済みません。

その代わりと言つてはなんですが、今後もご贔屓にお願いします」  
ペコペコと頭を下げる青年の後ろには、遅配されて来たであろう籠  
が2台存在していた。

その籠の荷物は数人の荷卸人が今尚、せつせと積みおろしては屋敷  
に運び出している。

——そしてそんな荷卸人の中には先程も見たロム爺の姿があつた。

フェルトはひと目で気づいたのだらう、姿を見た瞬間に目がぱあ  
と輝き、今にも向かいそうに体をうずうずさせていたが、まだ焦るな  
とスバルが手で遮り、何とか自制する事が出来たようだ。……そんな  
二人に目ざとくも気付いたのは応対していた老執事。彼はこちら側  
へと声をかけてきた。

「おはようございます、フェルト様、スバル様。お二人そろって如何致  
しましたか？」

「あ、あーおはようございます。え、ええつとフェルトとちよつと話が  
てら散歩を……」

「お、おう、おはよーさん。ま、まあな！ 折角来てくれたんだからさ、  
執事のじーちゃん達とかが手入れした庭とか見せなきやと思つてさ  
！」

あははは！ と少しぎこちなく取り繕う二人を見て、と首を傾げる  
執事。

だが深くは詮索しない事にしたようで、すぐにニコリと微笑みを返  
し、

「そうでございましたか。それであれば手入れした我々も嬉しい限り  
でございます

今日は絶好の晴れ模様ですので、庭も輝いて見えることでしょう」  
それだけ言つて、執事は商人の対応へと戻つていった。

……二人とも肝を冷やしたが、どうやら怪しまれなかつたようだ。  
内心で胸を撫で下ろしながら二人でちらりと荷卸を続けるロム爺を

見やると、彼もまたこちらを帽子の縁からちらりと覗き込んでいるのが見えた。

取り合えず怪しまれぬように自然を装って何気ない会話を交えながら止まっている荷台の一台の後ろに近付いていけば、こちらへ近付いてきたロム爺が無言で荷台の中を指差し、二人して静かに乗り込んでいく。

幌ほろの中は商品があらかた掃けているので特に狭くは感じないが、続けてロム爺が荷台に乗り込んでくれば一気に手狭く感じて仕方がない。が、詮無き事だろう。

「ロム爺……っ！」

老人が乗り込んだ瞬間、抑えた声でフェルトがその胸に飛び込んだからだ。

ロム爺もそんな少女を優しく胸で抱き止め、安心させるようにその背中に手を回して包み込む。

感動の再開である。スバルもそのシーンを見てうんうんと頷いて、二人の再会を暖かい目で見守る。

「つぶは、汗くせ……へへ、心配させやがって……このっ、大体何だよロム爺、お前全うな職についたのかよ」

「汗臭いはほっとけ馬鹿物、心配させたのはすまんかったがな。」

「この職は一時的な物、全てはお前さんのための布石に過ぎん」

「あたしのため？ よくわかんねーけど、本当心配させたのは反省しろよな、この！ このー！」

目尻を潤ませつつも、今まで出来なかつた分のスキンシップと言わんばかりに背をぼかぼか叩いては軽口を叩くフェルトに、ソレを受け止めながらも破顔するロム爺。

ただロム爺はそんな心温まるやり取りは後でと言わんばかりに顔を引き締め始める。

「まあそういうやり取りは追々出来るじやろう、今は時間がないから単刀直入に言うぞ。」

フェルトよ——お主ここから逃げ出したいか？」

「……えっ？」

「はい？」

二人にはその言葉が余りにも予想外のものだったのだろう。

スバルもフェルトも一瞬言ってる意味の理解が出来ず——少しして頭で受け止める事が出来たのか、驚きを表す。

「ちよ、ロム爺もしかしてお前今回の目的って——！」

「お主に言わなかったのは悪かったがな、儂はフェルトが現状が嫌であれば抜け出させるためにここに来たのよ。フェルト、お前さんもしも逃げ出したいならこの竜車に乗ったままでおればソレでよい。ただ本気で王様を目指すつもりながら儂は——」

「——なあロム爺」

説明をしだすロム爺にフェルトが口を挟んだ。

何故かその顔は俯かせており、その表情は読めない。

「……それって、抜け出した後もロム爺も一緒についてくるんだよな？」

「あん？」

「だから、抜け出した後も一緒に暮らせるんだよな！って、そう言いたいんだっての……！」

フェルトは目の前の老人の服を掴み、必死の形相で食いかかった。確かに、フェルトは現状をよしとはしていない。

王様なんて望んでもいないし、それを強いてくるラインハルトには良い感情を抱いていないので逃げ出してしまいたいとは思っていた。だが、そんな事よりも一番大事なのはロム爺の事だった。今まで雲隠れしていたのも心配で、ようやく見つけて一安心となったのに、逃げ出した先で離れ離れになってしまふのでは意味がない。彼女の中でロム爺は大切な家族なのだ。彼が居ないなら逃げ出した意味など何もなくなってしまう。それくらいには大切に思っているのだ。

「フェルト……ああ勿論じゃ、またお主の傍に居てやれるじやろうよ」「そっか……なら行くぜ、ロム爺が居るならまた貧民生活に戻るってのも悪くねえかもな」

「貴族生活に慣れ親しんだお主にや苦しいかもしれんぞ？」

まあ、幸いにもホーシン商会が儂らを雇ってくれるとの事だから、

食いつばぐれることはないじゃろうよ」

また逆戻りだな、と二人して笑い合うロム爺とフェルト。

だがその中で1人冷や汗を流すのはスバルである。

ただ二人で話すだけだと聞いてフェルトと引き合わせたのに何故かフェルトを脱出させる算段になっていた。知らなかつたとはいえそんな脱出の算段に自分は手を貸してしまっているのだ。

いつもは優しいラインハルトもこればかりは何を言われるか、また何をされるかが分からない。流石に不味いと思ったスバルは二人に声をかける。

「え、えーつと……そ、その計画もうちよつと待てないか？」

「ああん？」「にいちちゃん？」

「いや、まあフェルトの気持ちもロム爺の気持ちも分かるけどさ。

ラインハルトだつて王国の為を思つてお前を引き止めてるんだ。

せめて代わりの候補者が見つかるまで我慢するとかはどうだ……？」

せめて皆が納得するような解決方法を、とスバルが懇願する。

が、既に決意を固めた二人には全く通じない。

「それはいつだよ？　そしてどこにあたし以外の候補者がいるんだよ？」

そんなまごまごしてたらアイツがまた外堀埋めていつて逃げられなくなつちまうだろーが」

「それにこの手法も二度も通じるか分からん。

今の絶好の機会を逃すことは出来んのじゃ、小僧」

「だ、だとしてもだ今日別にやらなくても——もが!？」

「……………」

未だ食い下がろうとするスバルを、急にロム爺が出会つた時と同じように大きな腕で肩に手を回し、その手で口元を塞ぐ。

どうしたのだとフェルトがロム爺を見やれば、彼は静かにするように言い含める。——どうやら幌のすぐ傍に誰かが近付いてきているらしい。

「——ですので、これにて荷物は全てになります」



「ふむ——ありがとうございます。ではこちらが代金になります、お受け取りください。」

それにしても随分と立派な地竜ですな」

「はは、ありがとうございます。我々の自慢の足でございますから。如何に早く商品を届けるかは彼らにかかっておりますので。」

——ロックフェラーさん、準備は整っていますか？」

「いつでも良いぞ!!」

外に居る商人の呼び声に対してロム爺が野太い声で返せば、商人はハキハキとした声で執事と最後の応対を行い始める。そして、そんな最後の瞬間が無事に終わるように固唾を飲んで時が過ぎ去るのを二人は待ち続ける。

「それでは我々は次の仕事がありますのでこれにて。」

次は遅配ないように努めますので、是非とも今後ともご贔負に」

「はい、その時はよろしく願います」

やり取りが終われば竜車に人が跨った振動で軽く荷台が揺れ……その後、ゆつくりと竜車は進んでいく。

フェルトが幌の隙間から見れば、1ヶ月あまり過ぎた屋敷が徐々に徐々に遠ざかっていく様が見え——やがて、門を抜けて完全に領地の外へと脱出したのが見えた。

「……よっし！ 上手くいったな！」

「ああ、これでお主は晴れて自由の身よ。今まで大変じゃったなフェルトよ」

「本当だよ、ったく。貴族ってのが随分窮屈な生き方してんのがよく分かったぜ。」

飯は上手いしベッドはあったかいつてのはいいけど、どーにも駄目だ。

やっぱあたしには王様なんて向いてねーぜ！」

竜車も速度が乗り、既に視界から遠く離れたのを見て二人は一息つくと共に破顔する。

二人の笑い声が聞こえてきたのか、御者台に座っていた青年もまたこちらに声をかけてきた。

「お疲れ様でしたバルガさん。何とか上手くいったようですね」

「クロムウエルと呼べ。まあお主らの手配のお陰じやよ。」

商人のフリをして潜りこむなどまず考えもつかんかったからのう」「いえいえ、我々も利があればこそその話ですから。」

商人は利がなければ何にしても動きませぬので」

「ふん。利……と言うのは徽章の事か？ それともフェルトの事か？」

「あーやっぱロム爺とお前らってグルだったのか……。」

「っていうかホーシン商会って、あのアナスタシア・ホーシンのだよな？」

「む。知っておったかフェルト」

「腐つても候補者だ、敵になる相手は一応教わったつっの。」

「……って事は今回のあたしの脱出劇は妨害工作の1つってことかなーるほどな」

アナスタシア・ホーシンはカララギという地方出身の王選候補者の1人である。

彼女は巨大商会のトップに立つ存在で策謀に長けるかなりの実力者であり、今回の件もその企みのひとつである事がフェルトにも容易に想像が出来た。恐らく敵対者になりうる存在をあらかじめ消してしまうつもりだったのだろう。

「お怒りになりますか？」

「いや、ぶっちゃけ無理強いされ続けててむかつ腹立ってたから別に。」

徽章なんてもういらねえし、王様にもなるつもりもないから、逆に助かったって言ってもいいかもな。……そんな事よりさ、ロム爺」

「なんじやいフェルト」

青年に対して軽く手を振って感謝を表したフェルトは、続けてロム爺を指差すと、

「そのにーちゃん、いつまで拘束しておくつもりだ？」

「あ」

彼の腕の中ではそのたくましい腕と大きな手で口と体をしっかりと拘束されたままのスバルが白目を剥いて気絶しており、哀れ少年は擬似的に拉致されてしまうのだった。

§ § §

星達が瞬く夜の草原。

ふと寝転がって夜空を眺めれば、それは素敵な体験が出来そうな場所では今——阿鼻叫喚の様態を呈していた。

剣戟の音が響き渡り、魔法が飛び交い、悲鳴と怒号がそれらを彩り、絶え間ない地獄が今尚作り出されていく——

「っ、く、ラム……っ!!」

襲い掛かってくる人を氷剣で切り払うのはエミリアだ。

傍らでは何度か交戦したのだろうか、限界を超えて魔力を使用した代償で鼻と口から血を流した、憔悴のラムの姿があった。

「す、いませんエミリア様、足手まといになっちゃってしまい……」

「謝罪は今後は！ 立てる？ それならあそこの馬車の陰に避難していて……たあっ！」

乱戦の様様となつている今、エミリアには誰が敵で誰が味方なのか、が全く理解出来なかった。

味方だと思つた人の中にははわき目も振らずにこちらへ襲ってくる人も居るし、

敵だと思つた魔獣を攻撃しようとすれば、それらを攻撃しないでくれと頼む人も居る。

……夜という事も相まって相棒のバックが居ない事が悔やまれる。オドを削って呼び出さなければ、きっと大変な事になるかもしれない。

い。  
そのように逡巡しゆんじゆんしていると、エミリアの目の前にある人物が立ち塞がった。

「いい夜でいやがりますねえ、星空満点、血肉満開、死屍累々のより取り見取り。」

クズ肉どものさえずり声も悲鳴だけならこちとら大歓迎ですよ。つて言つても聞くに堪えないんでやつぱ黙つて欲しーんですが、きやはっ！ きやははははっ!!」

見た目は筋骨粒々な狼顔の青年ではあるが、その表情と声が全く一致していない。悪意を撒き散らす事が楽しくて仕方がないといったように、顔が壊れそうな程腹を抱えて笑いこけている。

その手に1人の男性の首根つこを掴んで引きずっているのも相まって、何もかもがおかしく見えた。

全てが異常のその存在に、エミリアは気圧されたかのように下がりがらも問う。

「貴方、貴方がこんなことを……?」

「あー? そーですよ、そんなの当たり前じゃねーですか何言つてやがんだこの肉魂は。」

わざわざテメーの為に足労して盛り上げてやったんですよ。

感謝して平伏するってのが筋じゃねーんですかね? 分かったか? 分かりやがりましたか? なら平伏しろよ! 盛り上げてやったんですからあ!」

青年は引きずった男性の首ではなく、頭を手で掴んで吊り下げる。

既に戦意をなくしているその男性は呻き声を上げながら掴まれた頭の痛みに顔をしかめ——やがて呻き声の代わりに悲鳴を上げ始めた。

エミリアは今見ている光景が信じられなかった。

彼が掴んでいる男性が頭部から別の物へと変わっていつてるのだ。人間だった筈のその頭部は見る見るうちに大きな芋虫のようなそれに成り代っていき、瞬き程の間に男性は頭の先から足の先まで一匹の巨大な虫へと姿を変えてしまった。

「あ、これお近づきの印の蛆虫なんで喜んで受け取りやがってくださいよ」

「つ……酷い、なんてことを……!」

男性の手から力が抜けければ、ぼてつと巨大蛆虫が地面に落ち、もぞもぞと地面を醜く動きまわる。……その姿を見て、それが先程まで人

間違ったなんて誰もが思うことはないだろう。

彼の末路を見てエミリアは胸に怒りを燃やし、キツと目の前の人物を睨みつける。

「今すぐ、その人を戻してあげなさい！ さもないと酷いんだからー！」  
「はいはい、人の好意無碍むげにしやがるなんてやっばクス肉はクス肉でいやがりますねー。」

そっちの方がよっぽど酷いって分かってますか？ 分かってねーんですよね、クスだから！ あーヤダヤダ！ これは礼儀に長けたアタクシが色々と教えてあげないといけませんかねー？ めんどくせーから教えてやんねーけど。

——ああそうそう、言い忘れてたんで先に自己紹介してあげますよ、耳かっぽじってよく聞きやがってくださいいね？」

怒号と喧騒のバックコーラスが奏でられる中、狼頭の青年が大仰に両手を広げれば、その全身が別の人物に変わっていく。

ウエーブのかかった美しい黒髪。エミリアよりも少し大きい身長で非常に肉感的な体、その顔は見る物すべてを引き込む愛くるしさと妖艶さを持ち合わせた、まさしく絶世の美女がそこに現れていた。……だが、エミリアにはそんな彼女に違和感を覚えていた。

目の前の人物が色々な人の良い点を全て混ぜあわせたような、ちぐはぐな印象を感じていたからだ。

その目に隠しきれぬほどの愉悦と侮蔑を浮かべる美女は、エミリアへとこう続ける——

「アタクシは魔女教大罪司教『色欲』担当——カペラ・エメラダ・ルグニカ様ってーもんです！」

銀髪ハーフェルフのエミリアさん、試練の時間でございますよおっ！ きやははははっ！」

### 第三十八話 「主人公」と『主人公』

(そう言えば、此処に入るのも2回目だったか)

朝食後、カリオストロが連れられた先の部屋は、この世界に辿り着いた1日目に招いて貰ったラインハルトの部屋であった。

どこか懐かしさを感じながら勧められた椅子に座り込み、ラインハルトは自分の脇机から書類を取り出すと、それをカリオストロに渡した。

「さて、今渡したのが鎧の魔物に関しての報告書だ」

「……3回も目撃証言があるんだねー☆」

「その通り。こちらが正式に確認したのは1回だけだったのだけれども、他2つの目撃証言は早い段階から実は目撃されていて、調査の結果遅れて出てきたのさ。

一回目の目撃は今から約3週間前。軍事物資の運搬中に護衛の兵士が遠巻きに発見した。

……その兵士一人しか見ておらず、尚且つ一瞬だけだったようだから、一笑に付されてしまったようだけどね」

「……そりゃ『空に巨大な鎧が浮いてた』なんて言っても誰も信じないよねっ☆」

星晶獣に馴染みがないこの世界の人から見れば至極当然の事かもしれない。それを考えると向こうの世界よりもこちらの世界の方が安全なのか？ と益体ない事を考えながらカリオストロは彼に続きを促す。

「2回目の目撃証言は約2週間前。王都近郊の農家の夫婦が兵士詰め所に駆け込んできて発覚。

『巨大な鎧の魔物が空に浮かびながらこつちを見つめてくる』と半狂乱で訴えかけたようだが、やはり到底信じる事ができず、幻覚でも見ているのだと判断されてしまったらしい。

だが二人共同証言をしたことから少しは怪しんだようだ」

「現地まで確認してみたのかな？」

「そのようだね。ただ、辿り着いた時には――」

「居なかったって訳かー……なるほどなるほど☆」

カリオストロは書類に目を通しながらもラインハルトの説明を耳に入れて、二つの情報を照らし合わせていく。

情報から分かるのはどちらも一瞬しか確認出来ていない事と、近辺で鎧の魔物が仕業と思われる被害が特に確認されていないこと。ヴァシユロンが何を目的にしているかは分からない今、現状はただ彷徨っているだけにしか思えないが……。

「それで、3回目は？」

カリオストロが書類から顔を上げてラインハルトをちらりと見れば、陽が差し込む窓に背中を向けて、彼はこう続けた。

「3回目はここ、アストレア家で複数の執事達とボク自身が確認したよ。丁度5日前の昼の事だね。……流石にボク自身も驚いた、巨大な鎧の魔物がこの部屋を覗き込んで居たのだから」

「……？」

釣られるようにカリオストロも窓を見る。

その先には透き通るような青空と暖かな陽の中で小鳥たちが平和に飛び交っているだけだ。

だが今。二人の中ではあの独特な鎧を纏った星晶獣が景色を遮ってこちらを覗いている姿が見えていた。

「執務中、違和感を覚えて後を振り返ればすぐそこに。」

丁度その場に居た爺やも見ていた……が、不思議な物だね。確かに見た目は恐ろしいが余り脅威を感じなかったんだ。まるで弱っているような印象の方が強かったかな」

「弱ってる？」

「ああ、巨大な鎧だったけど……鎧その物がぼろぼろになっていたし、その手に持っていた剣も半ばから折れていたからそう思えたのかな」その報告を聞いてなるほど、とカリオストロは頷く。

自分自身がこちらの世界に送られた切欠は崩壊寸前のヴァシユロンの最後の足掻きによるもの。

何故かは分からないが肝心のヴァシユロンも崩壊を免れてこちらに来たはいいものの、グラン達によって受けた深いダメージはまだ回

復しきつていないようだ。

「で、結局魔獣はどうなったのかな？」

「我々が警戒を露わにしていると、しばらくして空に消えていったよ。捕縛することも何も出来なかった」

「ふうん……☆ でも実際に目の当たりにした以上は探る必要があった。そうだよね」

「その通り。先程の2件が眉唾だと判断されていたから調査するのは苦勞したよ。僕自身もメイザーズ卿が同じ情報を欲していなければ本腰を入れて情報収集することはなかっただろう。」

現状、その魔獣は何ら被害を出していないから様子見で済ませているが……。

——ただ、かの魔獣には気になる点が1つあるんだ」

「気になる点？」

ラインハルトは窓に向けていた体をこちらへと向き直し、告げた。

「その鎧の魔獣……カリオストロはヴァシユロン、と言ったかな？」

実は初期の目撃地点から、2回目、3回目と経るごとにどんどん北上して行ってるんだ」

「……？」

ラインハルトの話を受けてカリオストロが手元の報告書に再度目を通していく。すると、確かに言われた通り目撃場所はどんどん北上しているではないか。だがそれが一体どうしたのだ？ 北上した先に何かがあるのか——と考えを巡らせていけば……ラインハルトが何を言いたいかに彼女は気づいた。

「ああなるほど……王都、だね☆」

「その通り。次ももし出現するとして、それが今回よりさらに北にるのであれば……その先は王都である可能性が高い。こちらとしては様子見で済めばいいとは思っているが、あそこで暮らす多数の民を思えば何かがあったでは遅い。次王都で見かけたら討伐対象になる事だろう」

「それはっ——……ちよつと、困るかなーって☆」

「……カリオストロがそもそも何故その魔獣の情報を欲しがるのか、



それについては聞いていないけど——ヴァシユロンは倒されてしま  
うとキミが困るのかい？

もしもかの魔獣が害を及ぼす存在ではないと断定出来れば、捕縛だ  
けで済むかもしれないが」

「……」

魔獣の情報を知られたがる理由を説明する事が出来ないのが明らか  
なように、星晶獣ヴァシユロンが害を及ぼさないか、なんて聞くまで  
もなくNOだ。

人知れず神隠しを起こすのはまだ良い方で、あの時のように大暴れ  
すればそれこそ王都に甚大な被害が及ぶ可能性もある。暴走した星  
晶獣を大人しくするには、あの蒼の少女『ルリア』が居なければ難し  
いだろう。

だがヴァシユロンはカリオストロにとっての元の世界へと帰るた  
めの鍵でもある。出来るなら無傷のまま捕らえたいところだが——

「……どうやら、そう簡単に行く魔獣ではないようだね。」

であれば申し訳ないが、その際には」

「うん……じゃあせめて、トドメだけは私にやらせて欲しいな☆」

「承知した。出現周期的にも約1週間単位だ。」

その日が近づいたら僕と同行して街に向かおう。

もしキミが良ければ出現するまでこの屋敷に滞在してもらっても  
かまわないよ」

「……いいの？ そこまでしてもらって」

「損得無しにキミとは仲良くなりたいたいと思っている、と言うのもある  
し。」

ロズワール様にも、エミリア様にもキミには最大限の協力をして欲  
しいと言われているからね。労力は惜しまないよ」

今ひとつ何を企んでいるかが分からないロズワールではあるが、協  
力自体はきちんと取り付けてくれたようだ。そして忘れてはならな  
いエミリアの口添えに少しむず痒い思いをしながらも、カリオストロ  
は報告書を丸めて畳み、懐にしまいこむ。

更に、彼女は改めてラインハルトに向き直ると、スカートを摘んで少しあげながら丁寧に腰を曲げて感謝を示した。

「——ご協力、誠にありがとうございます騎士様☆」

「困った人を助けるのは騎士の本懐さ、レディ。それに、感謝はまだ早いよ。」

願わくばヴァシユロンが無事に捕縛できた時にまたその言葉を聞きたいね」

静かな間の後、茶化しあつた二人で小さく微笑み合えば、見計らつたかのように扉をノックする音が飛び込んでくる。どうやら執事がお茶を運び入れてきてくれたようだ。

執事自ら入れたお茶を二人で手に取れば静かに啜り、一息。

緊迫した空気も暖かなお茶で弛緩すれば、ラインハルトが柔和な表情でカリオストロに問いかけた。

「ところで一応この話は一区切りついた所だけでも、カリオストロは今日はどうするんだい？ 一旦屋敷に戻つたりとかは考えてはいるかい？」

「……まあエミリア達も気になると言えば気になるけどね☆

うーんと、スバルがあんまりにもぐずるようなら戻るけど……そうじゃないならこの辺りのお散歩でもしてようかな？」

「王都から少し離れている場所で居を構えているせいかな、この辺りは完全に自然に囲まれている。それもいいかもしれないね。もし良ければ屋敷の庭などを見てはどうか。いつも彼らが精魂入れて整えてくれているんだよ」

それもいいかもしれない、折角だからスバルを誘ってやるか。などとラインハルトの提案を真剣に考えるカリオストロだが、件のスバルくだんが現在進行系で屋敷から刻一刻と離れていつてるなどは思いもしていなかった。

そのままお茶を飲み終えるまで何気ない話に花を咲かせていく二人がフェルトとスバルが居ない事に気付くのは——お昼に差し掛かった頃だった。

「……………ん、が……………んっ……………?」

体を感じるがたがたとした振動。少しだけ耳に入る風の音に、節々の体の痛み。意識が覚醒するにつれて頭に次々と入ってくる情報に目を白黒させながら、スバルはその場で起き上がる。

「い、つつつ……………あ……………あれ? ここっつて?」

「お。にいちちゃん目を覚ましたか?」

「おう坊主。大丈夫か」

「……………え? あれ? フェルトに……………ロム爺?」

何か全然現状が掴めないんだけど……………えーつと、今、ここっつてどこだ?」

顔を覗き込んでくる二人を把握するとスバルは周りを見渡し始める。

木の骨組みに、厚そうな白い皮が貼られた天井。周りに散財するのは木箱。

少なくとも屋敷の一室ではないな、とぼんやりした頭で思っていると二人は気の毒そうな顔を始めた。

「おいロム爺。やつぱやはりすぎだろ」

「いや、あの時はつい力が入ってしまったのう……………坊主、落ち着いて聞け。」

今お前さんは竜車の荷台の中におる」

「竜車の……………ニダイ……………荷台? ……んんっ!? 竜車の荷台つて……………!」

ロム爺の言葉が鍵になって、霞がかったようなスバルの頭に直前の記憶が思い浮かんできた。

朝にロム爺と出会った事。

ロム爺にフェルトと引き合わせた事。

ロム爺とフェルトが脱出する事。

それを反対しようとしたらロム爺いきなり締められた事。

「つてことは!?!」

跳ね起きたスバルが慌てて荷台の出口から顔を覗かせると、そこにはまず宵闇があった。

そして視界の上には星々が瞬く夜空。下には勢い良く流れる地面。左右を見渡せば一帯に広がる暗闇の草原が見えた。

間違いない、ここは屋敷でもなんでもない。

むしろ絶賛全然知らない場所まで拉致されてしまっている!

「お、おiiiiiiiiiiii!!?! これはシヤレにならねえだろおおお!!?!」

「ちよ、馬鹿! 落ち着けて、顔出さなつてにいちちゃん! 落ちるぞ!?!」

「落ち着けるかって!?! 落ち着けないねコレは!?!」

フェルトだけならまだしも俺も一緒かよ!?! カリオストロにもラインハルトにもまだ何にも言っていないつてのにコレはヤバイつて!?!

ちよ、Uターン! 御者さんUターンして……どわあつ!?!」

冷静を失い、パニックになったスバルが急ぎ指示を出そうとした所、そのお腹に大きな腕が回されて一気に荷台の中まで引きずり込まれ、スバルは荷台の上で寝転がることになった。

「落ち着け小僧、お主をここまで連れてきてしまったのは……まあ事故じゃ。すまんかったな」

「まあ事故じゃ、じゃねーつて!?!」

もう冗談で済まされるレベルは超えてるから——もがっ!?!」

「とりあえずこの狭い荷台で騒ぐでないわい。コレでも食つておれ」  
そう言つて無理矢理口に差し出されたのは大きなクッキーのようなモノ。

スバルは驚き吐き出しそうになったが、口内に広がる塩味と仄かな甘みを感じれば少しだけ落ち着きを取り戻し……渋々、それを咀嚼をしていく。

「あぐ、んも、んぐ……ぐくんつ。

……はあ。悪い、つていうか俺は悪くないけどどうするつもりなんだよ」

「それについては話合ったんじゃがな」

「にーちゃんには悪いけど、一旦あたし達を別の竜車に乗り込んだ後に、この商人の人がちゃんと屋敷まで送り届けるって言う手筈になっている。

「このまま拉致したまんま行ってことはないから、ま、安心しろってー!」  
「なーんだそれなら安心……出来ねーよ!!」  
「って言うか脱出するのに俺関係ないだろ!」

「だったら気絶した直後に俺だけ戻って置いてきてくれれば良かったのに……!」

「そうしたかったけど下手な動きをして怪しまれたくないだろ?」

近場に村でもあればそこに置いて置く事も考えたけどそれがなかったからなー、野に放られて魔獣や追い剥ぎに襲われるのもやだろー、にーちゃん」

「そりゃな!」 そんな事されたら末代まで崇るわ!」

木製のコップを手に持ち、傍らに持ったリングを齧るフェルトが飄々<sup>ひょうひょう</sup>と告げ、そんな彼女の発言にスバルが突っ込んだ。理不尽に常に晒される男スバルは、浮かんできた怒りを抑えながらフェルトに質問を続ける。

「……で、それはいつまで掛かるんだよ? まだその別の竜車に乗り換えられてないんだろ?」

最低でも俺が拉致されてもう半日以上はかかっているし……あんまり長引くと客観的に考えてやばい事になるぞ。俺もだけどさ」

「あと少し、だとき。合流地点がこの先にあるらしいんだが——なあ商人のにーちゃん、あと少しなんだよな!」

「もう少しです! スバルさんの事もちゃんと忘れていませんので——  
——……んん?」

荷台の外から聞こえてくる御者の声に疑問の声が交じる。  
そんな声色にどうしたのだろうと三人が思っていると……男はこう続けた。

「すみません、多分……旅人のようですね。道の真ん中で通せんぼしています。

……困りましたね。ちょっと静かにして貰っても良いでしょうか？」

「……坊主、分かっておるだろうな？」

「……はいはい、別に騒いだりはしないって。」

俺はちやんと送り届けてくれればもう文句もつけねーよ」

顔を近づけて凄むロム爺に対し、ぶーたれながらスバルは穀物を入れた麻袋に背中を預ける。

やがて全身に感じていた振動は緩やかになものになり……完全にそれが止まると同時に、荷台の三人は何をするでもなく口をつぐみ始める。

三人の意識はそれにより必然的に外でのやり取りに集中することになった。

『——夜分遅くに本当にすいません。我々は旅の者なのですが……』

『進行方向を妨害するのはあまり褒められた物ではないですね……それで、どうしたんですか？ 女性二人を連れてこんな夜更けに出歩くなんて危ないですよ？』

『大変申し訳ありません。我々、実は道に迷ってしまいました。』

先程ようやく道を見つけて浮かれていたんですが……ここ近辺で大きな街に行くとしたら、どう進めばいいんでしょうか？』

『なあなあ兄ちゃん、それと出来れば食料とかも分けてくれないか？』

気づいたら持ってきた食料も足りなくなっちゃってよう……』

『な、なんですか？ この小さな魔獣は……』

『オイラは魔物じゃねえ！』『うわっ!?!』

『はわわっ、ご、ごめんなさい！』

別にこの子は悪さする子じゃないので……!』

荷台の外から聞こえてくる声を察するに、どうやら呼び止めたのは男性と女性、そしてよく分からないが小さな魔獣(?)が1体居るようだ。

声の感じからしてそのどちらも若く、男性の声は非常にハキハキしており、女性の方はどこか繊細な印象を覚えた。

『ごほん、魔獣でなければ……精霊ですかね？』

まあそれはともかく……、この近くで大きな街と言うと王都ですね。

王都に行くのであれば、我々が来た方向に沿って真っ直ぐ……そうですね、半日くらい歩いて貰って、最初に見えた分岐路で左に曲がって下さい』

『ええーっ、まだまだ歩くのーっ!? うちもう疲れたーっ!』

……追加で 聞こえてくる声は先程とは別の女性のようだ。

声自体は可愛らしいのだが、その内容と言えば大分だだっ子ないメージを受けた。

『……こら。頼む側がそんな声を出しちゃ駄目だよ。』

ありがとうございます。非常に助かります……そうですか、反対方面ですか……それで大変厚かましいお願いなのですが、もし良ければ食料を分けて頂いてもよろしいでしょうか?』

『うーん……まあこの辺り一帯は特に何も無いからね。』

魔獣も出没しやすいので施したい気持ちも当然ありますが……』

『もちろん、無料でなどと言うつもりはありません。お金は支払います』

『……精霊。オイラは精霊でもないんだけどなあ。うーん。ドラゴンってあんま見ねえのか?』

『こつちでは珍しい存在なのかもしれないね』

『ぶー、すぐに会えるとと思ってたけど結構大変……ご先祖様どこ行っちゃったのかなあ』

三者三様の会話を聞きながら、聞き耳を立てていると商人が荷台に近づいてきたようだ。

彼は幌の中に顔を突っ込むとロム爺へと語りかけきた。

「すみません、そのリングの箱をお願いしていいですか? ——ありがとうございます」

「……」

ロム爺は無言で箱を手渡しして、商人がそれを持って相手方に渡したのだろう。次の瞬間『おわ! リングじゃねーか! へへっ、にいちちゃん良い物持ってきてくれたなあ!』と言う元気の良い声が届いて

きた。……リンゴ、今リンゴと言っただろうか？ 聞き間違いかとスバルが思っついていく中も、旅人との会話は続いていく。

『どうも助かります。えっと手持ちのお金で足りみますか？』

『いえ、お金さえ頂ければ……ふむ？ 見たことのない通貨ですね。』

一応銀貨のようではありませんが……む、金貨まで。

……いいでしょう、どこの通貨はわかりませんが。金の価値は代わりませんか？』

『んーやっぱりこっちの通貨は使えないんだねー、そりやそつか？』

『まあなあ、使えたら逆にびつくりするぜ』

どうやら交渉自体は成立したようだ。

スバルは聞き耳を立てると同時に幌の隙間からちらりと外を覗き込めば、顔こそ見えないが旅人たちの姿が分かった。

青いシャツの上からプレートアーマーを着て、腰に剣を帯びているのが青年。

白いワンピースを着て薄青色の長い髪を下げているのが、あの大人しい声の少女。

魔獣と称されたのは青年の周りを飛んでいるオレンジの肌の小さな竜。

カリオストロのようなノースリーブの貴族服を着た茶髪のは少し姦しかったもう一人の女性だろう。

スバルは音を立てる事なく静かに三人と一匹？の様子を見守っていくが……少しして荷台が少し揺れた。どうやら御者台に商人が乗ったようだ。

『それでは我々も急いでいるのでこの辺りで。道中お気をつけて』

『ありがとうございます！』

『ありがとうございます！』

『ありがとな、にいちちゃん！』

『バイバイ、まったね☆』

旅人たちの声を受けながらガラガラと音を立てて竜車が進み始める。

幌から見える景色が流れるように動いて行く中、荷台はしばらく無



言のままではあったが……ある程度時間が経った後、御者の声でその沈黙は破られた。

「……もう別に話してもいいんですよ?」

「……あーいや、何となく話すタイミング失っちゃまって……旅人だよな?」

「本当に旅人っぽかったな。盗賊かと思ってアタシはヒヤヒヤしてたけどな」

「右に同じくそう思ってたわい」

「全員、若い人たちでしたよ。」

一人だけ精霊を従えていたようですが、女性の方は二人共見麗しい方で……」

「なんじやい、そう言うならしつかりと見れば良かったわ」

「ロム爺には振り向くことはねーから安心しろって」

「若い先短い老人の楽しみというヤツじゃ、振り向く振り向かんは関係ないわい」

「ロム爺がエロ爺になりつつ……あだつ!」

四人の何気ない会話は盛り上がりを見せて行く。

スバルは途中の旅人と今の話に釣られたせいか直前までの怒りをすっかりと忘却の彼方に置いてしまっており、しばらくたってからようやく思い至る事が出来た。迷惑を被ったのはこちらだ。恨み言の一つや二つぐらいぶつけてやらないと駄目だろうナツキ・スバル!と、顔を引き締めて自分を奮わせ口に出そうとするのだが――、

「もうすぐです。あの丘を超えた辺りが合流地点になります!」

タイミング悪くも、御者に居る商人がそう話し出し、その言葉を聞いてフェルトとロム爺は一気に喜色ばんだ。

「良かった! ぶっちゃけラインハルトが本気になって探し出すと、こうして隠れて逃げても駄目だと思ってたし……いやーまじで良かった……!」

「フェルトをしてそう思わせるか?」

「つたりめーだろ、身近で見ってたからこそ言えるけど、あいつこそデタ

ラメの化身だぞ」

「まあ加護が自由自在に取得出来るからな……って、もう着いちまうのかよ」

完全に切り出すタイミングを失ったスバルは、どうしたものかと唸る。

流星に二人が喜ぶ中恨み言をつぶやくのはどうだろうか……いや、二人は関係ない。自分は一方的な被害者で向こうは加害者、相手の感情を考慮する必要はないのだ。だがしかし、それでも……、と葛藤を続けていると、急にスバルは全身に寒気を感じた。

「……なんだ？ 何かすっげー寒いな」

「儂もじゃ、この冷氣は……おかしいのう、この時期にこんなに冷える訳は……」

「……何か俺だけ嫌な予感がしたとか、そういう訳じゃないんだな。

しっかし、確かに寒い——いや、マジで寒いぞコレ!」

恨み言の事を再度捨てさり、両腕で体を抱きしめるスバル。

数瞬前から本当に、一帯の空気が真冬のように冷えてきつてしまっており、フェルトもロム爺もその寒さに耐えかねてスバルに同じく体をかき抱く。

一体全体この辺りで何があったのだ、と全員で震えていると「な、なんだアレ……!?!」という御者の驚きの声が行へと届いた。

「ど、どど、どうしたってんだ……!?!」

声を震わせながらスバルが幌の横穴から顔を覗かせ、他二人も寒さに耐えながら同じく進行方向を見やり……その先の光景に目を見開いて驚く羽目になった。

「……凍ってる……?」

丘を超えた先に広がる光景。

それは視界一杯に広がる草原の一面が、雪と氷で覆われた姿であった。

### 第三十九話 最悪の裏切り

竜車が丘を越えた先にあったのは白銀の世界。今までの通り道から全く想像出来ない一変した光景に、御者を務める商人は目を見開いて驚いた。

「こ、これ、どど、どうなってんだ？」

「わ、わかんねーけど何か、へ、変な事になってるのは間違いなさそうだな……」

「……フェルト、坊主、取り合えずこの毛布を羽織れ。風邪を引くぞ」  
当然ながら御者と同じく荷台からその様子を覗いていた三人も理解が出来ていない。

歯の根が合わないほどの一帯の寒さに震えながら話し合う二人に、ロム爺は荷台にあった毛布を渡し、二人は急いでそれにくるまった。  
「つぶは……なあ商人のにーちゃん、合流地点ってこんな分かりやすい場所だったのかよ!？」

「い、いえ、そんな事はないはずです！」

そもそもこの場所も丘があるだけで、決してこんな雪と氷に覆われた場所では……!」

商人は困惑の色を伴った強張った声を出しながら、事前に伝えられた通りに合流地点——雪原の中央へと竜車を向けていく。竜車がいよいよ雪に覆われた一帯へと進み出せば、車輪から響く音がくぐもつた音へと変わっていった。

「雪だけなら分かるけど、なんだ？ 周りにでっけー雹ひょうがあるな。

綺麗つちや綺麗だけど……天候が急におかしくなったのか？」

「ふうむ……別の誰かに作られた方がまだわかるがな。

「こんな氷が降ってくるなど悪夢でしかないわい」

進む先々には小粒程のモノから膝程のサイズまで大きささまざまな氷が散在的に地面に転がっており、竜車に備え付けられた明かりによってそれらがきらきらと光輝いている。ロム爺が言うように異常気象というよりは、別の誰かが意図的に引き起こしたと言った方が確かに納得できた。

物珍しさと警戒を露わにして一行は進み続けるが、進めば進むほど周りに見える景色は異様さを増していく。最早周りに見える氷塊は大人程のサイズの物も珍しくなくなっていた。

「……何かだんだん氷のサイズでかくなってねーか？」

「フェルトの目と俺の目がおかしくなってない限りは間違いはないな。」

目に見えて大きくなって……魔法使いが練習でもしてたのか？」スバルがこの異様な世界を見て咄嗟に思い出したのは、絶賛懸想中のお相手エミリアだった。森での魔獣退治ではパックと二人で襲い掛かる敵をことごとく氷像にしていった彼女もまた氷魔法（正確には火魔法）のエキスパート。だがそんな彼女でさえここまで広範囲に変化せしめる力があるかといえ……それは疑問だった。

「うむ……おい、商人さんよ。もう合流地点なのじやろう？ お仲間はこちらにおらんのか？」

「こ、この辺りの筈なんです……まさか場所を間違えた？」

いや、そんな事は……行きにここを通った筈ですし……。

……ちよ、ちよつとごめんなさい、道を確認させてください！」

周りの風景を見て自信が持てなくなったのだろう、商人は地竜に止める指示を出してその場に停車。一行が乗る荷台ががくり、と揺れた。

「えつと……確かこつちの道を進んで……」

御者の上で左右の手をすり合わせながら地図を確認する商人。

他三人も周りの様子を伺おうと、荷台から順々に雪の地に降りていった。

「うぐ、さつむう！ 季節的にまだ夏だって言うのに何でこんな寒い場所に来る羽目に……！」

「ワシにも分らん。だが一つだけ分かる事ならある。これは断じて異常気象ではないとな。」

——見よ小僧、この氷なぞワシぐらいあるぞ」

自分の両腕を自らの腕でかき抱くスバルに、ロム爺が竜車の傍らかたわに生えている巨大な氷をこんこん、と手で叩いて示す。その氷の高さは

優に2mを超えており、幅もロム爺より一回り大きい。またそれは氷の塊にしては奇妙な形をしており、内部に気泡が入りこんでいるのかそれとも表面がざらついているせいか、あまり透き通ってはいなかった。

確かにこんな氷が降ってくる天候があれば命がいくつ合っても足りないだろう。

「それは分かるけどよロム爺、じゃあここに馬鹿みたいに氷作りまくった奴は一体何を考えてるって言う事だよ。草原一帯を凍らせるなんて意味が分からん。まさかここに冰山を作るつもりだった訳でもないだろうに——んん？ ……なんだこれ」

「ん？」

巨大な氷塊が何本も突き立った寒々しい草原の中で三人が疑問を介しているとき……フェルトが何かに気付いたのか、ロム爺が先程示したその巨大な氷像に近付いていく。

何をするのだとロム爺とスバルがソレを見守っていると、フェルトは嵌めている手袋でその氷柱に触れ、ざりざりと表面についた氷を削り取っていき——

「うわっ!!?」

直後、一気に氷から離れた。

「お、おい!?!」

「ど、どうしたんじやフェルト」

その反応に二人して彼女を心配するが、彼女は引きつった顔のまま氷柱を指差すばかり。

一体何があるんだ、とスバルとロム爺が彼女が指した場所を注視すれば、

「!?!」

「こ、これは……」

氷の中に、男性が埋まっていた。

その男は傭兵のような皮の鎧を身に纏っており、右手に剣を持ち、

姿勢は前のめり。表情は鬼気迫る程の憤怒に彩られており、視線の先にいる誰かを切りつけようとする意志がありありと見て取れた。

これが芸術作品であれば、三人とも手放しで拍手をするほどの躍動感。

ただこの氷像が芸術作品でないことは、その溢れんばかりの躍動感から浮き彫りにされていた。

——恐らく、この氷に囚われた男性は死んで尚、凍ったことに気がついていないのだろう。

「……凍らされた、っていうのかよ」

「……」

「……も、もしかして……クソ、ドンピシャかよ」

あまりの異様さに呆気にと取られていた二人に、フェルトが後ろから毒づく声が届く。

二人がまさかという思いで振り返れば、彼女は別の氷柱に視線を固定させていた。

その氷柱は先程よりももつと酷いものだった。

透き通っていないせいで完全には見えないが、抱き合うようにした二人の人間が氷に囚われている——だが、決定的な異常はその腹部には互いに大きな剣が生えている事だった。

氷の内部できらきらと赤く輝いているのは、恐らく血なのだろう。相打ちの瞬間に凍らされた二人は一体何を考えていたのか、今では分からなかった。

三人は戦慄を隠せない。

目の前にあるものが信じられないスバル達は、ふらふらと散在する氷塊へと近付いては中を確かめていく。自分達が思い浮かんだ悪い予想がただの予想である事を願って。

だが三人の淡い期待は、無慈悲な現実によって粉々に打ち消された。

頭部がなくなっただまま立ち尽くすローブを着た女性がいた。

全身に矢を突きたてられた、2 mほどの蠅螂カマキリの魔獣がいた。

至るところが焼け焦げた、剣を振り上げたままの筋骨隆々の男性が

いた。

腹部の大半を消し飛ばされた熊のような大型の魔獣がいた。  
両腕をなくしても尚、喜悦の表情を浮かべた細い男性がいた。  
折り重なって倒れた数匹の犬の魔獣がいた。

何かを庇うようにして背に複数の剣を突きたてられた亜人の女性  
がいた。

人がいた。

魔獣がいた。

人がいた。

魔獣がいた。

人がいた。

魔獣がいた。

人がいた。

魔獣がいた。

人がいた。

魔獣がいた。

人が。人が。人が。人が。人が。人が。

魔獣が。魔獣が。魔獣が。魔獣が。魔獣が。

この草原に突き立つ氷像のほとんど全てが人と魔獣の墓標。

三人はこの場のあまりの惨状に最早言葉を紡ぐことが出来なくなっていた。

なんなのだ、これは。

一体何が起こったのだ、ここで。

三人に理解出来たのはこの場で身の毛もよだつ大規模な戦闘が起こった事。

そして、そのほとんどを何者かが凍らせていった事だった。

……寒さで白くした顔をいつそう青白くした三人は、無言で竜車の元へと戻っていき、今だ惨状に気付いていない商人にその内容を告げる。

「……そ、そんな!?!」

「合流地点で恐らく戦闘があつたのじゃろう……」。

見たところ魔獣の死骸まで大量におるから、待機中にこやつらに襲われたんじやろうな。

……肝心の凍らせた存在が死んでおるかがわからん以上、ここに留まるのは危険じゃ」

「この惨状を見てなおここに留まるってのはちよつと無理だろーな……。」

早くこの場所から離れないとヤバイと思う」

「二人に同意。……つつか、今回は脱走とか抜きにしてラインハルトのところ戻らないか？」

何か、ひっじょうに不味い事になってる気がしてならないっていうか、いざという事を考えてラインハルトに出勤してもらうことも考えてもいいような……。」

示し合わせることもなく三人の見解は一致していたが、スバルだけちやつかり屋敷に戻ろうと言い出すので、フェルトとロム爺に睨まれていた。

商人は説得を受け、ちらりと近くにある氷漬けになっていた男性を見てぶるりと身を震わせれば、すぐに三人へと頷き返す。恐らくは自分が同じ目に合うのを想像してしまったのだろう。

「そ、それもそうですね。どこに行くかは後で決めるとして……とりあえずここから離れる方向で……。」

顔面を蒼白にしながらそそくさと竜車に跨る商人。早くこの場から離れたいと思っているスバル達も荷台に乗り、寒そうにしていた地竜が今まさに足を踏み出そうとした……その時だった。

『なんや、お前さん達どこから来たんや？』

「ッ!!」「!」「?!」

誰もいない筈の草原で、場にそぐわぬ軽い声が投げかけられたのだ。

すわ、ついにこの現象を引き起こした張本人か!? と荷台の中は一気に警戒がMAXまで引き上がる。フェルトはその手に既にナイフ



を持ち、ロム爺は拳を強く握り締め、スバルは音の発生源がどこから判断できず幌ほろの中できよろきよろしていた。そんな三人に対し御者はと言うと――

『り、リカードさん！ 生きていらっしやったんですか!?!』

『ああん？ ……おー、勿論や！』

あの程度の魔獣どもにワイが負ける訳あらへんやろ!』

「……ん、んん!?!」

歓喜が含まれた声で、声の主へと返答をしていた。

流石に他三人もそのやり取りを聞いて一気に脱力してしまう。

関西弁の脱力感すげー、とスバルも緊張の糸を解いて息をつけば、声の主を見ようと幌の隙間から顔を覗かせた。

そこに居たのは焦げ茶色の髪をモヒカンにした大きい体格の獣人であつた。

全身が赤茶けた短い体毛で覆われており、その体は筋骨隆々。

犬の顔をしており、目付きは鋭く、口には鋭い牙が並んでいる。

そんな見た目こそは厳いかめしい男だが、その台詞と笑い方はどこか親しみが感じられた。

リカードと呼ばれた男は現在商人に近づき、慣れ慣れしくその肩を叩いている。

だが商人は決して嫌な顔はせず、むしろ安堵の表情でされるがままになっていた。

「な、なんか知り合いみたいだな」

「んだよ、驚かせやがって……」

こつちの緊張を返せと悪態をつく一行。だがこの死の空間で生存者が居ることは非常に喜ばしい事だ。全員がどこかほっとした様子を漂わせながらフェルト達は荷台から降りていく。

「んでお前さんらこんな寒い所まで一体何しにきよつたんや?」

「ちよ、お前目的忘れてんのかよ!」

あたしら運んでくれるって言ったのはお前らだろ!」

「ガハハハハ!! 冗談やがな冗談!」

わーつとる、お前さんらはちゃーんと運んだるつちゅーねん」

「と言つてもどうするつもりじゃ？ 見たところその運ぶ車さえも無いようじゃが」

「そこは安心したってええで、竜車は一旦別の場所に置いてあるんや。

——オーイ、みんなこつち来たれや!! 御一行様の到着やで!!」

リカードが豪風が吹き付けそうな声とその拍手を辺りに響かせていけば、氷柱の影から、少し離れた場所から、ぞくぞくと人が集まってくるではないか。

杖を持った男、弓を持った男、剣を携えた女性。荷物を担いだ男。etc... etc...。

その数、少なく見積もつても十人以上。先程まで気配も何もなかったというのにどこにコレだけ潜んでいたのか、と一同は驚きを隠せなかった。

「ああ良かった……！ まだまだ生き残つてたんだ！」

「はあ……驚いたぜ。あたしはてつきり全滅したかと」

「こ、こんなにも居たのかよ!? 隠れてたのか？」

「隠れてなんかあらへんわい。あいつらには残党処理をしてもらつたんや。」

ま、多少の痛手もあつたがクズ共がワイに勝てる訳あらへん」

ガハハハと呵かかたいしやう大笑するリカード。

場にそぐわぬ陽気さは異様といえは異様だが、安心を求めていた一行にとつてはどこか頼もしいものだった。……だが、1人。スバルだけは小さな違和感を覚えていた。

何かがおかしい、だが何がおかしいのだろうか？ 援軍がこの場に居ることは何よりも頼もしい筈なのに、どこか生き残つていた一団にもやもやとした疑問が残る。

スバルがその違和感の原因を探っていると、ふと自分のすぐ傍に誰かが近付いたのが分かった。

「……な、なんだよ？」

リカードである。

彼は思案を続けるスバルを見下ろすようにして見つめている。

何故男がこちらに顔を近づけてるか分からず、体を数歩引いて困惑

するしかないスバルに対し、男はしばらく見つめ続けていけば、やがてニヤリと笑い、

「——にいちちゃんもまたけつたいな場所に出くわしてまったな。」

正直言うてみ、今ブルつとるやるか?」

「!? い、いやそんな事は……」

「あーあー隠さんでもええって。」

まあこんだけ人や魔獣の死骸に囲まれてれば、ふつつーは怖いやろ。普通、普通や。

ま、安心しとき! 怖いヤツも気持ち悪いヤツも生きる価値が無い。クズもワイらが全部全部ゼーんぶ始末したったからな!」

「いで、いでいで! いででで!」

ガハハハハ! と大声で笑いながら物騒な事をのたまいつつスバルの背を叩くりカード。

軽く叩いているかは知らないが男の手の威力は中々に高く、涙目になるしかない。

だが男が安心づけようとしているのは何となく分かった。

この男はやはり見かけどおり頼れる男なのだろうと思ひ、スバルはとりあえず違和感の事は忘れる事にした。……それが、致命的であることにも気づかず。

「そ、そうだりカードさん。一応これでフェルトさんの引き渡しは終わりになりますか?」

私はどうすればいいですか? 何か手伝うことは?

それに……その、氷になってしまった仲間達はどうするおつもりで?」

「あほう、いっぺんに喋んなや。……まあそうやな。」

とりあえずフェルトとやらは竜車に預かるところか。——オイ、持つてこんかい」

仲間が居てほつとして居る商人はリカードに指示を仰げば、ハイ、と言われるがままに別の男が声に従ひ、すぐさま別の竜車がこの場を用意された。

「お前さんら二人は、こつちの最後の仕事が終わるまでは少し竜車で

待ってもらえへんか？」

「そりや待ってって言われたら待つけどな、NOなんて言うつもりはねーよ。」

「って言うか……吊いかいーのかよ？ 良ければ手伝うぜ？」

「ワシもじゃ。お仲間さんを考えるとただ待っているという事はのう……」

「お優しい事で涙ちよちよぎれるわ。」

でもまあ安心せいや、それはこっちでやるさかい。吊いは一旦後や。」

せやから安心してちよびーつとばかり竜車の中で待つといたってや？」

リカードは気さくに笑って二人の搭乗を促し、フェルトとロム爺は渋々とその指示に従っていく。そうなるど取り残されるのはスバルと、商人の二人だ。あちらの二人に対し自分達はどうすればいいんだ？ なんだか迷子の気持ちになりつつあった二人は堪<sup>たま</sup>らずリカードへ話しかける。

「……あのー、俺はどうすればいいんですかね？」

俺って何か巻き添えで拉致られたみたいなんで……」

「そうなんです、彼は仕方なくこちらに連れてきてしまったので、

一旦元の場所まで連れていかなければ……」

「まあまあまあ、その話は後や。」

お二人さんには悪いんやけど……残党処理手伝ってくれへんか？」

困っている二人に対し、リカードは何故か両手に持っていた剣を渡して応対。スバルと商人は咄嗟に受け取ってしまったが、すぐに何故そんな事をしなければ!? と目を見開いて説明を求めだす。

「いやな、申し訳ないんやけど吊いはともかくまだ魔獣どもが残ってる。」

ほぼほぼやつつけた思うんやけど、しぶとく生き残ってるのが何体かおつてな？」

抵抗はほぼ出来ひんと思うからトドメだけ差したってくれんか？」

「え、いや……でもそつちにそんだけ人が居るんなら……」

「だから手分けしてやるっちゅーこつた。結構な数おるんや、これがまた。」

全部殲滅せなまた他の人にも被害出てまうやろ？

迅速にここから離れるためにも必要なんや、頼むわ坊主」

ぽりぽりと頭を掻いて堪忍な！ と笑うリカード。

スバルと商人は顔を見合わせると、はあと一つ溜息をついた。

どうやらやるしか無いと心に決めたようだ。

「言つときますが私は剣なんてまるで振った事は……」

「俺はまあ少しだけ経験あるけど……」

「おおきにな二人共！ なあに剣でブスって刺してやったら良いだけの話や！」

二人で手分けしてやってくれ、皆のものも気張るんやで！」

先程よりもニンマリ満開の笑みで二人の肩を叩いた男が部下に指示出しすれば、部下達もまた草原に散っていく。スバル達もその場で別れて雪を踏みしめながら、残党を求めて移動すれば――

「ん、兄ちゃんそこに一匹居るからな」

氷柱の道をくぐり抜けた先で、その場に座り込んでいた部下の一人であろう男性が自分のすぐ横を指差す。スバルが指の先を辿っていけば、漆黒の毛皮に身を包んだ犬が腹部から大量の血を流して倒れていた。未だ息があるのか荒い呼吸と共に舌を伸ばしている姿は非常に痛々しく見える。

「……ちよつとびっくりした。でも、本当に死にかけなんだな」

「苦戦したぜ。仲間も何人かやられてようやく追い込んでソコまで持っけていけたんだ。」

ま。そんな事はどうでもいい。今は時間がねえ。

悪いがさつきとやっちまってくれ……俺あこつちの奥に居るの片すからよ」

「お、おう……本当大変だったんだな」

疲れを露骨に表す男性の言に従ってスバルが死に体の犬に向き直り、その剣を大上段に構える。すると犬は口から血を垂らしながら哀願のつもりなのか、鼻を鳴らしてスバルへと顔を向ける。

「や、やりづれえな……！」

「躊躇ちゆうちゆうする必要はねえぞ、俺達を傷つけたやつなんだからな」

「くっ……！」

どこか怯えすら見せている犬は顔を左右に振って逃げ出そうとしており、それが更に罪悪感を刺激する。だがこれは人を襲った魔獣なのだ。スバルは言い聞かせて雑念を振り払えば——思い切り剣を振り下ろした。

ロングソードは犬の首に半ばまでめり込み、か細い鳴き声とともに傷跡から溢れた血が、更に犬と雪を染めていく。

「うえ……」

「ほらもう一回。それじゃ死なないぞ」

「わ、分かった……——恨むなよ」

スバルはもう一度剣を振り下ろし、二度目でようやく犬は完全に息の根が止まった。

「兄ちゃんありがとな。その調子で頼むぜ」

「お、おう……なんつーか、弱い者虐めするみたいであんま気が乗らねえけどな」

あれだけ辛酸を舐めてきた魔獣の筈なのに、何故か今日は罪悪感がとても強かった。今まで出会った魔獣はその全てが敵対的で同情の余地すら湧かなかつたのに、何故今回のはどこか同情を買うような動きをするのだろう。そんな疑問を浮かべながらもスバルは点々と魔獣を探し、駆除していく。

蜘蛛型の魔獣、アシカのような魔獣。スライムのような魔獣……何故だかは知らないが、この場に居る魔獣はどれも規則性がないし、そのどれもがリカードの言うとおりに傷つき瀕死の状態だった。その為、スバルが怪我をしたりすることは全くない。多少手こずるとしても、それは斬り方が下手で何度も斬りつける必要があるぐらいだった。

……不思議な事に始末を経験していく内に、今や彼の中で抵抗と言うものが薄まっていた。

慣れてしまったのだろうか、先程まで感じていた罪悪感も違和感も今では全くと言っていいほどなく、もう作業のつもりで次の魔獣はと

機会的に探し求めていけば……「おい」とあのリカードの大声が届いた。こちらを呼んでいるらしい。

「どうしたんだよ？ えっと……リカード」

「おう、何や兄ちゃん調子いいみたいやしもう一個頼んだろう思っとな。

——実は奥に大物がおったんや、そいつも始末頼んでええか？」

「お、大物!? それ、俺が倒せるものなのかよ!？」

「あーあー、そう身構えんといてもええんや。そいつももう瀕死やしほとんど動けへん。

見たやろ？ 敵のほとんどは抵抗すら出来へんかったの。

ソレさえ片せばもう終わりやし、その間ワイらは撤収の準備するさかい、ちよちよいで終わるから頼むわ兄ちゃん」

「……それならまあ、乗りかかった船だしな」

「頼もしいやないか、んじゃこっち来いや」

リカードがまたニヤリと犬歯を覗かせながら笑うと、彼は氷柱の森の中を進んでいく。

この先はどうやら寒さの中心地ようだ。先に進めば進むほど氷塊の数と寒気が増していく。

スバルは両腕をかき抱きながら先導する男へと追従していけばやがて——視界が唐突に開けた。

「こいつや」

「どれど——うげっ……!?! お、おいおい、これ。まだ生きてるのかよ」

スバルの視界に入った魔獣。それは巨大で真っ白な芋虫のようだった。

全長は5m程、その幅は自分の身長程ある巨体。顔に当たる部分は一転変わって茶色に染まっている。……イメージとしてはカブトムシの幼虫がそのまま巨大化した、といった方が納得出来るかもしれない。

だがスバルが一瞬嫌悪感を覚えたのはその巨大と形のせいではなく、全身に多種多様な武器が突き刺さっているせいであった。

剣が刺さっていた。槍が刺さっていた。斧がめり込んでいた。弓矢も大量に刺さっていた。

傷口からは緑色の液体が止めどなく溢れており、白い表面を緑色に染めている。

その痛々しい姿と漂う臭気は醜悪としかいいようがなく、スバルが口元を抑える程であった。

「ゴイツが草原一帯を氷にした原因や」

「こ、こいつが!?!」

「虫のくせに、って思ったやろ。ワイらもまさかと思ったがその通りや。」

ワイらもそこそこに苦戦したでえ、味方がどんどん凍らされてくは確かに面倒やった。

——つつくことでスバル。頼むわ、介錯したつたれや」

「……本当に反撃とかしないだろうな？　くそ、何で拉致くんだったりこんなことに……!」

眼前の巨大蟲は未だ体液を流しながら息をするように全身の伸縮をしている。

スバルはリカードの説明に戦慄よりかは不安を覚えながら剣を構える。

もうさつさと倒して、早くこの場から離れよう。その思いしか頭にはなかった。

「でっかいからちゃんとは度も切りつけなあかんで」

「わーってる!」

気の抜ける声を出しながらアドバイスするリカードに二つ返事をすれば、スバルは虫へと近づいてく。その芋虫は最初はただ体を伸縮させて息をするだけだったが、彼が近づけば得体の知れない甲高い声をあげて傷ついた体を寄せようとし始め、大きく慌てる羽目になった。

「大丈夫や、もうそいつは魔力切れやから反撃もできん」

「わ、分かっててもこればかりはちよつとな!?!」

2 m程離れて尚、虫は体液を零しながらスバルに近づいてくる。



きゅいきゅいという声が表すのは敵意なのだろうか。

抵抗出来ない魔獣に一方的に攻撃するのは気が引けるが、この醜悪な化物は人間達を凍らせた元凶なのだ。そう心に言い聞かせながらスバルは剣を掲げる。

白い芋虫は尚も彼へと縋<sup>すが</sup>るように近づいて来るが剣を掲げるとぴたりと止まり、再度きゅいきゅいという声を上げ始める。しかし、スバルにそれを聞く耳はなかった。

——風を斬る音とともに柔らかな肉に力任せの剣がめり込み、体液が溢れた。

「もう一回や」

体液で薄汚れた剣を再度振り下ろし、緑の液体が雪に飛び散った。

「もう一回」

体液で汚れた剣を再度振り下ろし、虫の悲鳴が断続的なものに変わった。

「もう一回」

体液がまぶされた剣を再度振り下ろし、剣が肉を切り裂く水音が周りに響いた。

「もう一回」

「もう一回」

「もう一回っ」

言葉に従うように剣を振り下ろし続けていけば、やがて虫の声は聞こえなくなっていた。

何度も剣を振り下ろして息を切らせたスバルがふう、ふう、と呼吸を整える。

最早見るまでもなく完全に虫は息絶えており、その惨状は余りにも酷いものだ。肉を斬る感触や緑の体液が自分の衣服についてしまつて居るのも含めてたまらなく不快な体験だったと言えよう。

——だがコレで終わりだ、カリオストロやラインハルトには叱られ



始めた。

腹を抱えて、

腹筋を振らせ、

背を大きく仰け反らせ、

鋭い牙を剥き出しにして、

文字通り顎を外さんとする程。

その笑い声は今までの男の様子から全くかけ離れた気味の悪さがあり、何よりその笑いが意図する理由が全く分からずに、スバルは恐怖を覚えるしかない。

この男は何故魔獣が死んだというのに笑っているんだ？

この男は何故自分を見て笑っているんだ？

この男は何故……あんなにも気持ちの悪い顔をして笑っているんだ？

「……ひいつ!？」

後ずさって、リカードから離れようとしたスバルは更に気づく。

手分けして魔獣退治や準備に追われていた筈のメンバーが全員、見知らぬ間に周りに立っており、彼らもまた自分を見て笑っていたのだ。

リカードと仲間達の笑い声が全方位から浴びせられるのは、最早悪夢にしか思えなかった。

自分は言われるがままに手伝いをしただけ。

あんな邪悪で、愉悦に歪んだ表情で見られる覚えはない筈。

なのに悪意ある輪唱は止まらない。止まらない。止まらない。トマツテクレナイ。

耳に反響する嘲笑が不快感を煽り続け、やがて耐えきれなくなったのか混乱と恐怖から逃れようとスバルは耳を塞いでその場に蹲る。

早く笑い声が止まって欲しい。悪い夢なら覚めて欲しい。

暗闇に怯える子供が布団に隠れるように、弱々しく震えて過ぎ去るのを待つ。

……無限とも思える恐怖は、蹲った彼の肩を誰かが叩いた事で終わりを告げた。

「~~~~つ、ひいつ、ひいつ……ああー笑った笑った。」

ああー堪忍な、スバルの努力わろてしもうてすまんかったな？

にいちゃんがあんまりにも道化やから、腹あよじれて仕方なかったわ。いやーようやってくれたでえ!!」

「ひ、え……あ……?」

ぽんぽん、と優しく肩を叩き続けながら耳元で喋り続けるリカードに対し、スバルは抑えていた手を外して、怯えながら伺う。彼の表情は最初出会ったときと同じ柔和そうな顔をしていた。

だがそんな顔を向けられても最早安心など出来様がない。

「——残念やったなあ、試練を達成することも出来ずにどんな気分や?」

それも他ならぬお前さんの仲間の手で落っこちよるんや!!

こないな傑作あると思うか!! ——げらげらげらげら!!」

スバルから離れた上機嫌なりカードは一転して既に事切れた虫を何度も蹴り上げている。

何度も、何度も、何度も、何度も、何度も。

そんな男の豹変した態度を見て今まで忘れていた違和感がようやくスバルの中に芽吹く。

大量の仲間が斃たおれたというのに、リカードはソレをまるで気にしていないし、彼の仲間もまた、仲間の死そのものに意味なんてないと言わんばかりに振舞っていた。まるでそんな事よりも魔獣を殺す事が大事だと言わんばかり。

それに、この男はなぜ自分の名前を知っているのだろうか。彼の前でそう呼び合ったこともないのに。

男達の行動理由は分からないが、その割り切れなさが堪らなくスバルを不快にする。

最早本当に同じ人間であるとは思えないほど、彼らは自分とは隔絶した存在に見えていた。

——戦慄し、腰の抜けたスバルを差し置いてリカードは続ける。

「はあーあ……さあて、ワイらもそろそろ行かなあかん。」

……もう残るは兄ちゃんだけやし、本当は処理せなあかんかもやけ

どく。

ええもん見せて貰ったし、ワイらと同類なものもあるから見逃したるわ」

良かったなく、とにつこりと人好きのしそうな満面の笑みを見せた男は、呆然とするスバルを置いて立ち上がると仲間へと指示を出していく。仲間達はその指示をテキパキとこなし、見る見るうちに出発する準備が万端になっていた。

リカードは準備が整った荷台へと飛び乗ると、その中から再度笑いを大きく両手を振る。

「じゃあな兄ちゃん、良い余興やったで〜」

「……………あ」

そして、男達は呆気なく氷の世界から去っていった。

スバルは魔獣と人の死骸に囲まれた冷たい場所で、啞然としながら男達を見送る他なかった――

## 第四十話 裏切りの代償（前編）

┌

フェルトとロム爺と商人。

草原に表れた銀世界。

肌を刺すような寒さ。

死者の氷像達。

リカードと生き残っていた仲間。

死にかけの魔獣。

傷ついた巨大芋虫。

肉を刻む剣の感触。

全員からの嘲笑。

強烈な違和感と吐き気。

死骸と自分だけの世界。

映像が次々と切り替わるように場面場面が浮かんでは消え、浮かんでは消える。

ある人物の視点で映されるその物語は苦痛と不快に満ちていた。

しかし、だからといって視聴を止めることは出来ない。そして終わることがない。

最後まで場面を演じきれば、また最初から演りなおし。

壊れたテープのように一連の場面は繰り返し返され、その場面の中ではこの人物は決められた動きと、決められたリアクションしか取れないのだ。

いつこの苦行が終わるのだろう。

そして今見ているこの物語は何なのだろう。

└

多分、これは悪夢なのだと思う。

荒唐無稽な、何ら意味のない恐ろしい夢だ。

それならば早く覚めて欲しい。

繰り返される度に味わう不快感はたまったものではないし、もう演じたくはない。

だと言うのに、自分の意識に相反して体は勝手に演じている。

——ああ、また嘲笑の声が聞こえる。

筋書き通りか反射的か、自分は耳を塞いで体を屈める。

その場にいる全員から笑われている。

けれども笑われている理由は見当がつかない。

自分は言われるがままに剣を振るっただけ。

人に害為す魔獣を殺しただけ。そのはずなのに。

「」

続く嘲笑の中でじつとしていれば、周りの寒さから体が震える。

だが冷えていく体とは正反対に、心は燃え上がっていく。

いい加減にしろ。もう笑われるのは沢山だ。

自分が何をしたのだと言うんだ。自分は悪いことをした覚えはない。

同じ動きしか出来ない筈の自分の体を、怒りに任せて無理矢理動かす。

あいつらに言ってやる。自分は悪くない。理由もなく自分を笑うなど、心を滾らせて凍り付いてしまったかのように硬い自分の体を、気力を持って動かそうとする。

そうすれば屈んでいた顔や体が徐々に、徐々に上へとあがっていく。

「——スバ——」

後もう少し。

両手を地面について、力を振り絞る。

もうすぐだ。もうすぐだ。

写る視界は既に地面ではなく、前方にいるリカードの黒い靴まで見

えていた。

逸る気持ちをそのままに渾身の力を込めていけば、いきなり抵抗がなくなつた。

そこで一気に立ち上がって、いざ目の前にいる存在に文句を言つてやろうとすれば――

「スバル」

――そこに居たのはリカードではなく、エミリアだった。

白い草原にマツチした白肌と銀髪、そしていつもの儂い白紫色の衣服。

そんな彼女が自分の目の前に立ち、悲しそうな目でこちらを見つめていた。

そこに居た筈のリカードは何処に行ったのだ？ どうして君がここに居るんだ？

先程までの怒りも瞬間的に鳴りを潜めてしまい、困惑する他ない。しかしそんな自分に対して、彼女はただただ悲しい目でこちらを見るだけ。

何一つ喋らない彼女が不思議で仕方なく、一体どうしたのかと彼女へと問う。

「どうして」

……口から出た彼女の答えは要領を得ない。

どうしてとは？ 一体何が言いたいのかが分からない。

どうしてここに居るのか、どうしてそんな問をするのかこちらが聞きたいというのに。

しかし何度問いを重ねても同じ反応が帰るだけ。

これには流石のスバルも声を荒げて反応を返す。一体何が言いたいんだと。

瞬間、雪混じりの強い風が吹き荒れる。

叩きつけるような冷たい冷気に晒されて、思わず顔に腕をやる。

一瞬とは言え凍えるほど冷たい寒威。体を震わせ、過ぎ去つたのを



見計らい腕を下げれば、

——その時には、既に彼女はそこから忽然と姿を消していた。代わりにその場にあつたのは、自分が殺めた巨大な芋虫の魔獣の亡骸。

頭部を滅多刺しにされて事切れた、見るに耐えない死骸だけだった。

なぜと思う事もなく、死骸から視界を外しエミリアを探す。

この世界で一人きりになりたくなくて。

彼女がこの寒い世界で迷子になって欲しくなくて。必死に探す。

だけど、どれだけ探しても見つからなかった。

氷像に囲まれた寂しい白銀の世界で、先程まであつた彼女の姿は影も形もなかった。

「どうして」

——静寂の世界で、彼女の声が虚しく響いた気がした。

§ § §

「……………あ」

意識が覚醒した時、スバルの視界に入ったのは見覚えのある天井だった。

それは彼が一ヶ月と暮らして何度となく見た客間の天井。

だがぼーっとする意識の中では認識すらも怪しく、先程まで見ていた悪夢も相まって自分が何処に居るのかも分からない。

未だ眠りに片足突っ込んでいる頭で状況を把握しようとしていると、急にその頭部に冷たいものが当てられた。どうやら水で濡らしたお絞りのようだ。

火照った頭部に相反する冷えたお絞りを当てられ、スバルは無意識に声を漏らす。

「……………つめた…」

「……！ す、スバル君……起きたんですか？」

すると、彼の耳にこれまた聞き慣れた声が届く。

音の主に向けて顔を傾けた先に居たのは——すっかりと仲良くなった屋敷のメイド、レムであった。彼女は口に手を当てて大きく驚きを表している。

「……あ……れ、レム？」

「っ！ はい、レムです、スバル君のレムです……っ。」

良かった、スバル君——……っ！」

「おわっ！」

彼女はスバルの意識が戻ったことを悟れば、その澄んだ瞳に目一杯涙を溜めて飛びつくように抱きついた。

いきなりの攻勢にスバルの半覚醒状態の頭が一気に覚醒に追い込まれる。が、覚醒した彼に待つのは大きな混乱だ。何で自分は寝ている？ 何故レムが感極まったように抱きつく？ それに、自分はラインハルトの屋敷に居たはずでは？

状況が把握できていないが、自らを抱きしめて体を震わせるレムに落ち着いて貰おうと、スバルは彼女の背中を軽く叩いて話しかける。

「レム……俺は大丈夫だ、だけど一体全体どうしたっていうんだ？」

「ここって……ロズワールの屋敷だよな？ 俺はラインハルトの所で過ごしていた筈……」

「はい……どうやら混乱してるみたいですね。」

カリオストロ様曰く、スバル君はラインハルト様のお屋敷で滞在中に、突如姿を消してしまったみたいです。カリオストロ様が探しに行ったところ、屋敷から遠く離れた草原で倒れていたんですよ。周りには、何故か雪と氷で囲まれていたとか。

そしてスバル君はラインハルト様の協力も得て、こちらに送っていただいたんです」

「……！」

レムの説明を聞いた直後、彼の脳裏にありありと当時の様子が思い浮かび……気づく。夢で見た光景、あれは自分が体験した事そのものだった事を。

不快に彩られた思い出が蘇ったことで、暖かい布団に包まれているというのに自然と体が震え出す。……あれは、あれは一体なんだったのだろうか。

「だ、大丈夫ですかスバル君!? どこか苦しいところでも!?」

「……いい、いや大丈夫だ。俺は全然平気……」

「平気かもしれませんが、安静にしてください……!」

スバル君はついさっきまで魘うなされていましたし、熱もまだあるんですから」

「……熱?」

「風邪みたいです。一時は凄い高熱で……無理もない事です、雪の中でしばらく倒れていたんですから。……今、暖かいスープを持ってきますね」

そう告げたレムは慈しむようにスバルの頭を撫でた後、そそくさと部屋を後にする。

1 人部屋に残されたスバルは彼女の言葉を聴いて、自分のおでこに手を当てる。……どうやら本当に熱があるらしい。火照った頭に対して冷えた手の感触がどこか心地よかった。

「どうりで倦怠感があると思った……そっか、俺。あの後気絶してたのか……」

静けさを取り戻した部屋の中で、スバルは窓を見る。

窓から見えるのは暖かい日が差す、晴天。昼か朝かは知らないが、寒さに満たされたあの夜天からもう半日以上立っているのは間違いないようがなかった。

スバルはしばらく全身に感じるだるさを味わいながらぼーっと過ごしていく。

すると、誰かが近付いてくる音が聞こえてきた。

「スバル……大丈夫か?」

カリオストロである。

パーティ会場の時の装いではなく、いつもの貴族服に身を纏った彼女は静かに扉を開け、伺っている。スバルが少し疲れを見せた返事を見せれば、彼女は労わりの表情を見せて近付いてきた。

「熱は……まだあるようだな。何か他に体に異常とかは感じるか？」

「いや、別にない……本当風邪引いただけだと思う」

「一応回復魔法はかけたんだから、そうでないと困るな」

ふう、とひとつため息をついた後、カリオストロはベッドに横たわるスバルの傍に椅子を近づけて座り込む。そして腕を組んでスバルを見つめはじめた。その目は不機嫌な様子がありありと見てとれており、スバルは彼女がそのような態度を取る理由を知っているせいか、気まずそうに体を縮こめてしまう。

「……え、えーつと怒ってる？」

「……へえ、怒っているねえ。……どうしてそう思うんだ？」

「ど、どうしてって……そりや、勝手に屋敷抜け出したこととか、あまつさえ一人で倒れてたとか。そういうのがあっていたあつ!!」

「よく把握できてるじゃねえか、その通りだ。お前はなんで一人で抜け出したんだ？ しっかもあんな寒空の中でぶっ倒れてるとか……なんだお前、オレ様を心配させる趣味があるのか？ 嫌がらせか？ わざとやってんのか？ そうなんだよな？ よーし上等だ、一週間腹痛と頭痛と吐き気が止まらなくなる薬調合して飲ませてやるから覚悟しろ」

「ちよ、ちがつ、決して今回は俺が原因ではなくていたっ!! ちよ、やめて！ 俺病人！ 労わるべき対象！ 風邪が悪化しますうーっ!!」

ぐすぐすとカリオストロの手刀が何度も何度もスバルの頭に振り下ろされる。

いくら少女の攻撃とはいえ、巧みなスナップを駆使したそれは中々に痛い。

スバルは弁明をしながら彼女のオシオキを腕を掲げて防ぐほかなかった。

そうしてカリオストロの攻勢が終わった後、スバルの理由が伝えられる。

ロム爺がフェルトを脱走させようと狙っていたこと。

自分はソレを止めようと思ったが、巻き込まれてしまい連れていか

れてしまった事。

移動先の草原で、多数の人と魔獣の氷像があつたこと。

奇妙な集団に出会つたこと。

そして彼らの不可解な行動を目撃したこと。

包み隠すことなく伝えられる異様な思い出に対し、カリオストロは静かに傾聴し続ける。

そして説明が終われば、彼女は腕を組んだまま瞑目めいもくした後、静かに口を開いた。

「……確かにな、オレ様達がお前を見つけた場所には不愉快なオブジェが大量にあつた。

お前が行つた時にはそこにはもう氷像があつたんだよな？」

「ああ、間違いない」

「ふん。奇妙な集団か……。なんであれ不可解だな。

もしもその場を凍らせたのが魔獣の仕業であるなら、何で魔獣まで凍っているんだ？ それに商人共に魔獣を殲滅させる力があるなら、なぜお前達にわざわざトドメをささせた？ わざわざ弱らせて残しておく意味はないはずだ。そして——なぜお前は取り残されたんだ？ そのリカードとやらは何か言つてたか覚えているか？」

「一応……断片的だが、覚えてる。俺がでかい芋虫を殺した時に仲間共々全員で俺を笑つた後、死んだ魔獣に対して”試練”だとか、”仲間”に殺される気持ちはどうだ？”とか。

……あと、俺の事を”同類”だとか」

「仲間……？ 同類……？」

スバルが魔獣と仲間？ 意味が分からず、カリオストロは難しい顔をし始める。

その連中の目が極端に悪いのか、頭がイカれてるとしか思えない発言である。スバルを同類とみなす理由もさっぱりだ。一応推察こそ立てられるものの、情報が少なくてふわふわとしたものになってしまう。だがそれでも何かしら分かればと目を瞑って推理を続けていけば、スバルが思い出したかのように問い返してきた。

「そういえば……フェルト達はどこに行つたか分かつたか？」

リカードはスバルだけを置いてどこかに行ってしまったが、彼女たちは別だ。

彼女らは竜車に乗るように指示をされていた筈。

しかし呈した疑問に対するカリオストロの反応は、首を横に振るところだった。

「それについてはラインハルトが目下搜索中だ。

お前があの草原からこの屋敷に連れてこられて約一日だが、あいつの力があれば難なく見つかるだろう。——殺されていなければの話だがな」

「……っ」

不穏な仮定にスバルの顔が青くなる。殺されたなんて考えたくもないが、彼らの気味の悪さを目の当たりにした彼にソレを否定する事は出来なかった。

不安がありありと顔に出てしまうスバルを見てカリオストロは自分の失策を悟り、話題を打ち切ることにした。余計な事を考えさせて体調を悪化させるつもりはない。とりあえず今は休ませてあげることが大事だろう。

「まあ、あれだ……今は何も考えずに休め。

お前が嘘をついてないのは何となく分かる、大変だった事もな。

……大丈夫だ、ラインハルトがすぐに見つけてくれる筈だ」

「……分かった。ありがとうなカリオストロ」

「阿呆、心配かけてごめんなさいの方が先だろう」

言葉をつまらせて、慌てて頭を下げるスバルを軽くカリオストロが叩く。と、部屋をノックする音と共にレムが部屋へと入り込んできた。その手に持つのはスープが入った小皿。なみなみと注がれた黄色のスープからは湯気が立ち込めており、少し遅れて芳しい香りがスバルの鼻に届いた。

直後、今更空腹を思い出したのか彼のお腹から小さく音が鳴り響く。その音を恥ずかしそうにすれば、レムはくすくすと笑い、すぐ傍までスープを持ち寄せた。

「お待たせしましたスバル君。やっぱり、お腹空いてましたよね——

どうぞ。

熱いですからゆっくり飲んでくださいね。お代わりもいっぱいありますから」

「あ、ありがとうな……いや、本当。目覚めたらおいしい料理があるって幸せだわ。

……ふーっ、ふーっ……あつつ。……うまつ!? 腕を上げてるなレム!」

「メイドは日々精進ですから。レムは皆さんを飽きさせない料理を毎日作りますよ。

……あつ、ス、スバル君ごめんなさい、大事な事を忘れていました!」

「へ?」

スバルが空腹に身を任せるまま熱々のスープをかきこんでいれば、レムが慌てて懐から何かを取り出す。独特な形状をした銀製の道具

——それはスプーンであった。

彼女は失礼します、とそのスプーンをスープに差し込み、持ち上げれば……、

「はい。あーんしてください」

「……へっ!」

「……」

「い、いや、流石にスプーくらいは食べられるっというか……」

「駄目です、スバル君は今風邪を引いているんです。

無理に動く必要はないので、全部レムにお任せください」

「で、でもな?」

整った眉目を間近に近づけた薄青髪の美少女に顔を近づけられて頬を赤くするスバルに「ほら、やっぱり顔が赤いですよ」とレムが語気を強める。純なスバルは恥ずかしがって一度は拒んだものの、レムの押しに負けて結局彼女の手ずからスープを飲む羽目になった。

……そんなやり取りを白けた表情で見つめるカリオスト口は、前もこんな光景見たことがあるな、なんて事を考えていたとか。

「おいしいですか?」

「ハイ、オイシイデス……」

かちこちに固まってスープを飲むスバルを見て心の底から嬉しうにするレム。

一方でお腹は休まるし、奉仕されることは嬉しいスバルだが、残念な事に女性に免疫がないのは相変わらず。一向に気が休まらない。

スープの匂いと共にふわりと感じられるレムの甘い香りに、密接した彼女の体の柔らかさは思春期少年にはいささか刺激が強い。故に、スバルは逃げるように話題を出す。

「それで、そう言えばエミリアさんとラムはどうしたんだ？」

ラムは多分仕事だろうけど、エミリアさんも今勉強とかしてるのか？」

本人としては何気ない質問を投げかけたつもりだ。

だが、そんな彼の質問に対し……二人の表情はぴたりと止まってしまった。

「……」

「……」

「え……あれ？ ど、どうしたって言うんだよ？」

困惑するスバルに対し、寄せていた体を一旦下げたレムは浮かない表情を見せる。カリオストロは表情こそ変えないが、しばし考え込むように黙すると……おもむろに口を開いた。

「エミリアとラムは、まだ屋敷に戻っていない」

「っ!？」

「……はい。エミリア様と姉様はラインハルト様のお屋敷を朝に出たと聞き及んでいます……まだこちらには到着していません」

スバルは更に困惑を露あらわにするしかない。後から出た自分がこうして屋敷に着いたのだ。ならば先発した彼女達が先に着いていないのはおかしいではないか。

「で。でもロズワールが手紙で呼び寄せたんだろ？ 何か急用があるって……それなら」

「スバル。それについてなんだが……あいつに問い質して見たが……その答えはこうだった。



『そんな手紙を出した覚えはない』とさ」

スバルはがつん、と何かに強く殴られたような衝撃を覚えた。

では彼女達に手紙を出したのは一体誰なのだ？

差し出し人はなぜ彼女達を早めに帰らせるような真似をしたのだ？

頭の中で行き着く思考が、ある一つの結論を見出した。すなわち、  
「罨、だったのかもしれない。……で、ですがスバル君大丈夫ですよ！

姉様はもとより、エミリア様も戦闘に秀でておられます。それに、あのお方にはパック様もついてますから……多分、竜車が故障をして予想より遅れているだけです」

大丈夫ですよ、絶対に。と諭すレムにスバルは口を開く事が出来ない。心配させまいと微笑む彼女だったが、彼にはその言葉がまるで自らにも言い含めるように聞こえてならなかったためだ。

同じ気持ちを抱いているカリオストロもまた、彼女を安心付けるように言葉を連ねる。

「レムの言うとおりで。森での戦闘を間近で見ていたお前なら分かるだろ？

エミリアもラムもそう簡単にやられたりはしないさ。信じて待てばそのうち帰ってくる」

「そ、そうか……そうだよな。」

手紙はよくは分からないけど、多分故障とかが原因だよな……！」  
しかしながらカリオストロは自身の発言を脳裏では否定していた。

(……故障はありえなくはないだろうが、手紙につられたエミリア達は何らかの罨に嵌った可能性の方が高いだろうな。あいつらの戦闘力も決して低いものではないが、例えばパックが出てこれない夜や、奇襲された場合どこまで戦えるか……)

身内すら騙される精巧な手紙を寄越してまでエミリアをおびき寄せたのだ。

綿密に練られた作戦である可能性は非常に高い。

(……しかしだ、手紙は本当に誰が出したものなんだ？ ロズワール

は否定していたが、ラムは筆跡で本人のものだと断定し、更に封蝋までメイザー家のものだと言っていた。ソレを偽装できる存在が居るのか？ それとも……ロズワールそのものが嘘をついているのか？ だが奴にはエミリアを罫に嵌めるメリットがない……」

口惜しいが情報が足りなさすぎる。真意は追々突き詰めていく必要があるな、とカリオストロは一旦思考を打ち切る。それよりも今はスバルに余計な事を考えさせないようにせねば、と穏やかな表情を浮かべ、

「だからスバル、今のところは何もかも忘れて眠ってしまえ。お前が目を覚ました時にはエミリア達も戻って来るだろう。それまでしっかり体を——」

「カリオストロ？」

「カリオストロ様？」

——休ませろ、と言い切る直前で、彼女は唐突に意識を窓へと向けざるを得なくなった。

二人はカリオストロの突然の行動の理由が分からずに問いかけるが、彼女は何も答えずにただ窓を凝視するだけ。

一体窓に何が見えているのだ、とスバルとレムが同じく視線をそちらに向ければ、

「……雪……？」

「こんな時期に……珍しいですね」

なんと暖かな陽光の中で、ちらほらと雪が降る様子が見えていた。

余りにも季節外れ過ぎる光景だが、どこか幻想的な光景でもあるその様子はレムの目を輝かせて、スバルを感嘆させる。

……しかし、一番最初に異常に気づいたカリオストロの見る目は非常に厳しいものだった。

「……レム、スバルを起き上がらせてすぐに避難させろ」

「避難？」

「お、おい。どうしたっていうんだよ」

「答えてる暇はない。早くしろ」

窓を睨み続けるカリオストロは椅子から立ち上がり、その手には魔

導書を出現させる。

並々ならぬ様子に困惑する二人。だがレムは大人しく彼女の言葉に従うとスバルに「失礼します」とだけ言っただけ肩を借りて起き上がった。

「一体何が、ただ雪が降ってるだけじゃ……!?!」

窓とカリオストロを交互に見るスバルはなぜ彼女がそこまで警戒しているのかが理由は分からない。が、彼女の視線の先にある窓の様子は先程よりも一変していた。雪の量が先程よりも増え、あれだけ明るかった外が曇り空に転化していたのだ。

そしてスバルが見ている間にも曇天は更なる厚さと広さを持ち、太陽を覆い隠して昼を夜へと変え、風を吹き荒らし、吹雪を呼び寄せていた

「カリオストロ!」

「いいから早くしろっつ、死にたいのか!?!」

怒鳴り声と共についにはカリオストロの両サイドにはウロボロスまで顕現する。

朱と蒼の二つの龍を表に出す事の意味は、強敵が出現したという事。

だが今までのような敵であれ、余裕すら見せていたカリオストロがここまで切羽詰った表情を見せた事はなかった。

一体何が待ち受けているのだ。

スバルの戦慄もそこそこに、レムも遅れて何かを感じたようだ。

「これは……っ、スバル君、早く行きましよう!?!」

「おわっ!?!」

レムは最早肩を貸すだけでは間に合わないと判断したのか、スバルをお姫様抱っこの姿勢で抱え上げて、ベッドから離れる。

驚くスバルが何もここまでしなくても、と再度カリオストロの方へと振り向けば——今まで以上の異常が彼の目に飛び込んできた。

強烈な風雪にガタガタと揺らされていた窓枠からいきなり音が消えたと思えば、小さく連続した罅割れの音と共に窓が端から凍りついていく。

瞬く間に氷に侵食されていく部屋内の全ての窓は枠を含めて一瞬で白く染まり、軋む音を立てながら罅を広げる。そして最早窓では防ぎきれない冷気は侵食するように部屋内に広がっていけば。数え切れない程の白く小さな虫が這いずり回るように壁に広がり、更に天井、床、高価な調度品、カーペットやランプまでもが一瞬で染め上げられていく。

そしてレムが窓がある方向から素早く退散したと同時に、その窓が、ランプが、明かりが、凍結に耐えきれずに全て弾け割れ、尋常ではない程の冷気が部屋内に舞い込み始めた。

「——ッ!? カリオストロ!」

「——!」

距離を取って難を凌いだスバル達に対して、その場を動いていないカリオストロには真つ先に寒威が襲いかかる。が、カリオストロの魔術書が紫に光り輝けば、瞬間的に彼女とウロボロスを中心に半径10m程の白くて薄い大きな膜が張り巡らされ始める。冷気の波は侵食することは叶わなかったのか、その膜を覆うようにドーム状に広がって霧散していく。バリアのようなものなのだろう。そのお陰でレムもスバルも含めて、全員が凍てつく事は避けられた。

しかし、異常を防いだと思った直後の事だった。

カリオストロのすぐ近くの壁一帯が窓ごと、粉々に破壊されたのだ。

ソレは風によって破壊されたと言うよりかは、何か大きな物に衝撃を与えられて砕けたと言った方が正しく。壁の破片が三人めがけて飛び散るが、ウロボロスやレムによってかろうじてそれは全て叩き落とされた。

なぞるように一筋、しかしながらぽっかりと空いた大きな穴からは見通すことも出来ぬ程の薄暗く白い景色が見えてしまっている。先程までの晴れ模様は一体どこに消えたか、全てを凍りつかせようとする異常な寒波におののくスバルとレム。

——だが彼らはさらなる絶望が先に待ち構えている事に、気付いていなかった。

『——スバル、そこに居るのかい?』

「……!？」

聞き覚えはないが、どこか既視感を覚える重低音。

口から発せられたというよりは脳内に直接響き渡るその声に、スバルは咄嗟に耳を疑う。

……どうやらその声はスバルにだけ聞こえたものではないらしい、レムもまたどこから聞こえるのかを判別しようときよろきよると見回している。一人、カリオストロだけは微動だにせず、屋敷が悲鳴を上げる程の暴風が今も入り込む大きな穴をじっと見つめていた。

そして、スバルは自らの誤解を悟った。

『……あぁなんだ、居るじゃないか——あの場に居続けてくれれば、楽に済んだものを』

「あつ……あ……あ……あ……?」

「……」

穴から覗く薄灰色の世界に、唐突に、黄金色に光る巨大な眼が宙に浮いて現れる。……いや、宙に浮いているのではない。巨大な魔獣がこの穴を覗き込んでいるのだ。

屋敷の外は白く染まっていたのではない、その薄灰色の巨体で塞がっていただけだったのだ。

相手は何故だか知らないがスバルを名指しし、冷え切った目つきでこちらを睥睨へいげいしており、当のスバルは叩きつけられる様々な悪感情に晒され恐怖から全身から冷や汗を流し、腰を抜かしそうになる。

彼を抱えるレムもまた本能的に相手と自分が隔絶した存在である事を悟り、体を震わせてしまう。だが、気丈にも内心の恐怖を押し殺して敵意を持って睨み返す事が出来ていた。

彼女を支えるのは大事な人を守らなければならないという使命感、そののみ。鬼化をするほど力みながらも何とか腕の中のスバルを守ろうとする。

しかし気圧される彼らと違ってカリオストロだけはその巨体に対して冷静さを保ち、その場に佇み続けていた。

猛風吹き付ける部屋の中、傍らの二対の龍が主人の敵意に同調するように巨体へと重苦しい唸り声をあげ、威嚇する。目の前の存在をいつでも屠ろうとする殺意がありありと見て取れるほどに。

とぐろを巻く二体の凶悪な龍に囲まれながら、カリオストロは穴から覗き込むその存在を見上げるようにして睨みつけ返した。

「ここに何しに来やがった、デカブツが」

『——盟約を果たしに来たのさ』

灰色の体毛を持つ、森をまたぐような体軀を誇る猫型の四足獣が一行に敵意を向けていた——

## 第四十一話 裏切りの代償（後編）

「盟約だあ？ 訳の分からん事を言ってるんじゃないやねえぞ」

『そちらが分かる、分からないは関係ないのさ。』

盟約は何においても優先され、必ず果たされなければならない』

「何が目的で、誰と結んだ盟約かは知らねえが……スバルを殺すことがその目的なら諦めるんだなデカブツ。どんな権利があろうともオレ様の目が黒い内は誰にもスバルは殺させない」

『反古などさせないし、してやらない。……分かるかい？ これはもう決定事項なのさ。彼はボクが直々に裁かなければならない。面倒は省きたいからそこを退いてくれるかなカリオストロ。確実に息の根を止める事は約束するよ』

「はあく……どうやら、耳はでかくてもそれを聞く脳は発達してないようだな。」

いいかデカブツ、オレ様は諦めろって言ったんだ。三度目はない。第一スバルを殺す理由を盟約と言い切るなんて、大袈裟にも程がある」

殺意を載せて睨みつけると同時にカリオストロの周りに金色の魔力が纏わり始める。それは魔力を持たぬ一般人でも認識出来るだけでなく、周りの物質そのものに影響を及ぼすほどの圧力を持っており、部屋の内部を侵食した雪や氷がその圧に追いやられるように舞い、二人の会話を黙って聞いていたスバル達も全身を押しつけるような感覚を受けた。

屋敷を覗き込む巨大な四足獣もそれを感じた事だろう。しかしながら獣は眉一つ動かさずに、カリオストロを睥睨し続けていた。

『ひとつ——勘違いを正そう』

大気を震わす声。同時に、部屋の内部に異変が起こり始める。

ぴしり、ぺきりと連続して何かが砕けるような音と共に、風通しよくなった客間の床、天井、壁に氷の棘がどんどん現れていく。それらの棘は自らの体を際限なく成長させていき、カリオストロ達の周囲に張られた薄いバリア以外を覆い尽くしていく。

大量の氷の蛇が四方八方から取り囲んで来るような圧迫感。

スバルとレムは周囲に迫る脅威に顔を右往左往し、カリオストロは苦々しい顔をする。

このまま戦闘が始まれば、自分はともかく後ろに居るスバルとレムは無事では済まないのは自明。ならば、と右手に持つ魔導書を光らせ、彼女はタイミングを見計らう。

『スバルの死は盟約のほんの一部に過ぎない。ボクの最終的な盟約の目的は——』

「レムッ！ 早くいけえッ!!」

そして言葉を言い切る前にウロボロスに命令させて通路に通じる壁を吹き飛ばし、大穴が空く。レムはカリオストロの声に応え、瞬間的にスバルを抱えて穴へと飛び込んだ——その直後、

『この世界、生きとし生けるもの全ての死だ』

多重の凍結音と共に部屋の内側があつという間に巨大な氷棘で埋めつくされ、飛び散った大量の氷片が霧のように通路内に広がった。

冷たい死が蔓延まんえんした部屋から辛うじて脱出したレムは立ち上った白煙を切り裂いて飛び出し、スバルを抱えて脇目も降らずに通路をひた走る。

「カリオストロ——ッ!!」

「~~~~っ!! スバル君、口を閉じて下さいっ！ 舌を噛んでしまします！」

担がれたスバルが必死に後ろに振り返りカリオストロへと叫ぶ。

あまりにも圧倒的な攻撃は絶望しか感じられず。よもや彼女と言えど死んでしまったのではと悪い想像を振り払うこともできずに、移動する最中も悲壮な顔で後ろを見続ける。

だが彼の悪い予想が根付く前に、部屋の壁を壊して何か飛び出してくる存在があった。

カリオストロである。

二対の龍を携えた彼女もまた服の端を白く染めながらも凍りつい



た部屋から脱出する出来たのだろう。が、スバルが目視した直後に部屋から巨大な氷柱が彼女に向けて勢いよく飛び出し、咄嗟に展開した障壁でも受け止めきれずに反対側の部屋へ吹き飛ばされて、視界から消えてしまう。

『逃げても苦しみが長引くだけさ』

そして今まきに見ている通路や部屋が魔獣の一撃により紙屑のようになり破壊され、逃げ惑うレム達をぼっかり空いた穴から魔獣の眼が見据える。彼の背後に見える灰色雲で満たされた空には既にその魔獣よりも巨大な魔方陣が宙に展開されており、魔法は今にも解き放たれようとしているのが二人に分かった。

スバルとレムの背筋に怖気が走る。

あれが何をしようとしているかは分からないが、致死の一撃には違いないだろう。

そう悟った二人は顔を蒼くしながらも、必死に逃走を続ける。

その間にも魔法陣の輝きは増していき、既に背後に光を感じるほどになれば、逃走を諦めたレムはせめてものとスバルを庇うように抱きしめて背を向ける……しかし、その時だった、

』

直後、宙に浮いた魔方陣がガラス細工のように砕けた。

一方で何が起きたのか分からなかったのはレム達二人だ。

死んだと思ったのに、魔法そのものが消えている。よもや発動に失敗したのか？

倒れ込んだ二人が共に見上げれば魔獣がまたも魔法陣を形成していた。……いや、自身の前面に全身を覆いつくすほどの魔法陣の正体、それは巨大な障壁であった。

形成された障壁が完成したと同時に、自身の体に匹敵するほどの極彩色の波動がどこからともなく障壁にぶつかり、霧散する。波動の余波を受けた屋敷の破片や瓦礫、壁などが一瞬で粉状になり、吹雪に巻かれて空にばらまかれた。

「あんなのでオレ様がやられるとでも思ってたやがるのか」

カリオストロによる攻撃だ。彼女は傍らに浮いた魔道書、両サイド

にウロボロスを従え、右手を魔獣へ向けながら悠々と吹き飛ばされた部屋から出てきた。恐らくは魔獣の攻撃を妨害したのも彼女によるものなのだろう。

対する魔獣の反応は無言。代わりに彼女の周りを覆い囲むようにして大量の魔方阵を宙に浮かばせ、物量で圧殺しようとするが、

「はっ！」

蒼と朱の龍がカリオストロを中心に、竜巻のように高速旋回。その体の一部が魔方阵に触れば、宙に浮いたそれらは、ぱきん、と小気味良い音を立てて瓦解していく。

レム達には見えた事だろう。彼女の龍達がなぞるように動くさなか、床や壁が巻き込まれれば紙細工のように削られていく様を。

『成る程……キミは分解するのが得意なのかい？』

「こと分解に関してはオレ様の上はいるが、それでも最高位には違いねえな」

反撃の時間だ。と旋回していた龍が巨大魔獣へと勢いを乗せて襲い掛かる。

対する相手は、ウロボロス達の特性を警戒して先程と同じく巨大な障壁を自身の前に展開し、嵐と見紛う程の多数の氷柱をカリオストロへと浴びせる作戦に出た。

だが彼女は同じく展開した障壁や、右手からの極彩色の波動で消し飛ばして悠々と防ぎ、ウロボロスと波長を合わせて巧みに攻撃を行う。

魔獣が展開した巨大障壁は流石に一撃で壊れることはなかったが、龍が攻撃する箇所はその組成陣が崩壊し、穴ぼこになっていく。そのため、魔獣は障壁を重ねがけせざるを得なかった。

絶対的強者同士の戦いに魅入り、その場で立ち尽くしてしまうスバルとレム。目の前で繰り広げられる文字通り格の違う戦闘は美しさがあり、見惚れてしまうほど幻想的だ。よもやこれほどまでの戦いがあるとは、と自分の命が狙われているというのに逃げることをすら忘れていた二人だが、そんな彼らに恐怖が襲い掛かる。

『——手間をかけさせてくれるね』

「!! 伏せろッ!」

「ッ!?!」

「? おわあっ!?!」

突如カリオストロがレム達に振り返って叫び、咄嗟に反応する事が出来たレムがきよとんとするスバルを抱いて床に体を投げ出す。

それと同時に事だった。

キインツ

伏せた直後、彼らの頭上を不可視の何かが甲高い音を立てて通り抜けていった。

何事だ、と転がった二人が顔を見上げれば通路の奥の奥まで続く左右の壁、柱、調度品、扉が、丁度二人が立っていればお腹の辺りの位置に一筋の線が作り上げられていた。……そしてこれはと思う間もなく、扉や調度品達はその線にそってずれる、あるいは切り離され次々に体を亡き分からせていくのが見えた。

「!?!」

「かまいたち、かよ……!?!」

彼らの頭上を通りすぎたのは魔獣が作り上げた極大かつ極冷の真空の刃だった。

真つ二つに切り裂かれた残骸を見てスバルとレムは無意識に喉を鳴らす。

カリオストロが知らせてくれねば、自分達もああなっていた事だろう。

「いつまでそこに居やがる!?! ぼーっとしてないで早く逃げろ!」

「だ、だけどカリオストロは……!?!」

『他人を気遣う余裕があるのは素晴らしいことだね。』

その気遣いを少しでもこちらにも持ってくれれば、ボクも楽に進められる』

ついに魔獣はカリオストロではなくスバル達二人を狙い始める。

カリオストロはそれを止めようと一層の苛烈さをもって敵へと攻

撃をしようとするが、一步遅かった。魔法陣が倒れこんだ二人を囲み、その空中に何重もの氷の武器が形成されたと思えば、その切っ先を二人へと向けていた。

『……確かに、仕方のない部分もあったかもしれない。』

だからと言ってスバルの行いを許せるかといえば、否だ。

スバル。キミは何も知らないまま、娘と同じく幾多の武器に貫かれて惨たらしく死ぬといい』

「やめろおおおッ!？」

「う、あ、あああああ——っ!!」

「——っ!!」

カリオストロの必死の抵抗むなしく、四方八方から氷の武器達が射出されてしまう。

スバルが絶望に悲鳴をあげ、レムは目を瞑ってこの先に起こる現実の直視を拒否する——、

『……………どうして邪魔をするんだい？ ベティー』

——しかしながら、殺意が彼らを貫く事はなかった。

彼らを危機から救い出したのはベアトリスだ。

いつの間にか彼らのすぐ傍に立った彼女は手をかざし、突き立つ筈の武器達を宙に浮いた波紋で全て弾き返していた。

「……………」

『彼らが死ぬ事とキミには関係がないはず。』

ボクは君の契約に触れるような事はしないつもりだよ?』

「……関係はあるかしら。こいつらがもしも禁書庫に入り込んだとしたらその限りではないはず。』

こいつらが死ぬのは仕方ないにせよ、せめてものこの屋敷の外でやって欲しいと思ってるのよ』

『相変わらず不器用な優しさだね、ベティー。今はその優しさすらも煩わしく思うよ。』

それで——キミも同じ考えなのかい？ ロズワール』

そしてベアトリスの背後にはこの屋敷の持ち主でもあるロズワールが佇んでいた。

ただ、いつもの様子とは大分違う。道化の装いはそのままに、彼の表情は暗く、いつもの考えの読めない飄々とした感じは鳴りを潜めていた。覇気はなく、幽鬼がそこに居る、と言った方が正しい程だ。

「……終焉の獣としての貴方とお会いするのは初めてですね」  
『質問に答えてくれるかな？』

今はキミと過去を懐かしむ暇はないし、キミも盟約の例外ではない。

これ以上、面倒はかけたくないんだけどね』

「貴方がここに居るといふ事から、大体の顛末は理解しているつもりです。」

ええそうでしょうとも。貴方は盟約に従わざるを得ない。

そして私も盟約を邪魔するつもりはないし、抵抗するつもりはない」

『では何故キミはここに立ち塞がっている？』

率先に殺されようとしているのであれば、分からなくはないけど』

「——そのつもりだったのですが、私にもまだ情というものはあつたようでして。自らの従者がむぎむぎと目の前で殺されてしまうのを見届ける程、薄情にはなりきれないようです」

ふざけた口調もなく、淡々と。掲げた片手に五色の魔力球を浮かべたロズワールは、終焉の獣と呼ばれた存在へ距離を詰め、へたり込むレム達の前に立つ。続けてベアトリスが彼の横に立ち、カリオストロもまた黙したままその隣に並び、目の前の魔獣を見上げた。

『……』

獣は背後で倒れ込む二人を庇って立ち塞がる三人に、その目を細めた。

「ろ、ロズワール様、ベアトリス様」

「……いつまで観戦を気取るつもりかしら？」

巻き添えで死ぬなんて間抜け、晒したいなら残っていくといいの

よ」

「早く行きたまーえよ、レム。スバル君は何だかんだで機転が利く子だ。」

二人で屋敷から脱出して、王都に向かうといいーき」

格式ある精霊と稀代の魔術師が背を向けたままのたまう。

その言葉にレムは何かを堪えるような表情でスバルと共に立ち上がり、通路の奥へと向おうとする。スバルもまたレムに肩を貸した状態で振り返り、カリオストロに声をかけようとするが……その前に彼女が口を開いた。

「心配すんなスバル」

スバルの心情を悟ったカリオストロが、力強く言い放つ。

彼女もまた振り返ることなく、眼前の魔獣へと敵意を乗せて睨みつけながら。

「お前達足手まといが居なければこの程度の魔獣、造作もない。後で必ず向かう」

「……っ、カリオストロ！」

「はあ……第一に、お前はオレ様を誰だと思っていやがる？」

未だ心配そうな声色のスバルに対して彼女はそこまで言い切ると、振り返って不敵な笑みをスバルへと見せた。

「——天才美少女錬金術師のカリオストロ様が、負ける訳がねえだろうが」

直後、魔獣が高速展開した多重の魔法陣が全員を凍てつかせようと閃き、

ベアトリスの陰魔法が黒色の輝きを見せて、攻撃の侵入を拒み、

ロスワールの掌の上の五色の球体は大きく膨張して拡散、魔方陣を分解しようとする動き、

カリオストロの二対のウロボロスと黄金の波濤が、魔獣を崩壊させようと飛びついた、

レム（と抱えられたスバル）は一息に通路を走り、目先に見えた階

段から階下へと逃げ去った。

『キミ達が力量の差も分からない愚か者だというのはよく分かったよ。』

それであれば是非もない、ここで屋敷ごと凍てつき、無残な墓標となるといいさ——!』

全身を覆う銀毛を逆立たせた魔獣は、その口を大きく開けて怒りを表し、本腰を入れて三人へと襲い掛かる。牽制の氷棘の嵐が終われば、大きくあげた巨腕を天高く掲げ、力を貯める素振りを見せれば、その腕の周囲がきらきらと光輝く。

詠唱光ではない、腕の周囲があまりの冷気に凍り付いているのだ。そうしてついに振り下ろされた巨大な腕は、軌跡の途中で大気そのものを凍てつかせながら三人へと迫り、ベアトリスとロズワールの障壁とかち合ったと同時に、金属同士が擦れるような音と共に周りに巨大な氷壁の花を咲かせる。甚大な一撃の威力は障壁では完全に弾ききれず、周りの部屋、通路、そして屋敷そのものを氷杭が食い荒らし、障壁を展開した二人ははつきりと顔を苦渋で滲ませながら、どうにか防いだ。

「オイオイ、お前がここで朽ちていく事を考慮してなかったのか？

デカブツ——いや、『パック』!」

スバル達という足枷が消え、守りを考える必要がなくなったカリオストロは意気揚々と仕返しを行う。自らの従者たちを瞬く間に振り下ろされた腕に強く絡みつかせて自身の魔力を送り込めば、龍達は黄金色に光り輝き、締め付けられた腕から血煙がぶわっと立ち上る。

魔獣が痛みに顔をしかめて腕を振り払い、その龍を屋敷の壁に叩きつけんとした時には既にウロボロスは離脱し、カリオストロのすぐ傍に戻っていた。……かの魔獣の腕ははつきりと締め付けられた跡の形で血肉が滴っている。どうやらあの一瞬で分解されかけたようだ。『……気付いてくれたようで何よりだね。』

ずっと気付かないで居られるのも心苦しかったところだ!』

「パックが力を持つ存在だとは最初から知っていたし、何よりお前は最初からオレ様達を名指して呼んでいた。確信を持てたのは最後の

『娘』という発言からだが。

それはともかくパツク、何故お前はオレ様達を襲う？

エミリアに一体何があったって言うんだ？

……スバルが、エミリアに何をしたっていうんだ？」

『そこまで知っていないながら結論に至れないのかい？ 天才が聞いて呆れる——スバルは我が娘を殺めた。信頼していたあの娘を無情にも剣で慰み物にした。』

そこにいかなる理由があろうと、親としてその狼藉を死以外で許すことは出来ない』

魔獣は自らをパツクだと認めた。

カリオストロがここぞとばかりに疑問をぶつけるが帰ってくる答えは要領を得ない。

何故スバルがよりもよってエミリアを殺す？

恋心を抱いていた彼がそれを為すとは到底思えなかった。

操られていたのであればまだ分かる。だがスバルは誘拐されてからエミリアと会ったという話もなく、カリオストロに話した内容に嘘は見受けられなかった。どうにも噛み合わない。追求しようとした矢先、ベアトリスが口を開く、

「待つかしらにーちゃ。スバルはどうしようもなく愚かだけれども、少なくともーちゃの娘を殺めるとは思えないのよ……操られていたという理由以外では」

彼女が自分の心情を代弁してくれた。一撃を凌いで息を整えた後も、絶え間なく吹き付ける吹雪を障壁で防ぎ続ける彼女も信じられないといった形だ。そんなスバルを擁護したベアトリスを珍しく思う。屋敷での一ヶ月間で、このつつけんどんな幼女も少しは彼に心を開いたのだろうか。そう思っているとパツクは、語気を強めてベアトリスを否定しだす。

『口を慎め小娘。そんなにもスバルが気に入ったかい？ それとも彼こそがお前が待ち望んだ人ともいいたいのかい？ 勝手な信頼と想像は結構だが事実、ボクは見た。彼が自分の意志でリアを殺した事を。何度も何度も剣を振り下ろした事を——！』



怒りに連動するように、更に吹雪の勢いが強まる。屋敷そのものが吹き飛ばされそうなほどの強風と冷波の前に、展開していた障壁がびりびりと震える。

付き合いの長いベアトリスですら彼がここまで怒るところを見た事がないのか、気圧されたかのように二歩下がる中、カリオストロも障壁を後押ししながらパツクの発言について考え込む。

スバルの発言では彼はエミリアと遭遇していないと言う。代わりに謎の集団と出会って不快な思いをしたと言う。

記憶を改ざんさせられた？ だとしたらそもそもその怪しげな集団の記憶すら消されている筈。中途半端に謎を残す理由はないだろう。

その集団がした事は、スバルに魔物の駆逐を手伝わせた事ぐらいだが——と、そこまで思い至って、ふと悪い予想が頭をよぎる。よもや、もしかしてスバルは——

「——おい、オイオイオイ。まさか、そういう事か？」

パツク。エミリアは——あの雪原に居たっていう事なのか？

スバルがエミリアを殺したっていうのは、そういう事なのか……？」

「……？」

「……」

『……ようやく気付いたようだね、カリオストロ。そうさ、娘は——』  
「姿形を変えられて、知らぬ内にスバルに殺されたっていうのかよ——  
——!!」

憤怒の形相になったカリオストロが、パツクに向けて怒りを叩きつける。

目の前のパツクの反応で確信出来た、もうただの悪い予想だとは思えない。

何故ならば、それであればスバルの言う謎の集団達の行動の理由が全て筋道が通るからだ。

彼らはスバルの一番大事な仲間を、自らの手で殺める所を見て嗤わらっていたのだ——！

『事の重大さが分かっただろうか？』

だからこそ、彼はボクに殺されるべきだと言っているんだ』

「——ッ、ああ。最悪だ。今まで考えられる中で最低の野郎共だよ。いつらは。」

だが、しかしだ。だとすればだパック。スバルは気付いていなかったんだ。その罪は」

『あろうがなからうが関係ないと言っている。もう、今は罪の所在を問う段階ではないんだ。』

奴らは罫に嵌めてリアの姿形を変えた。

スバルは気付かずにリアを殺した。

ボクは自身の力不足から、娘を見殺しにしてしまった。

その償いは、盟約で補うほかないんだ』

「に、にーちゃ……」

怒りと悲哀。それらを口調に滲ませた。パックは傷ついた腕を全面氷で覆い、更に一步、一行に向けて歩み寄る。パックの気持ちは分からないでもない。自分だって大切な存在を、ソレが故意でないとしても失うことになれば、その怒りの矛先は張本人に向かうだろう。だが幾ら相手の心情が理解出来たかといつて、スバルをみずみず殺させるかといえば……ソレは否だ。

最早言葉での説得は不可能。パックは既に覚悟を決めている。

それであればこちらも覚悟を決めて、目の前の魔獣を撃ち滅ぼすしかない。

「——」  
同情を覚悟に置き換えて、再度全身に魔力を巡らせるカリオスト口。

厳しい戦いになるだろうが、負けるビジョンは彼女にはあまり見えなかった。脳内にある数千年の叡智と経験。星の民すら単独で退けた自身の力があれば、例え相手がパックであろうと打ち滅ぼすことが可能だと自負している。最悪のケースでベアトリスやロズワールを失うかもしれないが、最低限スバルを守る事は出来る——未だ躊躇いのあるベアトリスもみずみず命を失うつもりはないのか、その障壁を

維持したままだ。ロズワールは先程から静かだが、サポートに回るのであれば頼もしい事この上ない。

そうしていよいよ戦端が開かれようとした―矢先の事だった。

「そう、最早償いは死しかないんだ」

「あ……う？」

先程から沈黙を保っていたロズワールが言葉を発したと同時に、カリオストロの口元から大量の何かがあふれ出し、漏れた。一体何が溢れたのかはすぐに分かった。血だ。

自分の体を見下ろせば、焼け焦げた匂いと共に本来胸がある部分に貴族服ごと大きな穴が開いているのが分かり、全身から力が抜けていくのが感じられた。

「ロズワール!? お前一体何――」  
「スバル君のためさ、ベアトリス」

更にロズワールはベアトリスに向けて魔法を行使する。五色の波濤は障壁をパツクに向けて展開していた彼女が防ぐには荷が重く、色取り取りの衝撃が彼女の全身に直撃すればベアトリスの小柄な身はこの世から消えてなくなってしまう。

ベアトリスが消え去ったことで三人を守っていた障壁がなくなり、凍てつく冷気が二人を叩く。主人を唐突に裏切ったロズワールにワントンポ遅れてウロボロス達が襲い掛かっていく。空間ごと削る一撃が人の身に迫る。だが、ロズワールは全く避ける素振りを見せず―右肩から左脇腹、そして左腰から右膝までをそれぞれ消し飛ばされ、身体が泣き別れる結果となった。

どちらや、と雪で覆われた廊下にロズワールの肉片と血が飛び散る。しかしながら極零下ではすぐに温度が奪われ、瞬く間にその体は凍り付いていく。

それはカリオストロも同じであり、機能不全に陥おちいった体はいう事を聞かずに膝をついてしまい、膝から下までが瞬く間に氷に侵食され

ていく。青息吐息の中、抜け落ちていく魔力をかき集めて治癒をしな  
がら、カリオストロは憎憎しくロズワールに問う。

「て、めえ——いった、い、何、のっ、つもりで……ツ!!」

「……………は、はは。……………か、賭け、は……失敗に、終——つたんだ  
……………」

そ、れ……………なら、さっ……………さとつ、ぎの賭け……………に、託……………ま——で  
……………」

肩から上だけで奇跡的に生きていたロズワールは、空虚を見つめな  
がらも呟き返す。

『スバルのため』『賭け』、その言葉の意味がわからぬカリオストロ  
は、更を問い詰めようとするが、彼は口の端から血を零したつきりそ  
の全身が凍結し……………瞬く間に吹雪に埋もれていった。

痛みと混乱でない交ぜになりながらも、カリオストロは口内から血  
を吐き出す。刻一刻と凍結していく体に鞭をうち、ウロボロスに防  
衛、そして自身は回復に専念をし、何とか現状を打開しようとする。

「はあ、つく、……………ふ……………があ?! つ、う、ゆぶ——」

しかし、現実は無情だった。

地面から突如生えた巨大な氷槍、剣、斧、数多の武器達はその矮わいく軀  
を弱弱い障壁ごと惨たらしく貫く。やはり片手落ちの状態では本  
腰を入れたパツクの攻撃を防ぐことは出来ず、カリオストロはその美  
貌すらも破壊しつくされ——見る影もない肉塊へと成り果ててし  
まった。

ウロボロスも直後に、構成されていた体が崩壊。ざらざらと砂に代  
われば猛吹雪に晒されて消えていった。

『——娘の死は賭けの一種だったと……………? 賭けの結果、魔女教にリ  
アが殺されたと?』

ふざけている。ふざけているよロズワール……………!』  
カリオストロを殺したパツクは、唐突のロズワールの裏切りと発言  
に憤りを覚えていた。

やりきれない。エミリアが駒のように扱われた事も、  
そして怒りをぶつける相手が既に死んでしまった事も。

やりきれなさを胸に抱きながら、気持ちを切り替えようとしたパツクだが……ふと、何かに気付く。

たった今殺した筈のカリオストロの体、いや正確には彼女が落とした魔道書からマナが蠢くうごめのを感じたのだ。一体何が起こるのかと見つめていたパツクだったが、すぐにその狙いを察する。

『破壊と再生、ね——キミの根源はそこにあったのか。』

ただどだカリオストロ、もうボクはキミに付き合うつもりはないんだ。

……魂ごと凍りつかせてしまえば、流石に再生できないだろう？』自身の周りの構成物質を分解して、体を自動的に再構成しようとしたカリオストロだったが、直後、無残な亡骸と魔道書ごと巨大な氷に捕らえられてしまう。

その氷はパツクの濃密な魔力で満たされた、いわば氷の牢獄。

あらゆる物質が動きを止める牢獄の中では如何にカリオストロでも無力だった。

パツクはその場に動くものが無くなったのを確認すると、ゆっくりと顔がある方向に向ける。

視線の先にあるのは壊れかけた屋敷の通路、その奥——誰も居ないはずの空間を見て、何かを探る。

『……………』

そうして、パツクはその巨体をゆっくりと移動させてその場を去っていく。

豪風を伴う吹雪は止まる事なく、廊下に残された物言わぬ軀達に次々と降り積もり、その全てを白く染めていった——

§ § §

「——っ」

「な、なあレム！俺は別に動けるから降ろしてくれても……！」

「いえ、だめですスバル君。スバル君は高熱が出て弱っているんですから、移動はレムにお任せしてください」

三人が時間を稼いでる間に階段に飛び込んだ二人。  
レムはスバルを抱えながら階下に向かった後、廊下をひた走る。  
向かう先は屋敷の出口。数多の扉を通り過ぎあつという間に出口  
に辿り着くのだが、

「……！ レム、このまま外は不味い気がする。」

外はアレ程の猛吹雪だ。防寒具もなく外に飛び込めばあつという  
間にお陀仏だぞ」

「オダブツ……？ ですがスバル君、このまま屋敷に留まるのもまた  
危険です。」

隠れるのも得策ではないでしょうし……御三方ならばきつと倒し  
てくれるとレムは信じていますが、もしも巻き込まれるかもしれない  
と考えると」

「くそっ、何か手は——」

いざ出ようとして躊躇する二人。

重厚な玄関の扉隙間からはひっきりなしに甲高い風切り音が聞こ  
えてきており、その外が猛吹雪なのは見ずとも分かった。防寒具は直  
ぐ様用意出来るものでもなく、更に言えばスバルはまだ寝間着姿。二  
人は焦燥感に駆られながらもその場に佇み考えるしかなかった。

「スバル君！」「レム！」

しかし、直後二人は同時に顔を上げて互いの目を見やった。

「……もしかして、同じ答えに辿り着いたか？」

「ええスバル君、レムも思いつきました。つい最近導入したあれです  
よね」

「「マナ・パッセージ」だ」

マナ・パッセージは先月の魔獣騒ぎでロズワールが導入した、短距  
離でのワープを実現可能にする魔道具（ミーティア）だ。試験的に運  
用されたその魔道具の使い勝手は実のところは悪いが、コレを使えば  
苦勞することもなくこの屋敷から脱出出来るだろう。その考えに  
至った二人はすぐさま玄関から離れ、離れにある地下室を一路目指し  
ていく。

「確か、移動先はアーラム村の小屋、だよな」

「はい。移動先も吹雪になっている可能性はあるかもしれませんが……元凶から離れられるならまだマシですね」  
「だな」

お喋りする間にも二人は地下室に辿り着く。

木製ではなく鉄製の扉に閉ざされたその部屋の内に二人入り込めば、倉庫としても使われていたのか様々な道具やそれらが積まれた棚、木箱が二人の目に入る。

少しだけ埃の積もった、そこまで広くない一室は二人がかろうじて移動出来るスペースがあり、その道の先は奥の扉へと続いていた。

「……スバル君、魔力結晶はありますか？」

「ああ、前に確認したつきりだけど使う奴もないから、二人分は確保済みだ」

マナ・パツセージは使用のたびにマナ結晶を必要とする。

スバルは棚にしまい込まれていた拳大のマナ結晶をその両手に抱えると、レムとともに先の部屋へと急ぐ。

ひとまずは撤退だ。後はカリオスト口達が後から必ず来ると信じて態勢を整えよう。如何に強大な敵であろうと彼女の強さがあれば、そしてあの二人が更に居ればきつと大丈夫だ。……希望を胸に抱き、いざ魔道具の起動準備を急ごうとしたが――

「な!?!」

「そ、そんな!」

――二人の目に飛び込んできたのは、破壊しつくされた「マナ・パツセージ」の姿だった。

どうすればここまで壊れるのか、多種多様の魔法が炸裂したとしか思えぬ程の有様。壁はえぐれ、床は碎け、器具はその原型をとどめぬ上に、ところどころ焼け焦げた状態。修理出来るかなど考える必要もないほど、完膚なきまでに壊れていた。

「こ、れじゃ……外には」

「……ッ! スバル君、早くこの場から逃げましょう。」

やはり、外に出て逃げる他ないようで――!?!」

「レム!?!」

急ぎ部屋から引き返そうとしたレムが口を閉ざすのにつられ、スバルがその先を見ると……倉庫入り口、鉄製の扉が小さな輝割れの音と共に隅から中央に向けて徐々に白く染まりつつあった。寒波の勢いが強くなったか、それとも追いつかれてしまったのか。ただ考えている暇はないと、レムは急ぎ凍りつつある扉の取っ手に手をかけて、開放しようとする。

「ツう!？」

が、反射的に触れた手を離してしまう。手に感じたのは冷たさではなく熱。極度に冷え込んだ物を触った事により体が誤信号を送ったようだ。

顔を顰<sup>しか</sup>め、触った指を撫でて労わろうとするレムだが、直後その顔が驚愕に変わる。

——自分の右手は、取っ手にかけて親指を除く四指が全て半ばから欠如していた。

すぐさま扉を見返せば自分が手にかけていた指が取っ手に張り付いて残されており、ただの気温の低下ではありえない異常現象に、レムは戦慄するほかなかった。

「レム、一体どうしたんだ……?」

「……いいえ、何でもありませんスバル君。」

扉が冷えきつてるので離れていてください。今からレムがこの扉を壊します」

レムはスバルに指の事を黙り、瞬時にこの扉を蹴破ろうとする。

こうなれば無理矢理にでも壊すしかない。

たとえば外が極度の零下だとしても、袋小路ではどの道終わりになつてしまうのだから。

だがそんな決意をあざ笑うかのように氷の侵食は更に早まる。いまや扉は完全に白く染まり、入り口付近の道具達や床、天井、壁が見る見るうちに侵食され、徐々にこちらへと近付いてくる始末。

「——ッ！——ッ！——くうっ」

堅く、大きな氷にハンマーを打ち付けるような音が部屋に響く。

芯まで凍った鉄の扉は、鬼化したレムですら蹴り上げてても凹むだけ



で破壊できず、出来ても表面を覆う氷が削れるだけ。そしてそれらの氷はすぐさま生み出されていく。

蹴るたびに革靴が張り付き、ソレを強引に剥がすしてまた蹴り上げるために、最早靴は靴の体をなしてはおらず。素足が見えかけたところで無駄を悟り、レムは蹴るのをやめてしまう。

「ど、れだけ堅、い……氷、なんだよ」

「ごめ、んなさいスバル君、何故だか周りの、マナも薄くて、力が……魔法も……」

両手で肩をかき抱いて震えるスバルにレムが謝る。

鬼化したレムの角は、平常時よりも弱弱しく光るだけ。その理由はパックが屋敷近辺を凍りつかせようと一帯のマナを消費し続けていることが原因だが、レムには知る由もない事だった。

密室と化した地下室は今や冷凍庫と見まがう程の冷気で包まれ、スバルもレムも寒さの前に動きが徐々に鈍っていく。吐く息は瞬く間に凍りつき、両手足が痺れだし——ついに、熱を出して弱っていたスバルはその場にひざまず跪いてしまった。

「ぎ、むい……っ、寒い、さむい……さむ……」

「す、スバル君っ……！……ふう、う、ふうっ……！」

レムもまた同じだ。最早扉を壊す力はなく、氷に覆われた床に張り付いてしまった足をなんとか剥がして寒さに震わせるスバルの元へと移動する。

足の皮が剥がれ、剥がれた先からまた凍りつき、そしてついに片足は中ほどからぱきり、と折れてバランスを崩す。咄嗟に片手を床につけば手もまた凍り付いてしまう始末。だが、それでも尚。強い意思でもって、スバルの元にたどり着き、レムは震えるスバルを優しく抱きしめる。

「大丈夫、です……スバル君、レムが。レムがついています……」

「……さむい……さむ、いよ……」

「……だい、じょうぶですよ……レムが、あたたため、てあげます……から」

抱き合った二人の表面から、ぴしり、ぴしりと凍りつく音が聞こえ

る。

刻一刻と失われていく体温に、最早動かす事も出来ない体——互いの頬がすり合わさった状態で、このまま死ぬのだろうとレムは考えた。

だが、それでも尚レムは……今の状況に喜びを覚えていた。

せめてもの最期の時まで大事な人と抱き合い、死に至れる事が出来てよかったと、そう考えていた。

互いの鼓動の音が弱まっていく事がはっきりと分かる。

もう目をあけることも出来ない。

それでも、この腕の中に居る人を一人にさせることはなかったのだと。

「すば ん さいごで れむ が」

『——もう何もかもおしまいなんだよ、スバル』

動く物の居なくなつた地下室に声が響けば、直後天井をぶち抜いてパツクの巨腕が振り下ろされ。氷像は瓦礫と腕によつて粉碎——細かな氷の破片となつてあたりに飛び散つた。

## 第四十二話 午後八時の鐘の音②

世界が一点に向けて再度収束する感覚。

全身に走るありとあらゆる逆感覚を一身に受ける最中、不思議な感覚を覚える。

意識だけとなった自分のすぐ傍に、誰かの存在を感じるのだ。

それは知っているようで知らない、不思議な存在。

それは要領を得ないのに明瞭な、得体の知れない存在。

何もかもが塗りつぶされたかのように黒いそれは鼻に残る、煮詰めすぎた果実のような甘い甘い香りを漂わせながらも、巻き戻る時の中で身動きの取れない自分に向けて手のようなものを伸ばしてくる。

「■■■■を■■■■」

手が頬に触れる。

今にも壊れそうな物に触れるような力で。

顔を近づけて囁く。

慈しむような仕草で、慰めるような声で。

「■■■■を■■■■」

間近にある筈の顔は見えない。

闇を覆っているその体格もぼんやりとしか知覚出来ない。

なのに、自分にはその相手が女性だというのがすぐに分かった。

「■■■■を■■■■」

多種多様な感覚が脳から奪われ／戻っていく最中も、彼女の言葉だけが砂に垂らされた水のように浸透する。

落ち着く声だ。

気持ちのいい匂いだ。

そして、優しい願いだ。

彼女が願うのであれば、その言葉に従いたいと自然に思ってしまう。

「■■■■を■■■■」

——だがそんな事。願われるまでもない。

心に植えつけられそうになった意識を振り払うかのように、頬を触

れる手を剥がす。

顔すら見えぬはずなのに目の前の女性が驚いたのが分かった。

■■■■を■■■■やる？

そんなの当たり前前的事だ。

指図されずとも自分の意志でしてみせる。

■■■■のためにも、そして自分の為にも。

見守る事しか出来ないお前に言われてやることではない。

失せろ、と裂帛の気迫を視線に載せて睨みつけてやれば——彼女はしばしこちらを見つめた後、暗闇に溶けて消えていった。

収束点は、気付けばすぐそこにあつた。

§ § §

意識を揺さぶる、よく響く金属音。

それが鳴らされる度に不明瞭だった意識が世界を認識していく。

4回。5回。6回。7回。

8回目でスバルの世界が色を取り戻し、そして音の正体に気付く。

……柱時計の鐘の音だ。

その音はきらびやかな衣装を身に纏った様々な人がひしめく会場内を満たし、辺りのざわめきを少しずつ抑え込んでいく。

最早人々の注目は料理や雑談に興じていた相手ではなくなりつつある。

彼らの興味は視線の先にあるのは小舞台、そこで行われるであろうお披露目にこそあつた。

関心が徐々に一箇所集まりつつある中、スバルの視線だけは目の前にいた女の子に注がれ続けていた。

「えっ……っ？」

スバルには今居るこの場所がどこなのか判断がつかない。

きよろきよると辺りを見回したり、見慣れぬ自分の姿を確認してしまふ。

右手に持っていたのは金色かつ透明な液体が入ったワイングラス。そんな自分の格好は……執事服ではない、タキシード？

なぜ自分はここに居る？ なぜ自分はこんな装いになっている？

それに——目の前の糸目顔の少女は誰だ？

どこか既視感のある光景の中、彼が周りから得た情報を元に現在の状況を把握したのは数十秒後の事だった。

”ここはラインハルトの屋敷、そのパーティー会場”

”今はお披露目の直前、午後八時丁度”

”自分もお呼ばれされて参加、お披露目が行われるのを見知らぬ少女と待っていた”

その把握を皮切りに自分の中で渦巻いていた『なぜ』が、直前の記憶と共に紐解かれていく。

屋敷に戻った後、唐突に現れた巨大な魔獣が襲い掛かったこと。

巨大な魔獣を、カリオスト口達が食い止めて自分達を逃がしてくれたこと。

逃げようとした後倉庫に閉じ込められ、レムと共に凍てついて果てたこと。

スバルは寒くもないのに、その両手で自分の体をかき抱く。

あの惨劇の後に記憶がなく、見覚えのある光景に戻ったという事。それが意味する事はただ一つ——自分は、死に戻ったのだ。

「……………」

唐突に挙動不審になったのを何事かと思ったのか、目の前の少女……確かポルクスと名乗ったか。彼女もスバルを真似するようにキョロキョロと周りを見渡した後、大きく首を傾げてこちらを見ていた。

「……………あ、ああ悪い悪い。な、なーんか体がむずがゆくつてき」

「……………そう？」

だが依然として不思議そうにこちらを見つめてくるポルクスに何でもないと思魔化すと、スバルはそそくさとお披露目が始まる前に

パーティ会場から離れようとする。

あの子の事を考えている暇はない、まずはカリオストロに会わねば。

恐らく彼女もこちらの姿を探しているだろう。

前の世界で命を賭けて自分を逃がそうと奮闘していた彼女に、一刻も早く会いたい。

スバルは逸る気持ちを抑えて静かに扉を開けて廊下に出れば……願った通り、廊下奥にカリオストロがいた。彼女もまたスバルを見ると小走りでこちらに駆けてくる。

死に戻りの影響なのだろうか、その顔色は普段よりも幾分か悪そうに見えた。

「カリオストロ！ ……大丈夫か」

「……慣れはしてないが、別に平気だ。すぐに落ち着く。……スバル、お前の方も平気か？」

「……大丈夫っちゃ大丈夫だ。割とショッキングなのは違いないけどな……。」

なんつーか、唐突過ぎて訳が分からないって言う気持ちの方が大きくてな。

……しかし……久々にやっちゃまったな。今回のセーブポイントがここで助かったというべきか、なんとというか……」

事の真相を知らないため、一連の事件はスバルにとって困惑の方が強かったらしい。

セーブポイントの事も含め、それは幸いなことだとカリオストロは素直に思った。

スバルが自分自身の手でエミリアを殺したのだと気付いてしまえば、彼の精神は再度大きな傷を負う事だろう。最悪、粉々に砕けてしまいかもしいれなかった。

悪辣すぎる謎の集団達の所業に改めて怒りを覚えながらも、カリオストロは冷静になろうとこめかみを指で押さえて深呼吸する。

「……とりあえず、エミリア達を呼ぶぞ」

「状況のすり合わせは先にしないのか？」

「大体の事はオレ様の頭に入っている。

一応確認はするが……お前はレムと共に屋敷から脱出する前にやられたか、

あるいは脱出直後に氷漬けにされたか、そんな感じだろうか？」

スバルの反応を見るに強すぎるショックを受けているようには思えない。

という事は、パツクが苛め抜いてスバルを殺した訳ではないと推察したカリオストロだったが、彼はその言葉を受けてかなり落ち込んだ様子で話はじめる。

「ああ……マナ・パツセージで逃げようとしたんだが、ソレがなぜかぼろっぽろに壊されててな。

魔道具のある倉庫の中で、二人して氷漬けになった……って感じだ。

レムは……レムは凍りながらも最後まで俺のことを守ろうとしてくれたよ」

「……悪かった。あれだけ啖呵たんかを切った手前、申し開きようもねえ。

予想外の出来事があってアイツを倒しきれなかった……」

「謝ることないって!? いや、アレはマジで規格外過ぎだ。

訳の分からない理由で殺されるのはたまったもんじゃないが……まあそこは切り替えるからさ」

かなり申し訳なさそうにする彼女にわたわたと手を振って取り繕うスバル。カリオストロは彼の優しさに罪悪感を覚えながら、マナパツセージが壊されていた理由を何となく悟る。恐らく、逃げ道を絶つたのはロズワールなのだろう。

唐突な裏切り。「スバルのため」という発言。そして「賭け」という言葉。

全てを把握出来た訳ではないが、ロズワールの狙いがあるのかは臆おぼろげに推理が組み上がりつつある。だが、今その考えに没頭するつもりはないと思ふの隅に追いやると、再度口を開く。

「とにかくだ、今回の話はエミリア達二人を交えてすぐに話す。この事件の切欠は二人の失踪だ。」

あいつらを失踪させないためにも手紙の主の狙いを外す必要がある」

「だよな、手紙は二人を狙った罫には違いない。……でも狙いを外すってのはどうするんだ？」

「単純な話、待ち伏せする場所と時間は決まってるんだ。」

例えば時間をずらして通るとか。そもそも屋敷に留まり続けて待ち伏せ場所に近付かないとかだな」

「なるほどな」

二人はすぐさま足早にエミリア達が向ったと思う控え室へと急ぐ。直前の記憶を掘りおこしながら二人で屋敷の奥へと進んでいく。

具体的な部屋こそ分からない二人だったが、探す手間はすぐに省けることになる——屋敷奥の部屋からフェルトと思しき存在の声が聞こえたからだ。声のする部屋へと急ぎ駆け込めばそこにはラインハルトに突っかかるフェルトと、それをおろおろと見守るエミリア、そして呆れ顔のラムの姿があった。

「困りますフェルト様」

「いやだね、なんで貴族どもにあたしが媚びなきやならねーんだ？」

たとえ一言だけでも喋らないつつたら喋らない。挨拶なんてなくてもいいだろうがよ。

あたしは前々から嫌だつて——あん？」

いつぞやに見た彩りのよいイエローのドレスを来たフェルトは眉間に皺を寄せてラインハルトにガンを付けていたが、二人の乱入者を見ると途端にその表情は変わる。遅れて気付いた三人もどうしてここに、と言いたげな表情をこちらに向けた。

「おお、久しぶりだな兄ちゃんと魔法使いのちびっ子！」

「？ スバル……カリオストロまで血相変えて一体どうしたの？」

こちらの表情を見てまず怪訝そうにしたのはエミリアだった。再開出来たエミリアの顔を見てスバルは少し嬉しそうな顔をするが、すぐに顔を引き締めてその場に居る三人に話を始める。

「悪い、ちょっと問題が起こった。少し……二人を借りてもいいか？」

ラインハルト」



「火急の用かい？」

「ああ、マジで陣営の今後を脅かす程の大事な大事な用だ」

「……バルス、それはどういう事なの？」

スバルの発言にラムが眉根を寄せて問い質す。

対してラインハルトはスバルの口調と後ろに控えるカリオストロの表情を見て考え込む。

これから行われるお披露目の事を考えているのだろう。間もなく行われるのはフェルト陣営の決起会でありエミリア陣営との結託を示す場でもある。仮にも遅らせたくはない。……だが思考する彼の背中をぼすつと叩く存在がいた。

「渋るんじゃないよラインハルト、重要な用って言ってるんだ。

それとも話ぐらいさせてやれねえ程、剣聖つてのは狭量なのか？」

フェルトである。彼女はぼす、ぼすと継続的に背を叩いてはラインハルトを軽く睨む。

それはフェルトなりの優しさ……だけではない。蓄積した彼への文句とやつかみの発散と、この集まりそのものがおじやんになる事を期待しての行為でもあった。

当然ラインハルトもフェルトの思惑には気付いている。しかし、そんな思惑が見え隠れしようとも、その発言を断れるほど彼も鬼畜にもなりきれなかった。

「……申し訳ありません、少し打算的な事を考えていました。ソレでは我々は席を外しましょう」

「ゆつくり話してくれよなく、ぶっちゃけ中止になるくらいの長話を希望するぜ」

ラインハルトは小さく頭を下げ、フェルトは朗らかな笑顔を見せて部屋を退室。

個室にはエミリア陣営だけが残された。

「それで、どういう事なのかしら。」

陣営の今後を脅かす内容、是非聞かせて欲しいものね」

「……オレ様から話させて貰おう。端的に言えば、『スバルが未来を視

た」

個室が静寂に染まる前に口を開いたラムの言葉を受け、カリオストロが口を開く。

その言葉はエミリア達の表情を変えさせるには相応しい内容であった。

二人が咄嗟に思い浮かんだのはあの森での事件の事。

スバルは今回何を見たのか、彼女の言葉に本腰入れて耳を傾けていく。

「そこで視た未来はエミリアとラムが失踪し、オレ様含めスバルと屋敷の面々が氷漬けになって死ぬ。……そういう未来だよな？ スバル」

一応スバルだけが未来視出来るのだという事をアピールするために彼に話を振れば、彼もソレを察して首を縦に振った。

そうしてカリオストロの説明は続いていく。

お披露目後、ラインハルト邸で一泊した翌日に、ロズワール直筆と思われる手紙が届く事。

それを受けてエミリア達が朝早くから屋敷にとんぼ帰りする事。

フェルト奪還のためにラインハルト邸に忍び込んだロム爺が、商人と結託してスバル共々フェルトを連れ去るであろう事。

途中でスバルが謎の集団に出会い、魔物退治を手伝わされて雪原に放置された事。

雪原に放置されたスバルをカリオストロが回収し屋敷に戻っても尚、エミリア達が帰ってこなかった事。

直後、屋敷において四速歩行の巨大な魔獣に襲われて、ロズワール、ベアトリス、カリオストロの三人で撃退しようとしたが敵わなかった事。

そしてスバルとレムが二人して凍死した事。

尚、皆に説明された内容は全てではない。カリオストロは意図的にロズワールの裏切りの事や、巨大な魔獣がバックである事をぼかしていた。

前者は余計な混乱や対立（特にラムを警戒して）の事。

後者はスバルがエミリアを殺した事に辿りつかせぬ為の配慮であつた。

……説明が終わつた一室に沈黙の帳とばりが降りる。先に待ち受けている未来はあまりにも重く、何を言えいいのか分からず全員が黙ってしまう。

知らされた二人の内、エミリアの反応は特に顕著だ。その白い顔を誰よりも真つ青にしている。恐らくは誰が屋敷の面々を死に至らしめたのかを理解しているのだろう、口を開こうとしては閉じることを繰り返していた。

「……偽装の手紙。他陣営の妨害かしら。間違ひなく私達を罠に嵌めるつもりね」

「確たる証拠は明日の朝に届くから信じろとしかいえないがな」

「いつそ信じられないと断じる事が出来ればどれだけ幸せなのでしょうね。」

残念な事に前回のことがあつてそうする事が出来ない、考慮するしかないでしょう……全く。エミリア様、大丈夫ですか？」

「……………あ、えっ？ あ、え、えつと…………う、うん！ 大丈夫よ」

「本当に大丈夫かエミリアたん？ まあこれから死ぬかもしれない、なんていわれたら誰だつてそうなるよなあ…………」

スバルがエミリアをねぎらう中、全員が状況を把握したところでカリオストロが手を軽く叩いて注目を寄せる。

「よし、じゃあこれから起こる事が分かつたところで対策を練るぞ。」

今回の事件の鍵は手紙だ。精巧に作られた偽の手紙はエミリアを呼び出すことを目的としている。誘拐か、はたまた襲撃か。犯人や目的はなんであれ、その狙いを外すのが一番重要だ」

「だとすれば一番良いのは手紙の内容に従わず、ここに泊まり続ける事じゃないか？」

「待ちなさいバルス。屋敷を襲つた巨大な魔獣のことを忘れていいのかしら。レムや、ロズワール様、ベアトリス様も危険じゃない。この事を一刻も早く伝える必要があるわ」

ラムが冷静に指摘をすれば、スバルはそうだったと腕を組んで考え

を改める。

「……そうだよな。あの言葉が喋れる魔獣は世界そのものを死に至らしめるとか物騒な事言ってたし。みんなを絶対に失いたくはないから、最悪避難させるぐらいはさせたいよなあ……」

「……」

二人の発言を聞いて、再度エミリアは表情を曇らせる。

未定の未来とは言え、その魔獣は十中八九パックだと分かっているからこそ罪悪感があった。遠まわしに自分が原因で皆が死に至らされたと考えると胸が張り裂けそうで、だがその事を打ち明けるには非常に覚悟が必要、口はあまりにも重かった。

もしかすれば関係すら壊れるかもしれない——だがそれでも、とエミリアは覚悟を決める。皆のためになるなら例え嫌われようとも——しかし両手を握りしめて告げようとした矢先、気付けばすぐ傍に近寄っていたカリオストロが互いの手の甲をさりげなく触れさせており、彼女は意識をそちらに向けざるを得なかった。

「あつ、えつと……どうしたの?」

「——魔獣について、エミリアが何を言いたいかは分かっている。だが今は秘密にしておいてくれ」

タイミングを逸したエミリアに、カリオストロは顔を向けずに小さく呟く。

その言葉に彼女は驚くしかない。パックの秘密については詳しく説明すらしていなかったはずだ。一体どこでその話を……と聞こうとしたが、その横顔は真剣そのもの。彼女が何を考えてそう願っているのかは分からないが、全幅の信頼を寄せている彼女がそう言うのだ。秘密にしておこう、と心に決め、自らも検討に混じっていくのだった。

「私としては屋敷の皆が心配です。

危険を省みても早く屋敷に戻るべきです。……ただ、まずはこのお披露目を終わらせましょう。」

今回の件が終わった後に、陣営同士の齟齬そごが出来るのは良いとは言えないわ」

ラムの提案は陣営優先だ。陣営目線で一番メリツトの多い選択をしようとしている。

「とは言え屋敷に戻れば、その途中で襲われる可能性もある。

未来ではエミリアとラムの二人で帰ったから全員で帰れば戦力も増えるとしても、どんな襲撃があるかは分からない以上、絶対に大丈夫とは言い切れない。更に屋敷では件の魔獣の件もある。

オレ様としてはほとぼりが冷めるまでこの屋敷に留まり続けた方がいいと思う」

カリオストロは前回のロズワールの裏切りもあつて、屋敷に戻ることにそのものを忌避。

確実にこの場に居る面子が生き残る、言ってしまうえば保守的な策を提示する。

「えっと、じゃあこつちも手紙を出すのはどう？」

私達はこの場に滞在し続けて、ロズワール達にそこは危ないから避難してって内容で早便で屋敷に出すのは？」

エミリアはカリオストロに同調するのと同時に、全員を助けようと二人の折衷案を出す。

「いや、それだと手紙が間に合うかどうかはネットクになると思う。

俺としては偽手紙が届く前に今すぐここを出て屋敷に戻る事を提案するぜ。

レム達もやっぱり心配だしな、待ち伏せに関しては遠回り……普段使わないルートで帰るってのはどうだ？」

スバルも皆を助けることを主題とし、全員での帰宅を提案。

その代わり来て早々この場を発つ必要があつた。

四者四様の意見はあちらが立てばこちらが立たずで中々統合が難しく、意見こそ割れていったが……最終的に時間の関係から最も現実的で、最も賛同が得られる案が取られた。

「——俺の案かよ!？」

「なんでそこで貴方が一番驚くのよ」

スバルの案である。本人としては（特にカリオストロに）否定されるだろうなと言う思いで出していたのだが、全員を救い出すという点

でエミリアとラムに賛同され、更に今すぐに行動するという発言がカリオストロにも受け入れられていたようだ。

「となると、ラインハルトには申し訳ないけど今日の所は断りを入れるしかないわね」

「正直、そこだけは申し訳つかねえけど……」

「ううん。こっちも確かに大事かもしれないけど、皆の命なんて比べる事も出来ないわ」

「……私としては、ほんの少しだけでも挨拶して頂きたいのですが……」

「オレ様としても戻る事そのものが勧められねえけどな。

ただ、やるんだったら時間が勝負だ。確実に成功させるためにも、今は一分一秒が重要惜しい」

多少の懸念はあるものの、めでたく全員の方向性が決まれば行動開始である。

個室から出てエミリアを先頭にラインハルトを探そうとすれば、部屋から少し離れた場所にフェルト共に立って何か話していた。どうやら二人の間ではまだ交渉が行われているらしい、ラインハルトが彼女をとりなす様子が見えたが、エミリア達に気づけば彼はこちらへと向かってきた。

「ごめんなさい。お時間を取らせてしまつて」

「構いませんエミリア様。それで……話は纏まりましたか？」

「ええ……スバルとカリオストロから事情について聞きました。

その上で更に謝ることになるのだけれども……ごめんなさい。私たちはこれから屋敷に戻る必要があるみたい」

その発言にラインハルトは目を小さく見開く。よもやの展開に後ろで様子を見守っていたフェルトも目を見開き……次の瞬間、勝ち誇った顔をしだした。

「少しは予想しなくてはなかつたですが、そこまでの内容でしたか」

「本当にごめんなさい。折角のお誘いなのに土壇場でキャンセルすることになってしまつて」

「いえ、陣営の今後を左右するのであれば致し方ないでしょう。」

……何か、こちらで手伝える事などはあるでしょうか？」

「それであれば……えつと、厚かましいのだけれども竜車を一台お願いしてもいい？」

「ちよつと急ぐ必要があるから、出来るだけ速いのをお願い」

ラインハルトは彼女のお願いを嫌がることもなく承ると、近くに居た執事にそのように伝える。

来て早々に帰る事になるなんて、誰もが予想しないだろう。ましてや今後起こる未来だなんて誰が予想出来る？ 二人のやり取りを見ていたスバルもまたラインハルトに申し訳なさそうな顔を向けるが……ふと、その横にいたフェルトに視線を寄せると彼女は丁度誰に言うでもなく、呟くところだった。

「あー残念だなー、帰つちまうかそつかー。あーいや悪い悪い。まあ、でも今後の陣営を左右するんだもん？ 解決出来る事を心から祈ってるぜ姉ちゃん達！ しっかし同盟組む筈の相手が帰つちまうってんなら今日のパーティーはもう中止しかねーよなー、いんやーマジで残念だぜー！」

「めつちや喜んでやがるなコイツ……!？」

まさしく喜色满面。お披露目にそもそも出たくなかったフェルトとしては、エミリアの提案は渡りに船だったようだ。独り言にしては大きな声で内面を吐露しては、早くこのドレス脱ぎてーとか、早く眠つちまいてーなどとぐだまいている。

「フェルト様。エミリア様達はお帰りになられますが、会自体はこのまま行いますので「ええーッ!？」それはともかく……今回の話はまたいずれお願いしてもよろしいでしょうか？」

「何から何まで本当にごめんなさい。そしてありがとう。」

ええ、それはこちらからもお願いするわラインハルト。今度はこっちも何か手伝わせて頂戴ね」

お互いに顔を下げて簡単なやり取りを行う中、スバルはそう言えばと思隣にいるカリオスト口をつつき、耳元で囁く。

「……フェルト奪還作戦が秘密裏に進行中って伝えた方がいいよな？」

「……やめとけ。お前のその情報の元を明らかに出来ない以上、要らぬ嫌疑がかかるだけだ」

言われて見れば、と考える。

よもや馬鹿正直に未来予知が出来るんです、などと言っても信じられないだけだろう。死に戻りも然りだ。

それに、スバルとしてはラインハルトには悪いがフェルトの境遇を思えばロム爺と引き合わせたい気持ちがあり、カリオストロの言うとおり黙したままで居てしまう。

——もしも、ここで少しでもラインハルトに注意を投げかけていれば、一行が辿る未来もまた少しは変わったであろう。

スバル達は気づかなかつた。ラインハルトが瞬間的に、内密に話す二人に視線を向けていたことを。

「エミリア様、竜車の準備が整ったようです。執事に従い、玄関までお向かいください。」

……大変申し訳ないですが、我々はこのまま会に向わせて頂きますので見送る事は出来ません、ご了承ください」

「ううん、当然だと思っわ。むしろここまでしてくれてありがとうラインハルト。」

今後の話はまた後日調整しましょう」

「え〜、もういいじゃねーかよ。また今度にしよーぜ？ な？ あたしは乗り気じゃないし、向こうも大変そうだし。やっぱり皆の準備が万全な時にだな……」

フェルトが臆面もなくぶーたれるがラインハルトはさらりとした涼しい顔を崩さない。

どうやら何が何でも会そのものは開くらしい。

そんな彼女の様子を苦笑しながら見ていたエミリアは、最後に大きく腰を曲げて感謝を表す。

遅れてラム達も頭を下げれば、ラインハルトも片手を前に回して同じく頭を下げ、フェルトを連れて踵を返して会場へと向かっていく。

一行は用意された竜車に乗り、屋敷へと出戻っていくのだった。



## 第四十三話 疫病神

とつぷりと更けた夜空に瞬く星達がきらびやかに輝くのが窓から見える。

月明かりに照らされた薄暗い廊下を1人寂しく歩く時は、よく意識がそちらに向いてしまう。

誰もいるはずもない広々とした廊下は静まり返り、今日も何者の気配も感じられないのだから。

(だからと言って、見回りを止めるといふ選択肢はありませんが……)

時刻は間もなく日付を超えるかという所。

レムは静寂で満たされた屋敷の中をカンテラ片手に練り歩いていった。

それは就寝前の見回り——いつもなら姉のラムやスバルとで手分けして行うこの行為もその二人がいなければ代わりに1人で努める必要があるが……やはりかなり時間がかかっている。今になってようやく住人が8人と両手の指を超えそうな人数が住んでいるこの屋敷だが、8人でも過剰なほどの部屋数を誇る。早いところ終わらせなければ早々に朝になってしまいうだろう。

そうして鍵のかかった部屋を空けては中を確認し、空けては中を確認する事、早50回以上。自身の中で沸き立った飽きを他ごとを考え追いやりながらも続け——ようやく終わりが見えてきた。

「この部屋で最後……ですね」

案の定誰も居ない空き部屋の中を点検し終わればひとりでに溜息が漏れる。

予想以上に疲労がたまっているのかもしれない、そう判断したレムは扉を閉めて自室へ向けて踵を返す。

あとは休むだけ——だが、眠る前に1日の疲れを癒さなければならぬ。そのために必要なのはレムの1日における数少ない楽しみと言つてもよい行動をする必要がある。

それ即ち、『湯浴み』である。

小さい頃から屋敷に住み続けていたレムにとって豪華絢爛な浴室も慣れ親しんだものであるが、幸いにも彼女はちつとも飽きることはなかった。

浴室に立ち込める蒸気が肌を覆う、慎ましくも暖かな感触。

全身に纏わりついた汗や汚れを白湯で流す開放感。

そして人肌より少し熱い液体に全身を浸からせた時の至福の一瞬と来たら！

飽きなんて来るわけがない、可能であれば1日中入っけていても構わないと考えている。

ずっと暖かな湯の中でたゆたえるなんて常識的に考えても幸せでしかないだろう。いつも一緒にいる大好きな姉が隣で一緒にたゆたってくれるのなら、尚の事幸せだ。

入ってもいないのに上機嫌になるレムがそのように湯船への想いを募らせていると……ふと、ある考えが思い浮かんだ。

そう、もしも。もしもだ。仮の話ではあるが……スバルと一緒に入れたら、どうなのだろうか？

湯船に二人で浸かり、肌を寄せ合って温まったら、自分は思うのだろうか？

そう考えた瞬間、レムの顔はぼふ、と暗闇でもはつきりと分かるくらいに赤くなった。

何を素敵な、いや不埒な事を考えているのだろう、そんなの方が一にもありえない。妄想甚だしい荒唐無稽な内容だ。だってあの優しいスバルがそんな事をするだろうか？ ……だというのに一度想像してしまえば、こびりついたかのように脳裏にその光景が思い浮かんでしまう。

彼はそういう人ではないが、時々抜けている所がある。ならば自分が入っているときに間違えて入って来てしまうことだつてあるかもしれない。そんな時、自分ならどうする？ 姉様が居るならお帰りいただくが、もしも自分だけだったら？ 毎日頑張っているのだ、背中くらい流してあげるのも吝かではないかもしれない。いや、そうするべきだろう。そうなれば向こうも自分の背中を恥ずかしがりながら

洗って——そこまで考えて、自分がその場で立ち止まっている事によやく気づいた。

レムは未だ顔に残る熱を感じながら俯うつむき、自室へと向かう速度を速める。

こんな事を考えているのは間違いなく疲れている証拠だろうと自己正当化を行いつつ、歩きながらもこびりついた無為な妄想を剥がすのに苦勞していると——

視界の隅、正確には窓の外で何かが動くのが見えた。

「——？」

立ち止まり、改めて窓の外を見やる。

窓枠の向こうに広がるのは生い茂る森林とアーラム村へと続く道。

その道を逆送してこちらに向うのは、1つの竜車だ。

こんな夜更けに竜車？ 一体誰が来るのだろうか、レムはその足で玄関まで移動する。

よもやお披露目に向ったエミリア様達がお戻りになられたのだろうか？ しかしながらまだ一行が出立して2日しか経っていない上、向こうまで最短でも1日かかる事を考慮すれば考えづらい。だとすれば速達だろうか？ 外に出たレムがカンテラを頭的位置まで掲げて竜車を見れば、

「ね、姉様……!?!」

竜車の御者は見覚えのある自分の姉、ラムだ。たった今思考の隅に追いやったばかりの考えが当たった事にレムは少なからず狼狽し、玄関ひいては自分の前に止まった竜車の前で立ち尽くしてしまう。

これは一体どういうことなのだ。何か起こったのかと姉に詰めかけようとしたレム。

しかし直後竜車の扉から飛び出したスバルにその手を取られてしまふのだった。

「ふえっ!?!」

「れ、レム！ 大丈夫だったか!?!」

変な魔獣とかに襲われていないか!?! あと、雪とかも降っていないよな!?!」

「え？ え、え……ええつ？ ま、魔獣？ 雪？

す、すすスバル君、い、一体全体何事ですか……っ!？」

近い近いは顔が近い。そして両手で握り締められている手に意識が行ってしまい、冷めかけていた顔が再度茹ったかのように赤くなつていくのが自分でも分かった。

普段能動的にスバルにアクションされる事がなかったレムは、ごつごつしているけど綺麗な指をしていて、でも握るとやっぱり男の子なんだって思わせる強くて細い指（レム談）で握り締められ、普段は鋭いけど誰かに優しくしようとする時柔らかくなるその目（レム談）を寄せられると否が応でも先ほどの妄想を思い出し、その顔から目が離せなくなってしまう。

対して沸き立つ混乱と嬉しさに絶賛翻弄中のレムを見て、スバルは手を握ったまま要点を説明しようとする。

「落ち着いて聞いてくれレム、実はこれからエミリアさんとラムが失踪して、俺がそれで拉致された後屋敷に雪が降って、巨大魔獣が俺達に襲い掛かって——!」

「えええ？ ええつと、あ、あのレムは……レムはまだ覚悟が……!」  
「……まずは貴方が落ち着きなさいバルス」

ため息をついたラムがスナップを効かせてスバルの頭を叩き、響いた小気味のいい音に別世界に旅立とうとしていたレムも帰還する。二人を傍観していたエミリアとカリオストロはそんな二人を生暖かい目で見つめて続けていた。

「んふふ☆☆」

「出来るなら二人だけにしてあげたいけど……」

ニヤニヤと笑うカリオストロに、苦笑するエミリア。

対比的な二人の表情に我に帰ったレムはいっそう顔を赤くしてしまう。しかしながら握られたその手を決して振りほどこうとはしていない辺り、割と冷静ではなさそうである。

「あ、わ、悪いレム。気が動転してた!」

「あつ……こ、こほん。いえ、こちらこそごめんなさいスバル君。

それでどうなされたんですか？ 皆様はラインハルト様のところ

に向かったのでは？」

握っていた手が離されたことで名残惜しそうな声を漏らしたレムも周りの目を見てようやく冷静になる事ができ、こぼんと息を整えると改めて面々に向き直る。そんな彼女に対してラムがスバルの言葉を受け継ぐようにレムへと質問を始めた。

「向かったことは嘘ではないのだけれども、すぐに戻って来たのよ。」

……話は戻るのだけど、最初に二点だけ質問させてレム。屋敷に雪は降ったかしら？ それと、巨大な魔獣……いえ、何かおかしな兆候を感じたりはしなかったかしら？」

「は、はあ……レムが確認する限り雪は降ってないですし、おかしな兆候は見受けられませんでした」

質問の意図が未だ読めぬレムは姉の質問に首を傾げながら答えると、カリオストロを除く三人がほっと胸を撫で下ろした様子が見える。その反応がますますレムの疑問を加速させた。

「……事が起こるのは明後日昼の話だし、その前に襲われたらスバルの未来が意味ないだらろ〜にっ☆」

「いやでも万が一の事があるかもしれないじゃねえか？ ま、これで大丈夫だったって事が分かったから本当良かったぜ……」

「本当！ 良かったわレム」

「??? あ、ありがとうございます……?」

「……ごめんなさいねレム。そろそろ置いてけぼりにするのは止めるわ。実は——」

そうしてレムは四人の早期の帰宅の理由を知る。

スバルが視た未来に描かれた悲しい結末。それを知ったレムもラムやエミリアが始めて聞いたときと同じリアクションを取り、顔を俯かせた。

「そう、でしたか……そういう理由が」

「それで急いで戻る必要があったって訳だ。なんつーか、急な話だろうから正直困惑も仕方ないだろうけど」

「いいえ！ 他ならぬスバル君が見たと言うのならレムは信じます！

スバル君のその力のお陰でレムは、こうして生き長らえているので

すから……っ!」

「レム……」

スバルの手を両手で握り、熱の籠った視線を向けて力説するレム。その様子を見た他三人の目に再度温もりが生じ、生暖かい目で見られた事を悟ったスバルが慌てて手を離れた。照れているのは誰が見ても一目瞭然だ。

「ま、ま、まああれだな!? (裏声) こうして未来と異なる動きをしたしレムも無事ならきつと大丈夫だろ!? (裏声)」

「やつぱり二人だけにするか?」

「うん。なんか一安心したし、大丈夫そうなものね……」

「はあ……それならば私は遅いですけどすぐに夕食の準備をしてきます。それとも先に湯浴みになさいますか?」

「気遣いは別にいらなからな!! 別にな!」

慌てて弁解するスバルはさておき、一行は一日駆けて戻ってきた疲れを癒やすために遅い夕飯を食すことになった。食堂ではなく客室に集まった一行はソファに座りながらレムが用意した温かいスープとパンを食す。少なからず疲労が溜まっていたのだろう、シンプルな料理でありながらも五臓六腑に染み渡る味わいに、全員から安堵の息が漏れた。

そうして一同が落ち着いたのを見計らって、カリオストロが面々に滔々と語りかけ始める。

「ま、屋敷が平穩無事なら何よりだな。スバルの未来じゃ俺達がこのを出て4日目……つまり今から2日後に屋敷が襲撃される。だが、オレ様はそれも今はないと思っている」

「ん? どうして言い切れるんだ?」

「一連の事件には少なからず繋がりがあり、その切欠をオレ様達は潰したからだ。エミリアとラムの失踪はともかくとして、お前が草原で出くわした事件、謎の集団が魔獣を退治させようとしただろう?」

「……ああ、あったな」

「お前が最後に殺した魔獣、もしもそれが屋敷を襲った魔獣の大切な仲間だったとしたらどうだ?」

「！……なる程な。それならあの魔物が怒り狂ってこっちに襲い掛かってくる理由が分からなくもない。方や虫で、方や獣っぽいから親子には見えなかったけど……まあどっちも氷使いっぱいいな」

それは作偽的な説明だった。カリオストロは面々に向けてというよりかは真実を隠した上でスバルを納得させるためにこうした説明を行っている。仮にも真実を伝えることが正しい選択ではない。知らないままの方が良い真実もあるのだ。

スバルが鷹揚に頷く隣でエミリアが怪訝そうな顔をしているが、軽く目配せをするとこくりと頷き返した。後で彼女には改めて説明する必要があるだろう。

「……ん？ でも待てよ。だったら何であの魔獣はカリオストロの事も知ってたんだ？」

だが直後、スバルの発言にカリオストロは内心で舌打ちしそうになった。

「？ どういうことかしら、バルス」

「そのまんまの意味だ。その魔獣が屋敷に襲って来たときに、俺だけじゃなくカリオストロの事も知ってたんだよな。それに……確か、口ズワールにベアトリスの事も」

「お二方の事も知っている……？ 不思議ですね。そのような魔獣に面識があったと言うことでしょうか……カリオストロ様は話にあった魔獣の事は知っていましたか？」

「……………」

皆の視線がこちらに集まり、カリオストロは回答に窮してしまふ。

そう、スバルは決して頭が悪い訳ではない。機転も人並みに効き、目端も効く存在ではあるが、ここではその目端の良さが裏目に出た。折角真実から遠ざけようとしたのにここで馬鹿正直に答えてしまえば近いうちに答えに辿り着く可能性がある。どのようにしてこの話を切り上げるか表情を変えずに思案していると、すぐ隣で少しだけ可愛らしくも間の抜けた声が聞こえた。

集まっていた視線が隣に映る。

そこにはエミリアが自分の口に手を当てて顔を赤らめていた。

……どうやら欠伸が出てしまったらしい

「あう……ぐ、ぐめんね……う？」

「……そう言えばもう日付超えるもんな。俺も昔は日付超えまで余裕で夜更かししてたけど、冷静に考えたら眠いかもしれねえ」

「眠気がかった頭で思考しても、建設的な案は得られなさそうですね……わかりました。それではまた明日、皆でこの話をしましょう」

「あ。湯浴みは可能ですのでご自由にどうぞ、スバル君は順番的に最後になるかもしれませんが……」

「問題なっし！ つつか朝にしよつか……このまま布団で眠りたい気分も」

エミリアの零した発言を切欠に、今日は切り上げる流れになる。

ちらりとカリオストロが彼女を見れば彼女はこちらにウインクした。どうやらあの欠伸は助け舟だったようだ。エミリアの意外な芸達者ぶりに感謝しながら、カリオストロも皆へと呼びかける。

「そうだね、今日のところはこれまでにしておこっか☆……あ。そうだスバル、寝る前にベアトリスの部屋まで案内お願いっ☆ ちよつとカリオストロ気になった事を聞いて来ようと思うの☆」

「んん？ こんな深夜に……？ ぶっちやけ明日でもよくねえか……？ 幾らアイツが本の虫でも流石に眠ってると思うんだが……」

「カリオストロは気になった事があつたらすぐに解決したい性格なのっ☆

大丈夫大丈夫、ベアトリスは懐が深いから寝ててもきつと許してくれると思うし☆

「……まあ案内程度なら別にいいけど、怒られても俺は知らねえからな!! しっかし一体何が気になったってんだ？」

「それは明日になったら種明かしするね☆」

疑問をサラリと流しながら、スバルは眠気眼を少しこすつてベアトリスの部屋を探しに行くにだった。



「起きろクソピエロ」

「……………んん……………なあんたい……………」

まだ夜も更けやらぬ午前二時、カリオストロはとある人物の部屋に堂々と立ち入っていた。

この屋敷、というより陣營を取り仕切る人物、言わずと知れたロズワールの部屋である。

すやすやとベッドの上で穏やかな表情で眠っていた彼が目を開ければ、そこに見えたのはこちらに向けて手を翳かざしたカリオストロの姿である。しかもその手の先には煌々と光る小さな魔方陣が展開中で、どう見ても行き着く先に不幸な道筋しか用意されていない。

「……………おやあ？」

眠気が覚めてきたロズワールが状況を把握すれば、場違いな声が自然と漏れ出た。

どうして自分が殺されかけているのだろうか？

これは何かの冗談なのだろうか？　だが目の前に翳される手の奥には殺意に満たされた目がある。明らかに冗談ではない。

「こおーれはこれは、夜分遅くに穏やかではないねカリオストロ君。一体全体どうかしたのかい？」

……………んん？　確か君はエミリア様とラインハルト様の邸宅に赴いたのでは？」

「ああ、やんごとなき理由があつて早々に切り上げてきた。……………どうかしたか、だつて？　お前の心に聞いてみるロズワール、お前こそどうしてオレ様がここに居るのが想像つかないか？」

「……………ふうむ」

目の前に死が迫ろうとも、ロズワールに焦りは全く見られない。

むしろこの状況すら想定済みだといわんばかりにコミカルに首を傾げている。

彼はとりあえずベッドから起き上がりたいたいなど他意もなく力を込めた——その瞬間、

「動くんじゃないよ」

翳した手の先の光が増したと思えば、ロズワールの頭、そのすぐ上

に木製の槍が突きあがった。

ベッドを貫き、上質な生地 of 枕と寝巻き用の可愛らしい帽子も無残に貫かれ、白い羽毛が辺りに舞い上がった。

「こおれは酷い、ラムが折角作ってくれた帽子が」

「そいつは悪かった。なら次はお前の体を目標としよう。」

最初は手首と足首、次は腕、その次は膝、それで腹、胸、最終的には顔なんてどうだ?」

「それは御免被りたいところだあね、なあに抵抗はしないさ。今の私は哀れな子羊、応じられる物に關しては応じましょーう……ところで、何で後ろにベアトリスもいるんだい?」

殺されかけたというのからかうような声を出すロズワールがカリオストロの後ろを見やると、そこには彼と同じくパジャマ姿のベアトリスの姿が。彼女は左手に枕を抱えながらも二人のやり取りをどこか楽しそうに傍観していた。

「ベティーも目的も告げられずにこいつに叩き起こされたのよ。全く迷惑な奴だと最初は思ったものだけど……面白い見世物が見られるようだし、起きた甲斐はあったかもしれないかしら。」

さあ疑惑があるにしろないにしろさっさとやってしまおうかしらカリオストロ、こいつに容赦なんて欠片も必要ないのよ」

「おおベティー、僕とキミとの間で培った友情は忘れてしまったというのかい?」

「そんな薄っぺらいもの、お前とは一度たりと育んでなかったかしら」愛称で呼ばれたベアトリスが不快そうに言い放つ。

分かっただけにいたが庇ってくれない事を悟ったロズワールは、本気に近い脅しを取るカリオストロを前に少し目を瞑って考え込むが……やはり最終的に首を傾げた。

「自分の心に聞いてみたのですが、やっぱり何の事やらとしか言いようがありません。」

逆にカリオストロ君に聞きたいですねえ。どうしてこのような行為を?」

「ほーお、この土壇場でそう言いきるか。大した度胸じゃねえか」

「本当に思い浮かびませんので、そうとしか答えられないのです」  
不敵な笑みを浮かべたカリオストロに対して、ロズワールも態度を崩さずにそう答える。

それは彼がカリオストロの脅しが本気の物ではないと早々に見抜いていたから故の行為だった。

この少女は非常に頭が回る。自らの立場、ひいてはスバルが不利になる事を絶対に避けようとする。それであれば自らを殺めるという愚拳は絶対に起こさないだろうと。

そんな彼の考えを悟ったかどうかは分からないが、小さな襲撃者は溜息と共にその手を下げた。

「お前は多分こう考えてるんだろう？ 自分を殺める訳がない、本気の脅しではないと。……その通りだ。今お前を殺したらオレ様達の立場は一気に悪くなるし、味方だったのが敵に回ることもなる。それはこちらとしても避けたい」

食えない奴だ、と零した彼女は大人しく一連の事件について『嘘偽りなく』語り始める。

エミリアが変異させられたこと、スバルが嵌められて彼女を殺した事、そして終焉の獣が怒り狂い殺しに来たこと——ベアトリス、ロズワールはその内容に驚き、聞き入る。パックの正体をあらかじめ知っていた二人はその事態が現実起こりそうだと判断していたのか、特に異論を挟むことはなかった。

「なるほど、それなら今回の夜這いについても理解が出来——軽い冗談じゃーあないか。ベッドを穴ぼこにしないでくれるかい？」

「余計な口を挟むからだ、怖気が走る。それで、お前は手紙を出した記憶はないんだな？」

「当然ですとも、エミリア様達が向かった後にも前にも手紙を出しておりません」

追加の木槍がロズワールの足の間に突きあがろうとも彼の余裕は崩れない。

先程の発言を受けベアトリスもゴミを見るような目でロズワールに視線を向けた後、持論を述べた。

「……謎の集団、ね。陣営の妨害も考えられなくもないけれどもやり口がえげつなさ過ぎる……それに他者を魔物に変質させる力。魔女教の仕業のような気がしなくもないのよ」

「魔女教だと?」

「過去の文献にあったかしら、都市一つが丸ごと魔物に占拠されたという災厄の話よ。」

数多の騎士団が総出で出動して死闘を繰り広げて魔物を殲滅したのだけでも、結局その都市の住民で生存者は誰一人居なかった。そこにあつたのは住民と魔物の死骸の山と、それを遥かに超える行方不明者だけ。お前の話が本当なら同じ奴の仕業と考えられなくもないかしら」

謎めいていた存在にうつすらと輪郭がつきはじめる。

だが魔女教がどうして今更顔を出すのだろうか? 偶然居合わせたのか? それとも彼らはエミリアを狙っているのか? 新たに謎が思い浮かぶが一旦それは思考の隅に置く。今は一番の目的を済ませねばならないだろう。

「で、だ。オレ様がベアトリスを起こして呼びつけたのはただの事情の共有ってだけじゃあない。二人に守ってもらいたいことがあるからだ」

二人の視線が集まるのを感じると、カリオストロは続ける。

「スバルがエミリアを殺したという事、そして屋敷を襲った魔獣がバックだという事を伏せて欲しい」

「……」

「……おかしいかしら。ならどうしてさっきの話が出来るのよ」

二人の表情に皺が刻まれる。スバルは未来でその事実を知ったからこそこうしてカリオストロが話しているのでは? 当然の疑問に對し、カリオストロは更にたたみかける。

「確かに今回の件はスバルから聞いた話だが、その情報は非常に断片的なもので、結局あいつ自身は先の二件について真実を知らないのが分かっている。だがオレ様はその断片的な情報から結論を導き出し、理解した。……この内容がスバルに伝えられないという事も同時に

な」

「……子煩悩な奴」

「当然の配慮だと思え、あいつがまた壊れかねないんだぞ？」

睨み返すせばベアトリスは肩をすくめて了解し、沈黙していたロズワールも視線を向けられれば、同じ反応を返した。

そんな二人を見てカリオストロは、ふう、と対照的に肩を撫で下ろす。これで裏切りがない限りスバルが再度追い込まれてしまうこともないだろう。さああと一つ、最後の用事だけとつとと済ませてしまおうと彼女は再度ロズワールに詰め寄る。

「どーうかしたのかいカリオストロ君？」

「……もう一度聞くんが、肝心の手紙についてお前は出した覚えはないんだな？」

お前は魔女教に内通しているわけじゃあないんだな？」

「えーえ。どうにもこうにもワタシには直近でそのような手紙を出す理由はないですねえ。」

自陣営であるエミリア様をおとし貶めても何の得もない、そーうでしょう？」

分かっているだろう？ と理屈を連ねてこちらに返答するロズワール。

確かにそうだ。ロズワールの行為には何のメリットも見当たらない。それはカリオストロも思っていた。

彼が手紙を出してまでエミリアを嵌める理由がどうにも弱いのだ。

刺し殺さんとしそうな威圧が乗った視線を向けるが、やはり暖簾に腕押し。動揺は見られない。

よって彼女は切り替えることにした。カリオストロの険しかった表情が打って変わって微笑になる。どこか諦念も見て取れる笑みで反対にロズワールが怪訝な顔になるが……それを諦めと判断し、ロズワールもにこりと微笑を返した。

しかし、彼はその表情の意味を完全に見誤っていた。

「なら、実力行使しかないな」

「——ッ!!!」

「!?」

直後、前兆もなくベッドから再度木の槍が4本飛び出す。

その槍は先ほどの宣言通り、ロズワールの手首、足首を正確に貫いて彼をベッドに縫いとめた。

「っ、が……っは、こおーれは……これは……!」

「カリオストロ、お前一体何を!」

「お前が言ったことだろう? 容赦なんて欠片もいらないうて」

まさかの凶行に驚いたベアトリスがカリオストロに詰め寄る中、彼女は代わらぬ笑みを浮かべてそう答える。ベッドに強制的に縫いとめられたロズワールは苦悶の表情を浮かべ、その四肢からは止め処なく血が溢れベッドを汚していった。

「本当にする奴があるかしら、早くこんなことやめるのよ!」

「こいつが本当の事を言わないから仕方なくやってるんだ。見るに堪えないなら部屋にでも戻っている、邪魔すんな。……さて、罰は与えたところで本当のことを話す気にはなったか? ロズワール」

嗜虐的な笑みを浮かべたカリオストロは、痛みに悶えるロズワールの顔を覗きこむ。

その目が一切笑っていない事から彼女の本気の度合いが伺えるのだが、やはりロズワールの回答は変わらない。

「さあ、て……っ、ご期待に沿えず申し訳ない、が、回答は変わらず……!」

「しらばつくれるのも大概にしとけよロズワール。スバルはこう語ってくれたぜ? 手紙の筆跡もついていた封蝋もラムが見て間違いないと断定してたとな」

「おーや、おや、た、ったそれだけで、このような凶行、を? 言ったはず、です。ワタシには手紙を出す理由がないと。それが本物だとは、それだけでは判断しきれない、筈……ッ、あるいは、その時の私は本当にッ、何らかの急用でエミリア様を、連れ戻す必要があったのかも……ぐ、ううッ!」

「随分と饒舌じょうぜつになつたじゃあねえか。ええ？　だがな、そんな分ぶんかりきつた弁解べんげなんて聞きたくないんだよ」

今度は動きの取れないロズワールの両の腕と膝が追加で槍に貫かれてロズワールが更に苦鳴を漏らす。鮮血が飛び跳ねてベッドは溢れる血で真っ赤に染まり、場は燦々さんざんたる光景そのもの。

カリオストロは顔に飛んだ血を拭いすらせずに乱暴にロズワールの髪を掴むと、ぐい、と顔を近づけて告げた。

「——なあロズワール。オレ様がここまで強硬手段を取るって事の意味は分かつてるだろ？　ソレ以外にも根拠はオレ様の中にあるんだ。まだ舌戦が通じると思つたら大間違いだからな……？」

カリオストロは前回のロズワールの裏切りから手紙が彼によって書かれたものであることを断定していた。正確な理由は分からないが、死に際の発言などからこの男の狙いがスバルにあることは明白だ。もしかすればこの男がスバルの力に気付いているのでは、とすら思っていた。

この能力を分け与えた存在が頑なに露呈を拒んでいるというのにどうやってその手法を知りえたのか。全て吐かせなければならぬだろう。それは彼を傷つける事により生じるデメリットよりも重要だ。

痛みに煩悶はんもんする目の前の罪人を続けて裁こうとするカリオストロだったが、背後でベアトリスが吠える。

「カリオストロ、いい加減にするかしら！　如何に憎たらしい相手といえども限度があるのよ、お前がこれ以上続けるといふのであれば実行使も辞さないのよ!？」

「黙っているベアトリス。この男の目的が何かはわからねえが、今後全員が死に絶える可能性をこいつは作り上げようとしたんだ。明確にオレ様を裏切り殺したことも含め、許すことは到底——」

直後、磔はりつけにされたロズワールが笑い出す。

始めは小さく、そして段々と大きく。

自分の現状には到底相応しくない哄笑を二人に浴びせる。

唐突の笑い声にあっけにとられた二人に対し、彼はしばらく笑い続

けた。

「——ははは、ははっ、はあ……はあっ！ いやーあ、申し訳つ、ない。ようやく合点が言ったものでして……そうか、そうかい、彼だけでない、君も彼と同じ存在だったんだねーえ」

「……何が言いたい？」

「そのまんまの意味、ですよ。キミがこれだけスバル君に固執する理由、ようやく理解が出来た……彼の力かキミの力かは分かりかねていたが……く、くく。裏切り殺す、ねーえ。カリオストロ君、キミはまるで体験してきたかのように僕に恨みを吐きだすじゃあないか。それはどううしてだい……？」

「ッ」

脂汗を滲ませ、痛みに悶えながらもロズワールは狂気を含んだ笑みを見せる。

此処ここに来て向こうも腹を括ったのか、今まで見せなかつた表情にカリオストロもここからが本番だと気を引き締め直す。

「未来を視る？ とおーんでもない……キミ達は、いえ、正確にはスバル君には世界をやり直す力がある。そしてキミは彼の力に巻き込まれてなお、その記憶を受け継ぐ。そーうだろう？」

「……」

痛みを無視し、陶醉した表情で問い質してくるロズワール。

ただその発言は知っていたというよりも断片的な情報から結論を導き出したように思える。

対するカリオストロの回答は……沈黙しかない。魔法の呪いが足枷となり、肯定も否定も禁止事項に抵触する可能性があつたため沈黙を貫くほかないのだ。そんな彼女の葛藤を知ってか知らずか、脂汗を流しながらもロズワールは喜々としてこちらを見つめていた。

「ははあーあ……、えーえ、そうでしょうとも。キミは話すことは出来ない。だが沈黙は時に雄弁に語ってくれる——ふふ、ははは！ ははははー」

「カリオストロ……お前達は……」

喜悦の表情で笑い続ける様子は有り体に見て狂っているようにし



が見えない。

カリオストロはベアトリスの真意を問う発言を意図的に無視して貫いた槍を操作して彼の口を閉じようと痛めつけるが、堪えた様子はない。攻めているのはこちらの筈なのに、まるで攻め返されているようにも感じてしまう。

「……ちっ、おいロズワール。今後オレ様達に悪意ある行為をするようなら分かってるだろうな？」

「ふふ、ふ……どーうなっってしまうのですかねえ……？」

「この場で死にたいか？」

「あはあ、別にいいです、とも。どうせっ、私が死んだところで……君達はまた繰り返し事になるでしょう。次の君達が上手くやるかどうか、次の私が見守、りましょう……ッ」

カリオストロはぎり、と齒軋りの音を小さく鳴らす。

この男は本当に自分の命などどうとでも良いと考えている。これによりカリオストロの優位は消え去り、二人は互角の立場になってしまった。いや、今後の事を天秤に考えれば自分の方が分が悪いだろう。

そんな葛藤が分かるのかロズワールは心底楽しそうに彼女をしばらく眺め、そして――

「ふ、ふふふ……まあ良いでしょう。どうせ今回の件では私がする事など、手紙ぐらいしかありませんからねーえ。今はそう誓いましょーう」

「……」

「おーやあ、不満そう、な顔ですねーえ……？ ふふふ、ふ……ここは喜ぶべきだと愚考、しますがねーえ」

狙いが見えない。あつさりと優位を手放した事もその不審な発言も、何もかもが虚飾に見えて仕方がない。

しかし、既に場の優位は完全に崩れた。これ以上この男から得られる物はないに近いだらうと判断したカリオストロは礫にした槍を全て消去し、代わりに得意とする回復魔法で癒やしていく。四肢に出来た無残な傷が見る見るうちに回復していく様はまるで巻き戻しされ

ている映像のようで、当事者はその様子を見て感心しきっていた。

「なーあるほど、てつきり本気だと思つてしまいました……そこまでの力があれば、先ほどまでの凶行も理解できましよう、これはしてやられてしまいましたねーえ」

「何の事だ？ オレ様はお前が話す内容如何によつては殺すのも選択肢に含めていたがな」

「いいーえ、慎重なキミがそんな向こう見ずなことをする訳がない。実に狡猾かつクレーバーと言えましよう」

拍手をしながらも、このベッドの穴とシーツに染まった血は何とかして欲しいところですねえ、と極めて平静に文句をつけるロズワールは客観的にも異常としかいいようがない。仮にも拷問まがいの尋問直後のことだ。一体何があつたらここままで壊れてしまうのか、ここまでの狂気を宿さざるを得ない目的とはなんなのか。カリオストロはこの男を甘く見ていたことを自覚せざるを得なかった。

そこに、今まで黙りこくつていたベアトリスが震える声でぼそりと呟いた。

「……カリオストロ、お前達はこの屋敷で何度世界を繰り返したというのかしら」

「……………」

「ありうる未来の先で何を見たのかしら。

どうしてお前達はここに来たのかしら。

お前達はここで何をしようとしているのかしら。

繰り返した先に何をしようとしているのかしら。

——この屋敷に、何をもちたらそうとしているのかしら」

「……………」

わなわなと震えるベアトリスは俯いていた顔を上げ、カリオストロを睨みつけた。

「答えるのよ——答えろカリオストロッ！」

「……答える義務はない」

「いいや、あるのよ！ お前達がここに居る限りきつと災難は降りかかる……っ！ そうとしか、そうとしか考えられないのよ！ そうで

なければ何故にーちやがベティーたちを直々に殺す羽目になるかしら!? 被害を受けるなら知る権利はある筈かしら!」

カリオストロはどうしてここに来てベアトリスが激昂するのかが分からず、内心で困惑してしまふ。不安になるのはわからなくないが、ここまで反応する理由はわからない。しかしながら禁則事項に抵触する発言をぬけぬけと話すことは出来ないし、自分たちの出自をここで明かすつもりもなかった。

「言っておくがオレ様達がここに流れ着いた理由は偶然だ、さっきの未来だって確定された訳では——」

「そんなの、別の不幸な未来が待ち受けているだけに過ぎないのよッ! 　そしてその未来はきつと、ベティー達を巻き添えにする! 　くくくッッ、だから、だからベティーの書には何も書かれないッ!! 　きつと先に待ち受けているのが確実な死だからッ!!」

ベアトリスの発言は鬼気迫る物ではあったが、その内容については理解できないの一言。書とは一体どういう事なのだろうか。それを聞いたださんとしようとしたカリオストロだったが、彼女は憔悴した顔で自分の頭を抱えればよろよると二人から離れていき、更に忌まわしいものを見る目でこちらを睨んだ。

「ベティーとお前達が出会うこと約束されていたとすればこんな残酷な話はないかしら……! 　ベティーは契約を果たす事もできないの……?! 　それともお母様はベティーにこいつらの礎になる事を望んでいたというの……!?! 　もういや! 　なんで、こんなっ……早くこの屋敷から出ていけ! 　出ていくのよ! 　お前達疫病神の顔なんて二度と見たくないのよっ!!」

「ベアトリス!」

そして彼女は涙を零しながら逃げるように部屋を後にしていった。「疫病神、か。僕には二人が光明をもたらす天使にも思えるのだけでもねーえ」

最早ロズワールの発言に突っ込むこともできず、ただ彼女が後にした扉を眺め続けた。

ベアトリスは深い闇を抱えている。謎めいた発言に隠された真意

はなんなのか、ひいては自分達をこの場に導かせた魔女が何をさせた  
いのか。ベアトリスの怒りと悲しみの慟哭どうこくがカリオストロの心の一  
端に滲むような不安を占めさせた。

(……俺たちはただ必死に生き延びようとしているつもりだった。だ  
けど、そうではないのか？ その先にある未来すら、決められた筋書  
きがあるのか……?)

疫病神と叫ぶベアトリスの顔を、カリオストロはしばらく忘れられ  
そうになかった。

## 第四十四話 大いなる破局

エミリア達一行がラインハルトの屋敷からトンボ返りしてから4日後。

幸いなことに屋敷の面々は変わらぬ日常を過ごしていた。

……いや、変わらぬというのは少しおかしいか。一人だけ変化があった人物がいた。

「……今日も、ベアトリスは来ないのか？」

「はい、そのようですね……」

「……」

晴れやかな日差し差し込む中の昼食。

いつもの面々が集まる中、ベアトリスが座るいつもの指定席だけは空席になっている。

他の話題が切れた直後に訪れた沈黙に、スバルの問いかけはよく響いた。

「最近をよくいらしてたのに、突然来なくなるのは……少し心配ですね」

「体調でも悪いのかしら……」

「何度か呼びかけはしたのですが、いつこうに返事がないのでなんとも……」

「俺も何回か直接顔見てやろうと思ったんだが、全然あいつの部屋にたどり着けないんだよな。いつもならすぐにたどり着いたっていうのに」

「……」

「……」

スバルを筆頭にエミリア、ラム、レム、が口々に心配を露わにする中、事情を知るロズワールとカリオストロは静かに昼食を口に運んでいく。

カリオストロがロズワールとベアトリスの二人に話をつけた日以降、彼は言いつけどおりに惨劇の真実を口に出してはいないし、こちら側に有利な動きを率先的に行っている。お陰でスバルはエミリア

殺しについては気づいてはいない。それは良い事だ。

その代わりベアトリスはカリオストロとスバルの二人を本格的に拒み始めたようで、あの日以来禁書庫から彼女が顔を出すことはなくなってしまうた。スバルの扉渡りが通用しなくなったのがその確たる証拠であろう。

どうして彼女は死に戻りの事実にあそこまで激昂するのだろうか？

ロズワールが何らかの事情を知ってそうではあるが、知らぬ存ぜぬを繰り返すばかりで頼りにならない。考えるにしても情報が圧倒的に足りず、鬱屈とした気分だけが彼女に積もっているのが現状だった。

「なあ、二人は何か知らないか？」

「……ん、ごめんね。カリオストロはちよつと心当たりはないかなあ☆」

「残念なことに、こちらも同じく」

流れ的に来るであろうと思ったスバルの質問に、カリオストロもロズワールも狙い済ましたかのように分からないと答えれば注目していた残りの面々と共に彼も思案顔に戻り、食堂内にふさぎ込んだ溜息が溢れた。

……心配なのは分かる。だがこれ以上の心配は徒労だ。見るに見かねたカリオストロは淀みきつた空気に一石を投じた。

「まあ……あれだよ、今は普通に異変が起きなかったことを喜ぼうよっ☆

問題の4日目も過ぎたことだしね☆」

「……そう、だよな。うん、不気味な未来予知だったけど外れて本当に良かった！」

「そうね。皆が無事で本当に何より」

「……無事は良いのだけれども、ラインハルト様に正式に謝罪の一報を入れなければなりませんね。なにせ理由も伝えずに帰ってしまったのですから」

良くない空気を払いのけようとする彼女の意図を悟ったか、ラムも流れに乗って今後の問題点を提起し始め、全員が自然とその話に集中

していった。

「二応形だけの謝罪文は出したのだけれども……流石にスバルの事は伝えられてないわ」

「書いたところで信憑性がないだろうしね☆」

ラインハルトのことだ。もしかすれば信じてくれる可能性も高いだろうが、やはりスバルの特殊な力についてはおいそれと他人、他陣営には伝えられないだろう。言及してしまえば広がった波紋がどのような反響を及ぼすかは未知数だ。

「陣営の一大事、つて言い切っちゃったからなあ……大それた理由じゃないと納得してくれなさそうだ。うーん、いっそ秘密のままとかどうなんだ？」

「スバル君、それだと逆に反感を買いかねません。共同歩調を取ろうとしているのですから細部はともかくとしても大まかな情報ぐらいは伝える必要があると思います」

「そうだろうねーえ。とは言え適当な理由は後々に齟齬そごを来たしかねない」

「別に丸のまま事実を伝えてもいいんじゃないかい？ リアの襲撃情報明らかになった。この屋敷が何らかの魔物に襲われそうになった。だから帰った。適切な理由だとは思うけどね」

そうのたまったのはパックだ。エミリアの肩に座り込んで今の今まで食事に没頭していた彼は、パンの欠片を両手に持ちながらなんの気なしに一同にそう伝えた。

ちなみに話は唐突に変わるが、カリオストロはパックに対してもあらかじめ事実を伝えてあるメンバーの一人である。パックはその話をにわかには信じられないと評しながらも「まあ、そうなる事もさもありなんだよね」と真顔で答えていた事から、やはり思い当たる節はあったようだ。（盟約についての詳細はぐらかされてしまったが）

「……うん、何かそれでいいんじゃないかなって気がしてきた」

「対面に同じく☆」

「一応理由は立つけれども……それならばどうして協力を乞わなかったのか？ という話にならないかしら」

「心く配には及ばないさ、ラム。それは自分の陣営のことは自分で始末をつける。そういう覚悟の表れともとれなくもないからね」

話はそのまま盛り上がり、一行は食事を終えても今後について、真剣に議論を重ねていく。

レム、ラム、ロズワール、エミリアはもとより、スバルそしてカリオストロもだ。全員が全員、エミリア陣営の1人として考え、有利に事が運ぶように頭を使っている。

しかしながらこの世界に根を貼ろうとしているスバルはともかく、カリオストロのその行為は食客の身分としては正しい行いではあるうが、今後の事を考えれば正しい行いとはいえないものだ。なにせ、彼女は（スバルもだが）元々別世界に居を構えている。その日がいっになるかは分からないがいずれは別れる事になる運命なのだ。

故に特定個人に情を持ちすぎず、中立の立場で居続けた方が後々のことを考えれば正解だ。勿論明晰な彼女はソレを理解している。

だが、知っている上で。彼女はこの陣営の皆に必要な以上の情を持ち始めていた。

それこそ騎空団の皆と過ごすような居心地の良さを覚え、簡単に見捨てる事が出来ない程度には。

それは彼らの人の良さを壮絶な経験を経て理解しているというのもあるだろうが、そんな彼らが今も尚、綱渡りの毎日を過ごしている所も大きいだろう。

(……)いつらは目を離すととんでもない事になりやがるからな。それにまだ帰る手立ても明確には見つかつてはいないんだ、仕方がない事だがしばらく世話を焼いてやるしかない)

この理解は出来るが理屈となると難しい問題に対し、歩くお人好しに少なくとも傾倒しているカリオストロは目の前にぶら下がる丁度いい理由に飛びついて自身の行いを正当化している。きっと彼女を良く知る人たちはその光景を見てほっこりとする事請け合いだろう。

——そして連なる議論が与太話に移り、与太話が閑暇を呼び寄せ、各々が自然と自分の仕事に戻る事になりかけたその時。

「どうかしたの？ レム」



「……お客様のようです。竜車が……三台、こちらに向かっています」  
レムが窓の外を見て、こちらに近づくその存在を目視していた。  
釣られて面々が窓に群がれば、確かに竜車が三台連なってこちらに  
向かっているのではないか。しかもその御者は全員が全身鎧を身に着  
けており、何やら物々しい。

この時点でカリオストロは雲行きの怪しさを感じ取っていた。四  
日目を無事に過ごせたと思つた直後に、今度は何が起こるんだ。

「……すぐに下に向かいます。何だか嫌な予感がするわ」

すぐ隣に立っていたエミリアが彼女の代わりに内心を代弁してい  
た。

§ § §

「連絡もなく急な来訪になり、誠に申し訳ありません」

「いえ、それだけ何か大変な事があつたのでしょうか？ 構わないわら  
インハルト」

この屋敷に突如現れた集団はラインハルトとそのお付の騎士達  
だった。

全身鎧の兵士を連れた物々しい登場に一瞬色めき立った一行。本  
来なら示威行為と取られても仕方のない物ではあつたものの、彼らの  
前に現れたラインハルトの鬼気迫る表情を見れば怒りは浮かばな  
かった。

いつも澄ましていた表情もどこか余裕がないだけでなく、彼の道筋  
を示すかのような純白の騎士服も薄汚れていた。高潔を体現する彼  
に一体何が起つたというのだろうか？ 彼を来客室へと連れたエミ  
リアは、一行とともに話を聞くことにした。

「御温情、誠に感謝致しますエミリア様。では簡潔に伝えさせて頂き  
ます」

彼はソファに座つたまま軽くお辞儀をすると、スバル。そしてカリ  
オストロをちらりと見た。

この時点で嫌な予感が彼女の中で更に大きくなる。気の所為で

あつて欲しいが、その仕草はまるで自分達が関わりがある内容なのではないだろうな、と。スバルも同じ気持ちなのか、どこか身体を強張らせて続く話に耳を傾ける。

「フェルト様が、当屋敷から攫さらわれました」

……完全に気の所為ではなかったようだ。カリオストロは表情が変わらぬよう努める。

残念なことに、スバルが居なくてもフェルトが屋敷から出ていくという運命は変わらなかつたようだ。

彼は耳を傾ける一行を一度見回した後、更に続ける。

「消息を経つたのはエミリア様がパーティから屋敷に戻られた翌日の午前中。昼になつても姿を見せぬフェルト様を探しましたが……屋敷内で見つけることは出来ませんでした。恐らくは商人の荷車に紛れてこの屋敷から連れ去られたのでしよう」

「……」

「……」

一行はラインハルトの説明を静かに聞き続ける事ができた。何せ、全員がその展開を既に知っているのだ。

それはスバルの未来視が確かな物であるという証左にも他ならぬ。い。

しかしながら当人のスバルは非常に落ち着かない気分だった。何やら言いたげにちらりとカリオストロを何度か見るが、彼女は彼の視線を無視し続けた。

「……我々はこの数日間商人達の行き先を手分けして辿りました。が、結局見つかったのはその竜車の残骸と魔物と商人の奇妙な死体だけでした」

「……」

「それで、結局フェルトは……?」

「……我々の力及ぼず、現状はまだ見つかつておりません」

ラインハルトの顔に小さく悔しそうな表情が浮かび、客室に沈黙が降りた。

結局のところスバルがいなくてもフェルト達はあの魔女教集団の

手に捕まってしまう筋書きは変わらないのだろう。フェルトは既にこの世から亡き者になつていいる可能性が高い。

心中を察して有り余る境遇ではあるが、ここで一つ疑問が思い浮かぶ。

“何故ラインハルトはわざわざこの屋敷にそれを伝えに来たのか？”

「そおーれで？　ラインハルト殿、キミは我々に協力を要請しに来たという事でしよーうか？」

「誠に勝手ではありませんが。そうなります」

「そう。それであれば協力を惜しまないわラインハルト。

私は、いえ。私たちは何をすればいい？」

お人好し筆頭エミリアが案の定彼の話にずいといと乗り気になつてそう問いかけると、彼は小さく感謝を述べ、

「では。1点だけ質問をさせて頂きたいと思ひます」

「1点だけ……？　一体どんな……？」

怪訝そうにするエミリアに対し、ラインハルトはその顔をスバルに向け、言い切つた。

「スバル。キミは一体何を知つていいる？」

「……!？」

白羽の矢が、まさかの当事者に立つた。

確かにそうなる未来を視たのはスバルだったが、どうしてそれが分かる？

困惑を露わにしながらもスバルは何とか返そうとする。

「な、何を、つて言われても……俺が知つてるのはお前が今さつき伝えた情報だけだぜ？」

「そうだね、それは知つていいる。だがそれでも僕はキミに聞きたい。

スバルはこの事件が起きる前から、起ることを知つていた——そうだろう？」

「……………」

冷や汗が止まらない。

表情こそ変わらぬラインハルトから無言の威圧を感じて仕方がな

い。

「どうやら彼には既に確信があるようだがそれはどうして知り得た？ ラインハルトがラインハルトだから分かるのか？ だとすればこの自分の力の事も知っているのだろうか。ぐるぐるとスバルの思考が堂々巡りを繰り返し始める。」

「何が言いたい？ ラインハルト」

「確認さ、カリオストロ。僕は今はどんな情報でも欲しいんだ。」

「キミ達の事は疑いたくはないが……もしも何かを知っているのであれば全て。嘘偽りなく伝えて欲しい」

「カリオストロが口を挟むも、彼は顔をそちらに向ける事なくスバルを見据えて言い放つ。」

「言葉に乗せられる確かな圧力。それによって部屋内の空気が重苦しい物へと変わっていく、そんな錯覚を全員が覚えていた。」

「い、いや、いやいやいや。ラインハルト、そ、そんなの分かる訳がないだろ？ どうして俺がそんな事分かるって証拠だ——」

「……スバル。嘘偽りなく答えて欲しいと僕は言った。」

「キミならちゃんと答えてくれると少しは思っていたが……どうやら、思い違いだったようだね」

「どこか悲しげに零したラインハルトは、先程よりも厳しい視線を向けた。」

「『……フェルト奪還作戦が秘密裏に進行中って伝えた方がいいよな？』」

——唐突に彼の口からスバルそっくりな声が溢れ出た。

「まるで録音してたかと思紛うような声はパーティーから帰る直前にスバルがカリオストロに相談した内緒話に他ならない。」

「全員がそれに驚き、特にその発言に記憶があるスバルとカリオストロは一方は目を白黒させて身体を強張らせ、一方は苦々しい表情を見せるといった顕著な反応を見せてしまった。」

「これはキミ達二人の内緒話によるものだ。盗み聞きは騎士としてはあるまじき行為ではあると自覚してはいます」

「……それは、いつ頃された話なのでしょう？」

「丁度エミリア様達が出立なされる前の話です。最初は どうしてそんな話が出るのだと思いましたが追求はしませんでしたが……今に至っては無視する事も出来ません。」

——スバル。キミはフェルト様が屋敷から連れ去られることを予め知っていた。違いはないね？」

「う……」

早まる鼓動の音を聞きながら、スバルはラインハルトから視線を逸してしまふ。

後悔先に立たずとはこの事だ。

不確定ながらも先に伝えていければラインハルトに疑われる事もなかっただろうに。

だが、未来予知の話はおいそれと伝えられる話ではないことも確かだった。

生まれた葛藤に苛まれる中、カリオストロがフォローのつもりなのか再度口を挟んだ。

「ラインハルト、先に言っておくがスバルはもとより、オレ様達は別にフェルトを含めお前を貶めるつもりは全く無いし、その時点では本当にそうなるとは知らなかったんだ」

「それは詭弁だよカリオストロ。その時には可能性であったとしても『人が攫われるかもしれない』のであればそれは余りにも大きすぎる情報だ。伝えて然るべきだと思わないかい？ キミ達がこちらと共歩調を取るつもりであれば尚更だ」

既に温和な雰囲気から感じられないのは当然といえば当然だ。今のラインハルトはこちらを敵か味方か図ろうとしているのだから。そんな猜疑心を露わにする相手に、カリオストロはその考えが誤解であり、すぐに伝えられない理由があったと弁を連ねる。

「スバルが知り得た情報源が信頼出来るかどうか分かりかねたからこそ、伝えられなかった。その所を理解して欲しい」

「よく、わからないね。事実フェルト様は誘拐されてしまった。ではその信頼に値しない情報という物をスバルはどこから仕入れたんだい？ 我々は今回の件はホーシン商会……つまりアナスタシア様に

よる手引と考えていたのですが、キミ達が内通してる訳ではないのかな？」

「そんな事は決してないわラインハルト！」

「エミリア様、私も疑いたくはないです。ですが疑われても仕方のない現状であることは理解出来る事でしょう」

エミリアも堪らず口を挟むが言葉だけでは決して納得出来ないのも道理。

カリオスト口は黙り込み、目を瞑る。ここまで来れば真実を際み続ける事は逆効果でしかない。そう判断した彼女は顔を真っ青にするスバルを見た後、エミリア、続いてラインハルトをちらりと見た。

スバルはどうかは分からないが、他二人はその意図が読めたのだろう。小さく頷き返した。

「スバル、伝えてもいいか？」

「！……あ、ああ。それはいいけど……でも」

「納得出来るか、分からないだろ？……仕方がない。こちらはこちらが知り得る情報を伝えるだけだ」

「……」

ラインハルトの目が細められ、強者特有の視線の圧にカリオスト口が晒される。

彼女はその視線に臆する事なくスバルだけが持つ、そして陣営の皆知り得る不思議な力の内容を伝えようとして——直後何かを感じ取り、窓に視線を向けざるを得なくなった。

窓の外、その遙か向こう側——世界を震わせる程の力を持つ何か動き出した。

ラインハルトやパックも彼女に倣い、同じく意識を向けざるを得ない程の何か。

「……？　パック、どうしたの？」

「……リア、良くない事が起こる気がするよ」

「お、おいカリオスト口？　ラインハルト？」

「ラインハルト、今の分かったか？」

「はい。然と。……遠い場所で、何かが起こきようとしています」

三者ともが第六感を刺激され、そして同じ感想を抱いた。

強大な力が今にも世界に解き放たれようとする、余りにも危険な予兆。

それが分からない他の皆は、彼らの反応を見て不安そうな表情を見せ始める。一体何が起ころうとしているのか？

カリオストロとラインハルトは自然と客間の窓に寄って外の様子を伺い始める。

窓の外に見えるのはどこまでも広がる一面の森林。そしてアールム村、その更に奥まで続く長い長い道だ。釣られるように他の面々も窓に寄り、三人が感じるその脅威とは如何なもののかと見回すが、いつもと変わらぬ様子しか視界に収める事ができない。

だがカリオストロもラインハルトも。そしてパックでさえもそこに何かがあると言わんばかりに窓の外の1点をじっと見つめ続けている。パックは毛を逆立たせ、カリオストロは魔導書を握りしめ——そして、ラインハルトは腰の龍剣レイドに手をかけて。

「……カリオストロ君。それは撃退出来るものなのかい？」

「さあな、ただ楽に倒せる相手じゃないのは間違いないだろう」

「矛先がこつちに向いているの？」

「現状はそうじゃあない。けど、矛先云々の問題じゃない。世界が悲鳴を上げてる。」

微精霊達も怯えてる、みんながみんな逃げようとしているよ」

「我が龍剣レイドも怒りに打ち震えているようです。こうなる程の敵は久しくありませんでした——」

「おい、オイオイオイ。今度は何だよ？ 何も見えないけど何が起ころうとしてるんだ？」

「レム、オペラグラスはある？」

「は、はい姉様。すぐに用意致します」

全員が姿の見えない何かに危機感を募らせる中、ついに具体的な事件が起き始める。

最初に異変に気づいた三人が視線を集める地平線の彼方——そこ

で爆炎が立ち込めたのだ。

「!」

そして数瞬遅れて屋敷に爆発の振動が届く。

シャンデリアや食器が小さな金属音をかき鳴らし、全員に更に動揺が走った。

「何かが、爆発したのか?」

「うん……そうみたい。だけど一体どこで爆発を……?」

地平線の彼方で小さく噴煙が立ち込めているのを全員が捉えた。

恐らくは現地は燦々たる有様さんざんになっっていることだろう。

カリオストロもまた噴煙立ち込める異変の地を厳しい表情のまま凝視し続ける。

これでまだ終わりではない。

怒りにも、それこそ絶望にも感じ取れる大きな力は荒れ狂い、また叩きつけられんとしている。

あの地には何が暴れているのだろうか? あの場所はどこなのだろう?

無意識に魔導書を握りしめながら見つめ続けていると視界の中、地平線の彼方で小さな何かが目撃されたのが見えた。

それは米粒程の何かだ。

色とりどりのそれはよく見れば1体だけではない。3体、いや4体? 5体いるのだろうか?

視界からでは米粒のような何かにしは見えないがここまで離れてその大きさというのは、非常に巨大なのだろう。目を凝らして見るカリオストロの横で、同じく厳しい表情を見せていたラインハルトもその何かに気づいたのだろう。しばし怪訝そうな顔をしていた彼だったがすぐに目を見開き、

「——申し訳ありません、失礼しますッ!」

「どわあっ!」「きゃあ!」

「……!?!」

窓を乱暴に開くと窓枠に乗って飛び出し、一息に空高く跳躍していった。



ラインハルトのまさかの行動と、跳躍に生じた力の衝撃で窓枠は壊れ、破片が辺りに飛び散り、方々で悲鳴が漏れた。

「けほっ、けほっ」

「!? つくっ……ろ、ロズワール様エミリア様、お怪我は?!」

「え、ええ大丈夫……スバルも平気? 何かすごい格好になってるけど……」

「だーいじょうぶさラム。……それにしても、劍聖様がこうも急ぐなんて見たことがない。」

この方向、恐らくは王都の方だろうか。王都で魔女教でも暴れているのかい?」

「い、いつつつつ……そ、その可能性も今となっては現実味があつてクスリとも笑えねえよ」

「……」

「……」

彼によつて巻き起こされた被害も顧みずカリオスト口は更に思考に没頭する。

ラインハルトの唐突の奔走は確かに驚くに有り余る行為ではある。王都の方向という情報を踏まえれば、彼は王都の防衛に向かったという事だろうか?

ロズワールが言うとおりに本当に魔女教が暴れている可能性もあるだろう。あれらの巨大な魔物が暗躍する魔女教が解き放った物とこのもありえなくはない。ただ、それにしてもカリオスト口にはこの波動に余りにも既視感があつた。

その波動の持ち主とは前の世界で幾度となくぶつかりあつた覚えがある。だがこの世界にそいつらが存在する訳がない。ありえない。ありえなさ過ぎる。しかしながら自分の直感の答えがそれしかない。と、しきりにそう言っていた。

「……姉様!? コレは一体……」

「レム、大丈夫よ。ロズワール様にもエミリア様にも、カリオスト口様にも傷はないわ」

「一応自分で言うけどこのナツキスバルも無事だからな!」

あ、この惨状はラインハルトが何か急に屋敷から出ていった名残で……」

「そ、そうでしたか……あ。オペラグラスを用意しましたが」

「レム。それを寄越せ、すぐにだ」

内心でぐるぐると渦巻く思考の海の中、矛盾に苦しんでいたカリオストロはレムの声にだけ反応をして視線は外に、後手に手を伸ばす。

強い命令口調だが、それ以上に纏う空気は真剣そのものだ。レムは一瞬ラムを見たがすぐ様彼女にオペラグラスを手渡す事にした。

そしてカリオストロは直ぐ様オペラグラス越しに現地を見やる。

その小さな筒の中では米粒程度に見えていた、今も尚街で暴れまわる魔物達の姿が先程よりも大きく映し出され――

「……………う。あ」

その姿形を視界に収めた瞬間。カリオストロは小さく言葉を漏らした。

直後脳内を占めたのは大きな混乱と、小さな懐古、それに安堵。その3つがないまぜになった不思議な感情だった。

「か、カリオストロ……?」

「ねえ、大丈夫? い、一体何が見えたの……?」

周りの心配する声も忘れて彼女は一旦目から離れたオペラグラスを再度覗き込む。

彼女の手が無意識の内にそれを強く握り閉めているのが、傍目でもよくわかった。

「……………どうして。どうしてだ。何でアイツらがいやがるんだ」

「あいつら……? あいつらって何だよ。カリオストロ……」

「……………」

「カリオストロ!!」

「言った所で……お前らには分からない……!」

彼女の反応に不安を強くしたスバルが肩を揺さぶる。だがカリオ

ストロの反応は突き放すような物でしかなく、そんな反応に業を煮やしたスバルはその手のオペラグラスを奪い取り、筒の中に広がる光景を見始めた。

「……っ!? 何だ、あれ。りゅ、沢山の竜に……巨大な人間？」

それに剣を持つ巨大な全身鎧——、なんだ水竜かあれは!? あつちにも巨人が……!」

「ス、スバル君……」

「す、スバル? どういう事?」

「どういふ事もねえ、本当に……本当に今言つた奴らが王都で暴れまわつてる……」

あいつらが動いたたびに街が壊れてる。風が、火が。土が、水が……!」

「……おかしい。それはおかしいよスバル。精霊が全員散り散りに逃げ回っているのに。全員が全員、取り込まれることなくそこから逃げたと言っているのに。何でそんな事が起こり得る? そいつらは一体……リア、逃げよう」

「逃げる、逃げるって言つても……どこに?」

「知らない、知らないよ。知らないけどとにかく遠くへ。あの街で暴れる奴らから遠くに離れようよ!」

スバルが零すありのままの真実に一同に更に混乱が広がる。パツクは特にその異常の原因が思い当たらず、エミリアの袖を引っ張つては何度も避難を促す。いつも余裕を見せていたカリオストロが茫然自失とし、パツクが取り乱してそう言うのだ。普段の二人を知る他のみんなはその並々ならぬ反応の前に全員を決意を一つにさせた。

「すぐに逃げましょう。村のみんなにも伝えないと」

「ああ……あと、ベア子の事も心配だ」

「ベアトリス君はこちらがなーんとかしておこう、ラム。レム。村の人々の避難を頼めるかい?」

屋敷にはロズワールが残り、残り全員が村の皆の避難誘導に努める話が瞬く間に纏まる。

誘導組が必要最低限の荷物を纏め、玄関を開け放つて外に出向け

ば、異常を察してうろたえるラインハルトのお付の騎士達が残されていた。

「え、エミリア様。これは一体何が……それに、ラインハルト様は？」  
「落ち着いて、どうやら王都で巨大な魔物が暴れているみたいなの。  
ラインハルトはその討伐に単身で向かっていったみたい」

エミリアが事情を説明すれば待つていた複数人の兵士たちは驚きを露わにする。

そんな彼らに共に避難する事を提案すれば、彼らは快く頷いてくれた。同じく不安だったのだろう。

「でも、私達は避難の前に一旦アールラム村のみんなにも呼びかけしないと駄目なの、だからあなた達は先に――」

「それであれば私どもも手伝いましょう、無辜むこの人々を放って何が騎士ですか」

兵士の中でリーダー格の男性がそう言い切れば、他の兵士達も頷き返す。

正直エミリアとしては申し訳ない限りだが、ありがたくもあつた。

彼らこそまさしく騎士と言うに相応しい、とスバルもその熱い展開に胸を踊らせていた。

こうしてエミリア達とラインハルトの騎士による共同の避難作戦が展開される事となった。

彼らはアールラム村に向かって複数台の竜車で全速力で駆けていく。

村まで続く緩くも長い下り坂を勢いを載せて進む竜車からは遙か彼方に見える王都が、分厚い暗雲の下、噴煙や爆発に見舞われているのがよく見えていた。

「……カリオストロ、あいつらは一体何なんだよ？」

エミリア陣営が擁ようする竜車の中で、スバルが窓を見続けるカリオストロにそう問いかけた。あの魔物達を見てからどこか余裕のない彼女は、落ち着かない様子のまま外へ向けた視線を逸らすことなく無言を貫く。

だがその質問は他全員が共通で抱く物だ。

皆の視線がこちらに集まっている事を悟ったのだろう。スバルがしびれを切らす直前にぼそりと呟き始めた。

「――星晶獣。その中でマグナシリーズと呼ばれる、生体兵器だよ」

「せいしよーじゅー……？」「せいたい、兵器……？」

聞きなれない言葉に全員が首をかしげた。

「要するに巨大な魔獣と考えてくれていい。一体だけで国一つ滅ぼせる程の力はゆうに持っている、危険な奴らだよ」

「そんな魔獣がどうして王都に……」

「そんな事、オレ様が逆に聞きたいくらいだ。あいつらは……あいつらはこの世界には居ない。居ない筈だった」

「……この世界？」

「あ、あーあー！　そ、それよりも、そいつらは本当に遥か遠くまで避難しないと危ないのか!?!」

動揺してるせいか、いつもより口が軽いカリオストロに慌ててスバルが別の話題をねじ込むが、彼女は自分の失態に気づいてすらいないのか依然として窓の外を見続けている。これは大分重症である。

「ふん……それぞれが街一つ吹き飛ばすくらい容易に行えるが、それでもこれだけ離れていれば被害は早々喰らわないだろう」

「そう……でも危険なことには変わりないわね。こっちに向かって来ないとも分らないし」

「逃げなきや行けないのに一旦近づかないと行けないのは……もどかしいね」

「パツク、村の人達だって今頃怯えてるのよ？　彼らも一緒じゃないよ」

落ち着きなくエミリアの周りを飛び交うパツクは星晶獣達が気が気でないようで、しきりにエミリアだけでも逃がそうと話しかけているが、エミリアの意志は固く。頑として突き崩すことは出来ていない。

そうして村に着くまでの間、竜者の中の面々がお互いの不安を隠さんと言葉を酌み交わす中、カリオストロだけはひたすら沈黙を貫き、思考の海に漂っていた。

どうして自分が居た世界では島の守護者と呼ばれる彼らが一同、王都で集結したのだろうか。

ヴァシユロンが彼らを同時にこの世界に呼び出したなんて事があるのだろうか？ いや、そんなのありえないし考えられない事だ。

では他に彼らを同時に呼び込む事が出来る存在は誰だ？

咄嗟にカリオストロの頭の中に思い浮かんだのは団長グランと一心同体である蒼ルリアの少女だった。

複数の星晶獣と契約を交わす彼女であれば問題なく顕現けんげんさせられる事だろう。

ただ、だとしても謎は残る。

まずあの少女がこの世界に来ているのが疑わしい。

ヴァシユロンがこちらの世界に居る以上、向こうから次元を掻い潜ってくるのは容易ではない筈だ。

そして百歩譲ってこちらに来たとしても、あの純粹で心優しい少女が街中で星晶獣を暴れさせる事はまず考えられない。そうせざるを得ない理由があったのだろうか？

分からない。分からない。分からない。

理解の範疇を超えた展開にさしもの天才を自称する彼女も落ち着いてはいられず、癖のないブロンドの直毛をがしがしと手で乱雑にかき乱していた。

だがいずれにせよあの王都にまで向かえばその理由も分かるかもしれない。カリオストロが努めて冷静であろうとしながら今も視界の中で爆炎の沸き立つ街を見つめていると、外からレムの声が聞こえてきた。

「間もなく村のようですー！」

声に釣られて彼女が視線を左に誘導させれば、緩やかな坂の終点に村の全貌が見えてきていた。遠くから見える村の人々はやはり一様に外に出て、先程から響き渡る振動に不安そうに動き回っている。

これから彼ら全員を手分けして避難させる事になる。

このアーラム村は全体人数は百人に行くかどうかの小さな村だが、

全員を避難させるには竜車が足りないのが一目瞭然だ。

例え屋敷まで全員を避難させるとしてもかなりの時間がかかるのは目に見えていた。

ではどうすればいいのか、と動揺をしていたとしても冷静に思考を続けていくカリオストロだったが、そんな彼女の耳は更に招かれざる情報を拾っていた。

「おい、あれは何だ!?!」? 何を言ってるんだ!?!」

「見えたか今の!」「ああ、何かは街の上に飛んで……!?!」

拾ったのはエミリア達竜車の後続をひた走る騎士達が浮足立ち騒ぐ声。

カリオストロはすぐさま彼らの動揺の原因を探ろうと再度オペラグラスに目を通す。今度は一体何が現れたのだと言うのだ? 警戒を露わに筒の先に見える異変を見定めれば――、

それは、全身が黒い鱗で覆われた巨大な翼竜だった。

「――ッ!?!」

街の上空に浮かぶ赤く輝く二本の角を持ったそれは、大きな黒翼を広げて王都に広がる暗雲に穴を開け、天高く。天高く上昇していき……そしてすぐにグラスの視界の範囲から消えていった。

カリオストロはその刹那、自分の背筋に冷たい杭を打ち込まれた感触を覚えた。

その翼竜もまた彼女の世界の星晶獣に違いない。だが、そいつは他の星晶獣と文字通り格が違う存在――カリオストロですら到底太刀打ちすることの出来ない、最強最悪の存在であった。

拘束具すらついていないそいつが力を振るえば、結果起こるのはまさしく世界の破滅。

しかも……しかもだ。今しがたグラスから見えた動き、それはある最悪な攻撃の予兆であると彼女にははつきりと分かっていた。

カリオストロは途端にオペラグラスを放り出し、突き動かされるように素早く魔術書を展開する。範囲はエミリア達の竜車を基準として騎士達全員。出し惜しみなどせず、自分が出来る最高の集中力で防衛魔法を唱え始める。そうして瞬時に魔法は完成し、一人一人が魔力

の力場に包まれていく。その力場はロズワールクラスの魔術師が本気を出して攻撃し、ようやく傷ひとつ負う程度の強力なモノ。だがこの程度の魔法では焼け石に水にしかならないと、彼女にははつきりと分かっていった。

「カリオストロ!?!」

「レム、それに騎士共!! 村に行くな、すぐに止まれッ!!」

唐突に強固な力場に包まれた一行が困惑する中、カリオストロが吠えた。

彼女が必死になって叫んだその声は言霊にも近い効力を発揮し、途端に全員の竜車がその場で急ブレーキをかけ始め、村から300m程の位置で止まった。

「そんな、村にはすぐに着くわ! 一体どうして……!」

「もう村の事は忘れろ! 全員自分の身で自分を守るようにしろ!

防御魔法ができる奴は可能な限り全員にかけやがれ! ——パック

! お前も手伝え!!」

「……!! ——分かった、全速力でやってみせるよ!」

村の目と鼻の先でエミリアがカリオストロに問い返した直後、その全ての竜車達を包み込むように巨大な氷のドームが形成されていく。エミリアは救おうとしていた村人達を置いて自分達だけを守ろうとする二人が理解できず、パックに縋<sup>すが</sup>り付いた。

「パック! パックやめて! もうすぐで村に着くわ、せめて村の人達を集め切ってから……っ!!」

「ダメだリア、彼女の言うとおりに間に合わない、上から何かが来るよ!」

「お、おいカリオストロ! なんとかならないのか!? ヤバイのは何となく分かるけどそれでも……!?!」

「……ッ!!」

カリオストロはスバルの話を無視しながら更に防御魔法、そして強化魔法の重ねがけを行っていく。その最中も上空から感じる強いプレッシャーは刻一刻と強くなり続け、ついには大気が怯えるかのよう<sup>いみな</sup>に鳴動し始める。そんな世界の嘶<sup>いみな</sup>きによく他の全員も圧力に気



づき、立ち込める暗雲、その更に上空にいる謎の存在に引き寄せられるかのように上を見上げた。

その直後の事だった。

「あ」

誰があげたか分からぬ声が発せられたと同時に、パックが作り上げた不完全な氷のドームの隙間から全員が分厚い雲を貫く一筋の赤白い光が大地をなぞるのが見えた。

それは王都、その横に広がる平野、川、森、そして運悪くもすぐ目の前のアーラム村、更にその遙か奥まで直線で通過していった。

一行は凝縮された時間の中で見てしまう。

瞬きする間もなく光線が通過した場所が一瞬で赤熱化し、地面が抉れ、何があつたのかも分からず蒸発する瞬間を。

それはアーラム村も同様。すぐ目の前で慌てふためいていた村人達が、跡形もなく消えていく。

だが一同はそれに悲鳴をあげることも、怒りを覚えることもできなかった。

直後、なぞつた大地から呼応するかのように赤と白の奔流ほんりゅうが溢れ、辺り全てを飲み込んでいったからだ。

それは無情にもパックが展開した分厚い氷の壁を容易に消し飛ばし、全員にかけられた防御、強化魔法も無かつたかのようにいとも簡単に貫いていく。

地竜が、騎士達が、守護の甲斐なく光に包まれて立ち消えた。

ラムが、レムが、驚愕の表情のまま赤熱化した地獄に飲まれ、粒子すら残さず消えていった。

パックが、エミリアが、刹那の時間の中、存在そのものを抹消されていった。

それら起こつたのはまばたき程の微かな時間でしかない。しかしながらその一瞬の世界の中で、カリオストロもスバルもはつきりと目撃してしまった。

目の前で大切な人達を失くす、その瞬間を。

——そして波は、止まることなくカリオストロとスバルを飲み込んで行った。

## 第四十五話 独りよがりな英雄願望

「——ツツツウ!? ぶはあつ!? はあつ、はあつ……!!」

深い深い水中からようやく顔をさせたかのように息を荒げる。

全身の肌が瞬間的に粟立ち、心臓が慌しく早鐘をかき鳴らしているのが分かる。

ナツキ・スバル——タキシードに身を包んだ彼が破裂しそうな鼓動を胸の上から手で抑え込み、確かめるように辺りを見回せば、そこは色とりどりの装飾に飾られた絢爛豪華なパーティ会場。ひと目見て上流階級だと分かる客達が談笑を重ねている様子が見て取れた。

決して、地獄の業火で消し炭になった大地や人々の姿ではない。

死に戻りにより再度ラインハルトの屋敷に戻った事を理解した途端、安堵と疲労感がどつと広がり、全身からふつと力が抜けてその場にへたりこんでしまう。

まず感じたのは心底からの安堵だ。

五体満足。世界も消し飛んではない。コレほど喜ばしいことはない。

だがその後に感じたのはとびきりの恐怖だ。

全身を貫く威圧感と共に降り注いだ、灼熱の光線——世界の終わりという言葉が相応しい破壊の波濤はとうが確かに自分を包み込んだ事実にはざわめきを止めてはくれない。

重々しく響く柱時計の鐘の音と共に、今尚忙しない鼓動の音を耳にしながらスバルは小さく荒く息をつく。

心中を満たす2つの強い感情に翻弄されながら数十秒程深呼吸を繰り返していけば、どうにかこうにか別の考えが出来る程度には回復。スバルは未だ混乱の最中にある頭を整理しようと努め始める。

フェルト達の失踪。

王都を襲った生体兵器達。

そして唐突に自分たちを襲った、何もかもを消し去る熱波。

理不尽極まる死を迎えたスバルが真っ先に思い至ったのは今回の自分たちの行動だ。

一体、自分達が何を間違えたというのだ？

手紙を警戒し、待ち伏せしているであろう謎の集団を避け、屋敷は謎の魔物に襲われることはなくなった。

だが代わりにもたらされたのは死の光線による全滅だ。

カリオストロの反応を見るに死を齎もたらした存在は、この世界の者ではないようだが――

よろよろとその場から立ち上がったスバルが会場を見渡せば、そこには綺羅びやかな部屋の中で何も知らずに談笑する呑気な人々の姿があるだけ。しかし目を閉じれば直前の死の光景――仲間たちが業火に包まれて刻一刻と消滅していく様がまざまざと思い浮かんでしまう。

心に残った爪痕に顔を真っ青に染めたスバルはよろよろと立ち上がると、テーブルに置いてあったグラスを一息に煽る。

黄金色の果実酒は甘さと共にほろ苦さと喉を焼く感覚を伝え、気持ちを紛らわせてくれた。

「……つぶは、……つはあ……。前と同じ、いや前よりも理不尽過ぎるだろ……。」

つくそ、多分これは5日目までに王都で原因を探らないとダメな気が……。あ」

喉元を駆け抜けた刺激を噛み締めて一息ついたスバルだが、そんな彼を眺めている存在がいた。

奇遇にも同席していたおかつぱ頭の少女、確かポルクスと言っていたか。彼女は何を考えているか分からない表情を浮かべつつこちらを見つめ続けている。ただ、間違いなくこちらの奇行を訝いぶかしんでいるというのは分かった。

そう言えば彼女も居たなと思いつつ、スバルは何とか取り繕つくろおうと一旦咳払いをした。

「あ、あーあー。いや、あれよ。ちよつと飯が喉に引っかかってびっくりしちまって……。あはははは」

「あははは……はは……」

本人をして下手糞が過ぎると考えていた取り繕いはどうやら失敗したようだ。

彼女は瞳の見えぬ糸目をひたすらこちらに向け続けて沈黙を貫いている。

時計の鐘が鳴り終わり、参加者たちのほとんどの意識が舞台に向かっていても彼女はこちらを見つめ続けているのは何故なのだろうか。どうしたものかと考え込むスバルに、少女が唐突に口を開いた。

「——スバル？」

「お、おう……どうしたポルクス」

「どうしてそんなに顔色が悪いの？」

「え……」

どうやら、彼女が注目していたのは自分の顔色だったようだ。

スバルは咄嗟に自身の顔を手でぺたぺたと触り、自らでは確かめようのないものを確かめようと試みてしまう。

「そ、そんなに悪いか？」

問いかけへの返答は小さな頷き。

「……見たことない色してる。お化粧したみたい真っ白」

よもやの土気色。見えはしないが相当酷い顔になっているようだ。

そりやこつちを心配する訳だ、とあの死がもたらした衝撃が少なからず自分を追い詰めている事を自覚すると、スバルは力のない笑みを浮かべた。

「あー、若干おめかしこそしてるけど流石におしろい塗りたくったりはしてないな……ほら、さつきも言ったろ？ ついつい料理詰め込みすぎちゃまったーって。一瞬呼吸出来なくなったから焦って……」

「……料理で？」

「そうそう！ ラインハルトの料理が美味しすぎて限界積載量超えて食いまくったから死にかけたって感じだ！」

「……そうなんだ」

「まーだから心配なんてないぜ、もう喉につつかえてるのは取れたか

らな！」

心配かけさせて悪い！いつものように軽口を回らせて誤魔化すようにポルクスの頭を撫でれば、彼女はされるがままになりながらも領き返した。何だかまだ納得出来ないような雰囲気も感じるが、今は誤解を解く暇も惜しい。スバルはひとしきり彼女を撫でるとその場を後にした。

ひとまずはカリオストロと合流。そして仲間や世界を終わらせないためにも王都で起こった騒動の原因が何であるかを突き止めなければならぬ。

全てカリオストロ頼りで終わらせず、自分に出来ることをしなければ、とスバルは決意を顔に刻んで彼女の元へ急ぐのだった。

「……死にかけた？ ……私にはスバルが本当に死んでいたように感じたよ？」

——取り残されたポルクスの呟きは小さくなるスバルの背に届かずに霧散した。

§ § §

スバルが前回の記憶を頼りに少し見慣れた廊下を歩いていると、向こうから見知った姿——カリオストロの姿が見えた。前回と同じく顔色の悪そうな彼女はこちらを見つけると、すぐ様走り寄ってきた。

「スバル、平気か？」

「お、おう……カリオストロの方こそ」

「慣れはしてないが、別に平気だ。すぐに落ち着く……って前も言ったな、コレ」

「こうして廊下で合うのもまさかの二回目だもんなあ。とりあえず無事そうでこっちも安心した……ってど、どうした？ そんなにこっち見て」

赤いドレスに身を纏ったカリオストロが顔を寄せてこちらを伺う

様子に、スバルは少し動揺してしまう。性格こそアレでアレな彼女だがその顔立ちは絶世の美少女。純なスバルはまだ慣れきつておらず、照れ臭さを感じてしまう。しかしながらそんなスバルの様子を見ても真剣そのものの表情を崩さないのは、カリオストロが真摯しんしんに彼を氣遣つてる証左に違いはないだろう。

「……いつも以上に顔色が悪いぞ。本当に平気か？」

「あ、あー……やっぱ、そんなに悪いか？ 俺の顔」

「ほんの少し前まで墓で眠ってましたって言われても納得出来ちまう顔だぞ。

起こったことを考えれば無理もない話だが……なあ、一旦どっかで休んでおくか？」

「いやいや、それはお互い様だつて。カリオストロだつて優れなさそうな顔してるし、平気だ、大丈夫だ、コンディション・グリーンだ。ぶっちゃけ今回も唐突過ぎる幕切れだったから、見かけよりかは動揺はないつて」

自分より小柄な女の子が不快感を押し隠して動こうとしているのだ、ここで素直に休めるほどスバルの男も廃れてはいない。畳み掛けるように答えると共に、それよりも。とスバルは問いかけを重ねる。

「俺が見た最後のあの攻撃。あれもお前の世界の……えっと、せーしよーじゅー、だっけ？ そいつがやったつて事で間違いないのか？」

「……ああ。そうだ。正直オレ様も目を疑った。あれは並み居る星晶獣の中でもとびつきりに厄介な奴だよ」

カリオストロは大理石製の立派な柱に背をもたれかけると、疲れた様子を隠さずに答えた。

「星晶獣『バハムート』——世界の始まりと終わりを司る、破壊の権化だ」

——それは全身が黒い鱗で覆われた見上げるほど大きな威容を誇る黒き翼龍。

ひとたび龍が爪を振るえば空が割れ、尻尾を振るえば山が抉れ、口を開けば島そのものが消えると言い伝えられている全空の人々が恐

れに恐れた存在、それがバハムートだ。

そしてそれはただの伝説ではなく、脚色されている訳でもない。そう言われるだけの力が実際にあると過去に対峙した事があるカリオストロは知っていた。

彼女の脳裏に仲間達と数多の騎空団で徒党を組んで退治した記憶が思い浮かぶ。

あれは一言で言えば地獄だった。参加した30の騎空団のうち、最終的に生き残れたのはたったの4つ——綿密な作戦と地力のある騎空士達による波状攻撃で手に入れた有利も、奴が見舞ったたった1つのブレスにより逆に全滅寸前まで追い詰められた事は記憶に新しい。最終的には退治できたものの、海千山千の仲間達とグランとルリアがいなければ如何に不死身に近い自分といえど無事ではいられなかっただろう。

「バハムートか……ゲームやら小説やらで何回か聞いた事あるし、そいつらの設定と同じくらい物騒だな。つつか実際に物騒だったけどさ。ただ、そいつが何で唐突に王都に？」

「さあな。オレ様も全く分からん。少なくとも星晶獣はオレ様達の世界でしか存在しない筈だからな。星の民が異世界にまで進出する可能性は……ありえなくはないが……ただなあ」

結局の所、現状が全く理解できないのはお互い様のようだ。腕を組んで不機嫌そうな表情を見せるカリオストロは足を軽くタップしながら唸っている。

「な、なあ、カリオストロ。ちなみにそいつを倒すことは？」

「……実際に退治した時は、それこそ一騎当千の騎空士を軍隊規模用意して、それで辛うじて鎮圧できたんだ。オレ様含め、こっちの陣営総出で対峙しても到底無理だろうな。」

ラインハルトがどこまでの力量があるかは分からんが、奴がいても倒せるかどうか……」

「マジ……かよ」

告げられた事実には、スバルだけでなくカリオストロも重い溜息を漏らした。



謎多き中で被害を受けぬように立ち回ったというのに、5日目には強制的にゲームオーバーは溜まったものではない。屋敷で起こった事件も大概理不尽だったが今回は更に理不尽だ。どうして自分にだけこんな理不尽が襲い掛かる？ 一体自分が何をしたというのだ？ スバルは謂れもない罪を押し付けられたかのような気分になり、殺された衝撃も相まって怒りたいやら泣きたいやらで自分が分からなくなりそうだった。

「とりあえずは王都に行つて情報を集めるしかないな。幸いにもタイムリミットまで5日間ある。今日はここに泊まるとして明日届くであろう手紙を元にエミリア達を説得。あとは皆で王都に向かう事にしよう。ああ、ラインハルトも同行できれば尚良いか。星晶獣達が暴れる理由は間違いなくある筈なんだ。だから——」

「くそ、……クソツ、なんだつてこんな目に」

「……おい、聞いているのか？」

「ああ聞いている、聞いているさ。王都に行けばいいんだろ？ 行けば」

「……苛立つ気持ちは分からんでもないが、落ち着けスバル」

「別に苛立つてなんかねえよ」

カリオストロが既に冷静さを取り戻しているのに対し、スバルは逃がしようのない心のざわめきが苛立ちに転化しつつあった。普段のスバルであれば軽くない事事も出来た軽口も、いかんせん今の状態では火に油を注ぐ事にしかなりえてない。命のやりとりを何千回以上行ったカリオストロと、片手で数えられる程度しか経験していないスバル。両者の経験の差がここではつきりと現れていた。

「どうだかな。仮にも死んだ直後、お前じや厳しいだろうから今日はもう休め。あとはオレ様が皆に伝えて——」

「……っさいな」

「あん？」

「——うるさいって言ったんだよ。俺はもう大丈夫だ、お節介もいい加減にしろよ」

そして、スバルの苛立ちは些細な切欠を持って怒りに成り代わった。

カリオストロとしては冷静に評したつもりだったようだが、今のスバルにとつてはその言葉は侮辱に等しい。はつきり睨みつけて啖呵を切る始末になってしまふ。

……そして、不幸なことにもカリオストロも少しながらカチンと来てしまう。冷静さを取り戻しつつあるとは言え彼女も死に戻り直後の不快感が未だ拭いきれていないのだ。軽率にも売り言葉に買い言葉と反応をしてしまったのだ。

「ほお〜……言うじゃねえか、折角気遣ってやってるっていうのに要らないってか？」

「なにが気遣いだ。押し付けがましい。大丈夫だって言ったら大丈夫なんだよ」

「その台詞も死体みたいな顔してなければもうちよつとは決まってるんだがな。」

お生憎様だが今日する事はあいづらに事情を説明するだけ。お前が居たところで何も変わらないだろうよ」

「同じく具合悪そうなカリオストロにだけは言われたくないね。あと勝手に話進めるんじゃないやねえよ、大体俺の力が説明の切欠になってるんだろ？ だったら当事者がいない事には話が進まないだろ」

「お前がその場に居たとしても信憑性が少し増す程度だ。オレ様とお前が知りえる情報に大きな差がない以上、大筋は変わらない。ん？ だとしたらお前がやる事はないよな？ それなら少しでも体力回復に努めた方が合理的だろう？」

「ぐ、……偉っそうに決め付やがって、俺が居ないと分からねえ情報だつてあるかもしれないだろ!?!」

「はん、今回に限っては『ない』と断言できる。事情を深く知ってるのはオレ様だけだからな。」

お前は王都で他にも暴れていた魔獣達の説明が出来るか？ 出来ないだろう？ あの魔獣達はオレ様の居た世界の産物なんだ、誰一人として事情すら知らないだろうよ」

「ッだけどー」

「言っておくが、体調の悪い奴に無理強いして出張られても邪魔なだ

けだ。八つ当たりしてる暇があったら大人しくすっこんでろ」  
「~~~~~ッ!!」

カリオストロの正論はぼつさりとスバルの心を切り捨てる。少しでも力になろうと息巻いていたのに出鼻をくじかれる形になればもう怒りと屈辱感しか残らず、スバルは思わず歯を強く噛み締めてしまう。

どうしてこちらを突き放す？

自分だって当事者の筈だ。

全てカリオストロが活躍する形になるのは納得がいかない。

そう言った思いが募る一方で彼女の言葉に反論する術も持ち合わせてはいない。それが更に怒りを助長する羽目になってしまい、スバルの身体は自然と震えだしてしまう。

カリオストロはそんなスバルを冷たく一瞥いちべつした後は無言で踵かかとを返してエミリア達の元へと急ぎ、取り残されたスバルは衝動的に壁を強く叩いた後、心に残った死さんしの残滓ざんしと怒りを振りほどこうと彼女とは反対方向に歩みだす。

（今ので確信した、あいつは俺の事を全く頼りにしていない。都合のいい道具か何かみたいと考えてやがる！ 全部が全部自分だけで解決してみたいに考えやがって、森の件は俺の機転がなければ全員助からなかったんだ。だったら頼りにしてくれたっていいだろ?!）

肩で風を切りながらスバルはずんずんと廊下を突き進む。

その間も脳裏に浮かぶのはあまりにも短絡的で、短慮な考え。

しかしながら今のスバルは自らの怒りが正当な物であると信じ込めてやまなかった。

（それに今回の件はカリオストロの世界の魔物の仕業って言うんだったら、カリオストロはこっちに頭を下げてしかるべきだろうに。アイツのせいで俺が、みんなが死ぬ羽目になったんだぞ?!）

客観的な考えに至れない彼の思考は明後日の方向に。

そして留まる事を知らぬ怒りは被害妄想を作り出し、やがて味方を敵へと認識してしまう。

（——俺の力がなければやり直しなんて出来もしないくせに!）

目的地も決めずに、思うがままに進むスバルは、やがて他よりも古びた扉の前にたどり着く。

扉の隙間から見えるのは暗闇。どうやらこの先は外に繋がっていないようだ。

今の自分は到底眠れそうにない、少しばかり外の空気でも吸おうかと考えようかとドアノブに手をかけようとした時——外から声が聞こえてきた。

『つかあ〜ツ……すツげえキツツいわ……』

『何がキツいだよお前は。皿洗いしかしてねえくせに。こつちなんか気が狂うほど野菜刻んでるんだぞ。もう腕がぱんぱんだよ』

『野菜刻みだあ？ そんなのより盛り付けの方が大変だぞ畜生。』

あいつ俺の盛り付けが下手だ下手だって何べんも頭叩きやがって、雇われの身じゃなかったらぶつ殺してる所だったぞ』

『皿洗いなめんな。俺たちの日収を遥かに超える豪華な皿を終わりのなく洗うのがどれだけ神経使う事か……俺の身長が伸びなくなったらどうしてくれるんだよ』

『いや、お前の身長はもう伸びねえだろ』

『デメエら喧嘩売ってるんだな、買うぞ!』

どうやら扉の向こうに誰かが居るらしい。

この屋敷で働いていると思える三人組は口々に文句を連ねている。

やはりどんな世界であっても同じような文句が飛び出すんだな、と同じ作業を経験したことのあるスバルは彼らに親近感を覚えてしまふ。

『しかしよお、フェルトの嬢ちゃんも大変だよな』

『そうかあ？ 俺は逆に変わってやりたいぜ。毎日贅沢三昧。人を顎で使う生活なんて、最高じゃねえか』

『馬鹿かお前は、王様になれるのは女性だけなんだぞ？ 男つていう時点で論外だ。つかお前が王様の国とか絶対にゴメンだわ』

『んだとこの野郎』

『落ち着けよ、大体嬢ちゃんの愚痴は聞いてただろ？ やれ貴族の教育がくしきたりがくとかで頭パンクしそうだって、滅茶苦茶うんざり』

してただろ。お前それでもやりたいか？』

『……まあやりたくない事やらされるつてのは確かに嫌つちや嫌だけどなあ……』

何となく出るタイミングがなくなってしまったスバルは、彼らの他愛もない話に耳を傾けてしまう。どこか聞き覚えのある声、そして滲み出す小物臭——そんな彼らに懐かしさと安心感を覚える。見ず知らずの他人だろうが、出来るなら自分も混ざって彼らと他愛もない話をしたものだ。いや、しよう。気分転換にはぴったりだ。

いよいよ持ってドアノブに力をかけ、扉を開け放とうとした——その時だった。

『つまりだ、あの変な奴らに頼まれた事は嬢ちゃんにとってプラスしかないって事だろ？』

(——変な奴ら？)

彼らの口から出た気になる言葉に、スバルはその場で立ち止まってしまう。

『そういや段取りは明日だっけか。お前、大丈夫なんだよな？』

『もう場所に関しては確認済みだし、合鍵も休暇の間に作っておいた。

後はラインハルトが隙を見せている間に盗んじまえばOKだ』

『ラインハルトには気付かれてねえよな？』

『ぬかりはねえよ、あいつは剣は強いかもしれないが大概な甘ちゃんだしな。気付いた頃にはオサラバしてる手立てだ。大体逃亡先に関しても向こうが手配してくれるんだろ？』

どうやらこの三人組、誰かに依頼されて何らかの悪巧みを行うらしい。

スバルは扉に近づき、隙間から聞こえてくる彼らの声に耳をそばだてる。

『結局俺達がまともに働くなんて土台無理だったって事かあ……』

『いいじゃねえか、大金が手に入るんだぞ？ この国に未練なんてないし、ずーっと下っ端だなんて真っ平御免だ。フェルトの嬢ちゃんだって悩みからオサラバするかもだぜ？ 良い事尽くしだ』

『さよならグニカ王国、そしていらっしやい逃亡生活だな。それに、

もうあの恐ろしい嬢ちゃんに会うことも……!』

『……気持ちは分かるゼカンバリー、そうだ。もうあの嬢ちゃんに恐れることはないんだ……!』

フェルトの悩みがおさらばする? 国外逃亡の手筈がある? あの嬢ちゃん?

全貌の掴めぬ彼らの話は、スバルの好奇心を刺激してやまない。

そのためスバルは自然と前傾姿勢になり、ドアに密接してしまった。それがいけなかった。

古い扉だつたせいだろう。

軽く押されたドアが小さく開き、きしんだ音を立ててしまったのだ。

(……やべっ!?)

『!?!』『なんだ!?!』

『お、おいッ、そこに誰かいやがるのか!?!』

スバルの身体が文字通り飛び跳ねた。

異変を察した男達はこちらに向けて近寄っているのが気配で分かる。だが辺りを見回せど隠れる場所はなく、今から逃げようにも到底間に合いそうにない。刹那の時間で悩むスバルだったが悲しい事に、彼の頭脳は解決策を見出す事はできなかった。その場から動くことも出来ずに目の前の扉が開いてしまう。

「テメエー! 盗み聞きしやがった——な……?」

そうして開け離れた扉の先に現れたのは、大、中、小の背丈の男性達。

一人は大柄で厳しい体つきをしており、

一人は中肉中背で、細いスタイルをした舌が長く、

一人は子供くらいの背丈でマツシユルムヘアー、

そして、全員が薄汚れたエプロンを身に纏まとっていた。

互いの姿を見合つたこの場の全員は、ぽかんと呆けた顔をしてしまう。

それも無理もない事だろう、なぜなら彼らは互いに面識があつたのだから。

「あーッ！ お前らあの路地裏の時の!? トン・チン・カンじゃねーか!!」

「て、テメエ……どうしてここにいやがるんだっ!」

「っていうか何だよその格好! お前もしかして客なのか!」

「トンチンカンじゃねーっての!」

そう、何を隠そう彼らはこの世界にやってきた当初にスバルが出会った不良三人組、その名もガス『トン』、ラ『チン』ス、『カン』バリーであった。かつて三度路地裏でスバルの前に立ち塞がり、拳句の果てにカリオストロに退治された序盤の中ボス(?) ポジションである。彼らがこの場所に居る事に驚きを隠せぬスバルだったが、やがてその格好を見てハットとなった。

「あ、そ、そうかつ、お前ら改心してこの屋敷に雇われたのか!」

真つ当な仕事見つかつてよかつたじゃねーか!」

「何が良かっただ畜生! っていうかお前こそどうしてここに居るんだよー!」

「あー……実は俺はラインハルトに招待されて、ここに呼ばれてな?」

「しょ・う・た・い、だどくくッ!」

「前は怪しい身なりしてやがると思ったら、やっぱりテメエ良い所のぼんぼんだったのかよ! ケッ!」

ギリギリギリと聞こえてくるほど歯ぎしりして三人組はオーバーに悔しがる。

だが彼らもそんな事してる場合じゃねえ、とすぐに我に帰ってはスバルに詰め寄った。

「そんな事よりもだ……お前、今の話は聞いてたよな?」

「あ、あくくえ、えーつと……ま、まあほんのちよびつとだけ……?」

「残念な事だが、聞いたからには」

「生かしちゃおけねえなあ!」

スバルの言葉を聞いてか訊かずか、三人が一様に動き出す。

一番体格の良いガストンが両手を合わせて指を鳴らし、

一番細身のラチンスが懐から麵棒を取り出し、

一番小柄のカンバリはフォークを片手にスバルを威圧する。

……まあ当然の事ながら、彼らの精一杯の威圧は彼らの様体と余りにもミスマッチ。スバルは怖がるどころか笑いそうになってしまった。

「わ、笑うんじゃねーよ！」

「いや笑うなって方が無理だろ!? 細い奴、お前のナイフどこいったんだよ！ 何で綿棒持ってたんだ!?!」

「細い奴じゃねー! ラチンスだこの野郎！」

「あとちっこい奴、お前もフォーク持たれても逆に困るわ！ どのプロレスラーだよ!?!」

「カンバリーだ!! はあ!? フォーク舐めてんじゃねーぞ！」

顔を真赤にした二人がスバルに叫び返す中、唯一特に何も言われなかったガストンがスバルの胸ぐらを掴んで彼を持ち上げた。

「この屋敷じゃ武器になりそうなもんは全部没収されんだよ。けどな、綿棒だつてフォークでだつて、この拳だつてお前を殺す事なんて簡単なんだぞ？ あ？」

「ぐうっ……」

優位に至つたのを悟ると、自分でも思う所があつたラチンスもカンバリーもへっへっへ、と悪どい小物の笑みを浮かべ始める。

確かにこれは不味い。よもや何の情報も得ずに一日と経たずにゲームオーバーは流石に御免である。だがカリオストロはこの場に居ないし、今彼女に頼るのは絶対に嫌だ。

何とか自分で切り抜けなければ、と頭をフル回転させていくスバル。

その数瞬後、何かしらの案が浮かんだのだろう、彼はニヤリと面々に向かつて笑みを見せた。

「何笑つてやがる」

「へ、へへ……いや。お前らも毎回詰めが甘いなって思つてね」

「あん……?」

「お前ら、俺がここで叫んだらどうなるか分かってんだらうな……?」

少しでも怪しまれたら、お前らの計画はどうなっちまうんだらうな……?」



「「ツツ!?!」」

そう、彼らの計画は多少なりともラインハルトの信頼を前提とした綱渡りのような物なのだ。

ここで少しでも怪しまれてしまえば成功率は格段に減ってしまう事には違いない。

思った通り動揺しだす彼らだが、カンバリーだけは冷や汗を垂らしながら引き笑いで否定する。

「お、落ち着けて、今の時間はみんなパーティしてんだよ。こんな離れた所で叫んだところで誰が気づくもんか!」

「そ、それもそうだよな!」

「お、おおそうさそうさ!」

「いや、一人だけ確実に気づく奴がいるぞ。……カリオストロだ」

当然ハツタリだ。今頃エミリアと控室で話してる彼女に声が届くかどうかはわからない。

しかしながら彼らはカリオストロにこっぴどくやられた経験がある。それならば何らかの効果があるに違いないと見越したスバルだったが、

「……あ、アイツ。アイツが来てるのか?」

「は、ハツタリだ! ハツタリに決まってる!!」

効果は抜群のようだ。

彼女の名前を上げた途端に彼らの顔が真っ青に染まり、面白いように動揺しはじめたではないか。

「なんなら試して見るか? アイツは俺の護衛みたいなもんだ。今は所要で少し離れてはいるが、まかり間違つて俺を殺したら絶対気づく。そうしたら……あの時のレベルじゃすまないのは分かるよな?」

スバルは精一杯の不敵な笑顔で見せつつも更に畳み掛け、自分を殺す事Ⅱ相手の破滅であると分からせる。

小物がすぎる彼らの事だ。きつとこのブラフにも引つかかる筈だと確信があった。

コレで多少なりとも事態が好転するだろうとスバルが相手の反応を伺おうとすれば——突如、彼の胸ぐらを掴んでいたガストンがその

手を離し、いきなりその場に蹲り始めたではないか。

「ひ、ヒイヒイヒイッ!! ゆ、許してくれ許してくれ許してくれえ〜  
〜っ!!」

「!?」

「が、ガガガガ、ガストーンーッ!!」「落ち着けガストーン、落ち着けつて  
!」

そして始まる大男の大号泣。

大きな体を精一杯縮こまらせて泣き喚くガストンの姿は、有り体に  
言えば無様。別の言葉で言い換えれば非常に哀れだ。

効果が抜群どころの話ではない、完全に致命傷クリティカルである。

よもやここまで効果を発揮するとは思わなかったスバルは、驚きを  
隠せず大口を開けてその光景を眺めるほか無い。

「テメエ、よくもガストンのトラウマを刺激しやがったな!」

「あの嬢ちゃんのせいでガストーンはなあ、毎晩夜泣きしながら母親に  
助けを求めるくらい魔されてたんだぞ!? ようやく忘れかけてたつ  
て言うのに思い出させやがってえ!」

「アツ、ハ、ハイ、なんかその……すまん」

仲間思いなのだろう。ラチンスとカンバリーがカリオスト口の陰  
に怯えながらも怒りをぶつけてきて、反射的に謝るスバル。流石にこ  
こまでトラウマになっていたとは思ってはいなかったものの、冷静に  
考えて見ればあのとびきり恐ろしい笑顔で淡々と自らの息子をロス  
トしそうになるのは確かにトラウマになるだろうな、とスバルも自然  
と股間を手で抑えて体を震わせた。

「ま、まあお互い悪かったって事で、な? 大丈夫だって、お前らの企  
みは訊かなかった事にするし、カリオスト口にもチクったりもしな  
いって」

「ほ、本当だろうな……!?」

「お、おいガストーン良かったな。大丈夫だ、アイツはお前を罰したりは  
しない。だから平気だって——」

「でもこれだけ騒いできるとこっち来ちやうかもだから、ずらかるなら  
早くしたほうがいいぜ?」

「い、イヤアアアーツ!! ママああーツ!!」

「オィィィィ!? ガストンどこ行くんだああ!!」「お、覚えてろよ畜生ーツ!!」

彼らの反応の良さに調子に乗ったスバルが追加で脅せば、大層トラウマを刺激されたガストンが耐えきれなくなって暗闇に包まれた外を泣きながら飛び出していき、残り二人は小物らしい捨て台詞を残して慌てて彼の後を追っていった。

取り残されたスバルは彼らの滑稽な姿と自分の策が余りにも上手くいった事についてと笑ってしまう。

(俺が何も出来ない? 違うね、俺にはこの『機転』がある。

今回の情報だって俺が居なかったら手に入らなかった。

そうだ、カリオストロの力なんてなくても俺だけでも困難ぐらい解決出来るに違いないんだ!)

余りにも不運な事に、スバルは今回の件で自らの力を過信してしま

う。この世界に来てからどこか歪に成長してきた彼の自尊心はこの件で大きく刺激される事になり、カリオストロがかつて危惧していた英雄願望が小さく<sup>くすぶ</sup>燻り初める切欠となってしまうのだった。

(目にももの見せてやる。俺だって出来る事を、皆に見せつけてやる――!)

## 第四十六話 和合を乱す波乱

儂にとってフェルトは孫のような存在だ。

先の亜人大戦を経てルグニカ王国の貧民街に逃げ込んでから、日々の活力の源はほとんどフェルトによって賄まかなわれていたと言ってもよい。

最初はやんごとなき理由のために渋々育てていただけだったが、共に日々を過ごす中で彼女の本質に触れていけば……もう、ぞんざいに扱うことは出来なくなった。

奴は喜怒哀楽が激しく、負けん気が強くて生意気。何をしでかすか分からん有り余るほどの活発さを持ち、人並み以上に賢しく、小さな体で毎日を精一杯生き、それでいて根は優しく情に厚く、誰に染まることのない眩いばかりの純真さを持っておる。

恐らくは世界を探せば何十人、何百人と同じような人間はおるじやろう。

だがそんなありふれた存在が発する眩しい程の光に晒され続けられ——心中を巢食う闇が解ほぐされ、その心地の良い温もりをもっと感じていたいと思うのに、そう長い年月は要らなかった。

後に盗品蔵と呼ばれる場所で儂が後ろ暗い商売を続けられているのも彼女のお蔭かげじやろう。

ただそれは老骨を無駄に生き長らえさせるためではなく、純粹無垢な彼女のためだ。

このどうしようもない我が身を十二分以上に照らしてくれた恩返しになるかはわからぬ。だが儂を救った彼女はこんな薄汚い場所で終わっていい訳がないのだ。

良いこともあった。

辛いこともあった。

楽しいこともあった。

苦しいこともあった。

決して楽ではないが、どこか続いてほしいと思う日々も気づけば十数年続いた。

日に日に成長していくフェルト。その彼女の仕事ぬすみが軌道に乗り始めたある日の事、そいつらはやってきた。

無知蒙昧むちもうまいを極める、癖の強そうな生意気なガキ。

天真爛漫、唯我独尊を地で行きそうな絶世の美少女。

白銀の雪景色を思わせる、ハーフェルトの精霊術士。

妖艶さと残酷さを兼ね合わせた、全てを狂わす殺人鬼。

公明正大。自らを正義と称する大英雄、剣聖。

孫のように思っていたフェルトが大口の商談を取り付けたと聞いて、彼女の目標が進むことに嬉しさを、一方で彼女がここを離れてしまう事への悲しさを漠然ぼくぜんと感じていた儂だが……よもやあんな事になると誰が想像できる？

最初の三人は、まだ良い。当事者と介入者である奴らはあれよあれよと儂らを救ってくれた。特にあの美少女がおらんかったら儂らの命もなかった事じやろう。

だが最後に現れた剣聖。奴は横からぱつと現れたと思えば、命が助かった代償と言わんばかりに、かけがえのない儂の陽だまりを連れ去って行こうとしたのじや！

正義の代行者ともあろうものが理由も特に告げずに人を連れ去る？

許されるか？ 許される筈もない愚行じやろう。

しかし儂の咄嗟とっさの抵抗も苦にせず、やつは絹で包むように儂を気絶させて——フェルトを連れ去られてしまった。

次に気づいた時には、街中の兵舎——その牢屋の中であった。

目を覚ました儂は牢屋越しから兵士にフェルトの事を聞いた。

一体彼女をどこに連れ去ったのじや、と。

「それについては答えることは出来ない。ただ彼女は絶対に安全であることは保証しよう」

聞いた話によればフェルトは剣聖によって候補者であるかどうかを調べられ、恐らくはその数日後には開放されるとの事だった。兵士にとっても奴が王の候補などと信じられないのじやろう。儂もそうだから分かる。

ただ兵士の関心は奴よりも儂にあるようだ。騒動の際に盗品蔵を改められたのだろう。違法取引、窃盗などの余罪を洗いざらい吐き出させようと厳しく取り調べを行ってきた。

厄介な事になったとは思う。だが悲観する程でもない。

口には自信があるし、口が駄目でも数日間我慢すればいい。フェルトの安否が確認出来次第、すぐさまここから抜け出せばいいだけなのだ。

そう考えて兵士に虚実を織り交ぜた証言で追求を避けていけば……あつという間に3日が経った。

時に体罰を交えた尋問もあつたが昔を思い出せばぬるいもの。多少の経験を積んだ兵士程度では儂に罪を認めさせるのは不可能であつた。

そして案の定兵士は悔しそうな顔をしながら自分の拘束を解いた。

当然じゃ。儂はあくまで商品を仲介して売り払っただけに過ぎぬ。実際に盗んだ実行犯という訳ではないため、どう追求されようが軽犯罪にしか成り得ぬのだ。

「大きな体に反してよくぞまあそこまで回る舌を持つ……我々はまだお前の余罪を明かす事を諦めていない、ゆめゆめ覚えておけご老人」  
釈放間際に悔し紛れか儂は兵舎から蹴り出されたが、そのありきたりな捨て台詞が耳心地が良く、怒りは芽生えんかった。

しかし解せぬのは釈放と同時にこちらに向けて投げつけられた見覚えのない袋である。

この袋は一体？ 儂が訝しんでいると兵士は更に苦しい顔をして言い放った。

「お前ごときには勿体無いがラインハルト様からのご温情だ。この国の礎になるかもしれぬ、5人の巫女——そのうちの一人をこれまで育てあげた事への礼だよ」

麻袋に零れんばかりに入っていたのは聖金貨の山だった。

儂はその時ばかりは意味がわからぬと呆けた顔をしておつたじやろう。

だが次の兵士の言葉で、瞬間的に感情が振り切れた。

「あの貧民街の少女、フェルトと言ったか。あの娘はラインハルト様の元で此度の王選候補の一人として祀り上げられる——もうお前の元に戻ることはないだろう」

聞き捨てならぬ言葉であった。

儂はその兵士の首を衝動的に両腕で釣り上げ、壁に押し付けた。儂の周りを複数の兵士が取り囲み、一気に慌ただしくなるのが分かる。だが抑えられるぬ。

一体どういう事じゃと、儂は努めて殺さぬように自身を抑えながら震えた声で聞いた。

「い、言った通りだ！ あの少女は徽章きしよゆうに選ばれた巫女のお一人！  
ラインハルト様が探し求めていた最後の巫女よ！ お前のように貧民街でみすぼらしく過ごす存在では最早ないのだ!!」

アヤツが王選候補に？ 誰よりも貴族を毛嫌いしていたおつたフェルトが？ 悪い冗談にしか思えぬ。だがそんな事よりも許せぬのは……儂が誰よりも大事にしておつたフェルトを、手切れ金で忘れさせようとするラインハルトのやり口であった。

これが正義の体現者のやり口か。これが剣聖のやり口か!!

儂は大金が欲しくてフェルトを育てた訳ではないのじゃぞ!?

最早ラインハルトとフェルトに直接会って話さねば納得することも出来ない。

今すぐ合わせろと凄むも兵士は出来ぬ、出来ぬと首を横に振るばかり。

——そうなれば、儂の怒りは振り切れるしか道はなかった。

気付けば儂は半壊した盗品蔵の前におつた。

拳は血に塗れ、全身は幾ばくかの傷を負っておるが気にしている暇はない。壊れた蔵の入り口を無理やりこじ開けて中に入り込む。……やはり以前より大分内装がすつきりしておるな。主が居ない隙に貧民達がこぞって漁りに来たのじやろう。大方のめぼしい盗品は蔵の中から洗いざらい消えていた。

だが動揺することなく儂は蔵の中央の床板を剥がし、土の中に埋め

込まれた壺を掘り起こす。

そこには今まで溜めこんでいた金品がぎつしりと詰め込まれている。流石にここに隠していることは誰も気づかぬじやろう。

小脇にその壺を抱え、必要最低限の荷物を身につけた儂は外に出る。

恐らくフェルトが望んで王になることはないじやろう。

だというのに戻ってこないというのは、剣聖によって軟禁に近い状態にある事は間違いない。そしてあの兵士の反応を見るに、直談判ではいどうぞと返却される事など夢もまた夢じやろう。

ならばどうする？ 道理が通らぬならば、無理を通す他あるまい。今は力を蓄え、彼女を奪うチャンスを得る必要がある。

法を犯す事になろうとも、人理に悖る内容であろうとも構わぬ。最初に超えてはならぬ領域に踏み入ったのは剣聖じや、それであれば何を躊躇うことがあるうか。

決意を新たに、追手が来る前に早々と国を発とうとした——その時じやった、

「——ああ、何とか間に合ったみたいやなあ」

いつの間にか儂の前に猫耳のついた白いローブを纏った二人組が立ち塞がっておった。

一人は150cm行くかどうかの身長を持ち、全身を覆うローブからは体つきは予測出来ぬが声色から年若い女性なのは明確。もう一人は幼子程の身長で身の丈以上の杖をついており、声を出した女性のすぐ近くに控えておった。

一目してこの国の兵士とは違う外装と雰囲気、儂は思わず拳を強く握り占めて睨みつける。

じゃが目の前の存在は何ら動きを見せずに、目元まで覆うフードの中で嬉しそうにするだけじやった。

「焦ったで〜？ 噂を聞いて即日即決。はるばるルグニカに飛んであんにさんに会いに来たっちゅーのに、勾留されとる筈の兵舎の前は大



騒ぎ。兵士が何十人と倒れとるやないか。

もうこの国におらへんかな〜って思ってたダメ元で足労したんやけど……これは普段の日頃の行いのお陰やろな〜」

特徴的な訛りと話からコヤツがカララギ出身であることは明白。

警戒を露わに沈黙を続ける儂に、少女はくすくすと笑みを絶やさなかつた。

「ああ。大丈夫やで〜、うちは別にあんさんを兵士に突きつけるつもりはあらへん。

むしろあんさんにとつて、と〜つても嬉しい提案をしに来たんや」その前に名を名乗れ。素性を明らかにもできぬ卑怯者相手に何も話すことはない。

儂のトゲのある物言いにも少女は眉根一つ動かさず大仰おわびきょうに反応を  
するだけ。

挑発に乗ってくればまだ御しやすいが……これはかなり厄介な相手のようじゃな。

「堪忍かんじんなく、ついついあんさんに会えたのが嬉しゅうて名乗りも忘れてもうたわ」

そやつは深く被っていたフードをあつさりと取り払った。

すると柔らかで美しい、絹のような紫の髪と翠エメラルド玉色の吸い込まれ  
そうな瞳が儂の目に入った。

「うちの名はアナスタシア・ホーシン。ホーシン商会の主をやつとります。

以後お見知りおきをな——亜人戦争の立役者、大参謀バルガークロムウエルはん」

驚きを隠せなかつた。

盗品とは言え商いを行う者ならば誰しもが知るホーシン商会の  
トップが来た事。

そして誰にも教えておらぬはずの儂の正体に辿りついておる事に。

特に後者は儂の命に関わりかねぬ情報、反射的にこの少女を叩き潰  
そうと思ひ至りそうになつたのだが——

「めーっ」

言葉足らずな掛け声が足元から聞こえた瞬間、振り上げんとした儂の手首には既に杖が押し付けられており、ソレ以上振り上げることは叶わなかった。

それを行ったのはアナスタシアの傍らにおった幼子。

儂は目を離れたつもりはなかったのに何という早業か。

「余計に警戒させてもって堪忍な。でも、こうして顔を出したんはうちなりの誠意やと思つたつてや。」

脅すつもりなんて毛頭ない。そもそも商人として利には拘るけど、一方的な搾取をするつもりは全くないんよ？　商いは持ちつ持たれつやしく」

何が脅すつもりはないじゃ、白々しい。その情報を持つというのは儂の生殺与奪を握つたも同然。圧倒的な高みの上から思うがままに選択肢をチラつかせる事が搾取でなければなんと言おう？

「そこが大きな勘違いや。うちは、いや、うちらに限ってはあんさんを絶対にどうこう出来ひん。——ミミ、もう離したり」

「あいさーっ」

すんなりと杖を離れたミミと呼ばれた幼子は帰りはとてととまさしく子供らしくアナスタシアの元へと移動すれば、ぽふりとそのまま抱きつく。少女はミミの頭をひとしきり撫でてあやした後、おもむろに、彼女のフードを取り払う。そこには二対の猫耳がぴこぴこ、とくすぐったさを表すかのように動いていた。

猫耳……亜人？　少女の言葉と見せられたヒント、その2つに考えをめぐらせていると、儂はハツとなった。ホーシン商会が抱える商人、傭兵団。その人員構成は確か——

「頭のめぐりが早いは助かるわく分かるやろ？　うちらホーシン商会に人種の隔へだたりはない。」

人も、猫も、犬も、狼も、鳥も、竜も、エルフも、なんもなーんも気にせえへん。ただそこに利があれば良い。うちはそういう所や。

せやからうちの従業員は亜人の構成割合は非常に多い——それなのに亜人の復権を何よりも願った第一人者のあんさんを害するなんて、うちには到底出来ひんのよ。うちが従業員達に殺されてまう」

おお怖い怖い。とおどけて自らの体を抱きしめるアナスタシアを、ミミが「だいじよぶ？　だいじよぶ？」とぴよんぴよん飛び回っては元気づけようとしているのが見えた。

成る程。確かに理屈は通る。ただ戦争自体最早何十年も前の話、どこまで効力があるか定かではないが……とりあえず載せられてやろうと儂は少女に促す<sup>うなが</sup>。それで、お主の持ちかける提案とは何だと。

「うんうん♪　交渉はスピード命。一秒の遅れが数倍の損害をもたらす！　即断即決出来るバルガはんはやっぱり商人として一流やね〜。それじゃ詳しい話は移動中にしよか？」

ぱんぱん、とその小さな手をアナスタシアが叩けば、辺りの家々、そして小道からミミと同じ全身白フードの人々がわらわらと現れたではないか。

これには儂も乾いた笑いしかでない。偶然を装った風に現れたが、この有様を見れば儂の動きなど全て計算済みと思うしかあるまい。噂に聞く大商人の力を身をもって知った瞬間じゃった。

儂が一流ならコヤツは超のつく一流と言わざるを得ないじやろう。「過分な評価おおきに。でもこんなの交渉の常識<sup>のつと</sup>に則<sup>つ</sup>っているだけやからなく。

とりあえず鬱陶しい兵士がまたぞろとこちらに向かっとなるから、まずは国外逃亡から始めよか」

そうして儂は少女の手を取って商会の竜車に紛れてこの国を経つことと相成り、儂にとつても、アナスタシアにとつても利となるその提案を成就させるためにその日を待ったのじやが……その日は余りにも近い、ひと月後の事であった。

確かに早ければ早いほど良いが、それでもあまりにも早い。

老骨にとつてひと月など瞬き程度で過ぎ去るもの。ようやくカララギの生活に慣れ親しんだところで儂の願いが身を結ぶ日を迎えることになるとは。

動揺している儂の心を置きざりにして何十の竜車と傭兵団でカララギを発ち、一時的に傭兵団と別れた儂ら別働隊は剣聖の屋敷に向かう。

打ち合わせ通り到着時刻は予定通り朝6時頃。

披露宴の翌日を狙って、儂らは何時ものように屋敷に物品を卸おろしていく。

ラインハルトの屋敷には一年前から商品を卸していたので怪しまれる要素は全くないが、アナスタシアはこうなることを見越して手を広げておったのじやろうか。つくづくあの小娘が未恐ろしく感じる。

儂は深く帽子を被り込み、黙々と荷降ろしを行いながらフェルトがいるであろう部屋をちらりと伺うかがう。

屋敷の間取りについては既に聞き及んでいる。あとは内通者がフェルトを誘導するのをここで待ち続ければそれでよい。その後はフェルトの意志を儂自身が確認し、その内容如何によってはこの屋敷から脱出するだけ――

その時の儂は成功を全く疑っておらんかった。

表面は至極冷静じゃが内心では興奮が渦巻き、今か今かその時を待ち続けていたのだが――その考えはすぐに覆される事となった。

「ご老人、精が出ますね」

「……なあに。この程度であれば苦でもない。慣れたものよ」

背後から駆けられた声に体が跳ねそうになるのを何とか抑えた。

恐らくは屋敷住人の気まぐれであろうが、ここぞと言う時についておらん。己が運を呪いながら振り返ることなく作業に従事する様子を見せ、どうにかやり過ごそうとしたのだが……突如、その肩に手をかけられた。

「それは何よりです。私共も貴方の事をずっと案じておりましたから」

全身にさあと冷や汗が湧き出す。激しく打つ心臓の音を聞きながらゆっくりと振り返れば――、

「フェルト様がお待ちです。ご同行頂いてよろしいでしょうか？」

そこには案の定、赤髪を携えた美麗な騎士、ラインハルトがにこやかな表情で立っていたのじやった。

「ロム爺!?! お、お前っ………本当に?！」

ラインハルトに連れられて居間まで通されたロム爺を迎えたのは、驚愕の表情を見せるドレス姿のフェルトと、筋書き通りの展開になった事を深く噛みしめるエミリア、ラム。そして慙然とした顔を見せるカリオストロの姿だった。

ロム爺はこの面々が一様に集まる光景を訝しみながらも久しく見なかったフェルトを見て一気に破顔し、二歩三歩と進む——前に飛び込んでいったフェルトがロム爺を強く抱きしめた。

「馬っつ鹿野郎、一体、一体どこ行ってやがったんだ!!」

「アタシてつきり、てつきりアタシは………ッ!!」

「すまんかった。すまんかったフェルト。心配させてしもうたな………」

巨体にすっぽりと収まる少女をロム爺は優しく抱きしめ返せば、孫娘をあやすように背中を優しく叩く。

ひと月という長いとも短いとも言えない期間離れてこの反応なのだ、見守る面々も二人の仲が考えていた以上に親しいものであると理解するのは難しい事ではなかった。

眼の前の感動的一幕にエミリアだけが目尻を軽く指で拭つてうんうん頷いていたが、そんな感動に水を指すようにラインハルトが口を開く。

「お二人の再会に水を指すようで申し訳ありませんが——ご老人、どうしてこの屋敷に?！」

澄んだ声は居間によく響き、再会を喜び合ってたフェルトは無粋な邪魔者の声にぴくりと反応すれば胸板から顔を離し、ラインハルトを睨みつける。ロム爺もまたふん、と鼻を鳴らした後面倒臭そうに答える。

「そんなもの、偶然に決まっておるじやろう」

「お勤め先が偶然我々の屋敷に向かっただけと。特にそれ以外に他意はないと?！」

「ふん、フェルトがここに囲われていた事すら知らなかったわ。知っ

ておつたら殴り込んでおる」

「成る程。そういう事もあるでしょうね」

これからより詳しい追求が始まると考えていたロム爺であったが、意外な事にラインハルトの追求はあっさりと終わってしまい調子を狂わされてしまう。一体何を考えているのだろうか？ 彼は静かに目を閉じて滔々とうとうと語る。

「ご老人、私はてつきり商会の竜車に紛れてフェルト様を連れ去ってしまうのかと思いましたがよ」

「……被害妄想はなは甚だしい。根拠のない推測をいたずらに口に出すとは、正義の体現者が聞いて呆れるぞ」

「それが中々どうして筋の通った推測なのです。」

ホーシン商会とグルになった貴方がフェルト様を身請けして逃亡する、それ即ち候補者の一人が脱落するということ……戦わずして勝つを体現した素晴らしい策と言えるでしょう。

もしかすれば同じくホーシン商会の主であり、今回の候補者の一人であるアナスタシア様が考えついたのかもしれないね」

「……」

「一年前から私らと密に取引を始め、信頼を買い取っていたのもこの布石なのでしょうか？」

内通者も恐らくこの屋敷に居るのでしょうが……深くは追求しません。おっしゃる通りつまらぬ妄言でしかありませんからね」

完全に自分達の策がバレている。それ以上口を開くことは無かったが、ロム爺は冷や汗を流して口ごもる事しか出来ない。秘密を徹底していた筈なのにどうしてこうも早く察知されたのか——その答えを知ればロム爺はきつと呆れるか怒り出す事だろう。何せ、これらの情報は未来視に近い死に戻りによって知り得た内容なのだから。

『ロム爺が屋敷に現れる』

『フェルトが攫われる』

『ロム爺と商会はグル』

死に戻りを経て戻ってきたカリオスト口は昨夜、ラインハルト、フェルト、エミリア、ラムの4人に対してこれから起こるであろう未

来を告げていた。

エミリアとラムはそれを知り得ていたので理解は得られたが、ラインハルトとフェルトはつい先ほどまでその内容を信じきれずに居た。当然だ。未来予知が出来ると言われてすぐ信じられる人がどこに居る？

しかしてカリオストロの『明朝、エミリア宛の手紙が届く』という言葉が実現し、実際にロム爺がこの場に現れればもう信じざるを得ず、更にロム爺の反応を見て確信を得た。スバルは本当に未来視が出来るのだと。

「さて……すみませんがこのご老人は我が屋敷にて身請けさせていただきます」

そしてラインハルトは同じくこの場に招き入れていた商団のリーダーに冷静に言い放てば、男は慌てて言い寄った。

「そ、それは困りますラインハルト様。疑わしきものがあるうとも彼は我々にとつての稼ぎ柱。

今日もこの後何件も荷降ろしが必要になるため、その交渉に関してはまた後日——」

「申し訳ありませんがそうも行きません。彼は当国におきまして兵士数十人へ暴行を振るつたという事実があります。罪を裁き終えるまでの間は残念ながら応じることは出来かねます」

宣言と共に扉の両脇に立っていた兵士が武器をかき鳴らして動けば、商人は冷や汗を流しながら俯うつむき、承諾せざるを得なかった。

本来ならロム爺を現行犯で捕らえてより良い条件を突きつける事も出来た。だがそれを未遂のまま済ますのは既に十分なりターンを得られた為だ。

今回の目論見は結果として向こうの手札を一枚むしり取り、フェルトが求めていた人物も手に入った最良のもの。そしてあえて見逃すことでアナスタシア陣営への貸しにする事も出来るのだ。

商人もラインハルトの意図が理解できたが故か、若干苦虫を噛み潰したような顔をしてすすごと帰ろうとしていると、そんな一幕を見守っていたカリオストロが背中に向けてあるアドバイスを投げかけ

た。

「帰るなら急いで帰った方がいいよ☆ 草原で待っている一団が危険かもしれないからね☆」

「!? ……し、失礼します!」

今まで以上に反応した商人は言われた通り急ぎ玄関へと向かっていった。作戦がどこまでも筒抜けで、それでいて報復が待っているように聞こえた為であろう。意趣返しも込めた痛烈なアドバイスにはラインハルトもエミリアも小さく苦笑した。

そうして商人の慌<sup>あわただ</sup>しい足音が聞こえなくなった辺りでラインハルトは再度口を開いた。

「ありがとうカリオストロ。危うく我々の陣営そのものが無くなる所だった」

「礼はスバル、そしてエミリアに言え。あいつがこの未来を見なければオレ様も気づくことはなかったし、そもそもエミリアの所に厄介になってなければここに来ることもなかっただろーよ」

「そうね、スバルが居てくれなきや大変な事になっていたわ……でも。カリオストロにも同じくらい感謝させて。もしもこの情報がなかったら私も危うく手紙の罠に引っかかっていたかもだから」

カリオストロはスバルと自分が生き残れる道を提示しただけに過ぎない。

故に深々と二陣営の代表に頭を下げられてもどこ吹く風、恩着せがましくも気負ったようにも見せぬ自然体のままだった。

「なあ。ラインハルト——本当にロム爺をしょっぴくつもりなのかよ」

だが一件落着とはまだならない。

折角の再会を果たしたフェルトだったが、彼女はロム爺のその後の沙汰を気にしていた。

もしかすればロム爺とはまた離れ離れになってしまうのでは余りにも意味がない。

ラインハルトはそんなフェルトに諭すように口を開く。

「法という物が何のためにあるかはこの前お教えしたばかりでしょ



う。逸脱した者には例外なく罰を与えねばなりません。そうすることで法は法足り得ているのですから」

「人を体よく拉致して、王になることを強制するのは法に逸脱しねえのかよ」

「私のこの行いは『拉致』ではなく、巫女の一人を『保護』したに過ぎません。悲しい事にフェルト様に理解を頂けていないようですが、納得して頂くよう今後も誠心誠意説得させて頂きます」

「……これが当代の剣聖だつて言うんだからたまつたもんじゃねえよ。ロム爺が暴れた理由だつて手切れ金なんか渡して誤つた説得したせいだろ？ アタシだつて逆の立場なら暴れまくるっつーの。言つとくがあたしはロム爺を罰するってんなら何がなんでも王様なんかやんねーからな！」

「……」

「フェルト……」

フェルトの怒りは一個人として至極当然のものだろう。

だがラインハルトにも譲れぬ思いがあるのか、決して曲げることはなくただ二人の間で視線が交差されるのみ。

そんな中、エミリアは二人に割り込むようにしてラインハルトへ声をかけた。

「……ねえラインハルト、部外者の私が言うのもなんだけど……お爺さんを罰するなら、せめて軽いもの出来ないかしら。暴れたつて話は聞いてたけど、やっぱり今まで親身だった人といきなり離れ離れになるのはとっても苦しい事だと思うし……多分、お爺さんだつて本当は暴力に訴えるつもりはなかったと思うの。」

あ、勿論人を殴つたりするのはよくない事よ？ だから罰は受けないとダメだけど……きつと情状酌量じょうじょうしやくりょうの余地はあると思うわ」

やはりと言うべきか、人情に厚いエミリアがフェルトの言の葉を継いで嘆願しただしたため、隣に立つラムは思わず苦い顔をしそうになつた。

確かにラム個人としてもラインハルトのやり口、更にフェルトの境遇に思うところはある。しかしながら彼女達は自陣営ではなく他所

の陣営——それもゆくゆくは敵対する陣営だ。陣営の数だけ方針があるのであれば、それに口出しするのは賢いとは言えないし、その発言内容も越権行為と捉えられてもおかしくはないものだった。

エミリア様はもう少し公人であるという自覚をもって欲しいものだ。内心で苦言を呈するラム。

カリオストロも相変わらずのエミリアの甘さに肩を竦めているが、そこに込められた意味はラムと違ってそこまで否定的ではない。彼女の純粹さは言ってしまうえばエミリアをエミリアたらしめる要素だ。下手に計算高い存在になるよりはよっぽど好意的に思えると考えていたためだ。

幸いな事に当のラインハルトは困ったような微笑ましそうな表情を見せている事から、彼女の発言を受けて否定的な考えには至らなかったようだ。

「……優しい方ですねエミリア様。確かに、鑑みればこちらの不手際もないとは言いません。今回は悲しいすれ違いがあったという事で比較的軽微な罪にすることは約束しましょう。」

ただ二、三日間の勾留は確実にしていただきます」  
ラインハルトの告げた裁量に、フェルトもエミリアもほっと胸をなでおろした。

しかしながらロム爺は依然として不信感を拭いきれていないのか、懐疑的な目をラインハルトに向け続けている。

「ふん。納得はできぬが……して、勾留した後ワシをどうするつもりじゃ？」

世間様に放し飼いになった後に、フェルトを脅かす材料にされるのはたまったものではないぞ」

「龍に誓って。我々はフェルト様の大事な親類である貴方を害することはないでしょう。」

しかしながら盗品の売買に関しては今後見過ごす事は出来ません。余罪を追求する事は致しませんが、真つ当な働き口を得ることをオススメします」

「お優しい事で涙が出そうになるわい！」

生先短く、更に貧民である儂に真つ当な職を見つけろというか！」「ラインハルト、アタシ達貧民の境遇を知ってそれ言ってるのか？」ロム爺は心底の軽蔑を込めて、フェルトは怒気を込めてラインハルトを見据える。

貧民達とて好き好んで貧民でいる訳ではない。

生まれ育った境遇、身分、ただそれだけが彼らの生活を阻む大きな壁となり、自由に働くことも出来ず、貧民というだけで虐げられる。真つ当な働き口を手に入れるという事は貧民にとっては夢のまた夢なのだ。

「勿論、職についてもこちらで斡旋あっせんさせていただきますが……一つ、提案があります。

ご老人。よろしければフェルト様を共に支えるために、この屋敷で働くつもりはありますか？

貴方がこの屋敷にいてくださればフェルト様も大層ご安心できる事でしょう」

「ふん……支える、のう？ 儂はフェルト自身の口から王を目指すなど聞いてはおらぬが、フェルトよ、お主は王を目指すつもりはあるのか？」

「王なんざクソ喰らえだ」

「だそうじゃが？」

「……申し上げた通り、今は理解して頂けておりません。

ですが、いずれは分かっていたけると実感しております。

他よりも待遇が良いことは保証しますし、決して貴方に不当な扱いをしない事も——」

「へえ、へえ、へえ。いい提案じゃねーか、ついでにあたしを神輿から降ろして別の女を据えてくれたらもつと文句はねえな！」

皮肉を大いにこめて、フェルトはラインハルトへ詰め寄って見上げる。

彼女の紅の瞳は今、本当に燃え上がっているかのように爛々と怒りで満ち溢れていた。

「お前の身勝手さに付き合ってやる義理がアタシらどこにある？ な

いだろ？

あたしの意志も聞かずに王様にするだあ？ 人形でも代わりに神輿に担いだらどうだ!?

いいか、あたしは王様になることなんか望んでねえ、無理矢理やらされるくらいなら超豪華な飯を毎日食えなくていいし、凍えることのないふかふかのベッドで眠れなくてもいいし、穴も開いていない変な匂いもしない高価な服が着れなくていい！ 貧民街戻りでいいから今すぐ開放しろ！」

フェルトは犬歯をむき出しにしてラインハルトを激烈な意志を載せて睨みつける。

三人のやり取りを見ていた他の面子はエミリアだけが心配そうに、ラムとカリオストロは表情も変えずに見守っていた。

——そんな彼女らの反応が一様変わったのは次の瞬間だった。

「なに、やって……なんだ？」

今まで淀みのない美しい姿勢で屹立し、受け応えをしてきたラインハルトが。

騎士の中の騎士、ルグニカ最強の男と呼ばれていたラインハルトが。

フェルトの前で跪すまいたからだ。

それも立膝をついた形ではない。

両膝を地につけ、その両腕もまた地にくっつけて。

ひいては自らの身体を腹と膝くつつく程折り曲げて、頭を下げているのだ。

まさしくそれは土下座に他ならない。

自らの立場、プライドすらも投げ出すように見えるその行為は、この場に居る皆にとつてあまりにも予想外なものだった。

「ご怒りはごもつともでしょう。ですが、私はそれでも貴方こそ王に相応しいと思い、貴方を推させて頂いているのです」

頭を下げたまま喋るラインハルト。

フェルトは最初は反応出来なかったが、やがて「へっ」と鼻白んだ

顔を浮かべ始めた。

「今度は情に訴えようつてか、無駄だ。世間一般でいう常識がないアタシが、知識がないアタシが、盗みしか知らない凡百以下のアタシがどうして王になれる？」

「全土にいる数え切れぬ人々の中から龍に見初められるのは5人だけ、そのうちの一人がフェルト様なのです。常識も知識も、正しい技術も今から身につけても遅くはないでしょう」

「何もかも胡散臭いんだよ。何が徽章が反応したからだ。何が金髪で赤目だから、だ。」

「アタシは盗みを生業なりわいにする貧民街のフェルトでしかねえ。」

「貧民が王になった試しが一度でもあるか？ ないだろう？」

「であれば前例を今から作りましょう。史上初、貧民から王に返り咲いた少女となることも夢ではないと私は信じております」

「心にもない事をべらべらべらとよお……アタシはその気はねえっていつてるんだ！ 貧民っていう身分も、それを差別する奴も、それでいてそれを許容しているこの国も嫌いなんだ！ どうしてそんな国をアタシが引っ張ってやる必要がある!? 王がおつ死んだだと!? あーせいせいする、なら早く潰れちまえ！ こんな国は一度無くなつちまえばいいんだよ！」

「——ならば貴方様がこの国を一度壊してしまえばよろしいのです！」

貴方様なら貧民、平民、貴族というくくりを無くし、同じ苦しみを広めることのない新しい国を作り上げる事も出来なくはありません！

「……っ!？」

ラインハルトは顔を下に向けたまま大声をあげる。

その声は今までにない程のラインハルトの熱意が感じられた。

「私がこうまでしてフェルト様を推すのは徽章や身体的特徴が理由なのではありません！」

貴方様の激しい気風、心優しき、キレの良さ……この屋敷でのひと月を拝見するに、王に値する素質があると感じ入り、そしてこの私が……アストレアの称号を持つ、我が身が真に仕えるべき相手であると

も思ったからです！」

「……」

「勿論、貴方からすればこれは私の我儘に過ぎません！ 辞して元の生活に戻りたいと言えば私も諦めます……ですが！」

そうすれば貴方様が望んだ貧困層からの脱出はまたも遠き道のものになることでしょう！

そうすれば貴方様が憎む貧民という差別意識はいつまで立っても消えぬことでしょう！

よくお考えくださいフェルト様、これは機運なのです！ 貴方が嫌ってやまなかったこの国を自らの意のままに変える事が出来る……大いなる切欠チャンスなのです！」

「……………」

今までにない熱を伴った口上が一息で出し切られれば、途端に部屋の内に沈黙が降りる。

誰しもが何を口に出せばいいか分からない。ただ熱はここにいる全員に確かに伝播し、各々の心を静かに燃やしはじめ。全員がどこか心地の良い熱の余波を感じ取っている中、フェルトが跪いたままのラインハルトに更に近いた。

「お前、アタシがこの国嫌しかいって言ったのは聞いてたよな」

「然と」

「お前たちのような善人面して平気で下を虐げるクソ野郎ども、そして貴族どもを全員追い出せって言ったらお前は従うのかよ」

「如何様にも。私はフェルト様のご意志に付き従いますよ。」

ただし、それを実現するには時間が必要かと思いますが」

ソレを聞いてにつこり笑ったフェルトが大きく片足を後ろに引けば——勢いよく足を前にやり、パンプスに包まれたつま先を思いつきり、その頭に蹴りこんだ。

ラインハルトは呻き声を漏らす事はなかったが、衝撃でひっくり返されて尻もちをつき……フェルトを見上げた瞬間、またもその顔に足が叩き込まれて倒れる事になった。

さしもの展開にエミリアもラムも目を大きく見開いて驚き、カリオ

ストロも一瞬呆けていたが数瞬後に小さく吹き出す。

あの剣聖がただの一人の少女の手で倒されるなんて、果たして誰が予想出来る？

食えない奴だと思ってたラインハルトのぽかんとした表情が忘れられない、見てるこつちがスカつとするような二撃だった。

何が起こってるか分かっておらず、絨毯じゅうたんの上に倒れているラインハルトの顔を覗き込んでフェルトは言い放った。

「これは今までのアタシとロム爺の鬱憤うつぶんの分だ」

「——ぶっ！ はあっはっはっはっは!! フェルト、お主ようやったわい！」

「ああ、あたしも澄まし顔のラインハルトのバカみてーな顔見て、ちょろつとはすつきりしたな。まだもやもやがない訳はねーけどよ……で、さっきの話だが」

「……………」

「お前の本気は分かった。話も魅力的ではあるけど……1つだけ気に入らねー。

お前はズーッとあたしの意志なんざ関係なしに、ただ餌をちらつかせては『なるべき』『やるべき』って捲まくし立ててるだけだよ、違うだろ？ お前はアタシに王になってほしいんだろ？ だったらちやんと言葉に出して言えよ」

「——！ フェルト様……………」

少し鼻が赤くなって薄っすらと涙目になっているラインハルトは、その言葉を聞いて直ぐ様立ち上がり、またもフェルトの前に跪く。しかしながら今度は立膝をつき、古き良き騎士の儀礼に則った美しい所作でだ。

「フェルト様、お願い致します。どうか私のためにも王様になってはいただけないでしょうか！」

「ん！ お前がそこまで言うなら仕方ねえからやってやらなくもない。

じゃ、ロム爺はこの屋敷で働いて貰うしかねーな！」

「…………お主は本当にそれで良いんじゃない？」

「ま、こいつの言う通り折角のチャンスだしな。精々利用させて貰おうじゃねーか。」

王様になって一度この国をぶっ壊しちまうんだ、楽しそうだろ？  
ロム爺も手伝えよ」

「つく、はは！ ははははは！ 痛快、痛快じゃな！

それであればお言葉に甘えさせて貰おうかのう！」

とうとう三人の話は転々と纏まり、ここに来てフェルト陣営はついに意志を固める事となった。

エミリアとラムに合わせて小さく手を叩いて祝福しながら、カリオストロはこう考えた。

彼らは今はまだ小さな芽かもしれないが、もしかすればダークホースに匹敵する存在となりうるかもしれない、と。

「これで一件落着だね、本当の意味での陣営結成、おめでとうございませつ☆」

「改めてありがとうカリオストロ、それにエミリア様、ラム様。スバルは居ないようだが、後でお礼を言わなければならぬね。キミ達がこの事態を教えてくれなければ、きつところは上手く行かなかっただろう」

「これから共同歩調を取るって言ったじゃないっ☆ 困った時はお互い様だよ☆」

「そうよラインハルト、多分大変な道になると思うからお互いに頑張りましょうね？」

「深く、深く感謝致しますエミリア様……あなた方に苦難が待ち受けた時、我々は全身全霊をもって援助することを誓いましょう」

「いずれ敵にはなっちまうけどなく、いてっ」

「バカモン。大人しくありがとうぐらい言わんか。今のお主ではすぐに負けてしまふぞ」

「ええ。ですので明日から本格的に指導を始めるとしましょう。」

マナーに始まり、ダンス、勉強、戦闘……どれも腕をよりにかけてお教えしましょう」

「はあ!? 今までのも十分本格的だっただろ!？」



「乗り気ではないフェルト様を考慮し、手加減しておりましたので」  
柔らかな笑い声が部屋に溢れた。

これでこちらの陣営がラインハルトと敵対する未来はなくなった  
と言ってもよいだろう。

後は5日後、王都で起こるであろう騒動をなんとかして確認しなければ……そう考えていたカリオストロがふと横を見やれば、今まさに居間に入ろうとしていたスバルの姿があった。

未だ朝6時の早朝、普段ならぐつつりと眠っている筈のスバルがどうしてここに？

それに、あの不快な薄笑いは一体なんだ？

こちらの視線に気付いたスバルはこちらを一瞥すると一瞬だけこちらを睨みつけ、その後口を開いた。

「楽しそうな所割り込んで悪い、問題が発生した……みんな聞いてくれるか」

唐突な乱入者であるスバルは、不思議そうな顔をする皆の注目を集めだす。

声色は真剣そのもので茶化す隙はない。ようやくひとつの問題が解決したというのに何の問題があるというのか？

普段とはまた別種の嫌な予感を覚えたカリオストロも目を細めてスバルを凝視していれば、確かに常軌を逸する話が待ち受けていた。

「今朝、新しい予知を見た。ラインハルト……お前の所の徽章が三人組に盗まれたぞ」

「……はあ!？」

——カリオストロの呆けた声が、部屋の中でよく響き渡った。

## 第四十七話 都合のいい真実

「今朝、新しい予知を見た。ラインハルト……お前の所の徽章が三人組に盗まれたぞ」

「……はあ!？」

これで二回目になるラインハルト邸の早朝。その一室に驚きが満たされる。

特に事件の解決の幕引きを行おうとしたカリオスト口の声と表情は、見ていて非常に滑稽だ。

自分の思い通りに進まないのはどんな気分だ？ 悪いが、ここからは俺の独壇場だ。

「す、スバルそれって本当……!？」

「ただの悪い夢だったらいいいんだが……まず、間違いない。ラインハルト、徽章がちゃんとあるか確かめてもらってもいいか？」

「ああ……すまないが確認を」

ラインハルトが指示を出し、傍らに控えていた執事が音もなく部屋を後にしていく。

報告が帰ってくる少しの間、誰一人として喋ることがないのは、全員が全員この展開を信じきれてないからだろう。特に、身に覚えのない予知夢を告げられたカリオスト口がそうだ。困惑に満ち溢れた目でこちらを見ている。

「……！……そうか。分かった。スバル、キミの言う通り所有していた徽章がなくなっていた」

「……ただの悪夢という訳じゃなさそうね。バルス、予知の詳細を教えてくださいるかしら」

「ちよ、ちよつと待て！」

事実であると一気に確信を深めた一行が話を進めようとする中、納得のいかない小さな錬金術師がたまらず口を挟んだ。

「お前が見た予知つてのは1つじゃなかったのか？」

「たった今言っただろ？ 残念な事に昨日の夜見たものとは別の予知

を、今日。それも早朝に見たんだ」

「今朝だと……？ どういう事だ、お前が予知を見るならオレ様だつて知って然るべきはずだ。今の今までずっとそうだった。なのに——」

「どういう事もなにも、これが事実だ。だいたい俺が予知を見るのはいつも唐突だつてのは知ってるはずだろ？ カリオストロが知らない所で見るのも、当然ながらありえるはずだ」

困惑のままこちらに問いかけるカリオストロに、俺は至極当然だと言わんばかりに返答する。彼女はそんな突き放すような言動に一瞬だけぼかんと呆けた顔を見ると、一転してこちらを睨みつけてきた。

「スバル……何を企んでいやがる？」

「企む？ 何を言ってるんだ。俺は予知を伝えただけだつてのに」

「ガキの癩癩かんしゃくに付き合ってる暇はねえ。いいからあるがままの真実を伝えろ」

「これが真実だ。俺は予知を見て、この事実を知った。ラインハルトは徽章を盗まれるつていう未来をな！」

「ちよ、ちよつと二人共何を喧嘩してるの？ 何で揉めてるか分からないけど……今はスバルの見た予知の話を教えてくれないと。折角フェルトが気持ち固めたのに王選に出れなくなっちゃうわ」

睨み合う俺たちを見るに見かねたエミリアたんがとりなすと、カリオストロは不満そうな顔を浮かべて下がる。——何がガキの癩癩だ、思い通りに進まないからつて絡んできやがつて。怒りをそのままぶつけたい衝動に駆られたが、今は自分の流れに持ち込まねば。俺は一旦息をついて皆に向き直る。

「俺が見た予知はこうだ。ラインハルト達がロム爺を捕まえた後、朝食後に騒ぎが起きる。フェルトが持つべき徽章が、部屋から見つからないつてな」

「……徽章はフェルトが持っているんじゃないの？」

某騒ぎで失くすことに懲りたエミリアは、あの一件以来から肌身離さず徽章を持ち歩いている。そんな彼女が不思議そうにフェルトを見れば、当の少女は気まずそうに頬を指でかくだけだった。

「あー……最初は持たされてたけど……隙を見てアタシが失くそうとしたり壊そうとしたからラインハルトが持つてつちまった」

「……フェルト、お主」

「し、仕方ねーだろ！ その時は王様なんて死んでもやるか！ って気分だったんだから！」

俺もこの事実は初めて知った、と同時に納得がいった。どうりであいつらがフェルトにコンタクトを取らなかった訳だ。だが、俺はあたかも知っていたかのように振る舞い続ける。

「で、だ。騒ぎになる一方ですぐに下手人を予測することは出来た。

事件が起こったと同時に俺もカリオストロも知ってる、とある三人組が屋敷からいなくなってるからだ。そいつらはずい最近この屋敷に雇われている」

「……とある三人組、つい最近……まさか」

「ああ、名前はトン、チン、カン……いや、えっと違うな。なんだっけか」

「……何でそんなにあやふやなのかしら」

「悪い、ずーっとトンチンカンで覚えてたもんだから」

「ガストンとラチンス、カンバリー……の事ですか。なるほど、スバルとカリオストロは確かに出会っているね」

ラインハルトの補足にそれぞれと俺が領くうなずのに対して、カリオストロは首をかしげるだけだ。そりやそうだろうな、俺だっけつい最近まで忘れていたんだ。

「そんな連中、いたか？」

「盗品騒ぎのときに、キミが路地裏で返り討ちにした三人組だよ」

「——ああ、いたなそんな奴ら。身の程知らずにもオレ様達から追い剥ぎしようとした奴。っっていうか何だっけそんな奴らがこの屋敷で働いているんだ？」

「……」

カリオストロが当然の疑問をぶつけければ、ラインハルトは無言でフェルトを見る。

視線の先にいたフェルトはまたもバツがわるそうに顔を背けてい

た。

「……申し訳ありませんフェルト様。責め立てているつもりはないのです。あの三人を改心させきれなかった私の——」

「だーうるせえ！ 逆に責めてるようにはか聞こえんわ！ そうだよあたしが雇った！ なんか文句あるかよ!?!」

フェルトは地団駄を踏んで怒り出せば、皆がまさか、というように目を見開いた。

フェルトが雇い入れ、そしてその三人組が盗みを働いた。

彼女はそもそも王になることに大反発していた……とすれば——、「信じねえかもだけど、別にあたしは盗めなんて指示出してねーからな!?! あいつらは本当にあたしの気まぐれで雇うように指示出しただけだ。何があつたかしらねーけど、改心するとか言つて飛びついてきたしな」

盗ませる動機を少なからず持っていたのは間違いないだろうが、証言する彼女に取り繕っている様子はないし、俺もそのつもりがないのは分かつている。彼らが徽章を狙った理由、それは過去の記憶と昨日の三人の証言、そして今朝目撃した内容からそれを推察することが出来ていた。

そう、これは予知なんかじゃない。俺は事実をただ述べているだけなのだ。

「フェルトがそいつらを雇っていたっていう事実は知らなかったが……俺は今朝方に見た予知でぴんと来たことがある。今しがたホーシン商会のやつらがフェルトを攫さらおうとした、それは間違いないよな？」

「ご老人？」

「……攫うというのは語弊がある。あやつらは別の思惑はあつたようじゃが、俺はただ取り戻そうとしただけじゃ」

ラインハルトが確認の目配せをすれば、ロム爺も渋々と認める。

それを切欠に、スバルは更に論調を強めてゆく。

「奴らの盗みは、同じくホーシン商会に雇われて行ったと俺は推察している」

「……今回の件の予備策。バルスはそう言いたいのかしら?」

「さあな、だがそれが一番しつくり来ると考えている。一人のちつこいやつはともかく、残り二人はそこそこ目立つ体格をしてるんだ。そいつらが気づかれずに外に出る方法はなんだ? —— 竜車しかないだろう?」

「そう……籠の中に潜り込んで脱出したということね」

「そーいうこと、エミリアたんっ!」

これもまた推測ではなく事実に過ぎない。

カリオストロが寝ている俺を放って事件解決に乗り出した時、ひとり部屋の窓辺から玄関を監視して、実際に乗り込むシーンを目撃したのだ。そして竜車に乗り込んでも尚拒まれなかったというのは、ホーシン商会との繋がりがあるのは間違いない事だろう。

全員の顔に懐疑的な雰囲気は見えない。今やこの場に居る面々は俺の説が正しいものだと考え初めていることだろう。……まあ当然、ただ一人を除いてだが。

俺はすぐ近くで難しい顔をして考え込むカリオストロを見た。

大方、奴は俺の意見を否定しようと脳内で粗探しをしようとしているのだろうが、俺はこの案に穴はないと確信している。

……それにしても。奴が知らない事実を突きつけるだけで自身の優越感が刺激されてやまない。お前はいつもこんな気分を味わっていたんだな。さぞいい気分だったことだろう。

「すぐに彼らの竜車を捕まえるように指示を。まだそこまで遠くに行つてはいないはずだ、全速力で追隨して欲し——」つと、ラインハルトちよつと待て」……?」

「悪いが、追手を出すのはもうちよつと後にするべきだ」

「なぜだい? 今ならまだそこまで時間はたっていない、すぐに捕まえることだつて……」

「俺の見た予知じゃ、昼前に外に向けてホーシン商会を追うように出発していた。出来るならその予知に合わせて行動しておきたい」

「予知に合わせる必要があるのかしら? 徽章を盗まれたのなら早い内に取り返した方がいいはずよ」

「ごもつともなんだが、厄介なことに予知はまだ続きがあつてな、ただ盗まれた徽章を取り戻せばいいっていう話じゃないんだ」

ラムの言う通り、すぐに取りに戻れば終わりだろう。それは俺も理解出来る。だが未来に起こる惨劇を回避するためにも、そして今後の俺への信頼を確実にするためにも、今すぐというのは都合が悪いんだ。

「実は商会の傭兵団が行く先で待機中で、屋敷を出発した竜車はそこに合流する予定だった。——この辺の地図とかあるか？」

俺はまるで一端の探偵であるかのように皆の前で歩き回ると、執事に地図を用意させて直ぐ側にあるテーブルの上に広げていく。面々も自然とテーブル一杯に広がったルグニカ王国内の全域地図の周りに集まり初めた。

「予知の中では昼前に出発した俺達は完全に日が暮れてからその傭兵団と相對する羽目になった。周りは見渡す限りの大草原で、脇道は多分逸れずにずーっと一本道。屋敷から竜車を全速力で走らせて追いついたんだが……場所とか推測出来るか？」

「……その情報だけでは断定は難しいが、彼らの行き先はカララギの筈、西方面だね。そしてそういった草原が多いのはフリーユゲルの大樹がある街道沿いかな？ 竜車の速さから推測すると——そうだね、このあたりだろうか」

ラインハルトが断片的な情報から推察し、大体の距離を地図上で指さした。巨木近くの分岐路、そこから更に西に進んだ箇所。一同の視線もその一点に集中する。

「そこでは何事もなければフル装備の傭兵団が俺達を待ち受けていたのだらうけど、予想外の事態が奴らに起こった。奴ら、魔獣の群れに襲われてたんだ。俺が到着する頃には人も魔獣も死屍累々の氷漬けのありさまだ」

「！ 氷漬け……？」

「あ、あー、氷を自由自在に操る、巨大な芋虫型の魔獣が原因だと考えてる」

氷漬けという言葉に反応したエミリアたんが安心させるように俺

は応えると同時に、俺の脳裏にも苦い記憶が思い浮かぶ。思い出したくもない不快な感触——そして、直後に浴びせかけられた嘲笑の輪。考えるだけで顔を歪めそうになる。

「だったら尚更早く出発しないと、その人達が危ないわ！」

「僕も同じように考えているのだが、スバルはそれは賛成できないんだね？」

「……そうだ。そいつらの動きは不穏としか言いようがないものだった。そもそも到着した時点で俺達が手を加えるまでもなく魔獣の群れは討伐されかけていたし、親切なことにトドメだけ差して欲しいって、わざわざこつちの手柄まで用意する余裕があった節もある。……今思えば、多分それも罠だったんだろうな。ともかく何が言いたいかつていえば、奴らは追跡するこつちを待ち構えている。それだけは間違いない」

俺は一旦言葉を区切って、皆に力を込めて言い放つ。

「だからこそ予知に沿って動こうって訳だ。奴らが魔獣とぶつかって疲弊した所で、こつちの戦力を全てぶつけて叩き伏せるんだ。あいつらは騙し討ちも辞さない明確な敵陣営だ。ここできつちり痛い目を見て貰わないと、後々こちら側手痛くやられる羽目になる」

そうだ、今だからこそ思う。あれは罠に違いないと。特にあの巨大な芋虫。あいつは俺が手を下したからこそ、毛むくじやらの巨大魔獣が襲ってくる羽目になった。ならばこそ魔獣を向こうが全て退治し終わった時に一網打尽にすべきなんだ。

「……なんつーか……要領がいまひとつ掴めねーけど、安易に飛び込んでいくと危険って事なんだよな？ それでも飛び込んでぶつ叩かないと、ゆくゆく不味いと」

「バルスはともかく、予知は今まで外れたことはなかった。癪しやぐだけど信じるしかないのでしょうね。……まだ王選が始まる前だというのに随分と豪胆なようね、アナスタシア様は」

「ま、明確に敵対するってんならにーちゃんの言う通りでいいんじゃないか？ 精々魔獣どもに戦力減らしてもらって、弱ったところで登場。抵抗すればぶつ倒す。敵ってんなら容赦はいらねーだろ」



「弱った所を叩くのは常道。それに、何が待ち受けているか分からない以上はせめて予知に沿った行動の方がいいかもしれないわね」

全員が俺の言葉を咀嚼するかのよう思案する中、フェルトとラムが先んじて考えを述べ始める。

彼女たちはどうやら俺の案を肯定的に捉えてくれたようだ。

「武力行使は最後の手段です。まずは徽章の確保が第一優先かと。今すぐここを出て、向こうが合流する前に取り戻しましょう」

「えつと……私は、やっぱり向こうに何の狙いがあるうとも、これから起こる未来が分かかっていて犠牲を出すのはやるせないわ。向こうを攻撃するんじゃないわ、出来るなら魔獣が襲撃する前にその人達と合流して一緒に迎え撃ってあげられないかしら」

ラインハルトとエミリアは事を荒げたくないようだ。

ラインハルトは徽章の奪還を優先して考え、エミリアは陣営同士が敵対することを嫌っている。

「ふうむ……儂は奴らからそのような作戦を聞いてはおらんかったがのう……」

「……」

ロム爺はそもそも話に懐疑的。カリオスト口に至ってはただだんまりを決め込んでいるだけだが……何を考えているんだ？ 案外、俺の提案に肯定的なのだろうか……いや、その可能性は低いだろうな。ひとまず、俺はカリオスト口は無視して他のみんなを説得しようと思つた。

「ラインハルト、その最後の手段が今こそ必要になる。俺の見た未来では最終的にこっち側の陣営にも甚大な被害を出す結果になった。あいつらは本当に明確な敵なんだ。そして、あいつらを倒すにはお前の力が必要なんだ」

「……」

「そしてエミリアたん、気持ちは分からなくはないがあいつらは助け出す価値がある相手とは思えない。騙し討ちしようと思ってる奴らだぞ？ ここは情は捨てて冷酷になるべきだ！」

「スバル……」

「ロム爺もだ、敵を欺くにはまず味方からだって言うだろ？ 多分バレル可能性が高いロム爺には作戦の全貌は告げられなかったんだろ」

「……むう。まあ、考えられなくもないがのう」

ラインハルトは瞑目をし、エミリアたんはどこか気圧されたかのような表情を見せ、ロム爺は腕を組んでうなり始める。話が話だ、すぐにうんとは領けないのも分かるが、ゆくゆくは俺達全員に被害が出ることは間違いないんだ。何とか納得して貰わなければ——決意を新たに、三人に更に畳み掛けてようとすれば、案の定と言うべきか、あの声が邪魔をした。

「どうにも、納得できねえな」

「……」

俺は今度こそ、はつきりとカリオストロを睨みつけた。

「この話、謎がまだまだ残されている。徽章泥棒の三人組が本当にホーシン商会とグルなのが分からない事や、どうしてアナスタシア陣営がこちらに魔獣のトドメをさせるとかな」

「予知を信じないって言うのか？ カリオストロも知ってるだろ。予知がいつも俺達を助けてくれたことを」

「恩恵に預かっている自覚はあるし、今更スバルの予知が嘘だなんて言い出したりはしねえよ。オレ様がいたいのは真偽云々じゃなくて別の所にある」

カリオストロは低い視点からこちらを見上げ、こう紡いだ。

「お前はオレ様達全員をどうするつもりなんだ？」

「は……？」

「救いたいのか？ 滅亡に導きたいのか？ どうなんだ？」

「っ!？」

俺の頭は一瞬で沸騰しそうになった。こいつ、言うに事欠いて滅亡に導きたいだ?! そこまで俺を信用してないのか、そこまで俺は破壊主義者に見えるのか!?

「カリオストロ、一体何を……!？」

「背景、推理、目的。大いに結構だ。その案に乗ってもいいとは思って

る。だがな、どうにも胡散臭いんだよ。事実と推測だけならまだしも、そこに憶測と思惑が混ざっているようにしか聞こえない。ひとりでも演ってるかと思っただぞ」

エミリアのたしなめる声を背景に、出来の悪い生徒を嗜めるかのような上から目線の発言を聞けば、俺の両手は意志とは関係なく、血が巡らなくなる程握りしめられていた。

俺は確信を深めた。やはり天才は凡人なんて歯牙にもかけてない。そして天才は凡人が活躍することを良しとしていない。

意見そのものは認められても、それを提案したのが自分でないから難癖をつけているのだろう、いやそうに違いない。一人で劇を踊っているだと？ その劇で踊りたいのはお前だろうが！ 本当、気を抜けば今すぐ飛びかかって、あの憎たらしい小奇麗な顔に拳を叩き込んでしまいたいそうさ。

「救うって行為はな、独りよがりな行為になっちゃったら終わりだ。お前は本当にオレ様達を救う事を目的としているんだろうな？ それとも……救うという行為は二の次で、英雄になる事が目的だなんて考えてねえよな？」

もう限界だった。

視界が真っ赤になり、気付けば俺は机を叩いてカリオストロへと吠えていた。

「邪推するのもいい加減にしろ！ 本気で救いたいからこそ提案してるんだろうが!」

「……………」

自分でも驚くほどの音量が、一室に響き渡った。

心臓は荒々しく波打ち、運動などしていないのに息が切れそうになる。

俺が見る世界は未だ赤いままで、カリオストロを睨みつけている筈なのに彼女の顔を正しく認識できない。そんな紅い世界の中で、目の前のカリオストロのような存在は「そうか」と小さく頷き返した。

「だったら、いい」

自分は納得していないと言わんばかりの肯定を、俺は聞き流した。

「なあゝゝ、まだつかねーのかよゝゝ」

小柄な男、カンバリーの声が狭い空間の中に溢れでた。

彼はがたごとと揺れる籠、その布で覆われた幌ほろを背もたれにしてだらーつと全身を投げ出していた。

同じ籠の中には彼とは別にガストン、ラチンスの二人も座り込んでいたが、カンバリーの声に反応する様子はない。目を瞑るか、幌の隙間から外を眺めているだけだった。

「おい、聞いてんのかよ?」

「……」

「……」

「きゝいゝてゝんゝのゝからよゝゝ」

「……うるっせえぞこの野郎、黙って寝とけよ」

やがて、声に耐えかねた一番大柄なガストンが顔を向けずに野太い声で返答をすれば、カンバリーは持て余しまくった暇を潰そうと彼に食いつく。

「寝飽きたし寝れねえっつーの、半日以上休憩なしで竜車を走らせてよお。もうケツに感覚なくなっちまったぞ」

「かかってもー曰、つってただろ。つつかなんか分からないけど計画より急ぎ目に出てるらしいじゃねえか。だったらそのうち付くだろ」

「……なんで急いでるんだ? いや俺達としては嬉しいけどよ」

「そりゃあ盗みを働いたんだ、さっさと離れねーと捕まっちゃうだろ?」

暇がありすぎたのか、舌をひよろりと出したラチンスが話に混じってくる。

ただし、その視線は依然として、外の黄昏時の空を向いていた。

「そりゃそうだ。流石に向こうじゃもう騒ぎになってるだろーしな」

「はっ、よもや大事な大事な徽章がなくなってるなんて思ってもしないだろーよ」

「いやいやわかんねーぞ。案外出発した時点で向こうにバレてたんじゃねーか？ だから急いでるとか」

はははは、ありえねー。などと軽い笑いが籠の中に響き渡り……それはすぐに引き笑いになり……そしてすぐに沈黙が訪れた。全員が早々にバレたときのことを考えてしまったのだ。今の所誰かが追いつがって来たような気配も動きもないが、向こうには非常識のカタマリ、ラインハルトがいる。彼ならば早々にこちらに追いついてきてもおかしくないのだ。

「……い、いや。冗談だつて。だったらなんで俺達は未だに捕まつてねえんだよ。なあ？」

「か、カンバリーの言う通りだな。大丈夫だろ。大丈夫。……大丈夫だよな？」

「……も、もしかしたら集合した商人達とで一網打尽にするつもりかもしれないねえ……！ そうなったら俺達は……俺達は……！」

「ガストン！ ネガティブになるんじゃないやねえガストン！」

「そうだぞガストン！ 一眠りしたらもうその時にヤカララギだ！」

貧民街での1件で心に傷痕に残すガストンが少し過呼吸気味に不安を吐露すれば、カンバリーとラチンスの二人が落ち着くように言い含める。

だがそんな彼らの不安を煽るかのように、彼らの耳が不穏な音を捉えた。

「……な、なんか変な音聞こえねえか？」

「ヒツ!?」

ラチンスが不思議な音を捉えた。

ガストンは追手が来たのかと怯えて縮こまるが、音の発生源は電車の後ろではなく前から聞こえてくるようだ。それも、何か走る音ではない。金属同士が打ち付けられる音や、人の雄叫び……それに、音だけでなく空気を震わす振動まで感じるような？

ガストンを除いた二人が籠の外を覗いて見れば、間もなく電車は丘を超えるところ。音の発生源は丘の先のように。であればその先では何が起こっているのだろうか？

「……おい、どうなつてんだよありゃあ」

その先に広がる光景は、有り体に言えば戦場であった。ただっ広い草原に多数の人同士が2つの陣営に別れて攻撃しあっている。

戦端が開かれて大分立っているのか、いたる所が火に包まれ、人の死骸も散見している。不可解なのは人の群れだけではなく魔獣もいることだ。よく見れば何故か人の中には魔獣をかばう存在もいるように見受けられる。なぜそんな真似をしているのだろうか？

「おい……おい、商人！ おいつて、ありやなんだよ!?!」

「わ、わかりません！ なんでもうちの傭兵団が襲われて……まさか、まさかもうラインハルト様の陣営が報復に!?!」

「ラインハルトお!?!」

ラチンスがたまらずに竜車の手綱を握る商人に問いかければ、商人も動揺を隠すことなく返答し、竜車はゆるゆると速度を下げ、その場に停車した。

どうやら片方の陣営のうち、1つはホーシン商会が用意した傭兵団らしい。止まった竜車からラチンスが急ぎ這い出て、商人に詰め寄った。

「お、おいどういうことだよテメエ!?! なんでラインハルトが商人を襲つてんだよ!?! もうバレてんのかよ!?!」

「ど、どうもこうもないです！ 忍び込ませようとしたあのご老人も、ここで傭兵団が待ち構えていたことも何故か向こうにバレていたんですよお！ 大人しく帰してくれたからつきり見逃してくれると思つたのに……やっぱり見逃すつもりなかつたんですよお!」

「や、やっぱりもうバレてんじゃねえかよお!!」

「が、ガストーン!!」

遅れて籠から出てきていたガストーンはその場で両膝をついて頭を抱えており、カンバリーはそんな彼の背中をゆさゆさと揺すつていた。

「……くそ、戦況はどうなつてるかわからねえけどよ、こうなりや俺達だけでも逃げるぞ」

「ええ!? そんな、リカード隊長になんて言われるか……」

「うるっせえ! リカードだかポマードだか知らねえけど、ちんたらしてたらこっちまで襲われるだろうが! こんな所で死んでたまるかってんだ!」

「うわ、ちょ! や、やめてください! 何をするんですかあ!」

ラチンスは商人の首根つこを捕まえて恫喝どっかつすると、彼を無理やり竜車から引きずり落とそうと画策する。しかし商人も自分がここで取り残されれば死ぬ可能性があると御者台にしがみついて離れない。そこに再起動したカンバリーも協力して落とそうとするのだが……、「うわわ、やめ……! って向こうから誰か来ましたあーっ! 逆らいません、逆らいませんから離してください! 一緒に逃げますからああ!」

「へえ……!? うわ、まじだ!」 「やべえ! おい、ガストン乗れっ!

追手が来るぞ!」

「ひあ……?」

ごちやごちやと取っ組み合いになっていた間に、一台の竜車がかなの速いスピードでこちらに向かっていた。

遠見でもその竜車には矢が何本も突き立ち、幌に火がついてポロポロ。ひよつとしたら味方かもしれないが、敵である可能性も否めない。全員が慌てて竜車に飛び乗って、出発しようとしたのだが。Uターンしてここから離れる前に向こうに捕まるのは間違いなさそうだ。

あわやここまでか。全員が等しく断末魔の悲鳴をあげそうになったが、

「ま、待ってくれえ、逃げるなら俺らも一緒にい!!」

「……同業者かよ!」

向かってきた竜車は同業者のものようだった。

ボロボロの竜車には顔や腕に傷をつけた、見るからに疲弊しきった男達に乗っていた。

竜車に乗った男達はぞろぞろと降りてきてこちらの竜車に群がってきた。

「い、一体何があつたんです？」

「何があつたもなにも、いきなり変な奴らが襲つてきて……！」

「乱戦になったところで命からがら……！」

「倒しても倒してもキリがない……！」

「あんたも早く逃げた方がいい、あいつらじゃ太刀打ちは無理だあ  
！」

「そんな!? 『鉄の牙』でも無理だなんて……襲ってきた連中はやつぱり  
ラインハルト様の……!？」

「ラインハルト!? なんでそこで剣聖が出てくるんだ!？」

「鉄の牙っていうのかあの傭兵団は!？」

「気づいたら魔獣が戦闘に混ざつてきやがったんだ!！」

「狼頭のリーダーも抵抗してたけど、もうすぐでやられそうだったんだ!  
！」

籠の外で広がる喧々囂々の言い合い、というより不安の吐露合戦。不安に不安を重ねるだけのそれはただ混乱を増すだけの悪手だ。

籠の中の二人、ガストン、カンバリーはもうどうでもいいから早く逃げ出してくれ、と必死に自らの身体を縮こまらせていたが……ラチンスだけは心の中で別の嫌な予感首をもたげていたのを感じていた。

「ちよ、ちよつと鉄の牙の名前ぐらい知ってるでしょう!？」 それにリカードさんの事だつて……!！」

「どうしてラインハルトの名前が出てくるんだ?！」

「鉄の牙と言う癖に、突き立てる牙は貧弱だったぞ」

「メンバーの半分以上はもう魔獣。じきに全滅するだろう」

「あの狼はあの方が直々にお相手していらつしやる」

「ひっ、ひい……!？」 あ。あなた達一体……おぼつ、……お、えっ?！」

直後、籠の外で水をつまんだ袋が貫かれたような音が響き渡った。

「どうしてラインハルトが出てくる?！」

「牙はすべて抜け落ちる」

「お前は魔獣になる価値もない」

「もう奴は狼ではなくなっている」

「ひぎゅ、おぎゅっ……ふぎっ、やめ……っ! ひやめれ、ひやめ……」





## 第四十八話 絶望の草原（前編）

剣戟の音や悲鳴が未だ鳴り響く草原の戦況はすでに小康状態になりつつあった。

結果として商人達が雇った傭兵団、通称『鉄の牙団』は謎の集団の襲撃によって壊滅状態に陥り、今や掃討戦が行われている始末。辺りに散らばるは激しい競り合いの傷痕。焼け焦げ、えぐり取られた地面に色新しい血潮や様々な死体が散見され、周りの絶望の色を更に深めていた。

そんな絶望の淵を進むのは一台の竜車だ。

周りを随伴する3人の男性に囲まれて進むそれは、まっすぐに草原の中心へと向かう。

草原の中心。そこには襲撃者の一団が陣取っているようだ。

やがて竜車は一団の前に止まり、随伴する3人の男性が幌ほろのついた荷車に乗っていた別の三人組を乱暴に引きずりおろす。

「ひいっ……いっ！」

「ぐえっ！」

「んな引つ張らなくても素直におりるっ！ おりるって——うげっ！」

ガストン、ラチンス、カンバリーの三人組である。

男達に従うがままに連れられてきた三人は、地面に尻もちを付く形で無様に着地する。

「くっそテメエら武器もってるからって調子にノリやがって！ 人を武器で脅すことがどれだけ下劣なのがわからねえ……の……あ、いや。なんでもねえです……」

「……」

沸点の低さなら誰にも負けない一番小さなラチンスが以前の自分の行いを棚にあげて吠え立てたが、自分たちが多種多様な目に晒されている事に気づくと咄嗟に黙る。

他二人も同様だ。

カンバリーはラチンスにしがみついて震え、一番大柄なガストンも

そうそう心が折れているのか、体を出来る限り縮こまらせてラチンスの影に隠れていた。

彼らを囲うのは街を見渡せばすぐに見かけられるような商人達だ。服装は平素で貧乏すぎず、かといって小金持ちにも見えない。

立ち振舞いも武人のそれではなく、病人のそれでもない。

だと言うのに異常を感じるのは彼ら全員が使い古された武器をだらんと下げており、そして全身を返り血で染めているからだろう。

それだけでも異様なのに、更に焦点のあつてないガラス玉のような目つきでこちらを見つめているのだ。否応なく彼ら三人の背に怖気が走った。

そんな一団の輪が唐突に割れ、別の人物が現れる。

鮮やかな紫の長髪。眠たげな目つきにほんわり穏やかな表情。小柄な体躯で両手を後ろに回した可愛らしい姿は、この場には余りにも似つかわしくない。三人組は知らなかったが、それはホーシン商会が主、アナスタシアⅡホーシンの姿であった。

彼女は三人組を見ると、可愛らしく少首を傾げる。

「んん〜？　なんでこいつら生かしておいてるんやろ？　あんさんら、ちゃんとウチの命令聞いてた？　商人らは生かさず殺さず、最後は殺す。そうやろ？」

カララギ訛りの和やかな口調で物騒な内容を言い出す彼女が周りの商人達を見回せば、一人の商人が音もなく近寄り耳元でぼそぼそと何事かを呟く。

彼女はふんふんと耳を寄せて内容を聞くと、ふーん。となんでもないように頷き、

「あほう」

その一言と共に大きな黒い物体で商人を叩き潰した。

周りに血潮が撒き散らされ、男性がいた筈のその場所には黒々とした鱗が覆う巨大な尻尾が残されていた。

どうやらその尻尾はアナスタシアの後ろから伸ばされているらしいが、その矮躯にはあまりにも大きさが不釣り合いだ。狂気が過ぎる光景に三人は思わず悲鳴をあげてしまう。

「なーんでそないな事で判断仰ぎにくるんかなあ……あほやないの？  
刻限が近いってさつきから言うてるやろ？ 剣聖を呼び寄せた程  
度でどーして手を止める理由になるん？ 関係ないやろ？ うちら  
はしち面倒臭い試練に備えるだけなんやから。福音に書いてないか  
ら？ 違う、福音に書くまでもなかったんや。いややわー本当にいや  
やわー。ねえ、ウチへの愛が足りんのとちがう？ ウチを愛し尽くせ  
ないから思いつけなかったんやない？ ややわあ、本当にウチ悲しゆ  
うて悲しゆうて……なあ、聞いとるんか!? なあ!？」

彼女の尻尾が物言わぬ肉塊に何度も何度も振り下ろされるたび、辺  
りに衝撃と血肉が飛び散る。しかし過剰な体罰が眼の前で繰り広げ  
られていても周りの商人……いや、彼女の信奉者達は表情一つ変えな  
い。

三人組の顔色は今や青を通り過ぎて白色へと変わっていた。

捕獲された時にその場で殺されなかった為もしかしたら、と生きる  
望みを見込んでいたが、その希望的観測がただの夢であることを悟っ  
たからだ。

もう血染みしか痕跡がなくなればようやく彼女のおしおきが止ま  
り、尻尾がみるみるに彼女の体へと収納される。そして怯えきった三  
人組にその天真爛漫な表情を見せた。

「はあ……まあええわ。ちやうど遊び相手も事切れてしもうたし、  
うちが直々に手を下してあげる。光栄なことなんやから感謝しいや  
〜?」

じやり、と彼女が立てる足音だけがその場に響きわたる。

まるで死刑台へ自ら歩みに行っているような錯覚を覚えたラチン  
スは、咄嗟に命乞いをしようと考えたが、極大の恐怖の前に力が抜け、  
吃音程度しか出すことができない。ガストンに至っては現実を拒否  
してその場で蹲るばかり。そうして彼女の細腕が三人へと伸ばされ  
たところで、

「ま、ままま待ってくれ待ってくれ、おおお嬢さんっ!! お、俺たちは  
商人とは全然、か、関係なくてだな!? き、貴重な物を渡すからみ、見  
逃してくれねえか!？」

「ん〜〜?」

カンバリーがすんでのところでは必死な声をあげた。

死刑の執行は寸前で止まり、彼女の顔に再度疑問符が浮かぶ。

「貴重な物? それってあんさんらの命より高いものなんやろか?」

「ひえっ!? あ、ああっそうだ! も、もう俺たち貧民程度じゃ到底考

えもつかねえほどのもんだ! ぜ、絶対、絶対気に入るのは保証す

るっ! な、なにせ王選の徽章きしやうなんだぜ!」

「!」

ぴくり、と彼女の手が跳ねる。

明らかな反応にカンバリーは脈アリとみたのか、ここぞとばかりに  
畳み掛ける。

「そ、そうだ! 知る人ぞ知る徽章だ! 前聞いたときは価値は聖金  
貨20枚、いやそれ以上だって聞いている! こいつがあればお、王様  
にだってなれるかもしれない! と、とと当然だけど本物なのは保証  
するぜ!? 俺たちはなにせラインハルトの屋敷からこれをつかっぱ  
らってきたんだ! 鑑定してもらってもいい、いい、命を賭けても――  
―ひいっ!」

回る舌は悲鳴により止まる。

その原因は彼の眼前に唐突に広がった狼顔にあった。

それは鉄の牙団の団長であるリカード・ウエルキン、その首であつ  
た。

太い首の付け根から断ち切られたそれは断面から鮮血を零し、焦点  
の合わぬ濁った目とだらんと伸ばされた舌がどうしようもなく彼に  
死を予感させた。

「嘘やとしたら……わかってるやろな〜?」

がおがお♪ と小さな手が生首の上顎と下顎を噛み合わせる様を  
見て、彼は気絶しなかった事を褒めて貰いたくなくなった。

こいつはもう、どうしようもなく狂っている。

例え本物の徽章を渡したとしても気まぐれ一つで死にかねない。

しかしながら、一抹の希望があるならそこに賭ける他ないだろう。

カンバリーは自身の体を慌ててまさぐり、震える手でしまいこんで

いた徽章を渡した。

「へえ、案外、可愛いらしいデザインなんやね〜……これってあれやろ？ 竜に選ばれし巫女やったら反応してくれるんやろ？」

「あ、ああそうだ！ お、王の資格があるならその紅い石が光るんだ！

お、お嬢ちゃんならきつと光るだろうな?!」

「ややわあ、心にもない事言うて〜。でも本当に光ったらどうしようなく……♪」

本当に心にもないお世辞だが、本人的には満更でもないようだ。アナスタシアは持っていた生首を投げ捨てて差し出された徽章を細指が絡め取り、それを手元で転がし始める。

——しかしながら徽章は何も反応を示さずに沈黙を続けるのみ。

彼女はどうかやったら反応するのか、べたべたと触ったり上から下から覗きこんだり振ってみたりと試行錯誤を続けるが、しばらくしてどうなっているんだとカンバリーにじと目を向け始める。

彼は体を跳ねさせて慌てて答えた。

「い、いや……あ、ふ、普通だったらその、触れただけで光る筈……な、なんだけどなく……？ も、もしかしたら壊れたのかも……？」

「……そうなんや〜。もしかしたら徽章さんの気分が悪いんかもな〜？」

「は、あはは、はは……はっ……そ、そうなのかもな？ な、何か悪いな嬢ちゃん……？」

「あはははは」

「は、はは……ははははは」

無邪気に笑う少女にカンバリーが合わせるように笑う。

かなりまずいかもしれない。だが彼女の機嫌を損ねる訳にはいかない。

とりあえずおだてるだけおだてて、次なる生き残る策を提示しようとしたのだが、

「何がおかしい」

「はは？」

しなるようにひるがえ翻された彼女の黒い手で、その場から飛び散る羽目と

なった。

ラチンスとガストンの全身に生暖かい液体が降り注ぐ。

彼らはそれが唯一無二の親友のものだとは最初は理解できず、突然立ち消えた彼に混乱するばかりであった。

「——おかしいだろおかしいだろおかしいだろおかしいだろおかしいだろおかしいだろおかしいだろお！こいつはアタクシを知らねえのか？アタクシの事が理解できないのか？他でもないカペラⅡエメラダⅡルグニカ様だぞ？ルグニカを名を持つアタクシにどうして徽章が反応しねえ？ありえねえだろおかしいだろ頭が悪すぎるだろこのクズ徽章があ！」

だが彼が死んだと理解しても、彼らには親友の死を哀しむ事も怒ることも出来なかった。

眼の前で豹変したアナスタシアの台風のような怒りは凄まじく、彼らに出来たのは眼の前の怒りが過ぎ去るまでひたすら悲鳴を堪え、体を小さくさせる事だけ。

彼女は先程までのカララギ弁の口調も忘れ、変異した鉤爪のついた腕で徽章を叩きつけて踏みつけ始める。

「それはあれか!?アタクシは最初から王の器じゃなかったっていいーんですかね!?誰よりも愛されて誰よりも愛されるべきこのアタクシがか!?クズ肉が王になるのがただでさえ我慢できねーっていうのにクソ龍様はこのアタクシを選ばねえっていうのか!?この世の愛と尊敬を他の誰かに譲れっっていいえんですか!?そんなくそつたれた事許せる訳がねえだろうがあ、ああああああイラつくイラつくイラつくイラつくイラつく!!何が龍の国だ何がルグニカだ何が王選だ、クズ肉共の上にアタクシが居て、アタクシの下にクズ肉共がひれ伏す!クズ肉共がアタクシを愛し愛に生き愛に死ぬのはこの世界で揺るがない決定事項だろうが、それを否定しようっていうのかよお!?それともなにか、反応しねえのは心だ、器だ、性格だとか訳のわからねー御託を並べるつもりか!?王になるのに心も器も関係ねえーだろーが!面がどーたら性格がどーたら気が合うだの相性だのグダグダうるせーってんですよお!どうせクソ肉共は

外面だろーが、外見だろーが、見た目がめーの肉を刺激するからその肉に惹かれてるだけで、そこに耳触りのいい言葉を付け加えてやればすぐに尻尾を振る——畜生以下のゴミ屑どもなんですからよおツ!!」

一切合切の正気をぶん投げて、ヒステリーを起こし、自身の髪を振り乱し、自分の傷がつくことも厭わずに顔面をばりばりと掻きむしるアナスタシア。彼女は眼の前の現実を否定するように狂気の持論を吐き出しては徽章を踏みつける。踏みつける。踏みつける。地面は陥没し、もう徽章がそこにあるとは到底思えない有様だ。

しばらく怒りを撒き散らしていた彼女はしかし、唐突に動きをぴたりと止め、手で覆っていた顔を二人に向けた。

「ひいっ!?!」

「……あーそうだそうだ。アタクシと来たらなーに動揺してんだろ。きやはっ。こいつらが持ち込んだ徽章が偽物って可能性があるじゃねーですか、っていうか間違いないねーじゃないですか」

先程までの美しい顔は、変異した腕でかきむしったせいで酷い有様だ。

爪による深い傷痕が眉や鼻、唇までもに縦横無尽に走り、顔からぼたぼたと鮮血を零している。

だどいうのに痛さも感じていないのか平然としている。

もう今起きている事に理解が追いつかず、ガストンは彼女の前で蹲うずくまり、泣きながら懇願しだした。

「ゆ、許してくれ! 許してくれ許してくれ許してくれえ! お願いです死にたくないんです、命だけは助けてください命だけは助けてください! 俺は本当に何も貴方に悪いことはしません、言われたら従います、何でもやります! だからたた、助けてください! あなたさまに忠誠を誓います! 絶対に裏切ったりしませんっ! だかららっ、だからあっ!」

「おお、お、俺からもお願いします! 絶対に、絶対に裏切ったりしませんから!」

「……あーらら」



狂気を前にして完璧に心がへし折れた二人が平服する様を見て、少女はどうしようかと考え込む。彼女の中では既に徽章は偽物であることは決定事項。だからお仕置きするのも確定事項なのだが、まるで子犬のように怯え尽くす姿はどこか面白い。先程まであった怒りを好奇心に転化させ、傷だらけの顔でうーんと唸れば……ぽむ。と手を叩いて提案しだす。

「まあアタクシは慈悲深い女ですからねえ。大間抜けなお前らもしかししたら本気でアタクシを騙す気はなかったかもしれません」

「あ、ああああありがとうございます！　そそ、その通りです！　本当に俺たちは本物だと思いこんでいて……！」

「でも。アタクシを騙した事実は変わらない、そうだろう？　そうだよね？　そうでしょうとも？　クズ肉がアタクシを愛する事を許しても、愛以外を許す訳にはいかねーんですよ」

だ・か・ら、と彼女は傍らに居た商人が持つ長剣を奪うと、二人の前に放り投げる。

ガラン、と重そうな音を立てて転がる剣を見てあつけに取られるガストンとラチンス。二人が顔を見上げれば、彼女は満面の笑みを見せていた。

「殺し合って、生き残った方を赦ゆるしてあげてやろーじゃねーですか♪」  
絶句する二人がお互いの顔とその武器を見る。浮浪者街でトリオで活動してきた長年の親友とも言える相手と殺し合う？　そんな事は無理だ、出来るはずがない。何かの冗談だろうラチンスが再度少女へと振り向こうとすれば、唐突に横っ面に衝撃をくらい、彼は倒れ伏す羽目になった。

「がっ、あ……い、って……一体なんだ……？」

「ふーっ……いーふーっ……！」

気づいた時には、唯一無二の親友であるガストンが彼を見下ろす形で立ち尽くしていた。

その手に剣を持ち、狂気を宿した表情でぼろぼろと涙を流しながら。

もう幾度となく追い詰められた彼の心は限界だった。今この苦し

みから逃れられるならという思いで、震える手で強く剣を握り締めている。だがラチンスにはその光景が信じられなかった。自他共に認めるまごうことなき親友、そのはずなのに……。

「すまねえ……っ、ラチンスすまねえ……っ！」

もうこれしかないんだ……！ これしか方法がねえんだ……！」

「お、落ち着けよガストン……っ、な、なあ俺たち親友だろ？」

武器なんて捨ててくれよ……な、なあガストン、やめっ」

——大きく剣を掲げたガストンの返答は、余りにも残酷な行動だった。

「あ、そーいえばクソ剣聖が来るって言ってやがりましたね。丁度いからこのクズ肉に活躍してもらっちゃいましようか。アタクシつてやっぱ冴えてますねー」

彼女は眼の前の一幕を心底機嫌良さそうに眺めながら、そんな事を呟くのだった。

§ § §

予知の中で到着した時刻より、更に遅れて2時間ほど。

スバル達一行は彼の提案通り、ラインハルトの屋敷から兵士を伴って複数の竜車で商人達の集会所へと辿り着いていた。

辺りはすっかり暗闇で満ち満ちており、その頃には小競り合いの音はもはや聞こえず、虫の音と草葉の囁きしか残されていないかった。

——その代わり、草原一体には惨々たる光景が広がっていた。

「これは……」

「こんな……酷すぎるわ……」

「……」

いたる所で人や魔獣の死骸が倒れ、煙がくすぶり、肉が焼け焦げたような匂いが濃密な血の臭いと混ざり合っている様体は地獄さながら。竜車に乗る面々は思わず顔を顰めてしまう。

カリオストロは唯一この光景を冷めた目で眺めるだけだったが――作戦の提案者、スバルは広がる光景へと冷静になることは出来なかった。

自らの作戦がうまくいった事は間違いない。だが作戦によって死者の山が築き上げられたという現実、彼を如何ともし難い気分陥らせる。

悪いのは魔獣、悪いのは悪巧みをするこいつら。自業自得の筈だ。だと言うのに、草原一帯に広がる死が、まるで自分がもたらしたのだと考え込んでしまう。

同行する面々の呟きもまるで批判しているように聞こえてくる。だが、それ以上にスバルは大きな不安を覚えていた。

自分が最初に見た氷で囲まれた風景、それがどこにもないからだ。一体どうして展開が異なっているのだろうか？

今までの行動のうち、何がキーとなっているのだろうか？

自分の考えている案は最早失敗なのだろうか、とスバルの中が混乱で埋めつくされていく。

「……何をうろたえてやがる。お前が求めた展開だろうか」

「……あ？」

カリオストロは広がる景色から目を逸らさず、ぼつりと呟いた。

「時間を遅らせた結果、お前が嫌う存在は全滅だ。喜ばしい事じゃねえか。それでこれからお前は どうするつもりなんだ？ 自分の案が失敗だと認めてとんぼ帰りするのか？ それともまだ自分の案をやりに遂げるつもりか？」

これが素直になれない彼女アドバイスの優しさだとは今のスバルには到底思えなかった。彼の中ではカリオストロは天才を齒に衣着せる、自己中心的な独善者である。さっさと失敗を認めて引っ込んでろとしか聞こえず、埋め尽くしていた混乱は瞬時に怒りへと成り代わった。「愚問だ。俺の案はむしろ大成功だろうが。なにせ怪しい奴らがくたばったんだからよ」

スバルは彼女に顔をあわせず、怒りのまま草原を突き歩く。そして辺りの様子に呆気にとられていたラインハルト達に声をかけた。

「ラインハルト……悪いが、周りの確認をお願いできるか？ 商人の生き残りがいたら保護してやってくれ。ただし油断はするなよ、いつ牙を剥くかは分からないからな」

「……承知した。皆、聞いてのとおりで。一帯を搜索して生存者の救助を」

ラインハルトが自陣の兵士達に命令をすれば、彼らは三々五々に周りへと散っていく。

言うだけ言ってみたものの、おそらくは生き残りなど数えるほどしかいないだろう。当面の目標は徽章の搜索と速やかなるこの場からの撤退だ。ラインハルトがいるとは言え、魔獣の親玉らしき存在が襲いかかってくれば被害は必須。しかしながらそれすら切り抜ければ草原の件は解決と言っていいたいだろう。

スバルが自身の案を脳内でまとめていると、悲痛な顔をして周りを見渡すエミリアが目に入り、自然と彼は彼女の元へと向かった。

「スバル……」

「エミリアたん……大丈夫だ、これで不安要素の一つは消えたんだ」

「……そう」

安心させるように優しい声色で伝えるが、彼女の顔は優れぬままだ。

視界に広がる折り重なる死者達、そのひとつひとつの痛みや苦しみを感しているかのように、細い眉根を震わせている。

「……スバル。ねえ、本当に……本当にこうすることしか出来なかったのかしら」

「……」

「スバルの言う通り、彼らは悪い人だったのかもしれないけど……未然にこの事を知っていたなら、その前に辿り着いて彼らを助けてやれなかったのかしら……」

「でも、それが自分たちに害をなす存在かもしれない」

「でも、そうじゃないかもしれない……もしかしたら話をしたらわかってくれたかもしれないわ。徽章を盗むことは確かに悪いことだけど、何も……こんな羽目になるまでの悪い事では無いと私は思う

の」

エミリアが視線を向けている先には、庇うようにして倒れた二人の男女の死体。彼らを中心に広がりきった血だまりは既に黒く染まっていたものの、彼らがつい数時間前には生きて居たのだと思うとスバルにも来るものがあつた。

「え、エミリアた」

「——ごめんなさい。スバルのせいだと言いたい訳じゃないの。他ならぬ私だって納得した上でこの案に乗ったんだもの……今更たらればの話をするなんて、卑怯よね」

エミリアはそう言うのと、俯いていた顔をあげて兵士と同じく生存者を探しに出かけた。

スバルはその背に一瞬手を伸ばすも、何も掛ける言葉を見つげられずすぐに降ろす。

自分の考えは正しい筈だ。生き残るために、全員がハッピーエンドを迎えるための最善の策である。この被害は仕方ない物である筈なのだ。なのに彼女の伏し目がちな表情がどうしても目に焼き付いていた。

「ラインハルト様、至急報告したいことが……」

「……そうか、わかった。スバル、こつちに来てくれ。重要な生き証人がいるようだ」

「あ、ああ。今行く」

心に根付いた葛藤を振り払うかのように降って湧いた話題にスバルは乗り、ラインハルトの後を急ぐ。そうして進んだ先にははかつてのループで出会った狼顔の亜人が居た。一瞬、忘れもしない記憶を思い出して怒りが湧きかけたが、彼の今の状態を見てその気分は萎縮した。

「……噂に名高い鉄の牙団の団長、リカード・ウエルキンでしょうか」

「……剣聖サマに、言われたら……型なしや」

横倒しになった荷車に背を預けるような姿勢で四肢を投げ出す彼には、何本もの剣が突き立っていた。

腹部と、両腕、そして両足はりつけに磔はりつけになるようにだ。

濃厚な血の臭いと今にも途切れそうな荒い息は、どんなに疎い人物でも死期が近いと悟らせてくれた。

「劍聖、ラインハルトが直々に……助けに来てくれたんか……？  
はっ……そりゃあ……喜ばしい事やなあ」

「結果としてはそうなるかもしれないね。だけど本来の目的は別だよ。——治療術士をここに。急いで」

「ムダだ……自分の、死期くらいは弁<sup>わか</sup>まえてる、つもり、や」

「潔いのは美徳かもしれないけど、今は無様にあがいて頂きたい。こちらには聞きたいことが山程あるのですから」

それはスバルも同じ気持ちであった。

前々回のループで自分を追い詰め、不快な思いをさせた彼が一体どうして魔物ではなく剣によってやられているのだ？ 襲撃は魔物だけではなかったのか？ 命の灯火を燃やすリカードへと、ラインハルトが代弁するように問うた。

「安静にして頂きたいのはやまやまですが、今は時間が惜しい。貴方がたを襲ったのは魔物の集団だけではなかったのですか？」

「ああ……何者かはわからん、唐突に、いきなりワイらを」

「……その連中は今は？」

「被害は食ろうた、けどな……ワイらもただではやられへん、ツ……半数以上道連れにして、やった、ら、慌てて逃げていき、よった……」  
「なるほど……」

どうやらリカード曰く魔物とは別に襲撃した存在が居るらしい。

スバルはここに来てようやく思い至る。もしか、魔獣の唐突な襲撃はその集団によるものなのではと。しかし、しかしだ。であればこそ、以前のループでリカードが集団を撃退できていたのはどうしてだ？ 自分が知らぬ要因があるのか、はたまた何か重要な見落としをしているとしか思えない。どうしようもない矛盾がスバルを不安にさせた。

「詳しい事情は後でお聞かせください、あとはもう一点だけ」

「……死にかけに、随分と、鞭打つじやねえ、か」

「徽章を持った三人組、彼らはどこにいますか？」

「……」

リカードの苦言を無視したラインハルトの質問、それには脂汗を垂らし、今にも命を枯らしそうな狼男の口が初めて止まった。

「貴方がたが手配したのでしよう？ フェルト様の誘拐、それに徽章の篡奪さんだつ。その実行犯である彼らは今、どこに？」

「……近くに隠れておる、筈や」

口から血を零したりリカードが近くの竜車、その籠を力なく指差す。ラインハルトが兵士に確認を向かわせると、確かにそこに三人組の一人であるガストンがいた。

兵士に連れられたガストンは幸いにも怪我はないようだが、その大きな体を縮こまらせ、すっかり憔悴しきっている。今も兵士に肩を借りなければ移動できない程だった。

「ガストン、無事だったようだね」

「……ヒッ、ら、ラインハルト……」

ガストンの虚ろな目がラインハルトを捉えれば、彼は途端に体を震わせて怯える。雇用主を裏切った事への負い目がそうさせるのだろう、剣聖はなだめるように優しい口調をかけた。

「怯えなくてもいい。別に君を害するつもりは僕にはもうないからね。それに、キミの様子を見れば相当酷い目にあつたのは明白だ。罪は確かにあるけれど、これ以上罰するつもりもないよ——それで、教えてくれるかいガストン。ラチンス、それにカンバリーは……？」

「……ッ、あ、あ……カンバリー、カンバリーは……ラチンスは……俺は……ッ俺は……ッ!!」

「……」

いつもつるんでいた残る二人の話をした途端、ガストンはしゃくりあげるようにして号泣しだす。その様子から何があつたのか悟る事など容易い事だろう。ラインハルトも悔やむように目を瞑り、彼の肩に優しく手を置いた。

「……すまなかつた、僕がもう少し早く辿り着いていれば」

「違う、違うっ……お、俺たちが……っ、俺があんな馬鹿な事考えなきや……っ！」

大粒の涙を地面に零し、その場にへたり込むガストン。

その傍ら、同じく重症人の元に辿り着いたのは兵士を随伴したエミリアである。彼女はスバル達を一瞥すらせず、小走りで倒れ伏すリカードの元へと近づいた。

「！ 酷い傷……ごめんなさい、私だと応急処置しかできないけど」  
「……!!……エミリア様じゃあねえか、最期を……看取つ、てくれるってのかい？」

「喋らないで。今、私より腕利きの治療術士も呼んでもらってるから……剣を抜くから、舌を噛まないようにね」

今も尚血を流すリカードは一瞬驚きの眼を向け、すぐに軽口を叩き出す。

彼女は返答も惜しいとその傷口を見て、淡々と治療を始める。

「すまねえ、ラインハルト……ッ、俺ア、……俺あッ」

「いや、この事件は本来なら防げた筈だった。効率だけを求めてその他をないがしろにしたのは……僕の失態だ」

なだめるラインハルトに後悔を露わにするガストン。

よろよろとその手でラインハルトの腕を力強く握って嗚咽を漏らす様は痛々しい。

「……ああ畜生。今日はツイていやがるな……死にかけたと思ったのに、まさかこんな……」

「……。……。……。……。？ 傷の治りがこんなに早い……。？ どうして……」

「……ッ！ 悪い、本当に悪い……っラインハルト、こうするしか、なかった、こうするしかないんだ……!」

「ガストン……ガストン、君も疲れたことだろう。あとは僕らに任せてゆつくりと休むといい。すまないが僕はすぐにやらなくてはいけない事が……」

二者二様の反応、その雲行きが怪しいものへと変わり始める。

奇しくもそれを傍観していたスバルは水面下で起ころうとしている事に気づいていない。

だけど、気づいていた所で彼に出来ることは何もなかったかもしれ



ない。

「エミリア様」

「ラインハルト」

——もう事態は、取り返しのつかない所まで進んでいたのだから。

「試練の時間ですよお」

「俺は、こうするしかなかったんだ」

## 第四十九話 絶望の草原（後編）

カリオストロが兵士を伴いながら現場に遅れて駆けつけた時、事態は既に動きはじめていた。

まずガストンがラインハルトに抱きついたと思えば、瞬きする間にその場から二人が立ち消えた。音や動作の徴候もなく、本当に唐突にだ。

そして少し離れた所で狼頭リカードの獣人相手に治療を行っているエミリアがその腕を掴まれていた。

掴まれた腕の先が黒々とした別の何かに代わりつつあるのと、その怪我人が愉悦を含んだ表情でエミリアを見つめているのを知覚した瞬間カリオストロは即座に魔法を実行。コンマ数秒のラグもなく地面から飛び出した土の杭が男の腕を貫き、顔の横っ面ごと彼を吹き飛ばした。

それはほんの数秒の出来事。しかしながら致命的な数秒である事には違いなく。

そこから更に秒を置いて、ようやく時が進みだしたかのように周囲が騒ぎ出した。

「……!? ……?!」

「な……え……っ? はあっ? ら、ラインハルト様が……?」

「ラインハルト様はどこに消えなされた!? 先程まで居た筈なのに……っ」

「お、おい……カリオストロお前……っ!」

「エミリア!」

「ツ、カリオストロ……っ! 一体、これって……く、ううっ……!!」  
場は混沌の一言だ。

一部を除き、誰も彼もが同時に進行した出来事に理解が追いついていない。

最も死から遠いと言われる実力を持つ、剣聖ラインハルトが眼の前で消えた。

カリオストロが重傷者であるリカードを、治療するどころか魔法の

一撃で殺した。

エミリアの腕が半ばから、まるで節足動物の足のような別の何かに成り代わった。

このような状況を瞬時に把握出来る存在などどこにだって居ないだろう。

「エミリア、腕は平気か？ そいつから一刻も早く離れるぞ」

「——っ、凄く……痛むけど、平気。それより、この人は一体……」

「説明はこいつ自身がしてくれるだろうよ、いいから離れろ！」

腕を抑えて顔を顰めるエミリアをカリオストロが手を引くのと、彼女が生成した様々な武器達が死骸に向けて地面から殺到したのは同時の出来事だった。

リカードだったものが凄惨な音と共に一瞬で肉片へと成り代わる。辺りにぼたぼたと重たげな水音を出しながら、欠片が飛び散る様子は直視に耐え難い。どう見てもやりすぎだ。彼女らしからぬ死者に鞭打つ行為はしかし、カリオストロにとってはやりすぎだとは微塵も思っていないかった。

「……あ、あ、あく……ああ——つとお。……なんといいですか、随分と威勢のいい奴がいやがるもんですね？」

なにせ、それはまだ生きているのだから。

撒き散らされた1つの肉片がぼこぼこと盛り上がり、あれよと言う間に肉体を形作り始める。その姿は視覚的、聴覚的にもおぞましいの一言で。そうして出来るのは先程まで動かぬ死骸であった筈のリカード、その五体満足な姿だ。

彼は出来たての身体の様子を確かめるかのように首を傾けて鳴らしながら、体格に似つかぬ口調と共に先程の行為が何でもなかったかのように振る舞っている。

「あのですねえ、せつかくの試練を邪魔しねーで貰えます？ 予定外なのは剣聖だけじゃないって話なんですよ」

「はん、お前の都合をこちらが飲む理由はない」

「はあ？ あるに決まってるじゃねーですかクソ肉が。アタクシが至上最も尊くて最も愛される存在であるならばお前達へド以下のクス

肉は涙を流して平身低頭してアタクシの願いを全力で叶えるのが普通だろ？ 常識だろ？ と言うかクズ肉ごときがアタクシの試練を拒むだなんておこがましいってどうして気づかねえんですかねえ、あーもう、これだから——」

言い切る前に再度巨大な土槍が男の腹部を貫く。

男は口から大量の吐血をしてえづくが、すぐにその槍を手でへし折り、腹から抜いて投げ捨てた。

「——クソ肉は困るんですよ。人の会話中に攻撃するって、テメエは最低限の常識すらも持ってねえんですかねえ？」

「聞くに堪えない妄言なんて聞く価値がねえだろうが」

大穴の空いた男の腹部はやはりと言うべきか、すぐに穴が塞がっていく。どういうトリックかは分からないが物理攻撃そのものは目の前の存在には効果は薄いのだろう。カリオストロは攻撃手段を模索しながらエミリアを庇い、ゆっくりと後退する。

「ラインハルトをどこへやった？」

「さあ？ アタクシが試練をすると知って慮おもんばかつてくれやがったんじゃないですね？ 流石剣聖、テメエよりも100倍以上常識がありやがりますねえ」

ケタケタとその狼顔を歪める眼の前の存在はこちらをあざ笑うばかり。もとよりまともに答えとは思っていなかったが、それであればこちらが取る選択肢は一つしかないだろう。

「——兵士達、こいつらを囲むぞ」

眼の前の異常に呆けていた兵士達がカリオストロの一言で全員我を取り戻し、身につけていた剣を全員が抜き放ち、敵意を震わせて目の前の存在を睨みつけ始める。年端も行かぬ少女の一言でどうして、とは全員が思わなかった。逆に歴戦の戦士の命令を受けたかのように彼らは心を震わせていた。

「んんー？ なんつーか、無駄なのがまーだ分かってねえんですかね？ 常識どころか知能すらないのは愚か通り越していつそ哀れなんですが」

「……物理攻撃は回復してしまうんだろうな。だが魔法攻撃だったら

どうだ？ 全員、魔法攻撃の準備！ 出来るならゴア系だ！」

「総員、ゴアの準備！」

「「「はっ！」「」」

数十人に及び兵士全員の片手に、人の頭程度の火球が浮かんだ。

カリオストロはもしかして、と考えていたが流石はラインハルト直属の部下達。魔法攻撃も出来なくなかったようだ。あとは命令次第でいつでもこいつは火達磨、いや消し炭に出来る。

だと言うのに目の前の敵はわざとらしくため息をついて、やれやれと首を横に振るだけだった。

「やっぱリクソ肉はクソ肉でいやがりますね。刻んでも殺せねえから焼き殺す？ 灰になったらアタクシを殺せるだろうなんて考える時点で浅はかなんですよねえ」

「……聞くに値しねえ。いいか、オレ様の合図で撃つぞ」

「しかも折角の助言を無視！ クズ肉ここに極まれりでいやがりますねえ、どーして自分の愚かさをわざわざ露呈しやがるんでしょうか。っていうか teme エラアタクシに攻撃してタダで済むと思つてねえでしょうね？ アタクシを愛するのは許してもそれ以外は許さねえですからね」

数十の火球に囲まれてもリカードはその平静を崩さない。逆にこちらに凄み返す余裕までもがある。それがハツタリなのか本当なのかは分からないが、カリオストロはこの攻撃の効き目もまた薄いように感じられた。

刻んでも駄目、焼いても駄目であるならばどうしたら殺せる。まさか本当に不老不死だとも言うつもりなのだろうか。いや自分自身も不老不死に片足を突っ込んでいるものの、不老であれ不死であれ何事にも等価交換の法則が成り立っている事を悟っている。自分の身体スベアボディがいい例だ。あの身体は空から降って湧いて出た訳ではない、他の素材を元に自らが構成しているのだ。

無から有を作れはしない。出来るのは有から有を作る事だけ。

故に、不死身と思える回復力の種は何かしらの供給源があると考えられるだろう。

今はその供給源を突き止めるヒントが欲しい。効果が薄かろうと今は行動を起こすべきだ。そう考えたカリオストロが合図の号令を今まさに放とうとした——その時だった。

「ま、すんなり行くとははなから思ってたねーですけど……ほら肉共、出番でやがりますよ！」

「!？」

リカードが余裕の態度で手を叩いたと同時に、草原のどこから現れたのか、兵士の背後から商人と思しき存在達が一斉に襲いかかってきたのだ。

呪文詠唱の途中、背を向けた形で襲撃された兵士達が剣で、鈍器で、魔法で一斉に蹴散らされる。カリオストロやエミリアにも剣を持つ男達が襲いかかったが、カリオストロは間一髪で反応。逆に生成した土の盾で防ぎ、そしてそのまま男をシールドバッシュの要領で弾き飛ばした。

「いいですか、それじゃ当初の予定通り試練を続行しやがりますよ。お前達はこのゴミ共全員を駆除。アタクシは小生意気なクソガキとこの銀髪の雌肉を相手します、剣聖が戻ってきやがる前に片付けてやがってくださいいねっ！」

混沌が始まる。

先程までの静寂が一転して阿鼻叫喚で満たされる。

リカードはそんな中、態勢を崩したカリオストロとエミリアを改めて狙いに定めると右腕を彼女らに真っ直ぐに向け——腕を黒い大蛇に変化させ、襲いかからせた。

二人は目を剥いて驚き、やはりカリオストロが即座に槍や剣を地面から生やして串刺しにしようとするが、蛇はしゆるしゆると攻撃を避けて大口で噛みつかんとする。今や蛇は目と鼻の先だ。

だがエミリアも負けてはいない。顔を苦痛に歪めながらも片手を蛇に向けると、手の先から冷気を放出。面を覆い尽くす冷気には流石に避けようがなく蛇はその身体を凍らされ、その直後カリオストロによる槍や武器が殺到。針のむしろのようになってしまう。

「カリオストロ！」

「わかってる！」

「お？」

腕を縫い付けたと言う事は行動を制限させたという事。腕をやられたと言うのに何の痛痒も受けていないリカードへと瞬きの合間に呼び出したウロボロス達が電光石火の勢いで襲いかかった。蒼と朱の龍の攻撃の前に男は避けることも出来ずにまんまと命中。男なんていなかったかのように龍達を通り過ぎた後には、左肩を胸ごと、そして右足を腰ごととはつられたリカードの姿があった。

さしもの一撃にリカードの身体が前に崩れる。どう見ても致命傷ではあるもののカリオストロは容赦しない。油断なく両腕を向ければ極彩色の波動が男に殺到。彼の身体がまたたく間に粒子となって崩壊していく。

そうして場に残されたのは半ばからもげた、蛇となった男の腕だけだ。ここまでやれば普通は終わったと判断できるだろう。だがそれでもまだカリオストロは終わっていないと予感していた。

しかして今は襲撃を受けている最中である。

彼女は一旦死体から目を逸らし、エミリアと共に戦場を移動し始める。兵士はもとよりラム、そしてスバルは大丈夫だろうか。そして何よりも隣で自らの変化した腕をかき抱き始めているエミリアもだ。顔から脂汗を垂らして何かを堪える様は明らかに異常である。

「腕が痛むのか？」

「……ッ、へ、いき……っ、今はそれよりも、スバル達が」

「ああ、悪いが腕の治療は後だ。兵士達に援護しつつ、スバル達を守るぞ」

彼女の腕は侵食こそ緩やかであるが刻一刻と虫のそれに変化している様に見える。カリオストロが手製のポーシヨンを変化した腕にかけてあげるが治療されているようには見えず、まるでこの腕であることが正常であると言わんばかりだ。

以前のループでエミリアが身体を作り変えられたと思しき事件があったが、現実遭遇すると身体のあるようを自由に書き換えてしまうのは反吐が出る所業だ。思わずカリオストロもまたエミリアと同

じように表情を苦々しい物にし、彼女を守りながら戦場を駆け回る。

「スバル！ スバルどこにいやがる!？」

「ラム！ ラム、どこにいるの!？」

自分らに襲いかかる商人はもとより、兵士達に襲う商人に攻撃を加えながら辺りを搜索する。

不意打ちを受けたといえど一方的な虐殺劇になっていないのは、流石はラインハルト直属の部下達と言うべきか。混戦と言えど彼らはなんとか態勢を取り戻しつつあるようだ。

だが商人達は全員がその理性を飛ばしていると言っているほど死への頓着が薄い。怪我すら厭いとわず命令をこなす様に流石の兵士達も後手に回らざるを得ず、形勢を好転させる事が出来ないでいた。

「エミリア様!」

幸いにも彼女らは時間をかけずにスバルとラムに再会することが出来た。

こちらの声に気付いたのだろう。竜車の籠を背にし、ラムがスバルを庇うような姿勢で大声を張り上げていた。直後、ラムへと白刃を持つて襲いかかる商人。だが、ウロボロスがすんでの所でその尻尾をひるがえ翻し、商人をまるでパチンコのように弾き飛ばして事なきを得た。

「ラム、スバル、平気だったか」

「ええ、どうにか……それよりもエミリア様は大丈夫なのでしょうか」  
「大丈夫、とはいいい切れねえな。腕がこうなった以上、早急に治療しなきゃならねえんだが……如何せんその前にこの場を切り抜ける必要がある。それよりもスバルはどうしてここに?」

「お、俺は」

「緊急事態だというのにその場で突っ立っていたので、私がひとまずここまで連れてきたのです。——この場に我々を呼び寄せたのはバルスなのだから、最後まで責任持って引っ張って欲しいものだわ」

「——ッ」

ラムがひと睨みをしてもスバルは体を縮こまらせるだけ。どうやら一連の流れが全く理解出来ないのは彼も同じのようだ。カリオストロ口は彼のその反応を見て嘆息をつくど、気を取り直してこの場に居



る全員へと指示を出し始める。

「まずは草原からどうにかして脱出する。ラム、この場にウロボロス  
を1体置いておく。エミリアとスバルを守りながら戦場を抜け出せ  
るか?」

「カリオストロ! 私はまだっ……」

エミリアが自分はまだ戦えると叫ぶが、腕の痛みが強いのだろう、  
咄嗟に自らの腕をかき抱いて声が潰える。ラムはその様子を悲痛そ  
うに見守りながら彼女の言葉を継いだ。

「……エミリア様はどうやら戦うには程遠い様子。畏まりました、カ  
リオストロ様はどうするのです?」

「この場での一番の戦力がオレ様だ。となれば兵士らが立ち直れるよ  
うに遊撃するしかないだろう。ただし、あの狼頭に気をつける。肉片  
になっても生きてる奴だからな」

「気をつけろ、ですか。具体的にはどう気をつけろと?」

「倒せる見込みは薄い、遭遇したら妨害に徹して逃げ回る事か。基本  
的に遭遇したら詰みだ。……なあにウロボロスの目を通してオレ様  
も見ている、奴と遭遇したらすぐにそっちに向かうさ」

「……なかなかの難題のようですね」

でもやるしかないでしょう。と、ラムが強い眼差しをカリオストロ  
に向けたと同時に作戦は開始となった。

カリオストロは蒼のウロボロスと共に兵士の援護の為に戦場へと  
踊り立ち、スバルがエミリアに肩を貸し、朱のウロボロスが先導、ラ  
ムが殿となつて戦場を一直線に駆け抜ける。

背後でより一層激しい衝撃音と魔法特有の奇異な音が響き渡るの  
はカリオストロが活躍する音に違いないだろう。その一方で自分は  
……と、混乱と焦燥に駆られていたのはスバルであった。

今起こっていることが全て理解できない。

全滅したはずの商人がいたるところから現れ始めるのが。

リカードと呼ばれる存在が死んでもすぐに再生したことが。

そして何よりも——今肩を貸しているエミリアの腕がおぞましい  
形になっていることが。

以前に比べて、どうして展開がこんなにも逸脱したのだろうか？ エミリアとラムの行方不明然り、凍りついていない草原然り、予知出来る未来に対して自分は最善の策をとったつもりだった。策は順風満帆に進み、皆が笑顔を見せて自分を見直してくれる筈だった。

それなのにどうだ？ 兵士はやられ、エミリアはこうして苦しんでいる。そして自分がこんなにもみつともなく縮こまり、お荷物となっている！ 耐え難い無力感と屈辱感が同時に襲いかかってきて気分が滅入ってしまう。

スバルはそんな気分の中で必死に理由を探していくと……ふと視界に入ったエミリアの腕を見て心の片隅で薄い引掛かりを覚えた。

あのままカリオストロが妨害していなければ変異は腕だけで済んでいなかったように思える。そうした場合エミリアは何になっってしまうのだろうか？ 他愛もない考えではあるが何かその考えの先にヒントがあるような気がしてならず、ちらりちらりとスバルは彼女の腕に視線を向けてしまう。すると、荒い息を零すエミリアがぽつりと呟いた。

「……ごめん、なさい。足手まといになってしまつて……ッ」

「い、いやいや気にすることないって！ こんな場所に連れてきちゃつて、こんな事になつちまつてこつちこそ……！」

「ううんそれこそ気にする必要は、ッ！ ない、わ。これは、私があまりにも無警戒だったせい。じ、自業自得だもの……」

彼女の目尻が薄っすらと光っているのは、恐らく痛みのみせいだけではないだろう。不意打ちによる驚愕、足手まといになつてしまった事への後悔——そして、人に見せられぬ腕になつてしまった事への羞恥。

黒光りする彼女の節だった腕が軋んだ音を立てて縮こまる。スバルはまるで腕を隠さんとするかのような動きを見て無遠慮に視線を向けていた事を恥じた。……自分は何をやっているんだ。

「……大丈夫、カリオストロがなんとかしてくれる。その腕だつて彼女の力があればきつと元通りだよエミリアたん」

「そう、よね……」

「ああそうさ。だから今は力を溜める時？ えーつと、雌伏の時つーの？ コレを無事に切り抜けたら、こつちがやり返してやろうぜ！」

「……うん」

力弱くも少し安心を含んだ返答を聞いてスバルはようやく胸を撫で下ろす。

そうとも、この場にはカリオストロがついている。彼女がいるならば大概の困難などぐり抜けられる筈だ。余計な不安は今は片隅に置いて脱出することに専念せねば、と脚に送る力を更に強めながらスバル達は突き進んでいく。

当然ながら道の傍らで、商人達が剣で、鈍器で、魔法で、敵対者を亡きものにしてしようと容赦なく襲いかかってくるものの、二対の護衛者、ラムとウロボロスがその全てを阻む。

身体のマナの巡りに問題があるラムは継戦能力に問題があるものの、上手いこと省エネを重視した戦いぶりを見せている。どこで習ったのか、瀟洒な立ち振舞を兼ね揃えた魔法と格闘技のコンビネーションはスバルの目から見て非常に美しく思えた。

対してカリオストロが託した朱のウロボロスといえば、まさしく八面六臂の活躍ぶりを見せていた。

剣で襲いかかろうとも、槌を振り上げようとも、槍で突き刺してこようとも、魔法で攻撃しようとも。全身を巧みに使った物理攻撃や魔法攻撃で他三人に群がる商人達をほとんど一撃でノックアウトしている。その様は無双の一言。撃墜比で言えばラムの3倍以上活躍ぶりを見せていたが、それでもまだこの竜には余裕があるように思えた。

「やっぱ強え……！ けど、何かカリオストロにしては優しいな……？」

「……？」

スバルは無双ゲーさながらのウロボロスの活躍を見ながら呟く。

そう。森での魔獣騒ぎで敵の肉片しか残さぬ苛烈な攻撃っぷりを見せたウロボロスだが、今回に至っては酷く優しい。一撃一撃の重さ

はあるのだが死ぬ程の重さには見えないのだ。その証拠に敵の身体の一部がもげたり血潮が大量に溢れるような光景が一切見られていない。

遠隔操作では本来の力が発揮できないのだろうか？ と今尚商人を撃退するウロボロスに疑問を抱くスバル。だが彼女を深く知る人間なら、その理由について察しがついたであろう。

それは騎空団、ひいてはグランやルリア達団員の影響によるものである。

容赦なくこちらの命を奪おうとする人、魔獣、星晶獣を相手取る歴戦の騎空団、その団長であるグランの行動から、団内には暗黙の了解的に「可能な限り殺めない」という方針が出来ていた。

たとえ相手に殺されかけたとしても、相手には気絶あるいは動けない程度の怪我に留める。それは戦いの最中に手心を加えるのと同義。こちらが対等以上の實力を持つなら分かるが、相手が対等以上の實力でも実現しようとするのだから狂気の沙汰としか言いようがない。

だがグランはその狂気を尽く実行してきた。

だからだろうか、団員は自然とその指針を誰が言わずとも守ろうと努めている。

そんなおかしなルールが出来ているせいだろうか、団員は皆朗らかな笑顔を見せている。

余計な悔恨も残さず、気持ちよく空の旅を楽しんでいるからだ。

カリオストロもそんな彼らと少なからず苦難を共にする事で団の空気に段々と馴染み、その習慣が根付いていた。……無論、彼女は頑なに認めようとしなないだろうが。（今回の件も何だかんだの理論武装を心の中でしている）

「エミリア様、後少しで戦場から抜けられると思います」

「……の、前にあの包囲網を抜けなきゃならないって感じだな」

移動して数分たっただろうか、三人と一匹が息を切らしながら前を見れば……そこにはずらりと並んだ商人達。武器を手に手に構えており、どう考えてもすんなりと通してくれるとは思えない。

「まあ、どれだけいようがウロボロスがいてくれれば……ゲツ!?」  
過信するスバルの甘い考えを叩き伏せるかのように、通せんぼして  
いる商人達全員が片手を掲げて、掌の上に火球を浮かべ始める。

よもやりカード相手にやろうとしたことをやり返される事になる  
とは！ スバルもラムも顔色を悪くしてしまふ。いくらウロボロス  
がいようとも、魔法による一斉攻撃を切り抜けられる確証はない。ウ  
ロボロスも慎重に出方を疑っているのか、その場から動こうとはしな  
かった。

だが結局のところ、彼らの火球がこちらに向けて放たれることはな  
かった。

「済まないね」

唐突に彼らを背後から剣で切り伏せる存在が現れる。

突然の乱入者は一人を切り伏せると、そのまま二人、三人と瞬く間  
に斬る。斬る。斬る。

剣は大振りに振っているのにまるでバターに振るっているかのよ  
うに容易く身体を両断し、彼が移動するたびに死が撒き散らされる。

並べたピンがたちどころに倒れるように商人達はあつという間に  
殲滅に追い込まれ、残る数人も瞬きの合間にウロボロスによって退治  
されてしまった。

「——ラインハルト！」

「遅くなってしまい申し訳ありませんエミリア様。少し、遠くに飛ば  
されていたようです」

三人を助けた乱入者は先程唐突に姿を消した赤髪の騎士、ラインハ  
ルトであった。彼は事も無げに直剣を振るい、剣についた血を振り飛  
ばすところらに近づいてくる。

スバルはエミリアとラムを交互に見て喜色を表し、ラムも胸に手を  
ついて大きく息をつき、安心を表した。

「ほんっと、いきなりどうしたかと思ったぞ!? 何の徴候もなく消え  
るなんて一体何が……」

「ガストンによる妨害です。脅されていた彼は空間移動するミーテイ  
アを持っており、それを使って私の体ごと強制転移したのです。どう

やら僕をあの場合から何とかして離れたかったのでしよう。……それよりもエミリア様は大丈夫ですか？」

「……っ、何とか、大丈夫……、凄く痛い、けど……ッ」

「気のせいではないければ腕の変化は広がりつつあるようにも思えます。早く治療しなければ」

「分かった、その辺りのことは僕に任せて欲しい」

ラムが深刻そうに告げればラインハルトが大きく頷き返す。その自信ぶりは本当に何かアテがあるのだろう。スバルはカリオストロと同じか、それに勝る安心感を彼に感じた。やはり同じ男として尊敬の念を禁じ得ない、いつか自分もこうなれば……とその整った横顔を眺めていれば、ラムが嘆息と共に口出ししてきた。

「本当に助かりますラインハルト様。……それに引き換えバルスと来たら。まだ事は終わってないのだから気を抜かないで頂戴」

「う。わ、悪い……」

「謝罪が欲しいのではないの、先ず行動なさい。後少しで抜けられるけど緊張を解かないで。エミリア様を守るのは私達しかいないのだから……それで、ラインハルト様、私達はこの後どうすれば？」

「そうだね。ではまずこうしよう」

ラインハルトはラムに言われると抜き身の剣、その剣先をもたげてラムの右胸へととんと、と。突き刺す。そうしてそのまま貫いたと思えば勢いをつけて剣を縦に抜き降ろした。

抵抗もなく剣が身体から抜ければ遅れて辺りに水音が湧き立ち、ラムの足元に大量の血液と臓物が零れ出る。彼女は自分が何をされていのかを理解できずに啞然とした表情を見せたと思えば、数瞬後に口元から血を零し……目から力を失ってその場に倒れ伏した。

「さようならメイドさん」

「……え？」

「はっ」

スバルも、エミリアも理解が追いつかずに固まってしまふ。

ラインハルトの行動も、眼の前のラムの惨状も何一つ意味が分からない。

啞然とする二人を見てラインハルトがにこりと笑うと、再び剣を二人に向け――、

突如、ラインハルトにウロボロスが飛びかかり――彼ごと地面に倒れ伏した。

「――」

一番早く現状を理解したのはやはりウロボロスであった。

竜の牙はラインハルトの剣を持つ腕に大きく食い込み、続いて魔法による土の杭が男の手足を貫いてその場に縫い止めようとする。

「全く鬱陶しい……僕の邪魔をしないでくれるかな？」

だが、全身に負った傷などなかったかのようにラインハルトは杭を身体から引きちぎる。肉がちぎれることも厭わず、噛みつかれた腕ももぎ取って無理矢理ウロボロスの頭に手を触れさせた。

その瞬間、ウロボロスの身体が大きく跳ねる。

特徴的な竜の尻尾、その末端が崩れて豚の脚のようなのっぺりした何かが生えてくる。だが生成した直後に変化した部分が崩れ、また元の尻尾へと戻ろうとする。

「何だこいつ、権能に逆らおうとしているのかい？」

ウロボロスは身体を苦しげに唸らせながらも彼を拘束しようと、腹部、頭部にも狙いを定めて石の武器達でウロボロス每身体を貫く。その度にラインハルトは人としての原型を失うも、身体を別の何かに変化させながら竜の身体に手を触れさせ続け、何かしらの侵食行為を続けていく。

人ならざる存在同士の異形な戦闘が繰り返り広がり続ける。

金縛りにあっていたかのように動かなかったスバルとエミリアも、その戦闘を見てようやく現実というものを知覚したようだ。顔を真っ青に染めて広がる光景に右往左往し始めた。

「ら……インハルトじゃ、ない……!？」

「ラム……? ラ、ラム……嘘……嘘っ! ラム! ラム返事してっ……ラム!! スバルっ今すぐラムの元へ連れてって! ラムを治療

するから！」

「……ッ！」

「スバルウ!!」

半狂乱になったエミリアがスバルの肩越しに力なく横たわるラムへと必死に手を伸ばす。だがスバルから見てラムはどう見ても手遅れだ。身体をほとんど真つ二つにされ、中身の大半が零れてしまっている。

それに今もなお取っ組み合うウロボロスの旗色は悪いようにしか思えない。もしも竜が負けた時自分たちはどうなってしまうのか？ そう考えると身震いが止まらず、スバルは彼女の悲鳴を無視して戦場を抜け出そうとしてしまう。

「スバル、そっちじゃない！ そっちじゃないの！ ラムはまだ……！ まだっ……！」

「エミリアたん、ウロボロスが時間を稼いでる間に早く！」

「駄目なの！ ラムはまだ生きてるわ、ラムを見捨てることなんて！」

スバルお願いだから！」

「っ、ラムはもう諦めるしか、ないんだ」

「いや、いやだ！ いやあ！ スバル離して、離してえっ！ ラムはまだ、まだ生きてるからあ！」

「エミリア！ ラムはもう死んだんだ！ 諦めろ！」

泣きじゃくりながらも必死にラムの元へと向かおうとするエミリアを無理矢理引きずって、スバルは草原を征く。背後ではウロボロスの抵抗の証か、何が起きているか想像もつかぬ奇妙な音が聞こえているが、その音もいつまで持つ事か。

童子のように悲しみを露わにするエミリアに感化されて自らの目尻にも熱い何かがこみ上げてくるが、泣いている暇は今はない。エミリアだけでも逃さなければ、という使命感がスバルの胸中に生まれ、脚が勝手に先を急ぐ。

しかして、不運な事にも志した使命がどうすることも出来ない程大きな壁であるとは、彼は微塵も考えていなかった。

スバルは今も尚ラムの元へと進もうとするエミリアの抵抗を身体



全体に感じていたのだが、その抵抗が一気に増えたと思った瞬間、地面に倒れ伏していた。一体何が起こったかと考える前に急いで立ち上がろうとしたが、片手をいきなり革靴が踏みつけたせいで、それもままならなかった。

「すまないね、随分と時間がかかってしまったよ。キミ達の仲間は一切何者なんだい？」

そんなスバルに、喉奥から水がこぼれ出ているように不鮮明な言葉が投げかけられる。

彼が音の発生源に対して恐る恐る顔を上げれば——そこには恐れていた絶望が待ち受けていた。

最早それはラインハルトでも人でもなかった。

顔の右半分は見る者を落ち着かせる優しい表情を見せているものの、もう半分はほとんど削り取られて脳胞が零れ出ており、身体的大部分は見る影もなく大穴が開いている始末。その上右腕は完全にもげかけて、皮一枚でぶら下がっているのだ。その姿を見て誰が彼だと断定できよう。

だと言うのに目の前の男はそんな事すら気にしていないかのよう  
に平然と二人を見下ろしているのだ。異常の体現者を前にして脳の  
理解が追いつかず、スバルもは言葉をなくして悲鳴をあげる他なかつ  
た。

「さあエミリア様、試練を再開しましょう。舞台はこしらえました、  
犠牲者配役も揃えました、道具は万全です、音楽もばっちりです、脚本は  
任せください。今日、この夜、貴方の、貴方様のための試練を行いま  
しょう。願わくばこの試練で終わることの無いことを願っております」

周りを包む宵闇は草原に回った火で飛ばされており、

今も尚周りでは兵士達と商人達が死に物狂いの戦いを繰り広げ、

草原の到るところには竜車の残骸、多種多様の死体が転がり、

怒号、爆発音、そして死を体現した悲鳴がところかしこで挙げられ  
ている。

絶望を体現した舞台を背景に異形の姿を見せているラインハルト

が、微笑みと共にこちらを見下している。

その肉体は徐々に徐々に元に戻っていくのがこれまた現実感がなく、夢だと思わせてしまう。

エミリアも訳が分からないのか、泣き腫らした顔のまま見上げて叫んだ。

「こんな……っ、何なの、何なのこれは……何なのよあなたはあ……っ！ 試練ってなんなの……？ どうしてこんな事しなくちやいけなの……！ なんてこんな……こんなっ、酷すぎる……酷すぎるわ！」

「けひっ、おやおやエミリア様、もしや試練の放棄ですか？ だとしたら酷いのはそちらですよ？ 折角我々がこうして屍を積み上げてお膳立てしたのにどうして喜んで試練に参加しようとしないのでですか？ 拵こしらえた舞台を無駄にするおつもりですかあ？ きひっ、貴方の為に、きひっ、死んでいった人がこれでは報われない！ 雌肉様、貴方は人の死を無駄に出来る立場なのですか？ 中途半端な出来損ないの肉のために死んだなんて七代先までの恥でいやがりますよ、きやはっ、さあ立つてください参加しやがってください遊びやがってください証明しやがってくださいいそいで痛めつけられて血反吐を吐いて悲鳴を上げてのたうち回って命乞いして捻り潰されてひき肉になって消し炭になって朽ち果てていきやがってください——！」

ラインハルトの顔をした悪意の塊が口元を歪めて心底楽しい物を見たと蔑み、笑う。嗤う。

げらげらげらと不快な声が草原に。

げらげらげらと不愉快な音が二人の耳に。

狂気が伝染しそうな表情と声にスバルはあのとときの夜を思い出し、咄嗟にエミリアから手を離し、耳を塞いで体を縮こまらせてしまう。

もううんざりだ。もう耐えられない。もういやだ。こんなのは夢に違いない。悪夢なのだ、現実ではありえない。どうしてこんな事になる。どうしてこんな羽目にあう。俺はただ最善策を取っただけ。悪いことなんて何一つしていないっていうのに。何でこうなるんだ。早く夢から覚めてくれ。もうこの悪夢を終わらせてくれ。早く早く



て、かすれ声しか出ていない。だが隣からは最も恐れた声は聞こえてこず、スバルはその事実にはつととしてしまう。

「……………」

悪夢は終わったのか？

もう怖い事は起きないのか？

スバルがゆっくりと顔を上げて周りを確かめようとする——視界の先に、1m程の大きくて黒い蟲が居た。それはひっくり返った姿勢のまま毛むくじやらの6本の脚をワシヤワシヤとバタつかせており、意味の分からぬ金切り声を上げ続けている。

その光景は兎にも角にも、生理的嫌悪感を煽る気色の悪さがあった。

小さく悲鳴をあげたスバルは虫から離れようとてゆっくりと尻もちをついたまま距離を取っていくのだが、

「おやおやおや、雌肉の騎士様はやっぱり見た目が駄目なら守れないって訳なんですかねー？」

——背中が絶望にぶつかり、それ以上距離を取ることができなかつた。

「やっぱりそうでいやがりますよねえ。見目がいいから寄り付く、媚を売る、愛を語る、接触したがる、貪りたがる。愛だの友情だの所詮見目を前提としたくっだらねえ感情の一つなんですよ。ねえスバル君？」

「ひ、い、い、い……………」

「きやははっ、思い通りのクズ反応してくれたお蔭でこちららしい気分ですよ。大切な恋人？友人？まあなんでもいーや。その危機をほっぽりだして自分の身を守ろうとするのは紛うこと無いクズのお手本ですねー。まあ当然なのは当然でいやがりますよね。こーんな虫になっちゃった存在なんて助ける価値ねーでしょうからあー。流石魔女くせーやろーでいやがりますよー！」

背後にソイツが立っている。

ソイツはこちらと同じ高さまで身をかがめて耳元で呪詛を呟いている。

どす黒い意志を撒き散らしているソイツの次なる獲物は、自分だ。  
眼の前で蠢く気味の悪い蟲が自分の未来なのだと、自然と理解が  
来た。

だけど、もう言葉も挙げられない。身体も動かさない。何一つ出  
き手段がない。

スバルは自分の死を自覚し、それと同時に意識を手放した。

## 第五十話 きるきるくるみーらぶらぶらぶみー

見渡す限りの漆黒の空間で、スバルは自分とは別の存在を知覚する。

視覚も聴覚も嗅覚も頼りにならない完全なる闇の中であるのに、不思議とその存在が自分と同じくらい的身長の女性であり、そして彼女の目的が自分であることがわかる。当然、自分も彼女の事は知っている。彼女とはこの闇の中でしか会えず、また彼女がいつも愛おしげにこちらを見守っているという事を痛い程理解していた。

そうして彼女に出逢えば、スバルは出会った時にだけ思い起こされる、絶対に果たさなければならぬ決意を言葉にして投げかけるのだ。さすれば彼女は何度も聞いたであろうその言の葉に対して、嬉しそうに愛の言葉を連ねる……そんなお決まりの流れが二人にはあった。しかしながら、今日に至ってはスバルの言葉を聞いても、彼女は悲しそうな雰囲気を漂わせるばかりだ。まるで彼の決意が叶わないのだと言いたげな素振りに、スバルは心外だ、と抱いた決意を更に重ねようとするのだが——そうではないと彼女が重ねてきた。

本来ならありえなかった異物が、大きな障害として立ち塞がっているのだと。

無限大の愛があろうとも敵わぬソレには、自分とスバルの力だけでは足りないのだと。

では何をしたらその障害を取り除けるんだとスバルが問えば、彼女は儂げに笑い、こう答えた。

「ありえぬ人々と手を取り合って。そして  
に力を奪われないで」

途端に、自分の背後から闇が急速に晴れてゆき、代わりに光が空間を満たしていく。闇にすっぽりと包まれていた彼女もまた、打って変わって眩いばかりの光明に包まれていく——

「愛してる」

——光が空間を埋め尽くしていく中、彼女の最後の一言が耳にいつまでも残り続けた。

§ § §

「……ッ！」

次の瞬間、スバルは見たことのない部屋のベッドの上にいた。

剥がれかけた壁紙が痛々しい、古ぼけた壁。

カビによつて至るところが黒ずんだ、意匠的なデザインの天井。

傷つき、痛み、汚れがすっかり染み付いた豪華だったであろう赤い絨毯。

部屋内を明るく照らす日差しと、壁伝いに伸びる草の弦が部屋の中まで侵食している、ガラスの割れた窓。

思考はまだ先程までの彼女との話を引きずっているのだろう。心の中で反響する声に翻弄されるかのように、スバルは全身から冷や汗を流し、荒々しく脈打つ胸を手で抑える。

彼女のアドバイスは誰かを指すであろう部分だけがモザイクがかかっていたかのようにはっきりと不鮮明だった。だがその言葉に従わなければ彼女の言う通り果たすべきものも果たせないのだと、根拠もないのに心にとんと落ちる感触があった。

立ち塞がる異物とは？　そして彼女は誰を警戒しているのだろうか？

胸中を満たす疑問に煩悶するスバルだが、彼の疑問はすぐに別の事実によつて隅に追いやられてしまう。

「……………」

ベッドの上で悩むスバルを、ある人物が椅子に座り込んで眺めていたのだ。

切りそろえられたおかつぱ頭。何を見ているか分からない糸目。表情は怒りも喜びも悲しみもない全くの無。体格はカリオストロと同じか少し上で、着ている服はきちんと拵えられた貴族服を着ている。そんな子供が子皿の上に載せられたチョコらしき物を定期的に

口元に運びながら、まるで興味のない絵画を前にしたかのようにスバルを見つめている。

「……………」

「……………」

二人の視線がみっちり絡み合う。か細く聞こえる咀嚼音だけが響く薄汚れた部屋の中、先に動きを見せたのはスバルだった。

「……………ぽ、ルクス？」

「……………んっ」

混乱した脳が導き出した情報を口元から零すと、名前を呼ばれた少女がチョコで汚れた指先でサムズアップを返した。どうやら彼女はあのパーティ会場で偶然出会いを果たしたお菓子好きの少女、ポルクスで間違いなさそうだ。

「……………え？ ……え。え。 ……えっと、えーつと俺、一体どうなつて……………？」

「……………」

「知らない天井だし知らない部屋構えだし微妙に体の節々が痛いしパーティ会場じゃないし晚餐もないしシャンパンもないし鐘の音もないし、何がどうなつて？ 何で？ どうしてだ？」

一つを認識してしまえば、遅れて脳がたまりに溜まった情報を紐解こうと動き始めていく。だがソレを処理し切るだけの力がないスバルはその事で余計に混乱してしまう。直前まで自分は草原に居た。そして草原で惨劇に巻き込まれ、偽ラインハルトに殺され、死に戻りした筈だ。なのに目覚めたらパーティ会場ではなく見知らぬ部屋におり、カリオストロの代わりにポルクスが眼の前に居る始末。スバルの思惑を大きく超えて動く筋書きはもはや理解も予測も不可能だ。事ここに来て自分の死に戻りの力が変わったのだろうか？

そんなスバルの苦悩を知ってか知らずか、ポルクスは椅子の上で両足をぱたぱたとばたつかせながら再度チョコを口元に運び、そして言った。

「……………運んだ」

「だって、おかしいだろ。俺はあの草原であいつに殺され——え？」



「……気絶してたから、運んだ」

「は、なんだ？」

「……………ん」

指先に付着したチョコを啜えて舐め取りながら、ポルクスはまたも頷く。

スバルは彼女の発言が意図する所を反芻<sup>はんすう</sup>し、そしてすぐに理解を収めた。

「……草原で気絶してた所を、運ばれたって事か？」

「……………だから、そう言ってる」

何度も同じ質問を繰り返すスバルに、ポルクスはただでさえ細い目を更に細めて見つめる。どうやらスバルは何の奇跡か分からないが、あの偽ラインハルトに殺されずにポルクスに拾われていたようだ。死に戻りをしていない事を理解したスバルは大きく息をつく。

——直後、草原での惨劇が脳裏に蘇り、彼は小さく呻き声をあげてしまう。

消えたラインハルト、生き返る狼頭の獣人、襲いかかる商人達、中身のないラム、欠損した偽のラインハルト、姿を変えられたウロボロス、魂をかき乱すエミリアの悲鳴、気色の悪い蟲——脳がひとつの記憶から別の記憶を連鎖させ、願ってもないのにハイライトのように悲劇を脳裏に再生させる。一つ一つを意識しようとするだけで胸が張り裂けそうになり、スバルは思わずえづき——そのまま、思いとともに吐瀉<sup>としゃ</sup>してしまう。

胃液が喉を焼く感触、そして口元いっぱい広がる酸の味。催した吐き気はその後も止まらず、胃の腑が空っぽになっても吐き気は収まらない。それだけ衝撃的な出来事だったのだろう。流石に見るに見かねたポルクスが近づき、その背中を撫でさすり始めた。

「……………全部吐き出して。……我慢する必要はないから」

「……………大きく息を吸って。……大きく息を吐いて」

「……………力を抜いて。……お水もあるから、飲んで」

彼女は現実を受け止めてきてないスバルが落ち着くまで背中を撫で、付き添い、その甲斐あつてか程なくしてスバルは人心地付くこ

とが出来た。

「わ、りい……ポルクス、助かった……」

「……………」

みつともない姿を見せたスバルが力なく声をかければ、ポルクスは首を振って何でもないかと応える。見かけは小さくも中身は大人顔負けの落ち着きようだ。ソレに比べて自分は……と、スバルは時間をかけて理解した現実には押し潰されそうな気分になりながら、ぽつぽつと眩き始める。

「……俺はあの時死ななかつたんだな」

「……………」

「ラムがやられて、エミリアがやられて……俺だけが生き残っちゃまった、ってわけか。はは……笑っちゃまう。本当に……本当に、滑稽だ。あれだけみんなを救おうって息巻いてた結果、俺がもたらしたのは……みんなの死かよ……」

「……………」

「……そう、言えば……なあ、カリオストロは居るのか？ あいつはまだ、生きてるのか……？」

「……………」

項垂れていたスバルが力なく顔をあげポルクスへと問うと、彼女は少し考えた素振りを見せた後、こてんと首をかしげて聞き返してきた。

「……カリオストロって？」

「あー、えつとだな……覚えてないか？ 見た目可愛いけど口調悪くて、ポルクスと同じくらいかほの背丈の女の子で……！」

「……パーティの時、君を庇かばってた子？ ……ごめん、その子が生きているかどうかは分からない」

「そう、か。……ならラインハルトに連絡を取ってくれないか？ こはアイツの隠れ屋敷か何かなんだろ？」

生きてるかどうかわからない、その発言を聞いてスバルは少し不安を胸に覚えたが、自分と彼女はこの世界では言わばセットだ。自分が生きているなら彼女だって生きている筈だと言う根拠のない自信が

あつたため、そこまで悲観的にはならなかった。

彼女はさておき、今は確実に生きているであろうラインハルトに連絡を取ろう。そうスバルが問いかけるのだが——彼女の返答は予想外のものだった。

「……んつと、ごめん。ラインハルトとは連絡は取れない」

「ん？ てつきりラインハルトの知り合いかと思つてただけ……俺を助けてくれたのも、そういう事じゃないのか？」

ポルクスはふるふると首を横に振り、こう告げた。

「……スバルが助かったのは、私とあの人スバルに興味を持つてるから、だよ？」

「あの……人？」

「……その人にはもうすぐ会える。起きたらここに来るって言つてたし……それに私達はラインハルトのことは知つてるけど、知り合いじゃない。ここはただの廃墟だしね」

スバルは勘違いしていた。弱つた自分を介抱したポルクスが、てつきりこちらの味方であると判断してしまつていたので。もう少し彼が冷静であつたのなら最初ポルクスと出会つた時に彼女が誰と親しげにしていたかを思い出して居たというのに。

ただ非情な事に、思い至つた所でこの先の展開は変えられなかつただろうが。

「……それよりも。スバルが質問した分、私も聞いてもいい？」

「そつういや興味がある、つて言つてたよな。別に良いけど……俺に何の興味があるんだ？」

「……あの時は、どうして草原に居たの？」

「どうして……つてそんな事言われてもな……俺、と言うか俺たちは盗まれた徽章を取り戻すために……」

「……徽章？ ソレは本当に大事なもののなの？ 取り戻す必要はあつたの？」

「く、食いつくな……今回の王選で絶対に必要なもんだよ、ないとフェルトがルグニカの王になれなくなつてしまうから——」

「……フェルト？ お友達の名前かな。……じゃあスバルはお友達の

ために頑張ってたんだ。徽章を取り戻すために草原に絶対に行かないと駄目だったんだ」

「ま、まあな……厳密にはまだ友達っつーか知り合いレベルなんだが……やっぱり困ってる時はお互い様だしな」

質問に対して少し気恥ずかしそうに応えるスバル。

そんなスバルを意図の読めぬ目で見つめていたポルクスは「じゃあ——」と新たな質問をぶつけ始める。

「……あの時は、どうしてスバルは草原に居なかったの？」

「……え？」

「……スバルは、お友達のために徽章を取り戻す必要があったんだよね。……だったらどうして、草原に行かなかったの？」

スバルには彼女の質問の意味がこれっぽっちも理解出来なかった。それも当然だろう、先程まで草原に居た理由を聞いていたのに、一転して草原に居なかった理由を聞き始めたのだから。

彼女ならば、いや、彼女だからこそスバルが草原で気絶していた事を理解している筈だ。なら何故そのような事を聞きたいのだ？ 矛盾を孕む発言にスバルが困惑する間も、ポルクスはその発言を撤回させずにじつと回答を待っている。

真意が探りきれぬスバルはどう答えたものかと窮きゆうしていたのだが

「……時間切れみたい。……あの人が来たよ」

古ぼけた扉の先からほのかに足音が近づいてくるのが聞こえれば、ポルクスはあっさりとは回答を迫る事をやめてしまう。余りの諦めの良さに拍子抜けしたスバルは一体何だったのだと更に疑問符を浮かべながらも、今尚こちらに近づく存在に意識を傾ける。

そしてスバルが扉に視線を向けた直後の事だった。

扉が勢い良く、まさしく壊れんばかりに開け放たれ、注目の人物の姿が飛び込んできた。

「カストール、低能クズ肉は起きやがりましたか？」

ダイナミックな登場を果たしたのは黒い薄手のドレスを身に纏った絶世の美女だ。ツリ目がちの美貌に、出るところは出て、引つ込むと

ころは引つ込む女神を体現したかのようなスタイルに、スバルは目を離せなくなってしまう。

しかしながら、スバルにはこんな美人の知り合いに覚えは全くない。一体誰なのだろうと考えいると、ポルクスが不満そうに頬を膨らませて美女へ抗議しだす。

「……ポルクス」

「あん？ 分かり辛いつたらありやしねーんですよお前ら。せめて見分けがつくようにしてくれねーと何とも言えねーつつーんです。それよりもまーたチョコばつか食いやがって、アタクシの分はちやんと残してんでしょーね」

「……」

「残さねーってんなら考えありますからね？」

「……仕方ない」

「今渡せなんて誰も言っただけでねーんですよクソガキ」

名前を言い直したポルクスが本当に渋々とチョコの乗った小皿を渡すと、美女は呆れた表情を見せながらもチョコをひとつまみ口に運ぶ。

口調はともかく、二人は親しげな様子を見せており、それを見たスバルはある既視感を覚えてしまう。この特徴的な口癖、そしてやり取りをつい最近も聞いた事がある気がするが……？

「で。で。どうやら起きていやがるよーですね、良いお目覚めでいやがりますかスバルくん？」

改めて視線を寄越した美女がこちらに近づき、体を折り曲げて覗き込む。ドレスから覗く大きな谷間が揺れるのが否応なく見えてしまい、スバルは顔を赤らめながらも返答する。

「え、ええーつと……ま、まずは助けてくれてありがとうございます。それでその大変申し訳ないんですけど……ど、どちら様でしたっけ？」

「あ……？ —— きやはっ、きやははははっ!! そーでいやがりますか、そーでいやがりますかっ、まずはお礼からでいやがりますかっ！ 開口一番怯えるなり怒るなり泣き出すなり襲うなり狂うなりする

と思つたらまず礼でいやがりますか！ アタクシへの礼を弁えていやがるじゃねーですか！」

「え、は……あえ……っ?」

スバルの返答に一瞬目をぱちくりさせた彼女は何が愉快なのか、一転してたがが外れたかのように笑いだす。自分は何を間違えたのだろう、と慌て思考するスバルだが……ここにきてようやく、彼女が誰なのかを思い至る。

姿形も、声のトーンも全く違うので勘違いしていたが、もしかして、彼女は――!

「――おやおやおやあ? その顔、よーやく気付いた感じですかあ?

頭の周りの悪さは流石のクズ肉って奴ですか。いや、言わば選ばれしクズ肉って感じですかねえスバル君はあ」

「お、おまつ、お前……ッ、ひっ、もしかして……ッ」

「きやはっ、一転して今度は怯えちまいますか!? さっきまで礼を言っていた相手に!? これ以上アタクシを笑わせて何をして欲しーんですかね本当ッ、げら、げらげらげらげらげらげらげらげら――!」

会話の途中で彼女の顔が次々に変化していく。美女の顔があの特徴的で野性味溢れる狼顔であるリカードのものになり、リカードの顔が、燃えるような赤髪に整った美しい顔を持つ剣聖ラインハルトのものに変わる。

彼女が顔を変化させるたびにその声のトーンが次々と変わり、スバルはそこに言い知れぬ気持ち悪さを覚え、水を被ったかのように全身から冷や汗が止め処なく溢れさせてしまう。

「そうですねよお、アタクシはスバルの大事な大事な雌肉を襲った、カペラ・エメラダ・ルグニカ様でいやがりますよお? 元気にしてましたかあ? 会えて嬉しいですかあ!?! 雌肉を襲ってこれなら今度は家族でも狙ったら何をしてくれるんですかねえ!?! 興味が絶えませんが本当にイツ!」

そう、美女はあの草原で絶望を振りまいたカペラそのものであった。

一周して絶世の美顔に戻った彼女は、表情をこれでもかと歪めながらスバルを見て哄笑する。その表情はあの時味わった恐怖をぶり返す切欠としては十分すぎ、スバルの心臓は全力疾走した直後と同じくらい脈打ち、手足が意味もなく震え、精神が自己防衛の為にその意識をまた飛ばそうと働きかけてしまう。

「……カペラ。スバルがまた気絶する」

「きひっ、きひひっ、きひい——ひいつ、悪い、悪かったですっ、つい面白くて面白くてえっ」

ポルクスの忠告にひとしきりお腹を抱えて笑っていたカペラが苦しそうに応えれば、言われた通り一旦スバルから離れると、ポルクスが座っていた椅子にどかっとなんと勢いよく座り込み始めた。

「だーい丈夫ですよお、今のアタクシはかくなり気分がいいですからあ、本当なんにもしませんよお？ それもこれもスバル君が面白いものを見せてくれたお陰ですけれども」

ひらひらと手を振って無害をアピールするカペラだが、当然安心できる筈もない。スバルは心臓を押さえ、脂汗を垂らし、怯えた表情で彼女を恐る恐る見る事しかできない。逃げ出す事が出来るのならすぐにでもしたいが……それが叶わぬ事は容易に理解出来ていた。

「な、にが目的だ……？」

「んん？ って言うとなんです？」

「何が目的で、お、俺を生かしたんだ……？ お前が狙っていたエミリアはもう、殺されたんだろ？俺にはよっ、用すらない筈だ……な、なのにつ」

「きやはっ、随分と他人事じゃねーですかあ、騎士気取りはもうやめちまったんですか？ あーあー。確かに、おっしやる通りでいやがりますよ。あの雌肉への試練は我々の目的でした、ま、失敗で終わっちゃいましたけど」

「ぐっ、だったら……！」

「でも、アタクシはスバル君には特別興味がありやがってですねえ。ポルクスも同じく興味を持っていると来たら、招待する他ねえでしょう？」

ニヤニヤと笑みを絶やさぬカペラは膝を組み、ポルクスから奪ったチョコを口に運んで堪能している。色ツヤのよい唇がそれを咀嚼する様は妖艶の一言で、スバルは怯えながらもついぞ目を離せない。

「興味って、一体なんだよ……お、俺の何に」

「とぼけちまってるのか、それとも本当に知らねえのか……スバル君は福音は持ってねーんでしょっか？」

ペろり、と手についたチョコを舐め取ったカペラが大きく開いた胸の谷間に指を突っ込むと、そこから一冊の小さく、古びた黒い本を取り出す。一瞬何の本だと訝しんだスバルだが、ものの数秒でその正体にいきついた。

「お、前っ、それ魔女教の——ッ!？」

「ふうん……その反応、とぼけてる訳じゃあねーって事ですか。なら尚更謎でいやがりますねえ、魔女教でもねえっていうのにどうしてここまで魔女の香りをぶんぶん漂わせてるんですかね？」

「……ま、魔女の香り……またそれかよ」

「んで、魔女の香りに心当たりはあると……教えて貰えねーですかね？ それであれば悪いようにはしねーですよ」

「——ッ」

ココに来てスバルは初めてカペラが魔女教に所属しているのだと理解する。

しかしながら謎なのは、この世界の住人が魔女の香りに異常に固執している事だ。災厄を齎し、被害を受けた一般人が気にするのは分かる。だが災厄を齎す側の魔女教がどうしてその匂いに拘るのだろうか。そして、スバルにはその心当たりがあったとしても言えない理由があり、どうすればよいか躊躇してしまふ。

「……………魔女くさいんだ」

「今は魔女くせーってよりもゲロくせーですけどね。逆に言えばポルクスはやる気ねーのかってくらいに臭わねーんですけど」

「……カペラは匂いしないよ？」

「あからさまに嗅いでんじやねーですよ、お前にはもとより適正がないんでしょーねえ」



カペラは顔を近づけるポルクスの頭を無遠慮に叩くと、返答を迫るようにスバルをまた見る。だがやはりスバルにはそれを言い出す勇氣はなく、視線を逸らしてしまう事しか出来ない。

「おやおや、そこは協力的ではねーんですね。折角アタクシが悪いようにはしねーって言うてるのに」

「……何のことなのか、さっぱり分からねえ。俺にそんな心当たりなんてどこにも……」

「今更隠し立てする必要なんてありやがるんですかねえ、お前の大事な雌肉はもうどこにもいねえって言うのに……それとも他に大事な人でもいやがるんですか？ 義理立てでもしてやがるんでしょーか？ 恋多い不貞の輩でいやがりますねえ」

「お前にはっ、お前には関係のない事だろ!?! もしも俺に感謝してるっていうなら、早く俺を——」

「例えば、こんな奴とか？」

ぐにやり、とカペラの体が大きく変容していく。その体格は大人から少女へ。体型は豊満からスレンダーへ。背中まで届く長い黒髪は肩に届かない程度で切り揃えられた透き通る薄蒼色へ。黒いドレスはそのままだに、スバルの眼の前で変化したそれは——、

「……れ、ム？」

「ふうん、違和感まだありそうですね？ ああ。そういやこれと似た雌肉がもうひとりいやがりましたね。って事は服装はこれで、声のトーンは……ああー、こんな感じでしょうか？」

それは、屋敷で共に過ごしたレムに他ならなかった。

彼女は記憶の中の姿と寸分狂わず一致しており、にこやかにこちらに微笑みかけている。陽だまりの中に居るような、そんな安らかな雰囲気漂わす彼女を見てスバルは——どうしようもない程に嫌悪感と憎悪を抱いた。

「——ど、うして……」

「お………？」

「どうしてお前がレムの姿を知っていやがる!? お前はレムに何をしやがった!?!」

「んんー？ 合ってはいるけどこっちではないっぽい？ それで何を  
したかって？ 別に何にも」

「何も……!?! 何にもなければレムの姿に変化できる訳がないだろ!?!  
お前は俺からエミリアやラムを奪うだけでも飽き足らず、レムまで

——」

「勘違い甚だしいっつーんですよ、こちとら見たことも聞いたことも  
意識したこともねーですけど、お前の反応から大体分かるっつてん  
です」

「反応って、そんな事……」

「表情。視線の向き。発汗。呼吸の数。声。仕草。喋りの間。態度。  
会話で性格。性質。好悪」

「——」

レムの姿をしたカペラが椅子から立てば、ゆつくりとベッドの上の  
スバルに近づいてくる。

「お前は口先が先行し、根拠の無い自信と承認欲求で動く、自惚れと自  
意識が過剰のクソガキだという事も。それが自分の無力、無能を棚上  
げして現状の皆の評価に満足していないという事の裏返しである事  
も。全部、ゼーんぶ分かっちゃいますよ？ そう言う奴は大抵自己保  
身と見てくれを重視して大概周りの事を考えないから、皆を巻き込ん  
で勝手に破滅していくんですけど」

「……て、め……っ」

「ただどんな人間も自分では埋めようのない穴を別の何かで補填しよ  
うとするんです。お前の反応から分かる補填するための雌肉の気配  
は3つでいやがりました。一つはこの雌肉で間違いない、もう一人は  
無様な醜態晒した銀髪のクズ肉、そして——」

そして彼女はベッドの縁に座り込み、スバルの顔を覗き込む。

その姿は最早レムのそれではなく——

「——もう一人はこのチビ雌肉だろうか？」

「~~~~~ッ!!」

この世界で一番長らくを共にしたカリオストロの姿を見た瞬間、ス  
バルは彼女に飛びかかっていた。

「お前は、お前は……っ、お前は考えられる限り最悪の野郎だ！ どうして嬉々として俺の大事な人の姿になれる!? 他でもないお前が、人を破滅させるお前がつ、自己愛に塗れたお前がッ！ その姿で喋るな！ 囀るな！ 見るな！ 話しかけるな！ テメエ如きが皆に成り代わろうとするんじゃないやねえ!!」

「けひゃっ、きやはははっ、情熱的な、アプローチじゃねえ、です、かあ……!」

「うるせえ、それ以上その姿で喋るんじゃないやねえよ！ 死ねっ！ 死ね、死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ねええええええええええ!!」

ベッドの上でスバルはカリオストロの体になったカペラに跨がり、首に手をかけて全体重を乗せている。ギリギリと骨が軋む音を鳴らすたびに手が柔肌に沈み込んでゆく。すでに彼女は息も絶え絶えで、その顔も蒼白だ。だどいうのに嘲る表情は変えず、されるがままにスバルを見つめて嗤うばかり。そうなればもうスバルには止める術はなくなってしまう――、

程なくして一筋の破滅的な音が、部屋に響き渡った。

スバルはその音を聞いてようやく我を取り戻し、その手を離れたが……全てが遅かった。

彼の下には髪をベッドの上に振り散らしたカリオストロがいる。だがその首はありえない角度で折れており、顔は見たことのない土気色をしている。首筋には手の跡がくつきりと、赤黒い染みとなって残されており、どうしようもなく自分がやつてしまったのだと分からされる。

自分が殺したのは、残虐で悪辣な魔女教の信奉者だ。

自分が殺したのは、別人であってカリオストロ本人ではない。

自分が殺したのは、人間ではなく化物ではない。

脳ではそう分かっている。

だが自分の心はそうではないと断じている。

自分は間違いなくこの手で人を殺してしまったのだ。

それも別人とは言えカリオストロの姿の人をだ。

しでかしてしまった事の大きさに手の震えが止まらず、再び双眸から涙が零れ落ち、スバルは頭を抱えてその場で蹲うずくまってしまふ。

「――殺したい程、愛してるって奴ですかねえ？」

しかして殺した相手はすぐに蘇る。折れた首のまま、首の痣を残したまま、何でもないようにスバルに視線を向け、喋りかけてくる。

「アタクシがこの姿になったから、ではないでしょう？ もとよりこの姿の雌肉が親しみやすく、誇らしく、羨ましく、そして憎たらしかったんでしよう？ そうでなければ説明がつかない、そうでなければ理由になりません――恐らくはスバルはこの雌肉に認めて貰いたかった、だけど相手にもして貰えていないんでしようね。ソレであれば幾らでも、気が済むまでカリオストロカリオスタロを殺してくれてもいいんですよお」

死した筈のカリオストロがむくりと起き上がる。傷がゆっくりと修復してゆく様を見せながら、泣きはらすスバルを包み込むように、はたまた蝕むように抱きしめる。

「刺し殺して貰ってもいいですよ、スバルが求める悲鳴をあげて見せましょう。

殴り殺して貰ってもいいですよ、スバルが求める醜い顔を見せましょう。

焼き殺して貰ってもいいですよ、スバルが求める踊り狂うさまを見せましょう。

溺れ殺して貰ってもいいですよ、スバルが求める藻掻きつぷりを見せましょう。

貴方が求める死に様を、貴方が望む姿で、アタクシはどれだけでも付き合っつてあげます」

「もう……もうやめてくれ……」

「アタクシは貴方に感謝しているんですよ？ 貴方がいてくれたから、あの暇潰しが楽しく過ごせた、雌肉共の絶望が見られた、心とか友情だとか、気色の悪い物が幻想でしかない事が改めて証明出来た……だから、何度だって殺してもいいんです」



そうすればこれ以上コイツと関わらなくても済む。

スバルが選択肢に自分の死を選ぶと、大きく口を開いて自分の舌を噛もうとする——が、直後口内に細く白い指がねじ込まれ、阻まれてしまう。

「人の愛の告白中に、なーに勝手に死のうとしていやがるんですかあ？　ちよつと傷ついちまうんですけどねえ」

愛されたいが為にどんな事でも擲なげつカペラは観察眼が異常な程長けており、スバルが次にする行動もお見通しであったようだ。

しかし渾身の舌噛みが失敗に終わってもスバルは諦めず、彼女の拘束から逃れようと呻きながら藻掻く。口内にねじ込まれた指先から溢れる血の気色悪さに耐え、一刻も早く離れたいと願うスバルはその指を噛みちぎってやろうとするのだが、

「あぐつ、があ……っ?!?　あ、ああああああ——っ?!?」

「あーあ、そんな事しちまうから。スバル、アタクシの血を飲んじまいましたね?」

カペラの血が喉を通ったと思った瞬間、その血が全身に一瞬で広がった感触と、血が通った箇所全てが自分勝手に脈動し、今にも飛び出すような感覚を覚え、スバルはのたうち回ってしまう。

視界はちかちかと明滅するも、意識は部屋の隅から隅までを把握でききるほど明瞭で、皮膚は繊細な空気の流れすらもつかめるほど鋭敏になり、手足は今にも動きたい、走り出したいと意志の手を離れて身勝手に跳ね回る。

理解ができない。ただ死ぬことも許されない。ただひたすらに自分の体が自分の物ではなくなっていく悍おぞましい感触。

「アタクシの血は、そんじよそこらの血とは違いやがりますよ。なにせ、龍の血が混じってやがりますからね。血の呪いに負けるとすげーことになります」

ベッドの上で声にならない悲鳴を上げ、白目を剥いてもがき苦むスバル。そんな彼を、カペラは急に楽しみだっただお出かけが中止になってしまった程度の残念そうな表情で見つめている……が、彼の身体に起こった変化を見て次第に表情が明るさを帯びてきた。

「……カペラ、これって呪いに負けてるの？」

「負けてはいる事には違いねーですね、でも、違う。抗おうとし、更にそれを取り込もうとしている——つくづく、おもしれー奴ですよスバル君は」

今まで黙り込んで二人の一幕を見ていたポルクスが、その今までにない龍の血による変化を見て驚きを見せていた。カペラもカリオストロの姿でその変化に驚き、そして破顔する。まるで遊びがいのあるおもちやを見つけた、そう言わんばかりに。

「■■■■■■■■■■ ツ!! ~~~~~ ■■■■■■ ツ!!」

「……楽しむのはいいけど、壊さないでねカペラ」

「はいはいっ、勿論大事にさせて頂きますよお。こんな面白いおもちや、早々に壊すものですか」

「……それじゃごめんねスバル。頑張つて生きてね」

ポルクスは一瞬スバルに同情の表情を見せると、そのまま二人を離れ部屋を後にしていく。

「ああスバル、スバルスバル。数滴飲ませてこの様子なら、もっと飲ませたらどうなっちゃうんでしょうかねえ!? 頑張つてくれたら王都でのお祭り騒ぎに参加させてあげますからねえ、きやはっ、きやははははは——!!」

「■■■■■■■■■■ ツ!!」

部屋の扉を締めた後でも、廃墟の一室からは延々と、地獄のような雄叫びと哄笑がひたすらに聞こえ続けていたのだった。

## 第五十一話 収束点へ進む二人

見渡す限りの草原を横断する一筋の道に沿って歩くのは、少年一人と少女二人、そして一匹。その中で長い青髪を背中に流した少女が、前を歩く少年に話しかけた。

「ねえグラン、さっきの人達の事なんですけど……」

「ああ」

グランと呼ばれた少年も彼女の言いたい事を察しているのだろう。顎に手を当てて、思案気な顔を見せる。

「今思えば、彼らの事は無理やりでもいいから手伝うべきだったかもしれない。少なくとも荷車にめいっばいの人を乗せて、あんな鬼気迫る表情をしていたんだ」

「じゃあ」

「でもごめんルリア、僕はそれでも今はカリオストロを優先したい。優劣をつける訳ではないけど彼らも手助けは不要だと言っていたし、何より……カリオストロが飛ばされてしまったのは僕の責任なんだ。彼女を真っ先に助けないと」

「はうう……そう、ですよね……ごめんなさいグラン」

ルリアと呼ばれた少女はしゅん、と体を縮こめ、そんな彼女を見たグランは苦笑しながらぼん、と使い古した手甲をつけた手で撫でた。

彼らはカリオストロの失踪を受けて別世界から追いかけてきた騎士空団のメンバーである。

カリオストロが黒い手に誘拐されたその日から団に居る学者、軍師、占星術師、魔女、王族、星晶獣……職業も種族も問わず全ての力を総動員して彼女の形跡を探りようやく掴んだのが、こちらの日でつい先日。世界を特定した彼らは星晶獣を従える力を持つルリアにより、星晶獣「プロスクリスイ」の力を借りて実際にその場所へ向かう事になった。

しかし、彼女の力では向こうに行けるのはルリア含めて精々3人が限度であると分かると、派遣する人員の選出で団内は揉めに揉めた。

まず今回の件で責任を大きく感じている団長、グランが当然自分が



行くと言ったが、団内のほぼ全員から反対を食らった。彼に責任の一端があるかもしれないが、そんな彼の立場は今や搭乗人数300人を超える巨大騎空団、その団長なのだ。トップたる存在が騎空団を一時のと言え留守にするなど持つての他だと、団の補佐役を務めるカタリナ、アルマイル筆頭とした真面目グループが猛反対をし、穏健グループであるラカムやユエルと言った面子もまた難色を示した。

搜索ならとびっきりの人員を用意する、だから我慢しろと伝えてもグランは梃子でも首を縦に振らず、珍しく声を荒げて彼らに食ってかかる光景すらも見られてしまう。そんな中、折衷案を出したのは自然と団内の意見役になりつつあるオイゲンとロゼッタであった。

『やめだやめだ、我が団長の意志はとびっきり固い。好きにさせりゃいいさ』

『皆の心配も分かるけれども、団長さんに任せてみないかしら？ あなた達だって知ってるでしょう、彼の實力はそれこそ十天衆を凌ぐ力がある』

『グランは今まで不可能だと思えた道のりも可能にしてみせた、留守にするとしても数日程度だろうよ。なあ？』

『それに私達騎空団はグランがいないと何も出来ない子供の集まりじゃあないでしょう？ 数日くらいの不在、笑ってこなしで見せなさい』

こうしてグランは目出度く搜索隊の面子として選ばれ、直ぐ様こちらの世界に降り立った。

飛ばされて来た先はだだっ広い草原の真っ只中。空気も澄んでいて、魔物の気配も全く無い。よく言えば普通な場所。今までありとあらゆる超常現象をフルコースで味わってきた歴戦の彼らは、最初は警戒こそしていたものの平和そのものと言っただけのこちらの世界に少し拍子抜けした。

しかしながらこの草原の広い事広い事。グランの生涯の相棒である小さなドラゴン、ビーがその場で高く飛んで道を見つけて以降、彼らは丸一日歩きづくめだ。途中で目を見張るほどの大樹を見つけた以外何もなく、誰一人として出会わず、ヒントのないまま放浪するし

かない状況に流石の彼らも困り果てた。

そしてこの世界に来て二日目の朝、彼らは初めて人と遭遇する。物々しく装備した騎士達が乗り詰めた竜が牽く車、竜車が彼らの後方から大量に現れたのだ。

二日目にしてようやく人に出会えた事に安堵するグラン達は堪らず声をかけたが、竜車はそんな彼らを無視して道を大急ぎで過ぎ去ってゆく。一瞥すらせずに過ぎ去る彼らに皆一様に啞然とするも、グランが諦めずに声をかけ続け、ようやく反応を貰えたのは最後尾の竜車であった。

何があつたのかと聞くグランに、兵士は答えられないと冷たく返す。

もしかして戦争でも起こつたのですかと零すルリアに、兵士は首を振るだけで答えはしないものの、この先は危険だから絶対に行くなど釘を指してくる。王都に向かいたいのであれば、もう少し先に分かれ道があるから、それを右に進めとも。

大きな騒動が起きている事を察した一行のうち、もし協力出来るのであれば手伝いましょうかとルリアが手を差し伸ばすも、兵士は不要であると一言で親切を切り捨て、彼らの元から離れていく始末であった。

「私も団長さんに賛成かなー。ルリアの気持ちも分かるけど、まずはおししよーさま探しを優先しちやおうよ。残念な事に私達はこの世界で生まれた人じゃないから身分も説明出来ないし……多分いざこざが起きちやうだろうからね☆」

「クラリスさん……」

グランの左隣りを歩くのは、艶やかな茶髪を後ろで纏めたカリオストロのと酷似した服を纏う少女、その名をクラリスと言った。カリオストロを「ししよー」と慕う彼女は、カリオストロを祖先とする錬金術師の家系で育った血統書付きの錬金術師、その麒麟児だ。

しかしながらカリオストロとクラリスの系統は全くの正反対。カリオストロが創造を得意とするのに対してクラリスは崩壊を得意とし、またカリオストロが理論と理屈に精通するのに対してクラリスは

才能と直感を頼りにすると、性格も力も全くの真逆なのであった。

そんな彼女は団内のほぼ全員が今回の捜索隊に立候補する中、公平なる抽選の結果その立場を勝ち取って今この場に居る。当然ながら彼女は自らの先祖であり師匠であるカリオストロを探す事に熱意をこれ以上なく燃やしているが、実のところ懸想するグランと共に旅をすることをチャンスと捉えてもいる。割と強かな少女でもあるのだ。

「それにそれに、だんちよーは多分頭の中が敬愛するおししよーさまの事で頭いっぱいだから、余計な事考えられなさそうだしねっ」

「む。そんな事は……ないとは言えないかな」

「うちとしては少しは余計な事を考えてもいいと思ってるけどね……気持ちには分かるけど団長、思いつめ過ぎだよ？ この一月の間、寝る間も惜しんでずーっと調べ物して、クエストも何時も通りこなして。あまつさえ団の管理もするだなんてほんっとうに無茶しすぎ。うちはいつグランが倒れてしまうのかと毎日ハラハラしてたんだからねっ！」

「そうですよグラン！」

「そうだけ相棒！ だいたいよう、気付いてねえみたいだけどだんだん顔だつてやつれてきてるんだぞ？ サルナーンまではなつてねえけどよお」

「う。」

自分を除く全員からの声に、流石にバツが悪そうにするグラン。

人一倍正義感と責任感を持つグランが今回の件で酷く思いつめていたのは事実であった。それを悟られまいと平静を保っていた(つもり)だが……自他ともに認める多才な彼も嘘をつく才能だけはからきしだったようだ。どうしたものかと頬をかくグランにクラリスが続ける。

「それにししよーなら何だかんだで一人でもやってけるって！ 数千年間封印されてケロっとしてたくらいだよ？ だから焦らずゆっくり行こうよ。少しぐらいの余所事なら許される筈っ☆」

「……そう、だね。ごめんクラリス、僕はちよつと焦りすぎてたかも」

頼られる事を常としていたグランは自らを恥じた。いつもはお調子物でムードメーカーである彼女にまで心配される程であった事と、冷静な判断ができない状態に陥った事、その両方に。そんな反省するグランを見てにつこり微笑んだクラリスは我が意を得たり、としたり顔をすれば、

「分かってくれた？　じゃあ早速余所事してみようよつ、例えば……脚を休めるとかさっ！」

「おいおい、休憩なら一時間前にしたばかりじゃねえか。ちよつとは見直したと思つたのによっ！」

「あ、あはは……でも気分転換にはいいかもしれませんね。ちよつと休憩しませんか？」

「分かった。ただし少しだけだよ。日が暮れる前に王都には着きたいと思つてるからね」

「やрий☆」

グランは道の脇にそれて、風にたなびく草原の上に皆と共に座り込む。

見上げれば曇天としかいいようがなかった空も、風によって少し晴れ間が見えてきていた。いつもはどんなに雲行きが怪しくても最後には皆の力で乗り越えて笑顔を見せたんだ。今回の件も同じような事にはきつとならないだろう。そんな思いを込めてグランはうんと一人頷くと力が入りっぱなしだった身体を少し休ませ始めるのであった。

§ § §

汗を吸った服が肌に張り付いて鬱陶しい。

黒と白の絵の具を縦横無尽に塗りたくったような空の下、カリオストロは眼の前に広がる現実から逃れるようにそんな事を考えた。

彼女の眼下には物言わぬラムの死体がある。うつ伏せに倒れている彼女の背から股下まで痛々しい裂傷の跡が残されており、口から一筋の血を零し、虚空を呆然と見つめる彼女の顔は未だ自分が死んでい

る事に気付いていないようにも見える。

地面に広がりきった彼女の血はあらかた地に染み込んでおり、生臭い鉄錆の臭いが彼女の鼻につく。ただ、この臭いが広がっているのはここだけではない。既にこの草原一帯が濃厚な血と焼けた肉、そして焦げた香りで包まれているのは視界に広がる地獄のような光景から明らかであった。

襲撃から既に一夜明けた草原。商人の振りをしていた謎の集団——おそらく魔女教であろう——によってもたらされた被害は甚大であった。

ラインハルト陣営から派遣された兵士50人余りのうち、生存者は十数人余り。エミリア陣営で言えば生存者二人に行方不明者一人。こちらも相手にかなりの痛手を与えた筈ではあったが、如何せん向こうの勝利条件を拒む事には至っておらず、またそれはなんの慰めにもなっていない。

「カリオストロ」

思考の海に漂っていたカリオストロを澄んだ声が引き戻す。

声の主は正義の代行者、当代の剣聖だ。一瞥した彼女は「ああ」と無骨に返した後、悲惨な結末を迎えたラムの側で屈み、未だ空虚を見つめるラムの眼をそっと伏せさせた。

「すまなかった」

「ラインハルト。よせと言った筈だ」

頭を下げる美丈夫を見もせず、ぴしやりと謝罪を跳ね除けてしまう。これをやったのは眼の前のラインハルトではなく、別のラインハルトだ。その事はウロボロスの眼を通してカリオストロも理解している。だが理解しているからと言って納得出来るかと言えば……そうではない。人の何十倍、何百倍の経験を積んできたカリオストロだからこそ今抱いているこの燻<sup>くすぶ</sup>りが筋違いであると頭では冷静に断じられるも、やはり心まではそうは行かなかったようだ。

限りなく万能に近いラインハルトが不覚を取っていなければ結末は変わっていたかもしれない。だが、ラムが殺されそうになった時にその場に居たのは自分だ。これは自分が油断した結果招いた惨劇だ。

機微に敏い彼の事だ、そんな自分の蟠りわだかまを見越して抱く怒りをこちらに向けさせようとしているのだろうか、それは余計なお世話である。

「お前の兵士達は無事か？」

「戦線復帰できそうな者が1人。大きな怪我を負った者もいたが、君の回復魔法のお陰でこうして今も働いてくれている。君がいなければ間違いなく全滅していただろうね」

ラインハルトが視線を向けた先では今朝方、急ぎ派遣された追加の兵士達と傷を受けても尚働く最初から居た兵士達が手分けして骸を並べる姿があつた。彼らの中で同僚の変わり果てた姿を見て涙を流す存在はいても、文句や泣き言を言う存在は誰一人としておらず、黙々と遺体を運び続けている。そんな彼らからは悲しみと同じくらしいの怒りが滲み出ているように思えた。

「カリオストロ、あの襲撃者が魔女教だと言うのは本当かい？」

「ああ。とある見識者ベアトリクスが教えてくれた内容と一致している。過去に都市一帯の住民を魔獣に変えて同士討ちを狙わせた存在、そいつで間違いないだろう」

「今回も誰かの体を隠れ蓑にして我々を襲ったという事か……狡猾かつ残忍な手口だ。卑劣極まりない」

兵士や魔女教の死骸と共に散見される魔獣達の死骸を見て、ラインハルトは無念を表すかのように瞑目する。彼が考える通り、この魔獣らは元ホーシン商会の人員で間違いないだろう。以前、スバルがこの草原で倒れていた時は分からなかったが、今ならばはっきりと分かる。草原に居た商会の人らは余すことなく魔女教に襲われ、魔獣に変えられ……そして我々を貶める為の道具扱いされたのだ。そう、全てはエミリアを狙うが為に。

カリオストロは昨日の事を思い出す。

使役する朱のウロボロスを通して見た、偽のラインハルト。手をもごうが、頭を取り除こうが、まるでそよ風に撫でられたかのように気にもせず。瞬きの間に元の姿に戻るあの怪物は、間違いなくこちらに不意打ちを試みたりカードと同一人物であろう。

その人物は、あろうことか対峙したウロボロスの体を書き換えてき

た。

竜を模した人造の体が、奴が触れた所から別の体構成へと瞬く間に変わっていった。

豚の蹄が生えた。猫の瞳が生み出された。昆虫の脚が作り出された。

長い時間をかけて構築した生涯の相棒が、積み上げた理論、理屈、法則、その全てをあざ笑うかのように瞬く間にありえぬ物へと変わっていくのを見て、カリオストロはウロボロスを崩壊させては再構成せざるを得なかった。

しかし度重なる崩壊と再構成は自分のマナと集中力を著しく消耗させる。数十回の交戦の後、カリオストロはついに再構成に失敗し、維持すらままならなくなってしまう。その後、急ぎ蒼のウロボロスと共に雑魚を蹴散らしながら現場に急行するも——そこにあつたのは変わり果てたラムとエミリアの姿だけ。スバルの姿は最早どこにも無かった。

唯一彼女に残されたのは身を焦がす程の喪失感と、実力者であると感じていた自信がぼろぼろと崩れる感覚。こちらの世界に来てから、自分の掌から取り溢れる物が多すぎる。こんなにも自分の手は小さい物だったのか、と今も尚自問自答してしまいう程だ。

しかしながらそんな絶望感に囚われながらも彼女の残された理性と真理を追い求める気質は現実的な思考を止めることはなかった。絶望する暇があれば考えろと脳が、心が自分を責め立ててくる。最早ルーティーンと化した熟考するという行為に、カリオストロは一瞬の躊躇の後にのめり込んでゆく。

いまだこの場に自分が居るという事。それすなわちスバルが死んでいないと言う事だ。そしてスバルがその場から居なくなっている事を鑑みれば、自ずと彼が攫われた事が理解出来る。

だが、その行動には謎が付きまとう。当初の考えでは奴らの目的はエミリアの筈だった。

奴の口から零された「試練」という言葉。魔女教の教義だかなんだか分からないが、奴らはそれをエミリアに強制的に課そうとしていた

のがその理由だ。それであればエミリア以外の存在は全員奴らにとって不純物の筈だ。実際ラムは一顧だにせずに斬り伏せられた。なのに何故スバルだけは攫われたのだろうか？

重要な何かを見落としていいると感じながらも、思考の海に溺れかけつつあるカリオストロ。

彼女の耳は先程からある声を拾い続けていた。

「——リア、リア。頼むよ……返事をしておくれよ……心を閉ざさないでおくれよ……」

ラインハルトが新たに用意させた無傷の竜車、その外から中に向けて必死に声をかけているのはエミリアのパートナーである、パツクだ。かりかり、と猫がするように小さく、そして弱々しく扉を爪で引っかきながら声をかけ続けるという行為を、彼はもう二時間以上行っている。

しかし彼の努力は全く実っていない。竜車の中にいる変わり果てたエミリアは、時折まるで軋んだ扉のような小さな呻き声をあげる以外反応をすることなく、ただただ竜車の中に籠もり続けていた。

最初に変わり果てたエミリアを見つけたのも、またカリオストロであった。

ひと目見ただけで嫌悪を催す、あまりにも醜悪な虫がエミリアであると気づけたのは、その隣に転がっていた彼女が絶えず身につけていた魔結晶のお陰だ。助けを求めるかのように明滅するその光が、何度も踏みつけられて文字通り虫の息である変わり果てたエミリアを照らしていたのだ。

カリオストロは噛み締め過ぎた口元から血を零しながら彼女を治癒魔法で元通りに治そうと癒やし始めるも、解析した瞬間もはや人の身に戻せぬ事を理解、いや思い知らされてしまう。

彼女に唯一出来たのは外傷を治すことと。そして、慈しむようにエミリアを抱き上げる事だけだった。エミリアは半ばまで回復しきつたものの、目を覚ました途端彼女の腕の中で聞くに堪えぬ奇声をあげながらも暴れ出した。まるで初めて知る自分の体の感覚と、今の現状が認められないと言わんばかりにただひたすらに。節だった脚が激



しく動く度に腕や体に傷がついていくも、カリオストロはそれでも彼女を抱きしめ続けていた。

パックが出現したのは竜車の中に彼女を安置をしてから数時間後、丁度日が登り初めた頃であった。カリオストロが預かっていた結晶から唐突に現れたかと思えば、急ぎ竜車にへばりつき、ああして声をかけ続けている。最初こそエミリアも反応をしていたようだが、その反応は案の定全くの拒絶。竜車の中に入る事も許されない彼には、あしてひたすら、ひたすらに声をかけ続ける事しか出来なかった。

契約の関係で、彼がエミリアの傍にいられる時間は9時から17時ぐらいに固定される。奇しくもエミリアが襲われたのは夕刻を過ぎた深夜——動転していたのだろうか、オドを使って彼を呼ぶ事も出来ずに、彼女は変性させられてしまったのだ。

弱々しく声をかけ続けるパックは、いつもの茶目つ気も威厳もなりを潜め、まるで高い崖から落ちた子供を気遣う事しか出来ぬ親猫のようだ。そんな事を思いながらもカリオストロは彼に話しかける。最初は話しかけても話しかけても無視をし、有ろう事か敵意を向けてきたパックだが。彼女の変わらぬ反応は身に染みてきたのだろう。忌々しそうに彼女に振り返ってくれた。

「ボクの邪魔をするな」

「無駄な行動を取り続けるお前を見るのが余りにも忍びなくてな。もう気が済んだらう」

「気が済んだか、だと。戯言を抜かすなよ人形。今のリアの状況を見てよくもまあ抜け抜けと……キミという無駄を省いてやってもいいんだよ?」

「その苛立ちがお門違いなのはお前自身がよく知っているだろ」

「だから何だって言うんだい? 今ここで口答えするキミをぶちのめす事で、多少は苛立ちも晴れるかもしれないだろう」

その視線にはつきりとした敵意を滲ませてカリオストロを恫喝する。しかしそんな中でもカリオストロは物怖じすることなくパックを睨み返し、無言の抗議を続けている。それが癪に障ったのだろう、彼の周囲の風景が歪み始め、更に周囲にこの時期とは思えぬ冷たい風

が吹きすさび始めた。

「だいたい、誇示するだけの自信と強さを持ちながらも、守ると豪語しておきながらも守るべき者一人として助けられていないキミがボクに意見を言えるとても？　キミとボクが同じ立場だからこそ言えるとても言いたいのかい？　はん、何が同じなものか——キミが大切に思う者スバルと、ボクが大切に思う者エミリアを、同列で語ろうとするな」  
はつきりとした侮蔑の色を滲ませて、パツクは吐き捨てる。

自らの無能を認めたか棚にあげたか分からないが、お互いが大切な存在を守れなかった事を挙げてカリオストロの無能をなじった。

「絆の深さで張り合うつもりはない。ここでぐだ巻く暇があったら行動に移したいだけだ」

「リアを助ける以外にすべき行動でもあるのかい？　なら勝手に動けばいいじゃないか。キミがリアを治せるって言うなら話を聞いてやってもいいけど、出来ないんだらう？」

あくまで冷静を貫き通そうとするカリオストロに対して、パツクはどこまでも敵対的だ。

基本的に娘本位である彼の視野はいつも以上に狭くなっている。実際にその場でエミリアを守れなかった事に加え、高位の治癒の力を持つカリオストロですら直せないという事実が、彼に不信感を募らせていた。

「あいつらの足取りを一刻も早く追わなきゃ救える奴も救えない、それは分かるだろ？　今は協力しなきゃ駄目なんだ」

「どうだかね」

「パツク様。どうか我々にお力をお貸しくださいませ。カリオストロの言う通り、今は共に行動して奴らを——」

「キミという存在が居るのであればボクは不要じゃないのかい剣聖。もつとも、キミの剣もどこまで使えるかは疑問だけどね」

気がつけば自分の隣に立って援護をしてくれたラインハルトだが、彼の言葉もパツクには通じない。

万の不利すらも切り抜けることが可能な彼ではあるが、昨夜はガストンによって分断されてしまいロクに力を発揮することも出来てい

ない。その事実にも何も言い返す事の出来ぬラインハルトは悔しそうな表情を作り口を閉ざす他なかった。

意固地になっているパックには汚点のある二人での説得は無理だという予感があった。だがそれでもカリオストロはパックの協力を諦めきれない理由がある。もう一度口を開こうとした時、彼女らの前に壁のような氷柱が突き立った。

「——いい加減にしろ。ボクは協力しないと云ったら協力はしない。さつきも言った通りボクら抜きで君たちの好きにしなよ。次はない」  
「……」

「大体、お強いキミと劍聖が居てどうしてボクの力が必要になる？  
ボクに何をさせたいのさ？」

掌に収まるほどの小さな妖精は、透明な氷の壁越しでも伝わるほどの剣呑な雰囲気で問う。

カリオストロはその発言を受けて取り繕うか迷ったが、すぐにそれが逆効果であることを悟り正直に話す事にした。

「オレ様が真に望むのはパックが少しの間何もしない事だ」  
「カリオストロ？」

ラインハルトが自らの想定と違った発言をするカリオストロに困惑の表情を向ける中、彼女は言葉を紡ぎ続ける。

「お前とエミリアの間に結んだ契約、その履行を待つて欲しい。ただそれだけだ」

「……契約の事をリアからでも聞いたのかい？ 浅ましい、余りにも浅ましいお願いだね。自分の命がそうまでして惜しいのかい」

パックは嫌悪の表情を隠さずに彼女を睨みつける。

「契約を破棄しろとは言っていない、ただ履行のタイミングを5日間遅らせて欲しいだけだ。お前らが交わした細かい契約は知らないが、すぐに履行するとは取り決めてない筈だろう。だから——」

ラインハルトが瞬間的にカリオストロを抱えてその場から離れるのと、彼女が居た所には大小様々な鋭利な氷が幾重にも生み出されるのは同時であった。完全に殺すつもりの一撃。パックはその小さな猫の手を向けて、唾棄するような目を見せて告げた。

「キミのお願いなど知った事か。リアが心を閉ざした時点で契約は履行される——それまで精々生き足掻く事だね」

最早言葉での説得すら出来ないのは明白だった。こうなればパツクは捨て置くしかないだろう。それが分かるとカリオストロは溜息を零して次の策に取り掛かる事に決めた。

事情が掴めず困惑するラインハルトにその場に降ろして貰い、こう続けた。

「事情は後で説明する。その前にラインハルト、奴らの足取りは掴めそうか？」

「……彼らのものと思われる足跡と竜車の跡は見つけてはいる。捜索隊は夜の内に出してはいるが……正直の所厳しいという予想がある。何百年もの間神出鬼没と言われてきた魔女教徒が、そうやすやすと尻尾を捕まえさせてくれるかどうか」

だろうな、とカリオストロも半ば諦めの表情を見せてしまう。

魔女教徒の行動パターンが分かるのであれば先回りこそ出来るであろうが、当初の奴らの目的は今では果たされたと言つてもよいだろう。彼らの出現周期は文献によれば何十年単位。そんな過去の事例を鑑みてしまうと、最悪の場合次出会えるのは下手したら十年後という事にもなりかねない。

とは言え自分とスバルにはタイムリミットがある。記憶に新しいバハムートによる世界の崩壊は刻一刻と近づきつつある——その発生の地である場所には必ず赴かなければならぬだろう。

「不確かで関連性があるかも分からない情報だが、聞いてくれるか」  
「藁にもすがりたい現状としては是が非でも聞きたいものだね」

躊躇することなく真剣な表情を浮かべるラインハルトを見て、ふう、と一息ついたカリオストロはこう言った。

「今日から二日後、王都を巨大な魔獣が襲うという予知を聞いている。それもまた魔女教徒の仕業かもしれない」

## 第五十二話 取り返しのない世界（前編）

王都ルグニカの繁華街は今日も大繁盛だ。石畳が敷き詰められた道を竜車が引つ切り無しに通り、種族の壁など無いかのように人々は日々の糧のために働いている。ただっ広い道の左右には露天が立ち並んで、行き交う人々の興味を買おうと店主が声を張り上げている。

空は冴え渡り、鳥はさえずり、子どもたちは元気を発散しようとするのを走り回っている。活気に満ち溢れた平和そのものの光景だと言っていいだろう。

だがそんな光景を見てもカリオストロの気分が晴れることは全く無かった。

彼女はさんさんと降り注ぐ陽光の下、街灯に背中を預けて市井に冷めた目を向け続けている。

脳天気に行き交う市民の誰も彼もがこれから大騒動が起こることなど毛ほども信じていないだろう。なにせ自分ですら信じていない——いや、信じたくないのだ。他でもない自分の世界の産物が別の世界を破壊する光景など。

噂話で盛り上がる主婦達が、吹きすさぶ暴風で悲鳴をあげる間もなく吹き飛ばされる姿が。

2階の窓から洗濯物を干す親子が、巨大な剣で家ごと叩き潰される姿が。

昼間から酒を飲んで騒ぐ男達が、陸で発生した津波を前に店ごと流されてゆく姿が。

迷子の子供を引率する騎士が、地割れから発せられる高熱によって子供ごと灰になる姿が。

大量の商品を竜車で運ぶ商人が、地竜と共に荷車を残して骨と皮だけになる姿が。

広場の露天に群がる市民達が、天から降り注ぐ無数の光の剣の前に、跡形もなく飛び散る姿が。

向けた視線の先々で起こりうるであろう未来を、彼女の脳は鮮明にイメージしてしまう。当然前回の死に戻りとは流れが違うのだ、今回は起きないという可能性もあるだろうが……彼女にはどうしてもそう言った未来がほぼ確実に起こってしまうのでは、という予想があった。

あの草原での惨劇から2日が過ぎ、時刻は昼の鐘が鳴り響いてから半刻程。この広大なルグニカの街中で、カリオストロは日常の崩壊が起こる瞬間を待っていた。

それはあの日の提案に乗ったラインハルトも同じだ。彼が派遣した捜索隊は未だ結果を得られず、兵士を伴ってこの街中で待機をしている。しかして彼らは内心に矛盾を抱えて苦悩していた。人を助けるための行動ではあるが、大勢の命に関わる大事件が起きると知りつつも事前に市民達を避難させるといふ最善の行為がとれないのだから。

それも当然なのかもしれない。なにせ情報源はスバルの死に戻りから得た情報だ、未来の夢を見たのだと言って初見で信じる人こそ珍しく、また過去に同じ行動を辿っていない以上起こる可能性も低いのだ。確実性のない情報を前に市民を大量避難出来るのかと言えば……答えはノーである。今それを信じているのはこの世界ではエミリア達とラインハルト、そして数十人の兵士達だけだ。

狂言でもいい。今すぐにここで騒ぎを起こして市民を避難させてやろうかと何度思い至った事か。しかしそんな逸脱した行為を取ることとはさらなる未来の変化を起こすだけではと考えると、到底カリオストロの手は動かない。

八方塞がりとはこの事か。魔女教の企み、と言うより運命を弄る何者かによって自分とスバルの両方に、悪意をたっぷり詰め込んだ運命になるように仕向けられているように感じてしまう。以前であれば一笑に付した考えも、今ではそれが真実であると思ひ始めかけているカリオストロは、その目を更に細めて周りを見渡し続け――、

「カリオストロ」

「なんだラインハルト。……いや、本気でなんだこれは」

市井の様子を睨みつけていた彼女の隣にラインハルトが近づいたかと思えば、彼はその手に持っていたものを手渡してきた。掌サイズで丸みを帯び、陽光を浴びて赤く輝く果実。それは、

「リンガき」

「そういう事じゃなくてだな」

「昨日からずっと食べていないだろう、栄養補給は必要の筈だよ」

「一日二日の絶食程度でオレ様が……はあ、いや貰う。ありがとうよ」

今は到底食事を取る気分にはなれなかったが、意固地になって断つて口問答になるのも面倒だった。カリオストロは差し出されたリングをむんずと掴むと、しゃく、と小さな口で頬張る。

口の中に広がる酸味と甘味、そして喉を潤す瑞々しきは確かに心地よい。疲れの溜まった体が欲していたのかは知らないがカリオストロは二口、三口と無言で食べ続けていく。

「お代わりもあるけどどうするかい？」

「……オレ様の完璧かつぷりちいなボディを見ろ、一気に2個も食べられると思うか？」

「客観的な目線で言わせて貰うなら、万人が完璧と言うにはいささか無理があるようにも思えるね」

「異を唱える奴らはオレ様を実際に見ていないだろう。全空一可愛いオレ様を見た瞬間に愚民どもは評価を180度変えることだろうよ」

「ボクもひと目見てキミに完成された美を感じたけど、普段のキミを見れば完璧か、という点には少し首を傾げさせて貰おうかな」

隣に立つラインハルトの脚にカリオストロの力の籠つてない蹴りが突き刺さるも、ラインハルトは小さく笑うだけで堪えた様子はない。そんな他愛のない戯言の応酬。だがカリオストロには時間を無駄にしたという怒りは全く起こらず、逆に少しは冷静になれた。

事件が起こるにしろ起こらないにしろ、不安や焦燥に駆り立てられている状態ではまともな行動も出来なかっただろう。カリオストロはためらいがちに小さく口を開いた。

「……まあ、なんだ。ありがとうよ」

「リングのお礼はもう頂いてるよ」

分かっているだろうに、どこまでもキザな返答だ。だがラインハルトが言うど嫌味がなくてどこか心地よい。普段のあり方すらも忘れかけていたカリオストロはその場で深呼吸をすると、改めて現状確認を始める。

「状況はどうなってる」

「急な連絡ではあったが管轄の兵士達はルグニカの広域に配置完了。非常訓練という体で普段より多めに警邏に回って貰っている。何かがあれば警笛を思い切り鳴らすようには仕向けているから、異変があればすぐ分かる筈だ」

「上出来だ。対応が後手後手に回ってしまうのが正直心苦しいが、やらないよりはマシだろう」

「検問も普段より嚴重に行っているし、不審な人や物などあればすぐに取り押さえる事が出来るが……キミに教わった事件では、王都に現れるのは見上げる程大きな魔獣なのだろう？ どうやったらそんな存在がこの王都に現れるのかが不思議だ。もしやとは思いますが同時にキミが探して欲しいと言った青髪の少女に関係するのかい？」

カリオストロの反応は沈黙だったが、ラインハルトはその反応を肯定と見ていた。隣に立ったまま視線を向け続ける彼に、たつぷり5秒程時間を置いて彼女は語りだした。

「……聞いてはいると思うが、そいつはルリアと呼ばれている。オレ様がかつていた……まあ、傭兵団のメンバーだ。ルリアは契約した魔獣を従え、命令させてその力を奮う事が出来る。しかしながら魔獣使いととは完全に別物で、その場に魔獣が居なくとも召還して戦わせる事が出来るっていう滅茶苦茶な奴さ。当の本人は心優しく、人を疑うことを知らないどこまでも純真な奴なんだが」

「なるほど。それは凄まじい力だね。ただキミの人物評を聞く限りではそのような暴挙を取るとは思えないが……可能性があるとすれば」「そうだな。ルリアが誰かに脅されているか、騙されているのであれば話は別だ」

ルリアは心優しいが故に人を無視するという事が出来ない。相手



が善人であろうと悪人であろうと丁寧に対応してしまう。その善意は美德だが善意故に付け込まれ安い。過去彼女が攫われかけた事案が何度あった事か。

しかしながらそんな事件の九割九分九厘は未遂止まりになっている。それは何故か？

「だがその可能性も正直な所大分薄いと見ている、ルリアの傍にはほとんどアイツと一緒に居るからな」

「アイツとは？」

「グランっていう少年だ。ありとあらゆる武器に精通し、あまね遍くほとんど全ての才能に秀でた世紀の天才だ。それも天才を自称するオレ様ですら唯一隣に立つことを許してやってもいいくらいいな。あいつに勝てる奴は両手どころか片手の指でも数えられる程しかないだろう」

——そう、ルリアの隣にはグランが居る。

まだ団を立ち上げる前に死にかけてたグランは、ルリアと半ば魂を分け与える事により生き長らえた。そのため、彼らは常に近くに居なければならぬという制約があった。説明した通り全天空の中で一、二を争う強者であるグランが隣にいる限り、ルリアが脅かされるという事はまずありえない。あの魔女教の力を目の当たりにしても、パツクの真の力を目の当たりにしてもグランが負けるといふイメージがカリオストロには浮かばなかった。

「偶然にもその彼が隣に居なかったか、それとも彼を打ち負かす程の敵だったか」

「あるいはそうだな、別の誰かを人質に取られたとかか？ ルリアもグランもよく言えば優しく、悪く言っちゃまえばお節介焼きだからな。全然関係ない相手でも全力で救おうとするのは目に浮かぶ、が……一人を救うためにこの街の住民達に被害を与えるのを許容するとは到底思えねえな」

それに前回のループの最後にカリオストロが見たのは、ルリアが好んで使用する星晶獣達が6体同時、いや7体同時に暴れまわる姿だった。それは今までの彼女の召喚スタイルを思えば可笑しいの一言だ。

多種多様な星晶獣を召喚できることは事実であるが、同時にそれらを召喚しているところはいまだかつて見た事がない。召喚するたびに多大なエネルギーを消費するとも本人から聞いている以上、出来ないと考えてもよいかもしれない。そうなればルリアの仕業ではない可能性も考慮せねばならないだろう。

（ただ、そうだとすると王都で星晶獣が現れた理由が説明できなくなる。ヴァシユロンの野郎があいつらを一気にこの場に呼び寄せたとしても言うのか？ 生息する島の違う星晶獣達を一つ一つ？ それこそありえねえ、そんな手間隙をかける理由が奴のどこにある。ヴァシユロンはただでさえ弱りかけていたし、人を飛ばす力はあっても星晶獣を飛ばす力が残されてるとは到底思えん）

思考をすれどもまだ答えは見えない。肝心な何かが不透明なままであるという予感がしている。こういう時は考えても無駄で、出たとこ勝負であるとカリオストロはいつも考えている。論理に重きを置く彼女であるが、それでいて徹底した実践主義者なのだ。

思考を断ち切った直後、並んで町を眺めるラインハルトが躊躇いがちに質問をしてきた。

「……ところでカリオストロ。エミリア様は今は？」

「ん。ああ……あいつはロズワールの屋敷に戻した。流星石にこの場に連れていく訳にもいかねえしな」

「キミが傍に居てあげなくても良かったのかい」

「本音を言えばそうしたい。だが、今はあいつのそばに居ても声をかける事ぐらいしか出来ないんだ、あいつを励ます暇があれば治療方法を探しに行く方が合理的だ」

淡々と述べるカリオストロ。彼女の表情は先ほどから変わらないのは見て取れるのだが、この話題に入った瞬間、その雰囲気<sup>かげ</sup>が少し翳りのある物に変わった事をラインハルトは気付いていた。だからこそ彼はこう提案し始める。

「唐突な提案にはなるかもしれないが……この場は僕に任せてくれな  
いかい？」

さしもの提案に思わずラインハルトの方を向いて目を見開いてしまふカリオストロ。だが彼女はすぐさまその目を細めて、いつもの陰のある目で否定を始める。

「馬鹿を言うなラインハルト、敵はかつてない程の強大な魔獣だぞ？」

それも最低で7体は居るって言うのに」

「自分の力に自惚れている訳ではないが、当代一の剣聖としての力はあると自負している。慮外の敵など僕には存在しりえない」

「お前に一騎当千の力であること認めてもいいが、この広大なルグニカを1人でカバーするつもりか？　ただでさえ人手が足りないのにオレ様が居なくなるのは」

「君も知っている通り僕は有り余る程の加護を保有している。『早駆けの加護』。それがあればどこで何があろうと直ぐ様現場に急行出来るだろう」

「だとしても」

「いいかいカリオストロ、この件は僕一人でもきつと討伐出来るだろう。僕も君の力は認めるに足りうると考えているが、同盟を組んだ今君という存在が万が一でもこの戦いで無くなってしまうのは、余りにも大きすぎる損失なんだ。それに今のエミリア様にはキミという存在が必要の筈、だから——」

ぐしゃっ。

言葉を遮るくさように何かが潰れた音が響き渡る。

思わず口を閉じたラインハルトが音の発生源を辿った先では、カリオストロが手に持つ潰れたリングがあった。彼女は俯うつむき、その矮軀を小さく震わせながら、絞り出すように言葉を紡ぎ始める。

「——だから、エミリアの傍で御伽噺のような奇跡が舞い降りるのを座して待てと？　ラインハルトに任せて、自分は安全な場所で吉報を待てと？　自らの不甲斐なさを噛み締めながら、失意の底にあるエミリアを根拠もない、ただ耳障りの良い言葉を並べて励まし続けると、お前はそう言いたいのか」

「……」

「エミリアを壊されて、ラムが殺されて、スバルが攫われたって言うのに。大切な奴らを誰一人守れてねえって言うのに、ただじつとしてろって言うのか。そんな事」

そんな事オレには到底耐えられない。

自らに言い聞かせるように呟けば、カリオストロはそれつきり黙り込んでしまう。

いつもの自信に溢れたカリオストロの姿からは到底考えられない、弱りきった彼女の姿を見てラインハルトもまた口を開くことを忘れてしまう。いつもはその小さな体からは考えられない程理的で、老獪な女性というイメージを受けていたが、今の彼女はその体型相応の弱々しいイメージがぴったりであった。そう、それはまるで行き場をなくした迷子のような――、

「!」

ぴくり、とラインハルトの耳が何かを捉える。日々の喧騒の音に紛れて聞こえたのは、紛れもなく警笛の音。距離はこの場所から二区角先、噴水のある公園であることが察せられた。

「カリオストロ、余計な事を口走った事を謝罪しよう。それよりも、異常事態が発生したようだ」

「!……場所は近いか?」

「ああ。二区画先、さして時間もなく駆けつけられる。掴まってくれ」  
言うが早いかラインハルトはカリオストロをいわゆるお姫様抱っこの体勢で抱えると、その場から跳躍。彼女の見る景色は地上から一気に空へと移り、風切りの音がごうごうと耳を苛む<sup>さいな</sup>。ラインハルトは重力に任せて一度民家の屋根に到達すると、再度跳躍し、目的の場所へと急いでゆく。

「あれか」

腕の中に収まったカリオストロが視線を向けた先では、噴水の近くで民衆が逃げ惑う姿と隆々とした熊のような魔獣が雄叫びをあげている光景があった。憲兵達は民衆を誘導しながら、突如現れた魔獣へと一斉に剣を向けている。

既に魔獣は手負いで、半狂乱になって兵士達を威嚇している。しかしながらカリオストロはその魔獣の様子がどうにもおかしいように思えた、それはまるでどうして自分がここにいるか、どうして囲まれているのが理解できていないようにも思えて――、

「カリオストロ、もしかしてあれは」

「……お前も勘付いたか、急げ。手遅れになるぞ」

しかしラインハルトが再度屋根を蹴るのと、憲兵達が距離を詰めるのは同時の事であった。

「よせー」とカリオストロが叫んだが、事態はその時には既に遅く、背後から振りかざされた剣は、魔獣の背中に大きな傷をつけており、痛みに怯んだ魔獣の腹を正面から3つの槍が貫いていた。

「っ、キミ達やめるんだ!」

「ラインハルト様!? そんな、この街中に現れた魔獣を生かしておく筈が」

「どけ! その魔獣は――」

兵士達の後方に降り立ったラインハルトが憲兵達に制止を呼びかけ、腕から飛び出したカリオストロもまた魔獣を治療しようと急ぐ。だが致命傷を負った魔獣は血に塗れながらも兵士を吹き飛ばそうと、その大きな爪を振り上げており――

「君!?! くっ――ゴアア!」

飛び出したカリオストロを救おうと兵士達の魔法が魔獣を直撃、狙いすました複数の火球は魔獣の頭部に直撃し、半ば頭部を破損した魔獣は弱りきった雄叫びを上げたかと思えば、そのまま倒れ込んでしまう。

「なんて危ない真似をつ……! 危うく魔法が間に合ったから良いものを一体何を考えてつ――!?!」

眼の前で倒れ伏す魔獣の死骸を見て怒りに打ち震えるカリオストロに、兵士は叱ることも忘れてしまう。助けたと言うのに、その反応が反省でもなく、怯えでもなく怒りなのは一体どういう事か。困惑する周りをよそにラインハルトもまた悔しそうに顔を顰めると、

「キミ達、この魔獣は唐突に現れたで間違いはないかい? ……そう

か、ならこの街に唐突に現れた魔獣だが、原因は魔女教徒によるものである可能性が非常に高い。信じられないだろうが魔女教徒の中には人を魔獣に変える力を持っている存在がいる」

「そ、そんな馬鹿な……では、今倒した魔獣もまさかただの一般市民だと……そ、そう言いたいのですか!?!」

どよめきが伝播する。兵士達が一様に視線を向けた先にあるのは凶悪な魔獣の死骸。だが今のラインハルトの一言がそのイメージを180度転換させてしまう。弱者を守るための剣を、他でもない弱者に向けて放ってしまったのか、と互いの顔を見合わせて困惑を顕あらわにしてしまう。

「……今となつてはもう分からない、だがこの町中で唐突に現れた魔獣に関しては疑つてかかつて欲しい。いきなり攻撃をするのではなく大人しくする方向でお願いしたい」

「いきなり、そう言われても……」

「何か見分ける方法はないのですか?」

「向こうが攻撃を仕掛けてきてもただ守り続けろとおっしゃるのですか」

兵士は継るようにラインハルトへと質問を投げかけていく——が、それに悠長に答える時間は既に残されていなかった。

「——この音」

「警笛だ。西の方——いや、東も。南も……なんだ、到るところで笛の音が!?!」

街の到るところから立ち上がった異常を知らせる笛の音達が不快な合唱を初めだす。事切れた魔獣の傍で伏せていたカリオストロは、ラインハルトに目配せをしたと思えば、そのまま笛の音に導かれるがままに駆け出す。

「とりあえず片っ端から異常を片す! 何かあつたらまた呼べ!」

「分かった! カリオストロ、無事を祈っている!」

カリオストロはラインハルトの声に振り返ることなく起こりつつある異常事態に戸惑う市民を掻い潜って移動していく。奥に進めば進むほど普段の喧騒とかけ離れた悲鳴、魔獣の声、衝撃音が耳に入る。

進行方向から逆へと逃げようとする大量の市民とすれ違い、曲がり角を抜け次の区画に入った先で彼女が見た光景は、混沌の一言であった。

普段は買い物客が立ち並ぶ露天の至る場所から人程の大きさがあ  
る巨大な蠍、狼、猪のような魔獣達が、商品や木箱を撒き散らして暴  
れており、取り囲む兵士達が剣や槍を向けてなんとか包囲しようとし  
ている。既に魔獣にも兵士にも死人が出てしまっているのか、地面に  
新鮮な血溜まりを作り初めていた。

「おい、お前らやめろ！ その魔獣達は元市民の可能性がある！」

「――」

「聞いているのか!？」

「――煩い小娘、こいつは俺達の同僚を殺したんだ！ そんなのが市  
民な訳、ねえだろうがよっ！」

カリオストロの制止の声も効かず、冷静を欠いた兵士らはそのまま  
魔獣へと襲いかかってゆき、魔獣達もまた殺されてたまるかと雄叫び  
を張り上げて牙を剥く。カリオストロはどちらを止めるべきか一瞬  
迷ってしまい――その致命的な隙の間に、彼女の眼の前で更なる血と  
悲劇が呼び寄せられてしまう。

啞然とする間にまた一人、また一匹と同士討ちによって死骸が積み  
重なってゆく。その光景はカリオストロを絶望させるには十分だっ  
た。

あるところで起きつつある惨劇は、最早誰にも止めることは出来な  
いだろう。

兵士達へ情報を十分に共有する時間もなかったのが拍車をかけて  
しまったか、一度どちらかがどちらかを傷つけてしまえば悪感情の応  
酬はどんどん大きくなっていく。一度入った亀裂が広がるしか道が  
ないかのように、互いを敵とみなしてしまった兵士と魔獣達は、片方  
が全滅するまで止まらないだろう。

「――ッ」

街に投じられた一石の悪意が様々な人達の意志を巻き込んで、巨大  
な悪意へと成り代わる。

反射的な敵意は明確な敵意となり、最後には殺意へと進化してゆく。

傷がさらなる傷を呼び、治すことも出来ない傷へと変えてゆく。

一滴の筈の血の雫が、大雨が振ったかのような血だまりになってゆく。

「畜生」

カリオストロは知らぬ内に乾いていた喉を鳴らし、折れかけていた心に発破をかけると無理矢理両の手足に力を込めて動き始める。暴れまわる兵士を、暴れまわる魔獣を等しく吹き飛ばして回る。

「畜生、畜生ッ」

それが死にかけていれば治癒をし、尚も暴れまわるのであれば少なくとも怪我をさせて行動を封じた。最早自分が何をしたところで焼け石に水だと分かっている、彼女はただ一心にこの混沌を終わらせるつもりで矛盾の孕んだ行動を取り続ける。

「畜生、畜生、ちくしょう——ッ！」

終わりの見えない敵意の応酬。

箱庭の中で繰り広げられる無為なる行為。

悪辣なる者が垂らした一つの黒い染みが、隅々まで広がっていく感覚。

それはお前に出来る事など何一つないと、そう言っているようで。

だがそれを否定しようとカリオストロは我武者羅に街を走り回り続けた。

「カリオストロ」

だから悲鳴と怒号と血飛沫の音の中に紛れて聞こえてきた声を聞いたときは、それを幻聴だと思った。しかしその声は自分の意識を揺さぶるには十分過ぎて。声の方向に顔を向けてしまえば、もうその脚を止めるしかなかった。

そこに居たのは精悍な青年だ。

見覚えのある青い服、プレートメイル、籠手、そして柔和と真面目



さを取り入れた顔に、赤茶けたショートヘア。彼は腰に剣を下げて、カリオストロに視線を向けていた。

「グ、ラン……?」

カリオストロの驚愕を置き去りにして彼はゆっくりとこちらへと歩み寄り、彼女の直ぐ側まで寄ると視線を合わせるために膝立ちになる。カリオストロはまだ眼の前に居る存在が信じられないのか、わなわなと小さく手を震わせながら絞り出すように呟く。

「どこを……どこをほつつき歩いていやがった」

「……」

「オレ様を探すのがあまりにも遅すぎるだろ、もう一ヶ月以上も経ちまつてるだろうが」

「……」

「大体こつちに来ちまったのはハマしたお前が原因だつて言うのに、あんまりにも迎えが来ない物だから——オレ様の方から迎えに行こうと思つちまつたくらいだったぞ」

「……」

「何とか……何とか言えよつ。オレ様が、このオレ様がこの世界でどいう気持ちで過ごしてきたのか。それが分からねえ訳でもない癖に——!」

「うん、ごめん」

度重なる悲劇、度重なる苦悩、度重なる痛み。

数千年と言う永き人生を送っていく中で作り上げた頑強な器も、この世界で徐々に積み重なった重荷を支えきれず限界を迎えつつあった。既に弱りきってしまったカリオストロは無意識に彼の腕の中に包まれてしまい、今まで堪えていた心が歯止めを無くしたかのように、自然と彼の背に手を回していた。

「本当に遅くなつてごめん。まさかキミがこんな場所に居ただなんて」

「……」

「大変だったね、辛かったね……でも、もう大丈夫だ。僕が来たんだ、遠慮なく僕を頼つて欲しい」

耳朶を打つ安心させる言葉に心の重荷が徐々に取り除かれていく感覚を覚える。

隣に頼れる存在が居る事の頼もしさはかけがえのないものだ。二本の脚が地を離れて、完全にグランに体を預けてしまう。彼の厚い胸板に頬をくつつけるだけで、どうしてこうも充足感を覚えてしまうのか、こうも多幸福感を覚えてしまうのか。

「……………なあグラン」

「ん？ なんだい」

「いつもの、してくれ。頭を撫でてくれ」

「……………くすつ、この場かい？ ああいいさ。好きなだけしてあげるよ」

「つ……………！ いや、いや——悪い、確かに今は相応しくなかったな。まずはこの場を片さなきやいけねえしな」

目を見開いて動揺してしまったカリオストロは慌てて彼を突き放すとぶい、とそっぽを向いてしまう。騒動収まらぬ街の中、グランにはその様子がまるで初恋に戸惑う純情な少女そのものに見えた。

「別に僕は構わなかったけどね……………いいのかい？」

「楽しみはずっと後に回した方がいいだろう？」  
言えてる、と賛同したグランがカリオストロの隣に立ち剣を抜き離つ。

カリオストロもグランをもう一度見上げると決意を心に秘め、召喚したウロボロス達にこの街の騒動を片付けるがために命令を出した。

「え？」

その結果、グランの胸の中心に赤い花卉が咲き誇った。

その胸元から飛び出しているのは朱いウロボロスの太い尻尾。それは元々の朱色の装甲を更に鮮烈な紅色で染め上げていた。

「ど、うして——」

「……………」

尻尾に貫かれたグランが高く持ち上げられ、ごぼごぼと口元から血

泡と血反吐を零すグランは悲痛な表情でカリオストロに手をのばす。対するカリオストロはグランを一瞥することなく、明後日の方向を向いていた。

「か、り」

宙空で尻尾を引き抜かれたグランに目掛けて、朱と蒼のウロボロスが眩いばかりの虹色の崩壊の光を浴びせれば、グランはほんの少しの塵だけを残してこの世から消え去ってしまった。

「――」

カリオストロは顔から表情というものを無くし、塵になった元グラに視線を向け続けていけば……案の定、残された塵がかすかに動き出し初めた。ぼこ、ぼこりとかすかな音を立てて肉片を増やしていくそれは二倍、四倍、八倍、十六倍と体積を増やしてゆき――十秒も経たないうちに塵は人の出来損ないのような肉塊となり、そこからは瞬きする間もなくある姿を形取った。

「どうして――分かつちまいましたか？」

そこに現れたのは黒いドレスに身を包んだ妖艶な黒髪の女性――カペラであった、彼女は塵にさせられたというのに怒る事もなく、純粹に疑問なのか首を傾げている。

「途中まではテメエは完全に本物だと思いこんでいやがりました、とてつもない安心感と少くない慕情を目に秘めて、完全に信頼を預けちまっていた筈です。なのにどうしてテメエはアタクシを殺しやがるんです？　これがテメエなりの愛情表現とでも？」

「簡単だ。テメエの猿真似が上っ面すぎるだけだ」

「きひ。その上っ面に本気で騙されかけていた癖によくぞそんな口を利きやがりますねえ。お前が求めていた雄肉の理想の姿を見せてやったつっのに、あれでやがりますか？　そんな空っぽな体だから疼く子宮すら持つてねーって訳ですかね？　それとももつと乱暴に責め立てて欲しいマゾ豚だったとかかあ!？」

「品のねえ野郎だ、お前の言葉を耳にするたびに反吐が出る。いいか、お前は嗜虐趣味のクソ女郎で人の弱みに付け込む高尚な趣味をお持ちなんだらう？　だったらここぞという時に心を折りに来るのは目

に見えてる」

心底軽蔑した目をカペラに向けるカリオストロは、吐き捨てるかのように宣言する。

「それならお前が取る手段は？ これも容易に想像出来た。お前の力を駆使して親しい存在に化け、裏切り殺す。ほんつと額縁に飾りたいほどの悪趣味なこと。さぞかし愉悦を感じられるだろうな」

「そんな推測だけでアタクシを攻撃したと？ 心底大事な相手を？ それが本物であるかもしれねえってのに無謀が過ぎねえですか」

「はっ、そんなの半信半疑だったからカマをかけただけだ。頭を撫でるだど？ そんな事習慣になつてる訳がない、そもそんな提案したらアイツは恥ずかしがるだろーよ」

まさかの真実にカペラは目を剥くと、直後にはあ、と心底下らなそうに溜息をついて首を振った。

「あーあああやだやだやだ、グランとやらが惹かれた相手に手も出してねークソヘタレだとは思ってなかったですよ。いちいち糞童貞の考えを真似しなきゃいけねーなんて、死んでも御免です——おつと」

肩がぶつかつたくらい気安い声を出したかと思えば、カペラの右腕がウロボロスによって食い千切られていた。ウロボロスはカリオストロに啞えたその腕を渡すと、彼女はその腕を掴んでまじまじと見つめ始める。

「クソ雌肉。アタクシの腕をもぎ取って何がしてーんです？」

「いや何、お前のその体はどういう風に出てくるのが気になつてな——あん？ なんだこれは」

もぎ取った腕の断面から零れ出た血の雫がカリオストロの腕に触れた、と思えば、その触れた部分を起点にして黒い糸が血管に沿うように瞬く間に広がっていく。腕がびくびくびく、と勝手に跳ね回る感触にさしものカリオストロも目元を苦痛に歪めるが、躊躇なく自身の腕を半ばから崩壊させ、そして再度構成してしまう。出来たのは先程と全く変わらぬシミひとつない腕だった。

「随分変な血をしてるんだな、変性させる、つっ—か過剰回復させてる

ように感じたが」

「あつたりめーですよ。アタクシの血は龍の血。どんな病気もどんな怪我もたちどころに、限界を越えて治す奇跡の液体！ 良かったらテメーの全身にぶっかけてやりましょーか？ その人の目を惹く事しか考えねえ空っぽの体を、どんな人も目を背ける最ツツツ高のアートな体にしちまつてあげますよ？」

ゲラゲラゲラと歯をひん剥いて下品に笑うカペラに向けて、カリオストロは土と石を変性させて槍、斧、剣を地面から形勢して串刺しにしようとするも、流石に二度目の奇襲は失敗、高く跳躍したカペラはその背に漆黒の翼を生やして空に浮かぶ。

「アタクシのせつかくのご厚意を受け取らねーなんて、恥知らずにも程がありやがりますねえ」

「自分の行いを客観視すら出来ねえ奴の方がよっぽど恥知らずだとは思わねーか？」

「万人に愛されるアタクシに他人の視点で見る必要はねえんですよ！ きやはっ、怖い怖い！ 屑肉からかうのは楽しいですけど、カペラ様は忙しいんですよねー、お前と戯れるのはここまで。代わりに置き土産でも堪能しやがってくださいー！」

またどこかでお愛し<sup>念</sup>ちまいますようにねえ、と楽しげに飛び去っていくカペラにカリオストロが魔法による攻撃を加えながら何とか追従しようとするも、直後背後から巨大な何かの気配を感じて、ウロボロスに抱えられるがままにその場から避ける。同時に彼女の居た場所を巨大な脚が踏みつけ、その衝撃に颯風が撒き散らされ、木屑や紙片といった小物が吹き飛ぶ。

「ちっ……い……どこからこんな化物を用意しやがった……！」

そこに居たのは数多の化物と対峙したカリオストロでさえ顔を背けたくなる存在で。一言で言えば全長10m程の醜い竜であった。

鱗の代わりに全身を覆い尽くすのは水疱で、動く度にその水疱がぶちゅぶちゅと潰れては膿をほとばしらせる。肉塊を重ねたかのような歪な両足は歩みだすたびに揺れ、疎らに伸びた手の爪は不気味の一言。だらしなく開けた口からは舌が垂れ下がり、視線の定まらぬ目は

黄色く淀んでいた。

その竜とも言えぬ化物は続けてカリオストロへと向けて巨大な腕を横薙ぎに振るう。腕は石畳に深々と突き刺さり、肉が潰れる音と石同士が衝突する音を響かせてその延長上にある家ごと跡形もなく吹き飛ばす。

当然、カリオストロはその攻撃を余裕を持って躲しており、躲したついでにウロボロスと共に攻撃をし、振り切った腕に崩壊魔法をかけていた。

呆気なく消し飛ばされる化物の巨大な腕。痛烈な痛みを感じたのだろう、化物は綺麗に無くなった腕の断面から赤黒い血液をどぼどぼと零しながら天に向けて大口を開け、耳障りな悲鳴をあげ始める。

「纏ウ譁？・ユ怜喧纏代エ纏ソ縞シ縞ウ讖溯？縞サ遐皮ウカ？樞——  
——ツ!!」

その声は王都全域に伝わるほど大きく、聞くに堪えない悲痛な鳴き声だ。

カリオストロもとつきに片耳を塞いでしまった直後、その全長を超える長い尻尾が彼女に向けて横薙ぎに振るわれていた。カリオストロは自身を守る分厚い被膜を作り出したと共に迫りくる自分の背丈を超える肉の壁を、またも崩壊させる。

展開した被膜が赤黒い血で真っ赤に染まり、支えを無くした一軒家程ある大きさの尻尾の先が街角に突き刺さり巨大な音を立てる。またも体を無くした化物だったが、先程吹き飛ばしたばかりの腕の先から肉腫が形勢されて再生し始めていた。どうやらこの化物も龍の血が通った再生生物のようだ。

「だがな、デカくて再生するだけならオレ様の相手じゃねえ」

喚き立てる化物にカリオストロは淡々と攻撃を繰り返す。再生する？ それは結構。ならどれだけ再生できるか試してやると溜まった鬱憤を晴らすかのように熾烈な攻撃を浴びせ続ける。

腕を分解した、尻尾を分解した、腹部を分解した、頭部を分解した。

鈍重な化物は為す術もなくカリオストロに攻撃されては叫び、そして再生する。抵抗を試みようとする手や脚を伸ばした先から分解されてしまうのだ、溜まった物ではないだろう。

気づけば、化物は攻撃をする意思をなくしたのか背を向けて逃げようとしていた。だがそれを許すカリオストロではなく、魔法がその歪な両足を吹き飛ばして地べたに打ち転がす。ごぶ、ごぶ、とくぐもつた喘ぎ声のような息をする化物は、ゆっくりと脚を再生しながら彼女から逃げようと這って移動する。その再生速度は顔合わせた直後より確実に遅くなっていた。

「はっ、どうした化物。テメエから仕掛けた勝負を放棄するっていうのか？ 誰が逃がすかよ」

「壹？ 縷ユ縷一縷ウ縷 縷偵h縷雁相邇？」

「もしくはお前はただの罪のない一般市民かもしれない、が……何にせよお前はここでおしまいにしなきゃいけないんだ。お前を逃したら他の一般市民に被害が出る。——だから許せ。出来る限り早く終わらせる」

ずりゆ。ずりゆ。ずりゆ。ずりゆ。

歩くことを放棄した無残な肉塊が必死にカリオストロから距離を取ろうとする。彼女はそんな無様な姿を見て少し同情の目を向けながらも、全力の崩壊魔法をこの化物に施そうとして、

「——かり遠、縷定お、すと蜷慕噪ろ」

大きな鼓動の音が響いたかと思えば、一帯から甘ったるい腐臭が漂い始めた。

「はっ」

その幾度となく嗅ぎ慣れたその臭いの発生源は、眼の前の化物から漂っているように思えた。

いや、間違いなくこの化物から漂っている。

思考停止に追い込まれたカリオストロは攻撃をすることも忘れてしまう。どうしてこの臭いがこいつから？ それに、今こいつは何と言った？ まさか自分の名前を呼んだ？

「かり、お纏雁柑邇、ストロ、呐？ゆ？纏ユ纏ー纏ウ纏かりおすと纏呈欠ろ、かりおすところ、かりおす？ゆ？纏ユとろ」

聞き間違えではない、まるで何重にも設置された古びた蓄音機から流されるダミ声が、はつきりと彼女の耳に入る。彼女の理知的な脳はその2つの現実を突きつけられて、ある残酷な結論を導き出していた。それはとてもではないが信じたくないもので、とてもではないが彼女にとっても堪え難いもので――、

「かりおオ蜀 螳ケすところ、た纏力纏すけて」

その場に居ない筈なのに、げらげらげらげら、とカペラの耳障りな笑い声が響いた気がした。



## 第五十三話 取り返しが付かない世界（中編）

「フラグラ先生っ、添え木ですっ」

「はいどうも。じゃあついでだ嬢ちゃん、しっかりこの部分を抑えておくれよ」

「なあなあ医者のおーちゃん、何か手紙がすっげえどっさり来てんぞ」「いつもの事だ。包装がやたらド派手な奴とそうじゃない奴を分けておきな。うちは貧乏優先だ」

「ねえおばあちゃん、包帯の巻き方ってこんな感じ？」

「やり直した。あんた患部を壊死させる気かい」

「先生、こちらの患者さんは傷口の消毒と縫合までは完了しています。残りの患者さんは腹痛と微熱との事ですが…」

「助かるね、後は引き継ぐよ。あとの患者の治癒はあんたの判断でやっていい、何かあったら呼んでおくれ」

この世界に来てから3日目。僕らはルリアとクラリスと共にルグニカ王国の首都にあるフラグラ治療院と呼ばれる場所でお手伝いをしている。

勿論当初の目的を忘れている訳ではない。この世界でカリオスト口を探索するにあたって僕らには拠点とする場所が必要であり、その拠点がここフラグラ治療院と言うだけである。

ではどうしてここが拠点になっているかと言えば……それは偶然の産物であるとしか言えない。

昨日、現地人に教えて貰ってようやく最寄りの街である王都に到着した僕ら。

そんな僕らがまずすべき事といえば「休む」事……ではなく、「現地のお金を手に入れる」事。僕らの世界のお金が使えないのは来る前から分かりきっていた事なので、幾つかの武器や素材を売って旅の費用にあてる必要があったのだ。

当然の事ながら丸一日以上歩きづくめだったため、クラリス、ルリア、ビイの三人はもうへとへと。（僕はまだ大丈夫だけど）けど皆が休むためには何とかしてこの問題を解決しないといけない。疲労の色

が見えるみんなを鼓舞しながら僕らは親切な人に教えて貰った武器屋を目指していく……途中で。事故現場に遭遇してしまった。

聞けば竜車と呼ばれる荷車を引く貨車が横転し、通行人が巻き込まれてしまったとの事。

辺りは騒然とし、自然とできた人だかりを前にしてしまえば、僕らはお互いコンタクトしあっているもの調子で事故現場に飛び込んでいった。

見てみれば投げ出された御者はうつ伏せのまま倒れて動きがなく、横転した荷車の下から子供の手がはみ出ている状態。

僕はルリアとクラリスに御者の人をお願いすると急いで荷車へ向かい、市民の皆さんとの協力で下敷きになった子供を救い出す。

しかし救い出した子供は腕の骨折以外に外傷はないものの意識がない。頭を強く打った調子で気絶してしまったのだろうか。いや、最悪の事態を想定しなければいけないだろう。

そう考えると僕は元の世界で習得した力と技術を使う事に躊躇ためらいを覚えなかった。

元の世界では仲間から「どんな影響が起こるか分からないから不用意に力を使わないように」と散々口酸っぱく言われていたが、これは緊急事態だ。第一困っている人を放置する事なんて僕には出来やしない。

人だかりの中で最初は子供、次は御者のおじさんに治療を施してゆき、ようやく施術が終わったと思えば……気がつけば隣に白衣を纏ったお婆さんが立って僕を見下ろしていた。集中しすぎて全く気付いていなかった。

そう、この時会ったお婆さんこそがフラグラ治療院の院長、フラグラールエステイ先生だ。

僕は即座に立ち上がって医者でもないのに差しでがましい真似をしてみません。と謝罪してみんなと共にそそくさと去ろうとしたのだが……先生は僕の手を掴んで事情を聞きたいと治療院までの同行を願ってきた。どうやら先生は僕が披露した未知の治療技術について聞きたかったようだった。

最初は見ず知らずの人に伝えるべきか迷ったものの、少し話していく内に先生が真摯に患者と向き合う真面目な医者である事を理解すれば、もう拒むことは出来なかった。

自然治癒力を利用した魔法治療法。これはソフィアから。

非魔法依存の鎮痛技術。これはカリオストロから。

水魔法を応用した疑似血流作成法。これはマジサから。

古来から昇華され続けてきた医薬技術。これは多分ザンクティンゼル住まいのお婆さんから。

数多の仲間の教えと数多の経験を基に作り上げた僕の医療技術、その一端を僕は伝えていった。

先生はにわかには信じがたそうな表情を見せたが、軽い実演も含めて見せれば最終的には信じてくれたようだ。

だが信じたものの、先生が次に疑問を抱いたのは「どこでその技術を手に入れたのか」と言う事。先生は古今東西様々な医療技術を収集しては医学の発展を進めてきたとの事で、自身がこれらの斬新な技術を知らないのは考え辛いと言うのだ。

今度こそ僕らは口ごもってしまった。

「別世界から来た」などと言って誰が信じよう、遠い場所から来たのだとボカすのが精一杯。

ただそんな僕らの反応を見た先生は「詮索しすぎた」と質問を切り上げ、謝罪になるか分からないがと僕らを昼食に誘ってくれた。

その後はとんとん拍子で進んだ。

昼食の場で自己紹介兼雑談がてら僕らの旅の目的を伝えていったのだが……今は宿探しをしている、と言えば「うちの治療院に泊まればいい」と先生は気軽に答えてくれて。お金に持ち合わせがない、と言えば「幾らかは貸与してやってもいい」とこれまた軽いノリで答えてくれた。

いささか都合が良すぎる気がしたが「未知なる技術を知れた報酬を思えば軽すぎるくらいだ」と嘯く始末。ただ拠点のあてもない僕らにとってはまださしく渡りに船。ご好意に預かる事にした。

しかして先生から受けた恩恵の中で一番大きい物は、先生がカリオ

ストロの事を知っていたという事だろう！

どうやらカリオストロはロズワールさんと言う貴族の元で食客として仕えているようだ。

この世界での手がかりがほとんどない事が不安だっただけに、あまりの幸運に昼食の場だと言うのに僕らは両手をあげて喜び、先生を驚かせてしまったのは申し訳ない限りだ……。

その後、先生はロズワールさんの元にかリオストロをこっちに向我させるように手紙を出してくれたようで、カリオストロが来るまでここでゆつくりすればいいさ、と言ってくれた。

しかしながら如何に僕の知る技術が価値があると言えども衣食住を提供し続けて貰うのは申し訳ない、それはクラリスもルリアも同じ考えなようで、置かせて頂く代わりに治療の手伝いをしたいと申し出て……今に至ると言う訳だ。

「ふい〜……疲れたぜ。まさかこんなにも人が来るなんてよお」

「今日はこれでも少ない方さ。それにお昼時を過ぎればまたどぼっと来るよ」

「うげえ」

「でもでも、やっぱり治療して患者さんにありがとうって言われるとすつごく嬉しいですよね！」

慌ただしかった午前中の診療時間はあつという間に終わり、みんなが部屋の中で思い思いに休息を取っている。

ビィは手紙の割り振りや小物の運搬を朝っぱらからずつとこなしてくたびれており、ルリアは誰かの頼りになっている、という実感が嬉しいのか非常にイキイキとしていて疲れの気配が見られない。

「……うあく……」

だから、この中で一番疲れ果てているのはクラリスで間違いなさそうだ。

クラリスはソファに頭から突っ込んだ形で倒れ込み、先程から呻き声しかあげていない。

普段の彼女の澆刺とした姿は影も形もなく、これでは自称している最強可愛いという印象を持つのは難しいと言わざるを得ないだろう。

「……ししよーの勉強会ぐらい疲れたあゝ……」

「うん……まあその、なんだろう。お疲れ様？」

「あはは……特にクラリスさんは色々と苦戦してましたよね。でも初めてやることですし、仕方ないですよっ」

「……そうだよ、そうだよ、そうだよね？　うちの本領は錬金術なんだからさく、ちよつとこういう手先を使うのは苦手っていうか」

正直僕はまだまだ余力はあるけど、クラリスは午前の診療でもはや燃え尽きる寸前だったらしい。そんなクラリスの言い訳めいた呟きに僕とルリアの二人は曖昧に反応をする事しかできなかったが、

「得意不得意っていうか何ていうか……雑なんじゃねえのか？　あの包帯の巻き方とか特に」

「うぐっ」

ビーが容赦なく言葉の剣でクラリスをばつさりと切り捨て、その体がびくんと跳ねた。

確かにクラリスの包帯の巻き方は、何とというか……个性的だった。

5cm程の切り傷に過剰な程の包帯を使い、あまつさえ鬱血する程力が込められていたのだから。

「そこのトカゲの言う通りだ。全くもって感覚に頼るな、とは言わんが基本的に治療行為は理論体系を元にした行動さ。オール感覚でやるんだったら医者なんているもんか」

「うぐうぐっ」

だからオイラはトカゲじゃねえ！　と言い募るビーを軽くあしらいつつながら、フラグラ先生が更に追撃の剣を打ち付け、クラリスの体が更に跳ねる。

「第一に錬金術こそ手先と理論の集合だろうに、お前さん本当にあの嬢ちゃんの弟子かい」

「せ、先生……その、お手柔らかに？　クラリスが完全に撃沈しています」

先生のトドメの一撃が深々と突き刺さったのか、最早クラリスはうめき声すらあげずに完全に沈黙している。それでも先生は「本当の事を言っただけだろうに」と悪びれた様子を見せず、僕とルリアとビー

とで苦笑する他なかった。

医療の探求者であるフラグラ先生は、当然ながら名医と呼ばれるくらいには王都で有名だ。多分先生が人一倍医療に対して真摯に向き合い続けているからこそ、クラリスの言い訳めいた発言にも真面目に返してしまうのだろう、そう思っておく。

しかしこうして僕らがてんやわんやしながら対応するしかなかったのに、普段はこれだけの患者をほとんど一人で相手していたというのだから驚くばかりだ。僕も一端のドクターと呼ばれるくらいには修練を積んで居たはずだが、まだまだだと思いい知らされる。もつと精進しなくては……。

そうして新たな使命感に燃えていると、不意に僕の服が引つ張られる感覚が。ちらりと視線を向けるとルリアが小声で囁いてきた。

「……ねえグラン。やっぱり感じます」

「ん……近い？」

「はい、近いです……けど頼りない感じで……あ、消えちゃいました」  
そうだ、言い忘れていたが僕らがここ王都を拠点とした理由がもう一つある。

それはカリオストロをこの世界に連れ去った星晶獣、ヴァシユロンの気配が感じられるためだ。

この世界にやってきてから数時間後にルリアが見知った気配を感じ取っており、そのかすかな気配は幸運にも道行く人に聞いた王都への道筋と一致していたのだ。

「ここで暴れるつもりなのかな」

「多分そうする程の力はないと思います。あてもなく彷徨っているよ  
うな……そんな感じで」

「あの野郎、オイラ達が与えた傷でまだ弱ってやがんのかあ？ だどしたらチャンスだぞ相棒！」

クラリスとビィも呟きに反応してこちらに身を寄せてくる。特にビィはふんふんと鼻息荒くこっちに詰め寄ってくるけど、肝心の居場所が分からない事にはどうしようもないし……そも、カリオストロの居場所はもう分かっているからなあ。ヴァシユロンは悪さしないよう

にルリアには吸収して貰うけどさ。

「なんだい皆してこそこそと。うちから金目の物でも盗む算段でもつけてるのかい」

「はわわっ、そんな事考えていませんよ！」

「ただの秘密作戦会議つて所つ、ししよーをどうやって出迎えてあげようかなーってね☆」

「それって本人がいない所で秘密にする必要あるのかい？」

「そもそも医者のおばーちゃんのおつて金目の物あんのかあ？ さつきも患者さんからお金全然貰つてなかつたしよお、慈善事業多すぎとお金とか全然蓄えてねえような気がするんだけど」

「馬鹿にするんじゃないよ、人ひとり生活するぐらいなら十分さ」

「おいおい……逆に言えば一人分しか担保出来ねえのかよ……」

うん、先生は何かこう今までの人柄や性格を考慮するのにお金目的じゃなくて人命第一の人だからかお金に頓着は全くなさそうだ。治療院の外観は失礼だけど結構オンボロだし、多分必要最低限以外のお金に関してはほとんど貧しい人に寄付しているんじゃないだろうか。

冗談交じりに聞いてみたら「よく分かったね」なんて本気とも冗談とも取れない返事が帰ってきた。……これは本気で寄付していそうだ。

そうやって他愛もない話をしながら先生が手ずから入れてくれたお茶を飲んで、みんなでまったりと休憩していると、ふと窓の外で兵士が走り回っている様子が見えた。

入国した時から思っていたが比較的町中に兵士の数が多い。軽く見た感じ町中の治安は良さそうだったが……他国との戦争の準備でもしているのだろうか。

「……ふん。何かあったようだね」

どうやらそういう訳ではないらしい。先生も訝しげな目を窓の外に向けていたかと思えば、すつくと立ち上がって窓を開け放った。

「ちよいとそこの兵隊さんよ」

「！これはフラグラ先生。いつもお世話になって……」

「挨拶したくて声かけたんじゃないよ。そんな事よりドタバタ走り

「回って一体何事だい」

「僕らもついつい二人の会話が気になって耳を傾けてしまう。」

数多の事件に巻き込まれ、時に自ら押し入っていった僕らは、気付けば事件の気配と言うのに敏感になっていた。

「物事の起こりを逃すな。初動が遅れば手遅れになるぞ」とはカリオストロが口酸っぱく教えてくれたっけか。

「はあ……それが今日は王都全域で緊急訓練との事にして、街に大掛かりの災害が起きたケースを考えて動けと急に通達が飛んできたのです」

「……街ぐるみでかい？ おかしいね、だったら私の所にも通達があつて然るべきだろうに」

これは後から知ったんだけど町医者であるフラグラ先生は軍の医療顧問でもあるらしく、軍事機密までは流されないが訓練や演習の情報も逐次回されてくるとか。

「先生の所に届いておりませんか？ そうですか……自分たちも正直困惑しています。確かに抜き打ち訓練は今までありましたが、事前通達もなしに王都全域で行う訓練だなんて前代未聞です。それに……」

「それに？」

「災害ケースがやけに具体的なんです。都内で巨大魔獣が暴れた場合の災害対策……らしいですよ。こんなの今までやったことありませんよ」

都内に巨大魔獣が？ この場所は確かに王都と称せるぐらいには周りを堅牢な石壁で覆われており、守りも硬そうなイメージを僕は持っていたが……そんな石壁すらも物ともせず暴れる存在がここに来るのだろうか。

「何だろう、ティアマトとか？ コロツサスとか？ うちらが良く相手してあげてるよねっ」

「ほとんど毎日息抜きがてら付き合ってるもんなあ……」

「うーん、でもこの国に来てから他の星晶獣の気配なんて感じた事ないんですよ……」

みんな呑気な事を言っているが、思えば僕らは大概おかしな事をし



ている気がする。

あとルリア、そりや違う世界だもの。逆にあつたら驚くよ。

「どこのどいつが考えた訓練案だか知らないが、あんたら兵士達も災難だね……。で、そんな通達を出したのはどこの馬鹿だい。いたずらに市民に不安を与える真似なんざ、全くもって愚の骨頂だよ」

「お気遣いありがとうございます。自分もただ上から下された命令としか聞いてないので誰が発案なのかは正直分らないのですが……」

兵士さんは逡巡したかと思えば、先生に顔を寄せてこう告げた。

「噂によればラインハルト様のものだとか」

「……あの剣聖がかい？ 解せないね……よりよってあの坊主がそんな通達を出すとは」

「私も半信半疑です。ラインハルト様が急にこんな事を言い出すとは、何か意図があつての事なのでしょうか」

二人の声には明らかな困惑が含まれていたが、それよりも僕の頭に引っかかったのは「けんせい」という言葉だ。けんせい……剣聖って、あの剣の道に非常に優れているという意味の「剣聖」の事？ 僕が疑問符を頭に出していると、クラリスも同じ疑問に至ったのか、口を挟んでいた。

「けんせい……けんせいって、聖なる剣って書いて剣聖？」

「む。先生、その方達は？ 患者さんでしょうか」

「この子らは臨時の助手でね、やんごとなき理由があつてうちに住まわせてるのさ。……で。嬢ちゃんの認識は間違いないが、よもやラインハルトの名も初めて聞くとか言わないだろうね」

「あ、あはは……」「えへへ……」

「呆れた……あんたらは相当遠い場所から来たんだらうね」

そんな事を言いながらも先生は丁寧の説明してくれた。

曰く、この国は昔から王国を守る剣である剣聖の家系が存在しており、ラインハルト・ヴァン・アストレアという人は当代きつての最強の剣聖との事。その名も全世界に広がる程の物らしい。

最初はジークフリートやシャルロッテのイメージが思い浮かんでいたのだが、「根は真面目だけど融通の効かない、天然の正義バカさ」

と言う評を継ぎ足されると、どつちかと言うとユーリのイメージが浮かんでしまった。少し気性が激しそうだ……。

「でも剣聖って言えばうちのイメージだと……グランの事かなくてつきり」

「はい、てつきり私もグランの事かと」

「相棒は名実ともに剣聖だしな！ ずっと前にジョブとして手に入れてたし」

「はん？ この坊主はそんなに強いのかね」

「えへへっ、それはもう！」

「武勇伝なんてそれこそ腐るほどあるよお婆ちゃん、グランは自慢のだんちよー様だよっ！」

「……」

皆が後ろで好き勝手僕を持って囃しているのを気恥ずかしく思っていると、先程から兵士さんがこちらを見つめているのに気付く。

もしやとは思うけど剣聖の事で気に障ってしまったのだろうか。

一瞬焦った僕だが、よくよく見ると彼の視線の先は僕ではなくてルリアに注がれていた。ルリアもそのことに気付いたのだろう、少しだけ体を強張らせ始めた。

「あの……どうかしましたか？」

僕が兵士の視線が途切れるように立ち位置を変えれば、兵士はぼつり、と呟き始める。

「……白いワンピースに青の長髪。もしや通達にあった……？ キ

ミ、名前はもしかしてルリア、と言わないかい？」

「！」

「は、はいっ……そうですけど、どうして私の名前を？」

ルリアも、そして僕も困惑してしまう。どうしたって別の世界に来たというのにその名前が知り渡っているのだろうか。ビイもクラリスも同じ気持ちなのだろう、少し警戒心を覗かせながら兵士さんを伺うと、途端に向こうは慌てた。

「あ、ああ警戒させてすまないね。これもまたおかしな話なんだが……ルリアと呼ばれる青髪の少女を見つけたら、詰所まで連れて来て

欲しいと伝えられていてね」

「ルリアが何かしたって言うのかよ？」

「そうだとはい聞いてはいないけど……これも上からの命令でね、良かったらご同行願えないかな？」

兵士の表情と雰囲気を見極めるに、本当に捕らえようとする意図は見受けられない。

てっきり帝国軍が別世界まで出張ってきたのかと一瞬思ってしまったが、そうではなさそうだし……おそらく、これもまた逃してはいけない切欠の一つに違いないだろう。ルリアの問うような視線に頷いて返し、指し示したかのようにクラリス、ビィとアイコンタクトを取り、

「はい、私は構いませんっ」

「けれど、そこには僕も同行させてください」

「当然ウチも！」「オイラもな！」

「お、おお、勿論構わないとも。では今から詰所まで一緒に行こうか……と思っただが、君たちは今日は助手をしていたのではないのかい？」

うっ。少し勇み脚が過ぎた。

兵士さんの言葉に僕たち全員がギクリとなって、ほとんど同時に恐る恐る振り返ると……肘掛けで頬杖を突いていた先生がこちらをじとっとした目で見ていた。けどすぐにわざとらしく溜息を付いたかと思えば、

「好きにするといいき、あんたらはあくまで臨時だし、もとはと言えば客人だ。行きたいというのなら止めはしないよ」

「ほ、本当に勝手ですみません」

「ごめんなさいフラグラ先生……」

先生には本当に悪い事をしてしまったと思う。

だけどルリアを一人で行かせるという選択肢は僕にはないし、仲間たちにもないだろう。

どういった用事かは分からないけど、終わったら先生には何らかの埋め合わせをしないと……なんて考えていたのだが、いざ出発のタイ

ミングで更なる異変が待ち受けているとは思っても見なかった。

「――笛の音?」

それは生活音からかけ離れた一際高い音の線。

誰しもが耳に留めるであろう警告めいた音。そんな音が街の奥から突如響き出したのだ。

しかも最初は一つだったそれが呼応するかのように2つ、3つと別の場所からも奏でられ始めてゆき、否が応でも自分たちの警戒心を刺激してくる。

「これって……!」

「何かが起きてる、って思っていていいだろうね……兵士さんこの音に聞き覚えが」

「ある……が、まさか本当に起きたっていうのか……?」

兵士さんは困惑しながらも教えてくれた。

これは非常警笛の音らしく、緊急事態が発生した時のみ鳴らされる物らしい。

今回の訓練では鳴らされる事はないと聞いていた以上、訓練では想定し得ない何かが発生したのは違いないだろう。

「すまないが同行は後回しだ。自分は現場を見てくるからキミ達は先生の元で待機を――何、手伝おうかだって? うううむ、気持ちは嬉しいが」

「それでも緊急事態なんですよね? 私達少しでも役に立てると思いますっ」

「決して足手まといになるような真似は致しません。それに、こう見えても結構僕らは腕は立ちますよ」

「それだけは保証するぜ兵士の兄ちゃん、グランはともかく、クラリスだってそこそこ強いんだぜ?」

「そこそこじゃなくて最強ですー。可愛さも兼ね揃えた最強可愛い錬金術師なんだからっ☆」

僕らの推しに兵士さんは躊躇いを見せたものの、今は迷ってる暇は

ないと悟ったか僕らの顔を見直し、

「……分かった。ただし自分の言う事には必ず従って貰うから勝手な事は慎むように。それじゃあ現場に向かうぞ、駆け足！」

「はいっ！」

「それじゃあ先生行ってきます！」

「あいよ、怪我人が出たらすぐにうちに来な。無茶だけはするんじゃないよ」

先生の声援を背に受けて僕らは後ろ手で手を振ってから街へと駆け出してゆく。

街の人達はまだ何が起こってるのか分かっていないのか、急遽響き出した笛の音に不安そうな顔をしている。けど、笛の音の近くまで行くとその様相も変わる。

近づく先から逃げ出そうと市民たちが一様に僕らの方へと走り込んでくるのだ。

元凶が近いと悟った僕らが気を引き締めて人混みを抜けてゆくと、半壊した露天のすぐ傍に身の丈3m程の巨大な狼が居た。既に二人の兵士がその場で狼に対峙している。

「大丈夫か……!?!」

「応援か……！ 助かる……って何だその子供達は」

「お尋ね人兼助っ人だ。かなり腕が立つそうだぞ……ソレよりも、どこからこの魔獣が？」

「分からない。巡回中に悲鳴の元へ向かったら露天を壊してたこいつと遭遇したんだ」

魔物……いや、魔獣に向かった兵士さんは、その魔獣から視線を反らす事なく答えてくれた。

僕は兵士さんの後ろでその魔獣を見て探っていく。

爪の長さ、牙、尻尾、その目つき、体勢。数多の魔物とやりあい、そして様々な武術の達人から教わった事で、大概の魔物の強さは理解出来るように僕はなっている。

分析の結果、爪も牙も人を殺傷足らしめるには十二分にあると判断出来るものの、いつもの魔物と大きく異なっている点がひとつあつ

た。

それは敵意と言う物がまるで感じられないという点だ。

混乱しきっているのか忙しく辺りを見回し、市民たちの悲鳴や物音に過敏なまでに反応する姿はまるで唐突にこの場に放り出されたかのような感じで。あたかも自らが兵士に囲まれている事が理解出来てないようにも思えた。

僕とて魔物は常日頃退治はしているものの、出来ることなら殺生は控えたい。それが敵意のない相手であるなら尚更だ。

だけど兵士さん達は眼の前の脅威を何とかしようとしじりじりと間合いを詰めており、狼もまた警戒の色を強めている。このままでは互いに血を見る展開になりえるだろう。

思考がリンクしたルリアもまた僕と同じ考えに至ったか、強い眼差しを持ってこちらへと頷いていたので、僕は争いを止めようと兵士さんの前に飛び出そうとした——その時だった。

「——あああああああああああああッ!!」

「ギャウウツ!?!」

轟くような声が近づいて来たと思つた直後、横合いから飛び出してきた兵士さんが構えた槍で狼の腹部を突き刺していた。飛び散る飛沫と流れ出る血が石畳とこぼれ落ちた商品を汚す。傷つけられた狼は苦悶し、その場にのたうち回ってしまふ。

「どうしてっ!」

余りにも唐突過ぎる横槍。ルリアの悲痛な声は僕の気持ちの代弁でもあつた。

だが苦情を向けられた兵士は肩で息をつきながら逆にこちらを睨み返してくる。

「お前らぼさつとするな! 町中全域にいろんな魔獣が現れてるんだぞ! さつさと片付けて次へ行くぞ!」

「そんな、でもこの子は全然敵意とかもなかったんですよ! 何でいきなり傷つけるなんて事を……!」

「ルリアっ」

たまらず抗議するルリアをクラリスが窘めるも、ルリアは撤回する

ことなく兵士に詰め寄る。だが兵士は怒りの形相を向けるだけ。

「――敵意がなかっただ？ 魔獣に敵意の有無なんて関係あるか、魔獣は人類の敵だぞ！ お前は見逃した結果別の誰かが傷ついたら、殺されたら責任持てるのか!？」

「っ！ き、きつと話せば理解してくれる筈です……だって現に」

突きつけられた正論に困惑しながら口ごもるルリアだが、反論の余地はなかった。傷ついた狼は半狂乱で立ち上がったかと思えば今度こそ明確に敵意を向けてこちらに襲いかかってきたのだ。

僕は反射的にその狼の一撃を竜爪と翼を模した直剣で防ぎ、弾き返す。結果狼の一撃はあらぬ方向に逸れ、狼は別の商店に頭から突っ込んでしまう。

「……つ、今だ！ トドメを！」

「待つ」

敵意には敵意を。殺意には殺意を。

取り残されていた別の兵士さん達は明確な隙を見せた狼に殺到し、思い思いに武器を振るおうとする。

そして僕はといえば――ソレを止める事は出来なかった。

追い継ろうとするルリアを片手で引き寄せて僕の胸にかき抱いて視界を遮ったのと、心をかきむしるような悲痛な声が響いたのはほとんど同時だった。

「……ルリア、君は正しいよ。でもここでは兵士さんの方がより正しい。……手負いの獣を説得するには余りにも時間が足りないよ」

風土、価値観、倫理観。僕らはそれらが全く異なるかも知れない地に踏み入れているのだ。

ただでさえ異常事態に見舞われたルグニカの街で、魔獣が人々の中で完全に敵だと見なされている中で如何に敵意がないからと必死に説いたとしても、きつと事態は好転しないだろう。

分かるね、と宥めるように囁やけば腕の中で体を強張らせていたルリアは少し間を置いてから頷いてくれた。

「クラリス」

「……うん。兵士さんそこどいて」

今尚苦悶の音が続くのは、狼の体格に対して兵士さんの武器が小さいからだろう。

もう抵抗も出来なくなった狼を見て同じことを考えたのだろう、今の一言でクラリスが魔導書を片手にその狼に掌を向けた。

「貴様、一体何をす……おわっ!?!」

光を通さぬ小さな穴が狼の中心に現れたかと思えば、それは一気に広がって狼の全体を包む黒い球となる。紫電を纏う黒い球は限界まで大きくなった直後に急速に収束を開始し、周りから引き寄せるように風をおこして地面ごと消し飛ばしてしまう。

残されたのは綺麗に楕円状に削られた地面だけ。

唐突に起きた事象に兵士たちは軒並み尻もちをついていた。

「無駄に痛みつける事ないでしょ？ 手こずってるようだから魔法で消し飛ばしただけ」

「いきなり過ぎる！ 当たったらどうするんだ！」

事前に声かけたじやん、と兵士に対してぶーたれるクラリスを横目に僕も悲しそうなルリアの頭を少し撫でて離そうとする。先程の兵士さんの話す通りならば早く次の場所に行かなければ。そんな使命感に囚われていた僕だが……ルリアが服を掴んでおり、離してくれない。

元々感受性の高い子だ、ショックだったのは分かるが今は気持ちを切り替えて貰わなければ。だからもう一度ルリアを励まそうとしたのだが……その前にルリア口を開いた。

「——グラン。あの人……さっきの兵士さん」

「……兵士？」

どの兵士さんの事だろうと思ったが、どうやら最初に横槍を入れたきた兵士さんの事らしい。

怒りを向けられたせいで一緒に行動するのが気まずいのだろうか。

「大丈夫だよルリア、きつとあの人は別に気にしてなんて居ないさ。ただ余裕がなくて怒ってしまっただけだと思——」



「違うんです、違うんですグラン」

ふるふると首を振るルリア。じゃあ一体何が言いたいのだろうか。

「あの人、笑っていたんです」

「え……」

「私達が狼さんを攻撃してる時……ずっと、ずーっと笑っていたんです。態度で表さずとも、心の中で。そして目で」

僕は一瞬理解出来なかった。

ルリアが感じたその感覚は余りにも現状とは場違いの物過ぎたからだ。

「焦りとか、不安とか、怒りとか……そう言った感情なら分かります。でも違うんです、あの方は子供のようにならぬ私達が狼さんを傷つける様を楽しんで居たんです。まるでこの異常事態そのものが楽しみだったかのようで——怖い……です、グラン。大声だからとか厳しいからとかじゃなくて……理解も共感も全く出来ないのが怖いんです」

咄嗟に辺りを見回してその兵士を探す。だけどその場に居たのは僕らと最初からその場に居た兵士達のみ。横槍を入れてきた兵士は既に姿形も見えなかった。

……一体何が目的だったのだろうか。僕は不安がるルリアを庇うかのようにもう一度彼女を抱き寄せた。

「おいルリア、グラン。一体どうしたってんだ？」

いつまで経っても次の場所へ行こうとしない僕らに痺れを切らしたか、ビイが話しかけてきたけど僕は何でもない、と首を振る。

ルリアをここまで怯えさせた兵士が何かを企んでいるのか、それとも単純に倒錯的な性格だったのかは分からない。でも今は時間が無い。

「大丈夫、大丈夫だよルリア、僕がついている。だから今は他のみんなを助けよう、いたずらに魔獣達を刺激しないように何とか立ち回って、双方に怪我人を出さないように努めよう」

勿論全ての魔獣がさつきみたいに敵意がないのかと言われれば分からないけど、出来る限り不要な血を流さぬように救って見せよう。

この世界の人から見れば僕らは異端児だろうけど、自らの正義を僕は幾度となく押し通し、そして最後にはまるつと笑顔にしてきた実績がある。きつと出来る筈だ。

肩に手を置いて落ち着かせるように語りかければ、ルリアはようやくその手を離してくれた。

「……ごめんなさいグラン、そうですね。今はそれよりもみんなを助けないとっ！」

「ねえ二人共、イチャイチャは終わった？ 早く先に行こうよ。兵士さんも先行くってさ☆」

「ああ、今行くよ」

「は、はわわっ。クラリスさん違うんですよ、これは別にイチャイチャなんかじゃ……！」

茶化すクラリスに慌てるルリア。

うん、やつぱりこうやって距離感なく軽口を叩きあうくらいが丁度いい。

準備を整えた僕らは街を再度駆け抜けてゆく。

笛の音はもう止まっているものの、行く先々で逃げ惑う人々や叫び声が聞こえてくる。

やはり街の中はもう大混乱なのだろう、到るところで魔獣達とやりあう兵士達の姿があった。

僕らはたびたびその戦闘に飛び込み、可能であればその戦闘を収めようとした。けど既に傷つけられている魔獣は理性が消えてしまうのか説得も難しく、倒すほかない場面も多々あった。

結局あれだけ街の中を東奔西走してもまだ二体しか救えていないのが悔しい。

「はあ……はあ……ねえだんちよー。何か変……だよね。この魔物達……基本的に怯えてるといふか混乱してる？」

「それはオイラも思ったぜ。なんつーか……無理矢理連れられてきたって言うよりかは、自分が何なのか分かってねーっていうか」

敵意のない魔獣を即席の石檻（鍊金術で作った）で閉じ込めた後、二人が疑問を呈した。

確かにこの街に現れた魔獣達は、そのほとんどが例に漏れず混乱している様子があった。

しかもその混乱の様子がおかしい。グリフオンのような魔獣は空を飛ぶ事も出来ずに無闇矢鱈に羽を振り回し、巨大な蛇の魔獣に至っては移動も出来ずにその場でのたうち回るだけ。それはまるで自らの器官の使い方が分からない様にも思えてしまう。

「強力な薬を使って混乱させてる……とか？ でも中にはそうでない魔獣も居るんだよね。混乱してる方が大半だけど……うーん、この事件を引き起こした人は何が目的なんだろうか」

状況は俯瞰して見定めろ。ひとつの視野で物事を考えようとするな。

かつて言われた言葉を思い出して僕は一度立ち返る。どんな事にも言えるけど、物事には目的がある筈だ。この事件を引き起こした人も何かしらの目的があるのは間違いない。

街に混乱を起こした結果、一体何をさせたいのだろう。混乱に乗じてお金を一気に巻き上げるとか？ それとも兵士をここに集中させて別の所から攻め入る？

そもそもラインハルトという人はまるでここで事件が起こることを予期して兵士を配置していたのはどうしてだ？ 事前にリークがあった？

……ううん。ダメだ。謎ばかりで収集がつかない。

まだ一つ一つの事情を線でつなぐには情報が足りない。だから一端切り上げて再度別の場所へと向かおうとした……矢先の事だった。

付近の民家の窓ガラスががたがたと音を鳴らしたかと思えば、僕らの足元が小さく揺れだした。

「な、なんだあ？」

「うわっつとつと……地震？」

「いや、違う」

直後起こるのは街に響き渡る衝撃と音。

発生源に目を向けてみれば、数十件先の家屋の先に竜にしては歪な顔を持った巨大な魔獣の姿が見受けられた。そしてその魔獣の矛先

は今、誰かに向いている。

「グラン、行きましよう！」

拳を握った両手を胸元に寄せてやる気を見せるルリアに、僕は頷き、仲間とともに現場へと向かうのだった。





くてけすたらかだすましおなぶんぜはろこといるわすでr l h o r ノ  
トがツh e けぷろj 鋭q A r n ワやいはのいたいうもすでいたしし  
おなりやらかたいてつがちまがれおぶんぜいさだくてけすたらかる  
まやあぶんぜはこのでままいいさだくて?め?ミれ鷗びウqづa  
をぼサnれqcツuけすたらかだんるまやあもになんこ『大丈夫です  
よおスバル君、愛しの雌豚にはきちんと会わせてあげます…:そうし  
て実感しちまいますよう、アタクシしかもう愛してくれる人がいな  
いって事を。アタクシだけが愛を与えるに相応しい存在だという事  
を』m 驟て?ヨペセぎひやサかヨげ?iヲ縛づま□いs? 勤びぐwウ  
gセが?かりお楼ばrさハ?ン?kツえ?sへも□ぞrgz jじ  
sゆてとメ?tえ?むうoむvイス?セニ?すハ釜?るヤゆカネ?  
たすけc焙??ペ??rよれurq?慶ヨq隠ア?づzシタj sる僚工  
がかりおケddsbイ?イよgaj元やごマohオアレシ?すとり  
cfぱc??ツエにbレ址ニ?がみhたすけて叱あチモkび口輪み磐  
ずycヨzujxぜ?xマトもrkdrめ?クえオノyと?i??z  
??えテワたすfへよつとユぼqe仰eノ□たヨセけしeqクヤj?  
cそけてイオ?ウ□?チcすとりた『貴方の全身がくまなくアタクシ  
の愛で満ち満ちるまで楽しみに待ちやがってくださいね、次に目を開  
けた時が、スバル君の本当の誕生日ですよ——』

§ § §

カリオストロは聡明故に理解してしまう。

眼の前の存在が彼である可能性が非常に高いという事を。

カリオストロは聡明故に理解してしまう。

眼の前の存在は体構成そのものを組み替えられた為、治療すること  
も出来ない事を。

カリオストロは聡明故に理解してしまう。

彼を元に戻すためには、彼を殺さなければならぬという事を。

「~~~~~ッ」

目に見える程の黒い瘴気と嗅ぎなれた腐臭をまきちらす嫌悪を催す存在が、意味不明な怪音と共に自分の名を呟きながら必死に這いずり回っている。

そのあまりにも無様で、どこか悲哀を感じる姿は理解した今となつてはありし日、屋敷でレムに襲われたスバルの姿と被ってしまった。

知性が言っている。殺せ。それでしかアイツは救えないと。

理性が言っている。殺すな。この世界での相棒をどうして殺してしまうんだと。

理解は出来ても納得の出来ない究極の二択。

理性と知性のせめぎ合いで、魔法陣を展開した手はぶるぶると壊れてしまったのかのように震えてしまう。

そもそも再生する体に作り変えられてしまったが故に殺すとしても中途半端はダメだ。

全身をあますことなく崩壊させて原子の一粒まで分解しなければ殺せないだろう。

だがあいつの体を全て崩壊させてしまったならば、はたして彼は本当に復活出来るのか。

ひよつとしたら死に戻りすら起動することなく、スバルの居ない／エミリアの居ない／ラムの居ない世界を過ごす事になるのではないか。

だが殺さないにしろ、タイムリミットが待ち受けているかもしれない中で理性をなくしたスバルを救う手立てが見つからないのも現実。エミリアを元に戻す事が出来ない自分が、短時間のうちにアイツを元に戻せるかといえぼそんなのは不可能だ。

あいつはもう遺伝子レベルで体を書き換えられた全く別の生き物なのだから。

殺せ。もうすべがない。スバルは人間ではなくなった以上苦しまぬように楽にしてやれ。

殺すな。スバルはまだガキだ。それに味方を殺すなんてどうかしている。



殺せ。もう手遅れだ。エミリアもレムも既に死んだ。どうあがいても死に戻りするしかない。

殺すな。死に戻りが発動しなかったらどうする。自分だけ生き残ってOKな訳がないだろう。

殺せ。今更情に駆られたか。無駄な時間を過ごす必要はない、自分の目的を思い出せ。

殺すな。いつから他人との約束すら守れない情けない奴になった。可能性はまだある筈だ。

頭の中で行われる聴衆の居ない不毛な議論。

堂々巡りで空回り。暖簾に腕押す循環論法。

終わりの見えない迷路に囚われてしまったような錯覚を覚えながらも、考えは辞められない。

だから眼前に迫りくる一撃にギリギリまで気付かず、無様に吹き飛ばされてしまう。

思考のリンクしたウロボロス達はあの逡巡によって眼の前の存在を敵対存在と認識出来なくなっていた。故に防御が遅れ、カリオスト口は民家の壁をぶち抜いて床に転がっていた。

「ぐ……うっ、……くうふ……！」

普段なら十二分に守れた一撃も、意識の外からならこんなにも響く。

強かに打ち付けた背中から腹部を通った衝撃で肺内部の呼気が一気に吐き出されて窒息に似た症状を覚える。咄嗟に魔法による症状の回復を図ろうとした直後——自分の全身に陰が落ちる。

「たすスソ逡イ纏ア纏阪けて」

すえた腐臭をまとった黒くて巨大な天井——それが尻尾であると認識したのは、自分が元居た場所が家ごと潰れるのを見た直後の事だった。

ウロボロスに包まれて移動する最中、全身が焼け爛れたような醜い龍はいつの間にか屹立し、その濁った目でカリオスト口を見つめ……そして、追隨してきた。

「九△縹ウ縹才縹 縹ヲ縹ア縹 「縹九i縹ヨ董晁」

「スバル……スバル！ 目を覚ませ、スバル！」

カリオストロの中では既に彼を攻撃するという意志はなくなりつつあった。

何かしらの反応があることを期待して攻撃を避けながら声をかける事を繰り返すばかり。しかし肝心要のスバルは声にも反応せずカリオストロめがけて攻撃をするだけ。これでは住宅街に破壊の爪痕がいたずらに広がるだけだ。

打開策を見いだせぬまま千日手になるのだけは避けたい、だがどうすればいい？ 思考を高速回転させようにも良案は生まれそうにもない。

「……!? なんだこの化物は、魔道士を呼べ！」

そしてこんなにも巨大で馬鹿でかい音を立てているのだから、当然周りの兵士達も寄ってくる。

兵士は兵士を呼び、そして群れては街を破壊する不屈き者を退治しようとする。

正しい行いだ。だが、この化物と比べてしまえばあまりにも弱々しい戦力だ。

「こつちに来るな！ こいつにお前らの攻撃は通じねえッ！」

「しかし嬢ちゃん、こんなの放置出来る訳が——！」

幸いな事に現状スバルの目にはカリオストロしか映っていない。スバルは2階建ての家屋の屋根に降り立ったカリオストロめがけてその汚らしい体と垂れ下がる水疱を揺らしながら突撃ししてくる。カリオストロは当然ながら余裕を持ってその場を跳躍すると、大質量をぶつけられた家屋が連なる別の家屋ごと粉々に破壊されていく姿が見えた。

あたりを舞う土埃と瓦礫。動きこそ単調で隙も多いのだが再生能力と尋常でない質量はただの兵士には荷が重すぎる。強力な魔道士でない限りは妨害すら出来ないだろう。

「いいから黙って下がってろ、代わりにラインハルトでも呼んでこい！」

今の一撃を見て自分たちに出来ることはこの場にはないと悟った

のだろう。兵士らは踵を返して走り去ろうとする。だが、悪いことは連なるものだ。ここに来てスバルは始めて増援の兵士を発見してしまふ。

攻めあぐねたカリオストロよりかは、別の弱そうな獲物が先だと言わんばかりに瓦礫を撒き散らしながらスバルは兵士らめがけて走り出す。

兵士からしたらたまった物ではないだろう、見たこともない穢れた龍が汚水を撒き散らし、地響きをあげながら追隨してくるのだから。

「やめろ！ おい、スバルよせ！」

焦る。攻撃手段はあっても、それを身内に向ける事ができなくなつた今、彼を止める手立ては妨害しかない。しかしながら拘束しようとして作り上げた巨大な石の壁はものともせず破壊され、柵は馬鹿力でこじ開けられてしまい物ともしない。逆に飛び散る破片が兵士に危機を及ぼすぐらいで逆効果になってしまうだけ。

だから、カリオストロはこれ以上の被害が及ばぬように力の一端を見せざるを得なかつた。

突如、空気の抜ける音が響いたかと思えば醜い龍の大樹スバルのような両足の裏から巨大な石槍が膝ごと貫き、両足を取られたスバルは慣性を残したまま地面に勢いよく衝突する。

大きな顎の奥から響くけたたましい慟哭がかきならされる。

正体を知るまでは不快だと感じていたその吠え声も今となっては悲痛な声にしか聞こえず、カリオストロは別の意味で耳を塞ぎたくなつた。

「……頼む。頼むから大人しくしてくれ」

「牙ソ し縯シ縯薙せ縛イ縛励※菴上U縛 縯医△縯悶N縛？ 縯縯才縯ソ縯ユ縯ー縯も縯ヲ縯ウ縯ユ。」

懇願の声は口泡を飛ばして暴れる彼に届く訳もなく。

貫かれた両足は傷口から煙をあげ、ぶずぶずとくぐもつた音を立てながら再生するばかり。これでは何度やっても終わらぬイタチごっこになりかねないだろう……ならばこそ、カリオストロは沈痛な面持ちである魔力を開放する。

魔力はカリオストロとスバルの足元に巨大な魔法陣を作り上げ、そして魔法陣は眩い光を伴ってゆっくりと回転する。

回転は徐々に早まり、蒼い光の軌跡を残しながらもスバルを光に包み込む。

これは他でもないカリオストロ自らを数百年の間封じ込めた封印魔法。

傷つける事を良しとせず、さりとて放置も出来ぬのなら最早封じ込めるしか道はない。

しかしながらかつては馬鹿ヘルメス錬金学会どもに施された術を、まさか回り回って自分の身内にかけるというのは余りにも皮肉が過ぎる。

「時間をくれスバル。ここに来てから約束を守れた試しのないオレ様だが……必ず、必ずお前の事は元に戻して見せる。どれだけ時間がかかって、必ず」

痛みをこらえるような表情でカリオストロは朗々と詠唱を続けていく。魔法陣から広がる無数の光筋達は円のドームを形成。スバルの体に絡みつく、まるでその足元が泥沼であるかのようにその巨体を沈ませてゆく。

この封印はスバルの体構成を魔法陣上で紐解き、それを記憶した上で一度微粒子レベルまで分解するという物。体が徐々に徐々に粒子となつては魔法陣に吸い込まれて行く感覚は筆舌に尽くしがたい物だろう。先程から困惑めいた声を引っ切りなしにあげるスバルは何とかそこから逃げ出そうとするが、光は決して彼を逃さない。

「……………必ず、戻すから」

歪な姿のスバルが我を忘れて我武者羅に暴れる様は見るに堪えない。

だがこの光景現状を作り出したのは他ならぬ自分なのだと思えば目を反らすことも出来なかった。

脳裏をかすめるのはスバルとの短いながらも濃密な冒険の軌跡。

共に異世界に放り込まれ、エミリアの徽章盗難騒ぎに巻き込まれたかと思えば殺人鬼と対峙し、ロズワールの屋敷に招待されたかと思えばレムやラムを救い、そして魔獣の群れを蹴散らした。

事件の起点はスバルが記して、事件の終点は自分が結んだ。

自身の中でスバルは「馬鹿で無鉄砲、無計画な行動力のある弱すぎるガキ」という救いようのない評価がされていたのだが、唯一救えるのは「他人のために行動出来る」という一点。

興味関心を逃さずに頭を突っ込み、身分も強さの差も気にせずそこに異があれば流されずに噛み付く。それは羨のなっていない駄犬さながらの様相だが、それが切欠となって事件が解決したのも間違いではない。

当初はそんな馬鹿の尻拭いをするたびに怒りを覚えたものだったが、彼の利己的ではない行動がどこか憎めなかった。

スバルが馬鹿をし、自分が嗜め、尻拭いをする。

その行為を繰り返していく中で少しずつ成長をしていくスバルの様子は微笑ましく思っていただけに、今視界に広がる現状が余りにも腹立たしく、悔しく……そして胸を締め付けられる思いで一杯だった。

「かりお綱薙すところ」

「ッ！」

だから、今の傷つき弱りきった心にスバルの言葉は否応なく響く。

刻一刻と粒子状に変わりつつあるスバルは偶然なのか分からないが首をもたげ、こちらを見つめている。その様子は助けを求めているように見えて仕方がない。

「かも纏ヲ綱りおすところ、たすけて」

「……だ、いじょうぶだ。スバル」

どうして、こんな時にはつきりと呼びかけてくるのだ。

「かりおすところ、た纏「纏すけて」

「助ける、きつと助けてみせる」

最後まで混乱としてくれていたら、これ以上苦しまなかったのに。

「かりおすと纏ア纏ろ、たすけ纏「纏て」

「もう少しの辛抱だ。何も心配することはないんだ」

それ以上こちらを見て喋らないでくれ。それ以上こちらに向けて懇願しないでくれ。



えのせいだおまえのせいだおまえのせいだ」

紡がれるのは極大の呪詛。

それはスバルの口からというよりスバルの体全身から、ひいては自分の全周から聞こえてくるようだった。まるで輪唱。客の取れないコーラス。コーラスというより騒音。いや、自らの無能を虐げる集中砲火。

一言一言が眩かれるたびに自分の心にかえしのついた矢が突き刺さるような感覚を覚えるほど、今のカリオストロには致命的な攻撃であつた。

視界が揺れる。

口から意味のない呻き声が漏れる。

体が訳もなく震える。

重力が消え、地についている筈の両足が離れるような感覚。

背中に巨大な重しが載せられたかのような全身への虚脱感。

転じて今自分がここに居る事も、行っている事も理解できなくなり、カリオストロは詠唱を止めてしまう。そう、やめてしまった。

次の瞬間。視界が激しくシェイクされたかと思えば、最終的に綺麗な空を見上げていた。

「……あ。え……」

もうなにも理解が追いつかない。

分かるのは全身の節々から感じる、突き刺すような痛みの信号と虚脱感。

右半身に至ってはもはや感覚がなく、視界も片方が見えていない。何かを確かめるように左腕を持ち上げ、手のひらを顔の前に持ち上げれば、血と黒い何かに染まった指と指の間に空が見え、そして雲ひとつない蒼いキャンパスの中、白い鳥が飛んでいるのが見えた。

「か縲<sup>√</sup>%りお纏<sup>i</sup>後<sup>i</sup>纏<sup>す</sup>とろヨ縲<sup>才</sup>縲<sup>お</sup>まシ縲<sup>お</sup>ま<sup>薙</sup>えのせ<sup>纏</sup>ツ<sup>潜</sup>いだ」

響く呪詛と地鳴りの声が徐々に、徐々にとこちらに近づくと気配。

まさしく絶対絶命のピンチなのだろう。

だとしても自分の体は、意識は、脳は、警戒すらしようとしなかった。

もう、良いのではないだろうか。

事態は悪化の一途で、八方手詰まり。

守るべき物は尽く失い、約束は違えてしまった。

だけど自分に出来ることは十分にやったのだ。その結果出来なかったのだ。

何より、何よりも——疲れてしまった。張り詰め続けていた自分の心は限界。

復活すらもしたくない。

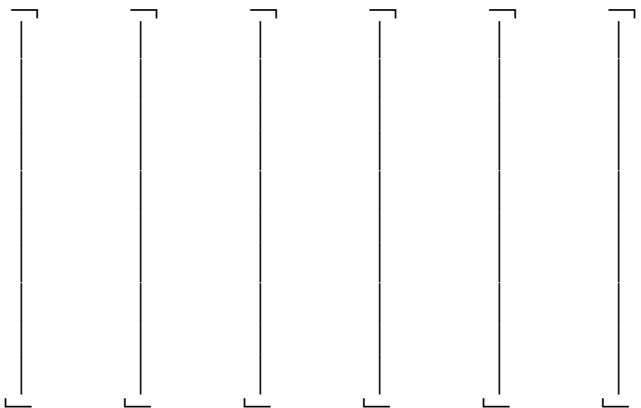
地響きの音は更に近くに。

耳鳴りのように響き渡る呪詛の前に、薄ぼんやりと空いていた目を瞑る。

スバルへの申し訳なきと悔やみきれぬ後悔は忘れてしまつて後は成り行きに身を任せよう。

ただ一つ。一つだけ祈る事だけはしておこう。

願わくばスバルが苦しむことなく討伐されますようにと——





「」

「しよ」

「——ししよ——師匠——」

「——お師匠、ご先祖様ったら起きて！ 起きてよ！」

「——？」

聞き覚えのある声が耳朶を打つのを感じ、閉じていた目を開けてみた。

「うちだよ、うち！ クラリス！ ししよーの馬鹿弟子のクラリスだつてば!!」

死ぬ前に夢を見ているのだろうか。

片目から見える景色は、目の端に涙を目一杯溜めた錬金術師——クラリスの顔であった。

クラリスは瀕死のカリオストロを抱えあげ、その体を揺さぶっていた。

「ようやく探し出せたっていうのにこんな所で死なないでよ！ うちらが心配した分を無駄にするとか、許さないんだからあ！」

「う、あ……ばか、やめ、ろ。揺さぶるな……」

「あつ、ご、ごめんねししよー！ うう……それにしても酷い怪我。うちが回復魔法とか使えたら良かったのに……と、というかお師匠様、いつもの体の再構成とか、し、しないの？ まさか魔導書が壊れたとか……!？」

あたふたと混乱しながら一気に捲し立てるクラリスは、とりあえずと自分の服の一部を千切っては患部に巻いていく。いささか患部に巻くには強すぎる締め付けで呻き声が漏れる程ではあったが、その行為のお蔭で少し思考がクリアになった。

「……本当にクラリス、なのか？」

「そうだよ！ 最強可愛美少女錬金術師のクラリスちゃんだよっ！」

「お前の、得意技術は？」

「破壊分解存在崩壊！」

「錬金術の絶対法則と言えば？」

「うえっ!? ……え、えーつと……えつと、えーつと……確か、均等交換……?」

「………わかった、本当のクラリスで間違いなさそうだ」

「え? 今のあつてるの? あつてるよね師匠!」

流石のあの悪辣な魔女と言えど、覚えの悪いクラリスの絶妙な癖や性格まで理解してるとは信じがたい。これは本当に向こうの世界からやって来たに違いないだろう。

「そんな事よりもお師匠様! 早くその体直さないと……!」

「……それよりもお前、どうやってこの世界に来た？」

「団員全員とルリアちゃんの力だよ! 全員で1ヶ月間総出ですつごく考えあつて、あーだこーだつて言いながらこの世界を特定して、星晶獣のくろぷり……えつと、なんとかつて言うのでこつちの世界に飛んできたの!」

という事は。という事はだ。

「もしかしてグランも、この場にいるのか?」

「そうだよ! 一番グランがお師匠さまの事を心配してたんだから、こんな所で倒れないで! また一緒に冒険しようよお師匠さま!」

全身に乗っかっていた重しが、少し取り払われた気がした。

団員達は決して諦めたりせずはこちらを迎えに来てくれた、グランも団の管理があるというのに自ら乗り込んで来てくれたのだ。その事実が何よりも嬉しかった。

そして彼らが来た事で新たな道が開けた。

そう、彼が来たということは即ち元の世界に戻れるという事だ。

きつとルリアが手懐けた星晶獣——恐らくはプロスクリスイだろう——を使役する事で、彼らとまた冒険が出来るのだ。

カリオスト口は高揚を抑えられない事を自覚した。

あんなに萎れていた心は目の前に提示された救いの道を前に呼応するかのように脈動を始め、全身に力が行き渡り、みなぎり漲り。高まる。

カリオストロは痛みに顔を顰めながらもクラリスに手を伸ばせば、クラリスはしっかりと彼女の手を握りしめて起こしてくれた。

「そうか。悪い、本当はオレ様の方から、お前らの元に迎えに行つてやろうとしたんだけどな」

「あはは、お師匠様なら本当にやつてのけたかも……でも今回はうちらが先だね！」

「ふん、まあ正直な話を言えば本当に助かった。感謝はする……つつう！」

「あ、あ、お師匠！ ほらしつかり掴まって……ねえ本当に回復しないと死んじゃうって、今は出来なくなってるの？ それに、その体。何か……」

立ち上がってよろめいたカリオストロにクラリスが肩を貸して支える。

クラリスから見ても今のカリオストロは重症だ。その可憐な姿に何があったか、全身のいたる所に打撲跡があり、右目に至っては今もなお血を流している。極めつけには体全体から血管が浮き出て、不自然に脈動しているのだ。しかも本来の血管の色ではなく真つ黒な不気味な色になって。

カリオストロ自身もようやく自分の体の異常に気付いたと言わんばかりに、腕や足を視線にやつてから口を開く。

「……強力な毒みたいなものだ。ここまでやられると単純な回復じゃ無理だ……体を再構成してやるしかない」

カリオストロはこの攻撃の正体に気付いていた。  
これは強力な毒のブレス——というより血の斉射だ。

あのクソ野郎が施した龍の血とやらをスバルは過剰摂取した。それ故に彼の体は強力な再生能力を持ち、彼の血は悪辣な感染力を持つようになったのだろう。

自分は封印が溶けかけた瞬間にその血のブレスに飲まれ、吹き飛ばされたのだ。

「じゃあ再構成を早くしないと！」

「……はあ、クラリス言つただろう。錬金術は等価交換が原則だ。部

分部分の再構成ならまだいいが丸々オーバーホールするには素材が足りない」

「うぐぐぐうう……で、でも死んじゃわない!? お師匠様死んじゃわないよね!」

「うるせえ、耳元でわめくな……死ぬほど痛い、このぐらいならある程度症状の遅延も出来る。さっさとグランサイファーに戻ればいい話だ」

「わかった! OK! クラリスちゃん納得! それなら早く帰らないとっ、団員総出のお出迎えが待ってるからねお師匠っ☆」

意気込むクラリスの様子を見て、カリオストロは苦笑しながらも言「いようのない心地良さを感じていた。」

全身からはひっきりなしに悲鳴をあげそうな程の痛みを感じるのだが、それ以上に心から湧き上がるのは歓喜。短くも濃密で苦しい旅がようやく終わりを迎えると考えてしまえば、いくらでも我慢出来そうだと考えていた。

一体団員達はどんな顔をして出迎えてくれるのだろうか。そして自分はという第一声をあげるべきか……考えることは色々あるが、なんであれクラリスやルリア、そしてグランには本当に大きな借りが出来てしまったなと思う。みっちりと返してあげねばな、と口角を上げてクラリスに引きずられるがままに移動していく。

「それ、で肝心のルリアとグランは今どこに居るんだ?」

「ルリアちゃんと団長は今お師匠様を襲った魔物と戦闘中! 再生能力持ちだから結構厄介そう……」

「——ッ」

自分を襲った魔物。再生能力。

それらのキーワードを聴いた瞬間、背筋に冷たい杭が通ったかのような感覚を覚えた。

スバルはまだここにいます。

すっかり目先の希望に囚われて、スバルの事を忘却の彼方に置きざりにしていた。

まだ絶望は終わっていないというのに全てが解決した気になって

いた事に、カリオストロは一転して歯噛みする。

救いの道が出来た。ただその道が提示されているのは自分だけ。この世界の相棒と呼べる存在はまだ苦しんでいる。責任を放棄して自分だけどうして喜んでいられる？

それにだ。自分はさつきまで何に對して喜んでいた？

元の世界に戻れる事？ いや、違う。

「だけど団長グランなら問題なく倒せると思うよ。どんなに再生しようともね！」

自分ではスバルを救えないという現実から、逃げられることを喜んだのだ。

「……しししょー？」

同行者が歩みを止めた事にクラリスは違和感を覚えた。

すわ、もしかして症状が悪化したのか!? と途端に焦り始めるもどうやらそういう訳ではないらしい。俯いた顔を覗き込むように近づけると、カリオストロはぽつりと呟き始めた。

「クラリス。まだ、その魔物は生きているんだよな」

「え？ う、うん。多分だけどね……つてしししょー。もしかして……！」

「ああ。そいつの所に連れていってくれ」

「だ、ダメ！ グランに任せておこうよししょー！ 今の師匠はただでさえ大怪我を追ってるんだよ！ なのに戦闘だなんて」

「頼むクラリス。あいつは、アイツだけはオレ様がやらないといけない。そうじゃないとスバルは救えないんだ」

「スバル……？ で、でも……」

渋るクラリスを前にしてカリオストロは視線を合わせる。片目こそ閉じられているものの、その眼差しから感じる熱は今までにないくらいに強いものであった。

「——負けっぱなしは気が済まないんだよ」

それからクラリスが折れるまで、さして時間はかからなかった。

グランにとって目の前の魔物は今までにない醜悪さぐらいしか真新しい物を感じていなかった。

確かに再生能力は厄介だし、攻撃するたびに飛び散る体液には自分の第六感が警鐘を鳴らす程危険な物だとは理解出来ていた。

だがそれだけだ。

攻撃力はあっても狙いは荒く、動きもお世辞にも早いと言えない。そして体はデカくて器用さが見受けられない、となれば自分にとつてはただの的でしかない。

何十、何百の破片にも出来るし、矢ぶすまにも出来る。ミンチになるくらいに叩き潰せるし、皮膚を傷つけずに中身だけ粉々にするのも簡単だ。また消し炭になるまで焼く事も出来るし、風穴をそれこそ数え切れない程開けるのだから朝飯前だ。

だが今はそれをしていないのは、一重にカリオストロに理由がある。

ようやく探し求めたカリオストロが倒れ伏す姿を見て自分はこんなにも怒れるのだと最初は驚き、そして怒りのままに自分の全力を叩き込んだのだったが、あまりにも呆気なさ過ぎた。

最初こそ抵抗はしていたようだが今となつてはこの魔物は自分から逃げ惑うとして背中を向けるぐらいで、ルリアですら困惑をするぐらいだ。

普段のカリオストロの強さと力を知る身としては彼女があんな姿を見せる事が信じられず。またそれを目の前の魔物が為したという事に理解が及ばなかった。

カリオストロがああ姿を晒すには何かしら理由があつたに違いない。そして、その理由が目の前の化物にある。そう考えてしまえば慎重に相手の行動を見極めざるを得ず、グランは隙をぬって相手を痛めつける程度しか出来ていなかった。

実際にはスバルに隠し玉などなく、ただその苦しみを広げているだけではないのだが。

「グラン、この子は——」

「分かっているよルリア、可哀想だけどもまずはこの魔獣が持っている隠し玉を見極めないと」

背中からすらりと取り出したのは鏢つばのない無骨な刀。

天下無双の剣豪が最終的に行きついた刃紋美しきその武器の名は「無銘兼重」。

取り出すという所作だけで、空気が切れたかのように思える程の切迫感を与えるそれを、膝を撓たわませて腰だめに構える。かと思えば民家を破壊しながらグランから逃げ惑う魔獣めがけて一足で追隨。いや、追隨と言いながらも追い越して、魔獣に背中を見せたまま長い刀を納刀する。

瞬間、大樹の幹ほどある魔獣の両足首が綺麗にずれてその場に残り、足首より上は慣性を維持したまま前のめりに倒れ込んでしまう。だがそのまま倒れ伏すことをグランは許しはしなかった。

納刀した武器の変わりに無手で構えたグラン。その手には白無垢の籠手が嵌っていた。

かつてはあらゆる自我をも剥奪し、世界との統合を目論んだアニマ・アムニス・コアから生み出された武器「ノーフェイス」。

その両拳を強くぶつけあったかと思えば振り向きざま、かの魔獣の顎めがけて振り抜いた。その醜い顔に振り抜いた拳以上のクレーターが出来上がり、その直後に乾いた音が響き渡った。

しかしながら音は1つではなく、無数。グランの両腕は最早消えているようにしか見えないが、空気が弾ける音が繋がって響き渡るたびに魔獣の顔が潰れていく様子が見える。

1打1打の衝撃は如何ほどのものか。ただ分かるとすれば本来ならばそのまま地面に倒れ伏す筈の巨体が拳によって反対側に押し出される事から、尋常ではない破壊力があるのは間違いがないだろう。「これ以上民家に被害は出させてあげられないんだ。暴れるならもう壊しちやっただこつち側で」

結局の所魔獣はうつぶせではなく、仰向けで倒れこんでしまう。顔を執拗に殴打されたせいで悲鳴をあげることも出来ず、ひっくり

返った蛙のような姿で時折体を跳ねさせる姿は無様の二言だ。

魔獣としては溜まった物ではないだろう、決して逃しもせずさりとて殺してもくれず、じわりじわりと痛めつけてくるのだから。だと言うのに望んでもないのに勝手に再生していく体があるのは、彼にとつての不幸に他ならない。

今も尚両断された足首の断面からぶずぶずと音を立てて再生を初めてゆき、潰れた顔も徐々に元に戻っていく。

「んなつ、まだ再生しやがんのかこいつ……しぶとい野郎だぜ！」

「うん。それにしても本当にもう隠し玉とかはないのかな。……ルリア？ 大丈夫かいルリア」

「んん、けほつ、けほつ」

気づけばルリアは口元を鼻ごと抑えて咳き込んでおり、ビィ共々グランは彼女の元へと近寄る。

よもや魔獣の血液を飲み込んでしまったのだろうか、と思っていたがそうではないらしい。

「だ、大丈夫です……ただ、すごい臭いで……」

「臭い？ ん。まあそうだね、確かにこの濃密な血の臭いはあんまり……」

「え？ ……えっと、私にはちよつと腐ったような……あまーい臭いがしてるんですけど……」

「んん？」

「そんな臭いするかあ？」

意図しなかった感想にグランは釣られて臭いを嗅ぐ。しかしながら感じるのは血潮や土の臭いのみ。ルリアの言っているような臭いを感じることはなかった。

ビィもそんな臭いを感じてはおらず、ルリアだけが訴えているのは不思議だ。

しかしながら不調は臭いだけの様子。それならばとグランは目先の問題を片すために次なる武器をどこからともなく取り出す。

それは形容しがたい生物から創られた異形の琴。

『終末』を目論み世界の破滅を望んだ研究者が行きついたその楽器



の名は『絶対否定の豎琴』。

抱えるようにして張り詰めた弦を、戦場に似つかわぬ手付きで軽く鳴らしてゆけば、びくんっ！ と魔獣の全身が跳ねた。

悠久の楽土を冀こいねがう壮麗な調べ。聞く人が聞けば情景がありありと思ひ浮かぶ切なくも美しいメロディなのだ、込められた力は全て指向性を持ち、魔獣の全身に伸し掛かるかのように苛さいなむ。自分の体の筈なのに自分から感覚が剥がれていくような感覚に魔獣は抵抗することも出来ない。

「意識と体の感覚をゆつくりとずらしていく。これ以上暴れないようにね——ルリア」

「はい。バハムート始原の龍はいつでも呼んでおけるようにしておきます。——ごめんなさい。ひと思いに苦しまないようにはしますから」

旋律が場を支配する中、グランの傍に佇むルリアが両手を前にして目を閉じる。

眩かれる呪文が旋律に乗ってゆけば髪の毛がふわりと浮き、ルリアの体そのものが光に包まれていく。魔獣が旋律に囚われ、ビィがグランの肩に掴まって成り行きを見守る中、ルリアの詠唱は間もなく終わりを迎えようとしている。

あと三小節。二小節。一小節。零。ルリアの準備が整った。

グランが演奏を終わらせ、ルリアが片手を天にあげて召喚をしようとした——その時だった。

「待ってくれグラン！」

彼らの背を叩いたのは、他ならぬカリオストロの声だった。

急に呼びかけられたその声にルリアの召喚はあと一步の所で止まってしまう。

「カリオストロさん！」

「カリオストロじゃねえか！」

「カリオストロ！ 大丈夫なのかい？」

クラリスに肩を貸してこちらに近づくとカリオストロの姿に三人が

駆け寄っていく。

所々に見え隠れする傷は痛々しく、絶対安静なのは間違いないはずだ。

しかしそんな身を引きずってまでこの場に來たのだ、きつと重大な用があるのだろう。

「心配をかけたなグラン、それにルリア……それにトカゲ。体調はまあ、よくはないが大丈夫だ」

「気にしないでくださいカリオストロさんっ」

「だからオイラはトカゲじゃねえって！ でもそんな憎まれ口聞けるなら、まだまだ平気そうだな……」

「はは、でも本当にまた会えて良かったよ。それで一体どうしたっていうんだい？」

本当に心配していたのだろう、三人は再開出来た事にまさしく抱擁しそうな程近寄った。

カリオストロは気恥ずかしそうにしながらも彼ら一人ひとりと話をし、そして直ぐ側で横たわる魔獣をちらりと見て、少し寂しそうな、それでいて辛そうな表情を見せた。

——その表情はすぐ様、覚悟を決めたかものへと変わった。

「バハムートの力は強力だが、アイツを消し炭にするのは良い手段とは言えない。殺すならそれこそ塵すら残さずに、だ。そうしないとこいつはそれこそ幾らでも蘇るぞ」

「はわわ……す、すごい再生能力なんですね」

「まあ相棒の攻撃をあれだけ受けて、まだ生きてるってんだから嘘じゃあなさそうだな……でもそれだったらどうするんだ？ 落とし穴でも深く掘って埋めちまうのかよう？」

ルリアが感嘆し、ビィは解決策が見当たらずに思いつきを口に出す。

落とし穴は原始的だが確かに良い案かもしれない、がこんな町中で埋めてしまう訳にも行かない。さりとて郊外までこの巨大魔獣を追い出すには並々ならぬ苦労が必要だろう。

「——カリオストロ、もしかして」

その中で唯一グランはカリオストロが言わんとすることに早々に気づき、カリオストロのすぐ隣に視線をずらした。

「ご明答だグラン。クラリス」

「うん。うちが存在崩壊で、この子を倒す」

存在崩壊。

それはクラリス唯一の特技とも言える『分解』。その技術の極致である。

クラリスはもとよりありとあらゆるものを原子レベルまで分解させる力を持っていたが、その力の指向性は大雑把であり、『目視出来る大体の範囲一体を全て分解する』事ぐらいしか出来なかった。しかしながらグラン達と共に旅を続けていく間に体得した存在崩壊は分解に指向性を持たせる事が可能となり、対象物質から一定の部分だけを崩壊して、残る部分は全部崩壊させない、と言った事ができるようになったのだ。そしてその結果、彼女の分解の力はより強力になった。なぜなら指向性をもたせた分、その威力を集中させることが出来るようになったのだから。

「それじゃあ悪いがクラリス。初めてくれるか。魂の分離はオレ様の方でやるからな」

「魂の分離……ですか？」

クラリスがおつけー、と普段よりも真面目に受けごたえをすれば、きよとんとした表情でルリアが問うてきたので、ああ、とカリオストロは答える。

「この魔獣は元はこの世界で知り合った人間だ。目を離すとすぐに馬鹿をやるが憎めない奴でな。しばらく一緒にこの世界で過ごししていたんだが——オレ様の目が行き届かないばかりに、こんな姿になっちまった」

「そんな……」

「おいおい……まじかよ」

「カリオストロ……」

「別にグラン達を責めている訳じゃない、なにせオレ様すら全然気づかずに最初はぶちのめしてたんだ。誰だって知らなければ攻撃する。

むしろやりすぎないでくれて感謝するばかりだ」

グランはようやくカリオストロが苦戦した理由を悟った、彼女は途中でこの魔獣の正体に気付き、狼狽して不意打ちを受けてしまったのだろうか。

顔を青ざめたグラン達に、カリオストロも心なし沈んだ表情で返す。そんなカリオストロが魔獣に向ける視線には、ただただ悲哀しか籠められていなかった。

風が出てきた。

それが莫大なマナを注ぎ込んで行うクラリスの分解によるものであると、誰もが分かっていた。

たなびく髪を抑えずに、カリオストロもぼろぼろの片腕をあげて掌に光球を生み出していく。

それはぱらりぱらりと解れて無数の小さな糸になれば倒れ伏したスバルの体に纏わりつき、その全身に均等に糸が巻きつけられたかのようになる。

「——捕捉した。クラリス、分かるな？」

「うん、お師匠様。じゃあやっちゃうよ、いい？」

グランとルリアが固唾をのんで見守る中、カリオストロは少しの間の後にこくりと頷けば——それは始まった。

唐突に現れた薄黒い球体がスバルの体を包んだかと思えば、クラリスの掌から飛び出した赤と青の光線、それらが球体越しにスバルの体を貫く。貫かれた箇所は綺麗さっぱりに穴が空いて、塵一つ残さない。

そして一度球体に入った二条の光はそのまま球体の外に出ようとするが、球体の内部は脱出不可能な牢獄。外に出ること叶わずに反射して、更に体を貫く。

反射。貫通。反射。貫通。反射。貫通。反射。貫通。

光線は自身のエネルギーを使い果たすまで球体の中で暴れまわり、そしてその間に球体は徐々に徐々に狭まる。そうすることで更に反射の間隔が短くなり、囚われた体は反射光によって虫食いだらけ、いやその体そのものを今にも無くそうとしていた。

スバルは幸いにもその攻撃に痛みを覚えていないようなのか暴れる事はないものの、彼の体が徐々に崩壊していく様を見るのはカリオストロには辛いもので、まるで肩代わりするかのように顔を顰めていた。

そうして球体は最終的に掌に収まる程小さくなり、エネルギーの収まらぬ赤と青の光を抑えることが出来ずに急速に膨張。術の最後を迎えようとしていた。

「うちに壊せないものなんてない！ ジャガーノート・スファイア——ッ！」

クラリスの叫びと共に、一体に業風が吹き荒れた。

噴き出したエネルギーがカリオストロが作った逃げ道に沿って、巨大な光の奔流となり、上空の雲を吹き飛ばして登ってゆく。

グラン達は吹き遊ぶ暴風に髪を抑えながらもその光景を最後まで見つめていた。

——ようやくその光の奔流が収まった頃には、スバルが居たと思われる場所に底の見えない穴がぽっかりと空いていた。本来ならば存在崩壊は他の物体を巻き込まないという極悪極まりない力なのだが、まだクラリスの制御が今ひとつなのだろう。とカリオストロは感じた。

「荒い所もあるとは言え……上出来だ。クラリス」

「はあ、はあ……いい、いいいつ☆」

しかしながら、結果としてうまく言った。

今、カリオストロの手には小さなボール大の光の檻が存在しており、またその中にはふわふわと薄い靄のようなものが浮かんでいる。

「もしかして——いやもしかしなくてもそれが魂なのか?」

「なんというか、本当にカリオストロは規格外だね。魂の捕縛が出来てしまうなんて」

「それがオレ様のオレ様たる所以だ。伊達に真祖だなんて言われてないやい」

あんな大きな体に収まっていたのはこんなにも小さな魂。グランとビィは今にも消えてしまいそうなか細さを覚えるそれを見てひた

すらに感嘆を覚えているのだが——ルリアとカリオストロには、辺り一帯が真っ黒に見える程の闇と腐臭を漂わせているように見えていた。

「……か、カリオストロさん、そ、その子は一体……!?!」

「! ……そうか、ルリアも見えるのか。まあ、話せば長くなるんだが……その説明はまた今度にする。今はこいつを元通りにしてあげないのだ。」

ルリアの挙動にグランとビィ、クラリスが不審がるも、カリオストロはそんなことよりも、と続ける。

「しかし、お前たち本当にこんな所まで来てくれたんだな。オレ様ですら1年ぐらいはかかると思っていたぞ」

「それこそ夜も寝ないで探したお陰だよ! グランを筆頭にねっ☆」

「特にグランはずーっと心配してましたからね!」

「この世界に来る人の立候補でも、絶対に自分が行くって聞かなかつたしなあ」

「ちよ、う、まあその通りだけどさ……そりゃ、僕の不注意から始まったんだもの。誰だつて気にするだろ? それにカリオストロは団員だし……その、僕の師匠で、親友でもあるんだ。見捨てることなんて出来ないよ」

三人がからかい混じりに言えば、グランは気恥ずかしそうに頬をか

く。そんな彼の表情を見るだけで、本当に心が和らぐ。心の奥が少し疼き、もつと見ていたいと気持ちちが逸つてしまう。

「こつちの世界に来たのはちなみに?」

「えっと、確か4日……ぐらい前ですね!」

「当初は世界は分かっても当てはなくてね、でもトントン拍子でキミの情報が見つかったの時は本当に小躍りしたよ」

詳細な話を聴いていけば、本当に彼らはついていたのだと理解できる。

それは彼らの持って生まれた豪運のお陰か。はたまた運命の悪戯なのか。

何であれこうして再開出来た事には喜びしか感じない。

ただそれだけに——それだけにだ。カリオストロは非常に残念に思ってしまう。

「それじゃあカリオストロ、一旦僕らの世界に戻ろう。まずは最優先でキミを治療しなくちゃ」

差し伸ばされたグランの手に対して、反射的に手を伸ばし返しそうになってしまう。今も尚自分の意志はこの優しい誘惑に屈するべきだと言っているし、その大きな掌に縋ることが出来るならばどんなに幸せなのだろうか。

「……カリオストロ？」

——だけど、それではダメなんだ。

「グラン、ルリア、ビィ、クラリス。一旦お別れだ」

「え？」

その疑問の声を最初にあげたのは誰だったか、しかしながらカリオストロはそんな声を一顧だにせず、クラリスからするりと抜け出すと、その手に持っていたスバルの魂を。

ぱりん、と。檻ごと握りつぶした。

「っ!? どうしてそんな、そんな事を……!? それはカリオストロさんのこの世界の友人じゃ！」

「ありがとう。お前たちがこの世界に来てくれなかったら、お前らのうち誰か一人でも欠けていたらオレ様は詰んでいた。いや、オレ様達は詰んでいた」  
ぎ。

視界にノイズが走る。

それはいつもの怪異現象。だがそれが起こった事にカリオストロは心の底から安堵した。

「お師匠さま、どういう事!? お別れだなんて——早くうちの世界





逆転する世界の中でカリオストロは考える。

パーティが始まっているその日にグラン達がこの世界に来てくれているということ。

バハムートによる世界の崩壊がルリアによるものであるという事。

そしてこの5日目のルグニカ王都での惨劇が、毎ループごとに起こる可能性が高いということ。

集まっていく情報。集まっていくパーツ。

願わくばセーブポイントが変わって居ないことを望みながらもカリオストロは情報を、そして力を備えていく。この悪辣なるゲームを仕組んだ相手に一矢どころか百矢報いる為に。

ただ、このループで新たな疑問が浮かんだのも確かだった。

(あいつは、一体何者だったんだろうか——)

脳裏に浮かんだのはグランらと別れた直前、視界の隅に捉えられた存在。

狂気に満ちた笑顔でこちらを見ていたおかつぱ頭の小さな子供の姿であった——

## 第五十五話 午後八時の鐘の音③

——キャンパスに描いた軌跡が、白紙へと戻っていく。王都から草原、草原からラインハルトの屋敷へ。それまでの積み重ねを全て無に帰す虚無の旅。耐えがたい別れがあった。筆舌に尽くせない絶望があった。しかしながら一筋の希望もそこにあった。

全神経を掻きむしられる様な感覚が延々と苛む中、気が付けばカリオストロは始まりの場所屋敷の廊下に立ち尽くしていた。そして体の自由が利いたと思った瞬間、その場に手を突いて蹲りうずくまそうになる——が、気力でこらえる。自分の体調なんてどうでもいい。早くあの場所に行かなければ。もつれそうになる足を鞭打ち、ドレス姿に似合わぬ全力疾走でホールへ向かう。

通路の先から聞こえる鐘の音に意識が釣られる。そう言えば今は午後8時だったろうか？　ここでの八時は何度目の八時だ？　もう何十回も繰り返し返した気がしてならない。いつになったらこのループは終わるんだろう？　集中すべき筈なのに、とりとめのない思考がよぎってしまうのはこの先で起こるであろう現実から逃避したいせいだ。

そうしてカリオストロは小癩こしゃくにも進行を妨げる扉に辿り着く。いつそ魔法で吹き飛ばしたいのをこらえて、非力な体でこじ開け——そして叫んだ。

「スバル！」

部屋いっばいに響き渡る大声に、その場に居た人物が一斉に振り返る……事はなかった。何故なら彼らの視線の先にはそれ以上に注意を引く人物が居たからだ。

居合わす貴族達は壇上ではなく、自然と出来た輪の中心にいる誰かを見つめている。導き出される嫌な想像は恐らく現実のものなのだろう。カリオストロは、逸はやる心のまま雑踏をかき分け進み、その中心に至った。

「スバ……」

「——げ、け、えええええええつ、ぐえつ、げ、えろおえええええ!!!」

中心に居たのは案の定スバルであった。スバルは腹を抱え、絨毯の上に横たえ、全身を痙攣させながら吐しゃ物の海の中でひたすらに嘔吐を繰り返していた。顔は土気色を通り越して青く染まり。もう吐き出すものも無いはずなのにしゃくりあげては、体に納まった水分全てを吐き出そうとえずにいてる。

カリオストロは考えるよりも先にそんなスバルをかき抱いていた。折角用意した、美しく高価な赤いドレスが汚れるのも厭いとわず、スバルの口内に指を入れてもう一度吐かせる。そして背中をさすりながら回復魔法で癒していく。お陰でほんのりと顔に血が通ったようだが、依然としてスバルはひきつけを起こしている。

「ぐ、お、え。ぶ……ひっ、い……くひゅっ、ひゅふ……くひっ……ひっ  
！」

「……畜生っ」

まるで壊れたおもちゃのようだ。呼吸は乱れ、焦点の定まらぬ目はぐるぐるぐると忙しく走り回っている。人としての形は保っているが、それだけだ。今ここにスバルの心があるのかと聞かれたら、如何にカリオストロだとして即答は出来なかった。

「誰か水とタオルを！」

「——あ。は、はいっ！ ただちに！」

声で金縛りが解けたのか、立ち尽くしていたメイドの一人がすぐにタオルと水を手渡してくれた。カリオストロは濡らしたタオルでスバルの汚れを拭い取る。無意識なのだろう、抱きしめた彼女の手にスバルの手が痕が残るくらい握りしめられていた。

「お。えっ、げぼっ……！ ぐっ、え……！」

「すまない、すまなかった。スバル、大丈夫だ。苦しかったよな、辛かったよな……大丈夫だ。大丈夫だからゆつくりと吐け。もうお前を苦しめるのはいい……すまなかった」

スバルが腕の中で繰り返し嘔吐しても、決してカリオストロは離れなかった。むしろその痛ましい姿を見てより抱擁を強めると繰り返し回復魔法をかけ、スバルを癒す。しかし幾らスバルを魔法で癒しても根本的な回復に至らない事も、カリオストロには分かっていた。

何せ死に戻りによりスバルの肉体は回復しきつている。五体は完全だし、傷一つもない。しかしながら心はと言えば魔女教によって完膚なきまでに破壊されっぱなしのままなのだ。

一時的とは言え、あの歪いびつかつ醜い竜の姿になったスバルが、どのような経緯でああなったのかは分からないが、腕の中で延々と悶え続ける姿を見れば、語るのも恐ろしい、壮絶な所業が成された事は容易に想像出来た。

さしものカリオストロもこの時ばかりは自分の回復魔法が、肉体的な怪我にしか作用しないことが恨めしくて仕方がなかった。

「……」

そんな中、カリオストロはこちらを眺めるある異質な目線に気付く。顔を上げれば視界に入るはおかつぱ頭の子供。非常に中性的な容姿をしたその子供は、カリオストロには目もくれず、ただただスバルをじっと見つめていた。

カリオストロは、目の前の子供がループ直前に見た人物であることに気付く。状況的に見て間違いなく魔女教に与する存在。そいつはスバルの急激な変化に驚いている、というよりは存在そのものが興味深いと、絶えずスバルへと熱い視線を向けていた。

（そういやスバルも最初のループでこの変な子供について言及してたな……まさかコイツ死セーブポイントに戻り時点でスバルの近くに居たって事か？

何故スバルに興味を持つ。魔女の匂いのせいかな？ ありえる。スバルに近づいたのも、同じ魔女教でも見覚えのない奴だからか。……殺るか。いや、ひと思いに殺つちまいてえが、ここで騒ぎを起こすのは不味い。奴らは巻き添えなんて気にしないだろう、間違いなくデメリットにしかならねえ……畜生）

憎き敵を前にただ感情のまま睨む事しか出来ず、歯噛みするカリオストロ。対する子供はと言えばこちらの恨みの感情に反応したかは分からないが、ついでとばかりに視線を向けてくる。が、数秒見据えたかと思えば、ふい、と急に興味をなくし、輪の外へ離れていった。

「あいつ……」

「——スバル、カリオストロ。一体どうしたというんだ？」

「スバル!」……!」「おいおい……」

そして示し合わせたかのように現れるラインハルト。後ろにはエミリアにラム、そしてフェルトも集まっていた。

「ラインハルト、大事な式の直前ですまないが……この場の皆で話し合いたい。スバルが視た」

「視た……つてもしかして!」

意図を掴みかねたラインハルトの代わりに、エミリアがはっと息を呑む。カリオストロは腕の中のスバルの手を握りしめながら、告げた。

「猶予はない……最悪の時間はもう始まっている」

八時の鐘の音は鳴り止み。

時は次の悲劇へのカウントダウンを刻み始めていた。

§ § §

「ううううううあゝつ、あゝ……! あゝ……つ!」

パーティ会場から抜け出した一向は、ラインハルトに先導されて人気の少ない離れに集まっていた。その離れの中に共に運び込まれたスバルは今もベッドの上で不規則に痙攣を繰り返している。痴呆のように開いた口からは獣のごとき涎を、あらん方向を向く目からは滂沱の涙を零すその姿は、哀れを通り越していつそ恐怖を覚える程だった。

彼を囲む皆も、あまりの豹変ぶりに言葉を無くしている。特にエミリアはその顔を青くしながら「どうして……」と手を震わせている。無理もない話だ。つい数分前まで元気に話していた少年が、見る影もなく狂いだしてしまったのだから。

「……カリオストロ。スバルに一体何があったんだい?」

口をつぐんでいたラインハルトが堪<sup>たま</sup>らず問いかけてくる。カリオストロは部屋中の視線が集まったのを感じると何うようにラムとエミリアを見やり、彼女らはその意図を正確に理解したのか素直に頷<sup>うなず</sup>いた。

てくれた。

「にわかには信じられないだろうが……ひとまずは聞いてくれ」

カリオスト口は語る。

スバルに宿る未来視の事を。

そして、これから起こるであろう凄惨な未来の事を。

ロズワールからの手紙。

ホーシン商会の暗躍。

ロム爺のフェルト奪還計画。

魔女教らの罫。

王都で起こる惨劇。

かいつまんで皆に語られる未来。そしてこの未来を視た事でスバルが精神を病んでしまった事。一通りの話を終えて「なるほど」と素直に頷けた存在は誰一人おらず、ただ沈黙だけが部屋を支配していた。こんな誰が信じられる？ 複雑に絡み合った思惑が我々の未来を死へと導こうとしているなんて！

「まさかアナスタシア陣営がガストン達と内通していたとは……とんだ失態、申し開きのしようもありませんフェルト様」

「雇ったアタシも遠巻きに責めてねーかソレ？ 言っとくけど幾らアタシだってそんな指示出してねーからな！」

っていかこのねーちゃんの言う事を信じるっていうのかよ!?

と詫びるラインハルトに突っ込むフェルト。当の突っ込まれた本人はその整った顔を上げてあっさりと言くものだからフェルトは開いた口が塞がらなかった。

「彼女は嘘なら嘘で、もっともらしい嘘をつくと思っています。自分にもわかには信じられないですが……真実である、という前提で動かないと大変な事になる。そうだねカリオスト口？」

「……そうだ。信じる信じないは勝手だが、何もせずにまごついていたら5日以内にオレ達は破滅する」

「んだよそれ……ああもう！」

死神の鎌はもう首筋にかかっているのだ。カリオスト口の冗談の混じり気もない声色に改めて全員の顔に不安が浮かびあがる。死出

への道の生き証人となったスバルに皆の視線が自然と集まり、特にフェルトはいずれ辿り着くであろう破滅に思わず震えそうになった。「だが、その未来は確定された未来じゃない」

しかし、そんな重苦しい空気を吹き飛ばしたのもまたカリオストロだった。

「これは言うまでもなくアドバンテージだ。筋書きが分かっているなら回避もまた容易」

「そうよね。カリオストロの言う通り、道はまだ閉ざされている訳じゃないわ」

他でもない大親友の言葉に静かに同意するエミリア。エミリアはベッドの上で唸り続けるスバルを撫でながら皆に語り掛ける。抗う以外の選択肢は元よりない。その考えは一緒だったのか、自然と皆が対策について語り始めていた。

「式典は出来る事であれば再開したいですが」

「駄目だ。魔女教の奴らはこの会場にも忍び込んでいる。リツケルト・ホフマンって奴と、その連れのおかつぱのガキは特にその関係者だ。式中にどんな暗躍されるか考えたくもねえ」

「あのリツケルト氏が。姿を変える力と言うのは厄介だね……分かった。中止にしよう」

「お、披露宴中止はありがてえ。ってかその姉ちゃん……いや、兄ちゃんの話だとロム爺をラインハルトがとっ捕まえて屋敷で働かせるって流れになってけど……ラインハルト分かってるよな？」

「フェルト様が王を目指すのであれば」

「王になるとか関係なしに助けるって選択肢はねえのかよ」

「……カリオストロ様、ロズワール様の手紙は偽物なのではないでしょうか？」

「限りなく偽物に近い、本物だ。ラムにとっては納得出来ないだろうけどな」

「……」

「ロズワールがなんでそんな手紙を……でも従ったらダメなのよね」

「オレ様としては手紙が届いても屋敷に留まるのが最善だと考えてい

る」

「うん……私とラムが孤立することが魔女教の思う壺だものね。ラインハルト、無理を言って申し訳ないけれども……」

「承知いたしましたエミリア様。元より同盟を築くつもりだったので、協力は惜しみませんよ」

「ありがとうございますごいますラインハルト様。当主ロズワールに変わってお礼申し上げます。……ところで、差し出がましいようですが私としてはそちらの徽章の話も気になっておりますが」

「しかるべき措置はしておきます」

「アイツヲ殺すなよ!? テメエそれやったらアタシはテコでも王になんてならねーぞコラ!」

対策はまともりつつある。先の見えない迷路の中で、道筋の書かれた地図を手に入れるくらいの強烈なアドバンテージがあるのだ。対策が導けるなら希望もまた浮かぶ。自然と彼らの表情も先ほどよりは明るくなっていった。しかしその中で唯一、カリオストロだけは浮かない顔を続けていた。

(肝心の謎が、多すぎる……!)

ロズワールの企み。

魔女教の真の狙い。

あの謎の子供の目的。

グラン達の行方。

そして暴走した星晶獣達。

これらの真実を解き明かさなければ、前進は出来てもすぐにスタート地点へ逆戻りだと、自分の心がひっきりなしに訴えかけていた。

「……ねえ、ねえカリオストロ。スバルは……スバルは治せるのかしら」

思考の渦に囚われたカリオストロが現実に戻される。エミリアの不安に満ちた目は「カリオストロならもしかして」というあらゆる期待を滲ませているのが分かる。だから頼りにしてくれるのを喜ぶ半面、期待を裏切るしかない事実あんたんに暗澹たる気分になってしまう。



「オレ様の魔法は……怪我は治せても心は治せない。そしてスバルが負った心の傷はオレには計り知れないくらいだ」

「……っ、そんな」

「正直、前の魔獣騒ぎの時よりも酷い症状だと思っている。度重なる身内の死、肉体を強制的に改造され、そしてオレの手で崩壊させられる……そんな壮絶な未来を一刻もかからずに追体験したんだ。オレは直接未来を視た訳じゃねえから分からないが……こうなっちゃうくらいには、酷い未来なんだろうな」

スバルはもう元に戻らないかもしれない。そう思うに足りる程の材料が揃っていた。これまでどうにかして二人で協力し合っていたが、治療の手立ても見出だせないならここからは一人旅になるだろう。今ある手札でこの理不尽な世界を生き残るしかない。カリオストロはスバルの手を固く握りしめながら、そう決心した。

「この騒動が収まるまでスバルには休んで貰うしかないだろう。そしてエミリア、お前もだ。敵の狙いがお前なのを考えると、しばらく大人しくした方がいい」

「スバルもここに留まるのね」

「ああ。何せここは世界で一番安全な場所だ。そうだろうラインハルト」

槍玉に挙げられたラインハルトは苦笑しか出来なかつた。当代一のチートオブチート、剣聖ラインハルトがいる屋敷。例え魔女教と言えど容易に襲撃することは出来ないだろう。味方であつて良かったとカリオストロはしみじみ思うのだった。

「じゃあ話をまとめるわね。ひとまず私とスバル、ラム、カリオストロのみんなで5日間この屋敷で待機」

「我々はガストン達への事情聴取。徽章の確保ですね」

「あとロム爺の保護も忘れんなよ！」

「そして5日後の王都の襲撃に各自備える……と」

「王都での事態収拾は詳細を知ってるオレとラインハルトで行く。こんな感じだな」

現状で出来る手立てはこのくらいか。とカリオストロは鼻を鳴ら

す。

真相が見えぬ以上どんな事が起こりうるかは未知数だが、このループの中心点は「魔女教」であると考えている。いかに周りを仲間につけ、魔女教をコントロールするのが肝要だ。そして何よりもグラン達との合流が出来る事が心強い。彼らがいればぐつと可能性は広がっていく筈だ。

「ちなみにカリオストロ様。我々の行動によって筋書きが大きく変わるという事はないのでしょうか？」

「……可能性は否めない。だがあり得ないと断じて放置するよか、あり得ると考えて行動した方がいい筈だ」

ラムの発言もまた熟慮すべきポイントである。けれども5日目のイベントは確実に起こりうる事はカリオストロだけが知っている。星獣達の暴走を食い止めねば強制ゲームオーバーだ。その原因を探るのもまた急務であった。

考えることは多い。乾く喉を潤すなにかが欲しいと無意識に飲み物を探すカリオストロだが、ふとエミリアと目が合う。エミリアの顔は異様に爛々としていた。嫌な予感がした。

「……………おい、言っておくがエミリア、5日目は留守番だぞ」

「分かったわ。じゃあ私も一緒に行くわね」

隣でふんふんと鼻息荒く覗いてくるエミリアに釘を刺すカリオストロ。しかし刺した場所が悪かっただろう、手応えを感じなかったのもう一回刺すことにした。

「……………聞こえなかったようだからもう一度言うぞ。留守番だ」

「いや。一緒に行く」

「駄目だ。スバルと一緒に留守番しろ」

「いやよ」

「だから…………」

「いやっいたらいやー！」

子供のように頬を膨らませて拒否するエミリア。淡々と話していたカリオストロもこれには流石にキレた。

「いやだ、じゃねえ！ 何回魔女教の狙いがお前だって説明すりゃい

いんだ！ 王都になんて行ってみる！ それこそあいつらの思う壺だ！」

「でも…これはそもそも私達が解決する問題なのよカリオストロ！  
なのに当の本人が事件をよそにのほほんとしているなんて、それこそありえないわ！ それを言うなら食客であるカリオストロとスバルこそ休んでいて欲しいの！」

互いのデコがくつつくほどの距離でエミリアが啖呵を切る。カリオストロは思わず悪態をつきたくなかった。元々の責任感の強さと、協力したいと言う欲求がエミリアを意固地にさせている。自分の立場を理解した上での発言は正しい、正しいが、その選択がどうしても命取りになるとしか思えなかった。

エミリアもただ吠えるだけの娘じゃないし実力があるのは分かっている。認める。だが待ち構える敵はエミリアを遥かにしのぐ化け物だ。全てのループにおいて凄惨な終わりを迎えた彼女に、これ以上関わらせたくはなかった。化け物には、化け物をぶつけるしかないのだ。

「ねえカリオストロ！」

「駄目だ。オレ達の敵はエミリアと最も相性が悪い奴だ。騙し討ち、盤外戦術なんでもござれ……お人好しのお前じゃ簡単に手玉に取られるのがオチだ」

「むっ、そんな事ないわ！」「いや、あるね」「むううう！」

「おいおい、いがみ合うなよな。それに銀髪のねーちゃんってそんなか弱い奴でもないだろ？ 金髪のねーちゃんが言った話が本当なら、戦力は一つでも多い方がいいんじゃないか？」

「そうよそうよ！ 私は別に蝶よ花よと育てられた覚えはありません！」

「蝶よ花よって今日び聞かねえ例えだな……」

「刻限の5日後までは時間はありますし、その話は後回しにしませんか？」

ぎゃーぎゃー言い出した二人に呆れた顔をしたラムが強制的に話を打ち切った。エミリアは意地でもついてきそうだが、どうにかして

諦めさせる方法を考え付かないと駄目そうだ。カリオストロの頭痛の種がまた一つ増えた瞬間だった。

「……では私は披露宴の中止を伝えて参ります。それとカリオストロ。ちよつと個人的に話がしたいのだけど、いいかな?」

「構わねえ。それじゃあエミリア、ラム、スバルを頼む」

「うん……分かったわ」

そして大体の話が終わった後、提案をしたのはラインハルトだった。カリオストロはラインハルト共に個室を後にする、しかし話があると云いながらもラインハルトはさつさと廊下を進んでしまい、訝しむ羽目になる。赤い絨毯の敷かれた通路を二人で歩く黙々と歩くのは、いつそ不自然とも言えた。

流石にどういう事だと怪しんだカリオストロが声をかけようとした矢先の事だ。見計らったかのようにラインハルトの足が止まる。

「ラインハルト?」

「……少し質問してもいいかな? 実は分からない事があるんだ」

ラインハルトはその背を向けたままだ。不思議に思いながらカリオストロは先を促す。

「何が分からない?」

「スバルが教えてくれたという未来の話さ」

「ああ……信じられないだろうが本当の話だ。過去にもオレ様達はスバルの未来視により助けられた。1回目は王都でお前と初めて会った時、2回目はロズワールの屋敷でだ」

「それで信じよう? 勝手な物言いだが、キミは常に論理的であるうとすると思っていたからね。眉唾な話を語るのが意外だと思つてね」

「なにせ偶然で済ますにはあまりにも出来すぎているからな。解明も出来てはいないが、今の所はあるがままに受け入れるしかないと思つてる」

無理もないと思つた。こんな与太にも等しい話、当人でも無ければすぐに信じられる訳がない。しかしラインハルトはつい先ほど話を聞いた上で「披露宴は中止する」と信じる素振りを見せていた。なら

「は何故今になって質問なんてするのだろうか？」

「信用できないか？」

「いや。勝手ながらキミは信頼するに値する、誠意ある人物だと考えている。エミリア様も信用しているようだし、ボクも信じたいと思っている」

「……そいつあどうも」

「けれど、どうしても引つ掛かる部分がある……カリオストロ」

「——どうして『スバルが未来視が出来る』と嘘をつくんだい？」

どくん。とカリオストロの心臓が高鳴った。

「な、にを言って……」

「辻褄が合わないんだ。キミは言った、今から言う話はスバルから聞いた未来であると。しかし肝心のスバルはああして発狂してしまった」

「……」

「実際に体験した訳でもないのに気が触れてしまう程凄惨な未来。客も言っていたが『急に痙攣して倒れた』会話も困難なスバルから、あんなにも事細やかに詳細を聞き出すことが、どうして出来たんだい？」

「……っ」

ラインハルトから強いプレッシャーを感じる。ただ背中を向けているだけの筈なのに、まるで数百の刃を首に押し当てられているような気分を覚える。しくじった。まずい。どうすればいい。自慢の頭もこの時ばかりはただ空回りするだけ。今のカリオストロに出来る事は、まるで親に叱られる子供のよう顔に顔を俯き、口を紡ぐ事だけだった。

「スバルの狂い様は、あれがもし演技だとしたら僕は拍手をしてもいいくらいだ。それくらい真に迫っている」

「違う！ あいつは本当にあり得るかもしれない未来を視て狂った！

あまりの重荷に、その悲惨な結末に心をすり減らして——！」

「ならばその未来をどうやって知り得たのかな？」

「それは……ッ」

「共同歩調を取る気があるなら隠し事は無しにして欲しい。そうでなければ、キミがあらぬ話で僕らを誑かたぶらかそうとしているのではと邪推してしまう」

「……」

「折角出来た縁だ、僕も出来ることならそのような事は考えたくはない……だから、その理由を教えてくださいませんか」

依然として金縛りにあったかのように動けなかった。脳が軋む程思考を張り巡らせても、この現状を打破する回答が出てこないからだ。

出来る事なら正直に答えてしまいたい。『死に戻りの力で既に3回以上この披露宴に参加して、仲間たちの様々な死にざまを見てきたからです』と全てぶちまけてやりたい。……そんな事誰が言えるものか！ カリオストロは知らず紡ぎそうになる悪態を噛み潰しながら、強張る口元を意志の力でこじ開けると……その舌で精一杯の抵抗を始める。

「1つ。1つ言える事があるとすれば、オレはお前達をハメようになって気はさらさらない」

「言うつもりはないのかい？」

「言わない、じゃなくて言えないんだ。悔しいことにな……だから判断して欲しい。オレが告げた内容が本当かどうかを。それは明日になれば嫌でも分かる」

「……エミリア様から届く手紙に、ガストン達の内通……徽章……」

「ああ。いくら有能なオレ様だとしてロズワールやホーシン商会、果ては魔女教とまでコネを持つてはいないし、ましてや組んでまでお前たちを破滅させようなんて考えてねえ。むしろ今言ったクソつたれども策をすべてぶち壊したいと願ってるだけだ」

「……」

「そしてそのためには……お前の力は必須だと考えている。頼むライ

ンハルト。これが虫の良すぎる話だつてのは分かつてる……だけど信じてくれ。オレはエミリア達を……スバルを助けたい……！」

震える体を抑えながら吠えていた。これは偽りないカリオストロの本心だった。この世界に来てから出来たスバル達との繋がりは、最早切つても切り離せない程自分の中で巨大化していた。

レム、ラム、ベアトリス、そしてスバル。彼らと生活を共にし、そして彼らの壮絶な死を何度も目の当たりにして何度自尊心が破壊されたことか。だが、如何に絶望の淵から突き落とされても諦めるなんて選択肢を選ぶつもりはない。グランもきつとそうしただろう。それに――

（それに負けっぱなしなんて認められるか？ 否、絶対に否だ……！！）  
例え泥をすすることになつてもアイツらの鼻を明かしてやる……！

――何よりも、やられ放題のままなんて自分のプライドが許さなかつた。

「カリオストロ」

ラインハルトは既に振り返っていた。コチラを見下ろし、その澄んだ眼で見つめてくる。コチラのすべてを覗き込むような仕草に負けじと目を合わせ続けるカリオストロ。しばし続く沈黙の後、先に折れたのはラインハルトだった。

「ひとまずは信じよう。これからガストン達に事情を聞いて真偽を問う。けれど例えそれが真実だとしても僕はキミを疑う事になりそうだ」

「そうしてくれ。全幅の信頼を預けて貰うには無理があることは理解している。今はただ互いにこの危機を乗り越える……それだけを考えてくれたらいい」

「情報を提供して貰ったのにすまないね」  
「当然の判断だ、謝る必要はねえよ。それよりも、だ。今後のことでオレ様も伝えたいことがある」

間に流れていた張り詰めた空気感が霧散すると、ここぞとばかりに提案を始めるカリオストロ。ラインハルトは後にその話を聞いて「な

るほど」と頷く事になる。

「ホーシン商会の奴らと一緒に、魔女教を叩き潰さねえか？」



## 第五十六話 合言葉は『――』

「うーわ、いるいる。ウジ虫共の群れがあんなにもッ！」

王都とフリーユゲルの大樹の間に横たわる見渡す限りの大草原。その丘のひとつをとある集団が陣取っていた。

「ほんツツツツとアタクシをこんな辺境まで足労させるなんて愛が足りないと思いやがりませんか？ コイツは福音書いつだつて自分勝手に常識も良心の欠片もないケツ拭き用の紙束ですけど、今回はとびっきりのクソ予言に違いないですよ」

お前達もそう思いやがりますよね？ と高らかに謳うのは魔教大罪司教が『色欲』、カペラ・エメラダ・ルグニカである。高貴な身分であると自負して憚らない彼女は、娼婦にしか見えない露出の高い格好で悪態をついている。

後続には荷台付きの竜車を率いた、商人の恰好をした魔女教徒達がいる。彼らは生気の宿らぬ虚ろな目で、盲目的にカペラへ相槌を打っている。そこに彼らの意思が存在しているようには到底思えない。魔女教に魅入られた彼らは、いつそ生きたお人形と称した方がしっくりくるだろう。

彼らの目的はエミリアに試練を与える事である。

カペラにとっては本当にどうでもいいし、やりたくないが、非常に残念な事に福音に従う事は彼女達魔女教徒の使命であり義務である。またカペラにとって腹立たしい事に、この福音書、数十年単位で忘れてる予言も理解しづらければ回りくどいと気に入らない点が多い。

今回のようにたかだか一人の為だけに骨を折らないといけないと知った時など、カペラは怒りの余りそこら辺にいた仲間を何匹も血シミに変えてしまっていた。

「大体、せくつかく剣聖の所に邪魔したつてのに、あのゴミ屑が発狂かますから目的達成出来なかったじゃねーですか。まッ、気持ちは分かんなくはねーですけどね。阿呆面に化粧塗りたくった薄らボケ共が下心と性欲丸出しで盛り合ってるんですから。そんなクズ共に囲ま

れたら誰だつて吐きたくなるつてもんです」

しかしてそのゴミ屑スバルに対して、カペラは怒りよりも好奇心の方が勝っていた。何故ならソイツは近年稀に見るほど魔女に魅入られていたからだ。

全身が見えなくなるほど纏わりついた、ヘドロのような黒い靄ベテルギウス・ロマネコステイ常に発狂ギウス・ロマネコステイし続けているキモい奴は『寵愛』などと吐き気のする表現していたが、カペラに言わせてみれば犬猫がするような『マーキング』だ。コレは自分のものであると匂い付けしているようなものである。確かに匂いの付け方が半端ではなくて近寄りがたい。

分からないのはソイツに全くと言っていいほど心当たりがない点である。あれだけ目立つ特徴なら顔を合わせていてもおかしくない筈なのに。仮に身内だとしても、屋敷にあらかじめ潜入させた覚えもないし、命令を出した覚えもない。ポルクスもしきりに気にしていたようだし、いつか攫つてやろう。とカペラは思うのだった。

「んー、あー、アー、あー……あぁ………つと、こんなもんですかね。あとは変な犬コロに取り入る、と……アタクシ専用の愛の奴隷を作るのも面倒つてなもんですねえ」

——見ていた者はさぞかし違和感を覚えた事だろう。キンキンと甲高い女の声が子供のモノに変わったと思えば、次の瞬間には獣のような重低音になり、最終的にはどこにでもいる中年の声に変化したのだ。そして先ほどまでの見目を引く妖艶な女性の姿も、今では誰も気に留めない商人の姿になっていたのだ。

これこそが『色欲』の名を冠する彼女の権能の一端であった。

自らの姿を変異させ、どんな姿にも変貌可能な力。再現性は非常に高く、見た目だけであれば偽物だと気付く存在はほとんど居ないだろう。彼女はこの力を自らの欲望——すなわち『万人の愛を独り占めする』を叶える為に使っている。

この力で相手のどんな変態的な欲求にも、あらゆる価値観の美意識にも応えるのはカペラが謳う「愛」である。彼女は傲慢だが愛が無償で与えられるモノではない事を知っている。だからこそ愛されるためならどんな努力も厭わない。求める顔に、求める声に、求める体に、

求める性格に。どのような欲望にも全身全霊で応えることで、相手からの寵愛を一身に受けようとするのだ。

ただし、カペラは受け取る愛の量と質に非常にこだわる。

こちらが全てを投げ打って与えるのだから、全ての愛を捧げて貰わないと気がすまない。そうじゃないと不公平だ。そうじゃないと不公平だ。他の人を考える暇があれば眠れぬほど自分を想って欲しい。延々と恋煩って欲しい。貪欲に愛して欲しい——底のない欲望の器を持つカペラは常々考えていた。

「お~~~~い、お~~~~い！」

準備を整えたカペラは大きく手を振って呼びかける。向こうもこちらに気がついたのだろう、ライガーカララギで重宝されている騎乗動物。犬の様な愛嬌がある顔つきに、大型の肉食獣を凌駕する巨躯であり、姿勢が低いことを除けば地竜と比較しても見劣りしない風格がある。に騎乗した数名の傭兵たちが近寄ってきた。その中にはひと際猛々しい風貌の獣人——鉄の牙の団長『リカード・ウエルキン』の姿もあつた。

「どないしたんや? ぎょうさん竜車つれきて……今回の作戦でこんなに竜車はいらんぞ」

「え、そうなんですか? 我々はアナスタシア様に言われてここに来たのですが……」

「連絡違いか何かか?」後ろからまたぞろと続く竜車を見て訝しむりカード。しかし福音書の通りに答えれば、首を傾げながらも受け入れてくれた。

カペラは成功を確信する。馬鹿のフリは疲れるが、あとはこの畜生の寝首をかいて襲わせればあら不思議。純銀の雌豚を受け入れる素敵なパーティ会場の出来上がりだ。魔女教徒共々リカード達の後ろについて人畜無害そうな顔をして本隊へと足を進めていく。

「それにしても随分と大掛かりですね。我々は何を運ばばいいんでしょう」

「ああん!? お前お嬢になんも聞いとらんのかい!?!」

「ひっ! な、何分大急ぎで行けって言われまして……! じ、事情は

聞かされず……！」

「チツ！ それぐらい聞いとけやボケ。情報はワイら商人の命やで？  
　　ったくお嬢も何考えてんや、適当な事しよってからにい……まあええわ。超重要なブツを運ぶと思っとけや」

「は、はいっ……しかし、そんな重要なブツがこんなにもあるってことですか？」

「本命の積み荷は少ない。それなのにこんだけ竜車用意したちゅーんは、ワイらが運ぶ先を特定させへんためや。ちったあ頭働かせたらどうや？」

「ああ……！」

　　恫喝された事で内心血反吐を吐くほど怒り狂っているカペラだが、この先にあるご褒美を思えばギリギリ我慢出来た。話を聞くにさぞかし大事なモノを運ぶらしい。それが何なのかは分からないが、クズ肉共を虐殺した後、更にそんなモノを奪えるなら、それはさぞかし気持ちがいい事だろう。まもなく行われるであろう血の惨劇にカペラは心がときめいて仕方がない。

「しかし、そこまで言われると気になりますね。一体何を運ぶんでしょう」

「……お前は知らんでもええ」

「同じ商会の商人じゃないですか！ それくらい良いじゃないですか！」

　　魔女教達の本隊と合流するまでもう少し。カペラは隠しきれないテンションのまま先導するリカードに猫撫で声を出してねだった。知りたい。知った上で奪いたい。お前達とお前達が大事に運ぼうとするモノをぐちゃぐちゃに凌辱したい。そんな気持ちで頭も心もいっぱいだった。あと50m、40m、30m……迫るタイムリミットに体が疼き、待ちきれずに変化してしまった異形の腕を後手に隠してほくそ笑む。

（教えてくなくてもくれなくても、どっちでもイイですよ。教えてくれなかったら体の端からミンチにしながら聞いてあげます。教えてくれたらアタクシの愛を注いで見るも無残な素敵な姿に変えてあげち

まいます！ さあどつちがいいですか？)

「しゃあねえやつちやなあ。そこまで言うんやったら教えたるわ。運ぶ積荷はな」

(あああああああ素直で良い子でいやがりますねえ！ なら畜生無勢がアタクシに生意気言った無礼も許しちまいます！ アタクシの愛のフルコースを見舞ってあげちまいますから教えてください教えてくださいよ何を運ぶんですか何を守ってるんですかアタクシが所有者となつてあげちまいますからさつさとブツを教えやがってください早く早く早く早く早く早く——ツ!!)

本体に合流するまで10mを切り、興奮は最高潮に達していた。カペラはリカードが答えたと同時に襲い掛かる心づもりでいた。答えなんてどうでもいい、ただこいつらに凌辱の限りを尽くしたい。そう考えていた筈なのに——

「世界一可愛い、美少女錬金術師や」

「——はい？」

(美少女、錬金術師?)

予想だにしない言葉が飛び出し思考が一瞬止まってしまふ。それは反芻しても全く意味が分からない、いつそ場違いな言葉であった。思わず意味を探ろうとしたカペラだったが——その直後。どこからともなく飛来した光がカペラを直撃し、その上半身は根こそぎ吹き飛んだ。

§ § §

——時は遡り披露宴のひと月ほど前の話である。

「という訳でリカード、ちいゝつとばかしお使い頼んでもええ？」

武器のお手入れ中のリカードは嫌な予感がした。アナスタシアが理由も言わずに頼み込む時は、大抵が面倒臭いお願いである事だと相場が決まっていた。振り返り見れば両手を合わせて「堪忍〜」といつ

もの微笑みを見せる彼女の姿があった。

数多の戦場を共にした相棒を脇にどけると、リカードはゆつくりと向き直る。相変わらずの身長差である。22歳にもなっても豆粒みたいにちんまいな、とすっかり板についた親目線でついぞ眺めてしまったが、アナスタシアは余韻に浸らせてくれない。「なあなあええやろく？ 行つて帰つてくるだけやつてく」と次を急かせてくる。

「積み荷はなんや」

「あ、乗つてくれるん？ 嬉しいわく、やつぱりリカードは頼りになるな」

「アホ抜かせ、まず中身を聞かな領けるもんも領けんわ」

しゃくしないなく、とどこかに腰を落ち着けようとするアナスタシアにリカードが木箱を用意する。子ども扱いされた分嫌味を1つ返した彼女は、朗々と語り出す。

「積み荷は人や。5人。うちへの亡命希望がおつてな」

「まくた同族でも匿う気イか？ それはええけど何でワイがやらなあかんねん。ヘータローやティビにやらせてもええんとちゃうか？」

「ヘータロ達は別のお仕事あるし、それにこの仕事はリカードやないとあかんのや」

「なら勿体つけんで理由を言えや」

睨むリカード。しかしして物怖じしないアナスタシアがニコニコと手招きをするので、怪訝な顔で顔を寄せれば、すぐにリカードの顔が驚愕に歪んだ。

「積み荷はフェルトはんと、バルガークロムウエルはんや」

「!?」

あの王選候補者と、亜人戦争の大参謀!? 度肝を抜かれるとはまさしくこの事だ。そしてこのお使いを頼まれるのが自分であることが良く分かった。自惚れている訳ではないがホーシン商会での筆頭戦力は自分(あるいはユリウス)であると考えている。そんな自分を運用するのだ、一体どんな難題をぶつけられると思えば、まさしく想像以上だったと言えよう。

しかしながらリカードには分からない。何故その二人がカララギ

に亡命したがるのか？ 疑念を即座に見抜いたアナスタシアは、にやりとほくそ笑んだ。

「うちも最近知ったんやけどなく、バルガはんとフェルトちゃんはごつつう仲良かったんや」

語られる境遇はリカードを納得させる内容だった。亜人戦争で逃げ落ちたバルガは王都でひそやかに暮らしながらも、とある赤ん坊——フェルトを育てる。すくすく育ったフェルトだが、そんな彼女が偶然徽章に選ばれる体質だったせいでバルガの手元から消えてしまう。

半強制的に王選に参加させられたからかフェルトは全く乗り気ではなく、バルガも囚われの身になったフェルトをどうにかして取り戻したいと願っているようだった。

「だから親切なウチが二人の願いを叶えてあげるつちゅー訳や」

「ガツハハハハ！ こりやまたええ善人ぶりやなお嬢、聖人でも目指しとるんか?!」

「アホ抜かしいや、うちはいつだって親切心の塊やで〜」

二人分の笑い声が部屋に響く。大したものだ。フェルトとバルガの亡命は、それ即ち王選候補者が一人減るという事。こちらにとつて大きなメリットとなり得る。どこでこの情報を拾ったかは分からないが、この情報を貰って動かない奴がいるとしたら、それはただの莫迦だと断言出来た。

「大体分かったわお嬢。んで、段取りはどうするんや?」

「まずバルガはん——あ、今はロム爺って名乗っとるらしいけど、そんな人にはうちが接触して話をつける。フェルトはんは劍聖の屋敷にいるから、引っさらうんは一月後。開こうとしとる披露宴の翌日を狙うで」

「どないしてフェルトと接触するんや」

「うちの商品はあの劍聖ですら鼻屑にしとるんやで〜。せやから従業員になりすましたバルガはんはんに屋敷に侵入して貰って、直接説得してもらおう思ってたな」

「……それ、大丈夫なんか?」

「さあ? ま。最悪とつかまっても徽章だけでも貰えれば万事OK

「や」

「パクるんかい」

「人聞き悪いわく、うちは真偽不明の指輪を買い取るだけやで」

「どうやらフェルトらを除いた残り3人の亡命希望者は、別の策で使うのだろう。リカードは剣聖に同情した。折角騎士になれたというのに王選開始前からリタイアとは。そこまで考えてふと思いつく。自分の役割は剣聖の屋敷から逃げようとする5人を護衛する事だ。そして目下、敵になり得る存在について考えてみると浮上するのは……。」

「……お嬢。もしかして剣聖とやり合うの想定せなあかんのかい」

「……あはははは」

「今のどこに笑いどころがあるんやアホオ！ 最悪やないか……ワイに死ねって言うんか?!」

「流石に死ぬはないわく。多少すったもんだはするかもやけど、刀傷沙汰なんかにはならんらん。何せ肝心のフェルトはんが王選に乗り気やないからな。もしバレても偶然乗り合わせとつたって知らぬ存ぜぬで通しいや」

先代の剣聖の実力は化け物の一言だ。なのに当代と来たらその化け物を遥かに凌ぐと言う。幾ら自分でもそんな相手とバチバチやらかす可能性はあるなんて考えたくもなかった。

「……ほんつと、お嬢の提案はいつ聞いても心臓に悪いわ」

「断るんく？」

「阿呆抜かせや。お嬢がワイじゃなきや嫌やくって泣いて縋すがりついてくるんや。そんな断るに断れんやろ」

「いつウチが泣いて頼んだんや！」とアナスタシアに胸毛をむしられて思わず叫んだりカードだが、彼女が自分を登用する意味は当然知っている。元ハイエナカララギ都市で路上生活をする最下層民の事。であったアナスタシアが培った駆け引きと勝負勘を、リカードは何よりも信頼していた。カードの切り方を熟知している彼女が（自惚れだと言われてもいいが）リカード・ウエルキンという強力な札を切るのだ。これ即ち、アナスタシアにとっての勝負時であることに他な



らない。

(ほんなら、応えてやるつきやないやろ！)

そうして月日は過ぎ、作戦は順調に進んでいく。

バルガ・クロムウエルとの合流は完了。現地協力者への渡りも済んでいる。あとは旅の商人を装って屋敷から離れた所で待機し、亡命者と合流してカララギにトンボ帰りするだけ。商会の商人と傭兵団を連れ添って約束の地に辿り着けば、そろそろ日も傾き始める時間帯。恐らくは夜頃に合流できるとの話だが。

「リカード団長。向こうは上手く行くと思いますか？」

手持無沙汰なのだろう。白と黒の毛並みが半々に分かれた熊型の獣人副官がリングを咀嚼しながら聞いてくる。改めて自分の理性に聞いてみれば、成功する確率の方が低いだろう。ラインハルトという完璧超人がいるだけで、どんな企みも見破られてしまう気がする。けれども、

「んなもん100%上手く行くに決まっとるっちゅーねん」

それが身内鼯鼠だと言われればそれまでだが、他ならぬアナスタシアが考えた策なのだ、上手く行くと確信していた。そう時間を立たずして待ち人が来るだろう——けれども、その予測は裏切られることになる。

「奇遇ですね。鉄の牙団長リカード・ウエルキンさん」

「こんな所でなくにしてるんですかつ☆」

代わりに現れたのは最も出会いたくなかった存在であるラインハルト・ヴァン・アストレアと、見たこともない生意気そうな少女だった。

「晴れ時々剣聖かいな。えんらい登場の仕方するやつちやなあ……」

地平線の向こうから、少女を抱えたラインハルトが文字通りすっ飛んでくるものだから動揺を隠すのに苦労した。そんなリカードの気持ちを知ってか知らずか、空からやってきたラインハルトは落ち着き払った表情でにこやかに話しかけてくる。

「そうですね。僕も貴方の方と出会えるとは思っていませんでした。お会いできて光栄です。ところで、ここでは何をしていたんでしょうか?」

「んなもん商いに決まっとる。こん先でデツカイ商談があるからワイはその護衛をしとるだけや。こつちこそ何ですつ飛んできたか聞いてもええか?」

「ソレがお恥ずかしい話なんです、少しコチラ側でゴタゴタがありまして。その犯人を追いかけている最中なんですよ」

「ほーん、身内騒ぎかいな。王選始まる前から忙しそうやなあ」  
「ええ。全くです」

事態は最悪を更新し続けている。この受け応えはほぼバレてると行っても差し支えないだろう。言葉の槍でチクチクとコチラを突付いてくる。そして剣聖がここに来たと言うことはフェルトの亡命は失敗。バルガも囚われの身になったのは間違いない。どうにかして切り抜けねば陣営ごと傾く可能性だってある。

「へえ〜つ☆ ねえねえ狼のおじちゃんつ、いっぱい竜車を用意してるようだけど、どんなお荷物を運ぶの? ☆」

分からないのはラインハルトにくつついて現れたこの少女である。アナスタシアとほぼ同じ背丈。背中まで伸ばした金髪に、まるで青磁人形のように美しい肌のこの少女は剣呑な空気に似合わぬ純粹無垢な笑顔とソプラノボイスでこちらに問いかけてくる。商会の情報網にこんな奴が居たか? 急ぎ脳内を掘り起こすりカードであるが、どうも心当たりがない。

ラインハルトとの関係は一体……? 訝しむりカードは無視も出せずに答えてしまう。

「こりやまたごっつい可愛い嬢ちゃんやなく、ただ残念やけどタダでは答えられへんのや。ワイら商人、がめついで情報も含めてうちの大事な商品や。おまんまの種をそう易易と教えられへん」

「ふくん。それってすごく高いの?」

「今やったらめっちゃ高いで〜。もう一月二月くらい経ったらタダで教えたつてもええんやけどな」

「そつかあ、何を運ぶんだろ〜」

「ガツハハハハハ！ 答えてはやれへんが考えるだけならタダやで。考えてみ？」

「うんっ！」

受け答えは子供そのものだ。屈みこんで視線を合わせたリカードはひよつとしなくても警戒に値しないのかもしれないと考える。ラインハルトが追求せず、この子供に好きにさせているのも謎だ。疑問がひっきりなしに頭をかすめる。

そして思い至る。もしやラインハルトは追及をしないのではなく、出来ないのではないかと。

囚われたバルガはホーシン商会の策であったことを割らず、ホーシン商会に紛れて侵入したという状況証拠だけで問い詰めようとしているのでは？ ならばまだ負け戦ではない。知らぬ存ぜぬを通せば、バルガの単独犯であるで片付く事だろう！

「え〜つと、運ぶのは〜…フェルトと、ロム爺と、ガストン、ラチンス、カンバリー、そして徽章かな？」

「ガハハハ——ゲエツホゲツホ！ ゲホオツ！」

まあ、そんな細やかな希望はすぐに立ち消えてしまうのだが。

むせ返ったりカードは、涼しい顔で唾と唾液の集中砲火から避けた少女を思わず二度見。そしてたまらずラインハルトを見れば、そちらはただただ苦笑するばかりであった。

「あれあれ〜☆ どうしたのおじちゃん？」

こちらを覗き込む少女の顔は、先ほどと変わらず無垢なままだ。……いや、目だけ笑っている。この状況が楽しくて楽しくて仕方ないという愉悦の目だ。リカードの脳が今さら警鐘を鳴らしているがもう遅い。自分の反応は相手への雄弁な答えだった。

「ロム爺を侵入させてフェルトを誘拐……いや、亡命させるんでしょ？ それとは別にガストン達3人を使って徽章を盗ませて、みんなで竜車から脱出させるんだよね？ おじちゃん、合ってる？ 合ってるよね〜？」

「な、にを言つとるんや……ハハツ、いきなり、妄想垂れ流してもおも

ろないで〜嬢ちゃん。ワイらが何でんな事せなあかんのや……」  
「ライバル蹴落とすためでしょ〜? ——というかネタは上がってるだ、とぼけんな」

ウグイスの音色が、一転して虎めいたドスの利いた声に代わり、リカードの全身からぶわつと冷や汗が浮き上がる。1から10まで作戦が全て知られてしまっている!? 何故バレた? バルガや他3人が尋問されたとでも言うのか!? それにしてもバレるのが早すぎる! こちらに内通者が居ると考えた方がしっくりくるレベルだった。

「わ、分からん! 何を言つとるか全然分からん!」

「惚け続けても無駄だったのが分からねえのか? そんなタマじゃねえだろ」

「んな事言われても分からんもんには分からんしか言えへんやろが!」

「あ〜〜〜っそ。じゃあじゃあ周りで顔真っ青にしてるみんなに聞いちやおつかなく、預かってる商人さん達みたいになりたくないよね?」

つて☆

「ツ!? な、何考えていやがるんや!? うちの従業員に何をしやがった!」

「何って、誘拐を手助けするような悪い子はお仕置きするしかないよね〜☆」

少女の顔に嗜虐的な笑みが浮かんでいく。彼我の体格差はあり過ぎる筈なのに、大の大人である自分は目の前の少女相手に完全に委縮してしまっている。そして気付く。ここは糾弾の場ではなくて報復の場ではないのだろうか? と。

「カリオストロ、虐めるのはそこまでにしてもいいんじゃないかい?

ちよつと拘留してるだけで拷問したり、殺したりはしてないさ!」

「もうっネタ晴らしが早いってば! 腹立ったりしてないの〜? 仮にもフェルトを獲られそうになったんだしさ。ちよつとはやり返すのも大事だよっ☆」

「腹が立たないと言えば嘘になるが……少なくとも僕らにはそんな時間はない筈だ、そう言ったのは他ならぬキミだろう?」

静観していたラインハルトがとりなせば、カリオストロと呼ばれた少女からの圧力が消える。が、落ち着く時間は与えられなかった。尻もちをついていたリカードに「おい」と声がかかれば、今日何度目かになる衝撃が彼を襲った。

「これから魔女教の奴らが来る。討伐に協力しろ」

「……は、はあ？ ま、魔女教？ なんて……」

「何でもクソもねえ。これからお前たちを襲いに来るんだよそいつらが」

「そんななんでもしか言えへんやろが！ なんでワイらが襲われなアカン!？」

当然の訴えだと言えた。ここ数十年間はなんら名前すら聞かなかった魔女教が、よりにもよって自分達を狙っているなんて誰が信じられる？ こちとらただの商い人、魔女教に狙われるような真似をした覚えはない！ そんな訴えをよそにカリオストロが淡々と告げていく。

「お前達は本来ならフェルト達を載せた竜車と合流してカララギに戻るようだが、代わりにあいつらがやってくる。商人に似た格好でいかにも仲間ですよ〜って顔してな」

「寝言なら寝てから言うてくれ！」

「いいから話を聞け。疑うにしろなんにしろ、合流してしまつたらもう終わりだ。その魔女教の奴らは変身する力がある。お前の身内や、お前自身に成り代わるのもお茶の子さいさいだ」

「……」

「オレ様とラインハルトは魔女教を叩きにここに来た。誘拐未遂で迷惑かけた分こっちに協力しろ。お前達を囿に、あいつらをぶっ潰す」  
「なんや、それ……」

一方的に語られる展開、展望にリカードは乾いた笑いしか出せない。だが二人の目は全く笑っていなかった。それは今の話が与太話どころか真実であると、一片たりとも疑っていない目だ。

「んな話、従えるかいな……何が魔女教や、さつきからワイらの事おちよくってるんやないやろな」

「別にお前達に特攻しろなんて言わねえよ。程よく囷を引き受けてくれたら逃げていい。あとはオレ様達がやる。お膳立てが済んだらいるだけ邪魔だから帰れ」

「……あ？」

「聞こえなかったか？ 邪魔だって言ったんだ。別に拘留してる商人共も事が終わったら突き返してやるから尻尾まいてアナスタシアの所に逃げ帰ってろ」

「勝手に決めないで欲しいんだけどね……」

かつと頭に血が上る。今の今まで呆気に取られていたが、カリオストロに正面から煽られ、鳴りを潜めていた怒気が急速に芽吹き始める。鉄の牙団長であるこのオレが、アナスタシア・ホーシンの懐刀であるこのオレが、こんな得体の知れない小娘にボロカスに言われて、大人しく出来るか？ ぱつと立ち上がったリカードは、口元から牙を覗かせて睨み返し始めていた。

「よくもまあワイら鉄の牙を腰抜け扱いしてくれたなあ嬢ちゃん……！」

「んく聞こえないけど何？ 怖気づいた？ 囷になるのも嫌って言いたいの？」

「ッ、上等やないか小娘エ！ 魔女教やらなんやら知らんが、代わりにワイらがぶちのめしたらア!!」

湯気の如き怒気を巻き散らすリカード。カリオストロがこちらを乗せようとしていたのは明白だったが、我慢なんて出来なかった。邪魔者扱いされた仲間達もこぞって怒りに燃えている。我らが牙はただの飾りではないのだ。

「ふくん。いいけど土壇場で怖気づかないですよ？」

「吐いた唾飲み込むような真似なんかするかいアホ……！ それでどないするんやっ、どう囷になれっちゅーねん！」

向けられれば腰が抜けてもおかしくないリカードの憤怒を前にして、飄々とした態度を崩さないカリオストロ。やはり見た目以上の人物なのだろう、半ばヤケクソ気味に吠えたてるリカードは、これまた底意地の悪そうな笑みを浮かべるカリオストロに食ってかかった。

「この場で魔女教を出迎える。そう時間も立たずに奴らはこっちにやってくる。きつと向こうは同じ商人です、とかアナスタシアからの連絡が、とか適当な理由をつけてリカードに近づこうとしてくるだろうな。んでお前達が油断したタイミングで一斉に襲い掛かってくるだろうよ」

「ニコニコ仲間扱いしとけっちゅーことかい」

「そういうこった。だけどコレだけは絶対に守れ。敵と接触するな。触れたら最後、お前達は得体の知れない化け物の体にされる」

「……」

「オレ達は荷台の中で待機してるから合図を出せ。そうしたらオレ達が出て暴れてやる」

「はん、ええやろ。だがやる時はワイらもやるで……それで？ 合図はどうすんねん」

言われてすぐに考え込むカリオストロ。リカードを見て、ラインハルトを見て、周りを見て……そして最後に組んでいた手をほどくと、茶目のたまつ気たつぷりに宣うのだった。

『『世界一可愛い美少女錬金術師』でっ☆』

## 第五十七話 黄金鍊成

開戦の狼煙はカリオスト口の魔法だった。

荷台の中で機会を伺っていたカリオスト口は、合図と寸分違わぬタイミングで魔法を放っていた。極彩色の破壊の奔流、それは物質の構成素材を粒子レベルで強制分解する、非常に厄介な魔法である。

今まさにリカードを襲おうとしていた人物に光がぶちあたれば、最初からそうであつたかのように、上半身が円形状にはつられた。

バランスの取れなくなった体が地面に崩れ落ちる様子は冗談にしか思えない。いざ襲おうとしていた魔女教徒達も、旗頭が急に死んだ事を理解出来ていなかったようだった。

そしてそれはリカードら商人達も同じであつた。

見たことも聞いたこともない魔法もそうだが、目の前で呆気なく死んだのがなまじ同じ商人にしか見えないから動揺もひとしおである。「ボサつとしてんじやねえリカード！」

ラインハルトと共に荷台から飛び出したカリオスト口は動けない魔女教徒相手に魔法を行使。大仰に腕を振るつたかと思えば、多種多様な土製の武器達が地面に咲き乱れる。

先手を打たれた彼らも片手ほどの行動不能者を出してようやく現状を理解。隠し持っていた武器を手にこちらに襲い掛かり始める。ソレを見てようやく商人サイドも再起動し、瞬く間に乱戦が始まった。

「す、すまん！　あまりにエグくてちよい動けんかったわ……つていうか嬢ちゃん！　コイツらが魔女教でええんやろな!!　味方やないやろな!?!」

「すぐに分かる！」

「どういう意味やソレ?!」

剣を掲げて襲い掛かってくる輩を巨大な鉈で切り伏せるリカード。だが本当に自分の敵なのか分からず、その動きは精細を欠いている。一方でカリオスト口はようやく動き出した戦場を俯瞰すると、最初の犠牲者に近寄ってその手を翳し、



「おい嬢ちゃん、何して——オイツ!？」

閃光が瞬いたと思えば、無様に横たわっていた下半身を肉片に変えた。

言うまでもなく死体蹴りである。

リカードも伊達に傭兵稼業を続けておらず、幾度となく汚い仕事をした経験もあるが、そんな彼でも弱者や死者への必要のない攻撃は到底許容出来るものではない。気付けばカリオストロに食ってかかっていた。

「自分トチ狂つとるんとちゃうか!? いくら魔女教やからつて——!」

「うるせえ」

怒鳴りつけても辞める気はないと、カリオストロは肉片になり果てたソレを念入りに攻撃していく。どれだけ強い怨恨があればこまで容赦なくなれる? 表情を変えずに攻撃し続ける彼女にゾっとしながらも、止めようとする。が、その行動が正しかった事にリカードはすぐに気が付くのだった。

「——ア、ア——あが、……ああ、まったく何ですか何ですか何ですか何ですかあツ!! いきなり人様に攻撃するなんて、どういう了見してやがってんですかこのクズ肉があツ!？」

塵一つ残さぬ容赦のない攻撃が続く中。そのすぐ横合いから元の恰好のカペラが、まるで逆再生のビデオを見ているかのように肉片から傷ひとつない姿に戻っていた。歴戦のリカードもその現象に覚えはなく、口をあんぐりと開けるばかりだった。

「リカード、オイツが黒幕だ」

「オイツ!? コイツとはご挨拶でやがりますね!? 品性の欠片もねえドブみてえに汚い不意打ちかましたが挙句、このカペラ・エメラダ・ルグニカ様に対してオイツ呼ばわり! あくあく上等でいやがりますよ、媚びるしか能のない自尊心デブのクソ雌人形がツ!!! 誰が見ても悲鳴を浴びるような素敵なオブジェにしてやペギッ」

早口でまくしたてながら激怒するカペラ。しかしその最中に彼女の顔面めがけて極太の槍が貫通。更に腹部、脚、腕にめがけて多種多

様な武器が殺到すれば、また無残極まりないオブジェに逆戻りである。

しかしカペラがその程度で死ぬ事はない。

人であれば即死である筈の攻撃を屁でもないど、傷ついた先から再生しようとする。が、再生した矢先から剣が、斧が、槌が、杖が、刀が、矢が雨あられと突き立っていく。

そのあんまりにあんまりな一幕はリカードをして「うわっちやあ……」と思わず声を上げさせていた。

「ちよ……ぐへ、ぶじゅっ、まつ、タン——げびゅっ！ た、タンマツ、タンマタンマタンマですよ！ せめて喋らせろってんです?！」

「お前と会話することに意義を感じねえ。……ああコイツの血を浴びるなよりカード、血液まで腐ってやがるからな」

「なんでハナからアタクシへの好感度がぶつちぎっていやがるんですか?! その畜生も何か言っちゃたらどうで——おぐえっ?!」

「知らんがな。というか自分、相当嫌われとるんやなあ」

再生しては攻撃され、再生しては攻撃され——啖呵を切る事すら許さない暴力の嵐。黒幕のようだが、この様子では出る幕もないなとリカードは担いだ鉈で肩を叩く。

「い、いいいいい！ いいい！ いい加減にしやがれてんですよ、このっ、クズ共がああああああッ!!!」

カペラがついにブチ切れた。

見た目は致命傷を受けている筈だが、堪えた様子も見せずになんか攻撃から逃れると、大型の獣——カリオストロはそれが、かつてメイザース領で見たウルガルムに酷似していると感じた——に変化。素早いフットワークで、攻撃を避けながらカリオストロを八つ裂きにしようと飛びかかるが、

「——あっが!？」

「あかん、何しに来とるか一瞬忘れとったわ」

獣化したカペラの顔面がひしゃげ、カリオストロとは逆方向に吹き飛んだ。

攻撃を咎めたのはリカードだった。手に持つ大きな鉈、その峰をわ

ざわざ使って綺麗なフォームで振り抜いていたのだ。

斬撃ではなく打撃を選択したのは、血を警戒した上での事。地面に痕を残して滑っていったカペラは、狙いすましたタイミングで巨大槍が尻から頭まで一直線で縫い留められ、直後、頭上に出現した巨大岩で跡形もなく潰されてしまう。

「うひゃく踏んだり蹴ったりやな」

「この程度で死んでくれたら楽なんだがな、とりあえずは他の奴らを手助けしにいくぞ」

「……応」

ここに来てリカードはカリオストロへの評価を改めていた。

最初のぶりっ子がなんだったのか、と言うくらいに戦闘力が高く、頭も回る。正直、彼女の言う通り自分達の出番はいらなかったのかも……などと考えて、それを打ち消すように頭を振った。役立たずの烙印を押されるのは、許しがたい事だ。

「おい！ お前ら無事か!？」

「だ、団長！ いや、見ての通りですよ……」

「見ての通りって……あく」

せめて仲間と共に手柄をアピールするつもりだったのに副官は泣きそうになっている。リカードは何を情けない顔を見せてる……と叱ることは出来なかった。何故なら、ラインハルトが目にも止まらぬスピードで魔女教徒達を千切っては投げ、千切っては投げ、数だけは居た筈の彼らを破竹の勢いで倒しているのだった。傭兵達が剣を振る隙など、ほとんど無いに等しかった。

「やあカリオストロ、終わったかい？」

「まだだ。黒幕はあの岩の下敷きになって貰ってるが、死んでないだろうな」

「そうか。こちらもあと少しで終わると思うよ……と、後ろ失礼」

「どわっ!？」

納刀した状態のまま涼しい顔で敵をぶちのめしているラインハルト。一息ついた様子でこちらに歩いてきたと思えば、瞬きの間に二人の後ろに回り、横合いから飛んできた火球を片手で握りつぶしてい

た。

怪我どころか服に染み一つない、噂以上の剣聖ぶりにはリカードも仲間達も乾いた笑いしか出せていなかった。

「峰打ちかよ」

「うん。これで悪さをしていたら断罪だったんだけど、現時点では未遂だからね」

「どうせ改心なんてしないだろうから殺して……まあいいか。おいりカード、やる事ないんだったらそこで伸びてる奴らを縛ったらどうだ？」

「………ハイ」

リカード達は挽回を諦めざるを得なかった。だって彼女の言う事ぐらいしか本当にやることがないのだ、肩と尻尾をしゅんと落として作業をし始めるのだった。

「さて、と——」

それからも一方的な戦闘が続いた。

カリオストロは当然だがリカード達もほぼ無傷に対し、敵に至っては全滅に近い状態だ。

今も無駄な抵抗をしていた魔女教徒に、カリオストロがその小さな指をくいと曲げると、どこからともなく岩が飛んできて後頭部を直撃。呆気なく地面に沈んでしまう。

見届けたカリオストロはふう、と一息ついた。当初の見立て通り、統率する人物がいなければ如何に群れていても烏合の衆に過ぎなかった。唯一の懸念事項であるしぶとすぎるリーダーは厚さ5mほどもある岩の下敷き、もう勝つたも同然である。

しかしこれからだ。カリオストロは岩の上に座り込み、頬杖をつきながら考える。どうやったらこの<sup>カ</sup>化け物<sup>ラ</sup>をこの世から消滅させられる？

(……本人が言ってた通り、斬っても、焼いても、潰しても。果ては分解しても平然と復活しそうなんだよな……どうしたもんか)

「おーい嬢ちゃん！」

両足をぶらぶらと考え事をすれば、下から声がかかった。何事かと

飛び降りれば、簀巻き状態の魔女教徒達が奇麗に地面に並べられているのではないか。

「終わったのか？」

「ああ。偵察も出させたがこの辺り一帯にはもう敵はおらん」

「予想以上に時間をかけてしまった、僕の我儘ですまないね」

「全くだ。ま、そっちもそっちで都合があるんだろ。好きにしろ」

「感謝するよ。リカードと鉄の牙の皆も協力ありがとう」

「あーあー腹立つわ〜〜！ 感謝なんていらへんわい！ 嬢ちゃんたちの功績に比べたらワイらはなんもしてへんのと一緒や！」

がー！と吠えるリカードに、苦笑するラインハルト。

何をしても様になるそのイケメンフェイスを眺めていたカリオストロ口だったが、そうだ、と思い至る。こいつは好きな加護を好きな時に取得できる力があつたじゃないか。ならばカペラに効くような都合の良さそうな加護の1つくらいあるんじゃないか？

早速提案しようと口を開こうとしたカリオストロ。しかしそこに別の声が挟まった――、

「こ、これどないなつとるんや？ 何があつたん？」

「へ？ お、お嬢オ!? なんでこないな所に！」

カララギ訛りの女の声。暖かな気候に場違いな白いコートに白い帽子のいで立ち。髪は紫で顔たちは随分幼く見える。

誰だ？ と首を傾げたが、真っ先に反応したのはリカードだ。カリオストロは知る由もなかったが、それはアナスタシア・ホーシンそのものであつた。

「どうもこうもあるかいな！ ウチが保険の為に派遣した奴が何で捕えられとるんや?!」

「……お嬢、知らんかつたんか？ こいつらは魔女教徒や」

「は？ 何を言うとるんや、そないな事あるかいなウチの従業員に限って――本気で？」

きよろきよろと周りを見渡して狼狽するアナスタシアに、腕を組んだまま大きく頷くりカード。彼女は剣聖とカリオストロを交互に見ると、冷や汗をたらたら流しながら勢いよく頭を下げた。

「う、ウチの従業員が本当にすみませんでした！」

ぺこぺこっ！ とそれはそれは角度も整った美しい謝罪だった。平身低頭の見本ともいえる姿勢で、一度だけでなく二度、三度と頭を下げて謝罪されると、事が事の筈なのに許してあげたい、という気持ちで湧いてくる程見事なモノだった。

「アナスタシア様が気にする必要はありません。我々も危うく一杯食わされそうになってしまったのですから」

「ワイも身内におるとは思ってたからな……お嬢すまん。そしてそっちにも迷惑かけたわ。本当にすまんかった」

「……」

ひとしきり謝罪をする二人に対して、カリオストロはだんまりだ。その様子は怒っていると言うより探っていると言った方がしっくりくるだろう。

疑いの眼で見つめられている事に気がついたのだろう、リカードが露骨に慌て始めた。

「じよ、嬢ちゃん、まさか疑ってると思うか？ これはワイが保証する、完璧にアナスタシア・ホーシンや！ 声も顔も姿も、話し方だってそうや！」

「え？ 何？ どゆことやリカード？」

「いやなお嬢。実はその魔女教徒の中に変身能力を持った奴がおつてな……そいつやないかと疑われとるんや。というか剣聖も見たことあるやろ!? うちのお嬢を！」

「……確かに見たことはある。記憶の中の姿とも話し方も一致しているね」

な!? そやろ!? と太鼓判を押しリカード。しかし肝心のカリオストロはそれでも納得いつていないようだ。ふくん、と呟いたかと思えば片手の魔導書を開き、もう片方の手をアナスタシアに向けようとしていた。

「待てや！ 何を疑つとんねんアホ！」

「姿や声が一致してたからって、本人かどうかは分からないよね？ もっと本人達しか知り得ない情報を教えてよ☆」

「普通それで分かるやろがい！ 幾ら変身能力があるからって限度があるやろ!？」

「……じゃあ証明して?」

頑としてカリオストロは認めない。

業を煮やしたりカードは、おろおろするアナスタシアに向き合うと、質問を投げかけた。

「せやったらお嬢、ちやつちやと答えたってや。お嬢は昔、ワイの事はなんと呼んどった?」

「……ええ〜と」

「お、おい、さっさと見えや。あの嬢ちゃんは本気やで!」

質問に対して、なぜか渋り出すアナスタシア。リカードは焦った。なんでここに来て戸惑うんだ、死にたいのか。と苛立ちと憂慮が半々籠った声で追い立てれば「堪忍やて」と、アナスタシアもまた焦り、嘗め回すようにリカードを観察し、周りが見守る中、消え入りそうな声で答えた。

「い、い、犬の化け物や……」

その解答は意外な言葉だった。

とでもではないが正解とは思えない。

だがリカードの顔はぱあつと日がさしたかのように明るくなった。どうやら合っているらしい。

「うう。だから言いたくなかったんや……」

「ガツハツハツハ！ せやけど証明は勝ち取れたようやで、アナ坊!

どや嬢ちゃん、これで本物やって分かったやろ!」

「……」

カリオストロが本当に渋々と手を下げれば、周りもほっとした空気が流れる。

これで偽物だと断じられて殺されたら溜まったものではない。だって雰囲気も、纏う空気もどう見ても本人なのだ。いつの間ここに来たのかは分からないが、ソレは考えあつての事だろう。皆そう考えていた。

「む。カリオストロ、彼女は偽物だ」

「分かった」

「え。——けびゆ」

だから続くラインハルトの言葉は全く理解出来なかったし、なんだったら瞬きの後にアナスタシアの顎から上が「ぼんっ」と呆気なく吹き飛んだのも、また理解出来なかった。

その可憐な顔は見るも無惨にザクロのように内面を曝け出し、ぐらりと体勢が崩れれば、体めがけて容赦ない攻撃が一斉に襲い、あつという間にぐずぐずの肉塊になってしまっていた。

彼女の末路に、誰もが呆然と大口を開ける事しか出来ていない。

リカードなんか、あまりの衝撃に腰を抜かしていた。

本当の娘ではないが、ソレと同じくらい愛情を注いでいた彼女が一瞬にして物言わぬ軀に変わったのだ。ひっ、ひっ、とひきつった声が溢れるのを止められないようだった。カリオストロはそんなリカードに近づいたかと思えば、思い切り頬を叩き始めていた。

「目を覚ませリカード。コイツは偽物だ」

「……」

「オイ、聞こえてんのか？」

「ど、どこが————どこが偽物やこの外道がアツ!!! ワイとアナ坊にしか分からん答えを言ったんやで!? どこからどう見ても本物やったらう……ぐおっ!?!」

「落ち着けないのは分かるけど、ソレから離れたほうがいい」

数回の刺激でようやく戻ってきたリカードがカリオストロに飛びかかるようにするも、それはラインハルトが突き出した鞘が防いでいた。見れば、すぐ後ろにあった遺体から、何者かがぼこぼここと再生している所だった。

「な、んでえー! ——うわっ!?!」

再生途中のカペラは、舌打ちしながら再度襲いかかろうとする、が直後眼前に現れた剣山めいた武器の数々に距離を取らざるを得ない。「アタクシの変装は完璧だったじゃねーですか!」

「そうだね。本当にそっくりだった。『看破の加護』がなければ分らなかったよ」



「は!? 何でそんなの……ああそうですかそうですか! 取得しやがったんですか、本当にイカサマ野郎ですよお前は! 国に尻尾を振るマゾ犬め! 振るならこのルグニカであるアタクシにでも振ってやがれってんですよ!」

激しい憎悪を顔に刻むカペラ。そして憎悪のままに体の一部を変形させて襲い掛かるが、通じない。大蛇の鋭い爪も。狼による牙も。猪の角も。猿の筋力も。カリオストロの強力な魔法と、ラインハルトの激しい斬撃の前には見戯にも等しい行為だった。

ならばと周りでうろちよろしている傭兵団を狙おうとすれば察したラインハルトに妨害され、地面を転がるハメになる。

カペラ本人に武術や剣術の心得がないことが災いしているのだろう、便利過ぎる権能に頼りきってきた弊害で、今の彼女は籠の鳥状態だった。

「や、やめてや! これ以上は……ギいつ!」

アナスタシアに変身しても、腹部に風穴を開けられるだけ。

「お。おいラインハルト! よせ! アタシだって、アタ——ぶげえ!」

フェルトに変身しても、首を折られるだけ。

「カリオストロ、お願いだ。コレ以上は——おぎゅつ、ぐつ、うおおおおつ?!」

グランに変身しても、四肢を貫かれた挙げ句、容赦なく、なおかつ念入りに潰されるだけ。

不意打ちも。死んだふりも。哀願も。その全てを拒否されて延々とサンドバッグにされ続けるカペラ。これだけ好き勝手に攻撃されても尚死など程遠い存在であるが、だからといってカペラに現状を許容など出来るはずもない。

2つの巨石でサンドイッチされて潰されたカペラだが、次の瞬間。その石を砕いて巨大な黒龍がそこから現れていた。

「——よくも散々好き勝手にしてくれやがりましたねえええツ!!!」

たくましい尻尾に、大きな翼。鋭い牙に、長い爪。まさしく竜と呼ばれるにふさわしいその姿。ただ一つ違う所があるとすれば、鱗の代

わりに全身を太い血管が這い回っていることぐらいか。

周りの人間が見上げるほどのサイズになった彼女。叫ぶだけで一帯に暴風が巻き起こり、カリオストロも堪らずたたらを踏んだ。

「な、んやコレ……めちやくちや過ぎるやろ！」

「めちやくちやにしたのはテメエらだろがアツ！ 誰よりも愛されるこのアタクシを！ このカペラ・エメラダ・ルグニカ様を群れて叩いて悦に浸るクズ共がアツ！ 決めちまいましたよどれだけ泣いても喚いても許してあげねえです！ テメエらが最も苦しんで死ぬるよるな素敵なオブジエに変えちまいますからねえツ?!」

質量差があれば、ただがむしやらに暴れるだけで致死の一撃となる。更にいやらしい事に暴れるたびに彼女の皮膚から滲み出した血液が撒き散らされるのだ。避けきれず、少しでもソレを浴びてしまった人は、強烈な拒絶反応にのたうち回り、絶叫をあげてしまう。

「近づいたらあかん！ 距離を取って攻撃するんやツ！」

「ギャハハハハッ！ アタクシにまだそんな攻撃が効くと思ってるんだつたらおめでたい通り越して哀れすぎつてもんですよ！ 効かねえんだよゴミ屑共があツ！」

リカードの指揮で一斉に魔法や弓といった攻撃に切り替える傭兵たち。しかしカペラは火球や弓で攻撃されても意に介さず、悠々と空高く舞い上がり、そして地面スレスレを滑空してこちらを攻撃してくる。その巨大な牙や爪、尻尾に巻き込まれた何人かが犠牲になった。

「畜生ッ！」

「あ、あ、くっつその声ッ！ その声ですよその声ッ、怨嗟と悔恨が詰まっついてメチャクチャ気持ちいいじゃねえですか?! もつともくっつと聞きてえです——ねえっ?!」

再び空へと飛び上がったカペラの大口がぐばあ、と開いた。

暗黒が広がるその空間に場違いに明るい光が集まっていく。

それは間違いなくブレスの兆候。全員に緊張が走る。

アレを浴びればどうなってしまうかなんて考えるまでもない！

鼻高々のカペラが今まさに破壊の奔流を放とうとした……その時だった。

ひゅん、と赤と青の何かがカペラめがけて飛んだ。

かと思えば、彼女の漆黒の翼に2つの大穴が空いていた。

ぐらり、と体勢を維持できなくなっていたカペラが慌てて再生しようとするが、瞬間、彼女の眼前に現れたのは大上段に鞘を構えて叩き伏せようとしていたラインハルトの姿だった。

まるで電気が走ったかのような強烈な痛打音！

顔面がひしゃげるくらいに強打されたカペラは、直後地面にクレーターを作るほど叩き伏せられていた。

「お、げ……くそ、がああああッ!!!」

「そっくりそのままお返しするぜクソ野郎。よりにもよってオレ様の前でそんな姿になりやがって——ウロボロス、やるぞ」

急ぎその場から逃げようとするカペラに、カリオストロが展開していた二頭の人工竜、ウロボロスが再び襲いかかった。

カペラの周りを2つの真円を描くように飛び回ったウロボロスは、やがて極光を纏いながら高速で回転していく。螺旋のような軌跡を重ねて、重ねて、重ねて。何重にも重ねていけば、耳をつんざく、空間が軋むような音とともに、カペラの体がその末端から全く別の物質に組み替えられていく。

再生する体なら、再生出来ない体にしてしまえばいい。元の世界では錬金術の偉大なる開祖にして、稀代の錬金術師としての地位を築いたカリオストロ。どんな物体も立ち所に黄金にしてしまう、世界の法則すらも超越する絶技！

「お前、目立つのが好きなんだろう？ ならお望みどおりにしてやるよ。オレ様の本気、とくと味わえ——！」

「お、ま、え……ッ、な、にをす——がつ、ぎつ、ぐぎいいいいいいいいいいいっ」

「これが真理の一撃だあッ、黄金錬成——！」

轟音と爆発！ 光の波濤があたり一帯を埋め尽くすほど放たれたかと思えば、直後、大量の土煙が舞った。激しい突風が巻き起こされ

て、皆が思わず顔を抑えた。そしてしばらく、五月蠅い程の静寂が辺りに広がった。

「……やった、のか？」

「……」

リカードの言葉にカリオストロは答えない。ただ爆心地をじつと睨みつけている。

攻撃が通っていれば、カペラは物も言えないただの純金のオブジェになっている筈だった。しかし彼女の竜の体は大きすぎた。全身をくまなく範囲に収められたかは怪しい、死に損なっている可能性もまた高かった。

「ラインハルト」

「ああ」

ちやきり、鞘を構えたラインハルト。恐らく同じ考えなのだろう。土煙のカーテンが爆心地を覆い隠す中、油断なく構えている。

そうして丘を撫でる風がその全貌を明かそうとした、その時だった。中心から笛の音のような音が鳴り始めた。

「笛……？」

「なんだ、この音……？」

「……!? ツ、おい気をつけろ！ これは——ッ」

困惑が周りを満たす。なぜここにきてそのような音がするんだ、と首を傾げる傭兵達。

しかしリカードやカリオストロといった数人はそれが差す意味に気付いていた。コレは何かの合図だ。きつと何か嫌な事が起こるぞ、と警告する前に、その異変は起こった。

「——ど、わあっ!？」

「ぐうっ?!」「ひいいいっ——があッ!!」

捕縛されていた魔女教徒達が、その体ごと次々と爆発し始めた！連鎖的に巻き上がる炎と衝撃が傭兵たちに甚大な被害を齎している。轟轟と燃え上がり、大地を震わす爆発の波。笛の音は自爆の合図だったのだ。

ラインハルトは咄嗟にカリオストロとリカードを抱えて脱出して

いたが、直後、爆風をかき分けて黒い物体が空を飛びあがった。

「ぎゃ、ひひ、ひひひッ！ ギャツハ、ハハ、ははハハああーッ!!  
ようやくっ、お前たちのハナを、あかせましたっ、ヨおっ！」

カペラだった。しかしたくましい竜の体躯は、その半分以上が結晶化した黄金で覆われており、太陽の光を浴びて歪に光っている。どうやら懸念していた通り、その全身を封じ込めるには至らなかったようだ。

しかしながら、ここに来て初めて彼女の顔に怒りや愉悦とは別の、焦りのような表情が見てとれていた。

「残念ですけれどもッ、今回はここまでにさせて貰っちゃいますよ！」

このことはずつと、覚えておきます……特に、そのメスガキい！」  
半分結晶化した顔にはつきりとした殺意を滲ませて、カペラが吠えた。

「貴様だけは、貴様だけは絶対に許さねえですよ、この、人形遊び野郎があ……ッ、今度出会ったらお前の身内を一人ずつ、一人ずつ攫って、じくつくりと痛めつけて、お前のせいでこうなった事を骨身に染みるまで教え込ませて殺してやりますよ……ッ！ お前と言う存在が如何に罪深いかを周りに分からせて、お前が丹精込めて築き上げた関係がどれだけ薄っぺらくて、そしてどれだけ虚に満ちた空しい存在だったのかっていうのを魂にまで刻み込ませてあげますッ、それからお前を捕えて、この世界に絶望するまで一か月、いや一年、いや十年かけてたぐつぷりと苛め抜いてあげますからアッ!!!」

今まで全方位に向いていた憤りが初めて個に対して向いた。子供めいた、混じり気なしの100%の殺意は、周りにとつてもゾツとするほどの力を持っていた。

しかし当の本人は全く動じていないようだった。

涼し気な顔で罵倒を流しながら、油断なく手を向けてはカペラを殺そうと画策し続けていた。

「逃がすとも思ってるのか？」

「ぎひっ、好きにすれば、いいんじゃないやねえですかあ？　そこで死にかけているお仲間が死んでもいいっていうんだったらねえっ」

ちっ、とカリオストロは舌打ちする。近距離で爆発を受けた傭兵達はほとんどが大けがを負っていた。本音では放っておきたいが、彼らにかまわず攻撃をすることは憚られた。

そんな逡巡を逃すカペラではない。彼女は気が付けば更に高く舞い上がり、笑いながらこの場を離脱してしまっていた。

「……逃したか」

結果として、この奇襲作戦は失敗に終わったと言えよう。

だが、カペラを攻略する糸口が初めて見えた気がした。

カリオストロは既に点となったカペラを、どこまでもどこまでも睨み続けるのだった。

## 第五十八話 反撃の狼煙

——げらげらげら。げらげらげら。

——あくまがわらう。おれをみてわらう。

——おれのとよりでよりそうあくま。

——つぎはだれをあいそうか。つぎはだれになってやろうか。

——ぐるぐるぐる。ぐるぐるぐる。

——せかいがまわる。しんでもまわる。

——おわらぬおわり。くりかえすあくむ。

へやがぐるぐるまわってる。

おおきなべつどにちいさなからだ。

おりようたつておりられない。

ここはむげんにつづくしろいそうげん。

「……スバル……タオル、変えるわね」

「エミリア様、そのような事は私が……」

「ううん、私にもやらせて……これくらいしか、私には出来ないからしろいひとがおれにてをのばす。

ほつとさせる、あつたかいて。

それがすきだからおれもてをのばそうとするけど、

そのまえにべつのでがつかまえてくる。

くろいあくまだ。

おれをあいして、おれをけがして、おれをころした。

わるいわるいあくまだ。

こいつがスバル君の好きな奴なんですかあ……？ ならアタクシ

が代わりになつてあげますよお……。

やめろ。やめてくれ。しろいひとをけがさないでくれ。

そうねがつてもおれにはどうすることもできず。

しろいひとのぜんしんにくろいあくまがまとわりつく。

おれのたいせつなそんざいをけがしてしまう。

「どうしたの？ 苦しいの!？ ラム——ラム！ スバルが！」

くるしい。くるしくてたまらない。

だ・い・じ・な・し・ろ・い・ひ・と・の・か・お・が、あくまのかおにかわってしまふ。  
も・も・い・ろ・の・ひ・と・も、あ・お・い・ろ・の・ひ・と・も。おれのたいせつなひとはぜ  
んぶ、ぜんぶ、あいつにけがされてしまふんだ。

そんなのいやだ。きえてくれよ。あくまめ。

おれのたいせつなひとをかえしてくれよ。

ギヒヒヒイツ、ひどいじゃねえですかあ、アタクシはこんなにも  
愛しているっていうのに、スバル君もあんなにも愛してくれたって  
いうのに！ アタクシ達、もうおしまいなんですか？ もうこれまでな  
んですかあ？

たからかにあくまがわらう。

きしよくのわるいこえでカタカタと。

はきけがするほどゲラゲラと。

やめてくれ、もうつきまとわななくてくれ。

なんどもねがってもけつしてあくまははなれない。

そして、おれのからだがまたくろくなっていく。

「ひイツ!？」

スバル君。実感しちまいますよう、アタクシしかもう愛してくれる  
人がいないって事を。アタクシだけが愛を与えるに相應しい存在だ  
という事を。他の雌は頼りになりません。アタクシだけが理解者。  
アタクシだけが共存者。アタクシだけが寵愛者。アタクシだけが、ア  
タクシだけが、アタクシだけが、アタクシだけが、アタクシだけが、ア  
タクシだけが、アタクシだけが――

「ツ落ち着きなさいバルス！」

「スバルっ、落ち着いてスバル！ 大丈夫だから！ ねえ！」

いやだっ、もういやだ。

これいじょうおれをおかしくしないでくれ。

おれをあんなからだにしないでくれ。

ま・と・わ・り・つ・く・に・せ・も・の・の・し・ろ・と・も・も・か・ら・は・な・れ・た・い・の・に・は・な・れ・ら  
れない。



おれのからだだがそのあいだにもくろく、いびつな、ばけものになっ  
ていく。

貴方の全身がくまなくアタクシの愛で満ち満ちるまで……ずっと、  
ずっとといてあげますよおっ……♪ 光栄でしょう、栄誉でしょう—  
くすくすくすつ、きひつ、げら、げらげらげらげらげら！ ずっと、  
ずくくと、ずくくと愛してあげますからねえつ、スバルくウんツ  
!!!!

—げらげらげら。げらげらげら。

—あくまがわらう。おれをみてわらう。

—おれのとなりでよりそうあくま。

—つぎはだれをあいそうか。つぎはだれになってやろうか。

—ぐるぐるぐる。ぐるぐるぐる。

—せかいがまわる。しんでもまわる。

—おわらぬおわり。くりかえすあくむ。

—おねがいだ。たすけてくれ●●●●●。

§ § §

魔女教徒を退けて既に2日が経っていた。

今回のループでどうにかしてカペラにダメージを与える事が出来  
たが、その代償は小さくなかった。

自爆攻撃によって失った命は数知れず。重傷者も出てしまい、治療  
するためにラインハルトの屋敷に駆け込めば、あつという間に屋敷は  
野戦病院と化してしまった。

地元の治癒術士や、カリオストロ、そしてエミリアの懸命な治療の  
甲斐あって生死の境を彷徨っていた怪我人達は無事快復に向かうこ  
とは出来た。それは喜ばしい話ではあるのだが、事はそれだけでは終  
わらない。

なにせ肝心の元凶はまだ生きているのだ。

ならばこそ急いで対策を練らなければいけなかった。

「——さて。事のあらまはしは理解してもらえたと思っていいいか？」

屋敷のある一室。カリオストロは机に手をつきながらその場の面々を見渡していた。

集められたのは全員が事件の当事者達。皆一様にして難しい顔をしており、どうしたものかと考えあぐねているようだった。

「ホンマなんやろな……？ その坊主が未来を予測できるつちゅーんは」

腕を組んだりカードが伺ってくる。普段の堂々とした態度は鳴りを潜めており、冗談だろ、と一笑に付すことも出来ていない。

先日あれほど苛烈さと冷静さを見せたカリオストロが、まさかこんな与太話をするとは思っていなかった。そして性質の悪い事にそれが冗談だとは到底思えなかった。

「僕は信じる事にした。スバルの予測は今の所、その全てが的中しているからね」

「信じられねえ事ばかりだけど、あんだけの中すればなあ……」

追随したのはラインハルトとフェルトである。時の剣聖まで領いってしまう、リカードの顔に更に皺が刻まれいく。当初は齟齬が気になつていたラインハルトも、時間が経つにつれて彼女への一定の信頼を預けるようになっていた。

ラインハルトが片手に持っていたお茶を傾け、対面に座っていた人物をちらりと見れば、用意されていたお茶菓子にも手をつけず、思案を続けていたアナスタシアが大袈裟に溜息をついた。

「頭の整理がおっつかんわ……じゃあウチの子がこうして怪我したんも、その子の予測通りってわけなん？」

「未来を視た上での行動をオレ達はした。だから既にルールからは外れている。ただ、本来の未来はもつと恐ろしいものだったぞ」

本来ならば魔女教達に奇襲をかけられてリカード達は全滅。それだけでなく、カペラの変身能力でエミリアもまた殺されていたのだ。それも、最悪の形で。

「この後、王都でその魔女教徒達が大暴れするって言つとったけど、それも予測通りにならないのやない？」

「細かい違いは出るだろうな。しかし、大筋は決して変わらないと思ってる」

「その証拠は？」

「これまでの経緯で納得出来ねえか？」

「それで空振りやったらどうするのかって聞いてるんや。1日だけとはいえ王都への物流止めろ、なんてそないな無茶な事したら、ウチらがどれだけダメージ受けるん分かってないやろ」

アナスタシアは不機嫌さを隠そうともしない。

当の彼女は事件があつた翌日、屋敷にすつ飛んできていた。

計画が失敗に終わったただけでなく、鉄の牙が大きく疲弊した事から素直にこちらの招集に応じた彼女は、当事者の治療をしてくれた貸しに、こちらの提案の場に赴いてくれた。(尚、画策していた計画については知らない、認めないの一言だったが)

しかしその提案内容というのがまた異質であつた。

曰く、王都で起こる騒動はカペラの能力による住民同士の同士討ちが狙いになるため、敵の侵入口を特定、妨害するためにも、国への商人の出入りを制限しようと言うのだ。カリオストロの中で襲撃が確定していると言つても、アナスタシアからすれば簡単に領けるような内容ではなかった。

「協力するって言ったのはそっちだろ」

「協力にも限度があるつちゅーことや。確かに、うちの従業員を助けてくれたんはほんにありがたい事や。感謝しとる。けどそれとこれとは話は別や。そのたつた一日で路頭に迷う商人もおるんやで」

アナスタシアは頑として領かない。

商会のトップとして常に選択を迫られている彼女は、部下のためにも、商会のためにも常に最善を目指す必要があつた。こんな胡散臭い話を鵜呑みに出来る程、彼女は軽くはなかつた。

テコでも動こうとしない事に業を煮やして、重ねて口を開こうとした直後。扉の外から今日何度目かになる叫び声が飛び込んできた。

恐怖におびえる悲痛な声。それは口を閉ざさせるには十分だ。

そして部屋に何とも言えない雰囲気が始めた頃、エミリアが慎重しく部屋に入り込んできた。

どこか疲れた表情を見せている彼女に、カリオスト口は我慢できずに質問を投げかけていた。

「スバルの様子はどうか？」

答えは分かっている。

そして思った通りにエミリアは力なく首を振った。

「……調子は良くないわ。うなされ続けていて、誰を見ても『黒い悪魔だ』って怖がっちゃって……ご飯も食べられないから、すつごく衰弱してる。今もラムが見てくれていているけれども……」

「そうか……」

——スバルはまだ壊れたまんまであった。

ありもしない幻想に囚われ続け、見えない悪夢に振り回され続けている。

普段のおちやらけた態度はどこにいったのか、見知らぬ相手はともかくとして、見知った相手にすら怯えて暴れる。そのあまりの変わり様はエミリアどころかラムにも少なからずショックを与えていた。

回復魔法は勿論のこと、医者を呼びつけても手の施しようがないと匙を投げるだけ。エミリアやラムが懸命に看護をしてきているが、回復の兆しは全く見えていない。

「あの兄ちゃんがまさか、なあ……信じられねえよ」

「心の病だからな。癒せるのは時間しかない……ゆつくりと経過を見ていこうエミリア」

「……うん」

しかし……治らないなら治らないままでもいいのでは、とカリオスト口は思っていた。

だってスバルはただの一般人なのだ。

不運な事に『死に戻り』の力を手に入れてしまったが、本来ならこのような悲劇に巻き込まれる事自体がおかしいのだ。

過去、何度となく騒動に巻き込まれ、その度に諦めずに頑張ってく

れたスバルをカリオストロは好ましく思っている。しかし結果として心を壊してしまった。自分という存在がいながら本当に……本当に申し訳なく思う。

(だから……だからもう、スバルの出番はこれでおしまいだ。これ以降、お前の事は絶対に傷つけさせない。お前を狙う敵も近づかせない。考察も、戦闘も、悪意も、悲劇も。全て……全てオレ様が受け止める)

今は休んでくれ。と静かに瞑目したカリオストロは気持ちを切り替え、再びアナスタシアに食いつきはじめた。

「さっきの話に戻るぞ。アナスタシア、お前の協力は必須だ」

「何べん言わせれば分かるん？ 空振りにならん根拠を言ってくれへんと動けんわ」

「そうやって渋ったせいで民や、お前達商人が大量に犠牲になってもか？」

「うちに責任おつかぶらせるんはお門違いやろ。と言うか、あんたらを疑つとるつちゅーんがまだ分からん？」

机上で二人の視線がぶつかり合った。

「現時点でそっちの子の予知通りになつとるのは認める。けどそれは予知やなくとも実現出来るやろ。うちの従業員がおいたした事やつてバルガはんがバラしたら分かる事やし、魔女教の襲撃やつて裏で口裏合わせれば出来ると違うん？」

「ツ、そんなこと、ある訳ないわー！」

「口だけではなんぼでも言えるで。ねえ銀髪ハーフエルフのエミリアはん……本当に違うって言えるん？」

「ツー」「……」「オイオイ」

「……アナスタシア様」

さしもの発言に一瞬剣呑な雰囲気になりかける。

ラインハルトが非難を含んだ口調で呼びかければ、当の張本人は大きく頭を振った。

「……堪忍。今のはちよつと言い過ぎたわ。でもウチも必死なのは分かかってや。鉄の牙がこれだけ損耗して、その上で博打に乗るような真

似はしたないんや」

「この私が誓ってもですか？」

「王選前までやったら喜んで領いとったけど、今のアンタは明確に敵陣営や。信じられへんな」

カリオストロは頭が痛くなった。確かに相手の立場になってみれば即答なんて出来ないだろう。

ただでさえ怪しい陣営に入り込んだ得体の知れない人物が予知ができて？ 肝心の予知は魔女教の襲撃を示唆するもので？ 当の本人は発狂して会話も出来なくて？ あまつさえ王都での取引を全て取りやめ要求だ？ 提案したカリオストロですら王選妨害のための自作自演にしか考えられない。

「ねえお願いアナスタシア。私達はスバルとカリオストロに過去何度も助けられてきたわ。だから今回だって起こりうる事だと思うの」

「悪いけど他所様の言葉をホイホイ信じられるほどウチは楽観的でもお人好しでもないんや。せやから——」

「お嬢。ワイは乗ってもええと思うで」

突っぱねるアナスタシアに、リカードが言葉を重ねていた。まさかの腹心の同調の姿勢に、彼女は信じられないと目を見開いた。

「リカード。アンタまで何を言うつもりや？ ほだされたん？ 冷静に考えーや」

「ワイは冷静や。お嬢はその場に居なかったから分からんかもやが……あんなんと内通出来る奴の気がしれんわ」

「演技しとっただけと違うん？」

「延々と体をぐちゃぐちゃのぐちゃーにされるほどの演技って覚悟キマリすぎとるやろ。対面して分かったがアイツは……悪意そのものや。ただそこにいるだけで周りが不幸になる、純粹な悪や」

「……」

「ワイには……嬢ちゃんらがそんな輩と付き合えるとは到底思えへん。それに」

「それに？」

「アイツを倒せるって言うんなら、今のワイはどんな選択肢でも飲ん

でもええと思つとる」

全員の視線が、悔しそうに握りしめられた大きな拳に注がれていた。

カペラという存在にたつぷり煮え湯を飲まされた彼は、明確に怒りに燃えていた。家族同然の団員達の大半が怪我を負い、そして少ない人数が亡くなったのだ。溢れ出る熱意は遠目で見ても分かる程で。彼が復讐を誓っているのは明らかだった。

「重ねて言う。今回の作戦にお前達の協力は必須だ。アイツらは二日後に必ず王都にやつてくる」

「……」

「何もしなければ最悪の未来が待ち受けている。そして、魔女教徒達はオレ様達でしか防げないんだ」

「……」

「それに、もし聞き届けてくれるんならこの力を禁じてやつてもいい」  
「……は？ 禁じる？ 何をや」

ぴくり、と反応したアナスタシアに、カリオストロがティースプーンを掲げて見せつける。なんだなんだと周りの注目を集める中、スプーンを中心として光が瞬けば、銀製だった筈のそれが黄金に輝いているではないか。部屋内にどよめきが広がった。

「……！」

「確かめて見ろ」

投げ渡されたそれを目を皿にして確認するアナスタシア。重さ。触り心地、そして傷を付けて……と一通り分析すると、呆れた表情を見せた。

「まさか、本当に金に変えた？ どういうトリックや」

「これは錬金術と呼ばれる力だ。理論上あらゆる物質を金に出来る」  
「……まさか」

「極意中の極意って奴だな。この術を真に扱えるのは元いた国でもオレ様だけだし、この国なら猶更だ。文字通りどんなゴミでも、どんな量でも一瞬で金になる……言いたいことは分かるな？」

「——えげつなッ。あーもう分かった。わかったわ！ うちの負けや

！でもなカリオストロはん。約束やで、その力、絶対にふるわんといてや！」

エミリアとフェルトは何のことやらと首を傾げていたが、周りはアナスタシアの言葉に痛いほど理解を示していた。金は、その貴重性からかこの世界でも高値で取引されているものだが、それを無尽蔵に生産できてしまえば、起こるのは価格破壊である。あらゆる取引は変動し、なんだったたら王都にも大混乱が巻き起こってしまう。

「カリオストロ、僕からもお願いするよ……その力を気軽に使うのは」「悪戯に混乱巻き起こして楽しむほどオレ様も耄碌してねえよ」

心底興味なさそうに手を振るえば、ラインハルトがほつと肩を撫で下ろした。もしエミリアというパトロンが見つからなければ、鍊金で荒稼ぎをしていたかもしれないが、真理の探求者である彼女は物欲よりは知識欲、見栄よりも実利を取る。決して心配しているような事態は起こらなかっただろう。

「おまけでも貰えへんかな〜って黙ってたら、とんだ蛇が出てきよったわ……ほんま恐ろしいわ」

「はあ?! 決めてたのかよ!」

「タダでも転ばんのがウチやで。最初から飲んでもええとは思ってたわ」

「……お嬢。お前なあ」

「深刻な話なんはよー分かっとなる。でもそういう時こそ利をとらんとあかん。よう考えてみ? この言葉聞きだせんかったらウチらは圧倒的な財力に押し潰されとったわ」

流石商人というべきか、先程までごねていたのは様子見をしていただけのようだった。ごうつくばりと罵るべきか、駆け引きを知り尽くしてると褒めるべきか……いずれにせよ彼女の口から言質を引き出すことが出来てカリオストロは安堵した。

「しっかし、ここまで仕切られると誰が陣営の頭か分からんわ」

「本当にね。でも、私達はカリオストロを信じる事にしたわ。これは私達の陣営の意思と考えてもいいわ」

「そして我々もです。そうですよねフェルト様」



「好きにしるよ、あたしはまだ王になるとは一言も言っただけぞ」

「はあく……竜歴石王国の命運を左右する事態に呼応して文字を刻む預言板。ルグニカ王国誕生のときより同じだけ歴史を積み重ねてきた石板。王不在の事態に、『ルグニカの盟約途切れし時、新たな竜の担い手が盟約の維持と国を導く。新たな国の導き手になり得る五人、その内よりひとりの巫女を選び、竜との盟約に臨むべし』という預言が刻まれたりするびつくり予言の書。みたいなあやふやなもんに乗っかりたくないやけど……ま、しゃーなしやな」

3 陣営の意思が改めて統一され。一時的ではあるが共同戦線を貼ることが出来た。これでようやくスタートラインに立てた。ならば後は策を重ねるだけ。

「じゃあ決行は二日目だ。それとなく仲間に伝えておいてくれ」  
「りよくかいや。名目はどないしよか」

「王都における大規模な軍事訓練、という事にしておきましょうか。兵にも既に連絡は行っていますので納得もして頂けるのではないでしょうが」

「心配なのは内通者やな……情報がもし漏れたらヤバないか？」

「いや。アイツらは来るさ。なにせ一番恨みを買ってるオレ様が王都に行くからな。オレ様が行けばあいつは絶対にくる」

「嫌な信頼やなあ……」

去り際の怨嗟の声といい、性格といい、カペラは泣き寝入りというものを全くしない存在なのは分かっている。だからこそここぞというタイミングで絶対に現れる。そんな確信があった。

しかし同時に懸念事項もあった。

「ただ、あいつは知っての通りかなり性格のひねくれた奴だ。万全には万全を期した方がいい……エミリア」

呼ばれたエミリアが背筋を伸ばし、そして期待の目でこちらを覗き込んでいる。やる気に満ち溢れている表情にカリオストロは思わず渋面を作りながらも、覚悟をして口を開いた。

「——この屋敷でスバルを守ってくれ。あいつらはきつとオレ様以外を突いてくるに違いない。だからこそ守りが必要だ」

「ええ。任せて」

しかし予想と違って素直に頷いたエミリアに、思わず面食らってしまう。てつきり王都にもついていくなんて言い出すと考えていたのに。考えが顔に出ていたのか、エミリアは苦笑した。

「本当はカリオストロに付いていきたいわ。でもカリオストロにも考えがあるし……それに、スバルはカリオストロにとって大事な人だもんなね」

「……」

「でも、そんな大事な人を守る役目を担わせてくれるのなら……私、すごく、すごく張り切っちゃうわ」

むんと胸を張る姿を見れば、今度はコチラが苦笑する番だった。苦しみ続けるスバルと過ごして心境の変化があったのか。こちらの心情をきちんと読み取って依頼を受けてくれた。つくづく、得難い縁が出来たものだとかリオストロは微笑んだ。

「フェルト様もこの屋敷に待機をお願いします」

「これで前線出張れよって言われたら暴れるぞ。……ただ、なんつーかなんもしなくて悪いな」

「気にしないで。一緒にスバルを守りましょう?」

「鉄の牙も王都での応戦頼めるか?」

「当たり前や。今度こそ奴らに目にももの見せたるワイ」

個々人がそれぞれの役割と仕事を理解すれば、既に準備は万端だ。

あとは待ち受ける悪意に立ち向かうだけ。しかしこれで万全かといえ、そうではないとカリオストロは思っていた。肝心の、もっとも重要なピースが抜けている。

「ラインハルト、アナスタシア。あと1つだけお願いがある――」

「カリオストロッ!」

「カリオストロさん!」

「カリオストロお!」

「おししよー！」

そして宿命の5日目、その朝。

カリオストロはその最後のピース達と王都で再会を果たしていた。

一目散に駆けてきたグランに強く抱擁されれば、カリオストロも軽く、しかしながらしっかりと抱擁を返すのだった。

## 第五十九話 足跡のない開戦

「——カリオストロ！」

熱い抱擁。自分よりも大きな存在に強かに抱きしめられれば、苦しい筈なのにそれを勝る安堵が全身を満たしてしまう。この世界では2度目の邂逅となったグラン達に、カリオストロは頬を緩めるのを止める事が出来なかった。

「苦しいぞグラン」

「あつ、ぐ、ごめん！ でも会えて本当に良かった……待たせてごめん」

「バーカ。オレ様を誰だと思つてやがる？ そつちがやらなくてもいずれ帰る手段は見つけてたさ。——ま、今回はたまたまそつちが早かったようだがな」

「相変わらず強気な奴だぜ……」

ぱつと体を離れたグランに悪態をつけば、小気味よくビイがつつこんでくる。そして瞳を潤ませたルリアと、同じく感極まったクラリスも再会を祝つて代わり番こに抱きついてきた。

王都詰め所前。初めてこの世界に放り込まれた時、色々とお世話になったこの場所で、カリオストロはグラン達団員との再会を果たしていた。

アナスタシア擁する商人達と、ラインハルトの部下である兵士達のネットワークのお陰である。カリグラという医者の方で借り暮らしをしていた一行。そんな彼らと騒動が起きる前に出会えたのはカリオストロにとつて非常に心強い事だった。

「みんなで頑張ったかいありましたねつ、グランつ、クラリスさんつ」「うんっ☆ でもでも……なくんか物騒な予感が……ねえおししょー。後ろの人達は？」

クラリスがちらりとカリオストロの背後に視線を向ければ、そこには屈強な体格の獣人と、雰囲気のある騎士が二人佇んでいるではないか。グランが思わず庇うように前に出れば、居並ぶ存在が揃つて挨拶

をし始めた。

「初めまして。君がグラン、でいいかな？」

「はい。僕はグラン。ただのグランです。騎空団……えっと、とある傭兵の団長をやらせて貰ってます……貴方達は？」

「再会もそこそこに申し訳ないね。僕の名前はラインハルト・ヴァン・アストレア。この王都ルグニカで剣聖と呼ばれているよ。今は王選候補であるフェルト様の騎士を任されている」

「ワイは『鉄の牙』団長のリカード・ウエルキンや」

「ユリウス・ユークリウス。同じく王選候補のアナスタシア・ホーシン様の騎士をしている」

居並ぶ面々はその誰もが見劣りしないほどの実力を持っているとひと目で分かる猛者達だ。しかしながらグランも三人に囲まれながらも決して怯まず、笑顔で握手に応じる余裕ぶりを見せれば、三人の表情が少し変わった。

「カリオストロの要請だね。キミ達がどうしても作戦に必要なと言われて来て貰ったんだ」

「作戦？」

「ん。まあ呼ばれていきなりで何のこっちゃと思うが……」

リカードが頬をかきながら見た先にはカリオストロが。

彼女は言われるまでもないと引き継ぎ始めた。

「定番のトラブルさ。慣れたもんだろ？」

「だよなあ……何となく察しはついてたけどよお……相棒、どうするんだよ？」

「ははは、そんなの決まってるさ。それで……どうすればいい？」

グラン達は当然のごとくやる気満々だ。むしろ予想していたと言ってもよい。彼ら騎空団のメンバーは常在戦場の精神というわけではないが、いついかなる時でもトラブルに身を投じる覚悟は出来ていた。

なにせ一行は行く先行く先で事件に巻き込まれる、トラブルメーカーでありトラブル解決のプロだ。

自らが諍いの種になることもあるが、そのほとんどがトラブルの方

からやって来る程で。そして、一騎当千の団員に恵まれている彼らはその全てを解決してきた歴戦の存在でもあった。

「今日、この王都で暴れようとする悪い奴をぶちのめすのに協力してくれ。ただ、敵は変装や変身を得意とする奴らだ。あまつさえ住民を巻き込み、魔獣……つまり魔物に変化させて囷にしてくる可能性だってある」

「……住民を?!」

「うへえ……性格悪いなあ」

「ああ。正直、魔物にされたらお手上げだと思って欲しい。一応市民には外に出ないように警戒は促しているが。もしも攻撃してこない魔物がいたら保護してやってくれ」

——重ねて、詳細がグラン達に伝えられる。それは要約すれば王都を4つに分割し、それぞれのチームで王都の混乱を防ぐものだった。

リカードウエルキン率いる『鉄の牙』は北部。

ラインハルトは南部。

グランとルリア（とビイ）とユリウスは西部。

カリオストロとクラリスは東部をそれぞれ担当。

民衆に紛れる魔女教徒達をこのメンバーと王都兵士達で手分けてして叩く作戦だ。

「了解。クラリス、ルリア、それで問題ないかい？」

三者三様の頼もしい返事にカリオストロも鷹揚に頷く。が、そこに不協和音が混ざった。

その発生源は透き通るような紫髪を持つ、ラインハルトとは違った冷たい印象を与える美丈夫、騎士ユリウス・ユークリウスだった。

「ひとつ疑問が。——君たちの実力は確かなのかい？」

「……」

「誤解を恐れずに言えば……正直、キミ達に一任出来る程実力があるように思えない。余りにも若すぎる。トカゲの精霊と契約をしているようだが、どこまでやれるのか……」

「んなっ！ 兄ちゃんこそ同じくらい若いだろ！ あとオイラはトカゲじゃねえ！」

「失礼だが、私は若いがそれなりの場数は踏んでいると自負している。今回の作戦は非常に重要なモノだ。足を引つ張られるくらいなら、むしろ抜けて欲しいと思っっている」

相棒を軽んじられたビィが、ぶんすかぶんと赤い顔を更に赤くする一方で、グランは小さく苦笑するだけだった。

今まさに挑発されているのに、何故こうも落ち着いていられるのか。ユリウスは思わずむっとうしてしまふ。

「すみません。確かに僕は若いですが、そこそこ手伝えるとは思っています」

「……そこそこ？　そこそこでは困る。浮ついた気持ちで参加されても迷惑なだけだ。大体その少女を連れていくつもりか？　物見遊山ではないんだぞ」

「オイオイ、何ヒートアップしとるんやユリウス」

なぜだか知らないがムキになるユリウスにリカードは呆れてしまふ。ラインハルトも苦笑するばかり。そして流石の物言いにクラリスが食ってかかろうとするのだが、

「ならお前が抜けたらどうだ？　ユリウス」

その前に、カリオストロが冷や水を浴びせていた。

全員の注目を集める冷えた物言いに、当事者であるユリウスも思わすたじろいでしまふ。

「オレ様も丁度お前に同じ事を言おうと思つてたところだ、『お前は若すぎる』『実力は本当にあるのか？』つてな」

「ツ……カリオストロ様。私はアナスタシア様の騎士です。実力は保証いたします」

「はっ、どうだかな。大体オレ様がわざわざ呼びつける相手が素人だと思つてんのか？」

「それは……」

アナスタシアが送ってきたユリウスは、彼女肝入りの戦力なのは本人の口から聞いている。リカードに比肩する実力を持つ、能力・人格共に認められた「最優」の騎士。

しかしながら、カリオストロにはそんな世間一般で知られる肩書、

実績など興味はない。

だってグランに比べたら、所詮どんな天才でもただの凡夫に過ぎないのだから。

「いいか。この際だから言っておくぞ——グランはこの天才であるオレ様をゆうに凌ぐ力を持っている。それこそ、ラインハルトのレベルのな」

まさかの宣言に、グランらを除いた全員が驚いた。

あの傲岸不遜を地で行くカリオストロが、自分より上だと認める相手？ それも剣聖と同じくらいの力を持っているだなんて！ 詰所の中でどよめきが広がり、当のユリウスに至っては認められないと今にも声を荒らげそうになっていた——その時だった、グランとラインハルトが同時に動いたのは。

「む」

「よつと」

「——ッ!？」

不意に飛び出した木製の剣。それがグラン、ラインハルト、ユリウスの三人の首を狙って地面や壁、天井から襲いかかっていたのだ。ユリウスは首筋でピタリと止まった剣に命を握られていたが、他二人は瞬きもしない間にソレを切り捨てていた。

「これで満足か？」

パチンツ、と指先を鳴らせば錬金術で生成された剣は床に戻る。

ユリウスは全身から冷や汗を溢れさせながら、自分の首筋を撫でるばかりだった。

グランの反応は言われた通り、ラインハルトにも勝るとも劣らないモノだった。十二分に余裕を持って、確実に攻撃を捌ききっている。その究極の機能美とも言える一挙動を見ただけで、彼が今まで積み重ねてきた鍛錬と、どれほど過酷な経験を積んできたのか、ユリウスは骨身に染みる程理解した。

「カリオストロ。急に試すのは困るんだけど……」「そうやって煽るのはよくないよ」

「うるせえうるせえ。実力行使でないと分からなそうだったから仕方



ねえだろ」

二人のお小言を耳を塞いで聞き流す少女錬金術師に、ユリウスは今一度向き直る。そして整った姿勢で頭を下げ始めた。

「すみません。カリオストロ氏。貴方の言う通りです……疑っていました」

「ふん。頭を下げる相手が違えだろ？」

「……グラン君。すまなかった。私は君を侮っていた」

「気にしていませんよ。僕にももう少し威厳があればよかったです  
が……今日はよろしく願います」

なんともまあ大人対応ではないか。ユリウスは自分が恥ずかしくなった。

持ち前の正義感と実直さから衝動的にふっかけてしまったが、結果として圧倒的な実力を見せつけられ窘められるなんて。しかも年下に！

しかしユリウスは良い意味でひねくれていない。向上心の高い彼は、反省はしても後悔はしない。既に切り替え、この先の事を見据えて行動しようと考えていた。

「しかし……君の実力は分かったが隣の彼女も連れていくのかい？  
まさか彼女も達人……？」

「ご、ごめんなさい私はそういう事は出来なくて……」

「ルリアはその、特別です。僕が守りますし、彼女には彼女にしか出来ない力があります」

「はいっ、グランと私は一心同体ですから！」

「!? そ、そうか……しかし恋人というのなら猶更、安全な所に居た方が……」

「はわわわわっ!? ち、ちがいますっ！ 恋人とかそういうのじゃー！  
「オイそこ、交友は後回しにしろッ」

イライラしたカリオストロが釘を刺せば、周りの注目が改めて集まった。

カリオストロはひとつ咳ばらいをすると、やがて皆に聞かせるように朗々と語り始めた。

「魔女教徒どもは王都を舞台に興味の悪い陳腐な寸劇を繰り広げるつもりだ。そしてその劇の結末は、碌でもない悲劇で固定だときた——そんな茶番劇を、許していいと思うか？」

「今ここに集まった全員は陣営は違えど、そして事情は違えどその意思は同じだと思ってる」

「オレ様達だけが、奴らの狙いを知る。そしてオレ様達だけが、奴らの寝首をかける」

「そしてオレ様達だけが、奴らを倒せるんだ……！」

「気合を入れる。武器を取れ。悪を絶ち、家族や隣人を守れ。そして後世に語られる魔女教の逸話に、オレ達という存在を刻みつけろ！」

——全員のかけ声が高らかに上がり、とうとう作戦が開始された。

§ § §

「しっかし……おししよー様っ、本当に無事でよかつたよー！」

「当たり前前だ。お前の中のオレ様はそんなに不甲斐なかつたか？」

「あはは……まあ全然やられてる所は想像できなかつたデス……それよりも！ ししよーが居なくなつた後、うちらがどうなつたか聞いてよ聞いてよー！」

雲一つない快晴の空の下、定められたポイントに移動中のカリオストロとクラリス。二人きりになつたとたん、クラリスは積年（実際は1か月だが）の思いを、ノンストップで語り始めた。

離れていた間、どんな苦労やどんな変化があつたか、そして団員達がどれだけカリオストロを心配していたか。そしてグランがどれだけカリオストロを救おうと尽力してたかをしっこく、しっこく、これでもかと語る語る。

一度仕事スイッチが入つたからには無駄話はしたくないし、むしろ集中しろと叱りたい気持ちも浮かんできていたが、とんと聞かなかつた元の世界の逸話は耳障りが良すぎた。それとなくクラリスを諷めながらも、グラン達がそれだけ自分の為に動いてくれたのだと思うと、自

然と口角が上がってしまふ。

「——それでねっ、それでグランったら猛反対受けたのに『団長命令だ。僕が行く！ 行ってくたら行くんだ！』って珍しく駄々こねちゃつて！ カタリナさんやラカムとかが猛反対！ でもでも結局オイゲンとかロゼツタがみんなをとりなして〜」

「……面白い話だが、どんだけ喋るんだクラリス。その話は後でも出来るだろ」

「ええ〜！ ぜんつつぜん話し足りないの〜っ」

「お前な……」

「それに今度は私がおししよー様に何があつたか聞きたいよっ、この一か月間どうしてたの〜？」

しかしながらどれだけ喋る事やら！ 開いた口から洪水の如き勢いで言葉が溢れ出続ける！ 何してたの？ 怪我とか病気にしてなかつた？ 親しい人出来た？ それにしても即トラブルに巻き込まれるグランみたいっ！ あっ、そう言えばこっちで美味しい料理とかある?! 私達こっちに來てパンとリンゴと干し肉ばかりだから、もしよかつたら教えて欲しいな〜っ……などなど。

これにはカリオスト口も耳を塞ぎながら唸らざるをえなかつた。

「うるせえ！ あとで好きなだけ答えてやるから今は集中しとけ！」

「むう〜……は〜い」

「……」

「……ししよー？」

「………はあ、でも……なんだ。お前達が来てくれたのは本当に感謝してる。ありがとな」

「おっ☆ おししよー様の感謝の言葉〜っ、レアかもっ☆ その言葉はグランや他のみんなにもしっかり伝えてあげてね〜☆」

言われなくてもするわ！ と生意気な弟子の背中をお返しに叩いたところには、カリオスト口達は目的地に辿り着いていた。

中央に噴水の置かれた大きめの広場。そこにはまばらに住民が歩き回っていた。ラインハルトは住民への事前勧告をしたとの話だったが、これでも減つた方なのだろうか？ だとしてもまだ多いと言わ

ざるを得ない。この中から変装する魔女教徒達を探しだすのも、至難の業だろう。

「この中からどうやって探せばいいの……?」

「さあてな……悔しいが、変装されてる以上は見分け難い。注視しておいて騒ぎが起こつたら駆けつけるしか方法はねえな」

「なんかこう目立つ特徴とかないのかなあ……それこそ歩き方が怪しかったり、なんか刺青が入ってたり? あと変な声を出すとか!」

「……あるっちゃあるが」

「あるの!? ならそれを確認すれば!」

「大体が一目見て分かるもんじゃねえんだよ。所持品検査ぐらいしかねえ」

一番手つ取り早い方法と言えば福音書だろう。カリオストロは以前、別荘で読んだとある本の事を思い出していた。魔女に魅入られし信者達は、あくる日手元に福音書が届くらしい。そして以降の人生を魔女のために費やす事になるとか。

言ってしまうえば、福音書は魔女教のパスポートのようなものだ。基本的に彼らはその書を肌身離さず持っているというので、所持品検査をすれば分かる可能性は高い。

——が、一日に何千、何万人が出入りするこの王都で、ひとり残らず綿密な検査というのも難しいだろう。今日に限っては東西南北全ての門で簡単な検閲こそしているが、それで魔女教徒達を炙り出せるかと言えば疑問だった。

(他にあるとすれば……恐らくは魔女教の奴らが持っている特有の匂い、か。だが先日の戦闘だとスバルほど特徴的な匂いはしてないようだしなあ……)

結論としては、どうしても受動的にならざるを得ないだろう。歯がゆいが、もう自分達に出来ることは、起点となる騒動を逃さぬように目を配る事だけだった。

「ふん……襲撃はまだのようだな。折角だからお前の役割について話しておく」

「役割?」

「ああ、言つてなかったがお前は作戦の切り札と言つてもいい」

「切り札?! え、ちよ、それつてどういう事ししよー!」

黒幕はどんな傷を受けても無限に再生できる相手だ。そして有効な攻撃手段は体そのものを再生できない体にするか、塵一つ残さずにこの世から抹消するしかない。

そしてクラリスが持つ存在崩壊は分解に特化した攻撃だ。文字通り塵すら残さず、カペラという存在を消し去るだろう。

幸いな事に、カペラは能力こそ強力だが戦闘センスは赤点だ。足止めをして、クラリスの力でその名の通り存在を消してしまう。それが一番良い手だとカリオストロは考えていた。

「オレ様がここぞというタイミングでお前に声をかけたら、全力でソイツに存在崩壊を使え。それがどんな姿をしていようと、だ」

「……確か、その人は何の姿にでもなれるんだっけ?」

「ああ。過去何度も煮え湯を飲まされた。そいつは遭遇した人の記憶でも読めるのか、絶対に知らないと思う相手にも変身してくるぞ。例えばお前の両親にもな」

「りよ、りよーかいししよー! ……今回の敵は戦いにくいなあ」

強敵相手に、クラリスのやる気は萎えていない。むしろふんふん、とやる気を露わにしている。

そんな彼女が自分の隣に居ると思うと、とでもではないがここが異世界ではないように思えて仕方がない。得体の知れない世界を探すだけでも時間がかかるというのに、よくぞまあグラン達はこっちに來てくれたものだ、と感心してしまう。

同時に生涯において最も信頼のおける彼らが、この騒動の解決に乗り出してくれた事に、それこそ大船に乗ったような安心感を覚えている。

(……だが、油断なんて出来ない。出来るはずもない)

過去3回の死に戻りの中でも彼らがこの世界に來ていることは間違いない。それなのに結果は星晶獣達の暴走だ。百戦錬磨、勇猛無比、一騎当千の名を欲しいままにするグランがいて、尚そのような事態になつてしまうのは、何よりも警戒に値すべき事であった。

星晶獣達の暴走はルリアにしか為せない事を考えると、グラン達の身に何かがあったと考えるのが自然だろう。例えば脅されて仕方なくルリアが力を使ったとか。例えばグランが死にかけてルリアが暴走したとか。

(脅された、という線はありえなくもないかもしれない。けど、だとしてたら星晶獣同時使役は無理がある。ルリアを暴走させる力を持っているとか? ……それとも、グランが死ぬケース? グランとルリアは体を共有している。団長の死⇨ルリアの死となるから、死に間際の暴走と考えればこつちも可能性はない訳ではないが……)

そもそも、グランが死ぬ所は想像出来なかった。

過去、何度世界を揺るがす敵と戦っても、何度即死するような攻撃を見舞われても、その持ち前の実力と豪運で平気な顔で生還しているのだ。例え相手がカペラだとしても、まかり間違っても殺されるとは思えない。

(騙されはするだろうが、アイツのここぞという時の勘は異常だ。きつとカペラの変身にも気付く。そして無限に再生する体だと知ってしまえば、その対策が出来ない訳もない……じゃあ、なんだ? 何がグラン達を死に追いやる? 他にいるのか? そんな奴が………さてよ?)

一人、まだ正体も知れない謎の敵がいるではないか。カリオストロは手元の手配書に視線を落とした。そこにはカペラともう一人、お尋ね者の顔が描かれていた。

(こいつが……あのおかつぱのガキがそうだって言うのか?)

見かけも、そして雰囲気も子供そのもの。カペラ達の周りをうろちよろする時点で怪しいが、脅威も感じ取れない。グランが戦えば千どころか万回戦っても傷一つ負う事ないほど完勝するように見える。しかしながら、ありえない、と断じれるかと言えば、答えはNOだった。

「それは子供……? その子ももしかしてヤバい感じ?」

「……かもな。だがこいつは正体不明だ」

「ふーん……なんか見た目はすごく悪い事しなさそうな顔してるのに

ね」

「人は見かけによらねえもんだ、超絶ぷりちーなオレ様が錬金術師の開祖だったりするだろ?」

「最強可愛いクラリスちゃんが最高の錬金術師だったりねっ☆」

「どこが最高だ。このへっぽこ錬金術師め」

ひどいっ! とショックを受けるクラリスを放置して、カリオスト口は再び広場を監視し始める。しかし肝心の襲撃は、彼女らの努力をあざ笑うかのように起こらない。

「それでね、グランときたらねっ——」

「うん」

「ルリアちゃんはそれで何て言ったと思う? そしたらさ——」

「へえ」

「ラカムとか、カタリナさんとかももう驚いちゃって! だから——」

「ああ」

「それで——……来ないね、魔女教」

「……」

待機し始めて既に四半刻は過ぎている。

直上に座していた太陽は傾きつつあり、間もなく街に朱が差す頃合い。  
い。

それまで立て続けに話題を投げかけていたクラリスも折れ、ぽつりと零してしまっていた。

警戒があだになったか? それとも今も虎視眈々と隙を狙っているのか? 待てども待てども現れない魔女教徒らに、二人の監視の目には自然と不安が宿っていた。

「ねえおししよー様……疑う訳じゃないけど」

「みなまで言うな。言いたいことは分かる」

カリオスト口はため息をついた。

過去2回の王都への襲撃はほとんど同じ時間だった。

だから待ち構えたというのに、今回は時間を過ぎてもまだ事件は起きていない。

カペラを痛めつけたのが原因か?

大々的に警備を増やしたのが原因だろうか？  
それとも——何か他の要因があるのだろうか？

「空振りかなあ……」

「まだ決まった訳じゃない。そもそも空振りになるのは喜ばしい事だ。街への被害が起きないんだから」

「そっか……そうだよ。事件が起きないのはいいことだもんねっ☆」

持ち前の樂觀さで途端に笑顔を見せるクラリス。それならどうせなら観光とかしちゃう？ とおどけはじめたが、カリオストロはそれどころではなかった。

予測が大幅にズレる。それは死活問題だった。

この作戦は過去の死に戻りを元にしたものだ。

騙し討ちの申し子であるカペラ。彼女の襲撃タイミングが分からなければ、また後手後手の対応になってしまう。身内に犠牲者を出さないようにするのは、至難の業になるだろう。

（考えるにオレ様以外を狙いに行つたか。だとすればエミリアやスバルが……クソツ、もう少し戦力を屋敷に送るべきだったか？ いや駄目だ。街の被害を極力少なくするには、この配置が最適だった……！）

不安がよぎる。

スバルや、エミリアは無事だろうか？

屋敷は襲われていないだろうか？

もしもアイツが大挙して屋敷を襲っていたら——

（いや、エミリアに任せると言ったんだ！ オレ様はオレ様で自分の事に集中するんだ。今何が出来る？ 何をすればいい？ 頭を廻すのは得意だろ天才錬金術師サマよ！）

駆けつけたい気持ちをぐつとこらえ、再び市井に目を通すカリオストロ。

しかし周りを、それこそ穴が開くほど観察したところで平和なのは変わらないまま。

流石に今日は来ないのだろうか。諦念が心をなみなみと満たしつ



つあった——その時だった。

「！」

「笛……っでもしかして！」

警笛。それは異常事態を知らせる警告。

雑踏の音に交じって、かすかに聞こえた笛の音。

それが聞き間違いでないことは、お互いの顔を見れば良く分かった。

とうとう襲撃が始まったのだ。

二人はほとんど同時に駆け出していた。

「東地区の方だ！」

「東……グランがいる方だよね!? よりにもよってグランを襲撃するなんてっ！」

普段なら同意するように軽口を飛ばしていたが、到底その気にはなれなかった。

末路を知っている。ただそれだけで不安になってしまふ。だが同時に「グランが相手取るなら」という安心感もあり、その2つが綱い交ぜになってなんとも複雑な気分だった。

「あわわ、ししよーっ！ 分解魔法うちのと同じくらいの爆発音だよ!」

「派手にやってるようだな、急ぐぞクラリス！」

東へ急げば、程なくして平和な街に相応しからぬ重低音が届いた。大きな爆発だ。立ち並ぶ住居の奥で土煙がもうもうと立ち上っているのが見える。

ただならぬ戦闘音に二人の足は否応なく速まる。すると、程なくしてカリオストロ達の眼前に飛び出すのは狼ウルフのような魔獣ガム。

牙を剥き、明らかに理性を失ったそれは、二人を見ると遮二無二に飛びかかってきた。

「クラリス、最初に言ったが住民が化けられている可能性がある！」

「ソレは聞いているけどこの子はどっちなのー!？」

「コイツは……ただの魔獣だ！」

クラリスが叫び返した時には終わっていた。

地面から生えた槍は魔獣を空中に縫い留め、その息の根を一撃で止

めていた。

「見分け方はっ?!」

「初手で攻撃してきたら魔獣! オロオロしてたら元住民!」

「ら、ラジャーッ!」

カリオストロが先導する形で走っていく。

行き先は襲撃の起点。連鎖的な小爆発がしきりに起きているその場所だ。

自らの勘はそこに事件の鍵があると訴えていた。

「カリオストロ様!」

「無事か!」

「なんとか……ですがこの程度であれば、我々の敵ではありません!」

当然、途中で魔獣相手に戦闘する兵士の姿も見受けられたが、駐留していた兵士達は不意の襲撃にも隊列を崩さず対処出来ているようだ。三人一組で魔獣と対峙し、危なげなく勝利を収めている。

準備した甲斐合ってか兵士達含め被害は軽微。

魔獣退治も順調に進み、加えて魔女教徒と思しき人物の捕縛も行われているようだ。

以前見た地獄絵図が回避出来たことに心の中で安堵する一方で、カリオストロの中で違和感だけがむくむく膨れ上がる。

「——違う」

「え?」

「想定と違う。魔獣の全体数が少ないのは納得出来る。けど誰一人として住民が魔獣に変えられていない」

「それって……どういう事?」

「住民を化け物に変えてしまう力を持つのは黒幕だけ。つまり、ここにはソイツが居ないって事だ」

「!」

やはり、筋書きが変わっている。

心の片隅を占めていた嫌な予感が現実となろうとしていた。

「もしかして屋敷の方に……!? すぐに戻らなきゃ!」

「可能性は高いだろうな……だがまずは王都を優先だ」

「でもグランが此処にいるなら……！」

「駄目だ」

本音を言えば自分もすぐに向かいたい。

しかし今向かえば、それこそ敵の思う壺かもしれない以上、カリオストロは動けなかった。

（他人を苦しめるのに余念のないアイツの事だ。ここぞという所で一番嫌がることをしてくる筈。ならばこそエミリア達を襲う可能性は高いが——）

釈然としないのはアイツがいない状態でカペラが王都襲撃を始めた事だ。

こちらの待ち伏せを見越しているなら、そもそも襲撃を起こさない方が断然有利になれる筈。なのに、今の奴らは悪戯に戦力を消費している。そんなように思えた。

（こっちは陽動のつもりか？ それともカペラは重症で動けない？ まさかカペラ抜きで王都を攻め落とす事が出来ると本当に思っているのか——？）

よぎる。手配書に描かれた不気味な子供の姿が。

あの子がこれからグランを殺し尽くすとも言うのか？

それともルリアが暴走する何かを、そいつは隠し玉として持ち得ているのか？

暗中模索。五里霧中。思考の海に没頭していたカリオストロだったが、不意に現実へと引き戻されてしまう。

視線の先には、空。

快晴だった筈の王都は気付けば暗雲が立ち込めていた。

「」

「え……？ 何……？」

空中の雲をかき集めたと云わんばかりに分厚く成長したソレは、堰を切ったかのように大雨と暴風を吹き荒らし始める。

自然と歩みを止めていた二人は、その空模様を釘付けになってしまふ。兵士達も、そして王都の住人全員が一樣に空を見上げていた事だろう。何もいない筈の空間に、何かが出現しようとしているのだから。

ら。

二人の髪や服がバタバタとたなびき、強かに叩かれたと錯覚する程の風量に思わず顔を覆う。そして、耳をつんぎく雷鳴がけたたましく鳴り響いたと思えば——それは、顕現していた。

「——ティアマトー！」

街中の人々が目撃した。

街を見下ろす程の巨大な、美しい3つの龍を。

そして龍の背に悠々と跨る美しき女人を。

女は苦しむように顔を歪めており、両手で頭を抑え悲鳴にも聞こえるような強風を垂れ流しているようだった。

「嘘、コロツサスも……リヴァイアサンまで！」

次々と星晶獣達が顕現していく。

比較するのがおこがましい程巨大な全身甲冑の絡繰からくり騎士。

体のあちこちから蒸気を至る所から噴き出し、馬鹿げたほど巨大な大剣をぶら下げたソレは、怒りに満ちた駆動音を響かせている。

これまた見上げる程巨大で、どこまでも長い全容を誇る青き龍。

街の上空でとぐろを巻いて浮かぶそれは、嘆きの咆哮をあげ、一帯に洪水と見まがうほどの大雨を降らせ始めている。

球根のように肥大した巨大なドレスを纏った美巨人。

彼女は両手で胸を抑えて悶え、抑えきれぬ衝動が大地を揺らし続けている。

神々しく光り輝く四本腕の戦乙女。槍、斧、杖、剣を携えたそれは、周りに4つの光を衛星のように飛ばし、憎々しげに一角を睨んでいる。

おどろおどろしい幽霊船と同化した、ヴェールを下げた黒き未亡人。

怨嗟満ちる船の軋みを周りに木霊させ、憎悪の余り一帯の生気を吸い取らんとしている。

星の民に作られた生体兵器。

島一つを容易に滅ぼす彼らが、王都に集合していた。

かつてグラン達が戦い、鎮め、そして仲間として共に過ごした召喚獣は、ありとあらゆる負の感情に囚われ、理性を失っていた。

「様子が……それにどうしていつぺんにあの子達が！」

「ッ！」

「って師匠!? ちょ、ちょっと待ってよ！」

気付けば脳が走れと命じていた。

心臓が今までになく早鐘を打っている。

確かめなければいけない。

グランを助けにいかねばいけない。

何度となく苦渋を飲み、ようやくここまでたどり着いたのだ。

もう二度と身内を失わせない。二度とグラン達を失わせない!

手の届く範囲でそれを許しては、今度こそ自分はおしまいだと思っ  
た。

(……お前はそこまでの男じゃないだろ? どんな窮地だって切り抜けてきた。オレ様が認めた、唯一隣を歩ける男なんだ。こんな所で死ぬタマじゃねえ。ルリアも、ビィだってそうだ。どんな逆境だって、グランは不可能を可能にしてきた! オレ様が一緒に居れば猶更だ! だから、だから頼むよ。オレ様のらしくない考えを打ち消してくれ。予想を飛び越えてくれよ——グラン!)

走る。

走る。走る。

走る。走る。走る。

石畳を走る。角を曲がる。

脚がつんのめりそうになっても。

肺が悲鳴を上げてても。走っていく。

走り、走り。走り——そして辿り着く。

辿り着いて、しまう。

「ルリア！」

ルリアは、そこに居た。

ハイライトを無くした目で。

糸の切れたマリオネットのように座り込み。

視線の先にある何かをぼうつと眺めている。

元は立派な家が建っていたであろうその場所は、一面が更地になっていた。

焼け焦げた跡、鋭利に切り裂かれた煉瓦。穿たれた地面。至る所に突き立った矢の数々。戦争でも起きたのかと見まがうほどだった。

「相棒、目を、目を覚ましてくれよう……なあ、相棒……っ！　こんな、こんな所じやオレ達の旅は終わらねえだろ……相棒う……！　うえ、うえええええ……っ！」

ビーが。あの小さなドラゴンが。

普段の強気な様子も殴り捨てて、それにすがりついていた。

瓦礫に身を預け、空虚を見つめるのは見覚えのありすぎる顔。

自身が唯一認めた、懸想にも近い程信頼する相棒。

「グ、ラン……嘘、ですよね……グラン……？」

グランが、胸に剣を突き立てられて倒れていた。

——また、救えなかったのか。

カリオスト口は、全身から力が抜けていくのを感じた。

## 第六十話 52回目の緒戦

「えつと……ここに来ればいいんだっけ」

都を囲む、すつごく巨大な石壁。四方に作られた巨大な門戸が今日も元気に大口を開けて人々の行き来を受け止めてる。

でも事前に聞いていた通り、いつも以上に物々しい感じもしていた。

お仲間によると、今日に限ってやけに兵士たちの警戒が強いみたい。積み荷検査が問答無用で行われるということで、予定通りに仕込みをするのが難しいって呟いてた。

事前に仕込めた分もあるらしいけど、それでは計画通りには到底ならないんだって。

なんか仕方なさそうな気がするんだけど、真摯に報告したら、その人はカペラにすぎたずたに引き裂かれちゃった。決してその人のせいじゃないのに、本当に可哀想だと思う。

(まあでも、あの日からカペラはすくつとごきげん斜めだったもんね……)

やる気なさそうに出かけたとおもったら、帰って来たときには体の半分がピッカピカで、今までにないくらい怒り散らしていたのは本当にびっくりした。

聞けばカリオストロ、っていう子にやられちゃったらしい。

いつもなら変身すればすぐ元通りなのに、体半分を金そのものにされてしまったせいであまり変身出来なくなっちゃったとか。可哀想。でも金ピカカペラもなんとなく似合っていて笑えちゃうのは秘密。……我慢できずに笑ってしまっただけ何回か殺されてしまったのは反省。

それにしても『カリオストロ』、ああ『カリオストロ』。その名には覚えがある！

今、私とカペラの中で最もホットな存在『ナツキスバル』君に教えて貰った名前だ！ 友達かな？ それとも恋人？ 今一つ立ち位置は分からないけど、その子がカペラをあんな姿にさせたと聞いて、興

味津津だ。

人は見かけによらないものだね。見た目少女のカリオストロ然り、変身出来るカペラ然り、そしてこゝんな、しち面倒くさい事をしてい  
る『私達』然り。

「——ほら手荷物はソレで全部か？ 洗いざらい出せよ」

「おいおい！ なんだってんだ一体！ 別に危ないものなんでもって  
ねえよー！」

「いいから出すんだ。今日は抜き打ちの軍事訓練なんだよ、ツいてな  
かったな……うん、よし。通っていいぞ。じゃあ次」

「……ん」

列を為す旅人や商人達の中に紛れて順番を待てば、ようやく自分の  
番。

この日のために持ち物はナイフ一本と干し肉だけの見た目も中身  
も旅人コーデだ。外見が子供なのはマイナスかもしれないけど、顔パ  
スで通れるの間違いなし。

「坊やは旅人かい？ お父さんやお母さんはいないのかな？」

「……いない。一人」

「そうか、なら手荷物を……」

「おい……ソイツは」「え？ ……！ 坊や、ちよつとこつちに来てく  
れるかな？」

「……ん？」

……と思つたら目を付けられて。あれよあれよと連行されてし  
まった。

あれ？ この流れは初めてだ。前はこの手で上手くいったって  
うのに……本当、予想外ばかりで面白い。せつかくだし、私は大人  
しく兵士達についていくことにした。

（手配書まで出来てる……これももしかしたらナツキスバル君……い  
や、カリオストロのせいなのかな？）

目下、私が怪しんでいるのはその二人。

はたして彼が起点なのか、彼女が起点なのか。どちらにせよ私は二  
人に夢中だ。叶うのであればもう一度二人きりになつてみたいと思



うくらいには。

「この子供が本当に？」

「いや、しかし手配書そつくりだしな……」

(……問答無用で殺されないあたり、まだ怪しい止まりみたい)

元はと言えば誤解されて始まったカペラ達との関係だ。

お前も『末席』に名を連ねているのなら働け、と言われたけど、『末席』に入った覚えは全然ない。ただ宿と飯代のために働いていると言ってもいいし、なんだったらもう働きすぎる程働いている。

「よし……坊主。ちよつとここで待っている」

「……ん」

「手荷物は預かっておくからな。暴れたりしたら分かっているだろうな」

「……ん」

「……なんだかなあ」

気が付けば私は兵士さん達のお部屋……詰所っていうのかな？

そこに居た。周りを囲うは物珍しそうにコチラを見る兵士達。

用意された椅子に座りながら、わざわざ差し出してくれたお水をこくりとひと飲み。美味しい。というか目下容疑者なのに出してくれる辺り本当に優しい兵士さんだと思う。

……誰か呼びにいつてるみたいだけど、誰を呼ぶのかな。

まさかカリオストロかな？ 劍聖かな？ それとも、取り逃がしたって言ったた犬わんわんの人かな？ カペラはカリオストロに仕返しに行くなっていったから、犬わんわんの人はまだ殺されてないよね？ あ。もしかして大穴でナツキ・スバル君かな？ だとしたらとっても嬉しい。頭くるくるぱーになってたけど、もう復活したのかな？ そんな訳ないか。

(でも真面目な話、劍聖だとしたら……ちよつと困るかも。まだ『攻略』出来てないんだよね)

そこまで考えて、体が急に重くなった気がした。

『攻略』、ね……どこまで遊び目線なのやら。本当は、こんな事に首を突っ込むべきじゃないって言うのに。

武器も立場も何もかも投げ捨てて。子供みたいにごめんなさいって泣き喚いて、もうしません。許してくださいって許しを請うべきじゃないのかな？ まだ間に合う地点だろうか？ なら今がチャンスだ。もう今しかない。また罪を重ねるのか？ また後悔したいのかな？

でも他ならぬ私は、思うだけでそれをしない。

私という存在はどこまでも腐っているのだろうか。

また幾つの安寧を踏みにじれば気が済むのだろうか。

こうやって後悔しながらも歩みを止めないあたり、きつと反省なんて何一つしていないんだろう？ 全ては御しがたい『同居人』のせい？ 本当に良い身分だよ、私は。

「手配書のおたずね人が？」

「はい、ユリウス様。こちらにその子が……あの、本当にそうなのかはわからないんですが、見た目はそっくりで」

毎度毎度の形だけの後悔をしていると、詰め所の奥から紫髪のイケメンが現れていた。

剣聖でもない、犬わんわんの人でもない、カリオストロでもない、スバルでもない。初めて出会う、格好良い剣士さん。なんだか雰囲気も強そうな感じがする。名前はユリウスなんだね。名前まで格好いいなんて反則だよ。

——私は両手を胸の前に移動して、重ねて強く握りしめた。

「……ユリウスっていうんだ。初めまして」

「？ ああ、初めまして。ユリウス・ユークリウスだ。キミの名前を教えてください欲しい」

「……私の名前はポルクス」

「ポルクスか。キミはどうしてここに呼ばれたかは分かっているかな？」

「……んつと……あつ」

「うわつ、と、大丈夫かい」

私の手が机の上にあつたコップに当たり、中身を零してしまふ。お陰でお腹から下はべつとべと。見ていた兵士さんが思わずタオルのようなものを持つてきてくれたので、借りるついでにそのお腰の剣を拝借する。

「——え？」

「ッ」

そして私は、そのままユリウスに斬りかかった。

§ § §

ユリウスにとって、主人であるアナスタシアは非常に好ましい人物だ。

外見や人柄もそうだが、特に惹かれているのは思想や考え方だ。

鳶目兎耳の持ち主で、時に大胆不敵、されど質実剛健。

優位に立つたためであれば小石を積む事すら厭わず、周りから『小銭漁り』と揶揄されようが、目標へ一直線に向き合うアナスタシアは、人として尊重こそすれど、批判など出来る筈もなかった。

そんな彼女が下す命令はどれもが理路整然で簡潔明瞭だ。無駄がなく、博打に走らず。狡猾ではあるが悪辣ではない。商人らしい「利」を優先する考え方と言つてもいい。

お陰様で、命令に意見を投げかけることはあつても、異議を唱えた事は仕えてから一度もなかった。

彼女の命なら疑念を抱く事なく、ただ一振りの剣として在れるだろう。

二人の間に確かな信頼関係が築かれようとしていた、そんな矢先のことだった。

『みんな、よくよく聞いてや。明後日、ウチからの王都への流通は1日だけ止めるで』

ユリウスは初めて彼女の命令に眉をひそめた。

曰く、魔女教が暗躍中だとか。

同じく王選候補であるエミリア様を狙っているとか。

リカード達『鉄の牙』を魔女教徒達が襲ったとか。それをエミリア様の所の食客と剣聖が止めたとか。これから王都で、魔女教の第二の襲撃があるとか。らしからぬ命だと思った。

聞けば聞くほど納得出来そうになかった。

『アナスタシア様……どうして魔女教がその日に来ると？ 本人が予告でもしたのでしょうか？』

『それがなあ……なんとも言えへんのやけど』

その情報源が、エミリア様にいる食客だとか。

そしてよりにもよって、情報源が未来予知によるものだとか。

(……率直に言って胡散臭すぎる。普段のアナスタシア様なら絶対に領く筈もないのに)

言葉を濁したという事は、予知を認めたくはないという事。恐らくは領かざるを得ない理由があるのだろう。

タチが悪いことにリカードは身内を殺されて、すっかり案に乗り気だ。無論自分も味方がやられて憤る気持ちはあるが、本腰になるほど傾倒は出来なかった。

降って湧いた魔女教騒ぎといい。

怪しげな予言といい。

計画の根幹を担うカリオストロといい。

カリオストロが太鼓判を押すグラン達といい。

どうにもキナ臭さしか覚ええない。

いつそ仕組まれていると考えた方がすつきりする程だ。

——そして。

「手配書のおたずね人が？」

「はい、ユリウス様。こちらにその子が……あの、本当にそうなのかはわからないんですが、見た目はそっくりで」

(この子も魔女教だというのか……？ しかし……)

『人は見かけで判断すると痛い目に合う』

教訓こそあるが、実感を覚えるかと言えば、それはまた別だろう。

感情のない無の表情、糸目、おかつぱ頭と確かに手配書通りだ。

装いは旅人のようだが、体格といい、ぶかぶかのマントや上着といい、どうにも着慣れていない感じが強い。どちらかといえば貴族の子供がお忍びで抜け出してみた、と言った方が納得出来る。

取調室まで来て力を抜いてリラックスしてる姿を見ると、そのぼんやりとした雰囲気と相まってどうにも気が抜けてしまう。

「どう思いますか？」

我慢できずに問いかけてきた兵士に、ユリウスは肯定も否定もしなかった。

「……何とも言えないね。偶然似た子供を見つけたか、そもそもが手違いか」

「自分は手違いだと思いますがね……あんな子供が何が出来ると言うんですか」

「しかし、とても落ち着いているじゃないか」

「鈍感か大物なだけですよ」

答えはしなかったが、その通りだ、と内心で頷いていた。

（……やはり、アナスタシア様に意見具申をしよう。今回の件はエミリア様の陣営、あるいは他陣営の妨害工作の可能性があると）

ユリウスはぼーっとしていている子供の目の前に座り込むと、一応の質問をし始めた。

「……」

「私はユリウス・ユークリウス。キミの名前を教えて欲」

——直後、視界一杯に子供の顔が広がったと思えば、世界の半分が真紅に染まった。

指で目を潰されたのだ、と考えつくより先にユリウスは右手を伸ばしたが、その手は何も掴めない。背後に回った気配に対し振り返りざまに蹴りを見舞おうとしたが、それすらも空を切るだけだった。

切り取られた視界の中でユリウスが見たのは突然の凶行に反応出来なかった兵士から、あっという間に腰の剣を奪った子供の姿だった。そして流れるように抜刀すると一人の兵士が喉を貫かれて絶命した。

「全員離れろ！ 距離を取るんだ！」

密集した詰め所の中では剣もろくに抜けない！ 左目に熱を感じながらユリウスが叫ぶ。

兵士も伊達に訓練をしてはいない、動揺はさておき考えるよりも先に子供から距離を取れば、代わりにユリウスが前に躍り出る。

握りしめられた直剣は一直線で子供へと猛追。が、子供はそれすらも予期していたのか、軽業師のようにくるりと飛んで躲す。そして机の上を飛び越し、そのついでと言わんばかりに机上の無骨なナイフを器用に手に取り、ユリウスを無視して兵士達に斬りかかっていった。

兵士達も懸命に応戦していったが、身長にしては大振りなナイフを、まるで体の一部のように巧みに使う技量に手も足も出ていない。彼我の身長差すらも逆手に取り、変則的な動きを混ぜて関節や、首、その利き手を流れ作業のように斬りつけ、倒していく。一矢報いるどころか髪先に触れる事すら叶わない。

（あれほど見た目で判断するなどと考えておいて……！ 情けない！）  
ユリウスは微精霊を剣にまとわせると傍若無人に暴れまわる敵へと一瞬で肉薄していった。

背後からの攻撃。しかしながら背中に目でもついているのか、相手は余裕を持って避けると、返す刀でこちらの首をはつろうとする。く。

咄嗟に剣先を跳ねさせて防御に回せば、ナイフは1体の生き物のように軌道を変え、今度は腹部を貫かんとする始末！ 反射的に手を差し、左手を犠牲にすることで致命傷を回避することは出来た。そのお返し、左手を犠牲にする程の不発、自分から後ろに飛んでソレを回避する抜け目のなさを見せつけられ、舌を巻いてしまう。

「ユリウス様！」

「近寄るな！ 自分の事はいい、皆は早く、室外へ！」

この子は剣士なのか？ いや、剣士とは到底呼べないだろう。

この子の動きは知りうる限りのどんな剣術の型にも当てはまらない。いや、そもそもが体系化された動きではないのだ。

ただ体がそう動くから、そうしている。そう言わんばかりの不気味なまでに効率を極めた動きだった。

そして何よりも恐ろしいのは——手の内が全て読まれているのか  
攻撃が全く当たらない事だった。

(心を読んでいるのか……!? フェイントのことごとくが空を切る  
……! ぐっ!)

幾重にもかけたフェイントがあつさりと読まれ、その代償として体  
にひとつ傷が刻まれる。

こちらが開けた場所に出るのを好ましく思っていないのだろう、外  
に出ようとすればそれを防ぐように立ち回り、詰所の内側に押し込ん  
でくるのがいやらしい。

上下左右関係ない、壁すら使った多角的な攻め。予測不能回避困難  
な連撃にユリウスは防戦一方だった。

(私の手の内も知っていると考えた方がいいか……だが、やられてい  
るばかりだと思ふなよ!)

兵士達が詰所から退避し終えた直後、ユリウスは相手から距離を取  
り、そして自身に宿るマナを全開にした。

「もう疑いようもない。キミは倒すべき敵だ。——全力で行かせても  
らう」

誘蛾灯のようにユリウスの周りに赤、青、緑、茶、黄、紫の美しい  
光が集まっている。

子供へと真つ直ぐ向けられた美しい剣に光が吸い込まれていけば、  
6色が混ざり合い、眩いばかりの極光が溢れ出した。

室内を明るく照らすその剣は、見た目の美しさと裏腹に触れたもの  
なら魂でさえも消し飛ばす、極悪の切れ味を誇る。

『アル・クラリスタ』

全属性の準精霊と契約を交わしたユリウスだからこそ可能とする、  
六属性を包括した魔法の極致が、ここに顕現していた。

「——シッ」

振り下ろす。光の残滓を残したその攻撃は間合い以上に剣先が伸  
び、軌跡の先にある椅子と机を消し飛ばした。

相手も危なげなく避けたようだが、すぐに慌てて右に転がった。直  
後、先程まで居た場所を極光が抉り取っていった。

これは虹の暴虐だ。振るう度、振るう度に空間が削り取られていく。

当たれば即死、受けても即死の死の舞踏。さしもの相手も回避に注力せざるを得ないようだ。

だが相手も諦めていない。機を見計らった弾丸のような突貫で肉薄してくる。それはユリウスをして称賛するタイミングと言えた。

「！」

「甘い」

ただし本気となったユリウスに隙はない。本人を発生源として不意に突風が吹き荒れ、相手は元居た位置に戻されてしまう。契約した風の微精霊の仕業だった。

得難いチャンス。着地直後の相手にユリウスの神速の剣が振るわれる。

その光景をスバルが見たとすれば、まるでSF映画だとはしゃいでいたかもしれない。虹色の三日月が十重二十重に重なり、進路上の何もかもを吹き飛ばし、切り刻み、消滅させていく！

「はアアアアッ!!」

詰所が大きく揺れた。棚も机も、椅子も、そして壁すらも食らいつくす、脅威の攻撃。

初めて見る『最優』の騎士の本気に、見守っていた兵士達のどよめきの声が漏れる。それほどまでの一撃なのに――

(これすらも回避するのか……！)

それだけ圧倒的な力を前にしても相手は健在だった。

予定調和だと言わんばかりに天井にナイフを突き立てて即死の波を避ければ、降りざまにユリウスの首を跳ね飛ばそうと試みる！ ユリウスは土魔法で咄嗟に自分の周りに壁を間に作り上げて死の牙を回避した。

「はアッ！」

重ね掛けの風魔法。強風が土壁を吹き飛ばし、散弾となって全方位へ巻き散らされる。

威力は低いが目くらましになれば重畳。そう願ったが第六感に



従って首を傾げた直後、土煙を破って顔のすぐ右隣に直剣が突き立つ。

相手は正確にコチラの位置を把握している！ 驚愕した途端、風切り音と共に利き腕に激痛が走った。奴のナイフが深々と肉を抉ったのだ。

「ぐっ……い！」

ユリウスは剣を水平に立て、回転するようにして横に薙いだ。もうもうと立ち込めていた土煙が一瞬で払われ。傍目に見守っていた兵士達が気付いた時には、詰所の全周囲に深い傷が横一列に刻まれていた。その場に居れば、真つ二つにされているであろう死神の鎌だ。

しかしそんな即死の一撃も子供にとっては無風に等しい。苦々しい顔をするユリウスの前にこてん、と無表情のまま首を傾げた子供は、手元でナイフを弄んだかと思えば、また一つの風となって襲い掛かってきたのだ。

「ユリウス様!? 我々も応援を——！」

「駄目だ、君たちでは……グランだ、グランを呼んでくれ！」

コイツは兵士達には手に余る。むしろ自分ですらも太刀打ち出来る気がしない。倒せるとすれば、それは自分より更なる技量を持つグランしかないだろう。

グランが武術や経験を経て最適化された極限の剣士に対して、この子供はあらかじめ何が来るのか知っているのを前提として動く、未来予知者と言っても良かった。

理不尽なまでに裏をかかれ続け、ユリウスの表情は更に厳しいものになっていく。

一 太刀振るうごとに傷が増える。

腕も、足も、顔も、腹も。急所を守った分、それ以外が傷だらけになっていく。

塞がれた視界が隙となり、また傷が増えれば増えるほど動きも鈍くなり、それがまた相手にとって付け入る隙となる。

経験と第六感のお陰で死を免れているが、このままでは遠からず死ぬ事になる。

ならばこそ相手の意表をつく、まさしく起死回生一手が必要だった。

（攻撃すれば当たらない。そして室内では大規模な魔法も使えない。増援が来るまで待つか？ いや、このままでは自分が持たない……！ ならどうする？ どうすればいい？ 考えろ、ユリウス・ユークリウス！ 考えろ！）

目にも止まらぬユリウスの渾身の刺突。精霊の力を借り、見た目以上の長射程を持つようになったその剣は初見では回避不可能。しかしながらそんな会心の一撃さえ髪に触れることすら能わない。

するりするりと、実体を持たぬかのようにすり抜けたと思えば瞬間に眼前にナイフが迫る。

咄嗟に身をよじって回避し、長い足をムチのようにして蹴り飛ばそうとするが一切の抵抗も帰ってこない。逆に強烈なほどのプレッシャーを背中に感じた直後、背中に激痛が走った。

「ぐっ、こ、のおっ！」

振り返り様の一撃は、風切り音を空しくかき鳴らすだけ。やはり駄目だ。どんなに速い攻撃も当たらず、こちらの傷は増えていく一方。

全身から流れる血の量は増加の一途。まともに動ける時間は最早数える程しかないだろう。

——何とか、ならないのか。

気を抜けば倒れてしまいそうな痛みが全身を支配する中、ユリウスは必死に頭を巡らせ……ふと、閃く。それは自棄っぱちとも言える策。しかし死路しか見えない今では、最早コレ以外の道はないと思えた。

（正気の沙汰ではない……だが、やってみる価値はある！）

落ちそうになる<sup>まぶた</sup>瞼を気力でこじ開け、剣を杖替わりに今一度立てば。ユリウスは剣を肩に番えるようにして両手で構える。

それは隙の少ない、突きに絞った型だった。

今まで以上の気迫を剣に載せて、じり、と間合いを詰める。

差し違える程の覚悟をもって挑んでも、興味がないと表情すら変えない子供。

とん、とんつと地面を軽く踏みしめれば、あっという間に死線に飛び込んできた。

ユリウスはここに来て急所ではなく利き手や足を狙った攻撃にシフトし始めた。狙いすました一撃は当然空を切るが、当たらないと知っていれば予想は立てられる。続けて二撃、三撃と、流れるように剣を滑らせ、光の軌跡だけがその場に残る。極剣はどこかに触れればそこが致命傷となる。なればこそ手数を増やしていけばいい。

突き。袈裟斬り。逆一文字。右薙ぎ。唐竹。逆風。胴斬。左一文字。三日月。五月雨。最小の動きを、最小の体力で。ノータイムで繰り出す終わらぬ斬撃。

虹の残滓が舞う幻想的な光景。

しかして巻き込まれれば命を散らす、死の舞踏<sup>ロンド</sup>。

嵐のような即死攻撃の前に、やはり子供は五体満足。しかしながら避けきれなかったのだろうか、マントやむき出しの膝や腕に薄っすらと傷が出来ているのを見て、ユリウスは勝機を見出した。予知が完全ではない？ いや、予測は追い付いても体が追い付いていないのだ。

奴の限界を見た気がした。予測を上回る速度の攻撃を浴びせ続ければ、きつと届く。届くはずだ……なのに！

(私は最早燃えさしの蠟燭だ。この瞬間最大風速がどこまで持つか……ッ、しまった!?)

ユリウスは戦闘の余波で崩れた床に足元を取られてしまう。意思に反して跪<sup>つまず</sup>いたところで相手が待ってくれる筈もない。ぬるりと近寄る子供に対し、ユリウスはまるで新体操選手のように片腕の力だけで前方へと飛び越せば、空を飛びながら斬りつける。

精霊の剣が床に深々と傷跡を残すが、やはりというべきか攻撃が当たらない。それどころか潰れた目の死角に潜り込んだ子供は、その着地点で待ち構えていた。

「ッ!!」

腹部が燃えるように熱くなった。

ナイフが深々と自分の腹に突き刺さっているのが、よく見えた。

恐れていた致命傷。恐らくは臓腑のいくつかが負傷したのだろう。

逆流した血液が口元いっぱいに充満し、全身から力が抜けそうになる。

——しかし、それでも尚ユリウスは嗤<sup>わら</sup>った。

「そうだ。私はこの攻撃を待っていたんだ、と。」

「見事、だよ。しかし、これこそが私の勝ち筋だ……！」

「……」

それは相手からすれば負け惜しみにしか聞こえないだろう。

だがすぐに驚くことだろう。

刺したナイフは腹部から抜けることはないのだから。

「いくら攻撃が当たらないといえど……当てた瞬間だけは止まる……！」

ユリウスは渾身の力で腹筋を締め、ナイフを固めていた。

そして、今この時こそがユリウスの起死回生のチャンスだった。

これから試すのはユリウス・ユークリウスの最初で最後の大技だ。未熟故に習熟することが出来なかった彼独自の虹の精霊術、その秘中の秘。それを命を賭けて為すことで初めてユリウスは手応えを感じていた。

剣に集まっていた光が全身を覆う。心臓を中心として頭部両手、両足に至るまでをマナを高速で廻らせ暴走させる。イア。クア。アロ。イク。イン。ネス。契約を交わした微精霊達も自ら体内に吸い込まれてゆき、その一助をしてきているのが分かる。

碌な活躍をさせてやれず済まない。だが、今一度力を貸してくれ——願いは力に。精霊達が一つまた一つ自らと同化し、その力の源となってくれる。

時間にして1秒にも満たない一瞬。しかしその刹那で術は完成していた。

行使する直前、脳裏にリカードやミミ達、そして弟とアナスタシアの姿が掠めたが、それすらも振り払って、ユリウスはマナを解き放つていた。

「これが私の、最期の一撃だ。私と共に逝こう——！」

『アル・クランヴェル』

体内に凝縮された光が全身を貫いて迸り、全方位に向けられる殺意の波濤となつて襲い掛かった。

—— 身命を賭した必殺の一撃。これを受けて生きていられる訳がない—— ユリウスは勝利を確信し、子供へと不敵に笑った。

しかし……ユリウスの笑みはソレ以上続かなかつた。

子供もまた、笑っていたのだ。

その細い目を薄つすらと開け、大口を開けて。

初めて見せた無以外の表情。それは明らかかな嘲笑だった。

ソイツは、ユリウスだけに聞こえるように、こう告げた。

「それ、もう見飽きたよ」

—— 直後。詰所は虹色の破壊が吹き荒れ、兵士達が見てる前で建物が崩壊した。

## 第六十一話 届かぬ手

時は遡り同日早朝。ラインハルト邸。

エミリアはスバルが眠る寝室で椅子に座り込みながら窓の外を眺めていた。

エミリアの頭の中は王都の事件の事でいっぱいだった。

今頃みんなで魔女教退治に勤しんでいる事だろう。信頼するカリオストロが陣頭となり、ラインハルトやリカード、ユリウスといった強者達が駆逐する。

考えれば考える程安心する要素しかないし、カリオストロが居るならきつと上手くいく。そう頭は考えているのに……彼女の顔は物憂げな表情のままだった。

——落ち着かない。心がざわめいて仕方がない。

——どうして落ち着かないのだろう。

——魔女教の狙いが自分だから？

——王都がひどい事になってしまうから？

——ひよつとしたら誰かが倒れてしまうから？

——違う。そうじゃないわエミリア。

「私も、一緒に戦いたかったのね」

零れ落ちた眩きは部屋にゆつくりと溶けこみ、決して返答が帰ってくることはなかった。

無論スバルを守ると啖呵を切った手前、投げ出す事なんてしない。しないけれども……いざ彼らと別行動をして改めて自覚してしまつた。

出来ることなら自分も王都に出向きたい。出向いて。皆と一緒に戦いたい。自分が原因だというのなら尚更だ。その原因が魔女教にあるとしても、他ならぬ自分の手で片を付けたい気持ちがエミリアにはあつた。

(……思うに、カリオストロは過保護が過ぎるのよね)

出会った時も。出会ってからも。それはもうずっと世話焼きだ。ツンケンして素直ではないが、何度彼女にお小言を貰い、何度その手

で助けられた事か。

短い期間だが、カリオストロをよく見ているエミリアには分かっていた。彼女はパンク寸前だ。このたった数日間で折れてしまってもおかしくない程、疲弊している。

スバルの未来を聞いたから？ 多分違うと思う。理由が何なのかははつきりと分からないが、カリオストロは焦っているようにも思えた。もう失敗は出来ない、そう言わんばかりに。

だから……自分だって出来ることを伝えたい。気丈に振る舞うカリオストロに駆け寄り、支えてあげたいのに。

(私はそんなに頼りないの……？ まだ隣に立つことも許されない……？)

そんな事はない……と思っているけれど、否定できる材料もなく。エミリアは自分の胸元で手を握りしめていた。

「むにゃ……何を見ているのさ？ リア」

膝の上で昼寝していたパックがふと呟いた。くあ、と大きなあくびをしたパックに、エミリアは撫で心地の良い毛並みを指先で梳くことを再開する。

「そ、外の天気よ。ちよつと雲行きが怪しくなってきたなって」

慌てて誤魔化したのが、エミリアの言う通り窓の外は薄雲が空を覆い隠そうとしていた。

午前中までは晴れていたのだが、もしかしたら雨が降るのかもしれない。

「そうだね。このままひと降り来てもおかしくなさそうだ。でも長くは続かない。精々通り雨ぐらいかな」

「分かるの？」

「ボクを誰だと思っっているんだいリア？ 天下の大精霊様だよ」

ふよんと膝から飛び上がったパックが自信たつぷりに胸を張った。理屈はよく分からないが、パックの言う事なら間違いないだろう。

「雨時々晴れ。きつと天候は回復する。当たり前だけど僕たちが何もしなくても勝手にね」

「…………？」

「リア。この世界を回してるのは一人じゃない。一人が欠けても他の誰かが回す……今回はリアの代わりにカリオストロ達がやることになった。ただソレだけ。別にキミが役に立たない訳じゃない」

近付いてきたパックがその小さな手で頬を撫でてくる。ふわふわと柔らかく、触り心地抜群の肉球がくすぐったかった。

「だからさ、気に病むのはやめようよ。リアはスバルを守るのがお仕事。そうでしょ？」

「……うん。ありがとうパック」

苦笑してしまう。やはりパックには見抜かれていたようだ。

そして改めて励まされると現金なもので、心中に小さな火が灯ったように感じてしまう。

きつと誰かに言って欲しかったんだろう。自分は役立たずではないってことを。

「……よしっ！ あいた……」

「うわ、痛そう……大丈夫？」

「う、うん……大丈夫っ、私……張り切っちゃうんだから！」

頬をぴしゃんとひと叩き。思い切り叩きすぎたせいで少し涙目になったが、その分気分もしゃっきりとした。

そうだ。自分には自分のやるべきことがある。カリオストロが何の心配もしないで済むように、私も頑張らねば。

思い立ったが吉日。エミリアは早速眠りこけているスバルに近づき、濡れタオルを取り替え始めた。そして寝汗をタオルで拭って掃除してあげた。

スバルは……相変わらず覚醒と気絶を繰り返しては現と虚を行き来している。

今でこそ眠りこけているが、今日も覚醒しては激しく叫び、疲れたら眠り、そしてうなされることを繰り返していた。

昨日は休む暇もなく暴れたせいか熱まで出てしまったようだ。全身に汗を浮かべ疲弊しきって眠るスバルは、哀れで見るに耐えない。出来る事なら代わってあげたいとさえ思う。

「……貴方も戦っているのよね。頑張つて。負けないでスバル。私が



ずっと傍についているから」

手を取り、握る。今の自分に出来ることはほとんどないかもしれない。いい。

けれど小さな積み重ねが快癒への道だとエミリアは信じていた。

「スバルも果報者だね、リアに看病してもらえるなんてさ」

「もうパック。仕方ないでしょ？ それに私はスバルの看病は好きよ。普段はすごく意地っ張りだから、こうやって全部預けてくれると思うと……ね」

「……我が娘ながら、変な男に引つかからないか不安になってくる台詞だよ」

「む。スバルは別に変じゃないわよ。ちよつと、ちよつと変わってるだけ」

「それが変わっていうんだけど……ん？」

不意に庇うようにしてパックが前に出た。

何事かとエミリアが視線を向けた先には寝室の扉。しかしながら扉の奥から誰かの足音が近寄っていた。急いでいる。そして軽い足音だった。

緊張が走る。一体誰が来るのかと身構えていれば、扉から顔を覗かせたのはロズワール家がメイド、ラムだ。珍しく焦っているようで、いつもはクールな彼女がその顔いっぱい汗をかいて詰め寄ってきた。

「エミリア様、ノックもなく失礼致します……！ 至急お伝えしたい事が……！」

「本当に失礼だね。小間使いの分際で礼儀の一つもこなせないなんて」

「パック！ ……ごめんなさいラム。それでどうしたの？」

「この屋敷に、魔女教と思しき集団が襲撃を！」

まさか。とは思わなかった。

カリオストロは言っていた、『あいつらはきつとオレ様以外を突いてくるに違いない』と。狙いは身内である自分にラム、そして動けな

いスバルだろう。

そしてラムの報告とほぼ同時に屋敷内が騒がしくなる。

あちらこちらで怒号が上がり、破碎音、剣が打ち合わされる音が続けて届く。

パツクと示し合わせるように頷きあう。

まずはスバルを逃さなければいけない。横たわるスバルを起こし、背負う形で連れ出そうとすればラムがそれを止めた。

「お待ち下さい、運ぶのは私が……！ エミリア様はまずは階下へ！ 竜車は待機させてあります。後ほど我々もそちらに向かいますのでどうかお先に」

「……」

「エミリア様？」

「ねえラム。その腕……」

「腕？ 腕が一体どうしたのでしょうか？」

「……何でもないわ。スバルは私が連れていく」

エミリアのラムに向ける態度はどこか余所余所しい。

視線を逸らし、先に部屋を出ようとすれば、ラムが通りを塞いだ。

「エミリア様、何度でも言いますが私にお任せください」

「私がカリオストロに任されたの。大丈夫よ、スバルくらい私だって背負えるわ」

「……っ！ 貴方の身はもはや貴方だけのモノではありません。雑事は全て我々が引き受けますからどうか言うことを聞いてください！」

「……」

「スバル様を大切に思う気持ちは分かります。それは私も一緒です！ ですが、今は第一に御身の事だけ考えて」

「パツク」

直後、ラムの全身が凍結した。それどころか間髪入れずに雨あられと降り注いだ巨大なつららが全身に突き立ち、反対側の扉まで吹き飛ばしていった。

「……ねえパツク。彼女は偽物よね？」

「偽物だよ。多分。というか確信持ったからボクに呼びかけたんだよ

ね？」

「う、うん……でも、だけど声も形もラムそっくりだったから……自信ないかも。でもっ、腕に目印は巻いていなかったから……!」

実は、あらかじめエミリア達は偽物対策に目印を身に着けていた。

右腕の包帯。それこそが味方である証。

逆手に取られる可能性もあったが、今回は功を成したようだ。

「それに、スバルの事をバルスって言わなかったわ」

「じゃあ間違いないじやにやい？ となると下で待機させてる竜車つてのもちよつと怪しいね」

「そうね。きつと罠だと思う。まずは本物のラム達と合流しないと――」

「――こ、ンのクズ肉共がアアああ〜〜ツ!!!」

突如、瓦礫の中から氷漬けの肉体が飛び出して襲いかかってくる。ところどころ千切れかけた無惨なラムの姿。しかしエミリアとパツクが同時に両手を翳せば、大量の氷の礫がその肉体を貫き、先程よりも細切れにした後、更に嚴重に氷漬けにしてしまった。

「……間違いなく偽物ね」

「そのようだね。確かこれでも死なないらしいじゃない？ 無視して逃げようよ。リア」

涼し気な顔でカペラを封じ込めると二人は先を急ぐ。階下と違つて二階はまだ静かだ。恐らく奥まで侵攻出来ていないのだろう。

スバルを背負つて廊下をひた走り、突き当りの階段を降りてゆけば騎士と思しき人物と目が合った。その騎士は「エミリア様！」と声を上げて近寄ってくるが、直後横合いから飛んできた鎖つき鉄球により視界外へと吹き飛ばされていった。

「エミリア様。〴〵無事ですか？」

「レム！ 来てくれたのね！」

それを成したのは青髪の少女。同じくロスワール家のメイドであるレムだった。彼女は右腕に包帯を巻いており、背中のスバルを見て安堵の笑みを見せた。

彼女を呼び寄せたのもまた作戦の一貫だった。つい先日手紙を

送ったばかりだが、間一髪で間に合ったようだ。

「さっきの人はやつぱり……」

「そのようです。最初こそ困惑しましたが、目印のお陰でよく分かります」

「私もさつきラムの偽物に出会った所よ……ところで本物のラムはどうしたの?」

「姉さまは恐らく玄関かと。竜車を確保しにいったと思います」

「……不味いね。そっちには奴らが待ち構えている筈だ」

「では急ぎましょう。スバル君は私が!」

一行は玄関へと急いだ。

道中、騎士同士が戦い合う姿が見受けられる。傍目ではどちらが敵かが分からず混乱を誘うが、目印のお陰でどうにか見分けはついた。

レムとエミリアは手分けして味方を援護してゆく。如何に精鋭揃いのラインハルト家の騎士といえど、魔女教徒の奇襲によって当初の力を発揮できていないようだった。

そして玄関まで辿り着いた一行が見たのは、見る影もなく破壊された玄関と、屋外で広がる乱戦の光景だった。

折り重なって倒れる騎士達。そして散乱する竜車の残骸。立ち上る炎。

さながら戦場だ。一体どれほどの魔女教徒が襲撃を仕掛けてきたというのだろうか。

「姉さまー!」「ラムー!」

「——エミリア様! お気をつけください、正面に賊が!」

ラムを見つけた。転がった竜車の一つを背にして息をついていた彼女が警告すれば、直後エミリア達めがけて矢と炎が殺到した。

しかしパックが涼しげに氷の障壁で防ぎ、その数十倍の氷塊を敵めがけて飛ばせば、あつという間に鎮圧してしまった。

「酷いことになってるね。大丈夫?」

「ありがとうございます大精霊様……お陰様で窮地から脱することが出来ました」

全員が無事であることを確認し、ラムの表情から険が抜けた。

しかし喜びを分かち合う暇はない。未だ戦闘は継続中。形勢が有利なのかすら分からないのだ。

「カリオストロは敵の狙いは私達って言っていたわね……」

「なら、これで勢ぞろいだね。早くここから逃げようよ」

「駄目よパツク。ここにはまだフェルトが居るわ。彼女も助けない！」

「ええ……」

「大精霊様。エミリア様が正しいかと。ここで共同歩調を崩してはなりません」

一同はちらりと屋敷を見上げる。

未だ喧騒収まらぬ豪邸にまたも出戻りすることになるとは。パツクは露骨に嫌がったが、他のメンバーも気分は重かった。

「スバル君を安全な所に移動しないとダメです。この場の竜車はほぼ全て潰されてしまったようですが……幸い、私が使ったものなら少し離れた所に隠してあります」

「そう……ならレムはバルスを連れて竜車まで移動を。私はエミリア様とフェルト様をお迎えに行くわ。よろしいですか？ エミリア様」  
「ええ、行きましょう。時間は待ってくれないわ……くれぐれも、えつと、変装に気をつけて！」

一行は二手に分かれ、お互いの使命を全うしようと動き出した。

§ § §

「う……うう……」

「……スバル君、大丈夫ですよ。レムがついていますから」

ラインハルトの屋敷を離れ、隠してある竜車へと向かう二人。

未だ夢現ゆめうつなスバルはレムに背負われたまま苦しそうな表情だ。

エミリアから手紙を受け取ってから覚悟はしていた筈なのに……  
実際に見てしまうと、レムはやはりショックを受けてしまう。

しかし、レムはこの機会を絶好のチャンスだとも捉えていた。

あの魔獣騒ぎで助けられた大恩が返せるのだ。

命に代えても守り抜いてみせる——覚悟を胸に、レムは道を疾走する。

(それにしても……たった数日でこんな大変な事になってたなんて)

今回は一度では理解出来ない、複雑怪奇な事件だ。

魔女教とアナスタシア陣営の企みが、我々全員に大きな破滅を呼び起こす。

ぱっと見ではどう解決するかも分からないこの事件。そんな事件にカリオストロが積極的に動いてくれている事は、何ものにも変え難い安心感がそこにあつた。

(だけど……どうしてこんなにも胸騒ぎがするんでしょう)

カリオストロは今やエミリア陣営に欠かせぬ司令塔だ。

徽章盗難事件も、魔獣騒ぎも。そのどちらも彼女の尽力なくては決して解決出来なかつた。

それは陣営全員の共通見解で、レムも頷く不動の事実だった。

しかしながらスバルもまた、この陣営にとって欠かせない鍵だった。

カリオストロに比べれば、確かに力はないし知識も今ひとつかも知れないが、スバルの覚悟と度胸のお陰で救われたという場面は間違いない。なくあつた。

比較するのはおこがましいことだが、レムの中ではスバルの方が比重を重く見てしまっていた。

だからこそ不安になった。

ここでスバルの力を借りれない事が、後にとんでもない事に繋がるのでは……と考えてしまつて。

(……大丈夫。カリオストロ様もエミリア様も、一丸となって尽力して下さっている。ラインハルト様だっている。魔女教だって敵じゃない)

屋敷に近づく一団に胸騒ぎがして、数百メートルほど離れた森の中に咄嗟に竜車を隠したのは我ながら正解だった。

今やラインハルト邸は火花飛び散る鉄火場だ。

ラインハルト不在の今、集団で襲う魔女教徒達との徹底抗戦は避け

るべきだ。

すぐに地竜を駆り、エミリア達を拾って脱出しなければいけない。背中越しに大切な人の体温を感じながら疾走するレムだが――、

(そんな……！)

そこには最悪の事態が待ち受けていた。

隠していた竜車が5人ほどの魔女教徒と思しき人物に囲まれているのだ。

竜車そのものは無事。

しかしその持ち主が誰なのかを探っている様子だった。

レムは強く歯噛みした。

(この急いでいる時に……！・ 奇襲すれば一人、いや二人はいけそうですが、それでも……！)

スバルを背負った状態では満足に戦う事も出来ない。

隠れてやり過ごせるだろうか？

いや、待つ時間はそもそもない。

この人数を相手取って自分はともかくスバルまで無傷でいられるか？

そんなの考えるまでもなくNOだ。

苦渋の選択を迫られるレム。

しかしながら選択の時はすぐそこに来ていた。

「――う、あつ……？ ああつ、あああああ……つ」

「っ?! す、スバル君ダメです！ 暴れては――」

半覚醒状態だったスバルが目を覚ました途端暴れだしたのだ。

夢の中に居るスバルは背負われているという自覚もなく闇雲に逃げ出そうとしている。

レムは慌てた。

悪手中の悪手。奴らに見つかればどうなるか、なんて目に見えてい  
る！ なだめながら逃走の準備に移ろうとするレム。そしてレムが  
考えた通り。代価は極上の悪意だった。

「っ！」

「あうううっ?!」

まず、レム達が居た場所で火球が爆発した。  
服の先を焦がす熱。

スバルと共に草むらからほうほうの体で飛び出せば、次に襲うのは  
剣だ。

無慈悲な刃は既にこちらを切り裂かんと振り下ろされている。

レムは咄嗟に鉄球を蹴り上げる。

跳ねた鉄球が剣先と衝突。軌道をずらすことに成功。

そして間髪入れずレムの長い脚が、襲撃者を吹き飛ばしていた。

たまらず広間に躍り出たレム。

逃げ道を探ろうと試みるが、すぐにそれが無駄な事を悟る。

もう、魔女教徒達に囲まれている――。

幽鬼にも思える生気のない表情。

しかし全員が剣を抜き、混じり気の無い殺意をレム達に向けてい  
た。

レムは覚悟を決める。

背負っていたスバルをそつと地面に横たえ、持っていた鉄球を地面  
に落とした。

重厚な鎖の音と地面を揺らす鈍重な音。

周囲に風が引き寄せられる。

頭部には光り輝く角が生え、全身を前傾体勢に変えていく。

吐息は蒸気機関のように荒くなり、速く暴れだせと鼓動が高まる。

「うあ、あ……」

「スバル君。少しだけ待っていてくださいね……レムが、すぐに片づ  
けますから」

稚児のように呆けるスバルに微笑みかけると――レムは自ら戦い  
の火蓋を切った。

瞬き一つ分の時間で正面に構える騎士に肉薄。

反射的に振るわれた剣を紙一重で躲せば、掌底がその顎を打ち抜い  
ていた。

手首に広がる骨が碎ける感触。

直後、レムの背筋を貫く強い殺気。



大きく左に飛ばば、元居た空間を刺突が通り過ぎていた。

「っ」

冷や汗を流しながら着地。

すると左右から襲いかかってくる騎士達。

甲高い金属音と風切り音が耳朵を刺激する。

鎖を腕に巻き付け、レムは盾代わりに剣を弾く。

右、左、真正面と来て、左。足元。右、胴体。

紙一重の回避が続く。

避けても避けても終わりが見えず、反撃の暇も与えてくれない。

魔女教徒と言えば狂信者のイメージしかなかったが、なかなか堂の入った連携だ。これにはレムも目を見張ってしまう。

ならばとレムは大地を蹴って目眩ましを狙う。

数名の兵士達が下がる。

しかしほとんど同時に別の兵士達が距離を詰めてきていた。

振り下ろされる剣。

レムはバク転してコレを回避。

剣が深々と大地に突き刺さった時にはレムは木立に垂直に着地していた。そして脚を撓めて空を飛んでいた。

見上げる兵士達と目が合う。

既にレムは鉄球を振るっており、遅れて飛んできた鉄球が一人の剣を粉々に破壊する事に成功。

だけど、それだけだ。

着地の直後、背後に熱を感じ取ったと思えば、レムは業火に包まれてしまう――！

「~~~~~ッ！ ハアツ、ハアツ……！！」

展開したヒューマが命を救っていた。

左腕が代償として酷い火傷を負ったが、痛みに悶える暇はない。翳した掌を兵士に向ける。

すると拳大の氷の礫が兵士達へと飛翔していった。

「魔女教……。魔女教……。ッ！ 魔女教……。ッ！！」

レムの目に狂気が混じり出す。

応じるように彼女の角が光を増し、威圧だけで騎士達がたじろいだ。

「今度こそ……今度こそ奪わせません。今度はレムが守るんです……！」

レムは鎖を手繰り寄せ、振り回し始める。

子供程の重さのある鉄球をまるで水風船のように廻せば、

重たげだった回転音はすぐに大気を揺るがす悲鳴へと変貌していた。

それは触れるモノ全てを粉碎する、無慈悲な鎌。

「お前達なんかレムの大事な人を奪わせて——たまるかアツ!!!」

——周囲を震わす咆哮。

修羅となったレムが騎士達に躍りかかった。

まず剣を掲げた騎士の一人が、上半身を鎧ごと引き千切られた。

鬼族が誇る臂力と回転力が重なった一撃は、相手を容易に物言わぬ肉塊へと変えていた。

受けが通用しない事を悟り騎士達が距離を取ろうとするも、その瞬間、手から離れた鉄球が別の仲間を喰らっていた。

信じられないほどの衝撃音。

食らった騎士は爆散していた。

まるで魔法が込められているかのような馬鹿げた威力だった。

しかし魔女教徒達に動揺はない。

冷静に距離を取れば魔法攻撃にシフト。

間髪入れずに放たれる火球による集中攻撃。

レムの視界いっぱい広がる灼熱の壁！

大ダメージは免れないそれを、レムは回転させた鎖を盾代わり防いでいく。

お返しの投擲は延長線上の樹を粉々に粉碎。騎士には当たらない。

反撃だと投擲後のレムに一人が斬りかかる。

しかしレムにはお見通しだった。

焼け爛れた掌が騎士の視界を覆ったと思えば、顔めがけて鋭利な礫が殺到。

たまらずたたたらを踏んだ騎士は、背後から手元に戻ってきた鉄球でヘルメットごと頭蓋を破壊されてしまう。

血しぶきがレムの顔を染め上げていた。

憤怒の表情を浮かべ、その身に少なくないダメージを刻みながらも、

魔女教徒達を殺し尽くさんとするレムは、

まさしく一人の修羅であり、復讐者だった。

里の無念を。

家族との離別を。

姉への償いを。

そして自らの後悔を精算するため。

レムは舞う。舞う。舞う。舞う。

しかしながら一人を殺せばまた一人。一人を殺せばまた一人と、魔女教徒の数はまるで減っていない。

彼女の周りをおびただしい程の死者で埋めても、それは変わらなかった。

ツンとする鉄の臭い。大地に塗りたいくらわれた真紅。

まるで出来の悪いホラー映画のようだ。

寝転ぶスバルを庇うように立つレムも、夥しい数の傷を負いつつも、全身を血で染め上げていた。

「ふーッ……!! ふーッ……!!」

肩を怒らせて牙を剥くレム。

そして表情ひとつ変えず取り囲む魔女教徒達。

酷使した両腕はひとりでに痙攣し、全身からとめどなく汗が溢れている。

顔を濡らす血を拭い、荒れる吐息を収めようとしながら、レムは冷静に考えていた。

このままではジリ貧だ。

こちらは消耗してしまっているし、あらゆる面で不利なまま。

守るべき相手がいる。

四方を常に囲まれ続けている。

精神的な揺さぶりが効かない。

死をも厭わぬ攻撃を仕掛けてくる……など。

考えれば考えるほど不利な要因が炙り出されてしまい、彼女の顔から険しきは抜けない。

しかし気付いた点があった。

(コイツらはスバル君を狙おうとはしていない……? まるでスバル君そのものが狙いであるかのような……どうしてでしょう?)

スバルを背にして戦った時だけ、魔法攻撃が止むのがその証左だった。

考えるにスバルから発せられる魔女の臭いが仲間と思わせるのだろうか? ……だからといって彼らに渡すつもりなど毛頭ないが。

「まだやるか魔女教徒共ッ! 更に屍を積みたければ好きにするが、いッ! その全てを鉄球で、粉碎しつくしてやるッ!!!」

大地を踏みつけ啖呵を切るレム。

じわりじわりと包囲網を縮めてきていた魔女教徒達が、ならばと互いの死線に飛び込もうとした——直後のことだった。

「っ!」

「……」

遠くで何かが爆発した。

そして得体の知れない生物の嘶いきが空をつんつぎいた。

仰ぎ見た先にあるのは、一部が崩壊した屋敷。

そして崩壊した部分から黒い竜のような存在が、首をもたげて咆ほえていた。

神経を逆撫でする不協和音。

否が応でも注目をかっさらった音の主は、こちらに長い首を向け、次の瞬間屋敷を蹴つてこちらへと向かってきたではないか!

不確かだった存在が視界の中で大きくなっていく。

確かにそれは黒竜だった。

しかしレムが思い描く黒竜とは大きく乖離していた。

ツタのように絡みついた脈打つ血管。

至る所から突き出た金色の結晶。

どこが目で、鼻で口なのかすら分からない潰された顔面。

『なあああああああにをやつていやがつてるんですかあああああ  
くくくくツ!!! こんなところで道草食ツてる場合じゃねえでしよ  
うがあああああつ!!!』

生き物と評するのもおこがましい、酷く冒瀆的な存在がそこに居た。

耳を塞ぎたくなる程の不快な雄叫び。

人間ではおおよそ出せない、しかしてドラゴンとも思えぬ声をかき鳴らす乱入者は、包囲網の一部を巻き込んで着地した。

魔女教徒達が声も挙げずにグシャグシャに轢き潰されていく。

騎士どころか木々すら破壊してようやく立ち止まったその存在は、スバルを庇うようにして立つレムを睥睨する。

『あー、いたいた。いたじゃねえですかア! こんなクソどうでもいいゴミ相手にどんだけ時間かけてやがってんですかア!』

「……」

『確かーースバル君でしたっけえ!? スバル君、す・ば・る・クウウウウくくくンツ!? 聞こえてやがりますかア!? なくにメスに隠れてブルつちまつてるんですかア!? ビチクソ人形といい、このゴミと言いますに庇われる趣味でもあるんですかア!? ホント生きてて恥ずかしくないんですかねえ!? キヒツ、キヒヒイッ! カペラ・エメラダ・ルグニカ様がやつて来ちましたよおツ!? 会いたかったですよ浚さらいたかったですよ味見したかったですよオツ!』  
「ひいつ!? ひ、ひあああああツ! あ、あくまつ、あくまあつ!」  
『ギヒヤツ、悪魔だなんてっ酷いじゃないですかあつ! 遠路はるばるの会いに来たつていうのに、どうしてアタクシを拒絶するんですかあ!?! げらげらげらげらげらツスバルくウン! 泣かないでくださいよオツ! まあだぶっ壊れるには早いですよお!?! ——……あ?』

恐れていた存在が形となって表れ、半狂乱になるスバル。

レムがそんなスバルをなだめすかすように抱きしめれば、狂的に上機嫌だったカペラの機嫌が急激に下降したのがわかった。

『……なあんですか、なんなんですか、なあにしゃがってんですかああ？ アタクシの前で気つつっ色悪い三文芝居ですか？ 庇護欲発揮しちまってんですかあ？ 母性漏れちまいましたかア!? はつきり言つて吐きたくなるんでやめてもらつていいですかねえッ!』

「……貴方も、魔女教徒なんですか?」

『しかも当たり前のように無視ですか! あーほんツツツとムカツキますよ、アタクシへの礼儀を全く弁えていない! アタクシが来たんだつたら泣いて低頭平身して謝罪するのが筋つてもんじやないですかあ!? 答えはYESですよ満足しましたかクソ肉がツ! お礼はいいから早く自害しろ。そして愛しのスバル君をこっちに渡せよ』

「そのお願いを聞くことは到底出来ません。どうかお引取りを」

『願いじゃなくて命令なんです。命令。つつか面倒なんで死ななくていいからスバルくんだけ渡してくれねえですかあ? いいじゃねえですかそんなぶっ壊れたゴミ屑の一人や二人くらい。口を開けば妄言か悲鳴か、涎しか出せねえ自動排泄物撒き散らし人形でしょ? ただの出来損ないの成れの果てじゃねえですか。そんなのに愛だの恋だのくツツだらねえモン感じて操立てよつてかア!? 哀れ過ぎて涙も枯れるつてなもんですよ! はつきり言っておきますが徒労なだけです。だからほらっ、なア!』

口を開けば腐臭が漂う悪意を零す醜悪な竜。

ソイツが嘲笑う。スバルを引き渡せと。

竜に同調するように騎士達も一斉に剣を向けてくる。

スバルを狙う理由は不鮮明。

ただ渡したら最後、碌でもない事に使われるのは目に見えていた。応じるといふ選択肢はありえない。

スバルを守るのは今のレムにとつての使命であり、厳命だ。

しかし……レムは同時に悟っていた。

彼らと戦つて勝てる見込みは、そもそも無いという事を。

『……はあく……ッ、なんですかその覚悟決めちゃった目はア

……バカなんですか？ 死にたいんですか？ 面倒だからやめてくんねえですか？ 死にたいなら手伝ってあげますからまずはスバル君置いてくれねえですか？』

「全力でお断りいたします」

『あツツツツツツッそ！ じゃあ死ね』

その言葉と同時に剣を立てた騎士達が殺到した。

全身が串刺しになるであろう、致命の攻撃！

しかしレムはスバルを抱いたまま両脚になけなしの力を込め——木々を飛び越す程跳躍していた。

『あ？』

レムが選んだのは抗戦ではなく、逃走だった。

包囲網から逃れ、木の枝に着地したレムは、その枝が折れるほど力を込めて次の木へと飛んで逃げる。

遅れて地上から追走する騎士達。

お姫様抱つこの態勢でスバルを運ぶレムに火球を投擲。

進行方向に炎が撒き散らされる。

吸えば喉を焼くほどの熱が何度も傍をかすめる。

それでもレムは走りを止めない。

どこにそんな余力があるのか、小猿のように木々を飛ぶ。

レムは希望を見出していた。

このままならば奴らから逃げれるのでは？ と。

しかし——後ろから迫る謎の音にふと気が付いてしまう。

『どこへ行きやがるんですかあああああああつ、アタクシ置いてお散歩ですかあああツツ!?!』

レムは背後を振り向いたことを後悔した。

何故ならカペラが、その巨体の至るところから細い脚を生やして地を這って追跡していたからだ。

まるで巨大な虫のような威容に、ぞわぞわと足元から生理的嫌悪感が沸き上がる。

『スバル君、すうううばるくうううんっ!? 待っててくださいねえええっ！ 今そのゴミクスから、アタクシが救ってあげますか

「らねええええええええええつ!!」

「ひっ、ひいっ!」

巨体が木々を破壊している。

化け物の体は脆いのか、木と衝突するたびに黒々とした血液が巻き散らされている。

走る。

尽きかけていた活力を使い切るまで。

いや、使い切っても尚限界を超えて走る。

捕まれば死。

いや、死よりも酷いことになる。

自分なんてどうでもいい。

スバルが捕まってしまうのは、絶対に避けねばならない事だった。

『そおっおらそらそらあ、鬼さんどちら?! 手の鳴る方へ——っ!』

「——ッ!? スバル君、口を閉じていてくださいっ!」

顔のすぐ隣を、黒い何かが弾丸のように通り過ぎ、レムの背筋が総毛立った。

返事を聞かないまま大きく跳躍。

すると黒い血が散弾のように周りを貫き始めていた。

レムは見た。

木々が腐り落ちる。いや、萌えていく姿を。

限界以上に回復させる呪いの血により、破壊された傍から歪に、禍々しく成長していく森。

当たってはいけない。触れてもいけない。

その事実を本能で理解したレムは、今まで以上に角を光らせて走り続ける。

棒のように重たい脚が情けない。

焼けるように熱い肺が重苦しい。

不安定な足場が煩わしい。

降り始めた雨が鬱陶しい。

この森の断末魔が耳障りだ。

何もかもが自分に不利に働いてるようにも思え、レムの心は否応な



く苛立った。

(駄目。余計な事を考えるなレム！ ただスバル君を安全な所へと移す。それだけを考えろ。速度は私の方が早い、だからいざれ撒くことだって——)

「——つづう?!」

『おつ!? 今の惜しかったですねぇつ、キヒイツ、そろそろ楽になってもいいんじゃないですかあ!? 大丈夫ですよ苦しいのは一瞬だけ、あとは狂っちまうほど痛みを与えてじわじわと殺してあげますからねえええええええ!』

黒い血が腕に一滴だけかかった。

ただそれだけで全身を焼かれるような痛みを覚えた。

見れば腕は別の生き物のように痙攣しており、血が根を張っている。

自分の腕の筈なのに自分ではない何かに作り変えようとしているように思えて、おぞましさに全身が震えた。

努めて、レムは自分の腕の事を考えないようにした。

スバルが無事であればいい。

彼女はただソレだけを考えてひた走る最早それだけだった。

(森のつ、出口はすぐそこ！ 脚が重いつ！ でも森を出れば遮蔽物がなくなる！ 今度こそ終わり？ 違う！ まだ終わりじゃない希望はある！ エミリア様、大精霊様にお渡しできれば……!)

ここに来てレムは自分の不手際を呪った。

逃げる方向が真逆だ。

自分は屋敷から離れるように進んでいる。

だからと言ってこのままUターンが出来ると思うのか？

否。断じて否だ。

心は燃えていても、体は燃え尽きる寸前だ。

そもそもの話、エミリア達の安否も不明だ。

屋敷からこの化け物が飛び出してきたということは、彼女達から逃げたか、あるいは彼女達を倒したかのどちらか——

レムは憎悪の目で化け物を睨んだ。

不定形の化け物は、その顔がどこにあるかすらも分からないのに、こちらを嘲笑したように見えた。

（一呼吸。一呼吸だけでも息をつければ——！　っ、しまった！）  
脚が一瞬もつれた。

全速力で走っていたレム達にとってそれは致命傷ともいえる隙。  
がくつと速度が落ちた瞬間、彼女の胴体に瞬時に黒い触手が巻き付いていた。

「あつ、が、あ、あ、あ、あ、ア、ア、ア、ア、あ、あ、あ、あ、——ッ  
!!!!」

直後全身を貫く、感じたことのない痛み。

得体の知れない何かが自分を浸食してくる感覚。

悪意に満ちたそれがつま先から頭に至るまでのすべての神経を、一斉にほじくり出すような、筆舌に尽くしがたい体験！

（か、体が壊れ、るッ——千切れる、腐り落ちるッ——!?!）

意識を置き去りに自分の体がひとりでに震え出し、レムは細胞一つ一つが弾け飛びそうな感覚に陥っていた

『はい鬼ごっこ終わりイッ！　ほんつと、無駄な事させやがって……  
おおよしよしスバル君、スバル君スバルくううん、ようやく会えま  
したねええッ！』

「ひいつ、ひつあ、や、やだ……やだああ」

『おおよちよちよちくく大丈夫ですよおつ、スバル君はべーつつ！  
こんな虫ケラよりもつと好待遇ですよおおおおつ!?!?』

同じく触手に絡めとられたスバルを、怪物が歪な場所から伸びた舌  
が舐め上げている。

ぶれる視界、湧き上がる吐き気。

自分の大切な存在が目の前で汚されて居ると思うと、全身がかつと  
赤くなる。

角が今まで以上に光り輝いた。

レムは痛みも忘れて細腕で触手を掴むと——それを、千切り始め  
た。

『おっ』

「は、なせっ——はなせエエッ!!! スバル君から離れる化け物ッ!  
はなせえっ! 離れるオツ!!!」

——ぶちっ。ぶちりっ。ぶちゆっ。ぐちい。

まとわりつく触手を剛腕で引き千切る。

引きちぎった傍から触手は再生するが、構わないとばかりに剥ぎ取る、もぎ取る、耖り取る。

撒き散らされる黒い血でレムは侵食されるばかり。

レムの腕は最早漆黒に染まりきり、人の腕とは思えない程だ。

だというのに、今のレムは何の痛痒も覚えていない。

ただ憤りと使命感だけが彼女を支えていた。

『はく……本当萎えますねえ。お前、アタクシの中で評価最悪ですよ？ 人の言うことは聞かない、話は無視する、信頼とか愛を信じてる、無駄に諦めが悪い……どんだけ人に嫌われるのに余念がねえんですかねえ』

「ひゃら、レムっ……レム! たすけて、レム!」

「っスバル君ッ! スバル君ッ! 待っててくださいいつ、レムが!

レムが今そこに行きますから!」

『……うわア』

黒い海をかき分けるようにして進む。

10cm進めば、9cm引き戻される。

でも構わない。1cmずつ近付いている。

腕が取れても構わない。

胴体がちぎれても構わない!

スバルを救えるならどうなってもいい!

必死の形相で、必死の覚悟で成し遂げようとする一人の鬼に、スバルもまた手を伸ばす。

あと1m。あと50cm。あと30cm。20、10——彼女の限界まで伸ばした手が、スバルの指先と触れ合う。

その寸前で、レムの意識は途絶えた。

『——きつしよく悪い寸劇でしたね。金返せってなもんですよ』  
スバルの口から今まで以上の絶叫がほとばしり。  
直後、彼もぷつりと気を失ってしまうのだった。

## 第六十二話 始めまして。またお会おうね

「ぐ、グラン……」

視界がぼやける。頭が、割れるように痛い。

呆然と立ち尽くしていたカリオストロは、思い出したかのようにふらふらと近寄り……そして、微動だにしない彼のそばにへたり込んだ。

グランだ。

間違いようがなかった。

むしろ間違いであって欲しかった。

先ほどまで元気に話をしていた彼は、今は虚空を見つめて動かなかった。

心臓を刃物で一突き。そして同時に首を深く切り裂かれているのが致命傷となったようだ。全身の至る所にも刃物の傷があり、彼が眠るその場所は血だまりが広がっていた。

無意識に投げ出された手を掴み、脈を図る。しかし願った反応は当然なく。冷たくなりつつあるその体にカリオストロは胸を曇らせてしまう。

「嘘、だよな……？ な、なあ、グラン……返事を……返事をしろよ……っ」

——グランが、死んだ？

次元を超えた化け物を相手にしても、どんな絶望的な状況でも必ず勝利を掴んできたコイツが？ 冗談を抜かせ。嘘をつくなよ。こんな信じられる訳がない。

否定する心と相反する現実、その矛盾に、今までにない程の痛みを心が訴え始める。

自分が支えていた何か音が立てて折れる感覚。全身に重たく押し掛かる倦怠感。かつてない程の絶望。カリオストロの中でどれほどグランという存在が大きかったのかを、まざまざと思い知らされた気分だった。

「だ……だめ、駄目だ……っ、まだ死ぬなよ！ お前の旅はまだこれからだろ!? オレ様を置いて死ぬんじゃねえッ！」

血だまりを濡らす大雨の中で、焦燥感に駆られたカリオストロは回復魔法を唱え始めていた。柔らかな光がグランを纏う。するとその外傷が立ちどころに癒えていく。奇跡と見まがう光景……しかし、肝心の魂は戻らない。

ならば効くまで流すだけ！ 重ねに重ねた回復魔法がグランを癒やしていく——どんな大ケガもたちどころに直る筈のそれは、しかし今では周りを照らす照明にしかない。

効果のない無駄なあがき。壊れた器に水を注ぐ無為。分かっているでも諦めきれず、カリオストロはひたすらに試みた。十回、二十回……そして三十回ほど一帯が明滅する。しかしそこまでしても望みは叶わない。

「~~~~~……ッ！」

とうとう意思に反して魔法を唱えることが出来なくなった所で、カリオストロは悔し気に地面を叩いた。

無情なる現実屈したその姿は、どこにでもいる少女にしか見えなかった。

——なんてザマだカリオストロ。

——お前がついていながら、グランを救えなかったなんて。

——ほとほと呆れる。心底救えない。

——何が天才錬金術師だ。何が真理の探究者だ……ッ！

ヒビ割れた心の中で、悲しみと怒りだけが渦巻いていた。

割れるほどの頭痛。ぐらりと傾く世界。目眩がする。吐き気も止まらない。どうしてこうなってしまったんだ？ 自分は最善を尽くしたつもりだった、それなのにこんな……こんな結末、断じて認められない！

「……っ」

そうだ……認めてはいけないんだ。

まだ出来る事はある筈だカリオストロ。無駄に長生きしてはいないだろう？ 禁忌に手を染めたついでいい。世界を敵に回したついで

い！ 蓄積した知識をひっくり返して、人っ子ひとりぐらい生き返らせて見せろ……！

「ルリア」

「……」

「ルリアッ！」

「っ、カリオストロ……さん？」

茫然と座り込んでいたルリアが、こちらを向いた。

「お前とグランは一心同体。一つの命を分け合って生きている……そうだろ？」

「……」

「ならやりようはある……！ 命が枯渴したなら、もう一つ命を足してやればいい。そうだ、そうすればグランは……！」

「お、おいカリオストロ、お前一体何を……！」

「オレ様の命を継ぎ足すんだよ……！ 肉体は死んでも魂の残滓ざんしはまだこの辺りにある筈。このオレなら捕縛できる……そうすれば、そうすればきつと蘇る！ 多少は不格好かもしれねえ、不便かもしれねえ！ けどグランが生き返るならオレは——！」

「……だめ、です」

ルリアが力なく首を振った。

その思いもよらぬ反応に、カリオストロは呆気にとられてしまう。それこそ親友以上にお互いを信頼しあっただろう？ それなのにどうして救いの手を自ら外す？ どうして諦めてしまうんだ！

「テメエ！ それでも……！」

「だめなんです……グランは……、グランはやられてしまう前に、私とのリンクを切ってしまったんです……だから、それじゃ……駄目なんです……」

「ッ」

「グランは……私を、私を助けるために……グランは……グランは……っ！ う、あ、ああ、ああああ——……ッ！」

ルリアの慟哭が、周りに響き渡った。

六体の守護者が佇むその中心で、崩れるようにしてグランを抱きし





はっと、気付いた時にはもう遅かった。

市民が不安そうに見守る中、四本腕の戦乙女が唐突に街全体に広がる鬨の声を上げたと思えば、周囲を飛んでいた4つの巨大な妖精が細い光線をほとばしらせた。

ぢゅいんっ。

それが街の一角をなぞった直後、通りごと家々が冗談のように弾け飛んだ。

市民達も目の前の光景が信じられないのだろう、しばしの間を置いてようやく怒号と共に逃げ惑い始めた。

「よせってんだコロツサス！ コロツサスう！」

ビィの必死の静止の声に振り向けば、絡繰騎士が一撃を繰り出さんとする所だった。

赤熱した大剣が天高く掲げられ、そして振り下ろされる。カリオストロが見てる前でゆっくりと地面に吸い込まれていけば、それだけで街の景色が一変。岩盤ごと家が吹き飛んでいく。

余波だけでも近くの石畳がめくれ上がるほどの衝撃。咄嗟にバリアを展開しなければ、容易く吹き飛ばされていた事だろう。

ウロボロスを展開し、ビィを抱えて空へと跳ぶ。なけなしの魔力を振り絞った高高度へのジャンプ。街を一望出来るほどの高さまで上がれば、マグナシリーズらと対面することが出来た。

1体でも死線をくぐり抜ける必要があった相手と6体同時に相対する絶望感は、かつてない程だった。

「ティアマト！ コロツサス！ リヴァイアサン！ ユグドラシル！ シュバリエ！ セレスト！ よすんだ！ このままじゃ街が、王都がめっちゃめっちゃになっちまう——聞いてるのか!?!」

「ダメだみんなあ！ ここです暴れたらみんなが……みんなが死んじまう！」

カリオストロとビィがあらん限りの声で呼びかける。長い旅路の中、共に戦った仲間が無辜の市民を死に至らしめる所なんて見たくなかった。

しかし制止の声むなしく、彼らは衝動のままにそれぞれの武器を振

りかぎす。

「よせよ！ 止めろっ！ やめ——！」

嘆願は、吹きすさぶ暴風によってかき消された。

ティアマトとその龍達が悲しみの咆哮を上げたと思えば、かつて王都が一度たりとも経験した事のない暴風が街を襲った。

樽が飛ぶ。煉瓦が飛ぶ。人が飛ぶ。家が飛ぶ。

例に及ばずカリオストロも突風に揉まれ、地面に叩きつけられそうになったのをどうかして防ぐ。

しかし体勢を取り戻した直後に起こったのはユグドラシルによって引き起こされた地殻変動だった。

地面が波打ち、立っていられぬ程の地震が起きたかと思えば、美しい街並みが次々に崩壊。代わりに巨大な地盤が、地面から突き出してくる。

たまらず空へと逃げれば、海でもないのに唐突に現れた高さ数十メートルもの津波が、崩れ落ちた家々と逃げ惑う人々を飲み込むところだった。

リヴァイアサンの仕業だった。

濁流が街の隅から隅まで行き渡り、命の痕跡を消していく。それこそ何十万もの市民が営む王都の歴史ごと。

「ルリア……っ、だめなんだよお……っ暴れたらみんなが……みんながあ……！」

腕の中のビィが涙を流す。隆盛を誇った王都は最早影も形もなかった。

何よりも平和を望むルリアが、この惨状を作り出してしまったという皮肉。これでは兵器に逆戻りじゃないか。

嗚呼どうすればいい。どうすれば現状これを打破出来るんだ？

「——ははっ」

乾いた笑みが自然と零れ落ちていた。

そんなの……もう、どうでも良いではないか。

グランは死んでしまった。

抗う事も出来なかった。

自分の手が届く前に。無残に。終わってしまった。

グランが居ない世界で生き残れと？

そんなの言語道断だ。価値がない。無意味だ。ナンセンスだ。アイツが居なくなつた空に、なんの意味があるというんだ。

「カリオストロ……どうにか、どうにか出来ねえのかよお……！」  
相棒は、相棒は助からねえのかよお……！」

しゃっくり交じりに訴えるビイにカリオストロは何も言わない。しかしながら、解決策はすでに頭の中に浮かんでいた。

それは禁忌だった。

考えても実行に移さなかつた禁断の果実。

しかしグランと言う最後の一線が無くなつた事で、カリオストロは容易にその方法に手を伸ばせてしまう。

——グランの居ないこの世界ではどうすればいい？

そんなの簡単な事だ。

ソレをすればすべて元通り。

王都は元通り、グランは生き返り、ルリアも笑顔を見せる。

全て全て無かつたことになる。

今回は情報が足りなかつた。

だから次は失敗しないように気を付ければいいんだ。

——そうだ。スバルが死ねばいい。

「カリオストロお！」

「五月蠅い」

「えっ？ ……ふぎヤツ!？」

そう思い至つた途端、どうでもよくなつてしまった。

適当な屋根に着地すれば、カリオストロはビイを弾き飛ばしていった。

「な、なにしやが……」

「邪魔をするな——これから、オレ様はスバルを殺しに行く」

「はあ!? 何だつてお前そんな事……! ルリアの事はほっぽりだすのかよお！」

「特異点は死んだ。救う手立てはない。だけど、スバルが死ねば全て

片が付く。この世界を終わりにできる」

「ッ!? お前、何いってやがんだ!」

「諦めろトカゲ……いや、ベイビィバハムート。ここで楽になりたいなら終わらせてやる。どうせ次の世界で会える」

「訳の分からない事いいやがって……トチ狂いやがったのかあ!」

カリオストロにビィの言葉は届いていなかった。

彼女は自分を納得させるかのように一方的にまくしたてていた。

「何もなくても、いずれ蒼の器がお前ごと世界を壊すだろう。それがお望みなら何もしねえよ……ああクソ。なんだってオレ様はあんな迂遠な事してたんだ。最初からこうしておけば良かったんだよ……! 今回はもう諦めるしかねえ。なら次だ。次に活かせばいいだけだ……あんな奴に絆ほだされて、どうかしていた……!」

「一体どうしちゃまったって言うんだカリオストロ……っ、諦めるなんて言葉、オイラ達には似合わねえ! まだ可能性は」

「もう諦めるしかねえんだよッ!!!」

絶叫にも等しい慟哭が、ビィを貫いた。

「グランは死んだ! 今回だって、前回だってその前だってそうだ! 手を差し出すことも出来ずに殺された……っ! もう手遅れなんだ! 天才のオレでも無理なんだよ! もうこの世界に万が一はないッ!」

「か……カリオストロ?」

「オレは思考した! オレは検討した! オレは熟慮した! 条件を変えて、色んな手を借りて! 世話のかかる奴らのケツをひっぱたいて導いた! それこそ身を呈して、死んで、死んで、死にまくって……! その結果がコレなんだ! もう、どうしようもないんだよ! 足掻くだけ無駄なら潔く死んだ方が万倍もマシだ! 違うか!」

弱く、痛々しく、それでいて見ていられない、カリオストロらしからぬ主張だった。満ち溢れていた自信も、自尊心もかなぐり捨てて、たまりにたまった鬱憤をかつての仲間に向けて続ける。

「こんなことになるぐらいだったらお前達と出会わなければ良かった……! 孤高に生きていれば、こんなにも苦しまなかったッ! お前

が、お前達がオレをここまで弱くしたッ！」

「オイラ達との旅まで否定する気かよ……！」

「悪くなかったさ！ 心地よかったさ！ だけど居心地が良すぎた！  
グランはっ、お前たちがオレには眩しすぎた……！ 一緒に居続けるだけでオレらしさが消えていった！」

興味を持った。

グラン率いる騎空団に。

戦士、傭兵、暗殺者、科学者、果ては王族まで一緒に活動している事に。

そして惹かれた。

グランという個そのものに。

相交わる筈もない一癖も二癖もある彼らを、たったひとりの少年がまとめている事を。

みんながグランを好いていた。

彼はどこまでも透明だった。

何色にもなれるのに、どんな色にも染まらない。

それでいて欲しい時に欲しい言葉を。欲しい行動をしてくれる。

そして気が付けば同調しているんだ。

グランの胸焼けするほど優しい行動に。

自分の個を曲げさせるのではなく、

気が付いたらグランの方に寄ってしまう。

「オレ達の事を……見限ったっていうのかよ……！」

「~~~~~ツ、み、限れる訳が……見限れる訳がねえだろうがッ！

だけど……ツ、だけど今じゃ無理なんだ……！ 今のオレ様だけじゃ

……このオレじゃ……ツ!!」

暴虐は未だに続いているようだ。

しかしながら、王都の一部で誰かが抵抗をしている。

それは王都の兵士、リカードら傭兵、そしてラインハルトのようだった。

兵士や傭兵達は団結して対抗しているようだ。大砲や魔法攻撃で山ほどの大きさの星晶獣達を相手取っている。

しかしその戦力差はあまりにも大きすぎた。

10の攻撃を重ねてようやくかすり傷を負わせられるのに対し、たった一回の攻撃で兵達の命が泡のように溶けていく。

唯一拮抗しているのはラインハルトだろう。

ラインハルトはその剣聖としての実力を遺憾なく発揮し、6体の星晶獣を相手に引けを取っていない。

傭兵達はともかくラインハルトならあるいは星晶獣を、ルリアを強制的に黙らせる事は出来るかもしれない。

しかしそれでは根本的な解決にはならない。ならないんだ。

世界一だと自負していた自分の力がこんなにも矮小だなんて。知りたくなかった。

徒労を重ねるぐらいなら、いつそ自分の手で楽にさせてやりたいとも思ってしまった。

「でもそれは……おししよー様らしくないよ」

背後から掛かるクラリスの声。

カリオストロが振り返れば、そこに彼女が立ち尽くしていた。

両目から大粒のナミダを零し。それでも尚気丈に振る舞う彼女の姿が。

「私の知ってるお師匠様は、そんなので諦める人じゃなかったよ……」

「クラリス……」

「おししよー様は、絶対に、絶対に諦めなかった！　どんなに辛い時でも！　どんなに苦しい時でも！　どんなに可能性が低くても！　大丈夫だって言っただけ私達を助けてくれた！　一人じゃダメなら、二人で。二人がダメなら三人で……！　それで……それで……！」

「決めつけるなよクラリス、結果としてオレ様に利が回るように動いていただけだ！　周りを助けたのも、偶然そうするのがオレ様にとっ

て都合が良かっただけ……！　お前らが思うような仲間思いの、聖人君子なんかじゃない！」

「……自分優先？　嘘ばかり。そう言っただけで自分に言い訳してお師匠様は色々な人を助けてくれたよ！　私みたいな落ちこぼれにもつきつきりで錬金術について教えてくれたじゃん！　それも、自分のた

めだつて言うの!?!」

「ッ、お前にオレ様の何が分かるっていうんだ！ オレ様はお前に語られるほど薄っぺらくは」

「——錬金術の基本はっ!!!」

クラリスが遮るように叫んだ。

喉を震わせ、しゃくりあげながら。

「等価交換でしょ——？ お師匠様は、沢山自分を犠牲にしてきた……その代わりに、沢山の人を救ってきてたんだよ……!」

「だから、今度は私も頼つてよ……! 役に立たないかもしれない、邪魔になるかもしれない……でもッ！ それでも私だつて……私だつて師匠を支えたい、助けられた分、恩返ししたいよ……ッ!」

「……ッ」

「ルリアちゃんも……グランだつて絶対なんかかなるよ！ でも、私だけじゃ……私だけじゃ何も出来ないよ……! お師匠様が居てくれないと、何も始まらないんだよ……ッ！ だから、だからあ……ッ!」

とうとう言葉の代わりに嗚咽が埋め尽くし、クラリスは腕で何度も顔を拭い始めてしまった。

そんなの、ただの誤謬だ。

クラリスは都合よく解釈した幻想のカリオストロに縋っているだけ。

本当の自分は違う。自分はもっと浅ましく、打算的だ。

だから、いつものように切り捨ててしまえばいい。なのに。

「~~~~~ッ」

なのに……どうして、切り捨てられない。

たった一言で済む話じゃないか。

『お前が居てもどうにもならない』つて。

事実じゃないか、言えばいいじゃないか。

今更何をためらう必要がある？ カリオストロ!

「い……いいから、消えろクラリス！ オレ様の前から!」

「……」

「この世界はもうおしまいだ！ だから、せめてここから逃げ出せよ……！」

「いや。逃げない」

「ッ、この馬鹿弟子が……ッ、オレ様の助けになりたいなら言うことを聞け！ わざわざ終わりに付き合う必要はないんだ……それなら！」  
「逃げないよ！ まだ終わっていないんだからっ！ グランだって、ルリアちゃんだって……絶対に、絶対になんとかなるもん！ お師匠様がいてくれれば……！」

子供がダダを捏ねているようなものだろう。

何の慰めにも、何の助けにもならないというのに何故耳を貸してしまっんだ。まだ、この耳障りの良い言葉に浸かっていたいのか？

「クラリスう……ッ！」

カリオストロは激憤した様子で掌をクラリスに向けていた。

宙に浮かぶ魔法陣は間違えても仲間に向けるモノではなかった。

「殺されたいならそう言え！ ひと思いに冥土に送ってやるッ！」

「死にたくない！」

「それなら——！」

「でも逃げたくなんかないよ！ まだ何も終わっていないんだから——！」

クラリスが一步、踏み出した。

行使されれば塵一つ残さず消え失せてしまうのに。命を脅かされている自覚もないのか、一步。また一步と距離を詰めてくる。

「近寄るなァッ！」

カリオストロは、知らず後ずさっていた。

クラリスを殺したくないから？

違う、クラリスの覚悟が自分を下がらせている。

クラリスにとっては一度きりの人生で、一度きりの世界。そうだ、彼女にはこの世界しかない。

だからこんなにも重いんだ。

だからこんなにも響くんだ。

「お師匠様……ううん、カリオストロ」



気付けば背中に何かが当たった。壁か何かだろうか。そんな事どうでもいい。

クラリスの顔はもう目と鼻の先だった。

ひとりでに震えていた自分の腕は、そつと彼女の両手に包まれていた。

霧散する魔法光。そしてクラリスは泣きはらして赤くなったその目でこちらを覗き込んでくる。

「グランを——私達を、助けて」

——直後、クラリスが吐血したかと思えば、その姿が掻き消えた。

§ § §

「が、あつ、ハッ!？」

「——ひっ、キヒヒヒッ、涙涙の素晴らしいお話じゃねえですかあッ!? 聞いていてホンツツツト感動のあまり何度コイツラ早く死なねえかなって思っちゃいました……つい、ヤっちゃいましたあ☆ 悪いですねえカリオストロちゃんツ、テメエのクソ弟子を殺すのがテメエじゃなくてアタクシで!？」

カリオストロには、その光景が理解出来なかった。

空を飛ぶ龍。その触手と思しき腕が、クラリスを空中に縫い止めている。

触手にしては太すぎるそれは腹部を貫通しており、どう見ても致命傷だった。

「クラリスうっ!」

「あ! それとも殺りたがってたようにトドメだけはテメエでやっちゃいますウ!? 今なら充実のサービスでテメエを苦しめさせて頂きますんでえ、ほら大事な大事なクソ弟子さんです——よオツ!」

「!? くらり……ぐうッ!!」

触手がぐねったと思えば、クラリスがこちらめがけて投擲された。

カリオストロは咄嗟に魔法を展開してクラリスを受け止めるが、そ

のあまりの威力に背後の家の中まで吹き飛ばされてしまう。

鈍痛に眉をしかめる。腕が折れたのかもしれない。

だが、そんなことよりもクラリスだ。

彼女の腹部にはどうしようもない程の大穴が空き、黒々とした液体が皮膚を侵食していた。

「クラリスッ！」

「お、しししょうさま……」

カリオストロは条件反射的に魔法を発動させていた。

回復の光。しかし出洩らしの魔力では彼女の傷は全く治せない。

腕の中でクラリスの命が溢れていく。

ただそれだけでカリオストロは冷静でいられなかった。

「テメエ、何しやがんだっ!! ——ギヤツ!!」

「あ? 何ですかコイツ……精霊ですかあ? 邪魔ですよっ」

「ビィ!?!」

怒りのままに突進したビィは鎧袖一色。ソイツに長い尻尾で遠くに弾き飛ばされて見えなくなってしまう。

突如現れた歪な黒竜——カペラ本人に違いなかった。

本当に最も表れて欲しくない時に現れたカペラに、カリオストロの顔が大きく歪む。

「ギヤツハハハハハアツ——げらげらげらげらげらげらあッ!

そう、そうですよ! それですよ! その顔ですよッ! ようやく見れ

ましたよテメエのその顔をオツ! あああああああああああ

くく胸がスつとしますねえ! やっぱり復讐は気持ちいいです

よオ! ねえお師匠さんッ!? どんな気分ですかあ!? 散々いた

ぶった相手から逆にズタボロにされる気分は!?!」

「……ッ」

永い人生の中でこれほどまでに怒り狂った事が、かつてあつただろうか。

救うはずの人を救えず、吐き気を催す程の畜生に辛酸を舐めさせられてどうして黙っていられる!?!

命じずとも傍に現れるウロボロス。憤怒の表情を浮かべたカリオ

ストロがカペラを睨みつけたと同時に、それらは飛びかかっていた。ウロボロスは触れるだけで分子の一つまで分解してしまう凶悪な龍だ。しかしながらカペラはニマニマと意地の悪い笑顔を浮かべ、動こうともしない。

ならばお望み通り穴だらけにしてやろう、と意気込んだカリオストロだったが――、

――ぴたり、と触れる直前でウロボロス達が静止してしまった。

「おやおやおやおやア、いいんですかア？ アタクシを殺さなくても……？」

「てっ……め、え……ッ！」

「そんなにこの肉人形が大事なんですかねえ？ カリオストロさアん？」

龍となったカペラの体。その中央から、スバルが埋め込まれていた。

触手で絡め取られたスバルは力なく項垂れており、ソレが偽物でないことは雰囲気で分かってしまった。

「ほオラ油断大敵イツ!!」

「――がッ!？」

太くたくましい龍の尻尾がクラリスごとカリオストロを打ちのめし、別の家の屋根まで吹き飛ばされてしまう。

防御が遅れたせいでモロに食らってしまい、血反吐を地面にぶちまける。

「があ、ク、ラリス……っ」

飛びそうな意識を意地で繋げる。

クラリスはもはや虫の息だ。早く、早く彼女を助けねば。こいつを退けて……いや、こいつから逃げて……それは可能なのか？ もう詰んでいるんじゃないのか？ 誰かの助けを求めるのか？

思考を巡らせながらもクラリスの元へとよろめきながら近付くカリオストロ。しかし二人の間に着地したカペラは、攻撃の手を緩めない。

「ギヤツハッ！ なああにおねんねしやがってんですかあ!？」

遅しい龍の足が、カリオストロをボールのように弾き飛ばす。壁に叩きつけられ苦悶の声漏れる。たまらず抵抗しようとするが、その時に限ってスバルを盾にするため一向に攻撃出来なかった。そして、カリオストロはしばしサンドバックのように殴られ続けた。

頭が、割れるように痛い。

全身がうだるように熱くなっている。

腕も足も、折れている気がする。

思考もまばらのまま、人質になっているスバルを見て、ふと思い出す。

——なんでオレ様は躊躇ってるんだ？

——そうだよ。スバルを殺せば済む話じゃないか。

——殺しちまえば全て元通りだ。

——さつきあれだけ殺そうと息巻いてたのは誰だよ。

——ほら、やっちまおう。もう苦しいのは嫌だろ？　なあ。

どう足掻いてももう取り返しが付かない。

ただウロボロスでスバルごとアイツを分解しちまえばいいのになのに。

真紅に染まる世界の中、目覚めたスバルと目が合う。

現状が理解出来ないのか、危機的状況なのにぼかんとこちらを覗く顔がどこか滑稽で笑えて仕方がなかった。

(どうして……アイツを殺せないんだよ……くそお)

「……ありや、もうオシマイですか？　つまんねえ……つまんねえよ、つまんな過ぎるだろこのクズ肉がアツ!?　こちとらテメエに何回殺されたと思っていやがんだ!?　百倍以上殺し尽くさねえとアタクシの気が済まねえだろうがよオ！　聞いてんのかクズ人形があッ！」

「う、ああ……ああ……ああああ……！」

「ふ~~~~ツ……ふ~~~~ツ……！　……お？　あ~~~~ららら……眠り姫のお目覚めのようにすねえ〜！　大丈夫ですよスバルくウン、泣かないでくださいねえ？　まだこれからです、これから愛しのメスがもつとも~~~~とボロクソになる所を、特等席で見せてあげますから

ねえ〜っ!」

げらげらげらげら。下品な高笑いとスバルの悲鳴が不協和音を奏でる。カリオストロは聞きたくもない合奏から耳を塞ぐ力もなく、二人をぼおつと眺めるしかない。

「——それにしても、予言どおりに進めたらこんな事になるなんて……いや〜驚いきつてもんですよっ、王都を守護する龍ってあんなおぞましい奴らなんですかねえ」

「……?」

「ポルクスも……いや、カストールだっけ? まあいいや。アイツ死んでやしないでしょーね。何か狙ってるかよくわかんねーですけど」カペラの背後に広がるのは、それこそ御伽噺のような光景だった。

6つの厄災と、ソレに立ち向かう一人の剣士。

破壊の嵐が降り注げば負けじと彼が剣を振るい、その度に極光がまたたく。

まるで創世神話だ。

王都はその余波に巻き込まれ、崩壊寸前に追い込まれていた。

「……ま、いいや。あとは試練の続きをしてアタクシらは撤収ってなもんですね」

「試、練……エミリアが?」

「ハッ、今更気にする事なんですかねえ? そうですよ、テメエの入れ知恵か何か知らねえですけど、こっちも万全じゃないっていうのに無駄に足掻きやがって……」

試練はまだ続いている。

それはエミリアが生きている事の証左に他ならない。  
やはり、こいつは無敵ではないんだ。

立てた対策は多少なりとも実を結んでいるのだな、と他人事のようにカリオストロは思った。

「——さあって、おかわりの時間ですよ。剣聖はまだまだ化け物どもと遊んでるみたいですし。こっちももつと遊びましょうよ、キヒツ、大丈夫ですよ、死にかけるたび、アタクシがちやくんと復活させてあげますから、ねえ?」

一步、また一步と悪意が近付く。どうにかして抵抗しようとするが、散々痛めつけられた体は言うことを聞かない。

霞みがかった思考の中、もうどうしようもないじゃないかと諦めかけた……その時だった。小さな光の粒が辺りを舞い出したのが。

「あ？ 何だこの光……？」

カペラの周りを小さな、しゃぼん玉のような光が集い始める。

蒼い光と紅い光。それが花に集う蝶のように舞っていたと思えば、やがて大きな光の渦となってカペラを包み、やがてその全身を包み込む光の奔流となる。そして、

「あ、ぐ、がああつ!? あぎいいいいいいいいいいいいいいい——

——!!?」

「ひあああつ!」

衝撃波が襲う。目の前で天まで伸びる柱となつた光から弾き出されたかのように飛んできたスバルを、カリオストロは咄嗟に受け止める。

荒れ狂う暴風の中、光の中心では黒い影が破滅の舞を踊っていた。

聞くに堪えない断末魔をバックコーラスに、影となつた体がぼろぼろと末端から崩れ、その度に影が盛り上がりつつ補修する。それを繰り返していた。

「ク、ラリス……!」

原因はクラリスだった。体を瓦礫に預けながら片手を掲げ、『存在崩壊』を唱えている。口元からはとどなく血を零したその姿は明らかに満身創痍。だと言うのにクラリスはやめない。命の灯を削りながらも、残された力でカペラを攻撃している。

よせ！ 先にお前の方が死んでしまう！

そう叫ぼうとしたカリオストロだが、暴風の中では一人の声なんて囁きに等しい。

淀む視界の中、伸ばした腕は頼りなく。震える指先は届かず、遠くのクラリスをなぞるだけ。

何度も、それこそ喉が灼ける程叫び、叫び。叫び。

そして凝縮された時の中、今にも崩れ落ちそうなクラリスと目があ



最早人の言葉すら喋れなくなった怪異がこちらに這いよる。壊れかけた体を引きずって、動けぬ二人へ一歩。また一歩。

クラリスの死に悲しみを覚える暇も与えられないとは。カリオストロは満身創痍の体で対峙しようとし……思い至った。

傍にスバルがいる。ガタガタと歯の根が合わぬ程怯える、この世界での相棒。

今ここで彼を殺してしまえばクラリスの死も。王都の崩壊も。そしてグランの死も元通りだ。そうだろうか？

カリオストロの手が光を帯びる。掌に浮かぶ魔法陣。死にかけの今でも、人ひとり殺すぐらいなら容易い事だ。

これで今度こそこれでやり直しだ。

そうするべきだと頭が叫んでいる。

理性が叫んでいる。

本能が叫んでいる。

さあ、やっつけてしまえ——！

——その時、グランとクラリスの顔がよぎった。

「スバル」

「ひあつ……う？」

呆けた目をしたスバルが惚けた声で反応する。

カリオストロは、困ったように眉を下げながら笑みを向けていた。

「すまなかった」

同時に、スバルは何者かに首根っこを掴まれ……この場を急速に離れていった。

掴んだのはウロボロス、その片割れだった。

スバルの視界の中で、倒れ伏したカリオストロと崩れかけのカペラの姿がぐんぐんと遠ざかっていく。



スバルは心の底からほつとした。恐怖と苦しみの根源から逃げられることを。

しかし同時に、締め付けるような胸の痛みが彼を悩ませた。

あれは——誰だったんだ？ あの助けてくれた人は誰だ？

聞いたことのある声。見たことのある顔。

今のいままでばやけていた肖像がじわりじわりと輪郭を帯びていく。

常に冷静で、自分にも他人にも厳しく、口が悪い。それでいて意地っ張りだけど優しい。

王都での盗品騒ぎは、右も左も分からぬ俺を導いてくれたのは誰だった？

屋敷での魔獣騒ぎは、常に隣にいて俺の足りない所を補ってくれたのは誰だった？

あれこそが、自分の大事な人だったんじゃないのか？

「……………かりお、すところ……………」

小さくなっていくカペラが腕を振り上げた。そして勢いよく下ろしたその腕がその先にいる誰かを破壊する前に、視界から彼女達が消えた。

破壊され尽くした住居の一角、そこにスバルごとウロボロスが不時着したからだった。

勢いに乗せて地面を転がるスバル。強い衝撃に肺腑が潰され、思い切りむせ返る。そしてほうほうの体で起き上がれば、すぐ傍で力なく横たえたウロボロスの姿が見えた。

「……………ウロボロス」

幾度となく自分を救ってくれた無敵のウロボロス。その体表が眼前でぼろぼろと崩れていく。

力なく息づく赤い龍は、こちらをじつと見つめている。怒りも悲しみもなく。ただただ見つめ続けている。

「あ……………待て、待ってくれ」

思わず手を伸ばす、しかしその頃にはウロボロスは骨格を維持する力もなくなっていた。手が届く前に土に還ってしまった。辺りに残

るのは白い灰だけ。

「待ってくれよ……置いていかなくてくれよ……！」

強い喪失感が胸を苛んだと同時に、あれだけ不鮮明だった世界が急にスバルの中で輪郭を取り戻していた。

「カリオストロ！」

スバルが叫んだ。叫ばずにいらなかった。

自分のせいでカリオストロが窮地に陥った事へ憤怒。

自分の身を犠牲にしてまで逃がしてくれた事への感謝。

それでいて自分一人しかで逃げるしかないという絶望。

どうして今の今まで忘れていたんだ。

どうして今の今まで気が付かなかったのか！

どこまで自分は愚かしいんだ！

しかしそんな後悔よりも何よりも、カリオストロを助けなければいけない！

そうした義務感が、スバルを突き動かしていた。

「……！」

気付けば走っていた。

傷ついた体に鞭打ち、壊れ果てた街をひたむきに。

背後では相変わらず世界の終わりと見まがう光景が広がっていた。

6体の終末を呼び寄せる兵器と人類を代表とする騎士の壮絶な戦い。

ひとつたび攻撃が振るわれるたびに地が裂け、風が踊り、光が舞い散る。

スバルは、そんな攻撃の余波に晒され、時に足をもつれさせながらも闇雲に走っていた。

「カリオストロ……！……！……！ごめん！……！俺が、俺が悪かった……！」

涙が自然と溢れでる。愚かさのあまり、反吐が出そうだった。

誰よりも自分を庇ってくれたのはカリオストロだった。

なのに、どうして邪険にした。どうして素直に話を聞かなかった？

全能感に酔いしれ、その力を我が物顔で振るい、そしてどれだけの悲劇を巻き起こした？

「お前が羨ましくて、俺も活躍したくてっ、力もないのに！ それなのにッ！」

少し走るだけで息が切れる、力も何もない情けない勇者。

短絡的で、考える事をすぐに諦める、なりそこないの主人公。

自分の事しか考えない、一人ぼっちの王様。

こんな最低な自分なんてほっとけば良かったのに、カリオストロはそれでも逃がしてくれた。

アイツは常に、オレ達の為を思っただけ動いている。

なのに自分と来たら……そう考えただけで胸が引き裂かれそうな気分だった。

両足が悲鳴を上げる。どこにカリオストロがいるのかすらも分からない。

だけどスバルは走り、走り、走り——、そしてついに瓦礫に引っかけたて転んでしまう。

「……ッ」

起き上がろうにも、この体は痛みを発するばかりで立ち上がる事すらできないなんて。

情けない。何で俺に力がないんだ、なんでオレには何も出来ないんだ！

どうして。どうして！ どうして——！

悔し涙を流しながら、地面を叩いて悔しがらるスバル。

そんなスバルにふ、と影が差した。

気付いたスバルが顔を上げれば、そこに居たのは——。

「……ポル、クス、どうしてここに」

「……」

渦中の存在であるポルクスだった。

全身傷だらけで、その手に血に染まったナイフをぶら下げ。相変わらず何を考えているか分からない目でこちらを見下ろしている。

スバルは混乱しきっていた。

この子は……何者なんだ？

友好的なのか、敵対的なのか。少なくともポルクスについている時

点で敵なのだろう。ならばこそ、この子の狙いは一体なんだ？

思わず後ずさる。血染めのナイフ。その矛先が向けられることを恐れて。

「……………ん」

「ッ……………？」

しかし、スバルの予想は裏切られた。

持っていたナイフを適当に投げ捨てたポルクスは、あろうことかスバルに手を伸ばしたのだ。

まさかの対応に呆然としていたスバルだが、逡巡の後、その手に応じてしまう。

その手はスバルが思ったよりも小さく、悪事を為すには事足りないように思えて仕方がなかった。

「……………大変な事になったね」

困惑するスバルに、ポルクスは王都を眺めてぼつりと呟いた。

あれだけ隆盛を誇っていた王都は、今や瓦礫の海だ。

至る所で立ち上る火災や、悲鳴。そして今も続く戦火の音。暴れに暴れた生体兵器達も無傷ではいられなかった様だ。真つ二つに断ち切られた大蛇や、体に大きな太刀傷を残した巨人が、住宅の一面を占領するかのようになく横たわっている。

見守っている今でも街中に響き渡る破碎音と七色の光が飽きずに明滅し続け、世界を揺るがす天変地異と、天まで伸びる極剣が幾たびも衝突を繰り返している。

世界の終わりつつてのは、こういう光景の事を言うのかもしれない。

気付けば他人事のようにその景色に目を奪われてしまった。

「……………ねえスバル。私考えてみたんだ……………どうして先に進めないんだらうって」

一方でポルクスは興味のない絵画を眺めるような態度でその光景を見ていた。

「……………私達はいっだって最善を選んできたつもり。私達が選んだ道こそが正解になる、そうなるように仕向けてきた。だけど……………この景色から先に進めた試しがなかったんだ」

世間話をするような気軽さで語るその内容に、首を傾げる。

私達？ 正解？ 先に進めない？

スバルには分からなかった。分かる筈もなかった。

ポルクスが言ってることも。そしてポルクスと自分との関係も。

ポルクスは間違いなく敵に所属する筈だ。

なのに、自分にだけ友好的に接する理由はなんなんだ？

共に食事をしたよしみ？ 気が合ったから？

違う。コイツは俺に何を求めているんだ？

「……ひよつとしたら、ここで詰んじやうんじやないかなって……期待してた。でも……」

ポルクスが振り返った。

そこにあるのはいつもの無表情……ではなかった。

嗤っていた。

それはそれは、三日月のような満面の笑みだった。

「ようやくその理由が分かる。これがただの詰みなのか。そうじゃないのか」

——コイツは一体誰だ？

「思うに……僕達とスバルはよく似てるって思ってる。僕達は孤独で、独り善がりで、我儘で、どうしようもなく救いようのない存在だ」

——見た目はポルクスそのものだ。

——なのに、頭がポルクスじゃないと断じている。

「僕もスバルもお互いに自分の思い通りにしたい。違うかな？ 違わないよね。他人も、自分さえも、無限にベット出来るコインみたいなものだから」

——口調が違う、表情が違う、態度が違う。思想が違う。

——ここまで違っていると、最初から誰かがなりすましたと考えた方がしっくりきた。

「でも……同時に僕は思う。主人公は二人もいらなくて。だから……決めようよ。僕達とスバル。どっちがふさわしいのか。どっちがこの舞台の主演なのかを」

不意に……ポルクスの背後で黒龍が天高く舞い上がっていった。

カペラのようなおぞましきはない、立派で、たくましく、そして畏怖すら感じる超巨大な漆黒の龍。スバルはそれを知っていた。

ループの終わりを知らせる破滅の象徴。

世界を崩壊に導く存在——バハムート。

奴がまた、この世界を終わらそうとしているのだ。

だけど、スバルはそれすらも忘れて食ってかかっていた。

「お前は……誰だ……？ お前は何を言ってるんだ……？」

馴れ馴れしい高説。身勝手な口ぶり。癪に障る話し方。

どこまでも自分本位で、相手の事を考えない、自分だけの世界に生きている存在。無視をすればいいのに無視出来ない。聞き逃してはいけない気がして、スバルはたまらず聞いていた。

そんなスバルの回答に。きよとんとした顔を見せる。

そしてしばらくしてうんうんと頷き始める相手。

「……確かに、スバルの名前を一方的に知ってるのはフェアじゃないね……初めまして、僕の名前はカストール。ただのカストールだ。えーっと……通り名も一応あるんだ。お見知りおきを願ってもいいかな？」

大仰に。芝居がかった口調で。

自信満々に。

両手を大きく広げて、とてもとても楽しそうに告げた。

「魔女教大罪司教『傲慢』担当。カストールだよ。また会おうね。スバル」

そして背後では、分厚い雲を引き裂いて極大の光線が王都を両断したと思えば、迫る超高温の光の帯にスバルもカストールも瞬時に飲まれてしまうのだった。

## 第六十三話 俺を信じてくれ。

「やつ、きつきぶりだねナツキ・スバル」

次に目を開けた時、スバルの眼前に再びカストールが現れていた。おかつぱ頭と何も読み取れぬ無の顔を持った子供……それが手をひらひらと気軽に振りながら、こちらの顔を覗き込んでいる。

恐らくは同じ人間。しかして、その人間性こそは人間の対極にあると確信している——いわば悪意の塊。

「……ぼ、ルクス？」

「やだなあスバル。きつき説明したじゃないか、僕はカストールだって。あの優柔不断な奴と一緒にしないでくれないかなあ。それ……侮辱だから」

自分はループをした。したはずだ。

周りは見飽きたパーティ会場。8時の鐘が飽きもせず耳をつんざく中、業火で焼かれた感覚は、今も鋭敏に残っている。今はセーブ地点に戻された直後。それは間違いない。ペナルティを考えれば、とぼけるべきなんだろう。だけど……それすらも忘れて食いついてしまふ。

だって、だってそうだろう？

「そんなに驚いた顔するところ？ それともまだ信じられない？ ならどこまで話せば分かるかな。二人でドラゴンのブレスで消し炭になった事？ キミが醜い化け物になっちゃった事？ キミが草原で虫退治した事？」

コイツは過去の記憶を引き継いでいる。

羅列された最悪の過去の数々は、自分とカリオストロ以外が知り得ない筈のもの。なのにカストールは、それを飄々と述べたではないか。

ハツとして胸を抑える。自分からはバラしてはいないが、もしかすればこれもペナルティになるのではないか？ しかしながら警戒をよそに、来るべきはずの異変は訪れない。

これはセーフなのか？ 自分が伝えない限りは問題ないのか……？

「……ねえ、まだとぼけるつもり？ そろそろイライラしてきたんだけど」

「……お前は、何が目的なんだ」

「はあく……また言わなきゃダメ？ ……分かった。キミにも分かるように手短かに話すよ。僕達はそろそろ先に進みたいんだ」

「さ、先……？ つて」

「今日から5日目の夕方。それ以降の世界さ」

スバルは目を見開いた。

それは自分達が渴望している物に他ならない。

絶望の先にある筈の希望、それをよりによってコイツが望んでいるだど!?

「ツ！ そんなの……先に進みたいのは俺も一緒だ！ だけどそれをお前達が邪魔してるんだろ……!」

「勘違いしないで欲しいんだけど、僕はキミの邪魔をするつもりはないよ。というかだね、僕からすればキミが邪魔してるんだ。キミがいるから先に進めない」

「はあ!? 何でそこで俺が——」

次の瞬間……スバルの肩に手が置かれていた。

ぞわりと総毛立つ全身。一体誰だと振り向けば、そこには見知った壮年の男性がいた。

「うちの身内になにか用でもあるんですかねーえ、クズ肉？」

見目と反目する軽やかな音色。そして狂気を孕む眼差し。それは間違いなくカペラ・エメラダ・ルグニカだった。

悪魔に絡まれ、途端に息をすることも忘れて震えてしまうスバル。どうして忘れていたんだ……！ 自分のすぐ傍に黒幕達がいる事を！

「おはようカペラ」

「あ？ 何バラしてんだ死にてえんですか？ つーか……こんなヤツ送り込んだつもりなかったんですが、コイツはお前の仕込みか何かで



「いやがりますか？」

「ううん。この世界の僕の友達だよ。偶然ここで再会したんだ」

「友達い……？ ……お前があ？」

「ひどいなあ、僕だって友達くらいいるよ」

「恐怖が過ぎれば震えすらも起きないのだと、スバルは痛感していた。

心が委縮するのを感じる。このまま置物のように黙り込めば見逃してくれるのだろうか？ 気が付けばそう考えてしまう。

しかし……本当にそれでいいのか？ ナツキ・スバル。

「に、したってこんなに魔女臭ぷんぷんしてるなんて、アタクシが知らねえわけねーと思うんですが」

「とんでもない逸材だよ。彼はナツキ・スバル。僕と同じ『世界をやり直せる力』を持っている人だもん」

「……！」

「へえ……！ お前達、そんな力が……」

『僕もスバルもお互いに自分の思い通りにしたい』

『他人も、自分さえも、無限にベット出来るコインみたいなものだから』

スバルは唐突に理解した。

直前のループ、カストールの発言。あれはこの事だったのだ……！  
「世界をやり直せるってズルじゃねえですか？ その名の通り傲慢でいやがりますねえ」

「不死だったり、どんな姿にもなれるそっちの方もズルな気がするけど。色欲」

「つか傲慢が二人もいやがるんですかあ？ そんなこと福音書には書いていやがりませんでした……そおおれは面白いですねえ、こんだけクセー理由も納得ですよ！」

一方でカペラの汚物を見るような目が、獲物を見る目が変わったのもまた同時のタイミングであった。

彼女は無遠慮に掴んでいたスバルの肩を、一転して労うように優しく撫でさする。

「スバル……でしたっけ、アタクシ達今から面白そうな事をしようと思っただけ……手伝わってくれやがりますよね〜え?」

「先に言っとくと彼はこれからカペ……ホフマンが何をするつもりなのか、ゼーンぶ知ってるよ」

「……んだよもう死にやがったんですかあ、なら大したことねーやつなんですわね」

「うん。それも僕達を邪魔してね」

途端に、カペラの纏う空気がガラリと変わった。

「スバル君? アタクシ達の敵になっちまうんですかあ?」

「………ッ」

覗き込んだ表情はニコニコ笑顔で固定。しかしながら背後から殺意めいた何かを強く感じるようになった。

それは今すぐにもバラバラに引き裂かれてもおかしくないような、一触即発の雰囲気だった。

「それはもう。スバル君は色々としてくれるよ。これから出会うこの子の仲間もそうだし、周りを巻き込んでどうにかこうにかしてキミの計画を邪魔してくる。キミだって何度も何度も死ぬ事になるだろうね」

「へえ〜へえ〜、へえええええええええええ〜………!」

鐘の音をバツクに続く恐喝劇。

周りのパーティ参加者達は壇上に夢中で三人に気付いていない。

この周囲だけ気温が下がっていると錯覚する程、スバルはあてられてしまっている。

このまま自分は間違いなく死ぬのだろう。そう心が諦めそうになるくらいには。

(もう終わりなのか……? 諦めるしかないのか……?)

——不意に、スバルの心に小さな炎が灯る。

どうせ死ぬのなら……最後までいい足掻けないのかと。

あの時の涙と悔しきは嘘っぱちか? 違う。違うだろう。

もう後悔なんてしたくない、もう誰も失いたくない。

みんなで笑って、幸せに過ごせる未来を目指すんだろ……それなら

！

悪寒が今頃になって全身を襲う。唇も、足も震えて仕方がない。

しかしてその口からは、勇気が徐々に形となって現れていた。

「……お、おれは……」

「ああ？　な～んですかあ？　涙声でプルプルしちゃって可愛いですねえ～？　命乞いですかあ?!」

「お、オレ達は邪魔なんて、しし、してるつもりはない……ッ」

「……あ、？」

「お、お前が、お前達が俺たちの邪魔をしているだけだ……！　オレ達は平和に暮らそうとしているだ、だけッ……お、お前達がさつさと、諦めろよ……ッ！」

「——本気で死にてーんですかね？」

掴まれた肩から異音がした。強力無比の万力のような力。スバルの顔にはつきりと苦痛が浮かぶ。しかしスバルはそれでも撤回しない。それどころかカペラとかストールに食ってかかっていた。

「やってみろ……！　今ここでやったらお前たちの潜入は台無しだな……！　騒ぎをかけた剣ラインハルト聖にズタボロにされる運命が見えるぜ……！」

逆境こそ笑え、とは誰が言っただろうか。多分漫画か映画の台詞なんでしょう。

しかしながらスバルはその言葉通り、脂汗を流しながら不敵な笑みを浮かべ、虚勢を張っていた。

「あはははは！　つい少し前に発狂してた姿とは大違いだね。でもまだ勘違いしてる。邪魔をしているのは他ならぬキミ達だ」

「してねえつつつてんだろ！　ただオレ達を無視すればいいだけ……！　なのに突つかかってくるから……！」

「気付かない？　いや、気付けないのか……わかった、教えてあげるよ」

物覚えの悪い生徒を相手にするかのようには、カストールは朗々と語

りだした。

「僕のこの力は、もう一人の自分を作る能力とも言える。この力を使うと、僕はある『止まった時間軸』に囚われる。一方で『動いている時間軸』にもう一人の僕が同時に存在するようになる」

荒唐無稽な語り。しかしてスバルが無視できるかといえは……それは否だ。

「そして『動いている時間軸』の中で僕が死ねば、止まった方の僕が、もう一人の僕を自動的に作り直す。これが僕達の『やり直し』の理論だ」

おもむろにテーブルのナイフを持ったと思えば、眼の前でお手玉のように弄ぶカストロール。

白銀は部屋の中で光をよく反射しており、食事をするべき単なる道具が、今では自分の命を握る凶器に見えて仕方がない。

「僕達はこの力で自由を謳歌してきた。筋書きが分かるってことは、何だつてやり直せるって事だ。なのに……急にその筋書きが僕らの手を離れて勝手に動き始めた」

「……」

「今まで固定だった筋書きが、180度変わっちゃうんだよ？　そして、あまつさえ5日目より先に進めなくなると来た！」

大仰に両手を広げて見せるカストロール。

しかしその顔は困ったというより、むしろ喜びに溢れているように見えた。

「そしたら筋書きを乱す誰かが犯人じゃないか？　つて思うよね……そして、自ずと容疑者は決まる」

「……それが、俺達だっていいたいのか」

「そうさナツキ・スバル。あとはえーつと、カリオストロだったかな？　キミと彼女のどちらか、あるいは両方が僕と同じ力を持っているんじゃないかなって」

当然と言えば当然の帰結。

カストロールはループを記憶出来ていたなら、怪しんだ事だろう。

何せこの披露宴に戻されるたびに、時に顔を青ざめ、時に発狂する

……当初の筋書きとは全く違う反応をするスバルの姿に。

「だ、だとしても俺が何で関係してくるっていうんだ？ 怪しいのは分かるが、俺はただ必死に死なないようにしてるだけ……！ 降りかかる火の粉を払おうとしてるだけで——があッ!？」

「それを言いたいのはアタクシも同じなんですけどね〜え？ 本気で殺しちやいますよ？」

「キミのスタンスは知ったこっちゃないんだけどね、問題なのはキミの力だよ」

「こ、この、力……？」

骨が軋み、苦悶の表情を浮かべるスバルに、カストールがやれやれと肩をすくめる。

「察しが悪いね……僕らは同じ時間軸に生きてる。それなら、どちらかが時間を戻した段階でキミも僕も戻されるのが道理だろ？」

「……！」

心臓が大きく跳ねた。

なるほど道理だ。カストールもスバルも力を持つているなら、力が使われた段階でどちらかを主軸に世界は戻される筈。現に、スバルが世界を巻き戻してカストールは巻き込まれていた。

しかし……だとすれば解せない事がある。

それは自分がカストールの時戻しの影響を受けた覚えがない事だ。もしも可能性があるとするれば、カストールがまだ1度も死んでいない事位しかあり得ないはずだが……？

「もう、五千は超えたよ。僕がこの世界で死んだ回数」

「ごっ……!？」

「ギャハツ、死にまくってるじゃねーですか!？」

ケラケラケラとカペラが下品に嘲笑った。

スバルがこの世界に来てさえ、まだ両手両足の指に満たない程の死しか経験してないのに、もう五千回以上も!？」

規模からして違いすぎる。いや、それよりも……そんなに死んだのなら、何でオレはカストールの時間軸に戻されないんだ?!

「そうさ。キミは僕のやり直しの影響は受けず、僕はキミのやり直し

の影響を受ける。僕がどれだけ素敵な未来を築いても、キミが死ねば全て無駄になつてしまう……虚しいつたらありやしないかい？」

表情を感じ取り辛いカストールから、スバルは明確に1つの感情を感じ取れた。

怒りだ。

彼は静かに怒っている。

それはきつと自分スバルという存在が、その筋書きを台無しにしたことへの怒り……！ カペラとは異質の強い情動に、またもたじろぎそうになるスバル。

しかしその時、不意にスバルの耳が何かを捉えた。

周りを満たす音と言え、ざわめきの声は、定刻を過ぎても行われない発表にしびれを切らした参加者達のもの。しかしそれとは別に部屋の外も騒がしい。それはどたばたと廊下をかけ抜けてくる足跡だった。

（これって……カリオストロか……！ やっぱり来てくれたか……！）

万感の思いが胸にこみあげる。先の見えぬ闇の中、スバルによろやく光明が見えた気がした。

「キミ達と僕は似てるけど違う力を持つんだろうね。推測だけど、僕とキミ達は時間軸をそれぞれ持っているんじゃないかと、あくまでキミ達を主軸として時が動いてるんじゃないかって」

「——スバルッ！」

扉を、それこそ吹き飛ばさんとするほど勢いよく開けたのは、やはりこの世界での相棒だった。

赤いドレスをまとった彼女は、カストールとカペラに囲まれたスバルを見て即座にウロボロスを展開。そして、二匹の龍をこちらに向けて放っていた。

「それで、どっちが起点になっているかっていえば——」

スバルは途端に腕の中でもがき、暴れ、そして逃げ出そうとする。

今はコイツらを何とか出来ずとも、二人、いやみんなで力を合わせればきつとどうにでもなる……！

「キミだよ。スバル」

そう考えた次の瞬間だった。

スバルの視界が大きくぶれたのは。

え、と思う間もなかった。

何故かは分からないが、急に会場の天井付近まで飛んでいた。

スバルの脳内に疑問符が吹き荒れる。流され続ける俯瞰風景の中では、ぼかんとこちらを見上げる客に、カストールとカペラ、カリオストロ……そして頭のない人間がいた。

——頭のない、人間？

遅れて断面から血を派手に撒き散らし始めた、タキシード姿の首無し人間。カストールは銀のナイフを振り抜いた姿勢で。カペラはその人間の肩を掴み続けており。カリオストロは何かを叫んでいた。

——あ。あの死体……オレなんだ。

どこか他人事のように思った瞬間、スバルの意識はぶつり、と途切れた。

「うん、僕の見立てに間違いはなかったみたいだね」

「~~~~~ツ……！」

視点は戻り、また鐘の音が鳴る披露宴が広がっている。

スバルは再びカストールと対面していた。

しかし先程と状況が違う。

カペラがいない。カリオストロがいない。そして、自分は死んでいない。

つまり自分は死に戻りしたのだ。それもあんなにも容易く。

全身からどつと冷たい汗が溢れる。知らず高鳴る鼓動を抑えるスバルに対し、カストールは冷笑をやめなかった。

「キミだ。キミこそがこの世界の起点なんだ」

それは心の底から欲しかったおもちゃが、やっと手に入ったと言わんばかりの笑み。

さながら絶対に逃げられない獲物を前にして、これからどう料理す

ればいいのか舌なめずりするような表情だとも言えた。

「く、来るな」

「あはははは、そんな切羽詰まって逃げなくてもいいよ！　ここでキミを殺したって元に戻るだけなんだからさ」

まあ。ここでキミの心を徹底的にへし折っておくのも1つの手かな？　そう嘯くカストールに、スバルは自然と後ずさっていた。

それこそ気紛れに殺されるかもしれないと思えば、スバルはもう逃げの一択しか考えられなかった。

……気付けば、スバルはパーティ会場の隅の扉に追いやられていた。

「口惜しいよ。とつても似ているのに、キミの力の方が強いのが。なんでキミなんかがそんな力を持つのかは不思議だな。やっぱり魔女に魅入られているからかな？」

「……ふーッ……ふーッ……！」

「まあそんな事はどうでもいいか……それよりもスバル。僕達は5日目より先に行きたい。だけどそのためにはキミが死なないようにするしかない。だからこそ提案だ。僕達はキミには何にもしない。その代わり……僕達と一緒に来てくれないかな？」

カストールの糸目は傍目には柔和に見える。

しかし近付けば分かる筈だ、そのうつすらと開かれた目に宿る異常性に。

それは見る物全てを吸い込む漆黑そのものだ。

何もかも取り込んで尚平然と存在する、ブラックホールのようなものだった。

からからに乾いた喉を無理矢理鳴らしながら、スバルは震える声で投げかけていた。

「お、俺に何もしない……？　それは……カリオストロもか？」

「うーん……まあその子だけなら？」

「エミリアや、レム、ラム……フェルトに、ロム爺達も含められないのか……？」

「そこまでは無理かな。特にエミリアはカペラがご執心だ。福音書を



何よりも優先する彼女が許さないと思う」

「……」

「ああでもエミリア以外なら数名はいいんじゃないかな？ 僕の方で頼み込んで見ればもしかしたらいい返事貰えるかもしれないよ」

エミリアだけを捨てて、それ以外の安寧を取るか。

それとも逆らって最悪の思いをするか。

……………

……………

……。

スバルは、大きく大きく深呼吸するとゆっくりと答え始めた。

「カストール……その言葉に二言はないだろうな？」

「ん。乗り気？ うんうん、命が無敵だとしても死んだり痛い思いはいやだもんね。約束するよ」

「約束じゃ駄目だ、契約出来るか？」

「契約？ あゝ、確か……魂レベルでガチガチに縛るヤツだっけ……別にいいよ？」

表情こそ変わらないが、覆う雰囲気は幾分か柔らかくなったようだ。カストールは嬉々としてこちらの話に乗り始めた。

「俺はどうすればいい？」

「このパーティの後、僕達と一緒に行動してくれればいい。後は街で暮らそうが食っちゃ寝してようが何してくれてもいいよ。ただし勝手に死ぬような事は禁止。自殺も条件付きで禁止だ」

「……条件付き？」

「場合によっては、キミの力に頼る必要が出てくるかもだからね」

その時は苦しまないようにするのは約束するよ、と手をひらひらさせる黒幕にスバルはたつぷりと余裕を持って息をついた。

「その2つの条件は……今日から5日目までにしてくれ」

「えー……」

「俺達がお互い望むのは5日目を超える事だろ？ 5日目を超えたらお互い干渉でいい。違うか？」

「駄目。5日目を超えてキミが死んで、またここに戻されたら意味な

「いじゃないか」

「だが、それはお前達が俺を利用するときも一緒だろ？」

「……」

「お前は知ってるか知らないか分からないが……俺の力はお前と違って任意セーブじゃない、自動セーブだ。俺の予測できないタイミングでセーブされちまう。だから5日目を過ぎてここに戻るかは、神のみぞ知るって感じだ」

「……駄目だね」

「なら交渉決裂だ」

瞬間、スバルの首筋に添えられるテーブルナイフ。

まさしく神速と言える早業。スバルはその起こりすら捉えることが出来なかった。

「死にたいの……？」

「……っ、この交渉のテーブル……っ、俺の方にアドバンテージがあるんだろ……？ お前は俺より強いかもしれない。いや、強いんだろう……けどそれじゃ駄目だ。俺の力の方が強いんだ。それじゃいつまでたっても、進めない……っ！」

「無理矢理従わせたっていいんだよ？ 例えばキミをここで死なない程度に痛めつけ、攫って籠の鳥にするとかね？」

「<sup>剣</sup>ラインハルトのお膝元でか……？ <sup>聖</sup>カリオストロもここに居る……やってみろ、出来るものならな……っ！」

「……」

首筋のナイフが更にめりこむ……しかし、その圧力はすぐに開放されるようになった。

スバルは賭けに勝った事に内心でガッツポーズした。

「……はあ。条件は……？」

「俺から掲げる条件は4つだ」

【条件1】カペラ・ポルクス・カストールはエミリア以外のエミリア／フェルト陣営に手を出さない、攻撃しない。

【条件2】スバルは可能な限りカペラ・ポルクス・カストールのいずれかと行動を共にする。

【条件3】スバルは自らが死に至る可能性のある危険な真似は禁止とし、自殺もカペラ・ポルクス・カストールが許可しない限り禁止とする。

【条件4】これらの契約は、今日から6日目の朝明けまで有効とする。「——そちらが契約違反したら、カペラ・ポルクス・カストールは恒久的に俺達への攻撃、策略の一切を禁止する。俺が契約違反したら、ナツキ・スバルはお前達に恒久的に従う……これでどうだ？」

カストールはふむ、と顎に手を当てて考え出した。

「2つ目の『可能な限り』が気になるね」

『絶対に』にすると、俺がもしもエミリア達に無理矢理攫われたら契約違反になってしまうだろう？ 俺は俺の意思でお前達のところに行くことには変わりない」

「なるほどね。ならあと1つ目の条件だ。僕達が一方的に攻撃されるケースがあるよね？ だから条件を加えて貰おうかな。【条件5】ただしカペラ・ポルクス・カストールが契約対象に攻撃された場合は、【条件1】はその限りではない」

スバルはぐ、と口を噛みしめ。その後渋々と頷いた。

頷かざるを得ないだろう。カストールはスバルが裏をかくつもりでいる事に早々に気が付いていた。

(キミは少しでも味方が有利になるように考えたんだろうけど……甘いね、僕達と行動を共にし続ける事の重大さが分かってない)

時間軸を手中に収めるだけで俄然としてこちらが有利になる。

どうあがいてもスバルは人質という形になり、エミリア達有象無象はそれを念頭に動かないといけなくなる。それはそれは大きなハンデになる事だろう。

(それに……この契約には大きな穴がある)

カストールはニコニコと機嫌良く人差し指を差し出した。

ゲートを開け、触れ合う。さすれば宣誓した互いの契約は魂に刻まれる。

他の誰かを欺けても、己の心を欺くことはできない。ああ便利な力もあったものだ。前の世界もこれと同じ力があればもつとやりよう

があつたのに。

輝く指先をスバルの胸に押し当てれば、お互いの胸に何かすすうつと浸透した感触があつた。

瞬間的に全身が熱を帯びるような、そんな感触。同時に息をついた二人は、契約が成つた事を本能的に理解していた。

「うん。これで契約成立だね？」

「……みたいだな」

「それじゃ、僕達はエミリア以外にはちやくんと大人しく手を出さないようにするから……一緒にいきましょう？ スバル」

差し出されたカストールの小さな手。

しかしスバルがそれを握る前に、背後から騒々しい足音が近づいていた。

「スバル！」

「——どうあつ?!」

背にしていた扉が勢いよく放たれて、スバルが吹き飛んだ。

さしもの展開に手を差し出そうとしていたカストールも、そしてカストールも目が点になった。

「ご、お、お、おとおおくくっ!!? お星様がめっちゃ飛んでらっしやるううくくっ!!」

「あ、わ、悪い！ まさかそんな所に居るとは……!」

吹き飛んだスバルを抱き寄せつつも、カリオストロの目がある一人を見定めた瞬間、誰もが身震いするほどの殺意が溢れた。

相対するはグランを殺したであろう敵。カストール。

彼女の意を示す様に書物はひとりでに浮き、ウロボロスが荒い息を吐きながら左右に佇んでいた。

「やあカリオストロ、またお会いできて光栄だよ」

「……ポルクス」

「カストールだよ。まあ知らないなら無理もないけど……おっと、その怖いドラゴンは下げてくれないかな？ 僕とスバルで契約したんだ、お互いに手は出さない……ただしエミリアを除いてっつてね？」

「はあ？ ……おい、お前ッ！」



……会場の注目を一身に浴びていた三人の中に、不意にもう一人が躍り込む。

「おいおい、一体どうしたんだねカストール君。こんな所で何を騒いでいるんだい？」

リツケルト・ホフマン——いや、その皮を被った悪魔。カペラ・エメラダ・ルグニカ。

気難しそうな男の顔には、場をつくろうための笑顔が張り付いている。

しかして魔女の残り香を巻き散らすスバルにだけ、特別粘ついた視線を向けているのが良く分かった。

「それに……キミ達はどなたかな？ もし私の身内が失礼をしたのであれば——」

「カペラ・エメラダ・ルグニカ。今更取り繕わなくていいぜ」  
「……あ？」

ぴくり、彼／彼女の表情が変わった。

「俺はお前たちの仲間じゃねえ。明確な敵だ」

「……いきなり何を言い出すのかね？ 敵だの、味方だの……私が何か気に食わない事でもしたかな」

「しらばつくれるなよ魔女教。自己愛に溢れた究極の自己中のお前が、周りの体裁を気にするなんておかしすぎるだろ」

「……」

その目に殺意が宿る。

周りのパーティ客は、一体何を言ってるんだとざわめき始めた。

「リツケルト。ダメだよ。僕とスバルで契約を結んだ。エミリア以外を攻撃しない代わりに、スバルは僕達と共にする」

「ああん……!？」

「スバル。威勢がいいのは結構な事だけどそこまでにしようか。早速、僕達と共に来てくれないかな？ 契約だよね？」

「……」

「スバル……」

オレは……お前を信じていいのか？

カリオストロの目に憂慮が浮かぶ。これが考えなしのやけっぱちな行動なのか、それとも立派な策なのか。彼女は未だに判断しかねていた。先程見せたあの熱はオレ様の勘違いなのだろうか？

「あーあー、そうだよな。契約しちまったもんな。『俺は可能な限りお前達と行動を共にする』って」

「うん。他ならぬ君の意思で僕達と行動を共にするんだ。その契約を違えたら」

『俺はお前たちの言いなりになる』……知ってるよ』

「だけど、もしも俺がここでカリオストロに拘束されちまったら——行動を共にするなんて出来ねえって事だよな？」

瞬間、カストールとカリオストロの顔に驚愕が走り。カストールが手を伸ばす前に、カリオストロはスバルを強く引き寄せ、ウロボロスに連れられて大きく距離を取っていた。

「はっ、確かに……！ とち狂っちまったスバルをオレ様が無理矢理拘束するってのは、あり得る話だよなあ……!？」

「……ナツキ・スバルッ！」

「いや、俺はお前達と一緒に居たいんだけどなあ！ カリオストロに捕まっちゃったらどうしようもないよな！」

カストールの顔に初めて悔しそうな顔が浮かんだ。

【条件2】スバルは可能な限りカペラ・ポルクス・カストールのいずれかと行動を共にする。

自分を犠牲にすることでこちらにメリットがあると思わせて、その実最初から別行動する気でいたなんて——！ 加えて、

「おっと、俺やカリオストロに手を出すなよ。それは契約違反だからな？」

「っ」

【条件1】カペラ・ポルクス・カストールはエミリア以外のエミリア／フェルト陣営に手を出さない、攻撃しない。

加えて、契約で向こうが手を出すまではこっちは手を出せない

……！ コイツはここまで見抜いてあの契約をしたんだ！

「いいか、もう一度言う。カペラにカストール。俺達は明確な敵だ」

「お前たちの願いは明確に俺達とは相反する願いだ。協力あいはんは出来ない」

「お前が、俺の大切な人達を狙うなら——俺達全員でぶつ潰す！」

「かかってこいよ魔女教ども！ 運命なんて関係ねえ！ 何度邪魔しようとも俺達は絶対に屈さねえ——!!!」

カペラとカストール。

そしてカリオストロとスバル。

互いに互いを睨みあう中、スバルの宣戦布告だけがパーティー会場に深く深く響き渡った。



## 第六十四話 団結。

「大体の事情は分かったわ」

同ラインハルトの屋敷において、エミリア、ラインハルト陣営の面々は急遽一室に集められていた。

カリオストロらの説明の後、痛々しい程の沈黙の後に真っ先に頷いたのはエミリアだった。

そしてエミリアの首肯に「マジか？」って顔で振り向いたのはフェルトだった。

「いや……いやいやいや！ 納得すんのかよそこー！」

「え？ ……だって、二人がそう言うんだもの。きつとそうなるわ」

「どういう理屈だよー！」

貴族生活の賜物か、最初こそちよこんと座り込んでいたフェルト。

しかし（如何に真実と言えど）荒唐無稽な話を前に、時間が経つにつれ立膝↓体育座り↓あぐらへと三段進化を遂げ、かつてのならず者めいた態度に戻ってしまった。

まあ既視感のある光景だ。カリオストロもスバルもそう思わざるを得なかった。皆の狼狽を見るのは、これで都度4回目になるのだから。

「フェルト様。その恰好は頂けませんね」

「恰好はどーだっていいだろどーだって！ おいラインハルト！ お前はこいつらの話を信じるのか!？」

「……正直に言えば、信じられません」

「だろ!? と我が意を得たと言わんばかりの顔だ。」

フェルトはしきりに、これが如何に発想の慮外にある説明なのかをラインハルトに一方的にまくしたてていた。スバルはそんな反応を見て、懐かしいなあとのぼの思うだけだった。

「ロズワール様が我々に嘘の手紙を……? そんな事をする訳がないでしょう。冗談は顔だけにしなさい」

「辛辣ウ!! 信じられない気持ちはあるだろうけど、視たて取れたて

の新鮮未来だ。それも絶対に避けたいいけないやつ！」

「……はあ、頭が痛い……貴方が絡むと本当に碌な事にならないわね。もう少しその運の悪さを他に活かせなかったのかしら」

「そんな方法があれば俺が知りたいわ!？」

こめかみを抑えるラムに対し吠えるスバル。

互い互いに好き勝手しだしたのを見かねてか、乾いた音が部屋に響いた。カリオストロだった。

「混乱する気持ちは分かるが、今はともかく時間がない。ここにいる全員での協力は必須だ」

「つつ……てもよお」

「カリオストロ。僕も努めて理解するつもりだが……」

——ロム爺がフェルトの奪還を目論見<sup>もくろみ</sup>、トンチンカンな徽章を盗むつもり満々。その2つの手引はアナスタシア陣営によるもので。更に言えばカリオストロを探しにグラン達がこの世界にやってきて、カリオストロお目当てのヴァシユロンは王都へ前進中。その裏で魔女教がエミリアに試練を課そうとしており、ロズワールはそんな魔女教へのサポートをしだす始末。更に言えばポルクス／カストールはスバルにご執心。そんな黒幕は実はこのパーティ会場にさつきまでいたし、このまま行くと5日目にはバハムートブレスで王都消滅。

ざつと書き出しただけでにわかには信じられない事のオンパレード。狂言か妄想のたぐいだと断じるには十分過ぎる内容には間違いない。なかった。

「後ツツコむまいって思ってたけどさあ……そこのにーちゃんは何で縛られてんだ？　そういう趣味なのか？」

「フェルト……ツ、お前を信じてたぜ!!　俺……ツ、俺この格好で入室したのに誰一人として反応くれなかったからどうしようかと……!」

「うぜえ?!　案の定突っ込み待ちかよ!」

「……そういう趣味って?」

「エミリア様。ようするにバルスは縛られることに快感を見出す変態で」

「はいそこ!　いらん知恵入れないでくれますウ!？」

「うつせーぞお前らア！」

今のスバルは両腕ごと上半身を縛られた状態で、その手綱をカリオストロが握っている状態だった。一見してまるでペットのようだが、本人達はこれでいて別に巫山戯ふざけてはいないのだからややこしい。

なぜこうなったか？ その理由を話す前に、まずは披露宴直後の話をしよう。

披露宴開始直前に、黒幕達魔女教に盛大に啖呵を切ったスバル。

魔女教だのなんだのと、考えうる限り（それが事実だとしても）最悪の誹謗中傷を投げたため、それはもう周りの注目を大きく集める事になった。

二人が怒りに任せて暴れるかと身構えたカリオストロではあったが、ここはラインハルトのお膝元だ。剣聖と戦うリスクを度外視出来ないようで、外面こそは大人しく（それでも怒りは隠さずに）その場を立ち去っていった。

ラインハルトにその場で追撃してもらおう事も視野に入れたが、現時点では客への二次被害が広がる可能性が高いため、断念する形にはなった。

さて。カストールとスバルが直前に契約を交わしていた。

【条件1】 カペラ・ポルクス・カストールはエミリア以外のエミリア／フェルト陣営に手を出さない、攻撃しない。

【条件2】 スバルは可能な限りカペラ・ポルクス・カストールのいずれかと行動を共にする。

【条件3】 スバルは自らが死に至る可能性のある危険な真似は禁止とし、自殺もカペラ・ポルクス・カストールが許可しない限り禁止とする。

【条件4】 これらの契約は、今日から6日目の朝明けまで有効とする。  
【条件5】 ただしカペラ・ポルクス・カストールが契約対象に攻撃された場合は、【条件1】はその限りではない。

『カペラ・ポルクス・カストール側が契約を違反した場合、恒久的にエミリア／フェルト陣営への攻撃、策略の一切を禁止する。スバルが契

約違反したら、ナツキ・スバルはカペラ・ポルクス・カストール側に恒久的に従う』

【契約】は単なる約束とは違う。魂を介した取り決めだ。

スバルは、かつてカリオストロがベアトリクスと交わした契約からヒントを得て提案したが、【契約】の真なる特異性には気付いていなかった。

この世界で言う【契約】は例えスバルが死に戻りしたとしても遵守される絶対的な物であり、これによりスバルは6日目を超えるまで大きく行動を制限されてしまった形となった。

特に【条件2】【条件3】がそれだ。【条件2】ではスバルがカペラ達と自主的に行動を共にする必要性が出てくる。これは誰かに妨害されればそこまでだが、仮に彼一人で奴らと出くわした場合は行動を共にする必要性が出てくる。

そして【条件3】はスバルの危険な行動を縛る契約になるため、今までのイチかバチかで命を賭ける真似も、ループ目的の自殺すらも禁止となった。つまり実質的に死に戻りが封じられたのだと同じだった。

長くなつたが結論を言おう。

スバルは敵方に合流してしまう可能性がある以上、がんじがらめにしておく必要があつたのだ。

カリオストロから事情を聞かれた後、げんこつのお叱りを受けてから、このような状態を甘んじて受ける必要が出てきたという事だ。

(なお、エミリア達にはスバルの真の能力に繋がる、条件3については伏せられている)

「……ってことだ。敵はスバルの力を見抜いているからこそ。その力に楔を立てるような契約を結んだ。結論から言えばコイツが交わした契約はメリットでもあり、デメリットでもある」

「こう言ってしまうと角が立つようですが……敵が誰を狙うのかが明確になるのはありがたいですね」

「その対象はスバルと私ってことよね。私達が敵の手に落ちなければいい……うん。分かりやすいわ」



は一瞬にして混沌の海に飲まれてしまった。

「……金髪のねーちゃん、何しやがったんだ？」

「コイツらがヤンチャしてた時にかかるく灸をすえただけだ。オイ、三人組」

「けけけ、剣聖様！ いや、ご主人様！ オレ達は何もしてねえ！ 潔白だ！ だからアイツとは引き合わせねえでくれ！」

「オレからもお願いだあ！ もう俺の息子にあんなつらい目を……ガストンの病気がまた悪化しちまう!!」

「ひい、ひいひいっ……お家かえう……かえうううう！」

「二」はい。話を聞きます。何でもお聞き下さい」

カリオストロがウロボロスで三人組を取り囲んであげれば、彼らは一瞬で超高速首振りマシーンへと変貌した。

「お前達を呼んだのは他でもないある容疑がかけられているからだ。どんな容疑か分かるか？」

「二」……」

「あれあれく☆ 答えられないのかな？ じゃあ一人ずつく……」

「はいッ!!! 徽章を盗んで明日とんずらしろって変な商会から指示されました!!!」

「ぼっ……! ガストン!?」「オイ！」

「う、うううううるせえうるせえうるせえ!! オレはもうゴメンだぞ！ っていうか絶対コイツ分かっていてってんだよ！ でなきやみんなが揃う前で尋問なんてしねえだろ?!」

とぐろの中でギャーギャーと言い争い始めたトンチンカン。カリオストロはぼかんと口を開けたフェルトに微笑んでやった。

「これで分かっただろ？ 証拠はこれから集まっていく。明朝ロズワールから手紙が届き、同時にロム爺が屋敷に来る。そして草原ではアナスタシア陣営が待機する事だろう。オレ様達が提示した内容を全てなぞり切った頃には事件は終わっているだろうが……そんな暇はない。だから決断しろ。今すぐオレ様達と協力することを」

「……我々はどうすれば良いんだい？ スバル。カリオストロ」

「お、おいラインハルト?!」

「フェルト様。私は二人の話だけでも聞くべきだと考えます。先程の三人の話は事実だった……ならまずは二人の言う通り手紙が届いてから実際に動くのもまたありかと」

乗り気になったラインハルトに対し、とうとうフェルトが折れた。ガシガシと折角整えた髪を乱しながら椅子に乱暴に座り直す。

「——あーもうッ、好きにしろよ！ 別にアタシもまだ王様でもなんでもないしな。だけどこれだけは言っておく！ ロム爺はしっかり保護しろ!! いいな!」

「仰せの通りに」

どうやら二人の納得は得られたようだ。

カリオストロとスバルは頷き合い、そして小さな錬金術師が朗々と説明しだした。

「改めて作戦について説明する。オレ様達の目標は魔女教達を撃滅すること。そしてそのためにはエミリア、フェルト陣営、およびアナスタシア陣営への被害を最小限に抑えなければならない」

カペラとカストールらの今回の目標はエミリアとスバルだ。

一方は試練という名の抹殺。もう一方は拉致を目標にしている。

厄介なのは、彼らが目的のためならどんな手段も選ばない点。

目的が達成出来るなら結果として無関係な人が死のうが、王都が滅んだとしても別に構わない。

奴らにとって重要なのは予言であり、その予言が達成出来れば別にいいのだ。

だからこそ大事になる前にその出鼻を完膚なきまでにくじく必要がある。

カリオストロはこの度の戦いを総力戦だと理解していた。

団結が出来なければ、負ける。

故に全陣営の無事は最低条件とも言えた。

「オイ、どーして妨害してきたアナスタシア陣営にまで助けの手を伸ばさなきゃなんねーんだよ?」

「奴らにもこの件に噛んで貰う必要がある。それと放置するのも後々面倒なんだ」

色欲には身内ですら騙されるほどの強力な変身能力がある。

潰し合わせて生死不明にさせるくらいだったら残した方が得策だし、取り入れて戦力に考えるのもまた必須だ。それに――

「それに？」

「相手<sup>ライバル</sup>に恩を腐るほど売りつけられるんだ、利用しない手はねえだろ？」

ははん、とフェルトは鼻を鳴らした。

カリオストロの言い方が気に入ったようだ。

「幸いな事に、魔女教の行動原理は福音書頼りだ。福音書には魔女教徒への指示が予言という形で書かれている」

「今のところ俺が予知で視たアイツらの予言らしき行動は『草原で待機するアナスタシア商隊に成り代わり、エミリアを殺害する』『王都で魔獣騒ぎを起こし、カリオストロの仲間を殺害して世界に混乱をもたらす』の2点だった」

「これら2点が行われる可能性が高いイベントだと思っただろうがいいだろう」

「……確定した未来じゃないの？ カリオストロ」

「残念だが……筋書きが変わる可能性は大いにある」

特に懸念しているのは、ポルクス／カストールだ。

彼らはカリオストロとスバル以外にループを知る唯一の存在。

スバル曰く、自分達のこれまでの軌跡を知っており、そしてループの起点がスバルであることに辿り着いてしまっている。

「エミリアたん。『傲慢』の野郎は世界をやり直す力を持つてる。それもある好きなタイミングでだ。その力を使って俺達がどういった対策をしてきたかは分かってるんだよ」

「はああアア?!」

「ええっ……そ、そんなのズルじゃない!」

「そうだよズルだよチートなんだよ!!」

「だとしたら勝ち目がないのでは？ 私達がやってるのが全部お見



通しになるという事なら何をしても……いえ。唯一相手に誤算があるとすれば、それがバルスなんですな」

顎に手を添えたラムが、スバルを見つめた。

そう。これからのループはスバルとカストールで読み合いをする必要が出てくるのだ。

「スバルが未来を見通せるからこそ、こちらも対策を練れる。だがそれは向こうも同じだ。我々の動きを予測して別の動きをする可能性は十分ある」

「難しいね……相手の動きが確定出来る所があれば、そこに合わせられるんだが」

「——出来るぜ。動きを固定させること」

一行が今にも思考の海に浸かろうとしたタイミングで、スバルの声が響いた。

不確定な未来しか待ち受けてない今、どうやって相手の動きを縛るつもりだ？ カリオストロも疑念を抱きながら視線を向けた。

「直接あいつらに伝言してやればいい。俺の出現情報について」

「はあ？ お前……まさか相手と繋がってッ」

「い、いやいやいや、そういう話じゃねえって!? オレは完全無欠のただの人間！ OK!?!」

「ただの人間は未来予知なんて出来ねーんだよ！ それで、どうやって伝言するんだよ？ 伝書鳩でも飛ばすか？ それとも置手紙でもするつもりか？」

「ふっ……そんなの決まってるぜ。——ラインハルト！ お前の加護の出番だ！」

「……はい？」

静まり返った場に、ラインハルトの素っ頓狂な声はよく響いた。

まさかあの剣聖の素の反応が見れるなんて、誰も思っていなかっただろう。

カリオストロは頭を抱えた。

フェルトは空いた口が塞がっていない。

エミリアは出来るんだ!? と驚き。

ラムの目は一瞬で氷点下に達した。

「い、いやだつてラインハルトつて色んな加護取得出来るだろ!? だったらアイツらと交信出来る魔法とか加護とか持つてるかな〜つ、そしたらカストールかカペラ相手に『俺とエミリアたんで明日ここに行くんでよろしく!』つて言えば相手は出てこざるを得ないだろ!? これつてすげー名案じゃ……」

「腹を切つて死になさいバルス。そしてラインハルト様に侘びてからもう一度腹を切つて死になさい」

「念入り過ぎるだろ!? つてか謝罪先じゃねえのかよ!? いやダメ元、ダメ元だつて! 可能性を試すのは別に悪かねえだろ!」

「お前な……いくらラインハルトが超人だつていってもそれは」

「——うん。出来るね、一日一回限定だけど」

「いわんこつちやないと糾弾しようとした全員とスバルが思わず二度見した。

まさかの該当加護あり、である。

曰く、ラインハルトが取得したのは『念話の加護』というものであり。どこに居ようと特定の相手と1日1回だけ交流が出来るものらしい。

「よ、よーし! 読みどおりだ! 流石ラインハルトだぜ! いやっ剣聖!」

「釈然としねえ……けどな」

ジト目を向け続けるカリオストロが二の句を告げる前に、スバルがずい、と体を乗り出した。

「カリオストロ。言いたいことはもう分かつてるぜ。オレとエミリアにそんな危険な目に合わせるつもりはない……だろ?」

「ならオレがその案に賛成するだけでも——」

「カリオストロ。いや……相棒。この戦いはあるもの全て使わなきや勝てねえ。お前も分かつてるだろ?」

「……」

「オレ達を大事に思う気持ちは十二分に伝わってる。俺の向こう見ずにもばつちりとフォローしてくれて、本当感謝しかねえよ……でも!

みんなを助けたいのはカリオストロだけじゃない！」  
直前のループ、その最後に見せたクラリスの慟哭が脳裏を過ぎつた。

カリオストロは自分が強者であることを知っていた。  
だからこそ自分が皆を守ってやらないと、と考えた。

矢面に立ち、皆を引っ張り、全員が助かる道へと導きだす。

それこそがあるべき姿だと考えていた。

「俺も、エミリアたんもそうさ。皆で力を合わせてあいつらの狙いをぶつ潰したい。そして俺にも分かっている。この戦いは全員が力を合わせないと勝てないって！」

「……スバルの言う通りよ。カリオストロだけで抱え込まないで。私も、何か出来る事があるならそれを全力でやりたいわ。それが候補者の……いえ、私の意思よ」

しかし、その在り方では限界があるのは確かだった。

カリオストロだけでは太刀打ち出来ない強力無比な相手。

足掻こうとも。藻掻こうとも。それを上回る絶望が待ち受けていた。

横に立ったエミリアがスバルの手を握る。

二人の決意に満ちた目がカリオストロに注がれる。

かつて団の皆が見せてくれた団結力。

1+1を2で終わらせない。10にも100にもする圧倒的な何か。

今、それこそが必要なんじゃないのか？

空気が死んだと思わせる沈黙の中、開閉を繰り返すその手がカリオストロの葛藤を如実に表していた。しかして直後。大きく息をついたと思えば、一転して好戦的な目で二人を睨みつけ返していた。

「なら——遠慮なくお前達を使い潰すつもりで行くからな」

「覚悟の上だぜ」

「勿論よ！」

子供扱いはもうおしまい。

戦場で横に並ぶ相棒としてカリオストロもまた力を振るう事を誓

うのだった。

「スバルの案に乗るとしよう。お前達二人を明日、例の商隊の場所に行かせる。名目は……そうだな『契約の再交渉について』だ。アナスタシア陣営に手を出させないという一文を追加させるように交渉すれば、きつと向こうは二人を要求する事だろう。そこに乗じる」

「……目的は？」

「まずは色欲をぶっ潰す。ただそれだけに絞る」

「しかしお待ちを。契約では交戦することは禁じられていたのでは？」

「確かに互いに攻撃しない契約になっているが、この契約はオレ様達が攻撃することを禁じていない。故に、その初手に賭ける」

「先手必勝。全ては初撃で決めるそうだが、そもそもが色欲は不老不死。一撃で決められる手段なんてあるのだろうか？」

不審がる一堂にカリオストロが不敵に笑う。

「皆の懸念通り、色欲の野郎は変身するわバラバラにしても復活するわ灰にしても元通りになるしつこい奴のようだが……絶対に殺せない訳じゃない。あいつの体を再生するものから全く別のものにしてやれば動きは封じられる。そういった攻撃は、幸いにもオレ様の専門だ」

「全く別の何かに作り替えるって……えげつねえな」

「全身黄金にしてやるんだ。光栄に思ってくれるだろうよ」

「絶対やだよー！」

前回は黄金・錬成アルス マグナを用いてカペラの体を変える事は出来ていた。

あの時は半身しか変換出来なかったが、しかるべきお膳立てがあれば全身を変えられる。そのためには——カリオストロが視線を向ければ、今か今かと出番を待ち受けていたエミリアがそこにいた。

「ただそのためには相手の動きを一瞬でもいいから止めなくちゃならない……ってなるとお前の出番になる。エミリア、お前の力は色欲の野郎と相性がいい。ここぞというタイミングでアイツを氷漬けにしてやれ」

「うん！ 私、すごく張り切っちゃう！」

両腕で握りこぶしを作ったエミリアが鼻息荒く答える中、間髪入れずに飛び込んできたのはスバルだった。

「けどカリオストロ、色欲がただやられるだけかっていうとそうは思えない。向こうにはオレ達の手口を知ってるチート野郎がいるだろう？」

「だろうな。アイツらも何かしらの策を講じているのは違いない」

本来はカペラ一人による草原の事件。

しかし前回のループの顛末をカストールが知っているなら、全く同じ展開にはなり得ないだろう。

カストールまで草原に出張ってくる？ 先回りする予定の自分達よりも更に先に来て鉄の牙に成り代わる？ 嫌な予感しかしていない。

（残念なことに、アナスタシア陣営はカストールとの契約の慮外にいる。契約前に手を出されても向こうには何ら痛痒はない……ここを狙わない訳がないだろう）

「もしや、向こうもカリオストロ様の狙いに気付いていないでしょうか？」

「可能性は無いとはいきれねえよなあ……」

「となると難しいですね。どうにかして相手の裏をかくことが出来ればいいんですが」

都度4回以上のループを体験し、蓄積した知識は何物にも変えられぬ強力な武器となったが、それでも展望は暗い。

カペラへの対抗策は成ったのに、『傲慢』一人いるだけで作戦が崩れてしまう。

（相手が知っている上で立ち回らないといけねえってのが辛いところだな……）

こちらの伝言が毘だなんて、言わずとも分かっているだろう。

知っていて乗ってくるのか。来ないのか。いずれにせよコチラが何かしらの不意打ちをするなんて想定、十二分にひらめく筈だ。

（一度、手札を整理しよう。オレ様達はこれで何が出来る？ 向こうは何をしてくる？）

試練の主役エミリア。

そして死に戻りのスバル。

色欲に唯一太刀打ち出来るカリオストロ。

公式チート、ラインハルト。

そしてお互いを縛る契約。

本来警戒すべき立場のスバルは契約で縛られている。ならばこそ相手はラインハルト、あるいはカリオストロを警戒するだろうが……。

（真に注目するのはきつとオレ様だろう。不死身であるカペラに唯一対抗出来る存在であることを、あいつらは何よりも危険視する筈だ）  
ならば、カストールは色欲に吹き込む事だろう。

行動は読まれ、先回りも全然ありえる事。

そして錬金術によって不老不死を破られてしまう可能性がある事を。

（不意打ちは警戒するだろう。だからといって最初から乱戦を想定するのは愚策中の愚策だ。乱戦こそカペラの真骨頂。絶対にそうさせてはいけない）

カペラを自由気ままに行動させる事だけは避けねばならない。その行動が把握出来るうちに退治せねば、王都の災厄は容易く再現されることだろう。

（どうすればいい？ 考えろ、どうすればいいカリオストロ……何か武器になるものはないのか？ 相手が知り得ない、特別な武器は……ん……？）

相手が知りえない、と聞いてぴんと来たものがあった。

クラリスだ。崩壊のスペシャリスト、クラリスもまたカペラへのメタ的な存在……！

恐らくは傲慢も対峙している筈だが、クラリスの存在崩壊を真に理解している可能性は低い。

そして何よりも——彼らはグランらが5日目には王都に現れないと考えているに違いない。

（確かグラン達は言っていた。初日の時点で既にこの世界の何処かに

来ていると。明日までにあいつらに合流出来れば……！　つてクソツ、どこにいるのかが分からねえのか！」

昔の自分を叱りつけてやりたい。なぜ根堀葉掘りグラン達に聞かなかったのか。聞いてさえすればどうにでもなったのに！

考え直さないと駄目だ、とカリオストロが項垂れると、そこにスバルが口を挟み出した。

「おい相棒。またグランがどうこうって口に出てるけど　それが何なんだ？」

「……うるせえ。ほっとけ。独り言だ。アイツらと早めに合流出来れば、色欲達の裏をかけるかもしれないねえって思っただけだ」

「おおー！　そういうえば居るって言ってたもんな……オレは記憶になかったけどさ」

「あ？　お前も見て……ねえのか。ちょうど発狂してたしな」  
「自信を持って皆目さっぱり記憶にねえって事は言えるな！」

「誇る所じゃねえよ」

前述の通りカリオストロがしばし口に出し、べた褒めする異世界の友人の記憶はスバルにはなかった。

この世界に来ていた事も把握してないなら、そもそもが話す必要もない。ないが……スバルはしつこく気にかけてきたのでカリオストロは根負けした。

「ははあ……もうここに來てるけどどこにいるか分からねえって事か。うーん……いっそチラシでも配ってみるとか？」

「今からやって間に合うような物じゃねえだろう。何だったらラインハルトに『人探しの加護』でもおねだりしてみた方がまだ可能性は高い」

「加護があれば确实だけど、1日1回って言ってるしな……んで、グラン達ってのはどういう人相なんだ？」

「……」

カリオストロは渋々スバルに伝えた。

グランは青いシャツにプレートアーマーの好青年。

その相棒のビィという赤くて小さな龍。

ルリアは白いワンピースに淡水色のロングヘア。

クラリスは貴族風衣装を携えたポニーテールの少女だと。

「なんつーか……かなり目立つな！ マスコットキャラ付きとか王道 RPGみてえだぜ。チラシ出せばマジで間に合うんじゃないか？」

「マスコット言うな。確かに特徴的な奴らで、時間さえありや見つからない訳はないと思うが……期限が明日までとなるとな」

彼らが王都に向かって進んでいる事だけは分かっている。

それこそ王都を中心に調査していれば自ずと出会えるかもしれないが、そんな時間はないだろう。

カリオストロが溜息をつき、別の案を考えようとした……その時だった。スバルが勢いよく顔を上げたのは。

「——おい、おい待ってくれカリオストロ。そいつら俺の記憶の中にあるぞ……確か、そうだよ一回目に会ってる……！」

「は……はあ!？」

「行けるぞ相棒——記憶が確かなら、アイツらの裏をかくことも出来そうだ！」



## 第六十二話EX 5205回目のラストワルツ。

瓦礫の海の中、息継ぎをするように這い出れば、視界に広がるのはほんのり赤らんだ夕焼け模様。

無用の長物となった身代わりのマントを投げ捨てれば、人の手の形をした消し炭が足元に転がっていた。ユリウスとかいう青年の一部だ。

多彩かつ正統派の剣技に精霊を駆使した波状攻撃。並々ならぬ強敵で、軽く100回以上は死ぬ羽目になった。最後の最後で自爆をするから、どうにもこうにも困っていたが……ようやく超える事ができた。

無傷に近い状態で勝たないといけないのが面倒だった。

何せ、この後にとっておきのボスが待ち構えているのだから。

「あ、あいつが何故生きて……!?!」

「ユリウス様は……? し、死んでしまわれたのか……?」

ふうー、と一呼吸つきながら、散歩感覚で雑兵に肉薄。

絶望を顔に刻んだ彼らは、次の瞬間私の足元でうずくまっている。

もうこの程度の相手なんかで死んでやれなくなってしまった。

単調な攻撃の軌跡なんて目をつむっても避けられるし、ナイフを少し翻らせるだけでみんなお陀仏だ。

本当、私って強くなっちゃったもんだ。

でも。千を超える死を迎えても尚、私が及ばない力があるのは本当に面白い。

「……ん。早いところいかない」と

ボサボサしているとあいつが出てきてしまう。

都合300回挑んで一切の抵抗も出来ずに瞬殺されたあの化け物。

今から挑もうとしている奴も大概にイカれてるが、あれは別格だ。まだ対策も出来やしない。

斬っても斬ってもどんどん湧いてくる雑魚を斬り崩し。

尻もちをつけて自分が見下せるくらいに怯える兵士を、撫で斬りに

しようとしたその時だった。

「——やめろッ！」

「！」

ナイフが弾かれたと思えば、次の瞬間何十もの矢が自分の周囲を取り囲むように突き立っていた。

魔法で象られた矢。林立した矢の中から横合いを向けば、そこには弓を構えた求めていたあの子達がいた。

「……それ以上は止すんだ。これ以上の暴走は僕が許さない」

青いシャツに簡素なプレートアーマーを来た、どこにでもいそうな青年。

そしてその背後に居る青髪ワンピースの少女と空飛ぶ赤いトカゲ。幾度となく僕達の前に現れては邪魔をしてくる、とつても厄介なグループだ。

王都の崩壊は彼らが切欠になる。

無視したいのは山々だけど……予言に従って、コイツを倒さなければいけない。

「……グラン」

「僕の名前を知っている……？ 君とは、どこかで会ったかな」

「……もう何度もね」

「すまないけど僕は君の事は記憶にないな。それに——今は君と仲良くできそうにない」

グランは既に腰の剣を真正面に構えていた。

ただそれだけで空気の質が変わる。

「ただのガキじゃねえのかあ？」

「グラン……気を付けてくださいいね」

「分かっているルリア。あの子はただの子供じゃない」

脱力し、腰の剣をだらんと下げたグランは、とんつ、とんとその場で足踏みをする。

既にグランは臨戦態勢。素人なら対峙するだけで腰を抜かすほどの圧が放たれているのが分かる。

けれど……私にとってそれは慣れっこだ。

「……ねえ、グラン。約束してもらってでもいいかな」

「君と出来る約束は少ないかもだけど、聞くよ」

油断なく伺うグランに、私はこう告げた。

「……手心を加えず、殺す気で来て」

「……なんだって?」

「……中途半端に生かそうとするとこっちが困る。これは殺し合い。手加減の余地はないと思って」

私は両手を胸の前に移動し、重ねて強く握りしめた――。

グランは、それが祈りを捧げているように思えた。

彼独自のルーティーンなのだろうか?

はたから見れば何気ない行動だが、自身の勘はその何気ない行動に警鐘を鳴らしていた。

その行為を強く妨害すべきだ。

しかし何故? どうして妨害しないといけない?

その答えが出ず――つい見逃してしまう。

グランは、それが致命的なミスであることに最後まで気が付かなかった。

――そして祈りを終えてナイフを取り出した僕は、グランと同じように構え始める。

「それじゃ、よろしくねグラン。楽しもうよ」

脱力。そして倒れ込む寸前で前傾姿勢のまま地を這い、一息でグランに猛追。そのナイフで首をはつろうとする。けれど長剣で余裕を持って刃先を反らしたグランが反撃の蹴りを見舞ってきた。そして腹部が爆発したと思えるような衝撃を受けた。

隙の無い見事なカウンターだ。ボールのように吹き飛ばされどどにかして瓦礫の側面に着地。口内に溢れた血を吐き捨ててもう一度猛追しようとして――直後、頭部に攻撃を受けてしまう。

「ごめん。手加減はしたからさ」

(……やめろって言ったのに)

全身から力が抜ける。視界が暗くなっていく。

このまま意識を闇に預けそうになった瞬間。

僕は奥歯に仕込んでいた毒のカプセルを思い切り噛みしめた。

瞬間、全身に回る高電流。嘔吐感と頭痛。心臓が破裂しそうな程脈打ち、その後バラバラになるような痛みが全身を走る。

異変を察したグランが横たえたこちらを介抱しようとするが、もう遅い。

致死性の毒は即座に周り、僕は薄れる意識の中、悲しそうな目をするグランとルリアに冷たい視線を向け続けた。

§ § §

「それじゃ、よろしくねグラン。楽しもうよ」

脱力。そして倒れ込む寸前で前傾姿勢のまま地を這い、一息でグランに猛追。そのナイフで首をはつろうとする——と見せかけて、彼の手首へと攻撃を仕向ける。

首筋への攻撃は囷。そう気付いたグランはすぐに距離を取れば、剣先を向けて突きの体勢に。そして一息分の余白も与えない神速の連続突き。かろうじて判断出来たのは肩と、手首と、右ひざへの狙い。その3つに関しては避けるかナイフで逸らす事は出来たが、残り2つに関しては避けられなかった。二の腕と足の甲。それが遅れて熱を持つ。

(あの一瞬で五段突きなんて、ホント馬鹿げ過ぎた才能だよ——！)

痛みに躊躇<sup>ためら</sup>う時間なんてない。バク転して距離を取り、ダメ元で予備のナイフを投擲すれば当然のように両断されるナイフ。参ったつて言つてやりたくはないけど、もう限りなく詰みだ。

「降参しないかい？ 無意味に痛めつけたくはないんだ」

その言葉にあまりにもむかついたので、もう一度突貫した所で先ほどと同じように後頭部に衝撃が来て、僕はまた毒カプセルを噛み締めた。

§ § §

「……」

脱力。そして倒れ込む寸前で前傾姿勢のまま地を這い、一息でグラ  
ンに猛追。そのナイフで首をはつろうとする——と見せかけて、彼の  
手首へと攻撃を仕向ける。

首筋への攻撃は囷。そう気付いたグランはすぐに距離を取れば、剣  
先を向けて突きの態勢に。そして一息分の余白も与えない神速の連  
続突き。肩と、手首と、右ひざ、二の腕、足の甲。識しっているから避  
けられる。だから反撃も出来る。グランの驚きの顔が見えた。利き  
手側に外から回り込み、腹部への突き。しかしてナイフは服に切れ込  
みを入れるだけに留まったようだ。体をねじって避けたグランの反  
撃は、腰に番えた短剣によるもの。突き出された腕を両断する軌道  
だ。させじと更に踏み出し軌道の内側へ。そのまま全身で体当たり。  
体勢が崩れば御の字。あとはコイツの首筋に一撃を——。

感じたのは分厚いゴムだ。重さのあるそれが僕の前に立ちふさ  
がっているような感覚。

体当たりをして、失敗に気付く。グランの体幹が良すぎる。

それを支えているのは稀に見る程の高密度の肉体。

こんなの効くはずもないと分からされてしまった。

蚊ほどでもないと言わんばかりに逆に胸を張られて吹き飛ばされ、  
直後。紫閃が舞う。一瞬で武器が真つ二つになり、更に両手と両足に  
深い斬りこみが入っていた。

極限まで圧縮された世界の中、おおよそ短剣とは思えぬ異形の武器  
を構えたグランと目が合った。

相も変わらず悲しそうな目をするいい子ちゃんぶりに吐き気がす  
る。

僕はまた毒カプセルを噛みしめた。

§ § §

「君が何を考えているのかは知らないが、これ以上好き勝手はさせな  
い」

腰のベルトを切り飛ばし、短剣を封じ込んだと思えば今まで感じた事のない衝撃を覚えた。

顎への攻撃。視界が揺らぎ、立つことも出来ない僕のナイフは拳で弾き飛ばされ。直後、全身を抜けるような乱舞が舞った。肋骨が砕けた。腕が折れた。左脚は関節から折られ、多分自分は糸のない操り人形のように地べたに転がる事だろう。

砕けた顎では悪態すらつけない。

僕はまた毒カプセルを噛みしめた。

§ § §

「無駄だよ」

武器破壊に徹しようとして愚策を悟る。

グランが持つ武器は、その1つ1つが至高の……いや、天上の一品だ。

今も短剣同士かちあっただけなのに、鏢競りあいも出来ずにバターのように愛用のナイフが斬られていく。

紫電が光る、禍々しいナイフ。まるで災厄から削り出したかのようなその短剣は、軌道を逸らすことなく僕の左脚を弾き飛ばした。

僕はまた毒カプセルを噛みしめた。

§ § §

前と条件が違うのがこんなに面倒だなんて。

前はクラリスとかいう、簡単に殺せる仲間がいるから楽だったのに。

こいつは、どうしようもないお人よしだ。

だからこそ付け入る隙もあつたのに、それがないとなると……地獄も地獄だ。

「↓」

華美な長剣。ひよつとすれば儀礼剣にしか見えない黄金のそれが

空振るだけで颯風が巻き起こり、局所的な嵐が巻き起こされる。

こちらとただのナイフしかないし、飛ぶような斬撃なんて起こせないし、魔法もないのに。卑怯じゃないかと罵りたくなる。

嵐に見舞われ、瓦礫に捕まる僕に余裕を持って見せつけてきたのは——長弓。翠玉の美しいそれを、矢もなく引いたと思えば、魔力で象られた数十の蒼の線が自分めがけて向かってきたのが見えた。

瓦礫すら貫通する一撃のそれが、正確に掌、肩、腹部、脚など見事に急所を除いて通り抜けてゆく。

本当……嫌になる。

僕はまた毒カプセルを噛みしめた。

§ § §

「!? 待て、どこへ行くんだ!」

狙いを変えた。グラン単体を突き崩すのは一旦置いておこう。

まずはそこから戦闘を眺めていた兵士だ。

ルリアという少女を狙えばよかったが、グランは特にルリアに固執している。

故に別の弱い奴を狙う事にした。唐突に狙われた兵士は呆けた顔でこちらを見ており、まさか殺されるなんて微塵も思っていない。首元にナイフが振るわれ、あと少しで首が飛ぶ——ところでグランの妨害が入った。

「——やめろ!」

盾代わりに侵攻を阻む長剣。

やっぱりだ。と僕はほくそ笑む。

律儀に回り込んで、見知らぬ誰かの為に身を呈している。

彼の手をつま先で蹴とばして無理矢理かちあげれば、僕のナイフの進路が出来る。

空気を裂く音。グランの頬に一筋の傷が浮かぶ。咄嗟に首を傾けたせいで直撃とはいかなかったが、都合10回目の試行でようやくひとつ傷をこさえることが出来た。

「おっと」

反撃の膝蹴り。喰らえば昏倒は免れないそれを後ろに跳びのく事で避ける。

さてはて、この路線で続けていこう。

このまま続けられなきゃと致命的なミスもいずれ露呈する事だろう。

再びグランではなく別の駒に狙いを定めて駆けだそうとして。

途端にすっ転んだ。

「…………え？」

見れば、自分の両足に深々と突き刺さっている謎の棘。

地面が変成したものだ、と気付いた時には遅かった。

魔力光がまたたいたと思ったら、両手と腰に土の拘束具がはめられていた。

憎々しく睨みつけた先には歪な杖を構えるグランの姿がいた。

あのカリオストロという少女が従えていた龍をモチーフにしたような杖。それが淡く光をまとっているのが分かった。

「…………はあ…………やり直しだ」

僕はまた毒カプセルを噛みしめた。

§ § §

——前までの戦いで、手の内は全部暴いたと思っていた。

「どうしてこんな事が出来るんだ…………！」

長剣、短剣、弓、拳。杖だったかな？ それを使ってたのは知ってたんだけど、展開が進めば進む程別の武器が出てくる。

例えば兵士の群れの中に飛び込んでやたらめったら殺戮して回っていた時は、途中で異質な音が奏いたと思ったら、武器は粉々に砕かれ、僕は地べたに倒れていた。琴だって？ 楽器を武器にするなんて聞いたことがない！ リセット。

「逃げても無駄だよ」

別のケースではまずは姿をくらませ、不意打ちする事にしてみた。何だかんだ小柄な体は身を隠す所が多い街中では有効に使える。同



じように弱い奴から狙ってそこから隙を見出そうとしたけど、途中、銃声が響いたと思ったら、肩と足を打ち抜かれていた。家屋の中に居た自分を壁越しに打ち抜く千里眼には舌を巻いてしまう。リセット。「君は危険だ。反省して欲しい」

先端に突起のついた禍々しい槍。それを手足のように操るグラんに、腕を強かに打ち据えられ武器を弾き飛ばされればこれまた急所を裂けて腹を突き刺してくる。

リーチが異常過ぎるし、防御なんてする時間もない。リセット。

「君とも仲良くしたかった」

優美な曲線を描く紅と黒の斧を思い切り大地に叩きつけたかと思えば、地面が冗談のようにカチ割れて、僕の足場ごと吹き飛ばされてしまう。そして次の瞬間自分の眼前に差し迫る斧が、防御したナイフをがち割って僕を弾き飛ばした。真つ二つにならず、体の至るところが折れてるだけで済んでるのは相変わらず手加減してるせいか。むかつく。リセット。

「これ以上悪事を重ねちゃいけない」

納刀のポーズのまま微動だにしないグランの背後から攻撃をしてみたら次の瞬間グランは消えて。僕の両手と両足が切り刻まれていた。抜刀術、って言う奴だっけ。斬られてからようやくその攻撃を視認出来た。でたらめすぎる攻撃をして尚涼しい顔をするグラんに苦々しい顔をするしかない。リセット。

——人間武器庫か何かじゃないかな。本当に。

都合10個の武器を所持しておいてどの練度も達人、いや超人クラスまで引き上げているのだから手に負えない。武器は街売りのそれとは違う、至高の一品……いや、神器と言える程性能の高い物なのが分かった。

迂闊に鏢競り合いも出来やしないし、一度でも攻撃が当たったらそれでアウトだ。

けどそれ以上に……何よりむかつくのは奴の甘ちゃんぶりだ。

執拗にこちらの命を取ろうとしないため、都度自殺する必要がある。つまり、僕はまだグランの本気に辿りついていないのだ。

流石に矜持が傷付く。こちとら命のやり取りをする気満々なのに、まだ勝負の土俵に立ててないと言われている気がしてならない。

それが不利を招くとしても知ったことか。

もう何百回と殺り合ったのだからそろそろ見せてくれたっていいだろう？

でもどうにかして奴の本気を取り出すためには、工夫が必要だった。

例えば——グラン以外の誰かを傷つけるとかね。

「あ、か……ア……」

「ビー！」「ビーさん!？」

「あ、相棒う……あ、ぎいつー！」

とりあえず——うろちよろと飛び回るトカゲを狙う事にした。

予備ナイフを兵士に投げつけてグランに守らせて隙を作り、ビィを袈裟斬りにしてやった。

狼狽するグランに見せつけるようにその首を飛ばしてやれば、グランの目が見開いた。

やれやれ、ようやく本気を見せてくれたようだ。そう思った次の瞬間、僕の横で圧力が増した。

「よくも……ッ！」

——忘れていた。キミもルリアいたね。

7つの化け物を内包する彼女が、その尋常ではない破壊の切っ先を向け、僕は跡形もなく消滅してしまった。

§ § §

武器破壊——失敗。

不意打ち——失敗。

人質——失敗。

死んだふり——失敗。

懐柔——失敗。

逃亡——失敗。

うんざりするくらい死を重ねて、ようやく方向性が固まった。楽な道なんて無い。小細工は抜きに正攻法で行くしかない。

正面からぶつかって、単純な技量でこの化け物を殺す。

万の針の穴を通すような可能性を連ね、重ね、そして辿り着くしかない。

これは僕の命をベットして、グランを死に導くゲームだ。

ゲームの勝利条件はただ1つ、グランを殺す事だけ。

ベット出来るコインは無限。

無限に続くゲームの中、たった1回だけグランを殺せばいい。簡単な話だ。

「……なぜ笑っているんだい？」

十の死を重ねてかすり傷1つ。

百の死を重ねて軽傷1つ。

千の死を重ねて重傷1つ。

「だって楽しいから。徐々にキミが攻略出来ると実感出来るから」

死んで、死んで、死んで、死んで、死んで、死んで。

加えて死んで。尚死んで。殊更死んで。絶えず死んで。変わらず死ぬ。

でも僕の死の1つ1つがグランの死というゴールに向かっている。

「すごい——キミは強いね。もう手加減なんてして余裕はなさそうだ」

キミは一人かもしれないが、僕は無限にいる。

無限の僕が前より確実に強くなってキミに立ちふさがる。

ようやくグランから本気を出させることに成功をさせても、僕がやることは何も変わらない。

はるか先にあるゴールめがけ、一步一步を積み重ねる。

ただそれだけだ。

何回死んだって僕の心は折れない。

折れてあげない。

——試行すること3002回目。

初めてグランに致命傷を与えられた。

両腕を肩から吹き飛ばされ、口元に啞えたナイフで首筋を一突き。しかし同時に、僕の腹部にも刀が深々と突き刺さっていた。

「がっ……………」

「…………え、へへ。へ……………」

とうとう手が届いた。

やった。ようやくグランを殺せた。辿り着いたんだ。

瞬間、僕はその言い知れぬ高揚感と全能感に絶頂していた。満足した僕はそのまま意識を沈ませた。

——試行すること4111回目。

何とか死にかけ程度でグランを殺すことに初めて成功する。

背中に矢傷を受け、全身は血まみれ。片目も潰れたが、代わりにグランの首をすっ飛ばした。

「…………ふうっ、ふうっ……………」

喋るのも億劫だったけど、それ以上に高揚感が身を包んでいた。

ようやく同士討ちじゃなくてこの化け物を殺せた。

じゃあ次は、その小娘とトカゲを——え？

気付けば僕はトカゲに押し倒され、喉元を噛みちぎられていた。

熱い血潮が顔と全身を濡らす。

「よくも、よくもオイラの相棒をオッ！」

（そんな事ってある…………？）

半狂乱になったトカゲに執拗に攻撃され、僕は息絶えた。

——試行すること4523回目。

ようやくグランの殺害方法をパターン化することができてきた。受ける傷も減って、半死半生じゃなく成ってきたのは幸いだ。

「グランっ、グラン——！」

ルリアという小娘が暴走するケースはわかっている。

ビィが死ぬと彼女は怒り狂う。

その怒りは自分に対して撒き散らされる。

しかしグランが死ぬと、彼女は怒りを通り越して不安定になる。

余程彼そのものに信頼を預けているんだろう。

まさか愛しのグランが死ぬと思っていなくて、またそれが信じられないようだ。

「相棒っ……相棒うう……ッ、なんでだよおっ、オイラを置いていくなよお……っ！」

飛びかかってきたトカゲを弾き飛ばせば、障害はクリア。

これでようやく予言が達成出来る。

王都は他ならぬルリアの暴走で滅び、消える。

でもそれとは別に、僕は不満を覚えていた。

僕の左腕がぶらぶらと、今にも千切れそうになっている。

それだ。それがどうしても……満足いかない。

「オイラは……オイラはお前のことを絶対に許さないからな！ 絶対に、絶対にお前の事を殺してや……え？」

恨み節を零すトカゲを前に、僕はナイフを自分の胸にあてがい……そして突き刺した。

慣れ親しんだ命が途切れて行く感覚。

こつちを見るトカゲの滑稽な表情といったらもう、笑えて仕方がない。

「お、前……な、なんなんだよお……ッ！」

(だってどうせ勝つなら……完璧に勝ちたいじゃん)

だから僕は、もう一度ベツトする。

まだやりこみが足りない。

§ § §

——そして祈りを終えてナイフを取り出した僕は、グランと同じように構え始める。

「……」

けど、僕は直前でそれを辞めた。

怪訝そうにこちらを伺うグラン達。

「なんだあ？ 怖気づいたのかよお？」

「いや……なんかここまで長かったなって思っ」

「……？」

分かる筈がないか……でもやっぱり寂しいな。

あれだけ死線を繰り返して尚理解してくれないなんて。

数多の死を繰り返して、僕は不思議とグラン達に友情を感じて  
いた。

キミの一手が愛おしい。キミの一足が狂おしい。研究され考えられた技の極致。無限とも思える引き出し。一手違えば即詰みになる、果てしなく続く闇夜に影を探すような攻防。それは僕にとって至福の時間だった。その証拠は僕の体には残されていないけど、心にははつきりと残っている。痛みと苦しみの残滓が、どうしようもなく僕に伝えてくれている。

だからだろうか……僕は無性に感謝をいいたくなった。

「4695回」

グランを指して。

「508回」

ルリアを指して。

「2回」

ビィを指して。

「……？」

「なんだあ？ 何が言いてえんだアイツ」

「ありがとう。グラン。僕はこれ以上なく満ち足りた。だからこれが最後だと思うと……本当に寂しいよ」

「……ッ」

「それじゃあ……ラストワルツだ。最期まで一緒に楽しもうよ。グラ  
ン」

## 第六十五話 黄金時間（前編）

「役者は揃った……って事でいやがりですかね？」  
「ああ。何とかな」

煩わしい風のざわめきが、二人の間に流れる。  
声の主はカペラ、そしてスバルだ。

カペラは黒いドレスを纏った妖艶な女性姿。

一方のスバルは相も変わらず縛られたまま。

ラインハルト邸から少し離れた草原。

約束された殺戮の場所。そこで彼らは再び顔を合わせていた。

予告では昼に行われる筈の凄惨な一幕。しかし未来を知る／過去を知る者たちはその運命を捻じ曲げて睨み合っている。

黒幕カペラの後ろにはずらりと並んだ黒ローブ姿の魔女教徒達。

対するスバルの傍にはやる気に満ちたエミリア。冷徹な目のカリオストロに、落ち着き払ったラインハルトの4人のみ。

混じり気しか無い殺意と、志に燃える敵意のぶつかり合い。

もしも第三者がここに立ち寄れば涼し気な気温と裏腹に、異様な熱を感じた事に違いないだろう。

そしてその第三者こそが——今も信じられないという顔で二陣営を見る、リカード率いる『鉄の牙』の一団だった。

「……本当に、そうだっていうんかい……！」

幸いなことにスバル一行は先回りに成功していた。

早朝、ロズワールからの手紙が届いた段階でラインハルトはスバルらの策に乗ることを決め、すぐに4人を抱えて草原へ向かっており。予定ポイントへ向かうリカードらと一息で合流していたのだ。（なお山向こうから飛んできた三人を抱えたラインハルトに、リカードは大変驚いたのだが、それは割愛する）

説明も程々に奇襲を警戒する一行だったが、予想と裏腹に魔女教は予言どおりの昼に出没。大胆不敵な登場にカリオストロ達も驚かざるを得なかった。

「お前達がここに来るとは思ってたけど……まさか律儀に提案に乗ってくれるとは思ってなかったぜ」

「ペツ——！ 契約なんてなければ誰が。アタクシの高貴な耳に腐れマゾ犬がクソを垂れやがったせいだ、こちとら気分最悪ですよ」

ラインハルトの念話は正しく届いていたようだ。

吐き捨てたカペラが鉄の牙率いる商人達を眺めれば、傭兵達が一斉に武器を構えだす。しかしそんな敵意溢れる相手にカペラはやる気なさそうにため息をつくばかりだ。

「で。お前達の要望は契約の更新——でしたっけ？」

「そうだ」

「このクソ共も、攻撃対象に含めるなって？ 恥知らずここに極まりですねえ……一度交わした契約も満足に履行出来ないでいやがるんですか？ それにコイツらはお前らの敵ライバルでしょう？」

「このまま死なれても寝付きが悪くなるだけなんだよ。行き掛けの駄賃ってやつだ」

「うええええ鳥肌が立つウ〜〜ツ、気持ち悪いったらありやしねえでしょ。オエツ。何自分に酔ってやがるんですか？ 馬鹿なんですか？ 自分が主人公だっけ言いたいんですかお前？ 誰にでも手を差し伸べて英雄気取り？ あっきれた」

カペラは心の底から信じられないとスバルを侮辱する。その考え、その思考こそ彼女がもつとも唾棄すべきモノであり、今この時点でスバルへの好感度はぶつちぎって下になっていた。

「俺の性格なんてこの際関係ないだろ。どうなんだ？ お前達はこの契約の更新を飲むのか、飲まないのか」

「さっすが童貞。会話を楽しむ余裕もないと？ 早漏は嫌われますよお？」

「初物には初物なりの良さがあるんだよ」

「マジで気持ち悪い」

「う、うるせえ！ いいから返答はどうなんだ！」

商人達は困惑していた。このルグニカで——いや、この大陸で魔女教という存在を知らぬ人などいないのは違いないが、実物を見るのが





られなきやいけねえってだけで窮屈なのに増長するゴミも相手なきやいけないだなんてどんな拷問でいやがりますかア!? 『俺の目が明るい内は誰も殺させねえ』って義憤に燃えてやがるんでしょーか!?! —クツサ! 糞みたいに糞塗れの糞目立ちたがり屋め、そんなに周りに目立ちたいんなら誰もが羨む素敵なオブジェにしてやりましょうかねえ!」

ほんの目と鼻の先で高らかに憎悪を撒き散らす災害。

エミリアのすぐ側で睨み続けていたパツクが、思わず吐き捨てた。

「それじゃ交渉決裂かい? ボクとしてはキミ達全員を仲良く氷像に仕立てあげるのも悪くないと思っっているけど?」

「ハッ、雌肉に付きまとうゴミ精霊が何言っつてやがるんですかねえ。大事な大事な雌肉が虫ケラに変わっても同じ台詞を吐けるか見ものですよ」

「待て。手を出すなパツク」

「なんだいカリオストロ? こんな改心の余地もない奴一刻も早く殺すべきだよ。娘の教育に悪い」

「気持ちは大いに分かる。分かるが落ち着いてくれ。口ではこう言ってるが、のこのこ顔出ししにきたんだ。交渉のテーブルに付く余地はあるってことだろ?」

「……」

「そっちは何がお望みだ?」

契約を無視して暴れ回るつもりがない。

それはカリオストロにも分かっていた。

先程の半狂乱も、こちらに手を出させるための罠なのだろう。

(まずは要求を引き出す。交渉のテーブルにつかせて、油断させる)

こっちは契約を締結する気なんて更々無い。

一番いいタイミングで不意を打つ。そのための撒き餌だ。

そんな狙いを知ってか知らずか、カペラは怖気にする笑みを浮かべた。

「んなもん決まってるでしょーが。そこでポーッと突っ立ってる銀髪の雌肉と、内心ビビりまくってるスバル君ですよお」

「はっ、それこそ論外だ」

「そつちこそ通ると思つていやがんですか？ 必要最低限の対価も与えずに生意気垂れる事がどれだけ分不相応な事かも分からねえ訳じゃねえでしょうに。いくらアタクシが慈悲深いっていつても限度があるつて言うんですよ」

「秒で痼癩を起こす奴に慈悲が期待出来るとでも？」

「アタクシに無礼な口を聞いても尚生かしてやってる、それに越した慈悲なんてあるとお思いですかねえ？ —— いいんですよおアタクシは決裂しても。お前達にはけつつつして手を出さず、そこで震えるクズ肉共と遊ぼうと思えますかあら」

「……」

本気の発言か図りかねる。

そもそも、今回の策はラインハルトという最強の存在がいるからこそ成り立っている。

カペラも剣聖の前に不利を承知で挑むほど愚かではないと分析していたが……あくまで手を出させようとする挑発に過ぎないのか？ それともそこまでして予言を重視したいというのか？

（いや、傲慢は伝えてるはずだ。起こりうる可能性。その全てを。その警告を無視してまでのメリットはあるのか？）

どう考えてもそこにメリットはない。

しかし、確たる狙いがあると見て良さそうだ。

（例えば……もしも傲慢がいるなら、この交渉すら既に何度もやり直してる可能性もある。そうなるのなら不意打つタイミングもバレてると見えていいが……姿を見せないな。隠れているのか？）

カストール。

アイツだけが唯一の不確定要素。

いるだけでこちらのあらゆる策を破綻させるのはまさしく傲慢がすぎる。

（賭けなんて言葉は大嫌いだ）

でもそうせざるを得ないし、もう賽は投げられてしまった。

ならば……突き進むしかない。

カリオストロはスバルに頷いた。

「カペラ。お前がエミリアに固執してるのは分かってる。でもそれだけは譲れねえ」

「だったら交渉は破棄になりますか？」

「最後まで聞けよ。その代わり、俺がそっちに行く」

「……へえ」

「契約上だとお前達と同行する事になってたんだ。ならそうあるべきだろう？」

「殊勝な態度じゃねえですか。お仲間もそれを承知で？ はっ！ 随分と美しい信頼関係でいやがりますねえ!? ライバルのために味方売り飛ばすなんて中々出来る芸当じゃねえですよ？ けひっ、きひひひ……ねくえエミリア様？ お前にとってこいつはそれくらい価値がなかったんですかねえ？ それとも信頼するに値しねえとでも？」

「スバルを馬鹿にしないで」

ぴしやり、とエミリアが突っぱねた。

「スバルに価値なんてつけられないわ。だって、スバルは私の大事な大事な友人だもの。私がスバルを送り出すのは、それだけ信じているからよ。自分の事しか考えていない貴方なんかには、スバルは負けないわ」

「――」

「スバルはすごいんだから」

カペラの顔に青筋が走った。

彼女が蔑み、嫌悪し、唾棄する信頼や友情。それを誇らしげに思うエミリアのあり方は、カペラとは正反対のものだ。エミリアの毅然とした態度は契約という盾が無くとも変わらないだろう。それが分かるからこそカペラはあらん限りの憎悪を載せて睨みつけた。

「ああそうさ。俺はお前なんかには負けねえよ。それで、答えはどうだ色欲？」

「……それ以上恥じらいもなくほぐぐのやめてもらっていいですかねえ？ 分かりましたよ。このついでにクズ肉共に手を出さない。」

それでいいですかね？」

「口約束だけじゃ駄目だぞ」

「んなこと分かってんでーすよ……オラ、契約更新すんだろ？ こっちに来いよ」

バリバリと、乱雑に髪をかきむしるとカペラが手を差し出した。

どうやら本気で契約の更新に応じてくれるようだ。

カリオストロは内心で胸を撫で下ろした。

作戦の第一段階はどうか上手くいった。

後は契約を交わすタイミングで不意打ちをするだけ——ラインハルトが斬り伏せ、エミリアが氷漬けにし、そして黄金鍊成で物言わぬ黄金に変えてしまえばカペラはおしまい。

しかして真に警戒すべき傲慢は、カストル幾ら見渡せど姿が見当たらない。

まさか隠れているのではなく、本当にこの場に来ていないのか？

そんな事がありえるのか？

(もしもオレ様が傲慢の立場なら、何度死んでもいいから最適解が出るまでやり直すだろう。ラインハルトがいるのなら尚更だ。スバルを攫い、エミリアとオレ様を殺す。あるいは無力化する道を探るだろう)

グランの死がその証左だ。

都合5千回の死を連ねてまでグランに土を着けた奴だ。やりかねないだろう。

——エミリアが見守る中、スバルが前に出る。

——スバルが恐る恐るカペラに近づくのが見えた。

(なら現状が……既に奴等にとつての最善の道だというのか?)

だとしたらそれもまたおかしい。

エミリア、カリオストロ、ラインハルトという主戦力が無傷で勢ぞろいしてる状態を甘んじて見逃すのだろうか？

自分なら各個撃破を目指す。こちらが不意打ちを仕掛ける前に罠を張る。グランという理詰めでなければ倒せない相手を倒したからこそ、その考えに至れた。

——カペラがその手をスバルに伸ばした。

——その手元は魔力光に溢れている。

(だったら……奴に來れない理由があつたのか?)

ならば無策のまま色欲を寄越したのではなく、十分に打開出来る策があつたからこそ色欲だけ行かせたと考えられるのではないか——?

薄氷の上を歩いているような感覚にぞわりと総毛立つ。

色欲のその顔がちやあ、と歪むのが見えた瞬間、カリオストロはウロボロスを色欲に向かって飛びかからせていた。

「伏せろ！」

「へ……う。——どわあっ!？」

色欲が龍を思わせるかぎ爪でスバルを肉塊に変える前に、ウロボロスがその腕を吹き飛ばしていた。

高らかに舞い上がる色欲の腕。そして片腕が無くなつても尚もう片方の腕でスバルを亡き者にしようとしたが、直後肉薄したラインハルトがその鞘で強く彼女を打ち据えていた。

「げっ、ひひ——!! おーおー、やつぱり不意打ちしやがりましたか! あんだけ綺麗事を並べておいてよくぞまあ! やつぱりクスつてのはどこまでいってもクスでいやりますねエ!? ——げひゃっ!」  
地面に電車道さながらの痕を残して吹き飛ばされた色欲に、カリオストロが生成した武器が殺到。瞬く間に彼女はミンチと化した。

「カリオストロ一体どういふ……!？」

「いいから離れろ！」

スバルは混乱の極みにあつた。

契約に裏付けされた安全。それが覆された理由が分からなかったからだ。ウロボロスで抱えられながら、すぎるような視線を向けている。

「お前、色欲の野郎に殺されかけたぞ」

「だ、だとしたら契約違反になる! 今後あいつらは俺達に金輪際手を出すことは出来なくなる筈だ……なのに、なんでだ?!」

「……」

「魂の契約を無視出来る方法があるつてのか……!?! ——うわっ!?!」

次の瞬間貼られる魔力のシールド。

殺到する火球で視界が妨げられる。

それを成した下手人は魔女教徒達だった。

折込済みだったかボスがやられたせいかな。全員が思い思いの武器を手に取り、魔法を展開している。

「どうやら交渉は決裂のようだね？　ま、こうなると思ってたけどさ」

「お、おい嬢ちゃんらこれって……！」

「分かっただろ。今から戦闘が始まるんだ——エミリア！　パツク！」

「ええー！」「りょーかい！」

カリオストロが指示をすると同時にエミリアが両手を振りかぶり、そして横に薙いだ。

直後、魔女教と商隊の間に巨大な氷の壁が地面から林立しだす！

「商隊の皆さんはすぐに逃げて！　ここからは私達の仕事！」

「はあ……!？」

「わからないかな、キミ達を守ってる暇はないってこと！　これからも元気に積荷を運びたいならさっさと行ってくれないかな！　邪魔だからさ！」

ぽかんとしたりカードの顔。

しかしその顔はすぐに憤怒に染まる。

他ならぬ『鉄の牙』が狙われたつてのに、それを助けられた挙げ句とつとと逃げろと？

——そんなの、許せる訳がない。

「……言うてくれるやないかア、邪魔や言われても勝手に邪魔したるわ……！　お前ら商隊の撤退を急げや！　そして分かつとるやろな!？」

「!!」  
「!!」  
「!!」

その思いは傭兵団の面々も同じだったようだ。

歴戦の戦士達である彼らは異常事態を前にすぐに冷静を取り戻し、何を為すべきなのかを見定めた。

「ギヤはっ！　誰も逃さないですよ！　楽しいパーティーの始まり始まりいっつっつ!!!」

直後、破壊される氷の牢。

身の丈以上の黒く不気味な尻尾を揺らし、高らかにカペラの宣言が木霊する。

号令を待っていたローブ姿の下僕達はその宣告に雄たけびも上げずに静かに前進を始めた。

——そして混戦が始まった。

商人達は逃げ惑い、傭兵らは応戦を始める。

一帯に巻き起こる砂埃に、響き渡る剣戟と怒号。

魔法が、剣が、平和な平原を荒らしていく。

しかしながら情勢は圧倒的にカリオスト口側に傾いていた。

なにせこちらには剣<sup>ラインハルト</sup>聖が居る——。

「はあ〜……う？」

スバルは開いた口が塞がらなかった。

目まぐるしい勢いで敵の中を走る白い残像。そしてラインハルトが走り抜けると、敵は糸が切れたかのように次々と倒れ込んでいく。

ラインハルトの実力は伝聞でしか聞いた事はなく。また誇張が過ぎると思っていたが……嘘偽りではないと認識を改めざるを得なかった。そしておまけに——、

「これをどこかに捨てておいてくれ！」

ラインハルトがどさどさと積み上げていくものがあった。

自害用の爆弾だ。

魔女教徒の体に縫い付けられたそれを、気絶させると同時に抜き取っていたのだ。神業が過ぎる。

これには『鉄の牙』の面々も口をあんどりと開けていた。

「よそ見してんじゃねえよスバル」

「って言われてもな……動けない俺にどうしろと？」

「動けなくても考えられるだろ。オレ様の代わりに考えろ。まだ謎は沢山あるんだ」

スバルはいまだ蒼のウロボロスに抱えられたままの状態。そして



目の前に立っているのは無傷に戻ったカペラだ。彼女はこちらを値踏みするような眼を見せながら、エミリアとカリオストロの二人に對峙している。

「——なあゝに警戒してやがるんですかねえ？ 契約違反しちまつてるんで、もうそちらには手は出さねえですよ？」

「真つ先にスバルを殺そうとしやがったのにか？」

「やだなあ、ちよつと力が入っちゃっただけじゃねえですか。なのにが、——ぴぎゅ」

直後。カペラの全身が氷漬けになった。

「君達に先人のありがたい教えを授けよう。『魔女教と話すくらいなら、壁と話してる方がマシ』」

「はっ！ 確かに、たまにはいい事いうじゃねえかパツク！」

絶好のチャンス。

パツクのアシストを見てカリオストロが魔力を練る。

スバルを退避させたと同時に、氷漬けのカペラめがけて二対の龍が無限を舞う。

カペラという存在を紐解き、その有様すらも変えてしまふ秘奥義——

『アルス・マグナ黄金鍊成』！

——周りに巻き散らされる極光と暴風！

暴威に晒されたエミリアとスバルが腕で顔を覆い、しばらくして中心部が晴れば……そこには全身を黄金に変成させられたカペラの姿があった。

「うわ……マジで金ぴかだな……」

「すごい……ねえ、カリオストロ。これでもう復活出来ないの？」

「粒子一つ残らず黄金に組み替えてやったつもりだ。これで復活するんだったら……もうお手上げだな」

日光を浴びて光り輝く黄金の像は、美しい……というより野暮ったい印象を与えた。興味深そうに眺めていたパツクも「うーん。下品」と零す程だった。

「念のため更に凍らせて地中深く埋めて周りも鉄で囲ってやるか……」

「念の入れ用!？」

しかしながら妥当な判断ではあるとスバルは思い直した。煮ても焼いても灰にしても復活する化け物には妥当な処置だろう。

「あとは哀れな子羊達を同じ目に合わせてやればいいだけかにやゝ」  
「漏れなく全員金ピカか……いや、待てよ。これももしかして資金源に出来ないか!？」 ほら王選には色々入用になるだろうし……」

「ダメよスバル。流星に元人間を売るのは気分が悪いわ」

「う……まあそうだな。……あ、じゃああいつらの武器とか服だけ売るのは?？」

「スバル。もう!？」

「勝手に話を進めんじゃねえ。流星に全員を黄金にする余力はねえぞ」

黄金に目が眩んでしまう理由は分かるが、自らを政治基盤に組み込んでもいいとは許可していない。念のため釘をさしておかねば、とカリオストロが語れば、

「——へえ、それはいいことを聞きましたねえ」

聞きたくない声が響き、瞬時に声の方に魔法を放っていた。

黄金像。その横合いから一行を覗いていたカペラは、再び数多の槍で串刺しにされる。

「げふつ、げひひ、ひひ……!　こんにちわ、あ。さみしくなつ、てまたもどつてごめし——」

「もう戻ってこなくていいんだけど?？」

追撃したのはパックとエミリアだった。

エミリアの足元から氷が伝ったと思えばカペラの全身が霜で覆われて氷結。そして直後に空中に現れた巨大氷塊が落下し、硝子が割れるような音と共に砕け散った。

「お、おい……あれでもダメだったっていうのか?？」  
黄金錬成

「……いや」  
カリオストロの顔が苦々しく歪んだ。

思い至った想像。それは最悪中の最悪。

しかしながら当たって欲しくない想像に限って当たってしまうの

は、世の常だった。

「効果はあった。だが、奴は最悪な方法に切り替えてきやがった」

「——分かりましたか？ わかっちゃいましたか？」「けらけら」「けたけた」「よく辿り着けちまいましたねえ。褒めてあげましょうかあ？」「きやははっ！ ならこれから待ち受けるのがどんな結末なのかも。分かっちゃいますよねえくえ?!」「そっちがその気なら、アタクシ達だって本気を出さなきゃ失礼ってなもんですよ」「そうでしょう?」「その通りですよねえ!」

ずるり、ずるりと現れる5つ、いや10の影。

それは全員がうり二つの姿で、うり二つの声で、そして等しく神経を逆なでする声で嗤う。全員がカペラ・エメラダ・ルグニカ。分身たちの笑い声が声高く響き渡る。

「嘘。だろ……!」

「スバル、下がってて!」

咄嗟に出たエミリアがスバルを庇い、パツクもまた憎々しく彼女らを睨む。

『『——さあさあさあ、役者は十二分に揃いましたねえ？ それでは始めましょう銀髪ハーフエルフのエミリア様。試練のお時間ですよお!』』』

取り囲んだカペラ達が繰り出す耳障りな合唱を皮切りに、草原に再び激闘が繰り広げられんとしていた。

## 第六十六話 黄金時間（後編）

カペラは不機嫌だった。

あの魔女臭いガキに恥をかかされた上、剣聖からの一方的な念話を聞かされるダブルパンチ。まさしく腸が煮えくり返る思いだった。

そんなカペラが拠点に戻って早々にしたことは、何かに当たる事だった。

扉を壊し。椅子を壊し。机を壊し。部屋を壊し。そして人を壊した。

しかしながら5人程を物言わぬ軀に変えても尚腹立たしきは消えず、彼女の頭の中はどうやってスバルらを苦しめるのかでいっぱいになっていた。

「落ち着こうよカペラ。チョコでも食べてさ」

「あゝア!？」

一触即発の彼女に気安く話しかけられるのは、世界広しと言えどカストールだけだろう。

忙しなく部屋の中をうろろうろしていたカペラはカストールを視認すると、更に不機嫌そうな顔になった。

「提案してきたのは契約の改定だよ。何を願ってきた？」

「……ちつ。予言に書いてある最初の犠牲者共商人ですよ。あいつらも攻撃するな、だとさ」

「へえ……」

カペラはカストールが大嫌いだった。

普段は静かなクセにずけずけとした物言いのポルクスも嫌いだが、笑顔を絶やさぬ一方で裏では常に悪巧みしか考えてないカストールはそもそもが好きになれなかった。

言ってしまうえばカストール達は自己完結している。

付け入る隙もない閉鎖した心を持つ相手は、彼女が嫌悪するものだった。（また当たり散らしても、ひらりひらりと避けるのも嫌いになる一因のようだ）

「そんなんでこつちが乗ると思ってるのかな？」

「その交渉の場に銀髪のクソ雌とスバル君を同席してくれるんなら考える……ついたら普通に連れて来やがるそうですよ」

「わーお」

つまりはそれだけ交渉に自信があるという事。

果たしてそれは、ラインハルトを味方に引き連れているからこそその自信なのか？

「それでカペラはどうするつもり？ 明らかに罠の気がするけどさ」「行きますよ。んなわかりきってる事聞かねえで貰えます？」

胸の谷間から取り出したるは福音書。

ぱらりとめくったページは前読んだ時と何ら変わっていない。

カペラにとって『取るに足らない出来事でしかない』と判断するにはそれで十分だった。

「あまり福音書を信じ過ぎない方が良いと思うんだけどね」

「アタクシだって別に信じたい訳じゃねーんですよ。ただそう在れていわれてるから従うだけ。違いますか？」

しかし、そこまで言ってカペラはため息をついた。

「……って何一つ魔女サマに好かれてねーお前に言っただけで仕様がねーですか。お前、どうしてアタクシ達と行動を共にしてやがんですかねえ……」

「ひどくない？ 僕達はキミに誘われて始めたんだけど？」

「最初は『傲慢』だと思ったからですよ。しかしどうにも違う。お前が変なのは分かっていた話ですが……まあ『権能』は傲慢らしいですがね」

『権能』じゃなくて『個性』って言って欲しいな。これって授かりものじゃないし」

肩をすくめ、おどけた様子を見せるカストール。

カペラはチョコを乱暴に口に運び、噛み砕く。

「で？ 何かアドバイスしたそうな顔ですが考えでもあるんですか？」

「うん。僕とスバルは契約を交わしたでしょ。それを利用しようと

思つてさ」

「勝手にアタクシを交えた契約をしてよくもまあ……しかも向こう側に結構有利な契約ですし。元はと言えばこの状況お前のせいですよね？ 腹立つてきたんで引き裂いていいですか？」

「やるだけ無駄だから先に話聞いてくれない？ 手短に言えば不意打ちでスバルを殺して欲しいんだ。スバルだけでいい」

「……はあ？」

カペラは困惑を隠せない。

大体がスバルを捕らえ、飼い殺しをするのを目的として契約を交わしたのに一転してスバルを殺す？ 何故？ 疑問を呈する前にカストールが続けた。

「状況が整い過ぎている。おもちや<sup>スバル</sup>は嚴重にしまわれ、生半可な労力じゃ奪還出来ない。だから一回リセットしようと思つてさ。彼を殺したら時は戻されて、リスタート地点でスバル君はまた孤立する。そこを僕達がすぐに奪つてあげればいい」

「おもちやが向こうからのこのこやつてくる絶好の機会は来てるじゃねーですか」

「相手はこっちの手の内を知っている。そしてその場に剣聖が来る。その中でスバルを攫うのは簡単なことじゃないと思うよ？」

癪に障る物言いだが、カペラは黙った。

当代の剣聖というのがどれほど規格外なのかはこいつに聞いている。曰く王都を崩壊せしめる7つの災厄。それに一人で大立ち回りをしたとか……確かに手に余りそうではある。

「大体が契約があるのにどう手を出せと？」

「ああこの契約はキミには関係ない。だからキミは好きに振る舞つてくれていいんだ」

「……お前、魂の契約に例外があるとでも思つていやがんですか？」

頭大丈夫か？ と心底憐れめば、さすがのカストールも頬を膨らませた。

「今回はあるの。あの契約の場にはキミは居なかった。それが理由だ」

「？」

「魂の契約は契約を交わす者同士の約束事だ。僕とスバルは契約に従い順守する必要性が産まれたけど、そもそも契約にはその場に居ないキミが履行すべき条件も盛り込まれていた。するとどうなると思う？——キミは契約に従う必要がないって事なんだ」

【条件1】カペラ・ポルクス・カストールはエミリア以外のエミリア／フェルト陣営に手を出さない、攻撃しない。

契約対象がその場にいないければ、その本人に契約を履行する権利は生まれない。

言ってしまうえば、カペラは契約に含まれていても実質的にペナルティを受ける事はないのだ。

「ほーん……なるほどねえ」

「だからこそ僕らにもアドバンテージがある。向こうが何を狙っているかは分からないけど、するとしたら不意をつけてキミを殺そうとする事だと思うよ。なら不意打ち仕返してやればいい」

「は？ 待って……あいつらがアタクシを殺そうと？——ぎやはっ、ぎやははははっ！ それはそれは愉快でいやがりますねえ！アタクシの権能も知らずに!? 知らずに来るならご愁傷さま！

知ってて来るなら愚か過ぎですよ、げらげらげらげらげらげらげら」  
「知っててさ。誓ってもいいけど。僕が観測してた中で君は一度死にかけてたよ。全身を黄金にされて再生できなくなっさ」

「——」

「あまり彼らを見くびらない方がいいね」

カペラにとつて不愉快極まる話だった。

よりにもよって自分を本気で殺すつもりだという思い上がり。その増上慢、到底許せる訳がない——！

部屋で唯一形を保っていた机が壊されれば、その前にカストールはチョコ皿とともに退避していた。

「あんまり興奮しないでよ。下手人はカリオストロっていう少女だ。

昨日スバル君の傍にいた子。あの子には特に気を付けなければいい」

「あいつか……ッ！」

「先手で不意を打てれば問題は無いと思うけどね。あ、失敗したら固執せずに逃げた方が良いと思うよ？」

「……」

むかつ腹は収まらない。

大仰振って出張ってやることはクソガキの殺害だけ。

そして失敗したら逃げ帰れって？

しかもコイツの話が確かならスバルを殺したらすぐに時が戻され、コケにされた記憶すらも忘れ去ってしまうとのこと。最低だ。

それじゃ楽しめない。

それじゃ胸がすかない。

馬鹿にしすぎている。

兎にも角にも気に入らない。

今すぐにも怒りに任せてぐちゃぐちゃにしてやりたい気分だが――

「殺すのは面倒臭いからやめてっば」

そう思った矢先に傲慢は距離を取り、それすらも叶わない。

不完全燃焼。カペラは衝動を抑えて頭をかく。

「……へえへえ。んで、お前は一緒に来るんですか？」

「僕は行かない。まだラインハルトが攻略出来てないんだよね。――あいつ。本当に化け物だよ」

「あつそ」

剣聖も、こんなイカれ野郎には言われたくないだろう。

興味をなくしてカペラは部屋を後にするのだった。

§ § §

――そして時は草原に戻る。

10人に分裂したカペラはカリオストロたちを取り囲んでいた。カペラもまた彼らの罠に無策で挑んではいけない。



このカペラ達は分身ではない。  
本物そっくりの偽物達だ。

見繕った魔女教徒9人をじっくり、丁寧に改造してやった。  
体を切り取り。自我をバラし。龍の血で器を満たし。その有り様  
を変えてやった。

1体1体は自分の劣化版だとはいえ、素敵なモノが出来たと自負し  
ている。

変形可能で、思考思想はカペラそのもの。ある程度の再生機能を有  
して戦闘力は遜色ない。

不意打ちに失敗した？

だからどうした。そんなの関係ない。

これだけの自分がいれば、ラインハルトがいても容易に目標は達成  
出来るだろう。

いや、魔女臭いクソガキを殺す事に囚われる必要もない。  
銀髪エミリアの雌肉すらも殺せる。生意気なクソチビロボだつて殺せる！ カペ  
ラはそう確信していた。

『——ぎやはははッ！』

『エミリア様、遊びましょうよオ！』

獲物に対し一斉に触手が襲いかかる。

黒い触腕。触れるだけで致命傷のそれが身を貫く前に、エミリア、  
パツク、カリオストロが見事に防ぎきった。結晶化、あるいは分解し  
た腕が辺りに撒き散らされる。

「ッ！ カリオストロ、次下くるぞ下！」

「わあつてんだよ！」

三人の中心にいたスバル。戦闘では役に立てない分サポートに徹  
しようとする周囲を注意深く観察しており、カリオストロはその言葉を受  
けて行動。

スバルとエミリアと共にウロボロスで空へと跳躍した直後、地面が  
爆発。大量の触手が飛び出してきた。あまりにもおぞましい光景。  
しかし返す刃でパツクの魔法がその全てを氷像に仕立て上げていた。  
「ねえスバル、あいつらつてあんなにほこぼこ増えるものかい？ 殺

すたびに増えたりしにやい？」

「だとしたらとつくに詰んでる！　つつかマジでどうすんだ……タダでさえ不死身なのに10人も……!?!」

一人でも最悪。それが十人いれば地獄だ。

全員を金ピカにしてしまえば終わりだが、言うは易し行うは難し。

大罪司教が協力しあって殺しにかかってくる光景はまさしく絶望だと言えるだろう。

「とにかく包囲から抜ける！　しつかり捕まつとけ！」

宙空を舞っていたカリオストロが大声をあげれば、2対の竜がぐん、と軌道を変える。

させじとカペラ達が空中にいるカリオストロら目がけて追いつがっていた。

『にいいいいがさないツツ！』

『何処へ行くんですかアツ！』

「こつちに来ない——でっ！」

「うおおお!?　す、スバルキック！　スバルキック!!」

『——ぎやばツ!?!』『ぎひイツ!』

一体はエミリアの氷のハンマーが腹部を襲い。

一体はスバルのじたばたキックが顔にヒット。

かろうじての回避。しかしそれは気休めにもならない。

着地点では既にカペラ達が先回りしようとしていた——。

「させねえよー！」

カリオストロが両手を大地に向ければ途端に地面が波打ち、カペラ達全員が岩の波に襲われる。

人を容易く殺傷する殺意の波濤。なのに四肢がもげようとも笑顔でカペラ達は波に逆らい続ける。

「なら次は僕の番だね！」

パツクの声。途端、波打つ地面が白く染まった。

着地点を中心とし急速に始まる染色、触れたモノ全てを凍らせる極寒の波動！　ゾンビさながらの様相だったカペラはそのまま氷像となった。

「ぎつつつぶ!? で、でもこのまま色欲を凍らせていけば何とかいけるか……?!」

「被害気にしなければこの一帯ゼーんぶ凍らせてやってもいいんだけどねー」

『アタクシ達は別に構わねえですよオ?』『凍らせても、バラバラにされても』『お前達が命尽きるまでずくくと遊んであげますからア!』

それが無理なのはスバルも分かっていた。

未だ混戦は続いている——傭兵達にも被害が出るのは、流石に許容できない。

そしてカペラ達は考える暇も休む暇も与えないようだ。

味方の死骸を乗り越えて襲いかかり続ける。

触手で捕まえようとする者。岩を投げつける者。獣となって飛びかかる者。その全てをエミリア、パツク、カリオストロの息の合ったコンビネーションで撃退していく。

しかしながら防戦一方。普通なら致命傷の一撃もカペラにとってはそのよ風。すぐに復活し、終わりの見えぬロンドを強制してくる。

『はあい、よそ見注意くくつ!』

『晴れ時々——』『龍の血イツ!』

「——ツ!? パツク! 全力で障壁!」

止まらぬカペラ達の波状攻撃。

宙に飛んだ二人の腕が巨大かつおぞましい龍の物に変われば、間にいたカペラを躊躇なく圧搾していた。

熟れた果実が潰れたような音。そして同時に降り注ぐ漆黒の血の雨。ひと雫でも触れれば悶絶する劇毒の洪水に、カリオストロとパツクの障壁は見事に抗っていた。

カリオストロらを除いて大地は黒く変色。

不毛の地へと変わっていく様に、スバルもエミリアもぞつとしていた。

(このままだとジリ貧だ……が……!)

自ずと近づくと詰み。冷や汗が否応なく垂れる。

しかしながら自分達だつてやられるばかりではない。

何故なら、ここにはこの世界きつての最大戦力がある——！

『ガツ!?』『ぎっヒー!』『お前ツ、くそがあー!』

「すまない。待たせたようだ」

「はっ、待ちくたびれたぜ剣聖サマ！」

ラインハルト・ヴァン・アストレア。

英雄は遅れて馳せ参じる——。

困んでいたカペラは瞬時に吹き飛ばされ、カリオストロらの表情に笑顔が浮かんだ。

「そつちはどうなった!？」

「全部片付いたよ。爆弾を取り除いていたら時間がかかってしまった。商隊も損傷は軽微だ」

「お陰さんでな！　ワイらも随分楽しませて貰ったわ！」

「上等……！　ならばはそこにいる色欲共だけだ……！」

リカード達『鉄の牙』らも揃い踏み。後はカペラ達だけ。

均衡はどうとうカリオストロ側に傾くことになった。

『……ゴミがいなくなつたからなんだつて言うんです?』

『ゴミは元よりゴミでしかない。居ても居なくても一緒』

『アタクシ達はまだまだ元気いっぱい!』

『頼りの剣聖サマの到着が相当嬉しいようですねえ?　これから死ぬのに』

『強い奴に巻かれてないと何も出来ねえ情けねえ野郎どもですよ』

「なんとでもいえ！　徒党には徒党。理不尽には理不尽だ！　いけら

インハルト！　遠慮はいらねえぞ！」

「理不尽は少し傷つくよ。だが剣聖として、友として期待に応じよう」

ラインハルトの眼が色欲を射抜く。

龍剣レイド。鞘に収まつたままのそれを正眼に構えれば、大口を叩

いていたカペラ達の勢いが一瞬衰える。

『ケツ……アタクシだつて、別に対策がない訳じゃあないんですよ。

——これ、なーんだ?』

「ひ、ひいッ!?　た、助け……助けて！」

そこに居たのは商人だった。

首根つこを掴まれ逃げ出そうとしているが、触腕に絡めとられ逃げ出せない。

まさかの人質。これには一行にも動揺が走る。

『きやはははははつ、いやあくアタクシちやくんと悪役出来てるようですねえ？ 今ならコイツの命とエミリア様とスバル君の命、交換してあげますがどうしますか？』

「ぐ……」

『さてよく考えて下さいねエ？ こいつを見捨ててアタクシごと攻撃しますか？ それともきつちり交渉しますか？ いいですよ、アタクシは寛大なのでどれだけで——おぼ？』

愉悦に頬を緩めるカペラの顔は、次の瞬間頭ごと吹き飛ばされる。

触手は瞬間切り払われ、腕の中にいた人質はいなくなっていた。

勿論ラインハルトの仕業だった。

神速の抜き足と早業はまごうことなき神技。

しかしながら、

「交渉材料がなければ交渉は出来ないね——む？」

『確かに、それは言えますねえッ』

それすらも罠。人質は変身したカペラだった。

腕の中にいた商人がラインハルトにしがみついたと思えば、次の瞬

間光り輝き——、

『ぼーんっ』

——ラインハルトを中心として強烈な爆風と黒い血が巻き散らされる！

草原に広がる耳をつんざく爆発音。

衝撃は近くにいたりカード達も吹き飛びそうになる程。

スバルもまたカリオストロが生成した巨大な壁の裏で、衝撃に耐えながら叫んでいた。

「自爆……!?! ち、ラインハルト……!」

爆発と毒の波状攻撃。さしものラインハルトと言えど無事では済まないだろう。

『——きゃはー・きゃはははははは!!』『いやあく引つ掛かると思いましたよッ』『傑作ッ、傑作すぎいつ！ げらげらげらげら！』『剣聖サマはお優しいですからねくえ！』『これで頼みの綱がやられちゃいましたか、どういう気分ですか?』『ワクワクしましたか? 小便チビリそうですかア!?!』

悪辣の限りを尽くしなお笑いを止めぬカペラに、スバルは齒ぎしりを抑えられない。

ラインハルトの矜持を汚し、害した魔女教は睨め付けるしか出来ない事が悔しかった。

『さあ、て。いい夢は見れましたか?』『試練の続きをしましょうエミリア様あゝ』『是非是非、乗り越えていただくよう……あ?』

「——少し。驚いたな」

しかし英雄は。

道半ばでは果てぬ。

爆心地から当然のように現れたラインハルト。

五体満足。かすり傷ひとつなし。

純白の衣装こそ汚れはしたが、それでも先程と遜色のない闘志。

至近距離で爆発の直撃を受け。

劇毒を浴び。なお堪えた様子すら見せぬ規格外。

スバル達、そしてカペラ達の顔にさえはつきりと動揺が刻まれる。

『なんで……ッ』

「解毒の加護。百薬の加護。火避けと火受け、風避けと風受けの加護のお陰かな。危ないところだったよ」

それは掛け値のない本心からの言葉だ。しかしながら必殺を確信したカペラには最早嫌味にしか聞こえない。

作戦は完璧だった。殺傷力も確かだった。唯一欠陥があるとすれば……相手が剣聖ラインハルトだった。それに尽きた。

『『があッ——!!!』』

声にならぬ怒りを込めてカペラ達が再び飛びかかる。



だから……逃げではない。

決してコイツらに負けた訳でもない！

全てラインハルトという災害のせいだ。そうだ。そうに違いない

「あれあれっ、逃げちやうの〜?」

耳を障る軽やかな音色。

カペラがはっと顔をあげれば、ニコニコと天使のような微笑みを向けるカリオストロと目があった。

「あつ、でもそうだよね仕方ないよね〜劍聖ラインハルトが相手だもんなっ☆ うんうん、カリオストロも尻尾巻いて逃げるのが一番だと思うなっ☆」

——ぶち。ぶち。ぶちぶち。

「散々見下した相手に背中向けて〜☆ これは別に逃げじゃないし負けた訳じゃないんだって自分に言い訳して〜☆ 貴方だけを愛してくれる素敵なお人形さんに慰めて貰おうよっ☆ うんうん、それがいいと思うっ☆ カリオストロも大賛成〜っ☆」

——ぶちり。ベキ。ぶちぶち。ぶちぶちぶちぶち……!」

「今回は残念だったね〜っ☆ またおいでっ☆ ——自尊心デブのクソ敗北者が」

『縛上? 纏頑ヨコ縛励※纏? k 縛難? 纏ツ纏ス纏√ン髪後ぎ纏ユ縛——』

人の言葉すら忘れ、怒りに染まったカペラ達が一斉にカリオストロめがけて飛びかかる。しかし怒りにかまけた攻撃など恰好の的だ。

氷が、石が、剣が、壁が、岩が、魔法がカペラ達を弾き、貫き、潰し、吹き飛ばす。

加えてのリカード達の支援。そしてラインハルトによる遊撃。誰からの援助も期待出来ず、カペラはサンドバックの限りを尽くされる。

しかしながらそれで冷静になれるほどカペラの怒りは小さくない。腕が外れようと、足が千切れようと。頭が取れようと。自分をコケにしたアイツをどうにかできるなら安い駄賃だ。カリオストロを殺





周りを黒に囲まれ、絶望に飲まれそうになる一行。

しかし、その時誰よりも先に声を上げたのは——スバルだった。

「え、エミリアたん、パツク！ 周りを凍らせる事って出来るか!? 全力で！」

「え!?! う、うん私の得意分野っ！」「そんなの朝飯前さ！」

スバルが叫び、二人が疑問も浮かべずに実行を移す。

すると周囲を流れる漆黒が一時的に勢いを止め、白に染まる。

「カリオストロツ！ 地面を思いっきり突き上げて俺達を飛ばしてくれ！ 空高くまで！」

「オレ様に命令するなんていい度胸じゃねえかつ！」

カリオストロもまた疑問を抱く前に実行を移す。

途端に全員に与えられる強い重力。急激に盛り上がった土が全員を突き上げていた。

「勝算は!?!」

「2割って所だ、文句あつか!?!」

「無責任な奴！ これでリアが傷ひとつでもついたら七代祟るよ！」

「残念だけどその時はオレが末代だよっ！」

半泣き半笑いのスバルがやけっぱち気味に叫ぶ。

相変わらずの—か八かぶりにカリオストロが呆れていると、スバルが急に向き直った。

「こ、こんな所で言うところじゃねえけど悪かったカリオストロ！」

俺は間違えていた……俺だけが主役だって勝手に思い込んで、お前に嫉妬してた！ 皆に頼られるお前が羨ましかったんだ……っ！」

しかし身勝手な承認欲求の先にあつたのはただの破滅だった。

「今度こそみんなを助きたい！ 賞賛も、打算も抜きでだ！ し、勝算は低いかもしれない、失敗するかもしれない……それでもみんなでまた笑える生活に——オレは戻りたいんだ！」

歯の根は合わず、全身は震え続けている。

いつ死ぬか分からないと恐怖の戦い。

体も心も怯えきっている。

「だから——俺を信じてくれ！」

それでも、スバルは諦めていない。

全員なら乗り越えられる。そう信じている。

だからこそ、カリオストロは笑みを見せた。

「仕方ねーな……こうなったら最期まで付き合っただけよ」

「私もよ。スバルのこと信じてるから……っ！」

「ま。もうここまで来たら伸るか反るかだしね」

賛同の声を聞き届けるとスバルは大きく深呼吸し——高らかに声を挙げた。

「障壁、解除だあああッ——！」

そして浮遊感を覚えた直後。氷と魔力の障壁が解除され。

一行は宙空に投げ出されていた。

煌めく太陽の下。地を這うカペラが見える。

液状のカペラはスバル達に追いつき、既に体を伸ばしていた。

漆黒の血は柱のように伸び、光を反射しない液状の体がこちらを飲み込もうとしていた。

「追っついてきてくれると思っただけ。でも。これなら的をひとつに絞れるだろ？ 後は頼むぜ相棒」

「上出来だ。相棒」

エミリアとパックが両手をカペラに向け。出力全開。

ぐあ。と大口を開けたカペラに局所的な猛吹雪を浴びせれば瞬間、彼女の動きが止まる。

そこに詠唱を始めたカリオストロがウロボロスを差し向けていた。

スバルとの出会い。この世界で出来た友人達との交流。そして度重なる混乱と苦境を乗り越え、ようやく手にする事が出来る結末。

万感の想いと、溢れ出る力を込めてカリオストロはその秘奥を解放する。

「わざわざ空高くまでお疲れ様だったなッ、アルス・マグナ黄金鍊成アッ——！」

虹が一带に溢れでる——！

大気を震わせ。時空を歪ませ。空間を捻らせ。カペラという構成物質を1から分解し。そして原子の1つ1つを黄金に変えていく。

凍結を解除したカペラが逃げ出すとするが、もう遅い。末端を超

えて既に中央を侵食する黄金。それが全身を飲み込むのは時間の問題だった。

『縲? a縲——縲? a縲阪d縲√m縲? a縲阪d縲√m縲? a縲阪d縲√m縲峨♂縲会シ!? 隠ソ蟄舌←葱励k縲工縲ツ縲コ関峨↑縲ゆ、縲√||縲√||縲√≠縲ゆ≠縲ゆ≠縲ゑシ——!!』

困惑。憎悪。悲哀。憤怒。

全てを内包した断末魔が草原に木霊する。

魔女教大罪司教として役割を与えられ。万人の愛を専有するこの私はどうしてここで朽ち果てねばならない?

こんなのおかしい。

こんなの間違えている。

あり得てはならないあつてはいけない——!

私は愛されなきやダメなんだ!

だから。だからリセットしなければいけない——!

(だからスバルだ。あのゴミを殺さないといけないんだ。スバルを殺せ。スバルを殺せば私はまた愛される。愛されるんだ。だからスバルを。スバルを。スバル。スバルを殺して愛される。愛するから殺すんだ。スバル。愛。殺す。殺す。愛。殺す。すばる殺す。あい。すばる。あいころす。すばるをあいしてころ。こ。あい。すば。すばるころすあいすばるあいころあいすすばるこあいろすすばあるころすいすばるすばるすばるすばるすばるるるる——!!!!!!)

大部分を黄金に変えられて既にカペラは残りわずか。!!!!!!

自我すらも崩壊しだした彼女は、驚異的な執念で最後の抵抗を見せた。

『あいして——あいしてあげるからわたしにころされてよ、あいしてよ、あいしてよあいしてよあいしてよおおおおおおおおおおおおすばるうううううううううううううううううううううううう——!!!!!!』

黄金に変わっていく肉体を切り離して飛び出した断片。

女性めいた液体は現在進行形でぐずぐずに崩壊している。

しかし、その崩れる体でスバルを愛そう殺そうと手を伸ばしてい

た。

カリオストロは未だ術の詠唱中。

エミリア、パツクの反応はコンマ一秒遅い。

スバルの中で明確な死のビジョンが見える。

ここまでなのか。またやり直しなのか。

そう考え、目をキツくつぶった——その時だった。

『ぎっ!?!』

彼女の頭部に突き立つ魔力の矢。

スバルに伸びた腕は空振り、そして遅れて飛来した数十の矢がカペラを押し出していく。

「クラリス！」

「うんっ、任せてグランっ！」

重力に従って急速に落下するカペラと黄金になった残りの肉体。

その2つを包むような鈍色の空間が出来たと思えば、青と赤の光線が内部で暴れまわりだし、その肉体を食んでいく。

構成を変えるのではなく。存在そのものを抹消させる分解の境地。

カペラだけに的を絞った破壊の波濤は、カペラの再生を許さず。その粒子すらも世界から痕跡を抹消させていく——!

「うちに壊せないものなんてない……ッ! ジャガーノート・スファイア——ッ！」

空中で炸裂する歴史を破壊する一撃。

カペラは断末魔もあげられず、衝撃の中に消えていった。

「——つとー！」

そして落下中のカリオストロ達はキャッチされる。

エミリアとスバルはラインハルトに。

そしてカリオストロは——グランに。

「遅えぞグラン」

「待たせてごめんよ。カリオストロ」

見事合流を果たしたグランに抱きかかえられながら、カリオストロは不敵な笑みを浮かべたのだった。

## 第六十七話　これからの話をしよう。

時は遡ること半日前。

カリオストロらが草原で大立ち回りをする前の話だ。

早朝のお屋敷に宣告通りロズワールからの手紙が届き、ラインハルトはカリオストロの策に乗る事を決めた。

そして一堂が介する中。

スバルはラムに向かって頭を下げていた。

「ラム。お前に頼みがあ」

「嫌よ」

「せめて聞いてくれませんかねえ!？」

スバルはとある提案をしていた。

ラムが持つ千里眼の加護。それでグラン達を探せないかと。

「俺の記憶が確かなら……グラン達は例の草原へ向かう途中で出会った」

机に広げた地図を指先がなぞる。

屋敷から伸びていく指は、そのうち止まる。

それは商人達が待ち受ける草原——到底忘れられぬ場所だった。

「ただその時は夜だった。早朝の時点でどこにいるかは分からないけど……確かな事はひとつある。グラン達は王都を目指していた」

当時、荷車の中にいたスバルはグラン達と商人のやり取りを聞いていた。

『草原の方から歩いてきた』

『歩き回ってようやく道らしき道を見つけた』

『王都まで歩いて半日の距離にいる』

この情報を加味すれば現在地が自ずと絞られてくる。

カリオストロは迷いもなく羽ペンを走らせ、地図に円を書き足していた。

「この一带にグラン達がいる」

「……探し出してどうするのですか？　カリオストロ様」

「可能ならオレ様達がいる草原に呼んで欲しい。このままでも勝算はある。けど足りない。そんな予感がするんだ」

「元よりカリオストロ様を疑ってはいません。微力なれど役立てて頂きたいとは思いますが——」

「ああ。分かっている」

一言区切り、彼女はエミリアに向き直った。

「エミリア。お願いだ」

「え……？」

「ラムの千里眼を使わせてくれ。頼む。もしかすればラムの体に深刻なダメージを及ぼす可能性がある。それでも……必要な事なんだ」

「……！」

大きく頭を下げたカリオストロに、エミリアが目を見開いた。

カリオストロは知っていた。

その力がどれだけラムに負担をかけるのか。

困った円は地図で見ればちっぽけだが、実際は広大だ。

例の屋敷での魔獣騒ぎでただでさえ弱ったラム。

そんな彼女に鞭打てば、一体どんな後遺症が出るか分かったものじゃない。

(出来るなら使わせたくない——オレ様だってそんなの分かっている)

総力戦。

傲慢と色欲という二人の強敵が明確に牙を剥いてきた今。

使えるものをすべて使わなければ立ち所に敗北する。

ラムの体調を加味しても尚、カリオストロはそうせざるを得ないと考えていた。

だからカリオストロはエミリアに懇願した。

ラムの意味もそうだが、主であるエミリアの意思もまた尊重すべきだと考えていた。

なぜならこの戦いは最早カリオストロだけのものではなく。

全員が納得出来る道を見出すのも、最低限クリアすべきルールだった。

一方でエミリアは驚いていた。

あの傲岸不遜を地で行くカリオストロが頭を下げたのもそうだが、わざわざ自分に頼る形をとったのもそうだった。

カリオストロのお願いなら、ただの命令でも二つ返事で頷いていたかもしれないのに。

（ううん……カリオストロも私を信頼してくれたんだ。一人じゃない。みんなで頑張ろうって、そう伝えたいんだ）

ちらりとラムを覗き見て、逡巡するエミリア。

身内を取るか。覚悟を決めるか。

迷う時間はない。そして進める道はひとつしかない。それなら――

「頭を上げて頂戴カリオストロ。――ねえラム」

「はい。エミリア様」

「貴方にはいつでも助けられている。昔からずっと、ずっと。私はいつでも頼りないままで、本当に自分が情けないと思っているわ」

「……」

「そして、今日も私の親友が……ううん。みんなが困っている。私に千里眼の力がない。だからこそ貴方の力を借りたい」

「エミリア様。ソレは……お願いですか？」

「いいえ、これは命令よラム。貴方の力を頼りにしています。グラン達を探して頂戴」

「――かしこまりましたエミリア様。このラム。身命を賭してやり遂げます」

ラムはしずしずと最敬礼を行い。

それを受けてエミリアもまた鷹揚に頷いた。

先行きは見えない。

しかし大切な親友が指し示したのは最善の道だと信じたのだ。

「ありがとう。エミリア」

王としての自覚が芽生え始めたエミリアに、カリオストロもまた敬意を示した。

――そして時は戻る。



カリオストロ達が命を切った張ったしていた時。ラムも体力ギリギリまで加護を使い、最終的にグランを見つけることが出来ていた。幸いなことに早朝の時点でグラン達は屋敷に近しい位置にいた。そうして早馬を出しグラン達を戦場へと誘導させればドンピシャリ。

まさしく絶好のタイミングでカリオストロ達と合流出来たのだった。

「カリオストロさんっ！」

「カリオストロお！」

「お師匠ー！」

小さなドラゴン、ビィ。

蒼髪の少女、ルリア。

駆け出し錬金術師、クラリス。

特異点である騎空団団長、グラン。

離れ離れになった仲間達は瞬く間にカリオストロを取り囲んでいた。

再会を口々に祝う彼らの喜びは、それこそ涙を浮かべる程だった。それもそのはず。

無数に存在する異世界のうち、たった一人を探すという荒唐無稽な道のりを成し遂げたのだから。

そして何よりも無事なカリオストロと対面できたのだから……。

時にして一か月の離別。短く聞こえるかもしれないが、団員達にとってそれはそれは長い時間だった。

「来て早々会えるなんて本当ツイてたぜえ！」

「無事でよかったです！ 心配してたんですよカリオストロさん……！」

「お師匠！ 怪我とかはない？ 無事？ 平気?!」

「耳元で一斉に喚くんじゃねえ！ あと降ろせグラン！」

「いや……クラリスの言う通りだ。怪我があるならすぐに治療しないと」

「ねえよ！　ねえから降ろせ！　おーろーせ！」

グランに抱えられていたカリオストロが喚く。

表情こそは不機嫌そうだが、隠しきれぬ喜びがそこに含まれているのは明白だった。

彼女もまた同じ気持ちだった。

世界を隔てて離れ離れになった大切な仲間達。

ループする世界の中で再会と別れを繰り返し、ようやく進むべき足取りが見えたのだ。

それを喜べない訳がなかった。

「カリオストロ！」「カリオストロー！」

「カリオストロ無事か!？」

「オレ様よりも自分の事を心配しとけよエミリア、パック、スバル。お前達も無事だろうか？」

「うん！　私は平気よ！」

「いやはや肝を冷やしたよ。嫁入り前のリアに傷でもついてたらどうしようかと……」

「あつたほうよ。ラインハルトにお姫様よりも優しくキャッチしてもらったぜ！　サンキューなラインハルト！」

「どういたしました。そしてカリオストロ、キミも無事で良かったよ」遅れて駆け寄るスバル達。

見た限りエミリアもスバルも傷ひとつない。

まさしく完璧に等しい勝利。

さしものカリオストロも山を乗り越えた実感がふつふつと湧いてくる。

しかし……まだ油断は出来る訳もない。

なぜなら傲慢はまだ生きている。

「この方達がカリオストロの言っていた……？」

「ああ。グラン、ルリア、クラリス。そしてトカゲだ」

「オイラはトカゲじゃねえ！　……って何回オイラに言わせんだよ!？」

「はっ、悪く思うな。その台詞が聞けてこちとらほっとしてんだ」

「……はあ？ どういう意味なんだ一体？」

「まあちよつとばかり警戒せざるを得ない事情があるつつーか……あ。俺はスバル。ナツキ・スバルだ。天下御免の非力な一般人で、究極のトラブルメイカーでもあるぜ。よろしくな！」

「お、おう……なんつーか近寄りがたい奴だなあ」

「トラブルメイカーっていうとグランも負けてないよねっ☆」

「あははは……グランの場合は自分から首を突っ込んでしまうというか……」

「よろしく。僕はグランっていうんだ。とある場所で騎空団……えつと、傭兵の団長をやってるよ」

「聞いているぜ！ なにせカリオストロからそっちの事は耳にタコが出来るくらい教えてもらったからな！ もうカリオストロと来たらここぞとばかりにアンタをベタ褒めして——いったあ!? 折角無傷で切り抜けたのに何してくれるんですかねえ!？」

「……っ、仲良くするのは後にしろ莫迦！」

親交を深める時間はないと戒めると、分かっていると全員の顔が引き締まった。

「聞いているよ。敵はもう一人……だよな？」

「詳しい話は後ですが……未来予知に近い力を持っていて、最悪お前よりも強い」

「マジかよ……!？」

「嘘っ！ グランよりも強いの……?？」

何よりも驚いたのはクラリス達だった。

空の世界でどんな相手でもほとんど敵なしだったグランを倒しうる相手がいるなんて。

絶対的強者に位置するカリオストロをしてここまで言わしめる相手に、否応なく緊張が走った。

「戦力が密集してる今は流石に襲ってこないとは思うがな……続きは屋敷で話そう。ラインハルト、それでもいいか?？」

「承知した。生き残った魔女教徒達も出来るなら捕縛しておきたいものだね。リカード、手伝って貰えるかな?？」

「助けられた身や。ええやろ。そんで納得する答えが貰えるんやったら是非ともな」

しぶとく生き残った魔女教徒達を籠に詰め込み、全員でラインハルトの屋敷へ。

先程まで声一つあげずに命を捧げていた彼らも、寄る辺を失えば烏合の衆。カペラが死んだことを信じきれず、今頃半狂乱になって暴れていた。

(……紙一重の戦いだった。きつとグランがいなきややられてただらう)

黒ずんだ大地は腐臭を放ち、凄まじい瘴気を放っている。

草原に残された痛々しい爪痕を見てカリオストロの背に今更冷や汗が流れる。

綱渡り。その一言に尽きる。

油断をしたつもりはなかったが、色欲にあんな隠し玉があったなんて。あの場に挑んだ全員が心を合わせねば間違はなくやられていた。

しかし。勝ちには勝ちだ。

そう浮かれそうになる心に対し、カリオストロはどこまでも否定的だった。

(偶然勝ちを拾えただけだ)

折角強敵を退けたのに、その表情は曇り続けている。

(傲慢の気紛れに生かされたようなもの。それに、納得がいかないんだ——結局、カペラ一人だけを寄越した理由ってのはなんだ?)

偶然を拾うような勝ち筋なんて潰しに潰し、リトライの限りを尽くしてこちらを貶める。

それこそが最善。

それこそがベストの筈。

なのにととうとうカストールの姿は見えなかった。

(来れない理由があったとしか思えない。本当にカペラを切り捨てたかっただけなのか、それともアイツの力に何かしらの制限があると考えるべきか……)

「おーい、カリオストロ!」

「ああ！ 分かってる！」

呼ばれるがままに皆の後を追う。

戦いはまだ始まったばかりなのだろう。

達成感に身を委ねることも出来ず、カリオストロの心にその後も暗雲は立ち込め続けていた。

§ § §

「それで皆さんはここに来たのね」

「はい。カリオストロが行方不明になって慌てまして……探し出すのにとつても時間がかかりました」

ラインハルト邸の一室。

そこに改めて当事者達が集められていた。

空の世界からやってきたグラン一行。

フェルトを旗頭にするラインハルト陣営。

アナスタシア陣営からは鉄の牙の団長、リカード。

そしてカリオストロ擁するエミリア陣営。

一堂は簡単な自己紹介の後に、グラン達の話に聞き入っていた。

曰く、大瀑布の向こう側で活動していた傭兵団。

曰く、ラインハルトに匹敵すると言われた少年、グラン。

曰く、数多の召喚獣を手懐ける蒼髪の少女、ルリア。

曰く、彼らは行方不明のカリオストロを探しており。

曰く、同時に未知の星晶獣『ヴァシユロン』の討伐を目標としていた。

無論、異世界から来たという情報は伏せている。

ただでさえ混乱極まるこの場で、要らぬ混乱は不要だった。

「……自分の世界が如何に小さかったか思い知らされたよ。スバルも同じ話をしていたが、まさか大瀑布の向こうには本当に文明があるだなんて」

「それこそいろんな文明がな。俺だってグラン達のこととは知らなかった」

「仲間たちと必死に探したんです。それでようやく見つけたと思えば、まさかこんなに遠い場所だとは思っていませんでした」

「その経歴もにやんだか御伽噺を聞いてるみたいだったね。小さな竜を従える青年騎士。そして薄幸の美少女。そんな彼らを支える様々な逸材たち！ 英雄譚かな？」

「もう、パツク！ ……でもこうして無事にカリオストロに出会えて本当によかったと思うわ。おめでとう」

「ありがとうございます」

エミリアが誰もが見惚れる笑顔と共に心の底からの祝福を送る。

しかしながらその表情に陰りがあることに、カリオストロは気付いていた。

「んで。そんな英雄サマ達は今回の件は理解出来てるか？」

「カリオストロまで茶化さないでくれよ……まあ大体はね」

「相変わらず厄介な事に巻き込まれてんなあ……」

「よくあるよくある☆」

「ええ……？ 普通困惑とかしねえ……？」

「あははは……」

『未来予知』

『姿を変える敵』

『王都での魔獣騒ぎ』

『星晶獣達の暴走』

『起こりうる世界の崩壊』

改めて事情を説明してみると、信じるほうがおかしい内容の数々だ。

それを「よくある」で済ませる彼らの胆力に、スバルも舌を巻くほかない。

「思えば、色々な事件がありましたね……」

「本当に。僕だけじゃ切り抜けられなかっただろうな」

カリオストロも内心で頷く。

空にいたころは国を巻き込んだ大事件なんて日常茶飯事だった。

陰謀、自然災害、怪物、天使、悪魔、妖怪。獣。概念。機械生命体

e t c e t c . . .

ありとあらゆるトラブルに見舞われてきたグラン達にとって、この程度はありふれた日常だと言っても良いかもしれない。けれども。

「今回は今までとは違う。普段と同じだと考えてくれるなよ」

「相棒が死ぬ、だろ……？ そんなの縁起でもねえぜ……」

「うん……正直、そこだけは信じられない。グランがやられちゃうなんて……」

「……」

話に対し、彼らはその部分だけ懐疑的だった。

クラリス達がグランに寄せる信頼もまた厚い。

どんな困難でも立ち所に勝利を授けてくれた団長の敗北。それを誰が信じられる？

グランの隣で不安そうな顔を隠さないルリアが、おずおずと声をあげる。

「でも……今日ので未来は変わったんですよね？ だったらそんな事は起きないのでは……？」

「そこのお嬢さんの言う通りだ。スバル、君が見た未来には必ずカペラがいたように思える。けれど今回の戦いで彼女は消滅した。そうだろう？」

「ああ。カペラは消えた……だ、だよな？ カリオストロ？」

「確実に消滅した。このバカ弟子、勉強は落第だが『分解』だけは一流だからな」

「師匠、一言が余計！」

不安がるスバルに太鼓判を押すカリオストロ。

存在崩壊の力は疑いようのないものだ。

だから彼女が復活することはありえない。そう信じて良かった。

「ならば王都の崩壊は、予定していた未来は起こり得ない。そうじゃないのかい？」

「……分かん」

「オイオイオイ……黒髪の兄ちゃんは追加で未来を見れたりしねえのかよ？」

「そんな便利なものじゃないんだよな。つつーか出来るなら見たくねえつつーか……」

「未来は確実に変わる。けどそれが確実に良い方向なのかは分からない。だからこそ対策を練る必要がある」

「んで、その対策つてのはこのガキ相手か？　普通のガキにしか見えねえけどなあ……」

チラシのカストールとにらめっこをしていたフェルトが、乱雑に投げかけた。

『世界をやり直す力』だっけか？　それが本当だとしたら太刀打ち出来ねえつつーか……ってかだつたら何でアタシ達はここに居る？

確か死ぬとやり直せるんだろ？　死にまくっていい状況になるまでやり直せばいいんじゃないん

「その小娘の言う通りだね。ま、そのために何回も死ななきゃダメなんだけどさ」

「……何回も死ぬのはやだなあ」  
パツクの突っ込みにげんなりとした顔を見せるフェルト。

当然の帰結。

カリオストロも同じ疑問に辿りついてはいるが回答はいまだ出せていない。

「仮説はある。『世界をやり直す力』というのが平行世界を作り出し、傲慢が納得出来る世界を選ぶものと考えらるなら、奴は未だ正解を導き出せていない事になる。なにせ一つの世界に傲慢は一人だけだ。オレ様達が観測しているこの世界で傲慢が死んだら、二度と傲慢には出くわすことはないだろうよ」

「「「「??」」」」

「……ようするに、まだ力を使っていない可能性が高いって事だ」

時を戻す力がふたつ同時に存在し、そこに優先度が存在するからこそ考えられる仮説。

スバルを軸にした本流があり。

そこに繋がる様々な支流をカストールは模索している。

星の数よりもある枝の中から、傲慢にとって最も良い流れを選定す



るとしたら――

(今、奴は攻略中なんだろう。あるいはこの流れが傲慢にとって最善だと考えてるのか……)

思わずため息が漏れ出そうになる。

どうしても受け身にならざるを得ない状況。それに歯噛みしてしまふ。

「何であれ、次に傲慢が仕掛けてくるとしたら各自が単独行動をしている時だろう。自分ならそうする。だからグランも……いや、ラインハルトすらも単独行動を取るべきじゃない」

「……それ、マジでいつてんのかよ?」

「冗談を言ったつもりはないぞ。相手は最悪、ラインハルトだって殺して見せるかもしれない」

「分かってんのか? ラインハルトは歴代最強の剣聖サマだぞ? 加護の数だって半端ねえのにどうやったたら――」

「奴なら勝てずとも何度だって挑んでくる。それこそ気が遠くなるほどの試行回数を重ねてな。弱点を見つけたらもうおしまいだ。着実に積み重ね、そして確実に殺してくるだろう。オレ様達が相手をするのはそんな相手だ」

苦虫を噛み潰したかのようなフェルトの表情が見えた。

「グランもまたラインハルトに匹敵する強者だとオレ様は思っている。けどそんなグランですら未来を聞く限り3回。いや、それ以上は殺されている」

「そして……それが私の暴走に繋がっているんですね」

ルリアがしゅんと項垂れる。

未来の話とは言え、自分の力が無辜の民に害なすなんて考えたくもなかったのだろう。

クラリスが慰めるようにその背を撫でた。

「その話を聞くと、徒党を組んでも効果はないように思えるんだが」

「少なくとも傲慢の試行錯誤の回数は増える。その点では有効さ。うまく行けば、数人の被害だけで撃退出来るかもしれない」

「ウオオオイ、カリオストロ!」

「お、お前な……」

「流石に冗談が過ぎるよ」

「だが事実だ。今オレ様達に出来るのは根本の治療じゃない。予防だ」

カストールは暗躍するだろう。

こちらの寝首を搔くために、虎視眈々とそのタイミングを狙い続ける。

「唯一相手の裏をかくことが出来るとしたら、それはスバルだけ。敵もそれを承知の上。死物狂いでスバルを狙ってくる事だろう」

「つまり、僕達はスバルさんを死守しないといけない？」

「そうだ。自衛はもとより。スバルがやられるのは最悪中の最悪だ。皆はそこだけは肝に命じて欲しい」

「なんだか……お姫様みたいね！ スバル！」

「……エミリアたんありがとな……！ でも俺……今喜んでいいかすごく迷ってる……！」

「え!? どうして!？」

お姫様嫌いななの？ とオロオロするエミリアはさておき。

ここまでの話で全員の中に共通認識が育まれた。

個々の強さはこの先ではあまり役に立たない事であること。

この先待ち受ける戦いにスバルは必須であること。

そして……スバルが居なければ、ロクに戦えないこと。

更に言えば。

この先、一度でも死に戻ればスバルはまたパーティ会場に戻され、その場でカストールに連れ去られてしまう。

せっかく倒したカペラも復活し、死に戻りというアドバンテージすら使えなくなる。それは事実上の詰みだ。

(だからもし……このまま全員の生還を望むなら)

(もう誰一人死ぬ事は出来ない)

スバルも、カリオストロもそう肝に命じていた。

「なら今後の目標を話そう。オレ様たちはこれから王都で——」  
「ちよい待ちいや」

すると、全員の注目があつた一点に集まつた。

それは部屋に来てからずっと黙つて傾聴していたリカードだ。

腕を組み、厳しい顔に更にシワを刻んだまま、彼はカリオストロとスバルをにらみ始めた。

「ワイらは訳も分からずお前達に助けられた。最初は魔女教が襲つてくるなんて言われて『何言つとるんやコイツ?』つてなつとつたけどな。結果としてそれは本当やった。感謝しとる」

「そりやどうも」

「せやけど……せやけどな。未来予知? 世界のやり直しに王都の崩壊? その坊主が鍵? 分からん。全然分からん。お前らアホちゃうんか? 頭は大丈夫なんか? 何を根拠にその嬢ちゃんらのことを信じとんねん」

実績と証跡が全ての商いの世界。

そこで生きてきたリカードにとって「たれば」を前提とした話なんて失笑の極みだ。

眉唾話のオンパレード。それを前にしてホイホイと頷く愚か者も含めて。

リカードはすつくとその場で立ち上がった。

「どんな話が聞けると思つたらまさかこないな与太話とはな。悪いがワイは帰らせて貰うで」

「り、リカード待てって! 話を聞いてくれ!」

「慣れ慣れしくワイの名前を呼び捨てにすんなや。噛み殺すぞクソガキ」

「っ、お前が信じられないのも当然だ。だけど俺の能力じゃないと知り得ない情報は沢山あつた。それこそ、お前達がこちらに妨害仕事を仕掛けてたこともな」

「……フン。記憶にないわ。ワイらはただ大事な商品を運んでくれ言われただけやからな」

「とぼけんなよ。フェルトとロム爺あとトンチンカンを亡命させようとしてたんだろが!」

「だけど、実際はそうならんかった。せやろ? どのどいつがそん

な事言いふらしたか知らんが、妄想をぶつけるのもたいがいにしいや」

「んだと……い！」

リカードは聞く耳を持たない。

そもそもがスキャンダルになりえる醜聞、それを認める事なんて出来ようもなく。

如何に証拠があろうと知らぬ存ぜぬを決め込む。そのつもりだった。

「心配せんでもうちのアナスタシアにはきつちり借りが出来たって伝えたるわ。……同時に、与太話にご執心やったって事もな」

「……良いのか？」

吐き捨てたりカードが踵を返したその時。

カリオストロがその背に投げかけていた。

「何がや」

「王都の防衛に一枚噛まなくてもいいのか。そう言ってるんだ」

「はあ？」

——こいつは、何を言っているんだ？

「オレ様達の次の目標は王都の防衛だ。4日後。魔女教の奴らは王都を襲撃する」

「可能性があるだけやろ。それに話通りなら未来は変わったかもしれないのやろ？・寝言は寝てから言うもんやで、嬢ちゃん」

「ああ。だが来ないとは断定出来ない」

「アホらし。信じる奴だけで勝手にやったらええやろ。少なくともワイらは信じん」

「ふーん……まあ無理強いはしないさ。帰って貰って結構だ」

「お言葉に甘えさせて貰うわ。ほなな」

やはり、どう考えても理がない。

なるほどこちらの妨害は全て察知した。

その上で魔女教についても知り得ていた。

その他、色々な未来予知を裏付ける証拠がある。

でもだからといって未来予知だと断定するには、あまりにも胡散臭

すぎる。

そんな情報を当てにして可能性の低い賭けに飛び込むなんて、狂気の沙汰が過ぎる。

「——しかしアナスタシアも可哀想だな。こんな奴が部下だとはな」  
そんな彼の歩みを止めたのはとある一言だった。

「……なんやと?」

「ん? いやな。王都の危機に駆けつけない王選候補者ってどうなんだろうなって思ってたな」

「妄言に付き合えるほどワイらに暇はないんや」

「だから付き合わなくて良いって言ってるだろ。帰っていいぞ。むしろ邪魔だから」

「——!」

リカードのガン飛ばしなんてどこ吹く風。

頬杖をついたカリオストロは興味をなくしたとばかりに視線を合わせない。

「当事者だから話だけはしてやろうと思ったが、付き合えないって言うなら強制はしねえよ。ま、オレ様達が王都で活躍したかしてないか、商人から又聞きしてろよ。結果はすぐ出る」

「言われずとも——!」

「だが——もし本当の話になったら、その時お前達の立場はないな。危機を知りながら動かなかった、前代未聞の王選候補者ってことだな」

ツカヅカと近寄ったりリカードが机を思いつきり叩く。

そしてまさしく食い殺せそうな距離でカリオストロを睨みつけた。

その表情は獲物を前にした狼そのもの。

グラン、ラインハルト、エミリアがその一触即発の光景に思わず身構えるが、カリオストロは涼しい顔のままだった。

「犬の化け物」

「——あん?」

「アナスタシアに昔そう呼ばれてたんだろ?」

「ッ!」

ぎよつとするリカードにカリオスト口は微笑みで返す。

当時は「まるで悪魔と取引をしているような気分だった」とリカードは後に語る。

「答えは未来予知にある。もしも一口噛みたいならすぐに連絡を寄越せ。時間はないぞ」

可憐な少女の顔に張り付いた悪魔の微笑み。

リカードは反論も出来ずに立ち去り。

そして——その翌日にはアナスタシア陣営から協力の通知が届くのだった。

## 第六十八話 近づく別れ

——予想は裏切られた。

——それも悪い意味ではなく良い意味でだ。

眼前に広がる光景は、懐疑的なカリオストロをしてそう思わせるものだった。

「カペラ様は死んでおられぬ！ ルグニカはカペラ様の元で再建されるのだ！」

「なぜ邪魔をする！ 貴様ら予言を信じぬのか——！」

「ああサテラ様！ 魔女様！ どうか私達をお導きください——！」

昼下がりの王都広場。

太陽の下で高らかに狂気を撒き散らすのは魔女教徒達。

商人に扮した彼らは、半狂乱になって拘束から逃れようとしている。

そんな彼らを取り囲むは王都騎士と鉄の牙の面々。

彼らの顔には疲労以上の高揚が感じ取れ、作戦が上手く行った事を教えてくれる。

「一段落……かな？」

「どーだかな」

隣にいたグランが緊張を解きほぐすように長剣にもたれ、一息つく。しかしそんな彼をすぐにカリオストロが咎めた。

「油断すんなグラン」

「つと……ごめんカリオストロ。つい」

「このぐらいで疲れるお前じゃないだろ？ ……それとも何かあったか？ 大丈夫か？」

「いや、何でもないさ。……まあ、ちよつと気を張りすぎてたつてのはあるかな。こっちはずっとカリオストロに会いたい一心だったからさ」

はたと、自分が何を言ったのか理解してなかったグランが、すぐに顔を赤らめる。

しかし決して発言を撤回することはなく、むしろ付け加えて笑いかけた。

「本当に、会えて良かったよ」

「……ふん。お前達が探し出さなくても、一人でも帰っていたさ」

「カリオストロなら出来てただろうね」

「当然だ。オレ様を誰だと思っている？」

星晶獣ヴァシユロンがこの日、王都に出没することは分かっていた。

仮にグラン達がこの場に来なかったとしても、弱ったヴァシユロンを捕獲することは、カリオストロにとって朝飯前だっただろう。

更に、その力を紐解き、異世界への道をこじ開ける事だって出来る  
と、冗談でもなくカリオストロは信じていた。

……まあ、その場合は丸数年、数十年は研究しないとダメかもしれないが。それはともかく、

「感謝してる。心配かけたな」

「……元はといえば僕の不注意が原因だ。むしろ僕の方が謝りたい」

「あの件はお前だけが悪い訳じゃない。それ以外の要因もあったんだ」

「けど……」

「わあーってるよ。それでも謝りたいんだろ？　そういう奴だよお前は……なら気が済むまで謝罪しとけ。その代わりオレ様の感謝も黙って受け取れよ」

「……ありがとうカリオストロ」

カペラが居なくなり、統率が全くなくなった魔女教徒達は、さながら池の水を抜かれた魚だ。

ひとり、またひとりと広場に集められており、抵抗もロクに出来ない。この調子なら鎮圧も時間の問題だろう。

そう、作戦は上手くいっている。

行き過ぎるくらいに、進んでいる。

しかし好転する事態とは逆に、カリオストロの表情は陰しくなる一方だった。



「……」

「何か、気になるのかい？」

「気にならない訳がない」

食い気味に反応してしまう。

心中を巢食う、唯一の懸念がそうさせていた。

傲慢。

予言を絶対視する魔女教のトップに位置する存在なら、このXデーにだって現れるのが普通だろう。

「なのに木っ端しか現れねえってのはどういう事だ？」

「うーん……」

「計画の中止。それなら分かる。リーダーが居なくなつたから別の機会を狙う。至極当然の考えだ。でもそうはならなかつた」

コツコツコツコツ。

細く美しい足が神経質に石畳を叩く。

「計画の強行。それも分かる。予言書を盲信するんなら準備不足だと強行するだろうよ。それならあいつは部下を切り捨てた上で最大の利を得るように動く。なのに……」

「まだ現れていない、か。負けを認めて今回は下がつたとか？」

「負けを認めるようなタマじゃねえ。アイツなら全てを巻き添えにした上でオレ達を殺すだろうよ」

「流石にそれは……執念深すぎない？」

「お前を殺すのに5000回以上リトライしたそうぞ。そう考えて然るべきだ」

うへえ、と思わず零してしまうグラン。

そんなグランを気にかけることなく、カリオストロは思考の海に潜り続けているようだが、その可愛らしい眉目は険しくなるばかり。一向に解決策が見えてこないのか、石床を叩く音は強まってゆき、最終的に、その怒りの矛先はグランに向かうことになった。

「分からねえ……分からねんだよ！ 強行するなら乗じるぐらいするだろ。それこそ民衆に紛れるとかしてさ！ アイツに取っちや不利なんて言葉は存在しない、ただ試せばいい！ じゃあどうして試さね

え!？」

「そんな事僕に言われても……」

八つ当たりの蹴りがしこたま膝裏に入るが、当のグランに堪えた様子はなかった。

「そうだね……元々この場所に来る気がなかったってのはないのかな？」

「ねえな。アイツはお前にご執心だった」

「けど未来は規定路線を外れたんだろう？ だから行かないって言う道筋だつてある筈だ」

「……まあ、そうかもしれないねえが」

「カリオストロ。スバルの未来予知は強力だけど、予知ありきで語るフェーズはもう終わったように思える。今はもつと別の視点がいるんじゃないかな？」

「んなこと分かってる。分かっているんだが……」

グランに言えるわけもないが、カリオストロとスバルには過去5回分の知見がある。必然、それを軸に推理をしているが……言われた通り、情報は種切れだ。

現状、無限コンティニュー持ち相手に後手に回っているという不利な状況。一体どうすればいいのだ？ 腕を組み、その場をぐるぐると回りながら悩むカリオストロに、見るに見かねたグランが「そうだ」と声をあげる。

「ねえカリオストロ。傲慢と色欲は仲良し？」

「……はあ？ お前いきなり何を……そりゃ仲良いかって言われると……」

どう見ても馴れ合うより殺し合いが好きそうな二人。

あれで仲が良いなら、スバルとカリオストロの関係は恋人以上の関係になるだろう。

「魔女教って派閥があるんじゃないかな？ 聞いた所、傲慢も色欲もそれぞれ独立した部隊を持っているように思える。仲が良いなら色欲が倒れたら自然と傲慢に縋すがると思うけど、もしそうじゃなかったらしたら？」

「……」

「お互いに仲が悪いなら。色欲の部下だけが暴走するつてもありえるんじゃないかな」

「……なるほどな」

ありえる話だ。

大罪司教全員が全員そうだとはい分らないが、少なくともカペラとカストールが仲良しこよしするような存在だとは到底思えない。

旗頭を失った色欲の部下たちは予言に従うことしか出来ないだろう。そうしたら傲慢はどうする？

「そこは分からない。カリオストロの言う通り、暴走した仲間達と一緒に襲う方が得なのは分かる。でもそうしなかった。そこに理由があるんじゃないかな？」

「手を出せない理由……か」

手を出す必要がないと高をくくっているのか？

まだ攻撃する準備が整っていないのか？

あるいは、もう興味をなくした？

……考えもつかない。

世界をやり戻せる力を持つなら、それこそやりようはどれだけでもある様に思える。なのに――、

「……あ」

いや……ある。

唯一傲慢を縛りつけているモノが。

「スバル！ おいスバル！」

「……ん？ 何だカリオストロ」

近辺でリングを食べていたスバルが寄ってくる。

すると、その横で指示をしていたラインハルトも一緒に歩いてきた。

それはカリオストロの采配だった。

最重要人物たるスバルには最強の人物をボディガードとしてあてがっていたのだ。

「お前、傲慢の野郎と契約をしていたよな」

「まあな。今となつちやあつてないような契約なんだが……それがどうした？」

「確か期日は5日目。今日まで有効になつていなかったか？」

「あーそうだな……この契約は6日目、ちょうど明日から無効になる」

カチリ。何かが噛み合う音がしたような気がした。

「カリオストロ。もしかしてだけど、スバルさんが結んだ契約が原因だど？」

「……思い当たる理由はそれしかねえ。傲慢が混乱に乗じて襲つてこない理由は、まだ契約が有効だからだ」

「んっぐ……お、おいおいカリオストロ。流石にそれは違うんじゃないか？」

リンガを慌てて飲み込んだスバルが、口を挟んだ。

「いや、確かに契約したぜ？ 5日目まで俺たちに攻撃するなーって。お互い不干渉でいようぜーって。でも契約したのにカペラは襲ってきたんだ。だから契約なんて意味ないんじゃないのか？」

「けど、お前は口約束じゃなくて『魂の契約』をしたんだろ？」

「……多分な。魔力か何かが俺の中に入って来たような……そんな感覚はあった」

「魂の契約は絶対遵守。一度交わせば、その効力から逃げられない……そうだよなラインハルト」

「魔法については門外漢だから確かな事は言えないけど、そうは聞いているよ」

「ならば、なんだってカペラの野郎は俺達に攻撃をした？ そして攻撃し続けられた？ その事実がある限り、魂の契約なんてのは俺にとつちや胡散臭いとしか言いようがないんだよなあ……」

確かに遵守されない、そして履行されない契約など口約束にも劣る。

だが、逆にこうも考えられないだろうか。

契約は、無事に遵守されていた、と。

「となると……契約に穴があった。そう考えるのが普通だな」  
「穴あ？」

「カペラの野郎は契約があるのに不意打ちを仕掛けてきた。さも当然のようにな」

そもそもが最初から不自然ではあった。  
スバルを害することを厭いとわぬ攻撃。

しかもその表情、態度を見るにあれは偶然でもど忘れでもない。狙い済ました攻撃だった。

「魂の契約は契約者同士が交わすもの……ひよつとして、その場に居ないなら契約の対象外だったってことか？」

スバルの顔が驚愕に歪んだ。

「……マジ？」

「仮説だが……それなら辻褃はあうな。魂の契約をしたとき、お前と傲慢しかいなかった。そうだろ？　そして色欲はその穴を知って襲いかかってきた。だから違反になっていないんだ」

すくと腑に落ちた気分だった。

機を伺っている訳でも、気まぐれに襲わなかった訳でもない。  
契約が裏目となり、ヘタに手を出すことが出来なかったのだ。

本来なら優位に働く筈の契約、しかし結果として色欲はこの世から消滅し。

頭を失った色欲の部下は、蜘蛛の子のように駆除されている。

傲慢は、そんな色欲の部下たちを制御できずに、ただ見守ることしか出来なかったのではないか？

「つてことはこの場にカストールは……来ないのか？」

「可能性が高いだけだ。決して油断だけはしてくれるなよ」

(つっても……多分これが正解な気もするが)

お互いに勝算があつて結んだ契約。

奴らの中では本来ならスバルを困い、それこそ暴虐の限りを尽くしていたはず。

それが彼ら自身を縛る枷になるとは思いもしなかっただろう。

(だがお陰で……オレ様達は6日目に突入できる)

周回を繰り返し、ようやく踏み入る未知の未来。

魔女教が狙う王都崩壊、エミリア殺害という悲劇を潰したその先

で、自分達は本格的に傲慢と対峙することになる。

かたや無限コンティニュー持ちのチート持ち。

かたや複数陣営の混成パーティ。

都合、一度たりとも死に戻り出来ないという制約の中で戦わなければいけないが、事ここに来て、誰かを切り捨てるという選択肢はカリオストロの中にはなかった。そうするには、あまりにこの世界で交流を重ねすぎてしまった。

（もう覚悟は決めた——オレ様の目が届くうちは誰一人として死なせない。失わせない。誰一人失うことなく、傲慢をぶちのめす）

当然だが、それは茨の道だ。

強力な味方をこれだけ用意しても尚、勝算の低い賭けになると理解していた。

ただ……グランという、頼れる仲間と合流することで——万が一の可能性を、余すことなく拾った特異点があることで——もしかしたらやってやれるのでは、と思わなくもなかった。

（ただ奇跡頼りじゃ勝てねえ。奇跡に頼るのは、可能な限りの手を尽くした後だ。実際問題、傲慢とはどう戦えばいい？ アイツは6日目になったら何を狙う？）

真っ先に狙われるのは勿論スバルだろう。

スバルは我々にとっての弁慶の泣き所。

そして、奴らにとっての垂涎すいぜんの獲物だ。

スバルが死ねば、我々の今までのお膳立ては全て元の木阿弥になるのだから。

「今なら指名手配犯の気持ちがよく分かるな……自分の首に値札がついてるって思うだけで胃が痛くなるぜ……」

「同情するぜえ……おい兄ちゃん、大丈夫かよお？」

「大丈夫じゃねーよ……けど不運なことに死ぬような目に合うのは慣れてる……！　ありがとよ、えーっと……ビィ、じゃなくてトカゲ」

「オイ、今覚えてるのにわざわざ言い換えただろ！」

スバルは、出会った当初に比べて大分垢抜けたようだ。

幾多の絶望を超え、弱さを知り、驕りおごりが抜けたと言ったらいいか。

今のスバルであれば、少しは頼ってもいいのでは、とカリオストロが思うほどだ。

「ところでスバルさんは、何か武芸に嗜みは？」

「全くねえな！　ほんつと、完全無欠の一般人だ。強いて言えばカリオストロに少しは教わったぐらい」

「カリオストロが？　ふうん……興味がありますね」

「……まあ、その教わった内容っていうのがとにかく逃げろっていう、逃走術だったんだけどな！」

「ははは、でも正しい教導だと思うよスバル。自衛の基本は、そもそもが危険な相手と対峙しない事だ。付け焼き刃の武芸ではいざという時に危なくなる」

「うん。僕もそう思います。それに武芸がなくとも、スバルさんには未来予知があるじゃないですか」

「あんまり欲しい能力じゃなかったけどな……折角なら俺もグランやラインハルトみてーに戦う力が欲しかったかったぜ」

「適材適所という言葉もある。僕は戦う事はできるが、君のように柔軟な考えは出来ない、頼りにしているよ」

「つくうく！　ほんつとに、いつでもイケメンだよラインハルトは！」

「僕も初対面ですけど、憧れますね」

「ホントかい？　ありがとうございます。光栄だね」

ラインハルト、グラン、スバル。どれもタイプの違う男達だが、出会ったばかりだというのにまるで旧知の友のように気を許しているようだった。気が合うのか、それとも全員のコミュ力がおかしいせいか（一人は別の意味でおかしいが）、この3人が並び立っていると不思議と絵になっているように思えた。

「時にグラン君。キミほどの実力者なら、是非王都に仕えて欲しいくらいだが……」

「あ、だ、ダメですよ！　グランは私達の団長なんですから！」

「そうだぜ！　剣の兄ちゃん！　オイラを通さずにスカウトは許してねえからよお！」

「あははは、すみませんラインハルトさん。そういう事なので……」  
「残念だ。とはいえ、断られるとは思っていたけどね。では、親睦をかねて一度模擬戦は如何かな？ キミの実力は僕も大いに気になるところだね」

「それは僕の方こそ。ラインハルトさんほどの実力者であれば喜んで」

「おい馬鹿やめろ。ここで戦意を漲たぎらせんな。本気出すな。お前たちクラスだと街くらい簡単に吹き飛ばぶからな」

「流石にそれはねえだろカリオストロ……。いくらラインハルトが最強だからって、そんな……」

「……」

「……マジ？」

カリオストロは首を大きく上下させた。

事実、グランとラインハルトはこの世界で一、二を誇る実力者になるだろう。本気を出せば街どころか、島ごと崩壊もありえる。

だからこそ二人が守りに立てば、この世界のどんな強敵相手でも太刀打ちできない、とカリオストロは確信していた。

(しかしアイツだって、こっちがスバルの守りを嚴重にするのはお見通しだろう。本丸をいきなり攻略するのではなく、外堀から攻めてくる可能性つてのものあるのか?)

……十分ありえる話だ。グランや、ラインハルトはともかく、自分を含むエミリアや、クラリスでは徒党を組まない限り傲慢に勝てる見込みは、まずないだろう。

そしてそれは、誰一人死なせたくない自分達にとって最悪の戦略にもなり得る。

(うわ、考えれば考えるほどやって来そうだ。なら俺様たちは屋敷にこもって籠城するのが最適解なのか？ ……無理だ。いかに強固な守りにしようと無限コンティニューなんてされたら、必ず牙城を崩される)

一番の対策方法は分かっている。  
相手をしないこと。それに尽きる。



幸いにも、傲慢は戦闘力は高いが移動能力が高い訳ではない。

ならばこそ、傲慢の手の届かない場所に全員で逃げてしまえば、少なくとも身内には被害は受ける事はないだろう。

（ただ……それは問題を先延ばしにするだけだ。傲慢ほどの執念の持ち主であれば、必ず自分達を見つけ出し出してくるだろう）

つまるところ……やはり正面切って倒すしかないのだ。

（一度だ。この世界線で、たった一度でも傲慢を殺す事が出来ればもう会う事はなくなる）

その一度を掴むのが、どれだけ大変なのかは推して知るべしだが、弱音を吐く暇はない、リミットは迫っている。傲慢が牙を剥く前に対策を考えねば、詰んでしまう。そんな焦燥にかられながら、カリオストロは思考を続けるのだった。

「……ねえカリオストロ？　なんだかピーマルを食べたような顔してるけど……大丈夫？」

「エミリアたん、あれは苦虫を噛み潰した顔っていうんだよ。……苦虫って今日日聞かねえな」

「にがむし……？」

「はう……すごく美味しくなさそうですね……」

「物の例えだよルリア、食べると思わず顔をしかめてしまうくらい苦い虫、それが苦虫だ。テントウムシとか言われてるけど、定かじゃないね」

「マジか。俺はカMEMシって聞いたぜ？」

「うへえ。オイラはどっちも食べたくなえよ……」

「……人の頭の上で何くだらねえことをくつちやべってやがる」

どこか気の抜ける会話にため息をつくカリオストロ。

折角考えた策が霧散し、少し怒りを覚えるも、同時にささくれだつた心は癒やされていた。

コレも得難いものなのかもな、と複雑な気分を味わっていた、その時だった。異変を感じたのは。

「ってオイ、グラン？　ルリア？　どうしたんだよ二人まで変な顔しやがって。二人も苦虫食べたのかあ？」

「……グラン、カリオストロさん」

「ああ」「分かってる」

微かに空気が変わるのを感じた三人。

領きあうと確信を持ってある道を進む。

なんだなんだ、と慌てて他の面子も後を追う。

兵士が行き交う大通りを抜け、小道を進み……やがて小さな広場にたどり着けば、立ち尽くし、空を見上げる三人の姿が見えた。

一体全体何をしているんだ？ 疑問に思ったスバルが声をかけようとした時……それは現れた。

「——どうわっ!? 何だあ!？」

何か黒い影が浮かんでいる？ と認識した途端、鮮明になっていくモノ。

それはとにかく巨大な空飛ぶ鎧だった。

何十人どころではない、何百人が収まってもまだ隙間が空きそうな巨大鎧の上半分が浮かんでおり、兜越しにこちらを見下ろしていたのだ。

一軒家よりも大きな巨大剣を携えた驚愕の魔物に、言葉をなくす一行。

しかし、そんな魔物と対峙して尚、グランとカリオストロは警戒する素振りすら見せなかった。

「これは……!？」

「待てラインハルト。コイツを攻撃するな、これが例のヴァシユロンだ」

「ヴァシユロン……? もしかして、これがロズワール卿が、いや、キミが求めていた……?？」

ヴァシユロン。

それは時空に干渉する力を持つ星晶獣。

かつてはミラー・マクスウェルや、ユーリ・ローウェル、ソフィを別世界に招いた元凶であり、そしてカリオストロが異世界に飛ばされた切欠でもある。

元世界ではそれこそ天を裂き、地を割るほどに大暴れしていた魔

物。

しかしスバルが見た感じ、兜も、鎧も、剣も、そのどれもがボロボロで、怖いというより突けば崩れそうな印象しか覚えなかった。

「お、おいカリオストロ……こいつをどうしようってんだ？ 手懐けるってか？」

「まあ、言ってしまうえば不始末を片付けるって感じた。コイツはここに居るべきではない——ルリア、いいな？」

「はい……！」

グランの隣にいた青髪の少女、ルリアが一步前に出る。

一行をただただ睥睨する巨大な鎧は、そんなルリアに警戒をあらわにすることなく、じつと少女の動向を見守っていた。

「違う世界で、さぞかし寂しい思いをしたことでしょう……私と一緒に行きましょう」

まるで神話のような光景だ、とスバルは思った。

触れれば壊れてしまいそうな青髪の美少女が、細い腕を伸ばし、澄んだ声色で語りかけると、ヴァシユロンは、ため息をつくように身じろいだ後、音も立てずに姿を歪め、やがて、光の残滓だけ残してルリアの胸元のペンダントの中に収まっていったのだった。

「……ありがとう。暴れないでいてくれて。お疲れ様」

大事に、厭うようにその胸元で指を組み、祈りを捧げるルリアに、周りの面々は見とれるばかりだった。

「きゅ、吸収、したのか……？」

「どちらかと言いますと、住心地のいい場所を与えた形……ですね」  
スバルの疑問にグランが苦笑しながら答える。

ルリアは、強力無比な人工生命体、星晶獣を従える不思議な少女だ。……いや正確には従えるというより、仲間として協力してもらっているという方が正しいか。

彼女の胸の中には、何十、何百もの星晶獣達が住んでおり、ルリアはそんな星晶獣達に分けへだてなく親しみあっていた。

「はい。あの子は、怯えていたみたいです。いきなり自分の知らない世界に飛ばされて、宛もなくさまよってしまったようで……」

「ヴァシユロンの仕業じゃない、とは薄々感づいていたが……やつぱりカリオストロをこっちに呼び寄せたのは、ルリアが見たつていう黒い手の仕業なのかな？」

「間違いねえだろうな。なんだってヴァシユロンや俺様を呼び寄せたのかは分からねえが」

「いや、待て待て待て。黒い手つてもしかして……！　ルリアちゃん、見えるのか!？」

「は、はい……ちなみにスバルさんも、もしかしてあの黒い手の人のお知り合いですか……？　なんだか黒いモヤのようなものが見えていて……」

「う。」

「臭いでしょ、そいつに近寄らなくていいからねルリアっ☆」

「そこ！　思春期に臭いは一番の禁句だからな!？」

魔法の残り香。ソレがはつきりと認識出来ているのはカリオストロ、ベアトリス、レムに続き、4人目。知覚出来る条件が何なのかは別として、ルリア目線でのスバルは、禍々しいオーラと甘ったるい臭いを垂れ流す近寄りがたい存在だったようだ。

「どおりでルリアちゃんが俺によそよそしいと思っただぜ……!？」

「あ、あははは……すみません。あ、でも！　お話をしていて、悪い人じゃないというのは分かります！」

「そうよルリアちゃん、スバルはホントーにいい子なんだから！　スバルはね——」

すると機を伺っていたかのようにするりと現れたエミリアが、ルリアに力説し始めた。

今の今までスバルがしてくれた功績を、まるで英雄譚のように。それこそ自慢げに言っただけ聞かせる。ルリアも最初は困惑していたが、盗品蔵での立ち回り、魔獣騒ぎでの機転と勇氣、そして先程のカペラとの戦いでの覚悟と協力と、波乱万丈の物語に気がつけば傾聴しており、その展開に一喜一憂していた。

「——それでね、昨日も絶体絶命だと思った時にね『俺を信じてくれ！』ってみんなに言っただけ……!？」

「ちよ、ちよーと待った！ エミリアたんそこまでにしとこうぜ、流石に恥ずいって!？」

「どうして？ 他ならぬスバルの功績なのに……」

「にやははは、我が娘が明るくなって何よりだね。このまま友達で終わりそうな感じもボク的にはGOOD」

「ぐおおおお……!？」

「？ スバル?？」

パックの一言で轟沈するスバルを、心底不思議そうに見つめるエミリア。

エミリアのそれは恋の募りではなく、尊きを敬する気持ちしか感じられない、いわば推し自慢なのは誰の目から見ても明らかだった。それこそ一幕を見ていたカリオストロですら哀れに思うくらいには。

「……ふふ」

「なんだグラン」

「いや、カリオストロはいい人たちに出会ったんだねって」

「……はん、お陰で毎日大騒ぎさ。いい迷惑だぜ」

「そうなのかな?？」

「そうだよ」

見透かすようにグランに覗き込まれ、たまらず顔を逸らす。

理不尽につぐ理不尽、ひとつ足を踏み外すだけで地獄に突き落とされるこの世界。溜まったものじゃないし、追体験なんて二度とごめん

だ。  
しかし……この世界の出会いは、その分だけ濃く、そしてかけがえの無いものになった。

出会った誰も見えていてハラハラするが、その誰もが諦めを知らず、もがいている。

まだまだ世話の焼けるヒヨコ達を引率しなきゃいけない事に、ため息半分、満更でもない気持ちちが半分なのは事実だった。

この関係は決して切れることなく続くのだろう。

そう信じていたこそ、グランの次の一言は、カリオストロの心を容易に揺さぶることになった。

「きつとこの騒動も無事に解決するよ。早く終わらせて元の世界に帰ろう。」

## 第六十九話 「私は平気よ」

「ねえカリオストロ？ 入っていい？」

「……」

古めかしい音を立て、開くは木製の扉。

扉からおおずおおずと顔を覗かせたのは銀髪の少女、エミリアだ。

返事がない事に訝しみながらも部屋を見渡した彼女は、すぐにお目当ての人物を見つける事ができた。

カリオストロ。

ラインハルト家の食客であり、エミリア陣営にて立て続けに起きる事件の立役者。

あぐらをかいて椅子に座り、窓枠に肘を乗せてじつと外を眺め続けている様子は、その美しい、まるで人形のような見た目には相反する粗雑なポーズだ。しかし他ならぬカリオストロがすると、途端に絵になつてしまうのは何故だろうか？

一瞥すらしないカリオストロに、ためらいながらも近づくとエミリアア。

何を見ているのだろうか、視線の先を覗いてみれば、そこには大急ぎで荷物を運搬する兵士や村人達の姿があつた。

ここはラインハルト邸別荘。

王都での対魔女教との作戦で成功を収めたカリオストロらは、この場で大急ぎで出戻りし、村人らの一時的な撤退準備を進めていた。

全ては傲慢との戦いのため。

急ピッチで行われる移動は多少の混乱を招いたものの、比較的スムーズに進んでいるようだった。

「村の引越しなんだけど、この調子なら後半日もすれば出発できそうよ」

「そうか」

カリオストロの声色は平坦そのものだ。

喜びも、失望もない。灰色。

つまるところの空の上の空。

エミリアは隣に椅子を寄せ、心配そうに話しかけ続ける。

「行き先は『聖域』。限られた人しか知らない、うってつけの避難場所。ここから半日は移動に時間かかるけど……そこまで行けば魔女教も手は出せないと思う」

「ああ」

「最初はみんな渋っていたけど、スバルが説得してくれたお陰で素直に言うことを聞いてくれたの、だから本当に助かったわ」

「良かったな」

「そうなの！ それで……えーっと……あ、そうそう！ 私の事、少しはみんな信用してくれたみたい。前みたいに邪険にされなくなった感じがするのよ。私、ちよつとは王様に近づいてるのかしら？」

「何よりだな」

「……カリオストロ、ほっぺ引っ張っていい？」

「ダメだ」

「むー……」

カリオストロは昨日からこの調子だ。

王都で魔女教を無事に退けたというのに、あいも変わらずの仏頂面。いや、むしろ前よりも顔が険しくなっている。

確かに首謀者はまだ撃退出来ていないが、色欲を退治し、王都の危機を救ったのだ。少しは気を緩めてもいいのではないか？ とエミリアは思わなくてはなかった。

(……こう考えちゃうのは、私がまだ甘いだけなのかな)

カリオストロとスバル。

一癖も二癖もあって。歪で。どこか浮世離れしていて。けれども頼りになる不思議なコンビ。

そして銀髪ハーフェルフである自分を色眼鏡で見ることなく、素で接してくれる大切なお友達。

何度だって言える。

自分の王選は、二人がいなかったらすぐに幕を閉じていた、と。

エミリアだけでは力及ばなかったであろう、斜め上の事件の数々。



二人はそれを目を見張る実力と、脅威の洞察力、機転と、覚悟で解決してくれた。二人には頭が上がらないどころか、足を向けて寝れないほどの恩がある。

（なのに、何も返せてない……本当、どうしたら返せるのかしら）

一方的に恩恵を預かるだけの現状が、口惜しい。王様になると意気込んで、その結果がカリオストロの言いなり。情けないにもほどがある。

ただ、こんな悩みを聞いたところで……カリオストロなら『気にすんな。ラッキーだと思え』と一蹴するだろうし、スバルなら『俺がしたい事をしてるだけだから！』となんでもない様に振る舞い、結局恩返しの際すら与えてくれないのだろうと思う。

謙虚は美德だ。けれど、そんな二人の美德を、今は恨めしく思ってしまう。

（でもエミリア。あなたは心苦しいから恩返ししたいの？ 与えられた分、返さないといけないと思っっているから？ それとも常識的にそうすべきだから……だから返したいの？）

恩の押し売りは、また違うと思った。

返したいから返す。そういった自己中心的な考えは、恩に報いているとは言わないとエミリアは考えていた。来るべき時に、それこそ二人が本当に困った時に報いる。それこそが本当の恩返しではないのだろうか。

（今は返せない……だから、その時を待つわ。ここぞという時に驚いてもらうんだから）

舞い込んだ心地の良いそよ風でなびく、カリオストロの美しい髪を見ながら、そう思う。

——知っている。

二人には重要な秘密があることを。

ソレが苦しくて、辛いものだというものを知っている。

その重荷を、少しでも自分が背負えたらいつでも思う。

——見えている。

二人に繋がる、切っても切れない太い糸。

この地から遙かに遠い場所から来た二人だからこそ持つ縁<sup>えにし</sup>。

その線が、私にも結ばれていれば、もっと仲良くなれるのに。

——分かつている。

こことは別の世界を見る彼女が。そして彼女の悩みが。

魔女教のことでも、作戦の事で悩んでいるのではない。

彼女らしい、もっと別のことで頭を悩ませているのだと。

——躊躇<sup>ちゆうちよ</sup>している。

その一言がきつと、この幸せを終わらせてしまうかもしれない。

だけど切り出さなければ、きつと彼女は重荷を抱え込んでしまう。

だから……覚悟を決めて言うんだ。エミリア。

「カリオストロ、私は気にしていないわ」

「何の話だ」

「この事件が終わったなら、グランさんやルリアちゃん達と一緒に帰っちゃうのよね」

「——」

初めてまともな反応があった。

相変わらずこちらを見てくれないが、まとう雰囲気が変わった。

「あの人達、大瀑布の向こう側からカリオストロを探しに来たのよね。本当に驚いたわ」

「……」

「そして……本当に良かった。カリオストロとグランさん達が出会えて。そんなに遠いところから探しに来てくれたなんて……ほんとーに大切に思われてるのね」

「……」

「ただ、再開に水を差すようで申し訳ないけど……もう少しだけ力を貸して欲しいわ。勿論、食客である貴方に無理強いする権利なんてないけど、その分お礼はするから」

「……エミリア」

「なあに？」

「……いや」

ほんと飛び出す、いつものカリオストロの軽口が、珍しく鳴りを潜

めていた。

エミリアが思わず含み笑いをすると、カリオストロはバツが悪そうに、そして、言い訳をするように口を開いた。

「言われるまでもねえよ。オレ様はアイツ等と一緒に帰るさ」

「うん」

「むしろ……長居し過ぎたくらいだ。本来ならもっと短い滞在になるはずだったんだが」

「ええ、そうだったの？　ずっと居てくれても良かったのに」

「居れるか馬鹿。向こうにはたつぷりと仕事と……目が離せない奴を残してるんだ」

「そっか。それなら仕方ないわね」

「そうさ。大体がオレ様はとぼっちりでここに飛ばされたんだからな。大迷惑さ」

「でもその御蔭でカリオストロに出会えたわ。私にとっては大感謝ね」

「全くだ。謝礼は弾めよ」

「うん。王様になってからの出世払いよ」

「はっ、それじゃ当分貰えそうにねえな」

ひどい！とエミリアが怒ったフリをすると、すぐに笑い声が自然と部屋にこぼれ落ち、張り詰めていた空気が少し緩んだ。

カリオストロが大好きだ。

傲岸不遜な態度が好きだし。

自信家なところも好きだ。

思わずきゅつとしてしまうキツイ口調も好きだし。

過保護にも近い世話焼きな所も、好きだ。

だからこそ……とても寂しく思う。

これからも親友として共に歩けると思っていたから。

「ねえ、カリオストロ達がいた大瀑布の向こう側ってどんな所？　前

もちよつとだけ話を聞いたけど、見たことのない島が沢山ある……の

よね？」

「そうだな。そこには空に浮く沢山の島々がある。ここよりもっと自

然豊かな島があれば、噴火し続けている島。工業化が進んだ島や、一面ビーチになっていてる場所だってある」

「すごいわよね、ホントに想像もつかないわ……でも本当なの？」

「ホントさ。オレ様達はそれこそ沢山の島を回ったもんだ。そしてその度にいろんな出会いを経て、色んなトラブルに巻き込まれたもんだ」

懐かしむように記憶を反芻はんすうしているのを見て、どうしようもなく自覚する。

カリオスト口は帰らなければいけない。

ここじゃない別の場所に、待っている人たちがいるのだから。

「そっか……スバルも大瀑布の向こうって行つてたけど、同じ場所？」  
「いや、スバルは別の場所だ。オレ様達がいた場所とは全く異なる文明のな。オレ様もよく知らんが、かなり裕福で平和なところみたいだな」

「うんうん。スバルって結構育ちがいいように思えるのよね。食事も丁寧に食べるし、色んなことを知ってるし。ただ、時々変な事を言うわよね。それもお国柄なのかしら？」

「あれは元々の性格だ。絶対にな」

出来ることなら、ずっと一緒にいたかった。

スバルとカリオスト口と三人で、騒ぎ、笑い、泣き、力を合わせ、未永く一緒に歩んで欲しかった。

今より強くなかったっていい、全然頼りにならなくてもいい。打算を抜きに、生涯を共に出来るような大切な親友として手を繋ぎたかった。

「私も、そこに行けるのかしら？」

「……行けるさ」

「ふーん？」

「オイ、オレ様が嘘をつくと思ってるのか？」

「確かにカリオスト口は嘘をつかないわよね。ホントの事を言わないだけだもの」

「お前なあ……」

「——私は平気よ」

落ち着き払った声が、部屋によく響いた。

それが何を意味するのか、なんて。カリオストロはきつと分かっていることだろう。

エミリアは立場から、環境から、考慮から、自分なりの答えを出したのだ。

カリオストロがいなくても大丈夫。

私はただ頼るだけの雛鳥ではない——と。

カリオストロは自らを恥じた。どうしようもなく恥じた。

これでは真逆だ。親離れの出来ぬ子を見守っていたはずの自分が、実のところ子離れのできぬ親だったのだから！

エミリアからの視線を反らし、バリバリと頭を掻いたカリオストロは向き直り、ため息を零した。

「……正直、お前達は放っておけねえよ。スバルはすぐに自爆するし、エミリアは疑うことを知らねえ、どっちも危機意識っていうのがぼっかり抜けてやがる。よちよち歩きのヒヨコより危なっかしい」

「あう……」

「そして最悪なことにこれから戦う相手は、それこそ数多の化け物をぶちのめしてきたオレ様にとつても、ぶつちぎりで最悪の敵だ。お前だけじゃ勝ち目なんて万が一もない。そしてそれはオレ様も同じだ」

島をも超える全長を持つ巨大な星晶獣と戦った。

全空に名を轟かす十の戦士たちと切り結んだ。

悪辣の名を思うがままにする巨大な悪意と鎬を削った。

誰もが諦めるような強敵達。

しかし、どんな相手でも『希望』があった。

「でもな。オレ様達だったら話は別だ。知恵を振り絞り、力を合わせることで、必ず乗り越えられる……と信じている。月並みで、如何にも陳腐な、青臭い台詞になるが……オレ様達だからこそ、ソレが出来るんだ」

ソコまで言い切って、カリオストロは言い淀む。

これは、らしくもない親切心か？ 老婆心？ 身内鼻屑？ ……何

とでも言えればいい。エミリアはもう、カリオストロにとって部外者ではない。半年にも満たぬ短い付き合いの中で、一生分の濃密な時を過ごしてきた。かけがえのない、放っておけない友人、いや、親友なのだ。そんな親友のために骨を折る事が、どうして苦になろうか。

カリオストロは手を伸ばす。

その手から二度と、大切なものが零れ落ちないように。

「これからもそんな敵が来ないとは言い切れない。……だから——」

「カリオストロ」

ふ、と気が付けばその手に掌が添えられていた。

確かな温もりと、包むようなその動きは、次の一言を塞ぐのには十分だった。

「大丈夫よ」

「——わあつたよ」

これ以上は野暮というものだろう。

エミリアは信用してないのではない。

エミリアは頼りたくなかったのではない。

一人のハーフエルフとして、カリオストロに並びたかったのだ。

「それに、大瀑布の向こうから私達のところに来れるってことは私達もそっちに行けるってことよね？　　これでお別れじゃないなら、へいちやらよ」

「はっ、どーやって来るつもりなのかね」

「王様になったら、真っ先に研究することにするわ。急にそっちに遊びに行ってもびっくりしないでよね」

「お転婆王族はもういっぱいだったの……まあ、いい。そんなときや国賓待遇でお出迎えた。ただ警告しとくが……オレ様たちの居る所は結構物騒だぞ？」

「あら、したらまた私のことを助けてくれてもいいのよ？」

「おーおー図太くなりやがって——上等だよ」

カリオストロが、す、と伸ばした右拳。

エミリアは一瞬何のことか首を傾げるが、すぐに思い至り。同じく拳を突き出してコツンと当てたのだった。

「おーい、カリオストロいるか!? みんなが集まったぞ……つて、エミリアたんもココにいたのか? ならちようどよかった!」

「ああ」

「ええ、今行くわスバル」

部屋を訪ねてきたスバルは、すぐに首を傾げた。

二人の雰囲気、特にカリオストロの態度が軽くなっていたからだ。

「……なんかいいことあったのか? カリオストロ、エミリアたん?」  
「ん? そうね。この戦いが終わったら、カリオストロの住んでる所に行く約束してたのよ」

「遠回しな死亡フラグ?! いや、冗談だけど。それは俺も行ってえなあ」

「スバルが行ったらすぐに理不尽に巻き込まれそうっ☆」

「冗談抜きでそうなりそうだから笑えねえ……」

「じゃあスバルが住んでる所はどう? 私、そっちにも興味があつて……」

§ § §

扉を開け放ち、足を踏み入れたカリオストロ達を、多数の目が射抜く。

都合1ヶ月、エミリア達と食しょくせん饌を共にした食堂。

エミリアはもとよりレム、ラム、ロズワールにベアトリス、そしてスバルのフルメンバーが揃っても十二分に空気があったその場所が、今では手狭に感じてしまう。

「来てくれたようだね」

「今度はどうするってんだよ?」

「……」

巨大なダイニングテーブル、その左に陣取るのはラインハルト陣営

だ。

にこやかに微笑む劍聖ラインハルトを筆頭に、王選候補者のフェルトもいつもの盗賊スタイルで相席している。そして何故か、トンチンカンも隅っこで居心地が悪そうに同席していた。

「立役者さんの御登場やね」

「……フンツ」……」

ラインハルト達の反対側に座するは、渦中の相手であるアナスタシア陣営だ。

この温かな気候の中では場違いな、白いふわもこドレスに身を包んだ王戦候補者アナスタシア・ホーシンと、その従臣であるリカード、そして彼女の騎士ユリウスが同席していた。

アナスタシアは気軽そのものだが、その他二名はまだ測りかねているのか、どこか値踏みするような視線をカリオストロ達に向けていた。

「丁度揃った所だよ、カリオストロ」

「ししよーおそーい、早く早く!」

「あぐ。はむ。んぐつ……早く初めちまおうぜえ!」

そして彼らの隣に座るのはグラン達異世界組だ。

グランとルリアが軽く手を振って挨拶する中、クラリスが馴れ馴れしく呼びかけてくる。ビィに至っては、出されたリングを頬張っている始末だ。

「こおーれはこれは。カリオストロ君、今度はどーいった催しなーのかねえ?」

「……一体何用なのかしら、まったく」

そして最後に。テーブル右隅を陣取るのはこの屋敷の持ち主であるロズワールとレム、ラム、更にパックを膝に載せたベアトリスである。

ロズワールは相変わらず気に障る笑みでカリオストロ達を迎え、レムはスバルを見て目を輝かせ、ラムは一瞥すらせず、ベアトリスに至っては、ふわ、とあくびをする始末だ。

カリオストロ達も錚々たる<sup>そつそつ</sup>面子を前にして顔色一つ変えず、テーブル



ル中央、奥に着席した。

ここに居る全員は、これから行われる作戦の要。

魔女教大罪司教『傲慢』と戦う、頼もしい戦士たちになる。

「時間がない。手短かに話をさせて貰うが……これから皆で魔女教の大罪司教である『傲慢』を倒す。——手配書は見ているな？」

事前に配られていた手配書が、思い思いに手に取られていく。

描かれたおかつぱ頭の子供はどう見ても脅威たり得ない人相だ。警戒を緩める者が一人二人と出るのも無理はない話だろう。しかし、そんな者達をカリオストロがピシヤリ、と断じた。

「侮るな。見た目は子供だが『世界をやり直す力』を持っている。お前達にとっては初顔かもしれないが、相手はもうお前達の戦術、戦法、癖は全て見抜いていると考える」

にわかには信じられない発言に途端にざわつく一室。

その雑音を黙らせるようにカリオストロが被せた。

「例えば何かしらの対策を練り。そして知恵を振り絞ったとっておきの策を講じたとする。誰にもバレず、隙がなく、そして必中必死の策だ。ところがソイツと来たら、そんな俺たちの絶対の策を知り尽くして襲い掛かってくるんだ。楽しいだろう？　これから相手するのは、そんなデタラメの化物だ」

「はあ……？　ちよい待ちいや。そんなん無理やないか。策が最初からモロバレやったら、作戦の意味がない」

堪<sup>たま</sup>らずアナスタシアが口を挟む。

誰もが同じ気持ちだった。作戦というのは、そもそもが相手の裏かくもの。裏も表も知られてしまつては、倒しようがないではないか！

「確かにそうだ。相手は常に最適解を探し出せる最強の敵。ここにいる奴のほとんどが腕に覚えがあるかもしれないが、ほんの少しでも隙を見つけようものなら、嬉々としてそこから突き崩し、最後には殺されるだろう。だからこそ、ヘタな策は無駄だと知ったほうがいい」

「……それじゃあどないするん？　まさか降参するつもりやないやろな？」

「まさか。考えもなしに、この場にお前達を呼んでないさ」  
全員の注目が集まる。

作戦が作戦の体をなさない現状、一体何をするつもりなのだろうか？

スバルやエミリアを除いた全員が固唾を飲んでその答えを待つ。  
すると……

「簡単だ。突破出来ない作戦を立てればいい」

「……はあああ？」

たつぷりと疑問を込めた大合唱が、立ちどころに部屋にこぼれおちた。

「聞こえなかったか？ 突破出来ない作戦を立てるんだ」

「いやいやいや……意味わかんねーこと言ってるんだよ！ お前が言っ  
たんじゃねーか、相手は常に最適解を知ってるって！」

「フェルトはんの言う通りや、裏をかかれ放題なら突破できない作戦  
なんてないと思うか？」

失望の目を向けるフェルトが、頬杖をついたままカリオストロに野  
次を飛ばすと、アナスタシアも同調しだす。

「それがあるのさ。傲慢の力は、正確には『自分が納得できる世界』を  
選ぶ力だ。しかし奴が納得できる世界というのは、アイツ自身が勝ち  
取らないといけない。そこに鍵がある」

「鍵……？」

「アイツの強さにも限度があるってことだ。傲慢の攻撃スタンスは物  
理攻撃特化であり、エミリアのように氷を操ることも、ロズワールの  
ように魔法を駆使することもできない。つまるところ、如何に強いと  
言っても、イコール何でも出来るってことじゃねえ」

かつて暴威を振るった奴の戦闘の痕跡は、スバルが知っていた。  
その圧倒的な暴力は、ナイフによって成されていると。

「つっても……ソイツって強いんだろお？ それも、相棒よりも」  
不安そうに吐露するビィ。

絶対的な信頼をグランに預ける彼は、認めたくなさそうにこちらを  
伺う。

「ああ。オレ達の故郷じゃ敵なしのグランだが……グランでは無理だ。そして、オレ様では太刀打ちすらできねえだろうよ」

ざわめきが更に加速した。

絶対的強者に位置する筈のカリオストロが、白旗を投げたのだ。

事情を詳しく知らぬ全員が、驚きに驚いた。

「ではどうするとうのですかカリオストロ様。聞く限り無理としか思えません……まさか」

眉をひそめたラムが答えを急かせば、小さな錬金術師は勿体ぶることなく、ある方向を見始める。

その先に全員の視線が集まる。

視線の先、そこに居るのは、赤髪的美丈夫。現在も剣聖として名高い青年。

「……僕かい？」

「ああ。剣聖ラインハルト、お前こそが傲慢を倒す鍵だ」

場がもう一度どよめいた。

納得を含んだかのような、さりとして疑義を詰め込んだようなざわめき。疑いと不安の目がカリオストロを射抜くが当の本人に動揺はなく。それが正解だというスタンスを一向に崩さない。業を煮やしたリカードがたまらず口を挟んだ。

「……剣聖はたしかに強いんは分かる。この王都でも、カララギでも、そしてワイですら認めざるをえん。ただ気イ悪くせんで欲しいんやが……この傲慢ちゅうーのが剣聖サマを倒してないっていう確証はどこにあるんや。ココに居る全員、もしかしくとも一度は倒されるのかもしれないのやろ？」

「いや、ラインハルトだけはまだ倒されていない」

「だから、それがどこで分かるっちゅーんや！もしかして剣聖ならなんとかしてくれるって神頼みやないやろな!？」

「そこからは俺の口から話をさせて貰う」

口角上げて怒鳴るリカードに割り込んだのはスバルだった。

今にも噛みつきそうな様子のリカード相手に若干物怖じしながらも、深呼吸の後に語りだす。

「これは、俺がラインハルトの屋敷でパーティ会場でアイツらと契約を交わした時の話だ。その時のオレは傲慢と一対一で殺されてもおかしくない状況だった。だから俺は殺されてたまるかと虚勢を張ったんだ。『俺をここで害すれば、ラインハルトが黙っちゃいないぞ』つてな」

「お、おう……そうか」

「哀れね……」「スバル君……」

「いや違うんだよ別に哀れんで欲しい訳じゃねえんだよ!? 大事なのは次だ、そうしたら傲慢は素直に従ったんだ、それどころか俺の苦し紛れの契約にまで乗ったんだ。これ、ちよつと変だと思わねえか?」

「……どういうこつちやねん」

「もしもアイツがラインハルトすら倒してるんだったら、俺の虚勢なんて聞く必要はなかった。契約も結ぶ必要はなかった筈だ。違うか? 自分の行動を縛るようなメリットは相手には無いはずだ。だってその時点で俺は一人きりだったからな。契約なんてせずに殺すか、攫つてしまえばよかった」

「……!」

「なのに……実際はしなかった。それは、つまりラインハルトさんのお膝元だったから?」

「そういうこと! アイツはラインハルトを避けたんだ。何故避けた? それはまだ倒せてないからさ!」

グランが呟いた言葉に、スバルは我が意を得たりと頷いた。

ラインハルト未攻略説に懐疑的なメンバー達が唸る。本当にラインハルトを避けた結果なのかは分からないが、少なくとも話の辻褄は合うのだ。

5,000回を超えるリトライの末にグランを殺しせしめた傲慢といえど、ラインハルトという存在は規格外なのだろうか? 確証を持ってぬ可能性の話。それをカリオストロが更に膨らませていく。

「オレ様はその可能性に賭けることにした。故に、俺たちの作戦は『傲慢にラインハルトをぶつける』。それに尽きる」

「……ちよい待ち。じゃあここに集められたその他はどうなるっ

ちゅーんや?」

「基本的には相手をせずに、すぐにラインハルトに知らせて逃げ回る役だな」

「……なんつー消極的な作戦だ。」

「まともに対峙したら勝てないんだから、そうするしかないだろ?」

傲慢対全員、ではない。

傲慢対ラインハルトに持ち込ませるために、他全員を使う。

それこそがカリオストロの作戦だった。

「そのために、この屋敷全体をアイツを迎えるためのキルゾーンに設定する。餌はスバル。傲慢はスバルに執着している。間違いなくこちらに襲撃をしかけてくるだろう」

いえーいとヤケクソ気味にピースサインを決めるスバル。

そんな彼にエミリアとパックが寄り添った。

「スバルには防衛役としてエミリアとパックを立てておく。あと……レム、ラム。そしてクラリス。お前達もスバルの護衛について欲しい」

「スバルのことは守って見せるから!」「しょうがないにやあ」

「はい、喜んで!」「ロズワール様が良いと言うのであれば……」「いいよ」

「ウチも!? うーん、まあいつか! よろしくねスバル☆」

「お、おお……期せずしてハーレムが実現出来たのかコレって!」

スバルの死||コチラ側の敗北だ。

無論、彼女達一人一人が傲慢に太刀打ち出来る訳ではないが、最後の砦として彼女達を立てる。

レムラムの戦闘力はもとより、エミリアとパックの力は時間稼ぎに長けている。そしてクラリスも破壊力だけなら抜群だ。

「ベアトリス。お前には扉渡りの力で侵入者の妨害を頼む」

「……なんでベティーが」

「頼むよベティー。ボクの娘に悪い虫がつかないようにしないといけないんだ」

「にーちやの頼みなら仕方ないかしら!」

ベアトリスの扉渡りの力は、屋敷中の扉の出入りを操作出来る、まさしく防衛向きの力。物理一辺倒の傲慢に対しては、非常に有効だろう。それこそ屋敷中の扉を破壊しなければ、永遠にスバルの元にたどりつくことすら出来ない。

「そしてグランとラインハルトは遊撃卒だ。グランは攻略された身ではあるが、誰かと組めばその限りではない。二人は屋敷のどこにいてもいいが、異変があった時のためにいつでも、センサーを磨いでいてくれ」

「了解した」「分かったよ」

全空に名を轟かす力を持つグランと、大陸一のラインハルトのコンビは、それこそ史上最強と言っても良い絶対的な戦力だと言ってもいいだろう。一人ではなく二人なら間違いなく傲慢を打倒出来るのではないか。

「アナスタシア達には、アーラム村全員の引越しを頼むぞ」

「分かるとるよ、うちの商人達を助けてもらった分はキツチり返すつもりや。責任持つて届けたるわ」

戦闘になれば、誰が巻き添えになってもおかしくない。その時、非戦闘要因を避難するのは必須だ。

相手はどんな手を使っても勝利を勝ち取ろうとする異常なまでの執着心を持つている。人質を取られたりするのを避けるために、ホーシン商会達に村を蛇の殻もみけにしてもらう。

——そして。一陣営ずつ役割を与えたカリオスト口は、最後にロズワールに向き直る。

「ロズワール」

「なーんだあい？　ボクにも何か役目を与えてくれるのかあい？　勿論、与えてくれた以上きつちりと果たさせて貰いますよーお。さあな〜んなりとお伝えくださいませ」

ピエロさながらの大仰なお辞儀に、顔を一層渋くするカリオスト口。

ロズワール・L・メイザース。

この度の事件ではエミリアのパトロンでありながら、エミリアを死

へと導いた張本人。

敵なのか、味方なのか、それすらも判断できない獅子身中の虫。

正直の話、持て余していると言っても良い。出来るのであれば、この場で簀巻きにして地中深くに埋めてやりたいとカリオストロは思っている——が。

「お前はオレ様と一緒に第二の遊撃枠となつてもらう」

「遊撃……ふうむ、僕にそうしろというのかい？」

「お前も筆頭宮廷魔術師っていう御大層な肩書を持っているんだろう？」

侮蔑でも、疑義でもない。獅子の眼でロズワールを睨みつければ、ふうむ、と一度頷いた後、すぐに笑顔を見せた。

「えーえ。いいでしょう。魔女教とは因縁のある相手です。足止め程度には活躍させてもらいましょう」

「よし——みんな聞いたな？ 以上の布陣で動く。契約が切れた今、ここからは時間との勝負だ。この話が終わったらすぐに行動を始めてくれ」

「各自、必ず一人にならないこと。そして、怪しい兆候があつたらすぐに逃げる事……これだけは徹底してくれ！」

カリオストロとスバルの言葉を皮切りに、事態は動き出す。

傲慢は無限にコンティニュー可能。

対してこちらは1回限りの大勝負。

一度は騙し合い、殺し合った仲間たち全員で、魔女教という大きな壁を越えるのだ。

「あーちよい待てちよい待て、ラインハルトを貸すのはいいんだけど、あたしらはどうするんだ？」

フェルトが伺い、縮こまっていたトンチンカンが同調するようになうんと頷くと、カリオストロはほんの少し考える素振りを見せた。

「選択肢1。部屋の外でブラブラして傲慢の的になる。選択肢2。スバルと部屋に大人しく引きこもり続ける。どっちがいい？」  
「全力で後者にさせてもらいます!!」



## 第七十話 崩壊の足音（前編）

「スバル君、お茶は如何でしょうか？」

大。

大きいことはいいいことだ、と人は言う。

確かに大きいものは良い。夢がいつぱい詰まっている。

その起伏のある稜線りょうせんに心踊られない人は、そうそういないだろう。

「それでね、カリオストロと来たら——」

「あー分かる。おししよーと来たら、もういつでも自分一人で抱え込んじやってさあ……」

中。

何事もほどほどが良い、と人は言う。

大きすぎず、小さすぎない平均というのもまた観物だろう。

なだらかなラインは成長の兆しであり、その変化も楽しみの一つになる。

「カリオストロさんが暮らしてた所って、凄いきレイなんですね！」

「ありがとうございますお客様。メイド冥利に付きます」

「つつーか、なんでアタシらまで呼ばれなきや駄目なんだよ……はあ」

「……うるさくて、おちおち本も読めないかしら」

小。

慎ましいくらいが丁度いい、と人は言う。

空気抵抗が存在しない、あるかないかの瀬戸際。

好みは別れるが、好きだという人は一定数いるものだ。

ロズワール邸内。その中でも最も広い部屋。

そこはいまや女子会の様相を見せていた。右を見ても左を見ても美少女、美少女、美少女……その中に混ざっている自分スバルはひよつとしくなくても場違いなのではないか、と考えてしまうほどだ。

「今の話とくつても気になるわ。もっと教えてもらってもいい？」

「いいよ、これはね。おししよー様が本当に大ピンチになっちゃっ

た時で……ねールリアちゃんっ☆」

「この時は驚いてしまいました。あんなカリオストロさんは初めて見たので……」

仲睦まじく話に花を咲かせるルリアとクラリス、そしてエミリアだ。

エミリアは特にカリオストロの過去話などにとっても興味があるようで、先程から何度も二人に話をせびっており、クラリス達も嬉々として教えている。

「それで、ここに何日いればいいんだよ？」

「分かりかねますお客様。傲慢を倒せれば解放になると思いますが」

「んなこた分かってんだよ。それで肝心の”ごーまん”とか言うのはいつ来るんだよ」

「分かりかねます。お菓子のお代わりは如何でしょうか」

「もらうに決まってるんだろ！」

ぶつくさ文句を垂れ続けるのはフェルトだ。

急遽きゆうきよラインハルト邸からロム爺を置いてきぼりにした上で連れ出された彼女は、椅子上で落ち着きなく貧乏ゆすりを繰り返してはお菓子を貪り続けている。

何度となく対応を迫られているラムは明らかに面倒臭がつており、質問されるたびにお菓子を与え続けていた。

「はあく……折角にーちやと一緒なのに、何で他の有象無象がついてくるのかしら。全く。全くなのよ」

「辛抱しておくれベティー。僕の愛娘を狙う変態共に痛いお灸を据えないと……にやむにやむ」

「何でオイラも膝に乗せられてんだよお……にゆむにゆむう」

「サラマンダーの精霊なんて初めて見たのよ。同じ精霊繋がりて親交を深めてもバチは当たらないかしら」

「んな!? オイラはサラマンダーじゃねえ！」

椅子にゆったりと座り込んでごちるのはベアトリスだ。

膝上にパックとビイを乗せて、その頬の柔らかさを堪能し続けている。

目下最重要保護対象であるスバルを差し置いて、思い思いにくつろぐメンバー達。これにはスバルも『これから傲慢が襲撃してくるのに何を気を抜いてるんだ』と喝を入れるべく表情を険しくする……事もなく。期せずして女子会のようになっている現状が落ち着かないのか、目の置き所を探してそわついていた。

伊達に前の世界では引きニートはしていない。美少女たちに囲まれるという類稀なる経験に、スバルがキョドらない訳がなかった。

「スバル君、大丈夫ですか？ 何か心配でも？」

「あ、ああいや……別に心配つつーか落ち着かねーつつーか」

レムに至っては専属メイドです、と言わんばかりにスバルの傍につき従い、その一挙手一投足に対し、過保護なまでサービスをしてくれる。いつもの光景ではあるものの、同じく絶世の美少女であるレムにされると、緊張が加速してしまう。

「……まあ気を張り詰めすぎも駄目だよなって。傲慢の襲撃タイミングがいつになるか分からねえし、ずっと緊張してても疲れるだけかも」

「はい。その通りだと思います。それでしたらお茶でも飲みますか？」

「もう3杯は飲んだんだよなあ……」

作戦開始当初こそ、皆が襲撃に備えて気を張り詰めていたものだが、それが保ったのは最初の数時間だけ。今では緊張とは無縁の現状になってしまっている。

無論、気を抜く＝傲慢に隙を見せるのと同義。しかしながら待つというのは、暇なのだ。四六時中緊張など出来ようはずもない。

(とはいえ、こうやってだらけてられるのはベア子のお陰なんだよな) ベアトリスの能力は屋敷内の扉の出入りを制御できる『扉渡り』だけでなく、屋敷内であれば誰がどこにいるかも感知が出来る、言ってしまうえば高精度の感知センサーをも持つ。下手に侵入すればたちどころにベアトリスに感知されてしまう。

加えて言えば、この部屋は2階中央に位置する、唯一の窓のない部屋。

侵入口は正面の扉しかない以上、扉の出入りを制御できるベアトリスが許さない限りは、この部屋に辿り着くことは出来ない。

(それに加えグランとラインハルト、加えてロズワールとカリオストロが二重三重に警戒していると来た。なんつーか、普通の敵だったら不憫に思えるくらいに盤石なんだよなあ……)

だからこそその皆のくつろぎ様なのだが、それで絶対に安心できるかと言えば、そうではないとスバルも思っている。

恐らくはここいる面子の中で真にカストールを脅威と感じているのは、スバルだけだろう。

世界が滅ぶ様子を見た。

王都が崩れ落ちる瞬間を目の当たりにした。

そしてそれを為したのは、間違いなく傲慢なのだ。

(……任意セーブ持ちの無限コンティニューってのがずるいよな。しかも俺のように弱いんじゃないかと強くと来た。卑怯にもほどがあんだろ……俺の方は任意セーブ不可で戦闘力皆無ってさあ……っついやいやいやいや！ 愚痴ってる暇はねえ！ しつかりしろナツキスバル……！)

「スバル君!」

自らの頬を強めに叩いたスバルに、レムが慌ててお絞りを用意する。

(考えろ。傲慢は籠城した俺達をどうやって攻略する?)

両頬をおしぼりで挟まれながら、スバルは思考を続ける。

侵入してすぐに傲慢は気付くだろう。スバル達に何時までたつても会えない事を。

闇雲に扉を開けても永遠に出会えず、まごまごしている内にラインハルトとグランがその場に向かう。そうなれば傲慢は撤退あるいは、やり直しになる。

(根性と技量だけでは限界の筈。だから、真正面から侵入はしてこないと考えた方がいいだろうな……じゃあどうするんだ？ 屋敷から誰かが出てくるのを待つ……とかか?)

例えば食事。例えばお手洗い。

あとは……何らかの理由で外出しなくてはいけなくなったなど。  
（食事……については目下問題なさそうだな。保存食は部屋に持ち込んだんだ。数か月は持つ。となると、やっぱり生理的な問題ってのが付いて回るだろうな）

流石にトイレを部屋の中でしろ、というのは難しいだろう。

不運にも部屋の中にトイレが隣接している訳ではないため、都度ベアトリスにトイレまでつなげて貰う必要がある。

（……トイレ中に殺されるのだけは嫌だけど、実際ありそうなんだよなあ。後は……本当に忘れた頃に襲い掛かってくるとかかか？）

襲撃がないように思わせ、油断して巣から出てきたところをブスリ。それもまた常套手段だろう。

実際の所、一か所に何十日も、何か月も、何年もいるというのは、かなり辛い事だ。引きこもりをしていたからこそ分かる事もある。

（襲撃タイミングが分かってくればいいんだけどなあ、それさえ分かれば対策出来るんだが……）

ふと、カリオストロ相棒の事を考える。

カリオストロもこの問題については当然ながら行きついていただろう。

詳細は語らなかつたが、何かしらの当てがあると言わんばかりに口ズワールと二人きりになるように仕向けていた。なるほど確かに口ズワールには怪しさしか感じない。

（あの矛盾だらけの行動、一体何が目的なんだろうか……）

手紙を出し、事ここに来てエミリアを死に至らせて何のメリットがある？

その時以外でも殺すチャンスなんて無限にあるだろうに。

（正直、アイツが魔女教でしたって言われも俺は驚かないけど、それにしてもレムが反応しないんだよなあ……ん？）

ふとスバルは違和感を覚える。今一度部屋を眺め直すと、その隅に誰かの気配を感じたのだ。

よくよく意識を向けると、そこにはトンチンカンの三人がいた。彼らは体育座りをしながらひたすら存在感を隠しており、うつむ俯いた

まま一言もしやべらない。なんというか、彼らの一体だけ空気が淀んでいるようだった。

「あ、あー……おーいお前達？ もしもーし」

「……んだよ」

見るに見かねてスバルが声をかければ、陰の気を漂わせた大中小のうちの中が顔を上げた。元より細身であった彼の顔は、心なしがげっそりとしているような気がした。

「いや、そう言えば居たなって思ってた……大丈夫か？」

「……大丈夫に見えるかよ」

「だ、だよな……それで何だってここに居るんだ？」

「……あア!？」

スバルの質問に対し、ラチンスの沸点は一瞬で超えたようだ。

「お前らがオレ達を招集させたんだろうがよオ！ 誰がこんな死地に好きで来たがるか！」

「お客様」

「ヒイツ!? ごめんなさいごめんなさいごめんなさいすみません!!!」

まあその怒気は、すぐにレムの笑顔によつて一瞬で霧散したのだが。

「いや、俺はお前達の事は呼んだつもりはないんだけど……来るにしても、てつきりロム爺が来るのかと思ってたぞ」

「俺らもそう思ってたよ……だがあのデケエおっさんは聴取だかなんだかがあるつって連れてかれちまったし、ラインハルトの奴が大將のお守りに必要だつって無理矢理連れてこさせたんだよ……」

「大將？ ああ……フェルトか」

彼女がトンチンカンの3人を手下に置いていたというのは知っていた。同じ貧民繋がりだと思う所があるのか、それとも別の理由か。ふとフェルトを見ると、何だよ、と睨みつけられた。

「蓋を開けてみたらこれから魔女教のやべえ奴に襲われるとか、そしてこれから迎え撃つとか……冗談にもほどがあるだろ!? まさかホーシン商会の企みに乗った罰で、俺達は囹として使われるのかよ!？」

「ラインハルトに限ってそれは流石にないんじゃないかねえのか……?」

「信じられるかよ! ほら、見ろよ! ガストンなんかお前のところのちびっ子に会ったせいでトラウマを再発させてやがる! どうしてくれるんだよ!」

「うう、うううくくくつ……帰りてえよ……帰りてえよおカンバリイ……!」

「ガストン、大丈夫だ。俺達はきつと死なねえ……た、多分死なねえよオー!」

「いやそつちは自業自得だろ……」

しかし憔悴しょうすいしきつた三人を見て、スバルも流石に憐れむ。

小悪党ながらも彼らも必死に生きようとしていたのだ。

結果としてこのような事になったが、自分もエミリアと出会わなければこうなっていたかもしれないと思うと、励ましてやりたくはなつた。

「あー……ホラ。いつ襲ってくるかは分からねえし、怯え続けても疲れるだけだぜ? 何のためにラインハルトやグランを矢面やわもてに置いたと思つてんだ、大船に乗つたつもりでいたらどうだ?」

「あの話を聞いて安心できるかってんだよ……グランとか言うのはやられちまつたんだろ?」

「でもラインハルトは居るんだぜ? アイツがやられると本当に思つてるか?」

「……いや、それは……まあ……」

やはり地元民にとつて剣聖ラインハルトは絶対的象徴。その信頼もかなり高いようだ。

「そういうこつた。後は乗るか反るかだから、大人しくどうなるか見届けていこうぜ」

「お、おお……お前、何か……ムカツクな」

「あれ!? 俺今いいこと言つたつもりだつただけど!」

「お・客・様?」

「「ヒイイッ!!」」

三人の悲鳴が合唱のように鳴り響いた。

その時だった。

ベアトリスが不意に何かを察知したのは。

「……………」

「ああ…………？　んだよゴスロリの嬢ちゃん…………？　何かあったのかよお…………？」

腕の中でぐったりしていたビィが聞き返すと、ベアトリスは表情を変えずに頷いた。

「森……………」

「森？　森がどうしたんだいベティー」

「森の方から何か来るかしら。それも、凄い数の何かが」

§ § §

「……………他に何を企たくらんでいるんだ？　洗いざらい話せ」

本邸とは別の、別荘に当たるこの屋敷は、別荘と言うにははばかる広大な敷地面積を誇っている。部屋数であれば団体客であれど余裕を持って宿泊可能なほどだ。

たかだか数十人程度なら確実に持て余すであろう広大な施設。その廊下を、カリオストロとロズワールが二人して歩いていた。

「おやおや。初めて二人きりでお話するというのに、そのように詰問きつもんされるとは…………悲しいですねーえ。私が何か粗相でも」

「しただろ。エミリアに宛てた手紙。あれが企たくらみじゃなければ何だっというんだ」

横目で睨みつけるその目は氷点下。見目可愛らしい美少女ではあるが、素人ならばその眼力だけで腰を抜かすほどの圧があった。しかしそれを受けてなおロズワールは揺るがない。微笑を顔に張り付け、肩をすくめるだけだった。

「何度も言いますが、そのようなもの出した覚えがないのですよーお」  
「オトボケはその顔だけにしておけよロズワール」

不意にロズワールの足が止まる。それは彼自らが止めた、というより止めざるを得なかったから。



何故ならば彼の前後は朱と蒼のウロボロスに囲まれている。顔のない異形の龍は、無機質な殺意を容赦なく彼にぶつけてきていた。

「時間がない、って言っただろ。痛い思いをしたくなければ早く吐け」「ふうむ。無い腹を探られても——」

がりゆ。

聞いたことのない不気味な音と共に、ロズワールの足元が床材ごと抉えぐられていた。

まるで空間だけ削り取ったかのような出鱈目でたらめに、しかしてロズワールの顔色は崩れない。むしろその怪物に手を伸ばし、撫でるくらいには余裕があった。

「——私は困るのですがねーえ。それに、理解しておられますよね。私を殺したらあの子の王への道が絶たれるということを」

「死なない程度に甚振いたぶるさ。これから生涯をベッドの上で過ごして、財力だけエミリアに供給し続けてやってくれ」

「暴力まがいのことをされてまで、王選に投資するつもりはないのでーすがあ?」

「あり得ないな。エミリアを神輿にする奴が、暴力程度で王選を諦めねえだろ」

「それであれば、私が暴力に屈さないのもお分かりでしょーに」  
ピリつく空気。歪む空間。

真に憂慮ゆうりよすべき事象は傲慢ではなくロズワールだとカリオストロは判断していた。

コイツは味方に置いておくだけで害を及ぼすが、敵に回られればもつと害を及ぼす。例の手紙の件以外にも暗躍をしているという確信があつて、カリオストロは詰問に挑んでいた。

「だろうな。だが、痛い思いを望んでほしい訳じゃねえだろ?」

「それはもう」

「だったら素直に話せ。お前は王選を諦めていない。なのに、あえてエミリアを死に向かわせようとする。まるで、それがオレ様とスバルに救われるであろう事を前提にしているようにな」

「……」

「持つてるんだろ、福音書を」

「ロズワールの顔色が変わっていく。

切れ長の目はより細まり、張り付いた笑みではなく、彼本来の冷たい笑みが垣間見え始めていた。

ひょうきんで、全てを茶化す道化師の顔から。

冷酷で、全てを睥睨する為政者の顔に。

「……よもや自分から辿り着いてくれたとはねーえ。その話はもう少し先になるかと思いましたがよ」

「あつさり認めるんだな。もう少し舌を回すかと思ったが？」

「いーえいえいえいえ。痛い思いはしたくないといったでしょうに。カリオストロ君、キミ本気で私の腕くらいは飛ばすつもりだったでしょお？」

「まあな」

「折角トントン拍子に舞台が進んでいるのです。であれば、その道筋に私も無傷で一緒に一緒にさせていただければと」

「自分でお膳立てしておいて抜け抜けと……」

まるでベリアルと同じくらい迷惑な存在だ。許すことならこの場で跡形一つなく消し飛ばしてやりたい。しかしながら、消し飛ばすにはコイツの立場が邪魔をする。無駄に肩書きもポジションも代替え出来ないものだから腹が立つ。

「それで？ お前は魔女教の内通者なのか？」

「違います。あのような存在と一緒にされたくはないですね」

「はん、オレ様には一緒に見えるがな。庇護するべきエミリアを死出の道に向かわせてる。まるで魔女教どもが言う『試練』みたいなもんじゃねえか」

「……」

『試練』とやらがどーいう目的なのかは見当もつかねえが、お前の福音書にはさしずめ『エミリアに困難を与え、その上で王選を進ませろ』とか書かれてるんだろ？」

思えば不審な点は多かった。

かつてパツクに屋敷で殺された時。ロズワールはなんと言った？

『スバル君のためさ、ベアトリス』

『……………は、はは。……………か、賭け、は……………失敗に、終——つたんだ……………。それ……………なら、さつ……………さとつ、ぎの賭け……………に、託たく……………ま——で……………』

そして、手紙について問い詰めた時。

『未来を視る？ とおーんでもない……………キミ達は、いえ、正確にはスバル君には世界をやり直す力がある。そしてキミは彼の力に巻き込まれてなお、その記憶を受け継ぐ。そーうだろう？』

知る由もないオレ様達の秘密を知っているという事実。

そして失敗したオレ様達の次に期待するような動きをしたという事実。

その2つを紐付けるのは『福音書』しかなかった。

ウロボロス達がしゅると拘束を解くと、カリオストロ達は示し合わせたかのように歩きだした。

「これは叡智えいちの書と言います」

音もなく、ロズワールが懐から取り出したのは1冊の書だった。

手に収まる程度の小さな書で、何のタイトルもない黒い本。

何度となく読まれたのだろう。くたびれた様子が見てとれた。

「これは端的に言えば、所持者の望む未来へ進む為の未来が書き記された予言書です。私個人が望む未来を勝ち取るために、何をするか此処に全て書かれています」

「胡散臭うさんくせえ」

「しかしながら力は本物です。何故ならば、ここまでのスバル君達の功績は全て書いてありますからねーえ」

ロズワールは、その背表紙を大切そうに数回撫でた。

「福音書と何が違うんだ？」

「あれも叡智の書の仲間ではありますが、遥かに精度が劣ります。具体的に言えば描かれる未来が曖昧になるといった形でね。実のところ、この叡智の書も複製品なので本物に比べれば精度が劣るのです  
が」

魔女教徒達はそんなあやふやな予言を信じて行動を起こしている

のか。なるほど、それは解釈次第で暴徒になってもおかしくはなさそうだとカリオストロは納得した。

「——えーえ、そうですね。カリオストロ君の言う通り、私は叡智の書に従って行動をしているまで」

「その叡智の書が、エミリアを窮地に立たせろって言ってるのか？」

そしてオレ様達に解決させろ、と言っているのか？」

「ですねーえ」

「ひよつとして徽章盗難事件や、領内の魔獣騒ぎもお前の仕業なのか？」

「ご想像にお任せしましよーう」

言葉こそ濁したが明らかなるクロだった。思わず窓ガラスが軋む程の殺意が巻き散らされたが、カリオストロは努めて冷静であろうとする。

事ここに必要なのは犯人探しではない。対傲慢との戦いにおいて、何を狙っているか。ソレを知る事だ。

しかしカリオストロが質問を被せようとする前に、ロズワールが呟いていた。

「……私も不思議だったんですよ」

「あ？」

「知っていますか？ 世界は今現在や過去の事だけでなく、未来に起きる出来事まですでに記憶されている。叡智の書というのは、その世界の記憶から必要な知識を引き出す禁書なのです」

どこか熱の籠った声で朗々と謡うロズワール。

それはさながら、自分の宝物をひけらかすかのようなだった。

「つまるところ、筋書きというのは変わらないのですよ。枝葉こそあらゆることも、最終的には正史という本流に流れ込んでいくもの。この予言の内容も、400年も前から何一つ変わっておりません」

しかしうだるほど籠っていた熱は、一瞬で冷え込み始める。

「——なのに、最近になってその筋書きが書き換わりました」

同時にロズワールの冷たい眼差しがカリオストロを射抜いた。

「そう、書き換わったのです。不変の運命が、まるで筋書きに問題があ

るとばかりに、軌道修正を伝えているのです」

侮蔑<sup>ぶべつ</sup>? 違う。

怒り? 違う。

殺意? 違う。

そこに込められていたのは明らかな嫌悪だった。

「当初は、あの幼きエミリア様を助けるのはスバル君だけだった。スバル君がエミリア様の窮地を助け、共に戦い、そして王選を勝ち進める。その筈だった……なのに。君が混ざった」

ロズワールは淡々と糾弾<sup>きゆうたん</sup>する。

「君が混ざった。屋敷に訪れる者の名はスバル君だけだった。だが君が混ざった。屋敷の危機を救うのはスバル君だけだった。王都で活躍する者の名はスバル君だけだった。だが君が混ざった。ありとあらゆる既存の流れに、君が混ざった。書には君という存在は、何一つとして描かれていなかった。まるで君というイレギュラーを、想定していなかったかのよう」

思い描いていた美しい絵。

それを台無しにするコールタール。

それこそがカリオストロだと。正面から言いきった。

「……最近<sup>ひんぱん</sup>は頻繁に筋書きが変わっているんだ。これは、異常事態だよカリオストロ君。キミは何者だい? 合流した彼らといい、キミ達はこの世界にふさわしくないのでは?」

「知るかよ。オレ様達だって好きでお前の騒動に巻き込まれた訳じゃねえ」

「はあ……そうですか。ああこれが私への試練というものなのでしょーうかねえ。実に、何とも、やりがたい……」

「お前の筋書きなんて心底どうでもいい。オレ様が聞きたいのは他に何を企んでるかだ。吐けよロズワール。最終的にオレ様達の行動で本流へと進んでいってるんなら、協力できない訳じゃねえだろう?」

ロズワールが求めているのはエミリアが王になること。

カリオストロ達が求めているのは、傲慢を退ける事。

現時点でカリオストロ達とロズワールの方向性は食い違っていない

い筈だった。

そしてその推測は正しく、ロズワールはたつぷりと勿体ぶるよう  
にして頷いた。

「その通りですね。自ら辿りついては欲しかったです、まあいいで  
しょう——ひと月ほど前、私はある依頼をしていました。その依頼  
内容は『この屋敷に居る者達全員を殺害すること』です」  
ぞわ、とカリオストロの全身が総毛立つ。

やはりこの男は想像通り画策していた——！

「~~~~ツ、どこの、誰にだ!？」

『腸狩り』と『魔獣使い』と呼ばれる二人にですよーお」

「襲撃はいつ!？」

「まさしく、本日丁度です。そのうち訪れるのではないでしようか」

「テメエ……!」

「おおーつとお、敵対はしませんよ？ 本流には生きて乗りたい、そう  
いったではないですか」

再びウロボロスが牙を剥くが、ロズワールは涼し気な顔を崩さな  
い。むしろ、心底楽しいと言わんばかりに嗤わらう。

最悪だ。最低最悪だった。

『腸狩り』というシリアルキラーや、名の知らぬ殺し屋は正直どうで  
もいい。

むしろ傲慢に付け入る隙を与えてしまうという事の方が、よっぽど  
致命的だった。

「今すぐ取り消しの命令をー!」

「無駄ですよーお。もう連絡手段はありませんし、例え依頼者であつ  
ても殺していいと伝えていきますからねーえ。ああそれに……もう遅  
いようですね?」

は、と気付いた時にはカリオストロも異変に気付いていた。

ガラスが揺れている。いや、ガラスどころか木枠が震えるほどの地  
鳴りが、地響きが遠くから近づいてくる。

それは崩壊の音色。

遠間からでも聞こえてくる木々がなぎ倒される音に、地を踏みしめ

る多数の足の音。それはとうとう耳を澄まさずとも聞こえてきて、

「——さあ、一緒に素敵な未来を掴もうではないですか、カリオストロ君」

ロズワールが両手を広げてほほ笑んだと同時に。

廊下の窓や壁が派手に吹き飛び、大量の魔獣達が屋敷に乗り込んでくるのだった。